

# 三日月は流離う

がんめんきょうき

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある原作キャラに憑依でチートで都合主義で——以下略。

※書き手としての腕を磨きたいので、評価を下さる場合（特に低評価）は何故その評価をしたのか・どうすれば良くなるのか等、その評価に至った詳しい理由を感想の中で伝えて頂けると有難いです。

※年末デスマーチには勝てなかつたよ…

# 目次

## 原作前

第一話	三日月の始まり	1
第二話	三日月と髭	24
第三話	三日月と鍛錬と……	42
第四話	三日月とそよ風と孤狼と	71
第五話	三日月と鉄燕と豹王と……	102
第六話	三日月と忠犬と金鯨	127
第七話	鉄燕とそよ風と三日月	156
第七、五話	三日月の現在と黒歴史と	

## 破面出現篇

第八話	三日月の原作入り	220
第九話	三日月と大帝と虚無と……	245
第十話	三日月と虚無と憤怒と……	276
第十一話	三日月と主人公達と……	312
第十二話	三日月と店長と黒猫と……	342
第十三話	三日月は胃薬を求め	379

第十四話	三日月と胃痛と宴会と…	412	鬼と…	598	
第十五話	三日月と豹王と新入りと…	444	第二十一話	主人公と仮面と、三日月の無双と…	637
第十六話	三日月と御仕置と蔦嬢(男)と…	469	第二十二話	店長と黒猫と、三日月と胸騒ぎと	671
第十七話	三日月と虚無と旗と…	502	第二十三話	豹王と主人公補正と、三日月と黒猫と	706
第十八話	三日月と滅火と任務と…その他諸々	532	第二十四話	蔦嬢と鉄燕と、三日月と黒猫と…その他諸々	746
第十九話	三日月と任務と死神達と…	567	第二十五話	虚無と黒幕と、三日月の反撃と…	781
第二十話	その他諸々と、三日月と龍月の暴露	818	第二十六話	オカッパと清虫と、三日月の暴露	818

第二十七話	その他諸々と、三日月と 虚無と	848	第三十四話	三日月と虚無と、葛嬢と 豹王と	1084
第二十八話	三日月と髭と御披露目と	879	第三十五話	三日月と豹王と忠犬と	1120
第二十九話	三日月と髭と、金鮫に狐 狼と	916	第三十六話	三日月と邪淫と	1152
第三十話	三日月と黒幕と姫と葛嬢と	955	第三十七話	三日月と蛇と、店長と主 人公と	1187
第三十一話	三日月と胃痛その2と姫	994	第三十八話	三日月と姫の新衣装と、 毒娼と	1219
第三十二話	三日月と葛嬢と、そよ風 と	1025	第三十九話	店長と主人公達と、三日 月と孤狼と	1253
第三十三話	葛嬢と豹王と	1056	虚圏救出篇		

第四十話	主人公達の初戦と、その他	1290
諸々	——	
第四十一話	僅かな綻びと、三日月の	1321
始動と:	——	
第四十二話	龍拳と魔人と、髭と主人	1358
公と:	——	
第四十三話	そよ風と妖婦と、主人公	1398
と髭と:	——	
第四十四話	刺青と眼鏡と、強欲と白	1432
雪と:	——	
第四十五話	その他諸々と、白雪と強	1467
欲と:	——	
第四十六話	強欲と白雪と主人公と髭	

と三日月と:	その他諸々	1509
第四十七話	邪淫と、蛇と、三日月の想	
定外	——	
第四十八話	主人公と姫と豹王と:	1571
の他諸々	——	
第四十九話	三日月と悪戯小僧と、呪	1618
眼と白桜と	——	
第五十話	虚無と給仕と、妖婦とかま	1662
せと、邪淫と魔人と:	——	
第五十一話	魔人と邪淫と、剣鬼と剣	1699
八とか孤狼とか:	——	
第五十二話	主人公と豹王と、三日月	1740
と金鯨と:	——	
		1803

第五十三話 三日月と姫と幼女と豹王

と主人公と：

1850

第五十四話 三日月と主人公と、虚無

と孤狼と：

1903

第五十五話 三日月と羚騎と：

1949

第五十六話 三日月と羚騎と解禁と：

1987

第五十七話 羚騎と三日月と、虚無と

孤狼と：

2031

第五十八話 三日月と孤狼と虚無と：

2068

空座決戦篇

第五十九話 孤狼と金鯨と、黒幕と山

爺と：

2108

第六十話 其々の戦場と、剣鬼と虚無

と：

2153

第六十一話 地味つ子と、主人公達と、

虚無と剣鬼と：

2204

第六十二話 仄々夜宮と、死神達と破

面達

2239

第六十三話 死神と侵略者と、虚無と

剣鬼と

2290

第六十四話 破面と死神と仮面と：

2331

第六十五話 始まる戦い、終わる戦い



# 原作前

## 第一話 三日月の始まり

石英の様な結晶で象られた枯れ木が混在し、命の息吹を全く感じない砂漠地帯。

其処には風も一切吹かず、反転した月明かりのみが唯一の光源である永遠の夜の世界が広がっていた。

名は「ウエコムンド虚圏」。その世界のとある場所にて、彼は今日も一人ポツリと佇みながら目を眺める。

白装束を身に纏い、長身瘦躯で長い黒髪。眼帯で覆い隠された左目とは逆の右目は細く尖っており、獲物を探す獣の如き鋭利な眼光を放っていた。

何より目を見張るのはその背に担いでいる巨大な武器。三日月を8の字型に二つくっ付けた形の刃に、垂直に柄を取付けた形の鎌。柄尻には鎖が伸び、それは彼の腰の付近まで繋がっている。

顔付きはある程度整ってはいるが、御世辞にもイケメンというよりチンピラにしか見えなない。

そんな彼が現在浮かべている表情は疲労、憂鬱、僅かな焦燥が入り混じった複雑なも

の。

例えるなら、まるで初めて悪事を働き、後々でその罪の重さに気付いて困惑している子供か。

面倒臭い例えだが、今の彼の状況を考えるとこれが一番適した表現だった。

それに対し、その子供が自覚した時は既に事を起こした後で、その事件は結局犯人が見付からずなあなあで終わりそうになっている事実を付け加えてみる。

さて、この時点でその子供は自分が犯人ですと言い出せるだろうか。

己の罪の告白とは大人であつても相応の勇気が要るだろうし、容易に出来るものではない。

それに黙っていれば実質的に自分に罪は無い事になるとすれば言わずもがな。余程親の教育が良い子供でない限り、大抵は逃げの一手を選択してしまうだろう。

正直に罪を告白し、それに応じた償いを以て解決するか。その場から逃げ出し、一生を罪悪感に苛まれながら生きるか。罪の重さによっては状況も変わるだろうが、客観的に見てもどちらが正しいかは明白だ。

だが———そのどちらも選べないとすれば、どうか。

基本的に良識を持った善人にとって、自身が抱いた罪悪感が精神に齎す負担は相当なものだ。

薄情、無神経、自己中心的な者には理解出来ない領域だろう。罪悪感を抱く云々以前の問題なのだから。

彼の性根は何処にどう転んでも小市民で、善人だった。

子供でも無いし、しっかりと己の罪を自覚している。しかも何事も深刻に考え込んでしまふくらいが有るときだ。そんな彼が後者を選択すればこの上無い辛い思いをするのは明らかだった。

厳密にはつい数年前までは見た目通りの獣の如き性格で、ある日を境にそんな善人になつてしまった”のだが――。

「……ここまでやってくるのに大分苦労したぞ、このクソ野郎が」

最後の罵倒は一体誰に向けて放たれたのか。

それは当の本人にしか判らない。

彼は次の瞬間、担いでいた巨大な得物を右腕一本で頭上まで持ち上げる。

明らかに常人に振り回せる範疇を超えているソレを軽々と扱う光景は異常。

だが彼は平然としている。実際に大した労力でも無いし、この世界にとつて特に驚くに値しないレベルの行動であると理解しているからだ。

「フツ!!」

彼は得物をあらん限りの力で地面の砂地に叩き付ける。

その叩き付けられた場所からは、まるで大量の爆薬が起爆したのと相違無い程の凄まじい衝撃。それと同時に巻き起こる砂塵嵐は彼の姿を一瞬で覆い隠すと、半径五百メートルもかくやと言わんばかりに拡散した。

一分も経たぬ内に、砂塵は全て地面へと降り、彼の姿も再び視界へと戻る。

だが当然と言うべきか、彼の全身には先程の砂塵の名残が大量に降り積もっており、終いには眼帯には保護されていない右目に入ったらしく、その瞼は閉じられていた。

「…いつてえ」

間抜けにも程がある。目に異物が入り込むという煩わしい痛みは、余計に彼の荒んだ精神状態を煽った。

直ぐ様乱暴に目を擦り始めるが、そんな間違った方法で異物を取り除ける筈が無く、彼は目が赤くなるまでの暫くの間そうしていた。

彼は次第に落ち着きを取り戻すと、鎌を担ぐのではなく背負い直し、全身から砂を振るい落とし始める。

気にならない程度まで砂が落ちたのを確認すると、そのまま腰を下ろして胡坐を掻いた。

全身から脱力し、やや哀愁を漂わせたその後ろ姿は容姿も相俟って中々にアウトローな雰囲気にもマッチしている。これが他の男が行えば只のだからしない奴にしか見えないだろう。

彼は大きく息を吸うと、ワザとらしくはあくどと音を出しながら吐き出す。要するに溜息である。

その際、大きく開かれた口から覗いた舌の奥には、大きく五の数字が刻まれていた。

「…ああ、憂鬱だ」

彼——ノイトラ・ジルガに憑依した男は吐き捨てる様にして、そう呟いた。

意識が覚醒したのはこれ以上無い最悪なタイミングでだった。

彼は全て白で統一された建物の、開けた場所の高所から地面を見下ろしていた。

右手には三日月状の特異な刃が付いた柄の長い鎌を握っており、良く見るとその刃には血痕がこびり付いていた。

感情も振り切れれば冷静になるとは本当だったらしい。彼は生まれてから二十五年の中で初めての経験に少なからず感動を覚えていた。

だがそれも視界を三日月の刃から元の場所に戻した次の瞬間、全てが凍り付いた。

其処に有ったのは三つの存在。一つを覗いて明らかな人型で、皆頭部から血を流し、俯せに倒れている。

襤褸切れに等しい外套を身に纏った細見の成人男性らしき者。同じ服装だが、頭部が異常に肥大化し、手足も成人男性の頭部程は有る人とは到底思えない者。

最後は山羊の髑髏のような仮面を頭に乗せ、彼と同じ白装束に刀を腰に差した黄緑色の長髪を持つ女性だった。彼女が一番重傷らしく、今も尚頭部からは止めどなく血が流

れ出ている。

彼はこの光景に見覚えが有った。とは言っても現実には無く、愛読していたマンガの一コマでの話だが。

その漫画の題名はBLEACH。靈感の強い高校生、黒崎一護がある時死神となり、悪霊である虚を打倒しながら仲間達と活躍していく様を描く王道的なものだ。

その中で出てくるのが魂魄に死神やらその対を成す虚。彼はその中でも主人公勢と敵対する側である、虚が進化したもの——破面の一人へ憑依していたのだ。

——刹那、彼の脳内では凄まじいまでの量と速度で記憶と情報が開し始める。

一匹のしがたい下級大虚から始まり、獣の本能の中に明確な意識が芽生え、中級大虚へと進化。

やがてある一人の死神——藍染惣右介と出会い、誘いに乗って傘下へと入る。

その後、藍染の持つ崩玉によって新たな力を与えられ、破面へと至る。そして彼の率いる破面達に与えられる強さの序列を表す数字、その一番上から十番目までの破面に名乗る事の許される十刃、内一つの第8十刃の地位に立った。

その後は最強の二文字を追い求めながら、壮絶な戦いの中で倒れる前に息絶える、そんな矛盾を孕んだあやふやな目的の元、更なる力と戦いを求め、好敵手足り得る最上級大虚の探索の日々を送る。

その辺りから情報の流れが脳の処理能力を超え始めたのか、激しい頭痛に襲われた彼は咄嗟に頭を振り、脳の回転を打ち切る。

垣間見た記憶が正しいとすれば、今視界の先で倒れているのはネリエル・トウ・オーデルシユヴァンクで間違い無い。

以前からノイトラは女の破面でありながら第3十刃トレスの地位にいた彼女のことを快く思わず、何度も勝負を挑んでは負け続け、終には彼女に己を戦士では無く只の獣であると否定された。

やがてそんな屈辱に耐え切れなくなった彼はとある仲間と結託し、彼女の従属官フラッシュオンを利用して隙をつくり、頭を背後からかち割つて虚夜宮ラス・ノイチエスの外へ放り出すという暴挙に出た。

正に吐き気を催す外道の所業。当然、道徳的にもごく普通の感性を持つ彼はノイトラ・ジルガを軽蔑した。

とは言っても今ではそのノイトラへと憑依してしまっているので、その対象は自分自身の事となってしまっているのだが。

どうせ憑依するなら、せめてこうなる前にしたかったというのが彼の本音だった。

だが今となっては過ぎた事を幾ら考えても無駄である。

精神が身体に引つ張られているのか、彼は沸き立つ怒りと同時に途方も無い破壊衝動が生まれるのを感じた。

どうかしたかい、と不審そうに声を掛けて来た、協力者である破面の男を彼は無視し、その場を早急に立ち去った。

直後に何かが萎む音と、それに反応を示す男の声が聞こえたが、その展開を知っている彼は敢えて無視した。

——それから数日後、彼は以前までの自分の行動や態度を根本的に改めた。

戦闘任務への積極的な従事は変わらないが、自己鍛錬を霊力の続く限り倍以上に増やしたり、他の破面に露骨に嘯み付く様な態度を改めたり、サボりがちだった藍染からの召集には必ず参加したり。

ちなみに当初、彼が一番懸念していたのは自分の持つ戦闘能力についてだった。

元よりそれなりの強さを誇っていたノイトラだが、今は中身が違う。

何せ戦争とは縁が無い日本生まれの二十五歳フリーターの凡人だ。憑依後もその戦闘能力が引き継がれているかどうか不明な上、例え有ったとしてもいきなり殺し殺されの血みどろな戦場に立てるとは到底思えない。

だが幸いにも己の戦い方や得物の扱い方は身体が覚えていたので苦にはならなかったし、いざ戦場に立てば精神状態が血沸き肉躍るといった感じのハイテンションになり、何の躊躇いも無く敵対する虚達を血祭りに上げられた為、特に問題無かった。

そんな感じで戦闘以外での性格が一変したノイトラへの周囲の反応は様々だった。

同じ十刃達は特定の者達数名を除けば比較的好評。十刃以外の破面達にとってはノイトラ・ジルガという存在は未だに恐怖の対象だったが、出会い頭に避けられる事が減ってはきていた。

振り返ってみれば、この一連の行動は彼にとつての逃避行の一種だったのかもしれない。

憑依してしまつたとは言え、紛れも無く今の自分はノイトラ・ジルガに変わりないとすれば今迄ノイトラが積み重ねてきた業も全て自分が背負わねばならないのだ。

記憶や経験を引き継いだ分、今迄どれ程他者の誇りや命を蹂躪してきたのか、そしてそれをどう思っていたのかも全て理解出来た。

——それ故に彼が酷く重い罪悪感を抱き、思い詰めてしまつたのも致し方無いだろう。

押し掛かる重圧に心が折れ掛かつたのは何回もあつた。その度に只管何かに打ち込む事で思考を止め、意図的に現実から逃避した。

ノイトラという皮を被つた凡人は嘆いた。一体自分が何をした、何の罰なのか、と。

そうして一通り嘆き、一連の逃避行によつて身も心も疲弊して落ち着きを取り戻した後、自分のケツぐらい自分で拭けと今度はもはや存在しないであろうノイトラを何度も罵倒してストレスの捌け口とした。

勿論自責の念だけに限らず、周囲から向けられる様々な感情を含んだ視線も相当に堪えるものでも有った。

その余りの辛さにいつその事逃げてしまえば——と一時は考えたが、直後にそれは不可能だとも悟る。

何せこの虚夜宮は殆どが藍染の監視下にある上、十刃というある意味やんごとなき立場で無断逃亡など許される訳が無い。

例え運良く逃亡出来たとしても間違い無く探し出され、それ程時間も掛からずに粛清されるだろう。

だとすれば残される手段は一つ。人知れず自らの手で死を選ぶ事だ。

楽観的且つ希望的観測だが、もしかすると此処で死ねば元の自分に戻れるという可能性もあるのだ。誰もが同じ状況下に置かれれば間違い無く思い付く筈だ。

だが小市民たる彼がこれといった覚悟も無く、加えて死への恐怖を乗り越えて自殺を図る事など出来るだろうか。

それに前提からして違う。今の彼の身体は人ならざる化け物そのもの。歴代全十刃中最高硬度を誇る鋼皮イェロを持ち、生命力も段違いなノイトラ・ジルガだ。

普通の人間の様に高い建物から投身自殺を試みても死ねる訳が無く、ギャグ漫画的な展開——犬〇家状態になる光景にしかないだろう。

首吊りも論外。水による溺死も、この虚圏では川も海も無いので不可能。練炭による一酸化炭素中毒などはそもそも元となる練炭が無いし作れない。

つまるところ、一般的に知られている手法での自殺は不可能。自分自身の斬魄刀を用いたとしても相当に自分自身を傷付けなければならず、非常に困難。

苦しまずに確実に死ぬる方法が有るとすれば、同じ十刃の中でも上位のグループ、または藍染に特攻して返り討ちになる事だが——流石に彼にも男としてもプライドはある。生き恥なら未だしも、死に恥を晒す様な行為は御免だった。

それに桁違いな実力を持つ者の前に立ちながらポーカーフェイスを保ち続ける自信も無い。死ぬより先に下着を変えなければならぬ失態を晒す可能性もある。

彼は徹夜して長々と考え続け——結局開き直った。別に死ななくとも良いだろうと。

発想の元が現実逃避の一種だったので、特に重要視していなかったのか。本人でも意外に思う程にあっさりとした決断だった。

取り敢えず今後はネリエルと再び相まみえる時まで生き延び、許す許さないは別として誠心誠意謝罪する事を前提に、それまで十分な強さを身に付けるという目標を定めた。

それから後の事は後で考えれば良いと、一部の問題を先送りして。

だが先送り出来ない問題の中に、憑依する以前からノイトラの周囲には一人の破面を除けば味方が居ない——別な言い方をすれば敵が多いという難点があった。

元来虚達の世界は弱肉強食だ。弱い虚は強い虚の糧となり、同族間での仲間意識を持つ虚は少ない、血塗れた道が延々と続く殺伐とした世界。この虚夜宮内でもそれは変わらず浸透している。

例え十刃とて気を抜き過ぎれば足を掬われる。だからこそ彼は誰よりも精神を研ぎ澄ませ、貪欲に、我武者羅に強さを追及しなければならなかった。

それ故に始めたのが、他の十刃達でもドン引きする程にストイックな生活。

基本的に十刃達は藍染に最低限でも従っていれば行動の自由が許されている。にも拘わらず、彼は必要最低限の食事に休息と睡眠時間を確保した上で、殆どの時間を鍛錬と任務に費やす事で自分を極限まで追い込み続けた。

だが疑問に思わないだろうか。追い詰められた状況下において何故彼は此処までの事が出来たのかを。

実を言えばそれは憑依前の彼の生き方にも起因している。

詳細は省くが、彼は高校へ入学して二年経過した頃、人生の転機——それも不幸な方向への出来事が起こった。それまで順調だったにも拘わらず、ある日突然謂れの無い罪を擦り付けられ、抗議する間も無く退学に追い込まれたのである。

元々不仲だった両親からは勘当され、それから始まったのは先の見えないフリーター生活。複数のアルバイトを掛け持ちし、給料も一般サラリーマンには遠く及ばず、ポロアパートのぼったくり価格の家賃で八割方消える経済状況。

一般向けの格安なファミレスすら縁が無い、そんな極貧生活の余りの厳しさに、当初は生活保護申請すら考えたが、世間体を考えると断念せざるを得なかった。

だがそんな生活も三年経過すれば慣れるというもの。順応と同時に人生に対する考え方も変化していった。

——人間なんて米と味噌汁さえ有れば十分生きていける。肉が欲しけりやカエルかへびを捕まえれば事足りるし、野草だって食える種類は豊富にある。

取り敢えず死に間に間に恥じる事のない様な生き方をすれば良い。この意志さえあれば大抵の苦難は耐えられるというのが彼の得た教訓だった。

憑依の直前までの記憶は、その人としての一種の悟りを開き掛けていたその時点で途切れている。

——憑依から一ヶ月程度が経過した頃。

彼はその時、自分に課した連日の過酷な鍛錬の影響で、肉体的にも精神的にも極限状況だった。

身体的スペックのゴリ押しで外面は何とか平然と振舞ってはいたが、戦闘能力につい

ては下手すれば野生の中級大虚にも後れを取ってしまうかもしれない程に消耗していた。

だが運悪く、彼はその日に藍染からとある任務を言い渡されたのだ。それは新たに発見された最上級大虚らしき者の率いる集団の住む集落の調査である。

負の連鎖というのは継続するもので、彼は何とその任務の途中で中級大虚の集団と遭遇。済し崩し的に戦闘に突入し、その激戦の中で瀕死の重傷を負い、地面に膝を着いた。破面の持つ鋼皮の強度は基本的に当人の保有している霊圧に左右される。幾らノイトラの鋼皮が十刃中最高硬度を誇るとは言っても、霊力も体力も尽き掛けている状態で複数の中級大虚とまともに闘り合えばそんな傷も受けるだろう。

だがそれでも彼は耐え切った。

御都合主義というべきか、死を間近に感じながらもそれを全身全霊で拒否し、血反吐を吐き出しながらも立ち上がって咆哮を上げた瞬間、その時まで使用していた得物——  
— 厳密には斬魄刀に分類される三日月状の刃の鎌が変化し、現在の形になったのだ。

そして同時に膨れ上がる自分自身の霊圧。まるで窮地に追い詰められた主人公が急激にパワーアップするという王道的展開だった。

後の展開は推して知るべし。技術もへったくれもない、圧倒的な力による蹂躪によって屍の山を築き上げ、その戦闘を終結させると、彼は虚夜宮に帰還して直ぐに寝た。

それから間も無くして、彼は藍染より新たに五の数字を昇進という形で与えられる事となる。

「…御都合主義万歳、つてか」

本来辿るべきだった歴史を忠実に辿り続ける現状。この憑依劇を一つの物語として見る側からして見ればつまらない事この上無い展開だろう。

——憑依した身としてはその方が未来を先読みし易くて良いのだが。

未だに地面に座り込みながら、彼は考える。

もしも憑依先がノイトラ・ジルガでは無く、物語の序盤に一種のボスキャラとして登場する虚や、主人公達に退けられる事が運命付けられた死神など、後半では無力に等しくなる様な存在だったならばどうなっていたかと。

今後の物語の展開の中で一切抗う事も出来ずに埋もれるか、そのまま無様に死んでいただろう。

そう考えると、少なくとも憑依した対象は良かったのかもしれない。

「此処に居たのか、ノイトラ」

「…っ、テスラか」

周囲に気を配るのを忘れていた彼はいきなりの声に一瞬ビクついたが、直ぐに平常心を持ち直して返事を返す事に成功する。

思考の渦中に居た彼を呼び戻したのは、黄土色の髪を持つ、端正な顔立ちをした優男。ノイトラの従属官であるテスラ・リンドクルツだ。

従属官とは十刃が選ぶ事が出来る直属の部下だ。

十刃によってソレに選抜されるのは数字持<sup>ヌメ</sup>ち<sup>メロ</sup>以下<sup>ス</sup>の成体破面が基本。

崩玉を使用せず生み出された者、使用して生まれた者が混在する成体の破面達の全てが番号を与えられる訳では無い。数字持ちとはその中でも十一以上の番号を名乗る事が許された破面だ。

ちなみに数字持ちは基本的に生まれ順で数字が決まるのだが、十刃の場合はその中でも特に優れた戦闘能力を持つ破面が選ばれ、強さの序列で数字が決まる。

「相変わらず此処が好きなんだな」

「…んな訳じゃねえ。何となく来ちまうんだよ」

「ハハッ、何だそれは」

素つ氣無い態度で返す彼に対し、それが好きという事だろう、とテスラは苦笑を浮かべる。

傍から見るとまるで友人同士の遣り取りだ。決して十刃と従属官の会話ではない。

本来であればノイトラから邪険に扱われる筈であったテスラだが、憑依後のノイトラにとつては孤立気味の自分を毎日構ってくれるテスラの厚意を無下には出来ず、精神的な余裕が無い時も常に傍に居る事を許していた。

それに加え、稀に振られてくる会話にも必ず相槌を打っていたし、言葉遣い等の対等な振る舞いを窺める事は一切しなかつた結果か、今ではこの通り相当気さくな態度で接して来る様になっていた。

流石に十刃と従属官という立場の違いは弁えているらしく、公の場では畏まった態度を取っているが、それでも二人の仲の良さは周囲に浸透しており、ノイトラの中の人の性格を知らない他の従属官達にとつては一番の疑問だったりする。

逆にテスラからして見れば、今迄相当高圧的だったノイトラが“あの日”を境に大人しくなり、絡み易くなったのは嬉しい誤算だった。

以前なら、何か気に食わない出来事があった時や、いきなり癩癩を起して殴られたりするのとは日常茶飯事で、他の従属官からは同情の目で見られる事も珍しくなかつた。

だが今ではそんな事は一切無い。ノイトラはテスラを酷い扱いをするどころか寧ろ氣遣う様な態度を見せるのが日常となっていた。

任務時は遅れんなよと激励し、任務完了時にはごころーさん、終いには何時も悪い、などと礼を呟く。

その余りの変わり様は確かに疑問に思わないと言えば嘘だったが——きつと何か思う所があつたのだらうと、テスラは深く考えない事にした。

元々テスラは雑な扱いをされてきたにも拘らず、その命が尽きる最期の瞬間までノイトラへの高い忠誠心を見せていた男である。

そんな彼に本来与えられる筈の無い優しさと信頼を向けられたらどうなるのか想像に難くない。

表面上は非常に砕けた態度ではあるが、いざと言う時には迷わず命を投げ捨てられる程に高い忠誠心を誇っていた。

「あの女が探していたぞ」

「またかよ……ほっとけ」

テスラにそう言われた途端、彼は心底迷惑そうな表情を浮かべ、溜息を吐きながらそ

う零す。

それを見て更に笑みを深めるテスラは実に楽しそうだ。

その態度が何となく気に食わなかった彼は、何とか意趣返し出来ないかと脳をフル回転させる。

やがて効果的な返しの内容を思い付くと、思わず口元を吊り上げた。

急激な表情の変化を不審に思ったテスラを余所に、反撃の狼煙となる一言を放った。

「そーいやテスラ、昨日の『アレ』はどうだった?」

「…一体何の話だ?」

「ハリベルの視姦」

「ブツフォツ?!?」

その整った容姿を崩し、盛大に嘖き出すテスラの様子に、彼は内心でガツツポーズを決めた。

「アイツの従属官三人組も中々な容姿<sup>モッ</sup>だし、さぞ眼福だったろうなあ…」

「ななな何の事やら?」

彼が言うのはティア・ハリベル。ネリエルの後、第3十刃へと至った女性の破面。

金髪で褐色肌、同じく金の睫毛とナイスバディが特徴。顔の下半分と胸上部を服で覆い、下部から腰部までを露出しているかなり際どい恰好をしており、初見であれば必ずと言って良い程目が行ってしまう。

従属官も三人居り、全てが女性。そのどれもが個性的で、且つ容姿にも優れているので、より注目を浴びやすいチームでもあった。

実はこのテスラ、精神的に余裕が有るせいか、結構自分の感情が表面に出ている事が多い。

その筆頭がハリベルに対する感情だ。

切っ掛けは些細な事。以前ノイトラに何故ネリエルのみに食って掛かるのか理由を問い質したところ、雌が雄の上に立つのが気に食わないのだと吐き捨てていたのだが、彼女の後釜に入った——ノイトラの言う同じく雌に分類されるハリベルに対しては何のアクションも見せない事に疑問を抱いたのである。

一体彼女はネリエルと何の違いが有るのか。テスラはそれを確かめるべく、それとなくハリベルを観察する様になった。

——実際はその時既にノイトラの中身は別人と化していたので、ハリベルに対して

は特に思う事も無かったただけなのだが。

好奇心がやがて憧れへと変わったのをテスラが自覚したのは、観察を始めてから数ヶ月経過した頃だった。

何時もテスラを近くで見ている彼は比較的早い段階でその変化に気付いており、同時に納得していた。

第1十刃と第2十刃を除き、殆どの十刃が自らの従属官を雑に扱う中、ハリベルは全くの真逆。多少やんちゃな従属官達を思うが故に、普段からクールな態度を崩す事無く厳しく接し、時に優しく論し、戦士としての気構えなどを説く姿は正に女傑。

見た目は完全に痴女だが、それも気にならない程に良く出来た人格者だった。

——成る程、確かに彼女は憧れを抱くには申し分無い存在だ。

こんな状況でなければ自分も同じ感情を抱いていたかもしれない。彼はそんな高い評価をハリベルにしていた。

「今度暇出してやるから声掛けて来たらどうだ？それともあの下乳見ただけで脳内補完余裕でしたっけ？」

「止めてくれお願いしますノイトラ様喉が渴いていませんか今直グ取ツテキマスヨ——」

「…落ち着けムツツリ野郎」

顔だけでなく全身から冷や汗を滝の様に流しながら片言な言動になり始めたテスラ。彼は静かに立ち上がると、その頭に軽く拳骨を落とした。

拳がテスラの頭部の天辺へ着弾したと同時に響き渡る轟音。

傍から見れば明らかに軽くでは済まない威力だ。だがテスラも軟では無いし、彼もちゃんと手加減はしていた。

意識は飛んでも怪我はしない、その程度だ。

拳骨が直撃した瞬間、テスラから何かくぐもった悲鳴の様な声が漏れた気もしたが、特に気にしない方が良いだろう。

——それから数分後。

藍染からの命令でノイトラを招集に来た一人の破面が目当りにしたのは、上半身を地面の砂の中突っ込んで微動だにしないテスラ、そしてその横で大きな欠伸をするノイトラの姿だった。

## 第二話 三日月と髭

此処に通い始めて最早何年目になるだろうか。ノイトラは普通に過ごしていても時間間隔が狂ってくるこの世界に毒づきながら、白一色の通路を只管に進む。

虚夜宮から普通に歩いて来たが、既に大凡十分は経過している。面倒臭がりな性格の者なら直ぐに怠くなる距離だ。

破面には一瞬で長距離を移動出来る魔法の様な歩法、響転ソニードという便利なものがある。それを用いれば一分も経たずに済むのだが——何故かノイトラは一切使っていない。

厳密に言えば、彼は鍛錬や戦闘時以外では殆ど響転を使わないのだ。それは他の十刃や下剋上を狙う破面達に自分の情報を僅かであろうとも与えない為でもあり、自分が楽をする事を覚えたくないという馬鹿真面目な性分が原因である。

それに響転というのは便利な反面、余りの踏み込みの強さの為その踏み込んだ地面を破壊してしまうという欠点がある。

実力が上の者程、響転は速く、そして移動する距離が増える。それは踏み込み時の破壊レベルも同様。

響転の技量が上がればそういった事は無くなるのだが、ノイトラはそれほど得意な訳でも無いので現時点では正直言って厳しかった。

過去に散々虚夜宮の施設を破壊していたのだ。これ以上雑務係の破面達の仕事を増やす訳にはいかない。

これ程まで他の破面達に気を遣っているのは、ノイトラを除けば十刃の中では片手で数える程度しか居ない。

殆どの十刃の性格は自己中心的であり、戦闘力の乏しい底辺の破面達の事を幾らでも湧き出る塵と思うか、眼中に無いかのどちらかである。

だがノイトラとて、つい数年前まではその自己中心的な十刃と同じであったのだから、余り大きな声で自慢出来る資格は無い。

それでもこの憑依してから過ぎた数年間の努力は無駄にはなっておらず、荒っぽいが時折不器用な優しさを見せるノイトラの人気は下々の破面達の間で密かに上がっている。

歩き始めてやや数分、ノイトラはやがて開けた場所に着いた。

と同時に——真横へと軽やかなステップを踏んで跳躍する。

「カステイイイゴオオオ!!」

周囲に響き渡る程の怒声。または咆哮とも言つて良いそれを放つ影が天井スレスレの高度から現れる。

影は先程までノイトラが立っていた場所目掛けて長い脚を踵落としの要領で振り下ろし、轟音と激しい衝撃を巻き起こした。

飛散する無数の瓦礫と砂塵。

やがてそれが晴れた場所には半径五メートル大のクレーターが出来上がっていた。

「むん!!」

影は其処にノイトラが居ないと気付くと、即座にクレーターの中心から右脚を引き抜くと、一瞬でその姿が掻き消える。

「…響転か」

クレーターを眺めながらノイトラがそう呟くと同時に、彼の背中を照らしていた光が遮られる。

思わず反射的に右手に斬魄刀を取り出しそうになったノイトラだったが、その影の正体に心当りがあつた為、抑えた。

ノイトラは自身の背後に回つた影が放つ音と殺気から、次の答えを導き出す。

——霊子を固めて作つた足場に立って、後頭部に狙いを絞つた回し蹴りを放つ気か。

だが殺気の密度と使用する脚に込められた霊圧から、並みの破面なら頭部全体が粉碎するレベルの攻撃だと理解すると、一気に感情が冷え込むのを感じた。

「…ん何い!？」

ノイトラは殺人的な蹴りを首を前倒しにする事で躲すと、影の脚が振り抜かれる前に左手で掴み取つた。

影は自分の脚を万力の如く固定するノイトラの手から逃れようともがくが、ビクともしない。それどころか更に力が加えられたらしく、握られた部分の骨がミシミシと悲鳴を上げ始めた。

「ちよつ、待つ…ぎよえええええ!!」

「カステイルゴ  
刑罰つて……」

ノイトラは背後から聞こえる悲鳴を一切気にせず、左手をそのまま襲撃者の身体ごと振り被る。

その向かう先は直ぐ近くの壁だ。

「何に對してのだゴラア！」

「ムゴフツ!!」

ネイティブアメリカン・ファッション風のフリンジが付いた白装束に身に纏った襲撃者の男——ドルドーニ・アレックスサンドロ・デル・ソカッチ才は壁に上半身を完全に埋める事となった。

ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカツチオは数年経つ今でも、その時の光景を鮮明に覚えている。

十刃フリハロン・エスパルター落ち、数字は103。トレス・シフラス3ケタとも呼ばれるそれが、現在の彼に刻まれた数字だ。

それは何らかの理由で十刃の権限を剥奪された、かつて十刃だった破面だという事を示すもので、当人達にとってはこれ以上無い程に屈辱的な事実でもある。

ドルドーニが知る立場を同じくした者達の中には、十刃の権限を剥奪された途端に反抗の意志を示し、新たにその数字を得た十刃によつて鎮圧、もとい始末された者も居れば、剩え落ちぶれるくらいならと言つて自分自身で命を絶つた者も居た。

だが彼はそのどちらも選択しなかった。十刃という高みを再び肌で感じるべく、十刃落ちとなつた後も己の練磨を絶やさなかった。

藍染に自分の実力を示す事が出来れば、何時の日かきつとあの場所へ返り咲ける時が訪れる筈だと、そう信じ。

そんな時だった。3ケタの巢という虚夜宮の外れに位置する施設に移住させられて暫く経つた後、予想外過ぎる来客があつたのは。

ノイトラ・ジルガ。ドルドーニが十刃を外れたのとはほぼ同時期に第5十刃へと昇格した、藍染の持つ崩玉によって覚醒した破面の一人。

彼が第8十刃だった頃から会話した機会にはほぼ皆無。何時も遠目に見るだけで終わっており、彼の為人は全く知らない。だが第一印象で大体察しは付く。

眼前に立つ者の尽くに吠え喚き、気に入らない者には背後からでも容赦無く噛み付かんとする獣<sup>ケダモノ</sup>。それに尽きる。

後に風の噂で聞くと、正にその通りな様だった。

だが久々に見た彼の姿はそれとは全くの別物。獣から一転、常時その身に纏っている霧囲気から感じ取るに、まるで相對する者尽くに絶望を齎す死神<sup>ムエルテ</sup>だ。

もし敵として相對しようものなら——そう想像した途端、ドルドーニは不覚にも己の膝が震えるのを感じた。

そんな現十刃がこんなところに何の用か。自分達が目障りだと表し、始末しにでも来たのだろうか。

間近で向き合ってみて改めて判る、その膨大な量でありながら完全に制御された靈圧と、その佇まいから滲み出る威圧感。下手すれば殺し合いに発展する可能性があるのも拘らず、平然と腰を据えて佇んで居られるその胆力。

只、後者に関してはこちらが警戒するに値しない雑魚と認識しているに過ぎないのか

もしれないが――。

ドルドーニは先程から警報を鳴らし続ける己の本能から、ノイトラが自分とは一線画す存在であると悟りながらも、次第に早まる鼓動を抑え、腰を据えてその場に留まる。例え此処で彼と戦って果てる運命だとしても、傷の一つや二つは付けて散ってやろう。内心でそんな覚悟を決めながら、左足をやや後ろに下げ、何時でも飛び掛かれる様に身構える。

だがその覚悟は次の瞬間、無用の長物へと変わった。

「なっ!？」

――ノイトラがゆっくりと頭を下げたのだ。

イメージ像とは全く異なる、こちらに対して敬意を示した、綺麗な斜め四十五度の御辞儀。礼儀の基本などといった関係には疎いドルドーニでもハッキリ解る程に、それはそれは見事なものだった。

それもその筈。ノイトラが行った御辞儀は最敬礼というものに分類される、重要な依頼、深い感謝、謝罪を表すときにも用いられる最も丁寧な御辞儀だ。

ノイトラに憑依する前の彼が仕事の中で磨き上げた、相応の重みを持ったものでもあ

る。

混乱の余り硬直したままのドルドーニに、ノイトラは更なる追い討ちを掛けた。

「俺に脚の使い方を見せてくれ」

「……は……？」

ドルドーニはその瞬間自分が浮かべた表情をこう評している。

今迄の人生の中で最も間抜けな顔をしていただろう、と。

ドルドーニは暫く石像と化していたが、その間も体勢を変えないノイトラの姿を見て次第に意識を取り戻していった。

カバジエロ  
紳士として、

他者に頭を下げ続けさせるのは余りに不埒。

己の失態を誤魔化す様に咳払いをし、何時も通りの芝居がかったものでは無く、混り気無しの真剣な口調でノイトラに語り掛けた。

「……先ず誠意は伝わった」

その言葉に、ノイトラが頭を上げる。

ドルドーニは一息置いて、彼の目を正面から見詰めながら問い掛ける。

「その上で問おう。貴殿はそこまでして何を成したいのだ？」

「……………」

頼み事をする者の態度としては申し分無い。だが未だ一つ足りないものがあつた。

——覚悟だ。

ドルドーニは意味も解らず高揚する精神を押し留めながら、返答を待つ。

十刃がこの様な暴挙に出るとは誰が想像しただろう。ましてや十刃の中でも一際本能で動く獣と名高いノイトラ・ジルガがだ。

孤高の獣は人一倍高い筈のプライドを殺してまで、こんな無様な姿は晒さない。その位なら死を選ぶ。

だが眼前に居る男は何だ。こんなにも天晴な誠意を示し、格下である筈の自分に真っ直ぐな瞳を向けながら必死に懇願する者の何処が獣か。

ドルドーニは今迄のノイトラに対する固定概念を全て捨てた。

この場に限っては、並々ならぬ思いを秘めた一人の男として接しようとする。決める。

そして知りたくなつた。

自分の手を借りてまで何を追い求めるのか。  
彼のその瞳の奥に秘めた魂の色を。

「ケジメを…付けたい」

瞳を逸らさず、ノイトラは普段の荒々しい言葉使いを止め、ぽつぽつと語り始める。  
ドルドーニはその一言一句が聞き手の魂まで直接響いてくるのを感じた。

「過去に、罪に、自分に」

何故自分の精神が高揚したのか。

次の瞬間、ドルドーニは理解した。

「その為に…強くなりたいんだ」

——同じなのだ。

中身は違えど、目標へと向かって只管に自分を磨き続ける自分と。

何と微笑ましい光景か。

まるでチョコラテの様な甘さを持ちつつ、その理想が決して綺麗なものでは無い事を理解した上で、過酷な道を歩む事を決めた坊チヨやの様だ。

十刃としての別次元な強さ、通常とは逸脱した精神のあり方は何処にも見られない。

「頼む、先輩」

返答の内容など、決まっていた。

「師匠プロフェッショナルと呼ばたまえ、弟子アルムよ」

「んで、何のつもりだ師匠」

「女好きと話す口など持たん！ 断固として黙秘する！」

「…あ？」

「済みませんでした。謝りますので斬魄刀を首に添えないでください」

正座させたドルドーニの正面に立ち、ノイトラは彼の襲撃の意図を問い詰める。

だが当の本人は質問に答えない上に反省の色が無い。

殺意を向けられた身としては到底納得出来る訳が無く、蟬谷に血管を浮き上がらせたノイトラは無言で三日月の刃を突き付ける。後ほんの少しでも一押しすればドルドーニの首が落ちる程度に。

普段からフザケた行動や言動の多いドルドーニだったが、流石にこれはマズイと悟ったのか、滝の様に冷や汗を流しながら謝罪の意を示す。

ノイトラはその様子を見て溜息を吐きながら、澁々斬魄刀を消した。

ノイトラの斬魄刀は余りに巨大で常日頃から持ち歩ける代物では無い。原作を見る限り、虚夜宮内部でのノイトラは基本的に無手ではあったが、一体何処に仕舞っているのか不明だった。

記憶を見る限りでは、ノイトラは以前から自分の拠点に斬魄刀を仮置きしていたらし

い。だがそれでは余りに不用心ではないかと中の人は考えた。

斬魄刀という概念は本来、虚とは対を成す死神の持つ力の一部である。虚には元々無かったもので、死神の性質を得た虚の進化系である破面が、自らの真の姿と能力を刀状に封印した形で持つ事が出来る様になったのがコレだ。

この斬魄刀というものは持ち主と切つても切り離せない関係にある。破面の場合、死神のソレとは異なり顕著だ。

肉体の一部——それどころか一種の心臓と言つても過言では無い代物なのだ。

ある例外を除き、持ち主にしかその内蔵されている力を使えないが、それ以外では誰が持とうが振るおうが関係無い死神とは重要度が違う。当然と言えば当然だろう。

基本的に十刃達の行っている自分の斬魄刀の管理は、一般的な貴重品の取り扱いと同じだ。入浴時や藍染が主催の会議等、どうあつても帯刀出来ない時に限り、何処か別の場所に仕舞うか信頼の置ける従属官に預けるかのどちらかだ。

とはいつても、それは短時間に限る。長時間己の手から斬魄刀が離れるのを破面達は嫌う。

その為、多少は不便であっても常に帯刀しているのが破面達の中でも普通の事なのだ。

だがノイトラの場合は複雑だった。それは彼の斬魄刀の形状と質量にある。

何処かに仮置きするかテスラに預けるにしても非常に扱いに困る代物だ。それに加え、改善に向かつているとしても未だに風評がアレな持ち主の斬魄刀が目に見える場所に置いていようものなら、他の破面達に要らぬ緊張感を抱かせる原因にもなってしまう。

——だが其処はH E N T A I国家とも謳われる日本の斜め上を向いた思考回路を持つ中の人の発想が全てを解決した。

それはほぼ頭を捻るまでも無い単純な話だ。元は自分の力の一部なのだから、再び体内に戻す事なども出来るのでは、と。

斬魄刀に込められた力を解放し、虚としての肉体と能力の核をその身に回帰させる帰刃レスレクシオンとも違う。己の力を収束して核と成し、斬魄刀として封じるのではなく、己の体内にて核を形成したまま封印するという意味でだ。

——まあ完全に形になるまでそれなりの苦労があつたのだが、此処では割愛しておく。

現在この方法を取れるのはノイトラのみ。だがコツさえ掴めば他の十刃他破面達にも可能だろう。だが積極的に広める気は彼には無かった。

そしてこの斬魄刀の体内への収納法は、普段の生活の身軽さの他に、以前より抱えていた一つの懸念を払拭させるという効果も齎した。

ノイトラは己の斬魄刀の所在を如何様にするか悩んでいたある時、不意に目の前を長身で異様に縦長の仮面を被った破面が横切った。

それは第9十刃<sup>スレ</sup>であるアール・アルエリ。首から下は人型にも拘らず、普段から仮面に覆い隠されている頭部は薄紅色の液体で満たされた透明なカプセル状で、その中に虚を思わせるボール大の頭が二つ浮いているという不完全な人間形態を持つ破面。

他の虚を喰らう事でその霊圧と能力を際限無く取り込み、自分の物にする事が出来るという能力を持つアール・アルエリ。その事を知るノイトラは彼の姿を目の当りにした瞬間、現時点で最も警戒に値する存在の一人として認識した。

理由はその能力から導き出された一つの可能性にある。虚を喰らってその力を我が物にできるのであれば、破面という虚の一部でもある斬魄刀を喰っても同じなのではないかと。

ノイトラは元々アール・アルエリとの交流は少ない。それは他の十刃に対しても同様ではあるが、それとこれとは別の話。

十刃はその大半が最上級大虚、中級大虚から破面化した者達で占められている。だがアール・アルエリはその無限に成長する能力の特性からか、最下級大虚から破面化した身でありながら十刃に席を置いている。

その背景が要因となつてゐるかは不明だが、基本的にアールローは他の十刃からは見下されているか、または見向きもされてゐない。

というか当人が他の破面を同類以前に一種の糧として見てゐる点も要因の一つにもなつてゐるのだろう。事実、ノイトラは過去に何度も満身創痍で虚夜宮に帰還した事があつたが、その度に彼から獲物を見定めるかの如き視線を肌で感じたのを覚えてゐる。

以上の事情もあり、ノイトラはアールローの大凡の能力の把握は出来ても、詳細までは不明のままであつた。

虚自身を完全に喰らう事を取り込めるのか、はたまた虚の身体の一部でも喰らえば良いのか。前者なら問題無いが、後者ならば色々とマズイ。

考え過ぎとも言える考察だが、最悪を想定して行動する事は、常に死亡フラグの香りの漂う状況下で過ごすのに必要不可欠。

念には念を。そんな思想の元、ノイトラは行動してきた。

このドルドーニに対してもそうだ。

「で、茶番はもう良いだろ？ さっさと今日のレッスンを頼むぜ師匠よ」

「う、うむ」

ノイトラは日頃世話になっていいる分、この件は有耶無耶のまま終わらせる事にした。だがドルドーニはその対応を妙に勘繰ったらしく、機嫌を窺う様にノイトラの表情をチラチラと覗き見ていた。

その余りに情けない反応に、本当に彼が先程まで熾烈な戦闘行為を繰広げていた者と同一人物なのか疑いたくなる。

「…もしかして本気で殺<sup>や</sup>る気だったのか」

「そそそ、そんな訳無かろう！ 嫉妬という浅はかな感情如きで殺意を抱くなど、紳士としてあるまじき振る舞いはいせん！」

その反応から、ノイトラはドルドーニが冗談では無く本気で殺意を向けて来た事を知ると、抑えていた霊圧を少し解放してジト目と同時に彼にぶつけた。

当人は滝の様に冷や汗を流しながら何かを誤魔化す様にして、額に残る大虚時代の仮面の名残を頻りに触り続けていた。

## 第三話 三日月と鍛錬と…

破面の中で武というものに通じている、またはそれに似通った戦闘スタイルを持つ破面は極めて少ない。

十刃などが顕著だが、今迄踏んだ場数と経験、自分自身のスペックと勘を中心にした戦いをする者が殆どだ。

ノイトラもそうだ。しかしだからといってそれを変えないままにいる気は毛頭無かった。

正直な話、ノイトラは自身の鍛錬の質の向上及び戦闘方法の柔軟化を求めている。

現状においての鍛錬の内容はこうだ。場所は虚夜宮の外。入念なストレッチから始まり、慣らしの意味での響転を左右と前後の反復で各千回、遠中近全ての距離を想定しての素振り各二千回、霊圧のコントロール向上の為の霊圧解放から封印を大凡百往復、帰刃状態での響転五百回及び素振り各千回、これ全てを三セット行う。そして最後に脳内で仮想敵を眼前に置き、模擬戦を行って終了だ。

時間と霊力に余裕がある日においては、最下級大虚以上の虚のみが使える霊圧の集中された破壊の閃光——セロ虚閃。そして解放状態の十刃が放てる黒セロ・オスキュラス虚閃の練習や改善

の考察も行ってゐる。

ちなみにもう一つ。通常状態の十刃が放てる最強の虚閃、王虚グラン・レイ・ゼロの閃光というものがあるのだが、こちらについては余り練習していない。何せ発動前に自らの血を媒介にするという余計な手間が必要となるロマン技なので、相手によつてはそんな隙を作る余裕などある訳が無い。

只普通より規模が大きい虚閃という違いだけで、普通の虚閃の質を向上させれば十分だった。

傍から見ても十分過ぎる鍛錬内容。案の定、鍛錬後のノイトラは三十分から一時間の間は霊力と体力の回復に専念しなければ真面に動けない程だ。

だが破面の身体というものは思った以上に丈夫な様で、過剰なトレーニングを積んだアスリートにありがちな肉離れや剥離骨折などは今迄も一切無い。

しかもこの虚圏の 대기には非常に濃い濃度で霊子が満ちており、時間を掛けて回復に専念すれば確実に元の鍛錬開始前の状態まで持つて行ける。

全てはこの恵まれた身体と環境の後押しがあつてこそその鍛錬だった。御蔭で今となつては、原作で護廷十三隊の隊長格に対して互角の戦いを繰り広げた従属官達程度なら、解放無し且つ片手で捻れる程度の実力は着いたという自負がある。

だがノイトラはそれでも不十分だと断言した。

確かに地力は付いた。しかし相手が同格かそれ以上ともなれば話が変わってくる。

新たに別な鍛錬をするにしても、まず実質一人で行う事が前提であるし、基準となるものがノイトラ独自の戦闘スタイルのみときた。その時点で大体は察せるだろう。

並大抵の攻撃を容易く弾き返す防御力を全面に出し、巨大な武器を圧倒的な臂力と速度で振るって相手を叩き潰す。例えるならば戦車が近いだろうか。

だがこれだけでは速度、技術、戦略眼、そして天性の戦闘センスを兼ね備えた格上相手では直ぐに攻略されてしまう。

如何に厳しい鍛錬を積もうが、中身が一方向のみを向いていては駄目だ。全てが無駄という訳では無いだろうが、その鍛錬はやがて体力作り以外は余り意味が無いものと化すだろう。

戦いとは精神、技、身体——所謂心技体に加え、機転というものが求められる。

例えば目にも留まらない剣速が自慢の戦士が居たとする。得意技は縦一閃の振り降ろしのみで、それ以外はからつきしときた。

其処に体力も剣速も無いが、技を只管磨き上げた武道家が現れ、戦士と相対。その武道家は戦士の剣速を迫る事は叶わなかったが、その挙動の一から十までを見切る事が出来、戦士の得意技を完全に封殺可能だった。

さて、此処で問題だ。この現状で戦士はどうすれば武道家に勝てるのか。

その答えこそが機転だ。

戦士が余程の馬鹿でない限り、ある程度の時間が経てば別の戦法を思い付くだろう。だが戦場ではコンマ一秒の遅れが命取りとなる。一瞬で決着がつく事もザラなこの世界では尚更だ。

この戦士が日頃から剣速を生かした戦法のみしか考慮しない鍛錬を積んでいたとすればどうなるのか。普通に考えれば、思考を止める事に慣れている戦士はほぼ確実に機転が遅れ、呆気無く武道家に敗れるだろう。

だが真逆、得意分野を理解しながらもそれに頼り切らない柔軟性を追求した鍛錬を積んでいれば勝利する可能性が高まる。

ノイトラ・ジルガは戦いの才が飛び抜けてある訳では無い。見た目に反した身体的ポテンシャルと鋭い勘、そして誰よりも貪欲で情け容赦無い姿勢が前面に出ているだけである。

——迷いある刃は斬れるものも斬れなくする。

つまりはそういう事だ。

一度敵と認識すればその瞬間から呼吸一つまでが戦い。如何なる手段を用いて完膚無きにまで叩き潰す。場合によって相手が本当に自身が手を掛ける価値があるか否かは考慮したりするが、それ以外では基本的に情けを掛ける事は皆無。

その一貫性も強さの一つなのだろうが、それにも限界がある。

ノイトラは悩んだ。このままでは地力が付くばかりで肝心の戦闘能力自体が上がらないだけだと。

行き詰ってテスラに鍛錬の相手を頼み、帰刃状態の彼を未開放のまま素手でボコボコに叩きのめしたりした事もあった。

一番の理想は藍染からの最上級大虚の探索及び捕獲任務。その中で発生するであろう大虚以上の存在との戦闘経験を積む事だが、残念ながら最近はその任務の数が減ってきている。

それは即ち、藍染が自分の配下の戦力の充実を図る必要が無くなっている事を示唆している。

この事実はノイトラから余裕を奪うと同時に大きな焦燥感を与えた。

考え付く案は全て考え、内容を吟味した。

他の十刃に手合せを願うのは論外。何時敵となるか判らない者に好き好んで手の内を見せたがる奴が居るだろうか。素直にハイと返事してくれる訳が無い。

破面に至る前と同じく他の中級大虚を捕食するのも不可能。破面となった今では実入りがあるかどうか不明だし、先に述べた通りその任務の機会が極めて少ないので、頭の隅に置いておく程度しか出来ない。

というか前提条件が厳しいのだ。藍染からの監視は別として、他の十刃や破面達に不審に思われぬ、且つ目立たない範囲で強くなる方法など易々と思いつくものか。

悩みに悩んだ末、テスラを叩きのめしながら閃いたのが十刃落ちと3ケタの巢の存在だった。

彼等は元十刃とはいえ、その扱いは現十刃には及ぶべくも無い。情報の共有はされているが、藍染の思惑からはほぼ完全に弾かれている。そんな存在だ。

それに施設内のほぼ全てが監視下に置かれている虚夜宮とは違い、3ケタの巢の監視は必要最低限といった範囲の狭さで済まされており、少し気を配るだけで幾らでも掻い潜れる環境下であった。

例えるなら大手デパートに設置されている監視カメラ。それに移る映像を稀に藍染の副官二人が虚夜宮にある一室から覗く程度。中には追尾型のタイプもある様だが、数は少ないので何とでもなる。

——ちなみにノイトラは様子見で3ケタの巢に初めて訪れた際、カメラの配置は全て把握している。

これ等の条件から、3ケタの巢は鍛錬の為の拠点としては最適だった。それで且つ十刃落ち達に協力を仰げれば、最低でも今以上の強さは得られる筈だ。

だが常識では測りきれない能力を持った藍染にとって、この行動程度は直接見ずとも

読んでいるだろうと、ノイトラは確信にも等しい推測をしている。

正直、それは既に諦めている。主人公の成長補正でも無い限り、どう足掻こうがあのもチートの象徴たる存在に敵う筈が無いのだから。

所詮は憑依系中身別人オリ主。如何に不完全で矛盾点があろうと、完成された料理ものがたりに追加された余分な異物トッピングに過ぎない。

険しくも輝かしい道を歩むに相応しいのは主人公達のみ。異物は異物らしく邪魔にならないうまく隅っこで大人しくしていれば良いのだ。

だがそれをする為にもまずは生き延びねばならなかった。

ノイトラの目的はネリエルへの謝罪と贖罪が主だったが、つい最近はその後に転がっている特大の死亡フラグ——十一番隊隊長、更木さらき 剣八けんぱちから逃げ延びる事も追加されていた。

彼は憑依前、ネットにてBLEACHは漫画だけでなく小説版も存在していると知り、少し情報を漁ってみた事があったのだが——それで得た情報から、正直言って剣八への勝機が限り無く低いと悟った。

更木剣八は本来であれば総隊長すら凌ぐ底知れぬ力を持っているのだが、戦いを楽しみたいが為に無意識の内に相手の強さに応じて自分の力を調整しているのだという。

そのトンデモ設定を知った瞬間、敵に依じて強さを調整とか、一体お前は何処の真祖

の姫君だとツツコんだのを覚えている。

つまりノイトラが幾ら強くなるうが、結局はそれに比例して剣八も強くなるのである。

普通に無理ゲーである。

ノイトラは頭を抱えた。一応抜け道はあるにはあるのだが、それでは重要なキャラクターの一人である剣八を殺してしまう可能性が高くなる。

知識としては藍染と主人公との決着から少し進んだ部分までしか無いが、良くも悪くも更木剣八の存在は今後のストーリーリー上に於ける重要なフアクターになるのは間違いないだろう。故に殺す事だけはどうしても避けたかった。

だからこそノイトラは迷わず逃走を選択した。だがその為にはやはり効率的な鍛錬による戦闘能力向上が必要不可欠だった。

自分が強くなる為、そして目的を達成する為の一つの足掛かりとして考察したこの穴だらけな計画だが、鼻っから成功するとは思っていない。

主人公たる黒崎くろさき一護いちごがこの虚圏までやってくるまでは未だ猶予がある。

破面の中では珍しく義理人情に厚い性格で、男らしい男とも言えるドルドーニだ。下心無く誠実に、そして粘り強く説得を重ねていけばほぼ確実にこちらの意図を汲んでくると、ノイトラは期待していた。

ドルドーニに指導を頼んだ理由は単純。ノイトラの身長は二メートルと十五センチの細身で非常に足長だ。ならばそれを生かせる戦闘手段とすれば脚技、そして脚技といえば彼だろう、という簡単な連想からきている。

一応本来のノイトラも、消耗した一護を甚振るのに蹴りを多用する事になるのは知っている。だがそれは所謂ヤクザキックの類いであり、無駄だらけで一切洗練されてなどいない技だった。

その反面、ドルドーニの戦闘法は実に武術的でスタイリッシュな足技が主体である。3ケタの巢に侵入し、ドルドーニの馬鹿丸出しな振る舞いから侮った一護を容易く一蹴。防御の甘さに反応の鈍さを指摘した彼のあり方は正に武人。

ノイトラがその足技を習得すれば間違い無く戦闘手段が広まる。これ程指導を仰ぐに適した人物は他には居なかった。

「準備は？」

「…何時でも」

そのノイトラだが、現在彼は3ケタの巢の開けた場所にて一人の男と相対していた。特徴的なオレンジ色のアフロヘッドをした男の両手に握られているのは、グリップの

両端に小さな刃がある鉤爪。

「じゃあ行くぜ、ノイトラ・ジルガ！」

「来い」

ノイトラが重心を低くしたと同時に、男は響転でその場から消える。

次に男が現れたのはノイトラの懐。そのまま拳を前方へと振り抜いた鋭い打撃が、がら空きの腹部目掛けて幾重にも襲い掛かる。

だがノイトラの鋼皮の前には全てが無意味。

込められた霊圧も、力も、速度も、その絶対的な防御力を崩すには及ばない。

態々防ぐ必要性すら無い、それ程に男とノイトラには差があった。

「甘えよ」

「っ!!」

「ぶっ飛べ」

にも拘らず、ノイトラは瞬時に一步後退すると、男の打撃を敢えて蹴りで全て弾き返

した。

それも御丁寧に繰り出された打撃と同じ回数で。

その数は百。まさか真正面から、しかも打撃に合わせて無効化されるとは思っていなかったのだろう。男は驚愕を隠せていない。

ノイトラは最後の一打を弾くと、勢いを殺さず、慣性に従って身体ごと回転。再び元の方向へと体勢を戻すまでの間、威力と速度を上乗せした回し蹴りをお見舞いする。

「クソツ…龍拳（ドラグラ）!!」

最後に体勢を崩された男はその蹴りを躲し切れないと悟る。

だからといってその蹴りを喰らえば瞬間に戦闘不能へ陥ってしまうのは必至。

その事を十二分に理解していた男は直前に己の持てる力を解放し、全力で迎え撃つ選択をする。

「グ…ウウウアアア!!」

一瞬のみ発生した光の中から現れた男の姿はまるでアルマジロを連想させる、両腕と

背中に膨らむ様にして覆う鎧を纏っていた。

男は蹴りの着弾点である胸部をその両腕の鎧で防御し、受け止めんとする。

だがその脚は無慈悲にもその鎧を砕き、受けた腕ごと押し込んで、男の胸部に直接ダメージを叩き込んだ。

それでも尚残る破壊力に踏ん張りきれず、男は後方へ軽々と吹き飛ばされる。

「…硬さ×力×速度×霊圧、イコール破壊力ってやつだ」

「そ、そんな公式あって堪るかよ…」

やがて男は壁に身体を減り込ませて破壊して停止すると、絞り出す様にして呟く。

もはや立つ気力すら残っていないらしく、弱弱しく両手を上に持ち上げて降参の意を示すと、次の瞬間には全身から脱力して意識を失った。

「龍リュビル・デル・ドラゴン 拳。別に撃たせても良かったんだが…悪い、建物が壊れるんでな」

ノイトラは聞こえていないと理解しつつも、男に謝罪する。

そして礼に始まり礼に終わる武の精神に従い、その場で姿勢を整え、一礼した。

一連の光景を眺めていた二人のギャラリーは男が意識を失ってから数秒後、ハツとした表情で正気に戻る。

内一人であるドルドーニは顔色を真っ青に染めながら慌てふためくと、これまた数秒後に声を荒げた。

「そ、それまで!!」

「…っつか遅過ぎよ馬鹿髭!! あいつ死んだわよ絶対!!」

ドルドーニに追従するかの様に声を上げたのは、もう一人のギャラリー。

妖精の様な一對の羽の付いたゴスロリの様な衣装に身を包み、左頭部には小型の飾りのような形をした仮面の名残がある女性——チルツチ・サンダーウィッチ。

「なにおう!? 御嬢さんセニヨリータこそ呆けていたろうに!!」

「あんたは審判でしょうが! あたしはただの観客!」

「断じて否! それは詭弁と言うものだ! 黙っていたのなら同罪である!」

「それこそ詭弁でしょうがあああ!!」

怪我人そつちのけでギヤーギヤーと言ひ合ひを始める二人。

ノイトラはそんな二人に溜息を吐きながら、壁から男を引き摺り出すと、肩に担いで静かに立ち去るのであつた。

ノイトラは先程自分が打倒した男を背負いながら、破面達が共有している治療室へと足を運ぶ。

勿論、他の破面が居ない事は確認済みだ。

現十刃が十刃落ちの破面と仲良くしている場面など見られようものなら、間違い無く他の身の程知らずの馬鹿な破面達がちよつかいを掛けて来る。

虚夜宮において十刃は畏怖の対象だ。だがそれも理解出来ない阿呆も居る。

そういった輩は大抵その十刃の従属官達によつて知らぬ間に断罪及び処刑されてい

るもののだが、従属官がテスラ一人のみであるノイトラの場合はそうはいかない。

一応テスラも敵が多いノイトラの為に頑張つて対応しているのだが、やはり一人では限界があつた。その証拠に、片手で数える程度ではあるが、ノイトラは何度か見慣れない破面に絡まれている。

テスラの斬魄刀、牙鎧ベルーガ士の帰刃の能力は単純明快。解放と同時に身体が猪の巨人の姿になり、見た目通りの筋肉質の屈強な肉体と怪力のみで敵を捻じ伏せるだけだ。

搦め手が得意、または特殊能力を持つ破面が相手だったりするとそれなりに不利になつてしまう。

だからこそノイトラは無駄に争いの要因を作らない様、常日頃から気を配っていた。

そして剣八の放つた一太刀の元に両断されるといふ呆気無い死を迎えさせない為、定期的にテスラの鍛錬フルボッコを行いながら。

「セフィローは居るか」

「はい、少々お待ち下さい…」

ノイトラは治療室の分厚い扉を開き、中に入つて直ぐの場所に居た女性の破面に声を掛ける。

顔の右半分を髑髏の仮面で覆った彼女の名はロカ・パラミア。虚夜宮内での雑務係を任されている破面達の内の一人であり、この治療室も兼任している多忙な存在。それと血塗れのノイトラを見ても一切動じなかった猛者の一人でもある。

というか初見では人形のように無表情で、しかも初対面の筈なのに何故か彼女の向けて来る視線に何か冷めたものを感じたのをノイトラは覚えていた。

疑問には思ったが、それも時が経つに連れて薄れて行き、今では普通に会話出来る程度になっているので、今では心の隅に置いておく程度になっている。

ロカの姿が見えなくなると、不意にノイトラは周囲を見渡した。

相変わらず薄暗く、入口の巨大な扉も相俟って閉鎖的なイメージを感じる治療室だ。離れた場所ではロカと同じく雑用係である破面達が黙々と作業をしている。

だがノイトラは知っている。その破面達は元から今の場所に居た訳では無いのだと。

虚夜宮に居る破面達なら誰もが習得している探査回路<sup>ベスキス</sup>。その能力によって相手の霊力の強さや所在を測り、自分が来るのを悟って距離を取ったのだ。

ノイトラが過去に初めて此処を訪れた際、あの破面達は彼を見るや否や一気に顔色を青褪め、逃げるようにして小走りで立ち去って行ったという実績がある。それが数回続いた後、現在の様な状況に落ち着いたのだから、証拠としては十分だろう。

もはや見慣れた反応ではあるが、精神的な弱さ故に何も感じないという訳にもいかな

かった。

ノイトラは表面上は平静を保ちながら、近くのホテルに男を寝かせると、その傍らにしゃがみ込んで治療担当が来るまで待機する事にした。

「はあ…」

「幸せが逃げるぞ」

「っ!？」

ノイトラは弾かれる様にして背後のベッドに振り返った。

憂鬱な気分を溜息に乗せて吐き出した瞬間、何時の間にか起きていたらしい男——  
ガンテンバイン・モスケーダが声を掛けてきたのだ。

しまったと、弱っている様子を見られた事にノイトラは舌打ちする。

ガンテンバインは特に気にした様子も無く、胸部を擦りながら言葉を繋ぐ。

「本当に変わったな、ノイトラ・ジルガ」

「…何がだ」

「手加減しただろう？ 吹き飛ぶ瞬間、脚を引くのがわかった」

その慈悲深さに主も御喜びになっているだろうと、クリスチャンらしく十字を切りながら何故か誇らしげに語る。

対してノイトラは中身が違うんだから当たり前だろ、とは言いつ返す事も出来ず、顔を背ける反応で返す。

その様子を照れ隠しの意味合いで取ったのか、ガンテンバインは鼻で笑った。

「…一つ聞いて良いか？」

「おう、何だ」

先程とは一転、ガンテンバインは一息間を置いて表情を引き締めると、背を向けたままのノイトラに問い掛けた。

その真剣な雰囲気思わずノイトラも気を引き締める。だが次の瞬間投げ掛けられた質問に、思わず全身を強張らせた。

「そこまでして気に病む事か？」

「何？」

「ネリエル・トウ・オーデルシユヴァンクの事だ」

「っ!？」

破面達の中で、例のネリエルの件は失踪扱いとなっている。

だが十刃や破面の上位クラスとなると別だ。本人たちも確固たる証拠は無いのだが、ノイトラが何かしら行動したのだろうと密かに察せられている。

それでも何のアクションも無いのは、破面達の共通認識からくる。

自分達破面にとつて藍染の意志に従うのは当たり前、だがそれ以外では互いに警戒し合う相手ではない。

つまり極一部を除き、破面達は互いを仲間だと認識しては無いのだ。

結局彼等は他の破面が何人死のうが失踪しようが、自分達に影響が無ければ特に問題無いのである。

とはいえ、ノイトラはその殺伐とし過ぎた考えが気に食わなかった。

切っ掛けは藍染惣右介という神にも等しい存在に心酔し、彼に認められた自身の立場に固執するが故に産まれた考えなのだろう。

だがノイトラにはそんな心算は毛頭無い。同じ十刃や他の破面にも、純粹に良き友人として付き合いたいと思える者は居る。テスラが良い例だ。

だが今ノイトラが一番友人に——互いに理解し合える関係になりたいと思つてゐる者はネリエルだった。

些細な事では動じない冷静沈着さ、厳しさの中に併せ持つ優しさ、如何なる時も戦士たらんとする気高さを持つ尊敬すべき存在。

そして何より屑野郎と言つても過言では無い過去のノイトラに何時も付き添い、命令違反を窘めたりと面倒を見てくれた恩人。

過去の記憶を辿つていた時に思い浮かんだその姿に、正直言つて憧れた。

だが過去のノイトラはネリエルを陥れた。身勝手な感情を抱いた末に暴走して、消える事無い傷跡を刻んで。

それを罪と言わずしてなんとする。

「俺達破面は弱肉強食の世界で生きてる。騙し討ちだろうが何だろうが、敗れた者が悪い」

「テメエ……!!」

「確かに、相手に敬意の欠片も払わない昔のお前はキライだ。軽蔑もしていた」

元のノイトラの意識を塗り潰して憑依した以上、もはや自分はノイトラ・ジルガとい

う存在そのもの。この事実からは逃れられない。

状況的に見れば、彼はこのシナリオを描いた神によって濡れ衣を着せられた様なもの。しかしそんな事情を知らない周囲がそれを考慮してくれる筈も無かった。

日々溜まるストレスの御蔭で何度胃を痛めた事か、何度癩癩を起して暴れ回った事か、正直覚えていない。

文字通り魂が摩耗する程の戦闘と鍛錬を積み、極限状態の中で只管自問自答を繰り返した末に、彼はやつとの思いでそれ等の葛藤を割り切れた。

——こうなれば元のノイトラの面影が無くなるうが何だろうが関係無い。自分は自分らしく生き足掻いてやると。

という訳で現在まで色々してきた訳だが、歴史の根本的な流れに干渉する程の事はしていない。ならば今後の展開は本来の通りに進むのは必然と言えた。

いずれこの虚夜宮を訪れるであろう主人公とネリエルの仮初の姿であるネル・トウトの遭遇。そして戦闘へと移行、蹂躪される一護を目の当りにし、彼を守らんと再び元の姿へと偶然覚醒するネリエル。

己の感情を押し殺し、かつてのノイトラのように振舞えば、この流れまでは普通に再現出来る。

——尤も、彼自身の様なイレギュラーな事態が無ければの話だが。

そしてノイトラは其処で態度を元に戻し、一護を甚振る事を止めた後、彼女へと誠心誠意謝罪するのが計画だ。

結果、許しを得る事が出来ずとも和解程度は達成出来た暁には——今迄の恩を返し、いがみ合う事無く気軽に話せる友人になりたい。そう願った。

「だが——今のお前は尊敬に値する男だ。俺はそう思うぜ」

ガンテンバインは僅かな間を置いた後、そう言った。

本来、現十刃と十刃落ちの関係は基本的に悪い。まあ元の立場を乗っ取った者と乗っ取られた者同士で仲良くしろという方がおかしい。

ガンテンバインも最初はそうだった。だがそれも今ではこの通り、現第5十刃であるノイトラに友愛と信頼を寄せている。

実は彼は十刃落ちとなった経緯も経緯なので、それ程現十刃達に対する負の感情は持つていなかった事も関係していたりする。

虚夜宮では藍染によって密かに定められた法がある。それは十刃へと手っ取り早く登り詰められる、野心溢れる破面達にとって魅力的な法だ。

——現十刃の誰かに正式な決闘を申込み、打ち破る、または殺す事でその十刃の数

字を受け継ぐ事が出来る。

誰が何処からどう見ても、この法は十刃へと至るのに最も短距離な道だと悟るだろう。

だが近道とは言えど、その十刃という壁が果てしなく高い事に変わりは無いのだが、その道を選択する破面達は絶えなかつた。

法が定められて数年。その間で幾百、幾千もの破面達の死体が積み上げられた。それ程までに十刃達とぽつと出の破面達の実力には差があつたのだ。

だが時代は移ろうもの。やがて若手でありながら隔絶した実力を持つ破面達が現れ始めると同時に、第一期十刃は徐々にその中身を入れ替えていった。

ドルドーニ、ガンテンバイン、チルツチもその第一期十刃の一員だ。

だが疑問も残る。周囲の十刃達が命を散らしていく中、何故彼等だけが十刃落ちとして生き残る事が出来たのか。

その理由は藍染惣右介にある。何の意図かは不明だが、彼は一部を除き、残り少ない第一期十刃達にある日突然十刃落ちへの降格を言い渡したのだ。決闘も何も介さず、済し崩し的に。

彼等は当然の如く反発しようとした。だが新たに自分達の後釜として登場した破面達の霊圧から実力差を感じ取った三人は、無念の表情を浮かべながらも止むを得ずその

命令に従った。

中には直接行動に移した者も居た。お前を殺してどちらが十刃に相応しいのか決めてやる、と。

——その者はほんの数秒でミンチとなったが。

そんな経緯からか、現在3ケタの巢に住んでいる十刃落ちは片手で数える程度しか居ない。しかもとある一名はその厄介な特性から、虚夜宮の一角へ嚴重に閉じ込められている。

だが十刃落ちになったとは言っても、その実力は並みの破面達を凌駕している事に変わりは無い。

新たに十刃へ至った者から従属官への勧誘もあったが、彼等は拒み、後に与えられた3ケタの巢へと住居を移した。

何時の日か必ず、再びあの場所へと返り咲いてみせる。そんな思いを胸に秘めながら。

そしてそんな密かに腕を磨きながら機会を窺っていた彼等の前に突如現れたノイトラ・ジルガ。

ガンテンバインが警戒するのは当然と言えた。だが特に顕著だったのはチルツチだ。

何せ今の彼女の持つ数字は105。<sup>シレント・シンコ</sup>つまり前第5十刃だったのである。

元の立場を奪ったただけでは飽き足らず、その悪名を轟かせていたノイトラに対し、敵わないとは悟りつつも敵意を剥き出しにし、ガンテンバインも警戒心を露にしていた。そんな二人を尻目に、何をトチ狂ったのか彼を快く受け入れ、剩え教鞭を取って共に鍛錬を始めるドルドーニ。

残る二名は言い様も無いモヤモヤとした感情が募る日々を送る事となった。

そんな状況が二ヶ月程続いたある日——遂にチルツチが痺れを切らした。

アイツの真意を確かめてやると言いながらも、その実様々な思いが複雑に絡み合った状態でノイトラに戦いを挑んだのだ。

初めは茫然としていたノイトラだったが、チルツチの本気を察したのか、その申し出を受けた。

——結果は言うまでも無く、ノイトラの圧勝。

チルツチ自身、油断や慢心は無かった。決闘開始と同時に帰刃し、幾重にも重なった刃の羽根を持つ巨鳥へと姿を変え、全力で挑んだ。

だが現実は余りに無情。常に靈子を高速振動させる事で殺傷能力の上があったその刃も、苦し紛れに放った諸刃の剣とも言える技も、帰刃すらしていないノイトラの鋼皮に全て弾かれた。

一矢報いる位の覚悟はしていたのだろう。だがそれも欠片も残らず粉碎され、絶望に

打ちひしがれるチルツチ。そんな彼女の後頭部を、ノイトラは悲しげな表情で手刀で打ち据える事でその勝負は決した。

だが一つだけ予想外だった出来事もある。それはチルツチとノイトラとの関係だ。

チルツチはこの決闘で、最後に放った技の反動で力の大部分を永久に失った。

彼女自身は仕方が無いと諦めていた。そして普段の態度からは想像も付かない程、元とは言え十刃という兵士達の頭領としての矜持を持つ彼女は、もはや兵士として使い物にならなくなつた自らの命を不要だと切り捨てようとした。

それを止めたのはドルドーニでもガンテンバインでも無く——ノイトラだった。

力を失つた原因は自分にある、だから責任を取らせろと豪語し、チルツチの治療の為に毎日駆け回り始めた。

やつとの思いで見事完治まで漕ぎ着けた瞬間、ノイトラは普段のしかめっ面を何処かに忘れ、澄み渡つた笑みを浮かべた。

一切の雑念無く、本当に良かったと、心底喜んでいるその少年の様な表情に——何とチルツチは陥落したのである。

——その笑顔の裏には当人しか知らない苦悩から来るものがあつたのだが、それは後で語る事としよう。

以降、毎日を忙しなく行動しているノイトラをチルツチが影ながら追い回すという構

図が出来上がった。酷い時は3ヶ々の巣を抜けてまで追跡するのだから、追われる側としては溜まったものではない。

ガンテンバインは丁度その頃からノイトラとドルドーニとの鍛錬に混じり始め、徐々に親しくなつて行つた訳である。

「…違う…：俺はそんな男じゃねえ…！」

ノイトラはガンテンバインの言葉に全身を震わせ、微風にすら掻き消される程度の声で呟いた。

違う。ガンテンバインは何も知らないからそう言えるのだ。あのドルドーニもきつと真実を知れば間違い無く蔑如する筈だ。

自分は極めて勝手な理由で彼等を利用してに過ぎない最低野郎。その何処が尊敬に値するというのか。

だが——言い出せない。

極めて不本意なのは一先ず置いて、悪いのは全て自分なのだ。ネリエルは何も悪くない。

これ程までに寄せられた信頼を、仲間を失うのが恐ろしいが故に。

ノイトラはそんな弱い自分が許せなかった。

歯を食い縛り、あらん限りの力で握られた拳からは血が滴り落ちる。

心に痛みを感じ始めた時、それは起きた。

「ムグッ!!」

ノイトラの顔面が突然、何か柔らかい感触に包まれたのだ。

マシユマロの様にフワフワで、春先の太陽の様な温もり。加えて何か良い香りがする。

混乱しながらも、ノイトラは状況を把握せんと状況把握に努めた。

この感触に香りは彼自身、嫌になる程良く知っている者。そしてチルツチの治療の対価として理性をガリガリ削られる事となった元凶でもある。

「ムゴムゴッ!!」

「んん、ようこそいらっしやいましたノイトラさくん」

その正体は、口元をマスク状の仮面で覆った女性の破面だった。

彼女は依然としてノイトラの頭部を正面から抱き締め、羞恥心を抱くどころか寧ろ率先して胸をグニグニと押し付けている。

予想外の出来事に、ガンテンバインも呆然とその様子を眺めていた。

「…セフィーロ」

「フフフ、また会えて嬉しいですよ」

他の治療員の破面とは異なり、医者を思わせるデザインの白装束を身に纏った彼女はノイトラを解放すると、彼の頬を両手で包み込んだ。

そのまま後数センチでキス寸前といった位置まで自身の顔を近付けると、聖母の如き柔らかな笑みを浮かべた。

セフィーロ・テレサ。先程ロカに呼んでもらった治療室のトップであり、そして憑依後に治療室の常連と化したノイトラを唯一率先して治療をしていた破面でもあった。

## 第四話 三日月とそよ風と孤狼と

ノイトラを正気に戻した60セセンタの数字を持つ破面、セフィーロ・テレサは自慢の黒の長髪を靡かせながら、テキパキとした動きでガンテンバインの治療を進める。

これだけ言えば治療室での普通の光景に思えるだろうが、今はそうではない。

原因はセフィーロの傍で助手の様な事をしていいるノイトラだ。彼は両手にガーゼらしき布や薬の瓶を持ち、先程から彼女の指示を受けながら道具の受け渡し等を行っていた。

——ちなみに先程自ら傷を付けた掌はセフィーロの手によって密かに治療済みである。

「ノイトラさくん、消毒液と布切れを下さい」

「おう」

「次は塗り薬を」

「…おう」

「では最後に包帯を」

「…おう……つてちよつと待てやコラ」

流石にノイトラも我慢の限界だったのか、眉間に皺を寄せながらセフィーロに抗議する。

何でしょう、と疑問符を浮かべながら頭を傾げる彼女に、ノイトラは更に皺を二つ程追加した。

ちなみにガンテンバインは治療を受けながらも、顔を手で覆い隠して声を上げずに大笑していたりする。

「何で俺が治療を手伝う事になってんだ!? こういったのはお前等の仕事だろが!!」

「えく? 怪我をさせた張本人に責任は無いとおっしゃるのですか?」

「…いや、まあ……そういう訳じゃ…」

至つて普通にツツコんでくるセフィーロに、ノイトラは思わず言葉を濁らせる。

良く良く考えればその意見は問題しか無い筈なのだが、彼女は一切動じる様子を見せない。

十刃を只の数字持ちがパシリに使う、例えるなら猛獣が小鳥に使われている感じか。

それがどれ程異常な光景か解るだろう。

というか他の十刃であれば普通に殺されている。

「それに他の雑務係の方々は誰かさんを怖がって近寄れないですし……」

「ぬぐつ……」

セフィーロはそんな事など関係無しに、ノイトラの精神の弱点を的確に攻撃し続ける。

見れば確かに遠くにある物陰に破面達が集まり、こちらの様子を覗き込んでいる。彼等の視線には恐怖、好奇、戸惑い——そして何故か熱いものが含まれていた。

「私一人じゃ体格の良いガンテンバイン様に包帯を巻くのに苦労しますし……」

「だあああああ!! わかったわかった! やりや良いんだろやりやあ!!」

「は……い。では前の方をお願いします……」

最後の熱い部分に関しては知らないフリをしつつ、ノイトラは棚から渋々包帯を取り出すと、ガンテンバインの正面へと回った。

さり気無く自分以外の男に正面から抱き付く形になるのを回避したいというセフィーロの意図を何となく察しつつ、慣れた手付きで包帯を巻いて行く。

この遣り取りの間、ガンテンバインは笑い過ぎによつて傷が痛み、悶え苦しんでいた。

「オラ、もつと肘上げろ…つてテメエは何時まで笑つてんだ。自爆してんじやねえか」

「…グ……ブフウツ!!」

「そのアフロ筆んぞコノヤロウ…!」

ノイトラのその顔に似合わぬ丁寧な動きがツボに嵌ったのか、ガンテンバインは嘔き出す。

しかもノイトラが正面に居るにも拘らずだ。結果として何が起こるのかは想像に難くないだろう。

野郎の唾を顔に浴びたノイトラは蟬谷に血管を浮き上がらせ、ギリギリと齒軋りする。

普段抑えている膨大な霊圧も溢れ出し、それが湯気のように立ち上る姿は正に怒髪天を衝くを体現するかの様。

マズイとは思いつつも、ガンテンバインは笑いが止められない。

「すつ…スマン…ワザとでは…プツ!!」

「そうか分かった、そんなに壁に埋め込まれてえらいな…!!」

ノイトラは包帯を投げ捨てると、斬魄刀を取り出して肩に担いだ。

同時に室内の破面達から悲鳴が上がる。

このまま彼を放って置けば瞬く間に治療室が瓦礫の山になってしまいうだろう。

——だが生憎と、此処には対ノイトラ用の絶対的抑止力が存在していた。

「ノイトラさくくん?」

「何…を…つつ?!」

妙なりアクションを取るノイトラ。

何せセフィーロの声を聴いて振り向いた瞬間、互いの顔の距離がつい数分前の出来事よりも近い位置で向き合う結果となったのだから。

その距離、何と一センチ以下。一体どんな距離感覚を持っているのか激しく疑問である。

先程までガンテンバインの背後に居た筈なのに、何時の間に背後へ回ったのか。

ノイトラは眼前で冷たい笑みを浮かべるセフィーロに対し、底知れない恐怖を覚えた。

「此処では戦闘行為などは厳禁です、と…前に言いましたよね？」

「…はい」

「もう治療してあげませんよ？」

「それは御勘弁下さいセフィーロ様」

恥も何も度外視して、ノイトラは速攻で頭を下げた。

この虚夜宮で傷を癒す手段など、定期的に支給される薬か、治療系統の能力を持った破面に頼むか、治療室かのどれかに限られている。

毎回ノイトラの負う怪我と消耗具合を見ると、支給品ではどう考えても足りない。かといって治療系統の能力を持つ破面など数自体が少なく、例え運良く見付けてノイトラが従属官に誘ったとしても拒絶されるのが目に見えている。

とすれば残る最後の手段は治療室の一択のみ。それを追い出されでもしたらノイトラはもう絶望するしかない。

怪我等を含め、消耗しない事が前提条件となれば思う様な鍛錬も出来無い。

結果、思い通りに力を付けられずに原作とほぼ同じ経緯を辿り、後は死亡フラグへ向かって直進する羽目になってしまう。

それだけに、ノイトラは必死だった。

「んん、どうしましょうかね〜…」

「…何でもしますのでしょうか」

「何でもですかあ〜？」

「……出来る限りの事は…」

一見、セフィーロは穏やかで包容力がある美女に見えるが、中身は基本的に筋金入りのSだ。それもSの前にDが付く程の。

こうして一つでも弱みを握られれば主導権は常に彼女にあると言って良い。

ノイトラが秘密裏にチルツチの治療の協力を頼んだ時、彼女に対価として色々要求されたのを彼は今も鮮明に覚えている。

治療用の道具の点検に整理など、仕事に関するものから始まり、私生活の部分に踏み込んで執事的に奉仕したり、風呂で背中を流したり、添い寝したり——可笑なもの

も多々含まれていたが、ノイトラは精神的にズタボロになりながらも見事遣り遂げた。

「では早速やつてもらいたい事がありました〜」

「オイコラ待て、ガン<sup>ア</sup>テン<sup>イ</sup>バイン<sup>ツ</sup>の治療はどうすんだ」

「ロカちゃん、後はお願〜い」

「はい」

「丸投げか！ それで良いのか治療長!?!」

ノイトラの発言を聞いた途端、良い笑顔を浮かべたセフィーロは彼の腕を取ると奥へと引き摺り始めた。

一見すれば、抵抗も虚しく一方的にやられている様に見えるが、そうでは無い。

ノイトラ自身、抵抗すれば抜け出すのも容易なのだが、少々手荒になってしまうので避けているだけだ。

——女性に対しては常に紳士たれ。

憑依前から引き継いでいる教えであり、元ネタは同職場の尊敬すべき恩師からの受け売りである。

だがセフィーロはそれを理解した上でこうしてやや強引な手段を取っているのだから

ら非常にタチが悪かった。

ドナドナされて行くノイトラを尻目に、作業を丸投げされたロカは文句一つ言わずに黙々とガンテンバインの胸部に包帯を巻いていた。

「なあ…」

「何でしょうか？」

「…アンタって、実は結構イイ性格してるよな」

そう言うガンテンバインの顔は引き攣っていた。

ロカは作業の手を止めずにこう返す。

「…他人の不幸は蜜の味、ですから…」

彼女の顔は変わらず無表情であったが、その口元は確かに吊上がっていた。

——酷い目に遭った。

内心でそう零し、ノイトラは疲労困憊といった表情を浮かべながら、廊下を一人で歩いていた。

あの後セフィーロに自室へと連れ込まれた後、ノイトラは何の突拍子も無い内容の要求をされた。

マッサージである。正直言ってどんな無理難題が来るのかと身構えていたノイトラは拍子抜けした。

この程度なら楽勝———と思った矢先、それが間違いだったと後悔する事となる。

サツサと終わらせて帰ろうと、袖を捲つて準備万端の状態で待機していると、自室に入ったと同時に一旦席を外したセフィーロが戻つて来た。

だが彼女の恰好が問題だった。

———全裸である。マツパである。大事な事なので二度言った。

ノイトラは何処ぞのギャルゲーに出てくる難聴系主人公では無い。彼は以前からセ

フイーロが自分に好意を抱いている事など、それに至った理由以外は十二分に理解していた。

しかし今回の様なケースは前例が無い。露骨なアピールは今迄にも何度もあったのだが、今回の様に真正面から大胆な真似をするのは初めてであった。

そしてノイトラは確信していた。その誘惑には他にも意図があるのだと。

セフィーロは自分が色恋に現を抜かしている余裕は無いと知りながらこの行動を取っているのだ。

本能と理性の間で葛藤し、悶え苦しむ様を眺めて内心で愉悅に浸っているに違いない。

徹底したサディズム。しかもノイトラがどちらに転んでも自分に損は無いところ、実に用意周到な事である。

唾然とするノイトラに対し、セフィーロは平然とした様子で少々遅れた事に対して謝罪すると、そのまま近くのベッドに俯せになった。

母性の象徴たる双丘がムニユンと潰れて隠れ、今度は腰の下の肉感溢れながらも無駄なく適度に引き締まった桃神様が上を向くのが目に入る。

セフィーロはノイトラの方を振り向くと、言った。何処からでもどうぞ、と。

——そこから先は記憶が曖昧だ。

随分とおぼろげだが、唯一記憶に残っているのは両手に残った吸い付く様な柔らかな感触と、セフィーロの艶やかな声。

だが確実にそれ以上の事はしていない。つい先程までガチガチに膨張して斜め上を向いていた自慢の倅が何よりの証拠だ。

ノイトラとてセフィーロを好ましいとは思っている。

両想いで、しかも相手からアクションを起こされているなら、別に襲い掛かるなり何なりしても問題無いのではと普通思うだろう。だがそうもいかない理由があった。

下剋上を狙う破面達の中には以前のノイトラも可愛く見える程の外道な思考を持つ者も存在する。

そんな奴等が蔓延る中で友人以上の親しい者や恋人など作ってみろ。十刃の弱みとも取れる様な存在が知られればどうなるか考えるまでも無い。

そして現状でノイトラが最も警戒すべき者が居る。同じ十刃であり、第8の数字を背負う破面、ザエルアポロ・グランツ。

仮面の名残である眼鏡を掛けたピンク色の髪の男で、破面の中でも最高の技術力を誇る狂気の科学者。

そして他でも無い、憑依前のノイトラと結託してネリエルを陥れ、当時十刃落ちであつた自分自身をその十刃の空いたスペースに割り込ませる形で第8十刃の地位へ就

いた策士でもある。

それだけに限らず何か別の意図も持っていた様だが、ノイトラには其処まで読み取る事は出来なかつた。

そのザエルアポロは日頃から虚を独自に改造し、後で崩玉によつて破面化させるといふ実験を行つており、実は治療室に居るロカ・パラミアもその改造虚から生まれた破面であつた。

詳細については例の小説版にて描かれているのだが、未読な上に断片的な情報しか持つていないノイトラはその事について知らない。

「あの陰険眼鏡め……」

——さつさとマユリ様に研究者としての格の違いを見せ付けられた上で殺されてしまつてんだ。

内心でそう吐き捨てる、未だに残るムラムラとした気分を理性で抑え込みながら、ノイトラは溜息を吐いた。

何故ノイトラがザエルアポロを警戒しているのかというと、特にそれといった明確な理由は無かつたりする。

只単に彼が何の思惑で動き、何をしでかすか全く読めないという点からきているだけだ。

自らの知的好奇心を満たす事を優先し、その目的の為に兄すら利用し、死んだとしても気にも留める事も無い。拳句の果てには藍染すら欺こうとする胆力も持っている。

こんな危険人物、警戒するなという方が無理だ。

しかもザエルアポロは頭脳のみならず、情報収集能力、そして解析力が十刃達の中でもずば抜けている。虚夜宮内での破面達の行動全てが彼にはほぼ筒抜けと言つて良いだろう。

そんな状態でセフィーロと関係を持つてみればどうなるか。少なくともザエルアポロの興味を引く事になるのは確実。

恋仲かどうかは別として、破面同士で肉体関係を持った例は片手で数える程度にはある。

だがそれで子を成したという結果は無い。その破面達は大抵、破面同士の抗争か任務の中で死亡しているからだ。

破面同士で生殖行為を行い、新たな命を成す。自らの研究の目的の一つに完璧な生命へ至る事を掲げているザエルアポロが、生命に関する話題に興味を示さない訳が無い。

ノイトラは簡単に想像した。破面同士、それも片方が十刃ならば一体どんな生命が生

まれるのか、と。

生まれた直後は人型なのか、霊力は受け継がれるのか、能力はどうなるのか。

素人の観点からでもこれだけ疑問が浮かぶのだ。ザエルアポロであればその十倍以上の数は出るだろう。

例えば子供が出来なかつたとしても、それはそれで他の可能性も浮上してくる。

中でも一番あり得そうで、尚且つ最悪のパターンこそ、セフィーロがザエルアポロに人質として押さえられる事である。

もしそんな状況に陥つた場合、もはや今のノイトラではザエルアポロに一切逆らえなくなる。

彼女に手を出さない対価として様々な事を要求したり、剩えノイトラ自身に実験材料になる事を強要してくる可能性だってある。

十刃が弱みらしい弱みを持つ事というのは、所謂カモがネギを背負っていると云つても差し支えない。手を出して下さいとアピールしているのと同様だ。

仲間意識など欠片も無いザエルアポロにとって、例えば同族である十刃も魅力的な研究材料でしか無いのだから。

「頭イテエ……」

只でさえ、何故かあの日以降性格が真逆の方向へ一変した興味深い存在として、時折全身を隈なく覗かれている様な不快な視線を向けられているのだ。これ以上自ら墓穴を掘る様な真似は出来無い。

ノイトラは色々悩み過ぎて頭痛がしてきた。

——この後ドルドーニでもサンドバッグにして気分転換するか。  
そんな理不尽で物騒な事を考え始める程に。

「だからスターク、この程度なら大丈夫だって——つてウワアツ!? ノイトラあ!？」

「…おいリリネット。流星にそりや失礼だ」

「っ!？」

その時だった。思考の渦に溺れる余り、周囲の警戒すら忘れていたノイトラは声を上げられた後で初めて他者の接近を許した事に気付いた。

本日二回目の失態に内心で自分自身を罵倒する。

——この馬鹿野郎、ついさつき反省した直後にこれか、と。

「うおっ？ その…なんだ、随分と怠そうな面してんじゃねえか」  
「…アンタが言うかスターク」

だが今回は命拾いしたとも言えた。

疲弊しているノイトラを超える気怠そうな表情を浮かべている、下顎骨のような仮面の名残を首飾りの様に着けた黒髪の男——ブリメーラ第1十刃、コヨーテ・スタークはノイトラにそう返されると、バツが悪そうに後頭部を掻き毟った。

命拾いしたというのは、彼が十刃の中でも一番温厚且つ戦闘にも消極的で、そして面倒臭がりの為だ。

これが第10のヤミーデイエス・リヤルゴセフテイマや第7のゾマリセスタ・ルルー、第6のグリムジヨー・ジャセスタガージャックと鉢合わせしようものなら必ず一悶着あつた事だろう。

ノイトラは遭遇した相手がスタークであると理解した途端、小さく安堵の溜息を吐いた。

ヤミーは見た目も中身も脳筋ゴリラで、黒崎一護に切り落とされた腕の治療をしてやつた口力に対し、確認と評して彼女の頭部を潰して殺害する様な最低な男。

ゾマリは現十刃の中でも生粋の藍染教狂信者で、発動と同時にその部位を支配するやらしい自分の能力を愛アモーレと謳って敵に押し付ける変態。

グリムジョーは自分自身がある程度認めた相手に対しては九割のツンに一割のデレを見せる希少なツンデレ要員だが、普段は基本的にプライドが高過ぎる好戦的な獣。

普段から雑務係の破面達の働きに感謝して気遣っている上、ロカとは知り合いなのでヤミーは普通に嫌い。

藍染には感謝の念はあるが、余り忠誠心は無い。その時点で既にゾマリからは肅清の対象にされているし、彼の性格自体が苦手。

憑依後に行動を改め、日々身を削って努力している間、何処かで鉢合わせする度に何度も噛み付いて邪魔してくる事が多かったグリムジョー。しかもそれを尽くスルーしていたのを強者の余裕と取ったのか、最近では遠目からも一々殺気を飛ばして来る様になつているので極力関わりたくないのが本音だ。

中には擦れ違いが原因なのもあるのだが、結局はどれも相性が悪いのに変わりは無かった。

「…今日は引き籠っていないのな」

「ん？そーういやそーうだな。実はコイツがハマしてよ…」

ちなみにノイトラに対し、初めに悲鳴に近いリアクションを取ったのは、スタークの

従属官であり、彼自身の身体の一部でもあり、斬魄刀でもあるリリネット・ジンジャーバツクだ。

奔放でボーイッシュな性格の、頭部と顔の左半分を覆うように仮面の名残がある少女。そして虚夜宮唯一の癒し要員でもある——等とノイトラは一方的に思っていたりする。

リリネットはスタークの背中に隠れ、まるで余所者を警戒する犬の様に唸ってノイトラに威嚇していた。

だがそんな態度も今のノイトラにとっては癒される要因にしかなくなっておらず、彼女に小動物を愛でる様な視線を向けていた。

精神的な余裕が出来たノイトラは徐々にスタークと雑談に興じてみる事にした。

彼は何時ぞやノイトラの挙げた友人になりたい人物の中の一人でもあるし、他の邪魔が一切無い現在の状況ぐらいいいか真面に話せないレアキャラでもあるからだ。

今迄も機会があればポツポツと会話を重ねてはいたのだが、スターク自体が余り出歩かない上、ノイトラ自体も余裕が無かった事もあり、余り長話は出来ていなかった。

「…ああ、成る程な」

「まさかコイツだけを狙うなんてな…困ったもんだ」

スタークの視線を辿ってリリネットの右頬を見ると、浅い切傷が付いているのが判る。どうやらもしかしくなくとも、何処かの馬鹿破面にちよつかいを掛けられた様だ。

十刃のトップの従属官ともなればそうそう干渉出来る筈が無いのだが、恐らく今回のケースは特殊だったのだろうとノイトラは当たりを付ける。

「んで治療室へ移動中って訳か…下手人は？」

「眠らせて葬討部隊に引き渡したよ」

「相変わらず御優しい事で…」

第2十刃、バラガン・ルイゼンバーン。第3十刃、ティア・ハリベル。虚夜宮内では

この二名に対して、裏では熱狂的な信者達が存在していたりする。

十刃達の大半が藍染に心酔している様に、破面達は基本的に力のある者に惹かれる傾向が強い。

バラガンとハリベル、両名共に目に見えるカリスマと実力を持っており、彼等の為なら何をしてでも、死んでも構わないと豪語する破面達は少なく無い。

反面、その上に立つスタークにはそれが無い。怠情で、面倒くさがりで、引き籠りで、

一見すればカリスマなど一切縁が無いあり方だ。

故に信者達に敵意を向けられ易かった。何故こんな奴がバラガン様やハリベル様を差し置いて第一十刃なのだ、と。藍染が正式に認めた序列であるにも拘らずだ。

今回の下手人は間違い無くその二人への信仰を変に拗らせた連中だ。でなければ第一十刃やその従属官に手を出すリスクを無視してまで行動出来るものか。

見たいものしか見なくなるまで至った信仰はもはや信仰では無い、盲信だ。

——その程度の事に気付けないとは実に哀れな連中だ。

ノイトラはそんな見る目の無い奴等に付き纏われるスタークに同情した。

「結局ソイツ等が辿る運命は同じだろ。毎回そんな対応してつと舐められんぞ」

「…仲間 hands 掛けんのは御免なんだよ」

そう警告染みた事を言いつつも、ノイトラは特に問題無いだろうとは思っている。

スタークは過去に最上級大虚だった頃、その異常なまでの霊圧の強さから、何度も仲間の虚達が自身を残して消滅し最後に自分しか生き残らなかつたという経験をしている。

その為か、孤独を何よりも恐れ、仲間に対する情は誰よりも厚い。対応が甘くなるの

は致し方無いだろう。

だが今回の様にリリネットが怪我を負ったのは初めてだ。

如何に仲間を大事にするスタークとて、己が半身たるリリネットを害されるのは相当な衝撃を受けた筈だ。

もう二度と起こさせはしないだろう。

「…甘えな。まるでチョコラテだ」

「懐かしい言い回しだな。ドルドローニは元気か？」

「……………」

「…いや、その顔でだいたい想像ついたよ」

スタークの強さは見た目では全く判断つかないが、底が無い。

憑依後から暫くして漸く見えた部分ではあるが、霊圧だけに限らず、技量、戦略眼、勘、その全てに於いてスタークは読めなかったのだ。他の十刃は読めたにも拘らず、だ。

第2十刃であるバラガンには「老い」という能力がある。あらゆる事象や物体の劣化を促進させて動きをスロー化し、意志を持って触れた物体を老化・崩壊させるといふものだ。

本気を出せば一瞬で触れたものを朽ち果てさせる事も可能な、絶対的な力。

だが藍染はそれを把握していながらも、スタークを第1十刃としている。

それはつまり、スタークはバラガンの「老い」すら上回る力を持つているという事に他ならない。

有り得ないとは思うが、もしバラガンやそれに追従する破面達が藍染に反旗を翻したとしても、スタークが本気を出せば瞬く間に鎮圧させられるだろう。

「懐かしいといやあ、チルツチの奴の霊圧をお前の拠点の辺りで感じたな」

「あんの馬鹿女……」

「この前も居たし、アイツが執着心見せるなんて相当だぜ。一体なにしたらってんだ？」  
「ンなもん知るか。貸しはあっても借りは無え筈だ」

「…アイツも苦労してんのな」

一通り話してみると案外相性は悪くないらしい。ノイトラはそう思った。

それはスタークも同じ様で、気怠いだけだった表情に僅かな笑みが浮かんでいる。

互いに面倒事を嫌い、仲間を思い遣る部分が共鳴したのかどうかは定かで無い。

だが二人はこの時確かに互いを信頼出来る仲間だと認識していた。

だがリリネットは気に食わないらしく、さつきと行けと言わんばかりの視線を変わずノイトラに向けていた。

——当人はそれにすら癒されているといざ知らず。

「しっかし、お前も昔と比べて随分丸くなったなあ」

「…昔の事は触れんな」

「あれか、現世で言う黒歴史ってやつか？ 若さつてのは面倒臭えこつた」

「ウルセエよ元スーパーボッチ」

「ちよっ!? おま…」

「ああ、悪い。今は変態ロリコン野郎だったわ」

「前者はまだしもそれは止めろ！ ってかお前もいくら変わったって言っても変わり過ぎじゃねえか!」

「え、!? スターク変態なの!」

「信じたのかよ!? っつかお前俺の一部なのにわかんねえのか!」

スタークは特に十刃の立場についてどうこう言う事は無い。単に面倒だという理由からなのだろうが、ノイトラにとっては有難かった。

御蔭でこうして気さくに馬鹿話が出来る相手が増えるのは助かる。精神的にも楽で、モチベーションの向上にも繋がるので良い事尽くめだ。

そしてノイトラはスタークを弄ってみて悟った。

——ドルドーニ並みに面白い。

この瞬間、スタークはノイトラの弄りリストの中へ即座に追加された。

「いやいや、本当は違うから安心しろ。このスタークは紳士だ」

「そうなの!? 良かったあ〜」

「変態という名の紳士な」

「やっぱり変態だったあ〜!!」

「お前さんはどうしても俺を陥れたいのか!? おい泣くなりリネット…ってソコは止めゴフウツ!!」

泣きながら股間を蹴り出すリリネットを青い顔で必死に宥めるスターク。ノイトラはそれを傍からニヤニヤしながら眺めていた。

この役者三人のみの新喜劇は三十分程続いた後に解散した。

数日後、味を占めたノイトラと、後に彼と意気投合したりリネットによるスターク弄

り連合が結成されたのだが、スターク本人は知る由も無い。

以降も弄りを定期的で開催する事がスタークを除く二人の間での決定事項となった。

——ちなみにこの出来事の後、スタークはノイトラと擦れ違う度に渋い顔を見せる様になったのは言うまでもない。

「随分と賑やかな事だね」

モニターの画面越しにノイトラとスターク達の遣り取りを眺めながら、男は呟いた。此処は管制室。虚夜宮の全ての壁面に仕掛けられた監視カメラの映像がリアルタイムで転送されてくる部屋だ。

そしてこの部屋にはもう一つ、建物内の廊下全てを自由に組み換える事が可能という機能がある。

侵入者を監視しつつ、重要な場所への到達を阻む事も出来る便利な部屋。

欠点を指摘するとすれば、監視カメラにマイクが付属しておらず、音声映像から推測する以外の手段が無い事か。

だがあくまで此処はそれ程重要視される程のものでは無い。

全てはこの男の気まぐれ、または道楽とも言つて良い理由から作られた部屋なのだから。

「そうは思わないかい、ウルキオラ」

「……………」

死神特有の死覇装と呼ばれる黒い着物に身を包み、柔和な風貌の眼鏡を掛けた茶髪の男の正体こそ、藍染あいぜん惣右介そうすけその人。

普段は虚夜宮の中心部の玉座に腰掛けている筈の彼だが、今は珍しくお供一人だけを連れて此処を訪れていた。

本来の御付きである副官二人は居ない。それもそうだが、彼等は今、尸魂界ソウルソサエテの中の死神達の拠点である瀨霊廷せいれいていにてスパイ活動をしているのだから。

「どうかしたかい？」

「——いえ、何も」

藍染のお供の一人である、角が生えた仮面の名残を左頭部に被った、瘦身で病的にまで真つ白な肌をした黒髪の男——第4十刃、ウルキオラ・シファーは藍染からの問い掛けの後にやや間を置くと、そう返した。

無表情ではあるが、その目は画面に釘付けとなつている事から、興味の持ち様が見て取れる。

「正直に言つて御覧。気になるんだろう、彼が」

「……はい……」

藍染は薄く微笑みながら、教え子の成長を眺める教師の様にしてウルキオラに優しく語り掛ける。

だがその反面、彼の瞳には優しさなど欠片も存在しておらず、底知れぬ闇が渦巻いていた。

「以前言つたね。私は彼が興味深いと」

「…何故？」

「そうだね、強いて言うなら——目だよ」

ウルキオラはモニターから視線を外し、藍染の方を向いた。

藍染は何か面白い事を思い出した様で、静かに声を漏らしながら笑い始める。

ウルキオラは変わらず無表情のままじつと藍染を見詰めながら、更に問い掛けた。

「以前から著しいその成長率では無く、ですか？」

「まあそれもあるにはあるね。本人は隠している心算だろうが、何せここ数年で、霊力の総量だけを見ても第5十刃でありながら今ではバラガンを超えてスタークに匹敵し始めている。成る程、確かに異常だ」

「ならば…」

「だが——所詮はそれだけだ。彼自身のソレには及ばない」

その直後、ウルキオラは戦慄した。

魂が押し潰されるかの様な錯覚を覚える霊圧に、全身から力が抜ける。少しでも気を抜けば今直ぐにでも膝が地面に付いてしまいそうだ。

何度も瞬きを行い、改めて藍染を見遣る。

如何なる手段を用いようが、力を得ようが成す術も無い、絶対的な存在が其処には居た。

確かにノイトラの成長度合は第4以下の十刃達にとって十二分に脅威とも言えるだろう。

だが藍染にとっては取るに足らない事象に過ぎない。

何せ彼は絶対者。故に恐れの対象を持たないのだから。

「何なのか…聞いても？」

「それはね——」

——既知、だよ。

狭く、静かなその部屋に、その声は妙に響き渡っていた。

## 第五話 三日月と鉄燕と豹王と…

遠目に見ても距離感が狂わされる程に巨大な建物である虚夜宮。中にはその巨大さに比例する様にして多数の部屋が混在している。

その中でも特に広い面積を持った運動場の様な一室にて、現在一切の予断を許さない緊急事態が発生していた。

室内には濃密な霊圧が立ち込め、肌を刺す様な一触即発の雰囲気醸し出す。

当事者は四名。その内でメインとなるのは二名。

霊圧を発している元となるのは、右顎を象った仮面の名残を着けた、端正な顔立ちに水浅葱色のリーゼント風の髪をした不良風の男——第6十刃、グリムジョー・ジャガージャック。

彼の背後には従属官の一人である、左目から頭部にかけて横長の鎧のような仮面の名残を着けた辮髪で長身の男が付き従っている。

その正面に立つのは第5十刃、ノイトラ・ジルガ。何時でも飛び掛かれる様にしているのか、腰を起点に重心を低く落とし、敵意を剥き出しにしているグリムジョーとは正反対に、無表情のまま斬魄刀も持たずに静かに佇んで居る。

だがノイトラのその内心は混迷を極めていた。

——どうしてこうなった。

正にこの一言に尽きる。

タイミングも状況も悪過ぎる。

如何にしてこの場を切り抜けるか、最善の選択はどれか。

ノイトラはグリム・ジョーに警戒を向けながら、最高速度で思考を回転させていた。

その理由は現在ノイトラが背負っている女性の破面——チルツチ・サンダーウィツチ。良く見れば彼女の意識は無く、右頬には痛々しい痣が刻まれ、口内を傷付けた程度では足りない量の血を吐き出していた。

「もう一度言うぜ、其処を退け」

「……………」

「…チツ、ダンマリかよ。気に食わねえ野郎だ。ここんところ最近はずつとそうだ」

「……………」

「何とか言えよ!! ノイトラ・ジルガあ!!」

獣が敵に対して威嚇する様に、グリム・ジョーは声を荒げる。

先程から少くない霊圧をぶつけているにも拘らず、傍から見ればサラリと流している様に見えないのが理由だろう。

だがノイトラは一切動じる様子を見せない。

暖簾に腕押し。それが余計にグリムジョーの怒りを煽った。

生憎だが、現在藍染は不在。本来グリムジョーを宥めるべき存在が居ないのは致命的だった。

彼から放たれる霊圧が更に増加したのを感じる。

刻一刻と、ノイトラは決断を迫られていた。

——時はほんの数分前に遡る。

ノイトラは訳有って3ヶタの巣での鍛錬を休止し、自主鍛錬を何時もより長めに行つ

た後だった。

その訳と言うのも、ノイトラは前日の鍛錬にて、ガンテンバインとドルドーニの両名を誤つて必要以上に叩きのめしてしまい、大凡二日は動けない状態にしてしまったからである。

切っ掛けは破面の持つ虚閃に次いでポピュラーな技である虚弾（バラ）。霊圧を放つという点は虚閃と共通だが、使用する霊圧を小さく絞って固める事によって連射を可能にし、速度も虚閃の二十倍にまで向上させた使い勝手の良い技であるソレの改良に成功した事で鍛錬に熱が入ってしまったのだ。

イメージは頬に十字の傷跡を持つ二人切りの剣客が主人公の漫画。それに登場する破戒僧。

我流で見出した一撃一撃が必殺に等しい打撃技を武器とするその破戒僧だが、拳のみならず肘、描写には無かったが頭突き等、身体全身何処からでも技を繰り出せるらしい。それをヒントに、ノイトラは考えたのだ。基本的に手から打ち出す虚弾だが、それだけに限らず別の部位からでも出せるのでは、と。

それを思い付いた直後、不気味な笑みを浮かべ始めたノイトラ。その時彼と相對していた十刃落ち三人は後にこう語る。

——どう足掻こうが、正しく絶望。

五指、肘、足、膝、頭、終いには背中等、ありとあらゆる体の部位から繰り出される大小含めた虚弾の弾幕。

虚閃よりも威力は劣るとは言え、元から桁違いな霊圧を保有するノイトラが繰り出す虚弾は十分過ぎる威力を誇っていた。しかもその優れた速度と発射弾数が多さが加わり、三人の打てる手は限られるどころか皆無だった。

一向に止まる様子の無い弾幕に対し、意地になったドルドーニとガンテンバインはあろう事か同じく虚弾の連射で対抗した。

だがそれも最終的には構え無しで打ち出せる様になったノイトラによって全て叩き潰された。

後に彼は二人にその虚弾の詳細を説明している。

——身体の外側に張った霊圧の膜を砲身に仮定して、無差別に撃ち出す感じだ、と。当然二人は理解不能だったが、今度は虚閃の改良でもしようかと語り始めるノイトラに更なる恐怖を覚えていた。

ちなみにチルツチに関しては鍛錬序盤で運良く虚弾の一つが下顎に命中してしまい、ポコポコにされる前に退場していたので特に目立った怪我などは無い。

なので鍛錬をしようと思えば彼女を相手にマンツーマンという形ではあるが出来た。だが相手が一人だけとなると鍛錬内容は極端に絞られてしまう。故に休止という措置

を取ったのだ。

こうして暇を持て余したノイトラは一人で虚夜宮内をぶらついていた訳だが、道中で見知った霊圧を感じた。

結構遠方ではあるが、其処は普段ノイトラが良く行き来する通路。

この妙な刺々しさを含んだ霊圧は間違え様も無い、チルツチのものだ。

また何時ものストーキングか、とノイトラは溜息を吐きながら探査神経を一旦切り、捕捉されない様に霊圧を極限まで抑えると、そのまま彼女とは正反対の方向へと歩き始めた。

チルツチの探査神経の範囲は把握している。故に捕捉不可能であろう離れまで移動するのは容易であり、取り敢えず安全地帯まで到着すると一息つく。

そして再び探査神経を用い、今度は意地悪な笑みを浮かべながらチルツチの動向観察に入った。

はてさて、今回は何時までストーキング行為が続くかな、と。

ノイトラはチルツチのこの行動が自分への好意によるものである事実は既に気付いている。

だが何と言うか、色々と意識してしまう女の色気を見せて来るセフィーロと違い、チルツチにはどうしてもそういった感情を抱けない。

例えるなら、手間の掛かる妹を見ている様な気分になるのだ。

此方に近付きたいのに中々前に踏み出せずモジモジしている姿も、本人は誘惑している心算らしい遠回し過ぎて理解不能なアピールも、全ての行動に微笑ましい視線を向けてしまう。

最近は少しでもそういった視線を向けると怒り出し、ワイヤーを通したチャクラムの様な形状の斬魄刀をぶん回して所構わず攻撃し始めるので、建物の被害を抑える為にこうしてチルツチの霊圧を感じる度に逃げる様になった訳である。

——唯一文句が有るとすれば、調子付いた時に自分自身をちゃん付けで呼ぶ事と、メイクが多少濃い目な部分か。

ノイトラはチルツチが地団駄を踏んで悔しがる光景を脳内に浮かべながら、彼女の霊圧を探る。

再度捕捉してみると、どうやら今回は早い段階で諦めたらしい。彼女の霊圧はノイトラの拠点とは逆方向へとゆっくり移動し始めていた。

この様子だと後十分もすれば3ヶタの巢へと帰還するであろう。

そう考えたノイトラは探查神経を切ろうとし——瞬時に響転でその場から消え失せた。

普段は鍛錬以外滅多に使用しない、正真正銘全力の響転だ。鍛え上げられたその速度

は傍から見れば消えた様にしか映らない。

ノイトラ自身の視界もまるでDVDを最速でコマ送りしているかの様に次々と置き去りにされて行く。

行き先はチルツチの現在地。何故かと言うと、探查神経を切る直前、彼女へと近付く別の破面の霊圧を新たに二つ捕捉したからだ。

響転の速度的に見て、数秒後には到着する。にも拘らず、ノイトラの顔には珍しく焦りが浮かんでいた。

やがて現場に到着した時、彼のその懸念は現実のものとなっていた。

「チルツチ……」

其処には右拳を振り抜いた状態で固まるグリムジョーと、その後ろに佇む従属官の男。そして彼等の前方で呻き声を上げながら倒れ伏すチルツチの姿が在った。

見れば彼女は口内を切っただけでは足りない程の夥しい量の血を吐き出しており、痣の有る右頬だけで無く、内臓辺りにも相当なダメージを負っている事を証明していた。

「ノイトラ・ジルガ!? 何時の間……!」

従属官の男——シャウロン・クーフアンは気配を全く感じさせずに現れたノイトラの姿に気付くや否や、驚愕の声を上げる。

その声につられたのか、グリムジョーもノイトラの立つ方向を振り向くと、目を剥いた。

「つ……てめえ、何時から其処に居やがった？」

「……ノイ……トラ……？」

ノイトラは思った以上に冷静に思考出来ている事に驚愕する。

彼は本来親しい相手、そして自分自身の感情は兎も角として好意を持ってくれている者を害されて何も感じない様な冷血では無い。

寧ろ逆だ。憑依前も一度そういった事態に遭遇し、一気に激情を爆発させて下手人を叩きのめした事が有る。

その時は視界の全てが赤く染まり、時間の経過がスローになった様に感じたのを覚えている。

だが今の状態はそれとは微妙に異なっている。視界はこの上無い程鮮明だし、時間の

経過は通常通りの速度だ。

怒りを覚えていないのかと問われれば、それも違った。

思考は冷静だが、その中身の殆どがグリムジョーを如何にして潰すかどうかの考察で占められ、ほんの一部がチルツチを連れての逃走手段を考えている程度だ。

——成る程、これが冷静に怒っているという事か。

憑依した瞬間と同じく、また一つ新しい経験をした事に感動を覚えるという妙な余裕を見せながら、ノイトラはそう思った。

「な…!?!」

「っ!?!」

色々混乱し始める思考の事を気に留めながらも、ノイトラはまずチルツチを先に回収する事にした。

直前で気付かれて邪魔されるなどといった事が無い様、無拍子且つ最速でチルツチの元へ移動し、彼女を優しく横抱きして元の位置へと戻る。

その時に用いた響転は十刃最速を誇る第7十刃の響転すら超えかねないもの。厳密に言えば技量では及ばないだろうが、速度はソレに匹敵——否、それ以上であった。

それはスタークが見せる、一護や剣八がまるで消えたと錯覚する程に速い響転を彷彿とさせた。

案の定、グリムジョー達は倒れ伏すチルツチが一瞬でノイトラの背に転移した様にか見えていかなかった様だ。

第5十刃には有るまじき動きに、二人は思わず驚愕の声を漏らしていた。

ノイトラは一先ず彼等の事を放置し、背中で傷の痛みに呻き続けるチルツチの容体を確認する。

恐らく不意打ちに近い状態で攻撃を受けたのだろう。でなければ日頃の鍛錬の影響で本来より実力の上がつている彼女が、グリムジョーが相手だったとしても簡単に敗れるとは考えにくい。

色々調べた結果、確かに重傷では有るが、致命傷とは程遠いものだというのが、ノイトラの診た結果だった。

腐つても元十刃。魂魄の生命力が靈力に比例するこの世界に於いて、彼女程の存在ならばそう易々と死にはしないだろう。

安堵の溜息を吐きながら、彼女を運び易い様に背中に背負い直した。

「ゴブツ…なん…で…」

「あんま喋んな。直ぐに治療室に連れて行ってやる」  
「……」  
「めん」

そして——冒頭へ至る。

安心したのはチルツチも同じなのか、彼女は普段の強気な態度とは真逆の弱弱しい声で謝罪すると、そのまま意識を落とした。

只、ノイトラとしては首に回された手からもう少し力を抜いてくれると有難かったのだが——まあチルツチの体格自体が小柄で、体重も五十を下回る程度に軽いので、動くにしても攻撃以外に限定すれば特に問題は無かった。

「てめえ……一体何の真似だ、ノイトラ」

「……そりゃコツチの台詞だ、グリムジョー」

「あ、あ、!?」

グリムジョーはノイトラの冷静な返しに対して苛立った様で、ドスの効いた声で反発する。

相変わらずの沸点の低さである。ノイトラは内心で何度目かも分からない溜息を吐

いた。

十刃にはそれぞれが司る死の形が有り、それらが各々の能力や思想、存在理由となっている。

スタークは「孤独」、バラガンは「老い」といった感じだ。

グリムジョーの場合は「破壊」。道を阻む者は手当たり次第に破壊しようとする彼の性格にこれ以上適したものは無いだろう。

現に数字が一つしか変わらないとは言え、格上であるノイトラに噛み付いている様子から、そのレベルが相当な事が窺える。

こんな猛獣を一睨みで黙らせる事が出来る藍染は一体何なのか。ノイトラはあの男の規格外さを憂うばかりだった。

「…何でコイツを襲った?」

「あ? 頭湧いてんのかてめえ」

ノイトラは一息置いて冷静に問い掛けるが、それに対する返答は罵倒だった。

反射的に虚弾を打ち出しそうになったが、取り敢えずテスラもこちらに向かつて来ている様なので、何とか堪える。

「十刃落ち風情が平然と虚夜宮の床を踏んでいる。それがどれ程愚かな事であるか、流石に解るのではないか？」

「……………」

グリムジョーの意図を代弁したのはシャウロン。口調からして判る様に、一介の数字持ちに過ぎない筈の彼も主に似て大概態度が悪い。

まあそれも致し方無い事だ。シャウロンは中級大虚だった時代から忠誠を捧げているのはグリムジョー只一人。初対面から彼の強さを見込み、自らを率いるに相応しい王として定め、今も尚貫き通しているその在り方は正に忠臣。

それ故にノイトラはシャウロンの事は余り嫌いではなかった。他の十刃に対しての不敬な物言いも自分の主への忠誠心の表れであろうと納得していたので、特に気にもしていなかった。

「其処でゴミ掃除をしようとしたところ…邪魔が入った」

「……………」

とは言え、チルツチをゴミ扱いするのはいただけなかった。十刃落ちの彼女でも実力的にはシャウロンより確実に上の筈なのだ。

基本的に彼はグリムジョーよりも下だと思つては何時にも増して粗末な対応を取るの、つまりはそういう事だろう。

「その女：腹をぶち抜くつもりでやつたんだが、何でか直前で反応して身体を引きやがった。雑魚の分際で気に入らねえ真似しやがって…！」

グリムジョーは食い縛つた歯を剥き出しにして苛立ちを露にする。

だが今のノイトラに対してその対応は御法度。シャウロンのゴミ発言に続いてグリムジョーがチルツチへの侮辱の言葉を繋ぐ度、彼の理性のタガが段々と外れて行つた。

抑えられていた霊圧が感情の揺れに比例して凄まじい勢いで渦巻き始める。

——早く来いテスラ、いい加減間に合わなくなるぞ。

そう強く念じながら、ノイトラは残つた理性を総動員し、怒りから来る破壊衝動を必死に抑え込む。

猛スピードでこちらに移動している己の従属官の霊圧と、それに連なる様にして新たにやつて来ている霊圧四つを確認しながら。

「それに解せねえ……何でてめえがその女を庇う？」

「……おいグリムジョー。それ以上は——」

「黙つてろシャウロン!!」

十刃同士の公式外での戦闘は虚夜宮内では禁則事項として固く禁じられている。

それを破る事のリスクを承知しているのだろう、シャウロンはグリムジョーの発言を止めようとするが、当人は全く聞く耳を持たない。

ノイトラはもはや限界が近かった。グリムジョーの次の発言内容によっては、即刻開戦の引き金になる事は間違い無い。

彼は憑依した影響で沸点がやや下がった事に加え、怒りの起点が移り変わっていた。自分に関しての部分が、仲間に関しての部分へ、といった感じにだ。

自分自身を罵倒されても有る程度は耐えられるし流せる。だがそれが仲間だった場合はその限りでは無い。

そしてノイトラがこうまでして必死に耐えているのには理由が有る。

それはグリムジョーが今後、一護が成長するに当たってある意味最も重要なファクターとなるキャラだからだ。

一護は現世にてまず第10十刃のヤミーと戦闘し、初めて破面との戦いを経験する事となる。

後にその戦いを記録した映像を見てその存在を知ったグリムジョーは、後日独断で従属官達を引き連れて現世に侵攻し、其処で初めて一護と真正面からぶつかり合い、結果的には引き分けで終わる。

その後にもう一度再戦してまた引き分け、最後に虚圏で壮絶な最終対決を行って敗北。一護に大幅な成長を齎す要因となる。

他にも一護と複数回戦う破面は居るのだが、その中でもグリムジョーは合計三度という最多の回数を戦うのだ。

つまりグリムジョーは一護と一番関わりが深くなる破面であり、一種のライバルキャラとも言える。これを重要と言わずして何とする。

例えばこの場でノイトラがグリムジョーを叩きのめしたとしよう。すると彼は今後どう行動するのか。

まず敗戦の悔しさから間違い無く今以上に強さを求める様になる。その結果、グリムジョーは従来よりも強い状態で一護と対峙する事となり、最悪そのまま初戦辺りで主人公を殺してしまう可能性が浮上してくる。

——とはいえ、一護には主人公補正というものが有るので、一概にそうなるとは言

えないのだが、万が一という可能性も有った。

もう一つの懸念は、グリムジョーがノイトラへの対抗心を燃やし過ぎた結果、一護に對して抱く筈だった興味が失せてしまう事である。

自意識過剰な考えかもしれないが、グリムジョーの性格上有り得なくは無い。

この場合、一護は貴重な成長の機会を失うと同時に、その影響で本来辿り着く筈だったところまで行き着く事無く、志半ばで力尽きてしまう可能性だって有る。

結局のところ、一護が正規の形で成長してくれなければ、どちらに転んでもノイトラの目的の障害になるのだ。

その為、余りグリムジョーに変化を齎す訳にはいかないのである。

実を言えば既にノイトラは十刃落ちメンバーのパワーアップ等、結構な影響を齎しているのだが、基本的に自分の事で一杯なノイトラはそれを失念していたりする。

後に虚夜宮へ侵入する一護を含めた主人公勢三人が初めに戦うのが彼等だ。

つまり初戦から彼等を躓かせる可能性を自らの手で生み出しているのである。

——この事実本人が気付いたのは既に事が起こった直後だった。

「ああ、成る程なあ」

グリムジョーがそう零しながら浮かべる不敵な笑みが、ノイトラの感情を更に揺さ振った。

続きを聞く前に、早急にこの場を立ち去れば問題は無い。

その筈なのに——足が言う事を聞いてくれない。

まるでノイトラとは別の意志を持つているかの様に前へ進もうとする。気を抜けば直ぐにでも理性の制止を振り切つて襲い掛かりそうだ。

今迄グリムジョーは何時も絡む時はノイトラ個人にのみ限定していた。だからこそノイトラも対応出来ていたのだ。

だが仲間に対する侮辱の言葉を、それも危害を加えた上に度を越える程されては流石に抑えられる自信は無い。

憑依前からそういった場面に対して過剰なまでの反応を示していたのだ。今のノイトラへ憑依した状態で同じ状況下へ陥った場合、何をするのか想像も付かない。

だからこそ、この時ばかりは奇跡に縋った。

どうかグリムジョーの発言を止めてくれ、偶然でも良いからこの場を誤魔化せる展開を起こしてくれ、と。

「所詮は売女つてか。ハッ！ その程度で動いたあ、てめえも大概だな!!」

「つ、グリムジョー!!」

「…そうかよ」

しかし神がその願いに応える事は無かった。

次の瞬間、ノイトラの視界が瞬時に真っ赤に染まると、それに次いで思考全てが殺意に塗り潰された。

グリムジョーとしては軽い挑発以外の意図は何も無かったのだ。

だがまさかそれがノイトラの逆鱗に触れる発言だったとは思っても寄らなかつただろう。

「遺言はそれだけか」

「なっ!!」

グリムジョーは突然背後から聞こえた声に振り返ると、其処には既に彼の頭部目掛けて右脚を振り上げているノイトラの姿があつた。

只の蹴りでは無い。ドルドーニ直伝の、脚全体に霊圧を込めて強化する事で斬魄刀と相違無い切れ味を持った、歴とした技。

ノイトラのスペックから繰り出されるソレは本来必殺とも言つて良い威力を誇る。例えグリムジョーでも解放無しの状態で直撃すれば即死も必至だった。

とは言え、完全に隙を突いたノイトラであったが、ほんの僅かに残つた理性が最後の足掻きを見せた。

本人も無意識の内に、右脚全体へ鋭利に固められた霊圧を僅かに崩し、切れ味を除去。加えて振り抜く速度をかなり落としていたのだ。

その一方で、グリムジョー側からして見れば殺す気満々の一撃にしか見えていないのだが――。

「ウソ…だろ…!」

——有り得ない。

そう驚愕すると同時に、グリムジョーの体感時間が急激にスローモーションになる。だが身体は微動だにせず、徐々に迫り来る脚を視界が捉えているばかり。

グリムジョーは正直言つて油断していた。

実際に今迄ノイトラが戦う姿を見た事も無いし、見たいと思う程勤勉でも無い。

だが彼は自分の力に絶対的な自信が有つた。流石に藍染に及ぶまでとは思つていな

いが、ノイトラとはたかが数字一つ違うだけで、実力差など大して開いていないと、そう思い込んでいた。

だが現実には厳しいものだった。

解放状態で無いとは言え、先程の響転の動きが全く読めず、目で追う事も叶わなかった。

そして今、こうして為す術も無く叩き潰されんとしている事実が、自分が判断を誤ったのだと証明している。

しかもそのノイトラの振るう脚には見ただけでも判る、筆舌に尽くし難い重みが有った。気の赴くままに暴れ回って鍛えた程度で宿る重みでは決して無い。

グリムジョーとて一応鍛錬に等しい事はしているという自負が有る。積極的に藍染から定期的に出される任務内で発生する、最下級大虚以上の虚を相手にした戦闘で場数を踏み。また自らの従属官達全員を一斉に相手にした、限り無く実戦に近い稽古を定期的に重ねる日々。

緻密に練られた内容では無いが、手を抜いた心算は一切無かった。

今の自分ではどう足掻こうがノイトラに遠く及ばないと、今更ながらに悟る。恐らく数年前に急激に大人しくなったあの時が転機だったのだ。

同族嫌悪と言うべきか、グリムジョーは以前からノイトラの事が気に食わなかった。

共に獣の如き性質と凶暴性を兼ね備えた者同士だ、ソリが合うはずが無い。

そんな彼が突然悟りを開いたかのように落ち着き始めてからというもの、それは顕著だった。

出会い頭に挑発しても、そうか、等と澄まし顔で流される。霊圧を解放して威圧する様にして背中にぶつけてみても、一切振り向く事などせずに無反応。

お前の事など眼中に無いと言わんばかりの反応を返される度、グリムジョーは怒りを募らせて行つた。

遅かれ早かれ、何時かはこうなっていただろう。限界を迎えたのはノイトラだけで無く、グリムジョーも同じだったのだ。

チルツチを攻撃したのも、何時も以上にしつこく挑発したのも、その憂さ晴らしの一環と言つて相違無い。

——まさかそれでノイトラがマジギレするとは本人も想定外だったろうか。

それにしても一体何故、どうやってそれ程の強さを身に付けたというのか。

グリムジョーの中で驚愕と疑問ばかりが浮かんでは消える。

「…クソが…！」

命を刈り取る死神の鎌が、遂に眼前から数センチの付近まで迫る。

長らく嗅いでいかなかった死の香りが、グリムジョーの中で眠っていた恐怖という感情を刺激した。

——だが彼は屈しない。

この身は王、誰よりも高い場所に立つべき存在。恐怖など下らない感情は持たない。今は藍染惣右介という男に従っている形ではあるが、あくまで一時的な事。

何時の日か自分は彼すら踏み台にして頂点に立つのだ。こんなところで死んで堪るものか。

王としての矜持と大いなる野望。それ等を胸に抱きながら、豹王は迫り来る死神の鎌を必死に睨み付ける。

絶対的な死の運命にすら最期まで足掻く、何物にも屈しようとしないうその姿は確かに一つの王のソレであった。

——やがてその屈強な意志は奇跡を呼び寄せる事となる。

「…それ位にしておけ、ノイトラ」

「——っ!!」

「お前もだ、グリムジョー」

「なっ!？」

気付けばノイトラの脚はグリムジョーの鼻先で止まっていた。

良く見ると脛の部分に褐色の肌をした手が置かれ、振り抜かれた方向とは逆に引かれているのが判る。

その手の元を辿って行くと、緑がかった瞳に金色の睫毛、そして同じく金で光り輝く髪が目に入った。

「…ハリベルか」

ノイトラは殺意が籠った瞳をそちらに向ける。

現十刃の紅一点、第3十刃、ティア・ハリベルが其処に居た。

## 第六話 三日月と忠犬と金鯨

流石は第3十刃と言うべきか。彼女の手で押さえられたその脚は万力に固定された様にビクともしない。

初めは怒りの感情に流されたままハリベルを睨みつけていたノイトラも次第に落ち着きを取り戻し、霊圧を抑えると同時にゆっくりと脚を元に戻した。

重圧から解放されたグリムジョーは思わず膝を着く。

顔からは滝の様に汗を流し、息も絶え絶えな状態。にも拘らず、今も尚戦意を失わずにノイトラを睨み付けている。

そんな彼に、先程まで状況の変化に付いて行けずに硬直していたシャウロンが駆け寄って行く。

「…悪い」

「それはグリムジョーに言うべきではないのか？」

無関係にも拘らず、暴走した自分を止めてくれた事に対する感謝の意図も含め、謝罪

する。

だがそれに対する返答に思わず反論したくなつたが、顔を顰める程度に止めた。

「まあ、この状況を見れば大凡見当は付く。無理にしろとは言わん」

「…じゃあそうさせて貰うさ」

ハリベルは背負われているチルツチに一瞬だけ視線を向けると、そう言つた。

その理解ある言葉に内心で感謝しながら、ノイトラは踵を返す。

その方向にはハリベルの従属官である三人の女性の破面達と言ひ争いをするテスラの姿が有つた。

「つ…てめえ!!」

「止せグリムジョー!」

「放せシャウロン!」

弛緩した体に鞭を打ち、再び立ち上がったグリムジョーはそんなノイトラの背中に吼えた。

だが現時点での状況の悪さを察してか、シャウロンは決死の覚悟で彼の身体を羽交い絞めにして抑え込む。

「今この場で暴ればあの女も動く！ 抑えろ我が王よ！」

「……………くそが……！」

グリムジョーは相手が誰であろうと好戦的な姿勢は崩さないが、相手と自分の實力差を測る程度は出来る。

ハリベルが第3十刃へ就いた時、その佇まいと全身から溢れ出す靈圧から彼女の實力は判っていた。故に彼女が相手となつては明らかに分が悪いと、その表情に悔しさを滲み出しながらも敵意を仕舞い込んだ。

ノイトラに嘯み付いたのは、彼が普段から徹底して實力を隠していた為にそれが叶わなかつたからだ。

だが今は別だ。不意打ちにも等しい状況ではあつたが、身を以て実感した。

まるで中級大虚時代に藍染と邂逅したあの時を彷彿とさせる。自分では絶対コイツに勝てない、そう本能で悟つたあの瞬間と同じ感覚を。

例え正面から戦り合つて同じ結果になるのは目に見えていた。

その実力差が埋まらない限り、グリムジョーにはノイトラと正面切つて衝突する気は皆無だった。

——時折睨み付ける程度は続けるかもしれないが。

ノイトラは先程からチルツチ越しに背中へ剣を突き立てられているかの様な錯覚を覚えながらも、徹底して無視を決め込んだ。

これ以上関わりたくないと本当に面倒な事になる。ああいつた輩は大抵無視するより構つた方が余計騒ぎ立てるものと相場は決まっているのだから。

背中の煩わしい感覚をそのままに、未だにギャーギャーと騒ぎ立てている四人の従属官達へと近付くと、その内の一人であるテスラに声を掛けた。

「行くぞ、テスラ」

「——だから私は……ってノイトラ!! 大事無いか!？」

相当焦っていたのか、テスラは言い争っていた三人から一気に距離を取り、ノイトラの前へと響転で移動した。

畏まった口調も忘れ、全身を隈なく覗き込んで確認する姿は、まるで迷子の我が子を

見付けた直後の親の反応である。

ちなみにこれもがもし視認では無く、触診による確認をしようものなら即座に殴り飛ばしていたところだ。

テスラは自覚しないところで命拾いしていた。

「馬鹿野郎、俺がそんな軟な鍛え方してる訳無い事位知つてんだろ？ ほら行くぞ」  
「フゴッ!? ま、待てノイトラー！」

ノイトラはテスラの頭を小突くと、治療室へ向けて歩き始める。

その遣り取りに呆気にとられたのか、ハリベルの従属官達は哑然とした表情で二人の背中を見送るのだった。

ノイトラがグリムジョーと相対する十数分前、テスラは鍛錬を終えて拠点へ戻ったところだった。

あの日に境に性格が変わり、自分を極限まで追い込む様な鍛錬を始めたノイトラ。その姿に釣られ、テスラは自分からも鍛錬を始めた。

というか、ある理由から鍛えねばマズイのだ。下手すれば死ぬる。

ノイトラは自分の鍛錬を初めて半年程経過した頃から、稀にテスラに手合せを要求する様になった。

結果は当然瞬殺。時折受け身に徹し、テスラが疲れ切るまで攻撃を受け続けた後に勝負を決める時もあるが、恐らくは鋼皮の耐久性の確認なのだろう。

過酷な鍛錬の御蔭か、以前とは違って凄まじい勢いで力を付けているノイトラを相手取るには自分の実力は余りに掛け離れている。テスラは手合せを終える度に実感した。

——彼の従属官、そして友として、このままでいて良い訳が無い。

そう考えたテスラは手始めに、ノイトラの鍛錬に参加する事にした。

だが即座に断念せざるを得なかった。

何せその鍛錬内容はノイトラのスベックを基準として考えられたものだ。

力も、速度も、体力も、耐久性も、全てに劣るテスラはその鍛錬について行けず、案

の定途中で力尽きた。

それを見かねたのか、後にノイトラは彼に合った鍛錬内容を態々考え、伝えてきたのだ。

テスラはその時の言葉が今も脳裏に焼き付いている。

——トレーニングとか鍛錬の基本はセットを重ねる事だ。

そうぶつきらぼうに言い捨て、自分の鍛錬に戻るノイトラ。

その背中を呆然と眺めながら、テスラは理解した。その言葉に含まれた気遣いと優しさ。

今迄そういった感情を向けられた事など皆無だったテスラは感動に打ちひしがれた。

其処で疑問だ。今迄も酷い扱いを受けていた筈なのに、何故彼は頑なにノイトラに付き従い、忠誠を誓っているのか。

実は思いの外単純。只単にノイトラの事を放って置けなかったのだ。

他者との馴れ合いを拒絶し、常に孤独で居ながら、愚直なまでにその歪んだ生き方を選択し続けるその在り方。

——俺が十刃最強だ。

今ではもう一言も言わなくなったが、かつて口癖に近かったそれは、テスラにはまるで弱い自分に必死に言い聞かせて鼓舞している様に見える、長身の筈の彼のその背中は妙

に小さく、そして儂く映った。

切っ掛けは情けの一種だったのかもしれない。情けを掛けられる事を何よりも嫌っていたあの頃のノイトラにとって、それが非常に屈辱的だったのは間違い無い。

だとすればあの扱ひも納得だった。

だがそれでもテスラはノイトラに付き従う事を望んだ。

もう関わってしまったのだ。もはやこの意志は曲げる訳にはいかない、と。

テスラは義理堅かった。それも正気を疑う程に。

以前からそんな彼を見込んでか、ぜひ自らの従属官へと勧誘する十刃は複数居た。それも第8十刃だったノイトラよりも更に階級が上の者から。

だがそれも全て断った。自分にはもう決めた者が居る、と。

野心を持たない数字持ちにとって、十刃の従属官へ着任する事は名誉だった。その十刃の数字が小さければ尚の事。

そんな彼等にとってテスラの行動がどれ程異常に映った事か想像に難くない。

だが当人は後悔など一切無かった。

自分自身で選択した道だ。幾ら罵られ様が、殴られ様が、只管に忠誠を捧げよう。彼を独りになどさせるものか、と。

その覚悟が今こうして実を結んだのだと、現在のノイトラとの関係に、正直そう思っ

た。

自分の扱いに対する変化だけでは無い。ノイトラが自分の事を氣遣う、それは即ち彼が自分と言う他者の存在を受け入れた証拠に他ならない。

孤独を捨てたのだ。あれ程までに拒絶反応を示していたノイトラ・ジルガが、自らの手で。

「…待っている、ノイトラ」

ノイトラは自分の手を取った。そして次は彼自身が立つ高みへの道標を示してくれてまでいる。

ならばその期待に応えない訳にはいかない。

——何時の日か必ず、お前の立つ場所へと辿り着いてみせる。

そう心に誓い、テスラは今日も腕を磨く。

汗だくの身体をシャワーで流し終わると、新品の白装束へと着替える。

置いていた斬魄刀を腰に差し、拠点を後にする。

目指す先は当然ノイトラの下だが、その道中でこっそり寄る場所が有った。

言わずもがな、第3十刃でありテスラの意中の相手、ティア・ハリベルだ。

ノイトラに正面から指摘されてから今日で数日が経過しているが、もはや開き直つていた。

——ああそうだ、自分は彼女が気になつて仕方が無い。

もうどうにでもなれ。テスラは正にそんな態度でノイトラにそう言い放つた。

だが聞いた本人は何時もの様に笑いながら弄る真似はしなかつた。

返つて来た返事は——がんばれ。その一言だけだ。

使い古された応援の台詞だったが、テスラにとつては十分だった。

とは言え、未だに話し掛けるまでに至つていないのが現状。

稀に擦れ違い様に会釈する程度だ。

だがハリベルの従属官達は主人に対する他者の感情に機敏なのか、テスラの姿が見える度、毎回必ず睨み付けていたりする。

まるで自分の大好きなご主人を取られる事を恐れるが余り、近づく他人全てに吠え立てる寂しがり屋な飼い犬である。

基本的にハリベル以外は特に興味は無いテスラはそんな印象を受けていた。

何時もは言い争いばかりの三人だが、稀にハリベルの話題でキャピキャピと仲良く楽しげに話し合っていたりする事もある。

その時の三人の浮かべる笑顔が、実は結構目の保養となつていたりとか、微笑ましいと

か和むとか、そういった事を思っている訳では決して無いのである。

「…済まない、どうやら俺はその「ヘタレ」とやらと同等らしい」

自分には未だに話し掛ける勇気が無い。以前そう零した瞬間に放たれたノイトラの冷やかな声が脳裏に浮かぶ。

テスラは折角の友の応援に応えられない情けない自分を悔いる。

だがこればかりは一筋縄ではいかない上、時間が必要な問題だった。

立場上の問題もあるし、何よりテスラ自身が本人を前にしてしまうと緊張の余り硬直してしまうのだ。論外である。

——前に踏み出せるのは何時になる事やら。

そんな彼の状態を理解しているノイトラは、建物の影から遠目でハリベルを眺め続けるテスラの姿を見る度に溜息を零していた。

今の時間であれば、ハリベルは何時もの場所で従属官達の鍛錬の監督を務めているところだろう。

テスラは何時も通りに遠目から軽く覗く程度で済ませようと歩を進めた——その時だった。

「この霊圧はあの女……とグリムジョーだど!? マズイ!!」

以前のノイトラと同じ空気を持つ、現十刃の中で最も好戦的な思考を持つ男、グリムジョー・ジャガージャック。

普段の立ち振る舞いは鬱陶しいが、その実誰よりも大きな戦士の矜持を持ち、同時に負けん気も強い女、チルツチ・サンダーウィッチ。

S極とS極とも言えるこの二人が邂逅すればどうなるか。想像したテスラの行動は早かった。

今の虚夜宮には藍染を含め、副官二人も不在。

確実にグリムジョーを抑えられる者が居ないのは不運としか言い様が無い。

ならば残された手段は一つ。

この場所から最も近い場所に居る者——それもグリムジョーの持つ6よりも小さい数字を持つ十刃に助力を請う事だ。

響転でハリベル達の鍛錬場所から残り二百メートルを切る付近まで近付いた時、テスラの足が止まった。

確かにハリベルは他の十刃の中ではまともな性格をしている。だが同時に戦士と

しての冷酷さも持ち合わせている。

果たして願いを聞き届けてくれるだろうか。それ以前に一介の数字持ち風情が話し掛ける事すら許されるのか。

直前で生じた迷いに、全身が硬直する。

チルツチは元十刃で、尚且つノイトラと鍛錬を重ねて来ている為、並みの破面よりは遙かに強い。

だがそれでもグリムジョーと渡り合える程とは言えない。もし二人が戦闘に入れば間違い無くグリムジョーに軍配が上がる。

加えて彼は敵に対して情けなど欠片も持たない男だ。戦いの結果は勝者か敗者生きる死ぬの二択のみ。実際、今迄彼に敗れて生き残った者は一人も居ない。

もしもチルツチが殺される様な事になれば、ノイトラは躊躇無く確実にグリムジョーを殺しに掛かるだろう。

他人の事情には一切関与しない姿勢を貫くノイトラだが、今迄の反動なのか、一度受け入れた者には只管甘くなる傾向がある。

つい最近も十刃落ちメンバーを貶める様な発言をしていた破面と出くわした時があったが、その時の彼の対応は熾烈を極めた。

一瞬消えたかと思うと、次の瞬間にはキョトンとしたセフィーロを抱えて戻り、その

破面をタコ殴りにしては治療させ、また殴つては治療を繰り返し、徹底的に反省させたのだ。

本人いわく——言葉の要らない肉体と肉体の話し合いHANASHIAIとの事。

話し合いとは謳いつつ、相手の破面は最後の辺りしか喋つていない事にテスラは気付いていた。

返り血に塗れた状態で口元を歪めながら、それかSHITSUKE 騷ハルカとも言うなあ、と零すノイトラに何か薄ら寒いものを感じ、ツッコむのを止めた。

「クッ、どうすれば……」

——此処で死ぬのならその程度の者だったというだけだ。

人格者とは言え、冷徹さも持ち合わせているハリベルなら言いかねない台詞を想像しながら、テスラは齒軋りした。

ぶつちやけ言えよそんなドライな部分も魅力的だが——不意にそんな事を考え始めた自分に喝を入れ、思考を元に戻す。

こうなれば一か八か、誠心誠意頭を下げて頼み込むしか無い。

自分出来る事が有れば何でもすると、己が身を犠牲にしてもだ。

でなければ如何に人格者と言えど、現十刃を動かせる訳が無い。

いざ再び前にへ踏み込む——その前に一先ず深呼吸をして精神を落ち着かせる事にした。

しかし状況は更に悪化の一途を辿る。

二人の元へ近付く、更に大きな霊圧を探查神経に捉えたからだ。

「なっ!! まさか、この霊圧はノイトラ!?!」

同時に驚愕した。ノイトラは普段、こんなあからさまに霊圧を垂れ流す真似はしないからだ。

——能ある鷹は爪を隠すって言うだろ。それにあんま目立ちたくねえんだよ。

これに更に付け加え、こうも言っていた。

——もしもそれを止める時があるとすれば、緊急事態だと判断しろ。

全身から血の気が引いた。これは迷いを覚えるとか、そういった次元をとうに超えている。

テスラはもはや形振り構っていられなくなつた事を悟る。

ノイトラがこの状況をグリムジョーを殺すなどして切り抜けたとしよう。だがその

場合、藍染の決めた法を破った事に他ならず、最悪は危険分子としてノイトラ自身を始末する命令を、他の十刃達に通達されるかもしれない。

テスラは覚悟を決めた。その最悪の事態を避ける為に。

「無礼を承知で申し上げますティア・ハリベル様！」

気付けばテスラはハリベルの眼前で両手両膝を着いていた。

普段からクールな態度を崩さない彼女もその姿を見て思わず目を見開き、驚愕を露にしている。

「現在第5十刃の宮周辺にて、十刃落ち一名と十刃二名が衝突寸前!! どうか助力を御願ひしたく!!」

「んなっ!? イキナリ出てきて何言ってるんだこの優男……!」

「何卒!!」

テスラに対して声を荒げたのは従属官三人の内の一人。

額の部分のみが角の様に突出し、後頭部付近まで伸びた直線状の細めの仮面を着けた

オッドアイの女性、エミルー・アパッチ。

「無視してんじゃねえ!!」

「ガハッ!!」

身長は百五十半ばという小柄でありながら、土下座しているテスラの脇腹目掛けて横合いから蹴りを繰り出し、大きく吹き飛ばしてみせる。

テスラは油断していた事も相俟ってモロに食らい、肺から空気を吐き出しながらもどり打って転がる。

「おいアパッチ！幾ら何でもそれは…」

「はあ、相変わらず短絡的な猪な事で…」

そんなアパッチの先走った行動にツッコみを入れるのは、筋肉質で長身、頭部と首元に仮面の名残がある、主人に負けず劣らずの露出度の高さを誇る女性、フランチエスカ・ミラ・ローズ。

最後に毒を吐いたのは、挑発で長い袖が特徴の、仮面の名残を首飾りの様に首に下げ

た女性、シイアン・スンスン。

「つて、え？ ええ!？」

「御返答は如何に!!」

戸惑いの声を漏らしたのはスンスン。だがそれも致し方無いと言えた。

何せ不意打ちで吹き飛ばされた筈の男が特に怪我也無く、次の瞬間には再度ハリベルの前へと同じ体勢で現れていたのだから。

テスラは確かに防御も出来ずアパッチに蹴り飛ばされた。

だが転がっている最中、無理矢理身体を振り、方向転換した後に受け身を取り、直ぐ様響転でハリベルの元へ戻ったのだ。

それに加えて怪我也無いのも、全ては日頃の鍛錬の成果だった。テスラとしてはこう言うだろう。

——ノイトラのそれに比べれば屁でも無い、と。

「てめえ性懲りも無く…!!」

手加減など一切した覚えは無い。

にも拘らず全く堪えた様子も無い上、自分は相手にすらされていない。

そんなテスラの態度に腹が立ったアパッチは今度は斬魄刀の柄に手を掛けた。

流石にそれは拙いと悟ったのか、ミラ・ローズとスンスンは互いにアイコンタクトを取り、二人掛かりで彼女を止める事にした。

だがそんな二人よりも先に動いた存在が有った。

「止めろアパッチ」

「は、ハリベル様!？」

「二度は言わん」

「う…」

ハリベルは組んでいた腕を解き、アパッチの腕に自らの手を添えていた。

眼前の男は気に食わないが、他ならぬ敬愛する主人の命令ならば致し方無い。

アパッチは渋々といった感じで抜刀途中の斬魄刀を鞘に納めた。

「テスラ・リンドクルツ」

「はっー！」

「もしその頼みを引き受けたとして、貴様はその対価として何を捧げる？」

テスラは即座に悟った。

十刃を一介の破面が対価も無しに動かした。ハリベルとしてはそんな事実を作る訳にはいかないのだろう。

何事も前例があるというのは厄介だ。国と国との外交等、政治的観点から見れば禁忌にも等しい。

アイツにはやったのに、あの時はやったのに、何故こちらには出来ないのかと、まず追及される。

そりやあ乞食の如き連中に同じ事をするわけないだろう、等と返してしまえば即抗議の嵐が巻き起こる上、最悪は戦争だ。

基本的にそういった要求をする連中はまともな頭の作りをしていない。故に何をしでかすか想像も付かないのが非常に厄介だ。

十刃としては力尽くで黙らせる事は容易だろう。だが面倒事になるのは目に見えて  
いる。

ハリベルは唯一の女性の十刃というだけあり、普段から色々と大変な部分もあるのだ

ろう。

ならば他の者が尻込みする程の対価を、誠意を見せる必要があつた。

テスラは真正面からハリベルの目を見詰め、言った。

「私の全てを」

覚悟などとうに決めている。

この身全ては我が主の為。

地位、誇り、命、尽くを失う羽目になろうが躊躇しない。

「知識でも、力でも、命でも。文字通り全てを貴女様に捧げます。役に立たなければ道具として使い捨てても構いません」

「…貴様の仕える主の事は良いのか」

「我が主の為になるのであれば、この身が朽ち果てる事も厭いません」

「そう…か」

ハリベルは腕を組んで目を閉じ、暫し考える素振りを見せると、自身の従属官三人の

方を向いた。

「アパッチ、ミラ・ローズ、スンスン」

『っは！』

その呼び掛けに、三人は一斉に片膝を着いて応じる。

ハリベルの持つカリスマが成せる、その見事な統率性は圧巻の一言だ。

恐怖政治にも等しい形で統率を取っている第2十刃とはまた別のそれは見ていて気分が良い。

「鍛錬は中止だ。現場に向かうぞ」

『…承知しました!!』

多少間が空いたが、三人は了承の返事を返した。

ある意味彼女達と同類とも言えるテスラは何となくその理由は理解出来た。

「貴様の覚悟、見せて貰った」

「はい…」

「後悔は？」

「無論」

「——ならばその命、私が預かろう。案内しろ」

「…はっ!! 感謝致します!!」

——この日、テスラ・リンドクルツは全てを失った。

だが同時に憧れの存在に一步近付いた瞬間でもあり、新たなスタートでもあった。

実に面倒な事態ではあったが大事も無く終え、その大した苦勞でない対価として吊り合わない程良い拾い物をした。

未だに頭を押さえながら、嘗ての主が治療室から出てきた瞬間に駆け寄って行くテスラの後ろ姿を見ながら、ハリベルはそう思う。

全てを捧げると、そう言った時に見せたあの目。実に素晴らしい。あれぞ忠義に生きる戦士の鑑だ。

実力も申し分無い。直前まで接近を悟らせずに移動してみせた響転。アパッチの不意討ちを食らつても一切動じないタフさ、そしてあの反応速度。

現状に満足する事無く、常に練磨を絶やさなかつたのだろう。今の従属官三人よりは明らかに格上だ。下手すれば十刃最下位のヤミー辺りと互角に渡り合えるのでは、と思える程に。

「ノイトラ、あの女の容体は…?」

「セフイー口あに頼んだからな。治療は直ぐに済んだし、後は目が覚めるのを待つだけだ」  
「そうか…」

何時もよりも自分にやたら構うテスラの様子に、ノイトラは不審な顔をする。  
だが近くのハリベル達を見た瞬間、悟った。

「オマエ、もしかして…」

「…やはり分かるか。フツ、お前にはつくづく敵わない——」

「ナンパ成功したのか」

「ブツフォツ!! 何でそうなる!?!」

嘘である。だが敢えてその発言をしたのだ。

ノイトラはシリアスもセンチメンタルも苦手だった。

友との別れも、泣くより笑って済ませたい。そんな心情から来たもの。

「コイツはこの顔で実はムツツリだからな。精々気を付けるこつた」

「ち、違…」

「やっぱりてめえ下心でハリベル様に近付いたのか!!」

「ハツ! 所詮男つてのは下半身に脳味噌があるんだな!」

「お止めなさい二人とも。脳筋が何を喚いても決して頭が良くなる訳では無くてよ」

『てめえスンスン! どっちの味方だ!?!』

ノイトラはニヤつきながら従属官三人に告げ口する。

案の定、真に受けたアパッチとミラ・ローズの二人は一斉にテスラ目掛けて敵意を剥き出しにして騒ぎ始める。

だが言い争いの中でテスラのキャラを悟ったのか、二人は段々と彼の扱いを敵意から弄りへと変化させていった。

ノイトラはそんな彼女達の遣り取りを眺めながら、今迄自分がテスラにしてきた弄りかもはや出来なくなるのかと内心で寂しさを覚えていた。

やがてそのテスラ弄りに傍観していた筈のスンスンが混ざり始め、四人の意識がこちらから逸れたのを皮切りに表情を元に戻すと、深く溜息を吐く。

そんなノイトラの肩に、不意に手が置かれた。

「案ずるな」

「ハリベル……」

「奴の事は責任を持って面倒を見る」

寂しさの他に、自分の手元を離れて本当に大丈夫か、といった心配をしていた心情を読んだのか、ハリベルはノイトラに優しく語り掛ける。

随分アイツを買ってんだな、と零しながら、ノイトラは肩から力を抜いた。

「別に奴に限った話では無い、私としてはお前の事も買っているのだぞ？」

「…冗談も過ぎれば皮肉にしか聞こえねえよ」

「手加減したであろうあの一撃でも私の手が痺れたのだ。謙虚なのは美德だが、過ぎれば侮辱にしかならん。素直に称賛を受け取って置け」

「…Gracias」

「De nada」

この私がそう思ったのだ。お前もそういう事にしておけ。

つまりはそういう意味だろう。意外とハリベルは強情で、負けず嫌いなのかもしれない。

——どうして自分の周りの女はこんな強かな連中ばかりなんだ。

ノイトラはそう思いながら、頭を掻いた。

余り交流の無かった二人だが、こうしてみるとスタークと同じく相性は悪くない様だ。

気付けば二人の周囲では和やかで柔らかな空気が漂っている。

偶にはこういうのも悪くない、そう互いに思える程に。

「これから大変になるぞ」

「…分かつてるさ」

テスラは従属官として非常に優秀だった。それは十二分に理解している。

今後は彼が引き受けていたもの全てを、他ならぬノイトラ自身が背負わねばならない。

ちよつかいを掛けて来る破面達の対応も、藍染からの通達を受け取るのも、その他雑務も、全てだ。

只でさえ一日の大半を鍛錬に充てているのだ。それに加えらば——考えただけでも大変だ。

新たに従属官を入れたくとも、恐らく不可能だろう。数字持ち達はあの忠犬テスラが離れたのを見てどういった解釈をするのか、まあ想像に難くない。

遂に愛想を尽かしたのか、あのテスラが辞めるとかどんだだけ酷い事をしたんだ、等と今にも噂話が聞こえてきそうだ。

誰かそんな自分の従属官をしてくれる物好きが居ないものか。

ノイトラはセフィーロの事を除外しながら、そう思った。

「良いものを貰った礼だ。困った時は出来る限り協力はしてやる」

「:Te a g r a d e z c o d e t o d o c o r a z n .」

「ククツ、何だ畏まって」

憂鬱な気分を誤魔化す様に、ドルドーニの影響で勉強して覚えたスペイン語で返すノイトラだった。

——この世界は未だ静か。

だがそれもある時を境に瞬く間に崩壊する事を、彼は理解していた。

一人のイレギュラーの御蔭で微妙に狂い始めた本来の史実。その余波を受ける事になろうとは、この時の本人は思ってもいなかった。

## 第七話 鉄燕とそよ風と三日月

時間を掛け、ゆつくりとその重い瞼を徐々に開けてゆく。先程まで闇に支配されていた視界に眩いばかりの光が差し込んで——等という事は無く、目覚めには丁度良い薄暗さの広い天井が目に入った。

身体中が何か柔らかい物に覆われている様な感覚がする。少し目を下に動かすと、其処にはベッドに横たわり、首から下をフワフワの羽毛布団に包まれた自身の身体が有った。

半覚醒状態の脳を必死に動かし、この状態へと至る前の記憶を辿る。

その日、チルツチは何時を通りにノイトラを追い駆け、第5十刃の拠点である宮の周辺まで足を運んでいた。

今の時間は鍛錬を終えて自室に戻る頃だとりサーチ済みだ。

だがその情報に反して、彼の姿は何処にも見当たらない。

探査神経で探しても、居るのは彼の従属官一人。

——相変わらず忙しく動き回る男だ。

チルツチ・サンダーウィッチは中々捕まえない意中の相手を想い、溜息を吐いた。

考えれば考える程、ノイトラ・ジルガというのは不思議な男だった。

十刃落ち風情が、と其処等の有象無象の破面達にすら蔑まれる存在である自分達と対等に接し、寧ろ先輩と扱って敬意を示すなど正気を疑う。

殺されても文句の言えない様な行動を取った自分。それを即座に許し、剩えその時に失った筈の力を取り戻す手伝いを行い、今では友人として付き合っている。

噂は所詮噂、という言葉を体現しているのは彼以外に居ないだろう。何が繋がれた鎖を自ら引き千切った飢えた獣だ、只の底抜けに御人好しな鍛錬馬鹿ではないか。

「はあ、あたしってこんなチョロかったっけ……」

そうは言うが、あの笑顔から向けられた感情は本当に嬉しかった。

此処、治療室にて働く治療長とその補佐的存在の雑務係の破面の手によつて治療が完了し、見事成功したと報告を受けた瞬間、ノイトラは言った。

———そうか、ああ、安心した。これでもう大丈夫だな。

何でそんなに嬉しそうにするのだ。まるで自分の事のように。

有り得ないだろう。こんな状況に陥つたのも全てが自業自得だ。なのに勝手に責任を持って、勝手に治療の算段を確立して、勝手に喜んで、一体彼に何の得があったと言

うのか。

「…つてかそうじゃないでしょ。馬鹿かあたしは」

思考が惚気の方向へと脱線し始めたので、チルツチは軌道修正を行い、再度記憶辿りを再開する。

ノイトラの不在を確認した後、取り敢えず彼女はその場を離れる事にした。

第5十刃の拠点は虚夜宮の中央部寄りに位置している為、他の破面達と遭遇せずに辿り着くのが中々に大変だ。

なのでそれを繰り返している内に隠密能力が高くなったのは致し方無いと言える。

だがその日は妙に気を抜いていた。何を思ったのか、拠点を後にする時、迂闊にも探查神経を切ってしまったのだ。

そして運悪く、その道中で破面と遭遇してしまった。それも一番出会ってはいけない存在と。

グリムジョー・ジャガージャック。十刃の中で最も凶暴で、少しでも気に食わない存在は尽く蹴散らす暴君。

そして十刃落ちを負け犬にも劣るカスと最も蔑んでいる男でもある。

彼にとって敗者は死を意味する。とすれば十刃落ちの事は敗者で有りながら無様に生き延びている下等な存在にしか映っていないのだろう。

自身の失態を恥じると同時に、ノイトラへの謝罪の気持ちが溢れた。

さり気無く、それも複数回に亘って彼から言われていたではないか。虚夜宮こよみやに来るのは構わないが、グリムジョーには絶対に会わない様にしろよ、と。

加えて会った場合の対処法も教えられていた。

まずは軽く会釈するか、先にあつちが噛み付いてきた場合は軽く相槌を打って、興味を無くすまで粘る事。挑発に対して反発したり、強い言動で返す様な真似は禁忌だと。

始めはその通りにした。案の定、十刃落ちのゴミカスが何で此処に、等といった挑発を仕掛けて来たので、冷静に対処した。

だがチルツチは元々気が長い方では無い。

グリムジョーは何とノイトラに対する侮辱を言い始めたのだ。それも思わず耳を塞ぎたくなる様な、胸糞悪い発言を。

想い人への侮辱を聞き流せる程、チルツチは達観してはいなかった。

——ノイトラよりあんたの方が雑魚だろうが。あいつより階級が下の癖に粹まことがつてんじゃねえ。

そう言い放った次の瞬間、チルツチは腹部に貫手を叩き込まれていた。

狙った箇所と、それに込められた速度と力から見て、明らかに殺意の籠った一撃であるのは明白。

咄嗟に引いた為にそのまま貫かれる様な形にはならなかったが、完全には威力を殺し切れず、盛大に吐血した。

思わずその場でふら付いた直後、今度は右頬に衝撃が走った。

今度は殴り飛ばされたのだと、地面を転がりながら、チルツチは悟った。

腹部への強いダメージは足にも響く上、最後の一撃が脳にも響いたのか、意識が朦朧とし始める。

そんな彼女が最後に見たのは――。

「――っ！　そうよノイトラはっ!!」

その光景を思い出した途端、チルツチは起き上がる。

そうだ、自分はノイトラに助けられたのだ。

きつとあの後グリムジョーと相對したに違いない。あの荒れ具合からいつて、何も無いで済むとは到底思えない。

そして気付いた。

自分が無事という事は、もしかしてノイトラはグリムジョーを下したのか、と。想像した瞬間、彼女は顔を青褪めた。

虚夜宮内での私情による戦闘は厳禁だ。もしそれを破れば藍染より直々に処分が下される。

その戦闘による被害が酷ければ最悪処刑、それ以外であれば基本は降格。この二択だ。

ノイトラの従属官であり一番の理解者であるテスラいわく、あいつは身内が害されると過剰なまでの反応を示す、と。

今迄の例を挙げて聞かせてもらったが、どれもが熾烈というか強烈だった。

肉体と肉体の話し合HANASHI AIいとか、手足切断きりつけ接着会談とか何だ。拷問以外の何物でも無いで

はないか。

だが十刃同士ともなればそんな悠長な真似は出来ないだろう。

しかも相手はグリムジョーだ。どう考えても大規模な戦闘が勃発するに決まってる。

施設内は当然破壊されるだろうし、下手すれば十刃の一つの席が空白になる。

そうなれば例え勝者がノイトラだったとしても確実に罰が下る。

「そんな…あたしのせいで…!」

「そうですね、貴方のせいですわねえ」

「んなっ!!?」

チルツチの零した言葉を肯定する別の声が背後から聞こえてきた。

彼女は思わずベッドから飛び降りて構えながら、その声の主を視界で捉える。

「つてあんたかよ!!」

「そうですね、皆大好きセフィーロ・テレサさんですよ。わくパチパチ…と云つても今此処には私達しか居ないんですけどね」

「だああああ! 一々間延びした声出すんじゃないやねえ!! 無性に腹が立つつての!!」

治療室に居る破面達のほぼ全てが戦闘力を持たない非力な存在だ。にも拘らず、一定以上の実力を持つ破面であるチルツチに対してこんな立ち振る舞いが出来るのは彼女一人しか居ない。

しかも最近ではノイトラすら従えられる一種の抑止力として、他の雑用係の破面達から非常に頼りにされてたりする。

そしてチルツチにとっては現時点での最大のライバルであり、恩人の一人でもあった。

「体調も問題無さそうですね〜」

「…御蔭様でね」

「ではノイトラさんにも伝えときますねえ」

「あ、そうだノイトラよノイトラ！ あいつはどうなったの!? 教えなさい!!」

「…ちよつと肩を揺するの止めてくれたら教えますよ〜」

元十刃の身体的スペックで両肩を掴まれ、凄まじい勢いでガクガクと揺すられているにも拘らず、態度を全く変えないセフィーロはそう言った。

チルツチは逸る気持ちを抑え、彼女を解放して言葉の続きを待つ。

「結果だけ言えばどちらも怪我無く終わりましたねえ。特に藍染様からの罰も無い様ですし〜」

「そう…良かった…」

けど、とセフィーロは不意に間を置くと、先程までの柔らかな雰囲気豹変した。突如として放出された膨大な量の霊圧が、チルツチのみに降り掛かる。

そのセフィーロの有り得ない行動と変化に、全身が硬直した。

まるで蛇に睨まれたカエルの気分だ。

セフィーロの全身から放たれている霊圧の量は尋常では無い。明らかに鍛錬時の手加減モードのノイトラに匹敵しているし、少なくとも現十刃の中堅レベルだ。

本人は戦闘力が皆無などと言っていたが、絶対嘘だ。所持している能力が戦闘向きでは無いの間違いでは無いのか。

チルツチはそんな事を思いつつも口に出せなかった。

「今回のせいでノイトラさんは掛け替えの無い存在を手放す羽目になりました。テスラ・リンドクルツという唯一無二の理解者を」

「……え？」

建前としてはこうだ。

事が起こる前、テスラは既にノイトラの従属官を辞しており、新たにハリベルの従属官として着任する事が決まっていた。

そしてその後釜にチルツチ・サンダーウィツチが入る形になっていたのだが、藍染が不在だった為に申請が出来ず、待機状態だった。

そんな時にグリムジョーが彼女と遭遇。従属官云々の事情を知らない彼は一方的に彼女を攻撃、それを止めるべくして主たるノイトラが動いた。

大規模な戦闘まで発展しそうになった瞬間、ハリベルが介入し、一先ず最悪の事態は回避した。そういうシナリオだ。

何とも無理矢理感が否めない流れである。しかしこれ以外に丸く収める方法は無かったのも事実。

事情を聴いたチルツチは思わず全身を震わせた。

滝の様に冷や汗を流し、譫言の様な声を漏らし始める。

単に顔色を青褪めたとか、そういった次元を超えた反応だった。

「……う……そ……あ……あたしはそんなつもりじゃ……」

「——しゃきつとせんかこの糞雌が!!」

「ひいっ!」

寒さに耐えるかの様に自身の身体を抱き締め、床に両膝を着くチルツチ。

そんな彼女に痺れを切らしたのか、次の瞬間、治療室全体にセフィーロの怒声が放たれた。

我に返った彼女は顔を上げ、背景に般若を浮かび上がらせたセフィーロを見遣る。

「事情はどう有れ、あの人は選択した！　そしてテメエは…私が望んで已まなかつた居場所を手に入れた!!」

「でも、あたしは…」

「でももだつても無えんだよ!!」

チルツチは目を見開いた。

泣いていたのだ。何時も飄々と振る舞い、何事にも揺るがない気丈な態度を崩さなかつたセフィーロが。

——　そうだ、彼女もノイトラの事を自分より前から。

チルツチは悟った。

態度はアレでも、何時も傷だらけだったノイトラを只管癒し続けたセフィーロ。彼女は恋情を抱き始めた以降もその行動は基本的に変えず、誘惑はしても自身からはそれ以上踏み込まないスタンスで接し続けた。

誰よりも彼の傍に居る事を望んでいた彼女が、ぼつと出の存在にそれを先に奪われたのだ。

それはどれ程の悔しさだっただろう。自分がどれ程疎ましく、憎たらしかった事だろう。

破面とはいえ、チルツチは同じ女だからこそ理解出来た。

別に心を奪った訳では無い。だが長きに亘つて想い続けたにも拘らず、一步リードされたのだ。それも他ならぬ自分の失態という切っ掛けで。

「後悔も、罪悪感もあるだろう！ でもあの人の傍に立ったからには、せめてそれに相応しい存在になつてみせろ!! チルツチ・サンダーウィツチ!!」

その悲鳴にも等しい叫び声に、胸が締め付けられた。

チルツチがノイトラの従属官に決定した今となつては、セフィーロの立場では幾ら足掻こうがどうしようも無い。

彼女の今抱いている感情は想像を絶する。にも拘らず、彼の為になるならば、とライバルにまで助言を与えるその姿に、チルツチは心打たれた。

「……言われずとも……!!」

彼女は覚悟を決めた。他ならぬ想い人の為、そして断腸の思いで身を引いたセフィー口に認められる様に。

「あたしを誰だと思つてやがる! これでも元第5十刃! グリムジョー程度捻り潰せる様になつてやるに決まつてんだろ!!」

「ハッ! グリムジョーとは大きく出たな!! あの人は一撃で、それも寸止めで沈ませ掛けたぞ!!」

「だつたらあたしは一睨みで沈めてやる! 指を啜えて見てろアバズレ!!」

「吠えたな糞雌! 精々今回みたく情けない姿で此処に運ばれて来ない事だな!!」

両者共に肩で息をしながら、互いを睨み合う。

———どれ程の間そうしていただろう。

やがて自身の涙を白衣の袖で拭い、何時もの柔らかな笑顔に戻ったセフィー口はその場から踵を返した。

「…さつき探査神経で確認しましたけど、今ノイトラさんは第5十刃の宮に居ますねえ。今日のところはもう動かないと思いますよ」

治療室の中にある自室の扉の前まで移動すると、何時もの口調でそう言い残し、そのまま自室へと消えて行った。

残されたチルツチはベッドの傍に立て掛けてあつた自身の斬魄刀を握ると、治療室を後にした。

「…お節介な奴」

その顔は憑き物が取れたかのように晴れやかで、憑依後に覚悟を決めたノイトラと同じ目をしていた。

自室へと入った後、セフィーロは盛大に溜息を吐いた。  
その表情には、先程まで浮かんでいた筈の悲しげなものは一切感じられない。  
あるのは只の疲労感のみ。

「はあ……本当に面倒な子」

何時もの間延びした口調は何処へやら。

涙で濡れた目元を、袖で至極気怠げな動きで拭いながら、そう呟く。

この態度からして丸判りだが、先程までチルツチに対して見せた態度は全てが大嘘。  
俳優を目指しても良い程の迫真の演技であった。

「けど——これであの子も此方の手中」

——実にチョロイ。

セフィーロはそう内心でほくそ笑んだ。

仮面の名残で隠れている為に確認出来ないが、その口元は確実に吊り上つている事だろう。

目付きで直ぐに判った。

そんな彼女に、横合いから何か差し出された。

それは白く細い綺麗な手に乗せられた濡れタオル。しかも微温湯に浸けたのか、ほんのり温かい。

手の持ち主は、数年前から同じ部屋で同居している雑務係の破面——ロカ・パラミア。

「……これで拭かれた方が、目に優しいです」

「ん、有難うロカちゃん」

セフィーロは御礼を言いながら微笑むと、顔を上に向け、受け取ったタオルを目元に乗せた。

あゝあゝ、と何処か温泉に入った直後のオッサンの如き声を出し始める彼女に、ロカは不意に問い掛ける。

「…何故、チルツチ様に対してあの様な事を？」

「んんん？ さあ、何ででしょうかね」

恍けた声でそう言うセフィーロは、乗せていたタオルを取る。

視界に入ったのは、“今の状態”になる前から好きだった水玉模様の壁紙が一面に張られた天井。

セフィーロは不意に、想い人の事と自分自身の過去を思い返す。

何時からだだっただろう。気が付いた時には既に、この想いは心の奥底の部分まで根を張っていた。

今思い返しても具体的な時期は不明のままだ。

ノイトラ・ジルガと関わりを持ち始めた切っ掛けは、ある時突然彼が瀕死の状態に従属官のテスラに支えられて治療室の扉から現れた時だ。

何故か傷は全て塞がっていたが、既に血を大量に流していたのだろう。その顔色は青白く、目は虚ろで視界が定まっていなかった。出血過剰による貧血症状を見せていた。

それに加えて極限まで消耗した体力と霊圧から、一刻を争う危険な状態であるとセフィーロは即座に察した。

テスラの話によれば、ここのところ最近の無茶な鍛錬が祟り、先程の任務内で少なく無い怪我を負ったそうだ。

セフィーロは困惑した。彼女が事前に持ち得ていた「知識」とは大きく掛け離れた行動を取るノイトラに。

——何だ、無茶な鍛錬とは。

そこまでして己の身を削ってまで強さを求める程、彼は努力家だったか。

断じて違う。鍛錬で地道に力を付けるより、他者を蹴落とす事で自分が強くなったという状況を無理矢理作り出す様な最低な男だった筈だ。

哑然とするセフィーロに対し、どんな手を使ってでも彼を治療して欲しいと懇願するテスラ。

だがその日は運悪く物資の補給の前日であり、現時点での治療室の設備と道具では満足に治療が出来ない可能性があった。

治療長という立場上断る訳にもいかず、止むを得ず彼女は口力に人払いを頼み、自室で秘匿していた自身の能力を使つての治療を行う事にした。

そこで彼女は自身の失態を悟る。何とノイトラは致命傷レベルの怪我を負いながら、確固たる意識を残していたのだ。

瞬く間に怪我を完治させた能力を見て驚愕の表情を浮かべる彼の傍で、セフィーロは

内心で恐怖を感じていた。

もしもこの能力を周囲にばらされでもすれば、そしてそれを脅迫の材料に何を要求されるのかと。

——いつその事、何かをされる前に消すか。

セフィーロは不意にそんな考えを抱いた。

デメリットはあるが、丁度その手段は持ち合わせているのだから。

だがその心配は無用だった。何とノイトラは特に追及する様子も無く、普通に頭を下げて礼を述べたのだ。

セフィーロはこれにも驚愕した。彼女の中ではノイトラ・ジルガという存在は誠意ある行動を取る様な人物では無いからだ。

固まったまま動かない彼女を放置し、完全回復したノイトラはベッドから立ち上がり、そのまま大人しく治療室を出て行った。

次も宜しく頼むと言い残し。

以降も彼は最後に言い残した言葉を体現するかの様に、定期的に治療室を訪れた。毎回少なく無い怪我を負いながら。

狙っているのかと疑う程、そのタイミングは何時も補給前日か道具が不足している時で、済し崩し的にセフィーロが自身の能力で治療するのが通例となっていた。

他の破面はノイトラを怖がって近寄りもしないし、唯一彼を恐れない口力を助手にしてもそれは変わらなず。

最終的に——彼女は諦めた。自分以外にはこの人を治療出来無いのだと。

やがて普通に世間話が出来るまでにコミュニケーションを重ねたセフィーロは、不意にノイトラへと質問してみた。

何故第5十刃である貴方が此処までして自分を追い込むのか、と。

思えばその時の返答が、彼の事を気にし始めた切っ掛けだったのかもしれない。

——自分には謝らなければならない者が居る。

その為には強さが必要不可欠なのだと、ノイトラは静かに、そして悔いる様にして語った。

セフィーロは戸惑った。

“知識”の中でのノイトラは、更なる戦いを引き寄せる為に強さを求めていた。なのにこの在り方は何だ。全くの真逆ではないか。

やがてセフィーロは認識を改めた。彼は別人だと。

そしてそう零した彼の横顔が、“今の状態”より前の記憶にある“彼”と重なった。顔も、身体も、種族も、世界も違う。だが彼はどうしようも無い程に、似ていた。

その日を境に、セフィーロはノイトラに対する態度を改めていった。

やがて付き合いを重ねる度、気付けばその感情が恋情へと、そして愛情へと変化していった事に、セフィーロはこれ以上無い程に遅れながら自覚したのだ。

同時に口力も、とある理由からノイトラに悪印象しか抱いていなかったのだが、徐々に認識を改めていった。

「んふふ〜」

「セフィーロ様？」

向かうところ敵無しだった、一介の大虚だった頃の時代。セフィーロはある日突然自分の前に現れた藍染に勧誘され、彼の傘下に入った。

そしていざ崩玉を用いて破面化してみると——想定外も良い結果になった。

大虚だった時に所持していた戦闘能力の一切が失われたのだ。最下級大虚なら片手で投げ捨てられる程だった身体的スペックも、息をする様に放っていた射程範囲内の尽くを灰燼に帰した虚閃も、自身の半径五百メートル以内の範囲の事象ならば即座に察知出来た第六感も、全てだ。

その時の落胆した表情の藍染。恐らく自身の不完全な崩玉が原因とでも考えていたのだろう。

あのチートの象徴とも言える男を欺いたという事実には、今も思い出しただけで笑みが零れる。

セフィーロ自身、主な戦闘能力を失った理由は理解していた。

と言うか、彼女は力を失ったのでは無く、破面化と同時に意図して別の場所へ全て移動したのだ。

残した能力は、全て補助系統に特化したものばかり。だがそれは戦闘に関する適性が極端に低くなっただけで、別に戦えない訳では無いのだ。

現に今の状態でも霊圧に物を言わせた遣り方をすれば、十分な威力の虚閃や虚弾を放てるし、鍛錬を積み重ねれば響転だって再度習得可能だろう。

「何でも無いですよ。大丈夫大丈夫、私達の不利益にはならないから」

「はあ…」

口調を戻したセフィーロは、ロカにそう返す。

ロカは表情を変えぬものの、その意図が理解出来無いのか、首を傾げていた。

「さてさて、ちょっとスッキリサッパリしてきましょうかね」

やがてセフィーロは浴室へと向かって歩き始めた。  
ロカは視線でその後を追う。

「……ノイトラさんの為に、これから頑張つて頂戴ね……チルツチちゃん？」

セフィーロが何かを囁く様にして呟いたまでは判つたが、中身までは良く聞き取れなかった。

だが彼女のその後ろ姿に、ロカは何とも言い難い妙な寒気を感じていた。

気付けばノイトラはベッドから跳ね起きていた。

呼吸は乱れ、前に突き出されていた手は汗ばんでいる。

「…何だってんだ」

理由は只夢見が悪かった、それだけに尽きる。

まあ致し方無いと言える。何せその内容はノイトラ・ジルガに憑依する前の  
■ ■ ■ ■ ■  
だった頃の記憶。

それも人生が大きく狂った切っ掛けとなる、あの出来事とくれば言わずもがな。

今更だ。もう関係無いのだ、その頃の記憶など。

あの時自分が取った行動に後悔は無い。でなければ “彼女” の人生が終わっていた  
のだから。

自身を犠牲に誰かを救う。それを成した結果、自分は身体一つで社会の荒波の中に放  
り投げられる形になったが、その心は晴れやかだった。

小説の中で稀に自己犠牲に酔う、と表現されているのを見た事があるが、納得だ。成  
る程、確かに甘美なものである、この極めて身勝手な達成感は。

それに高校を退学になったのは悪い事ばかりでは無いと思っていた。

退学時に嘘を鵜呑みにして散々罵倒して来た同年代の連中よりも、一足先に大人の道

へと近付けたのだから。

大人になる。随分漠然とした言い方だが、その時の彼としてはこう考えていた。

自分の行動に責任を持ち、結果として生まれた過ち等を認められる様になる事だ。

きつと自分を陥れたアイツは今頃社会に出て苦労しているだろう。例えば始めは上手く行つたとしても、後々痛い竹箆返しを食らう事になるのは確実だ。

社会とはアイツの様な能天気な脳味噌を持つ人間が考える程甘いものではない。

— そう想像しただけで、そのアイツに対して抱いていた恨みも大分薄れていったと——  
— そう思っていた。

にも拘らず、これだ。

過去の光景を振り返り見せられたせいで、その憎しみが再び返したのだ。

それは消えた様に錯覚していただけで、心の奥底では未だに残留していたという事に  
他ならない。

—— その程度で大人に近付いたと思ひ込んでいたとは、笑止千万。

ノイトラは過去の自分を卑下した。

「ホント、俺もまだまだ餓鬼だな……」

「そんな事……無いわよ」

「っ!？」

独り言の筈が、まさか外部から反応が返ってくると予想外だった。ノイトラは弾かれる様にして声の方向——自室の入口を向いた。

「オマエ……」

「聞いたわよ、テスラの件」

「っ……そうか」

チルツチはノイトラの自室の扉を閉めると、そのまま凭れ掛かる。顔を俯かせ、暗い声で語り掛けた。

「……あんたは、それで良いの?」

「当たり前だ」

「っ!」

「アイツが選んだ道だ。俺の事とか全部ひっくるめて考えた結果の……な。今更どうこう言う気は欠片も無えよ」

迷い無き即答。それだけで、ノイトラとテスラの間の絆の深さが手に取る様に分かった。

チルツチは後ろに組んだ手が震えるのを感じた。

解っていた筈である。だがやはりそのショックは大きい。

距離は関係無くとも、互いを理解し合えるその繋がりに羨望した。

そしてその余りにも遠い目標に、心が折れそうになる。

セフィードにあれだけ言つて置きながら、何と情けない姿か。

彼女は自分の代わりまで涙を流してくれた。なのに自分ときたら先程から視界がぼ

やけて仕方が無い。

「だから——今度は俺達の番だ」

「え?」

今彼はと言つたか。チルツチは自身の耳を疑う。

俺だけなら解る。だが達、とはどういう訳か。

この馬鹿な自分の事を含めて言っているのか、と。

口を半開きにしながら、チルツチは次の言葉を待った。

「今迄色々とおんぶに抱つこだったからな。アイツが安心してハリベルのところで働ける様、自立しなきゃならねえ」

「そ…そう」

「だからよ、これから宜しく頼むぜ…チルツチ」

「——！！」

その一言に、チルツチの心情は先程とは一転。罪悪感も葛藤も、何もかも全てが払拭された。

——そうだ、彼は何時も前を向いていたではないか。

時折儚げに何かを考える仕草は見せても、次の瞬間には何時ものしかめっ面へ戻る。その切り替えの早さのせいで、以前までは一体何を背負っているのか全く読む事が出来無かった。

辛うじて解つたのは、十刃落ちの三人との稽古の他、恐らくは見えないところでもより過酷な鍛錬を自分に課している事ぐらいか。

本当に自分とは目指しているものが違う。

こちらが山頂を目指して歩んでいる内に、彼は既に空へと舞い上がっているのではないか。そう思える程に。

「う…うん、うん！　そこまで言われちゃ黙つてられないわ!!　このチルツチちゃんにまっかせなさい!!」

頼られている。信頼を寄せられている。他でも無い、想い人に。

そう理解した瞬間、チルツチは顔に熱が集中するのが判った。

——きつと今、自分の顔は他人に見せられる様な代物じゃない。

チルツチは勝手に動く表情筋からそう推測する。

間違い無く真つ赤に染まり、ニヤけているに違いない。

彼女は顔を横に逸らし、ワザと大きな声で尊大な態度を取る事で自身の照れを隠した。

普段通りのノイトラであれば、彼女の尊厳を気遣つて見て見ぬフリをしつつ、軽く相槌を打つて終わっていただろう。

だが運悪く、今は夢見の悪さの影響で、やや精神的余裕を欠いていた。

故にこの時の彼が着目したのは照れ隠しの様子では無く、斜め上な方向のものだつ

た。

「…オマエ結構餓鬼くせえ反応すんのな」

「つて…ああ？ いまなんつったコラ？」

「だからオマエ結構餓鬼くせえ——つておいしいい!? 何斬魄刀抜いてんのオマエ

!!?」

「はじめにフオローしてやったのにその言い草かよ!! 搔つ斬れ // 車輪鉄燕<sup>ゴロンドリーナ</sup>” あああ

!!!」

「ばっ…! 此処で解放なんてしたら——」

「知るかよこの鈍感野郎! そのまま死ね! 絶対死ね! 死んで更に死ねえええ!!」

「意味解んねえええ!!?」

この日、第5十刃の拠点の宮の三分の一が瓦礫の山へと化した。

修復に掛かった時間は大凡一週間。その間、其処の住人は治療室に匿ってもらったらしい。

風の噂によると、この後日、とある十刃の一人が従属官である小柄な女性の首根っこを掴んで引き摺り回し、虚夜宮内の雑務係の破面達に謝罪して回ったとかそうでないと

か。

## 第七・五話 三日月の現在と黒歴史と…

虚の身体というのは不思議の塊である。それだけに限らず、死神や一般的な魂魄にも言える事だが。

霊体故に、その身を構成しているのは兆を超える数の細胞では無く、無数の霊子の集合体。

死した後の肉体は欠片も残らず霊子となって自然分解され、大気に溶け込んでゆく。現世の生物、そして尸魂界の霊力を持つ者達のように、水や食糧を必要としない。代わりに他の魂魄を喰らう事で全て事足りる。

当然、栄養バランスなどという概念も無く、それでも常に肉や骨や臓器を平常に保ち続けていられる。

怪我を負えば傷口から赤い血を流す。汗も流れるし、涎も涙も出る。

「ゼエ…ヒュー…ヒュー…」

全く以て生物としての原理が不明だ。

破面化した後は幾分か人寄りになったとは言え、それでもまだ謎は残っている。

今もこうして大量の汗を流しているのに、一向に身体中の水分が枯渇する様子が見えない事なども含めて、だ。

—— 本当に不可解で、気色悪い生き物だ。

ノイトラは危うい音を出す自らの呼吸を気にも留めず、内心で吐き捨てる。

実を言えばその理由も大凡は見当が付いている。呼吸の中で大気中の靈子を取り込み、体内で水分を構成して補充しているのだろう。

現世を除く、尸魂界と虚圏などといった死後の世界では、万物が全て靈子で構成されている。つまり水も靈子なのだ。

一見道理に適っている様で、全くそうでは無いぶっ飛んだ在り方である。

元々彼は憑依前は頭は良い方では無かった。

何事も身体で覚える派で、理屈で理解するよりも慣れが基本。感性は柔軟で、基本的に道理さえ通っていれば肯定する。そんなスタンスだった。

だがそんな彼でも、虚という生物の原理に関しては受け入れる事が出来無かった。

考えれば考える程出口の無い迷宮の中へと足を進めるばかりで、何時しか彼は理解する事を諦めた。

「……ゼ……ヒュー……まだ……だ……!!」

今のノイトラは帰刃形態。それは六本に増加した腕のみならず、首から下の上半身全てが節足動物を思わせる装甲の様な物に覆われるという、更なる進化が見られた。

その状態で鍛錬の最終段階である疑似戦闘を行っている最中だ。

仮想敵は勿論、我等がラスボス、藍染惣右介。

彼はイメージする。斬魄刀の能力も絶大だが、それを除いても全てに於いて超絶的な能力を持つ最強の敵の姿を。

破面化が成功した者は共通して何かをイメージする能力に長けている。

それは技の構成だったり、自らの能力の理想の形だったり、偶像だったりと多々に亘る。

でなければ頭が良いとは思えないグリムジョーやヤミーが響転やら虚弾を習得出来るものか。

それはノイトラも例外では無い。加えてアニメや漫画といった娯楽関連にある程度通じていた御蔭か、そのイメージはより鮮明で確立したものとなっている。

「……く……そつ……! ……これでも……未だ足りねえか……!!」

目標とは基本的に自分より高く設定するのが常だが、ノイトラの場合は余りに高過ぎた。

例えるなら、冒険を始めたばかりの勇者がラスボスの魔王どころか、この世界を創り上げた神を目指している様なものだ。

眼前には笑みを浮かべて佇む藍染。戦闘を初めてもう三十分は経過しているが、未だに一太刀も入れられていない。

その六本の腕を巧みに操り、手数を増やしたとしても、一向にそれは変わらない。

それどころか一分毎に一回は死んでいる。懐に入られた瞬間、咄嗟に六本の内四本の腕を防御に回してもそれごと断ち斬られるイメージしか浮かばない。

埒が明かないと判断したノイトラは次の一撃で鍛錬を終了する事にする。

猛者の余裕か、眼前に自然体で佇む藍染。彼に向けて、その六つ全ての手に握られた大鎌の頭を向ける。

消耗レベルから判断するに、これで完全に打ち止めだ。もしかすると倒れるかもしれない。

そう考え、離れに退避しているであろうチルツチに呼び掛ける。

「聞こえてんだろチルツチ!! 後は頼むぞ!!」

彼女の返答を待たずして、最後の氣力を振り絞り、全身の隅々から残った靈圧を有りつ丈集束。其々の鎌に均等に振り分ける。

ちよつと待ちなさいよ、という声が遠くから聞こえた気がするが、無視する。

黒い靈圧の渦が鎌の頭に生成される。その渦の形だけ見れば普通の虚閃の発射時と変わりは無い。

だがその色から判る通り、込められた靈圧量と集束密度はそれを遥かに凌駕していた。

——セイス・ゼロ・オスキュラス  
六連・黒虚閃。

帰刃形体の十刃のみが使える最強の虚閃、黒虚閃。王虚の虚閃すら上回る威力と速度を誇るその技は、同じ十刃すら直撃は絶対に避ける事を選択する程。

十刃の中でもウルキオラしか真面に放った描写が無い黒虚閃だが、それは全開状態の黒崎一護を一発のみで満身創痍にまで追い込んでいる。

それを複数発射という荒業を成し遂げたノイトラの凄まじさは推して知るべし。例え藍染でも直撃すれば無傷では済まないだろう。

六つの黒い極太の虚閃が一つに重なり、更に増幅。且つ虚弾にも匹敵する凄まじい速

度で藍染の偶像へと迫る。

だが直撃を確認しない内に、突如としてノイトラの視界が暗くなり始めた。

「限界…か…」

鍛錬時に消耗が激し過ぎた場合に良く起きる、極度の疲労と靈力の枯渇から来る気絶だ。

その症状に合わせる様に、既に放出された分を除き、黒虚閃が発射地点から一気に掻き消える。

本人の意志とは裏腹に帰刃形態が解除され、力の核が見慣れた斬魄刀の姿へと戻る。全身から力という力が抜け、地面に膝を着く。

何とか斬魄刀を支えにして転倒を逃れんと足掻くが、もはや柄を握る力すら残っていない。

「やつぱ…アレ」を習得しねえと駄目か…」

その一言を皮切りに、意識が暗転する。

直前、最後に視界の端に映ったのは、泣きそうな表情を浮かべたチルツチが何かを必死に叫びながら駆け寄ってくる姿だった。

——その眼前に映るのは、懐かしい過去の光景。

ノイトラ・ジルガに憑依して間もない、目的の為に只管我武者羅に動いていた頃のものの。

その日、珍しく藍染から召集を受けたノイトラは、彼の自室までの道のりを歩んでいた。

背中に背負っているのは、先端に三日月の刃一つが付いただけの大鎌。

彼の背後にはもう一人、従属官のテスラが付かず離れずの距離を保ったまま追従していた。

その表情は何処か不安を抱えてる様に見受けられる。

「…ノイトラ」

「何だ」

「大丈夫なのか？ お前…明らかに普通じゃないだろう」

それはノイトラの足の動きを見れば自ずと判断出来た事だった。

先程から不定期なタイミングで左右に行き来しているのだ。終始後ろから観察していたテスラはノイトラと集合した時点で既に気付いていた。

だが当人は沈黙を続け、頑なに隠し続けている。故に口出ししようにも出来なかったのである。

会話は一つも無く、時折ノイトラの斬魄刀の柄が通路の壁に当たる音が繰り返し響き渡る中、我慢の限界を迎えたテスラは遂にその均衡を破った。

その呼び掛けに、ノイトラは一時的に歩みを止めて振り返る。

瞳の色は黒く濁り、顔色もやや悪い。

正面から見ると上体も僅かに揺らいでいる。

テスラは途轍もない不安に襲われた。

恐らく藍染の召集は何時もの最上級大虚の搜索任務だ。

最上級大虚はその強さから他の虚達を従う事が出来、それを中心にコロニーを形成して集団で行動している場合が殆どだ。

別に最上級大虚に限らず、中級大虚にも拘らず抜きん出た力を持つ個体の場合でも同様だ。というか、任務内で探索を命じられるコロニーは大半がこちらのパターンだ。

虚圏という広大な世界に於いて、現存する最上級大虚の個体数は十にも満たないだろう。下手すれば更にそれ以下かもしれない。

そんな貴重な存在を、藍染は欲している。自らの陣営の戦力強化とは謳っているが、何処までが本気なのか解らないが。

「今回の藍染様の召集も、間違いなく新たに発見された集落の調査だろう。最下級大虚ならまだしも、中級大虚の集団に遭遇でもすれば——」

「別に、問題無えよ」

「…お前の強さは知っている。だが流石のお前も、その有様では隙を突かれる可能性だってあるかもしれない」

「……………」

「っ…ノイトラ！」

「黙れテスラ！ 何度も言わせんじゃねえ!!」

通路全体へ響き渡る怒声に、テスラは反射的に身構える。

彼のその反応を見た瞬間、ノイトラは舌打ちした。

続けてぼそりと何かを呟くと、完全に背中を向けて通路を進み始める。

——殴つて来ない、だと。

予想とは違つた行動を取るノイトラの姿に、テスラは暫しの間硬直した。

有り得ない。そして信じられない。

ネリエルが行方不明となつた日から様子がおかしくなつたのは解つていた。

だが今の反応は何だ。特に最後に言い捨てた台詞。

——済まねえ、テスラ。

間違い無く、確かにそう言った。

あろう事か自分に謝罪したのだ。あのノイトラが。

ふと気付けば、ノイトラとの距離は百メートルを超えていた。

テスラは慌てて追い始める。

「ま…待てノイトラ！ せめて俺は連れて行け！」

テスラ抱いた疑問は最もだった。理由は今迄の経験則である。

以前にも同じような場面は幾つかあった。心配性なテスラは何時も無謀な行動を取るノイトラに色々意見する事は多く、その度に不興を買っていた。

通常であれば最後の怒声の時点でノイトラは怒りに任せてテスラを殴り飛ばすか、斬魄刀を突き付けて脅すかの二択になる。

だが憑依の影響で中身が丸ごと一変したノイトラは違う。

先程は精神的余裕が無い状態だったせいでの感情のようになったが、自身の事を思っ意見をしてきたテスラに対して手を上げる気は一切無かった。

それ以降、自身の愚行を反省したノイトラは、藍染の元へ到着するまで一度も口を開く事は無かった。

内心で申し訳無いとは思いつつ、未だに粘り強く声を掛けて来ていたテスラの事は無視した。

「……いっしょに」

やがて目的地である藍染の自室へと到着すると、ノイトラは室内の中心部に視線を移

す。

配色は白一色と単純で、アーティストが手掛けた様な個性的な球状の椅子が、其処には有った。

その椅子に腰掛けた男——藍染惣右介は何時も通りの薄笑いを浮かべ、柔らかな声で言った。

「待っていたよ、ノイトラ」

彼と目を合わせた瞬間、ノイトラの背筋が凍り付いた。

脳裏に浮かんだのは光一つ無い漆黒の闇、そしてその中心には一人で立ち尽くす藍染の後姿。

次に感じたのは精神に直接伝わってくる感情の嵐。

辛うじて分類出来たのは、孤独、葛藤、渴望、嫌悪、好奇心、絶望、そして憧憬。規則性も無く、混ざり合ったそれはノイトラを精神を散々に掻き回した後、跡形も無く消え失せた。

「さて、予想出来ているとは思いますが、君にはとある場所の調査を頼みたいんだ。つい最近

発見されたばかりの新しいコロニーをね……」

脱力して膝を着きそうになる身体、普段の倍速で動く鼓動、詰まった呼吸、背中を濡らす冷や汗。ノイトラはそれ等全てを悟られまいと全力で抑え込む。

そんな彼の状態を知ってか知らずか、不意に笑みを深くする藍染。

ノイトラは話が終わるまでの間ずっと、自分の全てを見透かされている様な、そんな錯覚を覚えていた。

——其処で場面が一気に切り替わる。

場所は虚夜宮から一転し、虚圏の砂漠地帯。それも五階建てアパート並みに大きな岩、というか山を中心に、更に無数の岩が複数取り囲んでいる場所。

見ればそのアパート並みの岩には三メートル台の無数の穴が規則的に開いており、生活臭がしていた。

それもその筈、此処は先程藍染から調査を任された虚達のコロニーなのだから。

「……ク……ソ……こんな……ところで……!!」

その中心部に、ノイトラは居た。だが様子がおかしい。

現在彼は無数の虚達に囲まれており、斬魄刀を杖に何とか立っているという状態。

第8十刃となった時から既に、歴代十刃最高硬度の鋼皮の片鱗を見せていた筈の彼の身体には無数の切傷や裂傷が溢れ、出血によつてその足元の砂が真っ赤に染まっている。

その顔は苦痛と言うより、たかが有象無象の虚達の前に劣勢となつている事の悔しきで歪んでいる。

そんなノイトラの前に、一匹の虚が現れる。

周囲の虚達よりも小さく、両手両足が鉈の様になつている人型で猫背の中級大虚らしき存在。

その中級大虚は満身創痍のノイトラに対して勝ち誇つた様な笑みを浮かべて、言つた。

「しぶてえ奴だ。でもまあ…これで終わりだよ兄弟」

精々俺様の糧且つ駒として役立てや、と言つて大笑いを始める。

それに続いて周囲の虚達も笑い始めた。

結論から言うと、元々このコロニー全体が、この中級大虚が獲物を引き寄せる為に

張った罫だったのだ。

まず初めに現場へと到着したノイトラとテスラは、周囲を警戒しながら探索した後、いざコロニーの内部へと侵入した。

そのまま順調に中心部まで移動したまでは良かったが、直後に死角から襲撃を受けたのだ。

確かにその襲撃を仕掛けて来た虚は自身の霊圧を抑えており、こちらに察知されにくい手法を取っていた。だが普段の二人なら十分気付けていたレベルだった。

なのに何故察知出来なかったのかというと、ノイトラは初めから消耗が激し過ぎたが為、テスラはそんな彼を気遣うが余りに周囲への警戒が疎かになり、まんまと不意討ちを許してしまったのだ。

負の連鎖は続き、その不意討ちを皮切りに次々に現れる無数の虚達。その割合は、ヒュージ・ホロウ巨大虚五割、最下級大虚四割、中級大虚一割といった感じだ。

しかも虚達は只々襲い掛かって来ている訳では無く、明確に徒党を組んでの戦いを行っていた。

それは巨大虚と最下級大虚が無差別に襲い掛かり、その間に生まれた隙を中級大虚が突くといった非常にやらしい戦法。

その統制された動きは、明らかに何者かの指揮が無ければ不可能な芸当だった。

だが其処で更にノイトラは疑問に思った。

——余りにも機械的過ぎる。

先程から虚達を何匹も返り討ちに行っているのだが、一向に怯む様子を見せないのだ。それどころか、その仲間が死ぬ事を前提に考えたかの様な動きも中にチラホラ見られる。

例えるなら、まるで将棋かチェス。

駒を多数失ったとしても、敵の頭を取ればさえ勝利出来る。そんな棋士が取る様な戦法を、虚達から感じたのだ。

戦闘開始から十分程経過した頃、ノイトラは其処で初めて己が失態に気付いた。

何時の間にかテスラと分断されていたのだ。一応、まだ目を凝らして見える位置には居るが、互いの援護は恐らく期待出来無い。

思わず舌打ちした次の瞬間——突如全身から力が抜けた。

無茶な鍛錬の影響が今更来たのだ。

突然過ぎる出来事に動揺するノイトラ。だが虚達は動きを止めない。

そして遂にノイトラの身体から鮮血が舞う。動きが止まったところを、背後からの鋭利な爪の一撃で背中を切り裂かれたのだ。

戦場に於いて、焦りは禁物とは良く言うだろう。だが自身の想定を超えた事態と対面

した場合に平静を保てる事の方が少ない。

ノイトラもそうだった。内心では落ち着きを取り戻そうと必死に念じるが、一向に焦りが消えない。

幾つもの浅く無い怪我を負いながら何とか立ち直したものの、やはり先程より動きは鈍い。

次第に呼吸も乱れ、同時に血も流れ出てゆく。

——このままではマズイ。

そう考えたノイトラは帰刃を選択し、一度虚達から距離を取ろうと、悲鳴を上げる身に鞭打ち、響転でその場から跳ぶ。

近くの岩の上まで移動し、いざ解放せんと斬魄刀を掲げた——その時だった。

「はいぎんねくん！」

「なっ——ガハッ!!」

背後から声が聞こえたかと思うと、気付けばノイトラは腹部を刃で貫かれており、それが引き抜かれると同時に岩の上から蹴り落とされていた。

砂がクツシヨンとなった御蔭で落下ダメージは無いが、その直前に食らった不意打ち

が余りに大きい。

先程までの乱戦で負ったものをカウントすると、寧ろ怪我が無い部位が少ないのでは  
と思える程の重傷。明らかに戦闘続行は不可能だった。

だがどうあつても今死ぬ訳にはいかないノイトラは齒を食いしぼり、斬魄刀を支えに  
何とか立ち上がると、下手人を睨み付けた。

「いや、中級大虚かと思いきや、予想以上の大物が掛かつてるとは予想外だったぜえ  
！」

「何…だ…テメエは？」

「俺か？俺はバスター・テイラール。てめえを喰らう男だよ兄弟」

名乗りの直後、バスターの周囲に無数の虚達が何も無い場所から浮かび上がる様にし  
て現れる。そして即座に消えると、また現れ、消える。それを何回も繰り返す。

その異様な光景に、ノイトラは思わず目を見開いた。

バスターは自身の両手の刃に付いた血を払うと、ケケケ、と怪しい笑い声を出しながら、  
悠長に語り始める。

「驚いただろ？これが俺の能力、死<sup>アルマ</sup>霊<sup>マ</sup>愛。いままで俺が喰った虚全てを実体化して自由に操る事が出来る力だ」

「な……に……!?!」

「二体につき動かせる時間は一日三・四十秒っていう制限はあるが、意外と霊圧は食わねえ。あとは地道に数を揃えるだけで、結果はこのとおり！ 使い勝手の良い俺だけの軍隊の出来上がりって訳よ！」

確かに便利そうだが、使い物になるまで大変な手間が掛かりそうな能力だ。

だがそれにしても、一体今迄に何匹の虚を仕留めて来たのか。

ちなみにノイトラは先程までに大凡五百以上は潰している。後テスラの方に向かっているのを百としても、既に六百。バスーラの余裕振りから見て、恐らく千は超えていると考えられる。

——アローロニーロには絶対喰わせたく無い輩だ。

ノイトラは成長チートの象徴とも言える能力を持つ同僚の事を思い浮かべながら、そう断言した。

「さて、まあ半死状態のてめえの事は後回しだ。まずはさつきから喧しいアツチの奴

を片付けるか…」

「っ!？」

バスーラのその台詞で、ノイトラはテスラの存在を失念していた事に気付いた。

咄嗟に遠方を確認すると、凄まじい砂煙を立ち上らせながらこちらへ向かって来る巨体が目に入る。

「猪突猛進…ってか？ すげえなあいつ、何匹引つ張つて来てんだ？」

「…テ…スラ…!」

帰刃して猪の巨人と化したテスラは、その身に何匹もの虚を纏わり付かせながらも足を止めない。

時折その虚達を殴り飛ばし、ノイトラへと必死に何かを叫びながら。

「ま、とりあえず殺つとくかー」

そう言って、バスーラが両手の刃を地面へと突き刺した直後、彼の周囲に四匹の中級

大虚が姿を現す。

先程大虚以下の虚を出した時はそんな動作は無かった。

刃を抜いて立ち上がると、気怠そうに大きく息を吐いている事から推測するに、自分と同格の虚を出す場合は幾らか霊圧の消耗が激しいのだろう。

バスーラはそのまま中級大虚達をテスラへと差し向けた。

帰刃形態とはいえ、流石の彼でも複数の中級大虚が相手では分が悪過ぎる。

ノイトラは焦る。だが身体は全く動かず、何も出来無い。

——まさか、本当にこんなところで終わりなのか。

斬魄刀を握る手が緩み始める。

背中を中心に寒気が急激に襲い掛かる。

視界はぼやけたり、四方八方に揺れ始める。

迫り来る死の感覚が、徐々にノイトラの精神を追い詰めに掛かる。

別に此処で死んでも別に良いのではないかと。

元々この憑依自体がイレギュラーだったのだ。この物語に最後まで付き合う必要は無いではないか、と。

死の間際に、ノイトラの中でそんな悪魔の囁きが次々と浮かび始めた。

気を抜けば最後、一気に引き摺られてしまうだろう。それ程までに強力で、甘美な言

葉だった。

「……んな事出来るか馬鹿野郎…!!」

だが——彼は全力で拒否した。

冗談では無い、今更になって投げられるかと、その言葉を全て切り捨てる。もう決めた、誓ったのだ。己の魂の奥底にまで刻み込んだのだ。

絶対に曲げられないその思いを。

——自分自身の意思で一度決めた事は最後までやり通せ。

憑依前、高校を退学になる直前に恩師から送られた言葉だ。

「…誓ったんだよ…」

「あん？ いきなりなに言っただやがる？」

突然ブツブツと呟き始めたノイトラに、バスターは不審な目を向ける。

「確かに…ノイトラの為にここまでしてやる義理は俺には無え…けどな…」

ノイトラの満身創痍の身体に、再び新たな力が宿り始める。  
斬魄刀頼りだった体勢も、次第に自身の足で普通に立てるまでに回復する。

「…俺自身がそうしたいと思っただ。…ネリエルあいつに…もう一度会って…」  
「てめえ、一体…!？」

立ったとはいえ、未だにふら付きながら幽鬼の様に佇むノイトラ。その全身からは有り得ない量の霊圧が立ち上っていた。

その明らかに異常な様子に、バスターラは思わず後ずさる。

「…絶対…謝るってな…だから…」

「やめろ…来るな来るなくなるなああああ!!！」

バスターラは言い様も無い焦燥に駆られ、顔を恐怖に染め上げながら、大量の虚を実体化させる。

その数は千と数百。やはり余裕を出すだけは有った様だ。

「そいつを殺せええええ!!」

「…こんなところで…こんな奴の手で…」

正面、側面、背後、空中、ありとあらゆる全方位から飛び掛かって来る虚達。だがノイトラは逃げる素振りも見せない。

「俺が…俺が…俺が…ッ」

彼等が其々に持つ得物が、全身に突き立てられる直前——ノイトラは不意に己が斬魄刀を高らかに天に向けて掲げた。

見ればその先端の刃の形状は既に変わっていた。

「俺が死んで堪るかあああ!!!」

ノイトラが咆哮を上げると同時に、全身から更に霊圧が噴き出した。その余波だけで、実体化したその虚達は尽く吹き飛ばされてゆく。

「んな…馬鹿な…ッ!？」

「祈れえええ!!! 聖サンタ哭タテ螳レ娘サアアア!!!」

蹂躪が——始まった。

「…何かデジャヴ」

それがノイトラの目を覚ましてからの第一声だった。

気持ちは解らなくも無い。何せ時系列は違えど、従属官の入れ替わりが正式に済んだ三日前に引き続き、余り思い出したく無い過去の出来事を夢に見るといふ経験をしたの

だから。

「どう見ても黒歴史だろ、本当に…」

しかもだ、本来のノイトラが、自分を追い詰めた更木剣八に対して放つたのとはほぼ同じ台詞を叫んだのだ。

思い出しただけで段々と羞恥心が湧き出てくる。

無意識の内に口から出ていたとはいえ、やってしまった事には変わりはない。

ノイトラは再び目を閉じると、思考を切り替え、今の状況に至る以前の記憶を辿り始めた。

——現在進行形で胸の上を感じる温かい物体から意識を逸らしたいという意図も有ったりする。

テスラと別れを告げ、チルツチを従属官に迎えた日から間を置いた三日後。ノイトラは何時を通り自分の鍛錬の為に虚夜宮の外へと出ていた。

ちなみにその三日間は3ヶ々の巣には行っていない。何故ならある人物がチルツチの件を知って勝手に暴走し始めたらしく、顔を出した瞬間面倒事に発展しそうだったからだ。

これはガンテンバインからこっそり聞いた話だが、何やら知り合いとは言え女性の破面を従属官にした自分にドルドーニが嫉妬し、連日の様に広間で酷く暴れているのだという。

それを聞いた瞬間、ノイトラは零した。馬鹿かあいつはと。

チルツチを含め、十刃落ちメンバーの誰かを従属官に加えるというのは、元々考えていた案件でも有った。

だがその案件はメリットの他にそれ以上のデメリットを伴うものだった。

それは歴史の部分的な崩壊だ。その中途半端さ故に、次に何が起こるか全く予測出来無いという厄介なリスクを。

例えばだが、チートオリ主等が現時点で藍染を倒して封印してしまえばどうなるか。

藍染がカリスマ全開で絶対的な力を見せ付ける場面も、その後起こる副官である市丸ギンとの濃い遣り取りや、急成長を遂げた黒崎一護に倒された後に封印される最後の姿は決して見えなくなる。

残った司令塔を失った十刃達も、黒崎一護含めた護廷十三隊の隊長格メンバーのみで後はどうとでもなる。

これこそ完全崩壊。物語の展開の要でもあるラスボス不在だと確実にこうなる。

次の例だが、今度は逆に藍染以外の戦力全てを潰してしまった場合はどうか。

先程とは違い、ラスボスとなる藍染は健在。元々一人で護廷十三隊やその他諸々のメンバーを圧倒出来る彼だ。ならば別に戦力が無くとも特に問題無く物語は進むだろう。多少違いが有るとすれば、物語の展開速度の上昇と、強敵との戦闘機会を失った黒崎一護の成長不足が原因で起こり得る敗北のリスクが浮上する程度。

本来であれば、十刃落ちの三人はまず始めに虚夜宮へ侵入した主人公達と戦う。だがそんな彼等を引き抜いてしまえば、その機会は永遠に失われてしまう事となる。

そうなれば主人公達の成長率にも影響し、その僅かな差が後にとんでもない結果を生む可能性が出てくる。逆もまた然りなのだが、どちらかと言うと万が一の事を考えていた方が良い。

その為、ノイトラは考えていただけで、何か致命的なトラブルさえ無ければ何もしない考えだった。

その筈だったのだが——結果は見ての通りだ。

正直言えば、ノイトラはこれ以上の部分的崩壊を恐れ始めていた。

自分自身の力が向上しているのは良い。だがそれ以外は駄目だ、不安しか無い。

故にこれ以上の影響を及ぼさない様、主要なキャラには関わらない形で行こうと決めた。

こうして心機一転したノイトラは今のところは一先ずチルツチを伴って日々の鍛錬

に力を入れる事にした。

案の定、その内容を初めて見た時の彼女はドン引きした。

何せ素振りを千回やるだけでも相当根気が要る。にも拘わらず、ノイトラは別な形でも其々に千回以上行うのだ。その他にも多岐に亘って鍛錬の内容は分布しており、しかもそれ等全てを纏めて一セットと考え、更に複数回。そりゃあ引くに決まっている。

——見ていっただけで頭が痛くなる。

チルツチは虚ろな目でそう零すと、ノイトラとは別の離れた場所で別々に鍛錬を始めた。

彼女曰く、現在より帰刃形態の保持時間を三倍に延ばす事が目標だそうだ。

鍛錬開始から二時間は経過。一通りの鍛錬を終えたノイトラは疲労困憊の身体に鞭打って、最後に脳内で創り上げた偶像を相手に疑似戦闘を開始した。

相手は藍染惣右介。彼であれば取るであろう戦法、剣速、技術、鬼道のイメージを全く偶像に投影し、それを相手取る。

結果は言わずもがな。藍染の偶像の圧勝だ。

普段であればこの時点で鍛錬は切り上げていただろう。だがこの日のノイトラは少し異なった。

——まさかの続行である。

だがそれにはノイトラにとって絶対に無視出来無い理由が有ったからだ。

それは彼が憑依して間も無い頃、絶体絶命のピンチの中で突然劇的なパワーアップを遂げ、切り抜けた時の話だ。

その進化の際に感じた妙な感覚が有ったのだが、何とその名残を本日の鍛錬の中で感じたのである。

今より更に一ランク強くなれるかもしれない。ならば張り切らない訳は無かった。

だが結果は残念ながら途中退場という結果に終わった。

それでも今回得たものは決して無駄では無い。

解るのだ。どれ程まで自分を追い込めば、消耗すれば、再びあの感覚を得られるのかを。

——と、此処までで取り敢えず現実逃避という名の回想は終わるとしよう。

ノイトラは現実に向き合う事にした。

「う……ん……ノイトラさんの……凄く遅いです……」

「何の夢見てんだこいつ……」

ノイトラは現在ベッドに横たわっており、そのベッドはセフィーロの自室のもの。見

慣れた水玉模様の天井が何よりの証拠だ。

そして何より特筆すべきは——そのセフィーロ本人がノイトラと同じベッドに潜り込んでいる件だ。

しかもノイトラの上に重なる形で抱き着き、丁度顔が彼の胸元の位置に置かれている。

その顔はだらしなく緩み、しかも妙に鼻息が荒かった。

「ああ、そんなく……ここまできて御預けだなんて……イジワルですく……」

「……………」

「ええく……？ ……脱がないで良いって……やあん……其処は駄目ですよ……」

「……おい」

「あ……う……！ ……いきなり……なんて……らめえですうく……！」

「コイツ起きてるだろ絶対……！」

先程から漏らしているワザとらしい寝言が、時間の経過と共に段々と色っぽくなっており、口数もかなり増えてきている。

しかもセフィーロがノイトラの身体に回した腕の動きが怪しい。

両手もワキワキと効果音が付きそうな程に動き続け、舐め回す様にして彼の身体を弄っていた。

「ひやつ…そんな体勢…無理です…！」

「…俺の理性の方が無理だったの」

剩え悩ましい腰の動きを始めたセフィーロに、ノイトラの理性はガリガリと削られて行く。

無理矢理にでも抜け出せば良いのだが、そうもいかない。

それは部屋のドアに貼られた紙、それに書かれた内容に有った。

「私が自然と起きるまでにベッドから抜け出すなり何かした場合は、次からは絶対治療しません。後、監視担当はロカちゃんです…：：：勘弁してくれ…」

以前教えて貰った、ロカの帰刃が持つ能力の事を思い出す。

——どう考えても逃れられる気がしない。

ノイトラは思わず右手で顔を隠し、天を仰いだ。

きつと今後もこれと同じネタで、色々と要求されるのだろう。それも何度も。

そう考える彼の右手に隠れた目元からは、何か光るモノが線を描く形で流れ落ちていた。

——開放されたのはそれから二時間後だった。

どうやら本当に眠っていたらしい、セフィーロが起きた瞬間、彼は拳を高らかに持ち上げて自身の理性の勝利を宣言した。

ちなみにノイトラは開放された直後、即座に自室のトイレへ直行したのは言うまでも無い。

## 破面出現篇

## 第八話 三日月の原作入り

虚夜宮には大規模な会合を行う場合に使用される大広間が存在する。中央には高台、天井まで繋がった巨大な黒の支柱が二列、そして高台の前方以外を囲む形で立ち並んでおり、その中心には藍染専用の玉座が有り、丁度下の様子を隈なく見渡せる様になっている。

その大広間は別名、玉座の間とも呼ばれ、実を言えば玉座の更に奥にも続きが有り、其処には虚圏から現世や尸魂界に赴く際に利用する出入口、黒腔ガルガクタが開ける様になっている。

室内には現在、藍染と副官二名を除いた、虚夜宮に存在している十刃達を中心にした主力メンバー全員が集結していた。

普段は互いに協調性も無く個々でバラバラに行動している彼等だが、今回ばかりは皆同様に高台を正面から見上げる位置に並んで立っている。

「面倒くさくなってきたぜ……本当にな……」

第1十刃、コヨーテ・スタークは何時もあり気怠げな表情で、稀に欠伸をしている。彼の隣にはリリネット・ジンジャーバックが落ち着かない様子で頻りに周囲を見渡していた。

「スターク、その面構えを止めい。不愉快じゃ」

王冠のような仮面の名残を着け、右目付近や左頬などに傷がある老人、第2十刃、バラガン・ルイゼンバーンは相変わらずの王の風格をこれでもかと思わせ付けながら、無数の骨で組立てられた玉座に腰掛ける。

その後ろでは現十刃最多の六人の従属官達が規則正しく整列し、片膝を着いている。

「…後で指導だな」

第3十刃、ティア・ハリベルは腕をその乳房の下に隠す様に組み、毅然とした態度で佇む。

その後ろでは流石に場所が場所の為に弁えているのだろうが、小声で言い争う四人の

従属官達が居た。

「……………」

第4十刃、ウルキオラ・シファアは死神のそれに似た白い死覇装を身に纏い、その袴の側面の隙間へ両手をつつ込み、瞳を閉じて静かに佇んでいる。

「…チツ」

第6十刃、グリムジョー・ジャガージャックは現在進行形で隣の人物にガンを飛ばしているが、それ以外は大人しく所定の位置に立っている。

彼のバラガンに次ぐ数の従属官達五人は、胡坐を掻いたり腕を組んだりと其々に楽な体勢で並んでいた。

「遂に始まるのですね…藍染様」

坊主頭に無数の棘を生やし、そして耳に鬪髀ピアスの様な仮面の名残を見せる黒人男

性、第7十刃、ゾマリ・ルルーは終始沈黙を保ちながら、中央の玉座に熱い視線を送り続けている。

「やはり君は何度見ても興味深いね。今度暇な時に時間をくれないかい？」

第8十刃、ザエルアポロ・グランツは舐め回す様な不快な笑みを浮かべながら、隣の男を観察し続ける。

「断る。そこら辺の塵でも拾って研究している」

「キット未知ノ微生物ガ沢山見付カルヨ」

その隣の男である、第9十刃、アーロニーロ・アルエリはザエルアポロの頼みに対し、二色の声で拒絶の意を示す。

互いの両袖に手を遠し、隣の男の向けて来る視線が煩わしいのか、時折貧乏揺すりをしている。

「……何で一々集まる必要が有んだよ……」

下顎骨を象った仮面の名残を着けた辮髪の筋骨隆々の巨漢、第10十刃、ヤミー・リヤルゴはブツブツと愚痴を零しながら、退屈そうに首を左右に曲げてゴキゴキと鳴らしている。

「…ハア」

そして最後に第5十刃、ノイトラ・ジルガ。

ウルキオラとグリムジョーに挟まれる位置に立ち、その顔は憂鬱感を露にしている。

胸元が大きく露出し、後ろの襟がスプーンのように縦に広がり背後の光を遮る形の白装束——といった本来の服装では無く、ウルキオラと同じ白の死覇装に身を包み、髪の長さも憑依時から肩口に掛かる程度でキープしている清潔感溢れた恰好だ。

そんなノイトラの後ろに立つのはチルツチ・サンダーウィツチ。彼女も同様に、以前の様なゴスロリファッションでは無く、ノイトラとお揃いの死覇装で、髪型は一緒だが化粧は殆どしていない。

従属官ではあるが、この場に於いては元十刃という立場から来る居心地の悪さを誤魔化す様に右手で髪を弄りながら、顔を下に向けていた。

遂にこの時が来た。ノイトラは緊張で高鳴る鼓動を抑えながら思った。

我ながら随分と苦勞したものだ、色々は無茶を繰り返した過去を振り返る。

もしも憑依対象がノイトラでは無く、漫画の話数で言えば二話程描写された後はもう二度とストーリー上に登場しなくなる脇役の破面だったなら、まず現在まで生き残れなかっただろう。

改めて思うが、その事を考えると憑依する対象の選択は悪く無かった。身に覚えの無い業を丸々背負わされた事を除けばの話のだが。

ノイトラはこの三流小説の様な筋書きを描いた神に少しだけ感謝した。

今ではもはやおぼろげな部分が多くなってしまった憑依前の記憶だが、主要部分はしっかりと覚えている。

今後の展開に備え、出来る事は全てやった心算だ。

完璧までとは行かないが、目的を果たす為の必要最低限な力も付いた自負がある。

今後の展開に対する予想と対応策の構築は粗方済んだ。

チルツチも辛うじて自分に付いて行ける程度まで登り詰めた。

セフィーロが治療長を兼任しながら自分の従属官になった。

——最後の件についてはチルツチと彼女の間で相当揉めに揉めた末に、とだけ。

ノイトラは不意に頭を持ち上げ、高台の上の玉座に視線を向ける。

今日の会合の目的、それは藍染の出迎えだ。

今迄何度もこの虚夜宮を出入りしているだろうに、何故今更と思うだろう。

それは今日この日、藍染が護廷十三隊の面々に対して堂々と裏切りを宣言し、この虚夜宮のトップとして正式に君臨する日だからだ。

虚夜宮内に存在する全ての破面達には事前に連絡がされており、約束の時間が近付いた為にこうして現十刃全員が集まっている訳である。

「…約束の時間はとうに過ぎておる。随分と悠長なボスじゃ」

バラガンが不意にそう零す。

どうやら苛立っているらしい。その証拠に、彼の後ろの従属官達は皆共通して冷や汗を流している。

「別にどつちでも良いんじゃないやねえの、来なけりや来ないで昼寝して待てば良いし……って痛あ!？」

「そりゃスタークだけだつての!!」

極めて自分本位でだらけた発言をするスタークの臀部を後ろから蹴り飛ばすリリネット。

第1十刃チームの相変わらずの平常運行。間も無く藍染が帰還するにも拘らず、緊張感の無い遣り取りをしている二人には呆れと冷ややかなの二種類の視線が周囲から向けられていた。

だが今のノイトラにとってはそれが有難かった。

二人のコントの御蔭で良い感じに緊張が解れたのか、鼓動も先程より大分収まり、無意識の内に握り締めていた手も何時の間にか開いていた。

ノイトラは音を出さずに深呼吸を数回行う。

——これからが本番、気合を入れねばならない。

藍染が動き始める目安は今日から大凡一ヶ月だ。

つまりその期間内にやり残した事、保有戦力や対応策の最終調整などを完了させなければならぬ。

ノイトラの中では前者は特に無いので、必然的に後者になる。

ある意味丁度良かったかもしれない。そう考えたノイトラは直ぐ様この残り一ヶ月の行動計画を脳内で立て始める。

まず最優先にしたのは、つい最近習得した“アレ”の事。

今ではもう普通に使いこなせる様になったとは言え、習得して未だ二ヶ月しか経過していない。

正直言つて、まだ完璧では無い。全力を出した時の霊圧の制御は未だ難しいと感じるし、力の無駄遣いも多い。念には念を入れて調整しておくに越した事は無い。

「…気合い入れねえとな」

「あんた、それ以上入れてどうすんのよ…」

ノイトラはその背後からの声に振り向くと、チルツチが呆れた様な顔で見ていた。

彼女が言わんとしている事は理解出来る。

つまるところ、それに付き合わされる身にもなつてみるという意味だろう。

別にノイトラはチルツチにも自分と同じ事を強制した事は一度も無い。他ならぬ彼女が自分の意志で行っているに過ぎない。

——その御蔭でノイトラも心置き無く倒れるまでの鍛錬が出来ているのだが。

一人で鍛錬に行くと伝えれば、分かったと言いつつ何故か付いて来るし、何か事あるごとに必ず付き合おうとする。

恐らくではあるが、多分彼女はテスラの代役を務めようとしているのだろう。

確かにテスラ・リンドクルツという存在はノイトラにとって得難い存在であった。

どんなにぞんざいに扱われ、暴力を振るわれ様とも一貫して付き従い続ける彼にどれ程救われた事か。

テスラの代わりになる者などこの世の何処にも存在しない。

彼は彼にしか、チルツチはチルツチにしか出来無い事がある。比較する事は筋違いだと、ノイトラのこの意志を理解させる事が出来れば、彼女は行動を改めるかもしれない。だがその言葉は受取り方によっては今のチルツチ自身の努力を否定するものとなる可能性もある。

「…別にオマエまで付き合えとは言つてねえよ」

テスラの代わりでは無く、彼女は彼女らしくしてくるだけで自分は満足だ。正直に  
そう言えたらどれ程楽だろうか。

ノイトラは憑依前から不器用な自分にもどかしさを感じた。

「あんたがやるなら、あたしもやるわよ。何たって…っ!？」

——あたしはあんたの従属官なんだから。

チルツチがそう言い切る前に、室内の空気が変わった。

ノイトラは視線を高台をへと戻す。

玉座の奥側に霊圧の揺らぎが生じたのだ。

黒腔とは虚圏と現世や尸魂界の境界に通す抜け穴。その境界に当たる謎の空間には  
霊子が充満しており、通行人は自ら足場を作って移動する形になる。

世界と世界の境界に干渉するだけあってか、開閉する際、少なくともこうして霊圧の  
揺らぎが生じるのだ。

そして次の瞬間、途方も無い量の霊圧が、凄まじい重圧となつて室内を一気に支配す  
る。

それも時間が一秒二秒と進む度に更に増加してゆく。

数字が5以上の十刃達は顔色一つ変えず、だが心無しか緊張した面持ちで霊圧の出所を見遣る。

それ以下の十刃達は冷や汗を流すか身体の一部を震わせるかして、怯んでいる様な反応を示していた。

十刃達ですらこれなのだ。当然、従属官達は皆共通して顔色を青褪めると畏怖の表情を浮かべ、酷い者は膝を着いて息を荒くしている者まで居た。

「相変わらず洒落にならねえ霊圧しやがって…」

ノイトラはそう毒づきながら、押し掛かる重圧を軽く受け流し、難無く自然体をキープし続ける。

左隣から感じる視線に気付かない振りをしつつ、彼は不意に一番右端へと視線を移す。

其処には自身の身体を盾にする様にして、リリネットを背中に隠すスタークの姿があった。

ノイトラはそれを確認して安堵する。

何せリリネットの靈力は他の従属官、それどころか並みの数字持ちにも劣る程に小さい。そんな彼女がこの靈圧を耐えられるのか心配に思ったからなのだが、どうやら案ずるまでもなかつたらしい。

この虚夜宮で過ごす為の生命線の一つ、癒し要員の無事を確認した後、最後にもう一度後ろを振り向く。

其処にはノイトラが振り向くのを予見していたのだろう。腕を組んでドヤ顔を浮かべるチルツチの姿が有った。

——右頬に一筋の汗を流しながら。

最後の部分には目を瞑るとして、それにしてもこの靈圧の中で立っていられるとは大した成長振りだ。初めて3ヶタの巣を訪れた時とは比べ物にならない。

チルツチは従属官となつて初めに要求してきた事がある。それは以前ノイトラがテスラに課した鍛錬メニューの開示だ。

ノイトラとしては別に問題無いと判断した。何せそのメニューはテスラの身体的スベックと靈力を考慮して組み立てたもの。流石と元十刃と言うべきか、全てにおいて彼の能力を上回っているチルツチにこなせない訳が無いのだから。

鍛錬内容を紙に書いて渡すと、札を言つてそのまま自分の部屋へと引き籠つた彼女。

ノイトラはその様子を気にはなつたが、きつと何か思うところがあるのだろうと、そ

の日は一人にしてやる事にした。

すると後日、何時も通り自主鍛錬に行こうとすると、突如としてチルツチは自分も行くと言いだしたのだ。

別に困る事でも無いので、好きにしろと言ってそれを許したノイトラ。

そのまま何時も通り虚夜宮の外で鍛錬を始め、無事何事も無く終わらせた。

そしてチルツチと集合して帰ろうと思ひ、後方に視線を移すと——其処には止めどなく滴る汗で顔のメイクが流れ出し、ゾンビの如く覚束無い足取りでふら付く、オバケ屋敷の住人と化した彼女の姿が有った。

取り敢えず見えたものでは無かったので、即座に彼女を抱えて拠点へと戻り、シャワーを浴びさせた。

その後はどうしてあんなったのか話を聞くと、テスラの鍛錬メニューは身に合わなかったのだ、帰刃形態の維持時間の向上の為の鍛錬をしていたらしい。

具体的に何をしたのか追及すると、気まずそうに顔を逸らしながら、只単純に帰刃してそのままの状態を維持し続けていたのだと言う。

半鍛錬マニアと化していたノイトラはキレた。オマエ鍛錬つての舐めてんだろと。

彼は怒りの形相をそのままに、チルツチの行った鍛錬とも言えない粗末な行動の間違いを指摘した。

鍛錬とは基本、筋力トレーニングと同じだ。身体全体を余す事無く動かせる様にメニユーを組み、必ずセットを三回以上を重ねて行う。それによって筋肉の筋の一つ一つ全てを使い切る事が起こり、効果が上がる。

無理して百回を一セット行う事と、程良く五十回を三セット行う事は全く違う。

チルツチがやっていたのは一度に身体に掛かる疲労度も高く、効果も薄い前者だ。折角テスラの鍛錬メニユーという良い例を教えたというのに、この有様である。

致し方無く、ノイトラはチルツチに対し、やるんだったらこうしろと、一から基本を教え込む事にした。

——彼のその余りに鬼気迫った雰囲気、チルツチが終始怯えていたのは言うまでも無い。

結果、その出来上がったメニユーは二人が組む事が前提のものだった。

それはチルツチの斬魄刀の形状がノイトラよりも特異で、軽量であるが為に素振りも出来ず、だからと言って帰刃形態では霊圧の燃費が悪いという様々な理由からそうせざるを得なかったのだ。

そのメニユー内容を簡単に言い表すと、ノイトラの鍛錬の合間合間にチルツチが横から混ざる、といった感じだ。

まずノイトラが響転反復のアップを終えた後、的の代わりになって通常状態のチルツ

チが振るう斬魄刀を受け続け、攻撃力の向上を狙う。その中で有的である彼も時折動きを入れる事で命中精度を鍛える。

次にノイトラは素振りに入るのだが、その間チルツチは個人で響転の反復運動を行い、響転の質と体力を鍛える事に専念。

最後に帰刃形態となったノイトラに合わせて彼女も帰刃し、通常状態のと同じ事の繰り返しだ。尚、これは燃費等の理由から短時間に収めるが。

始めの内はこれを二セット目に入っただけでチルツチは限界だった。

だが継続は力也。現在では余裕で三セットをこなし、自身の鍛錬を終えて消耗したノイトラと限り無く本番に近い手合せを行うまでになっている。

その結果、実力もかなり向上しており、今では残る十刃落ち二人組を同時に相手取って引き分けに持ち込める程だ。

以前チルツチは言っていた。目標は打倒グリムジョーだと。

ノイトラは正直言えば未だ彼女は彼には及ばないと思っている。

だが良い線までは行くだろう。通常状態ならば確実に勝利可能で、帰刃まで追い込む位なら余裕。問題は其処からだ。

まあそんな機会などもう二度と来ないだろうし、起こさせる心算も毛頭無いのだが。

「ど…どうよ？ あたしも大分腕を上げたんじゃない？」  
「…そうだな。判ったから取り敢えず上を見ろ。来るぜ」

震える声でそう言うチルツチだが、ノイトラはそれを軽く流すだけだった。  
褒めて欲しいのかもしれないが、生憎と今はそんな状況では無い。

後でフォローしようとは思いつつ、ノイトラは注意を促すと、自身も高台を見上げた。  
コツ、コツ、とこの重圧の中でも妙に響き渡る足音が玉座の奥から響き渡る。

その数は三。一つは藍染惣右介、そして残るは副官の東仙要と市丸ギンのものだろう。

この霊圧の出所もその三人だ。とは言っても殆どの割合を藍染が占めているのだが。  
暗がりの奥から、やがてその姿が露になる。

護廷十三隊五番隊長を示す羽織と黒い死覇装は変わらず。だが彼が常日頃から浮かべている筈の柔和な笑みは何処にも無く、底知れぬ何かを感じさせる薄笑いへと変貌していた。

眼鏡も外し、茶髪を逆立てたその変わり様は凄まじい。

その身に纏う雰囲気も、正に魔王と言っても差支えない程の強大さを感じさせる。

「やあ皆、濟まないね。少々遅れてしまったよ」

藍染はそう言うと、ゆつたりと玉座に腰掛けた。

そんな彼の左側にはコーンロウと褐色の肌、ドレッドヘアが特徴的な男、東仙要が盲目である事を全く悟らせない歩みで其処に立つ。

「謝罪の必要は有りません。如何なる理由だろうと、それに従うのが部下である彼等の役目なのですから」

逆方向には、胡散臭い笑みを浮かべた細目で狐の様な飄々とした雰囲気を持つ男、市丸ギンが立ち、堅苦しい東仙の台詞をからかう様にして言う。

「そりゃあかんよ、要。あんま上司が我儘言<sup>ゆ</sup>たら、その内部下は愛想尽かして出て行ってまうで〜?」

内容は至って普通の事を言っではいるのだが、その飄々とした関西弁口調からは何処か軽い印象を受ける。

東仙はそんなギンにゆっくりと顔を向けた。

盲目の筈なのだが、周囲からはその目がギンを睨み付けている様に映った。

その遣り取りを楽しんでいるのかどうかは不明だが、藍染は二人を窘める様な事はせず、悠然と下を見渡した。

虚夜宮の持てる主力メンバー全てが一同に並び立つその光景は圧巻。

しかもその一人一人が護廷十三隊の隊長格に並び立つ戦力を有しているという事実。藍染は何を思つてか、人知れず口の端を僅かに吊り上げた。

「さて、今この時より我々の掲げる計画が遂に始動した。敵は恐らく護廷十三隊の主要戦力——隊長格全員になるだろう」

静かに語り始めると同時に、先程まで室内を支配していた重圧が取り除かれる。

その変化に、終始ずつとこの重圧の中で過ごさねばならないのかと思つていた者達は内心で安堵した。

「だが何も焦る必要は無い。君達ならば必ず勝利出来ると私は信じているよ」

まるで演劇の登場人物の様に、態々右手を持ち上げて自身の感情を表現する藍染。

——そんな事微塵も思っていない癖に、良く言う。

破面達の殆どがその雰囲気には？まれている中、ノイトラは内心で毒づいた。

護廷十三隊の隊長格程度、この男ならば一人でも撃破可能なのだ。

藍染の持つ斬魄刀、鏡花水月きやうかすいげつ。他の死神の斬魄刀には殆どある、能力解放に伴う形状の変化が無いその刀だが、解放の瞬間を一度でも見た相手の五感や靈感等を全て支配し、対象を誤認させることが出来る。『完全催眠』という能力を持つ。

しかも誤認させる内容も担い手の思いのままとくれば、もはや反則的。

これだけ有れば、例え一步も動かずとも相手を戦闘不能まで追い込める。

正にボスに相応しい強大過ぎる力。だが藍染の真価はそれでは無い。

恐らく彼は自身の死神としての魂魄の限界まで能力を強化している。

それは霊圧であり、力であり、技術であり、速さであり、全てに当て嵌まる。

虚と死神の魂魄の境界線を破る事で、その魂魄の持つ限界を超えた強化を可能とした破面。そしてその頂点に立つ十刃。

だが藍染の基本的な能力は何とそんな彼等すら容易に上回るのだ。更に彼は後に崩玉と融合し、その状態よりも更に数倍にまでパワーアップする。

だからこそ、ノイトラは自分では絶対に勝てない相手なのだと諦めていた。

勝てるのは主人公たる黒崎一護のみ。それ以外はどうか足掻こうが足元にも及ばない。これは必然だ。だがノイトラは諦めると同時に覚悟もしていた。

彼は力を付けてゆく度、初めに掲げた目的の他にもつい欲が出た。

それは自分の親しい者達の救済だった。

護廷十三隊との決戦で、決着が付く時には既に殆どが死に絶える事が決まっている破面達。

あろう事か、ノイトラはそんな彼等を助けたいと、愚かにもそう思ってしまったのだ。うろ覚えだが、確かに生き残る可能性の高い者は存在する。

まず第3十刃チーム。藍染に斬り伏せられたハリベルについては五分五分だが、确实なのは従属官三人だ。何せ彼女達を撃破した護廷十三隊総隊長である山本 やまもと 元柳齋 げんりゅうさい 重國本人が、命までは取らない発言をしていたのだ。堅物な彼ならば自分の言った事は守るだろう。

次にグリムジョー。一護との決戦の後、満身創痕になっているところをノイトラがトドメと言わんばかりに不意討ちするのだが、その後もしつかり受け答えが出来ている事から、恐らくは生き残れる筈だ。

——その後の物語の中で生きている様子が全く描かれていない為、以降の彼の所在が不明なのがネックだが。

残るは虚夜宮内の破面達数人、そして十刃落ちの中ではガンテンバインだけだ。

改めて数えてみると非常に少ない。そして他は残念ながら確実に死んでしまう運命にある。

スタークはあの怪我の規模を見ても、精々数分しか持たないだろう。

バラガンとその従属官達はその死に際までしつかり描かれているので説明は不要。

ウルキオラは塵となって消えてしまおうし、数字が6以上の十刃達も序盤で退場する。

ヤミーについては——可哀相だが、描写も省かれた上でしつかりやられている。

ノイトラの中では既に選定は済んでいる。基準はこの先生き残ったとしても仲間としてやっていけるかどうかに尽きる。

まずスターク。手段については後々考える予定だが、仲間意識が強い彼ならば助けても何の問題は無いだろう。

次にハリベル。彼女が人格者であるのは既に身を以て知っているので、選択するのに迷いは無い。

そして十刃落ち全員。チルツチについては従属官として常に傍に居るのでどうともなる。ドルドーニとガンテンバインについては、主人公勢との決着が付いたと同時に、迅速に動く予定だ。

セフィーロやロカを含めた雑務係の破面達については言うまでも無い。既に手回し

はしている。

明確な判断が出来無いのはウルキオラとグリムジョーだ。

ウルキオラについては、初めの内は余りに冷徹で無感情の為に論外。最終的に起こった彼の心情の変化が何を齎すのか想像も付かないので、未だ保留状態。

グリムジョーについても同様で、一護に敗れた直後は怪我と消耗のせいで非常に大人しくなっているが、回復すればどうなるか不明なので保留している。

確実に除外しているのが彼等を除いたメンバーだ。

バラガンは身も心も全てが王として完成されているので、ノイトラの理想とは決して相容れ無い。例えば生まれ変わってもその在り方は変わらないだろう。従属官達も彼に心酔しているので同様の事が言える。

第7以下の十刃達、ゾマリ、ザエルアポロ、アールニール、ヤミー。この四人は論外だ。

ゾマリ自身、藍染を裏切る様な真似をする者と馴れ合うなぞ御免だろう。

アールニールについては——ノイトラは身内に悪食すら可愛らしく見える様な存在を置く気は無い、とだけ。

ザエルアポロはこの世の天地が引つ繰り返っても選ぶ訳が無い。寧ろ直々に止めを刺しに行っても良い。

ヤミーについても、粗野で粗暴で、自身の気まぐれで同族を殺す様な輩など願ひ下げだ。

救うべき命を選定するという行為。傍から見れば何様だと思ふ者も居るだろう。

だがこれしか無いのだ。如何にノイトラが強くなつたとしても限界がある。

例え先程除外したメンバーも救つたとしても、後で改心させる余裕など何処にも無い。

全てを救うなど、それこそ神の所業だ。

そんな悠長な真似をしていたら救える者も救えなくなつてしまう。下手すればそれを成そうとしているノイトラ自身が死ぬ可能性だつてある。

「故に——今一度、ここで宣言しよう」

藍染は余裕さをアピールするかの様に、右肘を玉座の肘掛に置き、背凭れに自身の体重を掛けた。

そしてもう一度下の破面達を見回すと、言つた。

「開幕だ」

ノイトラは背中一面に嫌な汗を流しながら気付いていた。  
最後に破面達全員を俯瞰した筈の藍染の視線が、一瞬だけ、ノイトラの付近で止まった事を――。

## 第九話 三日月と大帝と虚無と…

藍染の開幕宣言から早三日。初めは慌ただしかつた虚夜宮内も次第に落ち着きを取り戻し、何時も通りの空気が流れ始めた頃。

ノイトラはチルツチに支えられながら、治療室に向かっていた。

何故こうなったのかは想像に難くない。何時も通り鍛錬に力を入れ過ぎただけだ。

しかし只の鍛錬ではこうまではいかない。実は最近習得したばかりの新しい力の追い込みと称して、準備運動もそこそこに、いきなり全力でそれを解放したのだ。

次元の違うその力の激流にアテられたのか、チルツチは全身が弛緩して行動不能となり、彼の鍛錬が終わるまで呆然としていた。

如何に鍛錬慣れしているとは言え、流星に初っ端から全力投球ではそう長持ちする訳が無い。

案の定、ノイトラは意識を失って倒れただけで無く、自動回復が間に合わず、セフィアの能力を頼って此処に来ている訳だ。

チルツチの鍛錬に文句を言った手前、これである。

「ほんとに馬つつつ鹿じゃないのあんた!? あんな出鱈目な力、遠慮無しにバカスカ使って…普通死ぬわよ!!」

「…め…面目無え……けどよ」

「けどもだつても無いつての! もう今日は大人しくしてろ!!」

チルツチは自身の肩を貸しながら、この無茶苦茶な主に対し、態と耳元で大声で騒ぎ立てていた。

これが普段通りであれば、想い人の身体に密着している事に照れ臭さやら羞恥心やらを覚え、逆上せ上つていただろう。

彼女はこうして鍛錬場所から虚夜宮に戻ってからもずっと罵倒し続けていた。

それでも全く声が枯れた様子を見せない事から、如何に彼女が普段から騒ぎ慣れているのが判る。

ノイトラの反論を強制的に途中で打ち切り、無理矢理引き摺って行く。

———しかしまあ、随分と感慨深い。

成すがままにされながらも、ノイトラは思った。

つい最近までは妹の様に思い、色々と面倒を見ていたのが、今こうして逆に世話を焼かれる羽目になるとは。

言つては何だが、ノイトラは普段の行動はしつかりしているのだが、私生活になると途端に緩くなる。部屋の中にはその日着た服を脱ぎ捨てて放置するし、疲れたからと言つて食事も取らずに寝ようとする。

ある意味、これはテスラが居た時の弊害だ。彼は男同士という事もあつてか、ノイトラの自室に顔を出す事も多く、その度に部屋を掃除したりと献身的に奉仕活動を行つていた。

その結果、やらなくともアイツがやってくれるという感じで、駄目亭主の様な生活習慣が出来上がってしまったのである。

——これが一人前になつて自立した娘を見て物思いに耽る父親の気分か。

ノイトラは本人が聞いたら激怒必至な事を考えながら、優しい笑みをチルツチの横顔に向けていた。

やがて治療室まで残り三つの廊下を切った、その時だった。

「そこで生まれ！ ノイトラ・ジルガ!!」

二人を背後から呼び止める声が上がった。その声の主は未だ若い。

振り返つて見れば、其処には拳法着のような服を着て髪を三つ編みにし、サーベルタ

イガーの頭蓋骨を模した仮面の名残を被った中性的な顔立ちの少年。

少年の名はジオ・ヴェガ。

ベインテイセイ 2

6の数字を持つ数字持ちで、第2十刃、バラガン・ル

イゼンバーンの従属官だった。

「畏れ多くも我が陛下が貴様を御呼びだ！ そのまま待て！」

「…いきなり来て何寝言言ってるだてめえは!!」

相手が第5十刃である事も御構い無しな小生意気な態度に、チルツチも思わず霊圧を放出して怒りを露にする。

今日は鍛錬を行っていないので、彼女の霊力は十二分に溢れており、その霊圧は下位の十刃に匹敵する程だ。

想定外の霊圧量に、ジオは小柄な全身を一瞬跳ねさせると、腰を抜かした様に後ろに座り込んだ。

あ、あ、と言葉にもならない声を漏らしながら、顔面を蒼白に染めている。

「相手が誰だか解って言ってるのか!! この——」

「…止めろチルツチ」

「ノイトラ!? でも…」

「止めろ」

「つ…チツ…ノイトラに感謝しろこの糞餓鬼!」

だが途中でノイトラが右手をチルツチの眼前へと翳し、制した。

不満気な表情の彼女だったが、渋々霊圧を引っ込める。だがその鋭い目は依然としてジオの事を睨み付けていた。

睨み付ける程度なら構わないかと、妥協したノイトラは支えてもらっていた体勢を解くと、自身の足で立ち上がる。

そしてそのまま当事者の到着を待つ事にした。

「…勘弁しろよな、マジで」

いきなり訪れた面倒事に、ノイトラは久々に深い溜息を吐いた。

気を抜けば倒れそうになる身体に鞭打って、普段通りのノイトラ・ジルガを演じる。

何せこれから相対するのは一筋縄ではいかない相手だ。保有する霊圧も能力も桁違い、対話による政治的駆け引きも経験ではあちらが上ときた。

ノイトラに出来る事は一つだけ——舐められないことだけだ。

十刃の数字は強きの序列。立場では無い。

其処に座り込んでいるジオの様に、大半の数字持ち達はその意味を勘違いしている事が多い。

十刃同士の間には本来上も下も存在しない。何時でも何処でも、その数字を奪い合うライバルの様な間柄なのだ。

「何を無様な姿を晒しとる、ジオ・ヴェガ」

「ば、バラガン陛下!?!」

廊下の奥から五人の従属官を引き連れて現れたバラガン。

その堂々とした佇まい、そして滲み出る風格に、ノイトラとチルツチは霊圧とは別な意味で圧倒された。

王としての在り方であれば、それこそ藍染よりも上だ。

——成る程、確かに彼程の存在なら並みの数字持ちが心酔するのも頷ける。

こうして対峙してみても初めて解る違いに、ノイトラは納得した。

仲間としては受け入れられないが、王としてなら可能だろう、と。従う気は欠片も無

いが。

「…命令の意図も酌まぬ内に先走ったか。馬鹿者が…」

「つ…も…申し訳…御座いません…！」

彼は伝令役として向かわせた筈のジオが座り込んでいるのを見遣ると、一瞬で彼の失態を悟ったのだろう。

冷やかな視線と同時に鋭い霊圧が、彼目掛けて放たれるのを、ノイトラは確認した。ジオはそのまま気を失って倒れた。そんな彼を、同じ従属官である、顎に仮面の残骸を残した虚ろな表情をした巨漢が担ぎ上げ、バラガンの後ろへ戻る。

「…謝罪は必要か」

嫌に下に出る。バラガンらしく無い。

恐らくこれは試している。ノイトラは悟った。

呼び止めた事もそうだが、恐らく彼は自分を見極めたいのだろう。

藍染も戻った今、ある意味境目とも言える丁度良いタイミングだ。

それもその筈。実はバラガンは最近のノイトラの強さを見抜いていた。

伊達に虚圏の王を名乗っていない。上限は不明だが、一先ず自身に匹敵するか否かを判断するのは造作も無かった。

バラガンが下したその結論は——自身と互角。

如何なる手段を用いて其処まで登り詰めたのか、それに対しては微塵も興味が無い。有るのは一つの懸念だけだ。

今後、ノイトラ・ジルガという存在は自身の覇道を阻む存在となるのか否か。

故にこうして行動に移したのだ。

そんなバラガンに対し、ノイトラは現在、自身の脳を全速力で回転させて対応策を検討していた。

此処はノイトラらしく下卑た笑みを浮かべて肯定する事が良いのだろう。

そうすれば恐らくバラガンは自分を今後一切関わる価値も無い小物として認識し、今後は無視を決め込む様になるだろうと。

評価は地に落ちるが、その反面で敵対する可能性は潰れる。

実に平和的な解決法だ———と思いきや、実は間違っていた。

実際にノイトラがそんな態度を取れば、バラガンは今この場でノイトラを殺す事も厭わない。

例え王で無くとも、力を持った小物の厄介さというものは皆理解出来る。どんな物語でも、こういうキャラは面倒事を起こしたり大事件の引き金を引いたりすると相場は決まっている。

己の振るう力に責任も持たず、只本能や欲求の赴くままに行動して周囲を引つ掻き回す輩を、バラガンが放つて置く訳が無い。厄介事の芽は早い内に摘んでおくに限るのだから。

そうとは知らず、地雷を踏み抜こうとしたノイトラだったが——直前で止めた。理由は単純。気に食わないからだ。

確かにこの態度を取れば、今後は安全かもしれない。

だがこれは下手すると舐められるよりも屈辱的な結果でもあるではないか、と。

其処でノイトラは挑戦してみる事にした。

小物を演じる必要も無く、それで且つバラガンの障害には成り得ないと理解させる方法。

こうして図らずも彼は特大級の地雷を回避した。

「いや、久々に面白い奴を見れたからな。これでチャラだ」

「ほうっ？」

ノイトラは謝罪を要求するのでは無く、その必要が無くなったと返す。

バラガンは意外だと言わんばかりの声を上げた。そしてその理由を促す様に視線を向けて来る。

この反応を見るに、取り敢えず好感触だった様だ。

ノイトラは間髪入れずに更に追い込みを掛ける。

「先が楽しみな餓鬼じゃねえか。良く見付けたな」

「…儂が直々に引き入れた人材じゃ。其処等の灰塵と一緒にするでない」

「確かに、あんな奴はそうそう居ねえわな」

一応これは嘘では無く本心だ。

虚夜宮内では十刃を除き、未だにノイトラの姿を見て怖気付かない破面は少ない。

あのハリベルの従属官三人組も、近くに来れば一瞬肩を跳ねさせる仕草を見せる。

だがジオはそんな素振り等一切無く、それどころか真正面から命令して見せたのだ。

見たところ実力もそれなりに、そしてまだまだ伸び代も有る。流星にバラガンが見込んだだけの事は有ると言うべきか。

ノイトラの称賛に、ふん、と鼻を鳴らすバラガン。

未だに駆け引きの内ではあるのだが、その御世辞に少なくとも気を良くした様だ。

あからさまなものでは無く、彼自身が既に行った事を褒めるのはツボだったらしい。

——意外とチョロい。

ノイトラはバラガンの意外な弱点を見付けて内心でほくそ笑んだ。

「……一つ良いか？」

「何じゃ、発言を許そう」

そろそろ決着を付けねば流石にキツイ。霊圧的にも体力的にも。

なのでノイトラは本題に入る事にした。

真正面から堂々と、バラガンの目を見据え、言い放つ。

「——アンタはこれまで通り、アンタの道を行けば良い。俺も俺の道に行く。それは金輪際交わる事は無い」

それは一種の賭けでもあった。

始めからバラガンの意図を知っていた事を仄めかし、その上で誠心誠意、嘘偽り無く本心を伝える。

自分は自分の道を行く。アンタの王道には決して干渉しないと。

敵対しない、では無く敵対したくとも出来ない。

地に足を着いて進む者と、空を翔けて進む者。この両者が一体何処でぶつかるというのか。

ノイトラとしてはこの方が楽だった。一度小物を演じてしまえば、以降は一貫して演じ続けねばならなくなる。そんなのは御免だ。

物語の展開が進む今後に於いて、其処まで気を配っている余裕は無いのだから。

「それを信ずる証拠は」

「無い」

バラガンは暫し間を置くと、そう問い返した。

対してノイトラは只一言、即答で返す。

両者は微動だにせず、その睨み合いにも等しい形を保ち続ける。

一分、二分と、時間だけが過ぎて行く。

靈圧は一切出ていない。だがこの場は如何ともし難い重圧が支配していた。周囲はその推移を息を飲んで見守っている。

「…良からう。その言葉、忘れるでないぞ、ノイトラ・ジルガ」

「無論だ」

「餓鬼が…一丁前な口を利く様になったものよ。行くぞ」

『御意！』

沈黙を破ったのはバラガン。彼はノイトラにそう言い捨てた後、踵を返すと従属官を引き連れて去って行く。

ジオの件が有ったせいだろう。去り際に睨み付けて来る奴は居なかったが、探る様な視線を向けて来る者が居たのを、ノイトラはすっかり感じ取っていた。

ノイトラはバラガン達の後ろ姿が完全に見えなくなるまで立ち続けると——やがて後ろに仰向けに倒れた。

その様子に、チルツチが慌てて駆け寄る。

「ちよつと!? 大丈夫!?!」

「…疲れた、寝る」

「さっさとセ<sup>あ</sup>フイ<sup>い</sup>ーロ<sup>っ</sup>のところに…ってマジで寝んなコリア!!」

チルツチの叫びも虚しく、ノイトラの意識はそのまま落ちたのだった。

虚夜宮内では主に重要な会議や会合といった、多人数が集って話し合う場合、主に玉座の間が使われている。

それは藍染が結構な頻度でその部屋を利用して為、元から其処を集合場所と決めておけば色々と楽なものも理由だ。

そして其処は黒腔を開く以外、時に何も無さそうだと思われがちだが、実は早想像以上にハイテクな造りになっていたりする。

虚圏の外部から調達した映像や情報を保存して空間モニターで映し出したり、意識を集中させる事で虚夜宮全体に自らの意志をリンクする事で建物内の殆どの様子を把握したりと、他にも機能は多々有る。

例え長時間過ごしたとしても、決して退屈はしない。藍染にとって玉座の間とはそんな部屋だった。

「…失礼致します」

治療室とは比較にもならない程巨大な扉が自動で開くと、召集を受けたウルキオラが入室する。

彼は藍染の居る高台から丁度真正面の位置まで進み、膝を着いた。

「いらつしやいウルキオラ。楽にして良いよ」

何時も通りの薄い笑みを浮かべながら、肘を付いた楽な姿勢で藍染は言う。

それに従い、ウルキオラは礼の体勢を解く。

副官二人は変わらず、藍染の左右両側に控えて居た。

「召集の理由は伝わっているかい？」

「…現世に於いての任務が有る、とだけ」

「そうか…要」

藍染は不意に傍らの副官に呼び掛けた。

それに対し、はい、と東仙は一言だけ零すと、カードの様な物を懐から取り出し、近くの黒の支柱へと近付く。

すると突然、支柱の表面の一部がカードリーダーを思わせる装置へと変形する。

東仙がそこにカードを差し込むと、今度は藍染の正面——玉座の間の入口側の壁に映像が現れた。

「任務内容はとある人物の調査だよ。その対象は彼——黒崎一護」

ウルキオラはその映像を見ながら、まるでアルバムを見返しているかの様だと感じた。

映像は、只の靈感の強い高校生——黒崎一護が、ある出来事を切っ掛けに突然死神

へと至るところから始まった。

高校生活と死神の役目を何とか両立させながら、やがて一護はその中で様々な者達と出会い、時に戦い、成長して行く。

ある時、死神の力を譲渡してくれた恩人でもある死神——朽木ルキアが尸魂界へと連れ戻され、自身もその力を失った。

だが厳しい修行の末、一護が本来持つ死神としての力に目覚め、ルキア救出の為に準備を整え始める。

そして遂に仲間とその協力者と共に、尸魂界へと降り立ち、死神達の拠点である瀞霊廷へと侵入を果たす一護達。

其処で沢山の強敵と対峙し、傷付きながらも戦い抜き、遂にルキアの救出を成し遂げる。

「……………」

実に王道的で、感動的な心躍るストーリーだ。常人ならばそんな感想を抱いただろう。

だがウルキオラはその内容に何の感情も抱かなかった。

生まれたのは疑念のみ。

——何故この人間達はこうまでして必死になれるのだ。

仲間、心、絆、どれもこれもが理解し難い。

仲間を持っては強くなるのか。心を持っては如何なる強敵をも打ち倒せるのか。絆とは恐怖や困難に勝る程のものなのか。

考え込みながら、ウルキオラは映像の続きを見遣る。

其処で藍染の大いなる野望が絡み、窮地に陥る一護達。

そしてやがて浦原喜助の製作した崩玉の入手という目的を果たした藍染の前に現れる護廷十三隊の隊長達。

だが難無くその場を切り抜ける藍染。彼は倒れ伏す一護を見下ろしながら、虚圏へと去って行く。

「ふむ、改めて見てみると恥ずかしい気もするね」

「……………」

映像が途切れて一呼吸置くと、ウルキオラは疑問に思った。

藍染様は何を考えてこの映像を自分に見せたのか、と。

情報の伝達という意味合いも有るだろうが、常識では計り知れない頭脳を持つ彼の事だ、絶対に他にも何か有る。

“虚無”を司る自分を刺激したいのか、それともつと別方向の意図か。

心という形を持たないが故に、その在り方が理解出来無い。ウルキオラは理屈でその答えを導き出そうとするが、当然の如く失敗に終わる。

やがてその思考は行き詰り、自分では理解不能だと諦め掛けた時、ふと思った。

奴なら或いは、この藍染様の意図を、そして先程の映像の人間達の心というものを理解出来るだろうか——と。

次の瞬間、ウルキオラは咄嗟に自身の思考を打ち切る。

何を馬鹿など、先程までの考えを全て記憶の隅に追い遣る。

自分は物だ。藍染様の手足となり、あらゆる障害を排除する為の道具。

映像内の人間達の持つ心などという無駄極まりないものに思考を割く必要は無いのだから。

「ではウルキオラ、今の映像で黒崎一護という為人は理解出来ただろう。早速だが任務を言い渡そう」

「…はい」

「現世——空座町からくらちようにて黒崎一護の能力を、そして彼が我等の妨げとなるか否かの可能性を調査してほしい。任務実行は三週間後だ」

「承知致しました」

ウルキオラは再び膝を着く。

藍染は満足気な笑みを浮かべると、そうだと付け加えた。

「後者だった場合、彼の処遇については君の判断に一任する。前者の場合は殺せ」

「…宜しいので？」

「ああ。それと誰か同行者を連れて行っても良い。私の命令だと言えば皆従うさ」  
「感謝します」

最後に一礼すると、ウルキオラは踵を返す。

彼が去った後、ひとりで扉が閉まる。

藍染は全身から脱力し、目を閉じる。

そのまま虚夜宮全体へ一時的にリンクし、ウルキオラの後を追う。

彼が向かった方向に居る存在を確認すると、直ぐにリンクを切った。

「…成る程。彼の変化は周囲にも伝染するのか…」

未だに目を閉じたまま、藍染は静かにそう零す。

「実に興味深いよ…ノイトラ・ジルガ」

その言葉には一体何の意図が有るのか、それは本人にしか解らない。

東仙とは逆側に立つもう一人の副官の視線を横顔に感じながら、藍染は笑みを浮かべた。

玉座の間にてそんな遣り取りがあったとはいざ知らず、所変わって治療室の中は喧騒

に支配されていた。

主に騒ぎ立てているのは言わずもがな、チルツチ。煽っているのはセフィーロ。離れた場所では口力が静かに紅茶の用意をしている。

ノイトラに治療と称して露骨にベタバタと引つ付きながら処置を行うセフィーロに、チルツチは今にも虚閃でもぶつ放しそうな勢いで怒りを露にしていた。

現在、治療室にはこの四人しか居ない。

藍染の計画が動き始めた影響か、虚夜宮内の補強作業などで他の雑務係の破面達は多忙なのだ。

とは言え、治療要員を全く残さない訳にはいかない。

なので治療の能力に優れたセフィーロと口力のみが残されているのだ。

「駄目ですよお、もうこんなに無理しちゃ。毎回これでは私の身体が持ちません」  
 「とか言いつつ何処を触ろうとしてやがる！ さっさとノイトラから退けこの淫乱女  
 !!」

「何処って…触診なんですから身体に直接触れるのは当たり前じゃないですか」

「…尻を触って何を診る御心算なのでしょうか。是非お聞かせ下さいセフィーロ様」

「……………えへへ…」

「笑つて誤魔化すんじゃないねえ!!」

セフィーロの姿は何時もの白衣では無い。マスク状の仮面は消えて素顔を覗かせ、その全身は裸に薄く柔らかな布が幾重にも巻き付いた様な扇情的な格好で、彼女の周囲には常に大量の布が舞い踊っている。

これは彼女の斬魄刀の帰刃形態。名は治癒<sup>ディアン・ケピト</sup>女神。

その持つ能力は正に治療長の座に相応しく、その治癒の効果は絶大の一言。怪我だけでなく、失った霊圧すら回復させるそれに、ノイトラは今までに何度も助けられている。

普段は頑なに秘匿し、解放したとしてもノイトラ以外に決してその力を見せなかったセフィーロだったが、今回は違った。

何時もよりノイトラの消耗が激しかった為、致し方無く彼女はその場で己の斬魄刀を解放して治療に当たったのだ。

彼女曰く、もっと早く来ていれば必要無かったらしい。

それを聞いたノイトラとチルツチは次の瞬間、あのクソジジイが、と二人揃って声を荒げた。

——その反面、何故かセフィーロは嬉しそうにしていたが。

「つてかもうとつくに完治してるでしょ！ あんたも無理矢理にでも退かすなり何なりしろつてのー！」

「いや…怪我するとマズイだろ」

「本当に紳士的ねこの馬鹿は!!」

チルツチは頭を抱えた。

別にその態度を責めている訳では無い。彼の魅力の一つだし、彼女とて今迄に何度もそういった扱いをされた事が有る。

只単に、それと同じ扱いを他の誰かにされるのが気に入らないという嫉妬だ。

ぶつけ様も無い感情に、チルツチは地団駄を踏んで悔しがった。

「…紅茶です」

「貰う!!」

ロカが横からトレーに乗せたカップを差し出すと、チルツチは一気に流し込んだ。

見た限り淹れたてだったと思うのだが、実に頑丈な舌だ。

自身の胸元に顔を擦り付けるセフィーロを見ない振りをしつつ、ノイトラはそう思った。

騒がしくも平和的な空気の治療室だったが——それは突如として終わりを告げる事となる。

「——っ!？」

ノイトラは此方へ近付いて来る巨大な霊圧を感知した。

遅れてセフィーロもそれに気付いたのか、即座に帰刃形態を解いた。

「これは…!？」

「う…あ…」

「っ、ロカちゃん!? いけない…!」

量だけでなく、何処と無く異質さを感じるこの霊圧を持つのは、この虚夜宮内にて一人しか存在しない。

ノイトラだけでなく、チルツチもその正体に気付いたらしく、焦燥に駆られた様な表

情を浮かべている。

厳密には違うが、基本的に力を持たない破面であるロカはその霊圧に耐えられなかったらしい。

手に持ったトレーを床に落とし、今にも崩れ落ちそうだ。

セフィーロはその様子を逸早く察し、直前にロカの身体を支える事に成功した。

「ノイトラさん！」

「…解ってる、早く行け」

「済みません…セフィーロ様…ノイトラ様…」

セフィーロはロカと協力し、自室の壁や扉全てに特殊な処置を施しており、監視カメラや霊圧等の干渉を一切受けない形になっている。

詳細は聞いていないが、二人の能力の相性が良いが故に出来る芸当だそうだ。

二人が自室へ消えるのを確認すると、ノイトラは一気にベッドから起き上がった。

先程まで寝ていた影響で固まった身体を軽いストレッチで解し、大事に備える。

チルツチも彼の直ぐ後ろへと移動。斬魄刀を腰に下げ、何時襲い掛かれても対応出来る様に、重心を落として構える。

「この霊圧…あいつよね」

「ああ」

「…何で？」

そう問われるが、事実、ノイトラとしては全く心当たりが無い。

これからやって来るのが想像通りの人物ならば、逆に此方の方が疑問だ。

彼とは交流らしい交流も無い。寧ろ治療室に来る前に対峙したバラガン以下だ。

治療室に来る以上、怪我をした可能性も捨て切れないとも考えたが、直ぐに有り得ないといと切り捨てる。

第4より第1までの数字を持つ十刃達の実力は、それ以外の十刃達のそれとは別次元だ。

それは今のノイトラも当て嵌まるのだが——一先ずそれは置いておく。

その証拠に、彼等は虚夜宮の天蓋の下での帰刃を藍染から禁じられている。解放時の力が余りに強力過ぎるが故に虚夜宮自体を破壊し兼ねないからだ。

そんな彼が傷を受ける程の事態が起こったとすれば、即座に藍染から各十刃達に召集が掛かっている程だ。直ぐに解る。

だがそれも無いとすれば、本当に彼個人からノイトラに用が有って近付いて来ているという事だ。

気付けばその霊圧は扉の前まで来ていた。

やがて音を立てながら扉が開き始め——その姿が露呈する。

左頭部の個性的な仮面の名残、そしてその整った顔の造形からも、見間違い様が無い。第4十刃、ウルキオラ・シファーが其処には居た。

「…此処に居たか、ノイトラ」

相変わらずの肌の白さだ。ノイトラはまず先にそう思った。

緑の両眼の下に、垂直に伸びた緑色の線状の仮面紋エステイグマが、よりウルキオラの無機質さを強調している。

成る程、確かに“虚無”と言うだけある。ノイトラは百回説得しても彼の表情を変え  
る自信は無いと断言出来る。

これを一護達は自分達の行動で変化させて見せるのだから、本当に驚きだ。

「…何の用だウルキオラ。怪我した訳でも無えんだろ？」

内心の焦燥をおくびにも出さず、ノイトラは冷静に問い掛ける。

——藍染様の命令だ。お前を殺す。

等といった事ではないよな、と最悪の事態を想像しながら。

「…先程、藍染様より現世での任務を仰せ付かった。期日は三週間後だ」

「へえ…」

予想が外れた事に内心安堵しながら、恐らくそれは現世に於ける初めての任務だろうと、ノイトラはウルキオラが言う任務に当たりを付ける。

現世の空座町に於いて、ウルキオラとヤミーの両名が来訪し、様々な爪痕を残す事となるある意味重要な出来事。

だが次の瞬間、ノイトラの全身に電流が走った。

——まさかそんな筈は無い、よな。

そう自分に言い聞かせるが、悪寒が止まらない。

右頬を嫌な汗がゆつくりと伝って降りる。

確かに、何となく嫌な予感はしていた。それはウルキオラが来ると知った瞬間から

だ。

関わる理由も特に無い今、こうして彼の方からアクションを掛けて来るとは想定外も良いところだ。

今直ぐ逃げ出したくなる足を必死に抑え付け、ノイトラは平静を保ちながら問い返した。

「———で？ その任務が俺と一体何の関係が有る？」

「お前も来い」

刹那———三人の周囲が静寂に包まれる。否、固まったと言うべきか。

空気が凍るとは正にこの事。

ノイトラは開いた口が塞がらなかった。

その様子にやや首を傾げながらも、ウルキオラは更に追い討ちを掛けた。

「………は……？」

「この任務に於いて、俺には裁量権が与えられている。藍染様の命令でな。…確かに伝えただぞ」

ウルキオラは返事も待たずにその場を去って行く。

まあ藍染の命令とあつては、結局従う他無いのだが。

「…なん……だと…」

残されたノイトラは茫然としたまま、まさか自分は言う事は無いであろうと思つていた——ネタとしても有名なあの名言を零していた。

その顔は何時ぞやのドルドーニを彷彿とさせるものであった。

「…良く解んないけど、御愁傷様？」

事の重大性を理解していないチルツチは、未だにブツブツと独り言を零し続けるノイトラの背中にそう言った。

## 第十話 三日月と虚無と憤怒と…

尸魂界の中央に位置している死神達の活動拠点、瀨靈廷。その中に、瀨靈廷内における様々な技術の研究や開発を行う十二番隊の付属機関、技術開発局という施設が有る。

その中の、広大な尸魂界や現世に派遣されている死神達との通信を行って情報の遣り取りをする通信技術研究科。

更にそれに隣り合わせて存在する、虚の出現等の霊圧反応を探知、分析する役割を持った、霊波計測研究所。その室内は今、緊迫した空気に包まれていた。

「おいリン!! 菓子食ってねえでさっさと詳細を報告しやがれ!!」

大凡人の括りでは無い、左頭部に小型のハンドルが付いたフグの様な顔をした男が、後ろの丁髷頭の気弱そうな男に怒鳴り散らす。

彼の名は鴨州<sup>ひよす</sup>。技術開発局通信技術研究科霊波計測研究所研究科長という、随分と長つたらしい役職に就く男。

「すすす、済みません！只今!!」

口元に菓子の食べかすを付けたまま、リンと呼ばれた男は手前の端末から、靈圧反応の有った正確な座標を読み取ると、顔色を青褪めながら叫んだ。

「ぞ、座軸3600から4000、東京、空座町東部！ 補正と捕捉を御願います！」

それを聞いた鶴州は先程まで見せていた怒気を何処へやら。

まるで命令を出された機械の如く、自身の端末へと振り返ると、目にも留まらぬ速さでキーボードの様な物を指先で叩いてゆく。

彼のみならず、室内に居る他の者も其々に慌ただしく作業を進めていた。

その異様な雰囲気の中、何の躊躇いも無く自ら足を踏み入れる男が居た。

「おう、調子はどうだ？」

緊張感の無い緩み切った口調でそう言うのは、眉毛がない額に角が生えている男、  
阿近<sup>あしん</sup>。

彼のその態度も、技術開発局の副局長という上から二番目に偉い立場故と考えれば納得だ。

しかもそれだけに限らず、護廷十三隊十二番隊第三席までも兼任しており、この場に於いては誰も彼に頭が上がらない——筈だった。

「おう！ いいところ来たな阿近!!」

「あ?」

だが鶴州という男はそれを全く気にする事無く、寧ろ対等以上の物言いで阿近に声を掛ける。しかも背中を向けたままだ。

「『きた』ぜ」

鶴州は其処で初めて振り返る。

その顔は焦っているというよりも、この緊迫した状況を楽しんでいる風に見えた。

空座町の東側に位置する、街の外れに有る森林地帯。

その中心部の一部開けた場所に立つ三つの人影が有った。

「ぶはア〜！ 面付いてた頃に何度か来たが、相変わらずつまんねえ処だなアオイ！」

靈子がウスすぎて息しづれえしよオ、と剩え更に文句を垂れ流しながら、ヤミーは腰に手を当てながら周囲を見渡す。

「…その喧しい声を抑えろヤミー。無理矢理付いてきた分際で文句を垂れるな」

ウルキオラは表情を変えないまま、齒に衣着せぬ物言いでヤミーを窘める。

感情を持たない筈の彼だが、何処と無く不機嫌そうに見えたのは気のせいか。

「…どうしてこうなった…どうしてこうなった…どうしてこうなった…」

最後に残るは、顔を俯かせながら同じセリフを小声でリピート再生し続ける長身の男。

そう、何故か理由も解らぬまま此処に来る羽目になったノイトラ・ジルガだ。

彼は普段、表向きは堂々と落ち着いた態度を見せているのだが、現在は他の二人の視界に入らない位置をキープし、自身の現状を只管嘆いていた。

それはそうだろう。何せ初っ端から想定外な展開が起こっている上、その真っ只中に巻き込まれているのだ。

つい最近まで緻密に計画を練っていた手前でこれだ。今迄相当努力を重ねてきた分、こうまでして容易に出鼻を挫かれれば弱気にもなる。

「——良しスッキリした。さて、頑張るか…」

だが其処は流石のストイック精神の持ち主。一通り嘆く事で精神に堆積した鬱憤を晴らし、即座に次の事を考え始めるその切り替えの早さは目を見張るものが有る。

だからこそ今迄やってこれたのだろう。

二人が未だ動き始めていないのを確認すると、ノイトラは真つ先に探査神経を全開にする。

それに引つ掛かった霊圧は合計五つ。大きなものは三つ、そして残る二つは護廷十三隊の席官レベルといった程度だ。

恐らく前者の内一つは黒崎一護。とすれば残る四つも予想通りの人物の霊圧だろう。

「へーへー、すいませんすいません」

あからさまに謝罪の意が籠っていない返事を返し、ズカズカと前方に勝手に歩み始めるヤミー。

普通ならキレてもおかしく無い態度だが、ウルキオラは眉一つ動かさず、静かに周囲を見渡している。恐らくノイトラと同じく探査神経を使つて霊圧の捕捉をしているのだろう。

ノイトラはヤミーの動向に気を配りつつ、今度は現在地から周辺に存在しているであろう戦術を持たない力無い人間達を、その魂に含まれる微弱な霊圧を探る事で位置を割り出す。

今回、ウルキオラは藍染の命令により、一護の能力の調査を行う為、空座町に訪れた。それまでは良い。だがその任務へ従事する人数が問題だった。

何と三人。本来であれば二人となる筈だったにも拘らずだ。

ノイトラは思わず内心で頭を抱えた。

というか初めからおかしかったのだ。何故余り交流の無い筈のウルキオラが自分を任務に誘うのか。実を言えば一人でも別に構わなかったのだが、と本人は言いつつだ。

——じゃあ一人で行け。どうせ後でヤミーも我儘言つて付いてくんだから。

思わず口から飛び出そうになったが、抑えた。

本当に理解不能な状況である。自分も参加すると伝わった時に藍染の浮かべた満足気な笑みも含め。

今迄に自分が行つて来た事、そしてそれが周囲に齎すであろう影響をもう一度思い返してはみたが、一向に心当りが無い。

次第に頭が痛くなつて来たノイトラは——取り敢えず考えるのを止めた。

情報の少ない状態で理解出来無い事を考えても結論は出ない。ならば現在のこの現状の打開策に思考を割いた方がマシだ。

まず現在地。空座町の東部に位置する森林地帯の中心部で、到着と同時に盛大な爆発音を響かせながらクレーターを形成するのでは無く、静かに黒腔を介して来ていた。

ちなみに後者については、虚夜宮を出発する前のノイトラの忠言が原因でもある。

元々疑問だったのだ。一護の調査が目的の筈が、何故無関係な人間達にまで探知される様な派手な遣り方で訪問し、無駄に戦線を広げる等の効率が悪い調査方法を取ったのか。

戦う力を与えてくれた恩人たる朽木ルキアへの義理、そして自分の愛する空座町を虚から守護する事を目的にしている一護。そんな彼が、街に突如として現れた十刃レベルの馬鹿デカイ霊圧を探知して動かない訳が無い。それは彼の仲間達も同じ事が言える。

——だがノイトラのそんな努力も、つい先程ヤミーが全て台無しにしてしまったのだ。

地上よりも高い位置に出た黒腔から出る際、彼は他の二人よりも先に飛び出したかと思ふと、衝撃緩和など一切考えずに思い切り着地。三人が容易に入れる程広く、その姿が完全に隠れる程に深いクレーターを形成してしまったのだ。

折角藍染に忠言までして回避した筈なのに、強制的に史実通りの状況を作り出したヤミーの愚行に、ノイトラが殺意を抱いたのは致し方無いと言えた。

恐らくだが、藍染はウルキオラにヤミーが付いて行くと知った瞬間、態と騒ぎを大きくする様に仕向けたのだろう。一護を精神的に追い詰め、その反応を見たいが為に。

規模が大きくなれば、粗暴で暴力的なヤミーならば優々と暴虐の限りを尽くすだろ

う。加えて一護の仲間達を傷付けるなり出来れば、その下地は完成する。

尸魂界からの期間後、その内に秘めた虚の影響で、自身の力と精神が非常に不安定になって一護。そんな彼に対して外部から刺激を与えればどうなるのか興味を持ったのだろう。

成る程。実に藍染らしい考えだ。反吐が出る。ノイトラは内心で吐き捨てた。

「…あん？」

先にクレーターを出たヤミーが不審な声を上げる。

それにノイトラは反応し、即座に響転でクレーターの外へと出る。

「何だよこれ？」

「クレーターだろ…ってか隕石でも落ちたのか？」

其処には離れた位置からクレーターを眺める一般人達の姿があった。

良く確認すれば、その人数は十人以下と意外には少ない。此処が町より遠い、森林地帯の深部である事が功を奏した様だ。

恐らく部活の走り込み途中だったのか、空手部らしき白い道着を来た体格の良い若い男連中が野次馬のその殆どを占めている。

「ちよつと、迂闊に近付くなお前等！ 危ねえぞ!!」

そんな彼等を、同じく道着を身に着けた、ショートヘアで何処と無く男勝りな雰囲気  
の少女が後ろから注意を促している。

ノイトラは彼女の正体に心当りが有った。

ありさわ たつき  
有沢竜貴。空座第一高等学校の生徒で、同じく其処に通う一護のクラスメイト且つ幼

馴染。

今迄複数に亘って一護達の関係した事件に巻き込まれた影響か、霊圧知覚が変化。その時の記憶はルキアにある程度消されているが、ふとした拍子に自らの身に起きた変化を自覚すると同時に、さり気無く一護達の動向を気にしている。

ノイトラはふと思った。

竜貴は現在の出来事の後、空座町に現れたグリムジョーと一護の姿をハッキリと目撃している。

少なくとも、彼女は自分達の姿を視認出来ているのでは――。

「…え……誰……?」

「んだア? 見えてんのかこいつ?」

「——っ!? 早く此処から離れんぞ!」

その予想は当たっていたらしい。竜貴は明らかにクレーターの前に立つヤミーに視線を固定したまま、部員達に向かって声を荒げた。

その顔色は悪く、呼吸が乱れ、汗が止めど無く流れている。

恐らくヤミーの霊圧に中てられたのだろう。今は離れている為に影響は薄い様だが、これ以上近付かれれば間違い無く影響が表れ始める。

「いきなりどうした有沢?」

「…おい、顔色悪いぞお前。大丈夫か?」

「あたしの事はどうでも良い、早くしろ!!」

霊圧知覚を持たないその男達は悲鳴を上げる己の魂に気付かぬまま、切羽詰まった表情を浮かべる竜貴を逆に氣遣う素振りを見せる。

その遣り取りを眺める事数十秒、短気なヤミーは遂に痺れを切らした。

「…さつきからゴチャゴチャとうるせえ奴等だ。吸うぞコラ」

苛立った様子でヤミーがそう言い、何かを吸引するかの様に唇を尖らせた瞬間——  
ノイトラは動いた。

「ムゴツ!?!」

「止めろ馬鹿野郎」

ヤミーの口を自身の右手で塞いだのだ。

やった本人としては極めて不本意だったが、止むを得ない状況だったとして割り切る。  
る。

「…っ…ぶっはア!! いきなり何しやがるノイトラ!!」

掌に残ったやや湿った柔らかい感触に顔を顰めそうになりながらも、ノイトラは抗議

して来るヤミーに冷静に返す。

「…テメエ、今魂吸ゴンスイしようとしやがっただろ」

「ああ!? それがなんだってんだよ!!」

「ハア…」

怒声と同時に次々と霊圧を放出させるヤミーに、溜息を吐く。

——何でこんな奴が第0ゼロ十刃なんだ。

寧ろこの程度の器で今まで組織の一員としてやって来れた事自体が奇跡だ。

ウルキオラの方を覗いてみれば、もはや見る価値も無しと言わんばかりに目を瞑って静かに佇んで居る。

「藍染様の目的を忘れたのか」

「目的だア?」

明らかに覚えていない。頭を傾げて考え始めるヤミーの様子から、そう断言する。全く以て見た目通りの脳筋である。

恐らく後数分時間を与えたとしても、その内思い出せない事にキレ出すに違い無い。致し方無く、藍染の事を大凡把握しているであろうウルキオラに問い掛けた。

「オマエなら解るよな」

「…王鍵おうけんか」

ヤミーとは違つてほぼ即答に近い回答を返すウルキオラ。

そのキーワードを聞いて更に数十秒後、やつとヤミーは合点がいった様で、おオ、と大声を上げる。

王鍵とは尸魂界に存在する霊王及び王族の住まう空間へと行くための鍵。創生するには十万の魂魄と半径一霊里の重霊地が必要となり、その条件を満たす材料こそがこの空座町なのである。

時代と共に移り変わり、霊的な物が集まりやすい場所の事を重霊地と言う。それがたまたまこの空座町だっただけで、この地に住まう住民達にとって不幸以外の何物でも無いだろう。

ヤミーの魂吸は文字通り、自身を中心点にした一定の範囲内に存在する魂魄を根こそぎ吸い取る技だ。

ノイトラが探查神経を全開にして探った結果、周辺に存在している魂魄の数はざっと二千から三千といったところ。空座町は都市部の一つでもあるので、この人口密度には納得だ。

王鍵の創生に必要なのは十万の魂魄と謳っているが、恐らくこれは正確な数字ではないだろう。大凡と言うだけで、もしかすれば九万と八百程度だったり、はたまた十万と数百だったりするかもしれない。

もしそうだとすれば、一気に二千以上の魂魄を失うのは痛手である。だからヤミーを止めた自分のこの行動に不自然さは無く、藍染を裏切って人間達に味方している様には映らない筈だ。

ノイトラは自身の不安を払拭する為に、内心で何度もそう自分に言い聞かせた。

実は任務への同行が決まった日、ノイトラは茫然としながらも、上手く働かない脳を何とか回しながら一つの目的を作っていた。

それは自分達とは無関係の人々の犠牲を少しでも減らす事だ。

偽善とも取れるこの目的。だがノイトラは自らが知り得ない場所での出来事なら兎も角、眼前で無関係の人々が犠牲になっても平然として居られる自信は無かった。

だからこそ考えた。藍染と破面達に裏切りと取られず、且つ違和感の無い賢い救い方を。

それがこの王鍵の創生に話を繋げる事だった。

「ノイトラに救われたなヤミー。下手すれば後で藍染様から御叱りを受けていたぞ」  
「ぐっ…」

どうやらウルキオラは納得した様だ。

この場は全面的にヤミーが悪いという流れが出来た事に、ノイトラは安堵の溜息を吐く。

そして前を向き——絶句した。

先程までの野次馬連中が、全員倒れ伏していたのだ。

それも竜貴も含めて、だ。

「——っ!?!」

ノイトラは驚愕を隠せなかった。

声は漏らさなかったが、その内心では疑問ばかりが浮かんでいた。何故だ、どうして、と。

直ぐ様、現世訪問から現在にかけての記憶を振り返る。

そして気付く。原因は先程ヤミーが放出した霊圧にあると。

これは己の失態なのかもしれない。ノイトラは中途半端にヤミーの怒りを刺激する様な態度を取った事に後悔する。

念の為に探查神経で倒れた連中の魂を探るが——案の定、一つを除いて一切見当たらない。

ふと、ノイトラは気付く。周囲の霊子の濃度が少し上がっている事に。

つまりそれは彼等の魂は完全に消滅、霊子となって大気に分散してしまった事を証明していた。

「あん？ 何だ死んでんのかよ」

「当たり前だ。只の魂にそんな霊圧をぶつけければそうなるに決まってる」

思えば初めての失敗らしい失敗だ。ノイトラは無力感に襲われると同時に自信も無くす。

こんなんでこの先もやっていけるのかと。

だが——それだけだ。ノイトラは即座に意識を切り替える。

この様な失敗を繰り返さない、そしてこれが切っ掛けで次の展開で二の足を踏む事にならぬ様、帰還後は自身の立てた計画をもう一度吟味して見直す事に決める。

薄情に見えるかもしれないが、あくまでノイトラの主な目的はネリエルと仲間の事に關してのみ。それ以外は出来たら良いな、程度のオマケでしかないのだ。

物事の順序を誤る訳にはいかない。

——自分は誰も彼も救える様な万能な者では無い。だから割り切れ。

自分は所詮限られた範囲でしか行動出来無い矮小な存在に過ぎないのだ。

そう何度も自分に言い聞かせる。

「…お？何か一匹生きてるのが居るじゃねえか！」

気まずさを誤魔化す様に、ヤミーはズカズカと前方へ歩を進める。

彼が言う生き残りは竜貴の事だ。実際、彼女の魂は危険な状態ではあるが、無事ではある。

意識も残っている様で、今も力が抜けて倒れた自身の身体を必死に持ち上げようと足掻いている。

「何が…起きたんだよ一体…」

息も絶え絶えに、竜貴は倒れたままピクリともしない部員達を見渡す。

顔を視認出来る者は皆白目を向いて、息もしていない。

死んでいると、竜貴は悟った。

そんな彼女の前に、巨大な影が現れる。

ヤミーだ。彼は竜貴の生存を間近で確認すると、歯を剥き出しにした見苦しい笑みを浮かべた。

「俺の霊圧に耐え切ったって事は、出てるにしろ隠れてるにしろちったあ魂魄の力が有るってこった！ なあ!!」

「あ…う…」

優々と竜貴に話し掛けるヤミーだが、彼女としては反応を返すどころの話では無い。

距離が近い為に、ヤミーの身体から無意識に溢れ出る霊圧に中てられ、魂が悲鳴を上げ始める。

「ノイトラ！ ウルキオラ！ こいつか!? 見つけ出して殺さなきゃなんねえ奴つてのは！」

そんな事知る由も無いヤミーは振り返ると、見当違いな事を二人に問い掛けた。ウルキオラは小さく溜息を吐くと、クレーターの外に出てノイトラの隣に立つ。

「…良く見るバカ。お前が近付いただけで魂が潰れかけているだろう。その程度の事すら認識出来ないのかお前は」

ウルキオラは辛辣な口調でそう返す。もはや相手をするのも面倒なのか、横のノイトラに一瞬だけ目配りすると、それ以降は完全に口を閉じた。

まるで後はお前に任せたと言わんばかりだ。

何時もとは異なる対応を取る彼の様子を不審に思いながらも、ノイトラは渋々その意図を察し、続け様にヤミーの間違いを指摘する。

「…対象の特徴はオレンジの髪で、しかも死神だろ。まさか忘れたとは言わせねえぞヤミー」

「あア!? …そうだったか?」

「…つたく、何時もバカスカ食って摂取してる栄養を少しは頭にも回したらどうだ?」

「うるせえぞノイトラ! …って事はこいつが生き残ったのはたまたまかよ」

「お、今やつと栄養が回ったか」

「だからてめえはうるせえって言ってるんだろが!!」

「何そんなキレてんだ見苦しい」

「てめえのせいだろ!! 喧嘩売ってるのか!?!」

だが何を思ったのか、指摘の後にヤミーを煽り始め、最終的には弄りへと対応を変えた。

当然ヤミーは反発するが、平然と馬鹿にする態度を崩さないノイトラに更に怒りを募らせる。

同時に霊圧も再び放出されるが、魂吸に耐えうる程の魂の強さを持つ竜貴だ。多少なら耐えきれぬ筈だとノイトラは信じる事にした。

実際、ヤミー本人は無意識の内にノイトラの方へと集中させていた様で、竜貴には殆ど影響が無かったのは幸いである。

実はノイトラのその弄りに含まれた意図は単純で、且つ是が非でも成し遂げなければ

ならないものだった。

ヤミーの注意を引く事で、この状況を引き延ばしに掛かっているのである。

それはそうだろう。ノイトラがヤミーの魂吸を止めた影響か、物語の展開速度が少し早まっていたのである。

本来であれば、この後ヤミーの正面へ一護の仲間である二人の人物が現れ、絶体絶命の竜貴を寸前で救う形になる筈のだが、それに間に合わなくなる可能性が浮上したのだ。

その為、ノイトラは表面上は何時を通りの態度をキープしているが、内心では必死にヤミーの関心を引こうと必死だったりする。

「覚えてろよこの野郎……つてあア!? 何だお前ら?」

そしてその地味な努力は実を結ぶ。

ヤミーが再び前を向くと、其処には竜貴を庇い、彼と対峙する様にして立つ二人の人間の姿が有った。

前に居るのは、右腕全体に鎧を纏った浅黒い肌の体格の良い男——茶渡さび泰虎やすとら。

竜貴を庇うのは、胡桃色のロングヘアで遠目でも判る見事なバストサイズを誇る美少

女——井上いのうえ織姫おりひめ。

竜貴と同じく一護のクラスメートであり、同時に彼と共に尸魂界でルキアを救出する為  
に戦い抜いた経緯を持つ、一護と固い絆で結ばれた二人。

彼等は共に緊張した、そして何か決死の覚悟を決めた様な面持ちで、ヤミーの姿を見据えていた。

ノイトラが不在の虚夜宮。彼に留守を任されていたチルツチは治療室に居た。

彼女は先程から落ち着かない様子で、あっちこっちを行き来している。

機嫌が悪いのか、その身に纏う不穏な雰囲気と霊圧に、雑務係の破面達は先程からずつと気が休まらず、今か今かと救世主セイエイロの到着を待っていた。

「うゝ、何で従属官の私は駄目なのよ…。ホント訳わかんない…」

親指の爪を噛みながら、ブツブツとそう呟くチルツチ。

彼女の言いたい事は理解出来る。確かにウルキオラの任務に付いて行く人数は特に制限が無かった。流石に十人単位は無理だろうが、五人程度であれば問題無さそうだった。

なのでノイトラも折角だからと、自身の従属官も連れて行く事を彼に提案した。

にも拘らず、ウルキオラはそれを断った。俺が同行を許したのはお前一人だけだ、と。その言葉にはどうにも言い表せない妙な威圧感が有ったのを、チルツチは覚えている。

「それにノイトラもノイトラよ！ 何が、アイツとはあんまり話した事も無いんだが…

”よ！ あの人形野郎、しっかりあんたに限定してたじゃない！”

「そうですねゝ。あの人の事ですし、私達の与り知らないところでちやっかり交流を深めてそうですねゝ」

「そうそう、あれで付き合いが無いとか絶対嘘…ってうおう!? 何時の間に居やがったためえ!」

突然背後から聞こえてきた声に、思わずその場から飛び退く。

其処には何時も通りの笑顔を浮かべながら、その眉間に皺を寄せているセフィーロの姿が有った。

「もしかして…怒ってる?」

「はい、簡単に言えば——仕事の邪魔してんじゃねえよ糞雌があ!!!  
…って事です  
ね」

「ま、誠に申し訳御座いませんでした」

セフィーロは何時ぞや見せたキレ口調を見せたと同時に、チルツチのみに向けて一瞬だけ本気で霊圧を放出する。その直後、チルツチはノイトラと全く同じ、見事なまでの土下座を見せた。

同じ主を持つ従属官であり、恋のライバルでもある二人だが、この遣り取りを見る限り、明確な力関係が出来上がっているのが解る。

理由はセフィーロがノイトラの従属官へと着任して間も無い頃に行われた、十刃落ちメンバーも交えたノイトラ主権の合同鍛錬が切っ掛けだ。

その鍛錬の中で最後に模擬戦を行った結果、純粋な力関係ではチルツチが上を行くが、戦闘に関してはセフィーロの方に軍配が上がるという事が判明したのである。

別にセフィーロが鍛錬の末にパワーアップしたとか、そういった理由では無い。基本的に戦闘力が無いのはそのままだが、彼女の帰刃形態の能力が原因なのだ。

彼女の帰刃、治癒女神の持つ能力は治癒の一辺倒かと思われていたが、実はそれ以外の能力も有った。

相手の精神に直接干渉して錯乱させたり、相手の意識を短時間のみだが意のままに操ったりと、搦め手にも特化していたのである。

物理攻撃に特化した帰刃を持つチルツチにとつて、セフィーロの能力は相性が悪いどころの話では無かった。

それ以降も二人は何度にも亘って模擬戦を行ったのだが、全てがチルツチの敗北で終わっている。

ある時は、戦闘開始から精神干渉され、見事に終始翻弄され続け、度々生じる隙に威力の低い虚弾を延々と打ち込まれた末に敗北。

またある時は、精神干渉と同時に精神操作も受け、

最近ではセフィーロも自分の仕事もそこそこに、積極的にノイトラの鍛錬に参加し始め、尋常では無い速度でメキメキと実力を上げて来ている。

本人いわく——勘が戻って来たとの事だが、チルツチには理解出来無かった。

そんな補助特化型のセフィーロがもし中近接戦闘特化型のノイトラと組んで戦闘を行えば——想像するのも恐ろしい蹂躞劇になる光景しか浮かばない。

「では今から消耗品リストのチェックを行おうと思つてましたので、それを手伝つて頂ければ許します」

「…もうそれで良いわよ」

「はい、まずこのメモ用紙とペンをどうぞ」

「はいはい……ハア……」

チルツチは溜息を吐きながら、セフィーロの後に付いて行く。

何だかんだ言つても二人は仲良くやれている様だ。もしこの光景をノイトラが見ていたとすれば、まず間違い無く父性を感じる優しい表情を浮かべているだろう。そして次にそれに気付いたチルツチがキレて暴れ出し、セフィーロが脅し掛けて二人を土下座させて取束するという流れが出来上がるだろう。

以前まで虚夜宮内に於いて修理履歴が多い宮の上位に食い込んでいた第5十刃の拠点だが、セフィーロがノイトラの従属官となつてからは、最後の件の御蔭か一気に下位

まで落ちていた。

大凡三十分、手際良くセフィーロの指示通りに作業を進めていたチルツチは、ふと問い掛けた。

「…ねえ、セフィーロ」

「んん〜？ 何ですか〜？」

「あんたとノイトラってさ——」

—— 一体何を企んでんの。

次の瞬間、問い掛けられたセフィーロの表情が消えた。

作業の手を止め、スツと姿勢を正して真っ直ぐに立ち上がる。

「…何時からですか」

「つい最近、ね。あいつが何時に無く真面目な顔しながら治療室じりょうしつに向かつてったから…  
気になって後から付けたの」

バツが悪そうな顔をしながら、チルツチは独白を続ける。

背を向けたままのセフィーロが、その手に斬魄刀を取り出している事に気付かぬまま。

「鍛錬後だったし、あいつも油断していたのね。あたしの粗末な霊圧の消し方でも気付かれなかったわ」

「それで…聞いたんですか…?」

「ええ、幸い人気も無かったし。その後、ドア越しにあんた達の会話を盗み聞きしたわ。…殆ど聞き取れなかったけど…」

セフィーロは内心で舌打ちした。まさか藍染とザエルアポロ対策に仕込んだ、外部からの干渉の一切を断つ自室の壁が裏目に出るとは、と。

確かにノイトラは最近、鍛錬後の消耗度合が大き過ぎる。自分としては事情は理解しているのに遣り過ぎなければ特に文句は無いし、多少注意力が散漫になるのは致し方無いと、彼女自身は考えていた。

だがチルツチの場合は少し勝手が違う。何せ従属官になる前に何度も第5十刃の拠点へと忍び込み、その際に霊圧を消して隠密行動を繰り返していたせいで、彼女自身は気付いていないがその霊圧隠秘能力はずば抜けている。

正直言つて、自分が頗る調子が良い状態だったとしても見付けるのは中々に骨が折れる。

セフィーロは自覚無き隠密チートと化しているチルツチに少し殺意を抱いた。

「けど——最後の部分は聞き取れた」

「……何と……？」

「何だかの為に『俺は藍染を止める』……って、確かにあいつは言つてた」

セフィーロは思わず斬魄刀を取り出し、その柄を握る自身の右手に力が籠った。

——不確定要素となるのなら、今の内に此処で消しておくべきか。

一瞬そう考えたが、何とか踏み止まる。

チルツチの事は嫌いでは無い。あの不器用ながら真つ直ぐな性格は寧ろ好きな部類だ。

ノイトラとの共同目的を無し遂げた後も、彼女とは今後上手く付き合っていきたいと思つている。

本来なら自分達の秘密を知った者は生かしておく訳にはいかない。

確かに意図的に此方側へ来る様に仕向けはしたが、此処まで深く踏み込ませる気は無

かった。

暫し悩んだ末——セフィーロはチルツチを試す事にした。

もし自分達の目的にそぐわない答えをする様であれば、その時は然るべき対応を取るだけだ、と。

「…チルツチちゃん」

「…何よ？」

「貴女は…ノイトラさんの事を愛してますか？」

「んなっ!? てめえいきなり何言つて——!?」

「どうなんですか？」

一気に顔を沸騰させて答えに詰まるチルツチを気にも留めず、セフィーロは間髪を留れずに問い詰める。

その有無を言わせぬ雰囲気、チルツチは顔を赤くしたまま、そっぽを向いて答えた。

「あ…あ…愛…してるわよ…!!」

「それが例え——如何なる危険な状況下に置かれたとしても？」

「あ……当たり前じゃない！」

「……例え——藍染様と相對する事になっても？」

最後に振り返りながら、セフィーロはそう言い放つ。

彼女の顔を見たチルツチは絶句した。

同じだったのだ。鍛錬時の様な、意識を失う極限状態まで自分を追い詰めて続けるノイトラの表情と。

——冗談で言っている、訳では無い。

チルツチはセフィーロの本気を悟った。

一瞬だが、正直言つて何を馬鹿な事を聞くのかと思つた。

藍染の力は知っている。それが現十刃の上位クラスでも齒が立たないであろう事も。

そんな彼に相對するなど、今迄想像した事は無かつた。するだけ無駄だからだ。

だが同時に納得する。それはノイトラの鍛錬内容の最後に組み込まれている疑似戦闘。

本人も口にしなない為、一体誰を仮想敵に置いているのか一切不明だったが、恐らくそれこそが藍染だったのだろう。

常に斬新な考察をし続けるノイトラの影響か、最近になって急激にイメージ力が上

がっていたチルツチは、今やつと彼の浮かべるその仮想敵の正体を理解出来た。

正にアレは自分程度では瞬殺以外の結果を持たない、全く以て次元が違う相手だという想像は合っていたのだ。

何故ノイトラがそれ程までに藍染を敵視するのか。その疑問はセフィーロに聞けば解るのかもしれない。

——これは運命の選択肢だ。

チルツチは大凡だが、自分が置かれた状況を理解していた。

回答を誤りでもすれば、即座に消されるだろうと。

「……を……い……」

「……聞いませせんよ」

勿論、愛してる。

無論、どんな状況だろうとそれは変わらない。

当然、例え藍染と相対し——くどい。

そんな事、今更口にするまでも無い。

あの時命を救われ、従属官となった瞬間から、この命は既にあの人の物なのだから。

「何を今更な事聞いてんだつつつてんだよ……！」

「っ!!」

「藍染様が相手？ その程度の事でこのチルツチちゃんが怖気付くとも思つた？ 随分安く見られたもんよね！」

腕を組み、堂々とセフイーロに言い放つ。

チルツチのその最後の台詞が予想以上だったのか、彼女は驚愕に目を見開いている。

「だから——聞かせなさいよ。あんた達が何を思つて、何をしようとしてるのかを……」

正直言えば恐ろしい。藍染を敵に回すという事はそういう意味だ。

だがそれ程でも無かつた。何せ自分には誰よりも頼りになる男が傍に居るのだ。

「……解りました〜！ では今からチルツチちゃん、貴方も共犯者ですな〜！」

「寧ろ遅過ぎたくらいよ……ってかちゃん付けやめろって言つてんだろコラア!!」

「ええ〜、自分でも言つてるくせに〜」

「あんたが言うとは子供扱いしてるみたいに聞こえて嫌なのよ!!」

チルツチの本気の覚悟を垣間見たセフィーロは、態度と口調を普段通りに戻す。

何時も通りに言い争いながら、チルツチは回答後に自分が何もされなかった事から、受け入れられたのだと悟ったのだった。

彼女はその後、数十分に亘って言い争いをした後、セフィーロの自室へと招かれ、暫く出て来なかった。

全てが終わったのだろう。ドアから出てきたその顔は疲労を隠せなかったが、実に晴れやかで、何時も以上にやる気が満ち溢れていた。

——だが彼女達は失念していた。

セフィーロの自室へと消える以前までの話は、治療室の倉庫内で行われたものであり、其処も監視カメラの範囲に入っているのだと。

そしてその時の様子を、藍染の副官である一人の男が覗いていた事を。そして彼がチルツチの口の動きを読み、二人の会話内容を全て把握していた事を。

「——これはおもしろい事になりそうや…」

男——市丸ギンは不敵な笑みを浮かべながら、普段は閉じている程に細い目を僅かに見開いていた。

## 第十一話 三日月と主人公達と…

眼前に居る、虚とも死神とも取れない謎の存在に対し、茶渡泰虎はそのほぼ二メートルの体格を震わせていた。

過去にこの空座町で虚が大発生した事件が有り、それが切っ掛けで今の能力を覚醒。そして尸魂界へ訪れた際に積んだ死神達との戦闘経験の御蔭で、自分にはある程度の実力が付いたという自負が有った。

流石に護廷十三隊の隊長格レベルには及ばないが、あの無駄に刀を振り回していた自信過剰な男は八番隊第三席と名乗っていたし、あの程度の席官レベルならば制圧は容易い。

だが目の前の巨漢は違う。御世辞にも洗練されているとは言えない佇まいだが、無意識の内に身体より漏れ出している霊圧から判断するに、先程言った席官の男など話にならないのは明白。

下手すれば隊長格。自分の持てる渾身の一撃を埃を払うかの如く片手で打ち払い、通常の刀と小太刀の二刀一対から繰り出す不可視の一閃で呆気無く勝負を終わらせた男。八番隊隊長——京楽きょうらく 春水しゅんすいに匹敵するのでは、と。

——やはり井上が、それどころか自分もどうか出来るレベルではない。

泰虎は警戒を解かず一瞬だけ背後に視線を移し、自分と同じく奴等の霊圧を察知してやって来た仲間の井上織姫と、同級生である竜貴の様子を確認する。

此処に到着する前に予め話を付けて置いた御蔭か、織姫は今のところ現在の位置より前に出ようとする意思は見られない。

ならば彼女には今の内に竜貴を連れて避難させ、一護が此処に来るまで自分が時間稼ぎするのが得策か。泰虎は判断する。

「…井上。話した通り…有沢を連れて退がってくれ」

「うん…。無理しないでね茶渡くん…」

一瞬泰虎の身を案ずる様子を見せた後、織姫は竜貴に肩を貸しながら後ろの安全圏へと下がって行く。

それを確認した泰虎は鎧に覆われた自身の右腕をやや背後へと引き絞り、拳を硬く握って戦闘態勢を取った。

「ノイトリア!! 何だこいつは!？」

「…俺に聞くな馬鹿。少しは探査神経鍛えとけつて馬鹿。そんなんじやこの先やつていけねえぞ馬鹿。少し霊圧が有るだけの人間だよ馬鹿」

ヤミーは先程までの遣り取りで怒りを蓄積していた影響か、ややドスの利いた声で問い掛けた。

ノイトラは面倒臭そうに溜息を吐くと、随分な言い回しで返事を返す。  
それが余計にヤミーの怒りを増幅させる原因になろうとも御構い無しに。

—— 奴等は仲間では無いのだろうか。

泰虎はそんな二人の遣り取りを見て思わずそう思った。

「オイ!! 馬鹿馬鹿うるせえんだよてめえ!!」

「騒ぐな馬鹿。こつち見てどうすんだ馬鹿。取り敢えず前向け馬鹿。そいつ霊圧高めてんだろ馬鹿」

「う…うがああああつ!!」

当然の反応と言うべきか、ヤミーは只管に馬鹿と連呼するノイトラに対して更なる憤りを露にする。

流石にヤミーとて、決して自分の頭が良く無い事は理解している。そしてこの場に於いて最も立場が低く、非が有るのは自分であるとも。

しかも今は任務が最優先事項であり、流石に仲間割れをする訳にはいかない。我儘で付いて来た上に何度も失態を重ねる事をしてしまえば、帰還後に藍染から一体如何程の罰を受ける羽目になるのか——想像もしたくも無い。

故にこの行き場の無い怒りをどうすべきか迷った末、頭上に広がる雲一つ無い澄んだ青色の大空へと向けて咆哮を上げた。

確かに何度も馬鹿呼ばわりさせるのは気分的に良くは無い。だが実際にその発言内容を今一度確認してみると、その馬鹿の部分を除くれば普通に的確な答えとなっていたりする。

——ノイトラは無意識の内にツンデレ街道を真つ直ぐに進んでいた。

泰虎はそんな二人に対し、戦闘態勢を維持したままで少々困惑していた。

取り敢えず仲間割れしている様に見受けられる。一応チャンスではあるので、今の内に攻撃を仕掛けた方が良いのだろうか、と。

コントを思わせる遣り取りに、思わず緊張感が薄れてくるが、ふとその視界に倒れ伏した男達が映った。

もはや魂が消え失せ、物言わぬ死体と化していたが、泰虎は彼等の姿に見覚えが有つ

た。

同じ空座第一高等学校に通う生徒であり、その中でも特に全国レベルの実力が有ると有名な空手部、その部員達だ。

アルバイト等の関係で帰宅部である彼は下校時、普段なら親友の一護と共に帰宅の途に就くのだが、その道中で走り込みしている姿を良く見掛けるからだ。

「ウルキオラ!! てめえからも何とか言えよ!!」

「…喧しいぞバカ」

「おまえもかよオオオオ!!?」

—— 奴等は敵だ。彼等の仇を取らねばならない。

例え人間味溢れていようとも関係無い。泰虎は緩み掛けた精神を引き締め、右腕全体に全力で霊圧を込める。

後の事は一切考えていない。相手は紛れも無く強敵だ。長期戦に持ち込まれれば、実力的に劣る此方が瞬く間に不利になる。

ならば油断している隙に最大火力の技をブチ込み、超短期決戦で勝負を付けるべきだ。

巨大虚程度なら軽く屠り去り、最下級大虚に手傷程度なら与えられるであろう量の霊圧が、その右腕に集束し、固められてゆく。

泰虎のその変化に気付いたノイトラは、先程まで無関心を貫いていたウルキオラに声を掛けた。

「ウルキオラ、今から右に二歩移動しろ」

「…何?」

「調査の一環だ」

不審に思いながらも、ウルキオラは言われた通り、右横に二歩程度移動する。ノイトラはそれを確認すると、自分も逆側に二歩移動する。

そして未だに後頭部を盛大に掻き毟って怒りを表現するヤミーの位置と泰虎の位置に脳内で直線を引き、其処に交わる存在が何も無い事を探查神経で確かめる。

「おいヤミー」

「あア!?! 今度はなんだよ!?!」

「後ろだ」

「何…っっておおおオオオ!!!?」

ノイトラがヤミーに注意を促すが、時既に遅く、泰虎が右拳を前に突き出した直後だった。同時に右腕全体から固められた霊圧が放たれ、小型の虚閃を思わせるビームの様な一撃となつて前方へと直進する。

遅れてヤミーが振り向くが、元々動きも反応も鈍い彼だ。回避行動も何も出来ぬまま、その一撃に飲み込まれていった。

「…何の調査だ？」

盛大に砂埃が舞う中、事前に移動していた御蔭で難を逃れたウルキオラがノイトラに問う。

ノイトラは一見普通に見えて、その実今にも笑い出しそうな顔を必死に抑えながら、こう返した。

「威力観察。丁度良い肉壁が有るんだ、利用しない手は無えだろ」

ノイトラは調査と謳った時間稼ぎが順調である事に内心で大いに喜んでいた。

ノイトラは任務出発の直前、一般人への被害の予防策以外にも立てていた実験的な計画が有る。

それはイレギュラーたる自身の行動の影響力の調査と、従来の流れに大きな相違が起きない為の対策だ。

これからヤミーの手で重傷を負う羽目になる泰虎。そして唯一の攻撃手段を失う結果となる織姫。

ノイトラは考えた。ここで時間稼ぎをして展開を遅らせたらどうなるか、と。

まず泰虎がヤミーの一撃を貰う前に一護が現れ、そのままヤミーとの戦闘に入る。

親友の意図を汲んだ泰虎は手助けしたい自分の気持ちを抑えながら、織姫と竜貴の護

衛の務めを果たす。

そして途中で一護が内なる虚の妨害で身動きが取れなくなり、一方的にヤミーの反撃を受け続ける状態になったとしても、確実に織姫が飛び出そうとするのを防ぐ。

——逆に織姫の代わりに泰虎自身が飛び出しそうだが。

「茶渡くん!! しっかりして茶渡くん!!」

だがそんな想像とは異なり、眼前には木を背凭れにしてグツタリと座り込んでいる泰虎に対し、悲鳴にも等しい声で必死に呼び掛ける織姫の姿が有った。

泰虎の身体は正に満身創痍。右腕は所々がおかしな形に拉げ、関節が二倍以上に増えている。頭部や口元からも大量に血を流しており、素人目に見ても重傷なのは明らか。まあ致命傷まで至っていないのは幸いと言えるが。

その光景を目の当りにしたノイトラは思わず内心で舌打ちする。

——これが歴史の修正力というやつか。

別にノイトラは何がなんでも史実の通りにせねば、という考えは持っていない。

只極力その通りの方が良い、というだけだ。

多少粘った末で崩壊が回避不可能となれば、それはそれで致し方無いとして諦める。

後でじっくり対策を考えるだけだ。

だが自分から崩壊へと向かわせる気は毛頭無い。

その理由は藍染への対策にも大きく関わっているからだ。

本来迎えるべき歴史を根底から覆すメリット、デメリットは何か。

前者は流れを知っている分行動のタイミングが計り易く、事件等を事前に防げたり、上手く行けば黒幕やラスボス等を一気に退場させられる。

後者は覆してから先の未来が一切判らないので、今後起こるであろう事態を予測し、対応しなければならぬ事。下手すればより酷い結果に終わる可能性も有る。

さて、このBLEACHという物語にそれを当て嵌めて考えてみよう。

実行する行動タイミングは良い。だがほぼ全ての事件の黒幕が藍染である現状、事件の事前解決などまた夢の話で、彼を退場させられる可能性も万が一にも無い。

つまり道程全て、藍染の退場が前提条件なのだ。

もし彼の存在を残したまま、物語の流れを崩壊させた場合、彼の行動が全く読めなくなるという事で詰みとなる。

最終決戦時まで一切自身の目論見を悟らせなかつた藍染の事だ。如何なる流れになるろうが、何時も通り幾重にも策略を巡らせながら行動するだろう。

未来の記憶というアドバンテージが無くなり、条件が対等となったノイトラに為す術

は無い。

現在所持している戦力では、藍染に一矢報いれるか否か程度のものしか無い。

ノイトラは決して何処その転生チート能力持ちのオリ主では無いのだ。

故に本来なら辿るであろう道程を重視しているのである。

例えばの話だが、先程竜貴が絶体絶命の危機に陥っていた時、ノイトラが何もアクションを取らずに傍観していた場合、どうか。

まず確実に彼女は死ぬだろう。そしてその事実は一護達に激しい動揺を与えるだろう。

親友たる織姫は冷静でいられる訳が無いし、泰虎はそんな彼女のカバーと同時に、ヤミーを相手取らなければならないという窮地に立たされる。

そして仲間を誰より大切に行っている一護の精神に何も起きないと、または内なる虚が何もしないと思えるだろうか。不可能だ。

もし其処で一護が虚化して暴走でもすれば——後は泥沼な展開しか思い浮かばない。

ノイトラは周囲に聞こえない様、静かに吐き捨てる。

「…どうすりゃ良いってんだよ」

ヤミーが霊圧のビームに飲み込まれた後、ノイトラは再び探査神経を発動し、一護の現在地を確認していた。

その位置は思いの外近く、彼が瞬歩を連発すれば大凡二分程度で到着するであろうと距離。

ならば次は如何なる方法で時間を稼ぐか——そう思った直後だった。

先程の一撃に全力を込めた影響だろう、肩で息をする泰虎の前に、全身を砂塵で汚したヤミーが現れたのだ。

響転だ。第10十刃の通常時と第0十刃の完全解放時にも一切使用した事の無かったヤミーだが、流石に十刃に入っているだけあるという事か。他の十刃達のそれと比較すれば極めて出来ない代物だったが、泰虎の不意を突くには十分過ぎた。

当然、その身体には傷は一つも付いておらず、驚愕に目を見開く泰虎目掛け、丸太の如き太さの右腕を振り下ろした。

瞬歩や響転に反応出来る程では無いが、能力に目覚める前から場面数を踏んできた御蔭で鍛えられた勘が手助けし、即座に右腕を盾にする事に成功した泰虎。

だがヤミーの一撃は到底その程度の防御力で止められる様な威力では無く、直撃と同じ時に、彼のその巨体はいとも簡単に吹き飛ばされていた。

泰虎は地面を何度も転がった後、背後の大木へと叩き付けられて停止。そして現状へと至る訳だ。

「ああ〜!! 御蔭で服が汚れちゃったぜ!! これ新品だったのによオ!!」

ヤミーはそう言いながら、明らかに元からサイズの合っていない上の白装束の左前襟を摘んでヒラヒラと扇ぐ。

泰虎をノックアウトした事である程度の鬱憤を晴らせたのだろう。その表情は先程までより幾分か緩和されていた。

敵を蹂躪して高揚した気分をそのままに、ヤミーは次の標的を視界に捉える。

「ノ…いや、ウールキーオラ〜あ。この女もゴミか〜?」

品性の欠片も無い加虐的な笑みを浮かべながら、判り切った事を間延びした口調でウールキーオラに問う。

一瞬ノイトラと言いつけかけた様だが、先程の二の舞を踏みたくないのか、ちやつかり即座に言い直していた。

「…ああ、ゴミだ」

考える事を完全に放棄したヤミーに対し、もはやツツコむ気も失せたのか、ウルキオラは静かに答えると、それ以降は目を閉じて再び我関せずなスタンスへと戻る。

その隣ではノイトラが任務とは全く関係無い事を考えているのを考慮すると、この場に於いて任務に最も真面目に取り組んでいる者は皮肉にもヤミーだけだった。

「そうかい!!」

御墨付きを貰ったヤミーは、今度は白い歯を剥き出しにして暑苦しい笑みを浮かべる。

織姫が泰虎よりも小柄の為か、拳では無く人差し指を突き出し、彼女を潰しに掛かった。

ノイトラはその光景を、一挙一動たりとも逃さぬ様観察し続ける。

このまま何のイレギュラーも無ければ、あのヤミーの攻撃は織姫に傷一つ付ける事は叶わないまま終わる。

それは彼女の持つ霊能力である盾舜六花<sup>しゆんしゆんりつつか</sup>。其々に花の名を冠した妖精のような存在を呼び出して盾を作り、対象に起こったあらゆる事象を拒絶する——時間や空間の帰など話にならないレベルの能力。その持てる三つの技の内一つ、三天結盾<sup>さんてんけつしゆん</sup>という防御術で防ぐ筈だ。

だがノイトラにはそうはならないだろうという確信が有った。その理由は、後コンマ数秒でこちらに到着する見込みである一際大きな霊圧が証明している。

どうやらウルキオラも寸前で気付いたらしい。彼は閉じていた目を見開くと、それが向かつて来る方向へと顔を向けた。

「あ……」

「……な……!?!」

一般的な人の頭部に匹敵する大きさの指が間近へと迫った時、確かに織姫は迷わず三天結盾を発動させんとした。

死神の斬魄刀と同様、能力の媒介である兄の形見でもある六つの花の形をしたヘアピンより、火無菊<sup>ひなきく</sup>・梅厳<sup>ばいこん</sup>・リリーの三人の妖精が飛び出し、眼前に三角形の盾を形成する

——よりも早く、ヤミーと織姫との間に入り込んだ影が存在した。

咄嗟に能力を解除する織姫と、驚愕の余り声を漏らすヤミー。

後者の反応は致し方無い。何せ織姫を完全に仕留めたと思つた瞬間、鞘も柄も鏢もハバキも何も無い、出刃包丁のような形状の巨大な刀が現れ、その腹に当たる平地ひらちが自身の指を止めていたのだから。

只の剥き出しになつた刀の刀身、その後端の茎なかじ尻じりから伸びた晒しが巻き付いた茎なかじを握っている手は一つ。つまり未解放状態とはいえ、ヤミーの一撃を片手で防いだという事に他ならない。

「何だてめえは…!?!」

力比べとなれば自分の右に出る者は居ないという自信が容易く崩されたヤミーは、ゆっくりと突き出した手を引くと、表情を驚愕の一角で染めたまま、その影に叫んだ。

死神である事を証明する黒の死覇装、オレンジ色の髪に茶色い瞳、眉間に常に皺を寄せた二枚目の青年。それがその影の正体だった。

彼は己の斬魄刀たる巨大な刀身——さんげつ斬月を防御の形から正眼へと構える。そして僅かに顔を振り返ると、自身の背後の織姫の無事、そして泰虎の容体を確認し、ヤミーを睨み付けた。

「……黒崎くん……!」

「…悪い、遅くなった井上」

この物語の主人公——黒崎一護が其処には居た。

自分が最も信頼し、そして恋い焦がれる彼の登場に、織姫は安堵すると同時に嬉々とした声を漏らす。

一護は背を向けたまま、その声に応える。彼の声は平静を保っている様だったが、その顔には到着が遅れた事による後悔らしき感情が滲み出ていた。

ノイトラは高揚する自身の精神を抑えながら、思った。

——こいつは想像以上だ。

別に一護の実力が想像以上に高かったという訳でも、格好良かった訳でも無い。

例えるなら一般人がある日突然世界的スーパースターにバツタリ遭遇したというイメージか。

そうなれば恐らく大半の者が極度の緊張と興奮の余り茫然自失になり、全身を硬直させて動けなくなるだろう。それを抑えているのだ。

ノイトラの中身は健全な若者だ。漫画だってアニメだって、王道的ストーリーは大好

きだった。

その中でもBLEACHという漫画は小さな頃から読んでいた事も有り、愛着の度合は凄まじかった。

——いちごー、おれだー、月牙天衝してくれー。

馬鹿臭いノリではあるが、藍染の部下という今の立場が無ければ真っ先にしていたかもしれない。ノイトラはそれ程までに感動していた。

「ごめん……ごめんね黒崎くん……私が……私をもっと強かったら……」

「……謝んねーでくれ、井上」

織姫は極限まで張り詰めていた緊張の糸が切れ、地面にへたり込んだ。

膝の上に握り締めた手を置き、顔を俯かせて己の罪を懺悔するかのように、そう零し始める。

そんな彼女の荒んだ心を、ぶつきらぼうな口調だが、誰よりも仲間を思う優しい感情の籠った一護の言葉が癒す。

その直後に膨れ上がる霊圧。ヤミーの様に所構わずぶち撒ける様な雑な代物とはまた異なる、包み込む様な柔らかさを持ちながらも何処か極めて不安定で荒々しい、そんな

な霊圧が。

一護は斬月の構えを、今度は突きを放った直後を思わせる、前方に突き出した形へと変える。

死神の斬魄刀の持つ能力解放と同時に形状を変化させたりもする始解<sup>しかい</sup>。その更に次の段階に存在する——卍解<sup>ばんかい</sup>だ。

基本的に始解の強化版と言っても過言では無いそれだが、何とその値は五倍から十倍。

その強力さ故に斬魄刀戦術の最終奥義とも謳われ、習得するには才有る者でも十年鍛錬が、そして更に使いこなすにはそれ以上の年月を要する。

「心配すんな」

だが主人公補正を味方に付けた黒崎一護にそんな常識は通用しない。

彼はとある外部協力者が持ち込んだ転心体という霊具の人形を使用した修行により、その卍解習得を三日という極めて短期間で成し遂げたのだ。

朽木ルキアを救出する目的の最大の障害となる、六番隊長であり彼女の兄である、朽木白哉。護廷十三隊の死神の中でも、斬拳走鬼<sup>ざんけんそうき</sup>全ての分野に於いて特に高い実力を持

つ彼を、一部を除いて一護はその卍解で見事打倒した。

その勝利した場面を読んで心躍った読者は数多く居る筈だ。

一護の卍解時の特徴的な動作を確認した刹那、当然と言うべきかノイトラの精神は更なる興奮を覚えた。

来る、遂に来るのかと、子供の様に燥ぎ出そうとする身体を抑え、この決定的場面を逃すまいと、脳内カメラを最大画質設定で起動する。

「俺がこいつらを…」

一護はヤミーを含めた三人の十刃を全て視界に捉え、叫んだ。

「…倒して終わりだ!! 卍、解!!!」

全身に膨れ上がった霊圧は斬魄刀の刀身にも宿り、一気に爆発した。

その余波は天高く立ち上り、一護が立っていた周囲には砂塵が立ち込め、その場に居合わせた者全員の視界を塗り潰す。

砂塵が収まり始めると、その中心から先程見たオレンジの髪が真っ先に覗き、やがて

その全貌が露になる。

黒いロングコートに似た独特の死覇装を身に纏い、卍型の鏢と柄頭に途切れた鎖を繫いだ、全てが漆黒に染まった長めの斬魄刀が右手に握られている。

通常の死神の卍解とは巨大なもののだが、一護の場合は圧倒的に小型。下手すれば一種の始解だと言つても違和感は余り無いと思える程。

だが侮るなかれ。その解放された強大な霊力の全てをその小型に凝縮する事で、卍解としての強力な攻撃力を保つたまま超高速の斬撃と移動が出来、小型化による霊圧消費率の低下で長時間の維持を可能にした、正に安くて強い売り文句を形にした様な卍解なのである。

「———  
てんざんげつ  
 “天鎖斬月”」

———でもまあ折角のその強力な卍解も、王道ストーリーには欠かせない要素、インフレというもののせいで一気に活躍の場が狭まるのだが。

ノイトラは残念に思いながらも、この破面篇で唯一と言つて良い、一護の卍解の無双シーンを脳内に記録せんと更に集中力を高めたのだった。

その後の展開を語るとすれば、大凡はそのままであつた。

調査対象の登場に、ラツキ<sup>スエル</sup>キーと叫んだヤミーは速攻で右腕を振り上げると、何の警戒もしないまま一護に殴り掛かつた。

だが正解した一護の前ではその攻撃は兎戯に等しく、容易く止められる。

驚愕するヤミーを尻目に、一護は泰虎の怪我の借りを返す意味合いで、次の瞬間には既にヤミーの右腕の上腕二頭筋の中心から先を両断、斬り落とされた部位は宙を舞つていた。

公式的な情報ではノイトラに次ぐ硬度を持つヤミーの鋼皮。それを物ともせず腕を斬り裂いて見せた一護の斬魄刀の威力に、ウルキオラは思わず目を見開いた。

鈍重なヤミーは一護の超高機動戦闘に為す術も無く、全身を何か所も斬り刻まれて息も絶え絶えの状態で、止むを得ず最後の手段を選択した。

「…おい、こんな奴相手に斬魄刀まで使う気か？」

「うるせえつつつてんだ!!!」

ヤミーはウルキオラの問い掛けを一蹴し、斬魄刀を抜き始める。

自分をコケにした相手は許さない、徹底的に潰す。そんなグリムジョーを連想させる思考に則って。

その行動を見たウルキオラは、何故かまた隣のノイトラにアイコンタクトを取る。

——意図は何となく理解出来るが、だからと言って何故自分に頼る。

普段は限り無く優秀だが、人間関係が上手くいかない弟を持った気分を持ちながら、ノイトラはヤミーに忠言した。

「…解放までは止めとけよ、ヤミー」

「言われなくてもわかってるつつーの!!」

ウルキオラとノイトラの発言を聞いたのか、一護は目を見開いた。

——やっぱりあれは斬魄刀なのか。

「てめえ等、一体何者——っ!!?」

問い掛けようとしたその直後、自身の両目と額を左手で覆い隠すと、前のめりになり、只管に何かに耐える様な形で硬直した。

元々不安定だった霊圧が更にその度合を増し、制御を失って暴れ始める。

「くそっ…!! 何で…こんな時に…!!」

一護は歯を食い縛って必死に念じる。

——消えろ、消えろ、消えろ。

何度も同じ言葉を繰り返しながら、戦闘に回していた意識も総動員して抑え込む。

一護はこうなった原因を十二分に理解していた。

それは自分自身が抱えている内なる虚だ。

正体を知らぬまま戦っていた、眼前の死神の様な恰好をした謎の敵達。

彼等の発言から、死神なのかとも考えたが、そうでは無いと一護は断言する。

理由は彼等の持つ霊圧の異質さだ。あんな禍々しい霊圧の持ち主がルキア達の仲間

だとは到底思えなかった。

言うなれば、虚の靈圧に死神のそれが混ざったかの様に。

ふと思いつくのは前日に起きた出来事。

いきなり自分の前に現れた、オカツパ頭で関西弁を喋り、飄々とした態度で振る舞う掴み所の無い男、平子<sup>ひらこ</sup>、真子<sup>まこ</sup>。

彼は自分の所属する組織を仮面<sup>ヴァイザード</sup>の軍勢と名乗り、未だ誰にも話していない一護の抱えている虚の事を言い当てた。

驚愕すると同時に警戒する一護に対し、何と真子は自分自身の手で虚の仮面を出して見せる。そしてそのツタンカーメンを思わせる仮面を弄りながら、直後に組織へ勧誘して来た。

それは今朝になっても変わらず、剩<sup>ま</sup>え真子は学校の生徒を偽<sup>いつ</sup>つて一護のクラスに潜り込み、しつこく勧誘を続けた。

誘いを蹴りはしたが、彼に放たれた言葉が一護の中でしこりとなって残っていた。

——ホンマはもう氣<sup>き</sup>イ付いてんのと違うか。お前自身の内なる虚が、もう手エつけられんぐらい巨<sup>で</sup>かなつとる言<sup>ゆ</sup>う事に。

故に、考えてしまった。同類なのだろうかと。

この謎の敵達は、真子と—— “俺<sup>あいつ</sup>” と。

最後にそう考えた瞬間、内なる虚が体内で暴れ始めた。まるで御呼びになりましたか、と言わんばかりに。

容姿は一護本体と瓜二つ。だが白目や歯が黒く、死覇装や斬魄刀の色など何から何まで白黒が反転した奴の姿が脳裏に浮かぶ。

その顔は、あの他者を嘲笑うかの様な不快な笑みが浮かんでいた。

「ひゃっはア!!!」

「…ゴ…ツ!!」

一護が動けない事を良い事に、ヤミーは斬魄刀を納めると、優々とした表情で蹴りを繰り返した。

防御も何も無い状態で受けたせいで内臓がやられたのか、一護は黒い血を吐き出す。だがヤミーがそれだけで済まず筈も無く、今度は左手で続け様に殴り始める。

状況はこちらの優勢だった筈なのに、一気に不利にまで変貌を遂げた事に織姫は驚愕した。

一方的に殴られ続け、傷付いて行く一護。

次の瞬間、彼女は飛び出していた。

「黒崎くんっ!!!」

「…来るな井上っ!!!」

一護は咄嗟に叫ぶが、時既に遅し。彼の元へ向かって駆ける織姫の視界を覆い隠したのは、大きな手の甲だった。

盛大な鞭打の音と共に、何かが盛大に折れる音が周囲に響き渡る。

見れば織姫の華奢な身体は、一気に十メートル以上先まで吹き飛んでいた。

やがて仰向けに倒れた彼女の頭部からは、鮮血が勢い良く流れ始める。

咄嗟に防御に使ったのであろう左腕は有り得ない形に拉げていた。

「井上っ…ガッ!!」

「うるせえよ!!!」

ヤミーは無抵抗の一護に対し、間髪入れずに追撃を加える。

一護は内なる虚の妨害によって身動きが一切取れず、為す術も無い。

「ハッ!!! 何だかしらねえが急に動きが止まりやがった!! 死ねッ!! 死ねガキがッ!!!」  
「グ：アッ!!!」

——畜生。

自身の行動を阻む邪魔者に対し、一護は薄れゆく意識の中で思った。

確かに真子の言う通り、自分の抱える内こなる虚つの力は白哉と戦った時よりも大きくなっている。

だが決して表に出す訳には行かない。そうなれば最後、周囲へ無差別に破壊を撒き散らす事となるだろう。

「終わりだガキ!!! 潰れて消えろ!!!」

ヤミーはそう叫びながら、止めの一撃として拳を振り上げる。

だが一護はそれを察知していながら、何も出来無い。

——これで、終わりなのか。

ヤミーの振り下ろした拳が一護の頭上まで迫った——その時だった。

「あ!？」

一護の前に、突如として六角形の形をした紅色の盾が張られ、それがヤミーの拳を止めていたのだ。

「…やれやれ、一皮剥けたかと思いきや、まだまだじゃの」

「まあまあ、そう言わずに」

ヤミーが拳を引くと同時に盾が割れると、その内側から新たに二つの人物が姿を現した。

一人は刑戦装束けいせんしょうぞくと呼ばれる機能性を重視した武術タイプの装束を身に纏った、無駄の一切無い抜群のスタイルを持つ褐色の肌をした美女——四楓院しほういん夜一よるいち。下半身が黒のロングスパッツの様なものに脚甲が脛の部分に装着されており、彼女のメインとなる戦闘手段が徒手空拳、それも脚技主体である事が窺える。

「どおーもー。遅くなっちゃってスイマセンねえー、黒崎サン」

そんな彼女の横には、縦縞模様の帽子で目元を暗く隠し、甚平に下駄という妙な恰好をした男——浦原うらはら 喜助きすけ。

その右手には、何時もは杖に擬態している筈の、柄頭の部分がくの字に折れ曲がり、頭金かしらがねが三つ重なった、鐔の無い短めの直刀の形状をした斬魄刀が握られていた。

片や、四大貴族、四楓院家の二十二代目当主にして、〃元〃 隠密機動総司令官及び同第一分隊刑軍総括軍団長、そして〃元〃 護廷十三隊二番隊隊長。

片や〃元〃 護廷十三隊十二番隊隊長、及び技術開発局創設者兼初代局長。

現在、空座町に於ける最高戦力と言っても過言では無い二人の登場だった。

## 第十二話 三日月と店長と黒猫と…

ヤミーに殴られ続けながら、荒れ狂う自身の霊圧を必死に抑え続ける一護を眺める。現在ウルキオラが考察しているであろう内容の通り、確かに振れ幅が尋常では無い。その時、彼は振れ幅が最大の時は自身より上だと言っていたが、確かにそうだ。

——未解放の平常時であれば、の話だが。

元々疑問では有った。この任務に於ける藍染の命令は、自分達の妨げとなる場合は殺せというもの。なのに何故ウルキオラは無意識に興味を抱いたとはいえ、偶然では有るが自身を超える霊圧を見せた一護を生かしたのか。

ノイトラは考える。恐らく彼は一護のそれが自身の平常時を上回っていたとしても、帰刃すれば殺すのは容易であると判断したのだと。

「…ノイトラ」

「何だ」

「判るか」

その当人より不意に投げ掛けられた問い掛け。だが状況的を見れば、その意味は解説を受けずとも容易に察せた。

「一番アカい時は俺達よりも上だな」

「…そうか」

確認の意味も込めていたのだろう。

ウルキオラはノイトラの返答を聞くと、そのまま黙り込む。

どうやら再び一護の観察へと戻ったらしい。

しかし、とノイトラは考えながら、ウルキオラを横目に見遣る。

やはり疑問は尽きない。彼は如何なる理由から、自分を任務に誘ったのか。

そして彼自身も考えているのだろうか、頻りに自分に意見を聞く等、頼っている節がある。

推測の域を越えないが、恐らくウルキオラは藍染と共に自分を観察していたのでは、とノイトラは考える。

憑依の影響で豹変した態度、そして行動。それ等全てを藍染に見抜かれていないだろう等と、流石に其処まで能天気には思っていない。

外部干渉不可能なセフィー口の自室以外、それといった対策は取っていないが、元々監視されている事を前提で動いてはいた。

一見すると余りに不用心過ぎる。確かにノイトラは藍染に対して思考を放棄している部分がある。見方によってはそう取れるだろう。

だがそれは一応理由が有ってこそその行動だ。それに対策を立てようにも、相手が相手だ。

一護の死神化から最終決戦時に対峙するまでの軌跡全てが自身の掌の上の出来事であつたのだと豪語した藍染。

——最終的にはその想定を超えた成長を成し遂げた一護に敗北するのだが、あくまでそれは主人公補正だ。

崩玉の能力の補助が有ってこそそのものだろうが、そんな神レベルでぶっ飛んだ頭脳を持つ彼に有効な手立てを構築出来るとは思えない。と言うか存在するのだろうか。

そしてノイトラには藍染が、自分が反旗を翻す、または彼自身の思惑へ干渉する様な仕草さえ見せなければ積極的にアクションを起こす可能性は低いだろうという、少々賭けにも等しい想定もしていた。

藍染はその絶対者たる余裕の表れなのか、自分が目を掛けた対象については、秘密裏に観察したり、敢えて外部より刺激を与えて成長を促してみる等の真似をしたりと、そ

の者の辿る道程や変化を傍観して楽しむ嗜好が見られる。

——恐らく自分は既に目を付けられている。

過去に何度か、そしてこの任務への出発直前、彼から真意の読み取れない薄い笑みを向けられている事から、少なくともノイトラはそう思っていた。

だが実際、今迄表立った干渉をされた事は無いし、それどころか直接接触された事すら無い。

ネリエルにもう一度会って謝罪するという目的を達成するには、今の陣営に与している事が一番確実だ。

組織を抜けて直接ネリエルに会いに行つたとしても、追手が掛かる事は確実だし、何より魂が縮んでいる「ネル・トウ」の状態である彼女が都合良く記憶を取り戻してくれるかも知れない。

故にノイトラには現状で反旗を翻す理由も何も無い。それと如何に虚夜宮内が殺伐としていたとしても、ドルドーニやガンテンバイン等、命を散らそうとしている仲間を助けようとするのは組織の一員として当たり前の事だし、何ら問題は無い筈だ。

——全く以てノイトラらしくない行動だという点を除けばだが。

現在は全く無くなったが、過去にあつた最上級大虚の探索調査等の任務には真面目に取り組んでいたし、調査結果も余す事無く報告していた。

つまり藍染は今のノイトラに対し、観察はしても直接手を掛ける理由に欠けている――  
――答だ。

「…っ」

次の瞬間、ヤミーが飛び出してきた織姫に手を上げる光景が目に入った。

ノイトラは自身の身体に引つ張られて多少性格の変化が有っても、御人好しな部分はしつかり残っている。

華奢な少女が傷付く姿を見て動揺しない様な冷酷さは持ち合わせていない。

ノイトラは仰向けに倒れた織姫の状態を確認すると、思わず息を飲んだ。

明らかに虫の息だ。にも拘らず、彼女の口の動きを見る限り、一護の事を只管に呼び続けているのは愛故か。それとも優しさか。

目を背けたくなる光景だが、彼女に対して内心で謝罪しながらも何とか耐える。

其処でふと、ノイトラは気付いた。

そういえば藍染が織姫の能力に目を掛け始めたのは、この任務内での映像を見てからではなかったかと。

思い返してみると、織姫が能力を行使した姿は今の所無い。遣り掛けたのは有った

が、その直前に一護が登場している為、未遂に終わっている。

つまり現状で、藍染が織姫を誘拐する理由が無くなった事を示している。

即ち、それは一護達が虚夜宮に突入する理由も同時に失った事にも繋がる。

——まあ、藍染ならどうにかするだろう。

恐らく織姫を攫う理由が無くなったとしても、最終的に一護達が虚夜宮へと侵入する形へ持つて行く筈。ノイトラは確信していた。

藍染が織姫を誘拐した本当の理由、それは自分が崩玉と完全に融合を果たすまでの時間稼ぎだ。

一護達を援護する為に送られて来るであろう護廷十三隊からの援軍。それを分断した後、尸魂界に残存する戦力を潰した後にそれを相手する形へと持ち込みたいのだ。

藍染が一護を除く敵戦力の中で最も警戒しているのは、山本総隊長、そして他でも無い更木剣八だ。

総隊長についてははっきり対策を取っているが、剣八の特性については如何しようも無いのだろう。故に融合前に対峙するのを避けたいと考え、虚夜宮——虚圏へと閉じ込めた訳だ。

敵の本拠地へ乗り込むのだから、援軍の内容に妥協はしない筈。そう考えれば確実に剣八もそのメンバーに入っているであろうと、其処まで推測した藍染に、改めて戦慄す

る。

「…終わりか。存外、呆気無かったな」

拳を振り上げたヤミーを遠目に見ながら、ウルキオラはやや失望混じりにそう呟く。  
だがノイトラは探査神経に引つ掛かった二つの霊圧反応を確認していた為、こう返す。

「いや、まだだ」

「…何?」

ウルキオラがノイトラの方を向いた直後、状況が動いた。  
振り下ろされたヤミーの拳の先には紅色の盾。  
そして其処から感じ取れる二種類の霊圧。間違い無い。

「浦原喜助に四楓院夜一、か…」

「時間を掛け過ぎたな。あの二人は今のヤミーが勝てる相手じゃねえ」

「確かにな。だが——」

其処でウルキオラは間を置くと、反射的にヤミーの方向へと動かし視線を再びノイトラへと戻す。

「…それにしては随分楽しそうだな、ノイトラ」

「っ!？」

ノイトラは指摘されて咄嗟に自身の顔に手で触れた瞬間、初めて気付く。

——笑っている。

その笑みはまるで好敵手を見付けたグリムジョーと同様の、好戦的で獰猛な獣。

何も知らずに更木剣八と相対してそのまま戦闘に入った直後の、憑依という事象も何も起こっていないノイトラ・ジルガを思わせる。

確かに憑依後のノイトラにも戦闘を楽しむ嗜好の名残が有る。

だがそれは日々の過酷な鍛錬、そして十刃落ちメンバー及び従属官を含めた定期的な模擬戦で解消されていると本人は思っていたが、どうやらそれは間違っていたらしい。

無意識の内に鬱憤が溜まっていたのかもしれない。

正直言えば、かつてのノイトラが抱いていたであろう渴望は今も微かに残っている。

ノイトラ・ジルガという本能は求めていたのだ。直接口に出していたものとは異なる

——自分と対等以上の實力を持つ者との戦いを、血沸き肉躍る戦場を。

相手はあくまで偶像であり、戦っている様でその実戦っていない鍛錬。参加者全てが格下であり、追い詰められる事は皆無に等しい模擬戦。

成る程、考えてみれば確かにその渴望を満たすには不十分だ。

だが今は違う。眼前にはそれを十二分に満たせるであろう存在が居る。

護廷十三隊の中でも、特に隠密機動や二番隊が多用する素手による体術である白打はくだの達人。

それに死神全般が戦闘で用いる靈術きどうである鬼道きどうを組み合わせた最高戦闘技術である秘技を持つ——四楓院夜一。

元とは言え、隊長に相応しい水準の能力を持ち、尸魂界の中でも唯一藍染を超える頭脳を誇る天才。

常人には考え付かない様な道具を開発して自身の戦闘に組み込み、即興であろうとも見事に使いこなして見せる技量。

鬼道の扱いにも優れ、鬼道の中に更に別な術式を追加したりと、自己流なアレンジす

ら容易に成し遂げる——浦原喜助。

この二人と戦うとなれば、如何にノイトラが強くなっているとしても相当厳しいものとなるだろう。

息も吐かせぬ激しい攻防。隙あらば即座に突かれるであろう一切気が抜けない駆け引き。

ノイトラは想像しただけで全身が震えるのを感じた。

恐怖故に、では決して無い。所謂武者震いだ。

完全に戦闘狂な反応である。だがノイトラはもはや自身の顔に笑みが零れるのを止められなかった。

「…行きなければ行け」

「…は？」

そんな心情を読んだのか、ウルキオラはノイトラへ静かに呟いた。

ノイトラは思わず目を見開いた。

「今のヤミーは頭に血が上り過ぎている。奴を確実に止めさえしてくれば、後は好き

にして構わん」

「この任務は——」

「大凡の目的は果たした。後は奴等の戦力分析がしたい」

「……………」

先程までの協力に対する報酬なのか、実に寛容である。

ウルキオラから許可が下りた途端、ノイトラの全身から霊圧が溢れ出す。

「尸魂界からの援軍の可能性を考慮しても、制限時間は五分程度だろう。それ以降は許可出来無ん……」

「……………了解だ……!!」

獰猛な笑みをそのままに、ノイトラは響転でその場を跳んだ。

残されたウルキオラは何を考えているのか全く悟らせない、相変わらずの無表情であった。

ヤミーの思考は自身の攻撃が止められた事に対する怒りのみで、その止めた相手の正体が誰なのか等一切考えていなかった。

本来であれば、この眼前の自身の右腕を斬り落とした気に食わない餓鬼はミンチとなっていた筈だ。

恐らく原因はタコ殴りにしている最中、目障りなゴミが近寄って来たのをはたき返した、その一時の遅れ。

そのゴミ——織姫に対し、ヤミーは殺意を抱いた。とは言っても既に死んでいるだろうが、とも思っていたが。

「何だア？ 次から次へとジャマくせえ連中だぜ…」

ヤミーは拳を引くと、一護との間に割って入った喜助と夜一の姿を見下ろす。

喜助は飄々とした笑みを崩さず、夜一は終始無表情のまま静かに佇んでいる。自分など眼中に無い。そんな態度を取る二人に、短気なヤミーは更なる怒りを募らせる。

「割って入るってことは…」

——俺を馬鹿にした事を後悔させてやる。

その思いに従い、ヤミーは再び腕を振り上げる。

それは先程容易に止められた攻撃と相違無いのにも拘らず。

「てめえらから殺してくれって意味で…良いんだよなア!？」

今度は拳を握り締めていない。

掌を押し付ける様にして、上から叩き潰さんと振り下ろす。

確かに威力は申し分無い。だが余りに相手が悪過ぎた。

相手の力を受け流し、または返す事が出来る武の達人にとって、筋肉の塊の様な者は只の力モだ。

流石に普通の人間レベルの達人であれば、自分の三倍以上の体格を持つ者が相手では武も何も無いだろうが、夜一は違う。

彼女のみならず、護廷十三隊の隊長格といった実力者なら、自分の何倍の体格の者を指一本で止められたり、その巨体を一太刀で両断したりと有り得ない事が可能だ。

刹那の間に、夜一は振り降ろされたヤミーの腕に自身の手を添えた。

するとそのままヤミーの腕が本来の狙いから外れた動きをし始める。

上から下に目掛けて移動していた掌が、突如として右を向いた。

腰も入っていない力任せな攻撃だった事が仇となり、その動きの慣性に従って、ヤミーの全身がその方向へ振じられて行く。

やがて足が地面から離れる。だがそれに気付いていないヤミーの表情は依然として勝ち誇ったままだ。

響き渡る轟音。大量に飛散する砂塵に小石。

ヤミーは背中から地面に叩き付けられていた。

其処で初めて気付いたらしく、その表情が驚愕の色に染まる。

「……な……なん……だと……!?!」

自分の置かれた状況は理解出来る。だが其処まで至る経緯が一切不明だった。だがそれを考えるよりも、怒りが湧き出る方が早かった。

「…井上を介抱する。薬をよこせ」

「はいな」

夜一は横の長年連れ添った相棒たる喜助に声を掛けると、彼は打てば響く様な返答をする。

擦れ違い様に錠剤タイプの薬を受け取ると、織姫の倒れている場所まで歩き始めた。

「くそがあアアアアっ!!!」

だがヤミーにとって、彼女のその行動は挑発としか取れなかった。

——— またしてもコケにしやがって。

感情のままに地面へ拳を叩き付けながら、再び立ち上がる。

「待てコラア!!!」

そして再び掌を向ける。

懲りていない。それどころか全く学習していない。

このままでは先程と同じ運命を辿るだろう。

——だがそれを阻む者が現れた。

「なっ!!?」

「っ!!」

ヤミーは攻撃を中断すると、驚愕の声を漏らす。

夜一同じくその乱入者の登場に反応し、即座に行動予定を変更して瞬歩でその場を跳び、一気に織姫の元まで移動した。

「いきなり出てきやがって!! 何のつもりだノイトラア!!!」

「……………」

背後で騒ぎ立てるヤミーを無視し、乱入者たるノイトラは夜一と喜助の姿を順番に見

遣る。

夜一は視界を逸らさずに此方を警戒しながら織姫の介抱に入っており、喜助は一護の傍から離れない。

本音を言えば、今直ぐにでも戦いを挑みたい。

だがそれよりも先に行わねばならない事が有った。

「てめえ無視すん——」

「少し黙れ」

「オプフツ!!?」

顔を近付けて来たヤミーの頭に、ノイトラは背中を向けたまま右手を置くと、そのまま思い切り地面へ叩き付けたのだ。

それは先程夜一が行ったカウンターよりも更に威力の有るもの。

見事なまでに頭部が地面に埋まり、巨体が一瞬ビクリと跳ねたかと思うと、微動だにしなくなった。

だがヤミーのタフさは想像以上だったらしい。

ものの数秒でその手足が動き始め、両手を地面に着けて支えにすると、勢いよく頭部

を地面から引き抜いた。

「ブハアっ!!! 何しやがる!!!」

「土ん中で頭を冷やせつて意味だ馬鹿野郎」

「あア!!!」

ノイトラの突然の暴挙に、喜助に夜一も呆然とした。

ヤミーは今にも殴り掛からんばかりの勢いで、ノイトラに詰め寄った。

「コイツ等は浦原喜助に四楓院夜一だ。解放無しの今のオマエじゃ、どう足掻いても勝てねえよ」

「んだとオ…!!!」

その説明を聞いた上で、尚もヤミーは食って掛かろうとするが、心なしか勢いは削がれている様に見える。

一応彼も藍染が公開した敵戦力の情報を見ている。故にこの二人について有る程度の事は知っていた。

二人同時に相手するとなれば、上位十刃クラスでないと思われない存在であるとも。だがそんな事実など、今のヤミーにとつては、どうでも良い事と化していた。

敵わなからうが何だろうが関係無い。何よりも怒りの感情が勝っていた。

——此処までされておいて引ける訳が有るか。

「だからつて何もしねえでいられるかよオ!!」

「…やっぱそうなるよな」

予想していたとは言え、余りに考え無しで愚かな反応に、溜息を吐く。

——しようがねえ、か。

そう考えたノイトラは行動に移す事に決めた。

「おいヤミー」

「うるせえ!! そこを退けノイト…:…ラ…!?!」

ヤミーが呼び掛けた瞬間、ノイトラの姿は其処には無かった。

思わず周囲を見渡すが、何処にも見当たらない。

だが喜助と夜一、そしてウルキオラは気付いていた。

キヨロキヨロと忙しく顔を左右に振り回しているヤミーの上空にて、ノイトラが足元に霊子を固めて立っていたという事に。

「ああ!?! あいつ一体何処行きやがアボフツ!!」

「取り敢えず寝てろ」

直後に連続して起こった轟音。その数は三回。

ヤミーのくぐもった声と同時に、周囲一帯に砂塵が巻き起り、その場に居合わせた者達全ての視界を塗り潰す。

そして最後に一回、巨大な物体が落下したかを思わせる一際大きな音が鳴り響く。

やがて二・三十秒の時間を掛けて視界が晴れると、其処には上半身を地面に埋め込み、下半身のみが覗いた憐れな姿となったヤミーの姿が。

彼の臀部の上にはノイトラが立っており、まるでゴミを見る様な目でそれを見下ろしていた。

「…さあて、どつちから俺の相手をしてくれる?」

ノイトラはゆっくりと目を閉じると、再び開く。

彼の顔は表情が切り替わっており、飢えた獣の如き獰猛な笑みが浮かんでいた。

「何なら二人掛かりでも良いんだぜ？」

喜助、夜一といった順番で視線を投げ掛けると、そう言い放つ。

口元を盛大に吊り上げ、歯を剥き出しにしたその表情に、二人は背筋が凍り付いたかのような錯覚を覚えた。

危険を察知したノイトラは即座に響転でその場を跳んだ。

見れば彼の頭部が有った位置を、脚甲が装着された左脚が素通りしていた。

「…躲したか。存外素早いのだ…」

夜一はヤミーの成れの果てに目もくれぬまま、そう呟く。

彼女はノイトラの意識が再び喜助の方を向いた瞬間、動いた。織姫を比較的安全な一護の傍まで運ぶと、突然過ぎる彼女の動きに気付いたまでは良いが捉えきれず、周囲へ意識を逸らしたノイトラの不意を打ったのだ。

厳密に言えば真正正銘の全力では無い。だが本気ではあった。

今の自分が繰り出せる限界の速度の蹴りを躲された事に、夜一は表面上は平静を保っていたが、その内心は驚愕の一言。

喜助と共に尸魂界を追放された後、確かに百年余り実戦から離れていたとは言え、つい最近も鍛錬にも力を入れ始めており、全盛期に匹敵する程の勘は取り戻していた。瞬神の二つ名は伊達では無い。数名を除き、今の彼女は現在の護廷十三隊の隊長達にも引けを取らない——寧ろ数名は瞬殺出来るという自負が有った。

——やはり破面という存在の持つ実力の想定を上方修正した方が良いか。

特筆すべきは、先程の蹴りを躲した際に見せたあの死神で言う瞬歩に等しい歩法。

自分に匹敵する速度も脅威だが、それよりも動き始めに靈圧を感じさせないのが厄介だ。

夜一は警戒心を最高レベルまで引き上げる。

瞬歩は靈圧を消費して行う歩法故に、相手によつては察知されて出鼻を挫かれる可能性も有るので、それなりの練度が求められる技術だ。

一方、眼前の長身で眼帯の男の破面が行った歩法にはそれが無い。

例えば奴が自分達を無視して一護や織姫を狙った場合、自分でも対応し切れるかどうか――。

「…打って出る。援護しろ」

「おまかせあれ」

喜助の返答を聞いた瞬間、夜一の姿が掻き消えた。

踏む込む直前、背後の一護と織姫に命に別状が無い事を再確認した後、一気にノイトラとの間合いを詰める。

一瞬で懐へ入った彼女は、予め引き絞っていた右手で掌底を彼の心臓部目掛けて突き出す。

だがノイトラはそれを背後に一歩引く事で難なく直撃を避ける。普通にながっただけでは躲し切れない代物だったが、彼の足の長さを以てすれば容易であった。

夜一としてその程度の事、はなから予想していた為、更に追撃。

空を切った掌を地面に着くと、それを軸に回転しながら左脚を振り抜く。

これが従来ノイトラであれば一々躲す等という面倒な事は一切しなかつただろう。

自身の鋼皮の硬度に絶対の自信を持つ彼の事だ。敢えて直撃を受け、敵が自身の攻撃が通用しない事に驚愕、または絶望する様を嘲笑いながら優々と蹂躪していた筈だ。

「っ!？」

だが彼はノイトラであつてノイトラでは無い。夜一のその蹴りの拳動から全てを見切つていながら、敢えて迎え撃つ。

瞬時に左膝を胸の位置付近まで持ち上げ、脛の横に当たる部位にて、その蹴りを完全に受け止めて見せる。

ドルドーニ・アレツサンドロ・デル・ソカツチ才直伝の汎用性の高い防御用の足技――

バロン・ブントレエス  
男爵蹴脚術

本来なら霊圧を込めて鋼皮を強化した状態で、そして実際に蹴りを繰り出して行う技

だが、ノイトラの場合は何もせずとも十分過ぎる硬さを持つていた為、只その構えを取っただけだ。

上段、中断、下段と、どの位置でも対応出来るので、ノイトラは通常時も帰刃形態時も非常に重宝していた。

「なん…じゃと…!!」

「…何だ、随分軽いな」

容易に止められた事に目を見開く夜一に対し、静かな声で呟く。

直後、その防御体勢で硬直したままのノイトラの背後から、斬魄刀を振り上げた喜助が現れる。

刀身に攻撃能力を持った紅色のオーラの様な霊圧を纏わせ、攻撃威力と範囲を拡大させたそれを後頭部目掛けて振り抜く。

ノイトラはその威力が自身の鋼皮を超える程のものでは無いと理解していながら、響転で瞬時にその場を移動する事で回避する。

夜一の時と同じ技で防御しても良かったのだが、念の為だ。

何せこの喜助は最終決戦時に藍染と対峙した際、攻撃用に放った鬼道に崩玉の封印術

を上乗せする器用さを持つ男だ。

それは斬魄刀による斬撃も例外では無いだろう。下手すればザエルアポロと同じく、常時監視用の発信機の様なものも仕込まれる可能性だつて有る。

故にノイトラは喜助との直接戦闘は極力避けたかった。

「な啼け、へにひめ紅姫」

喜助は距離を取ったノイトラに対し、更なる追撃を仕掛ける。

一応一護や織姫までの距離は開いたが、あの動きを見る限りは余り意味は無さそう  
だ。

だがやらないよりはマシと考え、行動する。

先程と同じ紅色の霊圧を纏った斬魄刀を、今度は下段から上に振り上げる。

「かみそりべにひめ剃刀紅姫」。刀身から剃刀の如く鋭利な霊圧が放たれ、飛ぶ斬撃となって地面を抉りながらノイトラへと迫る。

まるでそれは一護の月牙天衝を連想させる技。流星は彼の下地を築いた師匠に等しい者と言うべきか。

だがノイトラは一切動じない。眉一つ動かさず、それ以前に回避行動を取る様子すら

無い。

「…ハッ！」

「!!」

眼前まで迫った次の瞬間、ノイトラは左脚より外に移動させておいた右脚を、右上目掛けて振り上げる。

超高速の物体が移動する際に生じると同じく、右脚で軌道を描きながら放たれた蹴撃は、その斬撃を容易く破壊して退けた。

夜一と同じく全力では無いとは言え、正真正銘の本気で放った攻撃を無効化された喜助は息を飲んだ。

互いに身動きを取らず、再度睨み合いの状態へと逆戻りする三人。

ノイトラは呼吸を乱すどころか、汗一滴すら掻いていない。

一方、喜助は肩を竦めながら掴み所の無い笑み浮かべ、夜一は視界を一切のブレ無くノイトラに固定していた。

「…いやあー、想定外も良いところスねえー。まさかこれ程とは…」

「呑気に言っている場合か馬鹿者め。…一護の容体は？」

「流石は黒崎サンと言ったところで。しかし井上サンも相変わらず素晴らしい精神力をお持ちだ…」

夜一はノイトラへの警戒を解かぬまま、振り返って背後へと視線を移す。

其処には自分が施した回復系の鬼道と与えた薬の効果で幾分か怪我の症状が和らいだのか、自分自身の事をそつちのけで、重傷の一護を盾舜六花の能力の一つ、そうてんきしゆん双天帰盾と呼ばれる治癒、または復元の能力を持つ技で必死に治療する織姫の姿が有った。

一刻を争う事態では無い事に一先ず安堵した夜一は、再び視線を元に戻す。

先程までの凄まじい立ち回りから、ノイトラが護廷十三隊の隊長レベルの平均を超える実力者である事は察しが付いている。

にも拘らず、今は平然と此方の出方を窺ったまま身動き一つ取っていない。

織姫や一護に危害を加える様子も無い事から、弱者や攻撃対象以外の存在に対し、必要以上を力を振わない制約でも課しているのか。はたまた本人が騎士道のような矜持を持っているのかは不明。

だがそんなノイトラに二人が言える事は只一つだけ。

——強い。それも底が見えぬ程に。

まだ交戦と同時に打ち合いを初めて二桁にも満たないが、共に実力者たる二人は理解していた。

完全に自身の霊圧や身体的スペックを御し切り、剩え武術の名残を悟らせる、その身体の軸を一切乱さない無駄の無い動き。

二人はふとノイトラから視線を外す。其処には何時の間にか離れに移動していたウルキオラの姿が有った。

彼にも隙が全く見当たらない。そして彼の腰に下げた斬魄刀を確認すると、今度はノイトラの腰の部分を確認して驚愕した。

始めは意識していなかった為に気付かなかったが、其処にはアクセサリーらしき輪の様な形状をした鎖が下げられているだけで、肝心の斬魄刀は全く見当たらなかったのだ。

一体何故——とは疑問に思ったが、それは今考えるべき事では無いと、瞬時に思考を切り替える。

恐らくは此処に持ち込んでいないだけで、確実に所持しているだろう。

徒手空拳のみでこれなのだ。斬魄刀を抜けばどれ程の実力になるのか。

想像した二人は思わず歯噛みした。想定通りであれば、自分達が抑えられる可能性は低いからだ。

断定は出来無いが、二人はノイトラがワザと斬魄刀を持って来なかつたのではと考える。

理由は恐らく一護や自分達を含め、空座町の現存戦力の分析。しかしだからといって斬魄刀を使用しない——否、しようと思つても出来無いという、敢えて自分達に不利な状況を作り出すのは有り得ない。

この事から、二人はノイトラが破面の中でもトップクラスの实力者であると仮定。ウルキオラに関しては情報収集の役割がメインで、保険の一種でもあるのだろうと当たりを付けた。

普通ならそう考える。この襲撃を命じたのが藍染だとすれば、他ならぬ彼がノイトラなら斬魄刀無しでも問題無いと判断したと取れるのだから。

そんな事実とは異なった形で認識されているとはいざ知らず、ノイトラは次に如何にして立ち回るかを考えていた。

現状で最も警戒すべきは、夜一の持つ秘技、瞬間<sup>しゅんかん</sup>。そして喜助の天才的頭脳からなる策と機転だ。

前者のその高濃度に圧縮した鬼道を身に纏い戦うその技は強力で、本気でやれば崩玉と融合したばかりの藍染に手傷を負わせる程の威力を誇る。

後者については、直接戦闘では敗北を喫したが、他者が考えても其処まで至れない程

に入念な策で最終的に藍染と崩玉を纏めて封印してみせた手腕は恐るべきもの。

だがノイトラの考察とは裏腹に、追い詰められているに等しい状況である夜一は瞬間を出す素振りも見せず、喜助は相変わらず飄々としており、何を考えているのか全く読めない。

瞬間はやはり強力な分、周囲に被害が及ぶ可能性を考慮しているのだろう。

もう少し追い詰めれば止むを得ず出すかもしれないが、同時に喜助も動く可能性もある。

故に迂闊に手を出す訳にはいかない。

一向に気の休まる暇が無い、張り詰めた緊張感。一歩間違えれば一気に状況を引つ繰り返されるか解らないという、背筋に悪寒を感じる程の危機感。

——これこそ自分の求めていたものだ。

すっかり戦闘狂的思考に塗り潰されたノイトラは更に笑みを深めると、次第に自身の力を縛っていた鎖を解き始める。

急激に上昇し始めた彼の霊圧に、対峙する二人は身構える。

「凌いで見せろ……！」

ノイトラは全身に靈圧の膜を張り、虚弾の連続発射の準備を整える。とは言っても、射線上に一護や織姫が居ない事を確認した上でだが。

ジジジ、という漏電の様な音を出しながら固められる小さな靈圧の無数の層。そしていざ発射せんとした——その時。

「よせ」

「っ……ウルキオラ!!」

ウルキオラだ。

彼は響転でノイトラの傍へと現れると、肩に手を置き、それ以上の行動を制止したのだ。

明らかな不完全燃焼。邪魔をしたウルキオラに一瞬殺意を向け掛けたノイトラだったが、今の置かれた状況を悟ると、一気に思考が冷えた。

そういえば既に五分程度過ぎている。これ以上は護廷十三隊の援軍が来る可能性が高い。

最悪の事態を考える。もしその援軍の中に更木剣八が混ざっていれば——と。

極めて不本意では有るが、確かに此処で止めて置くのが得策か。

ノイトラは齒噛みする。

—— 駆け引きの時間が多過ぎた。

始めから思い切り仕掛けていた方が良かったか。

だがそれだと喜助に隙を突かれる可能性も上がっていただろう。

「しょうがねえ、か」

「次の機会は有る。その時まで取って置け」

「…はいよ」

ノイトラが納得した事を悟ると、ウルキオラは何も無い空間に人差し指を付けた。するとその空間がまるで巨獣が顎を開いたかの如く、上下に開き始める。

「差し当たっての任務は終えた。引くぞ、ノイトラ」

「おう」

ノイトラは直後にその場から掻き消えた。

彼が動いた事に反応した夜一と喜助だったが、その警戒は杞憂に終わる。

何処に向かったのかと、二人が周囲を見渡すより前に、ボコンという大きな音が響き渡る。

音の発生源を見れば、其処は先程までヤミーが埋まっていた場所。だが彼の姿は何処にも無く、気付けばノイトラが元の位置に居た。

右手にはヤミーの足が握られ、その巨体を引き摺る様にして持ち運びしている。

空いた左手には一護が斬り落とした右腕が抱えられていた。

ノイトラは喜助と夜一に一切視線を向けぬまま、ウルキオラが開いた黒腔に向かって歩み始めた。

「…逃げる気か？」

その背中に向け、夜一が挑発する。だがその声には必死さも何も無く、特に引き止めようとしている様には感じられない。

本来ならウルキオラに対して言う筈の台詞なのだが、今のは間違い無くノイトラに対して放たれたものだった。

何で俺が、と内心で愚痴りながらも、嫌々振り返って返答しようとするが、それよりも先にウルキオラが答えた。

「らしくない挑発だな。貴様等二人がかりで死に損ないのゴミ二匹守りながら俺達と戦って、どちらに分が在るか判らん訳じゃあるまい」

それに、と一息置く。

徐に夜一の左脚に視線を移しながら、言う。

「片脚で俺達と戦り合おう等と、貴様には自殺願望でも有るのか？」

「っ!? ……チツ…」

ウルキオラのその一言に、夜一は思わず舌打ちした。

彼女が始めの打ち合いの際に用いたその左脚。実を言えばそれには結構なレベルの負傷が有った。

内部の骨には複数の罅が入り、所謂骨折寸前の状態。戦闘どころか、普通であれば立ってられない程のレベルだ。

此処に到着した際、本来であればヤミーに対して背面蹴りと手の甲での打撃を行い、その結果戦闘に支障が有る程の負傷をする夜一。

後に彼女が喜助に語った内容によると、瞬間有りでの状態であれば問題は無かつたらしい。

だが出来損ないと蔑まれる様な底辺の破面の鋼皮でも、上位席官レベルであるルキアが放つ斬撃すら容易に防ぐ強度を持つのだ。如何に夜一とて負傷しても致し方無いと言える。

それを踏まえた上でヤミー以上の霊圧硬度の鋼皮を誇るノイトラに打撃を加えたのであれば、それ以上の惨事に陥る事など自明の理。

それを踏まえると、この程度で済んだのは幸いと言える。ノイトラが男爵蹴脚術を本来の形で使用しなかったのも大きな要因だ。

現在も夜一は自身の怪我の部分を霊圧で覆う事で負担を減らし、強化する事で誤魔化してはいるが、痛みまでは無理らしい。

少し動く度に左脚を庇う様な仕草を見せていたのを、終始情報収集に徹していたウルキオラは見逃さなかった。

「藍染様には報告しておく。貴方が目を付けた死神 “もどき” は——」

ウルキオラは織姫からの治療を受けている一護に視線を移す。

その目は地面に転がる石を見ているかの如く、何の興味も示していなかった。

「殺すに足りぬ塵コミでしたとな」

ウルキオラはそう言い残し、黒腔の中へと入る。

ノイトラは未だに意識の無いヤミーを雑に扱いながら、それに追従する。

三人が入った直後、黒腔は閉まり始め、十秒もしない内にそれは完全に消え失せた。

## 第十三話 三日月は胃薬を求めぬ

玉座の間にて、第1から3、間を置いて6から9の十刃七名と、その従属官十六名。そして今回に限り、彼等とは別関係の破面達三名が、追加でこの場には存在していた。

「はあく、ノイトラさんはまだですかね〜…」

彼等を横目に見ながら、この場に居ない第5十刃、ノイトラ・ジルガの従属官であり、治療室管理責任者且つ治療長であるセフィーロ・テレサはそう呟いた。

今の彼女は正に恋に悩める乙女。自身の頬に手を当てながら、意中の彼の事を想いながら深い溜息を吐く。

ちなみにセフィーロと同じくノイトラの従属官たるチルツチは不在。彼女はセフィーロの頼みで治療室にてロカの助手をしている。

今回の会合の理由。それは現世の任務から帰還するウルキオラ達の出迎え及び彼等の収集した情報を回覧し、共有する為だ。

ちなみにこの情報は後で虚夜宮中の破面達に公開される為、参加者は自由であった。

本来なら二十名のみしか集まらない筈のこの会合。現在は何と合計二十六名もの破面達がこの玉座の間に存在していた。

この様に、以前より史実との僅かな違いが所々に見られている。それが蓄積された結果、今後に一体どの様な影響があるのか。

現状では余り正確な判断が出来無いが、今の所は特に対策は必要無い程度に止まっている。

元々、ノイトラと共に立てた計画は、ある程度のズレにも対応した内容となっている。達成した暁には輝かしい最良な結末を迎える事になるだろう。

だが何事も予定通りに行かないのが世の常。

セフィローは切に願う。例えばその計画が頓挫したとしても、せめて自分とノイトラ、そして親しい者達が最後に生き残れる形になる事を。

未だ彼女は自身の成り立ちを他者に話した事は無い。ノイトラを除けば一番付き合いが長いであろうロカにもだ。

それはこの戦いが終わるまで一貫して秘匿する覚悟だ。

藍染が正式にこの虚夜宮、破面達を従えるトップとして君臨した瞬間から、一瞬たりとも気を抜けない状況へと変化したのは間違い無い。

そんな厳しい環境下で人知れず奮闘し続けるノイトラを精神を揺さぶる様な真似は

御法度。

セフィーロの抱えている秘密というのはそれ程までに衝撃的な内容なのだ。

正直言えば、今直ぐにでもノイトラに洗い浚いブチまけたい。

多少揉める形になるかもしれないが、今の彼ならば恐らく最終的には受け入れてくれるだろう。だが同時に彼の持つ優しさ故に、計画の事に加えて常に自分を気遣う様になつてしまうのは想像に難くない。

藍染が黒崎一護に完全敗北し、浦原喜助の手で崩玉が封印されるといふ結末を迎えるまで何としても耐えねばならない。

言い様も無いもどかしさを感じながらも、セフィーロは溜息を吐いた。

「はあく、早く逢いたいですよ〜…」

「…そう言つてもう何回目になると思つてんだ、姉あねさんよ」

そうして先程から何度も同じ事を呟いているセフィーロに対し、横からツツコみを入れる野太い声が聞こえてきた。

前方大凡百二十度を除いた頭の中心部を囲う様にして上に逆立てた髪型。身体全体が球体に見える程に肥え太つた、首の外周に襟の様な仮面の名残を残した巨漢——グ

ラ・ケレール。

基本的に全ての行動が鈍重極まりなく、面倒臭がりな性格故に仕事が何時も遅く、セフィーロに何度もキレられている実績がある。

その経験から、彼女の事を畏怖の感情も含めて姉さんと呼び、そんな存在を惚れさせたノイトラの事を影でアニキと呼称し、崇めていたりする。

グラの言う通り、実はセフィーロのノイトラに逢いたいという眩きは今ので五度目になる。

彼としては四度目までは何も口出ししなかったのだが、流石にそれ以上は我慢の限界だった様だ。

「ホツホツホツ。いやはや、今のセフィを見てみると小生の若い頃を思い出しますなあ。良きかな良きかな」

呆れ顔のグラとは別に、微笑みを浮かべながらセフィーロの様子を見遣る老人——  
ビエホ・ベル。

後頭部より鼻先に掛けて輪の様に残る仮面の名残が特徴で、襟を立てて首元を隠している。

その発言内容から判る通り、極めて寛容で大らかな性格から、雑務係の破面達にビエホ爺と呼ば慕われている希少な存在だ。

ちなみにリリネットも彼の事をじーちゃんと呼び、彼自身も彼女の事を孫の様に可愛がっている。

だが正確に言えばそれだけでは無い。

実はその中身はゾマリと同様の屈指の藍染狂信者であり、藍染に逆らう者は例え十刃だろうとも容赦無く牙を剥く恐るべき二面性を持っている破面なのだ。

加えてビエホは相当な古株だ。故に彼のそれを知るのは第一期十刃のバラガン、ザエルアポロ、アローニークといった極限られた者達のみ。そしてヤミーは忘れている。

現十刃に対しては今のところそういった事も無いので、虚夜宮内では基本的に気の良いや爺さんで通っている。

言うなればこの三人は雑務係の破面達の纏め役——リーダーだ。

雑務とは言っても、生活、衛生、食事、施設、情報等といった、その内容は多岐に亘る。

雑務係の破面達が個々に持つ能力には個人差も限界もある。例え十分な人数が居たとしても、彼等にこれ等全てを兼任させるのは酷というものだろう。

その為、其々に纏め役の破面が仕事の分担や人員の分割を行い、虚夜宮内の組織の運

営に滞りが無い様管理しているのだ。

セフィーロは言わずもがな、治療部門を主に生活部門も取り仕切っている。

グラはその見た目通りに食糧等の物資の管理を。ビエホは施設の修繕や補強、そして外部から収集された情報管理を請け負っている。

「…雑談はその程度にしておけ。来るぞ」

和やかな雰囲気醸し出していた三人に対し、偶々近くに立っていたハリベルがそれを窘める。

直後、室内に居る者全てに膨大な量の霊圧が押し掛かる。

一切の乱れ無く完璧に制御され、且つ万物尽くを屈服させるかの様なそれは間違え様が無い。

「———すまない皆、少々遅れてしまったね」

珍しく遅れてやって来た藍染は、悪びれた様子も見せずになぞろしした。副官二人も彼の後ろに続き、室内へと入って来る。

そんな藍染の態度に反発を示した者はバラガン只一人。それ以外は存在しない。

バラガンは尊大な態度で骨の玉座に腰掛けて腕を組んだまま、悠然とした態度を崩さない藍染を睨み付けていた。

「さて……そろそろ任務を終えた彼等が帰還する。今後の進展に関わる重要な情報を持つて、ね」

中央の玉座に腰掛けると、藍染は下の破面達に事の重要性を語り始める。

その顔は常に薄い笑みが途絶える事は無く、発言内容の割には余りに余裕が溢れ過ぎていた。

やはり彼にとっては此れしきの事、議題に上げるまでも無いという表れなのだろう。

「どうか皆でその情報を共有し、分析してほしい——と、来た様だね」

隔絶した能力を持つ者、長き年月を生きる者が抱える一番の敵、それは退屈だ。

故に彼等は娯楽を追い求める。

だが藍染のそれはまた違う。

例えるなら、絶対者故の戯れ。

成そうと思えば何でも成せる。この世の全ては自身の掌の上。思い通りにならない事は無い。

——だがそれだけでは余りに詰まらない。

自らの娯楽の為に多数の命をも湯水の如く使い捨てるその傲慢さ、正に神の所業だった。

「…ウルキオラ・シファア、只今戻りました」

「ノイトラ・ジルガ、横に同じく」

「や…ヤミー・リヤルゴ、同じく…」

突如として室内の中央部の空間に現れた黒腔より、三つの人影が舞い降りる。

ウルキオラ、ノイトラ、そして満身創痍のヤミー。

重傷故に元から膝を着いていたヤミーとは異なり、前者二名は正しい動作で藍染に跪く。

「ああ、おかえり。ウルキオラ、ノイトラ、ヤミー」

任務より帰還した三人を見下ろし、更に笑みを深くする藍染。

「さあ、見せてくれウルキオラ。君が現世で見た事、感じた事の全てを——」  
全く真意の掴めないその表情ではあるが、心なしか楽しげに見えた。

ウルキオラは徐に自身の左手を持ち上げると、戸惑い無く左目の外側に指を突っ込んだ。

本来、眼球とは角膜という目を構成する透明色の層状の重要な組織があり、危険を察知し易い様に神経細胞が皮膚の二百倍も密集している。

その為、少し触れるだけで結構な痛みが生じる上、摘んだり傷付ける等すればその倍以上の痛覚が襲い掛かる——筈だった。

ウルキオラはそんな事は御構い無しに、薬指と小指を除く指で眼球を摘む。

見る側も思わず身悶えしそうな暴挙を行った本人の表情は何時も通り。痛みにも動じる素振りなど一切見せず、そのまま引き抜いて行く。

ミチミチという嫌な音を出しながら、その眼球の後ろ繋がった視神経や毛細血管が露になり——という事は無く、綺麗に眼球のみがその指に摘まれた状態で外気に晒された。

ウルキオラはその眼球を持った左手をスッと前に突き出すと、指先に力を込めながら言う。

「どうぞ、御覧下さい」

直後、力に耐え切れなくなった眼球が粉々に弾けた。

その音は肉が潰れるかのような生々しいものでは無く、何か極薄のガラス細工が割れた音を思わせた。

その破片は視認出来ぬ程に細かい粒子となって大気に充満し、室内に居る破面達、そ

して藍染の呼吸に混じって体内へと、そして脳内へ吸収されていった。

吸引した者達は皆ほぼ同時に目を閉じる。

すると彼等の脳裏に誰かの視点からと思われる映像と音声が浮かび始めた。

ソリタ・ヴィスタ  
共眼界。自らの眼球を取り出し砕く事で、その眼で見た映像を周囲の者に見せるこ

とが出来る能力。

破面化と同時に失ってしまう事が決まっている、凄まじい速度で自己再生を行える超速再生という虚特有の能力。その中で唯一、脳と臓器以外の全ての肉体を超速再生出来る特性を持ったまま破面化したウルキオラのみが可能とした固有能力だった。

「——成る程」

ウルキオラが現世の任務で得た情報を一通り確認した後、藍染は呟いた。

「それで黒崎<sup>彼</sup>一護を、 “この程度では殺す価値無し” と判断したという訳か……」

「はっ」

特にその判断を窺める様子も無く、淡々と語る藍染に、ウルキオラは返答する。

「我らの妨げになる様なら、との事でしたので。それに——」

言い切らぬ内に、背後のノイトラへと目配りするウルキオラ。

そのいきなり過ぎる行動に、案の定硬直するノイトラ。

——何だその視線は。

自分も何か言えという意味だろうかと悩み始めるノイトラを余所に、ウルキオラは再び視線を藍染へと戻した。

「彼も同意見だった様なので」

「……は……？」

ノイトラは思わず声を漏らしていた。

だが咄嗟に周囲には聞こえない程度の音量に抑えられたのは称賛に値する。

何故に其処で自分が出て来るのか。というかそんな事一言も口にしてないし、悟らせる様な態度を取った覚えも無い。

ウルキオラに行動を合わせた心算はあったが、もしかしたらそれが原因なのだろう

か。

——もはや、何も言うまい。

ノイトラはウルキオラから無条件に向けられる信頼に対し、考えるのを止めた。

「ふむ、そうか…」

藍染は目を閉じたまま、何故か納得した様に頷いた。

彼のそんな態度に対しても同様に、ノイトラは思考を止めた。

現状では何を考えても答えは出ないのだから。

そうは思いつつも、ノイトラの内心にはモヤモヤとしたものが渦巻いていた。

「微温ぬりいな」

突然横から放たれたその声の出所に、ウルキオラは視線を移す。

其処には此方を小馬鹿にする様な笑みを浮かべながら、場所も弁えずに胡坐を掻いて肘をついたグリムジョーの姿があつた。

そんな彼の周囲には、同じく良いとは言えない態度をした個性的な従属官達が勢揃い

している。

左側には、何やかんや言いながらグリムジョー自身が最も信頼し、腹心と言つても過言では無い、破面N<sup>o</sup>. 11、ウンデン・モシャウロン・クーフアン。彼だけが唯一、姿勢正しく後ろに手を組みながら、落ち着いた様子で佇んで居る。

鼻の上にアイマスクのような仮面の名残を着けた、頭部左半分が坊主で残る右半分が長髪といった奇抜過ぎる髪型の巨漢——破面N<sup>o</sup>. 13、トレッセエドラド・リオネス。両腕を組んでどつしりと構えたその姿は、肝が据わつていると言うのか、それとも威張つているのかは不明。

右頭部全体を覆う仮面の名残を被つた、おかつぱ頭の肥満体系の男——破面N<sup>o</sup>. 14、カトルセナキーム・グリーンディーナ。猫背故に、正面から彼を見ると、下から睨み付けられていた様にしかない。

左前頭骨に仮面の名残を被つた、金色の長髪を持つ伊達男——破面N<sup>o</sup>. 15、クインセイールフォルト・グランツ。その容姿と浮かべた笑みから女性受けが良さそうだが、何処と無く他者を見下す様な不快な空気を感じる。

半月状の仮面の名残の一部に紐を巻き付けた、口元から鋭く尖った歯を覗かせた小柄の男——破面N<sup>o</sup>. 16、デイエッセイスデイ・ロイ・リンカー。彼に言える事は一言、只のヤンキー。

その数、計五人。普段より欠席の多い第6十刃チームだが、今回はフルメンバーであった。

「こんな奴等、俺なら最初の一撃で殺してやるぜ」

「…グリムジョー」

最後に鼻で笑うグリムジョー。

ノイトラはその態度が余り好きにはなれなかった。

他者の行動の外面だけを見て、下手糞だ、自分ならもつと上手くやれる、等と批判するのは簡単だ。

考えれば確かに他にも遣り方は幾らでもあるだろう。だがその者が何の立場で、何を考えてそのやり方を選んだのか、それを踏まえれば自ずと選択肢は限られる。

「理屈がどうだろうと殺せつて一言が命令に入つてんなら、殺した方が良くに決まってるんだらうが！ あ!?!」

もしグリムジョーがウルキオラの立場で、同じく心を持たない状態であれば如何なる

のか。

一護と対峙しても、違う行動を取れると言い切れるのか。

——他者を自分に置き換えて物事を考えられねえ奴に、否定する資格なんてねえ。ノイトラが憑依前に恩師から教わった事だった。

「…同感だな。何れにしる敵だ。殺す価値は無くとも生かす価値など更に無い」

グリムジョーに続き、シャウロンも同意を示す。

組織に属する者としての意見としてならば、言わんとする事は理解出来た。

だが——残念ながらその認識は根本的に間違っている。ノイトラは断言する。

多数の破面達を従え、己の野望を果たさんとする藍染。だが彼にとつて、この任務、この組織、そればかりか長い年月を連れ添った副官すら全く重要視していないのだと。

如何に彼等が組織の為を思って行動しようとしまいと、最終的には切り捨てられる事が決定付けられているのだと。

藍染の持つ、絶大的な能力の他に卓越した頭脳。彼のその思想を理解し、分析及び対応策を構築出来るのは只一人。尸魂界でもトップと謳われる頭脳を持つ大天才、浦原喜

助だけだ。

だがこの世界の根源に等しい知識を有しているノイトラだからこそ、そう言えるのだ。

もし彼が憑依時、それ以前の記憶が全て消え失せていた等と言う状態であれば——  
行き着く先は容易に想像が付く。

「フツ、確かにあんなカス、居ない方がマシだな」

「……………」

弟のザエルアポロの面影を感じさせる他者を見下す様な表情を浮かべながら、イール  
フォルトは鼻で笑った。

元々無口なナキームは、無言でその意見を肯定する。

「あーあ、どうせなら俺等が行けば良かったんじゃないやねえかア〜？」

「ブハハハハ！ 止めとけ止めとけ、お前程度の実力じゃあ返り討ちになるのが関の山  
だ」

「んだとコラア!？」

全身から小者臭を漂わせながら挑発的な言葉を発したのは、デイ・ロイ。

近く起こるだろう、グリムジョーの独断の現世侵攻に追従した際、大口を叩きながら真つ先にやられるだけはあると言うべきか。

共眼界の映像で見える限り、確かに一護はヤミーとの戦闘の後半では一方的にやられていたが、序盤までは確かに圧倒していた。

これがヤミーでは無くデイ・ロイであれば、まず間違い無くその序盤の内に一太刀で終わっていただろう。流石に彼にやられる程一護は弱く無い。

それを悟っていたエドワードは笑いながら指摘すると、デイ・ロイは即座に声を荒げた。

「大体ヤミー！ テメーはボコボコにやられてんじゃねえか!! それで殺す価値無しとか言っても殺せませんでしたにしか聞こえねーよ！」

従属官達が場所も弁えずに騒ぎ立てるのを窘めもせず、更に捲し立てるグリムジョー。

この流れに何処と無く嫌な予感を感じながら、ノイトラは藍染の横に立つ東仙に視線を移す。

彼は依然として其処に静かに佇んでは居たが、その眉間には僅かに皺が寄っていた。東仙は一見すれば冷静な性格に見えるが、実は相当な激情家だ。

藍染に従うのも過去に起きた悲劇が切っ掛けであり、本人は表面上は正義を謳いながらも、その真意は死神に対する復讐のみ。

目的を達成するには藍染の野望の成就が必須であり、それを妨げる者には容赦しない。

恐らくグリムジョーの従属官達がこれ以上の狼藉を晒せば間違い無く動くだろう。

「……てめえグリムジョー。今の見てなかったのかよ。俺がやられたのはこのガキじゃねえ——そこで澄まし顔してるヤツだクソツタレが!!」

ヤミーの怒声と共に放たれた霊圧が、ノイトラの背中にぶつかる。

——やっぱ馬鹿だコイツ。

止める為とは言え、確かに少し遣り過ぎたかとは思うが、あのまま放置していれば確実に死んでいったというのに、それを全く理解していない。

恐らく解放すれば自分に勝る者は居ないという自負からきているのかもしれないが。

ノイトラは小さく溜息を吐いた。

あの時放った全ての攻撃は、一応全て手加減をしていた。

響転でヤミーの真上に移動したノイトラは、足の底に虚弾用の霊圧の層を三つ重ね、頭部目掛けて連続発射。

全弾命中したのを確認した後、完全に意識を奪う為の追い討ちとして勢い良く落下。

湖面では無く、地面版の犬○家の出来上がりという訳だ。

「そりゃ只の自業自得じゃねえか。俺が言ってるのはてめえの腕は誰に斬り落とされたんだって意味だっつての」

「ぬぐ…」

少なくともグリムジョーはヤミーより冷静に物事を見ていたらしい。

まさかの正論を返されたヤミーは反論出来ずにくもった声を漏らす。

「ま、結局あのへぼいパンチじゃ殺せるモンも殺せねえだろうがな!!」

「…なんだと」

「よせ」

その最後の台詞に反応したヤミーは、全身に怒りのオーラを漏らしながら立ち上がる。

ウルキオラは片手をヤミーの眼前に翳して動きを制すると、そのままグリムジョーへ語り掛けた。

「グリムジョー。今の我々にとって重要なのは今のこいつでは無いというのは解るな」  
「…あ？」

睨み付けて来るグリムジョーに一切動じる事無く、ウルキオラは対象を殺さずに戻った詳しい理由を淡々と説明し始めた。

藍染が警戒しているのは一護の成長率であり、現在の實力では無い事。その力は不安定で、放置しても自滅か味方に引き込める可能性がある事を。

ノイトラはその光景を静かに眺め続ける。

此方に向かつて笑顔で小さく手を振るセフィー口の姿に気付いていながら。

その後は特に大きな変化は無いまま、ウルキオラの説明が終わると同時に任務報告自体が終了した。

ノイトラ自身としては、さり気無くヤミーをボコった事については余り追及されなかった事で重荷が無くなり、非常に楽だったりする。

どうやらその後の喜助と夜一に対する好戦的な姿勢もあつてか、皆は流石に自分が裏切ったとは解釈していない様だ。

「…それが微温イって言うてんだよ！ そいつがてめえの予想以上にデカくなって、俺等に楯突いたらてめえはどうするってんだよ!?!」

ウルキオラから一通りの説明を受けたグリムジョーは激昂した。  
シャウロンと同様の正論ではあつたが、恐らくその真意は別。

単にウルキオラ思想、そして行動が気に食わないだけだろう。

死神と虚、絶対に相容れない存在同士が出会えば戦闘になるのは必然。それに理由を付けて戦わない事を選択するなど有り得ない。

グリムジョーのそれは組織の事を考えての事では無い。自身の信念にそぐわない行動を取ったウルキオラに対する抗議。

それに加え、言い出した手前で簡単に引く事など出来無いというプライドもあるのだろう。

離れた位置にて、骨の玉座に腰掛けているバラガンの言葉を借りるが、正しく “ 滑稽 ” と言わざるを得ない。

ノイトラはかつての自分がネリエルにされていた様にして、歯を剥き出しにして唸り続ける豹王へと憐みの視線を向けた。

「その時は始末するさ——」

ウルキオラは何故かまたノイトラに視線を移すと、言葉を繋いだ。

「俺とノイトラがな」

「…お…う…?」

——何でさり気に俺も混ぜた、ウル坊よ。

それじゃ自信無い様にも聞こえんぞ上位十刃、とノイトラは続け様にツッコんだ。

思わず反射的に相槌を打ったが、全身から崩れ落ちたくなる衝動に駆られる。

本人は無意識の内だろうが、こうも公の場でするのは勘弁してもらいたかった。

未だ言葉を知らぬ様な純粹無垢な幼い子供も、これは良い人だ、我儘の言える頼れる人だ等、直感で感じた瞬間から積極的に近づく様になる。

ウルキオラも似た様なものだろう。

彼は言うなれば産まれたての赤子の如く真つ白な状態だ。

心身の内、前者の部分のみを残して成長した様なものだと思えば良い。

どうやらウルキオラは一護と同様に、自分にも興味を抱いたらしい。

ノイトラとしては本来の流れから外れるかと一瞬だけ心配したが、そういえばしっかり一護を見逃していたと安堵する。

只、ウルキオラの興味対象が増えた事による影響が全く予測出来ないのが難点ではあるが。

「それで文句は無いだろう」

さも容易な事だと言わんばかりの返答に、グリムジョーは口を紡いだ。

ウルキオラが第4の数字を持つ上位十刃である事、そしてノイトラがその数字に不釣合な程の実力を持つ事を身を以て理解しているからだ。

「っ……てめえもだノイトラ!!」

これ以上の問答を重ねても分が悪いと考えたグリムジョーは、今度は矛先をノイトラへと変えた。

大声で呼ばれたノイトラは、至極面倒くさそうな顔をしながら振り向く。

「何でてめえまで奴等を生かした!? 例え雑魚だろうと、敵だつて事に変わりにはねえだろうが!!」

——終わり掛けのこのタイミングでそれを聞くか。

そうは思いつつ、予め用意して置いた返答内容を口元まで持つて行く。

「それに斬魄刀も持っていかなえってのはどういうワケだ!! やる気はあんのか!」

「なあ、グリムジョー……」

「ああ!」

それを言ったらどんな反応が返ってくるのか少々恐ろしい。

だが此処で差障り無い言葉を選んだりすれば、第5十刃の肩書は変わらずとも、周囲からの自分の評価や立ち位置が揺らいでしまう。

何だ、コイツ大した事無い奴だな、と思われでもすれば御終いだ。

——俺はノイトラ・ジルガだ。

勢いのままに追及を続けるグリムジョーに、ノイトラは自分にそう言い聞かせながら冷静に、室内全体にも通る声で言い放った。

「——雑魚を千匹殺したとして、一体誰が俺の最強を認める?」

グリムジョーは絶句した。同時に室内も静寂に包まれる。

全ての十刃が集結しているこの場に立ちながら、見事なまでの厚顔不遜な物言い。

ある意味、第4以下の数字を持つ上位十刃達へ喧嘩を売っているとも取れる内容でも

あつた。

「雑魚の命には興味も価値も無え。俺が求めてるのは、それを証明するのに相応しい好敵手だけだ……」

ノイトラは内心で申し訳無いとは思いつつ、徐に視線をスタークへと移した。

向けられた当人はというと、気まずそうに後頭部を掻き毟るだけだった。

その口元はやや吊上がっている事から、注目を逸らすのに利用された事に気付いているのだろう。

——全く、お前って奴は。

実際、ノイトラの性格を知っているスタークは内心でそう思いつつ、この借りを何時返して貰うかを考えていたりする。

そして彼を除く他の十刃達、そして破面達はそんなノイトラに敵意を持つどころか、納得した。

成る程。やはり幾ら変わろうが、ノイトラはノイトラだったのか、と。

つい先程まで忘れていたが、第8十刃だった頃から、彼は自分自身を最強だと謳って已まなかった。

だがある日を境に全くに口に出さなくなり、それどころかすっかり大人しくなった。てつきり最強を求めるのを止めたのかと思つたが、間違つていたらしい。

只単に、剥き出しだった牙を納めたのだ。そして人知れず静かにその牙を研いでいる。加えて本質も変わつていないときた。

そんなノイトラに好敵手認定されたスタークには、同情の視線が数多く向けられていた。

この瞬間、室内に居た破面達の殆どが、ノイトラ・ジルガという存在の認識を改めた。本能の赴くまま手当たり次第に暴れる獣から、自分達と同じ明確な意志を持つてして戦う戦士へ。

即ちそれは憑依前のノイトラがネリエルに対して望んで己まなかつた——弱者が未熟者強者へ昇華したと、そう証明された意味に他ならない。

それが今更、しかもネリエル以外の者達から齎された。

出来る事ならば本人に、そして自分自身の存在が塗り潰される前にそうなりたかつたであろう、憑依前のノイトラの何と不憫な事か。

口を。パク。パクと開閉させるだけだったグリムジョーはと言うと、周囲よりやや遅れて正氣に戻つた。

だが依然としてその目はノイトラを睨み続けていた。

「…そうだな。それで構わないよ、ウルキオラ。それにノイトラもね」

「有難う御座います」

「…感謝致します」

それを完全に肯定する声が、藍染から発せられる。

彼に対し、礼を返すウルキオラとノイトラ。

——ああ、これで帰れる。

ノイトラは頭を下げながら、そう思った。

居心地の悪いこの場所からやっと解放されるのだと、安堵の溜息を吐いたその時だった。

「———そうだ、もう一つ良いかなノイトラ」

「っ!?! …はい」

油断していたところへ放たれた、突然の呼び掛けという名の不意打ち。

ノイトラは自身の心臓が飛び出るかの様な錯覚を覚えた。

だが直ぐにその動揺を悟られぬ様、必死に平静さを装いながら、藍染の方向へ振り向く。

「ヤミーの魂吸を止めた事、正直助かったよ。そして例え仲間の手を上げてでも、任務を忠実に果たさんとするその姿勢、実に素晴らしい。評価しよう」

「…勿体無き御言葉です」

「チツ!!」

—— 其処で終わってればどれ程良かったか。

ノイトラは後にこう語っている。

ヤミーは自分をダシに使われた様で気に食わないのか、周囲に聞こえる様にワザとらしく舌打ちする。それが自身の評価を下げる原因となっているのだと気付かぬまま。

背後の脳筋を無視しながら、ノイトラは藍染から解散の言葉が出るのを今か今かと待っていた。

「そこで…だ」

ぎこちない動きで頭を下げたノイトラへ、藍染は暫しの間を置くと、言った。

「今迄の功績も含め、君に褒美を出そうと思う。後で私の部屋へ来たまえ」

次の瞬間、ノイトラは室内と室外から放たれる複数の殺気を感じた。

——はい、今ので一名の十刃と二名の雑務係の破面が敵に回りました本当に有難う御座います。

ノイトラはもはや投げ遣りというかやけっぱちな感じで、そう思った。

その正体は言わずもがな。室内はゾマリ・ルルーにビエホ・ベル。

そして室外については、その霊圧の低さから考えるに、藍染の侍女のような立場である女の破面——ロリ・アイヴァーン。

恐らく彼女は周囲に誰も居ないのを良い事に、扉越しに聞き耳を立てていたのだらう。

彼女は藍染に心底惚れており、普段は直情的で単純な性格だ。だがその反面、嫉妬深く陰湿で残忍な一面も持っており、まるでその在り方は乙女ゲームに登場する悪役キャラの如く。

ちなみに彼女の相棒的な存在であるメノリ・マリアは、特に藍染に何も思うところは

無い様だ。

耳を澄ませば、ちよつと止めなよ、等とロリを制止しようとする彼女の声が微かに漏れ出している。

別に十刃以外の二名は如何でも良い。問題なのは下位とは言え、十刃の一人に敵意を持たれた事にある。

殺気の重さから、本気なのは誰なのかは判断出来ている。

ビエホは五分五分といったところ。彼とは日頃から交流もあるので、恐らく三日から一週間程度の短期間、逐一口舌の刃で斬られ続ける程度で済むだろう。

だがゾマリ、彼は別だ。

殺気の重さはビエホ以上。それで且つ、矢鱈静かに研ぎ澄まされているのが余計に危機感を煽る。

まさか彼がこれ程までに藍染に心酔していたとはノイトラにも想定外だった。

言葉遣いや態度は丁寧だが、敵に対しては冷徹極まりなく、史実でも意識不明の瀕死状態のルキアを容赦無く処刑しようとし、死に際には藍染様万歳と叫び続けながら息絶えた男。

だが流星に嫉妬の感情のみで直接的な行動を取る程では無い。そう考えていたのだが、撤回せねばならないかもしれない。

正直言えば、如何にゾマリが十刃最速の二つ名を持つとは言え、鎮庄は容易だ。

考慮すべきは帰刃形態の能力、愛アモレのみ。だが死神の鬼道に等しいこの能力に対し、ノイトラは既に対処法も考えてあるので、特に問題は無い。

だが警戒するに越した事は無い。これまでのザエルアポロと同様に、ゾマリの事も含めて気を配らなければならない。

「ロリとメノリを使いに出そう。彼女達の案内に従いたまえ」

「……感謝……します」

ノイトラはそう返すだけで精一杯だった。

——この大変な時にいらん苦勞を増やしやがって。

最後の最後に爆弾を投下した藍染を内心で罵倒しながら。

## 第十四話 三日月と胃痛と宴会と…

藍染の自室へと続く通路に、三人分の足音が木霊する。

一人はノイトラ。そして残る二つは、左目周辺が仮面の名残で覆われたツインテールの女——ロリ・アイヴァーン。彼女とは対照的に右目周辺が仮面の名残で覆われたショートカットの女——メモリ・マリア。

ロリは終始一貫して眉間に皺を寄せており、非常に不機嫌なのが丸判りだ。視線のみを動かして隣のノイトラを見ては、舌打ちを繰り返している。

メモリはそんな彼女の態度を取る度、ソワソワと挙動不審な動きをしている。恐らくは注意したいのだろうが、中々言い出せぬままズルズルと引き延ばしにしていた。

ノイトラはそんな彼女達に両脇を固められながら、極めて面倒臭いと思いつつ、黙って目的地へと足を進める。

本来なら十刃としてロリの態度を窺めるべきだろうが、彼女自身の性格を知っているが故に、何も口出ししなかった。

何せ興奮すれば十刃たるヤミーやウルキオラに対して堂々と殺してやると宣言する様な身の程知らずだ。

そして妄想癖も有る様で、グリムジョーにした様に、自分に手を出せば藍染が黙っていないと喚き立てるに決まっている。

——つくづく可哀相な女だ。

ノイトラは表情を変えぬまま、彼女を憐れんだ。

「…今から藍染様を御呼びするわ。精々大人しくしている事ね」

「ちよつと、ロリつてば…」

「黙りなさいメノリ！」

やがて藍染の自室の前へと到着するや否や、ロリは失礼極まりない口調でノイトラに言う。

流石にこれは拙いと思つたのか、メノリは口を挟んだが、聞き入れられなかった。しゅん、と見るからに落ち込むメノリ。

ロリはフンと鼻で嘲笑うと、そのまま彼女を放置して扉を叩いて中の藍染に声を掛けた。

「…別に気にしちやいねえよ。安心しろ」

「っ!? ノイ…トラ…様…」

其処で御人好きさが抜けないノイトラの悪い癖が出た。

彼は落ち込みながらもコソコソと此方の様子を探っているメモリを放つて置けず、声を掛けた。

突然の事に、当然メモリは一瞬肩を跳ねさせる。

予想通りの反応にやや心を痛めながら、ノイトラは出来る限り優しく語り掛ける。

「アイツがそういった性格なのは端っから理解してる。そんなんに一々腹を立てる様な器は持ってねえ」

「で…ですが…」

「只、な…」

戸惑いを見せるメモリに、ノイトラはこれが初めて最後の忠言だと視線で訴えながら、諭す。

「グリムジョーとかヤミーに対しては絶対ああいっただ態度を取らせるな。力づくでも何

でも良い、じゃなけりや死ぬだけだ」

「は、はい……」

「解りや良い、頑張んな」

そう言った直後、ノイトラはメノリの様子がおかしい事に気が付いた。

先程までの怯えた様子から一転、何か妙に輝いた目で此方を見詰めていたのだ。

——この目はテスラと一緒だ。

別に自分を慕う存在が増えるのは構わない。だが現状を考えると良い傾向とは言えないのも事実。

仲間というものは強さの根源でもあるが、同時に弱みにも成り得る危うさが有る。その者に力が無ければ尚の事。

今回の呼び出しの件もそうだが、藍染が何を考えているのか全く判らない今、徒に仲間を増やすのは得策では無い。

先程のアドバイスは少々浅はかだったかと後悔した。

今迄恐怖の象徴だと思っていた上司的存在が、意外に優しく、そしてさり気に助言をしてくれたりすればどう思うだろう。

自分ならば普通にやる気が出る。しかもその態度の落差にやられ、その人の背中を支

えて遣りたいと思う。ギャップというものはそれ程までに大きな要素となるのだ。

メノリから顔を逸らしながら、ノイトラはロリの後姿を眺める。

どうやら入室の許可が下りたらしい。

藍染と話せた事に気分を良くしたのか、やや頬を赤く染めながら、先程よりも棘が抜けた口調で話し掛けて来る。

「入って良いわ」

「…お前達は？」

「藍染様は貴方一人で来るのを御所望よ。ただ、し！くれぐれも失礼な態度を取らない様に！」

「…はいよ」

言われずともその程度は弁えている。

これでも憑依前は職業柄、様々な人を相手にしてきた。

御偉方の対応程度、慣れたものだ。

——胃の痛みはさて置いて。

「失礼致します」

背中に妙な視線プレッシャーを感じながら、扉を開けて中に入る。

娯楽用具等が一切無い、シンプルな室内が目に入る。

そしてその中心には、リラックスした様子で椅子に腰掛けた藍染の姿が有った。

「良く来たねノイトラ。楽にしたまえ」

ノイトラはその言葉に従い、腕を後ろに組んだ楽な姿勢へ変える。

だがその内心は緊張と警戒で満ちており、出来る限り相手のペースに？まれない様に身構えていた。

「さて、呼び出した手前で申し訳無いんだが、実は褒美の内容が何も思い付かなくてね」  
「はあ…」

「だからノイトラ、他でも無い君自身の意見を聞きたい。何が良いかな？出来る限り要望には応えよう」

——やはりそう来たか。

予想通りの展開に、ノイトラは内心で溜息を吐いた。

実を言えば、これといった望みは無い。憑依前に寝泊まりしていたボロアパートに比べて、現在の拠点の設備は充実してるし、特に困っている事は殆ど無い。

日々の食事関係にしてもそうだ。

基本的に破面達の主食は虚同様人間の魂魄だが、現世の果物や、食用霊蟲で十分事足りている。

ちなみにこの食用霊蟲とは、一々虚夜宮の外から魂魄や虚を調達する手間を省く為、藍染が独自に研究開発した家畜の様なものだ。

支給された直後は既に調理済で、現世で言う携帯食料と同等なのだが、その味は御世辞にも余り良いとは言えない為、殆どの破面達は果物の方を中心に摂取している。

だが今のノイトラはそんな事をせずとも、憑依前と変わらない———それどころかもっと良い食生活を送っていたりする。

一汁三菜いちじゅうさんさいを基本に据えた、自然を尊び四季や風土の味わいを活かした食文化を持つ日本。他国に比べて資源に乏しい分、研究に研究を重ねる事で質を向上させ、日本人に心の豊かさを齎したそれは何事にも代え難い価値が有る。

ノイトラはその象徴たる日本食を常日頃から存分に味わっているのだ。

それは主に口力の働きによる恩恵である。

彼女の帰刃の持つ能力——反膜ネカンオンの糸。

反膜というのは大虚が同族の虚を助ける時に放つ光の事で、対象が光に包まれたが最後、光の内と外は干渉不可能な完全に隔絶されるという、撤退に用いるにはこれ以上無い程適したもの。

口力のそれは多少異なり、反膜の特性を保ちながらそれは極細の糸状になっており、あらゆる物質と接続して霊力や情報の共有を行う事が可能。

以前セフィーロと共に訪れた事の有る現世にて、その能力で日本の食材や料理の情報を収集。そしてこの虚夜宮に帰還後、大気中の豊富な霊子を使って再構成し、密かに自分達の食生活を充実させているのだ。

それまでは他の破面達と変わらない食事を摂っていたノイトラだったが、セフィーロが従属官となってからというもの、彼女達と同じになった。

ついぞと言っては何だが、その恩恵は稀に十刃落ちグループにも齎されていたりする。

だが最近では何時も決まって、再構成されたワインを飲んで酔っ払ったドルドーニがノイトラに嫉妬から来る殺意を以て襲い掛かるパターンが多い。

その度に次回の食事提供抜きという罰がセフィーロより下されるので、連帯責任とい

うとぼつちりを受けたガンテンバインが怒りを露にし、二人が喧嘩している光景が良く見られる。

普段より質素で修行僧の様な生活を送っていたガンテンバインも、元々娯楽の少なかった虚夜宮で手に入った唯一と言つても過言では無い——食という娯楽は何よりも代え難い楽しみとなつていた様だ。

良い鍛錬にもなるだろうと、ノイトラは特に二人の喧嘩を止める気は無かつた。

鍛錬時とは異なり、自身の感情に任せてぶつかり合うのはある意味良い経験にもなる。

当然というべきか、感情豊かなドルドーニよりも先に、自身の精神を律する術に長けたガンテンバインが落ち着きを取戻し、隙を突いて叩き伏せるという結末が六割を超えている。

だが最近ではドルドーニも学習したのか、幾分か巻き返す事も増えて来ているので、見ている方にとっては良い余興だ。

只、皆が賑やかに食事する光景を見る度にノイトラは思っていた。過去に己が従属官であつたテスラにも少しは振舞つてやりたいと。

だが現在では互いの立場上、余り容易に干渉出来る間柄では無い。故に致し方無いと断念していた。

今度こつそりクツキー程度は送り届けてやろうかと考えているが。

「…でしたら」

ノイトラは不自然さが無い様、少し考える素振りを見せた後に口を開いた。

例えば此処で藍染に新たな力を要求したとしよう。

さて、彼が素直に力のみを与えてくれると、本当に思えるか。

当人の持つ素養にも左右されるだろうが、恐らく力を与える事自体は可能だろう。

ノイトラの破面化は藍染の崩玉によるものだが、厳密に言えばそれは未完成の状態で行われたものであった。

喜助の持つ崩玉を奪い、自身のそれと融合させて完成状態となった現在の崩玉ではない。

未完成の崩玉の齎す破面化は、大凡六割の確率で失敗し、成功とも失敗とも言えないのが三割、成功例が一割だ。

帰刃形態を見れば判るが、完全に破面化した十刃達は共通してほぼ人型だ。ノイトラのように腕が倍以上に増加する等、明らかに人を外れた姿にはならない。

——バラガンは骸骨だが、一応形状は人のそれなので、その括りにしておこう。

後、成功例の全ては最上級大虚だ。

ノイトラは自身の記憶を見る限り、現十刃の上位三人は最上級大虚。ウルキオラはあ  
る日突然藍染からの紹介で初めてその存在が露呈したので、正確には判らない。

だが彼特有の帰刃形態のあの凄まじい戦闘能力を見る限り、恐らくはその三人と同様  
だろう。

つまりノイトラは中途半端に破面化した状態とも言える。

中級大虚出身の為、今の状態が限界点だという可能性も有るが、憑依後の成長度合を  
見る限りは低そうだと彼自身は踏んでいた。

だが完成した崩玉による完全な破面化——強化が可能だとしても、それを施す者が  
藍染では全く信用ならない。

ザエルアポロが兄のイールフォルトにした様に、怪我の治療と表して情報収集の為の  
録<sup>ろく</sup>霊<sup>れい</sup>蟲<sup>ちゅう</sup>の類いを仕込まれるかもしれない。

それとは別に、藍染の意思一つで起爆可能な爆弾の様なものである可能性だって有  
る。東仙の最期の姿が良い例だ。

つまり藍染に要求出来る褒美の内容と云えば、自身の身体に直接干渉される様なもの  
ではなく、自身を取り巻く周囲の環境に関したものに限られる。

ノイトラは予め考えて置いた要望を口に出す事にした。

「ザエルアポロの監視を止めさせて貰いたい。自分と…従属官達の周囲も含め」  
「…ふむ、確かに彼は一通りの宮を個人的に監視している様だね」

それが齎す結果は果たして好転か、それとも暗転か。

可能性としては五分五分だが、直接ザエルアポロと対峙する事になつたとしても、此方に負けは無い。

藍染は顎に手を当てると、何か考え込む様な仕草を見せる。

だが依然としてその表情は薄笑いを浮かべたままだ。

「だが…それだけかい？ 最強を目指す君ならば、更なる力を求める事も予想していたのだが…」

——冗談言うな。

ノイトラは内心で毒づく。

「十分です。以前からアイツは目障りだったので」

「…良いだろう。彼には私が直接伝えて置こう」

「有難う御座います」

藍染が納得した事を察し、安堵するノイトラ。

恐らくこれでザエルアポロの監視は確実に止まるだろう。 “彼だけ” は。

依然として藍染の監視は続くのは承知の上だ。

だがノイトラには自信が有った。如何に彼とて、崩玉との融合を果たさない限り、セフィーロの自室までは監視不可能だろうと。

その理由も、ロカの能力に繋がっている。

実はセフィーロの自室の壁や扉には、反膜の糸が大量に張り巡らされているのだ。

ちなみに水玉模様の壁紙もそれ仕様であり、所謂嚴重な二重構造となっている。

反膜というものの自体は、言うなれば織姫の持つ事象の拒絶と同等で、世界の理に匹敵する能力だ。

とは言え、ロカのそれは糸状だけあり、元の反膜としての性質は弱い。だが度重なる工夫と、セフィーロの能力との組み合わせにより、それも解決している。

——二人は未だにその詳細を話してくれてはいないが、時期的に考えても、判明する時は近いだろう。

現世と尸魂界の間には、穿界門せんかいもんと呼ばれる世界同士を繋ぐ門が存在し、その先には断界だんがいという空間がある。

断界には虚等の外敵を防ぐ為に拘流こうりゅうという霊体を絡め取る気流で満たされており、更には七日に一度拘突こうとつという強力な侵入者排除気流が現れる。

後者は世界の理の側の存在であり、死神には到底太刀打ち出来無い存在なのだが、崩玉と融合した藍染はいとも容易く破壊して退けた。

その域まで至れば、彼にとって反膜如き羽虫を払う程度のレベルの障害にしかならな  
いだろう。

だがノイトラには藍染が自分達に対し、それこそ最終決戦の後半までに何か行動する  
とは思えなかった。

良くも悪くも、藍染惣右介という在り方は大物だ。自分と同等のレベルの者でも有る  
まいし、周囲で怪しい動きをする輩に一々反応して対処する様な器の小ささは持つてい  
ないだろう。

寧ろ戯れと称し、平然とその者の足掻く様を観察した後、何時も通りの笑みを浮かべ  
ながら真正面から蹂躪してみせる可能性の方が高い。

自分を欺こうとしたザエルアポロにした様に、さも当然と言った風にその内容を語り  
掛ける真似はしそうだが。

——ところで、私に対抗出来る程の力は付いたかい、ノイトラ。

最悪、そんな問い掛けをされる事も考慮して此処に訪れたのだが、正直助かった。実際にされた場合、動揺を顔に出さずに冷静で居られる自信が無い。

崩玉と融合した後、藍染がまず優先するのは尸魂界の制圧と、王鍵の創生だろう。

そして霊王が存在する空間たる霊王宮<sup>れいおうきゅう</sup>への侵攻準備を終えた後、其処で初めて虚夜宮内に幽閉した、更木剣八含めた残存勢力を潰しに掛かる。

想定としてはそうだが、世の中はそうそう何事も上手く行くものではない。一応最悪の想定も含めてセフィーロとは打ち合わせているが、どちらにせよ死の先延ばしにしかならない。

結局のところ、一護に勝利して貰わない限りは御先真つ暗なのである。

「では以上で宜しいでしょうか」

「…ん、ああ。時間を取らせて済まないね」

藍染に確認を取り、ノイトラは一刻も早く退室すべく、そそくさと踵を返す。

背筋に何か嫌な汗を掻き始めたのを感じながら、扉まで残り後一步まで迫った。

「——そうだ、ノイトラ」  
「っ!？」

不意に放たれた呼び掛けに、ノイトラは思わず其処で立ち止まる。

——ほら来た。

元から呼び出しされた時点で、用件が褒美の件だけで済むとは思っていなかった。

もしかすればそれだけで終わるかも——とは心の片隅で思っていたが、やはり甘くは無い。

恐らく、藍染としてはこれが本題なのだろう。

褒美を与えるというのは建前に過ぎない。

一体何を問われるのか戦々恐々しているノイトラの背中に、藍染は変わらぬ口調で問い掛けた。

「黒崎一護の仲間である二人の人間だが……彼等を見逃した本当の理由は何だい？」  
「……………」

ノイトラは思考が一瞬硬直した。

てつきり自分自身抱える事情に対する確信を突くかの様な内容を問われるかと思つており、実際はその予想に反していたからだ。

一護ならまだ判る。だが藍染が言っているのは泰虎と織姫について。

報告の際に問われたグリムジョーの疑問への回答として放つた言葉。それは確かに真意では無いし、それを読まれていても何らおかしくは無い。

だがまさかこのタイミングで追及されるとは思わなかつた。

ノイトラは一先ず揺らいだ精神を落ち着かせ、情報を整理する。

織姫については、その能力の希少性に気付いたとも言えば良い。

任務の時の光景を思い返すと、喜助と夜一が登場した後半の辺りで、彼女自身も重傷なのに拘らず、必死に力を行使して一護を治療していたのをすっかり確認している。

—— 共眼界の映像で、だが。

致し方無いだろう。久し振りにバトルジャンキーモードに移行した影響か、戦い以外に意識を割く余裕など無かつたのだから。

問題は泰虎だ。虚に近いものであるのは判っているが、詳細は不明。織姫の様に希少性が有るのかどうか怪しい。

今は未だ変化していないが、虚夜宮へ侵入した際に覚醒するその能力。

本人曰く、右腕に宿る祖父の魂アブウエロが齎す防御の力—— 巨人ブラッ・デレチャ・デヒカンテの右腕。黒を基調と

したカラーリングで、髑髏の様な模様が入った巨大な盾のような形状のそれは、ガンテンバインの繰り出す技の尽くを防ぐ程の防御力を誇る。

そして彼自身が持つ攻撃の力——ブラッ、イスケルダ、デル、デア、ア、ブ、ロ悪魔の左腕。白色で、巨人の右腕よりシ

ンプルな形状をしているが、帰刃形態のガンテンバインを一撃で屠る程の攻撃力と、響転に対抗出来る程の反応速度を齎した。

だが十刃には通用しない。精々上位十刃の従属官レベルか。

その程度の能力で見逃したとあつては少々説得力に欠ける。

——賭けるか。

ノイトラは背を向けたまま、口を開いた。

「…あの女については、貴方なら言わずとも解っているのでは？」

藍染程の者であれば、そう言うだけで全てを悟ってくれる筈だ。

実際、織姫の治療は普通のそれとは違うのが丸判りだ。

通常であれば、傷を治療してもそれまでの出血の跡は残る。だが織姫の場合はそれすら残さず、綺麗さっぱり元通りになるのだ。

共眼界の映像を確認する限り、激しく吐血していた筈の一護の怪我も、帰還直前には

綺麗に消え失せている。

「——それで、もう一人についてはどうなのかな？」

返答まで多少の間が有った事を確認しつつ、ノイトラは覚悟を決めて口を開く。

「男の方については——自分と同じニオイを感じました」

「…成る程」

藍染の相槌の後、一時の静寂が訪れる。

一秒、一秒と時が進む度に、ノイトラの鼓動が高まる。

やがて右頬を一筋の汗が流れ落ちた。

次の瞬間、フツ、といった藍染の鼻で笑う声が聞こえた。

「有難う。質問は以上だ、戻って構わないよ」

「…失礼しました」

ノイトラは一度振り返って一礼。そのまま扉を押し開いて出て行った。胃は引つ切り無しにキリキリと痛み続け、その扉に触れた手は小刻みに震えていた。

場所は変わり、三ヶタの巢に有る広間の一室。

その端の位置にて、合計八つの人影が集まり、地面に敷かれたシートの上に置かれたクッションの上に腰掛けている。

そして皆が思い思いに、中心に並べられた料理や酒の数々へ手を伸ばし、飲み食いしていた。

「素晴らしい！ この美酒ワインこそ中でも選りすぐりだ。正しく他では決して味わえぬ至高の逸品よ……」

「あ、それはランクが下の方のやつですね〜」

「……………」

「…だっさ」

ワイングラスを掲げて高らかに宣言するドルドーニだったが、直後に入ったセフィーアの指摘に硬直する。

さり気が一番高い物を予めストックしていたチルツチは、勝ち誇った笑みを浮かべながら嘲笑う。

「もう少し静かに…味わって食べよ。食材への冒瀆だし、何より喉に詰まらずぞ」  
「むぐむぐむぐ〜！」

グラスを口元で傾けながら、ガンテンバインは優しく諭す。

その眼前には勢い良く炒飯を掻き込んでいたりリネットが居た。

「…悪いな。こいつ夢中になるとこつちの話しは聞かねえんだわ」

「まあ…こんな美味しい物が有るって知ったんだ。気持ちは判るがな」

「あぐあぐあぐあぐ!! むぐうツ!!?」  
「つて言わんこつちやねえ!」

スタークはお決まりのバツが悪そうな顔を浮かべながら謝罪すると、その直後にリリネットに異変が起きた。

だがそんな彼女の横から、水の入ったグラスが差し出された。  
胡坐を掻きながら日本酒を水の如く飲み続けているノイトラだ。

「ほらよ」

「つ! ゴクゴクゴク…ぷはあく!! 死ぬかと思ったあく!!」

「…アホか、自業自得だろ…つてゴフツ!!」

「うっさいスターク!!」

一気に流し込んで難を逃れたリリネットはそう叫ぶ。

その姿を見たスタークは小声で呟いたが、どうやら聞こえていたらしい。

「ブツ!!?」

リリネットはノイトラから受け取ったグラスをスタークの下顎目掛けて思い切り投げた。

直撃を受けた本人は——どう考えてもダメージが入る訳無いのだが、ワザとらしく大きく仰け反ると、そのまま後ろに倒れて行った。

同時に手に持っていた料理の皿が宙を舞い、仰向けに倒れたスタークの顔面へと料理と一緒に見事に落下した。

「…ナイス」

「いえーいー！」

それを見たノイトラとリリネット——スターク弄り同盟は共にハイタッチを交わす。

もはやツツコむ気が失せたらしい、ガンテンバインは静かに黙々と料理を口に運び始めていた。

この賑やかな食事会の様なもの。実はセフィーロ主催の“ノイトラさんの帰還祝い及び陰険眼鏡の目潰し成功祝い”である。

陰險眼鏡云々の部分に関しての情報提供者はメノリ。

彼女の情報によると、ノイトラが藍染に呼び出されてからそう時を待たずして、ザエルアポロが同じく呼び出された。

行く時は彼特有のいけ好かない笑みを浮かべていた様だったが、藍染の自室から出て来た時の表情は怒りに歪み、不機嫌極まりなかったそうだ。

その時点で察せる。ノイトラの要望が通つたのだと。深読みすればそれ以外にも有りそうなので、警戒はしておいた方が良いだろう。

只、メノリとしてはその時ザエルアポロが小さく呟いていた言葉が引つ掛かったそうだが、一先ず経過観察という形で落ち着いた。

——これで勝つたと思うなよ。

直後にセフィーロから何処の汚い忍者かとツツコみが入ったが、ノイトラには意味が解らなかつた。

そして余談だが、情報提供後のメノリからの褒めて褒めてオーラが凄まじく、止むを得ずノイトラは彼女の頭を軽くポンポンと叩いて一言礼を言う程度で済ませて置いたが、大層喜んでいたのが印象的だった。

さみしがり屋故に何時もロリの傍に居る筈の彼女が、幾ら懐いたとは言え、こうも自主的に単独行動を取るとはノイトラにも予想外だった。

もし今後もそれが増える様であれば、当人には知る由も無いグリムジ<sup>死</sup>ョー<sup>七</sup>フラグが折れる可能性が浮上するだろう。

——もしかして代わりにロリぼっちフラグが立つのか。

余りにも彼女が可哀相に思えてきたノイトラは、これ以上考えるのを止めた。

「…後で覚えてろよ」

「残念だったな、きつと明日には忘れてる」

「あひゃひゃひゃ!!!」

顔面の惨状の後始末をしながら恨めしい声を上げて来るスタークに、ノイトラは素っ気無く返す。

だがその顔は今にも吹き出しそうだ。

リリネットは既に腹を抱えて大爆笑している。

この食事会の参加者が何故こうなったのかというと、偶々だ。

メモリの報告を聞いたノイトラとチルツチ——主にセフィーロだが、陰険眼鏡が大  
人しくなった、よし祝いをしよう、何処でやるか、といった具合にトントン拍子に話を  
進め始めた。

治療室は狭いし、他の雑務係の破面に加え、今は斬り落とされた右腕の治療の為に定期的に訪れるヤミーが居る。

その為、適した開催場所は人目も少なく監視も薄い3ヶタの巢となり、偶々廊下で擦違ったスターク達を誘い、目的地へ到着して間も無く十刃落ち二人組が現れ——現在に至る。

スタークを誘うに至った理由については、任務報告の会合の際に利用してしまった借りを返す意味合いが有った。

ノイトラは既に謝罪は済ませており、苦笑交じりに許しも貰っている。

出来る事ならハリベルに断りを入れた後にテスラも誘いたかったのが本音だが、残念ながら今回は都合が合わなかった。

玉座の間を退室して直ぐに、テスラはアパッチ達の手によって引き摺られて行き、その後をハリベルが溜息を吐きながら付いて行く光景を確認している。

——上手くやれている様で何よりである。

自分に向けられる助けを懇願する視線を無視しながら、ノイトラはしみじみ思った。

「…もう少し料理を追加致しますか？」

「いや、十分だ。そろそろオマエも座って良いぞ」

「……はい……」

先程から酒を注いで回ったり、反膜の糸で追加の料理を再構成していたロカに対し、ノイトラは労りの情を含めてそう言った。

ロカは帰刃形態を解くと、やや疲労していたのか、深めの息を吐いた。

彼女は元からそれ程霊圧の保有限界である霊力が高い訳では無いので、致し方無いだろう。

やや強引な手段で上げる事も出来無くも無いのだが、反動が激しいので余り遣りたくないらしい。

「ほらほら、こっちこっち！」

「…失礼致します」

「はい、これおいしーぞー！」

相変わらず表情に乏しいが、以前と比べて幾分か明るい顔をしているロカに、リリネットは笑顔で声を掛けた。

態々料理を取り皿によそってやり、ロカに渡す。

感情豊かなセフィーロとの付き合いが長いとは言え、他者から一切邪気の無い善意を向けられる事に未だに慣れていないのか、おずおずとした手付きでそれを受け取った。

ノイトラは口力を横目に見ながら、改めて決意した。

間も無く腕の完治したヤミーに殺される事になるであろう、彼女の事も救おう、と。

実は口力は外部に自身の情報を蓄積しており、ヤミーに頭を潰された後も時間を掛けて身体を修復して復活出来るのだが、中途半端な知識しか所持していないノイトラはそれを知らない。

ノイトラは任務より帰還した後、セフィーロに言われていた事を思い出す。

——ヤミーあの男が治療室に顔を出している時は、出来る限り口力ちゃんの傍に居てあげて貰えますか。

ノイトラが治療室の常連となっている事は周知の事実だ。何より治療長が従属官となつている事も有り、彼がいざその場面に居合わせたとしても何もおかしくは無い。

だがノイトラはセフィーロのその言葉に疑問を持った。

まるでこの先口力に起こる悲劇を知っているかの様な口ぶりでは、と。

ヤミーの粗暴さは虚夜宮内では有名だ。だが彼に限らず、今迄の歴代十刃や有象無象の破面達の下らない癩癩によって、何人もの雑務係の破面が犠牲になつている。

だがヤミーのそれは断トツに多い。故に今となつてはノイトラを超える恐怖の象徴

となつてゐる。

ロカと親しいセフィーロなら、そんな存在に彼女を近付けさせるのは極力回避したいだろう。

そう考えたノイトラは即座に疑問を捨てた。

——彼女を疑うなど、精神に余裕が無い証拠か。

内心で自分を叱責しつつ、日本酒が満杯に入ったグラスを一口で空にした。

「ノ〜イ〜ト〜ラ〜！」

「うおっ!？」

直後に背中へ感じた衝撃。同時に感じる酒臭さ。

ノイトラはその中に僅かに残った嗅ぎなれた香りに、その正体を悟った。

「…いきなり何だ、チルツチ」

「うえへへ〜」

「駄目だコイツ…」

危うく零し掛けたグラスを置くと、後ろから首に腕を回して来るチルツチに言う。

———というか、破面も酒に酔うのか。

本当に今更だが、そう思った。

「抜け駆けは駄目ですよお、私だつて」

「あつ!!」

「ムゴ!?!」

「えへへ」

今度はセフィーロがチルツチを押し退けると、ノイトラの頭部を正面から抱き抱える。

豊富な胸の感触と女の香りが、ノイトラの男としての本能を部分を刺激する。

だがその場の雰囲気の流れされてそのまま暴走する等という様子は無い。

常日頃から我慢していれば、普通ならその反動が来るかと思うが、ノイトラ精神は想像以上に鍛えられていた。

彼自身、何時ぞやの様に全裸で抱き着かれたり添い寝されない限りはスルー出来る自信が有った。

それとも無意識の内に仙人っぽくなつてきているのかもしれないとも言えるが。

「…ええい、情けないぞ我が弟子よ！ 吾輩の御蔭で一介の強<sup>エル・フェルテ</sup>者へと昇華したかと思いきや、再び女好きへと墮落するとは！ これは師匠として指導せねば——!!」

「止めろつて。お前さんは馬に蹴られる趣味でも有んのかよ」

「黙るが良い鬪士<sup>ゲレロ</sup>よ！ 十刃時代<sup>十</sup>から汗臭いばかりで華<sup>フロール</sup>の欠片も無かつた貴殿如きが口を出すな!!」

「…よし解つた喧嘩売つてんだなそうだよな!! 主も言っている、〃右の頬を殴られたら、倍にして返しなさい〃とな!!」

やはり酔つた勢いというものは恐ろしいものだ。

売り言葉に買い言葉で、今度は向こうでドルドーニとガンテンバインが一触即発の雰囲気醸し出す。

もれなく彼等はこの後、セフィーロより罰が下される事だろう。

次第に混沌とし始める光景を眺めながら、スタークとリリネットは苦笑した。

——楽しい、な。

近くにいっても消えない強い仲間達が居るだけで満足だった。

例えその仲間達が馴れ合いを好まずとも構わない。  
自分達が孤独でなければ、それで十分だった。

「…つたく、騒がしい奴等だ」

「でも楽しいぞ！」

「まあ…そうだな」

だがこうして賑やかに交流するのも悪く無いと、そう思えた。  
改めてこの機会を作ってくれたノイトラに、二人は感謝していた。

——この時間が何時までも続けば良いのに。

どうにもフラグ臭い様子で、スタークはそう思った。

## 第十五話 三日月と豹王と新入りと…

第5十刃への拠点の宮へ続く通路の途中。食事会からの帰りであつたノイトラは何度目になるかも解らない自身の不運と迂闊さを嘆いていた。

時間的に見て、現世は恐らく深夜に入るかといつたところだろう。

ノイトラは眠り扱けるリリネツトを背負つたスタークを見送り、酒に酔いつぶれてダウンした連中を一通り運んだ後、一人で帰路に着いた。

ちなみにチルツチとセフィーロは後者の自室へと纏めて放り込んでいる。ドルドーニと同じく、今迄酔つた彼女がロクな事をした覚えが無いからだ。

第6から4の十刃の宮同士の距離は近い。故に通路が所々繋がっている部分があり、ノイトラがウルキオラやグリムジョーと顔を合わせ易くなるのは自明の理。

だがノイトラは意図的にそれを避ける為、日頃から探査神経を駆使してその道を進むタイミングを計っていた。

しかし、今回に限つてそれを忘れていた。先程まで飲んでいた酒が影響して酔つていたせいだというのか。

憑依前は酒には滅法強い事が自慢で、後には更に酒豪レベルが跳ね上がり、日本酒二

升三升程度では全く酔わなくなった筈なのだが。

「……………」

「……………」

ノイトラは眼前で此方を睨み付けて来るグリムジョーの全身を見遣る。

まず左の上腕の中間から先が無い。左側頭部に盛大な出血痕が残り、胸部には正面から見て右上から左下目掛けて直線状に、何かに扶られた様にも取れる太刀傷が刻まれている。

腕の断面には布切れが無造作に巻かれている事から、その部分に関しての軽い処置はしたのでろう。だがそれ以外は止血も何もしていないらしく、先程から布の吸収限界を超えた血液が少しずつ滴り落ちていた。

御蔭で彼の歩いて来たであろう通路の床には血痕が点々と続いている。

ノイトラは後日にこれを掃除する羽目になるであろう雑務係の破面の事を考えると、思わず同情した。

何故治療室に行かないのか、とノイトラは思ったが、今の時間帯の事を思い出して納得した。

破面は基本的に人間と同じ生活リズムを持っている。食事に入浴、そして睡眠だつてする。

そして十刃のみならず、雑務係の破面達にも休息は必要だ。特別任務や不測の事態でも発生したのであればそれに備えて待機したりと色々柔軟に対応するのだが、基本的に普段は夜間まで仕事をすることは余り無い。

グリムジョーの怪我の種類と時期を見ると、自ずと詳細は察せた。

ウルキオラの一護に対して下した判断が気に食わなかった彼は、従属官達を引き連れて独断で現世に侵攻。一護に加え、援軍として来訪していた護廷十三隊の隊長一人を含めた六人と交戦した。

グリムジョーと従属官達、戦況は彼等に優位のまま進んでいた筈だったが、終盤で思わぬ反撃を食らう。

結果、従属官達は全滅し、彼自身も一護の攻撃によって負傷。

自分に傷を付けた事に怒るでもなく、寧ろ仕留め甲斐の有る獲物を見付けた事で上機嫌になるグリムジョー。

此処からが本番だと言わんばかりに、嬉々とした表情を浮かべながら斬魄刀を抜こうとした瞬間、東仙が現れる。彼から今回の独断行動に対して藍染が怒りを覚えていると聞き、己むを得ず撤退。

虚夜宮に帰還した後、静観という藍染の命令を無視した事に一切反省の色を見せないグリムジョー。

それを見た東仙は制裁と表して彼の左腕を斬り落とし、鬼道で消炭にした——その直後が今の現状だ。

そんなシリアスが繰り返り広げられていた間、ノイトラ達は酒や肴を片手に騒いでいた訳だ。

余りに空気の落差が有り過ぎである。

「……グリムジョー」

「……何だ……」

任務帰還より一日が経過した本日の夜、グリムジョーが独断で現世に侵攻するのは知っていた。

だがそれがまさかこれ程まで遅い時間帯だったとは予想外だ。直後にノイトラは思った。

——高校生がこんな時間まで起きてるなんて不摂生だぞ、主人公とその仲間達よ。

実はノイトラが食事会に参加したのにも理由があった。

それこそが現世より帰還したグリムジョーと鉢合わせしない為だったのである。

理想としては彼が腕を無くした後、自らの拠点の宮に引き籠るであろう時間帯。それを見計らって第5十刃の拠点の宮へと帰還する事だ。

一護を仕留め損なつた上、東仙から処罰と表して片腕を消された事により、未だ嘗て無い程に殺気立っている状態のグリムジョーと鉢合わせしたい破面は居ないだろう。

しかもノイトラはチルツチの件を境に目の敵にされている。下手すれば面倒な事になる可能性が高い。

「オマエ、一体何した？」

「てめえには関係ねえ…其処を退け」

事情を知っていないながらも、ノイトラはそう問い掛ける。

だがグリムジョーは全く以て取り付く島も無い。

そして心成しか不機嫌さが増したらしい彼は、そう言い捨てる。と全身から靈圧を滾らせる。

「どうやら自分から避けて歩こうとは思っていないらしい。さっさと其処から退いて道を譲れ」という意思の籠った眼光がノイトラに向けられる。

普通、そんな相手に対して態々話し掛ける事はしない。無視してそのまま擦違う様に避けて行つた方が良い。

だがこの二人の場合は少々特殊だった。

常日頃からそうだが、ノイトラが如何なる態度や対応を取ろうが、グリムジョーはそれに尽くに嘯み付く。

徹底して無視すれば、スカした顔するな、または腰抜けがと罵倒を浴びせる。

面倒だとは思いつつ、其方を振り向いて視線を合わせると、戦やんのかてめえと今度は霊圧を高め始める。

——普通の状態で既に面倒臭い。

事情を知らない者が一見すれば、まるでタチの悪いチンピラだと断言するだろう。

だが当人は挑発が主な目的であり、本気で衝突する気は無いのが唯一の救いか。

「答えろよ」

「……………」

だが何故か今回に限り、ノイトラは無性にグリムジョーを放って置けなかつた。

幸いにも、この場には従属官のチルツチもセフィーロも存在していない。

つまり周囲に気を配る必要が無いので、もし小戦闘に発展したとしても鎮圧は容易。

——別に戦闘の余波で建物が壊れたとしてもグリムジョーのせいにも出来るからとか、そういった事では無いのだ。

だがグリムジョーは眼光を鋭く尖らせるだけで、一切口を開く様子が無い。

相変わらずのプライドの高さだ。ノイトラは内心で溜息を吐くと同時に、思う。

友好的な交流は一切無く、御世辞にも仲が良いとも言えなかつた間柄だが、何故か今のグリムジョーを見てみると僅かな心苦しさと寂しさを覚えるのは何故だろう、と。

視線をふと彼の背後に移す。其処には何時も追従していた筈の忠臣たるシャウロンの姿も、他の個性的な従属官達の姿も全く見られない。

グリムジョーが中級大虚だった頃からの長い付き合いだったろう彼等は、現世での戦いに敗れ、散って行った。この現世への独断侵攻という判断が、藍染の意思に背くものだとして理解していながらも、自ら主の事を優先したのだ。

正にそう考えた途端、ノイトラは理解した。

——ああ、そうか。

群れる事を嫌う一匹狼な資質を持っていたグリムジョーは、シャウロン達の抱く揺るぎ無い強い意志を理解し、配下として受け入れた。それこそ、憑依後にテストラを受け入れた自分の様に。

只管に前進し続ける一匹の豹。それを自らの王と扇ぎ、追従し続けた五人。

——付いて来るなら好きにしろ。だが途中で力尽きた者は置いて行く。

そんな数有る王の形の内一つを体現していたグリムジョーを理解する者は、もはや何処にも居ない。

完全なる孤王。彼は今後、誰にも理解されず、受け入れられる事も無い。だが彼自身は気にも留めず、歩みを止めないのだろう。

ノイトラにはそれが他ならぬ自分自身にも有り得た未来の一つに見えた。

「それに……シャウロン達はどうした」

本来、死神の持つ斬魄刀には斬り伏せた虚の罪を洗い流し、元の魂魄の形に戻して尸魂界へ送るという特殊な効果を持つ。

幾百の虚が互いを喰らい続け生まれた最下級大虚。其処から更に共食いを続けて進化した姿である中級大虚。そして到達点たる最上級大虚。

その中でもある意味派生したとも言える破面が斬られた場合、一体どうなるのか。

その元となった魂全てが復元されて浄化され、他と同様に尸魂界へと送られる——  
のでは無く、消滅だ。

「死神に非ず、人の身でありながらも虚と戦える力を持った滅却師と同じだ。彼等の手によつて仕留められた虚の魂は靈子へ帰属し、完全に消滅してしまう。」

それは何故か。その疑問は破面の性質を考えれば答えは自ずと浮かんでくる。

破面とは死神の力を得た虚の進化系、純粹な虚では無い。

死神が死神を斬つても、斬られた方が死ぬだけ。つまりはそういう事である。

死んだ者が生きた証が残らないというのは余りに虚しく、悲しい。

だが存在そのものが業の塊とも言える虚にとつて、ある意味相応しい最期だとも取れる。

「おい、聞いて——」

「いい加減にしゃがれ!! 其処を退けつつつてんだろが!!!」

ノイトラの執拗な追及に対し、遂に堪忍袋の緒が切れたのか。激昂し、隻腕の状態でありながら斬魄刀に手を掛けるグリムジョー。

だがノイトラの目に映つたその姿は、まるで自分自身に対して怒りを覚えている様にも見えた。

それは自分が敵を仕留められなかつた事か、それとも自らに忠誠を捧げてくれた従属

官達の死を無駄にしてしまった事の不甲斐無さか。

当人にしか解らないが、どちらにせよ今は殺気立っているグリムジョーを止める事が先決だろう。

だが手負いの獣と化している彼に対し、只止めろと言つても聞かない事は明白。ノイトラは然るべき手段を取つた。

「…あんま興奮すんなよ、グリムジョー」

「っ!!? ガツ…!!」

「傷に障るだろうが、一先ず落ち着け」

何時ぞやの時と同じ様に一瞬だけ本気で霊圧を解放し、正面からぶつける。

元々消耗していたのだろう。グリムジョーは呆気無く膝を着くと、呻き声を上げた。

翌日には治療室へ訪れて治療を受ける考えだろう。

それでもノイトラは行動する事にした。

余計な御世話だと拒絶されそうだが、関わってしまった以上は何もせずには居られなかつた。

「つたく…取り敢えず付いて来い」

「…いきなり…何言ってやがる…!」

グリムジョーは必死に声を絞り出す。

殺気も未だ健在だが、ノイトラは気にせず近づいて行く。

「治療を受けさせてやるって言ってたんだよ。良いから来いっての」

「なっ!! てめえ放しやがれ!!」

「さて、御一人様御案内だ」

「聞けよ!! ってかこれが怪我人に対する扱いかよオイ!!?」

セフィーロはダウンしているが、ロカは健在だ。

彼女は後片付けをした後に就寝すると言っていたので、今なら未だ起きているだろう。

そう考えたノイトラはグリムジョーの襟を掴むと、そのまま引き摺り始めた。

霊圧の直撃を受けた影響で全身が弛緩しているグリムジョーは成すがまま。最後の足掻きと言わんばかりに抗議の声を上げるが、所詮は悪足掻きでしか無かった。

幾らグリムジョーの事を放って置けないと思つたとしても、何時ものノイトラであれば此処まで御節介を焼く事は無かつただろう。

多少心は痛むだろうが、面倒事に関わりたくないとしてスルーしていた筈だ。

この一連の行動が自分らしくないものであつたと気付き、頭を抱える事となるのは翌日。

やはり少なくとも、ノイトラは酔つていたのかもしれない。

部屋の中央に置かれた縦長のテーブル。先端に一つ、そして左右両側に五対の椅子。前者は藍染、後者は第1から10の十刃用の指定席である。

此処は主に重要だと思われる事案についての協議、報告等が有る時に用いられる部屋

だ。

既に席は一つを除いて全て埋まっており、十刃達は皆リラックスした様子で藍染の言葉を待つて居た。

「さて、此処に集まってもらったのは他でも無い。昨日発生したとある事案についてだ」

雑務係の破面が紅茶の入ったコップを配り終えたと同時に、藍染はそう切り出した。

現在、彼の視線は空席となつてゐる椅子を向いており、それだけで十刃達は大凡の事態を察した。

以前にも同じ様な事が有つたからだ。これは決して初めてでは無い。

本来その席に座つてゐるべきなのは第6十刃、グリムジョー・ジャガージャック。

元々問題児であつた彼だ。何時かはこうなつていただろうと、十刃達は其々に彼が一体何をやらかしたのかを想像してゐた。

「昨晚、グリムジョーが従属官を率いて独断で現世に侵攻。黒崎一護とその援軍である護廷十三隊の隊長格含む数人と交戦した」

藍染の説明が始まると同時に、テーブルの中央が円形に開き、空洞が出来上がる。するとその上部の何も無い空間へ、突如として映像が浮かび上がる。

「結果、従属官は五名全員が全滅。グリムジョー自身も負傷した」

映像は戦闘風景の中盤から終盤の様子のみだった。

一護は既に卍解状態でグリムジョーと交戦。従属官達は護廷十三隊の隊長格三名と席官二名全員を其々に圧倒していた。

だがその内一つの戦況が引つ繰り返る。

従属官の一人のエドワードと交戦し、彼の帰刃形態である火山獣ボルカニカに追い詰められた坊主

頭の男——十一番隊第三席、斑目まだらめ一角いっかく。

肩の関節から両腕にかけての部分が巨大化し、肩の一部に空いた穴から噴出する火炎を纏った拳を、あろう事か背中中で受け止めたかと思うと、直後に卍解。

槍の形状であった斬魄刀は、巨大な鎖で繋がれた其々に刃の形状の異なる巨斧へと姿を変え、今度はエドワードを上回る破壊力を誇る攻撃で終始不利だった戦況を対等まで持ち込むと、最後に放った渾身の一撃で見事勝利を収めた。

それを皮切りに、他の死神達は一斉に限定解除と声を上げると、一角に続く様にして

個々の戦況を巻き返す。

銀髪翡翠眼の小柄な少年——十番隊隊長、日番谷ひつがや 冬獅郎とうしろろうと対峙していたシャウロンは、帰刃形態にも拘らず瞬時に片腕を吹き飛ばされ、最後に斬魄刀で喉を貫かれて敗北。

共に行動していたナキームは、胸元が大きく開いた死覇装が特徴のグラマーな美女——十番隊副隊長、松本まつもと 乱菊らんぎくの斬魄刀の特異な能力により、解放するよりも早く縦に二カ所を大きく斬り裂かれて敗北。

所変わって、場所は浦原商店なる喜助の経営する駄菓子屋の上空。

赤髪で眉毛から額に刺青を入れた男——六番隊副隊長、阿散井あばらい 恋次れんじと対峙していたイールフォルトは、恋次の卍解である巨大な蛇の骨の口から放たれたレーザーの様な巨大な霊圧の砲弾に飲み込まれると、帰刃形態であるその身に纏った鎧を砕かれ、塵となって敗北した。

死神の中でも特に強大な霊力を有する護廷十三隊の隊長と副隊長。彼等は現世へ訪れる際、現世に不要な影響を及ぼさない様、霊力を本来の二割まで抑制する限定げんてい霊印れいいんをその身に刻む。

但しそれは緊急時以外に適用されるものであり、制限状態では不利だと判断した場合、解除出来る。

虚もそうだが、靈力が戦闘能力に比例する死神。つまり彼等の戦闘能力はその掛け声と同時にそれまでの五倍にまで膨れ上がったのだ。

従属官の中でも中の上に位置するシャウロン達でも、流星にそれ程の変化には対応し切れなかった。

「……ん？ ……っ?!?!」

十刃達に混ざって静かにその映像を眺めていたノイトラだったが、次に視界に映ったものに思わず目を見開く。

それは一護とグリムジョーの戦闘風景。

正解したにも拘らず、その刃は一度も届かず、容易くあしらわれ続ける一護。

空中戦の最中、振り下ろされた踵落として地面に叩き付けられ、彼の姿が砂塵に？まれて消えた。

ノイトラが驚愕したのは、その映像の中で一瞬だけ映った、地面に横たわる人物の状態であった。

黒髪のセミロングの小柄な女性——十三番隊所属で正式な肩書は無いが、実力的に上位席官レベルなのは間違い無い、朽木ルキア。

涙目で彼女を介抱しているのは、死神が人間に成りすますために用いる仮の肉体である義骸<sup>ぎがい</sup>。正確に言えば、それに入れられた、肉体に入った時のみ擬似人格を持つ魂魄として作用する特殊な道具である義魂丸<sup>ぎこんがん</sup>が、それを成している。

一護と交戦前のグリムジョーの手により、腹部を貫手で貫かれた結果なのだろうと思っただが、映像の中ではそうでは無かった。

俯きに倒れるルキアの出血量を見る限り、確かにその部分は合っていた。

——右腕<sup>みぎうで</sup>が挽ぎ取られている事を除いて、だが。

「…どうかしたか？」

「い、いや…」

僅かなノイトラの態度の変化を感じ取ったのか、左隣の席のハリベルが小さく声を掛けた。

それとは反対の右隣に居るスタークも同様らしく、さり気無く横目で様子を窺っている。

動揺を悟られまいと、ノイトラは一息置いて冷静さを取戻すと、何も問題は無いと返し、再び眼前の映像に集中する。

実力差を理解していながらも必死にグリムジョーへ立ち向かう一護。その表情は想像以上に怒りの形相を浮かべており、刀を握る手に必要以上の力み有る事が見て取れる。

確かにルキアがああ惨状ではそうなるのも致し方無いだろう。

だがそれ故に攻撃が単調となり、余計に自身の戦況を不利な方向へと導いてしまっていた。

本来の流れとは異なる事態に、ノイトラは半開き状態になりそうだった自身の口を、開口筋と口輪筋を駆使して完全密閉する。

恐らくあの怪我でも、織姫ならば治療可能だろう。取り敢えずは誤差の範囲内だ。

特に問題は無いと思うが、一応心配なので後で考える事にした。

次の瞬間、一護の黒色の斬魄刀より黒い斬撃が放たれ、油断していたグリムジョーに直撃する。

刃先から超高密度の霊圧を放出し、斬撃を巨大化させて飛ばすという一護の持つ唯一の技、げつがてんしゅう月牙天衝だ。

始解状態で放った場合、あの喜助でも下手すれば片腕を持って行かれていたと零す程の破壊力を誇る。卍解状態で放てば更に上を行くのは想像に難くない。

だが内なる虚の影響か、霊圧が非常に不安定である現状では余り威力が出せないらしい。

い。

その証拠に、モロに直撃を受けた筈のグリムジョーはそれ程大きな怪我を負っていなかった。精々鋼皮を超えて皮膚の表面を浅く抉っただけだ。

黒い霊圧の名残が晴れた直後、歓喜の笑い声を響かせながら斬魄刀を抜こうとするグリムジョーを、突如として現れた東仙が彼の肩に手を置いて制止。

少々言い争いが続いた後、やがて二人は黒腔を開き、帰還して行った。

「——で、これがどうした？まさか此れしきの事で奴を『落とした』訳では有るまい、ボスよ」

一通りの映像を見た後、バラガンはそう藍染へと語り掛けた。

その言葉に首を傾げているヤミーを除いた十刃達は皆同意見らしく、藍染に視線を移し、返答を待っている。

この場に於いて、第6十刃専用席が空席になっている時点で、もはや答えを言っているも同然。

——グリムジョー・ジャガージャックは十刃から外された。

映像を見る限り、確かに勝負は付かなかった。だが黒崎一護の持つ技の情報を得る事

が出来た等、寧ろそれなりの功績を齎している。

ある程度の罰は下されても、十刃から落とすには足りない。

「その通りだ。実を言えば彼はこの後、要と少々擦れ違いを起こしてしまつてね。その結果——左腕を消失してしまつたんだ」

——その場面に立ち会つて居ながら、その東仙を止めもしなかつた癖に。

良くもまあ抜け抜けと言えたものである。

さも不幸な出来事でしたと言わんばかりの藍染の態度に、ノイトラは内心で吐き捨てた。

「成る程……それで、その空席は如何様にする御心算です？」

そう問うのは、グリムジョーと数字一つ違いのゾマリ。

相変わらずの冷静沈着さだが、ノイトラは彼の瞳の奥に渦巻く野心の存在を見抜いた。

純粋な疑問も有るだろう。だがその実、僅かに自分がその席へと繰り上げ出来るので

はという考えも有るらしい。

其処で誤認してはいけないのが、ゾマリのそれは別に自分の利益を考えている訳では無いという事だ。

全ては藍染の為。立場が上になればなる程彼に近付き、そして今迄以上に彼の為に働ける機会が増えるのだから。

「ふむ、実はそれこそが本題でね——入りたまえ」

藍染は笑みを深めると、椅子を九十度余り回して後ろを振り向き、後ろの扉へと呼び掛けた。

重厚な音を響かせながら扉が開き始める。

人一人入れるかといった隙間が出来た途端、其処から小柄な人影が飛び出した。

人影は部屋に入って直ぐの階段を一気に飛び越えて着地。すると更に大きく跳躍し、テーブル越しに藍染と対に位置する場所へと移動した。

「やっほー！ みんな初めまして！」

ぐるりと十刃達を見渡すと、長い袖をぶらぶらと振り回して軽々しい声を上げて挨拶したのは——左側頭部に仮面の名残が付いた、一瞬女かと思間違う程に中性的な容姿をした小柄な男。

先に述べた長い袖と、腹部中心を除いて両側腹部を露出した奇抜な白装束に、腋に抱える様にして下げられた斬魄刀。

露出部から覗く肌は男とは思えない白さを持ち、浮かべる笑顔は実に華やかだ。

——ドルドーニが見れば即座に勘違いして反応しそうな奴だな。

最近女に飢えているらしい自らの師匠の事を思い浮かべながら、ノイトラは溜息を吐いた。

「紹介しよう、彼は新たに第6十刃の席に就いた——」

「ルピ・アンテノールだよ！」

登場して早々、笑顔で藍染の発言を遮るといふ大胆な真似をしたルピ。

だが何故か許せてしまう。一見すればそんな不思議な雰囲気を持った破面だった。

実際は御喋りで他人を馬鹿にする事が好きという厄介な内面を持っており、ノイトラとしてはその性格を知っているの、普通にウザいと思っていたが。

「…中々豪胆な性格の持ち主な様で」

とは言え、藍染の事を神と等しく信仰しているゾマリにとっては許されざる暴挙であつたらしい。

ルピを見るその瞳が一瞬鋭利に光つた事がそれを証明している。

今にも殺意と同時に愛が溢れ出しそうだ。

藍染の後ろでは、そんなルピの事を話し相手として気に入っているギンが口元を押さえてクスクスと笑い声を漏らしている。

「…随分と騒がしい奴が来たね。全然そそられないなあ…」

不快感を隠しもせず、ザエルアポロは呟いた。

後者は兎も角として、騒がしいという点については皆同感らしく、無言で肯定を示した。

「うるせえな、寝起きの頭に響くだろ…」

スタークは後頭部を掻き毟りながら、露骨に顔を顰める。

仲間が増える事は願つてもないのだろうが、ルピとの相性は余り良く無いらしい。

考えてみると確かにそうだ。それなりに心を許した結果でそうなる事は構わないのだが、興味を抱いた途端、相手の都合等関係無く無遠慮に踏み込んできそうな雰囲気を持つルピは、重い過去を持つスタークにとって余り好ましいとは言えない相手だ。

平穏を望み、必要以上に騒がしくなる事も好きでは無いという部分も有るのだろう。仲が深まるまでは気を遣つて適度な距離を保ちつつ、相手を出来る限り尊重した接し方を心掛けているノイトラとは正反対。

その反面、リリネットとの相性はそれなりに良さそうだが、果たして格下である彼女をルピが受け入れるか如何か怪しい。

十刃達は其々にルピを観察しながら、今後の付き合い方等を考え始める。この様に、彼が第6十刃へ就任した事に対して特に意見する者は居なかつた。

選ぶだけの根拠が有つて藍染がそう決めたのなら致し方無い、と納得しているからである。

問題行動や反抗的態度が多かつたグリムジョーとて、確固たる実力を持っていたからこそ、此れまで許容されてきたのだ。

ルピが彼に代わっても何の問題も無いと判断されたのであれば、反対理由は無い。

実力は有るが、プライドが高く好戦的な扱い辛い者。それよりも未だおちやらけた性格の者の方がマシだとか、そういった考えも有るのだろうか。

「彼は未だ不慣れな部分も有るだろうが、皆仲良くしてやってくれ」

「よろしくねー!」

テレビで稀に見るぶりっ子アイドルがする様にして、ルピは両手を顔の横に並べ上体をやや右に傾けると、語尾に星マークが付きそうな口調でそう言った。

## 第十六話 三日月と御仕置と蔦嬢（男）と…

治療室にて、ロカは自分が担当しているとある患者の最後の治療措置を行っていたとは言っても、患部に巻かれた包帯を解き、傷口を固定している大きなスキンステープラーの針を外すだけだが。

「おい、早くしろ。こっちは退屈でたまんねんだよ」

「…申し訳御座いません」

「チツ！ 役に立たねえゴミだぜ」

その患者というのはヤミー・リヤルゴその人。

治療しているのは現世の任務で一護に斬り落とされた右腕だ。

断面が綺麗だった事と、ロカの能力運用の向上の御蔭か、接合処置は史実よりもスムーズに進んでいた。

だがヤミーは彼女に対し、感謝の意など欠片も抱いていなかった。寧ろ治療時間が多い事に文句を垂れてばかり。

意識の無い当人に代わつて腕を持ち帰つて来てくれたノイトラに対しては、此方に攻撃して意識を奪つた事に対する殺意しか無い始末だ。

最近ではそれが原因で常に苛立つており、彼の従属官である子犬の破面——破面N  
トレイン・イ・シンコ  
 3、5、クツカプーロが八つ当たりで物を投げられる等の被害を被っている。

そして今回の様に治療を施してくれている筈のロカへの暴言は初めてでは無い。腕の治療を開始してから何度目になるかも不明だ。

ヤミーの性格上、口より先に手が出そうなものだが、流石に腕を治すにはロカが存在が必要不可欠であると理解しているのだろう。暴言以上の真似をする様子は今のところ無かつた。

だがそれにしても彼女に怒りを向けるのは全く以て筋違いである。

役立たず、ゴミ、ノロマ、屑、雑魚。他にも口にするのも憚れる単語が幾つも飛び出している。

——聞くに堪えない。

離れでそれを聞いていたセフィーロは遂に堪忍袋の緒が切れた。

「文句言うくらいなら出て下さいね筋肉ゴリラさくん。次からは漏れなく出禁にしますんで」

「ああ!? てめえ今なんつったコラア!!」

包帯を解いていた最中にも拘らず、ヤミーは立ち上がって声を荒げる。

剩え霊圧まで放出し、見境無しに撒き散らし始めた。

幸いにも、現在の治療室には他の雑務係の破面は居ない。事前に探査神経でヤミーが来る事を知っていたからだ。

そして一番影響を受けそうだと思われたロカは顔色一つ変えておらず、至って普通だ。

それもそうだ。以前ウルキオラの霊圧にアテられた教訓から、彼女が身に纏う装束はセフィーロとの共同の下、反膜の系によって形成された特殊なものに替えられていた。

外部からの霊的干渉も、霊圧も遮断する仕様となっており、その御蔭でロカは平然としていられた。

余談だが、ウルキオラの霊圧の件は、後に彼が態と放出していた事が判明している。関係無い破面達を追い払う意味合いでやったらしいが、あれは何処からどう見ても明らかに強過ぎだった。

——— 今度からは普通に口頭で伝えるか、目配り程度で済ませておけ。

彼等も馬鹿では無い。それだけでも十分理解出来るのだからと、ノイトラはそう注意

にも等しい助言をウルキオラにして置いたので、もう無いとは思われるが。

「大体初めつからうるセエんだよ!! 俺に指図して良い立場だと思ってるのかこの女アマ」

「あれあれ? では貴方は第5十刃の従属官である私に手を上げてても良い立場なのですか?」

「——つ、ちいッ!!」

ノイトラとの鍛錬の御蔭で幾分か戦闘能力が戻って来ているとはいえ、現状では依然として現十刃と渡り合える程では無いセフィーロは、切り札の一つを切った。

「治療が終わるまでそんなに時間は掛からないですから、大人しくして下さいね」

「クソツタレが…!!」

流石のヤミーとて、解放前の状態でノイトラを相手取るのは分が悪い事は理解していたらしい。

ドスンという音を響かせながら、不機嫌さを隠さぬ様子で腰を下ろした。

——大凡二分程度が経過しただろうか。

その間、ヤミーはセフィーロに言われた通り、大人しく治療を受けていた。バチン、バチン、とステープラーの針を外す音が連続して響く。

「…処置、終了致しました」

「ん？おオ…」

やがてその音が止まると、同時にロカが口を開いた。

ヤミーは首をゴキゴキと鳴らしながら立ち上がると、完全に繋がった右腕を持ち上げる。  
る。

何度も握つては開いてを繰り返し、感覚を確認する。

「如何ですか？ 動き、反応等は切断前と変わりありませんか？」

「…そうだな」

ロカの問いに対してそう零すと、ヤミーは不意にセフィーロの方に視線を移す。

だが何を言うまでも無く、出口方向へと身体を向けた。

その妙な行動にセフィーロは思わず頭を傾げそうになるが、次の瞬間、背筋に悪寒が走った。

ヤミーが振り返る直前、その口元が吊上がっている事に気付いたからだ。

「っ!!?」

——まさかこのタイミングで来るとは。

セフィーロは目を見開き、ロカも予想外の事態に身体を硬直させている。

既にヤミーは拳を振り上げ、今にもロカ目掛けて振り下ろさんとしていた。

「本調子かどうかちよつと試させろ、よ!!」

だが彼女は一步も動かない。厳密に言えば必要が無いのだ。

何せこの場にはもう一人、先程から霊圧を極限まで抑えて潜伏しているとある人物が居るのだから——。

「——大凡七割つてとこか。リハビリ無しでコレなら十分じゃねえか?」  
「お……おオ……?」

ロカの眼前まで迫ったヤミーの拳を止めたのは、横から伸ばされた右手の人差し指。見た目からはどう考えても有り得ない現象。だがその者の霊圧が大きければ、如何なる巨体を誇る相手が放った攻撃でも容易く受け止められるこの世界では珍しい光景でも無かった。

ノイトラは自身が受け止めた拳を眺めながら静かに語り掛けると、ヤミーは反射的に返事を返す。

だが直後に現状を理解したのか、声を荒げた。

「つて…あア!!? 何でてめえが此処に居んだよ!!?」

「何でつてオマエ…初めから居たっての」

「はあ!!? 聞いてねえぞそりゃあ!!?」

「当たり前だろ、言つてねえし」

次第に怒り口調へと変化し始めるヤミーに対し、ノイトラは冷静にツツコむ。

何故彼が此処に潜んでいたかという、事前にセフィーロより、ヤミーの治療が終わる日が今日であると聞いていたからだ。

恐らくヤミーは間違い無く、治療が終わった瞬間にロカを殺すだろう。

基本的に破面達は、一人の雑務係の破面が死んでも全く気にしない。するとすれば、それは同じ雑務係の同僚ぐらいだ。

他は大抵が消耗品が一つ減った程度にしか取らない。

だがノイトラやセフィーロはそうでは無い。

ロカには今迄も世話になっているし、感情に乏しいとは言え、細かな部分で気を遣ったり、さり気無く世話を焼いてくれたりと、見返りを求めず他人に尽くすその在り方には好感を持てる。

ノイトラ自身は知らないが、過去の彼女は現在とは比べ物にならない程人形染みており、ウルキオラを彷彿とさせる程だった。

今のロカが在るのは、セフィーロの尽力の賜物に他ならない。

事有るごとに共に行動し、気分転換と表して嫌々ながら藍染に許可を取り、現世にコツソリ赴いたり等、様々な事をした。

結果、僅かながらも感情豊かになり、セフィーロ限定ではあるが時折笑顔を見せる様になった。

そんな口力が、同族殺しを何とも思わない最低最悪な性格とも言えるヤミーに理由もなく虐殺される等、許せる筈が無い。

そう考えたノイトラは、まず霊圧を抑えて治療室の隅へと潜伏し、ヤミーが行動を起こした直前に行動するという、至って簡単な作戦を決行した。

霊圧知覚が鈍いヤミーなら粗末な霊圧秘匿でも気付かれる事は無いだろうし、従属官であるセフィーロの相棒的な存在を助けても何の問題も無い。

「だからこの前探査神経鍛えろって言っただろ。俺だから良かったもの…死神達相手にそんな真似すりや死んでんぞ」

「う…うるせえ!! てめえこそソコソコと情けねえ真似しやがって!! それでも十刃かよ!!!」

「力の無い雑務係の口力をサンドバッグにしようとするのは情けねえとは言わねえのか? 第10十刃サマ?」

「ぬぐぐぐ…!」

正しく完全論破。思考能力が著しく低いヤミー相手では、この結果になるのは自明の理。

だが忘れてはいけけないのが、彼はとことん馬鹿であり、此処で素直に反省を示す様な輩では無いという事。

案の定、ヤミーは反論すら出来ず手詰まりとなった途端、逃げる様にそそくさと治療室を後にしようとする。

—— させると思うか。

ノイトラは響転でその場から跳ぶと、ヤミーの眼前へと先回りした。

「んなっ!?!」

「…そう急ぐなって」

浮かべる笑みは何時ぞやの戦闘狂モードを彷彿とさせるものでは無く、加虐性極まる寒気を感じるもの。

初めて見るノイトラのその表情に、ヤミーは冷や汗を滝の如く流し始める。

「ヤミーよお…」

「な…なんだよ…」

「その腕、本調子に戻してえだろ?」

「お、おお…」

「俺が協力してやろうか？」

歯を剥き出しにしてそう言うノイトラに、ヤミーは全身に鳥肌が立つ。

同時に本能が警報を鳴らす。此処は危険だ、即座に退去せよと。

「い、いらねえよ!! その内戻んだろ!! 俺の事はほつといて其処を退けよ!!!」

「そんな水臭え事言うなよ…な？」

「どあアツ!!!」

だがヤミーは既に詰みの状況下であった。

眼前からノイトラが消えたかと思うと、辮髪を背後から引つ張られて後ろへと倒される。

突然の事に混乱していると、今度は襟を掴まれ、そのまま扉へと引き摺られて行く。

「は、放しやがれノイトラア!!」

「さあてと…楽しい楽しいリハビリの始まりだ…」

そのまま二人は治療室から出ると、即座にノイトラが響転でその場を移動。セフィーロも彼等が何処へ行ったのかまでは知らない。只、この日を境に三日間、虚夜宮内にてヤミーの姿が見えなくなった。

虚夜宮の外にてヤミーの教KYOUUIKU育を終えたノイトラは、後から遅れて来たチルツチと共に、第5十刃の拠点の宮への帰路へ就いていた。

別にフルボッコにしたとかそういう事では無い。十刃同士の戦闘は厳禁とされている中、感情に任せてそれを態々破る様な馬鹿な真似はしない。

単にノイトラの鍛錬メニュー——ヤミー専用改正版を強要しただけだ。とは言っても、当人は半分も成し得ていないのだが。

基本的に食っちゃ寝という自堕落な生活を送るヤミーに、ノイトラの行う様な過酷な鍛錬が出来る訳が無い。

「いやあ、スツキリした…」

「…あれには流石のあたしも同情したわ」

達成感溢れる爽やかな表情を浮かべるノイトラに、チルツチはうんざりした様子でそう呟く。

何せその光景はスパルタもスパルタ。少しでもサボろうとすれば斬魄刀を眼前スレスレに突き刺して脅したり、グリムジョーにした様に瞬間的に霊圧をぶつけたりという容赦の無さ。

第5と第10、余りに力の差が開いている未解放の状態では断れず、かと言って藍染の許可無しに解放する訳にもいかないヤミーは従うという選択肢しか取らざるを得ず、激しい息切れと発汗に見舞われながらも必死にメニューをこなしていた。

現在の時間は既に現世で言う午後四時付近を回った付近か。後二時間もすれば、何時も通りに仕事を終えたであろうセファイロとロカが夕食の準備にやって来るだろう。

セファイロは従属官になったと言っても、住居は治療室に在る一室のままだ。

——何なら其処で一緒に過ごしますか。

そんな誘いを受けたが、丁重に御断りしておいた。

ちなみに従属官でも無い口力が何故夕食時に混ざっているのかは不明だ。

再構成した料理を他の雑務係に運ばせればそれで済むのに、だ。

ノイトラとしては別に問題でも何でも無いので、余り気にも留めていなかったが。

この二時間という余った時間。待つには長過ぎて、鍛錬するには短過ぎる。

如何にして潰そうか、ノイトラは歩きながら考える。

最近は何かと藍染主催の会合等の用事が多く、満足に鍛錬の時間が取れていない。

一応この事を想定して、現世の任務の直前までは十二分に取っており、今も軽く流す

程度の事はしているが、正直言つて不安だ。

身体を使う鍛錬は非常に時間が掛かる。短時間の場合、霊圧の細かな制御等、細かい

部分を鍛える事も出来るが、やはり全力で力を振るわねば力の上限は上がらない。

僅かな時間ではあったが、以前の任務の中で喜助や夜一と交戦した御蔭で、色々とい

メージが湧いていた。

ノイトラとしては是非ともそれを鍛錬の中で試したいと考えているのだが、中々思う

通りにいかない現状に内心で歯噛みしていた。

「しっかし、やっぱ物足りねえなあ…」

「…今あんたが何考えてるのか判るわ。この鍛錬馬鹿!!」

懲り懲りだと言わんばかりに、チルツチは叫んだ。

——これ以上何か新しい事をしようと言うのか、この男は。

もう十分であった。主にS A N 値的な意味で。

ちなみにS A N 値とは、とあるクトウルフ神話を題材にしたTRPGで使われるプレイヤーキャラクターのパラメーターの一つである正気度を示すものだ。

主に衝撃的だったり極度の恐怖や狂気の場面に遭遇した場合に起こり得るそれ。

例えば小さな少女が大型トラックをボール代わりにジャグリングしている光景を目の当りにした様なものだと思えば良い。

絶対に自分の正気を疑うし、その光景が長く続くものなら、間違い無く気がおかしくなる。

ノイトラに関しては、その有り得ない光景と同時に放出される出鱈目な霊圧が有る為、余計に拍車を掛けている。

彼に追い付く、または出来る限り近付く事を目標としているチルツチだ。差が縮まるどころか、倍速で広がる事が繰り返されてみる。それは叫びたくもなるだろう。

「何言ってるんだ。向上心無くして成長無しだぜ?」

「あんたのはあり過ぎだつての!! ドルドーニにガンテンバインもその内泣くわよ!!」

かつてノイトラが凄まじい速度で成長を遂げていた頃、日に日に実力と戦法が変化し続ける彼の鍛錬を相手していた二人の零していた愚痴が脳裏を過る。

——如何足掻いても「絶望」。

最近では稀に実戦形式の手合せをする程度だが、開幕と同時に勝敗が決まる光景以外を見た記憶が無い。

そして最後の抵抗と言うべきなのか、ドルドーニは未だにノイトラに免許皆伝を与えてはいない。

チルツチやガンテンバインには只の悪足掻きにししか見えなかったが、自分には考えが有るのだと言って本人は全く聞き入れない。

確かに彼は時折何か思い詰めた様な表情を浮かべていたりするが、普段の行いの悪さ故に、皆は半信半疑だった。

「…そう言えば、昨日の会議の内容って——やっぱグリムジョーの事?」

何を言っても埒が明かないと諦めたチルツチは話題を切り替える事にした。

このメリハリの良さを見る限り、少なくともノイトラの影響を受けている様だ。

会議内容については、多分明日辺りに虚夜宮全体に詳細が伝わると思うが、ノイトラは折角なので教えて置く事にした。

「ああ」

「…『落ちた』の?」

チルツチにはグリムジョーの治療の面倒を見ていた事を伝えてある。

負傷内容、そしてそれに至った経緯の詳細についてもだ。

「片腕無くしてんだ。流石に継続は無理だろ」

「そう…」

ノイトラは最後の眩きに、落胆の感情が含まれている事に気付いた。

思えばチルツチはあの時を切っ掛けに、グリムジョーの事がある意味好敵手の一種と

して見ていた。

これが他の破面であつたならば彼の降格に喜びそうなものだが、戦士の心構えを持つ彼女にとっては違ふらしい。

高い壁というものは真つ向勝負で乗り越えてこそ意味が有る。それが外的要因で勝手に崩れ落ちて、瓦礫と化したそれを軽々と踏み越えて行く様な形になつて喜べる訳が無い。

ノイトラとしてもそれは同感だつた。

「で、後釜はどんな奴だつたの？」

「それは——」

——多分お前が嫌いなタイプだ。

その口に出す前に、その声を遮る者が前方より現れた。

「あ、ノイトラじゃーん！ やっほー！ あいかわらずデカくておつかない顔してるねエ!!」

「………こんな奴……」

「…マジで？」

正しく話題に上がっていた張本人——ルピ・アンテノールの登場だった。楽しげな笑顔を浮かべながら、長い袖を頭上で振り回している。

ノイトラは酷く面倒臭そうな表情でそう零し、チルツチは固まった。

前任者との余りの落差、そしてその容姿に。

ルピはそんな二人を見て首を傾げた。

「あれ？ノイトラってばなんでいきなり疲れた顔してんの？　ってか随分となつかしい顔が居るねー。あの噂はホントだったんだ！」

「……………」

「いやいや、でも昔とは大違いだねー。霊圧もすごく上がってるし、油断すればボクでも危ないかもオ。これはもう売女とか気軽に呼べないや、ざんねーん。ちなみにあくまで“油断すれば”だけどねー。大事なとこだよこれ！」

「…………ウゼエ…………」

「…同感。これはキツイわ…」

一向に止む様子が無いマシンガントーク。放つて置いても三十分は軽く話し続けて居そうだ。

ノイトラとしては元々ルピが御喋りだとは知っていたのだが、実際に体験してみると想像以上のものだった。

さり気に侮辱されていたチルツチだが、話し声を聞き流す事で精一杯で、特に気にしていなかった。

「ちよつとー、少しは反応してよオ。話してるコツチはつまんないじゃーん。折角会ったんだから少しは交流を深めようとは思わないの？ そんなんじゃコミュ症になっちゃうよ？」

「…せめて台詞が三十字以内であれば考慮する」

「それは無理だねー。だってその程度じゃボクの話したい事とか全然伝えられないしー。やっぱり言葉を尽くすつてのは最高の礼儀だと思うんだけど、そこらへんどう思うノイトラ？」

「…要点を簡潔に伝える事も時には必要だろうが」

「おおつと、それはボクも盲点だった。スゴイね、見た目に反して普通に冷静なツツコミも出来るんだ！ てつきり噂通りなただのゲスなチンピラだと思つてたよ！」

一言返せば倍以上になって返って来る言葉の嵐。しかも節々に挑発が混じつてきた。

だがノイトラは怒りよりもうんざりな気分が勝っていた。

それはチルツチも同様らしく、聞き流しに徹していた彼女の眉間に徐々に皺が増えて行ったかと思うと、とうとう痺れを切らした。

「…ちよつと、もう行くわよノイトラ。これ以上は流石に相手してられないわ」  
「お、おう…」

強引にノイトラの腕を掴むと、そのまま引つ張って行く。

突然の行動にキョトンとするルピの横を通り抜けると、二人は再び帰路を進み始めた。

だが彼がそれを大人しく見送る様な性格をしている筈も無く――。

「おやおや、そんなに密着しちゃって。もしかしてボクがノイトラを独占してたから嫉妬しちゃったのかな？ ヒューヒュー、熱々だねエ！ ノイトラも隅に置けないな」

「！」

「……………」

「そういえばチルツチ以外にも女の従属官が居るんだよね？ いやつ、この女こまし！」

「一体どんな方法で手籠めにしたのか、ボク詳しく聞きたいなー？」

ルピは歩を進め始めた二人の後ろに追従し、更に捲し立てる。

拠点の宮が近い為に致し方無いとは言え、このしつこさは少々目に余った。

喧騒を傍から眺める分には構わないが、自分がその中心となるのを嫌うスタークが拒否反応を示した理由も解る。

二人は終いに響転でも使おうかと思いついた瞬間、ルピの口から聞き捨てならない言葉が飛び出した。

「…やっぱりノイトラはノイトラなんだねー？ 前の男の従属官を捨てて、新しく女の方を選ぶなんて。いやー、流石ケダモノはやる事が違うね」

「なっ！！ てめえ何言ってる…！！」

「しかもその従属官だってハリベルっていうボンキュッボンの方を選んだみたいだし、全く以て似た者同士だねエ。言い換えれば好色主従かな？」

無視されている事が気に食わなかったのか、ルピは話の内容を変えた。

それもノイトラにとって禁忌とも言える話題へと。

ルピとしては他者を馬鹿にする事が好きという趣味の範囲内でも有り、話題作りの為の挑発の意味合いでしか無いのだろう。

「…何だと?」

案の定、彼は歩みを止めると、ゆっくりと振り返った。

——拙い、これはキレる寸前だ。

この場の空気がノイトラを中心に變化した事に、チルツチは焦り始める。

霊圧を抑えているとは言え、その佇まいから実力差を測れないのかこの女男は、と内心で毒づく。

「ア、ごめーん…もしかして凶星だった? でも仕方ないよねー…そう見えちゃうんだもん」

「……………」

振り向いたノイトラに対し、ルピはワザとらしく謝罪する。

その表情は明らかに反省の色等が一切無く、口元から舌を覗かせ、小馬鹿にした様に半目でノイトラを見詰めていた。

「でも考えるところに引つ掛かる女も大概だよね。その女は未だしも、そのもう一人だつてもしかすれば結構な尻軽なのかも——」

「おい！てめえそれ以上口を開くな!!」

第6十刃は揃いも揃って地雷を踏み抜くのが恒例なのだろうか。

チルツチはそう思いつつ、状況の泥沼化を防ぐ為に声を荒げてルピの発言を制止せんとする。

「少し黙れや、糞餓鬼が」

「え…?」

だが全て手遅れであつた。

気付けばノイトラはルピの真正面、それも半歩動けばぶつかる程度の距離に立つて居た。

油断していたルピは目を見開いて全身を硬直させた。

そしてその一瞬の間に、魂が押し潰されるがの如き霊圧が彼を襲う。

「か…ハッ!!」

「御喋りも度が過ぎると痛い目を見る事になるぜ。こんな風にな…」

「ヒッ…!!」

緩み切っていた表情を一転、恐怖一色に染め上げたかと思うと、後ろにへたり込んだ。それは到底男とは言えない、実に女々しく、そして情けない姿だった。

ノイトラはそんなルピに近付くと、頭部を右手で鷲掴みにして自身の視点まで持ち上げた。

全身が弛緩しているルピは成すがままにされるしか選択肢は無く、言葉にならぬ声を漏らしながら、虚ろな目でノイトラを見た。

「…その舌を引っこ抜けば少しは静かになんのか？」

「っ!! や…止め…!!」

「誰が喋って良いって言った、オイ?」

「ギツ…アアアアツ…!!!」

ノイトラは頭部を掴む手に力を込めた。

同時にメキメキという嫌な音が響き始める。

ルピは悲痛な叫び声を上げ、両目からは涙腺より涙が漏れ出す。

幾ら彼が逆鱗に触れる様な真似をしたからと言つても、これ以上ルピに危害を加える事が有れば流石に藍染の定めた法に触れる事になる。

そう考えたチルツチは咄嗟にノイトラの腕を掴んだ。

「ノイトラっ!!」

「…解ってる」

幸いにも未だ言うまで怒りを覚えてはいなかったのか、ノイトラは直ぐにルピを放した。

グリムジョーとは異なり、手よりも口が出る方が早かったのが原因だろう。

再び元の体勢へと戻ったルピに、絶対零度の視線を向ける。

ノイトラが一番気に食わなかったのは、テスラに關しての発言だ。

彼が何を思い、如何なる覚悟を以て行動したのか知らぬ癖に、知ろうともしない癖にあの発言だ。

——この身の程知らずが。

殺意は無いが、根拠も無しに勝手な想像で軽々しく語るあの女男の口から声帯までを抉り取つて遣りたいと、そう思った。

結果的に見れば殺意が有るのと同様なのだが、ノイトラの中では認識が異なる様らしい。

ルピが十刃でなければ、何時もの肉体言語の話し合ひを行つていただろう。それも一

番容赦の無い内容を、延々と。

今迄も何度か他の破面達に身内の誰かを侮辱され、それに対する報復を行つて来ているが、そのどれもが殺すまでに至っていない。

だが今回の場合は状況が違う。他ならぬノイトラと一番付き合ひが長い、互いに理解し合える親友と言える間柄であるテスラの覚悟を侮辱されたのだ。

精神状態を一からリセットされてもおかしく無い。

ノイトラとしては、寧ろ殺されない事に感謝しろとまで思つていたりする。

余りに日本人らしくない物騒過ぎる考えだ。憑依後の環境がそういつた変化を齎したのかもしれないが、それにしても変わり過ぎだ。

それ程までにテスラ・リンドクルツという存在は大きく、あの荒んでいた頃のノイトラの心に、一番最初に救いを与えてくれた唯一の存在でも有った。

現在では話す機会も減ったとは言え、その絆は健在だ。稀に視線を交差させるだけで十分通じ合えている。

——今日は随分と賑やかじゃねえか。

——馬鹿言え、振り回されているだけだ。

——ま、頑張んな、ムツツリ野郎。

——そっちもな、女コマシ野郎。

アパッチ達に弄繰り回されながら通路を進むテスラと擦れ違った際、一瞬のアイコンタクトで行われた意思疎通の内容だ。

もはや超能力の域なのだが、親しくなればこの程度は普通だと二人は思っていた。

「命拾いしたな」

「…あ…うっ!!」

ノイトラは右手から力を抜く。そうなれば当然、ルピはその手の間を摺り抜けて床へと落下した。

糸の切れたマリオネットの如く崩れ落ちると、前のめりに倒れそうになるが、其処は流石に十刃に選ばれただけ有るのか、咄嗟に両手を着いて身体を支えた。

「…ツ…ハア…ハア…!!」

ルピは荒い息を吐きながら、俯き加減だった顔をゆつくりと持ち上げ、ノイトラの様子を窺う。

その表情には先程までの余裕は皆無。前任者と同じく力の差を理解したのだろう、怯え混じりに観察している節が見られた。

——第三者が見れば誤解しそうな光景だ。

涙を浮かべながら怯えた表情をした美少年が、眼帯を付けた人相の悪い長身の男の前で両手両膝を床に着いている。

場合によつては如何様にでも解釈出来る光景を展開している事に気付き、早々にこの場を終息させた方が良くと考えたノイトラは、ルピに更なる制裁を加えたい自身の衝動を抑えながら口を開く。

「コレに懲りたら、二度とテスラアイツの事を語るんじゃねえ。行くぞチルツチ」  
「え？…う…うん…」

そう言つて一睨みした直後、踵を返すノイトラ。

チルツチはその行動の切り替えの早さに一瞬固まるも、慌てて追従し始めた。

ルピはそんな二人の背中を只々見送るしか出来無かつた。

やがて二人の通路の曲がり角へと消えて二・三分後、弛緩していた全身に感覚が戻ると、ヨロヨロとふら付きながら立ち上がる。

「あれが…5番目だつて…!? どう考えても詐欺じゃないか…!!」

顔を顰めながら、ルピは先程までとは異なつた口調でそう吐き捨てる。

彼はノイトラを舐めていた。所詮は鋼皮と膂力が傲慢なだけの、頭の悪い獣だと。自分でも完全に隙を突けば殺せる程度に実力が均衡していると、そう思い込んでいた。

噂通りであれば、少しばかりの挑発に反応するだろうし、感情に任せて襲い掛かつてきたところを、先に述べた通りに隙を突く事で返り討ちに出来る。

そうして自分が第5十刃へ昇格する。先程の挑発はその為のシミュレーションの一種だった。

この考えから判る通り、ルピは新人且つ成り上がりに近い男だった。

今迄十刃とは離れた位置に居たが故に、最新の情報にはやや疎く、風に聞いた噂程度の情報しか主に持ち得ていなかった。

ノイトラが大人しくなった事、任務報告の場に於いて衝撃発言をした程度の事は知っているが、それだけだ。その場に居合わせた破面達が彼に何を感じたのか、どう認識したのかまでは認知していない。

だがルピは実際にノイトラと相對してみて理解した。あれは次元が違う、と。

何が頭の悪い獣だ。あれ程見事に研ぎ澄まされた霊圧は、戦士であっても持つ者は然う然う居ない。

何が鋼皮と膂力だけの愚物だ。序盤に一瞬で間合いを詰めて来たあの響転の速度を見た上で言っているのか。噂を流した馬鹿な破面は。

たったの一睨み。それだけで勝敗は決していた。

ルピは必死に考察するも、一向に自分が勝てるビジョンが全く浮かばなかった。

「なのに……なんで……」

顔を俯かせながら、絞り出す様にしてそう零す。

これ程までに一方的な展開をされた経験は無かった。

第6十刃就任前の、只の遊撃要員の破面だった頃も、何時も周囲の主導権は自分が握っているのが常だった。

こんな時、何時もの自分であれば間違い無く激昂している。そして本気で仕返しの際を組み合わせ始める筈だったのだが――。

「いんなに――」

――胸がすく様な感じがするんだろう。

自身の胸を両手で押さえながら、呟かれた言葉は、周囲の空気に溶け込む様にして消えた。

一睨みされただけで、自分の全てを屈服させられた時に感じた恐怖。身動き一つ取れず、為す術も無い、僅かな抵抗すら許されない絶望。

最終的にゴミを見る様な目で見下ろされた挙句に見逃され、去って行くその背中を只々眺めるしか出来無かった無力感。

だがそれ等全てが、何故か、如何してか——悪く無いと思えた。  
もう一度感じてみたいと、そう思えた。

今この瞬間、ルピ・アンテノールは被虐嗜好——所謂ドMという新世界を己の中に  
開拓した。

同時に遠くでとある眼帯の男が背筋に悪寒を感じたとか何とか。

## 第十七話 三日月と虚無と旗と…

ノイトラは自室のベッドで仰向けになりながら、只管に真つ白な天井を眺め続けていた。

寝起きらしく、元から細い右目は更に細まっており、彼の事を余り知らない者にとつて、その姿は只不機嫌そうだという形にしか見えない。

だが寝起きの割には不思議な程意識は鮮明で、先程まで夢に見ていた光景をもう一度振り返った。

——久々に見た。

憑依前のノイトラ持っていた過去の記憶。それが夢へと姿を変えて現れたのはこれが初めてではない。

内容は主に彼にとつて強烈で印象的だったらしい部分で占められ、中にはネリエルへ決闘を挑んで敗北したにも関わらず、未だ勝負は付いていないと往生際の悪い態度を取る場面も、珍しく冷静な様子で、彼女へ対して自身の渴望を淡々と語る場面もしつかりと入っていた。

憑依して間もない間は頻繁に見ていたものだが、時間の経過と共に回数が減って行

き、最近では殆ど無くなっていた。

「…朝っぱらから鬱スタートかよ、勘弁しろってんだ」

始まりは虚夜宮の入口付近。藍染からの任務より帰還した直後だ。

その日、ノイトラは何時も通りにその任務内にて一人で勝手極まりない無茶な行動を取り、それをネリエルに諭されていた。

自分よりも実力が上の者からの有難い助言だ。普通なら全てとは言わずとも、ある程度は耳を傾けるぐらいするだろう。

だがノイトラは一蹴した。一向に聞き入れないどころか、刺え鼻で笑っていた。

そんな事をしても本当の意味で強くはなれない。明確な意思を持たずに獣の如く暴れ回っても、遠くない未来で行き詰るだけだと。

対する返答は真つ向からの否定。

如何なる形であろうが、強さというものは戦いの中でしか得られない。余計な口出しをするなど。

ネリエルは溜息を吐いた。これ以上言っても無駄だと理解したのだろう。

にも拘らず、口を噤む事はせずに尚も食い下がった。

元々面倒見が良く、責任感も強い彼女の事だ。自分の意志でノイトラに関わろうと決めたのだから、途中で投げ出すような真似は出来無いとでも考えているのかもしれない。

肉体や霊力だけが強さの全てでは無い。真の意味で強くなりたくば、自身の精神を律し、仲間を受け入れろ。

貴方の身近には既にそれが存在している。そうすれば自ずと願いは叶うと。だがそんなネリエルの粘り強い説得も、ノイトラには無価値以外の何物でも無かつた。

仲間を集めて群れるなど、弱者の証明だ。強くなるどころか、弱点に過ぎない。

そんなものは自分に不要だと、ノイトラは即座に切り捨てた。

一切の進歩無く、平行線を辿る議論。

遂にネリエルは諦めた。今日のところは、という説明が前に付くだろうが。

そしてノイトラにとっての禁句を零しながら、踵を返した。

——相変わらず、子供なのね。

決して聞き流す事の出来無い言葉へ含まれた、憐みの情。

野性的本能に秀でているノイトラだからこそ、余計にそれを強く感じ取った。

ネリエルの背中に向けて激昂し、吠え立てる。

だが彼女は一度も振り向く事無く、虚夜宮の中へと消えて行った。

「…マジやってらんねえ」

その直後にノイトラの目が覚めた。

——決めた、今日は絶対時間を作って鍛錬する。

言葉で言い表せぬモヤモヤとした心中をそのままに、自らの額に手を当てると、再び目を閉じる。

今一度考えてみると、確かにネリエルとノイトラの相性は最悪だった。

時間を掛けて縮める事も叶わない、絶望的なまでに遠く離れた心の距離。

しかも道中に多数の行き止まりやら、橋を掛けずには通れない巨大な地割れが点在している。

始めから他者が通る事など一切考慮されていない、劣悪な環境だった。

普通ならそんな道、進む等考えずに早期に諦めている。

だがネリエルは時折立ち止まる時は有っても、道を進む事を諦めなかった。

ノイトラは思った。案外、彼女はテスラと同類なのかもしれない。

例えテスラがネリエルの立場であったとしても、恐らくは同じ行動を取る姿が容易に

想像出来た。

そして過去のノイトラムも同様に反応を示し、行き着く先は変わらなかつただろう。

「…ん？」

不意に部屋の外から何処か聞き慣れた音が聞こえる。

厳密に言えば多少異なるが、憑依前に街中で良く聞いた、建築中の建物の中から聞こえて来る音だ。

そういえば先日、通路で擦違つたビエホから報告を受けていたのを思い出す。

ついでに藍染の褒美の件に対する小言を十言二十言程度頂いたのは一先ず置いといて——第5十刃と第4十刃の拠点の宮の間に、また新たに小さな宮を設ける事が決まつたと。

その指示を出したのは他ならぬ藍染。彼曰く一人用だそうで、出来る限りストレスの感じない快適な空間を作つて遣つてくれと。

——よもやこれが藍染様に要求した褒美ではありませんまいな。

説明を受けた直後にビエホからそう勘繰られたが、即答で否定させてもらった。

自ら墓穴を掘るどころか地雷原へと素っ裸で飛び込む様な真似、出来る訳が無い。

実際にそうしてみろ。監視レベルが最大なのは確実で、他に一体何が仕掛けられているのか想像すら付かないし、したくもない。

ノイトラは後にその宮の意味を即座に悟った。誘拐した織姫の軟禁用だと。だが特に気にも留めていなかった。

それはそうだろう。本来の展開であれば、織姫の管理を任されるのは直接彼女を誘拐したウルキオラだ。

宮の建設場所が近いのが気に掛かるが、恐らく自分が関わる事は無いだろう。

——何も無ければ、の話だが。

先程のモヤモヤと一緒に、妙な違和感が生まれる。

ノイトラはそれを払拭するかのように一気にベッドから跳ね起きると、テキパキと近くに置いていた替えの白装束を身に纏う。

そして徐々に本格的な鍛錬をすべく、室外の通路へと出た。

鍛錬場所から疲労困憊のチルツチを背負いながら帰還し、セフィーロに治療兼回復させて貰い、また無茶な鍛錬を行った事を注意された後、拠点の宮へ戻ったノイトラを待っていたのは、藍染からの突然の招集だった。

ちなみに伝達に来たのは何故かまたメモリ。最近やたらと此処に伝達をしに来ている様な気がする。

まあ一応彼女も雑務係なので、その行動は何処もおかしく無いのだが、一々褒めて褒めてオーラを撒き散らすのは勘弁だった。

何やかんや言いつつ、しっかり褒めて遣るノイトラだったが、一つだけ気掛かりな部分があった。

ロリである。何時も一緒に居た筈の存在が単独で動く事が多くなった今、彼女は完全に一人で置いてきぼりな状態であった。

——嫌な予感って、結構的中率高いのな。

今頃は藍染の事でも考えて寂しさを紛らわしているのだろうか。

そんな随分と勝手な想像をしながら、ノイトラは宮の留守をチルツチに任せると、  
“ 覚醒の間 ” へと移動を始めた。

覚醒の間とは藍染が破面化を行う際に用いる小さな部屋の事である。

室内の中心に虚を置き、それに対して藍染が崩玉を用いて破面化を行うのが正規の流れだ。

正確に言えば、崩玉と一時的に融合した藍染の力によつて——だが。

崩玉とは本来、死神と虚の領域の境を取り除くという機能を持つ物とされ、互いに相反する魂の壁を取り払う事で、魂が本来持ち得る限界強度を超えた強さを手に入れる事が出来る。

だが実際はそれとは別の能力も有している事を、後に藍染が語っている。

まず前提として言えるのは、崩玉には意思が有るといふ事だ。

そしてその持つ本来の力は、自らが周囲にいる者の心を取り込み、それが願つた事を自身の意思によつて具現化する。そんな神に等しき力なのである。

崩玉が魂の境を取り除く力を持つ様になつたのも、喜助がそう考えたが所以。

そして只の高校生であつた一護が非日常の世界に足を踏み入れ、死神の力を手に入れ、更なる戦いの渦中へと飛び込んだのも。彼の仲間である織姫に泰虎が能力に目覚めたのも、彼等の成長から辿り着いた結末から全てが具現化された結果なのだ。

全く以て有り得ないぶつ飛んだ設定である。

もしも藍染がノイトラの心の内を知りたいと崩玉に願つたとすれば、もはや対処不可

能だろう。

——無理ゲー此処に極まれり。

ノイトラはつくづく思った。

もし自分が崩玉の意思の制御下に在るとすれば、間違いない無く自身の目的の事も御見通しだろう。ネリエルにもう一度直接会って謝罪する事、そして死に行く仲間達を少しでも救おうとしている事も——全てが。

前者は未だしも、後者はいざ実行に移せば藍染が動く可能性が高まる。

彼にとつて十刃とは所詮は敵対勢力にぶつける為の駒の一つに過ぎない。消耗品と言つても良いのかもしれない。

敵を退けられればそれでよし。後は他の用途に用いて使い潰すだけだ。

共倒れになれば尚よし。何と言つても切り捨てる手間が省けるのだから。

役目を終えた道具はもはや不要。それを態々拾い上げる様な真似を、藍染がそう易々と見逃すとは思えない。遅かれ早かれ諸共始末されるに決まっている。

だがノイトラは何としてもそれは諦めたくなかった。

優先順位としてはテスラが一番だが、他にもハリベルやスタークといった信頼出来る仲間を見捨てる等という行為は、ノイトラ自身の持つ信念が許さない。

候補をセフィーロ等といった身内だけに固め、他に手を伸ばさなければより生き残る

可能性が高まるが、それは犠牲の元に成り立つ未来に過ぎない。仲間という何よりも代え難い存在。その骸の上で食う飯が美味い訳が無い。

「…ホント、頭悪いな」

憑依したばかりの頃はネリエルの件だけで頭が一杯だった。だが時が経つに連れ、他にも目を向けるべき点が次々と浮上していった。

目先の事ばかりに囚われ、未来の事を失念していたのである。

物語の中で若き勇者が魔王を倒しても、現実的に考えれば其処ではい全て終わりですとは行かないのと同じだ。

勇者は予測しなければならぬ。世界を揺るがす存在であった魔王を打倒した己の力。向け先を失ったそれを、人々はどう感じるのかを。

勇者は努力しなければならぬ。今後、戦いから離れて平穏な生活を送るにしても、勇者という形以外の身の振り方を構築しなければ、この先食って行けない。

物語は物語の中だからこそ、魔王を倒した時点でスツキリ終われるのだ。

そして現実には現実的な考えを持って行動せねば、先で如何転ぶか判断出来無い。

ノイトラの考えの中には藍染と直接対峙するという選択肢は一切無い。

寧ろ最初から最後まで部下として振る舞い、その限られた範囲の中で行動し、目的を達成するのが狙いだ。

藍染と直接対峙する役割を持つのは一護のみ。自分は不要でしかない。

彼等が激闘を繰り広げている間、自分達は視界に入らない程度に隅にでも隠れ、戦いの終息を静かに待てば良いと。

だがやはり唯一のネックは、やはり藍染の目論見だった。

既に目を付けられている現状を考慮しても、一体如何なる流れになるのか想像も付かない。

少なくとも今後の展開を何ら問題無い形へ持つて行く為に必要なのは、その藍染のノイトラに対する認識を変える事だ。

ノイトラの成そうとしている事は些事に過ぎず、一々目を向ける必要性すら皆無である。

一見簡単そうに見えて、非常に困難な課題だ。だからと言って他に対処法が有るとすれば、それこそ藍染を直接打倒する事しか手が無い。

だがこれにも落とし穴は有る。

余りに凡人として振る舞い過ぎた結果、存在する価値も無いとして始末されるかもしれない事だ。

理想としては、藍染が興味を失ったノイトラを無視し、元来通りに一護の観察を中心に行う形に収まる事だが、それでも成功と失敗の可能性は五分五分。

只、興味云々以前に今迄のノイトラ自身の行動が知らぬ間に藍染の思惑の中に組込まれている可能性を考慮すると、全てが無駄という結果に終わるのだが――。

考えれば考える程、不安ばかりが募った。何時までも続けているとやがては身動き一つ取れなくなりそうだった。

――今更何をとやかく言おうが、出来る事をするしか無い。

幾ら考えても結果は見えて来ない。ならば今は徹底して自分のスタンスを守るだけだと、ノイトラは開き直った。

所詮自分は小市民。取るに足らない有象無象。物語に干渉するには役不足。だが表面上ではそれを押し出し過ぎない様に留め、程良くバランスを調整をせねばならない。

今迄通りに自分は自分のすべき事を成し、他はこの世界の主人公に丸投げすれば良いのだ。

とは言え、ノイトラとしては間接的に細々とした御膳立て位はしてやる考えだが、それだけだ。

だがそんな浅い考えを持つノイトラとて、今後起こり得るであろう展開全てに対し、最悪の事態という想定もしている。

藍染の思考回路と行動は、尽く常人の予測の範疇を容易く越えるものだ。何時どのタイミングで此方の想定を引つ繰り返されても何らおかしくは無い。

その為にノイトラは自らに過酷な鍛錬を課し、過剰なまでに力を求めたのだ。

幸い、その必死さに応えるかの様に実力は伸び続けた。

準備は万全——とは御世辞にも言い難いが、最低最悪の事態に遭遇した場合に取るべき行動は実行に移せそうだ。

只、ノイトラとしてはこの最終手段の内容は誰にも話していない。無論、共に計画立てをしているセフィーロにもだ。

何せこれは彼女のみならず、自分に信頼を寄せてくれる仲間達を裏切る行為に他ならないのだから。

「……チツ……」

ノイトラは短絡的な考えしか浮かばない自分自身の低能さに嫌気が差した。

彼はこんな時、何時も思う事が有る。

——憑依対象がザエルアポロだったら、一体如何なつたか。

藍染や喜助に劣るとは言え、傍から見れば十分過ぎる程に優れた頭脳の持ち主である

彼なら、幾らでも手段を講じる事が出来ただろう。

無論、現在のノイトラの様に、以前までの記憶や経験を引き継いだ形での憑依であれば、の話だが。

藍染の前では恐らくその内九割は失敗に終わるだろうが、先程までのノイトラの欠陥塗れの考察よりかはマシだろう。

命の予備が利くという保険も有る上、とことん逃げに徹すれば物語に干渉せずに生き残れる可能性は高い。

「まあ…ボッチは確定だよなあ…」

ザエルアポロの仲間関係は非常に劣悪と言って良い。史実のドルドーニとチルツチにした様に、過去に傷付いた仲間を回収して研究材料にした例も少なくない。

そんな最低な男が心機一転して行動したとしても、そう簡単に改善まで行き着けるとは思えない。

他者と心から通じ合える関係を構築するには長期間の付き合いが必要だ。それを考えると、ザエルアポロでそれを成すには圧倒的に信用と時間が足らな過ぎた。

ノイトラとしてそれと同等ではあったが、気に食わない相手に対して積極的に干渉する

様な真似は少なかった為か、行動等を改めただけで今の状態が有る。

それ故にザエルアポロとして取るべき手段は、裏から手を回す程度でしか仲間を助ける事は不可能だし、例えそれが成功した上で藍染と一護の決着が付くまで自分も生き残る事が出来たとしても、恐らく虚夜宮には戻れない。居場所が無いのだから当然だ。

全てを成し遂げた後に待ち構えているのは孤独な逃亡生活。つまり家無し金無しコネ無しの、全てゼロの状態からスタートしなければならぬ。

生活環境については得意の発明品等で如何にか出来たとしても、やはり孤独というのは耐え難い。

それを紛らわす為、過去に手掛けた改造虚の破面である従属官を連れて行こうと思えば可能だろうが、如何せん知能が低すぎる。会話すら満足に成立するか怪しい上、何をやらかすか判ったものではない。

何より自分の性格上、そういった形に作り上げたのは自分ではないかという怒りと、彼等の命を弄んだという罪悪感に押し潰されるに決まっている。

新たに始めた生活が上手く軌道に乗ったとしても、自分の事を知る者や死神に気付かれれば一巻の終わりだ。目撃者抹殺による証拠隠滅か、一切の痕跡も残さずにその場から即座に逃亡するかの二択しか無い。

御先真つ暗とは正にこの事か。憑依するタイミングにもよるが、総合的に考えるとノ

イトラとどっこいどっこいである。

そして余談だが、ノイトラは宝くじの一等及び前後賞含むに当選する可能性にも満たないであろう、ミジンコ以下の大きさの希望も持っていたりする。

それは他ならぬ崩玉の力だ。

周囲の心を取り込んで具現化するのであれば、一番近い場所に居る藍染のみならず、自分自身の心も具現化してくれるのではないかと——余りにも儂い希望を。

だが何事にも可能性は有る。ノイトラは憑依前から基本現実的な思考を持つ反面、そういう理想論も同時に持ち合わせていた。

なので彼はコッソリだが、鍛錬時にとある思いを強く心の内で願いながら斬魄刀を振るっている。

——力が欲しい。ネリエルに会いたい。仲間を助きたい。平和な生活がしたい。

祈りというものとは本来、その主となる思い以外は一切の雑念が存在しない一色の状態で行うものだというのが、ノイトラの持論だった。

只、彼の場合はその主となる思いが複数で、既にその持論から外れているのだが、本人はそれ等全てで一つという無理矢理過ぎる考えを持っていた。

「……ん？」

ノイトラは通路を曲がった途端、進行方向に存在する感じ慣れた霊圧を感じた。思考を中断すると、視界の先にその霊圧から特定した通りの人物の背中を確認した後、声を掛けた。

「よう」

「…ノイトラか」

背中を持ち主であるウルキオラはその声に反応し、足を止めて振り返る。

緑色に煌く無機質な瞳、表情筋が完全硬直しているかの様な顔。無感情に無表情と、相変わらず無い無い尽くしの何時も通りな佇まい。

だが以前とは違い、何処と無く付き合い易い印象を抱ける様になったと、ノイトラは感じていた。

「一人か？」

「…正直言えば、本来ならヤミーも連れて行く予定だったのだが——」

時期とタイミングから、藍染の招集の意味を察していたノイトラは、確認の意味も込めて気になった事をウルキオラに問い掛けた。

本来なら腕の治療を終えたヤミーを引き連れて覚醒の間へと訪れる筈のウルキオラ。だが今の彼は一人だけで、同行者は居ない。それが疑問だった。

「身体中が痛い、怠い、動きたくないとはばかり抜かして、幾ら呼び掛けても自室から出ようとしなかったのな。置いてきた」

「へ、へえ…ソイツは大変そうだな…」

——どう考えても昨日の鍛錬の影響です本当に。

原因を作った張本人であるノイトラは思わず吹き出しそうになるも、顔を逸らして必死に堪えた。

「…心当りでも有るのか？」

「知らねえな。日頃の不摂生が祟ったんじゃないかねえのか？」

その反応を見てやや首を傾げながら、ウルキオラは問う。

ノイトラは表情を何とか引き締めると、白々しく自分は存じ上げていませんと言わんばかりに返答する。

腑に落ちない妙な感覚を覚えながらも、ウルキオラはそれ以上追及しなかった。

顔を進行方向へ向けると、再び歩み始め、ノイトラもそんな彼に続いた。

通路に響き渡る二人の足音。片方はゆったりとした間隔で鳴るのだが、もう片方はその半分の間隔で鳴っている為に回数が多い。

長身故に足が長く、一歩一歩の歩行距離が大きいノイトラ。そんな彼が普通に歩けば、他の者等容易く追い抜いてしまうのは自明の理。

だがウルキオラはノイトラが横を通り抜けそうになった瞬間、さり気無くその移動速度に合わせて足を倍に動かし始めたのだ。

——生後間もないアヒルかコイツは。

並列する二人。傍から見れば正に凸凹コンビだ。

内心でやや呆れつつ、何となく悪い気はしないノイトラは何も口を出す事はしなかった。

「…一ヶ月前、藍染様より指令を下された」

「ん？」

暫くの間会話も無くそうしていると、ふとウルキオラが口を開いた。

ノイトラは即座に悟った。

——タイミング的に考えると、井上織姫の誘拐か。

それは空座町に存在する戦力——死神達に一護、そして喜助の陽動を行っている内に、断界を護衛二名と移動中の織姫を直接誘拐する方に分かれて行う任務の事だ。

「で、俺も来いと?」

二人きりのこの状況で言い出すとすれば、何となくそういう事か。

そう考えたノイトラは先手を打つ意味合いで問い掛けた。

事前に覚悟を決めて置けば、以前の様に動揺する事も無いだろうと。

「…いや、今回は同行者の話までは出ていない」

「そうなのか?」

「ああ。藍染様が仰るには、任務中に現世の敵勢力と尸魂界の注目を逸らす為の陽動…

その選定も既に済んでいるそうだ」

氣遣いは無用だと、ウルキオラはノイトラの問い掛けをやんわりと否定する。

——別にそんな氣は無いのだが。

どうやら彼は何時の間にやら、此方の意見は好意的に取る方向性を持つてしまつたらしい。

「それに俺の任務内容も、陽動中に人間の女一人を虚夜宮此處に連れて来るだけだ。造作も無い」

打てば響く様にして説明を返してくれるウルキオラに、ノイトラはふと思った。

——これは機密事項ではなからうか。

史実にて織姫の誘拐が成功した後、玉座の間に集合した際のルピの発言から、彼はこの任務の目的について一切知らされていなかった事が窺える。

恐らく知っていれば知っていたで、こんな女如きを捉えるだけの為に自分が動くかと、参加を拒否する可能性も考慮されていたかもしれないが。

それを任務前に、当事者ですら無い者に易々と話して良いとは到底思えない。

自分になら話しても問題無いと信頼してくれているのかもしれないが、それにしても

想定を超える態度を見せるウルキオラに、ノイトラは内心で頭を抱えた。

恐らく現在、喜助に戦力外通告を受けた織姫はルキアに連れられ、瀨霊廷へと赴いている筈だ。

その間、十刃含めた数名の破面達が空座町へと襲撃を仕掛け、一護達を追い詰めると同時に、護廷十三隊の意識を織姫から完全に逸らす。

喜助に如何なる言い方をされたとしても、織姫の性格であれば襲撃の件を聞いて大人しくしている筈も無い。必ず現場へと向かうだろう。

その間に一番警備が手薄になるであろう断界の移動中にウルキオラが彼女の身柄を確保するのがこの任務の目的だ。

相変わらず遙か先を見通す目を持つ藍染に恐れ戦きながら、今回は物語の主要な展開へ関わらずに済む事に、ノイトラはほっと胸を撫で下ろす。

以前の様に引つ掻き回す様な真似は極力したくないし、何より小心者故に心労が重なって胃に悪い。

つい最近大ダメージを受けたばかりなのだ。暫くは大人しくしていきたい。

「そう、か…」

「…やはり行ききたかったのか？お前の意図は判らんでも無いが——」

「いや、そういう理由わけじゃねえ」

寧ろ凄く嬉しいです——と言える訳が無く、ノイトラは即座に否定する。

ウルキオラが言いたいのは、以前の任務に於ける不完全燃焼についてだろう。

別にあの時の鬱憤はもう消え失せているので、徒に刺激しない限りは再燃する事は無い。

「オマエなら問題無えとは思うが…油断すんなよ」

御人好し故の悪い癖と言うべきか、無意識の内にノイトラは無難な激励をウルキオラに返した。

実はテスラ以外に同じ様な発言をした事は無いのだと気付かぬまま。

「……………」

「…ってオイ、何だその目は」

突然足を止めたかと思うと、ウルキオラは静かにじつとノイトラの方を見詰め続け

る。

やや驚愕している様に見受けられるのは気のせいだろうか。

「やはり…変わったな、ノイトラ」

「…もう聞き飽きたぜ、その台詞」

ノイトラは何時もスタークがする様に、バツが悪そうな表情を浮かべながら後頭部を掻き筆った。

直接言われずとも、そういった反応は今迄に何度も向けられていた。現世の任務報告の際にはピークだった。

だがその反面、大人しくなったが故に余計舐められる様に——等と言う事は一切無く、それどころか激減した。

変わったのは表面上の話。内面は変わらずノイトラ・ジルガのままなのだ、ほぼ全ての破面達にそう認識されたのだ。

相変わらず適当な噂を流す者は存在している様だが、それだけだ。

ある意味ではより厄介になったと言えるノイトラに絡む様な愚行は、流星の馬鹿破面達も取らなかつた。

今度は代わりに無様な失態を演じたヤミーへとその鋒先が向けられ掛けている様だが、想像しただけでも余計に悪い方向へ向かいそうなのは明白だった。

ちなみにこれ等の情報は全てメモリより提供されていた。

実は最近の彼女はその報酬として齎される軽い労いの言葉と、頭を撫でて貰う事だけを目的に調査していたりする。

——完全に犬である。

ノイトラはメモリの頭を撫でてやっている最中、メモリの後ろで激しく左右に揺れる尻尾を幻視していた。

「…ノイトラ」

「んだよ」

「お前は本当に最強を求めているのか？」

そう問うウルキオラの目には純粹な疑問が見て取れた。

確かにそうだ。最強を目指しているのなら、自分より階級が上の者は皆乗り越えるべき踏み台として考えるのが普通だ。

一つ一つを踏み越えて行き、やがては頂たる最強に至る。気が短い者であれば他は無

視して一気に一番上まで飛び越えんとするかもしれない。

なのに先程の言葉だ。まるで仲間を気遣っている様にしか見えない。

暫し考える素振りを見せたノイトラだったが、次の瞬間には身に纏う空気を豹変させていた。

その場に居る者全てを押し潰す様に重厚で、既に全身が無数の刃に貫かれている様な錯覚を覚える濃密な殺意。

ウルキオラは突然の事に目を見開くと同時に、思わず身構えた。

「そんなに疑うなら……試してみるか？　これでも一番スタークに挑戦しても良いぐらいの資格はある心算だぜ？」

「っ!!!」

一瞬でも気を抜けば間違い無く膝を着いてしまう。まるで藍染の姿を幻視する程に強烈な存在感にウルキオラは絶句した。

——見誤っていた。

内心でそう零す。

これまでノイトラが徹底的に隠してきた、その極限まで研がれた牙がこれ程までに凄

まじいものだったとは思わなかった。

そして同時に認識を改める。

彼は最強を目指している状態では決して無い。既に何時その頂に辿り着いても何らおかしく無い場所へ立っているのだと。

「——なんてな。無駄話はこの程度にしてさっさと行こうぜ、遅れちまう」

ノイトラはふと軽い笑みを浮かべたかと思うと、同時にその空気が霧散した。踵を返すと、固まるウルキオラを放置してさっさと先に進んで行く。

「…ああ、そうだな」

一息遅れでウルキオラはそう返すと、先行するノイトラの背中に追従した。だがそんな彼の思考回路は複雑に入り組んでいた。

——興味深いのは確かだが、現状は放置していて構わない。

以前、藍染と共にノイトラの映像を見ていた際に言われた言葉だ。

ある日を境に成長速度が著しく上昇し、その結果、霊力が異常なまでに膨れ上がった

ノイトラ・ジルガ。

だが藍染が注目しているのは其処では無い。

ノイトラが時折見せる、まるで一度見た事の有る光景を見直しているかの様な、摩訶不思議な目。

流石の藍染も理解が及ばないと零し、何処まで見抜かれているのか少々恐ろしいとま  
で言わしめた。

故にウルキオラは助言した。必要と有らば消しますが、と。

即座に断られたが、彼はその時の発言を撤回したい気分であった。

「……………」

再びノイトラの横に並びながら、ウルキオラは考える。

——あの時は随分と大きく出たものだ。

先程の威嚇で理解した。ノイトラを相手取るには、今の自分では到底不可能だと。

少なくとも、対抗するには帰刃は必須。それも「アレ」を用いねばならないだろう。

だが忘れてはならないのが、自分のみならずノイトラにも帰刃は有るのだと言う事。

歴代十刃最高硬度と謳われる鋼皮。自分の何倍もの質量を持つ者が相手であろうと

も軽々と吹き飛ばしてみせる凄まじい膂力。視覚では追い切れない程の速度を持つ響転。そして十刃落ちの一人から伝授されたらしい洗練された脚技。

これ等に帰刃の効果を上乗せされるのだ。純粹なスペックだけを考慮しても、通常の帰刃形体の自分を明らかに上回っている。

だがウルキオラは此処まで考えた途端、何故か其処で妙な感覚を覚えた。

これ以上は無駄だと、不意に思考を打ち切ろうとする己の意思を。

「…何だ…これは」

別に諦めから来ている訳では無く、その必要が無いのだと訴える、理解が及ばないそれに、ウルキオラは頭を振った。

まるでその機会は永久に来ないと言わんばかりではないか、と。

藍染の脅威と成り得るありとあらゆる可能性を考慮し、それが僅かであっても対策を打つのが今迄の自分だったではないか。

「何か言ったか？」

「いや…何でも無い」

先程の眩きが聞こえたのだろう。問い掛けて来たノイトラに、そう返す。

このさり気無い気遣いも、違和感を感じるが、何となく悪い気はしない。

そしてウルキオラの中では、先程の妙な感覚の他に、もう一つ浮かんだものが有った。だが当人はそれを無かったものとして、頑なに消し去らんと努めていた。

当たり前だ。自分の存在意義の全ては藍染の為。其処に自分の意思を挟んではならない。

「どうした？ 遅れてんぞ、ウルキオラ」

「…今行く」

「つたく、結構抜けてんのなオマエ」

だからこそ、これは決して在ってはならないのだ。

ノイトラと本気で対峙した状況を想像した瞬間に浮かんだそれ。

——結果を抜きにしても、ノイトラとは戦いたく無い等という、この愚かしい思いは。

## 第十八話 三日月と滅火と任務と…その他諸々

覚醒の間の中心に、逆様の錐台型の透明な結界が張られており、その傍らに立つのは藍染。

結界の中には全身を白い紐の様な物で覆われた人型の何かが、まるで鎖に繋がれた囚人の様な姿で入っていた。

その中心の周囲を取り囲む様にして、十刃達が其々にリラックスした体勢でそれを眺めている。

正確には一名だけ、場違いな者も居る。元第6十刃、グリムジョー・ジャガージャツクだ。

十刃落ちとしての新たな数字は未だ授けられておらず、3ヶタの巢には拠点を移していない。今は遊撃要員の破面達の拠点の宮を仮住まいとしているが、遠からず移動する事になるだろう。

基本的に十刃落ちは虚夜宮の中心部には足を踏み入れる様な真似は極力しない。理由としては主に他の破面達の眼や現十刃に遭遇した際の気不味さが有るが、グリムジョーの場合はそんな些細な事を気にする様な器は持っていない。

唯我独尊とはまた異なるが、落ちたとは言え変わらず堂々と己の道を行く彼に口出しする者は居なかった。

3ヶタの巢へ移動したらしたで同僚の二人と面倒事を起こしそうではあるが、恐らくノイトラがそれを阻止する為に動くのは目に見えている。特に問題は無さそうだ。

先程からグリムジョーの視線は新たに自分の後釜となったルピの方を向いている。

一応場を弁えているのだろう、霊圧は抑えている代わりに溢れ出んばかりの殺意が見て取れた。

だがルピは無視しているのか気付いていないのか、顔色一つ変えていない。それどころか彼の意識は別方向を向いており、頻りに横目で入口の扉の前の階段に立つ二名の内一人——ノイトラの方を見ていた。

その視線には何かを期待する様な熱いものが含まれており、当人は背筋を走る謎の悪寒に疑問を抱きつつ、何故自分が見られているのかと内心で首を傾げていた。

不意に藍染が結界の上に何かを置く。

人型の何かと同じく結界に覆われた崩玉だ。

相変わらずの薄い笑みを浮かべながら、藍染は右手を伸ばすと、その指先は容易に結界を擦り抜けた。

指先が崩玉に触れると、球体である崩玉が形を変え、その指先へと溶け込んで行く。

刹那、発光と同時に、靈圧だけに限らない常軌を逸した力の渦が藍染を中心に巻き起こった。

だがそれはほぼ一瞬の間の出来事で、気付けば直ぐに収まっていた。

錐台の境界がガラスが砕けた様な音を響かせながら弾け飛ぶ。

何時の間にやらその中に居た人型の何かを覆っていた白い紐は消え失せ、その正体が露となっていた。

「…名を、聞かせてくれるかい。新たなる同胞よ」

藍染の問い掛けに、その人型の何かだった——小柄で額に小さい王冠のような仮面の名残を残した全裸の少年は、たどたどしい口調で答えた。

「…ワンダーワイス…ワンダーワイス…マルジェラ…」

彼に抱いた第一印象は皆共通していた。

——まるで言葉を覚えてたの幼子だ。

その目は虚ろで、知性の欠片も見られない。見た目は完全に人型なのだが、その中身

は明らかに不完全極まりない。

そして特筆すべきはその身に纏う霊圧。量、質、共に紛れも無く下位十刃レベル。

これ等の条件から、十刃達はワンダーワイズと名乗った破面が一体何の役割を持つ者なのか大凡察した。

「君を歓迎しよう。破面N<sup>セテンタ・イ・シエテ</sup>0・77、ワンダーワイズ・マルジェラ」

この一連の流れを見れば判る通り、藍染が行ったのは虚の破面化だ。

現在、崩玉は封印を解かれたばかりで睡眠状態に在る。故に本来の力を発揮するには完全覚醒を待たねばならず、それには結構な時間が必要だった。

だが嘗てより崩玉に対して並々ならぬ研究を注いでいた藍染は其処に抜け道を見出した。

護廷十三隊の隊長格に倍する霊圧を持つ者と一時的に融合する事で、ほんの一瞬だけだが完全覚醒状態と同等の能力を発揮するという事実を。

今回その破面化の対象となったワンダーワイズだが、十刃達の察した通り、普通の虚では無い。

彼等の敵対勢力である護廷十三隊。その中でも藍染が最も警戒している者の一人――

——護廷十三隊総隊長及び一番隊隊長、やまもと げんりゆうさい しげくに 山本 元柳斎 重國。

彼の持つ最強最古の斬魄刀と謳われる——りゆうじんじやつか 流刃若火の能力を封じる為に作り出された改造虚。それがワンダーワイスだ。

だが重國の強大過ぎる能力を封じるには多大な代償が必要で、御蔭で彼は言葉や知識、記憶や理性などを失っていたのである。ならば彼のその異質さも納得だった。

「…一ヶ月前に話した指令を覚えているね、ウルキオラ？」

破面化が成功した為か如何かは不明だが、より笑みを深めた藍染は背中を向けたまま、後ろのウルキオラに声を掛ける。

「…はい」

「実行に移ってくれ——おや？」

指示を出し終えた途端、藍染は不意に疑問の声を上げた。彼の視線はノイトラを向いている。

「…何か？」

突然の事に、ノイトラは内心で何かマズイ事でもしただろうかと盛大に焦り始める。だがその様子を表に出す訳が無く、冷静な態度でそう返す。

「いや、ヤミーが居ないと思ってる。彼は何かしたのかい？」

「……日頃の不摂生が影響したのか如何か不明ですが、全身が痛いと言って部屋に引き籠ってまして……」

「ふむ、珍しい事も有ったものだね。身体の頑丈さで言えば十刃随一だと思っていたのだが……」

困ったね、と笑みを崩さぬままそう零す藍染。

其処で初めてノイトラは己の失態に気付いた。

——拙い、ヤミーと言えばこの後の任務の参加メンバーだったではないか。

そして同時に悟る。これはパターンの言えば以前と同じ経緯を辿る羽目になるのではないかと。

「致し方無いね。ではウルキオラ、君に決定権を与えよう。ヤミーの代わりに好きな者を連れて行くと良い」

「…了解しました。では頼めるか、ノイトラ」

「…あ、いよ」

流れる様にして、ウルキオラは隣のノイトラに視線を移しながらそう言う。

——もう成る様になれ。

激流に身を任せ何とやらだ。達観した様な雰囲気醸し出しながら、ノイトラは了承の返事を返した。

そして開き直った彼は、序にチルツチを連れて行く事に決めた。

鍛錬後の消耗した状態では有るが、其処はセフィーロに頼めば如何にでもなるだろうと。

藍染から権利を譲渡されたウルキオラが決めたとあつては、それは藍染が決めたのと同等。もはや覆らない。

ならば前向きに事を運ぶ方法を考えた方がマシだ。

悪い方向から見れば、このイレギュラーが今後一体何を引き起こす切欠になるのか判らない事。

逆に良い方向では、最近では貴重な実戦の機会を——しかも相手は破面では無く死神という、何時もの鍛錬とはまた違った戦闘経験を積める機会が増えた事だ。

只、この任務に於いて注意せねばならないのは、自分が成すべき事はあくまで陽動であるという事。言わば時間稼ぎに近い。

不用意に相手を追い込み過ぎるのも、帰刃等の力をひけらかして相手に余計な警戒を促すのも得策とは言いがたい。

それにノイトラとしては自分の情報は極力流したくないという思いも有る。どちらの陣営に対しても、だ。

「…ああ、そうだ」

藍染は部屋の中に立ち並ぶ、サイズがバラバラの台。その中でも一際大きく高い台の頂上に腰掛けるグリムジョーに視線を移した。

彼の左腕には本来在るべき物が無く、自由の身となった左袖が室内に僅かに流れる微風でヒラヒラと舞っていた。

「君も一緒に行くかい？ グリムジョー」

返答は無し。グリムジョーの顔には先程までの殺意も消え失せており、落ち着いた様子で下を見下ろすだけだ。

だが藍染の問い掛けの直後に見せた鋭利な目付きは、彼の本心の全てを語っていた。

瀨霊廷の中の端に位置する、十三番隊隊舎裏修行場。

其処で井上織姫は心から信頼する仲間である朽木ルキアと対峙しながら、自身の一番慣れぬ力を必死に行使する。

盾舜六花より、呼び出した妖精は椿鬼つばき。それより放たれるのは、全体的に補助に傾倒した彼女の能力の中でも唯一の攻撃手段——孤天斬盾こてんざんしield。

盾の両面の物質の結合を拒絶するそれは物質の結合を解くという力を持ち、直撃した

対象を真つ二つに裂く。

一見凄まじい能力に見えるが、実はそうでは無い。精々雑魚虚を仕留められる威力しか無く、死神の上位席官レベルには全く通用しない。

御世辞にもこの先で待ち構えている破面達や藍染との戦いで役に立つとは言い難い代物だった。

この殺傷能力の低さは織姫自身の性格にも要因が有る。

事象の拒絶という能力は、意志の強さに左右される。

完璧に詠唱を済ませて技を放とうが、それに迷いや戸惑いが含まれていれば当然威力や効果も落ちてしまう。

それは戦場に立つ者達にとっては皆共通して言える常識だ。一瞬でも躊躇すれば逆に自分自身の命を失う事となる。

基本的に織姫は戦いを、そして敵であろうが相手を傷付ける事を極端に嫌う。

そんな甘さを持つ者が、明確な意志を以て敵を完全に滅する様な真似が出来るだろうか。

如何考えても不可能だろう。それは他ならぬ彼女自身も良く理解していた。

だからこそ、此処に来る前に喜助から戦力外通告と同時に放たれた容赦無い言葉にも納得していた。

——相手を殺す覚悟も持たない甘ったれに、戦場に立つ資格は無いつて言ってるん  
スよ。

「——孤天斬盾つ!!!」

だが幾ら納得はしたとは言え、感情は別だ。事実故に悔しさは無かったが、織姫はその胸の内に途方も無い淋しさを抱いていた。

確かに自分は弱い。秀でているのは双天帰盾の治癒の力のみで、この孤天斬盾の威力や三天結盾の防御力だって高が知れてる。

全く以て喜助の言う通りだ。こんな弱者が戦場に出たとしても、足手纏いにしかならない。

下手すれば自分が原因で誰かが傷付き、命を落とすかもしれない。そうなるぐらいならこの感情を享受している方が良かった。

しかしだからと言って何もしないで引き籠って居られるかと言われれば——否。

仲間が、そして一護が戦っているのだ。戦力にはなれずとも、自分にも何か出来る事が有る筈だし、役に立ちたい。

「私は…拒絶する”ッ!!!」

織姫は霊圧を纏った掌を前方へと突き出す。

その送り込まれた霊圧を、健気な思いと共に受け取った椿鬼が全身に円盤状の盾を張る。

完全に形成が完了すると同時に、その盾は爆発的な速度で放たれ、攻撃対象へ向けて直進して行く。

対するルキアは斬魄刀を構え、真正面から受けて立つ。

無論、解放はしない。何故なら盾舜六花の拭い様も無い弱点である脆さを知っているからだ。

あくまでこれは鍛錬であり、死合いでは無い。

織姫の狙いを見切り、着弾点である其処に刀の腹を持って行く。

「はああああっ!!!」

威力不足とは言え、かつて尸魂界へ囚われの自分を救助の為に訪れた時とは比べくも無い程向上したそれは、人間が持つ力としては過ぎた物。

躲したり相殺する等といった実戦的な対処は、この場に於いては無粋。そう判断したルキアは真つ向から受け止める。

身長百四十程度の少女の如き体格の彼女の身体が一瞬浮き上がるが、即座に全身に靈圧を込めて強化を施し、地面を踏み締めて耐える。

「ハアツ!!」

足場が安定したルキアは、刀身を右回りに返すと同時に真横へ弾き返す。

椿鬼はそのままブーメランの様な軌道を描きながら、織姫の元へと戻って行き、待機状態たるヘアピンの姿へと帰属する。

「つ火無菊、梅敵、リリイ!!」

織姫は続け様に三天結盾の展開の為の妖精三人を呼び出し、防御体勢を取る。

完全に次の体勢へと移行したのを確認し、ルキアは斬魄刀を鞘に納めると、そのまま鬼道の詠唱の準備に入る。

「行くぞ井上!!!」

「…うんっ!!」

如何に鍛錬と言えども、実戦形式に近いそれは一步間違えれば大怪我は必至。だが二人の顔には必死さの上に微かな笑みが浮かんでおり、実に楽しげだ。

「——君臨者よ！ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ!!」

ルキアの口から放たれる言霊ことだまは、死神の中でも最もポピュラーなものとして知られている鬼道の一つ。

二千年以上前に山本元柳齋重國により設立された、死神の他、鬼道衆や隠密機動を育成する為の学校である真央霊術院。それに入学して一年目にて演習として用いられる中級鬼道。

使用者の工夫次第では攻撃以外にも転用可能という汎用性の高さを持ち、卒業後に正式に死神となった後でも好んで使用する者は多い。

「〃焦熱と争乱、海隔て逆巻き南へと歩を進めよ〃!!」

元々鬼道全般の運用に長けたルキアにとっては、別に上級以外であればどの鬼道を選  
択しても問題は無かった。

只単に威力を三天結盾の強度を超えない程度に抑えれば良いだけなのだから。

だが如何にルキアが三天結盾の強度を把握していたとしても、不測の事態というものは必ず存在する。

しかも今の織姫は喜助からの諫言の影響も有り、精神状態がやや不安定だ。ふとした拍子に集中力が切れ、取り返しが付かない事態へ陥る可能性も捨て切れない。

故にルキアはより確実に調整可能なそれを選択し、更に威力を低めた上で放ったのである。

「破道の三十一、しゃつかほう赤火砲!!!!!」

基本的にこうして言霊の詠唱を行って放つ鬼道だが、ルキア程の熟練者ともなればその手間を省いて名称だけで放つ詠唱破棄という手法も取れる。

だがそれは発動が早い分、威力が落ちたり術の構成や制御が甘くなるというデメリットも存在する。上級鬼道でそれをするとなれば尚更だ。

以上の点から、ルキアは完全詠唱による鬼道の発動という確実性に念を込めた。突き出された掌より、人の頭一つ分程度の火の玉が放たれる。

本来より三割程度の威力が削られたものだが、人間一人殺すには十分過ぎた。

常人より霊圧の多い織姫ならば幾分か耐える事は出来るだろうが、当たり前所が悪ければ命に関わる事には変わりはない。

仲間に対して放つ攻撃とは思えない。痛みが無ければ成長しないとは良く言うが、それにしては容赦が無いのは事実。

だがルキアは信じていた。今の彼女ならば確実に防ぎ切る事が出来ると。

織姫としてその程度の意図など察しており、迫り来る火の玉を眺めながらも、覚悟を決めた。

「——三天結盾、 私は…拒絶する」 ツ!!!

本来の形は逆三角形だが、それを通常の三角形で展開。

そしてルキアから事前に聞いていたその赤火砲という鬼道の特徴から、盾の範囲を拡大し、自身をやや包み込む様に広げる。

三天結盾の展開と同時に、火の玉が直撃した。

響き渡る轟音に、立ち上る火柱。

その真つ只中に居た織姫はというと、同時に巻き起こった砂煙の中に？み込まれた為、安否は不明。

二人の鍛錬風景を遠くで眺めていた一名のギャラリーである、白の長髪に父性を感じる優しい雰囲気を醸し出した男——十三番隊長、浮竹うきたけ 十四郎じゅうしろうが一瞬表情を崩し、焦った様な表情を浮かべる。

次の瞬間、その砂煙の中心から突風が巻き起こる。

——その原因は椿鬼だった。

燕を思わせる超高速軌道で何かを中心にする様にして飛び回り、風を起こしていたのである。

やがて砂煙が風に乗って行き、視界が晴れる。すると其処には涙目で咳き込みながらも、やや罅の入った三天結盾を前方に展開したままの無傷の織姫が現れた。

「…ケホツ…ケホツ！ うう、目と喉が痛いよお…」

無事な姿に安堵の溜息を零しながら、ルキアは未だ咳き込み続ける織姫に近寄って行く。

それに気付いた織姫は、盾を消して全ての妖精を六花の形へと戻す。

「あ、朽木さん！ お疲れ様！」

「うむ、お前もな」

互いに腕で額の汗を拭い、笑い合う。

その顔は達成感に満ちていた。

実は二人は鍛錬開始前に打ち合わせていた。実戦形式ではあるが、互いに術の応酬に限定しての内容を何往復かしようと。

元々、この鍛錬のメインは織姫だ。

提案したのはルキア。強くなりたいと願う織姫の思いに応え、そして励ましの意図も込められた鍛錬内容だった。

「見事なものだ。手加減したとは言え、私の鬼道をあの程度の損傷で防ぎ切るとは、な  
「えへへ、有難う…あ」

虚偽り無い称賛の声に、織姫は照れた様子で頭を搔く。

其処で不意に、彼女はルキアのある部分へと視線を移したかと思うと、氣遣う様な表情を浮かべた。

それはルキアの右腕だ。

突然現世に侵攻してきた三人の破面という敵。結果、彼等の内一人の手で泰虎に一護、そして織姫自身が重傷を負い、途中で援軍に來た夜一までも結構な負傷をした。

更にその翌日の深夜。前日の者達とは別の破面達が更に現世に侵攻。

その戦いの中で、ルキアは不意討ちで腹部を貫かれ、意識を失う直前に抵抗した際に用いた右腕を挽ぎ取られた。

現場に到着したのは敵が撤退してから五分程度が経過した後だった。何せ一番近くに一刻を争う程の重傷者が居たのだ。遅れたのは致し方無いと言えた。

ルキアの惨状を目の当たりにし、織姫は初め、動揺の余り直視出来無かった。

前日の泰虎の場合、確かに重傷ではあったが五体満足だった為か、まだ耐えられた。

人体の身体の部位欠損とは思った以上に衝撃的な光景だ。それが信頼する仲間ともなれば尚の事。

思わず涙を零しそうになる織姫だったが、必死に治療を懇願する一護の声を聞き、即座に我を取り戻す。

そうだ、一番辛いのは他ならぬ、初めからルキアと共に居た彼ではないかと。

——今は現実から目を背けている場合ではない。甘えるな。

織姫は覚悟を決めると閉じていた目を開くと、意識の無いルキアの傍らに置いてある右腕を手にとった。

それを元の有るべき場所に接触させると、双天帰盾を発動した。

傷口が綺麗に両断されている状態であれば繋ぐ程度の事は容易だったろうが、今回は運悪く振り切り切られた形である。鬼道を用いたとしても、全くの元通りとはいかない現状であった。

それ故に周囲は駄目元と言った感じで治療の様子を見ていたが、見る見る内に元通りになっていくルキアの右腕に皆は驚愕していた。

「フツ、何だ井上。未だ右腕この事を気にしているのか？」

「う…だって…」

織姫の心配性な性格を十分理解しているルキアは、彼女が考えている事を直ぐに察した。

小さく鼻で笑うと、大袈裟に右腕をぐるぐると振り回してみせる。

その動きは以前と変わらず、特に後遺症も何も見られなかった。

「…案ずるな。見ての通り、腕の調子は頗る良い。お前の治療は完璧だ」

「朽木さん…」

「自信を持って井上。今のお前は決して無力でも足手纏いでも無い。あの胡散臭くて無礼極まりない奴の言つた事など気にするな！」

ルキアは普段は一切の緩みが無い凛々しい顔付きを、柔らかで屈託のない笑みに変えた。

腕を組み、本人が聞いたとしても一切動じ無いであろうと理解しながら、喜助の事を扱き下ろして織姫を激励する。

二人は暫しの間見つめ合うと、途端に嘖き出し、そのまま笑い始めた。

織姫は何かを吹っ切れた様にして、ルキアはそんな彼女に釣られて。

「はははは…さて、では後もう少し続けるか？」

「うん！ お付き合い宜しく!!」

「心得た。そら、持ち場に移動するぞ！」

雑談によつて一息吐いた形となつた二人。

虚圏に劣るとは言え、この尸魂界の空気にも豊富な霊子が漂っている。御蔭で彼女達の霊圧は既に回復していた。

現在時刻は未だ昼前。再び鍛錬を始めたにしても、休息時間は十分に取れる。

二人は其々の立ち位置まで移動し、自身の霊圧を解放し始めた。

その時、ふとルキアの眼前を黒い揚羽蝶が過つた。

「これは——っ、何だと!!?」

これは瀨霊廷で飼育されている特殊な生き物——地獄蝶。

尸魂界から現世へ案内役や、各方面に居る死神達に伝令を伝えたりする役割を持つ。

ルキアはその地獄蝶から伝えられた情報に驚愕の声を上げた。

直後、彼女の顔から先程までの余裕が消え失せると、今度は焦燥が浮かび上がる。

「ど、どうかしたの…?」

只ならぬ様子に、織姫はおずおずとした様子で問い掛ける。

それに対し、ルキアは緊張した面持ちで、ゆっくりと答えた。

「…先程、空座町の北部上空に新たな霊圧反応が現れた。数は五つ」

「まさか…それって!!」

その返答から脳裏を過つたのは、起きて欲しく無い最悪のパターン。

「ああ、反応色は全て紅色——十刃だ」

余りにも想定外な事態に、織姫は目を見開いて動揺を露にする。  
対するルキアはまるで苦虫を噛み潰したかの様な表情を浮かべていた。

第5十刃の拠点の宮の屋上にて、ノイトラは静かに虚夜宮の天蓋の下に描かれた青空を見上げていた。

その背には使い慣れた特異な形状の大鎌。どういった原理かは知らないが、鞘どころか引つ掛ける物も何も無いにも拘らず、逆さ状態で背中に接触したまま固定されていた。

「……………」

何時もであれば此処で何か独り言でも呟いていただろうが、生憎と今はそんな事をしている状況でも無いし、する気も無かった。

故に言葉を呟くのは内心でのみ。

口を完全密閉しながら、ノイトラは現状、そしてこれから先に待ち構えているであろう未来に対し、思考を巡らせる。

——いよいよ始まる。

間も無く決行に移される、現世での任務。

ルピ、グリムジョー、ワンダーワイス、そしてヤミーの代役として任されたノイトラ

と、その従属官のチルツチ。彼等の持つ役割は現世の戦力と、澗靈廷の死神達の注目を逸らす為の陽動。

後は本来のシナリオ通り、ウルキオラは単独で織姫の身柄の確保に動く。

この任務を境目に、ある意味ではこの破面篇の物語は佳境を迎える。

誘拐された織姫を巡り、錯綜する死神達と一護。異質とも取れる存在が身近に現れた影響か、少なからず状況が変化し始める虚夜宮内。

やがて喜助の協力の下、死神達には知らせずに独断で虚夜宮へと侵入する一護達三人。そして始まる壮絶な死闘。

その最中に於いて、ノイトラは自身の立てた目的絡みの関係から、単独行動が必然的に多くなる。

そして同時に危険度も一気に跳ね上がる。彼自身の事は勿論、何よりセフィーロやチルツチ等の身内に対するカバーが甘くなってしまふのだ。

藍染は言うまでも無いが、最近嫌に大人しいザエルアポロの事が気掛かりな現状、容易に隙を作りたくない。

後者についてはノイトラの意識が逸れた瞬間、吐き気を催す程の汚い策を平然と仕掛けて来る可能性だつて有る。

対抗出来る術を尽くしい、取り乱す此方の姿を嘲笑いながら、自分は優々と目的を果

たす。奴はそういう性格だ。

「ノイトラ」

「…チルツチか」

今後の行動に対して思索に耽るノイトラの背後へ声が掛けられる。

先程ウルキオラに任務同行の許可を得たチルツチだ。

ノイトラと同様に特異な形状故に鞘を持たない斬魄刀は、ワイヤーの部分を折畳んだコンパクトな状態で左腰に掛けられている。

「ウルキオ<sup>あ</sup>ラが呼んでたわよ。もう直ぐ出発だつて」

「——了解だ」

ノイトラは返答を返すと同時に右臉を閉じた。

一呼吸間を置いて、ゆっくりと開く。

ほんの僅かな時間であったが、覚悟を決めるには十分だったらしい。その眼光は鋭く、身に纏う雰囲気も、周囲の者に息苦しさを与える様な重みを感じさせた。

右腰から大鎌の柄頭に繋がる鎖をジャラジャラと鳴らしながら、ノイトラは宮の中への階段へと歩き始めた。

先程の彼の変化を感じ取ったのか、多少緊張しながらも、チルツチも追従する。

基本的に現世の任務へ赴く際に利用する出発地点——壮途の間を指して進み続ける。

二人の間に会話は無い。否、必要無いと言うべきか。

この任務についての打ち合わせは既に済んでいる。

緊張を解すという意味合いで雑談を重ねる事も良いのかもしれないが、それよりも今はこの静かな時間の方が案外悪く無いと互いに感じていた。

時として何も、そして多くを語らずとも、互いの気持ちを伝えられていると感じられるこの状況。正しく沈黙の共有に他ならない。

まるでノイトラとテスラの関係だ。流石にアイコンタクトで正確な意思疎通が出来るまででは無いが、確実に仲が進展しているという事実には、チルツチは微かな幸福感を覚えていた。

「…俺等が最後か」

だがその幸福も長くは続かない。

気付けば二人は壮途の間へと到着していた。

既に開かれていた扉から室内へと入ると、其処には既に任務に参加する全メンバーが集結していた。

ワンダーワイスは言葉にならない声を漏らしながら、虚ろな目で虚空を見詰めている。

グリムジョーとルピは互いに距離を取って立ち、その間には殺気が入り混じった嫌な雰囲気醸し出していった。

「…来たか」

そんな三人とは離れた位置に居たウルキオラは、ノイトラとチルツチの姿を確認するとそう零す。

その顔が何処と無くうんざりしている様に見えるのは気のせいだろうか、ノイトラは思った。

「随分とゆっくりだったねー。もしかしてさっきまでお楽しみでした…って感じ？ こ

れから任務だつてのに中々御盛んな事で——」

「あ?」

「…そ、そんな顔しないでよ。冗談だつて冗談! もー、ノイトラつてば気が短いなア  
…」

ノイトラは減らず口を叩き始めたルピを反射的に睨んだ。

何時もとは違つて得物を所持している影響か、心なしか威圧感が増している。

睨み付けられた当人だけで無く、他の三名も思わず身構えて後退りそうになっていた  
事から、どうやらそれは合つていたらしい。

ルピは冷や汗を流しながら、顔を逸らす。

だがノイトラは気付いていた。彼のその頬が仄かに赤く染まっている事に。

怒りが一瞬で冷め、全身に鳥肌が立ち始める。

——何コイツ気色悪いんですけど。

ノイトラは思わず顔が引き攣った。

先日ルピに教育的指導を行つて以降、妙な感じがする視線を向けられている事は気付  
いていた。

だがそれが一体何の考えで、何の感情から来ているのかは不明だった。

「……ああ……なんかクセになる……」

その眩きは即座に空気中に掻き消える程小さなものだったが、常に周囲に気を配っている為に地獄耳と化しているノイトラにはしつかり聞こえていた。

先程の態度とこの発言。こうして間近で観察してみても初めて理解する。

——まさか変態だったのか。

ノイトラは戦慄した。まさかSっ気の他に真逆のMっ気まで持ち合わせているとは、と。

実は他ならぬ彼自身がその切っ掛けを作ったのだと自覚せぬまま。

「……任務内容は先に伝えた通りだ。俺はお前達が奴等と交戦した後に移動する」

ウルキオラはそう言うと、メンバー全員に目配りする。

質問は有るか、その目は問い掛けていた。

「特に文句は無えよ」

「横に同じく」

「…アウー…」

質問も何も、初めから任務内容に対して特に文句も何も無かったノイトラは了承の意を返す。

それはチルツチも同様だった。

只、ワンダーワイスについては謔言の様に声を漏らすだけで、如何聞いても返答では無い。明らかに何も理解していないのが丸判りだ。

この様子では任務を忠実にこなせるとは到底思えない。それは皆の共通認識であった。

だがウルキオラ自身としては特に問題無いと判断していた。

確かに何を仕出かすのか判らないという懸念は有る。だが今回は仮にそうなったとしても、必ず「彼」が止めてくれるであろうと信賴していたからだ。

ウルキオラの視線がノイトラの方を向いている事から、その「彼」というのが誰を指しているのかは言うまでも無い。

「……………」

「ハア…ハア…りよ、りようかい…」

誰かに指図される事を嫌うグリムジョーは無言という予想通りの反応を示し、ルピは先程までの余韻に浸っているのか、やや頬を染めた状態で息を荒げながら返答する。

此処まで来てやつとルピの変化に気付いたのか、チルツチは顔を引き攣らせながら、自身の身体を抱く様にしてノイトラの背後まで隠れる。

流石のグリムジョーもその様子に拒否反応を示したのか、得体の知れない物を見る様な目をしてながらルピとの距離を取っていた。

「…では始めるぞ」

参加メンバー達の纏りの無さを無視しながら、ウルキオラは虚空へと指を付ける。

彼が以前の任務内にも見せたこれは解<sup>デスコレル</sup>空。黒腔を開く際に用いられる技だ。

バキンと空間へと罅が入り、両甲丸の形に開く。無数の色が入り混じっては不規則に蠢く、正しく異空間といった感じの光景がその中から覗く。

基本的に上位の破面や十刃はこの解空によって其々独自に黒腔を開ける。だがそれは決して好き放題に開けるものではない。

虚夜宮では原則として、藍染の許可を得ずに黒腔を開く事は固く禁じられている。それに加え、宮の建物自体が開いたら開いたで即座に認知出来る構造となつていたので、隠し立ては不可能。

当たり前だ。制限を掛けて置かなければ、グリムジョーの様に気性が荒い性格の者や、ゾマリの様に行き過ぎた忠誠心が暴走し、破面の何れかが独断で現世へ侵攻する可能性は少なくないのだから。

だがその反面、上位十刃に対してはそれ程厳しい制限は無かつたりする。

ウルキオラを筆頭に、彼等は本能よりも理性が勝っている上、無暗矢鱈に攻勢に出るような性格はしていない。

ハリベルは藍染に忠実で、命令が無ければ例え強大な敵であろうとも放置する。だが何もしないとという訳では無く、その待機期間中は静かに牙を磨きながら来るべき戦いに備える。

バラガンは虚圏の絶対的な神であり王。故にその腰は重く、何事に対しても玉座に腰掛けたまま堂々とした構えを崩さない。敵が来ても態々動く様な真似はせず、自らの部下が全て倒れた時に初めてその腰を上げ、彼自ら敵を蹂躪する。

スタークは言わずもがな。命令でもされない限り、面倒臭がりな戦いを嫌う彼が一々動く訳が無い。

こんな彼等だからこそ、藍染も特に何も言わないのだろう。もしも上位十刃の中にグリムジョーの様な者が居れば、必ず何か制限を掛けた筈だ。

——逆にその攻撃性を利用し、策略を巡らす可能性も有るが。

「制限時間は特に無い。俺の任務が完了したと同時に、お前達は反膜で纏めて回収する手筈になっている」

「ええー？ 何か気に入らないなア…回収つてまるで物扱いじゃーん。普通に敵を皆殺しにした後に黒腔で帰れば良——ッ!？」

「黙つてろ糞餓鬼」

ウルキオラの意図を理解していたノイトラは、一々口出しするルピの後頭部を右手で掴み、先日と同じく小柄な身体を持ち上げて、それ以上の発言を止める。

この任務に於いて、自分達が相手取るのは隊長格。基本スペックは此方に軍配が上がるとは言え、彼等は決して油断ならない相手だ。

今迄の経験から来る咄嗟の機転力。追い詰められた時に発揮される、不利な戦況を一瞬で引つ繰り返す起死回生の一手。

史実でのスタークがそうだった様に、流石の十刃と言えども、敗北の可能性はゼロで

は無いだ。

ノイトラはそのまま右手を後ろへと引っ込めると、ウルキオラに視線で続きを促す。

——その手に掴まれているルピが更に息を荒くし、恍惚とした表情を浮かべているとは気付かぬまま。

「…くれぐれも散開戦術は取らん事だ。でなければ回収に支障が出るのでな」

「…チツ」

ウルキオラは主にグリムジョーを横目に見ながらそう言うが、彼の態度を見る限りは余り効果は無いだろうと悟る。

まあ単独行動を取るのが彼一人であれば十分対応可能なので、特に気にも留めていなかった。

「では行け」

その掛け声の直後、五人の姿が黒腔の中へと消えて行った。

## 第十九話 三日月と任務と死神達と…

黒腔の中を、靈子で固めた足場の上をゆったりとした速度で進む五人の破面。

先頭を行くのはグリムジョー。その表情は至って普通に見えるが、周囲にはピリピリとした空気が漂っており、闘争心と殺意が入り混じっているのが丸判りだ。

位置的に見れば当然、足場を形成しているのは彼の手によるものだが、その出来は実に御粗末と言つて良い。

まるで一護のそれと同等。自分が進めれば後は知らないと言わんばかりに作られた靈子の足場は、後に続く四人が足を乗せるには余りに脆すぎた。

だが其処は流石のノイトラ。残る三人より前に出ると、足場の補強と同時に幅の拡張をしながら進んで行く。

しかもこれが無意識の内の行動だというのだから恐れ入る。正に御人好しの鑑である。

見方によつてはグリムジョーが基礎と骨格を組み立て、その上にノイトラが仕上げから完成までを共同作業で行っているかの様だ。

「うわー…」

大氣中に偏在する霊子は基本的に何の属性も方向性を持っていない為、霊力を持つ者であれば自由に使用出来る。

霊子を集束し、それに自身の霊力でコーティングして弓の形状を成した霊子兵装れいしへいそうを主な武器とする滅却師がその操作に最も秀でており、死神や虚がそれに次ぐ形だ。

そしてやはり彼等の中でも個人差が有る。

要となるのは明確な想像力だ。普段から試行錯誤を重ねているノイトラは、他の破面達のそれよりも遙か上を行っていると云って良い。

案の定、その足場の出来の良さに声を漏らしたのは初見であるルピ。

チルツチは想定範囲内の出来事だったので、特に驚いた様子は無いが、その顔の一部がやや引き攣っている事から、多少なりとも引いているらしい。

ワンダーワイスに至っては、足場の広さに託けて、左右に大きくフラフラと動き回りながら、何となくそれを楽しんでいる様に見えた。

「…何だよ」

「い、いや…だってコレシア…」

足場のモデルとなっていてのは、憑依前に良く通勤時に通っていた橋だ。

所謂田舎と呼ばれる地域ではあったが、町の中心部だけにそれなりの大きさを誇っていたそれ。

毎日見ていた御蔭で記憶の中に深く根付いていた影響か、幅等の細かなデザインだけに限らず、本人は特に意識もしていないにも拘らず手摺すら完備している。

その余りの徹底した作りに、ルピは兎も角として、付き合いが長い筈のチルツチが思わず引いたのも納得だ。

「ノイトラって一体何を目指してんのさ!! 建築家!! 最強じゃなかったの!! なんなのさこの完璧な足場は!! しかも一番は手摺だよ!! 安全面までちゃんと考慮してまーすいつでも言いたいワケ!?!」

指摘されて初めて気付いたのか、ノイトラは一瞬だけ固まる。

だが以前、胃が痛む程過酷な状況下にて想定外な質問をされる経験をしていた御蔭か、その間を置かずして理由を考え出す事に成功した。

「…落ちたら危ねえだろ」

「あ…うん、確かにそうだよねー。周りは何処へ繋がってるかもわかんない異空間だし。お気遣い有難う」

取って付けた言い分では有るが、どうやら通用したらしい。

至極当然だろうといった様子で説明するノイトラに対し、ルピはいきなり声のトーンを下げると、素直に御礼の言葉を返した。

傍ではチルツチが、またか、と言わんばかりに溜息を吐いていた。

「——じゃないって!! ボク達は子供かよ!!? んなドジ踏むワケ無いじゃん!!!」

解決したのかと思いきや、直後にルピは多少口調を崩しながらも見事な連続ツッコみを返す。

先程の発言と繋げると、ノリ付きという高レベルなものまで使いこなしている事にもなる。

流石はギンと会話が出来る数少ない破面と言うべきか。

一通り叫んだルピは、肩で息をしながら疲れた表情を浮かべた。

そんな彼の背中に、優しく諭す声が掛けられた。

「諦めなさい。こいつはこういう奴だから」

「…苦労してゐるんだねキミも」

チルツチは悟りを開いたかの如く、万物を許容する女神の様な表情を浮かべながら、ルピの肩に手を置いた。

余り相性が良いとは言えないこの二人だったが、この時ばかりは共通した原因の御蔭で通じ合えていた。

ノイトラとしてはいきなり仲良くなった二人に首を傾げていたが、特に困る事でも無いとして流した。

「つと、もう直ぐか…」

見れば先頭のグリムジョーが足を止めており、彼の眼前の空間が横一線に罅割れて今にも開きそうになっている。

ノイトラは歩く速度を上げた。常人の倍近い歩幅で早歩きをしたとなれば、それはも

う走っているのと同等。

それに合わせようとしているのか、背後の二人は慌てて小走りで彼の背中を追従する。

ワンダーワイスも何となく急がねばマズイと察したのか、相変わらずの譫言を漏らしながらも早足で駆け出し始めた。

「……………」

ノイトラはやがてグリムジョーの直ぐ傍に立ったが、予想に反して、彼から遅れた事に関しての文句等は無かった。

それどころか視線は前を向いたまま微動だにしていない。

恐らくグリムジョーの頭を占めている事は一つだけ。

それは本意ながら勝負を預ける形となった一護だ。

今度こそ彼を完膚無きにまで叩きのめし、完全に息の根を止めんと意気込んでいるのだろう。

木の茂みを狩場とし、狩りの成功率は二割に満たない世間一般的な豹とは別物。

姿を見られ、逃げられ様とも関係無い。隠れる等といった真似は一切せず、真正面か

ら蹂躪して獲物の命を刈り取る。その堂々とした在り方は正しく王に相応しい。

「ねえ、ノイトラ」

「ん？」

一息遅れで到着したらしい、チルツチはノイトラの左隣に立つと、不意に声を掛けた。ノイトラは一先ずグリムジョーから視線を外すと、声の方向へと振り向く。

——何を思ったのか途中で足を止め、手摺から飛び降りようとするワンダーワイスを必死に引っ張り上げ様と奮闘しているルピという、背後の光景を無視しながら。

「出発前に言った事…覚えてる？」

「…あれか」

チルツチの問い掛けに対し、ノイトラはそう零した途端、眉間に皺を寄せる。

実は任務同行を告げた際、彼はチルツチに対してある約束事をしていた。

それはこの任務内で戦闘を行う際の条件である。

原則として帰刃は無し。追い詰められた場合は別だが、極力未解放の状態で戦う事。

例え相手が自分より格下だと判つても、油断しないどころか、寧ろ警戒レベルを上げる事。増援が来た場合、僅かでも対処し切れないと判断した場合、素直に自分に助力を請う事。

そして最後は、この内容全てを守れた場合、何でも言う事を聞くという約束だ。

ノイトラとしてはチルツチに経験を積ませるといふ意図に加え、出来る限り生き残つてほしいと願うが故に条件を出した。

だが形ある報酬も何も無しに、あれを遣れこれを遣れと指示ばかり出すのは上司として愚策。故に最後に報酬を出したのだ。

上の命令を聞くのは当然——という考えは決して間違いでは無いのだが、其処で勘違いしていけないのは、その指示を成すのも自分と同じ人だという事だ。

考えてもみる。失敗したら怒られる、だが成功しても何も無し。遂には次の指示が休み無く出されるといふ仕事環境を。

せめて労いや感謝の言葉が有ればまた結果は違つて来るのだが、何故かそれを出来無い上司が多かつたのを、憑依前のノイトラは覚えてる。

——最近のそういった上司共は他人を本当の意味で認識してないのだ。大方、人じゃなく物だとも思つてるんだろう。

憑依前に唯一尊敬していた恩師が零した言葉の一つが脳裏を過る。

部下を持つ立場になった今、その意味を初めて理解した。ある意味で言えば、藍染と同じだろうか。

彼は彼で表面上は任務を終えた破面に対してに感謝の言葉を述べたりするが、内心では何とも思っていない。

自分に匹敵する存在はこの世に存在しておらず、全て道端の小石程度の価値しか無いのだと。

その本性を知っても尚、忠誠を捧げようとしそうな者は居るが。

「ちゃんと覚えてるっての。安心しとけ」

「……言質は取ったわよお……!!」

取り敢えずモチベーションというものは非常に大事だ。

そう考えたノイトラは、約束を守る気が少しでも上がるのであれば、と安易にも承諾してしまった。

その言葉を聞いたチルツチは密かに内心でガッツポーズを取りながら、任務への意欲を向上させた。

実を言えば彼女以外にも約束している者が居るのだが——それは言わぬが華だろ

う。

「ちよつとノイトラつてば！ 少しは手伝つてよ!! こいつのせいで無駄に体力を使つちやつたじゃんかア!!」

「アウー?」

ワンダーワイスを抱えながら、ルピはノイトラの前へと立つて騒ぎ立てる。

何だかんだ言っているが、結構面倒見が良いらしい。

只単にワンダーワイスの重要性を悟っていただけに取った行動なのかもしれないが。

眼前で頬を膨らませる女男にトキメク等といった事は一切無く、ノイトラはそう思った。

「取り敢えず前向け。繋がんぞ」

「ちよつ!?! 無視つて……いや、案外こういう扱いも——」

またしても寒気がする様な事をぬかし始めたルピを徹底的に無視し、空間の裂け目から入り込んで来た霊圧を感じながら、ノイトラは緩んでいた自身の気を引き締めた。

間も無く開かれんとする黒腔の接続先、空座町北部の森林地帯の上空。

その下では、尸魂界からの援軍たる護廷十三隊の隊長、副隊長、第三席、第五席の各一名、合計四名が存在していた。

彼等は其々に座禅かそれに近い形で足を組み、抜身の斬魄刀を近くに置き、静かに瞑想を行っている。

これは刃禅じんぜんと呼ばれ、意思を持つ斬魄刀との対話の為、尸魂界の開闢より何千年と掛けて編み出された形。

死神であれば誰もがが行う修行の一つでもあり、これを長年繰り返して斬魄刀と心を通じ合わせた末に、初めて始解——そしてやがては卍解へと至るのだ。

「イ、あ、~~~~~!!!」

だか刃禪には多大な集中力と精神力に加え、その斬魄刀の持つ性格によつては独自に対処を変えなければならぬという柔軟さが求められる。

これが相当な難易度を誇つており、気が短い者は途中で投げ出す事が非常に多かつた。

「くそつ!! くそつ、この野郎!! くそくそくそつ!!! 折れろ!! 折れちゃえ!!! ちくしょう!!!」

黒のおかつばで右の睫毛と眉毛に派手なエクステを付けた、整つた容姿の男——十番隊第五席、綾瀬川あやせがわ 弓親ゆみちかは、刃禪の途中で大声を上げながら立ち上がる。

その顔を怒りに歪めながら、斬魄刀の柄を握ると、そのまま近くの岩目掛けて叩き付け始めた。

硬い物に斬り付けた場合、刃毀れやしなえが起こりそうなものだが、彼の様子を見る限り、寧ろそうなる事を望んでいる節が見られた。

だが斬魄刀というものは普通の刀では無い。

斬る対象が膨大な霊圧を持ち得る存在でも無い限り、その刀身には刃毀れどころか傷一つ付く事は無い。

しかも罅が入ったり、折れたりしたとしても、多少時間を掛ければ修復可能。正解状態で損傷した場合はより多くの時間を要するが、直る事に変わりは無い。

故に刀同士、刃と刃を打ち合わせる様な真似をしても何の問題も無いのである。

本来、時代劇等で出て来るチャンバラシーンの様に戦う者が要れば、それは只の未熟者か愚か者かの二択だ。

だが実際、打ち合いの数が重なる度に刃毀れは増えるが、切れ味はそう易々とは落ち無い。問題なのはその状態によっては修復が困難となる事で、その刀は次から使い物にならなくなってしまうのだ。

故に刀同士の戦いというものは、基本的に平地の部分で相手の斬撃を受けるか、いなす事が主流だった。

「あ~~~~~~~~ム力つく~~~~~!!! ってあ痛っ!!!」

「うるさい!! あんたちよつとは黙って出来ないの!？」

今度は空に向かって叫び、更に苛立ちを露にする弓親の後頭部目掛け、乱菊は近くに

有った小石を投げ付ける。

見事に直撃。パカン、と景気の良い音を響かせた。

「だって藤孔雀ふじくじやくの奴ムカつくんだもん!! こいつ高飛車だしエラソーだし自分の事世界一美形だと思ってるしもーサイアクだよ!! 僕ぜったいコイツのこと具象化できないと思うんだよね!!」

むず痒い様なヒリヒリした痛みを発するその直撃部分を押さえながら、弓親は大声で自身の斬魄刀に対する愚痴を漏らし始めた。

人と同様に、斬魄刀の性格も千差万別。持ち主と同じ物も在れば、正反対の物だつて在る。

弓親の場合は前者だつたらしい。次々と文句を垂れ流している彼自身も、実はそれと似た様な性分である。

生粋のナルシストであり、私生活でも戦いでも、常に美しさを追求。逆に自分より美しい者には露骨に嫉妬する。

醜い者は存在すら受け入れられないとして、酷い時は目を瞑つても視界に入れまいとする徹底振り。

詳細は違えど、客観的に見ればほぼ一緒である。

「て言うか頼まれてもしてやるもんか!!」

「何言つてんの、あんたにソツクリじゃない。うちの灰猫はいねこなんて我儘だしぐうたらだし気分屋だしバカだし——」

かく言う乱菊も、弓親と同類だった。

何時もマイペースで気分屋な言動が目立ち、デスクワークもサボりがちで、その事で隊長である冬獅郎に怒られようが何処吹く風。

相当な酒好きで、毎月の給料が酒代へと消える為、常に金欠という駄目っ振り。それが斬魄刀の性格にも反映されていれば——容易に想像が付く。

「わーソツクリ。乱菊さんて絶対写真に写った自分の顔見て、  
“あたしこんな力オじゃな—い”とか言うタイプだよね…つてうぎやあああああ!!!」

「あんたが言うなあああ!!!」

白い目で乱菊を見つつ、弓親は肩を竦めてそう零す。

そんな彼の態度が癩に触ったのか、乱菊は額に血管を浮き上がらせながら殴り掛かった。

修行中にも拘らず、真面目にそれを行わないどころか喧嘩を始める二人。

全く以て五十歩百歩である。

離れで真面目に刃禪に取り組んでいた一角と冬獅郎だったが、後者はその余りの喧騒に、遂にキレた。

「うるせえぞお前ら!! 集中しろ!!」

尸魂界へと帰らせるか——本気でそんな算段を考え始める冬獅郎の近くの岩場の上で、一角はふと刃禪を一時中断した。

ゆっくりと目を開き、空を見上げる。今日は低気圧の発達に伴う強風も何も無い天気  
の筈だったが、一つだけ違和感が有った。

——雲が、疾はやい。

今迄過酷な環境下や戦場で培って来た勘が、胸騒ぎを訴えていた。

とは言え、この勘も外れる事は有る。確証も無い今、一概に信じる訳には行かないと、一角は一息置いた。

最悪の事態を考えるならば、此処で破面達が襲撃して来る事だ。

だがそれは幾ら何でも早過ぎる。まず有り得ないだろう。

ちなみにこれは護廷十三隊の総意でも有る。

完全な破面の成体を作り出せるのは、完全覚醒した崩玉だけだ。

以前の現世侵攻の時の様に、中には十刃という成功例も有る様だが、数はそう多く無い。

喜助の計算によると、藍染の持つ崩玉の現時点での覚醒状態は大凡五割。完全覚醒するのは未だ先だ。

つまり藍染が戦力を充実させるまでには猶予が有る。ならばその間に出来る限り此方の戦力の底上げを行わなければ——というのは大凡の見解だ。

如何に追放された身の上とは言え、尸魂界随一の天才の言葉を疑う様な愚者は、一部を除いて居なかつた。

その愚者というのは、中央ちゅうおう四十六室しじゅうろくしつ。尸魂界全土から集められた四十人の賢者と六人の裁判官で構成される尸魂界の最高司法機関。

主に死神の犯した罪咎は全てここで裁かれ、その絶対的な決定権故に総隊長ですら異を唱える事が許されない。

だが賢者というのは名ばかりで、中身は現世の汚職政治家とほぼ相違無い。

私利私欲の為に技術開発局に秘密裏の研究をさせていたり、同種の斬魄刀の存在を認めず、持ち主である二人に殺し合いを強要したりと、本当にロクでも無い連中の集まりなのである。

確かに賢者ならぬ愚者である。とは言え、全てが全てでは無いのも事実だが。でなければ今頃護廷十三隊どころか、瀟靈廷全体が成り立っていなかっただろう。

過去に起きた事件にて、喜助が藍染の策略によって濡れ衣を着せられた時も、この機関は踏み込んだ調査もせずに判決を下した。

当時、鬼道に秀でた死神によって構成される特殊部隊である鬼道衆、その総帥と副鬼道長二名。喜助を除いて隊長四人、副隊長三人という、死神の中でも上位の錚々たる面々が関連していた事件だったにも拘らずだ。

藍染の鏡花水月の後押しも有ったのだろうが、司法機関としての手法としては余りに御粗末極まりなかった。

当然、それを不服として、喜助は夜一の協力の元に逃亡を図り、現世へと身を潜めた。事件の被害者となった者達の治療法を研究しながら。

藍染の野望が公になった今、その事件についての詳細もほぼ明らかとなっている。喜助は冤罪であった事も同時にだ。

現在の中央四十六室はその事に対する復讐をされるのではないかと戦々恐々してい

るのだ。

故にこの藍染側の勢力に対する見解も、自分達を騙しているのではないかと、そういった考えが機関内には浸透している。

当時のメンバー全員は殺害されている為に、判決を下した下手人はもはや何処にも存在して居ないのだが、思考回路の殆どが以前までの愚者と同列な後任達はそう捉えなかつた。

喜助としては、ある意味で言えば組織に縛られずに自由に研究を進められる今の立場の方が気に入っており、中央四十六室の事はもはや頭の片隅に追い遣っている状態だったりする。

恐らく彼は今後一切、護廷十三隊に協力はしても組織自体に戻る事は無いだろう。

「ん？何か言つたか斑目」

一角の空気の変化に気付いたのか、冬獅郎が問い掛ける。

言うべきかと一瞬悩んだが、一角は先程の胸騒ぎを気にし過ぎただけだと判断し、無難に返そうとする。

「…イヤ…——っ!!!?」

何でも無い。その一言を言い掛けた直前——周囲一帯を膨大な霊圧が支配した。

同時に上空より聞こえて来る、何かに罅が入るかの様な音。

四人は一斉に弾かれる様にして、その音の発生地点を見上げた。

自称、護廷十三隊の中で最もツイてる男、斑目一角。

残念ながら、今回ばかりはそうもいかなかったらしい。

黒腔の開いた先から覗く青空。見る者の心を洗い流すかの様なその光景は、藍染の主

な監視下の一部である虚夜宮の天蓋の下に描かれたそれとは一線を画す。

ノイトラは思わず、感銘の溜息を吐いた。

以前訪れた際には落ち着いて眺めている暇は無かったが、やはりこうして見ると実物は違うと思ひ知らされる。

出来る事なら小一時間程、野原に寝転がって無心で眺めていたのが本音だったが、先程から感じている霊圧の持ち主達は許してくれないだろう。

「…何かいきなり大きい霊圧が有るんだけど。現世<sup>こっち</sup>ってこんなに霊圧持つてる奴と遭遇し易い場所な訳？」

左隣のチルツチは下を見下ろしながら、そう呟く。

視線の先には少年一人、男二人、女一人の合計四人の人影が在った。

「何言ってるの。アレ死神だよ？ 多分前に6番さんが言ってた『尸魂界からの援軍』じゃないの？ ねエ、グリムジョー？」

ルピはそう言うと、グリムジョーの方を見遣った。

その眼は何時ぞやのノイトラにした様に半目で、明らかに小馬鹿にする様な色をしていた。

「ア、ごめーん。元 6番だったっけ？」

一部分を強調した上で、ルピは演技掛かった大袈裟な口調で謝罪する。

言うまでも無く、明らかに挑発だ。任務中にも拘らず、露骨にグリムジョーの神経を逆撫でに掛かっている。

ノイトラはもう一度話し合いが必要かと考えたが、ルピの変態的な性癖を思い出し、断念した。

——重ねて言うが、これは自業自得である。

「あの中には居ねえよ。俺が殺してえヤローはな」

だがグリムジョーは珍しく目立った反応を示さず、吐き捨てる様にしてそう返した。彼が考えているのは只一人、黒崎一護の事だけなのだろう。

黒腔を出した瞬間から一人別方向を向いていたと思つたら、探查神経で御目当ての霊圧

を探っていたらしい。

今のところは仕留め損ねた獲物の一つという認識なのだろうが、好敵手へと昇華するのにそう時間は掛からなそうだ。

ノイトラは探查神経で辺り一帯の霊圧を探る。

実際に対峙して完全に記憶した喜助と夜の霊圧の周辺には、もう二つの霊圧反応。恐らく泰虎、そして阿散井恋次だろう。

そして其処から晴れた位置にもう一つ、微かだが一護の霊圧の名残が残っていた。

「なっ!? あいつ散開するなって言われてんのに!!」

「ほっときなよ。所詮十刃落ちさ」

次の瞬間、グリムジョーはその場を跳んで後者の方向へと駆けて行った。

白装束を風に靡かせながら、その姿を小さくして行く。

外部に晒された右腰背面には、本来刻まれていた筈の6の数字は無かった。

「何もできやしないよ」

そう零すルピの眼は先程とは異なり、憐みに近い何かを感じさせた。チルツチはそんな彼の様子とグリムジョーの方向を何回か往復して見ると、やがて口を閉じた。

任務中に独断行動を取ると言う事は、作戦から外れると言っているのと同義だ。

今回はあくまで陽動。戦況も此方側の有利に進めれば良いだけで、敵の殺害や殲滅も出来るならの範疇でしかない。

敵勢力全体の注目を逸らす事が出来れば、もはや作戦成功まで秒読み段階に入る。

そうなれば、後は油断でもしない限りは生き残れる。グリムジョーを除いてだが。

ノイトラとしては、グリムジョーを任務に同行させた時点で、彼の独断行動も藍染には予測済みだったのだろうと考える。

恐らくそれは一護の成長具合。そして願わくば、仮面の軍勢のメンバーの姿も確認して置きたいのだ。

藍染にとつては息をするかの如く容易に計画されているであろうこの任務に、ノイトラは驚愕どころか、もはやそれを通り越して呆れしか感じなかった。

「……ん？」

ノイトラは次の瞬間、凄まじい速度で自分へ一直線に近付いて来る靈圧を感じた。その正体を知ると同時に納得する。

今立つて居る位置は、史実でのヤミーと同じ場所。ならばそんな彼に代わって存在している自分に対し、同じく彼が相手する筈であつた者が来るのは当然。

だがノイトラは構え一つ取らない。

と言うか、取る必要性が無い。

何せ左隣には迫り来る靈圧を察知し、既に斬魄刀を構え終えている従属官が居るのだから。

「ちっー！」

「…何よ、どんなのが来るかと思つたら餓鬼じゃない」

ノイトラに向けて上段より振り下ろされた斬魄刀の刀身を、チルツチは何時の間にやらワイヤーを巻き付けており、両手で左右に張つてそれ以上の動きを完全に制止していた。

受け止めると同時に飛び散る氷の破片。そして急激に下がって行く空気の温度。

瞬く間に行われた見事な手腕だ。それより抜け出そうと力を籠めるも、ビクともしな

い己の斬魄刀——氷輪丸ひょうりんまるに、冬獅郎は舌打ちした。

そして餓鬼呼ばわりされた事に内心で憤慨しつつも、何とか名乗りを上げる。

「…十番隊隊長、日番谷冬獅郎だ！」

「ふーん、護廷十三隊つてのは随分と人手不足なのね…こんな餓鬼が隊長だなんて…」

「っ!! …てめえも名乗つたらどうだ? 破面」

子供扱いだけに飽き足らず、まるで致し方無く隊長へ就任したかの様な言い草。

取り方によつては冬獅郎自身に実力が無いという意味にも取れる。

発言したチルツチとしては、特に深い考えも無い素直な意見だったりする。

見た目に反した実力の持ち主というのは、破面の間でも幾つか例もあるし、珍しいものでも無い。其処は認める。

だが上に立って組織を回す能力については別だ。戦闘以外に能が無い、経験が浅い、精神的に未熟といった、実力はあつても上に立つ資格が無い者は幾らでも存在するのだから。

「面倒くさ…破面No.105、チルツチ・サンダーウィッチよ」

「No. 105…だと…? 十刃つてやつじゃねえのか」

眉間に皺を寄せながら、冬獅郎が問う。

だがチルツチはそれに答える事無く、ふと左手に握ったワイヤーを手放した。

以前として大部分が刀身に巻き付いたままだが、突然の事に反応した冬獅郎は思わず後退した。

実は伸縮自在であるワイヤーもそれに連れられて伸ばされて行く。

「なっ!?!」

「その疑問に答える必要は…」

移動した距離だけ伸び続けるワイヤー。だがそれはチルツチの呟きと共に、突如停止した。

その反動で冬獅郎の身体が一瞬前方へと引つ張られるが、何とか踏み止まる。

刀身を回す等して何とかワイヤーを解こうと試みるが、一向に緩まる気配が無い。

「無いのよ、ねっ!!」

「!!?」

チルツチは斬魄刀の柄を持つ右手を振り上げる。

するとワイヤー全体が意思を持つ様にしてその方向へと持ち上がった。

そうならば当然、氷輪丸も引つ張られる。

己の唯一無二の武器を手放す訳にも行かず、冬獅郎自身も一気に上空へと持ち上げられた。

「せーのつと!!」

「くツ!!」

それを確認した後、チルツチは柄を振り下ろすと同時に、刀身に巻き付いている部分のワイヤーを解いた。

始めは地面に叩き付けられるのかと予測した冬獅郎だったが、突然の拘束からの解放に驚愕に目を見開くと、遙か後方へと吹き飛ばされて行く。

辛うじて見える場所で体勢を立て直し、再び此方へと向かって来る姿を確認しながら、チルツチはノイトラへと問い掛ける。

「あの餓鬼はあたしがやるわ。良い？」

「…戦況が有利になっても慢心すんなよ。見た目がアレでも隊長だ」

「了解っ!!」

チルツチはノイトラの言葉に即座に了承の返事を返すと響転でその場から掻き消える。

ノイトラは視線を右にずらす。すると其処には何時の間にもやら、冬獅郎と同じく義骸から本来の死神の姿へと戻った二人の男とルピが相對していた。

ノイトラは周囲を警戒しながら、この後の事を考える。

この局面に於いて、彼は積極的に戦う気は無い。

物語の道筋に不用意にイレギュラーを起こしたくないというのが主だが、一番は藍染が後で見る事になるであろう戦闘記録に自身の情報を流したくないのだ。

如何あつても戦わねばならない事態に陥ったならば諦めるが、流石に帰刃まではしない心算だ。というかウルキオラに大事が無い限り、その機会が訪れる事は無いだろう。

懸念が有るとすれば、自分が戦闘狂モードに入らないか否かのみだったが、恐らくそれは大丈夫だろうと踏んでいる。

抑々、そのスイツチが入るには切欠が有る。それこそが喜助や夜一といった上位クラスノの敵と遭遇した場合だ。

今回の任務では来ても喜助一人だろうし、脚の負傷が史実よりも酷いであろう夜一は確実に来ない筈だ。

「一先ずは安心…ってか」

「ウ？」

ノイトラはそう呟くと、直ぐ傍で四つん這いになり、眼前を飛び回る蜻蛉を捕まえようと奮闘していたワンダーワイスの頭へ右手を置く。

強制的に興味対象から視線を逸らされた彼は、何処と無く不思議そうな顔をしながら、自身の頭へ乗っている手の持ち主を見上げた。

「…そんなモン食っても腹の足しになんねえだろ。そら」

「…??」

「飴だ。これでも舐めて大人しくしてろ」

ノイトラは懐から口カお手製の飴玉を取り出すと、そのままワンダーワイスの口へと突っ込んだ。ちなみにメロン味である。

ワンダーワイスは始めは戸惑っているというか意味が解らないといった風だったが、やがて今迄味わった事が無い「甘さ」という心地良い味覚を感じたのか、突然全身をピョンと張りつめて固まったかと思うと、慌ただしく口の中で飴玉を転がし始めた。

齒の噛み合う音と飴玉が転がる音が順番に鳴り続ける。どうやら普通の食事の様に噛み砕いて食べ様としているらしい。

——まあ、別に構わないか。

別に予備は後十個以上も有る。此処で噛み砕いたとしても御代りをやれば良い。

ノイトラはそう考えると、口の中で暴れ回る飴玉相手に奮闘しているワンダーワイスの頭を、これまた無意識の内に優しく撫で始めたのだった。

「……いつ等……斬つてもいいのかしら……」

此処が戦場であるという事も忘れ、仄々とした雰囲気を作り出している二人の破面。斬魄刀を構え、刃先を彼等へと向けた体勢のまま、乱菊は呟いた。

## 第二十話 その他諸々と、三日月と龍鬼と…

空座町の商店街。その裏通りの更に奥にひっそり構えられた駄菓子屋、浦原商店。

その店の地下に築かれた——喜助曰く、“勉強部屋”。其処で二人の男が激しい戦闘を行っていた。

「オラオラどうしたあ!? こんなモンかよ!!」

一人は死神、阿散井恋次。

卍解状態の己の斬魄刀——ひひおおうざびまる狒狒王蛇尾丸を縦横無尽に振り回し、もう一方を追い詰めている。

だが余裕綽々とも取れるその台詞の割には、彼の顔には大量の汗と疲労感が見られた。

「グ…ハッ…!!」

それに必死に抵抗しているのは茶渡泰虎。

迫り来る巨大な蛇の骨。その顎を何とか受け止めたまでは良いが、その持つ凄まじい力を抑え切れず、軽々と吹き飛ばされた。

背中から背後の岩盤へと叩き付けられ、余りの衝撃に肺の空気が強制的に吐き出される。

これが一般人であれば、受け止めた直後に只の肉塊ミンチと化すか、容易く押し潰されて死んでいただろう。

だが生憎、この茶渡泰虎という男は普通では無い。

彼は能力に目覚める以前より、既に人間から逸脱した耐久性を持つ肉体を有していた。

ビルの建設工事現場の上より建材の一部である巨大な鋼材が降ってきて、容易に背中で受け止めてみせる。負傷らしい負傷も、衝撃で頭部の表面の皮膚一枚が裂けた程度で、他は骨折も何も無い。

オートバイと正面衝突しても、やはり負傷は掠り傷程度。終いには逆に相手の方が重傷を負っており、泰虎はその相手を背負って病院まで運んでやるといった余裕振りだ。

この余りの人外振りは、死神の力に目覚めたばかりの一護も思わず引く程だった。

しかも自主的では無いとは言え、幼少期より喧嘩三昧の日々を送っていた御蔭で鍛え

上げられた戦闘経験により、能力を得た後も難なくそれを使いこなして見せるという順応振りを見せる。

ルキアを助ける為に尸魂界へ侵入した際は、護廷十三隊最強と謳われる十一番隊の隊士達を単体で壊滅状態にまで追い込み、副隊長の次に高い位である第三席の死神を瞬殺して退けた。

流石に隊長に対しては手も足も出なかつたが、一介の戦士としての及第点を得るまでには十分だろうと、泰虎本人もそう思っていた。

しかしつい最近、その認識が全て引つ繰り返された。

後から聞いて知った事だが、現世に侵攻して来たあの破面という存在。対峙した時点で、織姫がどうこう出来る様な軟な相手では無いとは判っていたが、まさか只のパンチ一発で自分が満身創痍に陥るとは予想外だった。

しかも問題はその次の襲撃時だ。不意討ちとは言え、前回よりも明らかに劣る破面の攻撃に全く気付く事が出来ず、一護の助けが無ければ間違い無く自分は死んでいた。その時の光景を今思い出すだけでも、泰虎は悔しさが込み上げてくるのを感じる。

「ハッ、ハッ……：：：：：いい加減、これで終いだろ、オイ？」

呼吸を乱しながら、恋次は中々立ち上がらない泰虎を見下ろし、確認する様にして言う。

元々実力的には自分の方が上であり、戦況は終始圧倒していた。とは言え、何度叩きのめしても尚食い付いてくる泰虎のタフネスに相当な霊圧と体力を持つて行かれたのも事実。

勿論本気では無いし、手加減はしている。だが恋次の卍解自体がその巨大さ故に燃費が悪く、幾らか加減しようが、展開しているだけでも激しく消耗してしまうのだ。

正直言つて、恋次はもはやこれ以上の力の行使は御免だった。

出来る事なら今直ぐ地面に寝そべって休みたい。

内心でそんな弱音を吐く程に参っていた。

「…まだ…だ…！」

恋次の願いを余所に、泰虎は悲鳴を上げる全身に鞭打つて立ち上がると、無意識の内に能力が解除されていた右腕に再び鎧を纏わせた。

その眼に宿る闘志は未だ烈火の如く燃え続けている。

とは言え、明らかに限界に等しい状態であるのは明白。幾ら本人が続けたいと思つて

いたとしても、靈圧や肉体が追い付かなければ逆に彼自身の命が危うくなる。

恋次は一旦、視線を横に移した。

其処には何時に無く真剣な表情で佇む喜助の姿が在った。

この二人——傍から見れば泰虎がメインの修行だが、元はと言えば喜助が言い出した事だ。

たった数日という短期間で、一護を恋次達や護廷十三隊の上位レベルと渡り合える程に鍛え上げた喜助。その指導力に目を付けた恋次は、現世に訪れて直ぐに修行を付けて貰える様に頼み込んだ。

それに続く様にして、怪我が癒えた泰虎も自分を鍛えて欲しいと懇願した。

喜助は困惑した。一護を鍛えたのは、あくまでそれがルキアの魂魄に埋め込まれた崩玉の確保の為に必要だったからに過ぎない。打算十割、罷り間違つても善意からの行動では無い。

だが現在では借りも出来た上、付き合っていく間で多少情に絆された影響か、何か彼から頼みがあれば可能な範囲で答えてやりたいという考えはあった。

だがこの二人は別だ。卍解を習得しているが故に、対破面用として主戦力に数えられている恋次は別としても、特に能力持ちとは言え只の人間である泰虎。

喜助の頭脳を以てしても未だ解明されていない泰虎の能力。だが気になるのはそれ

だけで、能力自体は対破面戦では現時点では全く役に立たない事は最近の戦闘実績から証明されている。

「……………」

喜助は視線で指示を仰いできた恋次に眼を合わせる。

—— 続けて下さい。

その眼に含まれた意図は、直接語られずとも十分に理解出来た。

恋次は溜息を吐いたかと思うと、その場から一旦距離を取り、再び卍解を構えた。

泰虎もふら付きながらも残り少ない霊圧を振り絞り、右足を前に踏み出す。

「うおおおおおッ!!!」

「おらああああッ!!!」

再びぶつかり合う二人の姿を眺めながら、喜助は考える。

確かに泰虎は弱い。だが彼の能力の構造を分析してみたところ、成長の余地は確かに存在していた。

言うなれば、今彼は壁にぶつかっている様なものだ。例えるならスランプと表現する方が正しい。

普通であれば日々厳しい修行を重ね、順調に成長を遂げて行く中で必ず訪れる時期だ。護廷十三隊の現隊長格の大半も、それを乗り越えた上でその場所に立っている。

「そんな攻撃じゃあ、この狒狒王蛇尾丸は押し返せねえぞお!! さつさと倒れた方がラクになるぜえ!!」

「そういう…わけには…いかない…!!」

泰虎の戦闘スタイルは能力を得る前から既に確立していた。

ルキア救出の際に尸魂界へ赴く数日前にも、彼自身に能力を自覚させる事以外、特に修行を積む必要が無い程に。

現時点では幾ら地力を上げる様な鍛錬を積もうが、余り意味は無いだろう。

魂魄自体が只の人間の為、成長限界が低いのだ。一護の様に死神として変質する等すれば、同時に成長率は伸びるだろうが、戦闘スタイル——徒手空拳主体から刀を用いた剣技へと真逆化するという弊害も在る。

だがそれには素質が必要だし、霊圧が有るからといってそう易々と成れるものでは無

い。

しかも運良く死神化出来たとしても、新たな力を我が物とするまでには更に時間が必要となる。

藍染との決戦が近付いている現状、そんな余裕は無い。

故に喜助が選択したのは現状維持を基本に据えた——泰虎の持つ能力の進化だ。

だがそれには新たな戦闘経験が必要不可欠だった。彼より格上の實力を持つ者との。

泰虎と一護の明確な違い——それは今迄格上らしい格上との戦いの経験が少ない事だ。

恐らくその不足分を補ってやれば、間違い無く変化が訪れるというのが喜助の見立てだった。

泰虎の才能は一護には劣るとは言え、相当なものであるのに変わりはない。こういった天才は窮地に追い込まれて初めて覚醒するというパターンが定石だ。

だがそれは隊長レベルの相手を宛がうという訳では無い。ましてや、喜助自身が相手をする事でもだ。

其処で目を付けたのが——相手は三席以上副隊長以下の死神、そして必須事項に卍解。

基本的に卍解を習得しているのは護廷十三隊の隊長だけだ。だが彼等ではそれを除

外しても泰虎との実力差が有り過ぎる。これでは修行自体が成り立たない。

ならば隊長以外で、卍解を習得しており、泰虎と余り掛け離れていない実力の持ち主で、且つ勤勉な者が望ましい。

其処で喜助が一通り候補として上げたのは二人。十一番隊第三席、斑目一角。六番隊副隊長、阿散井恋次。

だが前者は自身の卍解を徹底的に秘匿したがっている為、頭を下げた頼み込んだとしても絶対に首を縦に振らないだろう。

となれば残ったのは必然的に後者のみとなった。

考えてみれば恋次はそれ等の条件を十二分に満たしている。

人柄も問題無い。熱し易く荒っぽい性格では有るが、意外と気配りや機転が利き、さくで面倒見が良い事から同じ六番隊の隊士達から慕われている程だ。

人間如きが、といった差別志向も持ち合わせていないので、対等な立場で共に切磋琢磨してくれる筈だ。

しかも一護に似通った部分が有る恋次を相手にした方が、泰虎としても遣り易いだろう。

現世に訪れたばかりの時も、喜助に修行を依頼して断られたにも拘らず、彼が首を縦に振るまでその場に座り続けんとした忍耐力も称賛に値する。

そうと決まれば話は早い。喜助は得意の口八丁で恋次を丸め込むと、泰虎との修行に入らせた。

——ちやつかり雑用係も押し付けた上で。

「…の野郎ツ…タフなのも大概にしやがれ!!」

「ム…!!」

泰虎の放った霊圧のビームを躲すと、恋次は続け様に卍解を突進させた。

巨大な顎を開きながら、直進する蛇の骨。それは修行開始時よりも明らかに正確性が増しており、尚且つ疾い。

元々恋次は卍解を習得して間もない為、力加減や操作等、細かい制御の部分に難があった。

だがこの修行の中でその制御力が徐々に向上して行っており、彼自身もそれを自覚していた。

それは勿論対峙している泰虎も同じ事で、初めは何度か避けられた筈の攻撃が、今では受け止めるといふ手段しか取れなくなっている事に気付いていた。

「なっ!？」

押し負けると理解していながらも防御体勢を取った泰虎だったが、其処で予想外の事態が起こる。

右腕に集束していた筈の霊圧が突如として拡散したかと思うと、全身から力が抜け、そのまま膝を着いてしまったのだ。

想定外の出来事に、泰虎は驚愕に目を見開いた。

「っ、ヤベェ!!」

その姿に気付いた恋次は思わず焦燥の声を漏らし、放った攻撃を咄嗟に中断しようと右手を引いた。

——間に合わない。

熟練者であつたならばそれも可能だつただろう。だが現状に於いて卍解を完全に使いこなせているとは言い難い彼の技量では不可能だつた。

本人の思っている以上に消耗が激しかった事も拍車を掛けていたのだろう。

その顎は勢いを落とす事無く、対象を?み込まんと直進する。

泰虎はそれを呆然と眺める事しか出来無い。

——自分は一体、何をしているのだろう。

先程から何も成長せず、只々吹き飛ばされては地面や岩盤に叩き付けられているだけ。

これではまるで只の的だ。

終いにはこうして情けない姿を晒している。

自分の余りの弱さに、もはや怒りを通り越して呆れしか感じなかった。

「…なあ」

泰虎は右腕に視線を移しながら、語り掛ける。

だが肝心のそれは力無く垂れ下がるだけで、何の反応も示さない。

「今の俺には…何が足りないんだ…？」

不思議な感覚だった。こうしてゆつたりと話しているのにも拘らず、未だに恋次の卍解の顎はこの身に届いていない。

まるで時間が止まっているかの様だ。

だが泰虎はこれを好機として、更に言葉を繋ぐ。

「優しさか？ 覚悟か？ 仲間を思う気持ちか？ 護りたいと願う心か？」

右腕は答えない。

「…それとも…力への渴望か？」

破面という強大な敵を前にし、一撃で屠られた後、泰虎が感じた思い。

実を言えばそれは護りたいというより、この敵を打ち破る為の力を求める思いの方が強かった。

つい先程までもそうだった。防御や攻撃にのみ重点を置き、我武者羅に力を振るつて無駄に消耗し、危機に陥っている。

元々自分の動きが鈍い事は理解していた。だが攻撃の挙動や癖等を読み取る事が出来れば、一々受け止めずとも直撃は防げた筈だ。

自業自得。全く以て同情の余地も無い。

泰虎は自分を卑下した。

これでは一護の隣に立つどころの話では無い。何を思いあがっていたのだこの愚か者は、と。

次の瞬間——世界が一変した。

岩場ばかりであった勉強部屋の光景は、ゴミが散乱する薄汚れた街並みへと変化。

其処は嘗て幼少期の泰虎が住み、毎日暴力に明け暮れていた舞台である、メキシコを中心街の外れに在る、裏通りを抜けた先に在るストリート街に似ていた。

「——ヤストラ」

「……じいちゃん……!!」

突如として背中に投げ掛けられた声に振り向くと、其処には記憶の中に存在するままの姿をした祖父アブウエロが居た。

自分と同じ肌の色。皺だらけで草臥れた帽子。実際に吸つてる姿は余り見た事が無いが、常に口に唾えている葉巻。

気付けば祖父は何時の間にか泰虎の直ぐ眼前へと移動していた。

「…昔より大きく、そして美しく育ったな」

過去に経験した過酷な労働環境の中で鍛え上げられた、丸太を連想させる程に逞しい腕が持ち上げられる。

十歳児の頭のサイズは有る武骨で大きな手が、泰虎の頭の上に乗せられる。

泰虎は懐かしんだ。昔は見下ろされながら、時に祖父の方から視線を合わせてもらいながら、良くこうして頭を撫でられたものだ。

「…俺は——」

「…ヤストラ、俺は何時までもお前を見守っている。この右腕の中で、お前自身が大切な

者達を護れる事を願いながら」

祖父はふと泰虎の右腕に触れると、優しく語り掛けた。

子供の頃とは比較にならない程、大きく、逞しくなった腕を確かめる様にして、何度も握つては放してを繰り返す。

大凡三十秒後、祖父は満足したのか、その手を放した。

その場から一步下がり、今度は泰虎の顔を両手で包むと、自分と視線を合わせた。

祖父の目は帽子の影とは思えぬ程の漆黒の闇が覆っており、彼が一体どんな眼をしているのか、泰虎からは確認出来無かった。

やがて祖父は、フツ、と鼻を鳴らした。

それを不審に思う泰虎を余所に、踵を返す。

祖父は背中を向けたまま立ち去って行く。

「ま、待つてくれ!!」

泰虎は慌ててその後を追おうとした。

だが幾ら本気で駆けても、その距離は縮まる事無く広がり続けて行つた。

「じいちゃん!!」

「だが履き違えるな。あくまで儂の役目は護る事。道を切り開くのは他ならぬお前自身だという事を」

祖父は途中で振り返ると、静かに語り始める。

それと同時にこの世界の至る所に罅が入り始めており、崩壊の序章であると示していた。

「その為の力は、もう片方の腕に宿っている。努々、忘れるなよ…」

「…っ、じいちゃん!!!」

泰虎は必死な表情で右腕を伸ばす。

そんな彼に対して祖父が最後に見せたのは、マイナスイメージを全く感じさせない、ニヒルな笑みだった。

「またな、ヤストラ」

刹那、窓ガラスが割れる様にして世界が完全に崩壊し、泰虎の視界に映る光景が元の勉強部屋へと戻る。

そして眼前には変わらず迫り来る巨大な顎。その後方より必死に何かを叫んでいる恋次。離れでは斬魄刀を構えて割って入ろうと身構えている喜助。

だが不思議な事に、絶体絶命の危機に陥つていながら、泰虎は恐怖も何も感じていなかった。

有るのは只一つ——覚悟のみ。

全身から力が溢れ出ているのが判る。こんな感覚は初めてだった。

一部の糸が切れた人形の如く、力無く膝を着いていた体勢から、すつと立ち上がる。腰を低く落とすと、先程と同じく右腕を胸元より前に出して防御態勢を取る。

「うおおおおおおおッ!!!」

泰虎の放ったその雄叫びに呼応する様にして、右腕の鎧が変貌を遂げて行く。

盾の様に横広に広がると、只の白黒の線状だった紋様が骸骨の形を模り始める。

卍解の巨体が視界の邪魔をしている為に恋次は気が付いていないが、喜助はその変化

をしつかりと目撃していた。

——大丈夫だ、止められる。

全身より止めどなく湧き出て来る力に、自信を持ってそう断言する。

骨の牙が間近に迫った瞬間、泰虎は右足を一步前に踏み込んだ。

「んなっ!?!」

恋次の驚愕の声を漏らした。

何せ先程までは吹き飛ばされてばかりだった泰虎が、己の正解を受け止めたままその場へ踏み止まっていたのだから。

「——そうか、これが…」

右腕に掛かる凄まじいまでの重圧。

だが耐えられぬ程では無い。

踏み込んだ方とは逆の、後方で全身を支えていた左足に力を籠める。

地面を割り、捲れ上がらせながらも、自分の何十倍もの圧を徐々に押し返し始める。

気付けば泰虎の残る左腕は、その本来の姿から掛け離れた姿へと変貌を遂げていた。肩口より一部が大きく上部へ突き出た、白色の鎧。

右腕のそれとは全くの真逆のデザインで、無骨さを感じさせないシンプルな形状。

だが内包されている霊圧は、以前までの鎧とは比較するにも烏澁がましい程に大きかった。

「俺の…力…」

チリチリとした音を立てながら、左手の指先に霊子が集束されて行く。

別に他者から使い方を教わった訳では無い。にも拘わらず、この身体は全てを理解していた。

まるで卵から孵化して直ぐに、親が居らずとも自らが生きる為に必要な道筋を知る生物達のように。成長と共に二本足で立つ事を知る人間の赤子の様に。

霊子の集束を終えた拳を握ると、更に自身の霊圧をもそれに込める。

狙いは言うまでも無く、眼前の巨大な蛇の骨。

「<sup>ラ・ムエル</sup>魔人の一撃」

泰虎はそのまま左腕を振り抜いた。

それは寸分違わず鼻骨の部分へと命中すると、その巨体は破片を撒き散らしながら吹き飛ばされて行つた。

余りに想定外の出来事に硬直していたのか、あつさりと跳ね返されて来た卍解の巨体の下敷きになる恋次の姿を確認しながら、泰虎は意識を失つた。

高速回転するチャクラムが、不規則な軌道を描きながら冬獅郎へと迫る。

だが幼いとは言え、確固たる実力で隊長へ押し上がった彼に見切れぬ道理は無かつた。

冬獅郎は読んでいた。そのチャクラムは直撃まで残り一メートルまで近付いた瞬間、

狙いを正確に定めて直進してくるといふ法則が在ると。

「!!」

眼前へと迫つたそれを、右側へ一步踏み出すという必要最低限の動きで、擦り抜ける様にして躲す。

攻撃を見切られて完全に無防備な状態へと陥つたチルツチに対し、瞬歩で一氣に近づく。

ワイヤーは伸び切っている為、先程の様に刀身に巻き付ける等といった芸当は出来無い筈だ。

そう判断した冬獅郎は触れる者全てを凍らせる冷気を纏う刀身を、右上段より斜め左下段へと振り下ろす。

チルツチは未だ反応出来ておらず、刃先はそのまま彼女の左肩へと迫る。  
——討とつた。

今回は限定霊印も何も無い、真正正銘の全力の状態。  
完全に隙を突いた冬獅郎は勝利を確信する。

「なっ!?!」

「…ふーん、案外切れ味は大した事ないのね」

だがその想像は覆された。他ならぬ、柄を握る方とは逆の空いた左腕で容易に刃先を受け止めたチルツチによって。

だが完全にはいかなかったらしく、刃先の一ミリ程が鋼皮へ食い込み、僅かに出血している。

刀身に纏う冷気が、斬り付けた部位を中心に氷を張り始めるが、チルツチは眉一つ動かさない。

「…ちっ!!」

冬獅郎は迷わず刀身を引くと、直ぐ様瞬歩で後方へと距離を取った。

だがチルツチはそれを追う事はせず、氷に覆われた自身の左腕を持ち上げてまじまじと眺めたかと思うと、急激に力を込めてそれを砕く。

そのまま何度か左手を開閉させると、感覚的には特に問題無いと判断したのか、斬魄刀の柄を後方へと振ってワイヤーを引くと、再びチャクラムを手元に戻した。

——やはり卍解でなくては大したダメージは与えられない。

内心で齒噛みしながら、冬獅郎は今自分が対峙している敵を観察する。

通常の日本刀とは異なり、伸縮自在なワイヤーに謎の高速回転をするチャクラムを通した特異な斬魄刀。それから繰り出される不規則な軌道の攻撃は、此方の予測を尽くし上回る。

唯一の攻略法は、先程の様に攻撃を見切った直後に懐まで入り込んで近接戦闘を仕掛ける事だが、そう簡単には行かないらしい。

確かにワイヤーを伸ばし切った直後のチルツチは隙だらけだ。

だがそれは驚異的な反応速度と、破面特有の鋼皮という外皮によって阻まれた。

シャウロン・クーフアンと対峙した時とは異なり、既に限定は解除済みである。だがその真正正銘の全力の状態から斬撃を繰り出したにも拘わらず、結果は見ての通り浅い傷しか与えられていない。

しかも序盤で此方を容易に投げ飛ばしてきた事から、その華奢な見た目からは考えられない程の膂力すら持っている。

つまり現状で罅迫り合いへ持ち込むのは愚策。押し負ける事が目に見えている。

それ等の条件の中で冬獅郎が選択したのは一撃離脱戦法。別の言い方をすればヒツト・アンド・アウェイか。

現状では靈圧はほぼ互角。だが純粹なスペックで言えば此方が劣っている。

正解という奥の手が有るとは言え、それは帰刃という本来の姿を帰属させるという能力を持つ破面も同様。

今迄戦つた中でも特に手強い敵に、冬獅郎は破面という存在に対する警戒を強めると同時に、疑問を抱く。

シャウロンより聞いた内容では、十刃以外の数字持ちは生まれた順に数字が振られるらしい。

彼の数字はNo. 11。だがこのチルツチという破面はNo. 105と言った。

単純に計算すれば百以上の破面が藍染の陣営には存在していると推測出来るが、それは有り得ない。

喜助より齎された情報によると、確かに試験的に生み出されたりしき破面が存在しているそうだが、完全な人型である成体とは程遠い。

しかもそれ等は全て藍染の独自の手法による破面化であり、崩玉が睡眠状態である現状、そう易々で行えるとは思えないというのが、喜助の推測だ。

その情報を整理した冬獅郎は、ある一つの予測を立てた。この3ケタの数字は生まれ順では無く、十刃の様に何か別の肩書を表しているのではないかと。

「…てめえ、ただの数字持ちじゃねえな」  
「……………」

冬獅郎は切っ先を向けながら静かに語り始めた。

だがチルツチは此方を見据えたままチャクラムを振り回し続けるのみで、全く口を開く様子は無い。

「十刃じゃねえなら…破面の実動部隊か何かか…」

「……………」

「そうだとすれば、てめえのその実力にも得心が行く。前に現世（こご）に來た数字持ちの奴等とは別格だしな…どうなんだ？」

「…で？あたしの数字の意味が解つたとして、あんた達になんの得があるわけ？」

至極面倒そうな表情を浮かべたチルツチより返された投げ遣りな問い掛け。

冬獅郎は実質不利であるこの戦況を理解しながらも、それをひた隠しにしつつ、不敵な笑みを返す。

離れて自分達の戦いを眺めている、長身で眼帯を付けた男と、王冠の様な仮面の名残

を頭部に被った少年。この未だ参戦していない二名の破面を警戒しながら。

「いや、十刃じゃねえなら特に問題ねえなと思ったただけだ」

「ふーん…そう」

言外に十刃でも無いお前になら勝てると語る冬獅郎に対し、チルツチは静かに怒りを滾らせた。

抑えていた霊圧を高める。未解放の状態で出せる限界までの量を。

その変化に対し、対応を誤ったかと焦った冬獅郎は最大まで警戒心を上げて身構える。

「一つ、良い事を教えて上げるわ」

「…何？」

両脚に霊圧を籠めながら、チルツチは突如として口を開いた。

冬獅郎はやや眉を顰めながら、そう問い返す。

「数字の意味は省くけど…簡単に言えばあたしは十刃の従属官——部下の一人よ」  
「っ!？」

「だけどそれはあの女男じゃない。つまり…」

その言葉に冬獅郎が驚愕に目を見開いた次の瞬間、彼の視界には加虐的な笑みを浮かべるチルツチの顔が映っていた。

「ここには十刃がもう一人、他にも来てるって事なのよッ!!」

意図的に作り出された死角より放たれたハイキックが、冬獅郎の右側頭部へと襲い掛かった。

咄嗟に斬魄刀の平地で防御したは良いが、蹴撃の威力に押し負けて盛大に吹き飛んでいく冬獅郎。

その光景を遠目で眺めながら、ノイトラは呟く。

「…やっぱり御約束だよな…この展開」

この世界の猛者達は総じて話し好きだというのが、彼の抱いた印象だ。

それは戦闘中でも例外では無い。一応駆け引きの一種でもあるのだろうが、それにしても過ぎる。

藍染の様に相手を挑発して感情を揺さぶり、精神的動揺やミスを誘導するのなら未だ理解出来る。

だが一々自分の立場や能力を丁寧に説明するとは、一体何を考えているのか甚だ疑問だ。

完全に相手が虫の息で、且つ抵抗する術も一切無い状態であれば、勝者の余裕といった形でそうなるのも致し方無い。

ノイトラは軽く想像してみた。

追い詰められたところで自身の力を解放し、驚愕する敵にしたり顔で語り始める者の姿を。

そしてその説明の中で弱点を悟らせるヒントを出してしまい、瞬く間に対策されてしまう展開を。

——私の力は音を操って相手の聴覚に干渉する。

——じゃあ鼓膜を潰せば問題無いな。

——なん…だと…。

想像していて何だが、ノイトラは全く以て馬鹿馬鹿しくなった。これではもはやギャグ漫画ではないかと。

流星にこんな馬鹿な真似をする者は居ないだろうと、其処で思考を打ち切った。

通常の戦闘時であっても、戦闘と会話の割合は大凡五分に等しい。

先頭開始と同時に何度か打ち合い、何故か途中で会話を挟んで中断。ふとした拍子に再び戦闘を開始、そしてまた会話といったパターンが多い。

しかもその中には相手の発言や変化に驚き、その隙を突かれるといった展開も何度か有る。

憑依してからの期間を考えれば、ノイトラは未だ戦闘者としては素人と言っても良い。だがそんな彼を以てしても、この展開を現実で見た瞬間突っ込まざるを得なかつ

た。

——まあ、読者サービスの一種なのだろう。

内心ではそう納得しつつ、ノイトラは右手でワンダーワイスの頭を撫で続ける。

「漢わんじだったなら、黙して戦え…つてな」

「…アウー？」

飴玉が完全に溶け切ったらしいワンダーワイスが、物欲しそうな目でノイトラを見上げる。

ノイトラはすかさず左手に準備して置いた飴玉——今度は青りんご味を包み紙から取り出すと、今度は優しく口に入れて遣る。

するとワンダーワイスは今度も口の中で飴玉と格闘し始めた。

彼のその微笑ましい姿に思わず表情を緩めそうになりつつも、ノイトラはその様子を見守り続ける。

「そいつぁ同感だぜ」

「…ハア…」

だがその癒しの時間も終わりを告げる。

先程から探查神経で周囲を警戒していたので、一応予測してはいた為、特に驚きは無い。

どうせこの後はルピが全ての死神を相手取る事となるだろうし、上手く行けば自分は戦わずに済むだろう——という淡い希望は持っていたが。

ノイトラは溜息を吐くと、ゆっくりと振り向いた。

其処には拔身の斬魄刀を右肩に担ぎ、下げた左手に鞘を持った坊主頭の男が居た。

男——斑目一角はノイトラが自分の方を向くや否や、好戦的な笑みを更に深め、己の命すらチップにする戦闘狂らしい表情を浮かべた。

「更木隊第三席、斑目一角だ。いっちょ殺し合あわせい願うぜ、破面」

「……………」

見れば先程まで一角の立つ場所に居た筈の乱菊は、既にルピと弓親が対峙している場所へと移動している。

何やら二人はルピをそっちのけで言い争っている。

恐らく十一番隊の矜持を持つ弓親が、圧倒的に劣勢にも拘らず一対一で戦わせろと訴え、それを乱菊が咎めるか何かしているのだろう。

至極面倒そうに後頭部を搔き毟りながら、ノイトラは一角に問い掛ける。

「オマエ…エドラドを斃した奴か」

「ん？ ああ、あいつは強かったぜ。けどな——」

そう答えながら、一角は腰を落とす。そのまま斬魄刀を正眼よりやや高い位置まで移動し、鞘を後方へと引き絞った独自の構えを取り、ノイトラを観察する。

その身から溢れ出す霊圧は少ないが、その場に存在しているだけで思わず反射的に退いてしまいそうになる程の威圧感。全く隙の無い佇まいに、先程からけたたましく警報を鳴らし続ける勘。

それ等の条件から、一角は断言した。以前対峙して打倒したエドラド・リオネスが赤子に見える程に強大な敵だと。

真面に戦えば万が一にも勝ち目は無いだろう。それは理解している。

だが己の命をチップに賭けに出し——それこそ一パーセントでも可能性が生まれれば十分だった。

「てめーの方が、もつと強え。それぐらいは理解出来るぜ」  
 「そうか…」

一角としては一番響いたのはノイトラの先程の呟きだ。それが戦闘欲求に火を着けた。

まさか破面の中に漢の在り方を説く者が居るのは良い意味で予想外だった。

こういった連中は総じて戦闘狂か、鬼道の様な搦め手無しの正々堂々とした立ち合いを好む傾向が強い。

正しく一角にとつての理想の敵。実力的にも不足どころか御釣が来て余り有る。

「だからさっさと名乗れよ。同じ長物同士、楽しく戦ろうや!!」  
 なあ // 鬼灯丸 // !!

直後、一角は左手に握った鞘の鯉口目掛けて頭金をぶつけ、斬魄刀の名を叫ぶ。

柄と鞘が溶け合う様にして繋がる、その姿が穂先が片刃の短刀となった槍——菊池槍へと変化する。

本来、名を叫ぶ前に解号が必要となる始解だが、一角の様に卍解を習得した死神の場

合はその限りでは無い。

終いには名を呼ばずとも始解が出来るのだ。流石に卅解までは不可能だが、解放までのタイムラグが無いのは戦闘に於ける結構なアドバンテージになる。

例えば未解放の斬魄刀で斬り合っている最中、無拍子の間に始解して相手の不意を討つ等。柔軟な考えを持つ者であればもつと有効な手段を思い付けるだろう。

——残念ながら余りそれを生かした戦法を見せる死神は居ないが。

「……………」

一角の要求に対し、ノイトラは名乗るどころか一向に口を開こうとしない。

否、正確には別の事を考えているだけだ。

取り敢えず一角と接触した時点で戦闘回避は不可能となった。それは理解出来る。

だが余り心配する事は無い。ルピが痺れを切らすまで適当に時間を潰せば、後は何かする必要も無くなるのだから。

それに例え此処で一角を撃破したとしても、殺しさえしなければ今後の流れに余り支障は無い。

何と言つても、ルピは弱い相手をギリギリまで追い詰める事を好む。本来より少ない

人数を相手取る事になつても、ヤミーの様に易々と殺しに掛かる真似はしないだろう。寧ろ自分が有利なのを良い事に、嬉々として相手の事を馬鹿にした台詞を語り始める筈だ。

前回の任務の様に、展開に多少の時間のズレが発生しても、途中で会話を挟むなりして調整出来る。

それよりもノイトラが気にしているのは、この後援軍としてやって来るであろう喜助の事のみだった。

単独行動を取っているグリムジョーを除けば、喜助と真面に戦える者はほぼ居ない。行動を先読みして策を回避する頭脳や、例え嵌ったとしてゴリ押しで対処出来るスペックも無い。

唯一可能性が有るのはワンダーワイズだが、彼は山本総隊長に対する切り札と言える存在だ。力を解放するのは然るべき時だけだと、藍染に仕込まれている可能性が高い。当てにする訳にはいかない。

だとすれば適任はこの四人の中で最も強いであろうノイトラに限定される。

帰刃を封印している彼の身としては、攻撃手段も限定される為、非常に苦しい戦いとなるだろう。

最悪は帰刃以外の大半の手の内を晒す覚悟もしているが、恐らく杞憂に終わる筈だ。

何せ交戦状態へと移行する頃には既にウルキオラの任務が完了する寸前。

後は戦闘狂のスイツチが入りでもしない限り、特に問題は無い。

だが油断は禁物だ。戦闘のみならず、此方が少しでも不自然な仕草を見せれば、喜助は間違い無く思考を巡らせ始める。

万が一にも早い段階で織姫誘拐の件を悟られれば対処されかねない。

元より彼女の能力の事を案じて戦場より遠ざける様に仕向けた喜助だ。こんな事も有ろうかと——と謎の発明品を取り出し、此方の想像も付かない事を遣らかす可能性だつて有る。警戒するに越した事は無い。

本来喜助を相手取る筈のヤミーが不在である現状、このままノイトラが何の行動も取らなければ済し崩し的にチルツチが代役を務める羽目となる。

彼女の實力を軽く見積もると、未解放状態のヤミーやアールロニーロと同等。

だが相手はヤミーを赤子の様に捻つて見せる程の手練れ。チルツチは決して脳筋な訳では無いが、流石に分が悪い事には変わりはない。

「なに黙つてやがる。まさか今から死ぬ奴には名乗る必要は無えとでも——」

「別にそういうワケじゃねえよ。…そら、取り敢えずオマエは離れてな」

「アウー…?」

眉を聳める一角が何を言いたいのか理解していたノイトラは、台詞を遮る形で否定する。

一先ず今は先の事を考えるより、この場を乗り切る事が先決か。

そう結論付けると、ワンダーワイズを抱えて響転でその場を移動。

確実に戦闘に巻き込まれないであろう離れへと避難させると、元の位置に戻って一角と向き合う。

「…ノイトラ・ジルガだ。階級は言わねえ」

「なんだと？ やっぱてめーは——」

「だから違えよ」

舐められていると感じたのか、その声には怒気が含まれている。

だが組織に属する者として、自分の名は明かしても立場までは無必要無いと考えるノイトラは、これ以上説明する気は一切無かった。

「知りたけりや…テメエの槍で聞き出してみろってこつた」

「…上等だコラア!!!」

幸いにも数字が刻まれているのは舌の奥側。

普通に口を開く程度では読み取る事は叶わない。

ノイトラが最後に放ったセリフが引き金となったのか、一角は蟀谷に血管を浮き上がらせながら飛び掛かった。

## 第二十一話 主人公と仮面と、三日月の無双と：

突如としてこの空座町に現れた破面達の靈圧。それを感じ取った一護は居ても立つてもいられず、直ぐ様現場に向かおうと動き出した。

だがそれはつい先程まで虚化の修行をつけてくれていた仮面の軍勢のメンバーに止められる。

左腕を掴んでいるのは、銀色の短髪で筋肉質の目つきが悪いタンクトップを着た男――

――元九番隊隊長、六車むくるま拳西けんせい。

反対側の右腕を押さえ込んでいるのは、約百九十センチの長身でサングラスを掛けたアフロヘアアの男――元七番隊隊長、愛川あいかわ羅武らぶ。

「放せっ!!!」

元隊長だけあって、その靈力はかなりのもの。

それも二人掛かりで押さえられているとあっては、流星の一護も身動き一つ取れない。

修行の影響で消耗している事も相俟って、声を上げて反抗するしか出来無かった。

「てめえ聞こえてねえのか!? まだムリだつたつてんだろ!!」

額に青筋を立てながら、拳西は強い口調で一護を窘める。

元々短気な彼の事だ。これ以上一護が抵抗する様であれば、容赦無く拳を飛ばすだろう。

「こういう時の為に尸魂界から仲間が来て張ってんだろ!! そつちに任せとけつて!!」

羅武はそんな拳西とは正反対に、その声には怒りも何も無く、聞き分けの無い子供に言い聞かせている様に感じられる。

隊長時代から面倒見が良い彼は、こういった事に慣れているのだろう。

拘束から逃れようともがき続ける一護に粘り強く声を掛けながら、その背中を優しくトントンと叩き、感情を落ち着かせようとしていた。

「…いやあ、流星は一護くん。この一直線な感じはホントに若々しいなあ」

「アホか。ただの考え無しの間違いやろ」

困ったような、それで且つ微笑ましい視線を一護に向けているのは、ウェーブの掛かった長い金髪の伊達男——元三番隊隊長、おむりほし鳳橋 ろうじゅうろう楼十郎。

それを真つ向否定したのは、金髪のツイントールで八重歯とそばかすが特徴的な少女——元十二番隊副隊長、ざるがき猿柿 ひよ里。

この一護の虚化習得の修行で一番彼の相手をしている時間が長い彼女。ソツポを向きながらも、その視線はチラチラと一護の様子を忙しく窺っている事から、厳しい口調とは裏腹に心配しているのが丸判りだ。

何処から如何見ても完全にツンデレである。それを見抜いたのか、直ぐ近くの仲間からツツコみが入った。

「ほんならチラ見すんの止めーや。幼女のツンデレとか誰得やねん」

後ろ髪を三つ編みにした、セーラー服と眼鏡にお下げといった、正しく高校の風紀委員を務めてなそうな真面目な雰囲気を持つ女性——元八番隊副隊長、やしうまる矢胴丸 リサ。

彼女は如何わしいポーズを取った全裸の女性が表紙の本——所謂エロ本を熱心に

読みつつ、ひよ里に対して平坦な声でツッコんだ。

「なんやとコラア!! もいっぺん言ってみいリサ!! 誰が誰を心配しとるってエ!!?」

「誰もそこまで言<sup>ゆ</sup>ーとらへんわ。ほれ見い、やっぱツンデレやん」

「う…ぎ…」

即座に反論したひよ里だったが、指摘された内容が凶星だった分、リサの最後の言葉に思わず口を閉じた。

というかその反論の内容からしてみれば、只の自爆でしか無かったのだが。

「ねーねー、はっちゃん。いま来てる敵って、ベリたんが行ってもダイジョーブな感じなの?」

「…正直言つて、難しいデスね。感じ取れるだけでも、来訪した五人全てが十刃レベル。多少実力差がバラバラな部分は有りマスがね」

地面に寝転がりながらそう問うのは、全身を白色のライダースーツで身を包み、頭にゴーグルを被った緑髪の少女——元九番隊副隊長、久南くな白ましろ。

結構緊迫した状況下では有るのだが、彼女の表情からは緊張感は全く無い。

とうか元々子供供っぽく奔放でマイペースな性格の為、今迄一度もそういった態度を取った事も無く、その度に隊長である拳西がキレていたという過去を持つ。

白の問いに対し、顎に手を当てながら考え込む体勢を取っているのは、この場に於いて最も大柄で寸銅な体系を持つ、桃色の髪をした坊主頭の男——元鬼道衆副鬼道長、うしやうだ はちげん有昭田 鉢玄。

多少訛りが入った丁寧な口調で質問に答える彼の表情は思いの外険しい。

仮面の軍勢の頭脳とも言える鉢玄の事だ。他にも色々と思考を巡らせているのだらうと、意外にも真面な事を考えつつ、白は視線を一護へと戻す。

ちなみに彼女は仲間に対して独自の愛称を付ける癖が有る。

基本的に名前の後に“ん”を付ける。鉢玄は“はっちゃん”、ひよ里は“ひよりん”、羅武については“ラブっち”、拳西とは付き合いが長い影響か、呼び捨てである。

そして“ベリたん”というのは一護の事だ。これはまた妙なネーミングセンスから来ており、一護を母と変換した後、更に英語のストロベリーへと。その最後の部分であるベリを取って——完成だ。

全く以て常識に囚われない幻想的で自由な発想力である。

「冗談言うな!! こっちだつてこういう時の為に修行してんだ!!」

「だからつてオメー…そんなナリでどうする気だ。慣れねえ力使つて相当疲れてんだろ。下手すりゃ死ぬぞ?」

羅武の言う事は尤もだ。この修行は死神が行う様な普通の鍛錬とは異なる。

何せ死神とは性質が真逆の虚の力を扱うのだ。扱いの困難さも、霊圧の他にも精神的な消耗は段違いだ。

多めに見積もつても、今の一護が卍解した状態で全力で戦えるのは三十分にも満たない。

虚化については、保持時間は未だに十秒からその付近を行つたり来たりで中々延びていない。しかもその後は鉢玄の回復術が無ければ真面に動けなくなる程。

「そんなのは関係ねえ!! 今行かねえでどうすんだよ!!」

「この馬鹿が…いい加減に——っ!!」

予想通りと言うべきか、拳西は遂に堪忍袋の緒が切れた。

否、彼にしては意外に長く持つたと言うべきなのかもしれない。

不良が良く見せるテンプレ通りな怒りの形相を浮かべると、一護の腕を拘束しているのとは逆の空いた左手を握り、その拳を彼の横つ面に叩き込まんと構える。

それに気付いた羅武は焦り始め、慌てて拳西の暴拳を止めようとするが——それよりも早くその左腕を後ろから掴んで止めた者が居た。

「真子……」

「……行かしたれ」

オカツパ頭の男——元五番隊隊長で当時副隊長であつた藍染の上官、平子ひらこ 真子しんじは、徐に拳西に続いて羅武へと視線を移した。

普段は常に眠そうな眼をしている彼だが、今は違った。半目なのは変わらないが、其処から判る程に鋭い有無を上せぬ眼光に、拳西と羅武は思わず拘束の手を緩めた。

その隙に一護は一気に抜け出すと、外へと続く階段を駆け出した。

「おい!! 何考えてんだよ!! あいつ行っちゃまったじゃねえか!!」

「……………」

拳西から抗議の声が上がるが、真子は無表情のまま一護の後姿を眺めているだけだ。他の仮面の軍勢のメンバーからも抗議の視線が向けられるが、全く気にしていない。やがて拳西は何を言っても無駄だと判断したのか、不機嫌さを隠さぬまま、その場に座り込んだ。

真子は静かに一護の事を考える。

彼を仲間に引き入れようと思ったのは打算と同族意識が半々だ。

前者はやがて訪れるであろう藍染との戦いの為の戦力——切り札として。

後者は自分達も内なる虚の存在に悩み苦しんだ辛さが理解出来る為。

そしてそれ等とは別にもう一つ、一護の潜在能力の大きさ故に、放置していれば周囲に無差別な破壊を齎す可能性が高いという危機感からだ。

だが一護の虚化習得は思った以上に困難だった。

何よりネックなのは保持時間の短さだ。仮面の軍勢は少なくとも平均一時間以上は余裕で虚化を保持出来る。それと比較すれば余りにも短過ぎた。

だが真子達にはそれでも尚一護に頼らざるを得ない理由が在った。

それは彼等の虚化には、卍解状態では使えないという重大な欠点が存在していたからだ。

始解は問題無い。だが理由は不明だが、何故か卍解状態でそれを成そうとすれば、一

気に仮面が拡散してしまうのだ。

その欠点は真子達が虚化を習得する際に発見されており、その時の喜助の考察によれば、それは斬魄刀との同調が足りないのでは、というのが一番の要因では無いかという。制御も無し暴走状態で虚化した場合はその限りでは無さそうだが、それは本人の意志が皆無だったからに他ならない。

基本的に斬魄刀の意志の強さは担い手に左右される。つまり真子達が明確な意思を持ったまま虚化したとすれば、同等の意志を持つ斬魄刀にもその虚の力を流し込まなければならぬという事。

死神とは正反対の虚の力だ。長きに亘る虚化の修行の中で、真子達は何度も刃禪を行って対話を重ねた結果、実を言えば始解状態にそれと同調するだけでも拒否したいと、彼等の斬魄刀は揃って訴えたのだ。

一応それは只の我儘から来た意見では無い。それは虚化によって斬魄刀の意志が塗り潰されてしまい、本来の力が発揮されなくなってしまう可能性が高いからだと言う。

真の姿を晒すという意味合いでも有る卍解状態で虚化すれば、更にその危険性が跳ね上がる。その事実が判明した際、真子達も流石にそれはリスクが高過ぎるとして諦めた。

そんな中、一護は事も無しに卍解状態で虚化して見せた。

仮面の軍勢は驚愕すると同時に、この先に待ち構えている絶望的な戦いの中に希望を見出した。

理由は不明だが、正規の形で死神化した訳では無いその背景から、力の在り様が何処か自分達とは違うのだろうと納得して置いた。

そして修行を重ねて行く内、真子は一護の抱える危うさにも気が付いた。

一応話は聞いている。以前二度有った破面達による現世侵攻。その際に傷付いた一護の仲間達。

恐らく彼はこれ以上同じ事が起きるのを防ぎたいのだろう。故に初めは戸惑っていたこの修行も、態と危険な状況まで虚化を保持しようとするという無茶を何度も遣らかしている。

「真子、オメーまさか…」

「そうや…オレが出る」

当然、それを放置しておく心算は毛頭無い。

ああいった存在はふとした切欠で急成長する可能性も有るが、その反面、一気にマイナス方向へと堕ちてしまう可能性も孕んでいる。

唾然とした表情を浮かべる羅武の間にそう答えながら、真子は自身の斬魄刀を握ると、ゆったりとした足取りで一護の後を追い始めた。

槍の穂先が眉間を貫かんと一直線に迫る。

だが予め軌道を見切っていたノイトラは顔を右に傾ける事で難無く躲した。

それを想定していたのか、一角は直ぐ様槍を引くと、間髪入れずに次の刺突を繰り出す。

今度の狙いは心臓。的も大きく、多少外れたとしても胴体に確実に命中させられる点から、その狙いは悪く無いと言える。

だが相手が悪かった。

響転を多用する高機動戦闘を得意とし、一度間合いを詰めればほんの数秒の間に百を

超える拳撃を繰り出すガンテンバイン。

長いリーチと速度、そして斬魄刀と相違無い切れ味を生かした蹴撃を、ありとあらゆる角度から付け入る隙無く捻じ込んでくるドルドーニ。

一角が対峙しているのは、この二人に加えて数人の仲間達と共に数え切れぬ程の鍛錬を重ね、貪欲なまでに技術を学び取り、自分自身でも練磨を欠かさなかつた男だ。

如何に自身の命を失う事に何の躊躇いも持たずに特攻しようが、相手の意表を突く型破りな戦法を取ろうが結果は同じ。

実力的には中の上とは言え、一介の数字持ちであるエドラドに接戦の末に勝利した一角では、例え憑依という事象が起こっていない本来のノイトラを相手取ったとしても、傷一つ負わせる事も叶わずに敗北するだろう。

「……………」

真面に直撃したとしても、その刃は確実に鋼皮に阻まれて止まる。ならば躲す必要性は皆無と言えた。

だがノイトラは前回の任務時と同様、敢えて自分を縛るといふ別の選択肢を選んだ。

しかも今回は得物を所持している分、動きが相当阻害されている状態である。夜一や

喜助を相手取るより遙かに楽な状況とは言え、幾分か不利な事に変わりは無い。

だがノイトラは全く臆さない。寧ろ新しい経験を積める事で気分は上々だ。

常に自らを高める事を考え、余裕があれば態と苦行を課す鍛錬馬鹿の悪い癖である。

ノイトラは穂先が触れる瞬間を見極め、その直前に身体の軸を左回転させると、胸部で受け流すかの様にして後方へと逸らす。

攻撃を躲すのに、余計な力や動作は不要。

風に靡く柳の如く軽やかに、そして複数の動作を全て一つに繋げ、機械の様にカクカクとした動きの切り替えをゼロに。

想定外の躲され方をした一角は驚愕に目を見開いた。

だがそれは一瞬の間のみで、気付けばその口元は吊り上がっていた。

「まだ終わりじゃねえぞオツ!!」

先程から此方の攻撃は尽く通用していない。にも拘らず、一角は戦意を喪失するどころか更に燃え滾らせた。

凜猛な笑みをそのままに更に前方へと踏み込むと、先程の様な一発一発に必殺の意が込められたものから一転、只管手数に重点を置いた乱れ突きを放つ。

命中率を重視し、確実にダメージを蓄積させた上で最後に止めを刺すガンテンバインの拳撃の連打とは真逆。一撃一撃の殆どは無差別だが、時折急所である喉や動きの要とも言える脚部を突かんと狙ったものが上手く混ぜ込まれたそれは、中々に侮れない。

ノイトラは紙一重で躲し続けながら、その中で更に自身の体捌きの無駄を見付けては修正してゆく。

エドラドの考察の通り、その槍捌きは荒々しい。型らしき名残は見て取れるが、正式に教えを得たものでは無い。

恐らくこれは一角の独学。幾多の戦いの中で、有効と思わしき型や技を相手から技術を盗み取り、自身の戦法へと組み込んだのだろう。

——これはこれで新鮮な感じだ。

技術は十分だが、速度や威力は全く足りない。

今迄戦った者の中には居ない初めてのタイプだ。ノイトラは段々と気分が高揚していくのを感じていた。

「さつきから避けてばかりじゃねえか！ その背中の得物は飾りかよ!!」

「…ハア」

——この戦闘狂め。

溜息を吐くと同時に内心で吐き捨てる。そう言う当人として、余り人の事は言えないにも拘らずだ。

だがその表情には厄介者を見る様な不快感は全く浮かべられておらず、寧ろ楽しげだ。

ノイトラは軽く響転で後方へと距離を取る。とは言つても、槍が届かないであろうギリギリの距離を見計らつてだが。

その挙動を捉えきれなかつた一角は、自身の攻撃が空振つた時に初めてそれに気付いた様で、はつとした表情でノイトラを見遣つた。

此方の鬼灯丸の動きを完全に見切る驚異的な動体視力に、無駄の無い軽やかな体捌き。それに加えて響転という自分達の瞬歩と同列の歩法を無拍子に発動してみせる技能に、一角は思わず息を呑んだ。

だが怯んだ様子は一切無い。寧ろ敵が想定よりもずっと手強いのだと悟るや否や、より戦意を向上させた。

鬼灯丸を握り直し、軽く二・三回振り回すと、再び腰を低く降ろして構える。

力の差を見せ付けても尚、激しく闘志を燃やす一角の様子に内心で苦笑いしながら、ノイトラは右肩甲骨から斜め上に伸びる自身の得物の柄を指で弾き、カンカンと乾いた

音を鳴らす。

それが何の意味を持つのか、戦闘に関しては頗る察しの良い一角は直ぐ様理解した。

「…抜かせてみる、つてか？」

「……………」

その問いに対する返答は無言の肯定。

ノイトラは一角より格上なのは確かだ。だがこの行動には流石の一角も戦意より怒りが勝ったのか、その顔から表情が消える。

「——後悔すんなよ!!!」

一角は先程より殺意の籠った眼光を鋭く光らせると、瞬歩で一氣に間合いを詰めに掛かった。

ノイトラは思わず、へえ、と声を漏らし、意外な面を見たといった様子で感心した。

一角は主に超接近戦を好む為、てつきりこの程度の距離ならば只の踏み込みで対処してくると思っていたからだ。

戦法の中に瞬歩を組み込むのは基本的に隊長格だ。それは彼等が十や二十程度の連用では全く疲弊しないポテンシャルを持つが故でも有る。

第五以上の上位席官レベルとなれば普通に瞬歩を習得している。だが使いこなせているか如何かはまた別な話で、技量が足りない分消耗も激しい。

一角は十一番隊第三席に昇格して以降、その立ち位置を一切変えぬまま長い年月を過ごしている結構な古株だ。

その実力は限り無く副隊長に近い。今では卍解も習得しているので、下手すればそれ以上だ。

以前は十一番隊に所属していた恋次も、現在は立場が上にも拘らず敬語を使用している事から、少なくとも同等以上に認識されているのは明白。

彼が新人であった頃、良く戦い方を教えてくれた恩師でも在った分、尊敬の念も有るのだろうが。

そして他ならぬ一角自身も他の副隊長に対しては対等の口調で話しており、周囲もそれに納得している。

明らかに年下だが、隊長である冬獅郎には敬語で接しており、その辺の区切りはしっかりしていた。

「ハッ!!」

その距離は槍等の長物を振るうには近過ぎた。

ノイトラが不審に思ったのも束の間、一角は左手で穂先の根本を握り、右手を柄の後方へと添える。

今度は穂先とは真逆の石突いしつきの部分、棒立ちのノイトラの腹部目掛けて突き出した。直撃すれば衝撃は大きい。だが明らかに殺傷能力は劣る事から、これは何らかの布石であると予測出来る。

だがノイトラに読めたのは其処までだった。多少試行錯誤しながら努力していると、言え、専ら霊圧と霊圧のぶつかり合いや技同士の競い合いに等しいものが主で、幾多の戦場を駆け抜けた一角の様な戦上手との戦闘経験が少ない彼にそれ以上を求めるとは酷だろう。

——突いた衝撃でよろめいた所に追撃でも仕掛ける気か。

そう考え、序盤と同じく身体を左回転させて躲さんとするが、直後に気付いた。

「!!」

この刺突には速度の割には力が全く込められていない。明らかかなフェイクだと。だがその時は既に罠へと嵌った後。

ノイトラは己の迂闊さに内心で毒づいた瞬間、眼前の一角の口元は吊り上っていた。

「甘え!!」

石突を瞬時に引き戻すと、そのまま逆手にした左手へと持ち替え、豪快に斜め右上に振り抜く。

瞬く間に行われたこの動作の切り替え。実に器用で柔軟性に富んでいる。

エドラドとの戦いの中でも見せたが、左右どちらの手でも得物を扱える一角ならではの芸当とも言えるだろう。

今度は力も十分であり、加えて遠心力による勢いも上乘せされていた。

だが余りに愚直過ぎる。どうぞ受け止めて下さいと言わんばかりの大振りだ。

しかも間合いは殆ど変わっておらず、このままでは柄の根本に当たる部分が、真横を向いたノイトラの後頭部へと直撃する事となる。

相手の術中に嵌ったノイトラは焦燥に駆られた。

流石に絶体絶命の危機的状况に瀕したものは無い。言うなれば連鎖ゲームの中で

不意に凡ミスをしてしまった様なものだ。

その結果、咄嗟の思考からの行動よりも本能の方が勝つたらしい。

見ればノイトラは反射的に右手の甲にてその柄を受け止めていた。動き様によつては背中中の得物の柄が勝手に防御してくれる形になったにも拘らずだ。

「だから甘えつつつてんだろが!! 裂ける鬼灯丸!!!」

一角が叫んだ瞬間、槍に変化が現れる。

ノイトラの受け止めている柄の一部が別れたのだ。見ればその裂け目には鎖が有り、前後の柄同士と繋がっている。

振り抜いた勢いが残っているのか、その柄の先の部分は更に右側へと折れ曲がった。だが変形は其処で終わらない。

柄が左頬へと当たる直前、更に裂けて二分する。

——— あるいは三節棍だったな、コレ。

あの切り替えの際、本来であればもつと威力が増すであろう右手で振るわなかったのはこの為かとノイトラは納得する。

こうして槍を限界まで前方に突き出し、柄の根本で叩き付ける様に振るう事で、第一

関節に当たる部分が裂けた際、相手の正面まで穂先が回り込む様にしたのだ。

だが如何に罠に嵌ったとしても、実はそれ程緊迫した状況では無いのだと思ひ返したノイトラは、冷静に自身の頭部へと迫る穂先を眺めていた。

三節棍という武器は連結棍棒というカテゴリーに入り、変幻自在な分、担い手には相当な技量が求められる。

特に先端部分は制御が困難で、下手すれば自爆の危険性も高い。

鬼灯丸は元が槍な分、使用難易度は一般的なヌンチャクよりも更に上だ。

それを使いこなす一角は、近接戦闘の技術に於いては隊長レベルに匹敵していた。

にも拘らず彼が三席の地位に長年居座っているのは、霊圧の伸びが少なく、鬼道が不得意———というか使う気が無いのも有るが、本人の意志による部分が大きい。

自らが所属している十一番隊の隊長の強さ、そしてその一切揺らがぬ突き抜けた在り方に心酔し、彼の所で戦って死ぬ。それこそが一角の望みだった。

隊長へと就任する条件の一つである卍解を習得した現在でも、それは変わらない。

ノイトラとて別の形ではあるが、一角と同じく信念を持って行動している。

同じ男として、その信念は良く理解出来るし、尊敬に値する。

出来れば一角とはこの様に敵として刃を交えるのでは無く、共に盃を交わしたいというのが、ノイトラの偽らざる思いだった。

——そろそろ終わりにするか。

既にこの戦いに意味は無い。見るべきものは見れたし、良い経験も積めた。技術的には真似出来る領域では無いが、同等の戦法を取る相手への対処法は大体把握した。

故にノイトラはこの戦いに終止符を下ろす事に決めた。

内心で一角に謝罪しつつ、驚異的な反応速度で左手を持ち上げ、目先まで迫っていた穂先を驚掴みにして止める。

「なっ…!!」

完全に仕留めたと思っていたのだろう。一角は驚愕の余り声を漏らしていた。

「…中々に肝が冷えたぜ」

ノイトラは硬直している一角にそう語り掛けると、穂先より左手を放し、無拍子に懐へと潜り込む。

肩甲骨の周囲、胸部や脇腹部、肩部から脱力する。

体幹を固めることなく、体幹の揺らぎの波を、腕に伝えられる状態へと持つて行くと、両手の拳を握り締めた。

一角は背筋に言い様も無い程の悪寒を感じた。

——これは拙い。

今度は勘に頼らずとも予測出来た。この攻撃を食らった終わると。

咄嗟に瞬歩で後方へ退却せんと試みる。

だが槍を振り抜いた体勢から脱却していない状態では、それも叶わなかった。

「コイツは、その礼だ」

「……う……グオツ……!!」

気付けば鳩尾には右拳が突き刺さっていた。

それが引き抜かれると同時に、今度は左拳が脇腹へと捻じ込まれる。

一角は肺の空気と一緒に血を吐き出し、身体をぐらつかせた。

ベインテ  
トレインダ  
クアレンダ  
「20、30、40——」

「……ッ!! ……ガフツ……!!」

だがそれだけでは終わらない。次の瞬間、視認不可能な速度で、無数の拳撃の嵐が叩き込まれた。

ガンテンバインからの御厚意から伝授された——百拳。シエント相手の攻撃の隙に響転にて接近し、九十九発にも及ぶ拳撃の連打を加え、トドメの百発目で地面へと叩き付ける技だ。

拳が直撃する度、一角は声にならぬ呻き声を上げるばかりで、何の抵抗も出来無い。

「90——ノベント——終わりだ」

ノイトラは九十九発目に放った右拳を引き抜くと、最後に大きく左拳を引き絞る。

左上から斜め右下に、力無く地面へと落下し始める一角の右頬目掛けて振り下ろした。

「100」シエント

屈強な肉体を持つ大の男の身体は、そのまま凄まじい勢いで地面へと叩き付けられ

た。

まるで小型の隕石が落下したかの様に、落下地点には轟音と同時に半径五メートル超のクレーターが出来上がる。

その中心にて、檻褸雑巾の如き姿で倒れ伏す男は、ピクリともしなかった。

「……やり過ぎた……か？」

ノイトラはやや心配そうな面持ちで下を見下ろしながら、そう呟いた。

ジャラリ、と背中 of 得物の柄尻より垂れ下がった鎖の鳴る音が、静かになった周囲へ嫌に響いた。

——護廷十三隊現世援軍チーム、残り三名。

盛大な鞭打の音が響き渡ると、弓親の身体がいとも容易く吹き飛んで行く。

何とか途中で体勢を立て直すのが、普通に立って居られない程のダメージを負ったのか、膝から崩れ落ちそうになる。

咄嗟に斬魄刀を杖替わりにして身体を支え、相手を睨み付ける。その頭部からは大量の血液が流れ落ちていた。

「弓親!!」

その様子を見ていた乱菊は居ても立っても居られず、弓親をそんな姿にした張本人たるルピ目掛けて飛び出さんとする。

だが次の瞬間、それを制止する声が彼女に投げ掛けられた。

「手を出すな!!!」

「はあっ!?!」

その声の主は弓親。興奮しているのか、その口調は荒く、明らかに副隊長に対する物

言いでは無い。

以前尸魂界にて、九番隊副隊長、檜佐木<sup>ひさぎしゅうへい</sup>修兵に勝利している背景から、自分は彼等と同等だと心の片隅で思っているのも有るのだろう。

実際、彼は五席の地位に立っているが、その実力はもつと上だ。少なくとも四席、或いは三席だったとしても何ら遜色無い。下手すれば副隊長にすら匹敵する。

だがそれは弓親の斬魄刀である藤孔雀——真名は瑠璃色孔雀<sup>るりいろくじゃく</sup>。その本来の力を惜しみ無く発揮した場合に限ればの話だ。

その姿は無数の蕾を付けた蔦状のもので、絡み付いた敵の霊圧を根こそぎ吸収する能力を持つ。

傍から見れば実に強力な斬魄刀だが、一つだけ問題が有った。

それは十一番隊の風習だ。

“この隊に所属しているのであれば斬魄刀は直接攻撃系の能力のみ”という暗黙の了解が存在するこの隊では、鬼道系の斬魄刀を持つ者は軽蔑される傾向に有る。

只の平隊士にそう見られる程度なら平気だ。だが死神になる以前からの友人である一角にまで同じ視線を向けられるのは耐え難かった。

故にその力を使う事に抵抗を感じており、戦闘時になっても徹底的に秘匿を貫いているのである。

しかも弓親の美的感覺によると、最も美しい数字は「三」。  
だが彼自身、その数字を背負う三番隊に移る気は全く無かつたし、十一番隊では既に一角が三席の地位に就いている。

結果、「三」に似た「五」の席に甘んじているという訳だ。

「あんたも面白い加減にしなさいよ!! そんな情けないカツコ晒しといて、それでもまだ一對一でやらせろって言うわけ!!?」

乱菊は声を荒げ、弓親の愚かしいとも取れるその選択を窘めた。

だが弓親は全く聞き入れようとせず、震える膝に喝を入れながら何とか立ち上がる  
と、震える手で斬魄刀を構える。

実を言えば、彼が修兵を破る事が出来たのは運が良かっただけだ。

普通に立ち会えば終始圧倒されて終わっている。

だがあの時の二人の周囲には人が居らず、弓親は瑠璃色孔雀を出しても何ら問題が無い状況だった。

其処で始解もせずに油断していた修兵の隙を突き、ほぼ不意討ちに等しい形で勝利を収めたのだ。

純粋な力量で言えば弓親は修兵より下だ。才能は上だろうが、積み重ねの差というのは如何ともし難い。

真央霊術院の入試には二回落選。初っ端から挫折を味わった修兵だったが、その後は努力を積み重ね、在学中には既に護廷十三隊への入隊が内定、席官入りも確実と言われる程の優等生になる。

そして入隊後は自身の過去の経験から来る戦闘への恐怖心に苦しみつつも、当時隊長であつた東仙に現在は副隊長にまで登り詰めた。

乱菊は以前、宴会の中でその経緯を修兵本人から語られている為に知っている。

故に同格である自分でも勝てるか如何か不明な十刃——ルピに無謀にも立ち向かう弓親を放つて置く事が出来無かつた。

あの戦場に似つかわしく無い空気を漂わせていた二人の破面には一角が向かつた。

彼程の実力者ならばそうそう敗れる真似はしないでだろうと判断した乱菊は、御蔭でこうして加勢に来れたのだ。

だが極めて劣勢の筈の弓親は未だにそれを跳ね除けている。

敗北が許されないこの状況下に於いて、尚も意地を張り続ける彼に対し、乱菊が怒りを覚えるのも致し方無いと言えた。

「うる…さい…！ これはぼくの戦いだ!! 邪魔しないでくれ!!」

弓親はそう豪語したものの、先程から視界も揺れ、膝から下には力が全く入っておらず踏み込みもままならない状態だ。

ルピは完全に相手を見下す様な眼で、その姿を眺めていた。

「だーからア。一対一じゃ勝ち目ナイって言ってんじやーん」

確かにルピは他者を馬鹿にする事の他、敵を肉体的にも精神的にも追い詰める事を好む嗜好を持っている。

——違う、コレじゃない。

内心でそう零しつつ、退屈極まりないといった様子で肩を竦めた。

決死の覚悟で斬り掛かってくる敵に対し、自分の圧倒的な力を見せ付け、此方を恐れたり怯えたりする姿を観察する。それこそが至高なのだ。

もはや戦いにすらなっていない現状では、楽しさも何も無かった。

「そこのおねーさんもさ、そいつの言う事なんて無視して掛かってきた方がいーよオ？」

「…そうね」

「なっ!?! 止め——」

「うるさいわよ。縛道ばくどうで強制的に黙らせられたい?」

ルピの言い分に納得したのか、乱菊は斬魄刀の刃先を向け、何時でも踏み込める様に重心を落とす。

弓親は抗議の声を上げんとするが、直後に彼女の放った霊圧にアテられ、言葉を詰まらせた。

「そーそー、じゃないと…っ!?!」

一対二の構図になるかと思いきや、次の瞬間、周囲一体に凄まじい轟音と衝撃が空気を伝って響き渡った。

三人は弾かれる様にして発生源へと振り向く。

すると其処には背中に得物を背負ったまま、ウルキオラのように袴の側面の隙間に両手を突っ込んで棒立ちしているノイトラ。

その下にはあわや大爆発の直後かと思わせる巨大なクレーターが、周囲に砂塵を漂わ

せながら存在していた。

「…：…角…？」

信じられないものを見る様な表情を浮かべながら、弓親は絞り出す様にして呟いた。  
霊圧を探つてみると、確かに先程までガンガンと自己主張していた筈の一角の霊圧が消え失せていた。

やがてその砂塵が晴れると、そのクレーターの中心部が露になった。

死覇装はポロポロの布切れと化し、上半身を剥き出しにて俯せに倒れ伏す一角。

その変わり果てた姿を、弓親と乱菊は只啞然とした表情で眺め続けていた。

「あんな風になつちやうよ？ でもまあ…あの様子じゃ生きてないだろーねエ」

ルピは今にも漏れ出しそうな笑い声を堪えながら、挑発する様にしてその二人に語り掛ける。

——そう、コレだ。

自分が見たかったのはこの表情だと、ルピは口元を吊り上げた。

任務前もそうだが、こうも自分の嗜好を次々に満たしてくれるノイトラに対し、内心で感謝する。

余りにも早過ぎる仲間の敗北。二人は未だ理解が追いついていないらしく、硬直したままだ。

気分が乗って来たルピは、ノイトラとは別方向に視線を移す。

其処にはチャクラムを激しく飛び回らせるチルツチ。

そしてその不規則極まりない軌道を何とか見切りつつ、接近戦を仕掛けようとするも、今度は蹴撃等の徒手空拳による激しい反撃の嵐に晒され、止むを得ず距離を取るという反復運動をしている冬獅郎。

一見すれば後者が攻め切れていない様に見えるが、違う。その証拠に、互いの肩や顔には小さな切傷が幾つか覗いている。

どうやら戦況は見た目以上に均衡しているらしい。恐らくこの任務の制限時間内には決着は付かないだろう。

「ねえチルツチー!! せっかくだし、そっちの子もボクにゆずってよ!!」

意外と気が短いルピは、制限時間内に一気に勝負を仕掛ける事に決めた。

丁度彼の帰刃形態は一体多数に特化している為、残る三人全員を相手にしても何ら問題はない。数として見れば寧ろ物足りないぐらいだ。

叫んだ直後にチルツチの抗議の声が返って来たが、無視する。

抑えていた霊圧を解放すると同時に、左腋の斬魄刀の柄へと右手を添える。

「こいつらウダウダとめんどいからさ、ボクが解放してまとめて相手してあげるよ」

ルピの変化を感じたのか、其処でやつと弓親と乱菊は正氣に戻った。

二人は慌てて斬魄刀を構え直すも、既にルピの斬魄刀の刀身は中間まで抜かれていた。

## 第二十二話 店長と黒猫と、三日月と胸騒ぎと

以前と同じ、複数の破面の霊圧を感じた恋次は、何やら慌ただしい様子で動き回り始めた。

その傍らには岩盤に背中を持たれ掛けながら寝息を立てる泰虎が居た。

そんな彼を横目に見ながら、汗を拭い取りつつ水分を補給し、先程ダメージを負った自身の斬魄刀に軽い刃禪にて語り掛けてコンディションの確認を取る。

明らかな戦支度だ。

「…よし。今行くぞお前等」

帯を締め直し、斬魄刀を腰に差せば、その準備は全て完了だ。

そしていざ出発といった瞬間、恋次を制止する声が投げ掛けられた。

「貴方が出る必要は有りませんよ、阿散井サン」

「はあ!? あんたこの状況で何言ってるんだ!!」

恋次の言う事は尤もだ。

彼は本来こういつた状況に陥った時の為の戦力として、この空座町に存在している。今行かずして何時行くというのか。

「今の阿散井サンは消耗している。今彼等に加勢したとしても、大した戦力にはなれないでしょう」

「……………」

抗議の声に乗って来た怒気を受け流しつつ、喜助は淡々と答える

その様子は何時もの飄々としたものでは無い。帽子の影から覗く眼は鋭く、表情も至って真面目。

全く以て正論だ。恋次はぐうの音も出ない。

——それもこれも、コイツがタフ過ぎたからだ。

破面達の持つこの異質な霊圧が押し掛かっている状況下、穏やかな表情で眠り扱ける泰虎に対し、内心で文句を垂れた。

だが直後に反省する。実はそう言いつつ恋次もこの鍛錬を結構楽しんでいたのでか

ら。

それこそ、自分の消耗度合を忘れてしまう程に。

この鍛錬は泰虎がメインだったが、恋次にも恩恵は有った。

それは卍解の操作技能の向上だ。

恋次の卍解はその巨大さ故に、扱いが非常に困難だ。それは自身の所属する六番隊隊長である白哉にも指摘されている。

しかも霊圧の燃費も悪い。例えるなら、始解が軽自動車で、卍解が大型特殊車両といった感じか。

だがこの鍛錬の御蔭で、それも一気に解決まで近付いた。

泰虎は上位席官レベルまで渡り合える実力が有るとは言え、魂の強さは人間の範疇を遥かに超えている訳でも無い。つまり耐久力は死神の観点から見ても、それ程でも無いという事だ。

そんな彼に本気で卍解をぶつけ様ものなら、瞬く間に肉片へと変えてしまうだろう。その威力はあのイールフォルトに対し、帰刃形態のその外皮の鎧を砕き、中身を焼き尽くす程。

恋次は頭が良い方では無い。どちらかと言えば身体で覚える肉体派だ。

故に鍛錬時は卍解の力を制限し、泰虎にある一定以上のダメージを与える事が無い様

に精密な操作をする必要が有った。

口で言うのは簡単だが、それは非常に困難な課題だった。

考えてもみる。巨大な機械を操縦していて、メートル単位なら未だしもセンチ単位の操作を行うとなれば神業の域だ。それを初心者遣らねばならないとなると、どれ程無茶な事か理解出来る筈だ。

だが恋次として伊達に副隊長を名乗っていない。常に思考を止めず、過酷な修行を重ねてきた。倒れた事も一度や二度では無い。そんな彼が難しいからと言って諦める訳が無かった。

始めは失敗の連続。程度が解らず泰虎を盛大に吹き飛ばしたのは両手でも数え切れない。

だが泰虎自身も戦闘に関しては天性の感覚を持っていた御蔭か、吹き飛ばされる直前、咄嗟に後方へと跳んだりして直撃の威力を弱め、どれも大事には至らなかつたのは幸いだった。

やがて鍛錬が終盤まで差し掛かつた頃、恋次は遂にその精密操作をモノにした。

消耗が激しかったせいで加減を誤り、最後の最後でミスを遣らかしたが、危機的状况に陥つた御蔭か泰虎も能力が進化した様だし、結果オーライだ。

正解の影に隠れていた為に何が如何なつたのかは不明だが、どうせ後で教えてもらえ

ば良いだろうと恋次は全く気にしていなかった。

「アタシが出ます」

何時の間にやら解放済みの斬魄刀を右手に、喜助はそう宣言した。

その声の真剣さから、冗談で言っている訳では無いは明白。

「…そうかよ」

恋次は渋々といった様子で引き下がった。

少なくとも喜助が代わりに行くとなれば、代役としては十分過ぎる程だと理解していたからだ。例え自分が消耗していなくとも、御釣が来て余りある。

その場で一気に腰を下ろすと、そのまま後ろに倒れて仰向けになり、目を閉じた。

現世は尸魂界より霊子が薄い。体力は戻っても、霊力が戻るまでにはより多くの時間が必要となる。

それを理解していた恋次は、今の自分に必要なのは戦いよりも休息だと判断したのだ。

この冷静さこそ、似た様な性格を持つ一護には無い、明確な違いであった。

喜助はその様子を見て安心したのか、勉強部屋を後にした。

店内に戻ると、必要な発明品を幾つか見繕い、懐へと仕舞ってゆく。

視界を潰す等して敵を欺く物。身代わり等、攻撃を受けた場合の対策品。万が一の時の為の退却用。

そのほぼ全てが、尸魂界には一切情報を流していない試作品。というか使い物になるか如何かも怪しい品ばかりだった。

だが天才を舐めるなかれ。例えそれがデメリットが残っている欠陥品であろうが、作戦に組み込む程度は容易だった。

そして喜助は先程感じた霊圧から気付いていた。

今回の襲撃には、以前来ていたあの左目に眼帯を付けた長身細見の破面——ノイトラという男が居るといふ事に。

——明らかに加減していた。

左足の治療を受けている夜一が零した言葉だ。それと彼の本来の得物が長物であるという事も。

喜助とて気付いてはいない。

斬魄刀を所持していない時点で大凡は察せたが、完全とは言えない。もしかすれば

元々斬魄刀を持ち得ない破面の可能性だつて有る。

だが実際に打ち合った者の意見も聞き、確信へと至つた。

加えてそれは武術の達人たる夜一の読みだ。間違い無いだろう。

「…最悪は、使いますかね」

一通り準備を終えた喜助は、ぼそりと呟いた。

彼が何の事を言っているのか、説明を受けるまでも無いだろう。

——卍解だ。

だがあくまで最後の手段としての話だ。

あんな卍解、使わないに越した事は無いのだから。

「…さてと、少し本気出しましょうかね」

憂鬱な気分を払拭するかの様に、声のトーンを何時通りに戻す。

そして開きつ放しの店内入口へと歩を進めた——その時だった。

「待たんか、馬鹿者」

喜助の背中に、聞き慣れた声が投げ掛けられた。  
彼は即座に後ろを振り向くと、思わず息を飲んだ。

「夜一サン…しかもソレは——!!」

「あの破面も来ておるのだろうか？ 儂も連れて行け」

護廷十三隊とは別口の組織であり、同胞の処刑から情報伝令、敵地へのスパイ活動まであらゆる裏の仕事を担当する部隊、おんみつぎどう 隠密機動。

その第一分隊、けいぐん 刑軍。その部隊特有の刑戦装束、それも以前とは違って両肩及び背が剥き出しとなった特別製のものを身に纏った夜一。

特筆すべきはその手足。見るからに硬質で、相当な重量が有りそうな手甲に脚甲が装着されていた。

「りべんじ、というやつじゃな」

口を半開きにしたまま固まる喜助。

それはそうだ。先程懐に仕舞った物とは異なり、夜一が身に付けているそれは未だ試作段階。完成までは程遠い代物だ。

恐らく喜助の部屋から勝手に持ち出したのだろう。

彼の腕を信頼しているのか、それとも只考え無しに勢いで使おうと試みたのかは不明。

硬直する喜助を余所に、夜一は普段余り見せる事が無い好戦的な笑みを浮かべていた。

ノイトラはその場にリラックスした状態で立ちながら、ルピの戦いの様子を眺めていた。

場面が移り変わるに連れ、その表情は心なしか険しくなつてゆく。

終いには腕を組み、何かを考え始めた。

参加メンバーが異なるのもそうだが、本来居る筈の無いチルツチが冬獅郎の相手をし、同様にノイトラが一角を早々に退場させたりと、様々なイレギュラーを起こしている現状。

だがそれに伴う変化等は今の所見られていない。

その証拠が、今視界の先に広がる光景だ。

ルピが斬魄刀を抜刀し、解放せんとした瞬間、チルツチと対峙していた筈の冬獅郎が急激に方向転換すると、だいぐれんひょうりんまる大紅蓮氷輪丸を解き放った。

シャウロンとの経験から、破面特有の帰刃の持つ強大さを理解しているのだろう。それを阻止せんと、巨大な翼を持つ氷の龍をその身に纏い、瞬歩で一氣にルピ目掛けて駆ける。

だが一足遅く、ルピは既にその姿を帰刃形態——トレバドローラ 鳶嬢のものへと変化させていた。

頭部と上半身の一部が骨の鎧に覆われ、背中の円盤からは八本の触手。

解放を許してしまった冬獅郎は、直後に放たれた一本の触手による牽制攻撃を防いだは良いが、残る七本の一斉攻撃によって氷を砕かれ、地面へ落下していった。

ノイトラはすかさず探查神経を発動。冬獅郎の落下地点を中心に探りを入れる。

やはり想像した通り、その靈圧は未だ健在。

意図的に抑えているのか、確かに反応は微弱だ。ルピが死んだと誤認するのも致し方無いだろう。

一角については言わずもがな。一応は生きていたとは言え、靈圧の殆どが生命維持に使用されているのか、全身から放出されている量は殆ど無い。

敵対している立場上致し方無い行動だったとは言え、ノイトラは仄かに罪悪感を感じていたが、それだけだ。

始めからスペック差を全面に出してゴリ押しすれば直ぐに勝負は付いていた。だがそれをしなかったのは、経験を積むという目的の他にも意図が在った。

同じ武人として相対する事で、一角に対してノイトラなりに敬意を示したのだ。

ちなみに止め用に用いた百拳も、全力では無いが本気ではあった。

斬魄刀を抜かなかったのは、一角の斬魄刀を破壊してしまい、満足に斬り合える事すら出来なくなる可能性が在ったからだ。

——それでも彼は戦いそうだが。

帰刃形態のエドラドの拳の一振りでも容易にへし折れたそれ。ノイトラであれば例え未解放であっても同様の結果になっても何ら不思議では無い。

もし一角が秘匿せずに卍解を使用していたとすれば、ノイトラも間違い無く斬魄刀を

抜いていただろう。

「アウー……」

「……んだよ、御代わりか？」

ノイトラは不意に、後ろから白装束の袖を控え目に引つ張られるのを感じた。

首だけで振り返つて確認すると、其処には上目使いで此方の様子を窺っているワンダーワイスが。

別な方向へと意識が向いているノイトラは、先程までの子供の面倒を見る優しい父親の様な態度は見せず、難しい顔をしながらぶつきら棒にそう問い掛ける。

だがその問いに対して首を傾げたところを見ると、どうやらそうでは無いらしい。

ワンダーワイスは知能や言語を失っているとは言え、感情は有るし、赤子レベルだが思考能力も持ち合わせている。

史実でも純粋な性格の持ち主である東仙に懐いていた事から、この人は良い人だと判断出来る程度には学習能力が有ると推測出来る。

怯えられても何ら不思議では無い態度を見せたにも拘らず、頻りにノイトラの袖をクイクイと引つ張り続けるワンダーワイス。

謔言の様な声を漏らす度、その口元からは果実の甘い香りが漂って来ている。

——もしかして、自分の事を氣遣っているのか。

恐らく本人にはその気は一切無いのだろう。本当に何となく、自分の様子がおかしいと感じたが故に、こうして構っているのかもしれない。

まるで懐いたばかりの子犬だ。

その様子に幾分か緊張が解かれたノイトラは、フツ、と鼻で笑うと、再びワンダーワイスの頭を撫で始めた。

「…悪いな」

「ウ…ウ…」

やや力加減を誤ったのか、グリグリと撫でられる度に目を閉じるワンダーワイスだったが、その表情に不快感は無かった。

「なーに二人してほのぼのしてんのよ」

「別に良いじゃねえか」

今度は前方から声が掛けられた。

ルピによって冬獅郎との戦闘を中断させられたチルツチだ。

眉間には常に深い皺が寄っており、明らかに不機嫌丸出した。

尚もワンダーワイスを撫で続けるノイトラに溜息を吐くと、彼の横に靈子の足場を作り出すと、そのまま腰掛けた。

「んで……どうだった、護廷十三隊の隊長は。つつても、早い内に終わっちまったけどな」  
「……強かったわよ」

ノイトラのその問いに、チルツチは頬を膨らませながら顔を背けつつ、渋々と答えた。彼女の全身には所々に浅い切傷が見られ、多少汗も流した後が有る。

傍から見れば優勢に見えたかもしれない戦況だったが、実を言えば結構な接戦であった。

スペックだけ見れば確かにチルツチが勝っていた。それを生かすための戦法や鍛錬も積んできたし、そう易々と不利になる様な事は無いという自負も有った。

だが以前より鍛錬の中でノイトラも何度か指摘していたチルツチの弱点——攻撃の後の隙を早々に見破られ、次々に的確な反撃をされるとは予想外だった。

見た目通り経験も浅いのかと思いきや、その観察眼の凄まじさは圧巻。幾つか死角からの不意討ちを食らわせても、二度目からは決して通用しない。

それに勘も鋭い様で、ワイヤーを巧みに操って作り出した不規則な軌道を描くチャクラムの攻撃も、後半には直接視認せずとも見切られる様になっていた。

「あんた…あの餓鬼の事知ってたでしょ」

「さて…な」

チルツチは横目でノイトラを見ながら、そう問う。

恐らく自分が対峙したあの日番谷冬獅郎という少年は、所謂天才に属する存在。

鍛錬のみならず、実戦の中でもふとした拍子で目覚ましい進化を遂げる様な、そんな理不尽極まりないタイプだ。

成る程、確かに戦闘経験を積むという名目ではこれ以上無い相手だ。下手すれば此方が負ける可能性も有るが、生き残る事が出来れば今後自分にとつても良い刺激になる。

正直言えば、解放さえすれば苦戦せずに十分対処出来た。

現状の斬魄刀の様に多彩な遠距離攻撃が出来無くなるというデメリットは有るが、その分防御や接近戦への対応がし易くなり、何より殺傷能力が跳ね上がる。

ネックであつた燃費の悪さや動きの鈍さも、ノイトラのスパルタ鍛錬の御蔭である程度は解消しているの、何の問題も無かつた。

「んな事より、こうして五体満足で済んだんだ、万々歳じゃねえか」

だがそれでは駄目だ。直ぐに帰刃に頼る有様では、彼の隣に立つ者としては不資格。その証拠に、対峙したスキンヘッドの厳つい顔付きをした死神を、一切得物を抜く事無く素手で圧倒して見せたではないか。

それを見ていた冬獅郎は信じられないといった様子で啞然としていたし、恐らくその男は隊長が目を掛ける程の実力者——少なくとも副隊長クラスであると断定出来る。時折横目で見ていたが、あの鋭い槍捌きは自分では躲し切れない。

只、槍に内包された霊圧から判断するに、殺傷能力は鋼皮を斬り裂く程では無いのは明らかだった。

だがあの鍛錬馬鹿のノイトラの事だ。受けるのでは無く敢えて躲し切る事で、より自分を高めようと画策していたのだろう。

それにあの男が地面に叩き付けられた直後、それに続いて落下して行つた、男の手を離れた槍が三節棍へと変化していた事も考えるに、かなりトリッキーな戦法を取る技巧

派でも在ったのが判る。

つまり自分があの男を相手にした場合、接近戦ではまず分が悪い。終始遠距離から攻め続けるという戦法しか取れないだろう。

——つくづく規格外な男だ。

チルツチは改めて認識した。

「ま…そういう事にしとくわよ」

幾分か不機嫌が収まったチルツチは、今度は凄まじく気落ちした。

それは任務前に話し合つて決めた条件。それ等全てを守つた場合に齎される褒美が駄目になつた事だ。

——折角色々考えていたのに。

チルツチは更にモチベーションが低下して行くのを感じた。

只でさえ私生活ではセフィローに一步も二歩もリードされているのだ。立場は対等とは言え、此処で如何にか差を縮めなければ、一向に離され続ける羽目になる。

「はあ…」

「……一体どうしたよ、オマエ」

突然溜息を吐き始めた自身の従属官に、ノイトラは不審そうな表情を浮かべながら問う。

途中で戦闘が中断した事で不機嫌になったのは察していたが、今の溜息はそれとは全く別物だ。

早朝、目覚めると同時に、裸でベッドに潜り込んでいたセフィローを発見し、元気な自慢の倅に見て見ぬフリをしつつ鋼の精神でスルーしてシャワーを浴びに行き、そのまま戻って来た際に彼女が見せたそれと同等。

もはや状況としては慣れっこなので、流される事は察していただろう。では何故そんな態度を取ったのか、それについては未だに解っていない。

候補としては二つ。そのまま襲ってほしかったのか、または反応が思ったより普通過ぎてつまらなかったのか。

多分前者が一番近いかと考えたノイトラは、残念だったなと自信満々に言い放ったが、更に同じ様な溜息を吐かれた。

スルーするにしてもそれは、朝チユンが、いつそ眠ったままでも、等と零し始めたセフィローに、ノイトラは何となく背筋に悪寒を感じたのを覚えている。

如何にノイトラは鈍感では無いとは言え、女心の細かな挙動までは解らない。頭を傾げる彼に、何となく腹が立ったチルツチは声を荒げてソツポを向いた。

「なんでもない!!」

「お、おう…」

「アウー？」

離れたところで死闘が繰り広げられていたにも関わらず、ほのぼのの次にラブコメ風といった空気を作り出す彼等だった。

死神達の退場者はこれで二人。恋次を除けば、半分まで人数を減らした事になる。

「ラ・ヘリーセ  
旋腕陣」

ルピが上体を前屈みの姿勢へと移す。すると背中中の円盤が回転し始め、それに伴って数倍の速度で八本の触手が動き回る。

不意討ちに近いとは言え、冬獅郎ですら一瞬で退けた相手に、弓親と乱菊の二人だけで対応出来る筈が無い。

案の定、二人はその触手の目まぐるしい動きに接近する事も許されず、一方的に殴られ続けていた。

「っ…唸れ、灰猫!!」

其処で変化が起きた。本来なら呆気無く触手に囚われて無力化されてしまう筈の乱菊だったが咄嗟に始解したのだ。

いきなり彼女の斬魄刀が灰の様に霧散した事に、ルピは思わず首を傾げた。

「あれエ? 一体どーなってんの? その斬魄刀——ッ!!」

自分の方向へと向かって来たその灰を何と無く一本の触手で振り払った瞬間、乱菊が刀身の無い斬魄刀の柄を振るった。

すると次の瞬間、その灰がやや付着した触手に深々とした斬り傷が刻まれた。

一応それも肉体の一部らしく、傷口より鮮血が舞う。

おまけに痛覚も通っているのか、本人はやや眉を潜めている。

これぞ灰猫の能力。刀身を灰と化し、その灰が降り掛かった場所を柄の一振りで斬り刻む。

一矢報いたと感じたのか、乱菊は頭部から血を流しながらも、得意げな笑みを浮かべた。

「油断したわね？ 副隊長を舐めないでくれるかしら」

その挑発染みた発言に、ルピは目を細める。

「どうやら癩に触ったらしい。」

「終始うねり狂っていた触手全てが、突如として動きを止める。」

見ればそれ等の先端は全て乱菊の方を向いており、先程冬獅郎にした様に刺突を繰り返

出す魂胆なのは容易に察しが付いた。

乱菊は咄嗟に刀身の消えた斬魄刀の柄を振るう。

するとルピの背後に漂っていた灰が更に拡散。そのまま風に乗る様にして彼の背中目掛けて向かって行く。

「それはコツチの台詞さ。十刃を舐めないでよね」

ルピは後ろ向きのまま、右手を背中中の触手の隙間を擦り抜ける形で伸ばし切ると、その袖先に霊圧が集中させ始める。

直後に放たれたのは虚閃。灰状に変化する以外、何か特別な性質を持っている訳では無いそれは瞬く間に吹き飛ばされてしまった。

離れで観察に集中していたノイトラは即座に気付いた。その虚閃は威力よりも範囲に重点が置かれており、それに合わせて霊圧が絞られていたり、意外と細かい工夫が凝らされていると。

流石に第10から第7の既存の十刃を差し置いて第6に選ばれただけはある、納得の芸当であった。

「キミも、ね」

「っ!? グエツ…ア…!!!」

ルピが虚閃を放った右手を戻すと、触手の一本が大きく後方を横薙ぎに振るわれる。直後に響き渡る鈍い音と、蛙が潰れたかの様な声。

その発生源は、虚閃発射後は油断していると踏んだのか、背後から奇襲を仕掛けんとしていた弓親だ。

交戦直後の腕による鞭打とは異なり、帰刃形態による一撃だ。威力も段違いである為、その序盤の一撃のみでノックアウトされ掛かっていた弓親に耐え切れるとは思えない。

このまま彼も退場かと思いきや、意外にもそうはならなかった。

弓親は歯を食い縛って意識を失う事を避けると、霊子で作り出した足場を踏み締め、三十メートル程吹き飛ばされた地点で停止する。

すかさず瞬歩を使用し、再び乱菊の横へと移動する。

とは言え、明らかにダメージが蓄積されているのか、少しでも気を抜けば倒れそうな程に全身をふら付かせている。

「話にならないなア、キミたちホントに護廷十三隊の席官？」

肩を竦めつつ、ルピは気怠そうな声でそう零す。

周囲では触手が忙しく動き回っている。

「つまーんないっ」

次の瞬間、触手に新たな動きが見られた。

先程までは鞭打や刺突による攻撃が殆どだったが、今度は相手の懐に潜り込む様にして伸ばされたのだ。

「ツあっ!!」

「クッ!!」

突然の変化に対応し切れず、まず乱菊が全身に触手を巻き付かれて拘束される。

彼女よりも反応や動きが鈍くなっている弓親も同様に、呆気無く捕われて無力化された。

「ふうん」

ルピはその二人を自身の前に並べる様な形で移動すると、まじまじと観察し始める。特に視線が向いているのは、その豊富なバストを持つ乱菊の方だ。

下衆な男が舐め回す様——とはまた違ったその眼に、乱菊は妙な悪寒を感じた。

「おねーさんさア、やーらしい身体してるよねえ」

「…何よ、そんな顔しながら、そういった趣味もちゃんとあるのね」

ルピの意思一つで運命が左右されるこの状況下で、乱菊のこの発言。

明らかな強がりだ。しかもこの状態では柄を振るう事が出来無い為、彼女の折角の始解も意味を成さない。

それを読んでいたルピは余裕の笑みを浮かべたまま、軽い調子で返答した。

「いーなあ。セクシいだなあ…だから思わず——」

乱菊を捉えていた触手の先端が持ち上げられる。

その向く先は当然彼女だ。

「穴だらけにしちやいたいなあ〜」

「ッ!!」

ルピがそう零した直後、触手の先端部に変化が現れた。

これは触手の先端に無数の棘を生やし、相手を串刺しにする技——イェロ・ビルヘン鉄の処女。

その棘の一本一本が人一人軽く貫通出来る程の長さを誇っており、例え攻撃対象が乱菊以外でも直撃を食らえば即死は免れないだろう。

相手の恐怖を煽る様にして、その棘塗れな触手が左右にユラユラと揺らされる。

戦場に踏み込んだ時点で覚悟はしていたとは言え、流星に何も感じない訳では無い。

乱菊は血と汗が混じったものが頬を伝うのを感じながら、震えそうになる身体を必死に抑え、ルピを睨み付ける。

だがその視線を向けられている当人には逆効果でしかなく、加虐的な歪んだ笑みを深めるだけだった。

「ばいばい」

「乱菊さんツ!!」

ルピは乱菊に対して手を振り始めると同時に、触手が動いた。

より勢いを付ける為か、やや後方へと引き絞られると、瞬く間にそれは放たれた。

弓親は焦燥に駆られた表情で声を荒げた。

同時に触手から抜け出さずともがいている様だが、一向に拘束が解ける様子は無い。

例え今更抜け出せたとしても、乱菊の救助には間に合わないだろう。

———これまで、か。

乱菊は顔に悔恨の色を浮かべながら、迫り来る死を眺めた。

「なっ……!」

だがその死は寸前で断ち切られた。乱菊を拘束していた触手と共に。

弧を描いた形の紅色の斬撃が、そのまま空へと向かって飛んで行き、やがて拡散した。

「いや……、間に合った間に合った。危なかったツスね」

ルピは一瞬だけ瞠目したが、瞬く間に露骨に不快な表情を浮かべた。驚愕よりも自分の行動を横から邪魔されるといふ、彼自身が最も気に食わない事をされた怒りが余程大きかつたらしい。

「……誰さ、キミン」

離れた位置から響く、聞き慣れぬ音。

そのカランカランとした特有の音は、下駄。

やや顔を顰めたまま、ルピはその方向を向きながら問い掛けた。

「どーもどーも、アタシは浦原喜助。浦原商店で、しがな駄菓子屋の店主やってます」

左手で帽子を押さえながら、戦場に似つかわしく無い飄々とした態度でその男は答える。

「よろしければ以後、お見知り置きを」

その軽い声質とは裏腹に、帽子の影から一瞬だけ除いた眼は、相手を射抜くかの様な鋭利な眼光を灯していた。

全身から霊圧を滾らせつつ、喜助は己の斬魄刀を構えた。

乱菊と弓親がルピの触手に捕まった付近から、ノイトラは中断していた探査神経を発動していた。

正確さには掛けるが、半径十数キロ程度という範囲まで広げる事に成功した序盤のそれとは別。

広範囲型より十分の一程まで範囲が狭まる分、小動物の持つ微弱な霊圧でも一つ残らず探知出来るタイプだ。

——やはり、来た。

引つ掛かった反応は一つ。間違い無く喜助のものだ。

その移動速度から計算するに、此処に到着するのにそう時間は掛からないだろう。

ノイトラは安堵すると同時に気を引き締め、探査神経を再び広範囲型へと切り替える。

先程は探知出来無かったが、泰虎と恋次の周辺にはまた三つの反応が在った。恐らく元鬼道衆総帥、大鬼道長——握菱つかびし鉄裁テッサイ含めた浦原商店の住人だろう。

更に遠くには、現世来訪直後に飛び出したグリムジョー。彼と激しくぶつかり合っているらしい一護。それに近付く一人の死神——十中八九ルキアのものだろう。

そしてたった今追加された新たな反応。何も無い筈の場所から突如として現れたのは、死神とも虚とも取れない謎の霊圧。

恐らくそれは仮面の軍勢の一人——平子真子。直接対峙していない為に確信は無いが、元隊長に相応しい膨大なその霊力量から判断するに、ほぼ間違い無い。

「さて、と」

「…何よいきなり?」

ノイトラは両腕を上を持ち上げ、そのまま背筋を伸ばす。突拍子も無く柔軟体操ストレッチを始めた彼に、チルツチから疑問の声が上がる。ワンダーワイスも首を傾げている。

「探查神経を発動させてみる。そうすりゃ判る」

「……これ、つて——!!」

他の破面達は常日頃から探查神経を多用している訳では無い。只ノイトラが過剰なだけだ。

発動の際にはそれなりの集中力が必要となる為、基本的に気が短い者達で占められる破面達にとつて、必要に駆られでもない限り、通常の霊圧探知しか用いる事は無い。

指摘されたチルツチは直ぐ様探查神経で周囲を探り始める。

それから間も無くして、息を？んだかの様な態度を見せた。

ノイトラは自身の従属官二名に対し、今迄の経験や知識等の情報がある程度伝達している。

それは前回の任務内容についても同様だ。

故にチルツチは喜助や夜一の強さや脅威のレベルを十分理解しており、焦燥感を見せ

ると同時に冷や汗を流し始めた。

「安心しろ、浦原喜助には俺が対応する。オマエはソイツを連れてどっかに避難してろ」

「…ウ？」

「…りよーかい」

此方を気に掛けているかの様な視線を向けて来るチルツチを無視しつつ、ノイトラは身体を動かし続ける。

全身を隈なく解し終え、次は斬魄刀を軽く数十回程度振ろうかと柄に手を掛けた瞬間、ノイトラは違和感に気が付いた。

それは先程の探查神経の反応だ。

数が増えたのは特に問題は無い。気になったのは一つだけだ。

「おいおい…」

——黒猫さん何処行つた。

そう、初めは探知した筈の夜一の反応が皆無なのだ。

浦原商店の住人達の様に隠れていたとも考えられるが、それにしても何故彼女だけがその様な行動をとったのか疑問だ。相棒たる喜助が出撃したにも関わらずだ。

そこでノイトラはとある一つの可能性——何かしらの方法で霊圧探知を潜り抜け、喜助に続いて此方に増援として登場するということ事も考えた。

だが即座に有り得ないとして頭を振った。

夜一は左脚を負傷している。それも結構重度なレベルの、だ。

織姫の治療を受けていたとすれば既に完治しているだろうが、ノイトラの考察が正しければ、恐らく夜一はそれをしていない筈だ。

元々疑問だった。何故彼女はヤミーとの戦闘で負った手足の負傷を治すのに、自然治癒という手段を選んだのか。

やや辻褄が合っている様で合っていないさうだが、武術家としての観点から見ても、自身の迂闊な行動に対する戒めとして残していたのではないかと、とノイトラは考えた。

確かに相手の情報もロクに持っていない状況下で、容易に只の素手による打撃を仕掛けるという行為は失策だ。

それは夜一にとって、自身の沽券に係わる程に大きかったのだろう。

例え死ぬ事になろうとも、世界の命運を握る決戦の中でも、頑なに自らの意地を通してうとする者が居るこの世界だ。ならばある程度は納得出来る。

だがその遣り方は決して褒められたものでは無い。

その者が実力者であればある程、周囲に齎す影響は大きい。つまり意地を通す為とは言え、力を抑えたり身を引いたりすれば必然的に味方陣営の不利となる要素に繋がる。

仲間達が何時死ぬかも不明な戦場で戦っている中で、その当人が足を引く張る——または安全地帯にて一人で引く込んでいるという状態が出来上がる可能性も有る。

ノイトラは思った。これは並大抵の精神では貫き通せない意志だ。豆腐メンタルの自分には到底不可能だと。

確かにプライド、意地、誇り等は大切だ。だがそのせいで仲間が苦しみ、最悪は死に至ったり、自分達の陣営が全滅する要素が発生するのなら、そんなものは不要でしかない。自分ならば速攻で捨てている。

元々憑依前からそういったものに縁が無かったノイトラだからこそ、そう言えるのかもしれないが。

「…やっぱさつきは無しだ」

「なによいきなり？」

「最悪は帰刃しても構わねえ。それでも対処し切れなけりや…兎に角逃げる事だけを考えろ」

この身体の本来の持ち主より引き継いだ獣の本能。

先程からそれが執拗に訴え続ける胸騒ぎから、ノイトラはチルツチにそう忠告した。

## 第二十三話 豹王と主人公補正と、三日月と黒猫と

地面に叩き付けられ、俯せの状態から何とか身体を持ち上げた一護。

既に仮面は砕け、虚化は解けている。その隙に胸部横一筋に深々とした太刀傷を刻み込まれた上、虚化の影響で霊圧も体力もほぼ限界に等しい。

そんな極限状況の中、彼は眼前に立つ、全身が血塗れ状態にも拘らず、勝者の浮かべる余裕の笑みを崩さないグリムジョーを睨み付けていた。

悲鳴を上げる身体に鞭を入れ、右手を持ち上げて顔を覆い隠す様に構え、何とか再び虚化の象徴たる仮面を出そうと試みる。

だが仮面が形成されんとする様子は見受けられるが、それだけ。本来であればほぼ一瞬で形となる筈のそれは、一向に姿を見せない。

「どうした!! なんも起きてねえぞ死神イ!!」

「グアツ!!」

グリムジョーは隙だらけな一護の横っ腹に蹴りを叩き込む。

十刃落ちとは言え、只の破面を凌駕する実力を持つ者が繰り出した手加減無しの攻撃だ。

一護は何軒もの住宅を薙倒しながら、数百メートルもの距離を吹き飛ばされて行く。グリムジョーはすかさず響転で距離を詰めると、何とか立ち上がりんと足掻く一護を見下ろしながらその笑みを更に深めた。

「ハッ！ どうやらさっきの仮面は、一度壊れたらもう出せねえらしいなア!!」

「ゼエ…ゼエ…」

その強さだけでなく、注目すべきは圧倒的なタフネス。

あんな傷を負っていないながら、何処からあんな力が出せるというのか。

呼吸を乱しながらも、一護は何とか斬魄刀を握る手に力を入れる。

だが出来る事といえば、こうして睨み付ける事程度。

今更ながら後悔した。こうなると判っていれば、せめて仮面の軍勢の拠点を飛び出す際、鉢玄に回復を頼んだ方が良かったと。

「…いや、出す構えを取るってことはそういう訳でも無えのか…」

口元を吊り上げながら、グリムジョーは悠々と一護の虚化に対する推測を述べ始める。

此処にノイトラが居れば、この状況であれば特に何を語ろうが問題無いなど納得していただろう。

余り喋り過ぎればフラグにもなるけどな、と最後に付け加えて。

——頼むから動いてくれ。

一護は内心で必死にそう訴えるが、その全身は鉛の様に重いままだ。

辛うじて上体を持ち上げる程度しか叶わず、このままではグリムジョーより齎される死を待つしか無かった。

「だがダメージを受け過ぎたせいとか、霊力を削られちゃってるせいとか、それとも回数制限か……」

グリムジョーは完全に勝利を確信しているのだろう。構えも何も取らずに、満身創痍の一護へとゆったりとした足取りで近づいて行く。

「何が理由かは知らねえが、とにかくあの仮面は——」

やがてその距離が一メートルを切った時、所々刃先が欠けてボロボロとなった斬魄刀を逆手に持ち替えると、切っ先を下に向けた。

それが辿り着くであろう先には、一護の右手首。丁度彼が斬魄刀を正眼に構えたまま硬直している為、その下には左手首が影に隠れている。

グリムジョーはそれ目掛け、一気に振り下ろした。

「ッ!!」

「今はもう、出せねえ。そうだろ?」

刀は容易に右手首の骨を、そしてその下の左手首をも同様に貫通し、地面に突き刺さった。

これで一護は両手を完全に縫い付けられ、文字通り手も足も出ない状態となった。

もはや彼はそれを抜き取ろうとする力すら残っていない。

敗北寸前どころか、もはや詰みの状態だ。

逆転など夢のまた夢。グリムジョーの性格上、生き残れる可能性も皆無だろう。

一護は絶望に打ち拉がれた。

今迄も何度か同様の状況に置かれた時は在った。そしてそれ等全てを自身の揺るぎ無い意志の元、乗り越えて来た。

だが今回ばかりは違う。一切の希望も見えない、絶体絶命の窮地。自身の力では如何にもならない所まで来てしまっていた。

グリムジョーは呆然と此方を見上げて来る一護の眼前に自身の右手を掲げる。その掌に青色の霊圧が集中して行く。

「心配すんな、この距離での虚閃だ。仮面を被る頭ごと消して——ツ!!!」

虚閃は発射地点からの距離が開けば開く程範囲が広がり、威力も下がる。

だがその逆は、範囲が狭まる分、威力も必殺に等しいと言える程まで高まる。

イメージとしてはノズルから霧状噴射する水か。霧と化したそれは只冷たいだけだが、根本の噴出部分へと触れれば冷気の他にも痛みを感じるそれと同じだ。

例え死神としては並外れた頑丈さを持つ一護だろうと、これ程の至近距離では只では済まない。

やがて霊圧がその集束を終え、放たれんとした瞬間——突如としてその右手に加

え、膝から下が大量の水に覆われた。

グリムジョーは目を見開きつつ、自身の右手を見遣った。

集束していた筈の霊圧は、その繋がりが氷という異物によつて断たれた事により、完全に拡散してしまつていた。

「次の舞——」

直後に耳に入った、この場には居合わせる筈の無い第三者の声。

そしてその方角より感じられる霊圧の高まり。

グリムジョーに続いて、一護もその方向を振り向いた。

其処には刀で地面を順に四カ所突き、右顔前に逆さにした刀を構え、その切っ先をグリムジョーへ向けているルキアが居た。

幕末期の実戦剣術に於いて有効な剣法として活用されていた「突き」。それに長けたその構えからは、言い様も無いプレッシャーを感じていたらしく、グリムジョーの顔には焦燥が浮かんでいた。

「はくれん  
白漣」

先程突かれた地面の四カ所から、桜吹雪を連想させるかの様な白い冷気の花弁が舞い上がり始める。

やがてそれはルキアの眩きの直後、一気に数を増すと同時に、身動きが取れないグリムジョー目掛けて一気に雪崩込んだ。

彼はそのまま為す術も無く飲み込まれる——等という事は無かった。

咄嗟に迫り来る冷気に籠められた霊圧を読み取る。するとこの攻撃が自身の命を脅かす様なレベルでは無いと判明した。

ならば別にこのまま直撃を食らっても問題は無い。直ぐ様氷をぶち破ってお礼を返せば良いだけのだから。

だがグリムジョーは気に入らなかつた。

自分は王だ。相手が強者なら未だしも、こんな雑魚に対して騙し討ちの様な情けない真似、出来る訳が無い。そんな様では何時まで経ってもノイトラに勝てないままだろうが、と。

それに以前、治療室が機能していない時間帯にも拘らず、態々雑務係の破面にアポを取ってまで治療を受けさせてくれたという借りまで作ってしまったている。

その時に向けられたノイトラの呆れた様な表情を思い出す。

この戦場で無様な姿を晒しては、また同じものを向けられるかもしれない。それだけは御免だった。

「…舐めんじゃねえぞクソがア!!」

刹那の思考の内にそう考えたグリムジョーの行動は早かった。

まず右手の氷を砕き、自由にする。次に足と行きたい所だったが、生憎そんな余裕は無い。

そう判断したグリムジョーは、迫り来る冷気の雪崩に向けて瞬時に虚閃を放った。

ロクに霊圧を収束しなかった影響か、その色は白い。

だが威力は十分で、瞬く間に冷気を吹き飛ばしただけに飽き足らず、そのまま直進。その先に佇んで居るルキアへ襲い掛かった

その間、グリムジョーは既に足元の氷を砕いて拘束状態から脱していた。

「そんな…馬鹿な…ッ!!」

予想外の反撃に、ルキアは思わず反応が遅れた。

先程までの虚化した一護との戦闘時から、グリムジョーの咄嗟の反応速度は目を見張るものがあるとは理解していた。

—— 躲し、切れない。

だが予測が甘かった。そう悟ると同時に、内心で一護に謝罪した。

助けに来た筈が、全くその役割を果たせぬまま退場してしまうとは何と無様な事か。そう歯噛みしつつ、ルキアは虚閃の中に飲み込まれた。

「ルキアッ!!!」

一護は吹き飛ばされたルキアに対し、咄嗟に霊圧探知を行った。

流石に死んだ訳では無い様だが、反応は弱弱い。

「なるほどな…右腕だけじゃ足りなかったっつー訳か」

「ツ…止めろグリムジョー!!」

「少し待ってろ死神。てめえの相手は後回しだ」

ルキアの居る方角へ歩き始めるグリムジョーに対し、一護は必死の表情で制止の声を

上げる。

だがそれは鼻で笑われるという形で一蹴され、何の効果も無かった。

——また、なのか。

仲間が危機に瀕しているのに、自分はまた何も出来ずに終わるのか。

何処のどいつだ、両手に抱えられる程度では無く、山ほどの人を守りたいと豪語した奴は。

自分の仲間すら満足に助けられず、しかも逆に助けられている様な奴が、その他大勢を助けられる訳が無い。

動け。立ち上がれ。貫通している刀如き、それごと引き抜いてしまえ。

護るんだらう黒崎一護。その為なら幾らでも己が身を削れ。命を原動力として燃やせ。

「だから——!!!」

——もつと、力をくれ。

自分は如何なっても良い。仲間さえ守ればそれで十分だ。

だからこの状況を打破出来る、圧倒的な力をと。

心の奥底より一護は叫び、渴望した。

次の瞬間、その叫びに応えるかの様に、彼の身体に変化が起こった。

限界だった筈の霊圧と体力が回復し、全身に押し掛かっていた重さも、傷の痛みも消え失せる。

余りに突然過ぎる出来事に、一護は当然戸惑った。

だが一先ず考えるのは後回しにした。今はこれを好機とし、即座に反撃に転じるべきだと。

足全体に力を入れて立ち上がる。それと同時に、地面へ縫い付けられている両手首を、グリムジョーの斬魄刀ごと持ち上げた。

「……てめえッ!?!」

驚愕するグリムジョーを余所に、一護はまず先に左手首を引き抜いた。

傷口から盛大に噴き出す鮮血。だがそれをものともせず、残る右手首を貫く刀身をその左手で驚掴みにして引き抜く。

その間、一護の顔は全くの無表情。まるで傷の痛みなど何も感じていない様にしか見えない。

驚愕から全身を硬直させているグリムジョーの足元目掛けて、その引き抜いた斬魄刀を投げ捨てる。

彼がそれを拾う姿を確認しつつ、気付けば一護は無意識の内に自身の顔を右手で覆い隠していた。

——ホントにしようがねえ王<sup>やっ</sup>だな、まったく。

一護の顔に再び仮面が形成された瞬間、何処からかそんな声が聞こえた気がした。

喜助が到着したのと、ワンダーワイスの姿が掻き消えたのはほぼ同時だった。

だがそうなる事を始めから予測していたノイトラに、特に驚きは無かった。

先程から感じる胸騒ぎを気に留めつつ、現時点での行動方針を決める。

取り敢えず一人で突っ走ったワンダーワイスを回収した後、代わりに喜助の相手をす

るのが理想か。

だが見る限り、ワンダーワイスは明らかに正気とは思えない表情をしている。

まるで新しい玩具を得た子供の様でありながら、何処と無く狂気を孕んだ凶暴性を感ぜさせるそれ。

恐らく藍染が何か仕込んでいたのだろう。ワンダーワイスの試験運用か、喜助の能力の調査か、どちらにせよ普通に声を掛けても意味が無いだろう。

ならば拳骨なり何なり、シヨック療法にて正気に戻すだけだ。

そう考えたノイトラは響転で移動しようとした——直前、ゾクリと背筋に悪寒が走った。

「先に謝つとく、悪い」

「へ? ……つてきやあああああああああ!!!」

ノイトラは直感に従つて、咄嗟にチルツチの服の襟を掴むと、適当な方向へと放り投げる。

やや手加減を誤つた為、結構な勢いで吹き飛んで行っているであろうチルツチに内心で謝罪しつつ、周囲を警戒する。

即座に思考を戦闘モードへと切り替え、何時どのタイミングに仕掛けられても対応出来る様、その場で腰を低くして構える。

勿論探查神経は発動してある。だがそれによると周囲には一角を除いた死神三人と喜助以外の敵の霊圧は全く存在していない。

だがノイトラは確信していた。此処には必ず彼等以外にも誰かが居ると。

霊圧を消す手段など幾らでも有る。何故かそれを戦闘に使用する者は少ないが、兎に角今は霊圧探知以外での対処を取らねばならない。

——探查神経が駄目なら、直接気配を探れば良い。

ノイトラは目を閉じ、聴覚と一緒に第六感の感度を最大まで引き上げた。

「!!」

ノイトラがその存在を察知すると同じタイミングで、彼の頭部に影が覆い被さった。

——近過ぎる。

何と言う隠密能力か。探查神経に引つ掛からない程に霊圧を消し、この距離になるまで気配を全く悟らせないとすると、該当する人物は一人しか居ない。

ノイトラは閉じていた目を開くと、即座に響転でその場から退避する。

直前に何か空を切る音を耳にしながら、五十メートル程離れ、元の位置に視線を移す。

だが其処には何者も存在しておらず、大きな黒い布が二枚、その周囲を舞っているだけだった。

——アレは、確か。

ノイトラはそれに心当たりがあった。

良く見ると元は一つであった物が真つ二つに両断された様に見受けられる。

イメージの中でそれを元通りに組み合わせると、人の頭部から下までをスッポリと覆い隠すマントの形となった。

記憶を辿る限り、それを身に纏っていたのはかつて護廷十三隊に所属していた頃の喜助。

そしてそのマントの持つ効果は——霊圧の遮断。

其処まで考えた直後、ノイトラは反射的に右手で斬魄刀の柄を掴み、背中より抜き放つ。

8の字の刃を下に向け、その腹の内側に左手を添えて盾代わりにし、左真横から迫り来る何かから頭部を防御する。

響き渡る轟音。まるで硬質な金属同士が凄まじい勢いで衝突したかの様だ。

発生した衝撃が周囲一帯の空気を震わせ、下の森林地帯の木々を軋ませる。

ノイトラの両手から腕に掛かった圧力は、未だ嘗て経験した事が無い程に大きい。

虚圏と比較すれば遥かに少ない現世の靈子を掻き集め、足場を更に強化して踏ん張る。

「オ、ラアツ!!」

勢いが弱まるのを見計ったノイトラは、両腕に力を籠めると、それを一気に弾き返した。

手の内に僅かに残る痺れを感じながら、軽やかに眼前へと降り立った人物目掛けて口を開く。

「…不意討ちとか、随分とらしくねえ真似すんのな」

「勘違いしてもらっては困るのう。儂は元来これを主にしておる。どこも不自然ではあるまいて」

その人物——四楓院夜一は不敵な笑みを浮かべながらその挑発を軽く流した。

今の彼女の恰好は、初心な男であれば思わず凝視してしまいそうになる、極めて露出度が高い特別製の刑戦装束。

そして特筆すべきは——喜助の発明品である、藍染との決戦時に用いられる筈の対鋼皮用の特製手甲を両手足に装着している事。

——御披露目には幾ら何でも早過ぎる。

その持つ威力を知っているノイトラは、自身の頬が引き攣るのを感じた。

崩玉と完全融合を果たす途中の藍染の外皮すら破壊するその装備に、瞬間を出すという前提条件を加えれば、その脅威の度合は前回よりも数倍は上。

明らかに本気で潰しに掛かって来ている。

襲撃者の正体については直前に悟っていたが、特製手甲の事は想定外だった。

ノイトラは柄を握る右手から余計な力を抜き、精神を落ち着かせる。

「ん？ なんじゃおぬし、そんなに左脚ひだりあしと特製手甲とくせいてんこうが気になるか？」

夜一は徐に左脚を持ち上げると、ノイトラを煽る様にしてブラブラと揺らし始めた。

自分はお前の知らない事を知っているのだぞとも言いたげな、優越感溢れる視線を向けながら。

「…主に脚の方だけだな」

抱いた疑問については大凡だが想像は付いている。

後者については所謂試作品というやつだろう。記憶の中にあるそれと眼前のそれを比較すれば、明らかに形状が無骨で大きい事が判る。

見た目通り重量もそれなりに有る様で、夜一の身体の筋肉の強張り方を見るに、四肢の末端に掛かる重量に抗っている様に見受けられた。

現在持ち上げられている左脚も、揺れる度に彼女の上半体がやや前後している。

やはり試作品は試作品らしく、破壊力等の効果は十分だが実用性まで考慮した調整は成されていないのだろう。

作成者が普通の感性を持っていれば、ほぼ確実に使用許可は出さないのであろう代物だ。

実際、喜助が実戦で用いる研究品は大抵がほぼ完成していると言っても過言ではない。

携帯用義骸等が良い例だ。今は未だ未登場ではあるが、利便性が高い分扱いが困難の為、喜助以外には使用不可能であるそれは、実験と検証も兼ねていた為に使用されたの

だろう。

夜の装着している特製手甲についても、喜助自身が使用可能な範囲まで開発を進められればその限りでは無いのだろうが。

「あれしきの怪我なぞ、睡でもつけておけば直ぐに治る。儂の身体は特別なので」「…そうかよ」

——流石にこの場面で正直に答えてくれる訳は無いか。

一番知りたかったのはその事だったのだが。ノイトラは内心で舌打ちした。

如何にこの世界の住人が敵の疑問に対しても律儀に答えてくれる性分であるとは言つても、限界は有るといふ事だ。

自身の失態による負傷を秘匿したいであろう夜一の性格上、他者に治療を頼んだとは考えにくい。

一番有り得ないのは織姫だ。他の者に対しては素つ気無い態度を取る夜一だが、意外と彼女の事は気に掛けている。怪我の存在を知れば余計に気を遣うであろうと想定し、何も言わない筈だ。

だからと言つて喜助の薬を処方したというのも、イマイチ説得力に欠ける。

ならばやはり可能性として高いのは、夜一自身の持つ高い自然治癒力の結果だろう。日常的に戦いや過酷なトレーニングの中で自身の身体を痛め付け、鍛えている格闘家やプロレスラーの自然治癒能力は一般人を凌駕するのと原理は同じ。

彼等の中には軽い骨折程度の怪我をたった数日程度で治してしまつた例もあると聞いた事があつたノイトラは、多分夜一もそうなのだろうと当たりを付けた。

史実でもものの一日で私生活には支障が無い程度に回復した彼女の事だ。例えば骨が砕け様とも、多少の措置を施しただけで知らぬ間に回復していきそうだ。

「気遣いは無用じゃぞ？ ほれほれ、遠慮なく掛かってくると良い」  
「……………」

手招きの代わりのなのか、夜一は一定のリズムで両手の手甲を打ち合せ始める。

ノイトラは無言のまま巨大な斬魄刀を右肩に担ぐと、重心を低くして静かに戦闘態勢を取つた。

想定外の事態ではあるが、実を言えばそれ程緊迫している訳でも無い。

だが咄嗟にチルツチをこの場から離脱させたのは正解だった。

先程の一撃を受け止めて解つたが、試作品と言えども、あの特製手甲は並の破面は疎

か下位十刃の鋼皮ですら破壊せしめる威力を持つている。

加えて夜一の技量と瞬間の事を考慮すれば、少なくとも帰刃形態の上位十刃が相手でなくては話にならないだろう。

ノイトラは構えを解かぬまま、先程から激しい戦闘音を発生させている喜助とワンダーワイスの居る方角に視線のみを向けた。

表面上は喜助の劣勢だ。下手すれば並みの十刃を上回るであろう実力を持つワンダーワイスは、響転を多用した目まぐるしい動きで相手を翻弄し、ピンク色の虚弾を連射している。

背中に背負ったクレイモアを思わせる斬魄刀を使用する様子は一切無い。

藍染の事だ。ワンダーワイスが山本総隊長への切り札である事を悟らせない為、些細な情報も与えたく無いのだろう。

それが更に得体の知れなさを助長させ、喜助の意識を完全に織姫から逸らす事にも繋がると思つて。

その当人は現在、らしくも無く余裕の無い切羽詰まった様子で、瞬歩を多用しながら回避行動を取っていた。

頬から滝の様に冷や汗を流し、全身の至る所から血を流している。

どうやら何発か虚弾の直撃を受けているらしい。

——まあ、フエイクだろう。

ノイトラは確信していた。

あからさまに浮かべている焦燥感も出血も全てが大嘘。出血については何か仕込んであるに違いない。

それ以前に、頭脳云々を除いても相当な実力者である喜助が、易々とこんな無様な姿を晒す筈が無い。

「美女が誘っておるといいうのに余所見とは…連れない奴じゃのう!!」

ノイトラの意識が此方を向いていないと気付いた夜一は、その瞬神の二つ名に恥じめ速度の瞬歩でその場を跳び、ノイトラの背後上空へと移動していた。

その時既に両手を振り上げた体勢であり、移動と同時に無防備な後頭部目掛けてハンマーの如く振り下ろしていた。

「…そいつは悪かった、な!!」

敵と対峙していながら余所見をするという態度とは裏腹に、一切警戒を怠っていないな

かったノイトラはその奇襲に早くから気付いており、その場から左回りで振り返りつつ、右肩に担いでいた斬魄刀を大きく下から上へ掬い上げる様にして振るう。

同時に身体の軸も同方向に回転させ、元から重量の有る刀身に更に遠心力を上乗せした上で、夜の振り下ろしに真つ向から対抗する。

再び発生した轟音。先程とは異なり、互いの攻撃がぶつかり合った為か、その生じた音量と衝撃の大きさは尋常では無い。

その余りの余波に、其々に戦闘を行っていた者達は一瞬身体を硬直させ、その方向を振り向いた程だ。

ノイトラと夜一は互いに弾かれる様にして距離を取ると、その間を置かずして同時に踏み込んだ。

先手を取ったのは、純然たる速度では軍配が上がる夜一。

挙動を悟られぬ様、無拍子の動作で右脚を振り上げ、ハイキックの要領で頭蓋の左側頭部を粉碎しに掛かる。

完全に後手に回ったノイトラだったが、鋭い獣の勘は既にそれを察知していた。

予め右後方へ引き絞っていた斬魄刀を斜め左上へ薙ぎ払うと、それは脚甲を弾くばかりか、彼女の身体ごと軽々と吹き飛ばして退けた。

——何という膂力か。

夜一は宙を舞いながら驚愕した。

身の丈を超える得物を只の棒切れの様に扱っている時点で何となく察してはいたが、まさか試作品とは言え、喜助の手掛けた特製手甲を用いても押し切れないとは予想外だった。

それをおくびにも出さず、空中で体勢を整えると同時に壺子で形成した足場踏み台に瞬歩を発動。再び接近戦を仕掛ける。

「なんじゃ、何時ぞやの様に脚は使わぬのか!!」

瞬時に間合いを詰めると、手足入り乱れた打撃を目にも留まらぬ速度で連続して繰り出す。

そのどれもが必中であり、威力も十分。一撃でも食らって怯む様な事があれば、瞬く間に畳み掛けられるであろう結果は目に見えていた。

——馬鹿な事を抜かすな。

マシンガンを連想させる程の打撃の嵐を捌き、そして稀に反撃を加えつつ、ノイトラは内心で毒づいた。

そんな隙を与える気など毛頭無い癖に良く言ったものである。

挑発も搦め手も御手の物である彼女の事だ。寧ろ戦闘スタイルを切り替えた途端、その一瞬の隙を突いて来る可能性が高い。

正直言えば、現時点に於ける徒手空拳での打ち合いは可能だ。

流石にそのままとはいかないが、霊圧で鋼皮を更に強化した状態であれば、硬度で劣る事はまず無い。

だが瞬間の存在を忘れてはならない。

もしそれと特製手甲が組み合わさった全開状態の夜一の前では、例え歴代十刃最高硬度の鋼皮でも耐え切れないだろう。流石に帰刃を選択せねば危うい。

試作品だけに完成品との多少の差は有るだろうが、やはり最悪のパターンを想定して動くに越した事は無いのだから。

「ジョーダン、そんな硬えモンに打ち込んだらコッチが怪我しちまうぜ!!」

「そう遠慮するな! 存分にその脚を振うが良い!! 粉々に打ち砕いてやろう!!」

「アンタ只単に仕返ししてえただけだろオイ!!」

戦況は依然として激しい打ち合いが続いており、今の所はほぼ互角。

その反面、会話内容はシリアスとは程遠い。

それだけを聞いていれば、実力者同士がじゃれ合っている様にしか思わないだろう。だが現実には真逆。紛れも無く命懸けの激戦だ。

——もう少しマシな造りに出来なかつたものか。

夜一は予想以上に扱い辛い特製手甲に対し、内心で文句を垂れていた。

出撃前、これはあくまで試作段階の品であつて実用性は後回しになつていいるから危ない、喜助が念入りに忠告していた事実も忘れてだ。

完全に無茶振りである。

とは言え、夜一は武に関しては天性の感覚を持つている、所謂天才に類する存在だつた。

今ではその扱いに慣れ、枷になる筈の重量すら上手く利用した運用法すら見出ししており、それ程問題では無かつた。

だがノイトラは後手に回りつつも、現在進行形で見事に捌き続けている。

——本来の得物を握つただけでこれだけ違うか。

夜一は表面上は平静を保っていたが、内心驚愕していた。

主に刀身の部分で受け、弾き、時に柄の部分で受け流す。

重量に振り回されている自分とは異なり、その巨大な得物をまるで自らの手足の一部の如く滑らかに、且つ高い精度で扱うその技量は凄まじい。

劍筋を見る限り、間違つても天才では無い。素養は有るが、それだけだった。

だが長きに亘つて地道に劍を振り続け、貪欲に自らを高め続けたのだろう。見るからに感じ取れる、やや無骨ながら真つ直ぐな劍筋はその事実を物語っている。

それだけに限らず、時間の経過と共に段々と戦法が変化。守勢にも拘らず強引な反撃を捻じ込むという荒業も見せ始めている。

そのタイミングに狙いは絶妙。その時ばかりは思わず攻撃を中断して回避行動を取らねば危うい程だ。

だがその劍には必殺や必中の意志が殆ど込められておらず、本人も余り意図していない範囲での行動だというのが判る。

恐らくこれ等全ては勘に従つてのもの。時折防御の中にも見て取れた、野性的で鋭いそれだ。

——敵とは言え、中々に面白い男である。

何度も打ち合っている内、夜一はノイトラに対して僅かに感心を覚えていた。左脚の借りを返す事だけを考えていた筈なのだが、まさかこうも心踊らされる戦いになるとは、と。

一番身近に世紀の天才が存在している影響か、余計にその異質さが際立つて見えた。下手すればそれだけで通用しそうな程に鋭い勘を持ちながら、それに頼り切ろうとは

せずに態々堅実さを追求した戦い。

まるで純然たる力のみで生態系の頂点に君臨してきた野獣が、人の扱う武術という別世界の強さを取り込まんと試行錯誤している様だ。

相反する二つを兼ね備えた不自然な戦闘スタイルは新しく、見ていて飽きない。何時の間にか夜一の口元には笑みが浮かんでいた。

「やりおるのう!! お主等破面というのは皆そうなのか?」

「さて、な!!」

激しい攻撃を更に激化させる夜一に対し、ノイトラは次第に焦燥を感じ始めていた。

やはり特製手甲の重量がネックらしく、動き自体には前回の様な素早さや機敏さは見られないが、其処は流石達人級。動作の一つ一つの技量が半端では無い。

意図的にそう仕向けているのだろう。拳動が悟りにくい上、その動きを眼で捉えられたとしても、普通の対応では追いつかないのだ。

憑依前、古武術を嗜んでいた恩師にからかい半分で間合いまで踏み込まれた経験があるが、正にその時と同じ。

眼前で動いたのは見えていた筈なのだが、認識が追いついていないのか一切の反応す

ら出来ず、容易に懐へと潜り込まれたのを覚えていた。

それを近くで目撃していた同僚の話によると、自分が間抜けにも只棒立ちしているところ、普通にスツと近付かれただけに見えたそうだ。

本来の武とは、漫画世界の戦闘の様な華やかさとは程遠い。

傍から見ればぎこちなく、無駄だらけに見えたりする。

だがその中身は全く以て異なる。

——動きは見えていた。けど気付けば既に打ち込まれていた。

学生時代、体育の授業で行った剣道にて、有段者である担当教師に秒殺された者が零していた言葉が脳裏を過る。

他の武道でも、一度経験してみれば素人は皆同じような感覚に陥るだろう。

夜一の場合はそれに加え、所々にフェイントが組込まれているときた。

繰り出された攻撃の軌道を素直に辿る様な真似を続ければ、あつという間に罠に嵌り、次の瞬間には別方向から怒濤の追撃を受けているだろう。

この様に技量で圧倒的に劣っているノイトラが安定して攻撃を捌き続けていられているのは、夜一の考察の通り勘の御蔭だ。

迫り来る攻撃を視認するだけで、それがフェイントか本命かを全て感じ取ってくれるのだ。

時折返している反撃だつてそうだ。何時どのタイミングで、何処へ狙いを定めれば良いのか、その道標を明確に示してくれる。

後はそれに沿つて自身が磨き上げた剣を確実に振るえば良い。

だがその勘に頼り切りにならぬ様、出来る限り自身の感覚で攻撃を読み取る努力をしながら。

ノイトラの純粹な武人としての格は、護廷十三隊の隊長格よりも下だ。

先程一角に出し抜かれ掛けている事から、少なくとも副隊長以下、上位席官レベルに収まるだろう。

現実的には軽いゴリ押しでも如何にか出来てしまう程のポテンシャルを持っているので、本来なら余り気にする必要は無いのかもしれない。

だが今はその一角を遥かに上回る技量を持つ夜一が相手である。しかも本気でだ。

前回は警戒心が前面に出ていた為、互いに様子見が中心だっただけに過ぎない。

特製手甲の御蔭で鋼皮を気にする必要も無くなり、序盤に先手を取る事に成功したとくれば、夜一が積極的の攻勢に出るのは容易に想像出来た。

それと真正面からぶつかり合えば、ゴリ押しでは決して通用しないとも。

「ハアッ!!」

夜一の右腕より放たれた打撃を先読みして弾くと、後方に跳んで距離を取る。

そして勘に従い、両手で柄を握った状態から最大速度の響転で間合いを詰め、胴抜き  
の要領で斬魄刀を本気で薙ぎ払った。

憑依直後から現在までに積んで来た鍛錬の中で、気が遠くなる程に振るい続けた末の  
集大成。

それが持つ速度、鋭さ、威力。どれも先程までのものとは一線を画した、正しく一級  
品と言っても相違無い必殺の一振り。

——確かに、剣というのは片手で振るより両手で振った方が強い。これは真理だ。

ノイトラは夜一の反応を見ながら、剣八の放った迷言とも取れる名言を内心で呟い  
た。

「ぬッ!!」

これが特製手甲を持たない状態で、且つ隙を突かれたただだったならば対処は容易  
だった。

只、その攻撃が予測を超えたもので無ければ、という条件も付いた上でだが。

——やはり加減していたか。

やってくれる。先程までのそれは何だったのかとツツコみたくなる程、その一振りは別格だった。

狙いは腹部。刃先が向けられていないとは言え、直撃を食らえば間違い無く終わるだ。これが靈力の少ない耐久力の低い者であれば只の肉片となつて弾け飛んでいるであらう。

直撃までに残された刹那の時間。夜一は両手に加え、右膝を持ち上げ、四つの内三つの特製手甲を防御に回す事で、ノイトラの薙ぎ払いに対抗せんとする。

やがて両者は激突。その一合に勝利したのは——ノイトラだった。

夜一はバランスが完全に崩れた体勢で激しく回転しながら吹き飛んで行く。見れば防御に使用した三つの特製手甲はバラバラに碎け散っていた。

「…くッ!!」

装備は壊れたが、咄嗟に引いた御蔭か、幸いにも中身の手足は無事だった。

衝撃によつて激しい痺れが襲っている為に反撃には転じられないが、動かせない事は無い。

まだ左脚に一つ——そして瞬間が残っている。

攻撃手段としては十分。そう考えた夜一は体勢を建て直すと、視線をノイトラの居た場所へと向ける。

「な……に……？」

だが其処には居る筈の存在が居なかった。

疑問の声を漏らす夜一だったが、次の瞬間、上空より自身に掛かる影を感じた。

「しまっ——！！」

「終わりだ」

ノイトラは平坦な声でそう宣告した。

斬魄刀は右手に握られたまま下に降ろされている。使う気は無いのだろう。その代わりに左腕が持ち上げられており、その掌は夜一の方を向いていた。

「グジュリア・デ・パラス虚弾・多重奏」

言うなれば構えを取った体勢から虚弾を連射する技だ。

掌でも指先でも何処でも良い。発射地点に指定した部分に、極限まで薄く圧縮して固めた霊圧の層を重ね、間髪入れずに連続発射。最後に霊圧をやや増した止めの一発で、相手を完全に沈黙させる。

前回の任務でヤミーを犬○家状態にしたのはこの簡易版だ。

ちなみに技名を考えたのはセフィーロ。厨二的ネーミングなら御任せを、等と妙に張り切っていたのがノイトラには印象的だった。

現時点での連射回数に限界は大凡二十から三十。多大な集中力が必要となる意外と難易度が高い技の為、状況によって回数が変動してしまうのだ。

今回は十八。余裕が無かった分、やや調子が悪いらしい。

だが正規な構えより放たれるその虚弾の一つ一つは、たったの三発であのヤミーを撃沈させたものと余り差は無い。

五発以上直撃すれば流星の夜一と言えど確実に戦闘不能にまで追い込めるだろう。

しかも彼女自身、虚弾は初見だ。威力は及ばないが、虚閃の二十倍もの速度を持つという事も何も知らない。

「——ッ!!!」

声にならぬ悲鳴を漏らしながら、夜一は呆気無くその虚弾の弾幕の直撃を受けた。

その様子に違和感を覚えながらも、ノイトラは攻撃の手を緩めない。

十七発までの発射が完了し、やがて最後の一発を残すのみとなった時、夜一は既に変わり果てた姿となっていた。

直撃した虚弾のは計七発。大半が外れていたが、それでも彼女が負ったダメージは十分だった。

刑戦装束は襤褸切れと同等の代物へと降格し、防御に使ったらしい手足は左脚を除いてあらぬ方向へと拉げ、露出している肌や頭部からは激しく出血している。

見た所は完全に満身創痍だ。戦闘続行はどう考えても不可能だった。

止めの一発を放つまでも無く、夜一はそのまま全身を力無く脱力しながら、重力に従って落下して行つた。

その様子を静かに眺めていたノイトラだったが、如何にも違和感が拭えなかつた。隙を突かれたとは言え、あの夜一がこうも簡単に敗れるだろうか。

「やつぱり有り得ねえよなあ……」

ノイトラには初めから夜一を殺す気なぞ毛頭無かった。

何せ彼女の存在も、本来の歴史を形成する為に必要不可欠な要素の一つだ。間違っても欠かす訳にはいかない。

故に先程の虚弾・多重奏には手心を加えていた。直撃した数が少なかったのはその為だ。

多少想定外な事態もあつたが、恐らく今回の件はそれ程大きな影響を及ぼす結果にはならないだろう。

例えば今回破壊した特製手甲については、寧ろもつと強化が施される可能性が浮上しただけだ。

そうなれば藍染との決戦時、結果は変わらないにしても、幾分か戦闘時間が延びる程度で済むだろう。

—— 出来ればこれで終わってくれてれば有難いのだが。

これが本当に夜一を打倒した状況だとすれば、瞬間が出ない内にこの状況まで持ち込めたのは幸いと言える。

この後は初めに考えた通り、ワンダーワイズを拾って適当に喜助の注目を逸らしつつ、任務完了時間まで乗り切られれば万々歳だ。

最悪のパターンを考えるとすれば、夜一がこの後復活するか、初めから無傷で戦線復帰した場合だ。

まず瞬間を使用する可能性が高い事が一番の懸念事項だろう。

特製手甲は殆ど破壊してあるが、左足の一つが残っている。それだけでも十分過ぎる程に脅威だ。

加えて夜一が喜助に零した台詞から考慮するに、瞬間を発動した状態であれば素手でも十分破面の鋼皮を破る事が可能であると推測出来る。

そうなればノイトラの選択肢は限られる。

未解放の通常状態であれば、出し惜しみ無く持てる全ての手の内と力を総動員する事。初見の技であれば相手の意表を突けるし、任務終了までの時間稼ぎは出来るだろう。

それよりも確実性を求めるならば——やはり帰刃を選択する事だ。

より硬度を増した鋼皮を持つ帰刃形態で耐久戦へと持ち込み、後は先に述べた案と同様に時間稼ぎに徹すれば良い。

どちらにせよ、掌に残った最後の一発である虚弾を食らわせれば如何なるのか。それを確認せねば始まらない。

ノイトラは夜一の落下方向へと最後の虚弾を発射しようと構え——直前に気付い

た。

そういえば彼女には相手に自身を倒したと思ひ込ませるほどの残像を見せる、彼女特有の瞬歩が在ったではないかと。

元隠密機動の癖なのか、夜一は常に溢れ出す霊圧を抑えている為、探知しにくい。交戦を始めた為に無意識の内に切っていた探查神経を再び発動し、落下地点を探る。すると案の定、その場所には何の霊圧も存在していなかった。

「確か隠密機動の歩法に——!!」

隠密歩法 “四楓” の参、空蟬<sup>うつせみ</sup>。

それは護廷十三隊の隊長レベルを軽く欺く程のものだ。

初見であれば、例え上位十刃であろうとも見抜く事は困難だろう。

もしそうだとすれば、夜一は未だ健在。

ノイトラは掌に固めた霊圧の層を拡散させると、即座に響転で距離を取った。

「歩法か。ふむ、観点は悪くないが…ハズレじゃの」

案の定、ノイトラが元居た場所には、初めに真つ二つになったものと同じ黒いマントを身に纏い、悪戯が成功したとでも言わんばかりの良い笑顔を浮かべている夜一の姿が在った。

「テメエ……」

「さて、（こ）こで答え合わせといこうかの」

「……黒い……玉？」

夜一が懐より取り出したのは、ヤミーに対して喜助が見せたものと同様。

——まさかそれは。

瞠目しながら硬直するノイトラの前で、夜一はその玉を口に当てると、風船の様に膨らませてゆく。

するとある一定の大きさまで膨らんだ瞬間、風船は瞬時に巨大化すると盛大に破裂。その中からは刑戦装束に身を包んだもう一人の夜一が現れた。

「義骸の一種よ。喜助が開発したものじゃ」

「……マジかよ」

それは喜助以外には使用不可能な筈の、携帯用義骸であった。

何故夜一が使いこなせているのか。何故霊圧遮断の黒マントがもう一枚有るのか。

疑問は他にも多々あるが、今のノイトラには素直にそれを問い掛けられる様な精神的余裕は無かった。

「どうじゃ？ 何時入れ替わったのか…お主に解るかの？」

そのもう一人の自分の顔を上下左右へ引つ張りつつ、まるで悪戯が成功したと言わんばかりに満足気な笑みを浮かべる夜一。

普通に見れば美しい筈のだが、何故か寒気を感じるその表情。

ノイトラは右頬に一筋の冷や汗が流れるのを感じた。

## 第二十四話 鳶嬢と鉄燕と、三日月と黒猫と…その他諸々

ルピは自身の聴覚を支配する耳鳴りにやや顔を顰めつつ、横目でノイトラと夜一の戦闘風景を観察する。

——やはり何処から如何見ても詐欺だ。

内心でそう零し、改めて認識した。

夜一より超高速で繰り出される無数の打撃。それをノイトラは巨大な斬魄刀で全て捌きつつ、剩え反撃を返してみせる。

如何見ても有り得ない。あんな速度の攻撃の嵐を、これまた重い得物を同等の速度で振るって対抗するなぞ考えられない。

自分ならば帰刃形態であっても初撃から食らっている自信が有ると、ルピは素直に認めた。

以前虚夜宮内の通路で遭遇し、調子に乗って挑発したあの時、戦闘まで発展しなくて本当に良かったと安堵しつつ。

その激戦を繰り広げているノイトラ達とは反対方向に視線を移してみれば、其処には

つい先程まで喜助を圧倒していた筈のワンダーワイズが、何故か逆に追い詰められているという意味不明な事態に陥っていた。

一体何の手法を行ったのか不明だが、何度も虚弾の直撃を食らっていた筈の喜助は、何時の間にか無傷の無事な状態へと元戻り。

響転を連続使用し、超高速で動き回るワンダーワイズへと遅れる事無く追従し、これまた何時の間にか編み出したのか、虚弾を発射直前で相殺するという芸当をこなし、手玉に取っている。

——強い。

只の知恵遅れかと思っていたが、どうやら勘違いだったらしい。

傍から見れば子供が我武者羅に暴れ回っている様に見えるが、実際は異なる。

喜助の得体の知れなさを本能で感じているのか、接近戦を徹底的に回避し、遠距離攻撃を中心にした戦法。しかも捕捉されぬ様、常に超高速で動き回るといふ対策も取っている。

「階級詐欺はノイトラだけで十分なのにさア……」

それを赤子の様に捻っているあの喜助という男も相当だが、下手すればワンダーワイ

スの実力は自分でも後れを取るレベルだと、ルピは内心で齒噛みした。

藍染の言葉によると、ワンダーワイスは十刃になる事は無いと明言されてはいる。それでも自身の地位を脅かしかねない存在に対しては警戒もしたくなるのが、立場ある者としての性だった。

常日頃から虚夜宮内での噂話を良く耳にしているルピだが、意外にも夜一と喜助については全く知らない。

虚夜宮内での情報の共有は、ビエホの管轄下にてある程度はされているが、やはり格差はある。

従属官では無い数字持ちを含めた一般的な遊撃要員の破面達には、各勢力の情勢程度。十刃にはそれを更に踏み込んだ内容から、要注意人物のプロフィールまでの詳細まで知る事が許されている。

ルピは十刃へ昇格して間もなく、未だその情報を見ていない。

その為、喜助や夜一が来ても名前すら判らなかつたのだ。

だが少なくとも、この二人の実力は相当高いと即座に認めていた。

基本的に破面は死神や人間といった他種族を見下す傾向が強い。

それはルピも例外では無かつたが、流石にあの立ち回りを見てまでそう考え続けられる様な御目出度い頭はしていなかつた。

一先ず自分に出来る事は、今拘束している二人の死神を始末し、此方へ向かつて来て  
いるらしいチルツチと合流。

後はそう時間も掛からない内にワンダーワイズを退けるであろう喜助の相手をする  
事だ。

何処まで戦えるか判らないが、別に仕留める必要は無い。任務終了まで時間稼ぎに徹  
すれば問題は無いだろう。

夜一については——取り敢えずノイトラを信じるしかない。

とは言っても、ルピは彼が負ける未来など微塵も想像していなかったが。

それに考えてみれば、任務開始から三十分以上は経過している。

ウルキオラの任務も間も無く済む頃だろうし、残り時間はそう多く無い筈だ。

「ま、しよーがない。それじゃこっちはこっちで続きしよつか？」

ルピは思考を切り替え、再び視点を元に戻す。

其処には喜助が触手を両断して窮地から救出してくれたにも拘らず、そう間を置かず  
に再び拘束されてしまった乱菊の姿が。

折角始解した斬魄刀の柄を持つ腕も、身動き一つ取れない為に完全に無力化され、灰

状の刀身は虚閃にて吹き飛ばされて以降、遠く離れた場所でフワフワと漂っているだけだった。

弓親については相も変わらず触手の中でもがき続けており、体力を無駄に消耗するだけで何の進展も見られていない。

「ホント話んなんないよ。おねーさんはせつかくあのゲタ男に助けてもらってもスーグ捕まっちゃうし、そっちのイケメンはさつきかからずと芋虫みたいに動くだけだし——」

肩を竦め、呆れた様子でルピは長々と言葉を繋ぎ始めた。

主に機嫌が良かったり調子に乗っていたりする時に口数が増える彼だが、優勢とは言え戦闘中にまでそうなるのは欠点の一つだった。

「…あんたってさ、随分お喋りなのね」

「それに——ん？」

其処で突然、ルピの言葉を途中で切る様にして乱菊が口を開いた。

案の定、話しを邪魔された事でやや不機嫌になるルピだったが、次の瞬間には更にそのレベルが跳ね上がった。

「あたしお喋りな男ってキラいなよね——なんか気持ち悪くって」

生殺与奪の権利を握られた状態にも拘らず、一切怯む事無くそう言い放った乱菊。ルピは見るからに眼を細めた。

その身に纏う空気は冷え切り、殺意が溢れる。

「……言ってくれるじゃん。そっか、おねーさんてばそんな死にたいんだア」

その顔を加虐的な歪んだ笑みに変えると、ルピは決めた。

——こんな奴、生かして置く価値は無い。

拘束に使用している二本とは別の、フリーとなつている残りの触手全てに神経を集中させる。

簡単に言えばその触手全てに棘を生やし、取り囲む様にして一斉に突き刺す魂胆だ。これなら例え邪魔が入ろうとも確実に仕留められる。入らなければ乱菊は見るも無

残な骸と成り果てるだろう。

「…あれ？」

盛大な血祭パーティを開催せんと、触手を動かした瞬間、ルピは気の抜けた声を漏らした。

その六本の触手が何故か持ち上がらないのだ。

其処でふと気付く。周囲の空気の温度が明らかに低い事に。

先程から白い息を吐いている事が何よりの証明だ。

触手を伸ばしていた方向を見遣れば、何と其処には地面から伸びた巨大な氷の柱に取り込まれた触手達の姿が在った。

鈍いとは言え一応感覚は通っている筈なのだが、何時の間に。

そしてそれを成したであろう張本人を、ルピは忌々しそうに睨み付けた。

「つ…お前…!!」

「残念だったな」

冬獅郎は毅然とした態度で言い放った。

ルピの触手によって完膚無きにまで砕かれた筈の氷の翼は元通り。

それと同時に怪我の治療も行っていたのだろう、チルツチとの戦いの中で出来た複数の切傷も跡形も無く完治していた。

「生きてたのか…」

「あれしきの攻撃で俺が死んだと思ったか。そいつは舐め過ぎつてもんだぜ」

冬獅郎は徐に斬魄刀を持ち上げ、その切っ先をルピへと向けた。

彼の背後には無数の氷柱が立ち並んでおり、それは統率された動きで周囲へ展開されて行く。

気付けばそれ等全てはルピの周囲を取り囲んでいた。

「なっ!?!」

「俺に時間を与え過ぎたな。もはやてめえに勝ち目は無え」

「くそっ…!!」

危機感を覚えたルピは、即座に弓親と乱菊を放り投げると、その場から退去しようとして試みる。

だが地面に張り付けされた六本の触手がそれを阻害した。

残された手段は、自らその触手を半ばで引き千切るな何かしてその拘束から逃れるしか無い。

だが生憎、自身が追い詰められる事に慣れていなかったルピは、焦燥の余り其処まで頭が回っていないかった。

「終わりだ… “千年氷牢”」

周囲を取り囲んでいた氷柱が、一斉に中央へと集まり始めた。

——逃げられない。

ルピは即座にそう悟った。

今思えば確かに彼等の事を舐めていた。

探査神経で相手が死んだか否かを判断する事もせず、勝手に死んだと思い込み、余裕をかましてダラダラと話してこの結果だ。

如何考えても自業自得以外の何物でも無い。

ルピは後悔する共に絶望の表情を浮かべた。

「…え？」

だがその死の壁はルピまで到達する事は無かった。

ルピが背を向けている方向から突然大きな霊圧が発生したかと思うと、無数の巨大な刃が飛来。その全ての氷柱をバラバラに切り刻んだのだ。

「なん……だと…!？」

勝利を確信していた冬獅郎は息を？んだ。

するとその内一枚の刃が急激に方向転換。今度は彼を標的に定め、更に加速しながら向かって行った。

咄嗟に背中に生えた左側の氷の翼で防御する冬獅郎。

だがその刃の斬れ味は想像以上で、直撃と同時に翼の半分以上の深さに食い込んだ。それで止まる事無く、一秒二秒と経過する内、更に奥深くへと沈んで行く。

——刃が高速振動している。

その事実に気付いた冬獅郎は危機感を覚えた。

受け止めている翼の内側に、もう片側の翼を重ねると、更にその内側には斬魄刀を潜り込ませ、三段階の防御を形成した。

振動剣の原理としては、刀身を高速振動させて物体を切削する、または振動によつて発生した熱により溶断する事だ。

つまりそれは斬り付けた瞬間よりも鏢迫り合いの様に受け止めた状態の方が最も効果を発揮する。

博識な冬獅郎はそれを理解しており、防御を厚くしたとは言えこれ以上は危険だと判断し、迷わず後方へと跳んだ。

「ちっ…!!」

始めからそれを目的としていたのだろう。冬獅郎が引くと同時に、その刃は食い込んでいた氷の翼から抜け出すと、そのまま元の場所へと戻って行った。

向かう先はルピの居る方向よりやや上。

其処には何時の間にか、先程氷柱を切り刻んだ無数の刃を羽として持つ巨鳥が居た。

「まったく、舐めて掛かるからそうなんのよ」

「チルツチ……」

冬獅郎を追い払った一枚の刃が、本来あるべき場所である翼へと帰属する。

帰刃形態である車輪鉄燕の姿となったチルツチは、呆然と此方を見上げて来るルピを見下ろしながら溜息を吐いたのだった。

瞬間どころか、全く予想だに出来無い行動を取り、ノイトラを完全に欺いてみせた夜  
一。

彼女は自身の姿形をした義骸を両手で押し潰した後、したり顔でその豊満な胸を張つた。

「ふむ、喜助は使いどころが難しいなどと言っておったが…コツを掴めばこんなものか」  
「……………」

距離を保ったまま、ノイトラは夜一を睨み付けた。

何か仕掛けていそうだと考えていたが、まさか喜助が用いる筈だった道具を戦略の中に組み込むとは予想外だった。

特製手甲は手足を完全に覆い隠すギプスの様な形状となつてゐる為、装着中は物を掴んだりという事は一切出来無い。

まるで初めから手甲が碎かれる事も想定していたとしか思えない。

この調子だと他にも何か仕込んでゐる可能性が高い。

流星に相手に直接干渉したりダメージを与える様な物は無いと信じたいが、発明者がアレだ。警戒は必要だろう。

見た所怪我一つ無い上、特製手甲は左脚のみにしか装着されてゐない。

その事から、夜一が携帯用義骸と入れ替わつたのは、ノイトラが本気の一振りで薙ぎ払つた後から、虚弾・多重奏が放たれるまでの僅かな時間であると判断出来る。

あの追い詰められた状況から抜け出すという、刹那の内の判断力と機敏性には脱帽

だ。

単純な戦闘能力の高さだけでは猛者とは言えない。如何なる状況下に於いても冷静な思考を失う事無く、戦況を見極め、自身の取るべき手段と経緯を明確にイメージして行動する。それが出来てこそ初めてそう呼ばれるのだ。

「しかし、おぬしも恐ろしい男じゃのう。完成品では無いとは言え、対鋼皮用に作られたこれを打ち砕くとは……」

「……謝る気は無えぞ」

腕を組んだ夜一は、徐に左膝を眼前まで持ち上げる。

そのまま何かを考える様にして顎に手を当てると、脚甲をまじまじと観察し始めた。

一体どれ程の力を加えれば壊れるのか、等といった考察でもしているのかもしれない。

——それにしても余裕過ぎる。

ノイトラはそう不審に思いつつ、再び斬魄刀の柄を両手で持ち、やや正眼に構える。やや、というのは多少斜めを向いているという意味である。

普通の刀の様に構えると、柄尻に繋がった鎖が右脚に当たる為、踏み込みの邪魔にな

るのだ。

最悪、踏み込んだ直後に脚の何処かへ引つ掛かりでもすれば一卷の終わりだ。鎖を外せば何も問題無いのだが、それはそれで今度はデメリットも出て来る。

ならば多少構え辛くとも、扱いに慣れた今の形を保つ方がマシだった。

ノイトラの取る構えの基本は、剣道の構えを参考にしたものである。

憑依前、彼は高校入学の直後までは地元剣道団体に所属していた。

実力は決して高いとは言えなかったが、基本には忠実で、試合に勝つ事よりも剣筋を磨く事を意識して稽古を重ねていたのを覚えている。

故に基本は十二分に押さえており、鍛錬時の素振りの際には特に困らなかった。

実際は長物には長物の扱いというものがあるので、誤った使用方法なのだろうが、学べる環境が無かったので致し方無いだろう。

ノイトラの斬魄刀は刀とは到底言えない形状に重量を持つており、柄の握る感覚も全てが異なる。

だが武という観点から見れば、その扱いに関する根幹は皆共通している。

そして出来上がったのが、刃先の部分で相手を斬るのでは無く、刀身の外周部分で叩き潰す剣だった。

一応刃の部分を用いた斬撃も練習しているが、どれも分類としては突き技が中心であ

り、躲された時の隙が大き過ぎる為、実戦ではほぼ出番は無いと言って良いだろう。

「尋常な立ち合いの中でそうだったのじゃ。べつに構わん」

さて、と夜一は一息置くと、持ち上げていた左膝を下ろした。

両足を肩幅まで開いた後に重心を落とすと、小さく呟く。

「ちと本気を出すか」

急激に高まる夜一の霊圧。

それと同時にノイトラの背筋に感じる悪寒、本能からの警報。

——簡単に終わってくれるな。

そう語る夜一の鋭い視線を受け止めながら、ノイトラは覚悟を決めて待ち構えた。

「……………」

「……………」

訪れる沈黙。

極限まで張り詰めた緊張感がそうさせているのだ。

加えて互いの体感時間にも狂いが生じる。

それこそ、一秒が何倍にも長く感じられる程に。

やがてその極限まで張り詰めた糸は——とある切っ掛けが元であつさり切れた。

空座町北部上空一带に、突如膨大な霊圧が押し掛かったのだ。

ノイトラは即座に気付いた。その正体はチルツチだと。

霊圧の大きさからして、どうやら帰刃を選択したらしい。

彼女の傍にはルピ。少し離れた位置には弓親に乱菊、そして復活したらしい、先程よ

りも大きい霊圧を纏った冬獅郎が居た。

だがそれを詳しく確認している余裕はノイトラには無い。

何せ僅かに気を逸らした一瞬の間に、前方に居た筈の夜一の姿が掻き消えていたのだから。

やはり特製手甲が四分の一となつた分、身体が軽くなつたのだろう。瞬歩の速度が先程までとは一線を画している。

当然、霊圧遮断のマントを身に纏っている為に、探査神経等の手段は意味を成さない。だがノイトラの勘はその向かう先が何処なのか、ハッキリと感じ取っていた。本人

が集中していたのもあるのか、正しく手に取る様にして。

手首を左回りに九十度返し、斬魄刀の刀身を横向きにする。

同時進行で身体の軸ごと右回転しながら、自身の周囲を豪快に薙ぎ払った。

直後、確固たる手応えが柄を通して手元を感じた。

それは決して慣れる事の無い——肉が潰れ、骨が碎ける不快な感触だ。

かつて最上級大虚探索の任務内にて、何度も何度も叩き潰して来た中級以下の大虚達を思い出させる。

視線を移せば、其処には八の字の刀身の外周部分が腹部に直撃し、身体をくの字に折り曲げ、口元からどす黒い血を吐き出す夜一。

——引つ掛かると思ったか。

明らかに勝負は付いている。だがノイトラは勢いを緩める事無く角度を変えながら更に回転。一周した後、もう一度背後へ、今度は斜め左上から右下に振り下ろした。

案の定、其処には無傷な姿で左脚を振り抜く夜一の姿が。

見ればノイトラの斬魄刀の刀身部分には黒いマントが覆い被さっているだけであつた。

どうやら空蟬を使用したらしい。

事前にその歩法の情報を持っていなければ間違ひ無く騙されていただろう。

「!!」

此処まで完璧に読まれるとは思っていなかったのだろう。  
夜一の目は驚愕に見開かれている。

「オオオオオ!!」

雄叫びを上げつつ、ノイトラは斬魄刀を本気で振り下ろす。

これが直撃すれば、その脚甲は間違い無く碎け散る。

先程夜一が両手右脚の三つ掛かりで防御した事を考慮すると、脚甲の破壊と同時に左脚も使い物にならなくなる筈だ。

下手すれば重度の粉碎骨折か、最悪はバラバラに弾け飛んだり引き千切れる可能性もあるが——其処は喜助の技術力辺りに期待するしか無い。

あの喜助の事だ。もし夜一が藍染との決戦に参加出来無いたなれば、何か別なギミツクも用意する筈である。

今のノイトラに相手を気遣っていられる様な余裕は無いのだ。というか、そんな隙を

見せれば一気に形成を逆転されてしまう。

——申し訳無いが、此方も引けないのだ。

そんな内心を誤魔化す様に、ノイトラは斬魄刀へ更に勢いを乗せる。

思い付きの言い訳だったとは言え、全十刃の存在する場で堂々と最強を謳ったからには、それなりの結果を残さねばならない。

でなければノイトラを待っているのは嘲笑の嵐。そして所詮は口先だけの輩という肩書が刻まれるだろう。そうして侮られてしまえばオシマイだ。

未解放のまま戦い続ける事に拘っているのはそういった理由に加え、他にもある。

帰刃すれば耐えられる、捌ける、勝てる。この帰刃すれば云々、というのはい訳に過ぎないのでは、というのがノイトラの考えだ。

それは即ちそうしなければ自分は負けてしまうという事実の証明。最強を名乗るのであれば、未解放で大抵の者には勝てる位のスタンスで居なければ説得力も何も無い。

そしてノイトラが常に仮想敵として見据えているのは藍染だ。少し劣勢になった程度で逐一帰刃している様では、彼には到底敵う筈が無いだろうと考えからも来ている。

確かに帰刃は素晴らしく気分が良い。あの際限無く湧き出る力の奔流と全能感はずも麻薬にも等しい。

破面達が他種族を見下すのも頷ける。

だがやはりノイトラの感性としては、帰刃は余り好ましいものではなかった。

その感覚に慣れ、または溺れてしまうのもあるが、何より大きいのは普段眠っている筈の戦闘狂的感覚が暴走しそうになるからだ。

普段の鍛錬では極限まで集中力を高めた状態で、且つ暴走する暇が無い程に消耗した後に帰刃する上、相手も偶像の藍染以外は居ないので余り問題は無い。

だが今は拙い。最悪、前回の様に暴走すれば、自分を止められる者は此処には居ないのだから。

頼みの綱であるウルキオラはグリムジョーの方へと向かうだろうし、そうなれば一秒でも早く反膜による回収が始まらねば何が起こるのか不明だ。

「んなっ…!!」

だがそんなノイトラの思いとは裏腹に、彼が有利で進んでいた筈の戦況は急変する。

斬魄刀と左脚が激突する瞬間——夜一の霊圧が爆発的に膨れ上がり、前者が押し負けるという結果に終わったのだ。

「まさかソイツは…!!」

「惜しかったのう、破面よ!!」

斬魄刀を弾かれた勢いで、その体勢を大きく崩したノイトラ。

露出した両肩と背に高濃度の霊圧を纏った夜一は、左脚を振り抜いた体勢から、霊子の足場を踏み台に瞬歩を発動。瞬時にその懐へと入り込んだ。

脚は使えない。構えも取らず下手に蹴撃を繰り返せば特製手甲の重さで体幹が崩れてしまう上、何より間合いが近過ぎるからだ。

だが両手ならば問題無い。

そう判断した夜一は、ノイトラのがら空きな腹部目掛け、左掌を叩き付けた。

高圧電流が弾けた様な音が響き渡ると同時に、ノイトラは凄まじい勢いで地面目掛けで吹き飛ばされて行った。

それはルキアにとって信じられない光景だった。

何処から如何見ても詰みの状態だった一護。

それが——今は如何だ。顔には虚の仮面を被り、全身から禍々しい霊圧を纏いながら相手を圧倒しているではないか。

「どうしたよグリムジョー！ 随分と動きが悪いじゃねえか!!」

「ガ…ハアツ!!」

防御に回された斬魄刀を押し切り、その胴を横薙ぎに斬り裂く。

グリムジョーは鮮血を撒き散らせながら、後方の数軒の住宅を破壊しながら吹き飛ばされて行く。

先程から同じ様な事の繰り返しだった。

死角からの攻撃を仕掛けても、振り向きもせずに素手で刀身を掴んで止められ、放り投げられる。

防御に回ってもそれは何の意味も持たず、力尽くで押し切られて終わる。

正にグリムジョーにとっては打つ手無しな状況であった。

「一護……!!」

瓦礫の中から何とか這い出したルキアは、ほぼ半死に等しい相手を何の躊躇いも無く蹂躪する一護の姿に絶句した。

何処から如何見ても暴走状態なのは明白。何時ぞやの恋次との初戦を彷彿とさせる。以前から一護が何か新たな力を得ようと悩み、秘密裏に行動していたのは知っていた。

それがまさかあの様な——虚の力を取り込むらしきものであるとは思ひもしなかった。

死神が正であれば、虚は負。正しく対を成す存在同士だ。

ルキアは嫌な感覚が拭えなかつた。

それを混ぜ合わせるというのは、即ち虚が死神の力を得た形である破面と同類なので無いかと。

「止めろ一護!! 今己が何をしているのか気付いているのか!?!」

ルキアは必死に呼び掛ける。だが距離が遠いのか、はたまた一護自身に聞く気が無いのかは定かでは無いが、状況は変わらない。

あんな者は一護では無い。只の化け物だ。

敵対した相手の命を奪う事すら躊躇する程に甘い彼が、こんな真似をする訳が無い。余計な事にまで気を遣っては無駄に落ち込み、自分を責める精神の不安定さも持つが

——誰よりも優しい。

認められるものか。もしこのまま放つて置けば、一護は間違い無く一護では無くなってしまう。

ルキアは直感からそう感じた。

「ぐ……っ!!」

何とかして止めねばと身体を持ち上げるが、直ぐに倒れ伏す。

至近距離での虚閃の直撃を受けたのだ。重傷では無いにしても、満足に戦える状態では無かった。

何せ虚閃を放ったのはグリムジョーだ。塵にならなかつただけマシと思うべきかもしれない。

ルキアが一人奮闘している間も、状況は更に悪化の一途を辿っていた。地面に膝を着き、息も絶え絶えのグリムジョーを、一護は先程の仕返しだと言わんばかりに横合いから蹴り飛ばした。

通常なら未だしも、虚化した状態で放たれた蹴りだ。

グリムジョーは地面を抉りながら吹き飛ばされ、やがて先程一護が蹲っていた場所まで辿り着いた。

恐らく狙って遣ったのだろう。その事実を悟り、屈辱に顔を顰めるグリムジョーの近くに、一護は瞬歩で降り立った。

その肩は小刻みに震えており、如何にも笑いを堪えている様だった。

「さつきとは真逆の展開だな？」

「て…めえ…!!」

此処までされては、グリムジョーも我慢の限界だった。

残り少ない力を振り絞り、全身に霊圧を籠めて、帰刃の準備を整える。

「<sup>きし</sup>軋れ——」  
「ゴフツ!!」

「させねえよ」

グリムジョーは斬魄刀を掲げて解号を唱えんとした瞬間、一護はその右手を蹴り飛ばした。

その手から離れ、地面を転がって行く斬魄刀。

そして流れる様にして、今度は地面に叩き付ける形で、上から頭部を踏み付けた。

苦しそうに呻くグリムジョーを見下ろす一護。仮面に隠れてその表情は見えないが、加虐的な笑みが浮かんでいるのは間違い無いだろう。

まるで完全なる悪役だ。如何考えても主人公の姿ではない。

帰刃という最後の抵抗の術すら失ったグリムジョーに対し、一護は更なる追い討ちを掛ける。

「そら、さっきのお返しだ」

「ギツ…ガアアアアアアアアアア!!!」

この体勢から何とか抜け出そうと地面を搔いてもがいていた右手に、自身の斬魄刀を突き立てたのだ。

漆黒の刀身はグリムジョーの鋼皮を斬り裂いて貫通し、地面に縫い付ける。あろう事か、一護は自身が遣られた事をそっくりそのまま返したのである。

「止める…!! それ以上は…!!」

如何考えても今の一護は正気では無い。

もしも織姫がその姿を見たら、何を思い、何を言うだろう。

このまま一護を放って置けば確実に勝利で終わるだろうが、同時に彼はそれと引き換えに大切な何かを失ってしまう。

そうなればもはや取り返しの付かない事になると、ルキアは悟っていた。

「頼む…誰でも良い! 一護を止めてくれ…!!」

遠目から見ていたルキアは必死に懇願するが、それを嘲笑うかの様に、一護は止めの一手を打たんとする。

「そろそろ終わりにするぜ…」

斬魄刀の柄を握っていた右手を放すと、徐にその掌をグリムジョーへと向けた。するとそれに禍々しい霊圧が集束して行く。

一体それが何の意味を持つのか、グリムジョーには理解出来た。

「虚閃…だと…!?!」

「さっきてめえが言い掛けた台詞だ…頭ごと消してやるよ」

集束する霊圧量は、先程のグリムジョーのその比では無い。

あながち一護の言っている事に間違いは無い。

だがこのまま虚閃が放たれば、確実に周囲一帯に尋常では無いレベルでの被害が及ぶだろう。

それだけでは無い。もしこの後一護が正気に戻り、暴走したとは言え自分が満身創痍のグリムジョーを散々甚振った末、跡形も無く消し飛ばして勝利したと知った場合、何を思うのか。

自分自身が忌み嫌う、敵であろうとも相手を踏み躪ると言う行為を犯したのだ。

誰よりも優しく、責任感が強い一護の事だ。只管に自分を責め、こんな奴が仲間と共

に居る資格は無いと判断し、一人孤独で戦う道を選択してしまいかねない。

そしてやがては自分を犠牲にしつつ、他者を救うために手段を選ばない存在——所謂ダークヒーローとしての道を歩むのだろう。

一護を知る者達は悲しむだろうが、そんな事は御構い無し。

自分には救いなど必要無い。最後まで孤独のまま誰かの為に戦い、人知れず野垂れ死ぬのが御似合いだと。

「じゃあなグリムジョー」

「クソがアアア!!!」

必死の形相で叫ぶグリムジョーを鼻で笑いながら、一護は虚閃を放った——と思われた。

「な…!?!」

放たれる直前、その掌に集束していた筈の霊圧が拡散したのだ。

見れば一護の右腕には何者かの手が添えられていた。

「…勘弁せえや。なんでワイが首ツッコまなアカンねん」

一護は弾かれる様にして右側に振り向く。

其処には至極面倒臭そうな表情を浮かべた真子が居た。

「平子…!!」

「もう止めんか一護。こないな形で勝つても嬉しくないやろ」

殺気立った様子で睨み付ける一護に対し、真子は静かに語り掛ける。

力に? まれて暴走している者に対して、その程度では意味は無いと理解していながら。

真子は初め、必要以上に一護達の戦いに介入する予定は無かった。

彼の目的はあくまでこの町周辺への被害の軽減と、一護の死の回避だ。

そうでなければ終始傍観していようと考えていた。

だが状況は思った以上に悪化した。

序盤は圧倒していたにも拘らず、途中で虚化が解けた一護が逆に追い込まれたのは良

い。想定内の範囲だ。

援護に入ったルキアが手痛い反撃を受けて早期に退場した事についても同様だ。

——冗談きついで、ホンマ。

まさか其処で再び虚化が発動し、半ば理性を失って暴走し始めるとは思いもしなかった。

幸いだったのは、それが精神世界にて完全に屈服させた筈の内なる虚の人格が復活し、表に出てきた訳では無いという部分か。

こうして近くで話しをしてみれば判る。影響は受けている様だが、大部分は一護のままで。

実際、完全に内なる虚に支配された状態になれば、言葉を持たない化け物と化す。

そうすれば戦闘を長引かせる様な面倒な真似はしない。力の一切を隠さず、敵が死ぬまで終始徹底して容赦無い戦法を取る筈だ。

恐らく一護がこの行動を取ったのは、彼本来の意志と虚の意志が鬩ぎ合った結果なのだろう。

例え敵であろうとも、極力殺したくない。敵は敵、容赦する必要は無い。

相反するこの二つが中途半端に混ざり合った結果、グリムジョーを殺す事無く長時間甚振り続けるという行動に繋がったのだ。

「嬉しいとか嬉しくないとか関係無え!! 邪魔すんな!!」

「ほんなら別に無抵抗の奴を蹴り殺しにする必要あらへんやろが」

「黙れよ!! それにこいつを放つて置いたら…また——!!」

「…やっぱそうかい」

その声に焦燥が含まれているのを感じた真子は確信した。

現状に至るまでの経緯や行動はアレだったが、やはり本質はそのままだったのだと。

今一護が抱いているのは——危機感。

彼は破面の手によって、今迄に二度、仲間を酷く害されている。それも自身の目の前で。

仲間をこれ以上傷付けられたくない、その為には力が必要だと、そう渴望したのでらう。

そして——? まれた。

これでもう大丈夫だ。仲間を傷付けられない位に自分は強くなった。それを必死に証明するかのように、相手を蹂躪する事で。

真子は溜息を吐きながら、一護の右腕を放した。

だがそれは先程の行動を容認した訳では無い。  
その証拠に、真子の右手は腰に差しした斬魄刀の柄に添えられていた。

「平子……まさかてめえ……!!」

グリムジョーの腕を貫いていた斬魄刀を、一護は咄嗟に引き抜いて構えた。  
だが真子はそれを見ても慌てる事無く、淡々と語り続ける。

「済まんア、一護。仮面ワの軍勢イにとって、オマエは必要なんや」

如何なる状況下に置かれ様とも、一護は全ての元凶たる藍染を止める事を選択するだろう。

だが精神が不安定な状態では拙い。

虚言や洗脳といった、相手の心を揺さぶる様な言動は藍染の十八番だ。

そんな彼に一護が対峙すれば——いとも容易く掌の上で弄ばれるに決まっている。

最悪は仲間を引き込まれる可能性だって有る。それだけは回避せねばならない。

真子は空いた左手を眼前まで持ち上げる。

すると次の瞬間、その顔をツタンカーメンを連想させる様な仮面が覆っていた。

「せやから…いまは眠つとけ」

「なん…!!?」

直後、一護は何か甘い臭いを感じたかと思いきや、視界が黒く塗り潰された。

意識を失う直前の彼の視界に映った光景は、眼前にて逆様に立つ真子が自身の眼前へと斬魄刀を突き出した姿だった。

## 第二十五話 虚無と黒幕と、三日月の反撃と…

先程から僅かに感じる鈍痛に、ノイトラはやや眉を潜めた。見れば白装束の、腹部の中心に当たる位置のみが破けている。

だが素手である右手から繰り出された打撃だった御蔭か、ダメージはそれ程でもない。

鋼皮のみならず、その内側までも相当な頑丈さを誇るノイトラだ。骨や内臓は何の問題も無く、外側から見ると僅かに痣が出来ている程度だった。

「まさかあのタイミングで…かよ」

正直言って失念していた。確かに夜一は藍染との戦いの中でも、溜めも構えも一切無く無拍子で瞬間を発動させていたではないか。

だがそれを承知していたとしても、あの状況下に於いて上手く対応出来たかと聞かれれば怪しい。

如何にそれなりの力を持つとは言え、ノイトラの中身は凡人だ。

一つの事に集中している中、更にもう一つについて思考を割く等という器用な真似が出来る筈が無い。

——これでは人に油断するなど言える立場では無い。

チルツチに対しては、元々彼女が同族以外を見下す傾向が頗る強かった為に忠告した心算だった。

だが言った本人がこれでは、全く以て示しが付かないではないか。ノイトラは改めて反省した。

だが彼の持つ事情としては止むを得ない部分もある。

種族どころか女であるだけで見下し、自分こそが最強であると自己顕示欲が頗る強かった、ノイトラ・ジルガ本来の人格。凡人故に要領も悪く、用心深いが抜けた部分も多かった、憑依した人格。

この二つの内、後者がやや勝った状態で混ざり合った結果、非常に中途半端なものが出来上がってしまったのだ。

差別思考等の大部分は消え失せたのだが、名残はある。簡単に言えば人格がかなり理性的になり、多少思慮深くなっただけ、という感じだ。

理由はあつたにせよ、一角と対峙した時に斬魄刀も用いず、彼を自分が高みへ上る為の踏み台の様に扱った事も、その影響を受けているかもしれない。

「どうすつかな…」

地面に叩き付けられた衝撃により出来たクレーター。その中心部にて横たわったまま、唸り声を上げながら悩む。

やはり現時点で持っている手の内を全て晒す覚悟で掛かるか、それとも帰刃して拮抗状態へと持ち込んで時間稼ぎするか否か。

ノイトラ自身にその気が無くとも、想定外の人物との戦いが多い最近だ。

特に手の内については、相手の虚を突く為の手段として出来る限り公開せずに秘匿して置きたいところだ。

帰刃についても言わずもがな。

何せ手が六本になるといふ何の変哲も無い能力だ。スペックも上がるとは言え、事前に知られてしまえば幾らでも対策を取られてしまう。

並大抵の策であれば力技で跳ね除けられる自信はあるが、これが喜助であればそもそも言つてられない。

「帰刃は——やっぱ駄目だな…」

ノイトラが帰刃する事を拒む一番の理由は——やはり勘だ。

先程から囁くのだ。此処で帰刃してはならないと。

そして同時に感じる——まるで誰かの掌の上で踊らされている様な妙な感覚。

任務開始から現状まで至る経緯の全てが仕組まれたものなのではと疑問に思う程に。

だが夜一が真正正銘の全力を出した今、何にしろ早急に判断せねばならない。

それに左脚のみとは言え、特製手甲も残っている。今の彼女がそれで蹴撃を繰り出して来れば、流石のノイトラでも耐え切れる自信は無かった。

だが所詮は試作品という事か。先程ノイトラの繰り出した本気の振り下ろしで三個一気に破壊出来た事から、手甲自体の耐久度は低いらしい。

それから想像するに、瞬間の力で攻撃力等が強化されているとは言え、それを長時間維持出来るとも考え難い。

所詮は希望的観測だが、ほんの数回程度使用すれば内部崩壊してしまう可能性もある。

だが更に厄介な点がある。それは夜一が全体的に身軽になったという事だ。

先程を上回る動きで隙を作り出し、其処に左脚で必殺の蹴撃を捻じ込むといった戦法も取ってきそうだ。

幾ら手甲が脆いとは言え、その様な真似をされては自壊を待つ所の話では無い。

「ヤッ、と」

ノイトラはそう眩くと、クレーターの中から身体を起こして立ち上がる。

探查神経を発動してみると、夜一は微動だにしていな。未だ遠くで此方の様子を探っている様だ。

幸いにも周囲は木々が生い茂った森林地帯の中心部で、しかも砂塵が舞っている為に遠方から此方の姿を確認出来る状態では無い。

戦闘再開するにしても未だ余裕があると確認したノイトラは、腰の鎖を引つ張り始めると、やや遠くに転がっていた己の斬魄刀を手元まで手繰り寄せた。

柄を握つて軽く横に一振りすると、一先ずそれを背中に背負う。すると直後に感じ慣れた刺々しい霊圧が肌を刺した。

間違い無くチルツチの帰刃形態のものだ。

霊圧の位置から判断するに、彼女はルピのカバーに回つたらしい。

近くには復活したらしい冬獅郎と、その後ろには拘束から逃れたらしい弓親と乱菊が居る。

一角については相変わらず微弱な霊圧反応しか感じられず、復活の兆しは見えない。

「つてか時間掛かり過ぎじゃねえか…?」

——早くしてくれウル坊よ。

ノイトラは内心で頼みの綱であるウルキオラにそう念じた。

後で気付いた事だが、本来ならば、織姫が虚夜宮へ連れて行かれるのは後日だ。その事を踏まえると、事前に伝えられた任務内容とは食い違いがあるのが判る。

だがその時は任務開始直後。そんな事を考えている場合では無いと、頭の隅に留めつつ気にしない事にした。

藍染を含めた破面達以外には認識不可能な特殊な霊膜を張るという腕輪を装着させてしまえば、もはや確保したと言っても過言では無いのだから。

その直後、ノイトラの立って居る場所の近くに、何かが凄まじい勢いで落下して来た。

「つ、ワンダーワイズ!?!」

「アア、…ウー…」

それは喜助と対峙していた筈のワンダーワイスだった。

その姿は満身創痍。白装束もボロボロで、上半身はもはや剥き出しにも等しい状態となっていた。

幸いにも深い傷は無さそうだが、広範囲に亘って血が滲み出ている。

先程まで浮かべていた表情は一転、恐怖に怯えたものへと変化していた。

その原因は一つしか無い。喜助だ。

恐らく彼の天才的頭脳からなる戦略と策略に只管翻弄され続けたのだろう。序盤は自分が圧倒していたにも拘らずだ。

だとすればワンダーワイスの抱いた恐怖は未知に対するもの。この怯えっぷりを見れば一目瞭然だ。

単純明快に実力の差を示されるより、次に何をされるのか一切不明な不気味さを感じさせる方がより恐怖を煽るもの。

古来より人は自身の理解が及ばない事象に対する反応は顕著だ。

種族が異なるにしても、精神構造は基本的に人とそう変わらない破面にとつても、それは共通しているのだろう。

「大丈夫かよ、オイ」

ノイトラは直ぐ様ワンダーワイスの元へと駆け寄る。

やはり想像した通り、身体に刻まれた無数の傷には、喜助の斬魄刀が持つ紅色の霊圧の名残が見て取れた。

取り敢えず酷いのは見た目だけであり、例え暫く放つて置いても死ぬ事は無いだろう。

ノイトラは近くに膝を下ろすと、優しい手付きでその所々に残った白装束を捲つては、その傷の規模を丁寧に確認してゆく。

そんな彼の腕の袖を、ワンダーワイスは震える手で掴んだ。

「…オマエ」

「…ウー…」

思わず見返してみると、ワンダーワイスの目には何か継る様なものが感じられた。

まるで親に助けを求める子供だ。外見上は年相応の反応と言える。

だがその感情を向けられる側となったノイトラの心境としては微妙だった。

ワンダーワイスは兵器だ。それも藍染の開発した。

喜助が駆け付けた瞬間に見せた反応も含め、他にも何を仕込まれているのか全く不明。

こうして近くに居る間も、実は本人の知らぬ内に遠隔にて此方の霊圧等を解析しているかもしれない。

ノイトラの立てた計画の中では、ワンダーワイスの生存は含まれてはいない。

任務開始時点で飴玉を上げて頭を撫でたり、共に和んだりしたのも、特に意識して仲を深めようとした訳でも無い。只の子供に対する触れ合いの一環だ。

今こうして怪我の具合を確認しているのだから、同じ組織の一員として当たり前に行動である。

だが情が湧いていないと言えば嘘になる。ここまで懐かれれば、その者の性格が歪んでいない限りは必ずそうなるだろう。

だが本当にワンダーワイスを救うとなれば、到底片手間で行える様なものでは無い。下手すれば目的の一部を犠牲にしなければならなくなる可能性もある。

彼が持つ凶暴性や狂気に加え、藍染の仕込み等を全て取り払った上で、来るべき重國との戦いを回避させない限り、生存させる事は不可能。

そしてそれ等を成すには間違い無く藍染と相対せねばならなくなる。

剣八に続き、重國の事を脅威認定している彼の事だ。流刃若火を封じる唯一の手段を

奪う様な真似を許す筈が無い。

現時点では、例えワンダーワイスが死ぬ場面に居合わせたとしても見捨てる事は可能なレベルだ。

罪悪感を抱くだろうし、心は痛むだろうが、その程度の仲でしかない。

故にこれ以上ワンダーワイスに歩み寄る様な真似をする事も、させる心算もノイトラには無かった。

自分は超人とは違う。出来る範囲も、受け入れられる範囲も決まっている。

非情な選択ではあるが、超過分は割り切らねばならないと。

「…放せ糞餓鬼」

「ウ…?」

そう考えたノイトラは、此処は敢えて突き放すという選択をした。

突然のその豹変振りに驚愕したのか、頻りに瞬きを始めるワンダーワイスに、内心で申し訳無いとは思いつつ。

「そんなに喜助アイツが怖えんなら、此処でビクビクしながら隠れてろ。テメエみたいな雑魚

は戦場には必要無え、後は俺が全部やる」

だが根っからの御人好しがいきなり冷徹な態度を取ろうと思っても不可能な訳で。

多少捻くれてはいるが、基本的に彼は嘘が付けられない正直者だ。例え考えの通りの台詞を口に出せたとしても、しつかり意識していなければ本音が顔に出てしまう程に。

この発言を別に捉えれば、後は自分に任せて大人しくしている、という意味にも取れる。

完全にツンデレ語である。

此処にテスラが居合わせたならば、まず確実にそう捉えて苦笑を浮かべていただろう。

雑魚は消えろ、死ぬ、等といったフレーズがあれば、また違っていたのかもしれないが、どちらにせよ余計なものが混じって台無しになっていた可能性が高い。

「アー…？　　ウー…!!」

人の感情に敏感なワンダーワイズが気付かない筈が無い。

表面上の態度は冷たいが、何処か温かいものを感じるノイトラに対し、一度だけ首を

傾げたが、直後に理解した。

良く解らないが、結局彼は自分の為に動こうとしてくれているのだと。

此方に背中を向けて立ち上がったノイトラへ、ワンダーワイスは光り輝く眼差しを向けた。

——本人の与り知らぬ所で好感度を上げている者が、今此処にもう一人出来上がった瞬間だった。

「いやー、ちょっとやり過ぎちゃいましたかねー？」

「むしろ逆じゃろう。完全に仕留める気だかららんでどうするんじや馬鹿者め」

「そうは言っても、あの不思議な技を連発されては流石のアタシだって手元が狂いますよ。夜一サンだって同じでしょうに」

「相手の問題じゃ。おぬしと一緒にするでないわ」

そんなノイトラの前へ、上空より降り立った二つの人影。

彼等は戦場とは言えない緊張感の失せた声で口論している。

言うまでも無く、喜助に夜一だ。

如何やら何時の間にか合流していたらしい。

見れば喜助の全身は怪我一つ無い至って普通の状態。

タイミングは定かでは無いが、やはり虚弾が直撃する以前より携帯用義骸と入れ替わっていた様だ。

そしてその事実には驚愕するワンダーワイスの不意を突いて戦況を引つ繰り返し、肉体的にも精神的にも追い詰めたのが今の状況なのだろう。

ノイトラは内心で舌打ちした。

これではワンダーワイスを此処に置き去りにして戦線復帰するという、ものの数秒で立てた計画が実行に移せないではないかと。

実際、二人がワンダーワイスを放置してくれるかと言えば確実に否だろう。

特に喜助等は直接対峙した分、その異常性に気付いている筈だ。必要とあらば非情にも冷酷にもなれる彼が、見逃すとは思えない。

完全に息の根を止めるか、若しくは完全に無力化した後、自分用か尸魂界への研究材料として捕獲する可能性だってある。

本来の歴史を辿らせる為には、ワンダーワイスの存在も必須だ。それだけは避けねばならない。

「しかし……とんでもなく硬いのう、おぬしの鋼皮とやらは」

特製手甲は無しだが、瞬間状態の打撃を食らったにも拘らず平然としているノイトラを見るや否や、何処か呆れた様な表情を浮かべた。

だがその内心は別。一応想定してはいたのだが、やはり実際に欠片も堪えた様子が無いのを見るのは衝撃的だった。

驚異的な攻撃力に、鋭い勘、移動速度、凄まじい硬度を持つ鋼皮。流石は十刃のトツブクラスと言うべきか。

しかも解放せずにこれだ。解放後は少なくとも、現時点での実力は倍以上に膨れ上がる事は確実。

だが一向にそれをする仕草を見せないのは如何いう事なのか。

此方を警戒しているのか、舐めているのか。はたまたこの二度目の現世侵攻は只の牽制——または調査に過ぎず、全力を出す必要が無いのか。

夜一は瞬間を解かぬまま、ノイトラの反応を待った。

「同感ツスねー。しかも特製手甲あを一度に三個も破壊するなんて……いやー、ちよつと自信無くしちやいそうツス」

「…そいつあ悪かったな」

喜助は肩を竦めながら軽い口調でそう零す。

態度はふざけているが、その目は鋭利に輝いているのを確認したノイトラは——遂に選択した。

この窮地に対し危機感を覚える以外にも、何処か楽しんでいる。そんな自分に見て見ぬフリをしながら。

ウルキオラは自身の任務を終えた後、一時的に虚夜宮へと帰還していた。

本来であれば、彼は現世の戦力に尸魂界の注目を逸らしている間、井上織姫も一緒に連れ帰る予定であった。

だが藍染は何を考えているのか、任務開始直後にウルキオラを呼び出すと、突如とし

て任務内容の変更を言い渡したのだ。

確保するのでは無く、特殊な霊膜を張る腕輪を装着させて自分達以外の存在から完全に認識出来ぬ様にする事。

虚夜宮に移動するまでに十二時間という僅かな猶予を与え、その間に誰か一人にのみ別れを告げる事を許可するという条件を付け加える事。

それ等全てを織姫が？んだのを確認した後、一度虚夜宮に帰還する事。

ウルキオラとしては、藍染が態々細かな条件を付け加えた理由については理解していた。

織姫が虚夜宮に移動する際、彼女の思考をやや此方寄りに持ち込む事で抵抗する意志を奪い、尸魂界の認識を誘拐されたのでは無く彼女自ら裏切ったのだと誤認させる。その為の伏線だろう。

これが藍染にとつては呼吸に等しく容易に考え出された案であるのは想像に難くない。

玉座の間へと歩を進めながら、ウルキオラはその底知れない頭脳に驚愕すると同時に納得した。

「ウルキオラ・シファア、只今戻りました」

扉が自動的に開いた後、中に入る。

其処には相変わらぬ余裕溢れる態度で高台の玉座に腰掛ける藍染の姿があった。

「ああ、おかえり。その様子だと上手くいった様だね」

「はい。万事抜かりなく」

藍染の傍らにはギンしか居らず、東仙の姿が見当たらない。

そして入口側の壁には何時ぞやの様に映像が浮かび上がっており、それには現世にて死神達と激闘を繰り広げている仲間達の姿が映っていた。

「それは…」

「少し気になってね。見始めたのはさっきだよ」

ウルキオラの抱いた疑問を先読みした藍染は即座に返答した。

藍染は常に明確な未来を見通しているのは明らかであり、現在の様に態々状況を確認する必要は皆無の筈。

そう真つ先に疑問に思ったが、何か別の思惑があるのだろうか、ウルキオラは其処で思考を止めた。

映像は四つ。グリムジョー、ルピ、ワンダーワイス、そしてノイトラの戦闘風景だ。

現状としては皆優勢。取り敢えずは想定範囲内だ。

一護の見せた謎の仮面。それに伴う力の増大には興味を持ったが、それだけだ。

未解放のグリムジョーをやつと圧倒出来る程度では、警戒するに値しない。

だが明らかにおかしいと思わしきものがあつた。

ワンダーワイスと対峙している喜助だ。

余りに呆気無さ過ぎる。

現世の二大戦力の片割れが、あの程度の実力な訳が無い。

「…おや、何やら状況が動きそうだね」

「!!」

藍染がそう零した時、其々の戦況に劇的な変化が起こつた。

完全勝利まで後一步の状態だつた筈のグリムジョーは、暫し横槍が入つたかと思うと、次の瞬間再び仮面を被つた一護に圧倒され始めた。

胸元や手首に重傷を負っているにも拘らず、まるでそれを初めから無かった様にして超高速で動き回り、斬魄刀を振るう。

慌てて対応するグリムジョーだったが、彼自身も相当な怪我を負っている影響なのか、その反応は鈍い。

見る見る内に一太刀、また一太刀と斬撃の直撃を受けていった。

乱菊に止めを刺そうとしたルピは、戦線復帰した冬獅郎の手によつて殆どの触手を封じられた上で無数の氷柱に周囲を取り囲まれていた。

もはや為す術が無い。今にも止めを刺されんとしている。

完全に優勢であつたワンダーワイズだったが、その追い詰めていた筈の喜助の全身が突然膨張したかと思うと、紙吹雪を撒き散らしながら破裂。

奇想天外な事態に硬直していると、その背後から突然現れる本物の喜助。

咄嗟に振り向く程度の反応は出来たが、防御までは無理だつたらしい。

直後に紅色の斬撃の直撃を食らい、吹き飛ばされるワンダーワイズ。

自身の理解が及ばない事態に陥つた事で混乱したのだろう。顔に焦燥を浮かべながら、見え見えな動作で虚弾を放たんと拳を構える。

だが喜助は瞬歩で間合いを詰めると、それに斬魄刀の切っ先を当て、固められていた霊圧を拡散。虚弾の発射を阻止した。

顔色を青ざめるワンダーワイズ目掛け、更に容赦無く斬魄刀を振るう。

先程から激しい打ち合いを繰広げていたノイトラは、隙を突いて夜一の装備を粉碎し、虚弾の応用技と思わしきもので一気に追い討ちを掛けた。

これには藍染も思わず感心した様で、ほう、という声を漏らした。

喜助と同等の二大戦力の片割れたる夜一を押し切ったというのもそうだが、虚閃と比較すれば幾分か連発が可能とは言え、単発技には変わり無い虚弾を此方の想像も付かない方法で高速連射する姿には、流石のウルキオラも瞠目した。

だがそれは罫。事前に察知していたらしいノイトラが響転で一旦その場を離れたかと思うと、其処には無傷の夜一が。

互いに構えたまま睨み合う二人。

チルツチが帰刃してルピの加勢へ向かったのを皮切りに、再び激突。

夜一の策を完全に見破り、今度こそノイトラの勝利かと思われた次の瞬間、その想定は引つ繰り返される。

斬魄刀を弾かれ、無防備な体勢へと陥ったノイトラは、そのまま強烈な一撃を腹部へ食らい、地面へと吹き飛ばされてしまったのだ。

「…藍染様」

「既に要を向かわせてある。間も無く撤退させる手筈になってるから安心して良いよ」

この状況は流石に拙いのでは、というウルキオラの心情を察していたのか、藍染は即座にそう返した。

だがその表情は何処か楽しげで、欠片も危機感を抱いている風には思えない。

寧ろこの状況に持ち込まれる事を端から期待していた様に見受けられた。

だとすれば如何に手筈を取っているとはいえ、直ぐ様撤退させるとは思えない。

恐らくギリギリのタイミングまで行く末を見守りたいのだろう。

考えてみれば、藍染の行動は初めから妙だった。

何故任務が開始するまで変更点を伝える事をしなかったのか。

何故自身の手勢が劣勢に陥っているにも拘らず、素早く撤退の手筈を取ろうとしない

のか。

ウルキオラは今迄の自身の行動、そして藍染が何に興味を示しているのかを思い返し、其処で気付いた。

藍染は初めから自分が第三者たるノイトラへ事前に任務内容を伝える事を想定していたのだろう。

そしてそのノイトラが、情報とは異なる状況へと置かれ、追い詰められる事で如何な

る行動を取るのかを観察したいのだ。

正直言えば、ウルキオラ自身も興味はある。

あの時本能で感じた、ノイトラが隠し持っている実力の強大さ。

加えて以前と違って思慮深い部分を見せる様になった彼の事だ。霊圧の増大のみならず、何か色々と別の手の内も持っているに違い無い。

方法としては卑怯な形ではあるが、その片鱗を見れるとなれば、ウルキオラも映像に釘付けになるのも致し方無かった。

「…成る程、この期に及んでも尚解放無しそを選択するか」

——やはり彼は面白いね。

この展開が読めていたのか如何かは定かでは無いが、藍染はそう呟くと同時に笑みを深めた。

瞬間を発動した本気の夜一に加え、此方を完全に仕留める気でいる喜助。

この二人を同時に相手する事になるとは、全く以て想定外だ。とことんツイてない。そんな状況を打破すべく、ノイトラは遂に最後の手段を選択した。

悪役らしく、だが同時に馬鹿らしいとも取れる内容であつたが、帰刃を避けるのであれば取らざるを得なかつた。

「っ!!」

「いきなりツスカ!!」

ノイトラは瞬時に霊圧の膜を全身に纏うと、無拍子に複数の虚弾を放つた。夜一と喜助は互いに左右へ離れる様にしてその場を跳んで回避する。

そう間を置かずして再び戻ってくるだろうが、ノイトラにとってはその僅かな時間だけで十分だつた。

「なっ!？」

その声を漏らしたのは喜助。

何せこのまま交戦状態に入ることかと思いきや、そのノイトラは満身創痍のワンダーワイスを抱えて上空まで跳んでいたのだから。

慌ててその後を追いつけるが、既にノイトラはチルツチ達と合流していた。

「の、ノイトラ!？」

「…大丈夫なの？」

夜一の一撃で見事なまでに吹き飛ばされた姿を見ていたのだろう、ルピは驚愕の声を漏らした。

逆にチルツチは至極落ち着いた様子で、刃の翼で周囲をけん制しつつ、ノイトラの剥き出しの腹部に視線を向けながら声を掛けた。

だがノイトラは無言のまま、ワンダーワイスをチルツチに渡すと、背中の斬魄刀の柄に手を掛けた。

「取り敢えず低高度を保った状態で、出来る限り遠くに逃げる。巻き込まれたくなく  
りやな」

「…は？ それってどういう——ッ!？」

ルピの疑問に答える事無く、ノイトラは斬魄刀を斜め下へ放り投げた。

鎖が限界まで伸び切る直前、鎖の根本を掴んで大きく横に振るう。

それは地面から伸びた氷柱に捕えられていた六本の触手を、あろう事かそれごと粉碎  
したのだ。

「いきなりなにすんのさ!!」

即座にルピから抗議の声が上がる。

拘束から逃れて自由の身になったのは良いものの、御蔭で殆どの触手が短くなつてし  
まった。

この帰刃形態の売りであるリーチの長さを潰さ、先端から棘を生やす事も出来無い。  
一応は肉体の一部である為、自然再生はする。だが短時間では不可能。

つまりこの任務に於いて、もはやルピは完全に役立たずと化してしまったのである。

そう考えるとこの反応も致し方無いだろう。

「もしかして…使うの？」

「……………」

協力するのでは無き、避難を指示するノイトラの意図。それを何となく察したチルツチは彼に問い掛けた。返答は無かったが、その目を見れば一目瞭然だった。

「そう…じゃああんた達、行くわよ」

「ちよつと!! ボクには何がなんだか——」

「黙りなさい、舌噛むわよ!!」

「意味わかんない…つてうひゃあああああああ!!!」

チルツチはその長い手でワンダーワイスとルピを其々に抱えると、一気にその場から急降下する。

限界まで高度を下げた後、大きく羽ばたきながら高速で飛翔して行った。

それを見送りながら、ノイトラは腰の鎖を手前に引き、斬魄刀を再び手元に戻す。

「…やるか」

斬魄刀をゆつたりとした仕草で背中に背負うと、ノイトラは深呼吸を行う。

やはり靈子が薄い分、何処と無く息苦しい。

だが気を引き締める分には丁度良い刺激だった。

やがて自身の周囲を取り囲む様にして、五つの靈圧が展開する。

視界に確認出来るのは、やはりこの場に於ける一番の実力者たる喜助と夜一。

「…追い掛けねえのか？」

「いえいえ、ここで優先すべきはアナタの方だと判断したままでしてねー。申し訳ないツスけど——」

——袋叩きにさせていただきます。

喜助はそう言い終えると、己の斬魄刀を構えた。

隣に立つ夜一も、左脚をやや後ろに移動させて腰を落とす。

視界の外に居るであろう、残り三人の死神達も同様らしい。

先程から苦戦していたルピを上回る実力の持ち主であると悟ったのか、切っ先を向けられているノイトラにまでその緊張感が伝わって来ていた。

「——折角だから教えといてやる」

「…いきなりなんスか？」

——さあ、始めるか。

ノイトラはそう内心で呟いた。

感情を読まれぬ様に表情筋を固定し、何事にも動じない鉄仮面を作り出す。腹部と声帯に力を入れ、抑揚が一切無い平坦な声が出る様にする。

「アンタがさつき不思議って表現した技はな…虚弾ってんだ」

そうして準備を終えたノイトラはやがて喜助に視線を向けると——何と丁寧に自分達破面特有の技についての説明を始めた。

余りに突拍子も無い意味不明な行動である。

如何に些細な内容だとしても、徒に自分達の情報を漏らすのは迂闊だとして、名は語つても階級等の詳細までは言及しなかつたにも拘らずだ。

明らかに思考と行動が矛盾している。

「虚弾……ですか。それは虚閃とは別物と思つても？」

「自分の霊圧を放つて意味合いでは同類なんだろうが、コイツは虚閃より少ない霊圧で済む」

「……へえ、だからあんなに速いんスねー」

喜助はそんなノイトラの態度を不審に思いつつ、構えを解かぬまま問い掛ける。

一切の邪魔も入る事無く、その会話はスムーズに進んで行く。

他の四人はそれに聞き入っている様で、構えた体勢から一向に動く気配が無い。

——幾ら何でもチョロ過ぎではなからうか。

一種の賭けでもあつたが、意図してこの状況へ持ち込んだノイトラは内心ですかさずツツコんだ。

これは作戦の一つ、この世界に於ける「敵の説明は素直に聞く法則」を利用し、喜助達が襲い掛かるタイミングを遅らせるというものだった。

確かに馬鹿げている。普通なら通用する訳が無いと思うだろう。

だがこの状況を見ろ。まだ解説を始めたばかりだということのに、この嵌り様である。

夜一辺りは途中で不意討ちでも仕掛けて来るかと思っていたが、どうやら彼女もその法則からは逃れられないらしい。

—— 本当に訳が解らない世界だ。

ノイトラは思わず全身から脱力したくなった。

状況が切迫していなければ間違い無くそうなっていた。

恐らくその法則が通用しない例外は只一人。

空座町決戦時、スタークが話しているにも拘らず、繰り返し攻撃を叩き込まんとしていた京楽春水のみなのだろう。

「速度は虚閃の二十倍。初見じゃまず対応出来無えだろうな」

「まったくもってその通りツスねー。実際アタシもワンダー<sup>あ</sup>ワイ<sup>の</sup>ス<sup>ヒ</sup>を相手にしてたときは苦勞しましたし…」

「…早い段階で攻略しておいて良く言うぜ」

緩み掛けた気を引き締めつつ、ノイトラは周囲を警戒しつつ、喜助との会話を続ける。

ふと試しに僅かな殺気を放つ事で敢えてプレッシャーを掛けてみる。それには喜助のみならず、他の四人も思わず身構えた。

——流石にコレには反応するか。

小針で肌を刺されているかの様な空気から、切っ掛けがあれば直ぐ様襲い掛かって来るのは想像に難くない。

だがやはり想像した通り、反応が遅い。

これは先程の影響。この法則に囚われた者は——必ず後手に回るのだ。

例えそれがほんの一瞬の間のみだったとしても、この世界の戦場に於いては致命的である。

考えてみれば、思い通りに物事が運んだのはこれが初めてである。

だがそれで浮かれる程、ノイトラは単純ではない。

寧ろ逆に後で何か反動が起こるのではと、変に警戒し始める程に臆病な思考の持ち主だ。

例えばこの任務の後、前回の様に藍染が余計な発言をしたり。後はルキアの様にも、明らかに史実以上の大怪我を負う者が出て来たり等々。

只でさえ今後の課題や悩み等を抱えている現状だ。これ以上考えるべき事項が増えたりすれば、完全に凡人としてのキャパシティを超えてしまう。

そしてその超過分がストレス、ダメージの順へ変換され、胃へと降り掛かるのは確かだ。

だが幸いにも、今のノイトラは其処まで頭の回る状態では無かった。特に変化も無いまま、彼は淡々と作戦を実行し続ける。

「んでもって扱いやすい分、コツを掴めば色々と応用が利く技でな…」

やがて一旦言葉を切つて間を置くと——直後に霊圧を全開放した。

正にこの状況を待っていましたと言わんばかりに。

「少し工夫すりゃ——こんな使い方も出来る」

それは現時点で出せる限界値。下位十刃の帰刃形態に匹敵し、下手すれば超える程に膨大なもの。

だが実を言えば上位十刃にとってはそれ程珍しい事でも無かつたりする。

護廷十三隊の隊長格と席官の様に、彼等の実力は想像以上に隔絶しているのだ。

そしてノイトラは再び全身を霊圧の膜で覆う。

予め意識して置いた御蔭か、無数の霊圧の層も瞬く間に形成され、何時でも虚弾が発射可能な状態へと移行した。

前回はウルキオラの制止によつて不発に終わったが、今は遮るものも何も無い。後は本人の意思一つで開戦の狼煙を上げるだけだ。

「迂闊な…!!」

「っ!! 皆サン避けて下さい!!!」

後手に回つた分反応が遅れ、まんまとノイトラの先制行動を許した五人。

やはり最も早く動いたのは夜一。吐き捨てる様にして呟いた言葉は、恐らく自分に対してのものだろう。

それに続いて喜助。見覚えのあるノイトラのその姿に、浮かび上がる虚弾の発射の予兆である霊圧の層の存在に気付くと、即座に周囲へ向けて声を荒げ注意を促した。

三番目に反応し、ノイトラへ斬り掛かる事で行動を阻止しようと考えていた冬獅郎だったが、焦燥に駆られた喜助の声に思わず踏み出そうとした右足を止めた。

冬獅郎はルピの攻撃を受けて地面へ落下した後、大気中の水分を支配下に置く事に集中していた為、他の戦況は余り確認出来ない。

だが突如として戦場に乱入してきた時点で、ノイトラの實力の高さは察していた。まるで初めから其処に居たかのように移動して来たその速度。彼に接するチルツチとルピの態度。

そしてそれは先程の更なる霊圧の放出にて確信へ至った。

——今の自分の手に負える様な相手では無い。

現状では致し方無いと、冬獅郎は喜助の呼び掛けに応じ、攻撃よりも回避を優先する事に決めた。

場合によつては、例え相手が格上だろうとも立ち向かわねばならないが、今は異なる。自分には無理でも、此処にはそれを成し得る可能性を持つ実力者が二人も居るのだから。

——喜助については、その得体の知れなさ故に余り信用出来無いのが本音だったが。

「ちっ!! 世話の焼ける!!」

まず優先すべきは、その場で全身を硬直させて身動き一つ取らない弓親と乱菊への対処だ。

恐らくは靈圧にアテられたのだろう。

この僅かな時間では、二人を順番に回収するのは不可能だと刹那の内に判断。

冬獅郎は乱菊の方へ瞬歩で移動すると同時に、無数の氷の粒を集めて形成した雪玉を弓親目掛けて放った。

「へんっ!!」

拳大のサイズではあつたが、凄まじい速度で放たれたその持つ威力は尋常では無い。

冬獅郎が氷の翼を用いて乱菊を抱えたのと同時に、弓親の頭部へと直撃。

イケメンらしからぬくぐもつた声を漏らすと、そのまま勢いに乗つて地面へと吹き飛んで行つた。

其々の形でノイトラの周囲より引いた五人だったが、残念ながら彼等はとあるミスを犯していた。

それは初めに展開した包囲網の形と、一時退却する方向にある。

まるで地面に足を着けて戦っているのと同様に、終始ノイトラとほぼ同じ高度へ留まっていたのだ。

今の戦場は空中。本当に包囲する意志があるならば、四方八方のみならず上下一帯にも展開すべきだろう。

理想としては、同じ高度に三人、上下に其々一人ずつ配備する形か。

だが彼等のこのミスはノイトラにとってこれ以上無い好機だった。

何せ必然的に虚弾の発射方向が全て一定の高度より下を向く事が無い為、空座町へ直撃する可能性が皆無。

つまり一般人への被害を気に掛ける必要が無いとなれば、正真正銘全力で戦えるという事に他ならない。

「…技の内容が少し被っけど、許せスターク」

ノイトラは小さく呟いた。

今から使用するのは、十刃落ちメンバーとの模擬戦の中で編み出した虚弾の応用法、それを技へと昇華したもの。

然るべき時まで隠して置きたかった切り札の一つでもある。

前回の任務で出し掛けたのはこれだ。だが今回に限ってはその数が比ぶべくも無い程多い。

——どうか死んでくれるなよ。

密かに内心でそう願いつつ、ノイトラは溜めに溜めたそれを一斉に放った。

「ア  
ニ  
キ  
ラ  
ン  
オ  
ン虚弾・狂葬曲”」

ノイトラの全身より、無数の不可視の弾丸が一斉に放たれた。

## 第二十六話 オカッパと清虫と、三日月の暴露

暴走に等しい状態だったが、突如として戦場に乱入して来た真子の手によって仮面を割られ、虚化が解けると同時に意識を失った一護。

前のめりになって倒れ伏す彼を、真子は左腕で優しく受け止めると、安堵の溜息を吐いた。

空いた右手には、柄尻にリングが付き、一定間隔で複数の穴が開いた刀身を持つ斬魄刀——さかなで逆撫”。

相手が認識する上下前後左右、且つ見えている方向と斬られる方向の感覚を逆にするという、鏡花水月と同系列の他人の神経に干渉する能力を持つ。

だがその複雑さ故に扱いが非常に困難で、効果範囲を的確に把握していなければ混乱してしまう。

かく言う真子自身も、気怠げでマイペースな普段の態度とは裏腹に、常日頃から態と上下逆様のまま過ごしたりと、逆撫の感覚を忘れない様さり気無く鍛錬に努めている。

何度か一護の身体を揺さ振ると同時に、支えている腕に押し掛かる重さから、完全に意識が飛んでいる事を確認。

この調子だと暫くは眠ったままだろう。

それは運動神経で支配されている錘外筋線維の筋肉の緊張が解けて弛緩状態になった死体と同じ原理。

意識がある人は自身の身体を支えられたり持ち上げられたりする時、その動作を助げ様と無意識の内にバランスを取る習性がある為に軽く感じるのだ。

「世話の焼けるやつちゃで…」

虚化を解いた真子は、自身も膝を着きながら一護をゆっくり地面に仰向けの体勢で横たわらせると、最後に斬魄刀の始解を解除して納刀した。

実を言えば相当危険な状況だった。

結果的に上手く意識を奪えたから良いものの、失敗すれば洒落にならない事態に陥っていた可能性が高い。

最悪、一護と交戦する羽目になりでもすれば、彼の実力的に考えれば互いに無傷では済まなかつただろう。

一護の潜在能力の高さは想像を絶する。

今は未だ対処可能なレベルだが、グリムジョーとの戦いを見ていけば、そうとは限ら

ない事は明白。

下手に追い詰めて土壇場で覚醒されても困りものだ。そうならば流石の真子とて全力を——卍解を使わざるを得ないだろう。

しかも何処に藍染の眼があるとも判らないこの現状では、それだけは避けたい。

既に始解を出してしまっているが、幸いにもこの逆撫の能力の対象は一人。傍から見ただけでは解析も出来無い筈だ。

「んで、まだ戦る気なんか？ 破面」

「…あたり…まえだ…!!」

視線を一護から別の方向へと移す。

其処には蹴り飛ばされた斬魄刀を再び右手に持ち、必死に立ち上がろうとしているグリムジョーの姿があった。

御世辞にも戦える状態とは言い難い。

卍解と虚化が組み合わさった一護が放った月牙天衝を二発、そして更に数回の斬撃を受けたのだ。

重傷も重傷。血も相当流した。意識も朦朧としているのか、その足元はおぼつかず、

もはや氣力で立つているに等しい。

斬魄刀を持つ右手も、握っているとと言うよりは引つ掛けていると表現した方が良い。だがその鋭い眼光から感じる激しい殺意は健在。例え手足が使えなくなつたとしても、残つた顎で喉笛を噛み千切りに来そうな勢いである。

呆れたタフネスだ。その生命力の強さは靈力の高さだけが要因では無い様に思える。恐らくはグリムジョーも何か信念の様なものを持つているのだろう。その方向性が如何であれ、そういった者は皆総じて意志が強い。

真子は思わず溜息を吐き、自身の不幸を嘆いた。  
傍観に徹する筈が、何故こんな猛者と相對する羽目になつてゐるのだと。

「もう止めいや。そないなカツコでワイに勝てるとホンマに思つとんのか？」  
「なんだと…!!」

真子のその発言が引き金となり、グリムジョーの中でタガが外れた。

——— どちらもこいつも舐めやがって。

先程まで交戦していた一護も、彼と同様の仮面を出した男もそうだ。少し優位に立つたからといって、恰も勝者の様に振舞う。

此方の実力の底が見えたでも思っているのか。

確かに失態は見せた。これについては言い訳のしようが無い。

だがやはり気に食わなかった。グリムジョー・ジャガージャックという存在が、この程度の実力であると認識されているという事実が。

ならば今度こそ見せてやろう。

その認識が誤りであり、自分が一体誰を相手にしているのか。そして真の勝者は誰なのかを。

グリムジョーは全身から霊圧が放出すると、斬魄刀を引き絞る様にして構えた。

「!!」

「『軋れ——』!!」

——まさかこの期に及んで尚解放する気か。

真子はグリムジョーを見誤っていた事に気付いた。

掛かってくるなら相手するが、逃げるなら追わない。彼はそんな態度を取った心算であつた。

真子が想定外だったのは、グリムジョーのプライドの高さが常軌を逸していた事。

そして破面の持つ帰刃という副次効果が、それまでに負った怪我も修復してしまうという事も、彼は知らなかったのだ。

明らかに劣勢なこの場面。確かにこれが藍染に忠実な普通の破面なら後者を選択していただろう。

何せこの任務はあくまで陽動。敵の殲滅はついででしか無い。

余計な事をして被害を増やしてもすれば、それこそ藍染の意志に背く事となるのだから。

「っ!!」

だがそんなグリムジョーの腕を掴んで止める者が居た。

それは特徴的な髪形と褐色の肌をした男。

「オマエは——!!」

真子は驚愕すると共に、表情を怒りに染めた。

忘れる訳が無い。百一年前のあの時、藍染と結託して仲間達を襲撃し、虚化という事

象を背負わせた張本人の一人。

「東…仙…!!」

「ここまでだ、グリムジョー」

涼しい表情のまま、東仙は挿んでいるグリムジョーの腕を強制的に下げさせた。だがグリムジョーがそれに大人しく従う訳が無く、即座に抵抗を試みた。

「止めろ。今度はその右腕も失いたいか」

「つ…てめえ…!!」

どの口が、と激昂し掛けたグリムジョーだったが、何とか耐えた。

誰よりも藍染に忠実な東仙の事だ。此処でこれ以上口答えでもすれば本当にやりかねない。

両腕を失っては、流石のグリムジョーと言えども大幅な弱体化は免れない。ノイトラに追い付く所か、十刃へ返り咲く事すら困難になってしまふ。

屈辱的ではあるが、今は耐えねばならないだろう。

そう考えたグリムジヨは渋々ながら斬魄刀を鞘に納めた。

「…えらい久しぶりやなあ、東仙？」

「……………」

「無視かいおんどれ…！」

気を抜けば即座に斬り掛かりそうになる身体を必死に抑え、真子は顔に笑顔という名の仮面を被りながら声を掛ける。

だが東仙は反応を示す所か、見向きもしない。

気が短い拳西の様に、真子は思わず額に血管を浮き上がらせた。

グリムジヨが渋々斬魄刀を納刀したのを確認すると、東仙は天を見上げた。

直後、青空の一部がガラスの如く碎ける。

その隙間から極大の光の柱が降り注ぐと、東仙とグリムジヨを包み込んだ。

「反膜か!!」

こうなればもはや外部からの干渉は不可能。

反膜に包まれた二人は、ゆったりとした速度で上昇を始める。真子は鋭い目つきでその様子を見送るだけだった。

「精々私を退屈させない事だ、平子真子」

「!!」

「藍染様からの言伝だ」

無視を決め込んでいた筈の東仙から、突如として言葉が投げ掛けられた。

真子は口を開きかけたが、軽く舌打ちをする程度で止めた。

以降は誰も声を発する事は無く、反膜と共に中の二人の姿は消えて行つた。

セロ・メトラジエツタ  
無限装弾虚閃

それは帰刃形態のスタークの持つ固有技であり、文字通り無数の虚閃を絶え間無く放つもの。

元より霊圧の消費が激しい虚閃だ。それを連発するなど、正しく無尽蔵な霊力を持つ彼以外には運用は不可能だろうと断言出来る。

例えばこの技を、放つものを普通の虚閃では無く黒虚閃に変更すれば如何なるか。

そうなれば恐らくあのバラガンの老いの力すら容易に押し切れる代物と化すだろう。

鏡花水月の能力を除けば、藍染にも十分通用する筈だ。

だが史実でのスタークは最期までそういった第一十刃らしい部分も見せぬまま、その生涯を閉じた。

今迄に何度か交流を重ね、その中で彼の立ち振る舞いや実力等を観察していたノイトラとしては、その事実疑問しか抱けなかった。

あの程度の実力であれば、バラガンが今の階級に甘んじている訳が無い。間違い無く下剋上を狙う筈だ。

黒虚閃の連射も、実際にスタークがやろうと思えば可能なだろう。そう考えれば、彼は最期まで本気を出していなかったのではと推測出来る。

建前として最強を謳っているノイトラだが、最近では少しだけそれを目指してみようという気持ちも芽生えていた。

それはスタークの生存にも拘る事柄だからだ。

ノイトラの考察としては、彼が本気を出さなかつたのは、既に己の渴望が満たされた事で全てに満足していたからではないかというのが濃厚だった。

そして必死さも見せずには呆気無く幕を閉じたのは、倒れ行く仲間達と、部下が死んだというのに一切動じない藍染の姿を見て、此処が自分達の終焉なのだと思つたからではないかと。

強過ぎるが故に孤独となり、かつてのザエルアポロの様に魂を二つに分けても、実質は何も変わらず、虚圏の砂漠地帯を只管彷徨う日々。

そんな時に現れた藍染。自分より遙かに強大ながら、孤独になる事無く複数の部下を率いて悠然と佇むその姿に、スタークは希望を見出し、傘下へと下つた。

結果、スタークは何より求めていたもの——共に居ても消滅する事の無い強い仲間達が手に入り、何時死んでも良いと思える程に満たされたのだろう。

そんなスタークを生存させる為には、何よりノイトラ自身が迅速に行動する事が必須だが、一番必要なのは他でも無い——スターク自身が何をしてでも生き残りたいと願う事だ。

ノイトラが少しだけ最強を目指してみようかと思つたのは、その為の楔を打つ為。

——テメエを倒して、そして本当の十刃最強は誰なのかを証明する。だからそれま

では死ぬな。

その様な感じで、スタークの存在が必要不可欠なのだと言置いて置けば、何か心境に変化が訪れるかと期待して。

基本的に仲間の頼みであれば、殺し合い等の物騒な内容で無い限りは大体聞いてくれるスタークだ。

その可能性は決して低くは無いだろう。

「…もう少し弾幕を厚くしても良いか」

ノイトラは自らが放つ無数の虚弾、その僅かな隙間を縫う様にして徐々に近付いて来ている夜の姿を視界に捉えると、そう呟いた。

その近くでは喜助が紅色の盾を形成した状態で激しく動き回り、回避と防御を両方用以て弾幕を何とか耐えている。

途中までは回避行動のみを取っていた筈なのだが、恐らくそれだけではキツイと判断したのでらう。

ノイトラの背後では、冬獅郎はその場から動けない乱菊を庇う形で、氷の翼で防御態勢を取ってその場に留まっている。

だがその氷の翼の削られる速度から見て、そう長くは持たないだろう。

この虚弾・狂葬曲という技だが、それは先程述べた無限装弾虚閃の影響を受けた末に出来上がった代物だ。

無限装弾虚閃の様に高威力の攻撃を連射するという単純な力技は、燃費の悪さというデメリットを考慮しても、その効果は非常に魅力的だ。

故にノイトラも何とかそれを真似出来ぬかと試行錯誤したのだが、最終的には虚閃の同時発射という形しか編み出せなかった。

——それでも十分強力なのだが。

ノイトラは妥協しなかった。帰刃形態からして基本的に近接戦闘タイプの彼は、一つでも多くの遠距離攻撃の手段が欲しかったからだ。

只の虚閃や虚弾では無く、未解放の状態でも使えて、尚且つ対処されにくい技を。

そう考えたノイトラは十刃落ちメンバーをボコリつつ、新たな技の開発に努めた。

構え無しの体勢からどの方向へも放てる虚閃や虚弾に始まり、手足から放つ虚弾・多重奏を開発し——やがて虚弾・狂葬曲まで行き着いた。

現在は射程方向がノイトラの腰の付近から上——半球の範囲のみを向いているが、本来なら上下前後左右関係無く全方位に向けて虚弾を放つ味方殺しな技だ。

敵味方の区別無しに、容赦無く打ち滅ぼす。故に、アニキランオン全滅。

藍染がこの技の存在を知れば、間違い無く虚夜宮内での使用を禁じるだろう。

とは言つても、ノイトラ自身も危険性は十分理解しているので、そうなつたとしても特に問題は無いのだが。

「ぐ……ああああああ!!!」

「隊長!!!」

遂に耐え切れなくなったのか、突如として冬獅郎が叫び声を上げた。

見れば防御に使用されていた氷の翼は殆ど碎け散っており、先程のチルツチの奇襲に対処した時と同様、翼の内側に潜り込ませていた斬魄刀にて何とか急所等の部分を守っている状態。カバーし切れない肩や脇腹へは容赦無く直撃を受けていた。

何せ数え切れぬ程の虚弾が隙間無く打ち込まれているのだ。こうなるのは必然と言えた。

冬獅郎はもはや満身創痍。その最後の防御は崩れ掛けている。

しかも無数の虚弾の衝撃に負けて後方へと押し遣られて行っており、彼に庇われている形の乱菊は靈子の足場を踏み締め、それを止めようと奮闘していた。

彼女として既に打てる手は打っている。

それは鬼道の中でも、防御・束縛・伝達等を中心とする縛道。

円形の盾を形成して攻撃を防御する——縛道の三十九、えんこうせん「円開扇」も試したが、もの数秒で破壊されてしまった。

——ならばせてこの程度は。

乱菊は己の無力さに歯噛みしつつ、冬獅郎の背中に手を当て、鬼道を用いた霊圧と怪我の回復を行い続ける。

それが一時凌ぎにしかならないと理解していながら。

「これが、真の実力ツスか……!!!」

引き攣った笑みを浮かべる喜助は、額より大量の汗を流しながら瞬歩で動き回りつつ、無数の虚弾を防いでいる紅色の盾——ちがすみのたて血霞の盾を維持し続ける。

かつて一護との修行の中で、彼が放った月牙天衝を防ぐ為に咄嗟に形成したものは全く異なる。

込められた霊圧も、技の霊子構成も、全てが全力。並大抵の虚閃であれば容易く防げる代物だ。

そしてその形状も異なり、前方がやや尖らせる事で攻撃の一部を外部に受け流し、盾

の受けるダメージを少しでも減らすという工夫が凝らされている。

だがそれでも喜助は一瞬たりとも気が抜けなかった。

それ程に、ノイトラの攻撃は想像以上に強力だった。ふとした拍子で盾に送り込む霊圧や霊子構成を緩めたりすれば、瞬く間に盾が崩壊してしまう程に。

幸いと言うべきか、この技は弾幕の部分部分が薄かったりと、些かムラが見て取れる。

だが喜助には夜一のように紙一重で躲しながら動き回れる速度も技量も無かった。

故に弾幕の薄い場所を把握しては其処に移動し、盾で受けるといった形で何とか凌ぎ続けていた。

——何とデタラメな。

喜助は内心で舌打ちした。

虚弾というこの技。威力は虚閃には及ばないと言っていたが、十分に主力足り得る殺傷能力を持つている上、何よりその速度が凶悪だった。

つい数分前に相手していた少年の破面については、確りと構えを取った上で使用していた為に攻略出来たのだ。

発射までに至る挙動、筋肉の動き、その癖等を精密に分析した結果、初動から封殺するまでに至ったのである。

だがノイトラは違う。一切構えもせず、自然体から無拍子に放つのだ。挙動も何も読

む所の話では無い。

それに加えて意図が悪辣。先程までの武人一辺倒な戦法とは打って変わって、手段を選ばなくなっているときた。

何せノイトラの立ち位置を考慮すると、彼が僅かでも下部へ狙いを定めれば間違い無く空座町に虚弾が着弾してしまうのだ。

喜助達が先程からノイトラの居る高度より下に移動しようとしなのはその為だ。

更にノイトラの真下に移動してしまうと拙い理由もある。

それは序盤で敗北した一角に、先程の氷の玉の直撃により意識を失って落下していった弓親だ。

この二人は現在、下の森林地帯の何処かに居る。そんな状態でノイトラの狙いを下に向けてみる。特に一角に直撃しようものなら、完全に止めを刺す事になってしまうだろう。

「あの時気付くべきだったツスね…!!」

チルツチ達が飛翔して行った方向を見ながら、喜助は自身の判断ミスを悔いた。

だが次の瞬間、更に無慈悲な展開が待っていた。

「…つてウソでしょう!？」

何と虚弾の弾幕が更に厚くなったのだ。

盾より響いて来る衝撃が強まり、思わず足の動きが鈍る。

だが一カ所に留まってしまつては詰むのも時間の問題だ。

確かに弾幕は厚くなったが、未だムラは残っている。

長年実戦より離れていた影響で鈍った身体を酷使し、多少無理をして瞬歩を使用。先程までと同様に、弾幕の薄い場所を探つては移動を繰り返す。

ふと視線をノイトラの背後に移すと、其処には冬獅郎と乱菊の姿は無かった。

それと同時に、二人の方向には弾幕が放たれていない事に気付く。

直後に下から聞こえて来る、何かが落下した様な音が二つ。

霊圧探知を行うと、やはりその音の方向には冬獅郎と乱菊の霊圧の名残があった。

喜助は悟つた。ノイトラは初めから本気では無かつたのだと。

これこそが彼本来の戦い方。如何なる技も能力も、その圧倒的な力で捻じ伏せるといふ単純明快なもの。

武人としての夜一との尋常な立ち合いも、恐らく此方の戦力の分析の為なのだろう。

そして攻撃を食らったのも、敢えてそうしただけ。

正しく余裕の表れ。その傲慢な立ち振る舞いは、正しく十刃のトップに相応しい。全く以て手が付けられない強さである。

「使うしかないんスカね…!!」

喜助の脳裏に己の持つ卍解の事が過る。

——やはり駄目だ。

あれは人目に付く様な場所で使える代物では無い。

だがそれは決して一角や弓親の様な矜持から来る理由では無い。それこそ山本総隊長の斬魄刀と同様に、周囲への被害が大き過ぎるのだ。

しかも今は何処に藍染の目があるかも知らない状況である。もしも使う時があるとなれば、自身の生命の危機か、その藍染と相對した時か。

恐らくだが、今回は例え敗れても死ぬ事は無いだろうというのが、喜助の推測だ。

証拠はノイトラの行動にある。

彼が本気で此方を仕留めに掛かっているのであれば、冬獅郎と乱菊が力尽きた時点で、その方向への虚弾の発射を止めずに追い討ちを仕掛けている筈だ。

序盤に対峙して圧勝した一角に対しても同様の事が言える。

理由としては二つ。ノイトラが敗者の命を奪うまではしないという信念を持つているのか。はたまた今回の侵攻自体が、現世への援軍として尸魂界より派遣された死神達についての情報収集のみである為か。

どちらにせよ、それはあくまで推測の域であり、確定的では無い。

卍解は使えない。だがこのままでは敗北まで一直線だ。

「夜一サン!! 今から隙を作りますんで、一気に攻め込んで下さい!!!」

喜助は覚悟を決めた。

弾幕が厚くなった事で近寄る事が困難となり、回避に集中していた夜一へ叫ぶ。

当然、その声はノイトラにも届いた。

それに対する反応は、喜助へ向かう弾幕の更なる増加という形で現れる。

「——雷鳴の馬車、糸車の間隙、光もて此これを六むっに別つ」

だがそれは予測の範囲内。

自身の霊圧を別な部分にも回した影響か、罅が入り始める血霞の盾。

喜助はそれに怯む事無く、言霊の詠唱を開始する。

しかも一つだけに終わらず、喜助は更に詠唱を重ねて唱える。

二種類の鬼道の詠唱を並行して行う事で連発を可能とする「二重詠唱」という技術があるが、彼のはそれ以上。

その名も「多重詠唱」。前者ですら超難関な技術にも拘らず、それを超えるものを行使するその凄まじさは推して知るべし。

やがて盾が限界まで罅割れ、崩壊した瞬間、喜助は溜めに溜めたそれ等を一齐に放つた。

「六杖光牢りくじょうこうろう」、鎖条鎖縛さじょうさばく」、九曜縛きやうしほり ツ……カ……ハツ……!!!」

無数の虚弾の直撃をその身に受けながら、喜助は見事成し遂げた。

多重詠唱の行使には多大な集中力が求められる為、それ以外に何か行動する余裕は無かったのだろう。

「ッ!!?」

ノイトラの胸に六つの帯状の光が突き刺さり、太い鎖が身体中へ幾重にも巻き付き、彼の周囲縦方向に八つ、胸に一つの黒い鬼道の玉が浮かぶ。

その縛道による拘束が、ノイトラの全身を覆っている霊圧の膜の流れの大部分を断つた為か、虚弾・狂葬曲は途端に鳴りを潜め、前のめりになって落下して行く。

「…後は任せました…よ…」

ノイトラの拘束が成功したのを確認した喜助は、遣り切った表情を浮かべながら意識を失った——かと思われた。

ワンダーワイスとの戦闘時と同様に、喜助のその身体が大きく膨張して破裂。

その破片が跡形も無く消え失せた直後、本物が落下途中のノイトラの真正面に現れたのだ。

「——なーんてね」

それを目の当たりにしたノイトラは息を呑んだ。

——何のトリックだこれは。

先程の夜など目では無い程の携帯用義骸の活用振りだ。

何時の間に入れ替わったのか、全く以て解析不能。

流石は喜助と言うべきか。

あの状況下に於いて、多重詠唱と同時進行で携帯用義骸との入れ替わりを行ったその  
技量。

つくづくとんでもない男である。

「おおオオオオオッ!!!」

喜助の策の成功に続く様にして、夜一は動いた。

女性とは思えぬ程の雄々しい咆哮を上げながら、ノイトラの後頭部目掛け、烈火の如  
き勢いで真上から左踵を振り下ろす。

ノイトラの繰り出した斬魄刀の本気の一振りすら弾いた、瞬間状態での特製手甲によ  
る一撃。

如何に自身の鎖を外したノイトラと言えど、今の状態でその直撃を食らえば只では  
済まないだろう。

喜助も斬魄刀の刀身に紅色の霊圧を纏わせながら、大きく横に振り被っており、今にも薙ぎ払わんとしている。

前回の任務時に、剃刀紅姫をいとも容易く無力化された事を理解しているのだろう。その霊圧の密度は尋常では無い。

「……………」

だがノイトラの顔には焦燥の欠片も無かった。複数の縛道で雁字搦めにされ、完全に抵抗不可能な状態にも拘らずだ。

寧ろ何時もより落ち着き払っている。

それに喜助は引つ掛かりを覚えたが、気に留める事無く斬魄刀を薙ぎ払った。

「…逃げた方が良いぜ」

「——ッ!! 夜一サン!!!」

それに反応出来たのは奇跡と言って良い。

夜一の踵の直撃寸前にノイトラが零した言葉。

それを耳にした喜助は声を上げると、瞬時にその場から離脱。

夜一も無理矢理身体を動かして攻撃をキャンセルすると、真横に跳んだ。

次の瞬間、空を割って現れた光の柱が真下へ降り注ぐと、ノイトラを覆った。

「チッ…!!」

「反膜…まさか——ッ!!」

「時間切れつつー事だ。惜しかったな」

反膜の効果により、全身を拘束している縛道が解かれて行く中、ノイトラは口元を吊り上げながらそう言った。

此方の努力を嘲笑う様なその姿に、夜一は苛立ちを覚えたらしく、大きく舌打ちをした。

彼女の横に立つ喜助は何か気付いた様で、弾かれる様にして背後を振り返っている。

どうやらこの戦いの目的が陽動であり、本命は織姫の身柄の確保にあると今更ながらに悟ったのだろう。

一見余裕そうに見えるノイトラだが、実はその本音は全く別物だったりする。

浮かべている笑みは只のフェイク。その証拠に、彼の心臓は凄まじい勢いで躍動していた。

——正直、危なかった。

ノイトラはギリギリのタイミングで反膜での回収が間に合った事に安堵した。

中級以上の縛道は相手の動きだけでなく、霊圧操作までもを縛る効果を持つ。

かつて虚化して暴走状態にあった拳西が、鉢玄の放った鎖条鎖縛に拘束された際、空中の霊子の足場に立っていたにも拘らず地面に落下したのが良い例だ。

御蔭でノイトラは虚弾の射出元である全身に張った霊圧の膜が解除された上、身動き一つ取れなくなった。

所謂絶体絶命の危機だった訳である。無拍子で帰刃するという最後の手段もあったのだが、それよりも早く反膜が展開されたのを確認した為、大人しくしていたのである。

そして虚弾・狂葬曲のデメリットは、展開中は響転での移動が出来無いという事だ。ステップ等の多少の動きは可能だが、緊急回避には足りない。

だが初めはそれでも問題は無いと思っていた。

——圧倒的物量の前では如何なる小細工も通用しない。

策には策で対抗すると言える程頭の出来が良くないノイトラはそう考え、兎に角数を増やす事を重視してこの技の開発を進めた。

そしてやがて到達した。此方を攻める暇など与えない、弾幕の豪雨まで。相手が藍染でも無い限りはそう易々と破られる代物では無い。

流石に完璧とまでは言えないが、そう考えられる程に十分な出来だった。

だが想定外だったのは喜助の行動だ。

まさかあの彼がフェイクとは言え、捨て身の覚悟で縛道を放つとは誰が想像するか。

世界の運命を左右する藍染との決戦でも無い、この戦いの中でだ。

喜助の事を知る者であれば間違い無く動揺する。

その結果がこれだ。もしも反膜の展開が遅れていれば、攻撃の直撃と同時に帰刃せざるを得なかっただろう。

そうなれば今迄必死に耐えてきた意味が無くなっていた。

ノイトラは内心で反膜の手配をした者と、任務を終えたであろうウルキオラに感謝した。

「——四楓院夜一じゃ!!」

「…何だいきなり」

突如として投げ掛けられた声に、ノイトラは思わず首を傾げた。

ゆつくりと上昇して行く、完全に自由の身となった彼目掛け、夜一が名乗りを上げたのである。

そんな彼女の眼からは凄まじいまでの敵意と殺意が感じ取れた。

「随分と久し振りじゃて、ここまで腹が立ったのはのう……」

どうやら先程の笑みが予想以上に癪に触つたらしい。

それ以外にも、この戦いが不本意な形で終わったのもあるのだろう。

何せ秘密兵器でもある未完成の特製手甲まで持ち出し、剩え切り札である瞬間まで出したのだ。

本気で仕留める気だったにも拘らず、それが叶わなかったのだ。

もし自分が同じ立場だったならば——そう考えたノイトラは納得した。これは居た堪れない。

「おぬしも名乗るがよい破面——いや、十刃!! 次こそは必ず決着を付けてくれる!!」

その台詞に、思わずノイトラは胸が熱くなった。

完全に敵視された事による面倒臭さもあつたが、この世界でも屈指の猛者であるあの四楓院夜一に此処まで言わせたのだ。

ある意味今迄の努力が——そして自分が一介の戦士であるのだと、認められた様な気がした。

極力自分の情報を相手に与えるべきでは無いと言つて置いて何だが、此処で名乗り返さなければ漢では無いだろう。

良く良く考えれば、ノイトラが十刃の中堅だと判明したとしても余り影響らしい影響は無い。精々尸魂界陣営の警戒心が上がる程度だ。

空座町決戦までそう遠く無い今、例え死神達が修行内容を濃くしたとしても、この短期間では付け焼刃にしかない。

逆に藍染側の陣営も、この任務内でのノイトラの立ち回りが、少なくとも発破を掛ける切っ掛けにもなるかもしれない。

特に上位十刃。第5十刃がこれだけ奮闘したのだから、自分達ならもつと出来る筈、寧ろしなければ立場が無いとして。

つまりは総じてプラスマイナスゼロとなる訳だ。

そう結論付けたノイトラは、徐にその長い舌を限界まで覗かせた。

「ツ…なん…じゃと…!!」

「いやー、笑えない冗談ツスねえ…!!」

その舌に刻まれた5の数字を見た夜一と喜助は驚愕を隠せなかった。

それはそうだろう。二人はてつきりノイトラが十刃でもトップかその近くに位置する破面であると想定していたのだから。

「第5十刃、ノイトラ・ジルガだ」

二人を見下ろしながら、ノイトラは堂々と名乗りを上げた。

「以後御見知り置きを…つてか？」

不敵な笑みを浮かべた彼は、空の裂け目に消えて行った。

## 第二十七話 その他諸々と、三日月と虚無と

浦原商店地下の勉強部屋。其処には冬獅郎を始めとする護廷十三隊の現世援軍メンバー——日番谷先遣隊の一同が集結していた。

その目的はつい数時間前の戦いの中で負った怪我の治療の為だ。

治療を担当するのは、筋骨隆々の長身で眼鏡を掛けた男——握菱 鉄哉。

その傍では黒髪で気弱そうな少女——紬屋つむぎや雨ウルルが補助として就いていた。

やはり元鬼道衆総だけあって、鬼道の手腕は見事なもの。回復速度と量が尋常では無い。

加えて喜助の発明した治療用具も用いていた為、ものの数十分で全員分の治療を終えると、仕上げとして主に重傷者であった者達の身体へ特殊な包帯を巻いて行く。

「ウルル殿、新しい包帯を」

「…はい」

未だに意識が戻らない一角への処置を終えると、鉄哉は雨に包帯の追加を頼んだ。

やはり大の男の胴回り全てに巻くとなると、相当な量が消費されてしまう。

——包帯これもタダでは無いのですが。

内心でそう呟きつつ、鉄裁は休まず手を動かして行く。

本来、掠り傷程度であれば、鬼道で治療を終えた後は何の処置も必要無い。

だが重傷の場合はやや異なる。特に肉体や内臓がの一部が欠損していた場合は顕著だ。

余程酷い状態で無い限り、一応表面上は完治まで持ち込める。

だがその治療部位には肝心な中身が——その者の霊圧が全く流れておらず、スカスカな状態なのである。

鬼道の治療——正式には回道というが、それは負傷者の霊圧を回復させ、本来持ち得る自然治癒能力を促進させるのが基本の形だ。

だが先程述べた欠損等がある場合、負傷者自身の治癒能力を超えてしまっている。超速再生でも持っていない限り、如何に自然治癒能力を手助けしようが、完治は不可能。

その場合は致し方無く、強引に体構造を外部から完治させる措置を取る。

だがこれがまたポイントだ。

例えばその負傷者は腹部を大きく抉り取られていたとする。

治療後は内臓から筋肉、皮膚組織まで綺麗に元通りになった。

だが実質それは足りない箇所に代用品を埋め込んで無理矢理身体に繋げただけの状態。言い方は悪いが、身体に異物が入っている様なものである。

当然、そんな事をすれば身体が拒否反応を起こすだろう。それか体構造として上手く機能せず、最終的には死に至る。

解決策としては、その部分に負傷者自身の霊圧を完全に馴染ませる事だ。

だがそれを成すにしても、結局は負傷者自身の手掛かっている。

所詮回道による治療は医療の延長線上に過ぎず、限界があるのだ。

「むう……」

鉄裁は眉間に皺を寄せた。

今彼が巻いている包帯は喜助御手製の品。その治療部位と負傷者自身の霊圧を馴染み易くする他、傷に染み付いた死神以外の霊圧を吸い出して外に放出するという効果もある優れたものだ。

稀にだが、負傷した際に敵の霊圧が傷に溶け込んだり、渦巻く様にしてその部分を覆い隠しているといった現象が起こる事がある。

するとそれは鬼道による干渉を阻害したりと、決して無視出来無い程の弊害を齎す。

その靈圧の持ち主が負傷者とは決して相容れ無い存在で、且つ高い靈力を保持していればいる程、その度合は大きくなる。

止血剤等の治療薬は普通に使用出来るのだが、致命傷だった場合は拙い。

やはり治療の要は鬼道なのだ。それが効かないとなれば命取りになる。

現状では其処まで酷い状態の者は居ないが、敵の靈圧が傷に溶け込んでいる者は居た。

それは一角と同じく意識が戻っていない冬獅郎だ。

彼はノイトラの放った無限虚弾に耐え切れずに直撃を受け、その結果肩や脇腹等、複数の箇所をやや挟られていた。

致命傷まで至っていないのは幸いとも言えるが、その怪我は決して軽いものではない。

早く治療するに越した事は無かった。

だが如何しても溶け込んだ靈圧がそれを邪魔する。

鉄裁が洩い顔をするのも致し方無いだろう。

「隊長……」

その近くに立っている乱菊の内心は後悔で一杯だった。

敵の靈圧にアテられて全身を硬直させていたあの時。僅かでも自分から動けていれば、こんな事にはならなかった筈だと。

——何てザマ。

隊長を補助する所か、敗ける要因を作っただけ。

これでは只の足手纏いだ。次席とは言え、隊長の肩書を持つ者として情けないにも程がある。

乱菊は改めて己の責務を果たせなかった事を恥じると、更に自分を責めた。

彼女は最後の最後まで冬獅郎に庇われていた為、怪我らしい怪我は無い。

冬獅郎が力尽きると同時に、頭部に一発の虚弾の衝撃を受けて意識が飛んだだけだ。そうして意識の無い二人はそのまま射程範囲外である下へ落下していったのである。

視界を横に移せば、其処には治療を終えても尚眠り続ける一角が。

直ぐ傍には顔を俯かせながら座り込む弓親が居た。

彼のその拳は固く握り締められている。

それは心から信頼している仲間を傷付けられた事に対する怒りか。それとも己の失態を悔いているのか。

どちらにせよ、それは当人にしか解らない。だが乱菊にはその辛さが痛い程理解出来

た。

「…ぐうの音も出ないってのはこの事ね」

乱菊は思い返す。この戦いは見事なまでに完敗だったと。

序盤、冬獅郎は特異な斬魄刀を用いる女の破面と互角の戦いを繰り広げていたが、乱菊と弓親はあの第6十刃であるルピという女男に良い様にあしらわれていた。

するとその直後、これまた十刃らしいノイトラという破面の方へ向かって行った筈の一角が何時の間にもやら敗退。

考えてみると、流れが変わったのは其処からだった。

勢いに乗ったのか、続け様にルピが帰刃。それを阻止せんと急行していた冬獅郎も、その予想外な攻撃により一時退場。

不意打ちに近かったとは言え、隊長を退けた相手に残された二人が敵う筈も無く、あつと言う間に追い詰められた。

絶体絶命の危機に瀕したその時、援軍として喜助と夜一が到着。それから間も無くして冬獅郎も復活し、今度は逆にルピを後一步の所まで追い詰めた。

完全に流れが此方に向いたかと思われたが——即座に引つ繰り返された。

本気を出したらしい、ノイトラの手によつて。

「反則でしょ…何よあれ…」

今迄感じた事の無い程強い霊圧に、虚弾という不可視の攻撃の嵐。

その時の光景を思い出すだけで、乱菊は全身が震え出すのを感じた。

——勝てる訳が無い。

如何なる強大な敵にも臆する事無く、命を賭して尸魂界を守護するという使命を担う護廷十三隊の一員として失格だと理解してはいた。だがそれでも尚思わずにはいられなかつた。

五人掛かりでも近付く事すら叶わなかつた。何という理不尽な存在か。

しかも未解放の状態でその実力だ。帰刃すればどれ程の力を見せるのか、正直想像したくもない。

だが悪い事ばかりでは無いのも確かだ。

以前の現世侵攻の時、喜助からの情報によれば、あのノイトラこそが十刃のトップである可能性が濃厚との事。

つまり今回の戦いの中で、打倒すべき敵陣営の兵隊の持つ実力の上限が、大凡ではあ

るが見れたという訳だ。

そう考えれば今後、それを基準として何かしらの対策を立てたりも出来る。

少なくともノイトラ以上の実力者は、藍染やその部下の東仙とギンに限られる。

後者については元は此方側に属していた為、情報は多い。恐らく古参の隊長か総隊長辺りが対応する筈だ。

何も正面からぶつかり合うだけが戦いでは無い。手に入れた情報から策を講じるのも、一つの戦いなのだ。

「やれやれ……どうやら治療は一段落したみたいツスね」

噂をすれば喜助の登場だ。

前回に引き続き、二度対峙している分、現状では最も破面に関する情報を持っている者の一人。

ちなみに彼と同様に情報を持っている夜一だが、今は勉強部屋自体に居ない。

戦いが終わった直後、何か肌を刺す様な近寄り難い空気を醸し出しながら店の奥に入って行ったつきりだ。

「…ねえ」

「はい?」

「あの十刃のトップについてだけど…こつちに勝算はあるの?」

喜助と夜一についてのたまかな情報は、重國から直接護廷十三隊の隊長格全員に伝えられている。

過去は隊長であつた事。そして中央四十六室は未だに認めていないが、背負つた罪状が全て藍染の仕組んだ冤罪である事も。

だが尸魂界より姿を消してから百年余り。この二人が一体何をしていたのかまでは明らかになつておらず、その事に関して少なからず不審に思う者達は居た。

——得体が知れない。

乱菊もそう考えた一人ではあつたが、今はそんな事など気にしてられない程に切羽詰まつていた。

その為なのか。彼女は言葉使いを改める事もせぬまま、喜助に問い掛けた。

「そいつは俺も聞きたかつた。どうなんだ浦原さん」

横合いから口を挟んだのは恋次だ。

その顔は一見冷静に見えたが、全身に纏うピリピリとした雰囲気から、どうやらそうではないらしい。

何せ恩人であり尊敬すべき先輩でもある一角がやられたのだ。何の感情も抱かない訳が無い。

案の定、願わくば自分がその仇討ちをせんと、内心意気込んでいたりする。故に恋次はその仇敵たるノイトラについての情報が少しでも欲しかった。

「……………」

喜助は返答に困った。此処で教えて良いものかと。

前回護廷十三隊に伝えた、ノイトラを含めた破面三名に関しての情報。それが誤りであり、その中でトップだと思っていた破面は、実は中堅である第5十刃だったと。

隊長格を含めて五人掛かりでも仕留め切れなかった相手より、更に強い者が四人も控えて居るといふ事実が発覚すれば、まず確実に士気が下がるだろう。

しかし結局の所は皆に伝わる事になる情報だ。遅いか早いかのどちらかを選ぶとすれば、後者の方が良いに決まっている。

取り敢えずこの場面では、得意の演技を用いて上手く流れを変えるべきか。

確かに驚くべき事実ではあったが、特に支障は無い。対抗策は十分に講じてあると。そう考えた喜助は何時もの飄々とした態度で返答した。

「いやー、実はその情報は間違いだったみたいでして」

「は？」

「…なんだと？」

気拙そうに後頭部を掻き巻る喜助が零した台詞に、二人は思わず眉を潜めた。

一体何が間違いだったのだろうか。

まさか十刃とは別の肩書を持った、破面の中でもより特別な存在だったとでも言うのか。

ノイトラの実力の片鱗を身を以て理解していた乱菊としては、寧ろその方が納得出来た。

「本人から聞いたンスけど、あのノイトラ・ジルガという破面は十刃のトップではなく、中堅——第5十刃だったみたいなんスよー。いやはや、ホント参っちゃいますよ

ねー」

案の定、それを聞いた乱菊と恋次は揃って全身を硬直させた。

後数十秒も経てば、その表情が絶望に染まる事は想像に難くないだろう。

そうなる前に、喜助は先手を打った。

「ま、特に問題はないッス。これでも一応天才名乗ってるんで、あの程度なら何とかしてみせますよ」

——未解放の状態については、の話だが。

その後が続く筈だった台詞を飲み込む。

ノイトラの件を除いても、現在の藍染側の陣営についての情報は少ない。故に策を講じるにしても非常に厳しいのが現実。

正に御先真つ暗だ。藍染のみを見据えて準備を進めていた喜助だったが、非常に気掛かりだった。

目先の事を考えても、余り芳しく無い。

ノイトラの帰刃が一体何の能力を持っているのか。そして彼の上に立つ残る四人の

十刃が、一体どれ程の実力を持っているのか。

—— 己解の使用を本格的に考えなければいけないかもしれない。

そう考えるだけで喜助は気が重くなるのを感じたが、その表情に笑顔という仮面を貼り付かせ、内心を悟らせない様に努めるのだった。

虚夜宮に帰還したノイトラは、壮途の間にて一先ず安堵の溜息を吐いた。

これ程精神的に疲弊したのは久し振りだった。

肉体的には如何と言う事は無い。霊力も同様だ。

生憎と力だけはあるのだ。その中身に不相応な程に、だが。

「何とか乗り切ったか…」

失敗した事も多いが、得られた事も多い。

今回は実に学ぶ事が多かつた任務だつた。

それと同時に——やはり今のノイトラには精神面での安定性が足りないという事が判明した。

大抵の事には十分対処出来るだけのスペックを持ち得ている筈なのだが、その欠点のせいで上手く運用し切れていないのである。

夜一の突然の瞬間発動など、想定外の出来事に遭遇した時はより顕著に表れていた。

折角ドルドーニに師事を受けて身に付けた脚技も、後半では全く使用していなかったのも良い例だ。

状況が状況だつたとは言え、少なからず中にはそれが生かせる場面はあつた筈。戦闘者としては三流も良いところだ。

もし彼にこの事が露見すれば、まず間違ひ無く叱責される。

——同時に刑罰と評して襲ひ掛かれ、それを返り討ちにするという何時もの展開になるのだろうか。

だが憑依前のノイトラも、根拠も無しにこの程度なら問題無いと悠長に構えては手痛い反撃を受け、それに驚愕して対応が遅れるという部分が多かつた事から、別に中身が

凡人だからという理由だけではないのかもしれない。

完全解決は無理だろうが、何かしらの対策は取らねばならないだろう。

ノイトラは回転の悪い頭を必死に回し始める。

この任務の後、一護は織姫を救う為に仲間二人を引き連れて虚夜宮へ侵入して来る。

正確な日数は不明だが、そう長くは無い筈だ。

ならばその限られた期間内に出来る限りの事をすべきだろう。

幸いにも、今のノイトラには主人公補正は無いが、鍛錬補正は付いている。

それこそこの短期間の中で、今迄に無い程の極限状態まで自分を追い込めば、些細な事でも何かしら得られるものがあるかもしれない。

例えばぶっ倒れても、セフイ一口が居る限りは回復に困らない。またネチネチと怒られはするだろうが、甘んじて受けよう。

気分としては、テスト直前に全科目一夜漬けで乗り切らんと奮起する学生か。

普段使わないだけで元は頭が良い者、いざと言う時は凄まじい集中力を発揮する者等でなければ普通に無理だろう。

だがあくまでその意図としては他にもある。

それは迫り来る激戦の前に己の精神を引き締め、安定させる為だ。

——寧ろ此方の方がメインだったりする。

昔から言うだろう。身体を動かせば気分も晴れると。

精神状態が悪ければ、それに比例して身体の動きや反応も鈍くなってしまう。

例え得られるものが無かったとしても、気分が晴れれば大分違って来るものだ。

「最後の仕上げは……何にするか……」

今更だが、ノイトラの鍛錬に対する思い入れは非常に強い。

するなら徹底的に、それこそ剣を振るう以外は何も考えられなく成る程集中し、己を徹底的に追い込む。それこそが鍛錬だと。

見様見真似で無駄だらけな鍛錬を始めたチルツチに対して盛大にキレたのがその証拠だ。

憑依から現在に掛けて死ぬ気で打ち込み続けた結果、*“あの力”*を含めて確固たる成果を得ているが故に出来た考えなのだろう。

流石に憑依前は半ばサイババルに等しいストイックな生活をしていただけはある。厳しい環境下に適応する速度は半端では無かった。

「……ね、ねえチルツチ。ノイトラってばどうかしたの？　なんかすごく怖いカオしてん

「だけど」

「ウウー……」

「……知らないわよ」

そんなノイトラの背後では、やや怯えた表情を見せるルピとワンダーワイズ、そして呆れた表情を浮かべるチルツチの姿があつた。

口ではそう言っているが、実はチルツチは十二分に理解していた。

——どうせ鍛錬の事だろう。

あの死神達を蹴散らした虚弾・狂葬曲の時もそうだったが、ノイトラは何か新たな技を編み出そうと意気込んでいる時や調子が良い時など、何時にも増して恐い顔付きへと変わる。

困った事にそれは無意識の内の変化らしく、本人は全く自覚していないときた。

取り敢えずチルツチはツツコみを入れる事にした。

付き合いが長い分、自分は理解しているから良いものの、他人が見れば恐ろしい事この上無いだろう。

「ほら、帰ってきて早々なんて顔してんのよ。 さつさと治療室行くわよ」

「……ん？」

自身の背中に投げ掛けられた声に、ノイトラは反応して振り向く。

呆れ顔のチルツチの後ろで身体を縮込ませる様にしている二人の姿を見て、其処で初めて己の所業に気が付いた。

「あー……悪い」

バツが悪そうな顔で謝罪しつつ、ノイトラはその気拙い状況から逃げる様にして、壮途の間から一番に出て行く。

チルツチもその後を追従し、残る二人もその背中を追った。

移動中、暫く無言が続く。空気も心なしか重い。

先程の件が響いているのかと、ノイトラは申し訳無い気持ちになった。

此処は責任を取って、何か会話の切っ掛けになる様な事でも話すべきか。

そう考えて口を開き掛けたその時、正面から静かな足音が聞こえて来た。

「……来たか」

ウルキオラだ。

負傷云々以前に、その白装束には染みも皺も何一つ無い。

ノイトラ達と比べると、その差は歴然だった。

ウルキオラはその場で足を止めると、その無機質な眼でノイトラ達を一通り見回した。

するとやがてそれは一人のみに固定される。

「先に行つてろ」

「…わかった」

ノイトラはその意味に気付くと、背後の三人へ先に治療室へ行く様指示を出した。

それに対し、チルツチは一瞬躊躇った様子だったが、直ぐに残る二人を引き連れてその場から立ち去つて行った。

遠ざかる三人の足音がほぼ聞こえなくなる。

するとウルキオラは一瞬だけ視線をノイトラの剥き出しとなつた腹部へ移した後、口を開いた。

「随分と苦戦した様だな」

何に——等と問い返すまでも無い。

そうだな、とノイトラは返答し掛けたが、咄嗟にその台詞を飲み込んだ。

最強宣言をした立場としては、その返答は相応しく無い。

寧ろ此処は強気に、余裕綽々の表情で宣言すべきだ。これ如き、想定内の範囲内だと。

「そう見えたか？」

ワザと不敵な笑みを浮かべながら、ノイトラは逆に問い返す。

精神的にも余裕が出来た御蔭か、その演技は不自然さが全く感じられない見事な出来だった。

「…いや、違ったな。済まん」

——あれは本来普通に戦えば余裕で勝てるものだったが、敢えてそうしなかっただ

けだ。

そう語るノイトラの態度に、ウルキオラは先程の発言を撤回すると同時に謝罪した。確かにその通りだ。

寧ろあれだけ己に制限を課した上で、あの立ち回りを見せたのだ。逆に感心すべき内容だろう。

ウルキオラが内心でそんな事を考えている一方、ノイトラはとある真実に気付いていた。

——さては戦場を観察していたな。

事前に伝えられた任務の内容と、本来の内容との食い違い。

ウルキオラは自分達が陽動中に織姫の身柄の確保を行うと言っていた。だが本来であれば、彼女を連れて来るのは後になる筈だ。

実際、探查神経を発動してみても、虚夜宮内の何処にもそれらしい霊圧は感じられない。

つまりは任務開始直前か後か、ウルキオラはその辺りに藍染から任務内容変更を言い渡されていたと考えられる。

そして先程の発言だ。

ウルキオラの性格上、憶測でものを言う事は絶対にしない。解らなければ直接問い掛

けて確認する筈である。

だがそれをしないのは、つまりノイトラが苦戦したという確証を得ているという証拠。

手段については大凡検討は付く。大方任務終了後に虚夜宮へ帰還し、藍染と共に現世の状況を観察していたのだろう。

—— 終わっていたのなら、さっさと反膜で撤退させてくれれば良いものを。

そう内心で文句を垂れたノイトラだったが、直ぐ様撤回する。

良く考えてみれば、これは致し方無いと言える。

悪いのは藍染だ。

恐らく此方があたふたしている様子を、玉座に腰掛けて観察しながら愉悦していたに決まっている。

そしてコツソリ自分の実力を計ろうと画策していたのだろう。

つまりあの勘は正しかったのだ。

手の内の一つを晒してしまったのは痛手だが、まだその程度で済んで良かった。

もし帰刃していれば、此方の実力を大凡だが把握され、それを前提に何かしら仕込みを開始していた可能性が高い。

「……だがこれだけは聞かせろ」

「何だ」

「何故奴等に手心を加えた」

その質問の直後、ノイトラは暫し考える仕草を見せた。

ウルキオラが言っているのは、何故手加減したのかというより、何故殺さなかったのだという意味だろう。

言われてみると確かにそうだ。己を高める為に相手の土俵で戦う事を選択したり、最後まで帰刃しなかったのはまだしも、一角等に追い討ちを掛けなかったのは不自然だ。

傍から見れば手加減しているだけでなく、端から殺す気が無かった様に取りられても仕方が無い。

「お前であれば仕留められた筈だ。帰刃すれば確実に、な」

———なのは何故だ。

嘘偽り無く正直に答えろと、その無機質な目が訴える。

何故と言われても、彼等が死んで戦力が欠けてしまえば、空座町決戦時に尸魂界陣営

が不利になつてしまふではないか。

それに例え一護の主人公補正が都合良く発動して勝利出来たとしても、最終的に藍染を封じる喜助手段が存在しなければ詰む。

——という本音は勿論言える訳が無い。

ノイトラは面倒な気分になりながら、何時ぞやの様に虚勢を張る事にした。

「——最強つてのは、よ」

「……？」

静かに語り始めたノイトラ。だがその声には僅かに苛立ちが含まれている。

それに気付いたウルキオラはやや首を傾げた。

「どんな不利な状況下に置かれても、それを尽く跳ね除けられる様な奴じゃないといけねえつてのが、俺の持論だ」

「何？」

「それに『帰刃すれば勝てる』つてのは言い訳だ。つまりソイツは『帰刃しなきゃ勝てない』『つっ—意味なんだよ』」

「……………」

「その何処が最強だ？ あ？」

帰刃というのは破面の本来の姿なのだから、別にそれで勝利しても特に問題無いのではないだろうか。

ウルキオラはそう思つて口を開こうとするが、それよりも早くノイトラが続けた。

「それにまだ本格的な戦いが始まつてもいねえのに、おいそれと俺達の情報をひけらかす訳にはいかねえだろ」

その意見に、ウルキオラは納得した。

何せ敵側には喜助の他、それに次ぐ天才と謳われる存在も護廷十三隊には存在するらしい。

そんな相手に事前情報を与えてしまえば、一体如何なる手段で帰刃を封じに掛かりに来るか全く読めない。

それに加え、此方側が最も警戒すべき戦力である護廷十三隊の総隊長を含め、決して侮れない者もチラホラ居る。

藍染が気に掛ける程の実力者であれば、一度見ただけでその帰刃に対して有効な戦法を練る程度の事はやってのけるだろう。

「階級とかの肩書だけならまだしも、帰刃は論外だ。違うか？」

「……………」

——やはり其処まで考えていたか。

一種の理想論ではあった。だがそれを貫き通せる破面が、この虚夜宮には何人居るだろう。

しかも相手が相手だ。大半は追い詰められた末に帰刃を選択するに決まっている。

だがノイトラには力があった。そして最強を追い求めている確固たる意志の強さも。組織人としても実に模範的な存在である。改めてウルキオラは感心した。

一方、良く考えれば穴だらけな意見を堂々とかましたノイトラは、内心で少し焦っていた。

何せ話を聞かせた相手はウルキオラだ。

如何なる状況下でも只管冷静で居られる彼の思考回路なら、この意見の欠陥に直ぐ気が付くだろうと。

そうならない為、ノイトラは直ぐ様会話内容を変えるべくして、休み無く言葉を繋いだ。

「何だオマエ。もしかしてこの俺がワザと手え抜いてたと思つてたのか？」

「……いや」

「それだと俺が藍染サマに対して反逆してるみてえじゃねえか。ジョーダンきついでオ  
イ」

「……………」

ノイトラは溜息を吐くと、バツが悪そうな表情で自身の後頭部を掻き毟った。

そんな彼を尻目に、ウルキオラは考え込む。

もしもだ、ノイトラが裏切った場合、自分では止め切れるのかと。

あの時本能で感じた彼の力は決して間違いでは無い。それに加えてあの虚弾の派生技の他、此方が想像も出来ない様な攻撃手段を幾つか持ち合わせている筈だ。

やはり如何考えても厳しかった。

基本的に破面は未解放状態でも強い者は、帰刃形態の強さも比例して大きくなる。

例えば未解放で二の力を持ち、帰刃すれば大凡六から七まで上がる破面が居たとす

る。

今度は未解放で六の力を持つ破面の場合、帰刃すれば大凡二十近くまで上がる——といった感じだ。

かく言うウルキオラ自身も未解放の時点で相当だ。中堅以下の下位十刃クラスであれば、帰刃形態であつても十分相手取れる上、下手すれば撃破可能な程に。

実際、純粹な戦闘能力を見れば、ウルキオラは現状の第4より上の階級でも何らおかしくは無い。

虚化状態の一護が反応出来無い程の速度。月牙天衝を容易く防ぐ防御力。黒虚閃を初めとする凄まじい攻撃力。これ等の要素を持つ帰刃形態に加え、奥の手とも言えるその更の上——十刃で唯一彼のみが可能としている二段階目の解放、レスレクシオン・セグンダ・エターバ刀剣解放第二階層の存在。最後に超速再生を付け加えれば、それはもはや確定的となる。

極大な攻撃範囲による圧倒的な殲滅力を持つハリベル。攻守共に絶大的な能力を持つバラガン。無尽蔵の霊力を誇り、実力の底が全く見えないスターク。

上位十刃の錚々たる顔触れだが、この中でも確実にハリベルは上回る。バラガンはその能力の攻略法か隙を見出すか、その力を上回る程の攻撃を繰り返さない限りは敗北は無くとも勝利は不可能。スタークはその実力が不明瞭な為にハッキリとは言えないが、

もしノイトラの考察が正しければ、本気を出されると極めて困難だろう。

つまり上手く行けば第2十刃までは上り詰める事が可能という事だ。それはウルキオラ自身も自覚している。

それでも尚今の階級に留まっているのは、只単に藍染が出来ればそのまま居て欲しいと指示しているだけだ。本人に上がる意志が無いというのも大きいが。

その意図は不明だが、やはり自分如きには及びもつかない考えがあつての判断なのだろう。

ウルキオラはそう納得していた。

「オーイ、何か言えって。無反応は困るっての」

「……………」

完全に思考の渦中へと入り込んでいるウルキオラは、外からの音すら完全にシャットアウトしていた。

御蔭でノイトラは内心で地味に焦り始めていたりする。

——もしかして本気で裏切りという意味合いに取られていたのか。

ウルキオラがそう考えているという事は、勿論藍染も同様だという事に他ならない。

ノイトラの背中に冷や汗が流れ始める。

そんなあらぬ誤解を受けているとは知らぬまま、ウルキオラは更に思考を巡らせる。

自分でも勝てるかも判らない実力を持つノイトラだ。彼を完全に止められるとすれば、それこそ藍染か、東仙とギンの副官二名。それが遣る気を出したスタークか、バLAGANの能力が何処まで及ぶのかに掛かっているだろう。

其処でウルキオラは気付いた。想像が付かないと。

ノイトラが自分達を裏切り、その強大な力の矛先を此方に向ける、その光景が。

嘗ての姿はアレだが、今の彼は自身の持つ義務に対して忠実だ。

他者を無条件に見下したり、挑発する態度が激減。寧ろその身を案じる様な言葉を投げ掛けたりと、虚夜宮内でも随一の気遣いをする者へと変貌。最近知った事だが、それは特に雑務係の破面達に対しては顕著らしい。

そして藍染との会話では必ず敬語を使う様になり、任務内でも暴れ回りたい衝動を抑えつつ、命令を忠実にこなそうと努めていた。

大した改善振りだ。または変貌とも言つて良いかもしれない。

捻くれた見方をすれば、何かの伏線ではないかと思える部分はあるが、まず有り得ないだろう。

言つては何だが、ノイトラはそれ程頭が回る者でも無い。

所謂嘘が付けない正直者という事だ。今迄の会話内容を振り返るだけで大凡察せる。そういつた存在は勘繰るだけ無駄に終わるものだ。

やがてウルキオラは思考を止めた。

本人もそう言っているのだし、裏切る要素などほぼゼロに等しいだろうと。

「…何でも無い」

「溜めに溜めてそれかよコラ」

——この天然野郎め。

無駄に焦らせる様な態度を取った末に返された、全く答えになつていない返答。ノイトラは右頬の一部をヒクつかせた。

## 第二十八話 三日月と髭と御披露目と……

ウルキオラとの会話を終えたノイトラは、早足で治療室へと向かった。

とは言っても幾分かの霊圧の消耗と腹部の痣以外、特に目立った異常は無い。

その為、優先順位としては一番最後に回されており、先程やつと治療を開始したばかりだった。

ちなみに四人の中で最も重傷かと思われるワンダーワイスだが、意外と軽い処置で済んだ。

セフィーロの話によると、彼自身の自然治癒能力の高さ故か、治療を開始した頃には既に出血も大体収まり、傷も塞がってきていたらしい。

ノイトラは気付いた。そういえばワンダーワイスの帰刃——滅火皇子エステインギルには流刃若

火の能力を封じる他、超速再生にも等しい再生能力があったと。

未解放の状態でもその名残があるとすれば、この結果にも納得だ。

ノイトラはそんな事を考えつつ、視線を横に移す。

其処には室内を物珍しそうに眺めながら忙しなく歩き回るワンダーワイスが。

その全身には大量の包帯が巻かれていたが、激しく動くせいでそれも解け掛けてお

り、床に垂れ下がっていた。

「アーウー？ アー？」

「ちよつ、待てつつつてんだろがクソガキ!! 包帯引き摺んじやねえ!!」

後方から怒声を上げつつ、それを追い駆け回しているのはチルツチ。

彼女も帰刃の恩恵により目立った外傷は無い為、消費した霊圧を回復させる程度に収まった。

そして何故かセフィーロの脅しによって仕事を手伝わされており、こうしてワンダーワイスの世話を焼いている訳だ。

その理不尽な命令を下した張本人は、別の場所に設置された診察台の上に座るルピの治療に入っていた。

別に彼は怪我らしい怪我も負っていない筈にも拘らずだ。

「はい消毒しますよお、こつち向いて下さいね〜」

「なにその子供を相手してるみたいない方…つてうきやあああああ!! 目が、目がアー!!!」

セフィーロは自身の腰掛ける椅子を引いて移動し、ルピと正面から向かい合う。

そして近くの台に置いてある霧吹きのような物を手に取ると——何故かその眼球目掛けて噴射したのだ。

勿論中身は消毒液である。

案の定、ルピはけたたましい悲鳴を上げると、診療台の上から落下。そのまま両目を手で覆いながら、床を転げ回った。

「あれれえ〜？ 間違えて目に噴いちゃいましたあ〜」

「どんな間違えだ!! ってか初めからオカシイとは思ってたケドさ、ボクどこも怪我してないじゃん!! なんで治療受けることになってるワケ!?!」

テヘペロ、と自身の頭を軽く叩くセフィーロに、ルピは滝の様に大量の涙を流しながら指を突き付けた。

確かに彼は帰刃形態の触手を損傷した程度で、身体には一切の外傷は無い。

だがセフィーロは頑なに診察だけでも、と言って引かず、致し方無くルピが折れたのである。

二人の居る場所より少し離れた位置には、ルピの斬魄刀を手に取って、反膜の糸で包み込んでいる口力の姿が。どうやら何らかの修復措置をしているらしい。

彼女は帰刃形態にならずとも、規模は小さいが反膜の糸を使用出来る。

普段はそれで破面達の治療措置を行っているのだ。

破面の斬魄刀は本来持ち得る肉体と能力の核。つまりそれを回復出来れば、帰刃形態も元通りになる。

嘗てチルツチがノイトラに捨て身で戦いを挑み、最終的に肉体の一部を捨てた形となったのを元通りにしたのもこの方法だ。

未だに理由は不明だが、始めは冷ややかな態度であった口力に対し、ノイトラが土下座してまで懇願し、措置をしてもらったという経緯がある。

「何を言ってるんですか？ これは治療じゃありませんよお？」

「じゃあなんなのさ!!」

「だから消毒ですってば……汚物の……」

「ボク汚物扱いかよ!! もうなんなのこの治療長!! もしかしてこないだ尻軽とか言っただことの仕返し!?!」

「ウルセエぞカマ野郎、去勢されてえか?」

「ヒイツ!!!」

唐突にキレた口調になるセフィーロ。

しかも一瞬靈圧を解放し、集中的にぶつけたらしい。

ルピは小さい悲鳴を漏らすと、充血した目に更に更に涙を浮かべた。

実は全く以てその通り。セフィーロのしている事は只の嫌がらせという名の仕返しだ。

あの時に行った遣り取りの内容だが、ノイトラは誰にも言っていない。チルツチにも他言無用だと言い含めてある。

だがバレたのは何故か。

只単に隠し事の下手なチルツチが、まずセフィーロとの世間話の中でつい漏らしてしまい、鬼気迫る態度でそれを追求されて已むを得ず説明。詳細を知られる結果となったのである。

だがセフィーロが怒りを覚えたのは別にある。

自分を尻軽扱いされた事より、チルツチを売女、ノイトラやテスラを色狂いの様に例えた事だ。

セフィーロはノイトラと同様に、自分に対しての侮辱は流せる性格だ。だが仲間の、

それも想い人を侮辱されるとなれば話は別だ。

そんな暴挙をやらかしたルピが、脅されただけで大した制裁を加えられていないのも拍車を掛けたのだろう。

こうしてまんまと仕返ししの機会を与える結果となった訳である。

「テメエもキン○マ付いてんだろうが!! ビクついてねえで大人しく座つてろ!!」

「は、はいいいい!!」

消毒の次は塗り薬を塗る気なのか。

セフィーロは同じ台からチューブ型の容器を手に取ると、掌にそれを出して——思い切りルピの鼻に押し付けた。

「ふぎやあああああ!!!! こんどは鼻があああああ!!!!」

「あ、ワサビでしたこれ。テヘツ」

直後、ルピは先程と全く同じ形で、激しく床を転げ回り始めた。

良く見ると、その容器から出てきた中身は薬らしからぬ緑色をしている。

二人の周囲には少し青臭くてやや甘い、爽やかなで且つ何処か刺激的なツンとした香りが広がっていた。

どうやらこの時の為に中身を入れ替えてまで用意していた様だ。

「もう嫌だあああ!! いや、でもこういうのも案外……ケドやっぱいやだあああ!!」

流石のドM体質でも、セフィーロのネチネチとした虐めは耐え切れなかつたらしい。それはそうだ。何セルピの嗜好としては、圧倒的な力による強制的な屈服というか、支配されたい感じだ。

相手が圧倒的優位に立って居るのは良いのだが、何かこう指先から順に針を刺して行く様な遣り方では合わないのだろう。

そんなコントの様な遣り取りを遠目に眺めつつ、ノイトラは自分が置かれた状況を整理する。

彼は今、上半身裸でベットに腰掛けている。

別に放つて置いたとしても余裕で完治可能な腹部の怪我。眼前ではその患部に一生懸命薬を塗る少女——メノリが居た。

「んしよつと…こう、かな？」

「……………」

「うう、上手くないかない…」

患部を刺激しない様に気遣っているのか、その手付きは非常に覚束無い。

だがそれでもメノリなりに一生懸命やっている結果なのだろう。

邪魔するのは悪いとして、先程から口を噤んでいたノイトラだったが、もはや我慢の限界だった。

「…なあメノリ」

「は、はい！ 何ですかノイトラ様!!」

呼び掛けると、全身を跳ねさせるかの様にして反応するメノリ。

自分の名前を呼ばれた事が嬉しいのか、彼女の顔には嬉々とした表情しか見られない。  
い。

以前ザエルアポロの情報を提供してくれた褒美として頭を撫でてやった時と同じ、その頭部には頻りに開閉する耳と、後ろでは激しく左右に揺れる尻尾が幻視出来る。

「何でオマエが此処に居る？　つてかその恰好は…」

「え、ええと…」

見れば今のメノリは何時もの白装束では無く、セフィーロやロカと御揃いの白衣を思わせる物を身に纏っている。

まあノイトラとしては、胸元の露出度が高かった前の方よりも、現在の様な一切の露出が無い慎ましいデザインの方が好ましかったりするのだが。

「ああ、それは私です」

ゾンビの如き声を漏らしながら俯せに倒れ伏すルピを足蹴にしながら、セフィーロが答えた。

「何かノイトラさんに用事があつたみたいでして、帰りを待つついでに少し御手伝いしてもらつてたんですよお」

「…良いのかそれ」

「許可はもらってますので大丈夫ですよ〜」

恐らくその許可を出したのはビエホだろう。

彼は設備や情報の他にも、雑務系の破面達全体の人材管理も請け負っているからだ。

「め、迷惑でしたか…?」

メノリはやや不安そうな表情で、ノイトラを下から見上げた。

美女や美少女が行う上目使いというのは、男に対して尋常ならざるダメージを与える必殺技だ。

だがノイトラの場合、主にセフィーロのせいで異性に対する耐性が付いていた御蔭か、余り効果は無かった。

とは言え、自分の為に何かしてくれている者に対して冷たい対応を取れる筈も無く、無難な返事を返した。

「…んな事は無え、安心しろ」

「そ、そうですか!!」

——やっぱり犬だ。

見るからに安堵しているメノリを見たノイトラは改めて思った。  
そしてふと気付く。

最近やたらと良く会うメノリだが、その反面で本来の相方であるロリが放置状態となっているのではないかと。

メノリは寂しがり屋だ。史実では殴られる等の粗雑な扱いを受けても尚、ロリから離れようとしなかった事から、相当なレベルでの。

だが今こうして此処に居るといふ事は、その寂しさを払拭してくれる存在がロリ以外にも出来たからなのだろう。

案の定、ノイトラはここでまたもや御人好しを発動。御節介な事を考え始めた。

——メノリは良いとしても、ロリは大丈夫なのか。

何せあの性格だ。元から他者と馴れ合う様な事はしないだろうし、同僚の破面達の中でも確実に孤立している筈。

つまりロリは唯一の友人であるメノリが離れば、必然的にポッチと化す訳だ。  
考えれば考える程心配になってくる。

ロリはそのきつい性格の他にも、妄想癖やヒステリーな傾向を持つ。

それがボツチになった結果——主に藍染への想いが暴走する余り、織姫へ史実以上の暴挙を遣らかしたりと、何か悪影響を齎す可能性がある。

だが現状で幾ら考えても栓無き事。

所詮は推測に過ぎない上、直接ロリの様子を確認しない限りは何も判断出来無い。問題らしい問題は織姫の身の安全だけだ。藍染への好意は幾ら拗らせようが構わない。

それに織姫の面倒を見るのはウルキオラだ。後で少しロリの件を伝えて置けば、それなりの対応はしてくれる筈だ。

そう結論付けたノイトラは、メノリにその用事とやらについて問い掛けた。

「で、その用事ってのは？」

「それはですね……ドルドーニ様が『あの場所』に来てほしいとのこと……」

それは恐らく、ノイトラが一人で黄昏れたい時や、全力で鍛錬する時に良く行く、虚夜宮から結構な距離がある場所だ。

3ヶタの巣とは異なり、完全に藍染の監視が及ばないであろう安全地帯である為、非常に重宝していた。

とは言え、油断は禁物だ。故に念には念を込めて、その位置を起点として更に距離を取る事で、何時も場所を固定しない様に心掛けている。

「そうか…」

所要であれば、3ヶタの単にある何時もの広場——虚夜宮内には複数存在する侵入者迎撃用の部屋、〃遊撃の間〃にて済ませる筈だ。

だが其処では無いとなると、何やら只ならぬ用件らしい。

——彼らしくない。

ノイトラは疑問に思いながらも、治療が終わるのを待った。

治療室を出たノイトラは軽く体を動かした後、約束の場所へと響転で移動し始めた。その背中には念の為に斬魄刀を背負っている。

「変な事じゃ無けりや良いけどな…」

ノイトラは小さく呟いた。

指定された時刻まで未だ余裕はある。だが約束事等に関しては非常に義理堅いドルドーニの事だ。恐らく既に現場で待機しているだろう。

ちなみに後で知った事だが、グリムジヨールは一足先に虚夜宮へ帰還しており、チルツチ達が治療室へ入る前には既に治療を終えて立ち去っていたらしい。

その怪我の内容は、表面上ではあるが上体の前後広範囲の皮膚を抉られ、腹部を中心に複数の太刀傷が目立つ相当な重傷だったそうだ。

当然、ノイトラは違和感を覚えた。

虚化を習得したばかりの一護を相手取ったにしては、余りにも負傷が多過ぎやしないかと。

——またイレギュラーか。

ほんの僅かな変化が、巡り巡って大きな変化となる。正しくバタフライエフェクト。だが良く考えてみれば、この結果はある意味必然だったのだろう。

何せ自分自身も含め、本来であれば死ぬ筈の存在を生き残らせようと計画し、色々下

準備やら仕込みをしているノイトラだ。

本来有り得ない要素が増えている時点で、否が応にも変化が起こるに決まっている。やがてノイトラの視界に映ったのは、その場所の目印となる一際大きな石英の樹。

其処からやや離れた位置にて、両目を閉じて腕を組み、堂々とした態度で仁王立ちするドルドーニの姿が。

ノイトラは彼の眼前へ音を立てずに降り立つと、声を掛けた。

「師匠」

「ふむ……良くぞ来てくれたな、我が弟子よ」

——些か早い気もするがね。

瞼を開いたドルドーニはそう最後に付け足した。

「それで何の用だ」

「む？ 随分と急かすのだな。何か予定でも押しているのかね？」

「まあ……そんなとこだ」

ノイトラは即答する。

この後——正確に言えば四時間後だが、玉座の間にて今回の任務参加者全員に召集が掛かっている。

恐らくはこの任務の本来の目的の説明、そしてウルキオラが連れて来る手筈となっている織姫の紹介だろう。

そして何の変化も無ければ、そのままグリムジョーが力を取戻し、ルピを殺して再び第6十刃へと返り咲く、あの場面へと移行する。

だが以前の例がある様に、全てがスムーズに進むか如何かは不明だ。

主に藍染や藍染や藍染の御蔭で。

故にノイトラとしては残り時間を出来る限り休息に回し、心身共に万全の状態へと落ち着かせた上で、そのイベントに挑みたかったのだ。

「…あいわかった。では早急に済ますとしよう」

ドルドーニは組んでいた腕を解きながらそう言うと、突然霊圧を全開放した。その突拍子も無い行動に、ノイトラは一瞬硬直する。

「吾輩と立ち合いたまえ。無論、本気でな」

「は？ 何言つて——ッ!!」

問い掛けようとするノイトラだったが、ドルドーニはそんな事など御構い無しに動いた。

響転で瞬時にノイトラの頭上まで移動。右足を大きく振り上げ、迷い無くその踵を振り下ろしたのだ。

「コノ、ヤロツ…!!」

完璧なタイミングでの不意打ちだった。

だがノイトラは驚異的な反応速度で後方へと跳び、それを躲す。

「ハッ!!」

右踵は空を切ると、そのまま地面へと衝突し、大量の砂塵を巻き上げる。

だがドルドーニは初めからそれを予測していたらしい。流れる様な動作で体勢を立

て直して前方へと踏み込むと、間髪入れずに廻し蹴りを繰り出した。

胴を薙ぐ様にして迫る右脚を、ノイトラは男爵蹴脚術にて受け止めると同時に押し返す。

通常、歴代最高硬度の鋼皮に徒手空拳にて真つ向からぶつかり合えば、夜一の様に逆に攻撃を仕掛けた方の骨が砕けるかしてダメージを受ける。同じく鋼皮を持つ破面であつても、硬度に差があれば同様の結果となる。

だが今のノイトラは普段通り霊圧を極限まで制限しており、鋼皮の強化は一切していない素の状態。それに加えてドルドーニは両足に霊圧を込めて鋼皮を強化していた為、打ち負ける事は無かつたのだ。

「……ふむ、完璧だ。よくぞここまで我が技を習得した」

「……………」

「しかも以前より反応速度が上がっている。良き経験を積んだ様だな」

ドルドーニは押し返された慣性に従い、大きく宙に舞い上がった後に地面に降り立つと、何処か誇らしげにそう呟いた。

そんな彼を正面に見据えながら、ノイトラは疑問に思った。

先程の踵落としにと廻し蹴りだが、何時もの鍛錬時のそれとは明らかに別物。

速度、重さ、鋭さのどれもが増している。真面に直撃すれば、並みの破面であれば確実に瞬殺出来るレベルだ。

そして特筆すべきは、一切の躊躇いが無い明確な殺意が込められていたという点だ。

——— どういう事だこれは。

今迄模擬戦で散々ボロボコにした報復か。それとも何時も通りのパターンで、自分の周囲に女が多い事に対しての妬みか。

だがドルドーニの表情からして、そんなふざけた理由では無いのは確実だ。

負の感情も一切感じられない。

ならばその意図は一体何なのか。

そんなノイトラの心情を察したのか、ドルドーニは諭す様にして語り始める。

「そう身構えるな。ただ頃合いだと思ったまでよ」

「何？」

「いわゆる卒業試験という事だ、我が弟子よ」

その言葉に、ノイトラは思わず瞬きを繰り返した。

つまるところ、この師弟関係が今回の立ち合いを以て終わるといふ事か。

確かに、何時かは来るとは思っていた。

ノイトラは納得した。

同時に寂しさが溢れて来た。

ドルドーニとの鍛錬は、実に有意義で楽しいものだった。

今思えば、元から互いに大きなスベック差があった為、指導が開始した当初から色々問題点が多かった。

当時は力加減をするのが苦手で、最初の一回にてドルドーニを吹き飛ばし、気絶させてしまったり。完璧かと思いきや、技の形だけ真似ているだけで、その中身は過剰に力が込められていたり。

鍛錬開始から二ヶ月程はその辺りの調整に苦労したものだ。

だがドルドーニは投げ出す素振りも全く見せず、根気強い指導を続けた。

ノイトラ自身が真面目に取り組んでいた部分もあるのだろうが、この事に関しては感謝してもしきれない。

「…解ったよ、師匠」

「理解ある弟子で助かった。…では行くぞ!!」

了承の返事を聞くや否や、ドルドーニは再び前方へと踏み込んだ。ノイトラムもそれに続く。

直後、互いに蹴り出された脚が交差する。

やはり力負けしたのはドルドーニ。

弾き返された脚に引つ張られ、その身体も浮き上がる。

だが逆にその方向に従って身体を振じって、体勢が崩れる事を防ぐ。

すると即座に空中に形成した霊子の足場を蹴り、一度は離れかけた間合いを再び詰める。

「まだ終わらんよ!!」

ドルドーニの繰り出す、一振り一振りがまるで刃を思わせる蹴撃の嵐。

流石に数と速度はガンテンバインの百拳には及ばないが、その威力は此方の方が上だ。

加えてそれに籠められた殺意が相手に尋常ならざるプレッシャーを放っており、その動きを鈍らせるという効果も持っていた。

「オオオオオオツ!!」

だが今のノイトラには不十分であった。

その嵐を尽く、右脚一本のみで受け、弾き、いなし、凌いでみせる。

——遅い、軽い、少ない。

脚を振るいながらノイトラが考えていたのは、夜一の事だ。

やはり彼女との戦いの影響か、ドルドーニの攻撃を見る度に物足りない、如何してもそう感じてしまうのだ。

夜一とドルドーニなら、確実に前者の方が上だ。

技量、速度、機転。その全てが群を抜いて高く、唯一劣っているであろう殺傷力も、特製手甲や瞬間の存在を考慮すれば、完全に全ての要素で勝る。

そんな存在と真正面から戦って一日も経たぬ内に、今の状況だ。

御蔭でノイトラは余計にその落差を感じていた。

「想像以上だぞ我が弟子よ!! よもやここまで腕を上げていたとはな!!!」

「御蔭様で、なツ!!」

激しく打ち合う二人の顔には、先程から笑みが浮かんでいる。半ば殺し合いにも等しい状況なのだが、全くそれを感じさせない程に楽しげだ。

「ならば……いっからは全力だ!!」

ドルドーニは一旦蹴撃の嵐を打ち切ると、大きく上空へ跳び上がる。

次の瞬間、彼を包み込む巨大な竜巻と膨大な霊圧。

両脚部に竜巻を模った鎧と、両肩には猛獣の角を連想させる角。

前者にある煙突状の突起より風が噴き出し、可視化した竜巻がドルドーニの左右両側へと立ち並ぶ。

帰刃だ。それも解号の無い無拍子の。

ガンテンバインが出来るのだ。彼と同格でもあるドルドーニが出来無い道理も無い。

「凌いでみせよ!!」  
エル・ウフ・ビコテアル  
「単鳥 嘴脚!!」

その竜巻の一部が伸びたかと思うと、やがて鳥の嘴を持った蛇の様なものが模られ始

め、其々の竜巻につき一匹ずつ生み出される。

蛇はその嘴を攻撃対象たるノイトラへと向けると、そのまま一直線に突進を始めた。

それに対し、ノイトラはその場で全身を軸ごと右回転。その勢いに乗せながら振り返り様に右脚を振り上げた背面廻し蹴りにて、それ等を一気に破壊した。

頭部が完全に破壊された二匹の風の蛇は、発生源である竜巻に全身を溶け込ませる様にして消え失せた。

だがそれだけで終わる筈が無い。

案の定、今度は竜巻全体が無数に枝分かれすると、先程の倍以上の数の蛇が形成される。

「アベ・メジソス 双鳥脚」。単鳥嘴脚を無数に発生させる技だ。

だが良く見ると、その蛇の数は左右合わせて大凡二十。史実にて3ケタの巣に侵入した一護に対して展開した本来のそれを超えていた。

「オ、リアアアアアアアアアアッ!!!」

ノイトラは背中 of 斬魄刀を用いず、敢えて両脚のみで対抗する。

バラバラのタイミングで襲い掛かる無数の鋭利な嘴を、未解放の状態で出せる限界――

——文字通り全力の蹴撃で以て。

無論、未だに技量はドルドーニには及ばない。流石に彼の様に、建物の柱を断面に鏡面が覗く程綺麗に両断する事は出来無い。

だがそれに次ぐ程度は可能。加えて速度や威力は倍以上であり、全力で繰り出せば更に増加する。

霊圧を脚の表面上に刃をイメージして固め、且つ脚そのものを強化した上で振るう。

その一振りの齎す破壊力は圧巻。一度に三匹以上の蛇を両断し、更にその余波は追撃を掛けんとしていた他の蛇の勢いを削ぐ程。

蹴撃の回数が二桁も行かぬ内に、ドルドーニが繰り出した蛇は全て跡形も無く消え失せていた。

「——見事だ。もはや教える事は何も無い」

ノイトラが最後の蛇を両断したのを確認すると、ドルドーニは両側の竜巻を消した後、地面に降り立った。

「師匠……」

「その呼び名は止めたまえ。今を以て貴殿は吾輩の弟子を卒業したのだから」

ドルドーニは清々しい笑みを浮かべながら、ノイトラの呼称を訂正させる。だがその構えは一向に解かれてはいない。

これで終わりかと思われたのだが、どうやらそうでは無いらしい。

——これ以上何をしたいというのか。

ノイトラは内心で戸惑いを隠せなかつた。

「……ここからは吾輩の我儘だ」

「あ？」

「帰刃してくれ、ノイトラ・ジルガよ」

「!？」

——何を馬鹿な事を。

ノイトラは即座にツツコみ掛けたが、直後に向けられた鋭い視線に思わずたじろいだ。

「…何を考えてやがる」

「ふむ、断るかね？ それはそれで別に構わんのだが——」

ドルドーニは自身の顎に手を当てると、その視線を今度は挑発的なものへと変える。

その動作だけで、ノイトラは全てを察した。

これは自分が断れないと確信した上で、この態度を取っているのだと。

ノイトラがドルドーニの要求を断れない理由。それは至極単純な内容。

——今迄の借りだ。

この二人の師弟関係は、言わばドルドーニのボランテイアに等しい。

見返り等は一切無い。鍛錬の恩恵で力が増しているとは言え、それは本人の努力の賜物でもあるので、また別の話だ。

当然、ノイトラとしてはそれが申し訳無いと思う余り、以前宴会の中でそれを話した事がある。

——ならばそれは借りとして、然るべき時まで取って置いてほしい。

そう返され、ノイトラ自身もそれを承諾して話は終わっていた。

「きつたねえ…」

「なんとも言うが良い」

今こそがその然るべき時なのだ、ドルドーニはその態度で語っているのだ。

しかも生半可な覚悟では無い。それこそ、自身の命が失われる事となろうが構わないとでも言いたげだ。

——己が決めた道。故に如何なる結果だろうが、全てを受け入れる。

そう堂々と構えるその姿は正しく漢そのもの。

天変地異や地殻変動が起ころうが、もはや揺らぐ事は決して無いだろう。

ここまでされては、流石のノイトラも覚悟を決めざるを得なかった。

「して、返答は？」

顔を俯かせて黙り込んだノイトラに、ドルドーニが問い掛ける。

「祈れ——」

「!!」

「『聖哭蠟螂』」

次の瞬間、ノイトラの姿を巻き上がった大量の砂塵が覆い隠し、同時に重厚な霊圧が放出される。

帰刃。それが彼の返答だった。

正面からその霊圧を受けたドルドーニは、思わず膝を着きそうになった。

だが寸前で踏み止まる。

ノイトラが己の意思を曲げてまで帰刃を選択してくれたのだ。耐えずして如何するのだと。

師弟関係となつて数年。共に数え切れぬ程の鍛錬を重ねて来たが、その中でノイトラは一度たりとも帰刃していない。

頼まれたとしても頑なに拒み続けた。

後にドルドーニは悟った。それは自分達を誤つて殺めてしまわぬ様に、という気遣いだ。

初めて邂逅した時から、その圧倒的な差は既に感じていた。

武人という観点から言えばドルドーニの方が上だ。

だがそれ以外——身体的スペックや霊力といった地力の部分は別次元。

時の経過と共に、その差は更に開いて行った。

目を見張る程の成長振りに、ドルドーニは笑うしかなかった。

自分との鍛錬の他にも自主鍛錬を重ねているというのだから、それも当然と言えるのかもしれない。

ノイトラには武人としての天性の才能は無い。素質はあるが、それだけだ。

故にドルドーニとしては、ある程度の形までは出来ても、完全習得までは不可能だろうと踏んでいた。

だがノイトラは弛まぬ努力と、何が何でも取り込んでやるという貪欲な意志を以て、その非才の壁を踏破した。

見たか、先程の立ち回りを。

自身の帰刃形態からの猛攻を、伝授された脚技のみで凌いだのだ。

弟子が師を超える瞬間。それがこれ程感動するものだとは思いつかなかった。

頬に一筋の汗を流しながら、ドルドーニは笑みを深めた。

「…そうだ、その姿の貴殿と戦いたかったのだよ」

月光により作り出された三日月の影。それを映していた砂塵が晴れると、其処には“死神”が立って居た。

尸魂界に存在しているそれとは概念が異なる——正しく相対した者の尽くに死を齎す神の姿だ。

三日月を思わせる左右非対称の角。首から下の上半身が硬質な装甲に覆われ、腕は六本まで増加。その手には人一人は軽く両断可能な程の大鎌が其々に握られている。

眼帯によつて隠されていた左目の部分にある虚の孔、それを囲う様にして存在していた仮面の名残は、まるで開き掛けの顎を思わせる意匠へと変化。それを中心に右頬まで伸びる黄色の仮面紋。

何より特筆すべきは、その全身から溢れ出る霊圧だ。

ノイトラは何もしていないにも拘らず、彼の正面に立つて居るだけで身体どころか魂魄全体が悲鳴を上げている。

鋼皮の御蔭だろう、現状は何とか耐えられてはいる。だが一瞬でも気を抜けば押し潰されるのではないかという錯覚すら覚える程に、それは強大過ぎた。

もしノイトラと対峙しているのが鋼皮を持たない破面以外の種族、且つ並みの実力者如きであつたなら、その霊圧だけで勝敗が決していた事だろう。

正直言つて、解放直後は更に大きかった。

だが今はそれ程でも無い。つまりこれは制限されている状態での霊圧なのだ判断出来る。

——抑えていて尚これ程とは。

ドルドーニは盛大に笑い声を上げた。

「フハハハハ!! なんと素晴らしい霊圧か!! やはり吾輩の目に狂いは無かった!!!」

「…ドルドーニ」

「だが——」

これ程までに絶望的な戦力差は久しく感じた事は無かった。言うなれば藍染と邂逅した時以来か。

ドルドーニは震え出しそうになる身体を必死に抑えながら、好戦的な笑みを消す事無くノイトラに問い掛けた。

「まだ上があるだろうか?」

「ツ——何の話だ?」

「誤魔化さずとも良い」

予想外なその問いにノイトラは一瞬だけ動揺したが、次の瞬間には何事も無かったか

の様に平然と問い返した。

だがドルドーニはその僅かな反応を見逃さなかった。

「言つたであろう、全力で立ち合えと。さあ、早くそれを見せたまえ」

正直言えば、確信は無かった。

技を伝授するにあたり、常日頃からノイトラの動きをチェックしていたドルドーニだからこそ、その切っ掛けを見付けられた。

ノイトラの帰刃形態については、治療長を含めた世間話の中で大凡は聞き及んでい

る。そして納得した。確かに言われてみれば鍛錬開始直後のノイトラの動きは、上体を主体とした攻撃を想定したもの。

その反面、下半身は激しく動き回るより、踏み込みや踏ん張りを重視している様に見受けられた。

鍛錬の進行に伴って次第に変化してはいつたが、それよりも劇的な変化が現れ始めたのは最近だ。

ある日を境に、ノイトラの動きの中へ、更に別な何か混ぜり始めたのだ。

まるで全身を回転させつつ、常に激しく動き回る超高速戦闘を想定していると思わしきものが。

そしてその疑問は、ノイトラが先程見せた反応によつて確信へと変わった。

——言い逃れは許さない。

ドルドーニは視線でプレッシャーを掛ける。

「…加減出来無えぞ」

誤魔化し切れないと悟つたのか、ノイトラは小さくそう零した。

その様子に申し訳無いとは思いつつ、ドルドーニは即座に返事を返した。

「承知の上だ」

「…下手すりや死ぬぞ」

「その程度で吾輩が臆するとも?」

静かに警告し続けるノイトラの表情が、次第に険しくなつて行く。

だがドルドーニは一切引かない。

「本当に——」

「くどい!! 言つた筈だ!!」

そのノイトラのはつきりしない態度に、遂に我慢の限界を迎えたらしい。

ドルドーニは叫んだ。

脚部の鎧の突起部分より再び竜巻を発生させると、其処から風の蛇をこれでもかと言わんばかりに生やす。

数は先程の双鳥脚の大凡二倍。その余りの多さに、ノイトラは瞠目した。

「例え此処で死す事になろうとも、もはや悔いは無い!! 故に全身全霊を以て掛かつてくるが良い!!」

「…ツ」

「我が屍を超えて行け!! ノイトラ・ジルガよ!!」

ドルドーニは最後にそう叫ぶと、上空へと跳び上がる。

すると同時に全ての蛇が、その頭部をノイトラへと向けると、全方位から取り囲む様

にして襲い掛かった。

にも拘らず、ノイトラはその場を動かこうとする気配が全く無い。

だがドルドーニは攻撃の手を緩める真似はしなかった。

直撃まで残り一メートルを切る。

その直後だった。

ノイトラがその三対の腕を持ち上げ、六本の大鎌を其々交差する様にして天に掲げたのは。

「〃<sup>お</sup>覚醒<sup>き</sup>しろ——聖哭蠟螂〃」

その眩きの刹那、周囲から音の一切が消え失せる。

同時に天高く立ち昇る漆黒の霊圧。

ノイトラを取り囲んでいた筈の無数の蛇は、その膨大な霊圧の激流に押し潰されたのか、何処にも存在していなかった。

意識を失う直前、ドルドーニは〃ソレ〃を見た。

右目周辺を除いた全てを覆う、黄色のラインが部分部分に走った紋様を持つ漆黒の装甲。

その両手に握られるのは、未解放時の物とはまた異なり、より鋭利さを強調した三日月状の両刃の刀身を持つ二振りの大鎌。

絶望の化身の、その姿を――。

## 第二十九話 三日月と髭と、金鯨に孤狼と…

ノイトラの師匠となつて、一体何年が経過しただろう。もはや正確な数は覚えていない。

その一日一日の中身は濃厚に尽きる。まるで百年近い年月を付き合っていた様な錯覚を覚える程に充実した日々だった。

しみじみとした表情で、ドルドーニは過去を懐かしんだ。

指導している技がある程度形となると、次は実際に相手と打ち合う形へ。そして最後に完全な実戦形式へと移行した。

脚の動かし方、力の入れ具合等、傍から指示を出すだけでは不十分。故に実際に対峙して指導する事を選択したのだが——初めは非常に苦労したものだ。

何せ互いにスペック差が余りに隔絶している。技が完全に成立しておらずとも、繰り出される攻撃の一つ一つが十分過ぎる威力を持っていた。

受け流すだけでも精一杯。気を抜けば即座に押し切られるのは明確。

御蔭で指導の度に精神力がガリガリと削られる羽目になった。

だがその結果、ノイトラのみならずドルドーニ自身にも鍛錬の恩恵があった。

何せこの弟子は伝授される技を完璧にモノにせんと、真面目に、そして馬鹿が付く程に真面目に取り組んでいたのだ。

その御手本とならんと、指導する側も普段の鍛錬に力が入るのは致し方無いだろう。それにつられたのか、今は残り一人となった同僚も、今迄以上に鍛錬に打ち込む様になつた。

己を高める為には、共に切磋琢磨して競い合うライバル——または明確な目標意識があればより効果があるとは聞くが、正にその通り。

ノイトラの技の習得が進むと同時に、ドルドーニの技のキレや靈力も上がり、格上の存在に対する対処法も学んでいった。

未解放の状態でそれだ。無論、帰刃にも変化はあつた。

ノイトラとの立ち合いの中で見せた双鳥脚が、それを証明している。

「……あれだけの力を見せ付けた上で、吾輩を生かすとは……」

ドルドーニは見慣れた治療室の天井を視界に移しながら呟いた。

——やはりチョコラテの様に甘い。

それが無ければ一皮剥けるのだが、と考えつつ、深い溜息を吐いた。

「屍を超えて行けど、言ったではないか…」

「——だがそれもアイツの良いところでもある、だろう?」

その独り言に挟む様にして横から放たれた声に、ドルドーニは弾かれる様にして振り向いた。

見れば自分の隣にはもう一つのベッド。その上には第一期十刃だった頃より長い付き合いになる同僚——ガンテンバインが横になっていた。

二人共全身に包帯が大量に巻かれており、傍から見ればまるでミイラだ。

だが幾分かドルドーニの方は少ない。

それはそうだ。最後に奥の手とも言える力を見せたノイトラだったが、彼自身は一切手出ししていない。

つまりドルドーニの負傷は、その力の余波によるものだったのだ。

「闘士…」

「俺も完膚無きにまでやられたよ。そっちも大変だったみてえだな」

ガンテンバインは苦笑を浮かべながらそう言う。

実は本気の立ち合いを行ったのはドルドーニとノイトラだけでは無い。

それとは別に、ガンテンバインもチルツチを呼び出していたのだ。

そして互いに帰刃して真正面からぶつかり合った結果——前者が負けた。

二人がこうしたのも理由がある。

別に死にたかつたという訳では決して無い。

只単に——己の限界というものを知つたのだ。自分達はこれ以上伸びる事は無いと。

ノイトラについては元より伸び幅があつたのだろう。彼自身が努力家気質だったのも、それに拍車を掛けたのかもしれない。

同じ十刃落ちであつたチルツチも同様だ。

だが疑問に思わないだろうか。力及ばずして十刃落ちとなつた筈の彼女が、何故今更になつて能力が伸びたのかと。

チルツチは元より帰刃の燃費が頗る悪いというのがネックだった。

全力で使用すれば瞬く間に靈圧が消費されてしまう為、帰刃すれば自ずと短期決戦を選択せざるを得ない。そして出来るだけ早期に斬魄刀へと帰属させねば靈力の枯渇に繋がる。

明らかに保有靈力と能力が釣り合っていない。

だがそれは本当にチルツチが身の丈に合わないものを持つているだけと言えるのか。同じ十刃落ちとして付き合いが長い二人は、大凡見当がついていた。

帰刃は破面の持つ本来の姿だ。

例えるなら、他の生物であればほぼ確実に身動きが取れなくなるであろう質量を持つ上、酷く動きを阻害する甲羅をその身に背負いながら普通に歩ける亀か。

この世に存在するものは、生まれながら足枷となる様なものを持つていても、其々に最適な形に身体が出来ている。

つまりその燃費の悪い帰刃は、チルツチ自身が元からそれを使いこなせる素質を持つているという事に他ならない。

その反面、ドルドーニとバンテンバインの帰刃は共に燃費が良い。

殺傷力はチルツチにやや劣るが、安定して長時間の維持が可能であった。

思い返してみれば懐かしい。

ドルドーニは過去を振り返った。

御蔭である時のチルツチには良く羨望の視線を送られていたなど。

「…困った弟子よ」

ドルドーニはそう零す。

だが言葉とは裏腹に、その顔には苦笑が浮かんでいた。

弟子を持つなど、初めての経験だった。

その真摯な姿勢に心打たれて弟子入りを認めただけは良いが、実を言えばそれは初めての体験だった。

勿論教導のノウハウなど持っている訳が無い。一体何から指導すれば良いのか、悩み過ぎてその日は徹夜までしてしまった程。

そんな見切り発車にも等しい始まりにも拘らず、ノイトラは文句の一つも漏らさず真面目な態度を崩さなかった。

拙い指導にも拘らず、此方が何を言いたいのかを読み取り、理解出来無い部分は直接問い掛けて確認。

順々に鍛錬の内容を確立させながら、凄まじい速度で成長していった。

明確となった才能の差に、ドルドーニは嫉妬した。何故自分にはそれが無いのかと。

だが彼とて馬鹿では無い。この成長はノイトラ自身の弛まぬ努力による部分が大きいと理解していた。

如何に壮麗な原石でも、磨かねば光らない。そんなものは少し綺麗なだけで、価値は

そこら辺に転がっている石ころと同等だ。

ドルドーニの見た限りでは、現十刃でノイトラのように研鑽を積んでいるのはハリベルぐらいだ。

治療長の話によれば、彼女もノイトラの変化に刺激されたらしい。

最近では鍛錬の中で負った怪我や霊圧の消耗の回復の為に治療室を訪れる機会が増えたそうだ。

———また、女か。

その話を聞いた直後、何かと女の破面と縁のあるノイトラに対し、ドルドーニが苛立ちを覚えたのは内緒だ。

「ふむ、困ったな…」

「宙ぶらりんな状態ってやつだな。俺みたく、今後は主に祈りを捧げる日々でも送るか？」

「丁重に断らせてもらおう、クリステイアノ 教徒よ」

二人が互いに抱いていた、何時の日か十刃という地位に返り咲くという夢。

だがそれは叶わぬ夢だと悟った。ある日を境に成長が止まった己の霊力を見て。

意外にも諦めるのは簡単だった。既に心の奥底でその事を察していたのかもしれない。

では道が途絶えた自分達は今、何を成すべきか。

このまま生き続けていても無意味なだけ。かといって只単に命を絶つのも建設的では無い。

となれば——託すだけだ。

この命、そして信念を、次代を担う者へと。

ドルドーニはふと風の噂で耳にした内容を思い出す。

十刃という立場に驕らず直向に努力を重ねるノイトラだが、最近彼は十刃を含めた主要の破面達、そして我らがリーダーである藍染の前にて、己こそが最強だと豪語したそうだ。

それが十刃の中での話なのか、はたまた虚圏内での事を指しているのかは定かでは無い。

ノイトラの本当の性格を把握していたドルドーニは、それが只の表向きの態度であると直ぐに解った。

厳密に言えば目指していると言うべきなのだろう。

そしてその最強という称号こそ、以前ノイトラが零していた、ケジメを付ける為に必

要な要素なのだ。

十刃という地位に拘っている自分達とは全く別次元の目標。それを掲げるノイトラに対し、ドルドーニは己の全てを託す事を決意した。

同時進行で、ガンテンバインもその対象をチルツチに絞ると、尋常な立ち合いを申し込む事を決めた。

決行は任務より帰還してから直ぐ。

つい最近ノイトラに懐き始めたらしい、雑務係の破面の少女に伝言を頼み、その時を待った。

それが——この結果だ。

命を捨てる覚悟もしていながら、無様に生き残ってしまった。生かされてしまった。

先程の発言から解る通り、ガンテンバインは既に割り切つて先の事を考え始めている様だが、ドルドーニは別だ。

何せ文字通り己の全てを投げ捨てる覚悟で挑んだのだ。この様な状況に陥る可能性など一切考えていない。

再びベッドに身を預けると、天井を眺めながら、ドルドーニは呟いた。

「吾輩に生きて…一体何をしろと言うのやら」

「決まってるんだろ」

「っ!？」

独り言の心算が、まさかの返答。ドルドーニは心臓が飛び出すかの様な錯覚を覚えた。

声の方向を見遣ると、其処には背後にチルツチを伴って治療長の自室から出てきたノイトラの姿があつた。

その背中にはつい先程まで背負っていたであろう斬魄刀は見当たらない。

治療室は原則として武器の持ち込みを禁止しているので、恐らく何処かに仕舞つたのだと考えられる。

しかもあれだけの力を行使したにも拘らず、疲弊した様子は一切無い。

恐らく治療長の手で回復処置を受けたのだろう。

「俺から言わせてみりや——師匠の役目つてのは、卒業した弟子に自分の命を含めた全てを託す事だけじゃねえと思う訳だ」

「なに?」

どうやら自身の抱いた疑問は読まれていたらしい。

観念したドルドーニは、素直にノイトラの言葉に耳を傾ける。

「その弟子の行く末を見届けるのもまた、一つの役目とは言えねえか？　なあ、ドルドー

ニ

「!!」

ドルドーニは思わず瞠目した。

正直、それは盲点だった。

免許皆伝を与えた時点で、ノイトラの師としての役目は全て終えたと思い込んでいたからだ。

だがノイトラがドルドーニを生かしたのは他にも理由がある。というか、これが殆ど  
の割合を占めている。

言うなれば——正気を保てる自信が無かったのだ。

ドルドーニを己の手で殺す。その結果が、ノイトラに対して一体どれ程の影響を齎す  
か。

中身が多少忍耐強いだけの凡人であり、筋金入りの御人好しな性分だ。容易に想像が

付く。

師匠の事を何より尊敬している弟子が、不本意な形とは言え、その命を奪う。

その弟子はまず確実に罪悪感を抱くだろう。そして精神が荒むか、最悪は病にも等しい状態にまで悪化する。

——自分は師匠の命を背負った。それを無駄にしない為にも、もつと強くならねば。

今迄より徹底して、熾烈にと、その変化が行動や態度に現れる様になれば、もはや手遅れ。

その弟子は救いの無い修羅の道を一直線に突き進む事だろう。

ノイトラ自身、下手すればそれと同様の状態に陥ってしまうかもしれないと危惧していた。

無論、目的を捨てる事はしない。

だがその中に自分が勘定に入れられる事が皆無となる可能性が高い。

憑依前より自己犠牲というものの甘美さを知っているノイトラだ。タガが外れた場合、迷わず己の命を犠牲にした上での目的達成を優先するだろう。

残される者が悲しむと知りつつも、彼等なら自分が居なくとも大丈夫だと自己完結して。

「…全く、敵わんな」

ドルドーニは苦笑した。

チヨコラテなぞ目では無い程の甘さだ。

だが向けられる側にしてみれば——悪く無いと思えた。  
隣に居るガンテンバインも同様らしく、静かに笑い声を漏らしている。

「解ったんなら、もう暫く其処で休んでるこつた」

時間的に見て、間も無く召集の時間か。

そう考えたノイトラは踵を返すと、出口へと向かって歩き始めた。  
チルツチもそれに追従する。

——気合を入れねば。

和やかな空気に満ちた、その居心地の良い空間に名残惜しさを感じながら、ノイトラは治療室を後にしたのだった。

ウルキオラの指定していた時刻まで、大凡三十分程度といったところか。ドルドーニとの立ち合いの後、想像以上に結構のんびりしていたらしい。だが玉座の間まではそれ程距離も開いてはいないので、余裕はある。故にノイトラとチルツチはゆったりとした速度で足を進めていた。

「ん？」

ノイトラは前方から複数の霊圧が近付いて来ている事に気付く。

無意識の内に溢れ出す霊圧を抑えてはいる様だが、その強さまでは隠せていない。

十刃と思わしきものは二つ。それに及ばないが、虚夜宮の一般的な破面の中でも上位に位置する大きさのものが四つ。そして明らかに戦闘能力が低い、雑務系の破面レベル

のものが一つ。

ノイトラはその全てに覚えがあった。

「む、ノイトラか」

先に声を上げたのは、先頭を歩んでいたハリベル。

足を止めると、何時も通りにその下部が露出した乳房へ隠す様にして腕を組む。

相変わらず目に毒な恰好だ。本人は全く気にしていないのだろうが、男としては困る事この上無い。

帰刃すれば更に露出度が上がるというのだから、このハリベルと対峙する者が男だった場合、同情を禁じ得ない。

空座町決戦にて、もし彼女と戦うのが冬獅郎では無く、さり気にムツツリスケベな部を持つ修兵だったりすれば——ノイトラはそこまで考えた所で止めにした。

どちらにせよ、実力を見れば結果は容易に想像が付くのみだから。

ハリベルの後に続くのは、従属官の四名。アパッチ、ミラ・ローズ、スンスン——  
そしてテスラ。

其処でノイトラとテスラはほぼ同じタイミングで視線を合わせた。

そして——フツ、と互いに笑い合う。

擦れ違い様に合わせるだけでも十分な意思疎通を交わす二人だ。寧ろ今回は御釣が来ても余りある程だった。

言葉を交わさずとも通じ合える理想の関係を体現する二人。

ノイトラの後ろでは——悔しげな表情を浮かべながら親指の爪を噛んでいるチルツチが居た。

「げっ」

「うっ」

声を漏らしたのは、アパッチとミラ・ローズ。

二人はノイトラの姿を見るや否や、何故か怯んだ様にして一步下がったのだ。

「…おい、その反応はあんまりだろう」

「しようがないですよテストラさん。二人はあの映像のせいですっかり怖気付いてしまった様ですから…」

テスラは眉間に皺を寄せると、それを窘める。

彼の隣に立つスンスンは溜息を吐くと、呆れを含んだ視線をその二人に向けていた。

「なっ…んな訳ねーだろ!!」

「テキトーなこと抜かすんじゃないやねえ!!」

「ほら、弱い犬ほど良く吠えると言いますし」

『てめえスンスン喧嘩売ってんのか!?!』

「お前達な…」

三人娘の相変わらずなこの遣り取りである。

テスラは困った様な表情で自身の額に手を当てていた。

主である筈のハリベルは、横目でそれを眺めているだけだ。

その流石の冷静さに、ノイトラは感心した。

自分ならば我慢出来ずに速攻でツッコみを入れていただろうと。

「うるせえなあ…。通路は音が響くんだ、もう少し静かにしろってんだ」

「そうかー? あたしはおもしろいから気にならないけどな」

第3十刃グループの後に続くのは、もはや気怠げな表情がデフォルトとなっているスターク。

喧騒を余り好まない彼には、アパッチ達のテンションは少々堪えるらしい。

逆に賑やかな方を好むリリネットは、楽しい笑みを浮かべながら、四人の遣り取りを眺めていた。

差はあれど、全員がノイトラと交流のある者達だが、組み合わせとしては非常に珍しい。

というか、そう捉えてしまう一番の要因は、基本的に出不精のスタークにあるのだが。

「珍しい組み合わせだなオイ。何かあったのか？」

気になったノイトラは、ハリベルに問い掛ける。

といつても、大凡の検討はついていたが。

尸魂界陣営との決戦に近いせいなのか、つい最近になって藍染は第5以下を除いた上位十刃のみに限定した会合を行う事が増えていた。

恐らくその会合は間も無く始まる空座町決戦に於ける作戦会議か何かだろう。

今回も同様だったのかと予測していた。

「いや、今回は別件でな」

「別件？」

どうやら違ったらしい。

想定外のその返答に、ノイトラは思わず探査神経を発動した。

するとバラガンと複数の従属官達の霊圧は、何時もの会議室——“聚合の間”から第2十刃の拠点の宮へ向かう通路を移動している最中。

この事から、彼等もハリベル達と共に集まっていたのは明白。

だが返答の内容は否定。

上位十刃三名が参加する程であり、且つ公式とは異なる用件とは一体何なのか。

「数時間前までお前達が参加していた任務。それを記録した映像を藍染様に見せてもらっていたただけだ。私達が個人的に希望して、な。」

「…何？」

「しかし、バラガンも来たのは意外だったな」

奴もまた組織の一員としての自覚はあったらしい。

所謂見直したという意味だろう、ハリベルは感心した様にそう零す。

話を聞く限りでは、確かに私用に分類される内容だ。

だがこの三人が同時に同じ目的を持って動いたとは、意外も意外。

偶然にしては少々引つ掛るものを感じる。

「スターク、アンタもか？」

「……まあな」

スタークにも確認を取るが、何処か気まずそうに肯定を返されるだけ。

切迫した状況でも無い限り、自主的に動こうとしないと思われる彼ですら動いた。それが一番の違和感だった。

この任務は確かに重要性は高い方ではあるが、上位十刃までが気に掛ける程とは思えない。

「なに、最強を自称するお前の実力。それに興味が湧いただけだ」

ノイトラの抱いたそんな疑問は、次にハリベルの放った言葉で解決した。

——原因は俺か。

ノイトラは自分で自分にツツコんだ。

藍染の居る前で、臆する事無く堂々と言い放ったのだ。それは興味の二つや二つは抱かれるに決まっている。

性格や態度が変わっただけでも十分なのに、それだ。

もし自分が彼等の立場であれば間違い無くそうなる。

ノイトラはあの時の判断を少しだけ後悔した。

「…別に俺はそんなんでも無いんだけどな」

「好敵手認定された者が何を言っている。嘘が下手だなスターク」

静かにそう呟くスタークに対し、ハリベルは呆れた様子で言った。

まさか聞こえているとは思わなかったのだろう。

スタークは一瞬肩を跳ねさせると、バツが悪そうな表情で自身の後頭部を掻き筆つた。

「見事だったぞ。多少粗はあったが、あれ程の実力者相手に未解放のまま切り抜けるとは大したものだ」

ハリベルは視線をノイトラに戻すと、素直な称賛を送った。

その後ろでは従属官四人が喧嘩を一時中断しており、何処か棘のある目付きを一斉にノイトラに向けていた。

どうやら羨んでいるらしい。

それもそうだ。ハリベルは自身の従属官に対し、褒めるよりも窘める様な言動を取る事が多い。

テストラは兎も角として、残る三人は皆個性的で何時も喧嘩ばかりしている。そうなるのも致し方無いだろう。

「…アリガトよ」

褒められた事については嬉しいし、気恥ずかしさも感じている。

だがノイトラの心情としては複雑だった。

それは極力秘匿して置きたかった自分の手の内を、想像以上の人数に知られたという事実に対するもの。

素直に喜ぼうにも喜べないのが現状だった。

「お前もだチルツチ。話によれば、あの死神の少年は隊長だったそうではないか」

「決着は付いてないんだけど…」

「それでも、だ。隊長相手にあれだけ立ち回れば十分過ぎる」

「…一応礼は言っとくわ」

ハリベルはノイトラの後ろに佇むチルツチについても言及した。

現十刃でも珍しい人格者であり、尚且つ女の破面の頂点に君臨する者から称賛を送られたのだ。

喜びこそすれ、負の感情を抱く事などある筈が無い。

ソツポを向くチルツチだったが、その頬は仄かに赤く染まっていた。

——腕が上がっても、素直になれない性分は相変わらずか。

チルツチの事を多少知っているハリベルは、その態度に思わず苦笑を浮かべた。

数少ない同性の破面であり、しかも元は十刃の席に就いていた者だ。多少なりとも気

に掛かるのだろうか。

「流石はテスラを鍛えただけあるな。その部下を育てるコツを是非御教授願いたいものだ」

「…買い被り過ぎだ。アイツはアイツで努力したに過ぎねえよ」

「ククツ、そう謙遜するな」

頬を染める部分を除き、先程のチルツチと全く同じ態度を見せるノイトラに、ハリベルは笑い声を零す。

一応、彼女の言っている事は本心だ。

だがこれ以上追及しても、どうせノイトラは自分は何もしていないと言い張るだけだろう。

そう判断したハリベルは話題を変える事にした。

「折角だから教えてやろう。このテスラはな——私の従属官に加入して早々に行った鍛錬の中で、アパッチ達全員と戦い、引き分けた」

「…一対三でか？」

その話を聞いた次の瞬間、ノイトラはそのモヤモヤとした心情が一気に吹き飛んだ。唯一無二の親友の活躍を聞いて心が躍らない訳が無い。

アパツチ達は数字持ちの中でも上位に位置する実力を持つ。

それに加え、其々に自らの左腕を斬り落とし、融合させてペットを創生する合体技、  
キメラ・バルカ混獣神” という強力な切り札もある。

そんな三人を相手に戦い、引き分けに終わる。一介の数字持ちとしては有り得ない快挙だ。

「ああ。あれには思わず私も血が騒いだ」

その時の光景を、ハリベルは今でも鮮明に覚えている。

鍛錬の始めは、まず身体の慣らしから入ったのだが、初っ端からテスラはとんでもない事をやらかした。

十分以上掛けての、念入りな柔軟体操。それはまあ普通の範疇だろう。

問題はそれ以降。

虚夜宮の天蓋の下に広がる砂漠地帯。其処には建物の残骸が幾つも転がっており、そ

の上を一定時間跳び移り続けるのが、アパッチ達が行っている何時もの慣らしだった。テスラも初めはそれに合わせていた。だがそろそろ身体が温まって来たかと思つた瞬間——響転を発動。先程の倍以上の速度で駆け回り始めた。

当然、アパッチ達はその暴挙を止めようとした。

何を馬鹿な真似をしている。これでは本格的に鍛錬が開始する前にバテてしまうではないかと。

だが響転に対し、普通に駆けただけでは追いつける筈も無い。アパッチ達も致し方無く響転を用いて追跡を開始したのだが——一向に距離が縮む気配が無かつた。

柔軟体操の時と同じく十分程度が経過した頃。やがてテスラは動きを止めると、多少乱れた呼吸を整えながら額の汗を拭つた。

その後ろでは大量の汗を流しながら激しい呼吸を繰り返している三人の姿が。

如何かしたか、と心底不思議そうに問い掛けるテスラに、彼女達は苛立ちを覚えた。

其処から少し時間を置いた後、従属官四人での総当たり形式での模擬戦が始まつた。ハリベル達の鍛錬には、ノイトラの様な素振り等の内容は組み込まれていない。基本的に実践形式だ。

そしてこれも先程の慣らしの件に引き続き、テスラの立ち回りによって想定外の流れを見せる。

——まさかの全戦全勝。

半ば予想していたハリベルだったが、実際にその結果を見ると感心の溜息を漏らした。

対アパッチ。小柄なだけあり、高速戦を得意としていたが、それを上回る速度で終始翻弄される。

帰刃後は速度だけは上回る事は出来た。だが動きが直線的過ぎたのか、直ぐに先読みされる様になり無力化。

そして散々ノイトラに打ちのめされて鍛え上げられた、テスラの帰刃形態の鎧に鋼皮。それを突破出来る程の攻撃力をアパッチ持つておらず、あれよあれよと追い詰められ、勝敗は決した。

対ミラ・ローズ。見た目通りのパワーファイターな彼女は、同じくパワータイプの帰刃形態に目を付け、互いに帰刃形態での正面からの打ち合いによる勝負を申し込んだ。テスラはそれを承諾し、その直後に小細工無しの純粹な力と力のぶつかり合いを開始。

だがノイトラという、圧倒的な力によって相手を打ちのめす者との戦いに慣れていたテスラにとって、ミラ・ローズはまだまだ温いとしか言い様が無く、難無く押し返して勝利。

対スンスン。それまでの戦闘全てを見ていた彼女は、自分に全く勝ち目が無い事を半ば悟っていた。

だがだからと言って逃げる訳にもいかず、覚悟を決めてテスラと向き合う。

そして開始の合図と同時に帰刃して突撃——呆気無く玉砕に終わった。

何時もであればこの総当たり戦の後、ハリベルとの模擬戦が行われるのが通例なので、此処でアパッチ達が待ったを掛けた。

——テスラと三人掛かりで戦わせてほしい。

あろう事か、そうハリベルに進言したのである。

その時のアパッチ達の内心は——有り得ない。その一言だった。

日頃から鍛錬を欠かさずに行つて来た自分達が、ぽつと出の数字持ちに負けたと。

頭に血が上っていたのだろう。

互いに帰刃はしていたとしても、内容を見ればそんなものは慰めにもならないと十分に理解出来てはいた。

だがアパッチ達にも譲れないものがあつた。理屈では納得出来たとしても、感情は別なのだ。

主であるノイトラの方は虚夜宮内でも色々と有名だったが、テスラはその忠義深さ以外、特に詳細は知られていない。

つまりテスラが毎回ノイトラの鍛錬に付き合い、それに加えて自主的にも行つていたという過去も。そしてその実力が史実を遙かに超えており、まぐれではあつたがノイトラの鋼皮を僅かに傷付ける事も出来る程だという事実も。

暫し考える素振りを見せたハリベルだったが、それを承諾。

そして始まる、テスラが一方的に不利な状況での戦い。

普段は喧嘩ばかりのアパッチ達だったが、意外にもこの時は息の合つた連係プレーを見せる。

これには流石のテスラも一筋縄では行かず、苦戦を強いられた。

そして紆余曲折あつて——最終的に模擬戦では無く殺し合いにまで発展し始めたところを、ハリベルが強制的に止めて終了した。

切っ掛けを作つたのは他ならぬアパッチ達だ。

三人掛かりでも尚押し切れず、それどころか逆に自分達を追い詰め始めたテスラに対し、彼女達は遂に切り札を切つた。

それこそが先に述べた混獣神。それによって生み出されたペット——アヨンだ。

言葉を持たず、自らの殺戮本能にのみ従つて動く獣であり、あろう事か主であるアパッチ達の命令すら聞かないという欠陥兵器でもあつた。

その存在の危険性を一目で察したテスラは、止むを得ず全力を出す事に決めた。

其処から殺し合いが始まったのである。

「どうだ、この話を聞いてもまだ個人の努力に収まる範囲だと言い張るか？」

個々の戦い等、総合的に見ればこれは相打ちと言うより、テスラの勝利だと判断しても何らおかしく無い。

互いに模擬戦と言うルールに縛られている中、先にそれを破ったのはアパッチ達なのだから。

だが引き分けという結果になる様頼んだのはテスラだった。

例え殺し合いという形で無くとも、あのままアヨンと戦っていれば自分は勝てたか如何かも判らないからと。

故にこのアパッチ達との戦いは引き分けと言う形で収められたのだ。

「…降参だ。確かに色々鍛えてやったよ」

——良い加減に認めろ。

そんなハリベルの視線に耐え切れなくなったノイトラは、やがて観念した様に両手を

上げた。

テスラを鍛える際にノイトラが目標として定めたのは、劍八が繰り出す斬撃にも耐え得るタフさだ。

史実では劍八の力量を測らぬまま迂闊に攻撃を仕掛け、逆に一太刀の元に切り捨てられて敗北。その後は劍八との死闘の末に絶命したノイトラに続く様にして息絶える。

だが其処で気付かないだろうか。左半身を縦から両断されるという、明らかに即死級の重傷を負ったにも拘らず、テスラは長時間にも亘って生きながらえていたという事実

—— 霊力の強さは生命力の強さに比例する。

ノイトラはその事から、テスラにはそれなりに大きな潜在能力があるのではないかと考えた。

鍛錬と表して頻繁にフルボッコにしていたのは、それを引き出さんと徹底的に追い詰めていたに過ぎない。

耐久性を上げるという意図もあったが、どちらにしても地力を上げねばならなかった。

結果、予測通りにテスラは順調に霊力が上がり、それに加えて未解放のノイトラの鋼皮に掠り傷程度を負わせる攻撃力に、二・三十発程度の蹴撃なら耐えられる耐久力を得

た。

帰刃形態という前提付きでの話だが、生き残る事を優先するならこれで十分だろう。  
ノイトラは口元を吊り上げながら、テスラへと視線を移した。

「な、何だその目は」

「いんや、別に？」

「…寧ろあれだけの鍛錬こたんをしてきたんだ。俺としては負ける方がおかしいと——お  
わっ!？」

テスラのその台詞は強制的に途中で切られる。

見れば彼の頭部は、背後より筋肉質な筋張った腕が回されていた。

下手人はミラ・ローズ。彼女はフェイスロックの要領でテスラの頭部を極め直すと、  
蟀谷に血管を浮き上げながら大声で騒ぎ立てる。

「てめえ調子乗ってんじゃねえぞテスラあ!!」

「…う…ぐあ…!!」

くぐもった声を漏らしながら、もがき苦しむテスラ。

——実はその後頭部にミラ・ローズの胸が当たっており、ふとした拍子にその感触を思い出して赤面するのは後の話である。

「済ました顔しやがって、このムツツリ野郎!!」

「オグフツ!!? おまつ…止め…!!」

アパッチは無防備となったテスラの胸に容赦無い蹴りを御見舞いし始める。

本気で怒りを覚えている訳では無いのだろう。

声のトーンとは裏腹に、その表情はやや楽しげだ。

「お止めなさいな見苦しい。敗者がいくら吠えても、負け犬の遠吠えにしかならなくつてよ?」

『てめえもあたし達と同類だろうがスンスン!!』

後ろから静かにそれを傍観していたスンスンだったが、やがて呆れを含んだ声でそう言い放った。

いけしやあしやあと自分の事を棚上げにしてアパッチとミラ・ローズを扱き下ろすのは彼女の専売特許。

予想通りに、アパッチとミラ・ローズは激しく反発。

それをスンスンは長い袖で口元を隠しながら、ソツポを向いて知らん振りをする。

何時もの御約束の流れであつた。

ニヤつきながらその光景を眺めていたノイトラだったが、其処でふと気付いた。

——これは丁度良い機会かもしれない。

それは以前考えていたスターク生存の為の楔の件だ。

拠点の宮に直接出向かない限り、会おうと思つても中々会えない彼だ。

今の内に言う事を言つて置けば手間も省ける上、ハリベル達にも良い刺激になるかもしれないと考えて。

後者については生き残る事はほぼ確定しているのだが、不測の事態というのは如何しても存在する。

念には念を込めて置くに越した事は無い。

「スターク」

「ん? ……どうしたよ、いきなり」

そう決めたノイトラは、直ぐ様スタークに呼び掛ける。

振り向いたスタークだったが、その鋭利な眼光を見た途端、困惑した。

何せノイトラが自分と呼んだ場合、大抵その用件は弄りが八割で世間話が二割だ。

間違つてもこの様な態度を見せる事は無い。

戸惑いを見せるスタークに内心で謝罪しつつ、ノイトラは口を開いた。

「宣言するぜ。俺はアンタを超える」

「!!」

「そして本当の十刃最強が誰なのか証明してやる」

突如として放たれた宣戦布告とも取れる発言に、その場に居合わせた全員が硬直した。

流星のハリベルも瞠目している。

「それ…マジで言ってるのか?」

「当たり前だろ」

「そう、か」

スタークは静かにそう返した。

一見、冷静さを取り戻している様に見えるが、その内心は驚愕の一言。

何故ならあの時の最強宣言は、本心では無く建前だと思っていたからだ。

「だからその時まで死ぬことは許さねえ。アンタを降すのはこの俺だ」

「参ったぜ……」

戦うのは余り好きじゃない。傷付き、傷付け合うのは虚しいだけだ。

殺し合いなぞ尚の事。遺恨を残す様な真似をすれば、負の連鎖が生まれてしまう。

——折角仲間が増えたのに、そんなのは御免だ。

気の合う仲間達とは共にのんびりと過ごし、合わない者が居ても争いさえ起こらなければ、それで満足だった。

以前参加した宴会の中でこの内容を話したところ、ノイトラはこの意見に賛同してくれていた——筈だった。

今の彼が向けてくる鋭利な眼光は嘘を付いてない。

それだけにショックだった。如何に変わったとは言え、やはり戦闘狂のきらいは残っているとも言うのだろうか。

——といった感じに、スタークは勘違いしていた。

だが致し方無いだろう。十刃という立場を賭けた破面同士の戦いは基本的に殺し合いだ。

故にノイトラは自分を殺してまで最強を目指しているのだと、スタークはそう思い込んでしまっていた。

そんな事とはいざ知らず、ノイトラは依然としてその態度を崩さない。

勘違いしたままのスタークは、遣る瀬無い思いを抱きながらも、それに対抗する事にした。

二人は真正面から視線を合わせる。

すると先程までの緩い空気が一転。張り詰めた空気が、周囲に広がって行く。

互いに睨み合う形となった今の二人の霊圧を映像化すれば、まるでそれを中心に二つの壁が鬩ぎ合っている様な光景が其処には広がっている事だろう。

だがそんな殺伐とした雰囲気は、ほんの少しの間しか続かなかつた。

ノイトラは気の知れた仲間内でのシリアスが嫌いなのだ。

「——んで、俺が勝ったらアンタは俺のパシリな」

ノイトラがそう言った直後、ハリベルを除いた全員がずっこけた。

初めはスタークと同じ誤解を抱いていたリリネットは、ノイトラの真意を知るや否や、腹を抱えて大爆笑し始める。

ミラ・ローズの拘束から逃れたテスラも、相変わらずだな、と言わんばかりに苦笑を浮かべていた。

「おいこら待て!! この流れからどうしてそうなった!!?」

「そーいや喉が渴いたな。何か飲み物持って来いよ」

「いきなりパシリ扱い!? まだ勝負も何もしてねえだろ!?!」

「うっせえな。遅かれ早かれそうなるんだ。別に問題無えだろ」

「問題しか無えよ!!!」

普段は余り大声を上げないスタークだが、ノイトラの弄りがある時は何時も決まってそうなる。

リリネットも参加すれば更に顕著だ。

「うっさいぞパシリー。あたしはリンゴジュースでいいぞー」

「お前も便乗すんなリリネット!!」

「ククツ、ではついでに私の分も頼もうか」

「ハリベルお前もかよお!!!」

意外とハリベルもノリが良いらしい。

まさかの人物の参戦に、スタークは頭を抱えたのだった。

こうしてスターク弄りは召集時間の寸前まで続き、それに気付いたノイトラとチルツチは慌てて移動し始める羽目になった。

## 第三十話 三日月と黒幕と姫と鳶嬢と…

あわや遅刻寸前のタイミングで玉座の間への滑り込みに成功したノイトラとチルツチは、安堵の溜息を吐いた。

急を要する事態に陥った訳でも無し、明らかな私用で遅刻などしようものなら、組織の一員として目も当てられない。

「フウ…危ねえ危ねえ」

今から藍染と対面する為、気が張り詰めていても何らおかしくは無いのだが、その精神状態は意外と良好だ。

恐らくそれは先程の仲間達との遣り取りの御蔭だろう。そして一番はスターク弄りにあるのは間違い無い。

内心で感謝しつつ、ノイトラは室内を見渡した。

チルツチ、ワンダーワイズ、ルピ、グリムジョー。任務に参加した破面達全員が集結しているが、皆は先程から一言も発していない。

沈黙に耐え切れずに何かしら喋り始めていそうなルピも、落ち着かない様子で身体を左右に揺らし続けているだけだ。

気付けば既に集合時間は過ぎている。だが藍染は未だ現れていない。

此処にバラガンが居れば、以前の様に臆する事無く文句の一つや二つ零していた事だろう。

「…チツ」

静寂の中に響き渡る舌打ち。その方向を見遣れば、其処には史実よりも重傷を負い、全身包帯塗れとなったグリムジョーが居た。

その首は真横の壁を向いており、ノイトラの方向からはその後頭部しか見え、顔は確認出来無い。

全身からは殺意に似た、何処か近寄り難い空気を発している。

時間を守らない藍染に対して怒りを覚えている——という訳では無いだろう。

確かにグリムジョーは自分より階級が上の十刃に対しても一切態度を変えずに接するし、気に食わない事があれば即座に反応を示す。

だが藍染は別だ。舌打ち程度であれば普通にすが、それ以上はしない。

第0十刃という真の階級を持つあのヤミーですら、藍染の前では畏まった態度を取るのだ。

当然、グリムジョーもその辺りは弁えている。

つまり此処まであからさまな態度を取るといふ事は、その怒りの発端は別にある。良く見るとその下げられた右腕の先には、あらん限りの力で握り締められた拳が。

ノイトラは得心が行った。

——成る程、一護の事か。

実際に戦闘風景を見た訳では無い為に詳細は不明だが、グリムジョーの態度から大凡は予測出来る。

恐らく一護は虚化を完全習得、またはそれに近い領域まで至ったのだろう。

普通に考えて、現在の彼の實力は卍解状態でも未解放のグリムジョーに劣る。

その中であれ程の傷を負わせられる可能性があるとすれば、虚化以外には無い。

そしてそれは僅か十一秒という制限時間の中では絶対に成し遂げられないだろう。

結果、グリムジョーはギリギリまで追い詰められ、そのまま時間切れとなって撤退。

現状に至る訳だ。

——彼もまた、イレギュラーによる被害を被った一人という訳か。

原因の一環———というか発生地点であるノイトラは、申し訳無い様なそうで無い様

な、微妙な気持ちになった。

ここまでこつ酷くやられた上、解放も出来ず、反撃する機会すら得られなかったグリムジョー。

不完全燃焼とか、そういった領域を超えている。

その内に秘めた怒りは想像を絶する程に膨れ上がっている事だろう。

「…ん？」

ノイトラはグリムジョーとは逆の方向から此方に近寄ってくる気配を感じる。

この距離なら探查神経を発動するまでも無く、その正体が判った。

「ねえねえ、ノイトラ」

「何だ」

小声で話し掛けられたノイトラは、その方向を振り向く。

其処には自身の口元に手を当て、秘密の話をしようと態度でアピールをしているルピが居た。

その目は未だに充血している。

それはそうだ。何せ消毒液の原液がモロに直撃したのだ。

人間だったら失明する可能性も高かった事も踏まえれば、寧ろこの程度で済んで良かったというべきだろう。

「ホントはもつと前に聞きたかったんだけどさ……この任務って、いったいなにが目的だったワケ？」

ルピは声量を絞ったまま問い掛ける。この会話が周囲に聞こえない様に気を配っているのか、先程から視線が左右に激しく動き回っている。

彼とて馬鹿では無い。この召集がそれについての説明だとは理解している筈だ。

だが予定していた時間が過ぎてても一向に始まらない会合に、遂に我慢の限界を超えたのだろう。

この任務での役割が、陽動であるとしか知らないルピからしてみれば当然の疑問。

ノイトラは一瞬迷ったが、正直に答える事にした。

事前に詳細を、そしてついでに織姫の重要性もある程度説明すれば、彼女に対して騒ぎ立てる可能性も低くなるだろう。

て。そうすればルピが醜態を晒す事も無くなるだろうし、展開もスムーズに進むと考え

「…俺達とは別に、ウルキオラが単独で動いてただろ」

「うん」

「それは死神達が俺達に釘付けになっている隙に、とある人物の身柄を確保する為でな  
…」

「とある人物？」

別にこの後死ぬ事が確定しているルピに対し、そんな手回しをする必要性など皆無で  
あり無意味な筈だ。

だがノイトラはその事を全く自覚していなかった。

——真の御人好しというものは、理屈では無く自然とそう行動してしまうものなの  
である。

「人間の女だ」

「はあ!? それってどーいう——ッ!!」

大声を上げ掛けたルピの口を、ノイトラは咄嗟に自身の右手で塞いだ。

——静かにしろ。

同時にそう視線で脅すのも忘れずに。

「種族は関係無え。だからまず落ち着け」

「んむ…」

「そもそもこの任務は藍染サマが考えたもんだぞ。あの人が無駄な事すると思うか？」

ノイトラは窘める様な口調でそう語る。

次第にルピの興奮が収まったのを確認すると、その手をゆっくりと放した。

「後で説明される筈だ。だから冷静になれ」

「ぶはっ…わ、わかったよ」

渋々といった感じで、ルピは引き下がった。

この時、彼がやけに素直に従った理由は言うまでもない。

——やはりこの、力で強制的に押さえ付けられる感じが一番良い。他ならぬルピのこの内心が、それを証明していた。

「アウー」

「…何だよ」

ノイトラは不意に服の裾を引っ張られるのを感じた。

今度は何だ、と振り向けば、其処にはワンダーワイスが此方を見上げていた。

頭部に巻かれた包帯や、顔中に張られた絆創膏が痛々しい。

だがそれは外見だけの話であり、本人は至って元気そうだ。

セフィーロの話によると、多分明日には全て完治していてもおかしくないとの事なので、実際そうなのだろう。

「マー…」

「…だから何だったの」

ワンダーワイスは相変わらず言葉にならない声を発し続けるのみ。

顔は無表情だが、その瞳は何か物欲しそうに訴えている様に見えた。

——成る程、飴か。

ノイトラは納得した。

やはり中身が色々幼い分、甘味系が好みだったのかもしれない。

だが残念ながら、今は持ち合わせていない。

というか、ノイトラは基本的に重要な会議等に参加する場合、所持品は最低限に収める様心掛けている。

憑依前の職場の癖が抜けていない為か、必須となるメモ帳とペンを用意しようとする事も良くある。

斬魄刀は体内に収納しているので、所持しているとも言えなくも無いが。

「…後で幾らでも食わせてやる。だから今は大人しくしてろ」

「ウー…」

直後、瞳の輝きがやや失われるワンダーワイス。

如何やら落ち込んでいるらしい。

罪悪感が湧いたノイトラは内心で密かに謝った。

後で御詫びとして飴の他にも色々振舞つてやろうかと、そう考えながら、  
だが其処でふと気付く。

何故自分はワンダーワイスと仲良くなる様な真似しようとしているのかと。  
任務内で決めたではないか。彼の事までは手に負えない、故に救わないと。  
にも拘らず、これ以上仲を深めようとするなど、自分は馬鹿か。

ノイトラは無意識の内に行動してしまふ御人好しな性分に嫌になる。

平和な日常を生きる分には良いのだろうが、今の状況に於いては邪魔以外の何物でも  
無い。

憑依前からそうだった。

自分に好意を向けて来る相手には尽く態度が甘くなる。向こうから話し掛けられ  
ば、忙しかろうとも構わず相手をし、親交を深める事を優先。

相手が自業自得ともいえる失敗をして落ち込んでいる時も、自分で解決しろと切り捨  
てる様な事はしない。必ず相談に乗り、状況の打開方法を一緒に考えてやる。

これだけ見ると、詐欺を生業とする者にとっては絶好のカモでしかないだろう。

だがそれは第二の父親的存在でもあつた恩師の影響力の御蔭で、そのような輩が近付  
いて来る事は一切無かつた。

——昔は結構やんちゃだったとは聞いているが、本当に恩師の正体が何者だったの

かは不明のままだ。

更に困った部分もある。

勘当された身ではあつたが、家族。そして数少ない友人等の身内を害される等、余程酷い事をされない限り、時間の経過と共にその下手人を許してしまう。許せてしまう。

下手人が反省を示していれば尚顕著だ。寧ろ自分から率先して贖罪活動に協力してしまう程に。

罪を追及し、責める事は簡単だ。でもそれでは相手も自分も前に進めない。

ならば出来る限り建設的な方を選ぶべきだろうと、そう考えて。

——もう、これっきりだ。

ノイトラはそう自分に言い聞かせる。

ワンダーワイスに御菓子等を振舞つて、それで今後一切の交流を切る。それで全て解決だと。

史実でドルドーニが一護に放った台詞を思い出す。

——甘さを捨て、鬼になれ。

正にその通りだ。そうでもしなければ、この先限られた仲間達を生かす事も、自分自身が生き残る事も出来無い。

「アウー？」

「…何でも無えよ。そろそろ前向いとけ。」

その雰囲気の変化に気付いたのか、ワンダーワイスは下からノイトラの顔を覗き込む。

視線から逃れる様に、ノイトラは顔を逸らしながら、静かに窘めた。

直後、玉座の間全体に膨大な霊圧が押し掛かった。

それは間違い無く藍染とその副官二人のもの。

そしてそれに少し遅れる様にして、ウルキオラの霊圧も現れる。

——傍らに小さな別の霊圧を引き連れて。

「皆集まっていた様だね。では始めよう」

高台の後方から現れた藍染はそのまま玉座に腰掛けると、言った。

「入りましたまえ、ウルキオラ」

ノイトラ達の背後にある扉が開き始める。  
在室する者達全ての視線が、其処に集中する。

「失礼致します」

その先には二つの人影。

袴の側面に両手を突っ込んだ、もはや御決まりな自然体のウルキオラ。

そして——高校の制服を来た少女、井上織姫。

二人は元から開けられていたノイトラ達の間スペースまで移動し、其処で止まった。

「ようこそ、我らの城、虚夜宮へ」

藍染は手摺に肘を着きながら、何時も通りの笑みを浮かべながら言う。

頬に一筋の冷や汗を流し、非常に緊張した面持ちで、織姫は藍染を見上げた。

織姫はこの場に於ける自分の脆弱さを実感していた。

背中には既に汗だく。握り締められた両手も、先程からずつと震えている。

入室した直後から感じていたが、この場に居る全員が凄まじい霊圧を放っている。

隣に立つウルキオラは言わずもがな。そして以前現世に侵攻した際、ルキアの右腕を挽ぎ取り、一護が良い様にあしらわれたと零したグリムジョーを筆頭に、織姫は恐怖心を抱いていた。

そんな中でも一際存在感を放っているのは——ノイトラだった。

織姫は断界の中で接触してきたウルキオラが見せてきた映像を思い出す。

仲間達が苦戦し、傷つけられてゆく複数の映像の中で、唯一顔が映っていた破面であつたからだ。

ノイトラは対峙していた一角を、得物も用いずに素手で瞬殺した。

ルキア救出の為に尸魂界へ侵入した際に一護が交戦し、苦戦した相手。そんな一角を

事も無げに叩き潰すその姿に、織姫は驚愕した。

後で知ったことだが、ノイトラは夜の攻撃を容易く防いだだけでなく、逆にその脚を負傷させ、驚異的な頭脳を持つ喜助でも警戒する程に底知れない実力を持っているらしい。

残る他の数人の破面達も、相当な実力を持っているのは間違いない。

自分など小虫の様に潰せる事だろう。そう考えた織姫は背筋に悪寒が走った。

そんな存在に囲まれているのだ。何も感じない方がおかしい。

「——そして君達が敵の注意を逸らしている間、ウルキオラに身柄を確保してもらったのが彼女という訳だ。理解出来たかな？」

藍染は織姫に歓迎の声を掛けた後、ウルキオラを除いた五人の破面に対し、今回の任務の本来の目的について説明を始めていた。

やがて説明を終えると、最後に確認する様にして問い掛けると、周囲を見渡した。

ノイトラは言わずもがな。初めから承知の上で任務に参加していたのだから、意見も何もある訳が無い。

多少量した内容でだが、チルツチも彼から事前に説明を受けていた為、その表情には

特に変化は無い。

内心では多少気に食わないと思う部分はあつたが、堪えた。

他ならぬノイトラが何も言わないのだ。にも拘らず自分が意見するのは有り得ないとして。

グリムジョーは一切興味無しといった感じで、ソップを向いている。

まあ当然だろう。彼の目的は一護と決着を付ける事のみに占められている。それを邪魔さえされなければ、特に不満は無いのだろう。

ワンダーワイスについては——説明不要。

取り敢えず話の内容など一割も理解出来ていないのは確實。

何せ先程からずっと上の空で、天井を眺め続けているのだから。

最後にルピだが、説明を聞き終えた後に浮かべたその表情は険しい。

事前にノイトラから内容を聞いていたにも拘らずだ。

——たかが人間一人を攫う為、自分が囮として使われた。

冗談だと思いたかつたその事實は今、藍染本人の言葉によって確定した。

つまりそれは破面の中でも十刃という上位に位置する階級の自分よりも、下等種族の箒の人間が優先されたという事に他ならない。

ルピは酷くプライドが傷付けられたと同時に、激しい怒りを感じていた。

「井上織姫……といったね？」

特に意見も何も出なかつた事から、五人の破面は納得したと判断したのか、藍染は話の矛先を織姫へと変えた。

自らが腰掛けている玉座の右側の肘掛に体重を預けた楽な体勢を取ると、そう問い掛けた。

「っ……はい」

臨戦態勢でも無い、自然体であるその藍染の姿にも、織姫本人は底知れぬ恐怖を感じていた。

——正に別格。

周囲の破面達など話にならない、まるで別次元の存在が其処に居る様な、そんな錯覚を覚える程に。

「早速で悪いが、織姫。君の力を見せてくれ」

次の瞬間、藍染の視線が合わされる。

刹那——織姫は全身から力が抜ける様な感覚を覚えた。

抵抗する術から意志までの全てが外部へ吸い出され、自己意識の無い廃人と化するのではと錯覚する程に。

「…は…い…」

——逆らえない。

そう思ったのも束の間、気付けば無意識の内に返答していた。

本人の意志とは無関係に動く自身の身体に、織姫は困惑を隠せない。

恐怖故に従った訳ではない。

これはカリスマだ。

まるで彼に従う事が当たり前だという、理屈では絶対に理解不能な感覚。

正しくそれは神の御前に立って居る様な。

「…どうやら納得出来無い者もいる様だね」

藍染は不意にそう零した。

その視線の先には、変わらず不機嫌な表情を浮かべ続けるルピが居た。

「そうだろう？ ルピ」

「……………」

だが当人は何も答えない。

良く見ればその口は閉じられてはいるが、モゴモゴと頻りに蠢いている。

何かしら喋りたいのだが、何等かの理由でそれを必死に抑えているといった感じだ。

ルピは横に居るノイトラを見遣った。

ノイトラは依然として静かにその場に佇んでいるだけで、その表情も平静を保ち続けている。

この人間の女を攫う為だけに、尸魂界陣営の実力者達と相当な激戦を繰り広げる羽目となったにも拘らずだ。

それはチルツチも同様だ。

彼女も事前に任務の目的を知らされていたか如何かは不明だが、特に文句も無さそう

だ。

厳密に言えば内心では不服に思う部分は少なからずあるだろう。

だが主であるノイトラが何も言わないのだ。

彼の判断を信用しているのだろう。そして一介の従属官に過ぎない自分が物申す資格など無いと弁えて。

ルピは、段々と昂り掛けた感情が収まってくるのを感じた。

これでは怒りを覚えている自分が何だが馬鹿らしいではないかと。

「…いえ、特にはなにも」

「ふむ、そうかい？　なら良いのだが…」

その返答に、藍染はさも意外だと言いたげな表情を浮かべる。

確かにルピの性格上、この場面で文句を漏らしていても何ら不思議では無い。

すると藍染はふと視線をノイトラに向けた。

「…何か？」

それに対し、ノイトラは一切態度を崩さずに問い掛ける。  
何かまた余計な事を言われるのではと、内心では結構ビクついていたが。

「いや…何でもないよ。では織姫、君には取り敢えず——」

意味深に笑みを深めた藍染は、ノイトラの次にグリムジョー——その失われた左腕に視線を移した。

「そうだね…グリムジョーの左腕を治してもらおうか」  
「なっ!？」

思わずルピは声を漏らしていた。

唐突に話題に上がったグリムジョーも、藍染のその言葉に瞠目している。  
二人のその反応も致し方無いだろう。

通常、腕や脚といった肉体の完全な欠損は修復不可能だ。

大虚やウルキオラの様な超速再生を保持しているならば容易なのだが、持たぬ者にとつては関係無い。

ほんの一部分の欠損だけなら、治療室でも大抵は何とかなる。

だが丸々復元しなければならぬとなると、それこそ神でも無い限りは如何しようも無いのが現実だった。

——喜助や技術開発局ならば、その内何とかしてしまえばあるが。

ノイトラは何でもありな反則的な技術力を持つ彼等の事を思い返した。

グリムジョーの左腕は東仙の手によって消炭にされ、完全に消失した。

藍染はそれを治療しろと言った。しかもこんな、僅かな靈力を持つだけの人間の女に。

——正気なのか。

それがルピの素直な感想だった。

だがそんな極めて失礼に当たる内容を藍染に言える筈が無い。

落ち着きの無い様子で、ルピは視線を左右に泳がせる。

やがてそれは再びノイトラの居る方向を向いた途端、停止した。

まるで助けを求める様なそれに気付いたのだろう。ノイトラはゆっくり振り向くと、ルピに視線を合わせる。

——黙って見てろ。

ノイトラとそれ程親交が深い訳でも無いルピでも判った。

あの目はそう訴えていると。

「…は、はっ」

織姫は藍染の言葉に従い、恐る恐るその場を移動し始める。

その向かう先に立つグリムジョーは、疑念を含んだ目を彼女に向けるのみで、特に身構える様な仕草は一切見られない。

所詮は人間。警戒するに値しないとも思っているのか。

はたまた本当に左腕が治るのかと、仄かに興味を抱いているのか。

「〃——双天帰盾〃」

織姫はグリムジョーの直ぐ傍まで辿り着くと、直ぐ様その左腕があつた筈の場所へ両手を翳す。

呼び出された妖精は、しゅんわう舜桜、あやめ。

二人は互いの間に対象を囲う楕円形の盾を形成。グリムジョーの左肩の周辺一体を覆った。

「私は…拒絶する」

相変わらず緊張した面持ちで、織姫は術を行使する。

周囲はその様子を静かに観察していた。

双天帰盾による治療。攻撃も防御も苦手な織姫だが、こればかりは確固たる自信があつた。

それは今迄の実績と、ルキアの励ましによる効果が大きい。

術の行使時に於ける精神状態によつては、回復速度にズレが生じる事はある。

だがどちらにせよ失敗は無い。それは確実だつた。

「ん…な…」

骨格、腱、筋肉、皮膚と、瞬く間に復元されてゆくグリムジョーの左腕。

治るのでは無く、まるで初めから其処に存在していたものが根元から可視化していく

様な、そんなイメージであつた。

ルピは暫し啞然としていたが、やがて正氣に戻ると、気付く。

これは如何考えても普通の治癒術等のレベルでは無いと。史実よりも大分精神が落ち着いていた御蔭か、物事を見極める能力が残っていたらしい。

ルピは思考を巡らせ、織姫の能力に大凡の当たりを付ける。

恐らくこれは空間か時間は不明だが、回帰に類いする高等術だろうと。

本来ならそれ等は人間如きが扱える様なレベルでは無い。だがそれ以外に考えられないのも事実。

これならノイトラが文句も何も言わないのも、藍染が欲するのも納得だった。

やがて織姫は術を解除し、呼び出した妖精二人を六花へと帰属させる。

グリムジョーの左腕は完全に元通りとなっていた。

「——！！」

「これが、私が彼女を欲した理由だ」

グリムジョーは自身の左腕を眼前まで持ち上げ、正に信じられないものを見る様な目で凝視する。

同時に手を何度も握って開いてを繰り返し、この左腕が本物なのか否かを確認してい

る。

「さて、この力が一体何なのか、理解出来た者は居るかな？」

藍染は試すような口調でそう問うと、周囲を見渡した。

だが破面達は特定の三名を除き、皆織姫の力に驚愕するばかりで、思考もままならぬ状態だった。

「ウルキオラは空間回帰や時間回帰に属するものだと推測したね」

「はい」

「その意見は今も変わらずかい？」

「…恐らくはそうかと」

藍染はその特定の内の一人であるウルキオラに問い掛けた。

実物を見て何処か引つ掛かりでも覚えたのか、一瞬間を置いたウルキオラだったが、結局は肯定を返した。

藍染はそれに対して満足気な笑みを浮かべると、今度は別の方向へと視線を向ける。

それはウルキオラと同じく、織姫の能力を目の当りにしても平静を保っていたノイトラだ。

ちなみに残る一人はワンダーワイズだが——何故取り乱さなかったのかは大凡想像が付くだろう。

「君はどう思う？ ノイトラ」

「ッ……」

「大まかな予測で構わない。意見を聞かせてくれ」

想定外なその質問に、案の定ノイトラは内心で盛大に焦り始めた。

——そのまま流れで普通に説明すれば良いものを。

何故この場面で此方に振るのか理解出来無い。勘弁してほしい。

そう思いつつ、ノイトラは脳をフル回転させ、この場に於いて最も無難とも言える返答を導き出さんとする。

その結果は——自らもウルキオラと同じ意見であると便乗する事だ。

此処で罷り間違つて、織姫の能力は事象の拒絶だと正直に答えてしまえば、より藍染の注目を浴びる羽目になるのは確実。

というか、もし本気でそう言ったりする奴が居れば、そいつは只の馬鹿だ。

藍染にしか解らなかつたものを、ピンポイントで当てる。それが如何なる意味を持つのか。

その者が喜助並みの頭脳を持っていない限り、何処から如何見ても不自然でしかないだろう。

ノイトラは意を決して口を開こうとした——その直後だった。

「…ああ、出来ればウルキオラとは別の内容であれば助かる」

「は…?」

「例え外れていたとしても文句は言わない。さあ、どうかな?」

口元を僅かに吊り上げながら、藍染はそう付け加えた。

出鼻を挫かれるとは正にこの事である。

ものの見事に言おうとしていた内容を潰されたノイトラは、内心で盛大に舌打ちした。表面上だけ見ると、まるで口数の少ない生徒に発言を促そうとする教師か。

だがノイトラからしてみれば、そんな生易しいものではなかつた。

社内会議で上げる議題を決める場にて、初歩的な内容でも構わないと言う上司が、い

ざその通りにされた途端、これは初步的では無く幼稚と言うんだと盛大に怒り始め、盛大に揉めた。

憑依前、同僚が以前の勤めていた職場で経験した事のある内容だ。

ノイトラは何故か急にそれが思い浮かんだ。

藍染の事だ。その上司の様に怒るなどという小物的な反応は示さないとは思うが――

――余りに期待外れな返答を返した場合、彼は何を思うだろうか。

ノイトラは妙に不安になってきた。

別に無能認定されても問題無いのでは、と思うかもしれないが、実はそうとも言えない。

前々から立てている作戦の最終段階に関する部分だが、それを成すには藍染からある程度の信用を得る必要があったのである。

厳密に言えば藍染は誰一人として、信用どころか心を開く事は皆無だ。

それは金輪際変わる事はないだろう。

だがノイトラが言う信用というのは、言葉通りの意味では無い。藍染側の視点からの、効率面から見た部下としての有能性の事を示している。

使える部下と無能な部下。振り分けられる仕事に対し、その両名が自主的に挙手した場合、どちらを選択するだろうか。

——止むを得ない、か。

ノイトラは覚悟を決めた。

流石に完全までとはいかないが、やや正解寄りの意見を返す事に。

「法則か事象か…」

「ん？」

「定かでは無いですが——それに何かしら干渉し、捻じ曲げている…といった印象を受けました」

「…成る程」

「何にせよ、人間が持つには過ぎた力だと思えません」

良く考えてみると、回帰系統の能力と織姫の能力を比較してみると、幾分かの違いがある事が判る。

前者は行使する対象全体を確実に指定せねばならないのだが、後者にはそれが無い。グリムジョーの左肩周辺のみを楕円形の盾で覆ったのが良い例だ。

「ふむ…良い観点だ。概ね正解に近い」

藍染は満足気にそう呟いた。

如何やらそれ以上何か要求する様子はなさそうだ。

先程から胃が発する僅かな痛みにも耐えつつ、ノイトラは一先ず安堵する。

もつと具体的に、等と追及されていれば、間違い無く詰んでいた事だろう。

「これは——事象の拒絶だよ」

「!!?」

藍染は周囲全体に向けて言葉繋いだ。

その言葉の意味に、ルピは絶句した。

彼のように声を漏らしてはいないが、大半が同様の反応を見せている。

そんな彼等を余所に、藍染は説明を続ける。

これは対象に起こったあらゆる事象を限定し、拒絶し、否定する。何事も起こる前の状態まで帰す事が出来る能力である事。

空間回帰や時間回帰よりも更に上位に位置する力だという事。

「神の定めた事象の地平を易々と踏み越える——神の領域を侵す力だよ」

確かにそうだ。ノイトラは納得する。

とは言っても、場合によっては拒絶に手間取る事もあるので、決して万能ではないの  
だろうが。

ノイトラは依然として自身の左腕を眺め続けているグリムジョーを見て、思う。

——そろそろ、だな。

間も無くグリムジョーは織姫に命令し、自身の背中の数字が刻まれていた部分を復元  
させる。

そしてルピを手に掛け、再び第6十刃へと返り咲く。

言うまでも無いだろうが、ノイトラにそれを止める気は無いし、必要も無いと考えて  
いる。

ルピには申し訳ないと思うが、割り切らねばならない部分なのだから。

「…おい、女」

確認を終えたのだろう。グリムジョーは左腕を下ろすと、織姫に声を掛けた。

「もう一カ所、治せ」

グリムジョーは右手の親指で、自身の右腰背面を指差した。

其処は第6十刃という階級を証明する、6の数字が刻まれていた筈の場所だった。

十刃の持つ数字は、鋼皮に直接刻まれる為、洗剤等では決して落とせない。

グリムジョーは十刃落ちが決定してより直ぐに、治療室にて背中を鋼皮ごと削ぎ落とす処置を行った。

案の定、処置の前後は盛大に殺気立っていたらしいが、その最中は大人しくしていたらしい。

何せその指示を出したのは藍染。加えて処置を担当したのはセフィーロに口力だ。

前者については、流石に逆らう気は起きなかったのだろう。

そして後者の内一人はノイトラの従属官だし、残る一人も彼と交流のある破面だ。八つ当たりでもすれば、間違い無く主が飛んで来る。

ノイトラとの実力差を身を以て理解していたグリムジョーとしては、未だ対立する事は避けたかったのだろう。

基本的には己の道のみを突き進むが、弁える部分は弁える。

恨みや怒りは勿論だが、受けた恩も忘れない。

そういった部分が、同じ不良タイプであるヤミーとの大きな違いだろう。

その為、ノイトラはどうにもグリムジョーの事をどうにも嫌いになれなかった。

「ツ…何のつもりだよ…」

ややビクつきながら、指定された部分へ双天帰盾を行使し始める織姫。

治療範囲が表面上だけである為か、ものの数秒で元通りとなった6の数字。

それを目の当りにした現第6十刃ルピは、怒気を孕んだ声で問い掛けた。

「グリムジョー…!!」

「…ああ?」

グリムジョーは暫しの間背中を向けたままだったが、やがてルピの方向へ振り向き、声を漏らした。

その顔は凶暴性を感じさせる笑みが浮かんでおり、まるで水を得た魚というか、獲物を見付けた猛獣の様に殺気に溢れていた。

次の瞬間、グリムジョーの姿が消える。

理由は一つ。響転しかない。

終始気を配っていたノイトラは、その動きの挙動から何から全てを捉えていた。

グリムジョーは真つ直ぐルピ目掛けて突き進んでおり、その復元されたばかりの左腕は、後方へと引き絞られていた。

「!!」

そのままルピは呆気無く腹部を貫かれる——かと思われたが、想定外の結果に終わる。

何とグリムジョーの左腕が腹部に触れる直前、ルピは咄嗟に上体を横に逸らしてそれを躲したのだ。

だが僅かに掠つたらしく、白装束の一部が破け、その破片が宙を舞った。

「グリムジョー、てめツ…!!?」

「つまり——」

応戦しようとしたのか、ルピが右腕で鞭打を繰り出そうとするが——それよりも早く、彼の右頭部が何かに覆われた。

それはグリムジョーの右手だった。

左腕での貫手が躲かわされるや否や、間髪入れずに今度は空いた右手でルピを驚掴みにしたのだ。

ルピの反応速度も大したものだったが、グリムジョーのそれは更に上を行っていた。

「「こういふことだ。じゃあな」元「6番」

グリムジョーはルピを掴んだままの右手に、霊圧を収束してゆく。

「アガラル・セロ」  
「掴み虚閃」。

文字通り、相手の身体の一部を掴んだ状態のまま、零距离で虚閃を放つ荒技。

殆どの破面は、虚閃を放つ際は霊圧をやや外部に集束し、且つ攻撃対象との距離がある程度離れている時に放つのが普通だ。

他の破面がそんな真似をすれば、ほぼ確実に自身の手を傷付けてしまう上、下手すれば制御し切れず暴発を引き起こし、自分ごと巻き込んでしまう危険性があるからだ。

「ッ!!」

ルピはその丁度掴まれている部分に、焼け付く様な激痛を感じた。

グリムジョーの掌に収束されている霊圧が、鋼皮を通り越したその内側を焼き始めているのだ。

ルピは咄嗟にそれを阻止する為に動いた。

頭部を固定している右手から感じる尋常では無い握力から、引き剥がすには自分では力不足と即座に判断。

ならば——と自身の斬魄刀を抜こうと、左腋まで右手を持つて行く。

だがその手が空を切ると同時に、思い出す。そういえば自身の斬魄刀は修復の為に口に預けたままだったと。

その判断ミスの為に費やされた僅かな時間は、ルピにとってはもはや致命的だった。虚閃を放つ際に発生する、特徴的な霊圧の集束音。それは止み始めていた。

——もう間に合わない。

ルピは己の死期を悟った。

納得出来る訳では無いが、半ば諦めていた。

この、如何あつても覆る事はないであろう現実に。

「く…そ…!!」

ルピはせめてもの抵抗として、グリムジョーを睨み付けた。

勝ち誇った笑みを浮かべるその顔を、深く脳裏に刻み込みながら。

次の瞬間——凄まじい破裂音と衝撃が響き渡る。

同時にルピのその小柄な身体が、グリムジョーとは反対の方向へと吹き飛んでいった。

「なっ?!?!」

驚愕の声を漏らしたのはグリムジョーだった。

視線の先にある彼の右腕は、肘から先が上を向いている。

その先端の右手からは煙が立ち上っており、虚閃が不発に終わった事を証明していた。

「なんの真似だ…ノイトラア!!!」

グリムジョーは弾かれる様にして横を向くと、叫んだ。

其処には虚閃が不発となった原因である——横合いから彼の右下腕を掴んだまま静かに佇むノイトラが居た。

## 第三十一話 三日月と胃痛その2と姫と

ノイトラは無言のまま、グリムジョーの右腕を掴み続ける。

抵抗を試みたのか、グリムジョーは一瞬身動きするが、その腕は微動だにしない。

「ッ、何のつもりだって聞いてんだろぅが!!!」

力では敵わないと悟ったのだろう。グリムジョーは声を荒げると、ノイトラを睨み付けた。

その目は何時にもまして鋭く、濃密な殺意と膨大な霊圧が含まれている。

有象無象の破面であれば、それだけで気絶してしまいそうなレベルだ。

にも拘らず、ノイトラは全く表情を変えない。

至つて冷静に、グリムジョーを見詰め続けているだけだ。

ノイトラが行ったのは、至つて単純。

虚閃が放たれる直前にグリムジョーの腕を掴み、自身の霊圧を流し込む事で、それまでに集束されていた霊圧を破裂させたのだ。

普通の虚閃であれば直接握り潰す事も出来たのだが、掴み虚閃では如何し様も無かつた為、咄嗟に機転を利かせた形だ。

吹き飛ばされたルピを見る限り、完全にダメージを無くすまでは出来無かつた様だが、虚閃よりはマシだろう。

——自分は一体何をしているのだ。

止める気は無いと言いつつ、結局手を出してしまったノイトラ。

その内心は盛大に焦っていた。

目的の中にある、生き残らせる仲間達の絞り込みは既に済んでおり、それ以上は追加する余地も無い。

後に必要だと判明すれば追加する可能性はあるが、限り無く低い。

にも拘らず——この様だ。

行動したノイトラ自身も戸惑っていた。

ルピを生き残らせるメリットは何か。

慢心していたとは言え、任務内での立ち回りを見ても、戦力としては期待出来無い。

助けた見返りに協力を求めたとしても、あの性格だ。今迄自己中心的に生きて来た者に、協調性があるか如何かすら怪しい。

つまるところ——余り無いのが現実であった。

本来であれば損得等の打算で相手を選定するなど傲慢に尽きる。全く以て愚かしい最低な行為だ。

だがノイトラの置かれた現状としてはそうせざるを得ない。

彼自身もそれを覚悟の上で行動していた心算だったのだが———どうやら違ったらしい。

ワンダーワイスと同様に、如何なる形だったとしても、交流を持つてしまった時点で既に情が湧いてしまっていたのだろう。

そしてルピの命が失われんとした直前———気付けば半ば無意識の内に身体が動いていたという訳だ。

手の届く範囲で起きたというのも大きいのだろう。

———自分の気持ちだけには嘘を付くな。

これもまた恩師の言葉だ。

言わばノイトラはこれを体現してしまっていた。

それはそうだ。例えばそれが他人であろうとも無用な犠牲は望まず、助けられる範囲に居る者であれば極力助けたいというのが、ノイトラの偽らざる本心である。

ヤミーやザエルアポロ等、他者との共存が不可能であろう特定の人物を除いて、という条件付きだが、多少一癖二癖ある者でも大抵は受け入れられる。

事実、現状に於いても、藍染さえ関わってさえいなければ、ノイトラの行動方針はまるつきり変わっていた。

力を求めるのは変わらない。だが鈍い頭を総動員して対策等を考える事は無くなる分、只純粹に自分自身と仲間達の生存のみを目的として奔走していた事だろう。

だが所詮はもしもの話。今は今の事を考えなければ意味が無い。

——御人好しにも程があるだろう。

同時に堪え性の無い自分に対し、ノイトラは内心で頭を抱えた。

だが何時までもそうしている訳にはいかない。

如何にかしてこの状況を乗り切らねば、色々と面倒な事態に陥ってしまう。

もはや何度目になるかも判らないが、咄嗟に思考回路をフル稼働させたノイトラは、それらしい言い訳を即席で考え出す。

「…オマエ、今虚閃出そうとしたろ」

「それが何だ!!」

「此処が何処だか解ってんのか?」

主導権を握られているにも拘らず、今も尚喚き立てるグリムジョーに対し、ノイトラ

は静かに問い掛けた。

この玉座の間は文字通り、天命により人民を治める者である天子——王の腰掛ける椅子が存在している神聖な場所だ。

当然、他の宮とは造りも段違い。現十刃が普通の虚閃を何発放とうが、そう易々とは壊れない頗る頑丈な仕様となっている。

——黒虚閃の場合は如何なるか不明だが。

だが幾ら壊れないからと言えど、虚閃を放つて良い理由にはならない。

グリムジョーの行動を例えるなら、マフィアのボスの前で、下つ端が許可も得ずに銃を撃つ様なものだ。

失礼というか無礼というか、組織の一員としては完全に失格だ。

ノイトラはそれを止めたのだ。結果的にルピを助ける形にはなったが、傍から見れば何処もおかしな部分は無い。

即席で考え出したにしては上出来の言い訳だろう。

ノイトラの言わんとする事を理解出来たのか、グリムジョーは大きく舌打ちをする  
と、一先ず殺気を収めた。

「十刃に戻りたかったら、然るべき形でやれ」

「…チツ」

舌打ちの直後、グリムジョーの右腕から力が抜ける。

多少ごねるかと思つたが、意外にもアツサリ引き下がった彼の姿に、ノイトラは一瞬虚を突かれた。

どちらにしても、自分の勝利は揺るがないという確固たる自信があるのだろう。

ノイトラは手を放すと、吹き飛ばされた先で右頭部を右腕の袖で押さえながら立つているルピへと視線を移した。

途中で阻止したとは言え、多少強引過ぎる方法であつた為か、その部分からは少ない血が流れている。

「デメエもそれで良いか」

「…ツ!!」

返答は無いが、明らかに不服だと訴えるその目が全てを語っていた。

同時に歯を食い縛り、ギリギリと音を鳴らしている。

気持ちは解る。何せ先に仕掛けたのはグリムジョーだ。その彼が何の咎めも無しで

済むなど、被害者側であるルピから言わせてもらえば納得出来様筈が無い。

だが忘れてはいけない。此処は虚夜宮、そして住人は虚と何ら変らぬ性質を持つ破面だ。

何時、如何なる時も、強い者だけが生き残る事が出来る弱肉強食の世界。

それは不意討ちだろうと何だろうと関係無いのだ。

「そうだね…：そうしよう」

「!？」

これは説得するのに一苦労必要かと思いきや、突如として助け舟を出された。

先程から終始傍観に徹していた藍染から。

「グリムジョー、ルピ」

「……………」

「…はい」

藍染の呼び掛けに答えたのはルピのみ。

グリムジョーは口は閉じたまま、視線のみを藍染へと向けた。

「第6十刃の階級争奪戦を許可する。詳細については追って伝えよう。良いね？」

その問い掛けに、二人は静かに頷いた。

藍染は満足気な笑みを浮かべると、今度はノイトラにも声を掛けた。

「それと有難うノイトラ。二人を止めてくれて」

「いえ…」

—— 欠片も思ってもいない事を口に出すな。

ノイトラは内心で毒づいた。

グリムジョーの奇襲が成功しているが、藍染としてはどちらに転んでも構わなかっただろう。

というか、如何にも違和感が拭えない。

ノイトラは不審に思った。

以前より稀に感じていたこの感覚だが、最近では更に顕著だ。

この一連の流れさえも、誰かの掌の上の出来事なのではと。

「さて、話を戻そう」

藍染はそう言うと、視線を織姫へと戻す。

グリムジョーの暴挙に巻き込まない為だろう。彼女は何時の間にもやらウルキオラの手によつて場所を移動していた。

「彼女は既に我々への協力要請に応じている、そうだね？」

「は…はい…」

「つまりそれは我々の同志となった事を意味している」

藍染は静かに周囲を見渡す。

その意味は言わずとも理解出来た。

一概に言えば手を出すなどという事だ。

だが普通の感性を持つ破面であれば、間違つてもそんな愚かな真似はしない。

何せ織姫は藍染が直々に確保する様、態々陽動作戦まで組んだ上、上位十刃の一人に

直接確保させる程の特別枠。

ある意味では十刃よりも重要な立場とも言える。

織姫自身が反逆を企てた場合等、緊急時については別だろうが、滅多な事ではちよっかいを掛ける事すら忌避するだろう。

「彼女には個人的にも協力してもらいたい事もあるのでね。出来る限り丁重に持て成してくれと有難い」

だがそれも一護達が虚夜宮に侵入するまでの間までの話だ。

藍染の言葉を聞きながら、ノイトラは思った。

対外的には織姫の能力を必要としていてと語っているが、真実は全くの真逆。

藍染はそんなものは一切必要としていない。希少な能力故に一研究者としての興味を抱いているのかもしれないが、それだけだ。

考え事をしていたその時、ノイトラはふと扉の外から感じる刺々しい霊圧に気が付いた。

——ロリか。

案の定、以前の様に聞き耳を立てていたらしい。

織姫を特別扱いする様に語る藍染の言葉を耳にし、誤解すると同時に嫉妬心でも抱いたのだろうか。

十刃からして見れば、ロリの靈力や帰刃形態は鼻で笑う程度の代物でしかない。

だが只の人間に過ぎない織姫にとつては十分過ぎる脅威だ。

——これは早目にウルキオラへ進言して置くべきか。

少々危機感を覚えたノイトラは、そう考えて伝えるタイミングを何時にするのか考え始める。

その直後だった。

「彼女の世話役はウルキオラに頼みたい——と考えていたのだが……」

藍染からの視線を感じると同時に、ノイトラは嫌な予感がした。

「彼は最近何かと多忙でね。だから他にもう一人、同じ役割を担ってもらおうと思う」

——まさか、ここでもなのか。

そう思ったのも束の間、藍染からとんでもない発言が飛び出した。

「頼めるかい、ノイトラ」

「っ!!?」

「ウルキオラと協力しながら、どうか上手くやってほしい。駄目かな?」

嫌な予感程当たるとは良く聞くが、正にその通り。

——何故に自分なのだ。

一瞬だけ硬直したノイトラだったが、ある程度耐性が出来ていたらしい。早々に正気に戻ると、即座に内心でツツコんだ。

どうせ頼むなら、別の種族とは言え同性であるハリベル辺りでも良いと思うのだが。

「了解……しました」

無論、頼みを断れる筈も無い。

前にも同じ事があつた様な——等と考えつつ、ノイトラは絞り出す様にして了承を返した。

急激に痛みを訴え始めた自身の胃。それに必死に耐えながら。

ノイトラを先頭に、次に織姫、そして一番後方はチルツチといった配置で、通路を進む。

ちなみにウルキオラは用事があるらしく、玉座の間に残ったままだ。

——やはり共同というのは建前でしかないのか。

藍染の事だ。もしかすると、自分を積極的に織姫と関わらせて反応を見たいと目論んでいるのかもしれない。

これは今迄以上に迂闊な行動は出来無いと、ノイトラは改めて思った。

現在、三人が向かっているのは、以前新たに建設された宮のある場所だ。

これは藍染からの指示である。

やはりノイトラの予想は当たっていた様だ。

「…もう直ぐ着く」

僅かに後ろを振り向きながら、ノイトラはそう呟いた。

実はこの時まで、三人の間で交わされた会話は一切無い。玉座の間から出てから終始こうだ。

別に気拙さからくる沈黙では無い。

ノイトラ個人としては、話そうと思えば何でも話せる。

ならば何故そうしないのかというと、それは織姫の生まれ持った才能——初対面の人でも、少し会話を重ねるだけで仲良くなれるという部分にある。

ぶつちやけ言うと、打ち解ける分には構わないのだが、その中で余計な事を口走りそうで恐ろしいのだ。

それに織姫は女——能力を除けば非常にか弱い美少女である。余り無いとは思いますが、そんな彼女が落ち込んだ様子を見せたりすればどうなるか。

男ならば紳士であるべきだと心掛けているノイトラだ。まず間違い無く声を掛け、励ますか何かするだろう。

同時に彼は、意気消沈している者に対し、浅い考えで薄っぺらな言葉を投げ掛けるの

は御法度だという考えも持っている。少しでも心に響かせようと、今後に起こるであろう展開——特に一護に関しての内容を漏らしてしまう可能性もある。

考え過ぎかもしれないが、ルピを助けた件もある。今のノイトラは自分自身を信用出来なくなっていた。

思考とは裏腹に、身体が勝手に行動してしまうというのは非常に厄介だ。

——それにしても引つ掛かる。

ノイトラは疑問に思った。

幾ら御人好しとは言え、こんなにも自分は突拍子も無い行動に出る様な者だっただろうかと。

まるで別の意志の力によつて強制的に動かされていると考えた方が納得出来るぐらいだ。

「…此処が、オマエの過ごす事になる宮だ」

「わあ…」

ノイトラは目的地に着くと、その扉を開いて室内の光景を織姫へ見せる。

新築だけあり、汚れや染みなど一切無い、窓が一つだけある白一色で統一された室内。

入口から見て左側の壁際には、見るからにフカフカとした快適そうな大きなソファがある。

中心にあるカーペットの外周部分のみ、金と赤の配色がされており、まるで豪邸に敷かれている様な高級感溢れるデザインとなっている。

環境だけ見れば、現十刃と殆ど差が無い程に恵まれた待遇である。

他の有象無象の破面達とは比較にならない。

実質的には捕虜に等しいとは言え、藍染が目には掛ける程に重要視されている織姫だ。この扱ひも妥当だろう。

「トイレに浴室は完備してる。キッチンは無え」

てつきり牢屋の様な部屋を宛がわれるのかと想像していたのだろう。

織姫は何度も確認する様にして、頻りに室内を見回している。

そんな彼女に、ノイトラはビエホから予め伝えられていた、この宮の設備情報を淡々と伝えてゆく。

「それと食事は決まった時間に運ばれる手筈になってる。他にも何か必要なモンがあれば

ば雑務係の破面に言え。悪い様にはしねえ筈だ」

「えっ……と……」

「…何だ」

説明を終えると、何を思ったのか織姫はノイトラに対し、チラチラと視線を送り始めた。

此方の顔色を窺いながらも、何か言いたげなその表情に、ノイトラは内心で首を傾げた。

設備に何処か不足、または不満でもあったのだろうか。

如何に似通っているとは言え、確かに破面と人間の生活習慣には多少なりともズレはある。

ビエホ曰く、宮の建築の命令は出たが、中身についての細かい指示は無かったという。出来る限り不自由しない様な形にしてくれと言われた為、可能な範囲で力は尽くしたそうだ。

——御蔭で藍染様から御褒めを頂きましたわい。

嬉々とした表情でそう語るビエホの姿が思い出される。

この宮だが、位置付けとしては第4十刃と第5十刃の拠点の宮の間にあるが、極めて

高所に建てられている。

窓から覗く三日月が、虚夜宮の外である事を証明している。

つまり天蓋を超える程の高さなのだ。

内装に建築場所を考慮すると、確かに見事なものである。藍染が褒めるのも納得だ。

これだけの部屋を宛がわれていながら他にも何か要求するのは——といった風に、織姫の性格上、言い出しにくいのかも知れない。

例え敵だろうと関係無しに気を遣うその優しさに、何処か微笑ましい感情を抱きながら、ノイトラは何が悪いのかを考え始める。

憑依前の自身の生活環境と、一から史実を遡る事ほんの数秒。得心が行った。

確か織姫はこの女性が理想とするであろうプロポーションを持っているが、実は結構な大食であったと。

少しあやふやだが、確か昼食に食パン一斤に餡子の缶詰一缶を軽く平らげる程だった筈だ。

つまり織姫は食事関係について何か物申したいのだろう。

そう考えたノイトラは、思い付いた内容を続けて述べた。

「食いモンの御代わりは自由だぞ」

「へっ? ええと、そうじゃない…こともないのかな…?」

「御菓子が必要なら手配しとくぞ」

「あ、じゃあ御願ひします…じゃなくてえ!!」

——では一体何だと言うのか。

残る意見は一つ。これが正解でないのなら、食べ物関連以外だという事になる。

両手を大きく振りながら否定の声を上げる織姫を余所に、顎に手を当てながらノイトラは考える。

織姫の本心については知らないが、その考えが根本的に間違っているのだけは理解しているのだろう。

悩み続けているノイトラの後ろでは、チルツチが呆れた様に溜息を吐いていた。

「…ああ、安心しろ。食いモンに食用霊蟲は出ねえ。ちゃんと現世のを調達してやる」

「だから——って、ええっ!? 虚夜宮（虚夜宮）の食べ物って虫!!! イナゴ!? それともハチの子みたいなの!?!」

結局思い付かなかったノイトラは、致し方無く最後まで残して置いた意見を口に出し

た。

織姫は何かを言い掛けた様だったが、突如として声を荒げた。

ノイトラの言う霊蟲という部分に反応したのだろう。

確かに単語だけ聞けば虫の一種なのかと思つても不自然では無い。

だが忌避感を示したにしては、織姫の見せるその瞳は輝き過ぎていた。

ノイトラは思い出す。

織姫の作る料理は、味が良いが見た目はアレと乱菊が評していたと。

その事実から連想するに、恐らく織姫は見た目で食物を選ぶ様な感性は持つていない。寧ろそういったものに興味を抱く性分の可能性も高い。

だとすれば今の織姫が見せているのは好奇心。

もし食用霊蟲がそれなりに食べられる代物だと知れば、食べてみたいと言い出しそう  
だ。

「…何を想像したのか判らねえが、食用霊蟲つてのは、オマエ達で言う家畜みたいなもんだ。俺達破面は基本的にそれか、現世の果実を食つて過ごしてる」

「人の魂じゃないんだ…」

「それもあるけどな…簡単に言えば効率が悪いなんだよ。一々その調達の為に現世に行

くのは手間が掛かり過ぎる」

実を言えばそれだけではない。

人間の魂魄というのは、尸魂界か現世のみにしか存在していない。

そんな場所へ定期的に訪れる様な真似をしていれば、まず間違い無く死神達に気付かれてしまう。

特に尸魂界はある意味彼等の庭だ。故に破面達が魂魄の調達を行うとすれば、必然的に現世が中心となる。

例え気付かれたとしても完全に捕捉さえされなければ良いのでは、と思うかもしれないが、そう簡単な話ではない。

破面達が上手く事を運べば、それに比例して死神達の警戒心も上昇して行く。

空座町の様に、其処に存在している魂魄の平均霊力が高く霊的要素が強い町——所謂重霊地に分類される場所は勿論。他の街にも監視や警戒範囲をより広く、精密なものへと変えるだろう。

そうなれば時間の経過と共に、破面達が安心して行動出来る範囲が急激に狭まっていつてしまう。

元より虚は濃い魂——霊力の高いものを好む。味が良いのもあるが、何よりそちら

の方が腹が満たされるのだ。

破面もそれは変わらない。

しかも一般的な魂魄は霊力など殆ど無く、味も悪い。加えて百や二百の数を喰らったところで大した腹の足しにもならない。

だからと言つて一度に千以上万単位での魂魄の調達を繰り返せば、次々に町が滅んで行き、やがて世界の霊力バランスが大いに崩れてしまう。

其処まで追い詰めたりすれば、死神達も已むを得ず最後の手段に出るかもしれない。例えば瀟霊廷の持てる全戦力を引き連れて虚圏へ直接乗り込み、元凶の破面達が住まう虚夜宮へ殲滅戦を仕掛けるぐらいはしそうだ。

それにかの尸魂界の王である霊王を守護する——王属特務、零番隊が参加したりすれば洒落にならない。

とは言え、ノイトラは零番隊についての詳細は全く知らないのだが、少なくとも現隊長レベルを凌駕する実力者の集いだらうと予測はしていた。

「言つとくけどな、食用霊蟲は美味くも無く不味くも無え。腹が満たされれば良いって奴以外、大抵は果実の方を選んでる」

「そうなんだ…じゃなくてそうなんですな…」

ノイトラの説明に、織姫は感心した様にそう零した。

「つー訳で、オススメはしねえ。それでも食いたいつてんなら手配するけどな」  
「えつと…：やっぱり結構です…」

声のトーンを下げながら、織姫はそう答えた。

どうやら残念がつているらしい。やはり内容によつては挑戦したい気持ちがあつたのだろう。

ノイトラはふと気付いた。玉座の間から出て以降も暫く続いていた筈の胃痛、それが消え失せている事に。

——— どういう事だこれは。

織姫の世話役を任命された直後は相当参っていたにも拘らずだ。

世話役を任された瞬間より、ノイトラはある事を考えていた。

まず始めに言つた、織姫に心を開き過ぎて余計な事を口走らない様に気を付ける事。

この想定外の事態による、立てていた計画の修正や変更と、今後の展開の予測。

ウルキオラの最近のスケジュールの確認に、ロリが今後起こすであろう愚行への対策

立て。

だがこの世話役としての役割。実を言うと有効期間はそう長くは無い。

元々織姫誘拐の新的目的は、一護含めた尸魂界の戦力を誘き寄せる餌とする為だ。

一護達が虚夜宮へ侵入して来るのはほんの数日後。そして藍染と副官二名、第1から3までの上位十刃が参戦するの空座町決戦も。

となれば、ノイトラが気を張るのも僅かな間だけだ。

しかしその内容が濃い。それにノイトラが最も心配しているのは、一護達の侵入後、織姫がグリムジョーに連れられて宮を飛び出すまでの前後だ。

前については、人気が無いのを良い事にロリが織姫の居る部屋へ忍び込み、暴行を加える展開だ。

ノイトラが間接的な原因でもあるのだが、史実よりも精神状態が荒んでいると思われるロリ。殴る蹴るだけで済めば良いが、もつと惨い事をする可能性も浮上している為、如何にか対策を練らねばならない。

後についても同様に不安要素はある。イレギュラーな要素がちらほら見られる現状に於いて、本当に史実通りの展開に行くか如何かが怪しい部分だ。

傷を癒されているグリムジョーは、すっかり織姫に借りが出来たと思っている筈なので、それは良い。窮地に陥っていたとしても、必ず助けてくれる筈だ。

問題なのは一護だ。

史実よりも早い、虚化の完全習得。それが何の影響を齎すか想像も付かない。

ドルドーニに勝利した後、次戦にてウルキオラに敗北し、死の淵にまで陥る事が出来れば全て元通りになるのだが、果たしてそう上手く行くだろうか。

想像以上に強くなった一護に対し、ウルキオラが帰刃を選択してしまえば——といった部分まで考えたところで胃が痛み始めたノイトラは、止むを得ず其処で思考を打ち切った。

「むむむ……」

貰った情報を元に色々想像を膨らませているらしい織姫を眺めながら、ノイトラは思った。

胃の痛みが治まったのは彼女の御蔭なのかもしれないと。

別に双天帰盾で胃の痛みを拒絶してもらった訳では無い。

単にこれも織姫が生まれ持ったもう一つの才能——触れ合った相手の精神に多大な影響力を持つだけに限らず、癒しや安らぎを与える不思議な力だろう。

成る程。一護に続き、ウルキオラの心情に大きな変化を齎した要因となったのも納得

だ。

「後で藍染様から呼び出しをくらう筈だ。それまで寝るなりなんなりしてるこつた」  
「あ、待つて!! ……ください」

一先ず役目を終えたノイトラは、織姫にそう言うのと、踵を返して部屋を出て行くこととする。

だがその直後、正気に戻ったらしい織姫がその背中を呼び止めた。

「…その口調」

「え?」

「さつきから鬱陶しくて仕方が無え。慣れてねえなら初めから使うな、タメ口で話せ」

「う、うん…」

「で…用件は何だ」

ノイトラは首だけ振り返ると、余りにもぎこちない敬語口調に対する指摘をした後、視線で続きを催促する。

だが織姫は口をモゴモゴと動かすだけで、中々用件を話そうとしない。

否、実を言えば言い出しにくいのだ。

何せ声を掛けた理由も大したものでは無い。寧ろ何時でも済ませられる程度の内容だ。

ちなみに先程ノイトラが食べ物関係についての注文かと勘違いした部分でもある。

しかも相手は心から信頼している仲間でも無く、寧ろ限り無く敵寄り。

——立場的には仲間となつてしまつてはいる現状だが、本質は今迄通りのまま変わっていない。

加えて自分を一息で殺せる様なレベルの実力者。そんな相手と普通に会話が出来るだけで十分異常だ。

普通なら極度の恐怖と緊張の余り、口を開く事すら困難だろう。

なのに何故織姫は終始リラックスした状態を保ちながら会話をし、最後にノイトラを呼び止めるという行動に走つたのか。

理由は至極単純——話し掛け易かつたのだ。

些細な内容であっても、気軽に話せて、笑い合える、まるで気心の知れた友人の様に。

実際、ノイトラと会話を始めて十分も経過していないが、織姫は彼の性格を大体把握していた。

業務的内容は勿論だが、補足まで付けて丁寧の説明してくれる上、此方の抱いた疑問を先読みして教えてくれようとする親切さ。

基本的なぶつきらばうな態度だが、自分の拙い敬語を窘めた上で通常の言葉使いを許可するなど、細かな部分にも気を配っているのが判る。

——何処から如何見ても、多少不器用なだけで普通に良い人である。

御蔭で織姫は殆ど緊張感を抱く事も無く、平常心を保っていられたという訳だ。

とは言え、彼女自身は困惑を隠せなかった。

それはそうだ。事前情報として喜助から聞いていた破面という存在の正体。

虚が死神の力を得て進化したそれ。つまりは元が虚なだけに、てつきり本質もそれ寄りだろうと思っていた中で——このギャップだ。

想定外も良いところである。

だがそんな織姫の内心など知る由も無いノイトラは、煮え切らない彼女の態度に対し、次第に右目を細めていく。

何せ今後も遣る事が山積みとなつている。それ等の対策立ての為に、一分一秒でも時間が惜しいのだ。

それを見た織姫は、はっ、とした様な表情を浮かべると、次の瞬間にはその顔を引き締めた。

大きく息を吸うと、部屋を出た通路の先にまで響く程の音量で、ノイトラに問い掛けた。

「あなたの名前を教えてください！ あと後ろの人も!!」

『…は？』

その予想外な質問に、ノイトラとチルツチは同時にそう漏らしていた。

内容から察するに、自己紹介がしたいという意味だろうか。

—— 幾ら世話になると言っても、敵なのは変わらないだろうに。

見た目に反して豪胆というか何というか、実に肝が据わっている。

ノイトラはやや呆れを含みながらも、感心していた。

史実でも仲間に対して心無い発言をしたウルキオラに対し、躊躇無く平手打ちを繰り返せるだけはあると言うべきか。

二人は一瞬だけ互いにアイコンタクトで相談すると、やがて諦めた様にして、順に口を開いた。

「ノイトラ・ジルガ。オマエの世話役だ」

「…従属官のチルツチ・サンダーウィッチよ。言つとくけど、べつに人間如きに宜しくする気なんてないから」

ノイトラはぶつきら棒に、チルツチはつつけんどんな態度で名乗る。

それを聞いた織姫は突如として横を向くと、ブツブツと何かを呟き始めた。

チルツチは判らなかつた様だが、案の定、地獄耳のノイトラには十分聞き取れた。

恐らく覚えようとしているのだろう。彼女は自分達の名前を繰り返し復唱している  
と。

「——よしっ……じゃあこれからお世話になります！」

深々と頭を下げながら、織姫は明るい声で言った。

「宜しくね!!」 ノイトラくんにチルツチちゃん!!」

直後、ノイトラとチルツチの時間が停止した。

今彼女は自分達の事を何と呼んだのかと。

あれ程の音量で、且つ聞き取り易いハキハキとした発音だ。聞き間違える訳が無い。全く以て想定外な不意討ちに、二人は硬直するばかりだった。

「くん付け……だと……？」

「ちゃん付け……だと……？」

「…あれ？」

瞠目したまま動かなくなった二人を前に、織姫は可愛らしく首を傾げた。

## 第三十二話 三日月と蔦嬢と、そよ風と…

織姫の衝撃的呼称事件の後、ノイトラは直ぐに治療室へと向かい、セフィーロの自室にて今後の相談を行った。

とはいっても、内容としては特に目立った変化は無い。

言うなればノイトラがふと考えていた新たな対策を間に挟み込む程度で、後半は殆どが織姫の世話役として遣るべき事についての打ち合わせとなっていた。

結論として、基本的に織姫の生活関係についての世話はセフィーロとロカが。そして藍染からの呼び出しの際の付き添いや護衛等、業務的な部分についてはノイトラが行う事となった。

何せ相手は女性。男であるノイトラでは理解が及ばない部分も多々あるだろうし、プライベートに干渉する様な部分は同じ同性であるセフィーロに一任した方が確実だろう。

ついでに彼女も少し遣りたい事があるので、色々都合が良かった。

——根回しとか仕込みとか、NTRが如何とか、何やら怪しい呟きが聞こえて来た気がしたが、ノイトラは敢えて無視した。

変な事はするなと釘は刺して置いたので、大丈夫だろう、多分。そう自分に言い聞かせながら。

「…眠る」

眩きながら、ノイトラは重みを増した自身の臉を右手で擦る。

それはそうだ。何せ今の時間帯は一時を回った付近。

憑依前は仕事の他にも家事やら食糧調達やらが含まれた過密な毎日を送っていた為、夜更し寝不足は慣れっこだった。

現在も中々ストイックな生活を送ってはいるが、衣食住が安定している分、睡眠時間は十分に取れている。

その生活リズムに慣れてしまった今、こうなってしまうのも致し方無いだろう。

だが本来、虚という存在は基本的に睡眠を必要としない。

厳密に言えば眠れないとでも言うべきか。

殺し殺され、喰らい喰らわれが日常の彼等だ。

幾ら隠れていても、並の虚は大抵持ち合わせている霊圧知覚によつて直ぐに居場所を特定されてしまう。

そんな環境下で眠ってしまえば、どうぞ襲って下さいとアピールしているのと同義。自殺行為にしかならないのだ。

しかも人ならざる故か如何かは不明だが、体構造的にも睡眠が必須な訳でも無い。だが破面化した後は別。

霊力等が持つ事などを除けば人間と何ら変わらない死神。それに近付いた影響なのか如何かは不明だが、普通に睡眠を取る様になったのだ。

虚夜宮内の破面達は皆、特に疑問を抱く事も無く普通に過ごしている為、余り気にする内容でも無いのだろうが。

特に顕著なのはスタークだ。

破面達の中で唯一、崩玉も用いずに自力で破面化した彼。先に述べた破面化による変化を考慮すると、虚圏を彷徨っていた頃は一体如何していたのか甚だ疑問である。

日々睡眠に耐えていた——または元々並外れた霊力の持ち主故に普通に眠っていても何の問題も無かったかもしれない。

だが全ては本人のみぞ知る事だ。

藍染の陣営に加入してからというもの、何時も自らの拠点の宮に引き籠って昼寝ばかりで、自堕落な生活を送っている。

余り宜しく無い事だとは思いますが、今迄の反動なのかもしれない。ノイトラはある程度

理解を示していた。

「帰って寝るか…」

チルツチとは治療室に向かう途中で別れている。外に行くと言っていたので、恐らく寝る前に軽く自主鍛錬でも行う心算なのだろう。

ノイトラの影響なのか、彼女も中々スruik思考になつてきている気がする。

理由は不明だが、任務の後からその表情にやや焦りが見えている様子にも見える為、度が過ぎる様であれば少し対策を考えなければならぬだろう。

ノイトラは大きく欠伸をしながら、自らの拠点の宮へ歩を進め始める。

通路の突き当りを右に曲がった瞬間、ふとその先に存在する見慣れた霊圧を感じた。ノイトラはその場に立ち止まると、視線を向ける。

其処には通路の壁に背中を預けながら、顔を俯かせ続けるルピが居た。

「あ…」

視線を感じて初めて気付いたのか、ルピは顔を持ち上げると同時に声を漏らす。

心なしか、その表情はやや暗い。

——何時もヘラヘラしている彼にしては珍しい。

ノイトラは不審に思った。

「…如何した？」

「べ、べつに…」

ノイトラの問い掛けに、ルピは視線を左右に泳がせた。

言いたい様な言いたく無い様な、そんな煮え切らない態度。

何処からどう見ても、自分は悩んでますと訴えている様にしか見えない。

そんな態度を見て御人好しが何もしい訳も無く——。

「それで誤魔化せるとでも思ってたのかテメエ」

「へ？」

「折角だ、話ぐらいは聞いてやる」

言葉の表面上だけを取れば、自分が相談に乗ろうかと提案しているだけ。

だがその声には何処か有無を言わせない命令的な何かを感じる。特筆すべきはその眼力。

——だからさつさと話せ。

そう訴えるノイトラに対し、ルピは一瞬呆けた様な表情を浮かべた。そして続け様に苦笑した。

傍若無人な態度ではあるが、言っている内容は只の御節介。

以前の姿を知る者からすれば、想像も付かないだろう。

良くもまあこれ程までに変わったものである。

ルピは感心すると同時に、内心で密かに感謝した。

この虚夜宮にて、困っている者に気を配れる破面が何人居るか。

思い悩んでいるところに付け込んで——と何かしら目論んでいる可能性も考えられるが、今のノイトラを見る限りは無いだろう。

根拠は無いのだが、何故かそう思えた。

実のところ、善意で相談に乗ってやろうとしている部分は本のだが、眼力については別の理由があったりする。

ぶつちやけ言えば——只単に眠いから手早く済ませろという事だ。

「今から、六時間後——」

「ん？」

「第6の、遊撃の間で……」

先程通達された内容を、ルピはゆつくりと零して行く。

断片的ではあるが、ノイトラにとっては十分理解出来る範囲であった。

「……決まったのか」

「う、ん……」

ルピが言っているのは第6十刃の階級争奪戦の事だろう。

ノイトラはそう考え、問い掛ける。

案の定、返答は肯定。

——妙に早いな。

ノイトラは不審に思った。

六時間後という事は、即ち朝七時にそれが開かれる訳だ。

基本的にこういったイベントや任務等については、藍染の気紛れ——とは言い切れ

ないのが恐ろしい部分だが、彼の一存で日程が決められる。

だが今回に限っては少々違いがあった。

何時もはもつと余裕がある筈なのだ。

判り易い例を挙げるとすれば、初の空座町侵攻。これの三週間前、藍染はウルキオラへ事前には任務内容を伝えていた。

つまり重要度と規模に比例して、与えられる準備期間が延びるという訳だ。

個人個人の召集なら未だしも、現十刃が入れ替わるかもしれない可能性を孕んだ催しである。少なくとも、些細な出来事では決して無い。

ノイトラはそこに引つ掛かりを覚えたのだ。

だが所詮、藍染にとつては全てが平等に些細な出来事に過ぎないのだろう。前述の任務に関しても同様の事が言える。

今迄に幾度と無く行われてきた階級争奪戦だが、破面達にとつては大きなイベントだ。

虚夜宮内にて無数に存在している破面達。その中でも頂に等しい場所へ立つ十つの刃を冠する者達。

畏怖の象徴でもあり、憧れでもある彼等が、一桁の数字を賭けて衝突する。場合によつては全力で殺し合う。

有象無象の数字持ちの小競り合いなど遊戯に等しい、次元を超えた戦い。興味を抱かない訳が無い。

言うなれば、スポーツや格闘技等の頂上決戦を観戦する気分に近いのかもしれない。

——実際は古代ローマ帝国のコロッセオだが。

藍染という王が、破面という剣闘士を戦わせる。正にそんなイメージ。

元より娯楽が少ない虚夜宮だ。現世の料理や酒という、食という分野に嵌ったドルドーニ達と同様、他にも現世の文化を持ち込めば流行る可能性は高いのではないか。

実行に移す気は無いが、ノイトラはふとそう思った。

「それが如何かしたか」

「…あの、さ」

ルピは其処で一旦口を閉ざし、先程の様に顔を俯かせる。

その様子に、ノイトラは思わず首を傾げた。

——全く以て彼らしくない。

その小柄な身体から漂う雰囲気は、只管に重い。

他人を小馬鹿にする御調子者のものは欠片も無い。

「ボク、グリムジョーに勝てると思う…?」

「!!」

不意に眩かれたその言葉に、ノイトラは合点がいった。  
如何いう訳か、ルピは自信を喪失しているのだと。

「…らしくねえな」

「ノイトラだつて気付いてるだろ…」

——あんな、無様な。

視線を合わせぬまま、ルピは自嘲する様にしてそう零した。

最後まで言わずとも理解出来る。任務の報告と織姫の紹介を行ったあの召集での出来事だろう。

不意討ちとは言え、グリムジョーによって絶体絶命の危機まで陥ったルピ。

史実とは異なり、初撃の貫手は何とか躲したが、追撃には全く反応出来無かった。  
恐らくそれで悟つたのだろう。

本来の力を取り戻したグリムジョーに、自分は及ばないとある意味、実質的には敗北しているとも取れる。

加えてそれが初めての挫折とくれば、それはそれは落ち込むだろう。事実、その認識は正しい。

グリムジョーは近接戦闘に長け、野性的で優れた反応速度と、型に囚われない荒々しい戦闘スタイルを持つ。帰刃形態には飛び道具も付属する為、更に隙が無くなる。

史実に於いて、自分より数字二つ分格上の筈のウルキオラと衝突した際、発射前の虚閃を驚掴みにして潰すという、誰も予想だにしない方法で阻止したばかりか、意表を突いて一時的にウルキオラを退場させるという快拳を成し遂げている。

それに対し、ルピは如何か。

帰刃形態を見れば判るが、中距離から遠距離戦闘がメインで、後は八本の触手による手数と刺突の突進力が売り。

「鉄の処女」という殺傷能力を上げる技も存在するが、他ならぬ触手自体が脆い為、喜助が行った様に棘の生えた先端部分を切り落としてしまえば簡単に無効化されてしまう。

一応他にも使い様はあるとは思いますが、あの性格だ。相手を見下し、侮るのが癖になっていそうだし、強い向上心を持ち合わせている訳でも無い。

この通り、相性に加えて能力差もあるが、最たる違いは別にある。

それは——強い信念。

大虚時代より自身に付き従っていた部下達を失つても尚、王としての矜持を持ち続けるグリムジョーに対し、ルピにはそういったものは欠片も無い。

内容の善悪は兎も角として、如何なる状況に於いても揺らぐ事無い信念を持つ者は総じて強いものだ。

ノイトラはつい先程セフィーロから聞いた話の内容を思い出す。

それは第6十刃になるより前の、只の数字持ちだった頃のルピについて。

彼は日頃から弱い破面達に絡んでは、馬鹿にしたり嘲笑つたりを繰り返しており、酷い時は暴力を用いたりもしていたらしい。

雑務係の破面に対しては更に顕著。仕事中にちよっかいを掛けては邪魔をしたりと、それはそれは非常にタチが悪かったそうだ。

当然、破面達は力の差がある為逆らう訳にもいかず、泣き寝入りするばかり。

実は口力もその内の被害者の一人だったりする。

理由は虐め易そうな顔をしているから、といった下らないもの。

——復讐は済んだので、スッキリしました。

満足気にそう言うセフィーロに対し、あの仕打ちはそれが切っ掛けだったのかと、ノ

イトラは納得した。

十刃に昇格してからは減少した様だが、実はそのまま続けていればルピの身が危うかった。

何故ならあの藍染が絡まなければ仏に等しい懐の広さを誇るビエホが、その重い腰を上げんとしていたからだ。

ちなみに彼のその御説教を受けた前例はある。ヤミーだ。

刑罰の内容は単純。当初から十刃であった彼に対し、ビエホは臆する事無く真つ向から対立。完膚無きまでヤミーをボコボコにして反省させたらしい。

その時に負った怪我が原因で大幅に弱体化してしまった為、もはや同じ事は出来無いそうだが、それにしてもヤミーに勝利したというのは驚異的な戦果である。

これ等については結構前にビエホ本人から聞いた話だ。見栄を張って嘘を付く様な性格で無いのは確実なので、恐らく真実だろう。

ヤミーに聞けば十中八九、否定が見苦しい言い訳か何かを叫び出すに決まっている。当時の彼は一介の数字持ちであり、その階級で十刃に勝利したという事は、ヤミーとの入れ替わりが起きていても何ら不自然では無い。

だが弱体化の件があつた為、十刃としての役目を果たせないとして断つたらしい。

初期の頃のヤミーは非常に荒れており、通路を擦違つただけでも、目障りだと言って

雑務係の破面達を虐殺していたそうだ。

——あれでも大分改善したのですぞ。

溜息を吐きながらそう零すビエホに、ノイトラは労りの言葉を投げ掛けたのを覚えて  
いる。

確かに、現在のヤミーは他の破面が視界に入っても舌打ち程度で済ませる程度だ。

この功績を考えれば、ビエホが力の弱い破面達に慕われるのも納得だった。

「……………」

タイプは違えど、一時はそのヤミーと同列になり掛ける程度のルピだ。

当然、グリムジョーとは比較するまでも無い。

生き方の時点で既に負けている。

とは言え、ノイトラにはその本心を直接口に出す気は無い。

相手は心底落ち込んでいるのだ。相談を持ち掛けた手前、解決策を提示するのでは無  
く追い討ちを仕掛けるというのは余りに不義理。

そんな事を考えながら、ノイトラは口を開いた。

「まあ、無理だろ」

「っ…」

激励でもするのかと思いきや、まさかの真逆。

澄まし顔で、ノイトラはルピが密かに抱いていたであろう希望を打ち砕いた。

それが想定外だったのか、ルピは一瞬息を？んだ。

「普通に戦えば、の話だけどな」

「!?!」

だが続け様に放たれたその言葉に、ルピは思わず顔を持ち上げた。

何か考え事をしているのか、右手の人差し指を頬谷に当てながら、ノイトラは問い掛ける。

「聞くぞ、テメエの帰刃の強みは何だ」

「へ？ …えつと、長いリーチと手数？」

「じゃあ次、グリムジョーは如何だ」

「知らないからわかんないケド…多分近接戦に特化してる、と思う」

その問いの意図が読めず、戸惑いながらも、ルピは回答してゆく。

「その逆は」

「え〜と、ボクの触手は先端以外が脆くて…グリムジョーは…」

其処まで答えた途端、言葉に詰まった。考えてみると、グリムジョーには弱点らしい弱点が無いと。

近接戦を得意とする者に対する対策といえば、適度な距離を保つという選択が最も無難。

だがそれを選んだとしても、あの速度だ。生半可な遠距離攻撃は躲されるだろうし、下手すれば一気に間合いを詰められてしまう。

事前に罠を仕掛けては如何か——とも考えたが、直ぐに改めた。

十刃クラスに通用する罠など、一体どれ程のレベルが求められるか判ったものではない。しかもあのザエルアポロ並みの頭脳も科学力も無い為、前提からして間違っている。

戦法の中に罠を組み込むにしても、野性的本能か何かで察して直ぐに対応してしまいうるにも思える。

つまりグリムジョーと戦うには、純粹に真正面からぶつかり合い、実力で打倒するか術は無いのだ。

今更ながらその事実気付いたルピは、焦燥に駆られた。

自分では如何足掻こうが不可能ではないかと。

血の気が失せ、顔色が青褪めていくのが判る。

同時に背中を大量の冷や汗が流れ始めた。

そんなルピを尻目に、ノイトラはきっぱりと言いつつ放った。

「油断してる内が勝負どころだな」

「え……？」

「要するに、グリムジョーの奴がキレる前に仕留めりゃ良いってこつた」

——それなら十分勝機はある。

そう断言するノイトラに、ルピは開いた口が塞がらなかつた。

確かにグリムジョーは敵に対して情け容赦は無いが、格下だと判断した相手には油断

——または調子に乗る傾向にある。

先の任務内で満身創痍となった一護に対し、殺さずに甚振り続けていたのが良い例だ。

それはルピも同様。付け加えるならば、グリムジョーよりもやや顕著だ。

帰刃の際に発生した霊圧の余波によって隙が出来た冬獅郎を一時的に退場させたまでは良いが、探査神経で確かめもせずに死んだと判断。

結果、技の仕込みの時間を与えてしまい、まんまと反撃を許したりと、大ポカを遣らかしている。

「ワザと調子付かせて隙を突くって手もアリかもな」

正しく慢心が過ぎたが故に、本来の実力も出さぬまま敗北するという、物語に登場する敵キャラのテンプレ。

弱い主人公が、強い敵を土壇場の閃きや覚醒によって打倒する展開と比肩する程に使われている。

ノイトラはそれを利用しろと言っているのだ。

と言うか、今のルピにはそれしか無い。

「それに触手の脆さ云々は兎も角、手数が多いのは強みになる」

「……………」

ルピは感じた。その言葉には妙に実感が籠っている。

それはそうだろう。ノイトラの帰刃形態は鋼皮の硬度に脅力が上昇する件を除けば、腕が増えると言う至極単純なもの。

手数を生かした戦法の有効性について理解しているのは当然と言えた。

本来、複数の武器を持つ程度、比例して運用する難易度が上がってゆく。

史実のノイトラも、「剣道」による一閃を繰り返されるまでは剣八を圧倒していたが、三対の腕を巧みに使いこなしていたとは言い難い。

六本の内二本の腕を出し惜しみして、やや追い詰められたかと思われた瞬間、不意討ちに使ったり。建物の残骸を利用して隙を作ったりと、戦法自体は少しばかり考えていた様には見受けられる。

だが基本的に増幅した攻撃力にモノを言わせた単純な力押し戦法しか取っていないなかつたのに変わりはない。

——こんなに便利なのに、勿体無い。

その時は六本の腕を使い、小石でジャグリングをしていたノイトラは、そう思った。無論、それを目の当りにしたテスラがドン引きしていたのは言うまでも無い。

二刀流の基本は無論一刀流。この様に、通常よりも確実に基本を押さえておかねば到底扱い切れる筈が無い。

だが今のノイトラは何年も基本に忠実な鍛錬を重ねて来ている。帰刃についても同様に手を抜いておらず、常に試行錯誤しつつ腕を磨いていた。

その結果——其々の役割毎に腕を振り分けた状態での戦いを可能とした、正しく攻防一体といった現在の帰刃形態の戦闘スタイルを確立。

未だ実戦で用いた事は無いが、同様に確立させていた未解放時のそれが通用した事実から、恐らく使えないという事は決して無いだろう。

ちなみにルピはグリムジョーのものと同様に、ノイトラの帰刃形態を知らない。

バラガンやビエホといった古参の破面は別だ。

十刃クラスともなれば、余程の事が無い限りは滅多に帰刃しようとしなない為、大抵はルピと同様に把握していない者が殆どだ。

「それにテメエの帰刃は、突進とか鞭打以外にも使い道はあんだろ」

——例えば地面に何本か潜らせといて、死角から奇襲を仕掛けるとかな。

ノイトラは小さく呟いたが、ルピにはしっかり聞こえていた。

その意見は驚く程に、ストーンと腑に落ちた。

確かにこの虚圏一帯は全て砂漠であり、地面は細かい粒子の砂で統一されている。

虚夜宮に於いても、宮の外は全てそうだ。

力を持たない小さな虚達も、その砂の中に潜るなどして身を守ったりする事は多々ある。

ならば触手を潜り込ませる程度は容易だった。

ルピは気付いた。

少し考えれば直ぐに思い浮かぶ有り触れた意見である。

にも拘らず、今迄一度たりとも想像した事が無かったと。

「そつ…か、考えたこともなかったや」

「ハッ、向上心が足りねえだけだ」

その呟きを、ノイトラは鼻で笑う。

だがその態度には不思議と、相手を馬鹿にする感じは無かった。

——少しは自信付いたか。

まるでそう語っている様に見えた。

「…うん、なんかスッキリしたよ」

「解つたらさつきと宮に帰って寝ろ。戦いに備えてな」

「ははっ、似合わないセリフだなア」

「ウルセエよ女男」

一段落着くと、二人は互いに軽口を叩き始めた。

ルピの雰囲気表情も一転、明るなものへと改善されていた。

「…じゃあな」

「うん、また」

まるで仲の良い職場の同僚同士のように別れる二人。

ルピは駆け足で自身の拠点の宮がある方向へと。ノイトラも途中までは同じ方向に向かう筈なのだが、何故か逆の方向へと歩を進めた。

ルピとの距離が、探查神経を用いねば互いに認識不可能な域まで至った瞬間——突如としてノイトラが声を上げた。

「——クソツタレが!!!」

固く握りしめられた右拳を、真横の壁に打ち付ける。  
響き渡る轟音。みれば直撃を受けた通路の壁には、人一人軽く超える程の巨大なクレーターが出来上がっていた。

罅も考慮すると、その損傷範囲は倍近くになる。

「何が…勝負どころだ…!!」

ノイトラは絞り出す様にして、吐き捨てた。

盛大に歪めがらわれているその表情は、何かを必死に耐えている様に見えた。

それもその筈。今のノイトラが抱いているのは、後悔、怒り、焦燥が複雑に入り混じった上で激情と化している感情だ。

以前も似た様な事はあったが、今回に限っては別格。しかも前の二つの感情が異常に大きい。

忍耐強いノイトラも、流石に限界だったのだろう。

「どの口で…偉そうに語ってやがる…!!」

——この偽善者め。

ノイトラは内心で己を罵倒した。

ルピが落ち込んでいるのも、元を辿ればノイトラが原因だ。

あの時、グリムジョーを止めずに放置していれば、ルピもこんな状況に陥る事も無く一瞬で全てが終わっていた筈だ。

にも拘らず、条件反射で助けに入った挙句、勝負が見え切っている癖に階級争奪戦という形を提示。藍染がそれを決定付ける切っ掛けを作った。

そして先程の相談である。

変に希望を持たせる様なアドバイスをして、一体何の意味があるというのか。

確かにルピはあの慢心さえ取り除けばそれなりの実力は発揮出来ると、ノイトラは考えている。

だがグリムジョーを降す程では無い。

余りに地力が違い過ぎるのだ。

史実に於いて、未解放時とは言え素手で、鋼皮をもともせずルピの腹部をぶち抜いた時点で御察しだ。

「……この御人好しが」

それ程親しい間柄でも無いルピに対し、ノイトラが此処まで悩む必要自体が皆無の筈である。

結局のところ、この状況に陥ったのも全て自業自得。

見捨てれば良かったのだ。あの時、動き出した身体を無理矢理抑え込んででも。

例えそれが出来無かったとしても、最後に至つて簡単な方法で全てを解決に導く事が出来る。

それは——自らの手でルピを殺す事だ。

そうすれば全てが丸く収まる。多少不満はあるだろうが、グリムジョーは第6十刃に返り咲くだろうし、こうしてノイトラが悩む要素も無くなる。

殺した理由については——喧嘩を売られたとか、後で適当に付ければ良い。

だが端からそういった冷徹な思考と行動力が出来れば苦労してはいない。

御人好しというのは理屈で成り立っている訳では無いのだ。

相手が誰だろうが、怪我をしていれば心配するし、困つていればつい手を貸して遣りたくなる。

つまり生まれ持つてしまった時点で、如何し様も無い性分なのである。

「…クソツ!!」

ノイトラは逃げる様にして、響転でその場を立ち去る。

次にその表情に浮かんでいるのは——焦燥。

場所も弁えずに感情を剥き出しにして八つ当たりするという、愚行を犯した事に対し

ての。

何処に藍染の監視の目があるかも不明な環境下、この行動は余りに迂闊だったと言わざるを得ない。

だが今のノイトラは精神的に追い詰められ過ぎていた。

それこそ、抑えが利かない程に。

このまま拠点の宮に帰還して眠りに着いたとしても、不安定の極みにある精神はそう易々と改善されない。

下手すれば同様の事を繰り返す可能性が高い。

脳裏を過るのは、先程帰り様にルピが小さく零した言葉。

—— ありがとう。

それがノイトラの罪悪感を如何し様も無く増幅させる。

礼を言われる資格など、自分には無いのに。

あらん限りの力で、齒を食い縛る。

正しく限界。何時ぞやに考えていた最悪の想定。凡人のキャパシティを超えたのだ。

今の精神状態に比べれば、胃痛如き痒みに等しい。

一切合財全て投げ捨てて、本能のままに暴れ回りたいという衝動がノイトラを襲う。

だがそれを行う訳にはいかない。

だからと言って自分の力だけで耐え切れる自信も無い。

故に止むを得ず——ノイトラは縫る事にした。

男の癖に情けないと言われるかもしれない。だが他に方法が無いのだ。

響転の速度を緩めず、超高速で向かった先は治療室。

ノックも無しに速攻で扉を開き、中へ侵入する。

「ノイトラ…様…?」

何か道具の準備をしていたらしい、驚愕の面持ちで固まる口力を擦り抜け、セフィー口の自室へとこれまた無断で侵入する。

何時の間にやら壁紙全体が水玉模様と化した室内。その中心には、寝間着に着替える途中だったと思われる、白衣を肌蹴させた体勢で固まっているセフィー口の姿があった。

マスク状の仮面の名残も顎下まで下げられており、その美しい素顔が丸見えとなつて  
いる。

「…ふえつ? の、ノイトラさん…?」

流石の彼女も想定外だったのか、何度も瞬きを繰り返しながら、そう呟いた。だがノイトラは無言のまま、セフィーロへ近付いて行く。

「え、え、えええ？ もももも、もしかして遂にその気になってくれたんです——わぷっ!!」

頬を赤く染めて、何やら期待し始めたセフィーロだったが、それは裏切られる結果となった。

ノイトラは距離を詰めた瞬間、セフィーロを正面から抱き締めたのだ。

左手は背中に、右手は頭部に。誤って潰してしまわぬ様、優しく包み込む形で。

セフィーロの身長は百と八十。さり気にハリベルより高い。

だがそれに対してノイトラは二百と十五。その差は歴然。

そんな彼に抱き締められれば、必然的にセフィーロの顔は胸元よりやや下に埋まる事となる。

「ふはっ……ノイトラさん？」

「……………」

埋もれた状態から抜け出したセフィーロは、何とかノイトラの顔を確認しようとする。

頭部を右手でやや固定されている為、見えたのは口元だけ。

だがそれだけで十分だった。

ノイトラが今、どんな表情を浮かべているのか。

「…少しの間だけで良い」

「え…？」

「このままです、居させてくれ…」

その力無い声を聴いた直後、先程までであった筈の浮かれた感情が一気に抜け出すのを感じた。

同時に言い様も無い感覚が、胸が締め付ける。

セフィーロは恐る恐る、自身の両手をノイトラの背中に回す。

細身に見えて、実は相当な筋肉質。高身長なものもあるだろうが、傍から見れば普段は大きく、力強さを放っているそれ。

だが、今は如何だ。

感触は間違い無く一緒。にも拘わらず、この上無く小さく感じるのは何故だろう。

「……おっ」

セフィーロは慈愛の笑みを浮かべながら、それを了承。

やがて優しい手付きで、ノイトラの背中を撫で始めた。

今迄にも何度か弱っていると思わしき場面を見た事はあるが、これ程のものは未だ嘗て無かった。

基本的に人は自身の弱みを見せる相手は、信頼している者に限られる。

ノイトラは現在交流のある親しい者達の中でも、セフィーロを選んだ。つまりそれは彼女の事を最も信頼しているという証明に他ならない。

——やはり彼にとつて、自分こそが一番なのだ。

そんな優越感を抱きつつ、仄かに石鹸の香りが漂うノイトラの身体に密着し続けた。自室のドアの隙間から、熱心に此方を覗いている口カに見て見ぬフリをしながら。

## 第三十三話 蔦嬢と豹王と…

好奇、嗤笑、殺意、無関心。四方八方より感じる視線。様々なものが入り混じったそれに煩わしさを感じながら、ルピは戦場となる遊撃の間の中心部へと歩を進める。

前方からは同じ場所へ向かって来るのは——彼が今回第6十刃の階級を賭けて激突するグリムジョー。

袴の側面に両腕を突っ込み、背筋がやや曲がったその姿は典型的な不良スタイル。加えてその口元は愉しげに吊上がっている。

今から殺し合いに赴くとは思えない、余裕と自信に満ち溢れた態度。

——明らかに舐めている。

自分が敗れる可能性など欠片も考えていないのだろうと、ルピは悟った。

当然、それに苛立ちを覚えたが、それ程強くは無い。

ルピは思った。意外だと。自分自身の事にも拘らず、だ。

通常であれば此処で、怒りの感情と同時に激しい殺意を剥き出しにしているところだ。

それが如何だ。僅かな苛立ちがある事以外は至って普通であり、剩え現在進行形でグ

リムジョーの隙を探り続ける程の冷静さも見せている。

「…なんか、不思議な気分」

この戦いはルピにとって圧倒的に不利なのは明らかだ。

それは他の十刃達も大凡察している。

現在、この第6の遊撃の間には多数の破面達が集結している。勿論その目的は観戦である。

だが十刃は驚く程少ない。ハリベルとその従属官四人、ゾマリ、アールニール。つまり三人のみ。

見るまでも無いと考えているのか、はたまた興味が無いのか。観戦していない者達の理由は様々。

スタークとしては、単純に見たくないだけ。余り他の破面と接点を持たない彼だが、仲間同士が争う光景を好き好んで見たがる訳が無い。死ぬ可能性もあるとなれば、尚の事忌避するに決まっている。

バラガンの場合、戦いの結果だけを知れば良かった。その証拠に、この場には彼の従属官の内何名かが居た。

ウルキオラとノイトラは別件。内容は織姫の関係で少し用事がある、とだけ。

ザエルアポロは何時も通りに自身の拠点であり研究所でもある宮に引き籠って研究を続けて居る。しかし彼の事だ、何かしら特殊な手段でこの戦いの様子を窺っている可能性は否めない。

ヤミーは只単にサボりだ。階級争奪戦の観戦は強制では無いので、こうなるのは当然だろう。

逆に観戦している者達にも思惑があった。

ハリベルは個人的に興味があった為。それと自身の従属官達に十刃同士の戦いを見せてやりたいという、指導者の立場からの考えから来ている。

ゾマリは言わずもがな。この階級争奪戦を開催したのは藍染、そしてその当人は此処に居るとすれば——動かない訳が無い。

アールニール口については不明だ。だが彼の能力の特性から考慮するに、グリムジョーとルピ、どちらか倒れた方を喰らう事が出来れば——等と目論んでいる可能性が高い。

「ノイトラのおかげ…かな？」

新人とは言え十刃が、自身の悩みを他の十刃に相談する。まず有り得ない行為だ。愚行とも言つて良い。

しかも相手があのだらうとくれば、言わずもがな。

極悪人を連想させる容姿に、虚夜宮内でもトップクラスの長身。相對する相手の尽くに威圧感を与える彼。

第一印象だけ見れば罷り間違つても相談相手では無い。寧ろ敵だと言われた方が納得だ。

真面な会話すら成り立つか如何か怪しいと、以前までのノイトラの性格を知る者ならそう思うだろう。

だが結果は見ての通り。ノイトラは励ますだけに終わらず、こうして精神の安定までも自分に齎してくれた。

別れ間際、つい自身の口から感謝の言葉が漏れたのをルピは覚えている。

少しだけ後悔した。あれは正面から言うべきだったと。

しかし今更だ。もう遅い。

もはや戦闘開始まで後僅か。一旦中断して抜ける訳にもいかない。

ならば理想としては、ノイトラに感謝の言葉を送るのはこの戦いに勝利した後。

——きつと目を剥いて驚く事だろう。

ルピは想像を膨らませると、自然と表情に笑みが零れてくるのを感じた。

自分が勝利したという衝撃の事実も相俟って、ノイトラが見せてくれるリアクションは相当面白いものになる可能性が高い。

それこそ、此方が思わず噴き出してしまいそうになる程に。

「楽しみだなア…」

自分を応援してくれる仲間が居るといふ事実が、これ程まで心強いとは思ってもい  
なかつた。

群れるという行為は弱さの表れ。つい最近までルピもそう考えていた。

強者として、十刃として、そんな情けない真似は出来無いと。

だがそれは間違いだった。ルピは断言する。

無論、格下にノイトラと同様の事をされても何も感じないだろう。寧ろ舐められてい  
ると受け取り、激昂する可能性が高い。

プライドの関係もあってか、その辺りは変わっていない。

だがそれでも尚、ルピのこの変化は大きなものであると言えた。

「…両者共に、準備は整いましたかな」

グリムジョーとルピ。やがて二人の距離が十メートルを切る。

その直後、開始の合図を担当するビエホが二人に問い掛けた。

返答は無言。だがそれは肯定の意味であり、それを理解していたビエホは、第6の遊撃の間に存在している高台の観覧席へ振り返る。

そしてその中でも最も高い位置の椅子に腰掛ける藍染へ、その視線を向けた。

「良いよ、始めてくれ」

「御意に」

何時も通りの楽な姿勢を取りながら下を眺めながら、藍染は許可を下す。

ビエホはそれに膝を着いて了承の意を示すと、再び元の体勢へと戻る。

「これより階級争奪戦の開催を宣言する。両者、悔いの無き様…」

暫し間を置いて、ビエホは右腕を持ち上げる。

「——始め!!」

その掛け声と同時に、腕が振り下ろされた。

先手を打ったのは、ルピだった。

開始と同時に右手を斬魄刀の柄へ添え、抜刀。響転にて間合いを詰め、刀身を横薙ぎに振るう。

大振りでは無い。だが全力ではある。

霊圧も惜しみ無く解放されており、始解状態の一護ですら傷付ける事すら叶わなかつ

たグリムジョーの鋼皮を突破出来る程度の威力は持っていた。

だがそれは瞬間的に半歩後ろに下がられただけで躲される。

グリムジョーは余裕の笑みを崩していない。

明らかに本気では無い。それどころか両手は未だに袴の側面に入れたままで、斬魄刀を抜こうとする挙動など欠片も見られない。

「微温いぞオラアツ!!」

振り抜いた体勢のまま固まるルピに対し、グリムジョーは右足を蹴り出した。

武術の武の字も無い、完全なるヤクザキック。

ドルドーニやその弟子であるノイトラが用いる脚技とは天と地の差があるそれ。

本人が遊んでいるのもあるのだろうが、何とも御粗末な代物だ。

観覧席でそれを見ていたテスラは、思わず眉を顰めた。

——その程度、端から予測していた。

ルピは臆する事無く斜め前に踏み込み、蹴り出された右足と擦れ違う形でそれを躲そうと試みる。

攻めの姿勢に加え、小柄な体型が幸いしたのか、いとも容易く成功。同時に懐に潜り

込む事に成功する。

「!?」

「そつちがね、グリムジョー!!」

想定外だったのか、瞠目するグリムジョー。

ルピはその隙を逃さぬべく、切っ先を顔面目掛けて突き出す。

見事な反撃。だが流石と言うべきか、グリムジョーは驚異的な反射神経で状態を後ろへ逸らす事で逃れる。

そしてすかさず後退し、ルピとの距離を取った。

気付けばグリムジョーのその両手は解き放たれていた。

「…調子に乗んなよ雑魚が!!」

怒りの形相のまま、グリムジョーは右手を突き出すと、霊圧の集束も無しに虚閃を放った。

それはルピが立っていたと思われる場所を通り越し、観覧席の土台に直撃する。

だがその割には、観覧席に居る破面達の表情には焦燥が全く見られない。

それもそうだ。此処の観覧席一帯には特殊な仕掛けが施されており、内部の攻撃が一切通らない仕様となっている。

下位十刃の虚閃程度、何発直撃しようが問題は無い。

只、例外もある。第4から1の上位十刃——特にバラガンやスタークだ。

幾ら手を加えるにしても、限度がある。流石に“老い”という規格外の力や、千単位の虚閃の連発は対応し切れない。二人が本気で暴れ出そうものならば、虚夜宮自体がいつも容易く破壊されてしまう事だろう。

残るウルキオラにハリベルも同様。前者二人に及ばずとも、相当な力を持っている事実に変わりはない。

天蓋の下での帰刃を禁じられているのは伊達では無いのだ。

その為、基本的に上位十刃クラスの階級争奪戦となれば、虚夜宮の外が会場となる。

そして観戦する破面達も必然的に上位陣に絞られる。中には興味本位で参加する無謀な者も居るが、大概は戦いの余波に巻き込まれて死に至る。

破面達の間で上位十刃の情報が少ないのはそういった関係もあった。

「っ!!」

他の破面の中にも、反撃として素早く虚閃を放つ者は居る。

だがグリムジョーの様に完全に無拍子の形はほぼ無い。

ルピは驚愕の余り一瞬硬直したが、既に突きの体勢から重心を戻していた為、対応が間に合った。

響転でその場を跳んで回避に回ると、直ぐ様反転。

向かう先はグリムジョーの上空。

彼の表情は勝ち誇っている様に見える。

恐らく自身の放った虚閃が直撃したとても思っているのだろう。

——何時までそのふざけた顔が出来るか見ものだ。

そんな事を考えつつ、ルピは斬魄刀を振り上げながら落下。

一切の躊躇いも無く、その頭蓋を真つ二つに叩き割らんと迫る。

「なっ…!!」

自身の頭部に影が覆い被さった瞬間、其処で初めてルピの反撃に気付いたグリムジョーは驚愕の声を漏らした。

普段のグリムジョーであれば、この様な不覚は取らなかつただろう。

だが今の彼は全てに於いて手を抜き過ぎていた。

それはルピに対する認識が大きな要因となっていた。

不意討ちに多少反応出来る程度の力量はある様だが、それだけ。所詮は力を取り戻した自分の敵では無く、斬魄刀を抜くまでも無い雑魚だと、そう考えていた。

だが今の状況は如何いう訳なのか。

初撃は対した事無かつた。それは予想の範疇。

問題はそれ以降だ。此方の攻撃の躲し方から始まり、隙を突くタイミング、反応速度。どれも非常に優秀。

と言うか、戦い方からしてまるで別人だ。相手を見下し、小馬鹿にした様な、つい最近までの態度は何処へやら。

格下だと思っていた相手の想定外な動きに、グリムジョーは戸惑うばかりで思考が追いつかない。

「はああああアツ!!!」

「チイツ!!」

未だ嘗て無い程の気迫を籠めた咆哮を上げながら、斬魄刀を振り下ろすルピ。

グリムジョーは咄嗟に両腕を持ち上げて防ごうと試みるが、止める。

流石のグリムジョーも、その威力が自身の鋼皮で防ぎ切れるレベルを超えている事を悟ったのだ。

次の瞬間、室内全体に凄まじいまでの金属音が響き渡る。

発生源を見てみると、其処にはルピの振り下ろした斬魄刀を、右手に握った自身の斬魄刀で受け止めているグリムジョーの姿が。

「…なーんだ、けつきよく斬魄刀そ抜いちやったんだ!! 堪えないんだねグリムジョー

!!」

「てめえツ…!!」

受け止められて尚、霊子の足場を踏み締めて斬魄刀を押し込み続けるルピ。

だが本来の十八番である挑発も忘れてはいない。

案の定、グリムジョーの眉間に皺が寄った。

「粋がつてんじゃ——」

「っ!？」

「ねえッ!!!」

グリムジョーは柄を握る手に力を籠めた。

声を荒げると同時に強引に腕を振るい、力づくでルピを斬魄刀ごと弾き飛ばす。

身長は百六十センチ。体重は四十五キロ。

女性とほぼ遜色無い小柄で非常に軽量なルピはいとも簡単に宙を舞う。

——やはり力では敵わないか。

体勢を整えつつ、ルピは内心で吐き捨てた。

直後、ルピは自らの背後に気配を感じ、振り返る。

斬魄刀を左脇に振り被った、攻撃準備万端のグリムジョーだ。

その鋭利な眼光には、尋常ならざる怒りと殺意が含まれている。

「う…グウ…!!!」

御蔭で直ぐ様反応出来たルピだったが、結果は先程の繰り返し。

振り返りながら刀身の平地で斬撃を受け止めるが、一秒も持たずに押し負け、宙を舞

う。

その威力は先程の倍。その衝撃で腕のみならず身体全体が痺れていたルピは、体勢を整える余裕すら無く、そのまま受け身も無しに地面に落下した。

だが落下によるダメージは殆ど無い。これが特別仕様の観覧席側の壁であったならば話は別だろうが、地面については何の保護もされていない通常のもの。

十刃クラスの鋼皮となれば、只の壁や岩盤等に叩き付けられる程度ではビクともしない。その事を考慮すると、ルピの状態も納得だった。

口内に僅かに入った瓦礫の破片を吐き出しながら、立ち上がるルピ。視線を前に向けながら構えを取った瞬間、腹部に衝撃が走った。

「!!?」  
「ガハッ!!!」

突然過ぎる出来事故に踏ん張りが利かず、ルピは凄まじい勢いで地面を転がって行く。

直前まで彼が居た場所には、右脚を振り抜いた体勢のグリムジョーが。どうやら先程のリベンジを決行した様だ。

相変わらず凶暴性を帯びた表情を浮かべてはいるが、良く見ると多少は収まってい

る。

序盤までの仕返しが出来た事と、戦況を有利な形に引つ繰り返せた事で溜飲が下がりでもしたのだろう。

「…チツ」

口元から僅かに血を滲ませながら、ゆっくり立ち上がるルピ。

その姿を遠目に見ながら、グリムジョーは舌打ちする。

先程の蹴りは、完全に仕留める心算で放った。

だが手応えが無い。

理由は単純。直撃の刹那、ルピが僅かに後方へ引いたのだ。

結果、その蹴りはある程度のダメージを加えると共に、ルピを吹き飛ばすだけに留まった。

——気に入らない。

幾分か落ち着いていた筈のその精神に、今度は苛立ちが芽生え始めているのを、グリムジョーは感じていた。

理由は解っている。ルピの見せるその——何処か既視感を感じる目だ。

遊ぶのを止めた時点で、グリムジョーは自分の予測が合っていた事を実感した。  
やはり自分の方が強いと。

それはルピも十分理解しているだろう。

にも拘らず、彼は積極的に攻勢に出るわ、何度倒れても立ち上がるわ、一向に戦意を失う様子も見せない。

「ああ…そうか」

連想するのは、つい最近対峙したばかりで、中々決着が付かぬままズルズルと因縁が続いている相手——黒崎一護。

彼と同じなのだ。

初戦では、実力差を理解していながら無謀にも立ち向かい続け、自分の胸元に傷を付けて見せた。

次戦では序盤、あの謎の仮面の力らしきものに後れを取ったが、終盤にそれが割れてからは一気に逆転。

だが幾ら追い詰めても尚、その目は光を灯し続けていた。

「決めたぜ、てめえは必ず殺す…!!」

自分を舐めた目で見る奴は、誰一人として許しはしない。

相手が如何なる思いを抱いていようが、知った事か。

今迄もずっとそうして来た。それはこれからも変わらない。

王という存在は、全ての頂点であり、畏怖の象徴であり、誰もが跪くべきもの。

だが今はそれを阻む大きな壁がある。藍染だ。

ある日忽然と現れ、瞬く間に虚圏全土を統べた規格外。

その圧倒的な実力差と、新たに力を得られるという事で、グリムジョーは止むを得ず

傘下へと下った。

だが所詮それは一時的なものに過ぎない。

グリムジョーは改めて誓う。

何れ自分はその藍染をも越え、真の王として君臨してやると。

——己の道を阻む者は、一切合財壊し尽くしてやる。

そう内心で語るグリムジョーの司る死の形は、破壊。

藍染から齎されたそれだが、彼という存在を表すには最も適しており、それについて

は本人も納得していた。

「さっさと来やがれ…」

此方を睨み続けるルピへ向け、グリムジョーは挑発する様に手招きをする。

だがルピは斬魄刀を構えたまま、一向にその場から動こうとしない。

彼の表情には挑発に対する怒りが隠し切れていないが、抑え込もうと必死になつてい  
る様に見える。

先程までの戦いを見るに、冷静に思考しつつ戦う事を心掛けているのだろう。

グリムジョーは内心で何度目かも判らない苛立ちを覚えた。

極めて自分勝手だが、彼は挑発が流されたり等、自分の思い通りに行かない事態を特  
に嫌う。

それこそ、殺気や霊圧を飛ばそうが睨み付け様が、毎回涼しい顔でのらりくらりと流  
すノイトラや、上位十刃などはその筆頭だった。

だがそれは自分より格上の強者であるからこそ出来る反応であり、持てる余裕に過ぎ  
ない。グリムジョーもそれは理解している。

明らかに格下であるルピが、強者と同じ事を成そうとしている。

それが如何しても癪に障った。

「いつまでもビクビク縮こまってんじゃねえよ雑魚が!!」

遂に痺れを切らしたグリムジョーは、その手招きしていた右手を止め——中指を立てた。

そのサインは相手を最も侮辱する意味を持つ動作。場合によっては、それだけで殺傷事件に発展しても何ら不自然では無い。

無論、それを理解していたルピの表情が歪む。

次の瞬間、グリムジョーの視界からルピの姿が消えた。

寧ろ此処まで良く耐えたと褒めるべきだろう。

グリムジョーと同様に、ルピは元から気の長い方では無いのだから。

だが案の定、グリムジョーにとっては期待通りの展開だった。

感情的になった分、ルピの思惑の全てが手に取る様に解る。

動きの挙動に方向——そして彼のその狙いも。

「オラア!!!」

「——っ?!?!」

氣配を感じた背後目掛け、振り返り様に右手の斬魄刀を薙ぎ払う。

加減の一切無い、全力の斬撃。技術もへつたくれも無い力任せなそれは、攻撃と同時にグリムジョーの周囲へ凄まじい衝撃波を巻き起こした。

——完全に入った。

グリムジョーは確信すると同時に口元を吊り上げた

刃先が何かに阻まれた気もするが、一瞬だけ。そしてその直後に感じる、肉を斬り裂いた感触。

視界の先では、地面を盛大に抉りながら吹き飛んでいくルピが。

直接視認してはいない。だが右手に残る手応えは訴えている。間違い無く致命傷へ至る傷を与えたと。

恐らく直前に攻撃を阻んだのは、ルピが咄嗟に斬魄刀を攻撃から防御へ回したからだろう。だが殆ど意味を成していないのは明白。

ルピの飛ばされた先には砂塵が巻き上がり、その姿は確認出来無い。

手前に視線を移すと、如何やら宮の基礎ごと抉り取つたらしい。其処には虚圏特有の砂漠の砂が一直線に覗いていた。

「……チツ……」

グリムジョーはゆったりとした速度で歩を進める。

砂を踏み締めながらルピの手前まで移動し、其処で足を止める。

今も尚舞い続ける砂塵。

耳を澄ましても、身動き一つ取った様子も無い。

「終わりかよ、呆気ねえ」

グリムジョーは盛大な舌打ちと同時にそう呟く。

正直言えば物足りない。正しく不完全燃焼だ。

さっさと殺してやると意気込んでいたものの、それ以上に取り戻した力を存分に振いたかったのだ。

ルピが思いの外善戦出来た事で調子付き、勝機を見出したところで帰刃。その圧倒的な力で以て蹂躪し、完膚無きにまで捻じ伏せる。理想としてはそれがしたかった。

それがまさか、未解放時に本気を出しただけでこうなるとは思ひもしなかった。

帰刃を出すまでも無く終わらせてしまった己の実力の高さを誇ると同時に、ルピの余

りの実力の無さを内心で罵倒する。

不機嫌極まりない表情を浮かべながら、グリムジョーはその場から踵を返した。

斬魄刀も左腰の鞘へと納刀し、完全に戦闘態勢を解きながら。

——此処で霊圧探知を研ぎ澄ませるか、探查神経を発動させていけば、また未来は変わっていただろう。

やはり本気を出したとは言え、何処かで気を抜いていたのだろう。

「なん……だとオ……!!?」

次の瞬間、グリムジョーは驚愕の声を漏らしていた。

見れば彼の下半身には巨大な触手が巻き付いており、凄まじい力で締め付けに来ていた。

グリムジョーの表情に焦燥が浮かぶ。

何せ此方の隙を完璧に突く不意討ちのタイミングだ。そしてその末に自分が置かれた状況も、見逃す事が出来無い程悪い。

正確に言えば、触手に囚われたのは下半身のみでは無い。納刀した斬魄刀に加え、左肘から先の上腕も巻き込まれている。

自由なのは右腕のみ。ほぼ完全に動きを封じられたに等しい。

——これは、アイツの帰刃か。

そう悟ったグリムジョーは慌てて左腕を引き抜こうとするが、ビクともしない。

右手で触手を引き千切りに掛かっても、優秀な伸縮性を兼ね備えたそれは極めて弾力に富んでおり、全力で握ろうが引つ掻こうが傷一つ付かない。

逆に刀剣の類には滅法弱いだろうが、生憎と今は触手の中にある為、使えない。

グリムジョーは抵抗する術と同時に、帰刃するという手段すら封じられてしまっていた。

そうこうしている間にも、彼の身体は段々と地面に引き摺りこまれて行く。

「て……めえ……!!」

悔しげな声を上げるグリムジョー。だが幾ら口を動かしても状況は変わらない。

如何に彼でも、未解放の状態で帰刃形態の十刃を相手取るのは分が悪かった。

背後を振り向けば、其処には帰刃形態となったルピ。

白装束の腹部の辺りが破け、大量の血痕が染みついていく様子から、確かに先程の斬撃は直撃していたらしい。

だがそれは帰刃の恩恵により、全くの無意味と化していた。

「油断しているうちが勝負どころ…か。確かにそうだったよ、ノイトラ」

——これで勝負ありだ。

ルピは静かにそう零しながら、勝利の笑みを浮かべた。

実はこれこそがルピの真の狙い。

本当は戦闘開始直後から、罅迫り合いに持ち込んだ直後に帰刃し、一瞬で勝負を付ける作戦を立てていたりする。

だがそれはグリムジョーの驚異的な反応速度を見た途端、断念せざるを得なかった。

確かに隙だらけではあったが、やはり戦闘態勢に入っている為か、ある程度の警戒心は抱いているらしい。

獣の本能というのは侮れない。

加えてグリムジョーは戦いのセンスがすば抜けている。

例え全てに於いて後手に回ろうが、常識では考えられない動きをしても何ら可笑しくは無い。

そして直後に浮かんだもう一つの可能性。

上手く隙を突いたとしても、仕留め切れずに下手に負傷させる真似をしてしまえば、取り返しが付かなくなるかもしれない。

虎は平常時よりも手負いの状態の方が最も恐ろしい。つまりはそういう事だ。

其処でルピは思考した。完全に油断する瞬間とは如何なるタイミングなのかと。

御喋りな者というのは皆総じて頭の回転は良い。何せ口に出す言葉が次から次へと浮かんで来るのだから。

やがて導き出した結論は——相手が勝利を確信した瞬間にこそ、勝機があると。判断したルピの行動は早かった。

まずは初っ端から全力を出して斬り掛かり、ある程度グリムジョーを焦らせる事で判断力を鈍らせる。

結果、ほぼ確実にムキになって反撃して来る事だろう。

そうなれば流れは完全に此方の思うが儘。

余り気乗りしないが、それに合わせてグリムジョーの攻撃を態と受ける。すると如何なるか。

まず格下に先手を取られていた状況を引つ繰り返せた事で安堵するだろう。

その上で勝利を確信したとなれば——ほぼ完全に気が抜ける筈だ。

その隙を帰刃形態で突けば決まりだ。

且つノイトラからのアドバイスで得た——密かに触手を地面に潜らせて置き、不意を突くという運用法を加えれば、もはや自分の勝利は確定事項となる。

「終わりだよ、グリムジョー…!!」

「…くそがアアア!!」

咆哮を上げるグリムジョーを見遣りながら、ルピは残る七本の触手全てを持ち上げる。

この構えは現世で冬獅郎を一時退場させたものと同様。

対象目掛けて触手を突進させ、攻撃する。 ランサ、テンタクル 蝕 槍。その上位技である。

ハウラ、テンタクル 蝕 檻。

本来なら八本全てを使用する為、やや攻撃力が落ちている。

だがこの場に於いては少々異なっていた。

持ち上げられた触手の先端全てに棘——「鉄の処女」が発動されていたのだ。

これはルピの持つ手の内の中でも一番のとおきであり奥の手。

凄まじい殺傷力を持つがその反面、一点に攻撃を集中させるが故に、触手自体も傷付けてしまう——最悪長い期間再起不能まで陥ってしまう程の損傷を与えてしまうデ

メリツトも持つている。

正に一度きりの必殺技であり、諸刃の剣でもあつた。

「穴だらけになつちやえ——」  
「エヘクシオン串刺貴公子」

次の瞬間、七本の触手がグリムジョーを檻の様に囲いながら、一斉に襲い掛かる。柔らかいものを突き刺す不快な音が連続して響き渡り、大量の鮮血が舞った。

## 第三十四話 三日月と虚無と、鳶嬢と豹王と…

ルピとグリムジョーが激戦を繰り広げている最中、ノイトラとウルキオラは治療室の隅の壁際に並んで立って居た。

理由は織姫に関する事だ。

今の彼女は高校の制服を身に付けている。

虚夜宮の一員となった今、そのままの格好では相応しく無い。

その為、織姫専用に着束を手配する事となったのだが、とある問題が浮上した。

身長や肩幅といった、基本的な部分が適合する物は在庫にも幾つかある。

だがどれを試着させてみても合わなかったのだ。

理由は——その豊満なバストである。

如何せん、虚夜宮には女の破面が少ない。

故に現存する在庫の種類にも限りがあり、加えて織姫並のバストを持つ者もほぼ居な

いとすれば言わずもがな。

厳密に言えば、匹敵する者は二人だけ居る。

セフィーロにハリベルだ。

ならばこの二人の白装束を転用、加工調整すれば良いのでは、と思うだろう。だが其処にも問題があった。

まずセフイーロ。彼女の白装束の場合、医者等が着用する白衣の様なデザインで全て統一されている。

織姫が正式に治療室に配属されたとなればそれでも良いのだろうが、生憎とそうでは無い。

藍染の傘下に入ったばかりの初期の頃であれば、通常のタイプも使用していたのだが。

次にハリベルだが、ある意味彼女の場合が一番ネックだったりする。

取り敢えず一言で言えば——露出が過ぎるのだ。

ハリベルとしては、服と言うのは所詮飾りに過ぎないという認識だ。破面には鋼皮という鎧があるのだから、幾ら肌を晒そうが如何という事は無いと。

他にも彼女自身が所有している能力の特性上、水に濡れても大丈夫な様に——という事情もあつたりする。

確かに十分に水を吸った衣服というのは、思った以上に装着者の動き等を阻害、邪魔をする。

そう考えると、寧ろ理由としては後者の方が主なのだろう。

例え周囲から卑猥な眼で見られ様とも一切気に留めず、常に毅然とした佇まいを崩さない彼女らしい思考だ。

だが織姫までもそれが出来るかと聞かれれば——首を横に振らざるを得ない。代用として考えれば、セフィーロの物でも大丈夫だろう。

だが今後も着用が義務付けられるとなると、そもいかなのが現実。

どちらも修正を加えれば改善されるのだが、其処までするならば初めからオーダーメイドで作った方が良いだろうという結論へ至った。

織姫は現在、治療室の隅にある作業場に居る。要尺計算に必要なボディサイズの計測の為だ。

彼女と共に居るのは、チルツチ、セフィーロ、ロカの三人。

チルツチは強制的に補助としてメモ係を、任せた本人であるセフィーロは計測を、ロカは設計に制作を担当している形だ。

当然周囲には囲いがあり、外からは見えない様になっている。

「ひゃわあ!! ど、どこ触ってるのセフィーロさあん!!?」

「何処って…一番重要なおっぱいですよ〜? サイズの他にも弾力とかその他諸々ナニやらかにやら測らないと、ちゃんとした物が作れないですからね〜」

作業場の奥から響き渡る、織姫の悲鳴。

実は測定が始まってからずっとこうなのだ。

会話の内容を聞けば大体解るだろう。只単にセフィーロがちよつかいを出しているだけだ。

だが騒がしさの反面、その雰囲気は非常に和やか。

織姫もそれ程嫌がっている訳でも無さそうだ。

何せ彼女のクラスメートには同じ様なノリを持つ——“万年発情猫”と呼ばれる生粋のレスビアンたる本匠ほんしょう千鶴ちづるという者が居り、常日頃から性的なスキンシップを受けていたりする。

その影響なのか、セフィーロの行う悪戯程度は慣れっこなのだろう。

「は〜い、次はお尻ですよお〜。おパンツ脱ぎましょうね〜」

「えええ!! それぐらい自分で脱げる……ってひゃああああ!! 驚掴みにしないでえ〜

!!!」

「うえへへへ、ええモン持ってますなあ〜」

「……いい加減にしろこの淫乱女!! 作業が進まねえんだよ!!」

終いには怪しい笑い声を漏らし始めるセフィーロ。台詞だけ見れば完全にエロ親父である。

悪戯の内容も段々悪化している様だし、如何やら悪乗りしているらしい。流石にチルツチも拙いと感じたのか、怒声を上げて止めに入っている。

「…何やってんだアイツは」

ノイトラは額に右手を当てながらツツコんだ。

まさかこんな状況になるとは、と。

女三人寄れば姦しいとは良く聞くが、実際に騒がしくしているのは二人のみ。

というか、その内一人であるセフィーロが大人しくなれば全て収まるのが現状である。

だがノイトラとしては、織姫を好き放題弄繰り回す彼女の心情は解らなくも無かった。

セフィーロ・テレサというのは色々と秘密の多い破面だ。

それこそ、付き合いの長い口カや、好意を向けているノイトラにさえ、全てを曝け出

している訳では無い。

本人の事情としてはそうせざるを得ないのだろう。事実、セフィーロは以前その二人に対し、自身の抱える事情を話せない事を神妙な面持ちで謝罪している。

だがそれは即ち、セフィーロは親しい仲間内にすら常に気を遣いつつ接しているという事に他ならない。

実はこれ、人によっては結構な精神的負担となる。

憑依前は明らかに訳ありな背景を持つ自分に対し、色々と良くしてくれる恩師や職場の同僚達に負い目を感じながら生活していたノイトラには、その辛さが痛い程良く解つた。

真面目に学校を卒業した上でこの職場に就職し、毎日汗水垂らして仕事をしている彼等と比べ、自分は如何だ。御情けに近い形で拾って貰った上に、仕事のみならずプライベートでも面倒を掛けるとは、何と情けない事かと。

他にも手段はあつた筈なのに、良く考えずに一人で暴走し、半ば自業自得の形で高校を退学。目的である「彼女」は救えたものの、逆にその精神へ罪悪感を植え付けたまま去る事となつてしまった。

ある意味、悪い結果となつた感じが否めない終わり方である。

この結末から、大凡は理解出来るだろう。これ等一連の行動は、正義という崇高な思

いが切つ掛けとなつてゐる訳では決して無いと。

それは周囲の事など考慮しない、極めて傍迷惑な感情——自己満足。

助けられた相手の気持ちなど知つた事か。トラウマにさえならなければ問題無い。自分の事など気にせず、黙つて助けられていれば良いのだと。

実際、今のノイトラは後悔の念を持つておらず、それどころか自己犠牲の齋す甘美な感覚が忘れられずに残つてゐる。

正しくそれは陶醉。史実のノイトラも、最強や死に様云々の願望の他、上位の戦いによつて齋されるそれを欲していたが、憑依後の彼はある意味それ以上にタチが悪いと言えた。

こんな考えや感性を持つ馬鹿野郎を気に掛け、普通に接してくれる存在。それを有難く思うと同時に、申し訳無いと感じていたのを、ノイトラは覚えてゐる。

他の部分では目を見張る程の切り替えの早さを持つ癖に、人付き合いに関しては何故かこうなつてしまふのだ。

——所詮は御人好し特有の考え過ぎの一種。

そう気にせず割り切れば良い部分なのだろうが、それが出来無いのが性分であつた。

ノイトラは考える。

きつとセフィーロも過去の自分に近い辛さを抱えている事だろう。

心労が溜まる一方、その事情故に発散も出来無いジレンマ。

そんな時に現れた織姫。

一護と同様に敵であろうとも非情になれず、救いの手を差し伸べたりする甘さも目立つが、自分が戦いに向かないと理解していても、何とかして戦いたいと願う勇気を併せ持つ強い心の持ち主。

包容力も高く、誰であろうとも分け隔て無く接し、自然と心を開かせてしまう不思議な魅力も持っている。

そしてこれも重要なのだが——少々天然の入った弄られキャラであり、女性であるという事。

セフイーロの事だ。取り敢えず真っ先に弄りという形で絡むだろう。もし自分が彼女であれば確実にそうしていると、ノイトラは断言する。

実質、自分のストレス解消に利用するという身勝手な行動ではある。だが一応織姫自身にも緊張を解すという効果もある為、片方だけが得する訳では無い。

「ま、別に良いか」

——今回は見逃してやるとしよう。

騒がしいだけで、実害は無い様だし。

内心でそう考えたノイトラは、其処で思考を止めた。

「…止めないのか？」

何処か吹っ切れた様にして顔を上げるノイトラに対し、隣のウルキオラが不意に問い掛ける。

「セフ<sup>ア</sup>イーロも馬鹿じゃねえ。限度は弁えてるさ」

「…そうか」

「あの御姫サマも内心楽しんでるみてえだしな」

そう言うと、ノイトラは背後の壁に背中を預けた。

後頭部に両手を回し、完全にリラックスした体勢へと移行する。

「つーかコレ、俺達要らなかつたんじゃねえか？」

「…必要性を感じなくとも、それが俺達の義務だろう」

「やっぱそうだよなあ……」

良く考えてみると、この織姫専用の白装束作成は特に重要性が高い用件では無い。

だが一応彼女は藍染が気に掛ける程の重要人物である。

故に案内と護衛の意味も含め、世話役であるウルキオラとノイトラは治療室まで付き添ったのだが——こうして待ち惚けを食らう羽目になっている訳だ。

「……一つ聞かせろ、ノイトラ」

「あ?」

暫しの間会話が途切れるが、またしてもウルキオラが口を開く。

先程から意識の半分が別方向へ向いていたノイトラは、顔を反射的に振り向かせた。

だがその直後、彼の意識は完全に元通りになる事となる。

「心ッとは——何だ?」

「っ!?!」

想定外過ぎるその問い掛けの内容に、ノイトラは瞠目した。

——何故に今のタイミングでそれを聞く。

しかもその相手を間違えているのではないかと、即座に内心でツツコみを入れる。

本来、ウルキオラが人の持つ心に興味を抱くのはもつと先の筈だ。

織姫との交流、そして一護との戦いを通し、その在り方に疑問を抱き始め、やがてそれは関心から興味へと変化する。

にも拘らず、こうして既に変化の兆しが見えているというのは如何いう訳か。

ノイトラは混乱する。

ウルキオラとしては特に含みも無い、純粹な疑問を問い掛けた心算だった。

以前までの自分自身の在り方を根本的に改善してみせただけで無く、直接確認せずとも井上織姫の心情を察せるのだ。

ノイトラならこれの意味が解っているのではないかと。

「…藍染様には？」

「過去に伺った事もあるが、明確には答えて下さらなかった」

「だからって俺に聞くかよ…」

ノイトラは溜息を吐く。

もしかしなくとも、この面倒事の切っ掛けを作ったのは藍染らしい。

——あの爽やか成分ゼロの胡散臭さマックス腹黒ヨ○様め。

さり気に内心で罵倒しつつ、ノイトラは質問に対して如何返すべきかを考える。

——その答えは他ならぬ君の中にあるんだぜ。

却下。こんな歯が浮く様な台詞、想像しただけでも寒気がする。

——心とは、この掌にある。

これも却下。ウルキオラが散り際に零した、尋常ならざる重さを持った言葉だ。言ったら言ったで、間違い無く自分が許せなくなる。

今迄以上の最高速度で思考を巡らせ続けるノイトラ。

だが結局これだと言える答えは見付からず——最終的に自分の持論を展開する事に決めた。

「ウルキオラ」

「？」

「デメエは自分が中身が無え空っぽな存在だと思ってるだろ」

不意にノイトラは質問を質問で返した。

ウルキオラはそれに首を傾げながら、無言でそれを肯定する。

「“虚無”…か。見てくれは確かにそうだ」

「…？」

「けど俺から言わせてみりゃ、今のテメエはそうは見えねえんだよな…」

横目で視線を送りながら、ノイトラは意味深にそう呟いた。

しかも一向に質問の答えを返そうとしない。

——解せない。

痺れを切らしたウルキオラは、続きを催促する。

「…どういう意味だ」

「要するに、本質が欠けた存在である筈の虚無<sup>テメエ</sup>が、何で心つてモンを知りたがって——

否、求めてんのかって事だ」

「!!」

ウルキオラは瞠目した。

言われてみれば確かにそうだと、今更ながらに気付く。

無駄であり不要と切り捨てた筈のものを、何故自分は知りたがっているのか。

喜怒哀楽等の感情は、一応理屈では理解している。

プラス方向のそれを持っていれば本人のモチベーションは上がるだろうし、逆であれば下がる。そしてそれは結果にも繋がるだろう。

だがウルキオラは今迄そういったものを明確に感じた事が無い。

藍染の命令に従わず、自分勝手に行動するヤミーやグリム、ジヨーに対して愚かだと思っても、苛立ちまでは覚えなかったのが良い例だ。

「俺だって確かな答えは持つちやいねえ。けどな」

「……………」

「そうやって何かを追い求めて悩んでるつつー事は、テメエにも心があるっていう証明なんじゃねえかと俺は思う」

心を持たないのなら、それを知りたがる筈が無い。

僅かな疑問も興味も抱く事無く、そんなものは無駄であり不要だと切り捨てて終わ

り。

言わばウルキオラは生まれながらに欠陥を抱えているに等しい状態なのだ。故に欠如したそれを自覚した今、無自覚ながら補わんと行動しているのだろう。それがノイトラの考えだった。

「心つてのは見て触れる代物じゃ無え。感じるモンだ。テメエにも似た様な経験があつたんじゃねえか？」

「……………」

その言葉でウルキオラが思い出したのは、一匹の大虚だった頃の自分。

僅かな光も差さぬ漆黒の闇の世界を当ても無く彷徨い続け、やがて辿り着いた白色の木々が生い茂る森の中。

一人孤独にその場へ身を沈めながら感じた、自我さえ周囲の靈子へ溶け込んで消えてゆく様な不思議な感覚。

——それを幸福と感じていた自分を。

「俺にも…あるのか？」

「あくまで俺個人としての意見だ。あんま真に受けねえで参考程度にしとけ」

人間が持ち得るものとは色々異なる部分があれば、それも一つの心の在り方だとも言うのだろうか。

ウルキオラは思考する。

何時もは人形の如き無機質な瞳。それに戸惑いらしきものが浮かんでいたのを、ノイトラは見逃さなかった。

「それに無駄か如何かってのは、理解してから初めて判断しろ。今はそれしか言えねえ」  
「…そうか」

其処まで言ったところで、ノイトラは口を閉じた。

これ以上は説明すべきでは無いとして。

別に此処で心の在り方を説明しても良かった。

だがそれは同時に今後に余計な変化を齎してしまう可能性がある。

それだけは避けたかった。

——いい加減に自重せねば。

既に手遅れとも思えるのだが、ノイトラは改めてそう誓った。

「ノイトラ」

「ん？」

二人の会話が済んだ直後、ノイトラへ声が掛かった。

セファイロの助手をしていた筈のチルツチだ。

その手にはメモ用紙等も何も無い手ぶらな状態。如何やら計測については完了したらしい。

織姫の悲鳴も止んでいる事から、それは確かな様だ。

「あの淫乱女からの伝言よ。私達の事は気にせず、様子を見に行つて良いですよ」  
「だつて」

「っ!!」

伝言に対し、思わず息を呑んだ様子を見せるノイトラに、チルツチは頭を傾げた。

実を言うとノイトラは織姫の付き添いの開始より、別のものへと意識を向けている部

分があつた。

それこそ、ウルキオラの問い掛けの直前の様に。

それはルピとグリムジョーの戦いだ。

しかも気に掛けるレベルも相当。その証拠に、治療室に入つて以降、絶えず探查神経を発動させていたりする。

だが何故か戦いの様子を観測している者達以外の霊圧は感知出来無かつた。

恐らく観覧席の保護の為、戦場全体を覆う様にして結界か何かを張つてでもいるのだろう。

それ故に戦況が全く読み取れず、ノイトラは内心では少々焦つていた。

何せ彼は戦いの前夜、変に期待を持たせる様なアドバイスを与え、ルピを焚き付けている。

結果は見え切つているとは言え、バタフライ効果というものもある。ふとした拍子で番狂わせが起こる可能性も完全には否定出来無い。

もしもルピがグリムジョーを降し、第6十刃の階級が変化しなかつた場合、如何なるのか。

取り敢えず物語が完全に崩壊してしまうのは確実。

予測も対策も不可能。ノイトラ達の行動内容も済し崩し的に行き当たりばつたりに

せざるを得なくなり、掲げた目的達成がほぼ困難という詰みに等しい状態となってしまう。

だが敗れたとしても、グリムジョーが生きてさえいれば、まだ可能性はある。

取り敢えず彼の性格上、階級が十刃落ちのままであろうとも、史実通りに必ず一護に戦いを挑むだろう。その程度の予測は容易だ。

十刃と十刃落ち、どちらが行動の自由度が高いかと言えば後者である。

あのグリムジョーの事だ。下手に縛りを無くしてしまえば、それはもう好き放題に暴れ回る可能性が高い。

一護達が虚圏へ侵入した直後に藍染が開催した、御茶会という名の対策会議への参加義務も無い為、下手すれば霊圧を感知したと同時に攻撃し、ドルドーニとの初戦すらぶつ飛ばして交戦に入りそうだ。

流星の一護も、グリムジョーが相手となれば力の出し洩りなどはせず、虚化も解禁するだろう。

問題は其処からだ。

既に虚化の完全習得が済んでいる彼であれば、現状での勝敗の割合は恐らく五分。だが不安要素がある。それは織姫という勝利の女神の存在の有無だ。

史実でも、中盤まではグリムジョーと互角の戦いを繰り広げ、やがて劣勢へと陥った

瞬間、彼女の声援により奮起。繰り出された攻撃を視認せぬまま受け止めると、そのまま見事な反撃を見せる。

その後も熱く燃え滾った心を胸に、グリムジョーの放つ最強の技を打ち砕き、勝利した。

だがその勝利の切っ掛けとなった織姫が不在となれば、勝利がどちらに転ぶか判らない。

そしてもう一つ問題なのが、一護の仲間達だ。

一護がグリムジョーと交戦に入った直後、援護に入ろうとするのか、それともこの場は任せて其々個別に行動するのか。

彼等の行動によっては未来ががらりと変わってしまう。

グリムジョーはその戦闘スタイルや帰刃形態から勘違いされがちだが、一対一のみならず一対多の戦いにも慣れている。

大虚時代、シャウロン達と出会う前まではずっと一人で行動していたのもあるだろう。

しかもグリムジョーは常にコソコソと逃げ隠れする弱者の様な真似を嫌う。

それ故に堂々と表を歩き彷徨っていれば、他の大虚と出会う確率も跳ね上がるというもの。

大抵は単体だが、稀に集団で襲い掛かってくる大虚も居た。

それを尽く打倒して喰らい、その数に比例して強さも上がり続けた結果——今のグリムジョーがある。

例えば数人掛かりで戦いを挑んだとしても、寧ろ消耗する者が増えるだけで終わりそう  
だ。

一応彼等も史実では他の十刃とも対峙し、ボロボロになりながらも何とか打倒する。  
だがグリムジョーはその中でも更に上。やはり相手は一護以外には務まらないだろ  
う。

そういった考えもあつて、ノイトラは探査神経が効かない今、何とか早目に抜け出し  
て直接戦況を確認したいとうズウズウズしていたのだ。

それを察してくれたセフィーロの厚意に対し、ノイトラは驚愕すると同時に内心で感  
謝した。

「…ウルキオラ」

「何だ」

「後は任せても良いか」

「…別に構わん」

楽な姿勢を崩し、視線を何処か明後日の方向へ向けながら、ノイトラはウルキオラへ問い掛ける。

了承の返答を聞くや否や、即座にその場から踵を返した。

「悪いな」

そう呟きつつ向かった先は、治療室の出入り口。

早足だった御蔭か、瞬く間に其処まで到着したノイトラは、扉に手を掛ける。

通路に出て、扉を閉めた途端——響転で即座に移動を開始した。

直撃の直後、触手の先に感じた手応えに、ルピは安堵した。

——これで、本当に終わりだ。

と言うか、そうであつてくれなければ困る。

何せ此方にはもう打つ手が無いのだから。

先程使用したルピの奥の手——“串刺貴公子”。

“触檻”に“鉄の処女”を合わせただけの単純な内容の技ではあるが、その威力は必殺技と言つても申し分無い。

だが余りのデメリツトの大きさ故に、今迄一度も使用した事が無かつた。

拳同士をぶつけ合うのとは訳が違う。言わばその手の内に爆弾を握つた状態を想像してみれば解り易いか。

当然、衝突と同時に爆発。両手は木端微塵になるだろう。

“串刺貴公子”もそれと同義だ。

“鉄の処女”の際に生える棘は、触手の先端よりも硬度が高い。

棘同士が衝突しても相討ちになるが、棘と触手であれば結果を見るまでも無い。

今回の場合、触手の一本をグリムジョーの拘束に使用していた為、それについては確実に駄目になる。

一点に集中して突き出した残り七本についても、棘は殆どが折れるか砕けるかするだ

ろうし、全ての触手も同士討ちによって蜂の巣か檻樓雑巾と化している筈だ。

一応、攻撃手段は残ってはいる。とは言っても、薙ぎ払いやその程度だが。

やはりそれだけでは余りに心許無い。

基本的にルピの攻撃は鞭打であり、総じて打撃系に分類される。

他の斬撃や銃撃といった系統と比較すれば、やはり根本的に殺傷力が劣るのだ。

それを補っていたのが鉄の処女であつたのだが——つい先程、それを失つてしまつた。

つまり今のルピは相手を追い詰める事は出来ても、仕留める事は出来無い状態に等しい。

「さて、と」

七本の触手の先の光景は、砂煙によって覆い隠されている。

だが視認可能な範囲に飛び散つた血痕から、直撃したのは確実。

グリムジョーが本気を出す前に終わらせてしまった事に、やや申し訳無い気もするが、これも戦いだ。

油断慢心していた方が悪いと諦めて貰おう。

視認は不可能と判断したルピは、其処で初めて探查神経を発動。グリムジョーの霊圧を探った——その時だった。

「なっ!!?」

砂煙の中から何か巨大なものが、ルピを目掛けて飛び出して来たのだ。

咄嗟に右手を横に振るい、それを叩き落とす。

だがその叩き落としたものを見て驚愕した。

見間違える訳が無い。それはルピの触手の一部——先端から三・四メートル程度が切断されたものだった。

しかもそれはグリムジョーの拘束に使用していたもの。棘の生えていない先端部が何よりの証拠だ。

だが着目すべき点は——切断された触手に損傷が少なかった事だ。

通常、グリムジョーをあのまま拘束していれば、彼毎七本の触手の刺突を受けている筈である。

にも拘らずこの現状。つまり導き出される結論は一つ。

——グリムジョーは直前に拘束から抜け出し、“串刺貴公子”の直撃を避けてい

る。

「う……そ……」

ルピは震える声でそう零す。

慌てて触手を全て引き戻すと、血の気が引いた。

確かにグリムジョーのものらしき血痕は付いている。

七本中「一本のみ」に。

他は触手自身の損傷による出血だけだ。

「やってくれたな、てめえ……!!!」

砂煙が晴れると同時に聞こえて来る、激しい怒気を孕んだ声。

全身を真っ赤に染め上げ、特に両腕に無数の深い裂傷を負ったグリムジョーは、凄絶な殺気を放っていた。

虚化状態の一護と対峙した時と大差無い、その血塗れの外見。明らかな満身創痍だ。

だが所詮は見た目の話。恐らくそれは判断材料にすらになり得ない。

手負いの獣が恐れられる所以は、追い詰められたが故に見せるその決死の覚悟にある。謂わば殺られる前に殺つてやるといふやつだ。

グリムジョーの場合、手負いの獣とは少々異なるのだが、どちらにせよ想像を遥かに超える動きをしても何らおかしく無い。

「なんだよ…それ…」

「あア… “コレ” か？」

ルピの視線を辿つたグリムジョーは、得心が行つた様で徐に右手を持ち上げる。

その手は黒色の霊圧に覆われ、まるで猛獣の如き鋭利な爪を模つていた。

「なんだか知らねえが、急に出来るようになってなア…」

——結構便利だぜ。

グリムジョーはそう言うと、横の地面へ向けてその右手を振るう。

次の瞬間、その地面に刻まれる、巨大な五つの爪痕。

まるで巨大な龍が引つ掻いたのかと錯覚を覚える程に、その威力は凄まじい。

「それでボクの触手を…!!」

「そのとーり」

獯猛な笑みを浮かべながら、グリムジョーは肯定する。

あの時、グリムジョーはその右手の爪で触手を切断し、一旦拘束から逃れた。

其処までは良かったものの、周囲は既に触手へ取り囲まれており、直撃寸前。

避けるのはもはや不可能。右手の爪で乗り切るにしても、振り被っている内に直撃を受けてしまう。

かと言って防御しても、未解放の状態では防ぎ切れる訳が無い。そして帰刃するにしても解号の為の時間が足りない。

そしてグリムジョーが取った手段は——七本の触手の内一本に突っ込む事だった。

直撃は確定している。だがその数を減らす事は出来る。それがこの選択だった。

当然、そのまま突っ込んで致命傷は必至。故に地面を蹴ると同時に、触手目掛けて右手を小さく振るい、急所に直撃し得るであろう棘を予め破壊。

両腕の負傷が特に酷いのは、その際に盾にしたからだ。

「ついでに爪を色々試そうかと思っただが…止めだ」

グリムジョーは右手の爪を解除すると、斬魄刀の柄に手を添えた。

「てめえは帰刃で殺してやる」

「っ!!」

ルピは咄嗟にそれを阻止せんと飛び出すが、既に手遅れ。  
グリムジョーは抜刀し、その刀身に爪を立てていた。

「軋れ——豹王<sup>バンテラ</sup>!!」

刀身を引つ掻くようにして、解号を唱える。

霊圧が倍以上に膨れ上がり、直後に爆散。

それは余波となってルピに襲い掛かる。

「く…そッ!!」

余波に弾き返され、空中で体勢を整えながら着地したルピは思った。

——最悪の状況だ。

仕留め切れなかった上に、帰刃まで許す。しかも新技を編み出しているときた。

冗談にしても笑えない。

あれだけの事をしたのだ。もはや油断や慢心など欠片も持ち合わせていないだろう。今のグリムジョーにあるのは、相手を完全に仕留める意志のみ。

新技の試しより、帰刃を選択したのが何よりの証明だ。

「——諦め切れるかっての…!!!」

ルピは両手を前に突き出し、その周囲を囲む様に触手を移動させる。

当然、そのボロボロの先端からは夥しい血が流れ出る。

だが寧ろそれが目的だ。

その血液を掬って自身の霊圧を籠め、それをインクに見立てて宙に円を描く。

視界の先には、帰刃形態と化したグリムジョーが、体勢を低くして此方を睨み付けていた。

並みの破面の鋼皮すら容易く食千切るであろう鋭い牙。猛獣の鬣を思わせる、何処か風格を感じる長髪。獣人を思わせるその尖った耳。

全身を覆う鎧に、両腕に反り立つ複数の刃。脚部も豹のそれに酷似しており、背後では長い尻尾が揺れ動いている。

——まさかこれ程とは。

ルピは思わず膝が震えた。

だが引く訳にはいかない。でなければ自分を応援してくれたノイトラに顔向けも出来ない上、御礼も言えないではないかと。

そう奮い立たせ、あらん限りの力で地面を踏み締める。

「へエ…まだ足掻くかよ」

ルピが何かしようとしているのを見たグリムジョーは、口元を吊り上げた。

恐らく次に放たれるであろう一手はルピの全身全霊が籠められたもの。

ならばそれを完膚無きにまで打ち碎けば、格の違いを解らせるには十分だろう。

——グリムジョー・ジャガージャックは、ルピ・アンテノールよりも強いと。

「いいぜ、受けて立ってやる…!!!」

グリムジョーは両手を下に向けると、その漆黒の爪に青色の霊圧を籠める。

折角だ。相手が全力を出すのなら、此方も最強の技を見せてやると意気込んで。

そうとは知らないルピは、文字通りこの一撃に全てを賭ける覚悟で、全身から霊圧を絞り出す。

血液を使用している時点で直ぐに気付くだろう。

ルピが放とうとしているのは、十刃のみに許された最強の虚閃。

本来であればその桁違いな威力故に、虚夜宮の天蓋の下では使用が禁じられている筈なのだが、戦いの様子を眺めている藍染は一言も発さず、何時も通りの笑みを浮かべているだけだ。

「くた…ばれ…グリムジョー!!!」

顔に大量の汗を流しながら、ルピは叫んだ。

真正正銘の全力。これを放てば、もはや普通に立っている事もままならないだろう。

だがそれでも関係無い。どちらにせよ後が無いのだから。

接近戦は不可能。触手の件もあるが、何より帰刃形態のグリムジョーと渡り合える訳が無い。

序盤の様な堅実な戦いも、恐らく許さないだろう。寧ろそれをする暇も無く潰される未来しか見えない。

何をしてでも無駄なら、一撃に全てを籠めてぶつける方がマシだ。グリムジョーもそれを選択した様だし、丁度良い。

「グラン・レイ・ゼロ王虚の閃光」 オオオ!!!」

通常の虚閃とは比較にならない程の極大の光線が、ルピの両手より放たれた。

十刃であれば未解放時にも使用出来るが、帰刃形態で放つそれは更に上に行く。

光線はそのままグリムジョー目掛けて直進する。

だが彼は一切動じない。

下げていた両手の爪に、更に霊圧を籠める。

次の瞬間、爪全体を覆う青色の霊圧が大きく膨張したかと思うと、其々に五本の巨大な青の刃が浮かび上がった。

「<sup>デスガロン</sup>豹王の爪」

迫り来る光線目掛け、グリムジョーの左腕が振るわれる。

それに引つ張られる様にして、五本の青の刃も同時に。

衝突する白と青。

勝ったのは——後者。

「なっ!!?」

極大の光線を容易に斬り裂き、青色の刃は勢いを殺さぬまま直進。

その先に居るルピへ襲い掛かった。

ルピは咄嗟に回避動作を取らんとするが——動けなかった。

まあ当然だろう。後の事など一切考えず、全力を籠めた一撃を放ったのだ。寧ろ立って居るだけで上出来と言えた。

辛うじて全ての触手と両腕を防御に回す程度は出来たが、無意味。青色の刃は容易くそれを通過した。

小柄な分、ルピへの直撃範囲にある刃は二つのみ。

一つはルピの両脚を通過。残りは両腕に守られた胴目掛けて直進する。

「あ…」

気付けばルピの身体は宙を舞っていた。

彼の膝から下は無く、両腕も上腕から途中が何処にも見当たらない。

地面へ落下しながら、ルピはふと視界を観覧席の入口へと向けた。

其処には目を見開いたまま扉の前で硬直しているノイトラの姿があった。

「…来て……くれたんだア…」

息も絶え絶えながら、喜色を含んだ声でそう零すルピ。

そんな彼に覆い被さる影。

その上空には、残る青色の刃を持つ右腕を大きく振り被ったグリムジョー。

「あばよ元6番!!!」

振り下ろされる死の刃。  
迫り来るそれを余所に、ルピはノイトラへ視線を向けたまま、小さく呟く。

「あり……がと……」

視界を埋め尽くす青。

次の瞬間、ルピの意識は永久に閉ざされた。

## 第三十五話 三日月と豹王と忠犬と…

第6の遊撃の間へ到着する前、ノイトラには自身の中で激しく闘ぎ合う二つの意志があつた。

——折角アドバイスもした上、本人もやる気を出したのだから、是非ともルピに勝利して貰いたい。

——史実の通り、グリムジョーが第6十刃へと返り咲いてほしい。

そんな矛盾に満ちた、互いに相反するものを。

当然、割合で言えば後者の方が圧倒的に上だ。

ノイトラの目的達成の可能性を上げる為には、グリムジョーの勝利は必須。

間違つてもルピが勝利するなぞあつてはならないのだ。

それにも拘らず、前者の意志は消える事無く、ノイトラの中へ居座り続けていた。

理由は簡単。捨てられなかったからだ。他ならぬその意志を持つている本人自身が。

——取り敢えず、予想はしていた。

ノイトラはもはや戸惑う様子も、ツツコむ気力も失せていた。または開き直つているとも言う。

人の性格というのはそう易々と変えられないし、変わらない。

ならば今はそれにグダグダと文句を垂れ続けるのでは無く、上手く付き合っていく方が余程建設的だ。

そう考え、生まれた結論が——— 今後は自身の御人好しの部分にある程度織り交ぜつつ、目的達成の為に動くという簡単なもの。

ノイトラとしては、以前グリムジョーからルピを無意識の内に助けたのは、今迄自分を抑え過ぎた反動なのではないかと考えていた。

普段は優しく大人しい人でも、ストレスを溜め過ぎれば何時かは爆発するのと同じだ。

ならば普段からある程度発散させて置けば問題無いとして。

無論、史実の流れに大きな変化を齎す様な真似は避ける心算だ。

余程の事で無い限りはそうそう変化は出ないとは思うが、油断は禁物。

「ホント…都合良過ぎる頭してんな」

この階級争奪戦に於いて、開き直った状態のノイトラにとっての一番の理想。

それはグリムジョーが勝利を収め、且つその上でルピが生き残る事である。

だがその可能性は極めて低い。寧ろほぼゼロに等しい。

それでもノイトラは願う事にした。

今迄悪い方向の可能性ばかりを考えていたのだ。この辺で少しぐらい良い方向に方向転換しても良いでは無いかと。

「…っ、何だ？」

次の瞬間、ノイトラは妙な胸騒ぎを感じた。

それは会場に近づくに比例して、段々と大きくなつて行く。

ノイトラは逸る気持ちを抑えながらも、足に力を籠めた。

五本の青色の刃の直撃。やはり小柄なせい、全てが命中する事は無かった様だが、ルピを絶命させるには十分だった。

その身は肩から上、胴体、下腹部から下。見るも無残な三つのパーツへと分断された彼を目の当たりにしたノイトラは、その場から動く事が出来無かった。

脳裏を過るのは、直前に見せたルピの表情と、口の動き。

——あの心底安堵した様な顔は何だ。

——こんな状況に持ち込んだ張本人である自分に対し、あろう事か御礼を述べるなど如何いう訳だ。

落下して行くルピだったものを視線で追い続けながら、ふとそんな疑問を抱いた。だがそれに対する答えは、もはや何処からも得られない。

「…ク…」

やがてそれは嫌な音を立てて地面に落下する。

ノイトラと同じくそれを眺めていたグリムジョーの口元が歪んだ。

「はははははははははは!!」

直後、彼は上体をやや後ろに仰け反らせると、盛大に笑い声を上げ始めた。それは勝ち鬨を意味しているのか、それともルピの弱さに対する嘲笑か。

「わかったか!! こいつが俺の力だ!!!」

実際はどちらでも無い。

自身が完全に力を取り戻した事。それを証明出来た事による純粋な歓喜。

「そしてこの俺がN<sup>セ</sup>O<sup>スタ</sup>6だ!! 第6十刃、グリムジョー・ジャガージャックだ!!!」

声高らかに宣言しながら、グリムジョーは徐に右手を下に向ける。

その先には、地面に転がるルピの亡骸が。

その掌に青色の霊圧が収束している事から、何をしようとしているのかは明白。

完全に仕留めただけで済まさず、その亡骸すら跡形も無く消し飛ばそうとしているのだ。

正に無慈悲。血も涙も無い所業。

流石のハリベルも目に余ったらしく、その金色の眉を顰めた。

常に戦場へ身を置く戦士であれば、生き死にに關しては割り切るべきだとは彼女自身も考えている。

だが死体殴り、またはそれと大差無い行いは別だ。敵とは言え、その死体を傷付けるといふのが如何なる意味を持つのかなぞ、ある程度の良識を持つ者であれば直ぐに理解出来るだろう。

グリムジョーの場合、放とうとしているのは十中八九虚閃だろう。

恐らく、その一撃でルピだったものは確実に全て消し飛ぶ。

その事を考慮するに、未だマシな方なのかもしれないが。

「ま、雑魚にしては結構楽しめたぜ」

グリムジョーは初め、ここまで無慈悲な真似をする気は無かった。

気が変わったのはつい先程。死に際にルピが向けた視線の先を辿った直後——ノイトラの存在に気付いてからだ。

只単に自分の持つ力、完全勝利を収める様を見せ付けて愉悦に浸りたい訳では無い。

今のグリムジョーは、油断慢心の一切を捨てている。そんな小物的思考は欠片も存在

していない。

「…見てやがれノイトラ」

これは自分と敵対した者が如何なる結末を迎えるのか、その証明。そして宣戦布告だ。

——いずれはお前もこうしてやる。

グリムジョーは言外にそう宣言しているのだ。

幾重もの感情が複雑に入り混じり、集中力に欠いた状態であるノイトラでも、それは十分に理解出来た。

グリムジョーの中でターゲットに認定されているのは、大まかに言えば三人。

まずは一護。次にノイトラ。そして最後に藍染だ。

今この場に於いて、それに該当する人物は二名。

グリムジョーとしては、特にノイトラに対してのアピールが主であり、藍染は含まれていなかった。

それはそうだ。彼とて馬鹿では無い。流石に現状のまま藍染に喧嘩を売る様な真似をする訳が無い。

一護との因縁にケリを付けた後、護廷十三隊の死神達を根絶やしにする。その後は自身の力を磨き上げ、ノイトラを降す。

そしてやがては——藍染を玉座から引き摺り下ろす。

上位十刃は如何でも良い。向かって来るなら敵として対処し、来ないのなら無視を決め込むだけ。

何にせよ、グリムジョーにとって、己の道を阻みさえしなければ、それ等全ての存在は道端の石ころ程度の印象でしかないのだ。

霊圧の集束を終えたグリムジョーは、横目で観覧席を見遣る。

その方向にはノイトラ。彼はグリムジョーとほぼ同時のタイミングで、下に向けていた視線を上に向けた。

「黒崎の次は、てめえの番だつてなア……!!」

二人の視線が交差すると、グリムジョーの顔に凶暴な笑みが浮かぶ。

直後、掌から青色の閃光が放たれる。

未解放時とは一線を画す威力もつそれは、ルピの亡骸を一瞬で粉々にしただけで終わらず、戦場一帯に凄まじい衝撃波を巻き起こした。

「……………」

ノイトラの表情は、到着直後に見せた驚愕から一転、無へと変化。

その眼前に広がる砂塵は、グリムジョーを完全に覆い隠している。

視界が晴れるのを待つのかと思いきや、何とノイトラは突如として踵を返した。歩を進める足に迷いは見えず、そのまま彼の姿は消えて行った。

「ノイトラ…」

離れからその背中を眺めていたテスラは、小さい声で呟いた。

彼は気付いていた。

去り際、ノイトラはその両手が硬く握り締められていた事を。

テスラは虚夜宮の中で最もノイトラの事を知り、通じ合える存在だ。

主が変わった今でも、それは変わらない。寧ろ距離が離れた分、よりそのレベルは上がったとも言える。

そんなテスラでも、今のノイトラが抱いているであろう思いは判らなかつた。

それはそうだろう。何せ普通に考えても、ルピとノイトラの接点は皆無としか思えない。

普段から付き合ひがあり、他愛の無い馬鹿話等を交わす間柄だったのであれば、あの態度も納得なのだが。

互いの性格を考慮しても、決して相性は良いとは言えない。

——ノイトラの手による無自覚のルピの隠された性癖開発。そして階級争奪戦開催の前夜に二人が交わした遣り取りを知っていれば、またその結論は変わっていたかもしれない。

テスラは思考を重ねる度、余計に混乱した。

確かにノイトラは変わった。表面上は今迄通りだが、中身はこの虚夜宮内の雰囲気似つかわしく無い、御人好しと言える性格へと。

だが幾ら仲間とは言え、流石に接点の少ない破面が死んだ程度で反応を示す程ではない。

その証拠に、今迄明確に敵意を向けた上で襲い掛かって来た破面に対し、ノイトラは只一つの例外無く叩き潰すという手段を取っている。

実力では敵わないからと、陰口を囁いたり、根も葉もない黒い噂を流したりしていた陰湿な破面に対しても同様。尚これについては少し異なる部分があり、下手人が逆上で

もしない限り、殺さずに肉体言語の「話し合い」で全てを済ますという寛容さをみせてはいるが。

「行かないのか」

「つ、ハリベル様…」

ノイトラが消えても尚、出入り口を眺め続けるテスラに対し、横合いからハリベルが声を掛けた。

そんな彼女の金色の瞳からは、心成しか優しげな感情が見て取れた。

「気になるのだろうか?」

「…いえ」

その問いに対し、テスラは反射的に否定した。

確かにハリベルの言う通り、気になって仕方が無い。

だが今の自分の立場は第3十刃の従属官だ。

徒に私情で余所の十刃に関わるのは御法度。

そう考えたテスラは自身の感情を押し殺そうとした。

「今日は鍛錬以外、特に予定も無い。後は自由にしろ」

「——っ、感謝致します!!」

次の瞬間、テスラはその場から駆け出した。

その背中を眺めながら、ハリベルは静かに笑った。

「ちよっ…ハリベル様!」

「アイツ今日はあたしと勝負する約束だったのに…!!」

あつさりと許可を出した事に戸惑ったのか、アパッチは抗議の声を上げた。

それに続く様にして、ミラ・ローズはあつと言う間に姿が見えなくなったテスラに対して文句を零す。

「あら? まさか嫉妬ですの? これだから喪女は…」

『ああ!? なに寝言言って——』

「フフ、ムキになるところが益々怪しいこと」

『てめえスンスンぶち殺すぞ!!!』

アパッチとミラ・ローズ、相変わらぬハモリっぷりである。

まるで事前に打ち合わせでもしているのでは、と疑う程だ。

——だが今回に限っては、少々流れが異なっていた。

「じゃあてめえはどうなんだ!？」

「へ?」

通常であれば、この辺りのタンミングでハリベルが注意を入れるのだが、それよりも早くアパッチが口を開いた。

彼女は怒りに任せて喚き散らすのでは無く、突如としてスンスンへ話の矛先を変更したのだ。

その内容が想定外だったのか、スンスンは素っ頓狂な声を漏らす。

「そうだ!! こないだの鍛錬の時なんて、妙にアイツにベタベタ引っ付きながら顔を丁

寧に拭いてやってたじゃねえか!!」  
「っ!!!」

続け様に放たれたミラ・ローズの指摘に対し、スンスは右袖で顔の鼻から下を隠しながら後退りする。

その目は大きく見開かれ、次の瞬間には忙しなく左右に揺れ動き始める。

まるで自分の罪状が明らかになった犯人の如き反応だった。

現世での任務の様子を記録した映像を見た後、ハリベル達は日課である鍛錬を行った。

尚、この時のテスラの気合の入り様は尋常では無かった。

恐らくは映像の中のノイトラ達の奮闘振りに影響されたのだろう。彼の全身から立ち昇る鬼気迫る雰囲気は、直接立ち会っていた訳でも無いアパッチ達も思わずたじろぐ程。

見るに見かねたハリベルが止めに入らなければ、それこそ倒れるまで動き回っていた事だろう。

キリが無いとして、四人に休憩に入る様言い渡したハリベル。

問題はこれ以降だ。

直後、激しく息を切らして大の字で倒れるアパッチにミラ・ローズ。

この二人が疲れ果てるのは非常に珍しい。と言うか、普段であればこうなる事はほぼ無い。

理由は単純。テスラに対抗して無茶な動きをしただけだ。

自身の限界を知っているスンスンは自重した為、それ程消耗してはいない。だが残るアパッチにミラ・ローズは彼に対して対抗意識を持っており、こうなるのも致し方無いだろう。

だがやはり、そんな彼女達以上にテスラは消耗が激しかった。

彼は顔中に滝の様な汗を流しながら、宮の残骸の壁に背中を預けて座り込む。

そんな状態で周囲へ気を配る余裕がある訳が無い。

目を閉じて深呼吸を繰り返す彼に、ゆっくりと近づく影があった。

その正体こそがスンスン。

彼女の手にはタオル。無論、それはテスラが鍛錬前に雑務係の破面から手配して貰ったものである。

スンスンは徐にテスラの直ぐ正面にしゃがみ込むと、そのタオルで彼の顔を拭き始めたのだ。

当然、タオルが顔に触れた瞬間、初めて気付いたテスラは瞠目したまま動けなかった。

今迄他者を弄るか煽るかしてばかりだった者が、自分とて消耗しているにも拘らず、いきなり献身的な態度を取ったのだ。驚かない訳が無い。

全身を硬直させ続けるテストラを余所に、微笑みながら手を動かし続けるスンスン。時折互いの距離を更に詰めながら。

彼女が何を思った上で行動したのか、それは本人にしか解らない。

だが傍から見れば——まるで恥ずかしがり屋な年下の彼氏の世話を焼く、年上の彼女の光景が其処には広がっていた、とだけ。

「の、覗き見は嫌われますわよ?」

「…怪しい」

「…ずげえ怪しい」

顔を隠したまま、身体を背けるスンスン。  
その頬は赤く染まっていた。

「お、お花を摘みに行つてきますわ!!!」

『てめえ逃げんなコラア!!!』

「…ハア」

出入り口へ向かって駆け出す三人に、ハリベルは溜息を吐いた。

場所も場所の上、許可を出したのはテスラのみだった筈なのだが、と。

だが幸いと言うべきか、ハリベル達が居る場所は藍染の位置の正反対。ある程度騒いでも殆ど耳に入らないだろう。

「しかし…」

ハリベルは考える。その内容はノイトラについてである。

何も彼を気に掛けているのはテスラだけでは無いのだ。

——ちなみに桃色方向では無く、興味という意味で。

弱者を虐げ、見下すのが性分であるルピだ。今も昔も、ノイトラとの相性は最悪の筈だ。

だが映像を見る限り、余りそうとは思えないというのが、ハリベルの素直な印象だった。

予め指示を出していたのか、ルピが窮地に陥った瞬間に助けに入ったチルツチ。

自身の攻撃に巻き込まない様、敵の拘束から強引に解放し、退却させる。これ等の行動を鑑みれば、思ったより関係は悪くは無さそうだ。

「情でも湧いたというのか…?」

ノイトラは自身の部下や気を許した仲間に対しては非常に寛容だ。

その反面、敵に対して容赦は無い。だが武人には武人として戦わんと、敬意を払うくらいも見えて取れる。

それについてはハリベルも非常に好感が持てた。

だが先に零した言葉通り、もしも情に振り回されている部分があるとすれば、戦士としては少々危うい。

ハリベルはそれだけが気掛かりだった。

「以前より弱くなった——いや」

かつてのノイトラを例えるならば、抜身の刃というより制御を失って暴れ回る凶器。

そして何より——死に急いでいた。

テスラから聞き及んではいるが、当時のノイトラは良くこう零していたと。

——元より自分達破面に救いなど存在しない。

故に他者を拒絶、常に戦いを渴望し、その中で壮絶に散る事を求めていたと。

形振り構わぬその姿勢は、ある意味強みでもあり脆さであると、ハリベルは思った。

それが、今は如何だ。

常に自身を律し、無暗矢鱈に暴れる事を良しとせず、十刃として責任を持った行動を心掛け、堅実に腕を磨く。

自身の周囲に対し、心を開いて受け入れ、ルピの様に交流が少なくとも同じ破面としてであれば情が湧く。

「以前とは別の形で…強くなったと見るべき、か…」

大虚時代、他の大虚を喰らう犠牲を強いて自身が強化することを望まなかったハリベル。

彼女はその時既に最上級大虚にまで至ってはいしたが、捕食を極力抑えていたのが原因となり、常に本来の実力を出せない状態になっていた。

もしも他の最上級大虚と遭遇すれば、不利なのは此方。中級大虚の群れを相手取った

としても同様の事が言えた。

そんな最中、支えとなったのがアパッチ達の存在だ。

彼女達の存在がどれ程助けになったか、強く在れた事か。

そしてそれは現在も続いている。

最近では新たにテスラという部下が参入。常に真面目で気配りも上手く、何事にも本気で取り組み、時折折向けて来る曇り無い真つ直ぐな好意を含んだ視線が心地良かった。

——仲間の事を思い遣り、頼れるのも、強さの一つ。

ハリベルはそう断言する。

「——成る程、貴様も奴の影響を受けていたのか……」

実力もそうだが、何よりノイトラの変化は、周囲にも様々な影響を齎した。

それも殆どがプラスの方向に。

恐らくルピもその内の一人なのだろう。

何せ本来であれば、彼はあの様な戦い方をする訳が無いのだから。

先日見た映像から、ハリベルはルピの戦法を大凡把握していた。

——あれは弱者を蹂躪する事を目的とした動きだ。

只の遊撃要員から一気に十刃まで昇格した事で増長したのか、普段見せる態度からも十分に読み取れた。

格上が相手であれば大人しいが、それ以外には終始徹底して舐め切った態度を取る。処世術——と言えば聞こえは良いが、見ていて気持ちの良いものでは無い印象を抱いたのを、ハリベルは覚えている。

そんな小物に分類される存在であったルピだが、先程までの姿はまるで別人。相手を蹂躪し、自身の加虐嗜好を満たそうとするのでは無く、只管に勝ちに行っていた。

グリムジョーとの実力差を察していたのか、帰刃を出される前に勝負を決めんと、休み無く猛攻を仕掛ける攻めの姿勢。敢えて攻撃を受けて油断を誘う等、ハイリスクハイリターンな策を迷い無く実行に移す勇氣。

終いには、もはや敗北は決定的と思われた瞬間、最後まで足掻き続ける意志の強さも見せた。

ハリベルは俯き加減だった顔を持ち上げる。

同時に戦場の中心に広がっていた砂塵が晴れる。

その上空では、グリムジョーが先程と同様の笑い声を再び上げていた。

ハリベルはそんな彼から視線を外し、その真下へ移す。ルピの亡骸があつた筈のその

場所へと。

「…認めよう、ルピ・アンテノール」

——その生き様は、紛れも無く勇敢な戦士であつたと。

ハリベルは呟くと、徐に両目を閉じる。

その姿はまるで死者への黙禱を捧げている様に見えた。

第5十刃の拠点の宮の近くに差し掛かった時、ノイトラは其処でやつと足を止めた。そのまま通路の壁に移動すると、背中を預けた。

「…初めから判り切つてただらうが」

——この馬鹿野郎。

ノイトラは自分自身を罵倒した。

後悔先に立たず。今更何を思おうが、過ぎた事。

ルピとはそれ程仲が良かったとは言えないが、その理由は単に交流が少ないだけ。

昨晩話をした限りでは、親しくなれる要素は十分にあつた。

以前の行いを反省したのか、此方の話は素直に聞いていたし、自分とグリムジョーの実力差を真面目に考察するという、冷静な思考も出来るまでになつていた。

だが折角改心したルピも、つい先程死んでしまった。

体をバラバラにされただけでなく、その死体すら跡形も無く消し飛ばされて。

その原因を作ったのは他ならぬノイトラ自身。その事実が、彼の心に重く押し掛かる。

終いにはルピが死に際に見せた表情と、最期に零した言葉が、何時までも頭の中から消えない。

そしてノイトラは気付いていた。

己の罪を悔いつつ——グリムジョーが史実通りに第6十刃へと返り咲いた結果に、何処か安堵している自分が居る事に。

道徳的に見れば如何かと思えるだろうが、ノイトラの目的を考慮すれば、そう感じても何らおかしくは無い。

寧ろその御蔭で当初の予定通りに事を運べる可能性がグンと上がったのだから。だが本人としてはそう簡単に割り切れるものでは無かった。

「っ、落ち着け俺」

思考回路が完全にネガティブ方向へ向かい始めた時、ノイトラは自身の額を殴り付ける事によって叱責する。

血も涙も無い様にも思えるが、今はこうしている場合では無い。

一日後か二日後か、どちらにせよ間も無く一護が虚夜宮へ侵入して来る。それと同時に進行にて、色々と忙し無く動き回る事となる。

その結果によって、今後の運命が全て決まるのだ。後ろ向きどころか、生半可な精神状態で臨む訳には行かない。

この件に関して、やがてノイトラは結論付けた。

——全て、背負おう。

ルピを悲惨な死に追いやったその罪を。そして彼の分も含めて、後悔しない様に生き抜く事を。

「…許せとは言わねえ」

ノイトラは殴りつ放しとなっていた自身の右拳を額から離す。

顔を真上に持ち上げると、目を閉じる。

数十秒後、再び開かれたその目には、尋常ならざる覚悟が見て取れた。

「何時かは俺もあの世そっちに行く」

破面や死神の様な魂魄という存在に、黄泉国よみのくにという概念はあるか如何かは判断出来無

い。

だがそんな事は如何でも良い。贖罪云々全て含め、自分は只行動で示すだけだと、ノイトラは意気込んだ。

「文句はその時間くさ……だから待っててくれ」

そうと決まれば話は早い。気分切り替えも含め、早速行動するべきだろう。

ノイトラの頭にまず真つ先に浮かんだのは——取り敢えず何時も通り、鍛錬だった。

もはや完全に脳筋思考である。

自らの拠点の宮に向かっていた筈の足を、反転。

外へと向かうルートへ変更した。

そうして一歩前に踏み出した時、正面から何者かが走って来るのが見えた。

「——ノイトラ!!」

「…テスラ?」

嘗ての部下であり、同時に自分自身の一歩の理解者で親友。

そんなテスラの突然の登場に、ノイトラは思わず瞠目した。

「つと——大丈夫、みたいだな」

「…何の話だ？」

要領を得ないテスラの言葉に対し、そう反射的に答えたものの、内心では盛大にビクついていた。

ルピの死に動揺していた姿を見られたのか、それとも察したのか。

どちらにせよ、そんな情けない姿を晒してしまったのは不覚としか言い様が無い。

「いや、何でもない」

「…そうか」

その苦し紛れの問い掛けに対し、テスラは柔らかな笑みを浮かべるだけで、明確な答えを返さなかった。

追及されなくて助かったと、ノイトラは安堵する。

——十中八九察してらるだろうが。

そう内心では思いつつ。

長年の付き合いだ。憑依後など、何時も一緒に行動していた分、性格や考えも殆ど知られている。

そんなテスラが、今の自分の内情を悟れぬ訳が無い。ノイトラは理解していた。だからこそ言葉を切ったのだ。

これはノイトラ自身、話したい内容では無いだろうと。

例え十割を悟られていようと、口に出すと出さないとでは当人の気分も大分違う。

——相も変わらず、優しい奴だ。

テスラはそう思いながら、ノイトラに優しげな視線を送り続ける。

正に副官や部下としての鑑の様な気遣いが出る、実に優秀な男であった。

会話が途切れる。

こうして二人が面と向かい合うのは久々である。

その為、何を話そうか互いに迷っているのだ。

「…なあ」

「どうした？」

「俺は今から鍛錬に行く予定なんだが……オマエも行くか？」

「!!」

——言葉で話せないなら、互いの剣で語らうか。

そう考えたノイトラは、テスラにそう提案した。だがその直後、これは失言だったかと後悔した。

何せ今のテスラは第3十刃の従属官。

幾ら仲が良いとしても、第5十刃が思い付きで行動を共にするのは宜しく無い。ノイトラはその提案を撤回せんと、口を開き掛けた瞬間、テスラがそれを遮った。

「悪い、やっぱ今の無——」

「ああ、わかった!! 今直ぐ準備する!!」

「…は?」

「まずはハリベル様に許可をもらってくる!!」

一切の迷いが無い、即答。

唾然とするノイトラを尻目に、輝かんばかりの嬉々とした表情を浮かべたテスラは、一気にその場から駆け出した。

「直ぐに済ませるから待っててくれ!! 一人で勝手に行くなよ!!」

通路の曲がり角の途中で振り返ると、念を押す様にして言う。  
その様子に毒気を抜かれたノイトラは、思わず苦笑を浮かべた。

「…そいつぁ振りか？」

「だああああ!!! 何でそうなる!!!」

幾分か気分が晴れたノイトラは、何時もの調子で弄りを開始する。  
突然のそれに対し、テスラはずっこけた。

「これは振りでも何でも無い!! いいな絶対だぞ!!」

「わぁーったよ」

「フツ、今の俺の強さをみて驚くがいいさ!!」

まるで水を得た魚の様にはしやぐテスラ。

彼は得意気な顔でそう言い残すと、瞬時に其処から消えた。

——移動に響転を使うとは、これは相当だな。

内心でそう思いつつも、ノイトラは静かに笑った。

「さあて、俺も準備すつか」

嘗てとは異なり、今は鍛錬時の環境も整っている。

主にセフィーロとロカの尽力である。

結果、ノイトラの部屋には、常にタオルや飲み物が充実する様になった。

今回の鍛錬は軽く流す程度に留める予定だ。

持参する物は少なくても良いだろう。

そう考えたノイトラは最低限の必需品を持ち出すべく、自身の拠点の宮へ足を進めた

——その直後だった。

「——おや、随分と久しぶりだね？」

「っ!!？」

進行方向にて、見覚えのあるピンク色の頭髮が視界に入った。

ノイトラは反射的に立ち止まると、その持ち主である男を睨み付けた。

「テメエ……!!」

「折角の機会だ、少し世間話でもしないかい？」

指先で眼鏡を直しながら、男——第8十刃、ザエルアポロ・グランツは胡散臭い笑みを浮かべた。

## 第三十六話 三日月と邪淫と…

ノイトラは一気に興味の失せた様な表情を浮かべ、ザエルアポロを見遣る。

だがその内心では最大まで警戒レベルを上げたまま。

今から振られてくるであろう、ザエルアポロの話題の内容を想定。それに対する返答パターンを脳内に幾つもストック。

僅かでも不審な動きをすれば直ぐに反応出来る様、重心をやや低くしながら。

「…何年振りだろうね。こうして面と向かい合って話すのは」

先程はつい反射的に睨み付けてしまったが、如何やら気付かれてはいないらしい。

昨に警戒している態度を見せるのは得策では無い。

「覚えてるワケ無えだろ」

懐かしむ様に語り始めるザエルアポロに対し、ノイトラは如何でも良いとばかりに冷

ややかな反応を返す。

だがそれは想定済みだったのか。ザエルアポロはやれやれと肩を竦める様な仕草を見せると、もう一度眼鏡の位置を指先で持ち上げて修正した。

「最近の調子はどうだい？」

「…悪くねえ」

「そうかい。ならあの時協力したかいがあったよ」

——何か妙だ。

ノイトラはザエルアポロの態度に引つ掛かりを覚えた。

言うなれば——恩着せがましい。

恰も今の状況まで至れたのは自分の御蔭なのだ、此方にそう訴えているかの様で。

「そういえば、君の周囲は随分と賑やかになったね」

「あ？」

「ほら、十刃落ちの連中やら、1番目や3番目——そして治療室の連中とか、ね」

ザエルアポロの口元が吊上がった。

——やはり目を付けていたか。

自分の事然り、周囲然り。

あの時藍染に監視の目を潰す事を要求しといて正解だったと、ノイトラは安堵した。思いの外動揺は少ない。

それはそうだ。随分前からこれも想定はしていたのだから。

だがまさかこのタイミングで来るとは予想外だった。

想像したくは無いが、テスラが来る直前の精神状態であれば、何を仕出かしていたか判らない。

余裕の無さは視野の狭さ、そして焦燥に比例するのだから。

「それがテメエと何の関係があるってんだ」

「いや、特には——ああ、一つだけあったよ」

「…何？」

ザエルアポロは否定し掛けたが、直ぐ様訂正する。

如何でも良い世間話から始まったかと思いきや、突然の恩人アピール。そして今であ

る。

何の意図があつて、こんな纏りの無い会話の流れになるのか。疑問に思いつつ、ノイトラは続きを待った。

「ロカ・パラミア」

「…アイツが如何した」

だがその口から飛び出したのは、予想とは違う人物の名であつた。御蔭でノイトラは内心でやや混乱し始める。

「あの人形は元気にしてるかい？」

「…人形だあ？」

ロカに対する蔑称と取れるその余りの言い草に、ノイトラは苛立ちを覚えた。

だがそれも一瞬だけ。既の所でその感情を抑え込む。

ノイトラにとつて、ロカも十分に大きな存在である。

セフィーロに続き、自身を恐れる事無く治療を施してくれた恩人であり。日常の食事

等の用意も、稀に開催される宴会の給仕等を真面目にこなしたりと、常日頃から世話になりつ放しだ。

そんな人物を侮辱されたのである。何も感じない訳が無い。

確かにあの無表情は人形染みた何かを感じさせる部分がある。だが良く良く見れば結構感情豊かな事が判る。

只単に自身の感情を表現するのが不得意なだけだ。

外部より好意的な感情を向けられる度、時折戸惑いを見せる事から、人付き合いにも余り慣れていないのだろう。

まあ遠目から表面上だけを見ればそんな印象を受けるのも理解出来る。

失礼ではあるが、人形という蔑称は寧ろウルキオラにこそ当て嵌まるだろう。

とは言え、最近では彼は心というものを理解しようとしていたり、己の在り方に悩み始めている傾向がある。

寧ろウルキオラも人形のイメージが払拭され始めていと言うべきだろう。

セフィーロの話では、治療室へ配属された当初の口力は正に人形そのものだったそう  
だ。だが度重なる努力の末、今では改善されたとの事。

——痛ましくて見ていられなかった。

その様に行動した理由を、セフィーロはそう語っている。

虚夜宮入りしたばかりの彼女も相当スレていたそうだが、余りに気になって仕方が無く、痺れを切らしたそうだ。

自らの事を道具と表し、思考を放棄した状態で自己完結していたロカの姿。現在の彼女しか知らないノイトラは、正直言つて余り想像したくなかった。

恐らくは自分がセフィーロと同じ立場であつたなら、形は違えどもセフィーロと同様の目的の元に行動していたかもしれない。ノイトラはそう思った。

「…人形呼ばわりたあ、随分な言い草じゃねえか」

「おや、知らないのかい？　ロカは僕の作品だよ」

「!!?」

「自分の生み出した作品の事をどう言おうが、別に問題は無いだろう？」

けど結局は不必要になつたのだが、と最後に付け加えるザエルアポロ。

——当たり前な事を当たり前にしただけ。

その顔は罪悪感の欠片も感じられない、平然としたもの。

常人ならず確実にその姿に不快感を抱く事だろう。

そしてノイトラはというと、それよりも先にロカに隠されたその衝撃的な背景に瞠目

していた。

——マユリ様を彷彿とさせる言い回しだ。

やはりマツドサイエンティスト同士、似通った部分はあると言うべきか。

仄かにそんな事を考えながら。

ザエルアポロは得意気な顔で説明し始める。

元々ロカ・パラミアという存在は、無数の魂魄を人為的に寄り合わせ、人工的に大虚を造り上げる実験台として生み出された。

崩玉によって破面化する前は、純白の蜘蛛状の中級大虚だったと。

説明された内容を分析しつつ、ノイトラは思考を巡らせる。

そして納得。こんな最低に分類されるであろう性格の奴に端から道具として生み出されたのだ。それ相応の酷い扱いをされて来ただろう。

——思考停止もするし、無感情にもなる筈だ。

同時に悟る。ロカが何の目的で作りに出されたのかを。

ザエルアポロの研究目的は“完全な生命”。幾度死に絶えようが、何度でも炎の中から甦る不死鳥の如き存在へ、自身も至りたいのだ。

そこでロカの能力である“反膜の糸”。その特性と能力を考慮すれば、大体は想像が付く。

ザエルアポロは自らの野望の足掛かり、そしてもしもの時の保険として、彼女を生み出したのだ。

だがそれも——敵の臍から体内に侵入して卵を産み付け、体内から相手の全てを吸い尽くして死に至らしめ、自らの肉体を復活させる技である。『ガブリエール受胎告知』を編み出した為には不要となった。

故に——ロカは捨てられた。否、厳密に言えば放置されたと言うのが正しい。ノイトラは眼前のいけ好かない男の顔面を殴り飛ばしたい衝動に駆られた。

「ああ、そうだと忘れていた。実はもう一つ聞きたい事があつたんだ」

「……今度は何だ」

「君の従属官——治療室室長の事さ」

恐らくザエルアポロとしてはととしては、これこそが本題。

ノイトラは得心がいった。

反射的に動き掛けた表情筋を無理矢理固定。表面上は至つて平静を保ち続ける。

此処で僅かでも動揺して隙を見せて見ろ。ほぼ確実にセフィーロの存在が自分の大きな弱点の一つであると悟らせてしまう。

そうなれば良い様に利用されて終わりだ。

ノイトラは意識を切り替える。

考えてみれば暫く演じて居なかつた、本来のノイトラ・ジルガとしての在り方へ。

「…んだよ、もしかしてアイツを借りてえのか?」

一般的な善性を持つ者が聞けば即座に嫌悪感を抱くであろう。

そんな下衆な台詞を吐きながら、それに加えて下卑た笑みを浮かべる。

—— 出来れば早く終わってくれ。

自身の口から出た言葉とは言え、内心で盛大に吐き気を催しながら。

「おや、やはり既に手を出していたのかい」

「中々良い具合だぜ?」

「…やはり噂は当てにならない、か」

ザエルアポロは拍子抜けした様な顔でそう言う。

恐らくは変わったと噂されていた筈のノイトラが、しつかり下衆な部分を残していた

事を悟ったからだろう。

—— 事実は全く以て真逆なのだが。

他者の能力は観察しても、性格等の中身は一切気にも留めないザエルアポロだ。彼自身が変わらない限り、その真実へ辿り着く事は出来無いだろう。

「残念だが、まだ手放す気は無えぞ。まだまだ躡け足りねえし——」

史実では織姫をペット呼ばわりし、彼女の世話役を担当するウルキオラへどれぐらい躡けたのかと問い掛ける程の下衆な性格のノイトラ。

だが今の憑依後のノイトラは寧ろ躡けられる側だ。無論、躡ける側はセフィーロである。

今迄の恩義や隠し事をしている負い目もある分、強く出る事が出来無いのも、その状況に陥った要因だろう。

—— 実を言うとノイトラは最近、その扱いが余り嫌では無くなつて来ていたりするのだが、本人は必死にそれを否定している。

ルピの同類になるのは御免だと。

「いやいや、そうじゃない。君の所有物をどうこうしたいという訳ではないよ」  
「あん？　じゃあなんだってんだ」

偽りの自分を演じ続けるノイトラ。

さつさと真意を吐けと、そう願いつつ。

「少し彼女の血液サンプルが欲しいんだ」

「サンプルだと？」

「お願い出来ないかな。飼い主の君には従順だろうし、簡単だろう？」

小さな試験管らしき物を取り出しながら、ピンクはそう問い掛ける。

つまりノイトラの手でセフィーロの血を採取し、その試験管に入れろという意味だろう。

注射器では無いのは、通常の針では破面の鋼皮に耐え得る強度が無いからなのか。

——開発してはいそうだが。

ノイトラは密かにそう思った。

「今まで破面同士が子を成したという前例は無い。肉体関係はあっても、それだけだ」  
「……………」

「それにもし彼女が君の子を孕んだとしても、今の治療室の連中の腕では、現世で言う助産師の真似事は出来無い筈だ」

つまりザエルアポロの言いたい事はこうだ。

万が一の事を考慮すれば、母体であるセフィーロのバイタル等を安定させる為に色々準備が必要になる。

虚夜宮を代表する技術者として、それに協力してやりたい。だから事前にデータが欲しいのだと。

——信用出来るかこの陰険ピンク眼鏡。

ノイトラは内心で悪態を吐く。

協力すると訴えているその裏では、母体となるセフィーロの能力を解析やら何やらして、自分の研究に役立てんと目論んでいる筈である。

だが恐らく此処で言う通り素直に協力してやれば、出産までは確実に漕ぎ着ける筈だ。

所謂ギブアンドテイク。

ネリエルを陥れた件という前例もある。自分に見返りがあれば約束は果たす可能性は高い。

とは言え、あのザエルアポロだ。何を目論んでいるのか想像も付かない。今迄の行動や口力に対する言動を顧みるに、碌な事にならないだろう。

「それ程知っている訳ではないが、彼女の性格上、自分の子を蔑ろにする可能性は低いだろう。何せあの人形にすら情を抱いて身内に抱え込むぐらいだしね」

「…かもな」

「君にとつてはいつでもいい事かもしれないが、僕としては非常に興味がそそられる内容でね。今後の為にも、彼女には是非とも無事に出産を終えてもらいたいんだ」

明らかに嘘。完全にダウト。

確かに表面上だけ取れば、非常に協力的な物言いである。

だがこの表情を見ろ。まるで信用ならない胡散臭い笑みが溢れているではないか。善意から来る提案などでは決して無い。十割方野心だ。

——そろそろ区切りを付けるか。

そう考えたノイトラは口を開いた。

「やだね」

直後、ザエルアポロの両目が僅かに細まった。

本人は隠している心算なのだろうが、ノイトラは見逃さなかった。

その瞳に浮かんでいる——怒りの色を。

「…正気かい？ 出産に失敗すれば、ショックの余り塞ぎ込んでしまうかもしれないよ？」

「それこそ如何でも良い。知った事か」

断られても尚、食い下がろうとするザエルアポロ。

だがそれもノイトラにとっては予想通りの流れだった。

「後で取り返しが付かなくなっても——」

「…しつけえぞテメエ」

「ガッ…フ…!!?」

ザエルアポロの眼前から、突如としてノイトラの姿が消える。

次の瞬間、喉に感じる凄まじいまでの圧迫感に、後頭部から背中に掛けて襲い掛かる衝撃。

肺の中の空気が一気に排出され、必死にそれを取り戻さんと息を吸い込む。

だが気管が狭まっているのか、上手く行かない。

「このまま喉を握り潰されたくねえなら、その耳障りな口を閉じろ」

低い声で、ノイトラは言う。

その右手はザエルアポロの首を掴んでおり、彼のその身体は壁に押し付けられていた。

其処でようやく自身の置かれた状況に気付いたのか、ザエルアポロはノイトラを睨み付けた。

「つ、こんな事をして、只で済むと——!!」

ノイトラは口元を吊り上げたかと思うと、右手に更に力を籠めた。無論、手加減はしてある。本気だったら既に相手は息絶えている。だが十分に強力だったのか、より苦しげな呻き声を上げるザエルアポロ。そんな彼に、ノイトラは徐に顔を近付けて囁いた。

「…第8十刃如きが、この俺と対等な口を利いてんじゃねえ」

「う…グ…!!」

ノイトラは考える。

此処でザエルアポロを始末するのも一つの手だが、今後の展開に支障を来たす可能性があった。

もしその様な事をすれば、本来彼と戦う事となる筈の者達——一護と共に虚夜宮へ侵入して来る内の二人がフリーの状態になる。

すると如何なるか。

まず最も高いと思われるのは、別の破面と遭遇し、戦闘へ発展する可能性か。

客観的に見て、史実に於けるザエルアポロの敗因は明らかである。

研究用のサンプルとして相手を確保しようと目論んだが為、徒に戦闘時間を掛け過ぎ

た事。そして相手の事を所詮は低劣種と侮つたりと、慢心が過ぎた事だ。

例えば虚圏の神としての矜持と、自身の能力に対する絶対的な自信から来る慢心を持つバラガンが相手の場合ば如何なるだろうか。

それがグリムジョー、ウルキオラ。どちらでも良い。

取り敢えず——想像するまでも無い。

恐らく彼等は極めて高い確率で相手を殺しに掛かるだろう。

ハリベルであれば、尋常なる立ち合いの元に、情けを掛ける可能性は無きにしも非ず。

スタークは——最悪見なかつた事にしてやるから逃げろとも言いそうだ。

以前よりノイトラが何度も考えている事だが、この様に先の展開が全く読めなくなるという最悪のパターンはだけは避けたい。

それに例え、此処で止むを得ずザエルアポロを手に掛けた——という形にこの場を収めた場合、良いか悪いかで考慮すると五分五分だ。

有象無象の破面なら幾ら欠けたところで問題無いが、十刃は別である。間違い無く揉めるし、簡単に終わる筈が無い。

それに藍染の事もある。この場も間違い無く監視されているだろうし、後で映像の確認程度はするだろう。そうなれば直ぐに嘘だと暴かれる。

事の真偽を明らかにするため、裁判の様なものが開催されでもすれば、最早御手上げ

状態。

普通に話し掛けられただけでも凄まじいプレッシャーを感じるのだ。そんな藍染に尋問でもされ様ものなら、胃がストレスでマツハな状況になる事間違いない。

「君は……僕に借りがあるだろう…!!」

「あ?」

「それがこの仕打ちとは……あまりに不義理じゃないかい…?!」

ザエルアポロは苦しい表情を浮かべながらも、掠れ声でそう反論する。

その反応から、ノイトラは自身の予想が正解だった事を悟る。

ザエルアポロがノイトラに協力した理由。

それは更なる研究を進めんが為、十刃に返り咲く事を目的としただけでは無い。

ノイトラに借りをつくる事も、それに含まれていたのだ。

考えてみると、ザエルアポロとノイトラの相性は最悪と言つて良い。

全盛期——即ち第0十刃だった頃のザエルアポロであれば、単純な力押しだろうが何だろうが、容易に対処出来ただろう。

だがそれも弱体化した状態では到底不可能。

だからこそ、ノイトラとの敵対の可能性を下げる為に行動したのだ。

現在ザエルアポロが持ち得ている能力や技、霊圧を考慮してシユミレートしてみても、正に絶望的とも言つて良い。

まずノイトラの鋼皮には傷一つ付ける事も叶わない。例え何らかの対策を打つて彼の行動を縛つたとしても、結局はそれ如何にか出来無ければ詰む。

そして何よりあの即死級の一撃を受けても戦闘を続行出来る程の異常なタフネスを前にしては、唯一の攻撃手段でもある技も殆ど意味を成さないだろう。

——と言うか、後者については通用するか如何かも怪しい。

十刃らしくスタンダードに「王虚の閃光」を使用したとしても、他とそう大差は無いだろう。

「何言つてんだ。借りなんざ、テメエが十刃に返り咲いた時点でもう返してるだろうが」

ノイトラは呆れを含んだ声でそう返す。

事実を言つてしまえば、ネリエルを陥れる際に協力してくれた件についての借りは残つたままである。

だが結果として見れば、ザエルアポロは十分な見返りを得ている。

結果論に過ぎないと反論されればそれまでなのだ、暴論に近いそれをノイトラは堂々と言い放った。

「逆にテメエこそ俺の方に借りがあるんじゃないやねえか？ 例えば本人の了承も無しに、ココソと影から監視してたとか——なあザエルアポロ……」

「ツ……ゴホツ、ゴホツ!!!」

「ま、如何取るかは自由だがな」

笑みをそのままに、何を思ったのか、ノイトラは不意に首を掴んでいた右手を開く。その御蔭で拘束から逃れたザエルアポロは、激しく咳き込みながらその場で膝を着いた。

「第0十刃だった頃なら未だしも、今の自分の立場ってモンを自覚することだ」

この台詞から判るだろうが、元からノイトラはザエルアポロの過去を知っている。と言うか、昔からある程度の付き合いはある。上辺だけだが。

一体何の研究をしていたのか、といった踏み込んだ事情までは知らなかった為、口カ

の事を聞いて驚愕したのだ。

だがザエルアポロが自らの野望に従い、弱体化という手段を取ったのは知っている。自らが持つ戦士としての本能を、イールフォルト・グランツとして切り離し、最上級大虚から中級大虚レベルへと退化。一気に十刃落ちとなってしまう。

——理解出来無い。

ノイトラが憑依後に引き継いだ過去の記憶を辿った限り、確かに当時の自分はそう零していたのを確認している。

誰よりも強さというものに固執していた彼にとって、ザエルアポロの選択は極めて信じ難い愚行だったのだろう。

「あばよ」

最後にそう言い残すと、ノイトラは自身の拠点の宮を目指して歩き始めた。

ほんの一言だけだったが、それには明確な決別の意志が込められていた。

二十数秒程だろうか。既にノイトラの後ろ姿は通路の先に消えている。

その直後、ザエルアポロはその先を睨み付けながら口を開いた。

「獣風情が、調子に乗りやがって…!!」

膝を着いたまま、額に血管を浮き上がらせる。

とは言え、ザエルアポロはノイトラの言つた事に反論出来無かつた。

大幅に弱体化した今の自分では、勝利以前に勝負になるのか如何かが極めて怪しい。現状で全てを出し尽くしたとしても、果たして通用するか如何か。

「……まあ、いいさ……」

沸騰し掛けた感情が、急激に冷める。

ザエルアポロは自身の首を優しく擦りつつ、立ち上がる。

その顔は正に悪巧みしていますといった様子が、ありありと見て取れる。

「調子付いて居られるのも今の内だ…何せ——」

——既に「その時」の為の用意は済んでいるのだから。

内心でそう呟きつつ、ほくそ笑む。

脳内に思い浮かぶのは、藍染に呼び出されたかと思いきや、突如としてノイトラの周囲の監視の目を潰されたあの日の光景。

其処で秘密裏に依頼された、〃例の物〃の開発。

ザエルアポロは徐に懐に手を伸ばすと、何かを取り出す。

それはサイコロを連想させる四角い形をした、小さな箱状の物。色は黄。

それを掌の上で転がしながら、ザエルアポロはクスクスと不気味な笑みを漏らした。

ノイトラが利用している何時もの鍛錬場所。それから二キロ程離れているだろう。

其処で大の字に横たわるテスラが居た。

寝ている———と云うのは語弊がある。何せその全身は見るからに脱力し、糸の切れ  
た人形の如き状態。呼吸に關しても、寝息とは到底思えない程に乱れ、白装束は汗で

グツシヨリと濡れていた。

つまるところ——気絶しているのである。

だがその表情は実に晴れやかで、正しく全てを出し切って満足しているかの様。その隣で座り込みながら、ノイトラは横目でその様子を眺めている。

彼の状態はテスラとは全くの正反対で、呼吸も全く乱れておらず、汗を掻いたらしき痕跡はあるものの、全く以て平常。

だがその顔を注視して見ると、口元の右端に裂けた様な傷が。そして右頬には痣らしきものも。

今はもう止まっているが、傷口から微かに顎先まで伸びる血跡も見られる。

「まさかこんだけの傷を付けられるなんてな……」

その部分を指先で擦り続けるノイトラの脳裏に浮かぶのは、先程までの鍛錬風景。手始めに念入りなストレッチ。慣らしの響転反復横跳びに、素振り一式。

それはテスラも同様。流石にその中身はノイトラ並とはいかないが、慣らしというには少々過酷過ぎる内容である。

以前までアパッチ達も対抗してそれを真似しようとしたのだが——漏れなく途中

で音を上げた。下手すれば下位十刃でも積極的に遣ろうとはしないレベルだった。

そうして良い具合に身体が温まったところで——始まったのが模擬戦。

テスラは開始直後から即座に抜刀。何時ぞやのルキアがしたものと同様、右顔前に刀身を逆さした形に、切っ先を相手の喉元へ向けた構えを取る。

対してノイトラは背中にて得物を背負ったまま、手に取ろうともしない、無手で且つ自然体で対抗する。

舐めている訳では無い。そうでもしないと速攻で勝負が付いてしまう程の実力差があるのだ。それでは鍛錬どころの話では無い。

刹那、テスラの姿がその場から消える。

だが一見悠長に構えている様に見えて、実は極限まで集中力を高めていたノイトラはその初動から読んでいた。

如何に実力差があるとは言え、長年共に己を高め合った相手だ。戦法や癖等、一通りの部分は熟知しているだろうし、油断ならない。

元の実力差等は抜きにすれば、ここ最近様々なタイプとの戦いを経験して来たであろうテスラにアドバンテージがある。

ノイトラとて様々な可能性を考慮しつつ、鍛錬を重ねてはいたが、やはり実践からくるそれには劣る。

ノイトラは瞬時に左足を持ち上げる。

直後、脛の中間部を鋭利な刃が滑る様にして走った。

テスラはノイトラの左側を通る様にして響転で移動。擦れ違い様に斬り付けたのだ。

——速い。

以前までの速度と比較すると、凡そ一段階は上がっただろうか。

そして鋼皮の上からでも感じる、斬撃の鋭さと威力。

中でもノイトラが感心したのは、その刃先にブレが無い事だ。

本人の技量のみならず、その斬撃を響転の速度に乗せた御蔭で更に威力を増した一撃。

様子見の初撃と言うより、一撃必殺の分類に入るであろう。

中位十刃に届かせるには些か足りないが、未解放の下位十刃には十分通用するレベルだ。

良いものを魅せてもらった御礼として、ノイトラは動いた。

背中を向けたまま、更なる追撃に入ろうとしていたのだろう、テスラが体勢を整えた直後を見計らい、その場を跳ぶ。

向かう先はその眼前。振り返った途端、初撃を防御したまま硬直していた筈のノイトラが視界に映っていた事に驚愕したのか、テスラは息を呑んだ様子を見せた。

繰り出される、容赦無い蹴撃の嵐。

突き、薙ぎ払い、振り上げに振り下ろし。必死に躲し続けるテスラは、身体の一部が掠る度、背筋に途方も無い寒気が走った。

だがふと違和感に気付く。その蹴撃の全てが大振りだという事に。

威力は高いが、その反面では隙も多く、軌道が読み易い。何故そんな形ばかりをノイトラが選択したのか。

——この程度は凌いで見せろ、という事か。

テスラは悟る。そして奮起。

ノイトラの性格上、悪戯半分に試している訳では無い。

お前なら出来る筈だと、そう信じているのだ。

テスラの目の色が変化する。宛らそれは獲物に狙いを定めた狩人を思わせる。

直後、眼前に迫り来る左足。だが彼はそれに臆する事無く前方へ踏み出すと、同時に斬魄刀を突き出した。

金属同士が擦れ合う様な音を響かせながら、その長い脚を刀身が滑走する。

気付けば脚の狙いは外側に逸れ、テスラはノイトラの懐まで入り込んでおり、勢いに乗せたその切っ先をがら空きな脇腹目掛けて突き出していた。

ノイトラは驚愕の表情を浮かべたが、それも一瞬。

その口元は楽しげに吊り上っていた。

嫌な予感がしたテスラだったが、今更攻撃の中断は不可能。

ならばせめてと、更に刺突の勢いを増す。

切つ先が脇腹に振れたその直後——ノイトラは瞬時に全身を横倒しにすると、左回りに回転した。

その結果、突き出された刀身は受け流される形で、何も無い後方へと逸らされる。空を斬つた御蔭で、テスラの体勢が勢い余つて前のめりに崩れる。

——これは、拙い。

本能が警報を鳴らす。今直ぐ回避行動を取らねば危険だと。

だが全てが遅かった。

そう悟つたテスラは既に天高く宙を舞っていた。

腹部に残存する衝撃、激痛。少なくとも、肋骨は二・三本程は折れているだろう。

——蹴り上げられたのか。

飛びそうになる意識を根性で引き戻し、揺らぐ視界のまま下を見下ろせば、其処には使用したらしい左脚をブラブラと揺らしているノイトラが、此方を見上げていた。

その身に纏う霊圧は既に収まり、表情を見ても、先程までの鬪争の空気は落ち着き始めている。

恐らくノイトラはこれで終わりだと、そう考えているのだ。

やがて落下し始める身体。相変わらず力も入らない。

そんな状況の中、テスラは歯を食い縛った。

——まだ終わる訳にはいかない。

未だ自分は二回しか攻撃出来ていないではないか。それで終わりとは、何と無様な有様だ。

折角のノイトラからの信頼や期待を、裏切る真似は出来無いと。

地面まで五メートルを切った瞬間、テスラは身体を反転。霊子の足場を蹴ると、ノイトラへ向かって直進した。

それに気付いたノイトラの表情に焦燥が浮かぶ。まさかこの期に及んで反撃に転じるとは予想外だったのだろう。

斬魄刀を引き絞り、刺突の構えを取るテスラ。

それに込められた尋常ならざる気迫と覚悟。

気圧されたノイトラは、思わず背中の得物を抜いていた。

上等だと、ノイトラは真正面から迎え撃ってやる事を決める。

柄を両手で握った状態で、右へ大きく振り被った。

だが直後にそれは失策だったと悟る事となる。

テスラは間合いに入った瞬間、ノイトラは踏み込むと同時に、得物を薙ぎ払った。だがそれと同時にノイトラは驚愕した。

見れば正面のテスラは刺突の構えを解いており、斬魄刀を横にして眼前まで移動。その刀身に左手を添えていた。

——まさかこの土壇場で帰刃する気か。

始めから妙だとは思っていた。

今迄模擬戦をする時、テスラは決まって躊躇無く帰刃した後に交戦する。

実力差を理解しているのだろう。未解放のままでは相手にならないとして。

爆発的に膨れ上がるテスラの霊圧。それと同時に巻き起こった煙の様なものが、彼の姿を覆い隠す。

これでは狙いを定められない。霊圧の位置で判断するにも、先程の帰刃の余波のせいで不可能。

だが今更攻撃を中断する事は不可能。

——構うものか。例え如何なる奇策が待っていたとしても、受けて立ってやる。

もはや開き直ったノイトラは、本気で得物を振るう。

だがそれも虚しく空を切り、煙を払うだけに終わった。

先程から意図的に封じていた勘が独りでに働き、反射的に回避行動を取らんと動く

が、遅い。

突如として大きな影が覆い被さったかと思うと、右頬に凄まじい衝撃が走った。

衝撃を感じた部分に残る鈍い痛み。口元の右端の裂傷から僅かに飛び散る血しぶき。

——得物を空振った隙に、殴られた。

身体毎大きく後方へ吹き飛ばされながら、ノイトラは自身の置かれた状況を理解した。

逆方向には、左拳を天に突き出して咆哮を上げる、猪の巨人の姿が。

如何だ見た事か、やってやったぞ、そう訴えているかの様に。

——尚、次の瞬間に響転で背後に回り込んだノイトラの一撃で沈んだが。

それによってテスラは意識を失うと、同時に帰刃形態が強制的に解除されたという訳だ。

「…強くなったな、テスラ」

別な見方をすれば、ノイトラが弱くなった——または油断していた風にも取れる。勿論それは本人も感じており、素直に反省していた。

だがそれ以上に嬉しかった。

今のテスラは初期の頃とはまるで別人。凄まじいまでの成長振りである。

ハリベルの元へ移ったばかりの実力と比較しても、その差は歴然。

以前彼女の話で出た内容の通り、立場が変わった後も鍛錬を欠かさなかつたのだらう。

「やりきった感満載な顔しやがって、このムツツリ野郎が」

呼吸が落ち着き始めたテスラを眺めながら、ノイトラは苦笑する。

感慨に耽るのも良い。だが思っている以上に時間が過ぎた様だし、そろそろ移動せねばならないだろう。

そう考えたノイトラはテスラを抱えてこの場を去ろうとし——弾かれる様にして後ろを振り向いた。

その理由は、この場に向って別の霊圧が近寄って来ている事に気付いたからだ。

より詳細な情報を得る為、探查神経を発動。神経を研ぎ澄ませる。

良く良く考えれば、この場所は見晴らしの良い広大な砂漠の真つ只中だ。

ノイトラとテスラの他に虚が存在しても何ら不思議では無い。

だが通常であれば、例え虚が居たとしても、此方まで寄って来る可能性は極めて低い。

何せ虚夜宮内の破面の持つ霊圧は並みの虚を凌駕する。十刃など尚の事。そんな存在が模擬戦とは言え戦闘行為を行っていたのだ。

この周囲一帯にはその霊圧の名残が残っているに決まっている。

平均的な霊圧探知能力を持ち合わせていれば、近寄ろうとすら思わない。

だが例外も有り得る。中級大虚や最上級大虚だ。

退化の可能性の排除と、更なる高みを目指している中級大虚にとって、破面という存在はこの上無い糧だ。保守的な性格でも無い限り、最上級大虚にとつても同様の事が言える。

それを考慮すると、戦闘を終えて弱った所を狙いに来る可能性も無きにしも非ず。

だからこそ、ノイトラは警戒する。

背中の斬魄刀の柄に右手を添えつつ、探查神経で捉えた霊圧を事細かに分析してゆく。

「…この霊圧は——ッ!!？」

次の瞬間、ノイトラは瞠目した。

接近して来る霊圧の正体。それに合点がいったからだ。

一先ず右手を降ろし、だが身体は靈圧の方向に向けたまま、先を睨み付ける。暫しの間待つと、やがてその正体が露になる。

「——あらら？　もう鍛錬は終わりがいな」

その男はノイトラの眼前に降り立つと、残念そうに言った。

「…別にええか。そっちはついでやったし」

「デメエ…」

「や、こーして直接話すんは初めてやな？」

妙に馴れ馴れしく語り掛けて来るその男。

その声や雰囲気からは、ザエルアポロと負けず劣らずの胡散臭さを感じる。ノイトラは何処かデジャヴを感じながらも、冷静に問い掛けた。

「何の用があつて此処に来た——市丸統括官サマよお」

「…フフ、何でやと思う？」

その鋭い視線を受け流しつつ、市丸ギンは不敵に笑った。  
ノイトラは無性に左胸部下——胃の部分は無性に抑えたい衝動に駆られた。

## 第三十七話 三日月と蛇と、店長と主人公と：

市丸ギン。元護廷十三隊、三番隊隊長。

百年以上、その長きに亘つて藍染に付き従つて来た副官であり、彼と共に暗躍していた共犯者。

だがその真意は別。幼少期に幼馴染である乱菊の魂魄の一部を奪つた藍染への復讐で占められており、その目的の為なら例え悪人と蔑まれ様が躊躇しない。

死神を志したのも、乱菊が悲しまずに済む様、尸魂界を変える為。

それ等の事情を踏まえると、ある意味ギンは東仙と同類に含まれると言つても良いかもしれない。

常に薄ら笑いを浮かべ、常に飄々とした態度を取り続ける掴み所の無い性格の持ち主であり、例え人を見る目に優れた者でも真意を読み取る事は不可能だろう。

大切な者の為に、世界を敵に回す。一種の英雄譚とも思えるその生き方は到底真似出来るものではない。

仲間達の成長を促す為に憎まれ役を買つて出るレベルとは一線を画す。

その行く末に自身の救いは皆無。その事を理解していながらも、最期まで貫き通す

その覚悟は称賛に値する。

かく言うノイトラも、一人の男としてそんな在り方に敬意を抱いていた。

最近漸く覚悟を決めたが、それまで相当時間を要した自分とは大違いだと。

「いややなあ、そない警戒せんといてな。ちよつとショックやでボク」

そうは言いつつも、ギンは欠片も笑みを崩していない。

相手の態度を軟化させ様としている訳では無いのは明白。

「自分の立場を思い返してから言えよ、アンタ」

意図が掴めないその態度は、ノイトラの表情を更に引き締めさせた。

断じてそのペースに流されてなるものかと。

ギンはその本質こそ尊敬に値するが、逆にマイナス要素もある。

誰が傷付き、倒れ様とも躊躇わない。そうやって周囲を利用するのはまだ理解出来る。だがその為に時折相手の心を弄び、貶したりする部分はいただけない。

自分を徹底的に悪者に仕立て上げるといふ意図があるのだろうか、ノイトラは如何し

てもそれが気に食わなかった。

瀟靈廷に囚われ、処刑寸前だったルキアに希望を持たせる様な事を囁き、彼女が期待を抱いた途端に嘘だと暴露。死を覚悟していた筈のその精神を酷く揺さ振った。

所謂上げてから落とす。追い詰められている者に対しては最も酷な行為であろう。

三番隊の副隊長であり、左目を絶えず前髪で隠した、基本真面目だが気弱で暗い性格の男——「吉良 イヅル」。

今迄の積み重ねにより、絶対的な信頼を向けて来る様になった彼をギンは利用し、仲間同士で争わせる様に仕向けた。

一切表情を崩さずに平然とそれ等を行う姿は、正に悪人中の悪人。憎悪を向けられる要素しか無い。

幾ら何でも此処までの事をすれば、例え最終的にギンの真意が明らかになったとしても結果は見えている。

確かにある程度は理解されるかもしれない。だがそれまでの過程から、乱菊を除けば殆ど同情はされないだろう。そして間違ひ無く歴代でも屈指の悪人として扱われる。

だがギン本人は気にも留めない。

それは——何と哀しい姿か。

「ダイジョーブやて、今回はボク個人の用事で来ただけや。そないな氣い張らんと」

無表情で視線を向けて来るノイトラに対し、大袈裟に両手を振ってアピールするギン。

だが元から持ち合わせている、胡散臭い且つ不気味な雰囲気がその信用性を著しく殺いでいた。

何も知らぬ他人であれば百人中全員が嘘だと断言する程に。

「じゃあ此処じゃ無く、後で俺ん所の宮に顔出せよ」

ノイトラとしては正直、此処が特定されるとは余り考えていなかった。

目星としている場所への移動だけに三十分以上掛かる上、其処から更に不特定の方向へと距離を取るのだ。

響転込みでその移動時間だ。特定するどころか辿り着く事すら大変な労力を要する。だがそれには敢えて触れない。厳密には問い掛けても意味が無いというのが正しい。

ギンの性格を考えれば、素直に答える訳が無いと容易に想像が付く。飄々とした態度や虚言を駆使してはぐらかすに決まっている。

「うーん、出来ればキミだけと話したいんやけどな。藍染隊長にもあんま聞かれとうない内容やし」

「…何？」

「それに——キミの為でもあるんやで？」

悩む様にして顎に手を当てながら、ギンは呟く。

その口元は僅かに吊上がっていた。

ノイトラは一瞬だけ眉を動かしたが、それ以上の反応は示さなかった。

——内心ではザエルアポロと対峙した時以上に警戒心を上げていたが。

「…如何いう事だ」

「そやかて困るやろ？　いくら個別の宮つちゆうても、虚夜宮の中で、キミが——いや  
キミ達が、藍染隊長に反逆を企てるのかどーかを問い詰めるんは」

「——っ」

此処で僅かに息を？んだ事以外、殆ど反応を示さなかったノイトラは称賛に値すべき

だろう。

——反逆とは、一体如何いう事なのか。

確かに秘密裏に色々と目論んではいる。だがその内容は、藍染への真つ向からの反逆とは言い難い内容だ。

打合せもセフィールの自室のみで、しかも細心の注意を払った上で行っている。

藍染でもあるまいし、如何考えてもギンにバレる要素は無い筈だ。

だが現にこうしてギンは知っている素振りを見せている。

バレた原因は考えてみれば幾つかあるが、どれも決定的とは言い難い。

其処でノイトラは普段は意図的に抑えている野性的勘を全力で働かせる。

ギンは先程これは個人的な用件だと、そして藍染には聞かれたく無いと言った。その真偽を確かめる為だ。

もし彼の言葉が本当であれば——十分に対処は可能。

今迄伊達に考察を重ねてはいない。ギンや東仙にバレた場合の対策も確り考慮している。

結果は直ぐに出た。何処までが真実かは不明だが、これはギンの言葉通りな可能性は高いと。

実は既に藍染へ報告済みなのではないか、今も何処からか監視されているのではない

か。

最悪を想定すれば幾らでも可能性が浮上して来る。

だが勘はそれを否定している。何時ぞや感じた様な違和感も無い。

「この間見たんよ。キミの従属官二人が、コソコソ話しとるのを」

「…で？」

「たしか…藍染隊長を止める言うてたな」

ギンの言葉を信じるならば、余りにも迂闊。

だがノイトラは以前より仲間の事を信用する様になった為か、それを鵜呑みにする様な事はしなかった。

加えてセフィーロとは、そういった話を行う場合は必ず自室で行う様、嚴重な取り決めをしている。

今後の命運を左右する内容だ。忘れていたとは考え難い。

——寧ろ見られているのを知って居たのではないか。

セフィーロに対して疑念を抱き始めている事に気付いたノイトラは、其処で一旦思考を打ち切った。

考えてみると、ギンの発言内容も何処か引つ掛かる。

見たとは言うが、どの様な状況で見たというのか。

物影から覗いていたのは有り得ない。セフィーロの周囲には常に口力が反膜の糸を張り巡らせている。感知すれば直ぐに報告を受けている筈だ。

ならば残された可能性は一つ。虚夜宮の壁に無数に存在する監視装置だ。

だがそれは映像のみ。音声までは拾えない筈だ。

だがあのギンの事だ。確固たる証拠が無くとも、得意の話術で当事者に自供させる形に持ち込む程度はしそうだ。

まるで悪辣な警察官による容疑者への尋問である。一度でも認めてしまえば、後はトントン拍子に事が運ばれ——実際は冤罪であつても有罪にされてしまう。

ギンの場合、確実にそれを自身の目的の為に利用する筈だ。

反逆を企てていたとして、事前に阻止したと藍染に報告。彼からの信頼を得る形にしたいのか。はたまた弱味を握った事でノイトラを裏から従え、藍染を仕留める際の布石にでもするのか。

どちらにせよ躊躇無く使い捨てるだろう。ギンはそういう男だ。

だがノイトラの目的は、あくまで自分と仲間達の生存。そしてこの世界を史実の通りの展開にする事だ。

藍染の打倒は完全に一護任せ。崩玉との融合後の完全覚醒を阻止するだとか、直接的に何かをする心算も一切無い。

目的さえ果たせば、後は我関せずなスタンスを貫く予定だ。

「…へえ、それが本当なら大変だな」

「あら、あくまで恍けるつもりかいな」

「さあな」

他人事の様に語りながら、ノイトラは悟った。

ギンは恐らく嗅ぎ取ったのだ。自分と同じ、頑なにその真意を隠しつつ暗躍する者の匂いを。

これでは幾らシラを切ろうが、彼の目は誤魔化し切れない。

——出来れば実現してほしく無かったこの状況だが、致し方無い。

ノイトラは腹を決めた。以前までの自分であれば、この場面を如何にか乗り切らんと必死に言い訳を考えていた事だろう。

だがそれはもう終わりにする。

遣れるか遣れないかを考えるのでは無く、遣るのだ。

「困ったなあ、これは藍染隊長に報告せなあかん——っ!？」

肩を竦めて眩くギン。だが気付けば彼は次の瞬間、地面へ仰向けに倒されていた。直ぐ様立ち上がりんとするも、その額はノイトラの右手が押さえ込んでおり、ビクともしない。

「なんの…つもりや…？」

「まあ落ち着けて」

ノイトラは優しい笑みを——傍から見れば悪巧みしている極悪人でしか無いそれを浮かべながら、静かに語り掛ける。

だがその口調とは裏腹に、彼の全身からは対峙した者が思わず黙り込んでしまう、強烈な威圧感が放たれていた。

ギンの表情から一切の余裕が消える。

そして威圧感と同時に感じた言い様も無い悪寒に、僅かに身体を震わせた。

「そういやアンタには謝らねえといけねえ事があつたな」

「…なんやいきなり」

「こないだは悪かつたな。アンタの大切な幼馴染を傷付けちまつてよ」

「っ!!？」

ノイトラが放つたその言葉に、ギンは思わずその細目を見開いた。

——何処で、それを。

自分の情報は一切外部に漏れてはいない筈。虚夜宮では特にそうだ。

唯一詳細をしっているのは藍染のみ。彼が意図的に流した可能性も考えられるが、まず有り得ない。例えそうしたとしても一切得が無い。

「キミは…どこまで知って…」

ギンの勘が囁く。眼前の破面は己の全てを知っていると。

出来る事なら、今直ぐ此処で始末して口封じするのが最良の選択。

だが状況的に見てそれは不可能。斬魄刀の柄にさえ手が届けば全て解決するのだが、ノイトラがそれを許すとは思えない。少しでも妙な動きを見せれば、即座に頭部を握り

潰されるだろう。

つまりは八方塞。相手の出方を窺うしか無いのが、ギンが置かれた現状だった。

「さて、ちよつくら『世間話』と洒落込もうや。なあ——同志」

ノイトラは今迄に無い程、凶悪な笑みを浮かべた。

何時もの起床時の様に、ゆつくりと瞼を開いて起きる一護。

——此処は、自分の部屋か。

見慣れたこの天井は間違いない。

一体どれ程眠っていたのだろうか。一護は寝起きで回転の鈍い頭でボンヤリと考える。

暫しの間呆ける様にしていたが、やがてはつと正気に戻った。

脳内を駆け巡る記憶の奔流。

藍染の配下の破面達による、二度目の現世侵攻。

虚化習得の為の修行の真つ最中であつた一護は、消耗しているにも拘らず、周囲の制止を振り切つて飛び出した。

そんな彼の前に現れたのは——グリムジョー・ジャガージャック。

ルキアの腹部を貫手で貫いたばかりか、抵抗の意志を見せた彼女の右腕を挽ぎ取つた下手人。

そして卍解した一護を斬魄刀も抜かずに圧倒するなど、因縁のある破面だつた。

手加減は無用。寧ろしている余裕など皆無。それ程までに、グリムジョーの実力は極めて高い。

そう判断した一護は躊躇う事無く卍解し——虚化という切り札を切るや否や、先手必勝とばかりに斬り掛かつた。

想像を超えたその力に動揺したのか、後手に回るグリムジョー。その御蔭で初撃で多大なダメージを与える事に成功する。

ある程度抵抗されたものの、戦況は此方が圧倒的に有利。このまま勝負が付くかと思われた。

だがそうはならなかった。一護は虚化の持続時間を失念していたのだ。

砕け散る仮面。糸が切れた様に脱力する身体。

その隙だらけな一護目掛け、グリムジョーは胸部に横一閃の斬撃を叩き込んだ。

戦況が引つ繰り返ったのはそれから。

自らに酷使に酷使を重ねた一護は、反撃どころか満足に動く事すら叶わない。

結果、好き放題に蹂躪され、絶体絶命の危機にまで追い込まれる。

援護に来たらしいルキアが不意討ちを仕掛けるが失敗。逆に反射的に放たれた虚閃に飲み込まれて安否不明となった。

「何をやってんだ俺は…!!」

一護は自責の念に駆られた。

自身の無力さもあるが、一番の理由はその後の行動に対してだ。

あの窮地を乗り切る力を渴望したのは覚えている。その直後、何処からともなく力が湧き出たかと思うと、再び虚化。逆にグリムジョーを蹂躪し返し始めた事も。

態と殺さぬ様、致命傷にならない程度の斬撃を繰り返し、相手が苦しむ様を見て嘲笑うその姿。まるで悪魔の所業だ。

絶対的優位に立つたが故———と思えば理解出来無くも無いが、あくまでそれを行つたのは一護だ。

調子に乗り易い若者なら未だしも、彼の性格上、その様な行動を取るのには有り得ない。ある程度の力を見せ付け、自分は如何あつても勝てない相手であると理解させた上で降伏を促すなど、極力戦いや殺し合いを避ける方向で動く筈である。

真子が止めてくれなければ、確実にあのままグリムジョーを手に掛けていた事だろう。

極限まで追い詰められた上、二度も同じ仲間を害されたのだ。通常であれば、怒りや焦燥等の感情が入り混じり、暴走しても何らおかしくは無い。

だが一護はそうは思わなかった。

———これも全ては自分が弱いせいだ。

そう自己嫌悪しながら。

「くそっ…!!」

拳を握り締め、自身の額にぶつける。

明らかな八つ当たりだ。

その手首はグリムジョーの斬魄刀に貫かれ、到底動かせるレベルでは無い重傷を負っているのも御構い無しに。

だが一護はふと気付いた。

その手首から一切の痛みを感じないのだ。

寧ろ頗る調子が良い程である。極度の興奮によつてアドレナリンが大量分泌されている訳でも無し、これは余りにも不自然だ。

「まさか…!?!」

一護は咄嗟に手首に巻かれた包帯を解くと、驚愕。

何せ其処には傷どころか、汚れ一つも無かったのだから。

「———の靈圧は…」

手首を額に当て、その部分に微かに残った霊圧の痕跡を探る。

此方を包み込む様に柔らかく、優しいそれ。間違い無い。

——井上のだ。

一護は確信した。この手首にあつた筈の傷を癒したのは織姫だと。

霊圧もさることながら、此処まで跡形も無く綺麗に治療を施せるのは彼女以外には居ない。

後で御礼を言わねばならない。一護がそう考えた直後だった。

「間違いなく井上サンのものツス」

「っ…浦原さん!？」

突如として聞こえて来た声。一護は弾かれる様にして振り向く。

其処には何時の間に居たのか、部屋の入口近辺に直立する喜助が居た。

彼のその身に纏う雰囲気、一護は違和感を覚えた。

何時もの様に此方をからかいに掛かってくる様子も無いし、掴み所の無い飄々としたものは一切感じられない。

帽子の影から覗く眼からは、真剣と言うよりも何処か険しいものが見て取れる。思わず一護はそれを問い掛けようとしたが、それよりも早く喜助が口を開いた。

「二日」

「？」

「破面達がこの町に侵攻してきた日から経過した日数ツス」

「なっ…!!」

一護は絶句した。

自分がグリムジョーとの戦いから二日間も眠り続けていた事に。

—— 幾ら何でも遣り過ぎだ。

意識を飛ばした張本人である真子に対し、一護は内心で文句を零した。

彼自身が相当に消耗していた可能性も考えられるのだが、この大事な時に二日も無駄にしてしまった事で焦燥に駆られていた彼は、てっきり真子が犯人だと思い込んでいた。

「ちなみに平子サンは関係ないんで、彼に怒るのは見当違いツスよ」

「っ!？」

喜助から突如として飛び出した予想外の発言。一護はその考えを取り消されると同時に、暫しの間思考が硬直した。

——もしかしくなくとも、知り合いなのだろうか。

一護は思わず真子との関係を問う質そうとした。

だがそれは喜助から向けられる鋭利な眼光によって止められる。

「……色々聞きたいことはあると思いますが、今は勘弁して下さい」

「……わかったよ……」

喜助は普段より、己の事について殆ど語らない。

只単に秘密主義だからという訳では無いのは知っている。

尸魂界から帰還した時、崩玉の存在等についての詳細を殆ど説明しなかった事について頭を下げられた事から、只ならぬ事情があるのだろう。一護は理解していた。

浦原喜助という男は、一護にとっては色々と大きな存在だ。

死神の力を取り戻す手助けをしてくれた協力者であり、斬魄刀の名を聞き出す切っ掛

けを作ってくれた恩人であり、死神としての戦い方を教えてくれた師匠。

そして多少胡散臭い部分はあるが——大切な仲間の一人だ。

仲間というのは護るものであり、信じるものでもある。

そう考えた一護は、食い下がる事も無く大人しく引き下がった。

——ちなみにこの時、喜助の見せた眼力の凄まじさに、思わず男の象徴が竦み上がっていたのは内緒だ。

「…それじゃ本題に入ります」

そう言うと、喜助は一護に視線を合わせた。

態々自分の所へ訪れてまで話したい事とは一体何なのだろう。

緊張した面持ちで、一護は次の言葉を待つ。

「井上サンが誘拐されました」

「!!」

「下手人は左頭部に仮面を被った、白色の肌を持つ破面ツス」

——あいつか。

初めて空座町へ現れた三人の破面。その内一人の特徴と一致する。

「どうやら二日前の侵攻の真の目的は、こちらの目を逸らす為の陽動。まんまと嵌められてしまいましたよ」

「何で…」

「恐らく井上サンの能力が目的でしょう」

何故織姫が攫われなければならないのか。

一護は疑問を抱く。

それを読んでいたのか、喜助は言葉を繋いだ。

確かに盾舜六花の能力は特殊だ。攻撃力や防御力はそれ程でも無いが、治療については並の回道すら容易に上回る。

だが貴重な戦力を削られる様なリスクを負ってまで入手しようとするのは考えにくい。

一護は如何にも理解が及ばなかった。

「あれからアタシなりに調べてみたんすけど、盾舜六花の持つ能力の本質は、単純に攻撃を行ったり、防いだり、怪我を治すものでは無い事では判りました」

「なんだって…?」

喜助の口から語られる信じ難い内容。

“事象の拒絶”という、織姫の能力の在り方。

熱くなり易い為に判り難いが、基本的に頭は良い方である一護は即座にその異常性に気付いた。

ルキアの右腕の例がある様に、本来ならば完治不可能な規模の怪我ですら治療出来たのも納得だと。

——そして藍染がその能力を求める理由も。

「井上サン 능력は対象を選ばない。人のみならず、無機物にも効果はある」

「まさか…」

「ええ…下手すれば崩玉もその範囲内かと」

開発者本人の喜助ですら破壊不可能だった崩玉。

それを考えると、損傷部分を直すといった理由では無いだろう。恐らくはその中身。

何体居るかも不明な破面に、少数精鋭である十刃。これだけの戦力を揃えたのだ。恐らく相当崩玉を酷使したのだろう。

藍染は衰弱した崩玉を、織姫に回復させようとしている。

現状で一番可能性が高いのはそれだろう。

または今後——崩玉に負担が掛かる様な何かをしようとしていると見るべきか。

もしそうだとすれば、最悪の事態が考えられる。

多大なリスクを負ってまで敵勢力の一員である織姫を確保する程だ。一体何を成そうとしているのか想像も付かない。

もしかすれば十刃を超える秘密兵器でも作り出そうとしているのではないか。

一護は拳を握りしめる。

どちらにせよ、一刻でも早く織姫を救出せねば拙いと。

「例え目的が崩玉の回復ではないとしても、彼女は治療要員として極めて優秀です。なにせ肉体が欠損しても元通りにできるんすから」

——本人の前であんな事を言った手前ではあるが。

喜助は己の過去の行いを悔いた。

以前より織姫の能力の異常性、そして藍染がそれに注目しているであろう事実気付いていた喜助。

そんな織姫に正面から態と厳しい言葉をぶつけ、短期間のみでも戦場から遠ざけんと画策した。

勿論、その内容の殆どが嘘。戦力として全く期待出来無いのはその通りだが、その能力の有用性については疑うまでもなかった。

だが今となつては全てが無意味と化した。

言い訳はしない。断界の移動時を狙われるという可能性を考慮しなかったのは失態以外の何物でもない。

——この様で天才などと、笑わせる。

技術開発局局長の後任として活躍しているであろう、元部下の姿が思い浮かぶ。

自分と言う枷が無い今、恐らく今の自分にも匹敵し得る技術を身に付けている事だろう。喜助は思った。

「さて、どうしますか黒崎サン」

「——決まってる」

何処か試している様にも見受けられる、喜助の問い掛け。

一護は少し間を置いた後、答えた。

「井上を助けるんだよ!!」

「どうやって?」

「藍染<sup>あいづら</sup>達の拠点に直接乗り込んでだ!!」

「その拠点——虚圏まで行く為の手段は?」

喜助の最後の問いに、一護は思わず言葉を詰まらせた。

確かにそうだ。織姫を助けたいという気持ちは本物だが、それに至る経緯に障害があり過ぎる。

「山本総隊長からは待機を命令されています。尸魂界の援助は期待出来ません」  
「…だからルキア達が居ねえのか」

半ば確信しながら、一護は静かに呟いた。

話しの最中、密かに霊圧探知を働かせていた彼は、現在の空座町の何処にもルキア達の霊圧が存在していない事に気付いていた。

織姫の誘拐を聞けば、ルキアと恋次辺りは確実に動こうとする筈だ。

同じ仲間としては極めて共感出来るが、立場ある者が人間一人の為に動くとなれば、組織の一員としては失格。確実に止められるだろう。

恐らくは、織姫の救出を進言したが受け入れられず、今度は自分達が試みようとして止められた挙句、強制的に送還されたと考えられる。

一護は殆ど正解にも等しい想像をした。

「そうッス。なので今動けば、尸魂界の意向から背く事を意味します。下手すればその瞬間を以て、協力関係を切られる可能性だって考えられる」

とは言う者の、喜助としてはその可能性は極めて低いと考えている。

いまいち安定性に欠ける部分もあるが、一護の持つ戦闘能力は並みの隊長格を上回ると言つても差し支えない。

藍染との決戦は互いの勢力同士の総力戦。

その中に一護の存在が加わっているかいないかでは、大きな差になる。

「…上等じゃねえか」

「!!」

「井上は俺の仲間だ。尸魂界がどうだろうが関係無え!!」

——井上の救出ついでに、藍染も倒して来てやる。

視線でそう豪語する一護の姿に、喜助は瞠目した。

一見すると、只単に感情の高ぶりに任せての言葉に見える。今迄も何度かあった事だ。

一護の取ろうとしている選択は無謀に尽きる。

だが喜助は必ずしもそうだと断言出来無かった。

何故なら今迄の実績が、それを只の蛮勇では無いと証明しているのだ。

ルキアを救出に尸魂界へ乗り込んだ時などは特にそうだ。

あの時の一護は副隊長以下三席未満の実力しか持つておらず、如何考えても無事に目的を達成出来るとは到底思えなかつた。

他の仲間達についても同様の事が言えた。

だが——成し遂げた。

一護などは三席一名、副隊長四名、隊長二名を撃破するという戦績を残している。

凡百の死神が百年努力しても辿り着けない領域に居る存在を、十数年生きただけの人間が——死神の力を手に入れて一年もしない者が超えた。

何という奇跡か。護廷十三隊の中でも天才と謳われる冬獅郎でもこうはいかない。

「だから…協力してくれ、浦原さん」

「……………」

一護は深々と頭を下げた。

その姿からは尋常ならざる覚悟が伝わってくる。

しかしだからと言って、喜助としては容易に了承の返事を返せないのが現状だった。最たるものが、敵勢力の規模。藍染が率いる主戦力である十刃についてだ。

No. 5という中堅クラスであるあのノイトラでさえ、解放も無しに自身や夜一を含めた実力者数人を圧倒する程。

少なくとも、残された上位の四人はそれ以上の実力を持つ事は間違い無い。

そんな者達の相手を、果たして今の一護が出来るだろうか。

客観的に見ればほぼ不可能。

一護は確かに強くなった。恐らく、現十三隊の隊長クラスの上位には確実に食い込める。

一年所か半年にも満たない、この短期間で。有象無象の虚に苦戦していた頃が嘘のようだ。

だが所詮はそれだけ。喜助の見積りでは、現在の一護が相手取れるであろうレベルの上限は、今迄に二度対峙しているグリムジョー。

まかり間違つてもノイトラには敵わない。

——せめて半年か、最悪一月でも準備期間があれば。

喜助は思った。それだけあれば、まず確実に一護は十分過ぎる程の実力を付けていた事だろうと。

だが幾らもしもの話を考えても意味は無い。今は現実に目を向けるべきだろう。喜助は思考を切り替える。

合理的に考えれば、此処は一護を引き留める事が正解だ。

現状のまま虚圏へ向かつて、犬死にしかない。

だがそれでも確かに可能性はある。らしく無いとは思いつつも、喜助は思った。

頭脳はさておき、戦闘面では今迄に類を見ない才能を持つ一護。

その驚異的な成長速度は、もはや天才を通り越して異常である。

逆境を経験すれば、人は否応なしに成長する。それは皆共通認識だろう。

その場合、通常の成長率を二・三倍と見ると、一護はそれ以上——十倍も二十倍も上がる。

この事実が、基本合理的な思考で以て行動する喜助に変化を齎した。

もしかすると、一護なら如何にかしてしまふのでは、と希望を抱く程に。

今迄に無いレベルの死線を潜り抜けた末——グリムジョーを含めた十刃達を蹴散らし、やがては藍染を打倒せしめるまでに至る、通常であれば有り得ない未来を。

喜助は暫し間を置いた後、観念した様に溜息を吐いた。

——全てを一護に任せる訳には行かない。

自分も出来る範囲で手助けすべきだろうと。

喜助は現在解析を進めている黒腔。それも含め諸々を、本日中に片付ける事を決めた。

「…はあ、わかりました」

「!!」

「ただ、今直ぐにとはいきません。少し作戦を立てましょう」

喜助は振り返ると、自身の背後の空間に杖の先端を付け、大きな円を描く様にしながら始めた。

するとその杖が辿った後に切れ目が入って行く。

完全に円を描き切らぬ内に止め、杖を下ろす。

そしてその切れ目の一部に手を掛けた。

「入って良いですよ」

「なっ……お前等……!!」

まるで本のページの様に、切り目が入った内側の空間が手前へ捲られる。

一護は思わず声を漏らしていた。

何せ捲られた空間の穴に、見知った人物が立って居たからだ。

其処を通り、一護の寝室へと入って来たのは二名。

片方は自身の親友であり相棒である茶渡泰虎。

その姿はスポーツタイプの黒い長袖シャツに、伸縮性のありそうな白いズボンといつた、動き易さを重視した格好をしている。

残るはもう一人は——同じ高校のクラスメイトであり、嘗て死神に滅ぼされた筈の滅却師の生き残り。

初めは敵として対峙し、和解して以降は口喧嘩ばかりだが腐れ縁といった感じで付き合いが続く。

ルキア救出の際にも協力し、そしてその際に滅却師の力を全て失い、戦線からは完全に退いた筈の男——石田いしだ 雨竜うりゅう。

「チャド!! 石田…!!」

アニメキャラのコスプレと言っても差支えないデザインデザインの白装束を身に纏った彼は、馬鹿にする様な薄い笑みを浮かべながら、言った。

「——何だその目は。もしかしてまだ寝惚けているのか、黒崎」

——この大変な時に呑気に眠りこけているぐらいだ、しょうがないか。はっ、と最後に鼻で笑った雨竜に対し、一護は額に血管を浮かび上がらせた。

## 第三十八話 三日月と姫の新衣装と、毒娼と…

ノイトラはチルツチと共に、織姫の拠点の宮へと訪れていた。

理由はつい先程織姫専用の白装束が完成し、その御披露目をしたいとの事で、セフィーロから呼び出されていた為だ。

正直、ノイトラは一々それを確認する必要性を感じていなかった。

それはそうだろう。何せ如何なるデザインになるのか既に知識として知っているのだから。

なのに何故此処に居るのかと言うと——何時もの通り、勘。

断ると少々厄介な事になってしまうと、妙な胸騒ぎを訴えていたからだ。

「ダッ、ダダダダダダダダダ〜！」

「…だ…だだだ…」

眼前ではセフィーロとロカが、其々に大きな白い布の両端を持ち上げ、何かを隠している。

効果音の代わりなのだろう。セフィーロは何処かはしやいだ様子で声を上げる。

何故かロカもそれに合わせているが、途切れ途切れだ。やはり恥ずかしいのだろう。その証拠に、無表情ながらその頬は仄かに赤い。

——無理して遣らんでも。

ノイトラは苦笑した。

十中八九、遣る様に頼まれたのだろうが。

事実、ロカはこういったものは全く慣れておらず、気乗りもしない。

だが断れなかった。セフィーロには返し切れない恩がある上、彼女の為になるのならと勇気を振り絞ったのだ。

これを踏まえると、大概ロカも御人好しだった。

「ババ〜ン!!」

セフィーロがやがて大きな声を上げると、白い布が下げられる。

その先には——虚夜宮の一員の証明である白装束に身を包んだ織姫が立って居た。

「あうあう…」

だが様子がおかしい。

何時からそうしていたのだろう。織姫は胸元と腹部を両腕で覆い隠し、上体をやや前方へ丸めた状態で、身体全体を横に向けている。

その顔も真っ赤に染まっており、時折漏れる声も言葉に成っていない。

「…ブツ?!」

暫しの間首を傾げていたノイトラだったが、その原因に気付いた途端に嘔き出した。

黒いラインの走った袴に、それを止める黒い帯。膝下まで伸びる外套。

取り敢えず全体的なデザインは史実通りだ。

——両腕で隠し切れていない、その腹部と胸元の中心が大胆に開けている部分を除けばだが。

色気抜群な谷間と、その完璧なプロポーションから来るへそ丸出し。

何というか——非常に悩ましい。

もはや目に猛毒である。思春期の男子にとってはそれ以上。視界に入れた途端、瞬時に野獣と化してしまってもおかしく無い。

制作担当であるロカカの仕業で無いのは確実。彼女はあくまで指示を受けつつ作業を進めた側だ。

となると、全ての原因はデザイン担当であるセフィーロにある。

その当人は現在、その豊満な胸を張ってドヤ顔をしている。それは口元を中心に顔の大半がマスク状の仮面の名残に隠れていても直ぐに判る程。

「やややく、何度見ても最高傑作ですねぇ〜」

「いやいやいや、如何いう事だコレは!!? 明らかに恥ずかしくてんだろ!!」

むふー、とワザとらしく鼻を鳴らすセフィーロに、ノイトラは声を荒げつつ問い掛けた。

確かにこれは確認しておいて正解だった。

実際にこの姿のまま過ごさせてみる。というか羞恥心の余り、織姫自身が普通にして居られるとは思えない。

最悪なのはロリに見られる事だ。彼女の思想的に考えて、藍染を誘惑していると取られてもおかしく無い。

淫売やビツ〇等、余り耳にしたく無い類いの罵声が飛び出しそうである。

「いえいえ、これにはちゃんとした理由がありました〜」

「うう〜…」

背中に向けられる織姫からの視線を無視しつつ、セフィーロは説明を始めた。

白装束制作の件もあつてか、一緒に居る時間が長い分、世間話をする程度には仲良くなつた織姫とセフィーロ。

——ちなみに人見知り気味な口力は余り会話をしていない為、それ程では無い。

——そんな中で話題が上がったのが、好きな異性についての内容。つまりは恋バナだった。

其処で当然、セフィーロは自身の想い人たるノイトラの長所や格好良い部分を惜しみ無くぶちまけ、盛大に惚気話を開始。

——実はその中には事実とは異なる内容が混じっていた様だが、それは言わぬが華だろう。

織姫はそれにアテられたのか、彼女自身も想い人の事をポツポツと零し始めた。

高校のクラス内でも良く話す間柄で、仲は良いのは間違い無い。

尸魂界での戦いの中でも、大切に思われているのは十分に理解出来た。

だがそれは仲間という範疇での話。異性としては決して無い。

現状の関係を打破するには如何すれば良いだろう、と。

それが如何してか——この白装束に繋がったという訳である。

「これならその朴念仁さんも、間違いなく反応するはずですよ？」

「は、反応って…」

「はい、それはもうイロイロエロエロと」

「い、いろ…ってエロエロ?!」

取り敢えず織姫の言う想い人というのは一護の事だろう。

話を聞いたノイトラは納得した。

確かに一護は典型的な熱血タイプだ。何か大きな目的へ向かって突き進んでいる場合、それ以外の事が視界に入らなくなる部分がある。

だが彼とて健全な若者。色事への興味は人並みにある。

卍解習得の修行時、喜助特製の治療効果を持つ特殊な温泉に入っている際、夜一が自分も入るかと服を脱ぎ始め、盛大に動揺したり。

つい最近では日番谷先遣隊の一員として来訪し、寝床を確保せんと言論む乱菊の色仕

掛けに対し、顔を手で覆いながらも指の隙間から覗いていたり。

思い返してみると実にらしい。

ノイトラは織姫に視線を移し、その白装束をもう一度確認。そして確信する。

——これで反応しなければ男では無いぞ主人公。

絶食系男子でもあるまいし、確実に反応を示す事だろう。寧ろ過剰なまでに狼狽えたりはしそうだ。

仲間という身近な存在が、突如女としての魅力を見せるというギャップ。下手すれば陥落するのではないだろうか。

——まあそれはそれで面白いのだが。

寧ろ更に修羅場まで発展してくれば申し分無い。それだけで御飯三杯は軽く行ける。

他人のイチャコラを目の周りに炎の縁取りが施された白いレスラーマスク被って呪を唱えるより、遠くからニヤニヤしつつ眺めて居たい派のノイトラはそう思った。

「の、ノイトラ君…」

「あん？」

向けられる視線に気付いたのか、織姫は再び露出部分を隠しつつ身体を背ける。先程と変わらず、その顔を真っ赤に染めながら。

「その…あんまり見ないで…」

織姫はその多大な羞恥心故か、消え入る様な声でそう零した。

——これはあかん。

慌てて視線を逸らしながら、何故かノイトラは内心で関西弁になる。

美少女が恥じらう姿が、まさかこれ程までに破壊力を持つとは予想外だった。

大抵の男ならば陥落は必至。瞬く間にハートを打ち抜かれていた事だろう。

内心、ノイトラは戦々恐々だった。

異性への耐性が付いていなければ、自分でも中々に危うかったと。

実は憑依前から基本的に年上タイプである筈なのだが、その壁を通り越してまでそう思わせる程の魅力を、織姫は持っている。

流石はメインヒロイン。スキル欄に魅力EXとでも出ていそうだ。

ノイトラはセフィーロに感謝した。

此方の理性を極限まで削り取る、色仕掛け含めた過激なアプローチ。二人きりの時限

定で、稀に見せる妖艶な笑み等の大人の色気に動悸が収まらなくなったり。御蔭でそつち関係については、肉体と精神面の両方が十分に鍛えられた。織姫については予想外だったが、それを除けば大抵は耐えられるし流せる。例えば眼前でハリベルが脱衣K.O.されても全く動じない自信がある。

「…悪い」

メインヒロインというのは、文字通り数あるヒロインの中でも特に重要な存在だ。

主人公の成長を促す手助けをしたり、時に窮地を脱する切っ掛けとなったり、その役割は極めて大きい。

そんな存在に此方から惚れでもしてみろ。報われる訳が無いし、下手すると無駄に物語の流れを引っ掻き回す要素に成り得る。

例え惚れたとしても行動しなければ良いのではと思うだろうが、基本的に男というのは馬鹿だ。自身の恋心を押し殺して大人しくしているなぞ不可能。そんな事が出来るのは強靱な精神力を持つ者か、超人だけだ。

つまり何が言いたいのかというと——何事も身の程を弁えなければならぬという事だ。脇役は脇役、イレギュラーはイレギュラーとして。

それでも尚諦め切れないのであれば、それこそ覚悟を決めなければならない。ギンの様に、全てを敵に回したとしても最期まで貫き通す、確固たるそれを。

意図的な物語の根本となる部分の改変や干渉は、謂わばその世界への反逆に等しい。その世界に存在する主人公へ降り掛かる筈の困難や試練、そしてその役割全てを背負い、全う出来る者であれば、例えメインヒロインに惚れたとしても何も言う事は無いのだが。

「ふむふむ、ノイトラさんも思わず目を奪われるという事は、この作戦は大成功間違い無しですねえ」

セフィーロは両腕を組み、頻りに頷きながら言う。

その横では白い布を丁寧に折り畳んでいる口カが居た。

ノイトラはふと、隣のチルツチが先程から一言も発さず、静かな事に気付いた。視線を移すと、チルツチは顔を俯かせたまま微動だにしていな

「……如何したよ、オマエ」

「……」

一息置いて、ノイトラは静かに問い掛ける。

だが返答は無い。

——頭でも引つ叩いて正気に戻すか。

そう考え、ノイトラが右手を持ち上げ掛けた時だった。

「やっぱ胸なの!？」

「…は？」

突如として大声を上げるチルツチ。

その要領を得ない発言に、思わずノイトラは呆ける。

そんな彼を尻目に、チルツチは怒涛の勢いで言葉を繋ぐ。

「そうよね!! その淫乱女とか、あの露出狂<sup>ハリベル</sup>だって相当だし!!」

「おい、イキナリ何を——」

「クソが!! なんていまままで気が付かなかった!!？」

最後に悔いる様にしてそう叫ぶと、頭を抱えて座り込んだ。その様子に、ノイトラは何をすれば良いのか見当も付かず、混乱する。

「えええ!? も、もしかして修羅場? 修羅場なの!」

「いえいえ、織姫ちゃんには気にしないで大丈夫ですよ」

「で、でもお——」

そんな会話を小耳に挟みつつ、ノイトラはチルツチに掛けるべき言葉を必死に考える。

——織姫の声に微かな期待が含まれているのは気のせいだろう。

彼女の事だ。さり気んに人間関係ドロドロな昼ドラ等を普通に見ていそうではあるが。ノイトラは密かにそう思った。

「…たしかこの前見た本に、異性に揉まれるとデカくなるって書いてたような…」

「お、おい、少し落ち着いて…」

しゃがみ込んだ体勢のまま、チルツチは次第に怪しげな雰囲気醸し出し始める。

ノイトラはそれに妙な悪寒を感じながら、何とか宥め様と優しく声を掛ける。だが届いている様子は全く無い。

次の瞬間、状況は更に混沌としたものへと悪化する事となる。

「——よし……ノイトラ!!」

「お、おう?」

「揉め!!!」

何をトチ狂ったのか、チルツチのその発言に——室内の空気が凍り付く。

皆の表情も同様。

あの口力でさえ、折り畳んだ布を手に持ったままその場に立ち止まり、目を見開いて固まっている。

「ほら、今すぐ!! なんなら吸おうが舐めようが——」

チルツチは立ち上がると、自身の胸を持ち上げる様にして両手で支えつつ、ノイトラへ向けて突き出す。

仕舞には服を引き裂こうと手を掛ける始末。

「いきなり何を言い始めてんだテメエはああ!!!」

「ぎゃふん!!!」

大声でツッコみながら、ノイトラは反射的に手刀を繰り出した。それは見事にチルツチの頭頂部へと直撃。一瞬で彼女の意識を刈り取った。

「一体何だつてんだ…?」

「——それは此方の台詞だ」

突如として聞こえてきた声に、ノイトラは弾かれる様にして振り向いた。

其処には何処か呆れを含んだような雰囲気を見せるウルキオラが立って居た。

「ウルキオラ…」

「藍染様がその女を御呼びだ。さっさと準備しろ」

「ちよつ、おま…!!!」

ウルキオラはそう言うと、直ぐ様踵を返す。

咄嗟に何の用事かを問い掛けようとしたノイトラだったが、既にウルキオラは部屋を立ち去っていた。

「だめえええ!!! あなたが犠牲になる必要はないのよアンダーソン!! きつと別の方法が……!!!」

「いきなり何だ!? ってかアンダーソンって誰だよ!!!」

直後、意味不明な事を叫び始めた織姫。

どうやらその天然不思議花畑脳内にて、妙な妄想を存分に膨らませていたらしい。何せ一護の顔から連想を始め、仕舞には某闘魂の男の様な顔へ辿り着く位だ。

男女間の修羅場から、世界の命運を握る戦いまで脳内イメージが発展していても何ら不思議では無い。

「そんな…まさかあなたが黒幕だったなんて!! 何故なのワルゲス・ヒツキョー!!!」  
「如何にも悪そうな名前だなオイ!!!」

未だに妄想を止めない織姫にツツコみを入れつつ、ノイトラは慌てて準備をし始めるのだった。

織姫の白装束の御披露目から数十分後、ノイトラとウルキオラは藍染の自室の入口付近に立って居た。

一緒に居た筈の織姫はと言うと、先程入室したばかりだ。

ちなみにあの過激な白装束は着ていない。それとは別に慎ましいデザインの物も用意していたらしく、それを知ったノイトラが即座に着替えさせたのだ。

——会う相手が相手だ、流石に拙いだろう。

それにはセフィーロも同意を示し、素直に従った。多少残念がっていたが。恐らく藍染は史実通り、藍染は建前として崩玉の修復を彼女に頼む魂胆なのだろう。ちなみにロリとメモリは移動中に合流しており、織姫に同行している。だが間も無く退室を求められる筈だ。

「…ノイトラ」

「何だ」

思考に耽っていたノイトラの意識は、ウルキオラによって引き戻される。

「あの雑務係の破面——ロリ・アイヴァーンだったか。随分とあの女に敵意を向けている様だが…何故だ？」

その問い掛けに、ノイトラは少し驚いた。

史実よりも心情の変化が早くなっているとは言え、まさかあのウルキオラがロリの態度を気に掛けるまでになっているとは、と。

確かにロリは移動中、時折後方を振り返っては織姫を睨み付けたり、頻りに舌打ちし

たりと不快感を隠してはいなかった。

だがその程度の事、十刃クラスともなれば気にも留めない。

例えるなら、道の端にある石。普通に歩いていけば躓く可能性すら皆無なそれに意識を向ける訳が無いだろう。

ノイトラとしては、寧ろこれは丁度良いと言えた。

何せロリについては、以前よりウルキオラに忠告して置こうと考えていた事項だからだ。

何時話すかタイミングを見計らっていた時にこれだ。このチャンスを逃すまいと、ノイトラは口を開いた。

「…多分、只の嫉妬だ」

「嫉妬、だと？」

ウルキオラは僅かに首を傾げた。

嫉妬という言葉の意味は知っている。だが何故それをロリが抱くのが理解出来無いのだ。

「アイツは藍染様に御執心みたいだからな。大方、気に掛けられてるあの御姫サマが気に食わねえんだろ」

「…良く解らん」

「解らないで良い。テメエはテメエの感じるままで行け」

心と言う存在を感じ取る事すら出来ていないウルキオラに対し、いきなり恋愛感情を理解しろと言う方が酷だ。

物事を理解する為には、段階を踏むというのが重要だ。

まずは一から始まり、最終的に十に至れば良い。一気に五やら十を学び取れるのは天才だけなのだから。

「ま、取り敢えず注意しとけ。あんな奴でも御姫サマを殺す程度は容易だしな」  
「…ああ」

二人の会話が途切れた直後、些か乱暴に藍染の自室の扉が開かれる。

まず真つ先に出てきたのはロリ。それを追い駆けるのはメノリ。

案の定、ロリの表情は溢れ出んばかりの怒りに支配されていた。

「…ふんッ」

彼女は近くに立つノイトラとウルキオラを一瞥すると、そのまま一言も無しに走り去った。

不機嫌なのは理解できるが、それにしても失礼過ぎる。十刃を前にしているとは思えない態度だ。

「ロリ!? も、申し訳御座いません!!」

それに気付いたメノリはその場に立ち止ると、慌てて頭を下げ謝罪した。

——この前注意した筈なのに。

流石のメノリでも、先程のロリの姿には怒りを覚えた。

幾ら苛立っていたとは言え、流石にあれは無いと。

とは言え、ウルキオラは余り気にしていなかった。

直接的な手段さえ取られなければ一切干渉せず、如何に失礼な態度を取られ様が流せる。それが彼の性分だ。

無論、その者に対する評価は最低ラインまで落とすのだが。  
だがノイトラは別だった。

——少し、拙いか。

先程の態度を見る限り、藍染への想いを拗らせるが余り、視野が狭くなっているのは  
確實。

このままではメノリの制止にも耳を貸す事無く、自身の感情の赴くまま、織姫に危害  
を加える可能性が高い。

だが同時にロリ自身の命も危うくなっている。

まあ当然だろう。一介の雑務係の破面が、十刃等の上の立場の者に対してあの様な態  
度を取るのとは自殺行為。

以前忠告した通り、ヤミーやグリムジョーは確実に手を出す。他の十刃についても、  
遅いか早いかの違いだけで、ロリの迎える結末に大差は無いだろう。

ハリベルやスターク辺りなら、敢えて見逃す等の寛大な措置を取る可能性はあるが、  
従属官達が大人しく黙って居るとは考え辛い。

ロリの死と織姫への過剰暴行。どちらの未来が先に訪れるのかまでは読めない。

だが常に最悪を想定して動くべきだ。

ならば必然的に後者への対策が優先事項となる。

「…つたく、面倒な」

ノイトラはそう呟くと、最後に小さく溜息を吐いた。

ウルキオラに警戒してもらっただけでは少々足りないだろう。如何に優秀な彼でも、四六時中対応出来る訳では無いのだから。

故にノイトラは自分で動く事を決める。

——尚、この時の行動理念の根本にはロリへの気遣いも含まれていたりするのだが、やはりこの御人好しは自覚していなかった。

「ウルキオラ」

「…如何した」

「悪いが、少し席を外すぜ」

「…何？」

ウルキオラの疑問の聲に答える事無く、ノイトラはその場から移動を開始する。

「オラ、付いてこいメノリ」

「…へ？　ちよつ、ちよつと待つて下さいノイトラ様〜!!」

途中でメノリの頭をポンと叩いて体勢を戻させると、ロリが立ち去った方向を目指して歩を進めた。

自身の拠点の宮へ向う通路の途中で、ロリは立ち止まった。

途中で不慣れな響転を何度か使用した為、少々息が上がっている。

通常、身体を動かせば気分が晴れるものなのだが、一向に怒りが収まらなかった。

矛先は勿論——織姫だ。

「ホントになんなのよ…あの女…!!」

ロリは盛大に齒軋りした。

畏れ多くも、あの至高の存在たる藍染が気に掛け、且つ自室で二人きりになる事を許容される存在。

——侍女のような自分ですら、未だに二人きりになった時が無いのに。

其処に本人の意思の有無なぞ関係無い。ロリにとっては、そうなったという結果がすべてだった。

——気に食わない。

特殊な能力を所持しているらしいが、それ以外は只の人間に過ぎない。

全く以て目障りな存在だ。身の程を弁えているのだろうか。

それにメモリもだ。最近ではあのノイトラに引っ付いてばかりで、頭を撫でられた褒められたと、御満悦な様子で帰ってくる日が多い。

明確に恋情を抱いているという訳では無さそうだが、あの様子を見る限りは時間の問題だろう。

ロリは理解に苦しんだ。あんな下衆な獣の何処に好かれる要素があるのかと。

しかもだ。この間は誰かの入れ知恵なのか、目上の存在に対する態度を窺めるとい

う、今迄のメノリからは想像も付かない事をされた。

—— 無論、聞き流したが。

だがこの出来事により、ロリはメノリが自身から離れたのだと判断。彼女の孤独が深まるという悪い結果に終わった。

これには事の発端であるノイトラムも、流石に予想出来無かっただろう。

織姫のみならず、ロリにとつて良かれと思つた事が、何もかもが裏目に出る。

正に悪循環。想定していた最悪のパターンが現実となつていた。

もはや今のロリにとつて、自身の周囲を取り巻くもの全てが気に食わなかつた。

その末に—— 開き直つた。

もう自分には藍染様だけだ。あの方が居れば、他は何も要らないと。

だが如何しても織姫という邪魔な存在が居る。

殺害という手段も思い浮かんだが、既の所で堪えた。

何せ他ならぬ藍染が必要だとして確保したのだ。それを勝手に始末するのは流石に拙い。

ならば如何するか。簡単だ。徹底的に痛め付ける事で、その身に解らせるだけだ。

己の身の程を、そして人間風情が藍染に近付けるだけでも光栄なのだ。

無論、殺す事はしない。精神的にトラウマを負う可能性はあるが、その能力さえ残つ

ていれば大丈夫だろう。

ロリは口元を吊り上げた。本来であれば可愛らしい筈のそれは、何故かこの上無い醜悪さを感じさせるものだった。

「覚悟しなさい人間。思い知らせてやるわ…」

「何がだコラ」

「っ!!?」

ロリが呟いた次の瞬間、彼女の背後から突如として声が聞こえて来た。

咄嗟にその正体を確認する為に動こうとするが、不要に終わる。

その声の主は、背後からロリの頭を鷲掴みにすると、そのまま左回りに回転。強制的に背後を振り向かせたのだ。

——勢いが強過ぎたのか、彼女の首元からグキリと変な音が鳴ると同時に、その表情が一瞬引き攣った様に見えたのは気のせいだろう。

「なっ…あんたは…!!」

「よオ」

その並外れた長身故にロリを見下ろす形になりながら、ノイトラは短く挨拶を返した。

後方には誰も居ない。慌てて追従し始めたメモリもだ。

理由は単純。只単にノイトラへ追いつけなかつただけだ。途中で移動手段を早足から響転に変更したのだから。

ノイトラの早足ですら追いつけないメモリが、響転に追いつける訳が無い。

——実はそれだけで無く、焦燥の余り途中で道を間違つたり、頻りに足を捻って転んだりしているのも原因なのだが。

「な、なんで…」

「取り敢えず言わせてもらうぜ。止めとけ」

「っ!!」

視線を合わせながら放たれたその言葉に、ロリは思わず絶句した。

——眼前の男は、自分が何をしようとしていたか全て知っている。

てつきり先程の態度を窘めに、または報復に来るのかと思っていた。

予想外の出来事に思考回路が硬直し、同時に背筋に悪寒が走る。

「なんの事よ…」

「しらばつくれんな…つてかこつち向けよオイ」

言い逃れは許さないと、有無を言わさぬ圧力を放つその視線から逃れんと、眼球のみを外側に動かし、ノイトラを視界から外そうと試みた。

だがその度に頭の位置を調整され、元に戻される。

何度か繰り返しした後、やがてロリは観念した。

そして悟った。この男には、もはや言い訳も何も通用しない、逃れられないと。

「テメエだつて理解してんだろ。あの御姫サマが何の為に連れてこられたのか」  
「……………」

その問い掛けに対し、ロリは口を開かず黙り込んだまま。

だがその目はノイトラを真つ直ぐ睨み付けている事から、恐らく理解しているのは間違いないだろう。

——何が言いたい。

同時にそう問ひ掛けている事も。

「ま、これでも俺はテメエの事を認めてんだぜ？」

——いきなり何を言い出すのか、この男は。

ロリは混乱した。

自身の目論見を暴きに掛かったと思いきや、今度は一転して褒め始める。

全く以て理解不能だ。ロリはノイトラの意図が読めなかった。

そんなロリを余所に、ノイトラは静かに語り始める。

「この虚夜宮で、誰かを一途に想い続けられる奴つてのは中々居ねえ。それが藍染サマみてえな雲の上の様な存在じゃあ余計にな」

「……………」

「堂々と俺に突っ掛つたり出来る、デケエ肝つ玉を持つ奴もだ。ま、一步間違えりや無謀でしか無いんだが…」

「…だから何が言いたいのよ!! はっきりしなさい!!」

回りくどいその言い回しに限界を迎えたのか、声を荒げるロリ。

当然、これも不敬に分類される。

だが悲しいかな、彼女自身は興奮の余り気付いていない。

しかしノイトラは全く動じなかった。寧ろ怒るところか、愉快そうにその口元を吊り上げる始末。

それにロリが更なる苛立ちを覚えたのは言うまでも無い。

「つまりは、だ——テメエは良い女だっつってんだよ」

「…はあっ!!?」

直後、ノイトラから放たれたのは、単なる褒め言葉では無く——口説き文句と云つても差支えないものであった。

勿論、ロリにそんな経験は毛頭無い。寧ろ褒められた事すら殆ど無い。

耐性が無い所へ、それ等が容赦無く放たれば如何なるか。取り敢えず想像に難く無いだろう。

初めての経験に、思考回路が盛大に混乱。凄まじい羞恥心に襲われると同時に、顔全

体に熱が籠つて来る。

全身を硬直させたまま動かなくなつた口リを見ながら、ノイトラは内心でガツツポーズをした。

——これで良い。

過ちを犯した者に言い聞かせる場合、只単に叱るだけでは駄目だ。否定から入り、否定に終わるのも同様。

最も理想なのは肯定から入る事である。その後問題点を提示した上で、改善点を指摘すれば完璧だ。

相手が感情的になり易い者ならば尚更この手法を取るか、慎重に対処しなければならぬ。

これは仕事の指導や教育等、他に対しても共通して言える事だ。

要は自分に置き換えて考える事だ。そうしてみると実に解り易い。

だからお前は駄目だ、此処が悪いと、今迄の実績を無視した否定論ばかり。そんな意見を素直に聞き入れられると思えるだろうか。

如何考えても不可能だ。それが出来るのは余程謙虚で人間が出来た者か、聖人君子だけである。

相手に対する気持ちや行動は、そのまま返つて来る。

“人は鏡”とは良く言ったものだ。

百戦錬磨のビジネススマンでも無し、大抵の人は感情が判り易い。

悪意を抱いて接すれば、そのまま悪意で返されるし、逆に善意でも同様の事が言えた。中にはそれ等全てを上手く利用して立ち回る者も居るが、一先ずそれは置いておく。ノイトラの脳裏を過るのは、恩師の言葉。

——相手の欠点を責め立てるより、良い部分を見付けて褒める事が出来る。そんな器のデカい男になれ。

「だからよ、テメエの価値を下げる様な真似はすんな。折角の魅力モンが台無しだ」

「な……………な……………」

「取り敢えず、俺が言いてえのはこれだけだ」

怒涛の口説き文句に、ロリはまともな反応を返せない。

相変わらず顔全体は真っ赤に沸騰したまま。金魚の様に口をパクパクと開閉させ、言葉にならない声を上げるだけ。

「信じてるぜ、ロリ」

それを気に留める事無く、ノイトラはロリの頭をポンと軽く叩いた後、その場から踵を返す。

五歩程歩いた後、響転で一気に駆け出す。

当然、向かう先は藍染の自室の前だ。

ウルキオラを待たせているのもあるし、何より藍染から任された自身の役割を放棄しては宜しく無いからだ。

そうしてノイトラが立ち去ってからものの数秒後、ロリの前に見慣れた人物が現れる。

少々服装を乱し、盛大に息を荒げたメノリだ。

良く見るとその鼻や額が赤い。どうやら道中遣らかした転倒の中でぶつけでもしたのでらう。

「速過ぎますってノイトラ様あゝ——ってどうしたのロリ!!?」

「あ……」

その大声に、ロリは何処か遠くに飛んでいた意識を引き戻された。

そしてはっと気付く。先程まで自分は何をしていた。只単に醜態を晒してただけではないかと。

しかもその相手が拙い。下手すれば今回の件で味を占めて、何れは——といった最悪の展開が脳裏を過り、ロリの顔色が青褪める。

だが其処でノイトラの放った口説き文句——特に良い女というフレーズを思い出し、再び顔全体に熱がこもるのを感じる。

「だ、大丈夫…?」

「う、うっさい!! 先帰ってなさいメノリ!!」

ロリは如何しても認められなかった。

藍染でもない、あんなケダモノの放った言葉。

言い回しも御洒落染みたものでは決して無い。正に不器用で頭の悪そうな男が好んで使いそうな、単純で愚直な台詞。

にも拘らず——それが嬉しいと感じている自分を。

## 第三十九話 店長と主人公達と、三日月と孤狼と：

一護の自室へと集合した泰虎と雨竜。現在、身支度を整えた一護を含めたその三人は、喜助に連れられて場所を移動。浦原商店地下の勉強部屋へと集合していた。

外は既に日が沈み、十一時を回っている。

一護の自宅を出る直前に決めていた事だが、織姫救出の為に虚圏へと出発する予定時刻は零時。つまり一時間後。

基本的に健全な生活リズムを取っている彼等は、本来であれば夢の世界に旅立っている筈である。だが尸魂界からの支援は皆無という、未だ嘗て無い程厳しい状態で戦場に赴く覚悟を決めた彼等の目に眠気は欠片も見られなかった。

ちなみに泰虎と雨竜は既に修行で得た能力を一護に披露している。

その証拠に、周囲には真新しい戦闘跡らしきものが見て取れた。

「さて——では先程言っていた通り、作戦会議といきましょうかねー」

眼前で座り込む一護達の前で、何やら講義で用いる白いボードの様な物を取り出しな

がら、喜助は明るくい口調で言う。

緊張感を感じない、全く以て空気を読まぬその態度に、一護は元から浮かべている眉間の皺を更に増やした。

だが泰虎や雨竜は気付いていた。それはフェイクであると。

事前に気を引き締める事は確かに大事だが、終始そのままでは精神的な消耗が激しい。超人的な集中力を持つ者であれば持続可能だろうが、生憎自分達はそうでは無い。

精神の疲弊というのは馬鹿に出来無い。時に思考を遮り、隙を生む要因にもなる。

故に喜助は自分達を万全の態勢で虚圏に送り込むべくして、態とそのような態度を取っているのだと。

だが真実は異なる。確かにその様な意図もあるが、最たるものは別。

喜助はこの作戦会議の中で、現時点で判明している藍染側の陣営についての情報を伝える予定だった。しかしだからといって自分まで緊張した面持ちで居ては、一護達を追いつめる原因になってしまう可能性がある。

——自分達が如何にかせねば後が無い。

その様に受け取られてしまうと拙い。最悪、誰か一人でも犠牲を出してしまえば、重要戦力の一人でもある一護に少なく無い影響を与える事となる。

一護達には共通点がある。それは責任感の強さ故に、一人で背負い込む傾向にある事

だ。

そんな彼等に対し、喜助ですら対処不能な事案であると明確に態度で示してみろ。怖気付くとは逆に、自分達の手で覆して見せようと奮起する可能性が高い。

一護達には敵戦力を削るよりも織姫の救出を優先させ、出来る限り早期に虚圏を脱出。そして尸魂界の陣営と合流を果たし、後顧の憂いを断つた状態で藍染側の陣営との最終決戦に臨む事が望ましい。喜助はそう考えていた。

その為には常に余裕溢れる態度を保ちつつ、それに対しての対処法を確立していると仄めかした上で情報を伝える事で、織姫救出という一点に行動を集中させる様、上手く誘導する必要がある。

「今回の作戦の最優先事項は井上サンの救出。それに尽きます」

「…それはわかってる」

喜助の発言に、今更何を言っていると云わんばかりに、やや不機嫌な様子で一護が呟く。

残る泰虎と雨竜も、それとは真逆に真剣な面持ちで頷いた。

——今の所は問題無し。

一護達の態度からその心情を確認した喜助は言葉を繋ぐ。

「ではアタシ個人の見解ですが、皆サン其々の注意点を指摘させていただきまます。癪に  
触る部分があるかもしれないツスけど、其処はどうか勘弁して下さい」

そう言うと、一護達の持つ長所と短所を上げて行く。

まず始めに雨竜。

その鋭い観察眼と分析能力で敵の癖や弱点を見出し、短時間で有効な戦略を練れる部  
分は素晴らしい。それは十刃の様な強敵にも十分に通用するレベルだ。

だが敵が予測を超えた行動を取ったり、自身の練った策が通用しない——または仕  
留め切れない時があつた場合に弱い。戦況が一気に後手に回つてしまう他、動揺の余り  
思考や動きが一瞬止まったりと、致命的な隙を見せる事もしばしば。

喜助にそれを指摘された雨竜は、ややバツが悪そうな表情を浮かべた。

彼は先に述べた長所の他にも、機動力や反応速度は中々に優秀だ。だが攻撃や耐久力  
といった基本スペックが低い。

真正面からの戦いといった力押しに弱いが故に、相手の意表を突いたり、常に頭脳  
戦で相手を翻弄する必要があつた。

「…耳が痛いですね」

——もし戦略を破られても良い様に、もう少し引き出しを増やすべきか。

雨竜は指摘された内容を踏まえ、今持ち合わせている技や道具を一通り頭に浮かべ、新たな運用法を考え始めた。

「では次に茶渡サン」

喜助は今度は泰虎へと視線を移す。

卍解状態の恋次との度重なる模擬戦によって、見違える程の成長を遂げた泰虎の実力は、護廷十三隊で言う副隊長に匹敵する。

やはり特筆すべきはその攻撃力。ある程度手加減はされていたが、それでも「狒狒王蛇尾丸」の巨体を殴り飛ばせる程の膂力は相当なもの。同じパワーファイター同士の単純な力押しでの戦いであれば、まず高い確率で優位に立てる。

だがやはり攻撃に特化した者の宿命か、搦め手や機動力に優れた者が相手となると分が悪い。つまり相性に左右され易いのが欠点だった。

「…む」

とは言え、それは即興で如何こう出来る問題では無い。

本気で修正するとなると、極めて長い時間が必要となる。今はそんな時間なぞ無い。

それを理解していた泰虎は悩み始めた。

——場合によつては入れ替えを行い、相手を変える事も考慮すべきか。

だがこの案には欠陥が存在していた。虚圏に侵入した後、必ずしも終始三人で行動していられるとは限らないからだ。

場合によつては別行動を取らなければならないかもしれない。そうなるとヘルプを頼もうとしても出来無い。

「取り敢えず敵との相性が悪いと感じた場合、退却も視野に入れて置いて下さい」  
「…わかった」

その提案を泰虎が承諾すると、残る一人となった一護は身構えた。

——また何を言われる事やら。

あの喜助の事だ。取り敢えず全部と言っても何らおかしく無い。

「黒崎サンは——特に無いツス」

「…おい待て、そいつはどういう意味だよ!?!」

だが一護のそんな想像は、全て引つ繰り返された。

まさかの何も無しとは、予想出来る訳無いだろう。

喜助の発言をプラス方向に解釈すれば、現状で既に完成されているが故に——とも取れるが、流石に一護は其処まで馬鹿では無い。

この場合は、何を言っても無駄だと判断された、そう見るべきだろうと。

「どういう意味って…言葉通りツスよ? いやー、何も言う事が無いぐらいに成長した黒崎サンってばさいこうでべらぼうにすてきツスねー」

「最後あきらかに棒読みじゃねえか!!!」

後半から明らかに棒読み口調で、喜助は答えた。

煽り耐性の低い一護は即座に声を荒げて反応を示すが、難無く受け流される。

だが実を言うと、喜助のこの発言は考えがあつての事。

確かに今更何を指摘しても、基本的に直感で行動する一護に対しては無意味に等しい。一度熱くなれば言わずもがな。ゴチャゴチャ煩いと、周囲からの折角の忠告も跳ね除けそうだ。

彼はどちらかと言うと、理屈よりも身体で覚える典型的な脳筋タイプだ。変に考えさせるような事を言えば、無駄に混乱させてしまう可能性が高い。

これ等は全て、今迄の経緯を見れば自ずと理解出来る内容だった。ならば如何するか。勉強部屋へ向かう道中で、喜助は考えた。

——理屈等は一切抜きで、突き進んでもらおう。

ある意味丸投げにも等しい考えだが、正直言つてこれが一番無難だった。

誰もが避けるであろう逆境に自ら向かつて行き、その戦いの中で著しい成長を遂げ、やがて打倒する。これこそが一護の真骨頂。

とは言え、ある程度は段階を踏む必要がある。例え補正があるとしても、初期レベルでいきなりラスボスと戦つて勝つてと言われても不可能だろう。

つまり喜助が目論んでいるのは、一護が戦う敵の順序を調整させる事。それ以外は如何でも良かった。

「では次に井上さんの救出を成し遂げる為に大きな障害となるでしょう、藍染の私兵——破面達についての情報を御教えします」

「流すなよ!!!」

一護のツツコみを無視しつつ、喜助は杖の先端でボードの中心を叩く。

直後、ボード全体に複数の画像が浮かび上がった。

それを見た一護と泰虎は息を?んだ。何せその画像には、見覚えがあるだけで無く、その実力の高さを身を以て理解した人物がチラホラ映っていたのだ。反応しない訳が無い。

尚、雨竜は初見の為、興味深そうにそれ等を眺め続けているだけだ。

「では現時点で判明している部分から。まずこの巨漢の破面についてなんスガ——」

喜助は手始めに、破面の中でも頂点に位置する精鋭たる十刃——その一人であるヤミーについての説明を開始する。

階級は第10十刃。解放時の能力は不明。

見た目通り脅力は凄まじいが、その動きは鈍重且つ単純。性格も結構な激情家で、挑

発に対する耐性は皆無に等しい為、搦め手には頗る弱いと推測出来る。

破面特有の高い霊圧硬度を誇る鎧である鋼皮もそれ程では無く、ある一定の攻撃力さえあれば十分に傷付けられる筈であると。

「恐らくこの程度であれば、黒崎サンは勿論、今の石田サンや茶渡サンでも対処可能でしょう」

「…問題は解放した後、ですね」

「ええ。ですがそれは殆どの破面にも言える事ツス」

雨竜の呟きに、喜助は頷いた。

確かに考えてみると、現在確認出来ている十刃の中で解放時の能力が判明しているのは、片手で数える程度しか存在しない。

逆に此方の情報だけが相手に伝わっているに等しい状態である。

つまりは戦力のみならず、情報戦に於いても向こうが上回っていると云えた。

「ですがまあ、その程度の事は想定済みなんで御安心を」

状況は明らかに不利。だが喜助は不敵に笑う。

—— たかがその程度、自分の手に掛ければ如何とでも出来る。

まるでそう語っているかの様に。

普段はこの上無く胡散臭いが、その頭脳と実力は確かである喜助。その事を理解している一護達は、その態度から完全に信用した。

例え今破面達が現世に侵攻して来たとしても、彼さえ居れば大丈夫だと。

「…話を戻しましょうか」

向けられる視線から、思考誘導が上手くいつている事を確認しつつ、喜助は説明を再開した。

階級は不明だが、十刃に近い実力を持つであろうワンダーワイズ。直接相手をしただけに、喜助は戦闘中に分析した内容を丁寧に伝える。

三ケタの数字を持つらしい、只の数字持ちとは思えないチルツチ。如何やら従属官らしいが、未解放時ですら隊長クラスである冬獅郎が苦戦する程の実力を持つ事。

そして第6十刃であるルピについて触れ始めた途端、一護の表情に緊張が走った。理由はその階級から、因縁の相手であるグリムジョーの姿が思い浮かんだからだ。

彼と初めて対峙したのは二度目の現世侵攻時。その時の光景は今でも脳裏に焼き付いている。

明確な勝敗は付いていないが、あれは間違い無く此方の敗北だった。内なる虚の影響か、霊力が極めて不安定だったのも原因ではあるのだが、一護は言い訳に過ぎないとしてその意見を切り捨てていた。

卍解状態の自分をあしらう圧倒的な実力もそうだが、何より覚えているのは本人の口からきいたその階級だ。

確かにグリムジョーは自身の事を第6十刃だと言った。彼の事を良く知っている訳では無いが、嘘を付く性格には思えない。

だが喜助曰く、画像に映るその中性的な顔立ちをした小柄な男こそがその階級だと言う。

一護は疑問を抱いた。グリムジョーの左腕が消失していたのもそれに関係しているのかと。

「そしてこのグリムジョーという破面についてですが…彼については黒崎サンが一番理解していると思います」

「…っ」

「その上で問います。勝てますか？」

突如として放たれた、喜助からの問い。一護は一瞬答えに詰まった。

確かに今回、虚化状態ではグリムジョーを圧倒した。

だがそれは正規の形では決して無い。

一護はあの経験から、自身の持つ虚化に対して僅かに恐怖を抱いていた。

感覚的に見て、持続時間は何十倍にも伸びた。それは判る。

だが如何にプラス思考を心掛けても——不安が拭えない。

また暴走してしまうのではないか、消えた筈の内なる虚の意識が復活してしまうのではないかと。

「勝てる…いや、絶対に勝つ!!!」

だが何時までもそうしている訳にはいかない。

何より優先すべきは織姫だ。己の身を案じるのは後回し。

一護は大声で勝利宣言すると同時に、自身を内側から奮い立たせる。

暴走が何だ、内なる虚が何だ。前者はそうならない様に気をしっかり持てば良い。後

者は例え復活したとしても、また打倒すれば良いだけだと。

「…全く、何を根拠に言っているやら。信用ならないね本当に」  
「んだとてめえ!!」

だがその折角の決意に対し、隣の雨竜から茶々が入る。

即座に声を荒げて抗議の意を示す一護だが、口出した本人は肩を竦めて聞き流すだけ。

雨竜とは逆の位置に居る泰虎は頭を抱えていた。

本当にこの二人は会う度に喧嘩をせねば気が済まないのかと。

「はいはい、じゃれ合いはそれぐらいにして下さいねー」

「おい!! これのどこがじゃれ合いだ!」

「では続けます」

「無視かよ!!」

ぎゃあぎゃあ騒ぐ一護をスルーし、喜助は最後に残した重要な情報を伝えるべく、口

を開いた。

「さて、突然ですが今から言う事は全て事実です。まずそれを前提に聞いて下さい」

表情は変わらず。だがその声に含まれた真剣さを感じたのか、一護達は途端に静かになる。

そうして喜助が語り始めたのは——第5十刃であるノイトラ・ジルガについてだった。

初めてその存在が確認されたのは、一回目の現世侵攻時。

その中でノイトラは、「瞬間」無しとは言え手加減無しの夜一の攻撃を難無く躲すだけで無く、容易く防御出来る程の反応速度を見せ付け、逆に打ち込んだ方の左脚を負傷させる程の鋼皮の強度を持つ事が判明。

しかも直後に放たれた喜助の斬撃を容易く破壊する程の、見事な脚使いを披露する。そして今回の襲撃時、真つ先に交戦したのは一角。序盤はその豊富な戦闘経験と、型破りな戦法で優位に立っていた事。

其処まで聞いた一護は思わず納得した。

確かに一角のあの破天荒ながら無駄の無い動き、そして相手が強かろうとも一切臆さ

ず飛び込める度胸は素晴らしい。初見ならまず流れを持って行かれてもおかしくは無いと。

「ところがどっこい、実はその様に見えていただけでしてねー」

「…なんだって?」

思わず問い掛ける一護。

喜助は緊張感の感じない軽い声でそれに答える。

「どうやら相手の戦闘技術を観察してただけの様で、それが済んだ途端、ノイトラは斑目サンを瞬殺しました。しかも拳による打撃のみで」

「なっ!?!」

一護は思わず声を漏らして驚愕する。序盤の話を聞く限りでは脚技を得意としている印象だったにも拘らず、拳を使ってそれとは如何いう事だと。

もしかして徒手空拳での戦い全般に秀でているとでも言うのか。

彼のように声は発さずとも、残る二人も瞠目していた。

だが良く考えてみると当然だろう。ノイトラは短時間ではあるが喜助や夜一と立ち合い、斬魄刀も使わず難無く切り抜けている。寧ろ妥当と言える。

一角が退場した後、次は夜一が交戦を開始。試作品ではあるが、対鋼皮用の特製手甲を装備した万全の態勢で臨んだ。

今度は流石のノイトラも斬魄刀を使用。巨大な得物を軽々と扱い、彼女と対等に打ち合つて見せる。

それだけでも十分に驚異的だが、仕舞にはその特製手甲を一度に三つ破壊して退ける。

直後、携帯用義骸や隠密機動特有の技術等の奇策によって隙を作り出した夜一が切り札を切り、強烈な一撃を加える事に成功。

だがそれは直撃した腹部に痣が出来た程度で、大したダメージは無い。

それが切つ掛けになったのか、ノイトラは其処で本気を出した。

虚弾という、虚閃と同系統の技。その応用らしき技で援軍に入った自分と冬獅郎、乱菊を含めた四人を圧倒。

その中で喜助が何とか反撃のチャンスを作り出す事に成功するも、結局時間切れとなり、逃走を許した。

その有り得ない事実、一護達は絶句。口を半開きにしたまま啞然とした。

自分達では副隊長なら未だしも隊長数人を相手するだけでも厳しい、と言うか不可能だ。

それに喜助と夜一という、上位クラスの実力者を加えれば——言うまでも無い。真面な勝負すら成り立つか怪しい。

にも拘わらず、それを圧倒するとは如何いう事なのかと。

「解りましたか。そのノイトラですら十刃の中では中堅。つまり残る四人はそれ以上の実力を持っている事になります」

「…悪い冗談ですね」

静かに呟いた雨竜もそうだが、この三人は全員が其々に隊長と戦った経験がある。

泰虎については相手が悪かった為、たった一太刀で敗れたが、それでも隔絶した実力差を悟るには十分だった。

「井上サンを誘拐した張本人…確かウルキオラと言いましたか。彼の階級や実力も未知数ですし——」

少なくとも、ノイトラと同等かそれ以上の実力を持つのは間違い無い。喜助が続けてそう語る。

余りの状況の悪さを理解したのか、流石の一護達も重苦しい雰囲気を発し始める。

「ま、確かに脅威ですが、ちゃんと手は考えてます。これでも尸魂界一の天才と呼ばれてるので、それに恥じない働きはして見せるツスよ」

だが喜助は全く動じない。

通常であれば絶望の淵に落ちてもおかしく無い中、さらりと断言してみせるその姿に、一護達は今迄に無い頼もしさを感じた。

「なので貴方達は必要以上の交戦を出来る限り避けて、井上サンを救出次第、直ぐに虚圏を脱出して下さい。それ以降の手筈は此方で整えて置きます」

その言葉を聞くと同時に、一護達は腹を決めた。

元より立場は危ういだろうに、構わず自分達に協力を惜しまない喜助のその姿勢。

それに応えずして如何すると。

必ず織姫を救出し、全員無事に帰還してみせる。  
其々の目にはそんな覚悟が見て取れた。

「ではそろそろ出発準備を始めましょう。…頼みましたよ？」  
「おう!! 任せとけ!!」

皆の心情を代弁する様にして、一護は力強く答えた。

治療室の室内にて、先程からガチャガチャといった金属音が忙しなく鳴り続けていた。

発信源にはリリネット。見れば彼女は険しい表情を浮かべており、酷く唸りながら両手を動かしている。

その手の内には星を模った金属の輪。それが二つ繋がっており、彼女はそれを縦や横に引つ張ったりと悪戦苦闘していた。

所謂知恵の輪である。

娯楽の少ない虚夜宮だが、治療室は違う。囲碁や将棋、ボードゲーム等も豊富にそろっており、全てに手を付ければ二・三日は軽く潰せるレベルで充実している。

勿論、それ等を手配した人物は言うまでも無い。

食事関係だけでは物足りないだろうと、セフィーロが主導で、ロカが現世で得た情報を元に創り出したのだ。無論、使用者は親しい者達に限定されているが。

「…うがー!! 外れないぞこれー!!?」

遂に我慢の限界を迎えたのか、リリネットは大声を上げると、知恵の輪を地面に放り投げた。

大きな音を立てて床を転がる知恵の輪。するとそれをチルツチが拾う。その顔には意地が悪い笑みが貼り付く様に浮かんでいた。

「全く、お子ちゃまね。見てなさい、こんなもの直ぐに——」

そう言うと、手に取った知恵の輪を解きに掛かる。

だが開始より一分、二分と経過しても、一向に金属音が鳴り止む気配が無い。

恋というものを経験した御蔭か、史実よりも精神的余裕が出来たチルツチ。とは言え、他者と比較すれば気が短い事に変わりは無い訳で。

「何なのよコレ!! 壊れてんじゃないの!!?」

先程のリリネットの姿の焼き増しの様に、チルツチは知恵の輪を放り投げた。

元十刃だけあり、その力は相当なもの。

案の定、地面に叩き付けられた知恵の輪は破片を撒き散らしながら見事に破壊された。

「壊れてるといふより壊したと言わすべきじゃないですかね〜?」

「うるせえぞ淫乱女!! じゃあてめえは出来るのかよ!!?」

何時も通りの間延びした口調でセフィーロが横から突つ込む。

チルツチはそんな彼女に指を突き付けながら反論した。

だがそれは論点の摩り替えという、自身の失態からの逃避であった。

セフィーロは小さく溜息を吐くと、近くに居る口力から新たに知恵の輪を受け取り、

解除作業に入った。

それから十秒程経過しただろうか。

未だに両手を動かし続けているセフィーロを、チルツチは鼻で笑った。自分はその倍以上の時間を掛けても解けなかったにも拘らずだ。

「はっ!! やっぱ出来ないじゃない!! 所詮はてめえもその程度だったって——」

「はい、終了です〜」

「(ハ)……と……」

両手其々に解けた知恵の輪を持ち、ドヤ顔を浮かべるセフィーロ。

しかもそれは先程までリリネットとチルツチが苦戦していた物とは難易度が別次元。まず輪の形すら模していない。寧ろ複雑に絡み合った針金と言った方が正しいかもし

れない。

明らかに超難解な代物であろうそれを、ものの十数秒で解いたその腕前。もはや驚異的を通り越して異常だ。

要した時間もそうだが、その知恵の輪の難易度に気付いたチルツチは口を半開きにしたまま硬直するしかなかった。

「あ、でもロカちゃんの方がまだ早いですねえ〜」

「はあ!？」

チルツチは弾かれる様にして振り向くと、其処にはセフィーロと同じ知恵の輪を解いた体勢で佇んでいるロカが。

まさかと思い、問い掛ける。

「あんた…何秒でそれ解いた…？」

「…大凡八秒です」

「……………」

「おおー!! スゴいな二人とも!!」

次の瞬間、チルツチは全身から崩れ落ちる。その姿は正に真つ白に燃え尽きたかの様。

それとは真逆に、リリネットは惜しみ無い賞賛を拍手と共に送った。

まあ当然だろう。知恵の輪を創ったのは他でも無い口力である。反膜の糸で何かを再構成する場合、その対象の情報を読み取っているのだ。解き方なぞ初めから理解しているに決まっている。

例え其処まで把握していなかったとしても、元来そういった系統を得意にしている彼女であれば、そう時間は掛からずに解けていた事だろう。

「…これで勝ったと思わない事ね!!」

「もう勝負付いてますから〜」

「うぎぎぎぎぎ!!」

チルツチは苦し紛れにそう叫ぶが、セファイ口はそれを一刀両断。完全に勝負ありだった。

「相変わらず、騒がしい奴等だ…」

「けど嫌いじゃ無え、だろ？」

「まあ、な…」

そんな賑やかな様子を離れて眺めながら、スタークは苦笑する。

隣に立つノイトラも同様に。

ロリのナンパ——と言うと何か色々と拙い気がするが、一先ず織姫の安全対策と言つて置く。それを終えたノイトラは、ウルキオラに織姫を任せた後、拠点の宮へとは戻らずに治療室へと移動。本日の鍛錬は無しにして、就寝時間までのんびり休息を取る事にした。

やはりその行動の切っ掛けは勘である。警報とは違う、胸騒ぎにも等しいそれを訴えていた為、素直に従つたのだ。

ノイトラは悟つた。恐らくは今日中に、一護達がこの虚圏に侵入して来るのだと。

思い返すとこの数日間、極めて長く感じた濃密な日々であった。ドルドーニとの立ち合い、ルピの死、ザエルアポロとの遭遇、ギンとの『世間話』。

御蔭で胃への蓄積ダメージが一気に増えたが、それと同等に成果も得られた。

体調は万全、気構えも十分。やり残した事が無いかの確認も済んでいる。

後は事が始まるまで待つだけであった。

ちなみにスタークとは偶々道中で会っただけで、特に誘った訳では無い。

外出していた理由は、暇を持て余したりリリネットが治療室に遊びに行きたいと騒いだ為らしい。

立場等を一切気にしないで接するノイトラ達と絡む様になつてからというもの、治療室はもはや第一刃グループにとって、自分達の拠点の宮以外での憩いの場となつていた。

だがスタークとしては余り行きたくないのが本音だった。ノイトラが一緒であれば別だが。

理由は単純。女性比率が高い為だ。治療室に何時も決まつて存在するのはセフィーロとロカの二名。それにリリネットが加われば言うまでも無い。

基本的にセフィーロはリリネットに構つてばかりだし、ロカはそんな彼女に何時も引つ付いている。

つまりスタークは雰囲気的にぼつちとなるのだ。躊躇うのも理解出来る。

そんな彼が途中でノイトラと会えたのは幸運であつた。

「うおっ…?」

そんな事情があるとは知らぬまま、ノイトラは自身の計画達成に向けて、念には念を込めた手回しをする事にした。

懐から何かを取り出すと、そのまま真横へ放り投げる。

顔面目掛けて飛来するそれを、スタークは咄嗟に受け取る。いきなり何だと、抗議の視線をノイトラへ向けつつ、それを確認する。

「…何だ、こいつは?」

小さな容器の中にある、無数のカプセル状のもの。

スタークは首を傾げると、思わず問い掛ける。

「肉体と靈力を回復させる為の薬だ。効果は微々たるモンだが」

「何でいきなり…ってか何処から手に入れたんだよ…?」

怪訝な顔をするスターク。

渡された物の種類と用途は理解出来た。だがそれを渡して来た意図が読めなかった。先程拠点の宮を出るまではずっと寝ていた為、怪我也何も負っていないのだが。

「ザエルアポロのところからパクツた」

「ブツ!! お前…それって…!?!」

予想外な返答に、スタークは思わず噴き出した。

——色々と動き回っている事は察していたが、何をしているのかコイツは。

大丈夫なのかと、視線でノイトラに問い掛ける。

確かに普通では手に入らない物である。だがまさか盗品とは誰が想像出来るか。

だが実はノイトラの言った事は一部だけが嘘。薬自体は盗品でも何でも無いのだ。薬自体は。

盗んだのはそれを構成する情報だ。下手人はセファイロとロカである。

方法は簡単。通常なら視認不可能な反膜の糸。それにセファイロの力を合わせた物をザエルアポロの研究所まで伸ばし、薬品や機材等に接続。内緒で情報を読み取った。

通常であればロカだけで十分の筈なのだが、やはり生みの親だけあり、反膜の糸に対する対策が宮全体に施されていた為に不可能だったのだ。

ノイトラが以前から思っていた事だが、破面達は基本的に治療といった補助関係の術や道具に乏しい。

例えその系統の能力を所持している破面が居たとしても、戦闘力は低い為、戦場に連れて行くのは心許無い。

霊力の高さ故に、生命力の強さは折り紙付きだが、それだけ。致命傷を負った場合に生きて居られる時間が幾分が伸びるだけ。

「多分死神達との決戦に、アンタは第一戦力として選ばれる筈だ。その保険だな」

「…保険？」

「重ねて言うけどな——俺との決着を付けない内に死なれちや困るってんだよ」

一応、ノイトラとしては史実通りの展開を辿るという前提で、仲間の生存計画を立てている。

だが良く言うだろう。予定は予定であり未定、と。

何事も計画通りに行く訳が無い。此処は創作世界では無く、現実だ。何処かで綻びは生じる。

薬はその為の保険。少しでもスタークの生存の確率を上げる為の。

「約束しろスターク。絶対に生きて戻らな」

「…ホント、お前って奴は——」

スタークは自身の後頭部を掻き毟った。

その顔には苦笑が浮かんでいる。

ノイトラとの約束を結ぶという事は、決闘の約束を結ぶという事と同義。

だがスタークのその表情を見る限り、嫌がっている素振りは全く見えない。

事実、そうだった。

スタークとしては、この決戦の結果によっては、自ら死を選ぶ心算だった。

それは仲間の死。そう簡単に敗れるとは思わないが、十中八九死神達も決死の覚悟を以て戦いに臨むだろうし、断言は出来無い。

文字通り相手は死を恐れぬ死兵。例え四肢を両断して無力化されたとしても、自分ごとと鬼道で吹き飛ばす程度はしそうだ。

実力差などアテにならない。場合によっては番狂わせが起こる。戦いとはそういうものだ。

「…わかったわかった、お前さんの執念には負けたよ」

ノイトラの思いを受け取ったスタークは、考えを改めた。

とある事情から決して正真正銘の本気は出せないが、現状の持てる全力で動く程度は出来る。

——ならばその仲間達が死なぬ様、自分が動けば良い。

スタークはそう決意すると同時に、今更自覚した。自分は仲間を得たという現状に満足するだけで、完全に思考を停止していたと。

想定だが、決戦に臨む他のメンバーはバラガンとハリベル。同じ上位十刃たるウルキオラは、恐らく虚夜宮の守護の為に残る事になる筈だ。

スタークは長らく使用していなかった思考を本気で巡らせる。

ならば自分がすべき事は、戦況を見極めつつ、自身の戦いの合間に仲間達の援護をすゝめる事だろう。幸いにも、遠距離からの援護が可能な能力を持っているのだから。

バラガンは余り気に掛ける必要は無さそうだ。何せあの「老い」の力の攻略法は圧倒的な力によるゴリ押し以外には無い。情報を見る限り、護廷十三隊の中でそれを成し遂げられるのは総隊長以外に思いつかない。

それに気乗りもしないのもある。何せあの性格だ。自らの戦いに手を出されれば、ま

ず激昂する可能性が高い。

本当に危ない時以外は静観する事にしよう、スタークは決めた。

となると、気に掛けるべきはハリベルに絞られる。

片手で数える程度だが、彼女の能力は何度か目にしている。印象としては広範囲の殲滅力に優れているが、殺傷力はそれ程では無いといった感じだ。相性も出易い属性の為、少々危うい。

だがハリベルもハリベルで結構面倒臭かったりする。

戦士としての矜持を掲げ、援護という形であつても、戦いに横槍を入れられる事を良しとするとは思えない。

——前途多難だ。

思つたより複雑な状況に、スタークは内心で溜息を吐く。

だがそんな内面とは裏腹に、その表情は憑き物が取れたかの様に晴れやかだった。

「言つとくけどな…：そう簡単に俺をパシリに出来ると思うなよ」

「ハッ、それぐらいの気概が無えと面白く無え」

ノイトラとスタークは互いに憎まれ口を叩き始める。

だがこの瞬間より、二人は完全なライバル同士になれたと見て良いだろう。

「じゃあノイトラ、もし俺が勝ったら…逆にな俺のパシリになってもらうぜ？」

「知ってるか？ 如何考えても出来無い事を自信満々に言うのは、フラグと呼ぶってなあ…」

暫し間を置くと、二人は全くの同時に噴き出した。

一頻り笑い続けると、やがて互いの拳同士を突き合わせる。

これは男同士の約束の仕方。所謂指切りの代わりであった。

「ああ〜！ ノイトラさんが顎髭ニートと良い雰囲気になってますう〜!!」

「アホか。なつて無えよ」

「顎髭ニート…」

遣り取りが済んだタイミングで、セフィーロが声を上げた。

その余りに素つ頓狂な発言に、ノイトラは即座に冷静なツツコみを入れる。

横ではスタークが、セフィーロからの蔑称とも取れるその呼び名に多大なショックを

受けたのか、全身から崩れ落ちていた。

「まさか…ホモオ…」

「腐女子かテメエは!?!」

「そんな事より私と良い雰囲気出しましょうよお〜」

「おわっ!? テメツ、こんな事に響転使うな!?!」

突拍子も無く、セフィーロはノイトラ目掛けて響転で急接近すると、飛び付く様に正面から抱き着く。

明らかにいい雰囲気を出す気があるとは思えない行動だ。

寧ろ単純にスキンシップを取りたいだけなのだろう。

「このツ…抜け駆けしてんじゃないわよ!?!」

「ムゴツ!?!」

それに対抗する様にして、今度はチルツチが動く。

彼女は横合いからノイトラの頭を引っ張ると、自身の胸元に抱き寄せたのだ。

当然、ノイトラは顔に柔らかな良い感触を感じると同時に、呼吸が出来無くなる。だが無理に跳ね除ける訳にも行かず、何とか耐える。

「そりや怠け者だつて自覚はあるぜ？ でもニートつてあんまりじゃねえか…？」

そしてその横では相変わらず地面に両手両膝を付いて落ち込んでいるスタークが。しかも延々と言い訳の様な何かをブツブツ呟き続けている。

第10刃、コヨーテ・スターク。実は意外と繊細な男であった。

「ホモつてなんだー？」

「…それは、その…」

離れでは純粋なりリネットの放った、回答に困る質問に口籠る口力が。

如何に口力とて、子供に教えて良い事と悪い事の区別は付く。だが上手い言い訳が思いつかない。

この中では最も常識的で頼みの綱であるノイトラは騒ぎの真っ只中だし、スタークは茸が生えそうな雰囲気を出したまま落ち込んでいる。

「どなたか…助けを——っ!？」

口力の零したその懇願は、周囲の喧騒に掻き消される。

だがその思いが通じたのか、混沌と化したこの治療室は外部からの刺激によつて一気に収まる。

刺激というのは、虚夜宮に似つかわしく無い、破面以外の三つの霊圧。それが突如として押し掛かったのだ。

その内一つの霊圧の重さは、下位十刃に匹敵。それ以外は一段階下といった所。だがノイトラはその霊圧に覚えがあつた。

「——やつと来たか、主人公<sup>ヒーロー</sup>」

意識が逸れたのか、拘束の手の緩んだチルツチとセフィーロから抜け出しつつ、静かにそう呟いた。

## 虚圏救出篇

### 第四十話 主人公達の初戦と、その他諸々

虚夜宮の周囲地下に、蟻の巢の如く存在する地底路。その内から22号に分類される場所に、一護達は居た。

喜助の協力の元、黒腔を通り、虚圏へ侵入。だが真つ先に眼前に広がったのは虚夜宮では無く、窓一つ無い無機質な廊下。

そして直後に背後から現れた、敵らしき巨大な影。

此処が一体何処なのかを調査する暇も無く、一護達は現在進行形でその影に追い掛けられていた。

「うおおおおおおおお?!」

先頭を走るのは雨竜。恐らく逃走しつつも、先に進む道を選択し、先導する為だろう。後に続くのは泰虎。その右手には一護の後ろ襟が握られており、その当人は驚愕の声を上げながら持ち運びされていた。

「な…何で逃げんだよっ!？」

やや落ち着きを取り戻したのか、今度は抗議の声を雨竜に投げ掛ける一護。敵と遭遇したのだから、まずは交戦し、打倒する事が普通だろう。

敵の霊圧を調べても、それ程強くは無い。今の自分達なら十分対処出来る。なのに何故だと。

「馬鹿か君は!! こんな狭い場所で、君の馬鹿でかい斬魄刀が振るえると本当に思うのか!!」

「…あ」

雨竜の反論に、一護は今更得心が行ったらしい。何とも腑抜けた声を漏らした。確かにそうだ。死神の力を入れて間も無い頃、実は一護は同じ様な失敗をしている。

廃墟と化した病院の狭い廊下の中で、眼前に現れた虚に斬り掛からんと巨大な斬魄刀を振り上げ——そのまま刀身が天井に突き刺さって抜けなくなり、窮地に陥った事が

あった。

今思い返しても、羞恥心で顔が熱くなる。あの時の自分は実に間抜けな姿を晒していたと。

「それに周りを良く見ろ!! これだけ長い廊下に窓が一つも無い!!」

「…つまり？」

「地下なんだよ此処は!! そんな状態で戦って見ろ、建物が崩れて取り返しが付かなくなるぞ!!」

「おおぅ…わ、悪い」

逃走中にも拘らず語られる丁寧な説明。一護は思わず反射的に謝罪した。

同時に雨竜の観察眼に感心する。流星はあの喜助が褒めるだけであると。

——決して口に出して褒める様な真似は事はないが。

やがて一護達が辿り着いたのは、広大な面積を誇る広間。これ程の広さであれば派手に戦ったとしても問題は無さそうだ。

雨竜は安堵しつつも、更に周囲を観察。すると一カ所、階段を発見。それは上まで続いており、外への出口である可能性が高い。

「階段がある!! 出口かどうか確認する!!」

「あ! おいつ!!」

制止の声を振り切り、駆け出す雨竜。

だがその行く先を遮る存在が、彼の眼前に降り立った。

「っ!!」

「…何処へ行く、侵入者」

鳥類の頭部を思わせる仮面の名残を持ち、左目の周囲以外、顔の殆どを覆い隠した男  
——アイスリンガー・ウェルナール。

胸部から下は完全に人型だが、肩口周辺は妙に肥大化しており、布で覆い隠されている。

「新手か…!!」

雨竜がそう眩くと同時に舌打ちした直後、背後から轟音が鳴り響いた。振り返ってみれば、其処には先程まで自分達を追跡していた巨大な影がその姿を露にしていた。

目の周りを仮面の名残で覆い、耳に十字架のピアスを付けた巨大な男——デモウラ・ゾツド。

彼もまた基本的に人型だが、大凡三メートル半のその巨体と、体格に釣り合わない長過ぎる腕が、異形の類いである事を証明している。

一護達は其々に警戒心を高める。

何せ挟み撃ちだ。如何に相手の霊圧が高く無いと言つても、状況的な不利は馬鹿に出来無い。

一護の頬に一筋の汗が流れる。

咄嗟に斬魄刀の柄に手を掛けるが、それを止める者が居た。

「ここは俺達に任せろ」

「チャド!?! だけだよ…!」

自身の肩に手を置いた泰虎からの突然の提案に、一護は戸惑いを隠せない。

此処は皆で協力して戦うのが正しいのでは、と。

「頼む」

「……わかったよ……」

だが泰虎の向けて来る目から感じる強い意志。

——信じてくれ。

悩んでいたのだろう。暫し間を置いた末、一護は折れた。

今の雨竜と泰虎の持つ実力は、あの勉強部屋に入った際に見せて貰った為、大凡知って居る。

恐らく敗ける可能性は極めて低いだろう。そう結論付けて。

だが心配なものには心配なのだ。

一護は一先ず戦闘に巻き込まれる心配は無いであろう、離れの壁際まで移動。雨竜や泰虎が万が一にも危ない状況に陥った場合、直ぐに救援へ入れる様に身構えながら、傍観態勢に入った。

「俺はデカイ奴と戦る。石田はそつちを頼む」

「…それが理想だね。了解だよ茶渡君」

喜助からの指摘を覚えていた御蔭か、泰虎は冷静に敵の戦闘タイプを予想。どちらと戦うべきなのかを判断する。

アイスリンガーについては、此方が視認出来ぬ程の速度で現れた時点で、判断材料としては十分過ぎた。明らかに機動力に特化していると。

デモウラは言わずもがな。何処から如何見てもパワータイプで、頭の回転は極めて鈍そうな雰囲気がありありと見て取れる。

同意見だった雨竜は直ぐにその提案を承諾。アイスリンガーの方向へと歩を進める。

泰虎はその逆側のデモウラへと向かって行く。

自らが戦うべき敵と対峙した二人は、互いに己の武器を具現化する。

泰虎は以前より角張った部分が無くなり、肩口までの右腕全体を包み込む様な形状に変化した鎧を。

雨竜は五角形の滅却十字を媒介に、特殊な形状の弓——ギンレイゴシヤク銀嶺弧雀を形成。

「…さて、始めるとしようか」

雨竜のその声を皮切に、二人は其々に構えを取った。

虚圏に一護達が侵入して数分後。ノイトラは自身の拠点の宮の屋上にて、一人黄昏ていた。

だが無駄に立つて居る訳では無く、先程から絶えず探查神経を発動している。それは勿論、一護達の状況を確認する為だ。

二つの破面の霊圧。それと対峙する、これまた二つの霊圧。

前者はアイスリンガーとデモウラだろう。そして後者は———思えばこれが初めて感じる滅却師、そして人間の霊圧。つまり雨竜と泰虎だ。

史実であればこの二人は序盤、対戦相手の組み合わせを誤り、その相性の悪さから少々苦戦した後、敵の入れ替えを行って逆転勝利する形で収まる筈である。

だが探査神経によつて得た情報によると、現状はやや異なるらしい。

何せ対戦相手が初めから——泰虎とデモウラ、雨竜とアイズといった形で出来上がっているのだから。

「まあ、これ位は誤差の範囲内か……」

これだと早目に勝負が付くだろう。そう結論付けたノイトラは、そそくさとその場を後にした。

向かう先は何時もの十刃達の会議場所。今から大凡一時間後を目処に召集が掛けられているからである。

だがその時間を考えると、随分悠長としている。侵入者が現れた状況下で出された指示とは到底思えない。

まあ史実ではこの会議中、初っ端から優雅にティータイムを宣言する藍染だ。彼にとっては一護達の侵入も計画の内なのだから、焦燥が欠片も感じないのも納得だ。

——例え想定外な事が起きたとしても、楽しげに笑みを浮かべて構えているのだから。

「紅茶よりか、緑茶の方が好きなんだがなあ…」

通路を移動しつつ、如何でも良い事を呟くノイトラ。

それは少しでも自身の張り詰めた精神を和らげんとする意図があった。

緊張感を持つ事は大事だが、過ぎては駄目だ。元来ノイトラは憑依前からそのきらいがある為、こうして独り言をつぶやく事は時折あった。

最近では寧ろ日常的となりつつあるのだが、本人は自覚していなかった。

「おや？ これはこれはノイトラ様」

「…ビエホか」

そんなノイトラの前に現れたのは、虚夜宮の祖父と名高いビエホ。

胸の前で互いの両袖に手を通した体勢で、年配とは思えぬ整った背筋で佇むその姿からは、やはり長い時間を生きねば出ない独特の風格が感じられる。

「グラも居ますぞい」

「……………ど、ども…」

ビエホの背後である、通路の曲がり角。其処にはコソコソと隠れながらノイトラの様子を窺うグラが。

だが虚夜宮に存在する破面の中でもトップクラスに位置する巨体の持ち主だ。当然、隠し切れる筈も無く、ノイトラはビエホの姿を確認した直後に気付いていた。

「…何してんだオマエ」

「うえっ!? す、すみません…」

ノイトラは指摘しつつ、考える。

このグラだが、自分と接する時は何時も決まってオドオドとした態度を取る。それは何故かと。

単に怯えているという可能性もあるが、これでも以前までは普通だったのだ。それだけにノイトラの抱く疑問は更に深まっている。

ルピやザエルアポロの様に脅し付けた訳でも無し、原因が全く分からない。

グラは食い意地が張っている以外はある程度常識的で、気兼ねなく話せる相手だけに、ノイトラとしては少々ショックだったりする。

——まさかその態度の理由が、尊敬故に來ているとは欠片も思いもせず。

「二人して如何した。何かあつたのか?」

「いえいえ、実は先程藍染様に呼び出されましてな。この先に待つ、死神達との戦いに関して少々御話を——」

「…話だと?」

グラについては特に重要な案件でも無い為、別に解らないままでも良い。そう結論付けたノイトラは、ふと疑問に思つた事をピエホに問い掛ける。

「つゝ事は…アレか。もしかしてオマエ達もその戦いに参加すんのか?」

記憶を辿る限り、史実に於いてピエホにグラという破面は存在しない。それらしき存在は居た様な気もするが、その辺は曖昧だ。

もしかすると、本来ならば物語に全く関わらない——脇役と言うよりギャラリイに等しいキャラクターだったのかもしれない。

だが見てみる。現に眼前に居る二人の破面は其々に役割を担い、藍染が呼び出す程の

重要性を持った者として確かに存在しているではないか。

——やはり完全にはアテに出来無い。

ノイトラは改めて、自身の持つ知識の欠点を認識した。一つのルールを進む物語とは異なり、現実とは常に移ろうものなのだ。

「申し訳ありません。如何にノイトラ様と言えど、こればかりは御教えする訳には……」  
「す、すんません……」

返答は拒否。とは言え、その表情からは謝意がありありと見て取れる。

恐らくビエホ達側としては教えても構わないのだが、藍染から他言無用の指示を受けでもしているのだろう。

だがノイトラとしてはそれも想定内。答えてくれれば良いな程度の意図があつて投げ掛けた問いだった。

此処は大人しく引き下がるべきかと考えたその時——何を思ったのか、不意にビエホが小さな声で語り始めた。

「これは独り言ですが——護廷十三隊は恐らく主要戦力のほぼ全員を、藍染様にぶつ

ける御心算でしようなあ」

「……？」

「すると瀟靈廷はさてより、尸魂界の守りが薄くなりますのう？　席官クラスは残すやもしれませぬが、所詮はその程度。実に迂闊極まりない」

「——ッ!!」

ビエホが言わんとしている事を理解したノイトラは息を？んだ。

内容は単純。敵勢力の視線が一点に集中している隙に、手薄となる拠点を付く。

敵の拠点を制圧してしまえば、その時点で勝利は確定する。つまりはそう言う事だ。

互いに武力を用いて争い、制圧を目指すスタンダードな戦争の形とは異なり、素人目に見ても味方の損害が少なく済むのが魅力のこの戦略。部下や仲間を大事に、またはスマートな勝利を求める者であればまず選択するだろう。

「藍染様や上位十刃の皆様方が奮闘している内に、手の空いている者が別働隊を率いて尸魂界まで攻め込めれば完璧ですが——はてさて、一体誰が行く事になるのやら……」

白々しく語るビエホ。もはや隠す気など皆無である。

少しでも情報が欲しいと願っていたノイトラにとっては有難い限りだが、御蔭で一つ懸念が生まれた。

全盛期より力が落ちたとは言え、ピエホの実力は相当である。

霊力だけ見ても現十刃落ちメンバーに匹敵する程。仕事柄か頭の回転も速く、常に先を見通しているその広い視野から来る戦略眼は驚異的。

そんな彼が率いる別働隊が、主要戦力の殆どを欠いた状態である瀨霊廷を襲えば如何なるか。取り敢えず只では済まないのは確実だろう。

席官の中ではトップクラスの実力を持つであろう一角や弓親も、数字持ち相手に満身創痍になりつつやつとこの思いで撃破出来る程度だ。

『崩山剣舞』ほうざんけんぶ等と、無駄に格好良い技名を付けて無駄に刀を振り回している何処ぞの三席では話にならない。まず瞬殺である。

他の隊より立場の低い、地味メガネと名高い四番隊の三席は不明だが、情報が少な過ぎる為に判断出来無い。

記憶を辿る限り、他にもある程度の実力はありそうな席官はチラホラ存在しているが、突出した実力を持つ者は居ない。

史実とは異なる想定外の事態に、ノイトラはやや焦燥に駆られる。最悪、そのままピエホ達が尸魂界の残存戦力を殲滅してしまったならば、と。

だが立場的に止める訳にもいかず、齒痒い思いをする。

——今の自分に来るのは、信じる事しか無い。

如何に護廷十三隊が藍染打倒に重点を置いているとは言え、流石に自らの拠点や尸魂界の守りを放棄するとは思えない。何かしら保険は掛けている筈だ。

ノイトラは内心でそう自分に言い聞かせ、自身の精神を落ち着かせる。

「おっと、年を取ると独り言が増えて叶いませんなあ」

「…そいつぁ大変だ。下手な内容を漏らしちまう前に、さっさと宮に戻った方が良いかもな」

「ホツホツホツ、全く以てその通り。では御先に失礼させて頂きますぞ」  
「…し、失礼しやした」

ビエホは深々と一礼すると、踵を返す。グラも焦る様にだが、軽く頭を下げると即座に移動を開始する。

——そんなにビビらなくても。

折角会ったのだから、やはり先程の会話の中で原因を突き止め、解決させれば良かった。

ノイトラは少々後悔した。

「なっ?!? じいさんちよっ…のわあああああ!!!」

だが二・三步だけ移動しただろうか。次の瞬間、突如としてビエホの足が止まった。それに慌てたのか、グラは小走りを開始したばかりの状態から急ブレーキを掛けるも間に合わず、そのまま勢い余って転倒。悲鳴を上げると共に、ボールの如く転がって行った。

「二つだけ、ノイトラ様に御伝えしたい事が御座います」

「…手短にな」

背後から迫る巨大な球体を、ビエホは軽やかな身のこなしで華麗にスルー。そして何事も無かった様に口を開く。

一体何事かと思いつつ、ノイトラは続きを催促する。

「8番目が、最近何やら怪しい動きをしている様で…」

——はい、とうの昔から知っています。

等と返せる筈も無く、ノイトラは内心で思うだけに留めた。

だがその忠告は決して無視出来無いものでもある。

何せそれは普段から余り関わりが無いビエホが気付く程、ザエルアポロの行動が目立ち始めているという証明でもあるのだ。

偽の情報を流す為に敢えてそうしているのか、単に事が進むに連れて無意識の内に大胆になっているだけなのか。

何れにせよ、ザエルアポロが敗れるその時まで、警戒を怠る訳にはいかない。

「葬討部隊も、如何やら懐柔されているらしき御様子。どうか御気を付け下され」

「…おう」

「それでは、セファイにも宜しく…」

最後にそう締め括ると、ビエホは今度こそこの場を立ち去って行った。

やがて足音が聞こえなくなり、ノイトラは一人残される。

「……これで藍染教に入信してなけりやなア……」

ビエホは人格者だ。それも全破面中トップクラスの。

基本的に部下である雑務係の破面達にも優しく、セフィーロの事も気に掛けてくれている。それに望まずして弱者となった者は庇護すべきだという考えもあり、その為であれば自らの命すら賭けられる。

好印象を抱く要素としては十分過ぎる要素だ。

だが如何しても一つだけ大き過ぎる欠点があった。ゾマリと同類で生粋の「藍染狂信者」と言う、それが。

これさえ無ければ、ノイトラはビエホも生存させる仲間の一人としてカウントする心算だった。

「ビエホは兎も角、グラも悪い奴じゃねえんだが……」

尚、グラについては判断出来無い。

実は彼も比較的マシな性格だが、良くも悪くも小物的な思考も持ち合わせてもいる。上手く協力関係に持ち込めたとしても、ノイトラより強い立場の者から命令され

ば、恐らく高い確率で従うだろう。

目的達成まで後もう一步、といった肝心な所で裏切られてもすれば元も子も無い。そうしてリスク等を考慮した結果、ノイトラはグラも除外対象として判断していた。

「つーかチルツチの奴、何時まで引き籠ってんだ？」

今更だがチルツチは今、自室に籠ったまま微動だにしていない。

理由は単純。治療室での遣り取りが後を引いているだけだ。

セフィーロに対抗してノイトラを自身の胸元に抱き寄せたは良いものの、後になってその行動が如何に大胆な内容だったかを自覚。羞恥心の余りノイトラの顔を直視出来ず、そのまま自室のベッドに潜り込んで悶えているのだ。

「…ま、良いか」

再び探查神経を発動すると、アイスリンガーとデモウラの霊圧が全く感じられない。一護達の初戦は既に終了しているという事だ。

取り敢えずチルツチはこのまま放置し、早急に会議場所へ向かわねばならないだろ

う。

後頭部を軽く搔くと、ノイトラは目的地へと歩を進め始めた。

浦原商店地下の勉強部屋とほぼ一緒の、廃工場地下に存在する仮面の軍勢の住居であり拠点。

その中で、彼等は其々に自由なスタイルで過ごしていた。

とは言っても、鍛錬は毎日欠かさず行っており、今はその休憩時間の様なものだ。

女性がしてはいけない様な無茶な体勢で昼寝する白。その近くで黙々と筋トレを行う拳西。真顔でエロ本を読み続けるリサ。鍛錬時に負傷したのか、鉢玄の張った回復効果のある五角形の結界——  
“五ご養よう蓋がい”  
の中で胡坐を搔いてリラックスしているひよ里。それを静かに見守る羅武。

些か自由過ぎる気もするが、これが彼等にとつては日常であつた。

離れでは一人岩の上に腰掛け、刃禪を行う平子が居た。

両目は閉じられ、彼の意識はこの場には無く精神世界にある。だがその表情は非常に険しい。

次第にその蟬谷に血管が浮き上がつて行き、やがてそれが破裂するかと思つた瞬間、平子は臉をゆつくりと開いた。

そして大きなため息を吐くと、全身から脱力する様にして体勢を解いた。

「……………」の性悪斬魄刀が。後で覚えとれよ……」

眼前まで斬魄刀を持ち上げ、苛立ちを含んだ口調でその刀身に語り掛けると、そのまま鞘に納刀した。

次第に感情が冷めて行くと同時に、急激に疲労感に襲われるのを平子は感じる。理由は判るだろう。全ては彼の斬魄刀——逆撫のせいだ。

嘘や虚言ばかりを吐く極めて悪質な性格の持ち主であり、それは屈服させた今でも変わらない。

御蔭で刃禪にて対話する度、真子は凄まじい勢いで精神力を削られていた。

だが実は藍染の本性を察する事が出来たのは他でも無い、そんな逆撫の御蔭だったりする。

そんな恩義もあつてか、何時も最終的に退くのは真子だった。

——内心では盛大に悪態を吐きつつ。

「あんま無理すんなよ、真子」

「…そもいかんやろ」

何時の間にやら、近くまで来ていた羅武が労りの声を掛けて来る。

その気遣いに申し訳無いとは思いつつ、真子はそう返す。

つい数時間前、一護の霊圧が空座町から消えたのを、鉢玄の証言から確認している。

恐らく攫われた織姫を助けに虚圏へ向かったのだろう。そして協力者は間違い無く喜助だ。

そして真子はもう一つだけ、判っている事があつた。恐らくこれを起点として、近日中に藍染が動くだろうという事が。

「多分、直ぐに状況は動く。せやから残された時間は少しでも有効に使わんと」

「…一護のヤローも虚圏に行っちゃったしな」

平子は考える。藍染の事だ。普通に迎撃するという事はまず有り得ない。

以前より一護の事を気に掛けている事を考慮すれば、恐らく彼に態と試練を与えたり、精神的に追い詰める等して、その反応を観察するに決まっている。

例えば侵入してきた一護を一切相手せず、何処かに監禁。身動き一つ取れない状況へと追い込んだ上で、自分達が尸魂界を蹂躪する光景を映像か何かで見せ付ける等。

——想像しただけで吐き気がする。

実際は只単に愉悦に浸る為では無く、真意を悟らせぬ様幾重にも策略を巡らせた上で行動するのだろうか。

「つたく、何時もボケツとしてる癖に…そうやって色々一人で背負いこみやがって」  
「……………」

返答は無い。だが面倒見の良い羅武は気付いていた。真子は責任を果たそうとしているのだと。

昔、同じ隊の副隊長だった藍染。警戒を払っていたにも拘らず、彼の策略を止められ

ずに多くの犠牲を出してしまった。そんな事を考えているに違いない。

「ちったあ俺達も頼れ。仲間だろうがよ」

「…敵わんなあ、羅武には」

真子は苦笑する。

恐らく仲間の殆どが察しているのだろう。そんな皆を代表して、羅武は言っていてくれているのだ。

仮面の軍勢と名乗り始めるよりずっと前——大凡百年前の護廷十三隊に所属していた頃から、真子達の間には深い絆があった。

遣り方は違えど、死神として同じ志を持つ者同士。それ以外にも普段から頻繁に交流を重ねていた為、非常に親密だった。

それは表面上の薄っぺらい関係では決して無い。

誰かが過ちを犯せば、例え力づくという手段を取らざるを得なくなったとしても迷わず実行。それ以上の罪を重ねさせる前に、他ならぬ自分達の手で止める。

誰かが完全に理性を失い、周囲に破壊を齎すだけの化け物と化しても見捨てない。生きていく限り、最後の最後まで元に戻す方法を探究し続ける。

そういった者達なのだ。真子達は。

真子が一護に目を付けたのも、自分達と同じ空気を感じたからなのかもしれない。

「あ……」

真子がその場から立ち上がった直後、彼を中心に地鳴りの如き重低音が盛大に鳴り響いた。

周囲もそれを耳にしたらしく、皆一斉に真子の方向を振り向く。見れば熟睡していた筈の白も起床している。

突然だが、人は空腹時、血糖値が低下する。

それを脳が検知し、胃に対して食事を入れる準備を促す。すると胃は少しでも多くの食べ物が入る様にと、頻りに収縮運動を行い始める。

結果、胃の中の空気も動く為、幅が狭い食道入口部——“噴門”から音が鳴るのである。

つまり先程の異音は、真子の腹の虫が鳴いたが故に発生した音であった。

「その、なんだ……そろそろ飯にするか？」

「…せやな」

真子は激しい羞恥心を感じつつ、羅武の提案に頷く。

未だに向けられる生温かい視線を誤魔化す様に、大きく跳躍して岩から飛び降りた。

そして着地と同時に小走りを開始。目的地は厨房である。

基本的に真子達の食生活は気まぐれだ。其々に当番制で調理を担当したり、気分によつては外から弁当を買つて来たりする。

だが今の真子はマイペースに調理したい気分だった。

一応調理を担当する者の義務として、まずは事前に手を洗おうと、近くの洗面所に向転換する。

「——っ、平子サン!!」

突如として慌てた様子で声を上げる鉢玄。

それに真子は首を傾げつつ、振り向き様に問い返す。

「…何やハッチ、そないな慌てて」

「誰かガ…私の結界を擦り抜けて此処まで向かって来ていマス!!」  
「…はあ!!?」

鉢玄の返答に驚愕する真子に続き、他の仮面の軍勢メンバー全員にも緊張が走った。白は仰向けに倒れた体勢から、アクロバチックな動きで一気に飛び起きる。

拳西は筋トレ後のストレッチを中断し、表情を引き締めた。

リサは読み掛けのエロ本を宝箱に仕舞うと、自身の斬魄刀を手に取る。

ひよ里は剣幕な様子で、拠点への入口である階段を睨み付ける。

鉢玄は鬼道で侵入者の正体を探らんと奮闘中だ。

「織姫ちゃん…な訳ねえか」

羅武はひよ里と同様に、入口の階段へ視線を向けつつ、そう呟いた。

鉢玄の張った結界は完璧の筈だ。通常であれば感知など到底不可能。本気で張られれば、自分達でも発見は困難になる程に。

にも拘わらず、現にこうして侵入者が発生している。それは如何いう事なのか。

織姫の様に、鉢玄と同じ能力を所有しているのか。それとも結界を物ともしない実力

者なのか。

——どちらにせよ警戒は必須だ。

そう考えた羅武は精神を研ぎ澄ませ、何時でも瞬時に動ける様に構えた。

「こないな時に、一体誰が——っ!!」

真子は吐き捨てる様にしてそう零す。だが直後に絶句。

入口の階段から聞こえて来るカランコロンといった足音。次第にその音が大きくなつてゆくと、やがて現れる人影。

足音もそうだが、その姿に真子は見覚えしか無かつた。

「…じびらせんなや、バカタレ」

真子はその謎の侵入者の正体を悟ると、一気に肩の力が抜けた。

それは皆も同様。溜息を吐くなり、驚かすなと鉢玄に詰め寄つたりと、何時もの和やかな空気に逆戻りする。

その侵入者は黒いマントで全身を覆い隠しており、唯一判るのは顔。だがそれも大部

分は影で負隠れており、殆ど確認出来無い。

「——いやあ、皆サン元気そうで何よりッス」

侵入者は軽い口調でそう言うと、その黒いマントを一気に脱ぎ去る。

その正体を確認すると、真子は思わず口元を吊り上げた。

「そういうオマエは随分やつれたんちゃうか？」

特徴的な足音に、先程の言葉使いから、既に判り切っているだろう。

侵入者は——喜助であった。

彼は階段を降り終えると、右手で帽子を押さえながら小さく御辞儀する。

「…丁度飯のタイミングに来よってからに。さては狙つとつたな、喜助」

「あら、じゃあ折角なんで御馳走になっちゃいませうかねー？ 実はボク、前から真子

サンの手料理を食べてみたいと思つてたんすよ」

「アホ。べっぴんさん相手ならともかく、誰が野郎なんぞに飯作るか」

久々に会うにも拘らず、二人は長年連れ添った友人にする様にして軽口を叩いた。

「んで、何か用かい」

軽口からそう間を置かずして、真子は問い掛ける。

だが喜助は答える素振りを見せない。

彼は何を思ったのか、徐に被っていた帽子を右手にとると、普段は余り見せないその素顔を露にした。

「…実はちよ〜つと困った事になってるんで——助けてくれませんか？」

力の抜けた様な笑みを浮かべつつ、喜助は申し訳無さ気にそう零した。

## 第四十一話 僅かな綻びと、三日月の始動と…

此方の行く手を阻むのは二人の破面、アイスリンガーとデモウラ。

だがその二人は事前に適切な判断によつて対戦相手を振り分けた雨竜と泰虎。彼等  
の手で難無く打倒されるといふ結果に終わった。

アイスリンガーはその機動力は勿論、布に隠された骨格のみの翼と、両腕の細長い爪  
先より放たれる弾幕—— // 翼状爪弾を武器としていた。

それに対し、雨竜は自身に襲い掛かる弾幕を、更に上回る弾幕によつて退けた。アイ  
スリンガーの最大連射弾数は百八、雨竜は千二百。その差は明確であり、もはや勝負に  
もなっていない。

所詮は人間。そう雨竜を侮っていたアイスリンガーだったが、得意としていた筈の弾  
幕戦を容易く制された上でその身に傷を付けられ、其処で初めて自身の不利を感じた。

咄嗟に響転によつて距離を取るアイスリンガーだったが、滅却師特有の歩法である //  
飛廉脚ひれんきやくによつて瞬く間に追い付かれると、情け無用の大量の矢がその視界を埋め尽く  
した。

残るデモウラだが、彼については同情しか浮かばない、何とも哀れな結末であった。

彼はまずその巨体から想像出来る通り、力任せに右拳を上から振り下ろす。だが対する泰虎はその唯一の武器である鎧の右腕で軽く受け止めると、デモウラを身体毎後方へと投げ飛ばし、頭部から地面へ叩き付けた。

生まれて初めて力負けた事に戸惑うデモウラ。そしてその事実が認められずに激昂。自身の舌を伸ばし、敵をその刺突によつて攻撃する切り札であり奇襲技——  
レンゲア・トロシコ 舌柱砲” を繰り出すも、先程と同様に受け止められて終わる。

正に万策尽きる。其処を泰虎が右腕全体に靈圧を纏つたパンチ——  
エル・テイレクト 巨人の一撃” によつて幕を下ろした。

無事に勝利を収めて一件落着——かと思いきや、それと同時に崩れ始める22号地底路。

瀕死のアイスリンガー曰く、自分達が敗ればそうなる仕組みになつていたとの事。それを間一髪で脱出した一護達。そんな彼等の視界に広がったのは、一切の生命の息吹を感じさせない一面の砂漠地帯だった。

そして白色を中心とした、果てしなく巨大な建造物。

人目見ただけで理解出来た。これこそ藍染と破面達の拠点なのだ。

一護達は迷わず其処へ向かつて駆け出した。だが彼等はその後も色々とトラブルに見舞われる。

一人の少女が、三匹の虚らしき存在に追われている場面に遭遇。咄嗟に助けに入るも、結果的にそれは誤解だった。

正確に言うると、三人は破面で、一匹は虚。彼等は単に「無限追跡ごっこ」という——所謂只の鬼ごっこで遊んでいた事が判明。

罅の入った髑髏のような仮面の名残を頭部に乗せ、黄緑色の髪を持ち、眉間から鼻筋にかけて傷痕があり前歯が無い破面の少女——ネル・トウ。

細身の人型で禪を穿き、白蟻を思わせる仮面を被った、自称ネルの兄——ペッシェ・ガテイーシエ。

水玉模様の服と巨大な頭部と手を持ち、根源的な恐怖を煽る仮面を被った異形の姿で、これまた自称ネルの兄らしい——ドンドチャツカ・ビルスタン。

三人合わせて「怪盗ネルドンペ」とか「熱砂の怪力三兄弟」やら「グレート・デザート・ブラザーズ」だか、其々がバラバラのグループ名を騒いでいたが、どれが正規なものなのかは不明であった。

三人から放たれる天然ボケ発言に、一護が冷静にツッコむといった、コント染みた遣り取りを繰り返した結果、何時の間にもやら打ち解けていた。

やがて一護達はネル達のペットである巨大な黒い蛇の様な虚——バワバワに乗せてもらい、藍染達の拠点である虚夜宮へと向かった。

到着間近まで迫った時、虚夜宮を守る白砂の番人である、下級大虚と大差無い巨体を  
持つ破面——ルヌガンガと遭遇。

すかさず一護が月牙天衝で不意討ちを仕掛けたが、体が砂で構成されている為に物理  
攻撃は効かず。

無駄だとは思いつつ、雨竜は無数の矢を、泰虎は拳からビームを打ち込んだりもした  
が、それ等も同様の結果に終わる。

唐突に窮地に陥る一護達。

だが直後に其処を救う者が現れた。尸魂界に帰還していた筈のルキアだ。

彼女は横合いから己の斬魄刀——氷雪系の能力を持つ“袖白雪”そでのしらゆきによつて、ルヌ

ガンガの全身を凍り付かせて撃破する。

したり顔を浮かべるルキアの隣には、付き添いなのか恋次も居た。

一護達はその二人と合流。ネル達を含めると、これで総勢八名の大所帯となった。

良く良く考えると、ルキア達が虚圏に居るのは極めて不自然だ。

喜助の話によると、織姫誘拐の件を聞いた直後に動こうとしたのはこの二人で、強制  
的に連れ戻された挙句に待機命令が出されている筈だと。

だが当人達から詳細を聞くと、自分達を虚圏へ向かわせる為の手配をしたのはルキア  
の義兄であり、恋次の所属する隊の隊長である白哉。

しかも一護が目覚めるタイミングを見計らい、現地で合流させられる様、ルキア達を出立させる日程を調整するという気遣い。

一護は白哉のそんな行動に感謝したり、ルキア達の出発直前に呟いていた余計な一言にイラついたりしつつ、虚夜宮へ到着した。

だが入口が見付からず、もう少し調査するべきだと訴える周囲の反応を余所に、強硬手段へと出た一護と恋次。

簡単に言えば——入口が無ければ作れば良いじゃない、という脳筋的発想であった。

二人の放った斬撃により、盛大な穴を開ける虚夜宮の外壁。一護達はそのまま中に侵入するが、辿り着いたのは五つの分かれ道。

ネル達を除けば、丁度振り分けられる数だ。

話し合いの末、一護達は再会を約束しつつ、其々に進んで行ったのだが——。

「まさかこんな場所に来たア…物好きいな侵入者だ」

「……………」

まず泰虎が辿り着いたのは、3ヶタの単に存在する複数の遊撃の間の一つ。

其処で対峙したのは、オレンジ色のアフロヘアーを持つ破面の男。

「破面 No. 107、シエント・シエテガンテンバイン・モスケータだ」

「…茶渡泰虎だ」

真つ先に名乗るガンテンバイン。それに続く様にして、泰虎も静かに答える。

これは戦う前の儀式の様なものだ。

名乗りとは本来、武士の作法として知られている。

それは味方や敵に向かって自分の姓名や身分等の素性、今迄の戦功、戦における自分の主張や正当性などを大声で告げる意味を持つ。

だがこの二人の場合、少々意味合いが異なっていた。

簡単に言う——相手の名も知らぬまま戦うのは失礼に値する、という事である。

ガンテンバインと泰虎。実は結構似通った部分があった。

それは互いに拳による打撃を中心とした戦闘スタイルを持ち、何より相手が理性的であればある程、尋常な戦いを望む傾向にある事だ。

例え存在レベルで相容れぬ間柄の敵であっても、正々堂々対等な条件下での戦いを望むその志。

そして稀に十字を切る等、互いに信徒らしき動作を見せる部分を考慮するに、これは武士道と言うより騎士道の精神に似通ったものを感じさせる。

「……………」

名乗りが済むや否や、泰虎は右腕に鎧を形成。何時でも攻撃に転じられる様、やや後方へそれを引き絞った。

ガンテンバインも腰を低くを落とし、ボクサーに似通った構えを取る。だが彼のその表情には何処か嬉々としたものが感じ取れた。

「先に謝っておくぜ」

「…何の事だ？」

「初対面の奴と戦える機会は久し振りなんだな。正直…さつきから昂りが収まらねえんだ」

最後にそう零すと、ガンテンバインはニヒルな笑みを浮かべる。

何とも遠回しな物言いだ、泰虎には十分理解出来た。

つまりそれは——加減が利くか如何か判らない、という警告。

ガンテンバインは所謂武人氣質というやつなのだろう。流石にそれには及ばないが、泰虎もその気持ちは解らなくも無かった。

「それに——間違い無くてめえは強い。これで大人しくしているろつてのが無理な話だ」

過去を振り返ってみるれば判るが、ガンテンバインは十刃落ちとなつて以降、同じ相手としか戦っていない。

実力が均衡しているドルドーニとは日頃の鍛錬の他、しようもないイザコザからの喧嘩の機会も多い為、互いの手の内は知り尽くしている。

確かに戦つていれば楽しい。だが新鮮味は無いというのが、正直な感想だった。残るのはノイトラだが——これはまた微妙。

彼は強さへの探究心が人並み外れている為、模擬戦での戦法が固定される事はほぼ無く、戦う側としては新鮮味に溢れているのは確かだ。

だがその余りに掛け離れた実力差がネック。開始直後に高確率で瞬殺される為、毎度毎度不完全燃焼で終わる事も少なくない。

それにノイトラの本来の戦闘スタイルは徒手空拳では無い。故に手加減されている感じが否めず、ガンテンバインの中では何時もモヤモヤとした感情が渦巻いていた。

せめて相手が正規の形で対峙し、尚且つ己の持てる全てを出し切った上で敗北するという形で終わる事が出来れば、また違っていたかもしれない。ガンテンバイン自身も内心では何時もそれを願っていた。

だが帰刃形態の彼の持つ技は、殆どが破壊力に優れている。つまりその分、模擬戦を行えば周囲の建物の破壊率が上がる訳である。

壊れた施設を修理するのは、雑務係の破面。彼等の様な縁の下の力持ち的存在を何より尊重しているノイトラだ。自分達の都合で徒に苦勞を掛けさせる訳にはいかないとして、ガンテンバインが力を使う前に勝負を決める様に動く可能性が極めて高い。

つまりガンテンバインの希望が叶う機会は、現状に於いては皆無と言えた。

「行くぜ、茶渡泰虎!!」

「来い…ガンテンバイン・モスケーダ!!」

互いの掛け声を合図に、二人は互いに踏み込む。

次の瞬間、互いの拳が真正面から激突。周囲に盛大な衝撃波を巻き起こした。

泰虎とは別方向に進んだ一人である雨竜。  
彼は今、困惑を隠し切れない表情で、その場に立ち尽くしていた。

「…一体何なんだ、此処は？」

実はこの雨竜、仲間達と別れた時から終始走り続けているのだが、一向に敵と出会わないという不可思議な状況に陥っていた。

自分は侵入者であり敵の筈だ。にも拘わらず、迎撃の手が及ぶ気配が全く無いのは如何いふ訳なのか。

しかも最たる問題はこの道である。

例えるならば迷宮か。何故なら先程から幾ら進んでも、一定の周期で同じ場所に戻る事を繰り返しているのだ。

現在の場所に辿り着いたのも、既に三度目。

流石の雨竜も気付いた。これは何者かの意思が働いているのだと。

——— 実に悪趣味な悪戯だ。

下手人は間違ひ無く性格が捻じ曲がった性悪な性格である事間違ひ無し。

雨竜は内心で毒づく。

ちなみに途中で無数の柱が立つ広間の様な場所があつたが、無人だつた為に普通にスルーしていた。

「くそツ!! 全然先に進めねえじゃねえか!!」

「…阿散井か?」

「うおおお!!? 石田か!?!」

雨竜は足を止めたまま、この迷路から抜け出す為に思考を巡らせ始める。

するとその直後、何処からか大声が聞こえてきたかと思うと、横合いから恋次が飛び出して来た。

「お前…確か別の道に行かなかったか？」

「如何やら道の先が繋がっていらしい。それに何故か敵も見当たらなかった」

二人は一旦互いの状況を話し合い、情報を整理する事に専念する。

「俺も同じだ。さつきからずっと走り続けてるが、出口に辿り着く気が全くしねえ」

——これも藍染の仕業なのか。

後頭部を掻き篦りつつ、苛立った様子で恋次は吐き捨てる。

それを聞いた雨竜は更に思考を巡らせる。

彼自身、藍染について知って居る事は少ない。精々彼が行った悪事に、その目的を人伝に聞いた程度。

直接対面したり会話した事も殆ど無く、その為に藍染が実際どんな性格で、如何なる思考回路を持っているのかも良く解っていない。

だがこれだけは想定出来た。

護廷十三隊全体を完璧に欺き、此方の想定を軽々と超えた策略を巡らせる頭脳。隊長

格を軽く退け、卍解状態の一護を赤子の様に捻つて見せた恐るべき実力。

そんな超越者としての観点から考慮すると——恐らく藍染はまだ動いてはいないという結論に至った。

「…想定の域を超えないが——」

「あ？ 何かわかったのか!？」

不意に雨竜が漏らした声に、恋次は即座に反応。

鋭る様な視線を向けた。

恋次はそれ程頭が悪い訳では無いが、使う事は苦手である。

時間を掛ければそれなりの結果を出す事は可能だが、如何せん今は状況が状況。一分一秒でも時間は惜しい。

その為、この場に於いては基本的に頭脳を中心として器量良しの雨竜を頼みの綱としていた。

「僕達に対して、藍染はまだ手を出してはいない。恐らくこの状況は、策謀に長けた破面の仕業だろう」

「…俺達の合流も、ワザとそうさせたってか？」

「ああ、それに頗る陰湿で性悪な性格の奴が…ね」

本来、敵の合流を許すというのは愚行である。

だが自分達の現状を仕組んだ犯人はそれを選択した。

それは即ち——今更一人や二人増えようが、何の問題も無いと判断した事に他ならない。

完全に此方を見下している。

道に迷わせているのも、慌てふためく此方の様子を観察でもしたいのだろう。

実に悪趣味で、小物的な思考である。間違つても藍染がそれを行うとは思えない。

「今頃犯人は此方の様子を…何処か安全な場所でニヤつきながら眺めている筈だ。その余裕を崩してやろうじゃないか」

「そいつは良いな。…で、どうやるんだ？ そいつを引き摺り下ろすにしても、簡単にはいかねえだろ」

雨竜が犯人への仕返しを考えていると解つたからなのか、あくどい笑みを浮かべる恋

次。

だがそれはまだ先の話に過ぎないと思ひ至り、直後に表情を戻すと、雨竜に問い掛けた。

「この一本道を少し進んだ先に、壁が薄いと思わしき場所が幾つかあった。道程に進んで迷うなら……いつその事——」

途中で口を挟む事も無く、大人しく耳を傾け続ける恋次。

その様子に雨竜は密かに有難さを覚えつつ、説明を続ける。

これが一護であればこうはいかない。作戦の主旨を理解するや否や、それを成す為の手回し等の肝心な部分を聞かぬ内に一人で走り出す可能性が極めて高い。

つい先程まで恋次の事を一護と同類に脳筋だと思っていた事を、雨竜は内心で謝罪した。

「俺等で道作って進みやあ良いつてワケだな……良し、そうと決まれば急ぐぜオイ!!」  
「黒輪脳筋と同類みたいな作戦で癪だけどね……って先走るな阿散井!!」

今後の方針が決まるや否や、気合全開で走り始める恋次。

雨竜は慌てて制止の声を上げる。

だが聞こえなかつたらしく、その足が止まる事は無かつた。

——前言撤回。やはり彼は一護と似ている。

内心でそう断言しながら、恋次の後を追い駆け始めた。

それから間も無くして、そんな二人の後を追従するかの様に、新たに二つの影が現れる。

「いかん!! 置いて行かれてしまうぞドンドチャツカ!!!」

「そそそそそ、そんなく!! もう迷子になるのはいやでヤンスく!!」

その正体は——五つの入口で別れた筈のペッシェにドンドチャツカだった。

初めは一護達と共に虚夜宮の入口まで侵入後、それ以上付き添う気は無かつた彼等だが、其処で誤算が生じた。

ネルが一護を追い駆けて行ってしまったのだ。

僅かな時間を共に過ごしたが、それが今迄感じた事が無い程に楽しく、もつと一緒に居たくなつたと訴えて。

ペツシエ達もそれには同意だった。

付き合つて遣る義理も無いだろうに、本来であれば敵である自分達を殺さぬばかりか、少し話しただけで仲間の様に扱う人の良さ。しかも自分達の放つ渾身のボケに即座に反応、的確なツツコみを返す事までして見せる。

もう会話が弾む弾む。御蔭で虚夜宮への道中は実に充実していて、心躍る時間であった。

本音を言うと、ペツシエ達ももつと一護達と共に過ごしたいとは思っている。だがそれには決して無視出来無い問題があった。

ルヌガンガにも言われた事だが、虚夜宮まで彼等を案内した時点で、自分達は藍染には裏切者と判断されているだろうという事実が。

分かれ道の前で待機しているべきだったか、それとも早急に虚夜宮から離れて虚圏へ逃げ去るか、またはネルの様に後に付いて行くか。

だが現状ではどれが最も安全か、正確には判断出来無い。暫し悩んだ末、ペツシエ達はネルと同様の選択を取る事にした。

どの選択肢も可能性は五分五分だ。ならば立ち止まっているより動いている方が良いかもしれない。

そして何より自分達は兄弟。如何なる何時でも共に在るべき運命共同体なのだから。

——というのが、ペツシエ達が取っている今の仮の姿としての行動理念だった。  
真意は全くの別物。

如何に過去の記憶と力を失って弱体化したとは言え、主を置いて逃げるなど、従属官として言語道断。

それにあの時誓ったのだ。周囲のありとあらゆる脅威から、この小さな主を守り通すと。

彼女が幼子としての意識から来る軽率な行動を取っても、自分達はそれに最後まで付き従い、支え続けるだけだと。

「このまま置いてきぼりにされてしまえば、我等は瞬く間に駆逐されてしまう事だろう!! それは何としても避けねば…!!」

とは言え、肝心の主たるネルが何処に行ったのか判らない今、徒に自分達だけで動き回るのは得策では無い。

理想としては、あの二人の様な強い者達と合流し、行動を共にする事だと、ペツシエは判断する。

とは言え、ペツシエとドンドチャツカは人知れず己の腕を磨き続けており、実力も相

当に上がってはいる。

彼等としては、何とか下位十刃を相手取れるまでには至れたのでは、というのが正直な感想だった。

だがそんな真の実力を出す相手は何年も前から決まっております、その時が来るまで披露する気は毛頭無かった。

その相手と言うのは勿論——嘗て卑劣極まりない手段で自分達を陥れた十刃と十刃落ちの二人。

彼等の性格を考慮するに、再会したとしても確実に此方の事を雑魚だと侮るだろう。

それこそが最大の間隙であり狙い目。それを突く事出来れば此方のものだと、ペツシエ達は必勝のプランを立てていた。

——それが根本的に間違いであるとは知らずに。

「ぶふええええええん!! ネルはどこでヤンスかく!?!」

「ええい!! 泣いていないでさっさと行くぞドンドチャツカ!!」

ペツシエは喧しい声で鳴き声を上げ続けるドンドチャツカを叱責しつつ、石田達の後を追ったのだった。

ルキアはふと、現在駆け上がっている階段の先に光が差している事に気が付いた。

——自分は今、虚夜宮の建物の中に居る筈ではなかっただろうか。

妙に思いつつも、足を止めずに其処を目指す。

しかもだ。この先の光だが、明らかに人工物では無い。まるで瀨霊廷でも見慣れた太陽のそれにしか思えない。

全ては直接確認してみれば済む事。そう考え、ルキアはやがてその出口を潜り抜け、外へと出る。

そして驚愕。上を見上げると、其処には果てしなく広がる青空が。

「何だ……これは……!?!」

一瞬虚夜宮から脱出してしまったのかとも考えたが、即座に改める。もしそうであれば青空では無く、夜空が広がっている筈なのだから。

全く以て理解不能な光景を目の当りにした為か、身体の動きを止めて思考の渦へ入り込みそうになる。

正氣に戻ったルキアは、途端に自身の頭を左右に激しく振る。

何時までもこうしている訳にはいかない。今の自分には織姫を救出するという使命があるのではないかと。

それに考えてみる。この虚夜宮を作り出したのはあの藍染だ。

彼の手に掛かれば、恐らく限定的な青空を作り出す程度は容易だろう。

「そうだ…まずは進む事を考えねば…」

ルキアは視界を先程までの進行方向へと向け直す。

橋の様な通路の先には、巨大な柱を並べたかの様な巨大な塔が聳え立っている。

周囲に立ち並ぶ建物と比較すれば明らかに異質。侵入すれば何も起こらない訳が無い。

「まさかだが…此処は——」

「十刃ノ住処カモシレナイ？」

「ツ!!？」

不意に抱いた疑問。それを口に出すより先に、背後から聞こえて来た声がそれを代弁する。

ルキアは即座にその場を飛び退くと、斬魄刀を抜きながら後方へと振り向いた。

其処に立つのは、八つの小さな穴が開いた縦長の仮面を頭からすっぽり被った、長身の破面。

その仮面が頭部に嵌っている事から判るが、明らかに通常の人型では無い。

何より気になるのは、その身に纏う不気味な雰囲気に加え、止めどなく溢れ出している膨大な霊圧だ。

前者については異形故の得体の知れなさから来るものだろう。そして後者について連想すると——以前自身の腹部を貫手で貫き、右腕を挽ぎ取ったグリムジョーの姿が思い浮かんだ。

それ等の条件より、ルキアは眼前に立つ破面、その大凡の正体に見当が付いていた。

「貴様……十刃か」

切っ先を向けながら、ルキアは確信を籠めた問いを投げ掛ける。

だがその破面——アールローロはそれに応えず、それどころか一瞬にしてその場から姿を消した。

「……この空や俺自身の事も含めて、全てを教えてやる」

「っ、待て!!」

「ツイテ来キナヨ」

再びアールローロの声が聞こえて来たのは、またしても背後だった。

——一度ならず二度までも後ろを取られるとは。

難たる不覚だと、ルキアは内心で歯噛みする。

そんな彼女を余所に、アールローロはそのまま背中を向けると、建物の中に消えて行った。

ルキアは一先ず冷静になりながら、思考を巡らせる。

今の動きから、あの破面は並みの数字持ちの実力を凌駕している事は明確。

序列は不明だが、ほぼ高確率で十刃だろう。

正直言えば不安もある。果たして自分に、十刃クラスと渡り合える実力はあるのだろうか。

あのグリムジョーですら6番、階級で言えば中の下だ。そんな彼に良い様にあしらわれる程度では、実力がそれ程離れていないであろう一つ前の数字である7番と対峙しても同様の結果に終わる可能性が高い。

そして5番目——ノイトラ・ジルガについては触れない。と言うか、考えるだけ無駄だった。

喜助に夜一、冬獅郎と乱菊の四人の実力者を纏めて相手取れる程の規格外である。しかも解放無しでそれだ。

流星のルキアも、自分如きでは時間稼ぎにならないと悟っていた。万が一対峙した際は真つ先に退却すべきだろうとも考えている。

あのレベルの相手は、義兄であり隊長クラスの上位に位置する実力者である白哉、それか隊長として古参である浮竹か京楽といった辺りに任せる方が良い。

これは決して他力本願では無く、適材適所。料理家に服を作れと言っても出来無いのと同じだ。

中にはその選択を、臆病者の思考だと蔑む者も居るかもしれない。一死神であるルキアとしてもその気持ちは解らなくも無い。

だが勇敢と蛮勇は本質が全く異なる。一切の迷い無く自身の命を投げ打つ事が、必ずしも正しい結果を齎す訳では無いのだ。

とは言え、倒さねばならない状況に陥れば勿論交戦する。

それがどれ程無謀な事か理解していても尚。如何に絶望的な状況でも決して諦めず、最後まで勝機を探り続ける。

仲間達や、尸魂界の為であれば、文字通り命を賭して。朽木ルキアという死神はそういう存在なのだ。

「済まない井上。助けに行くにはもう少し時間が掛かりそうだ……!!」

——必ず勝利して、会いに行く。

そう胸の内で誓いながら、ルキアはその破面の後を追った。

一護は自身の頭部に掛かる重さを感じながら、長い通路を突き進んでいた。

良く見ると、彼のその頭部には何故かネルが肩車の形で居座っていた。

少し前、五つの分かれ道の先から感じる途轍も無い靈圧の多さに、ネル達の安全を考慮した結果、待機して居る様に指示を出した。

にも拘らず、ネルはそれを破って後を付いて来て、こうして共に居る訳だ。

再会の直後に腹部へ強烈なタツクルを受けたり、時折オレンジ色の髪の毛を引つ張られたりと、一護はネルとじゃれあいつつ進んで行く。

そして辿り着いたのは、特に特別な物も何も無い、非常に大きな広間の様な場所。無論、此処も3ヶタの巣に存在する遊撃の間の一つであった。

「…何か地下で見た広場に似てんな、此処」

だがそんな事を知る由も無い一護は、周囲を見渡しながらそう呟いた。

次の瞬間、ネルが叫んだ。

「一護!! 奥に誰かいるっス!!」

「なっ!!」

遊撃の間への到着後は上部を中心に見渡していた一護だったが、ネルの声で弾かれる様にして部屋を中心へ視線を移す。

するとそこには此方に背中を向けたまま、腰に手を当てて仁王立ちしている偉丈夫が居た。

「我が拠点へようこそ、インバズール侵入者よ」

「…誰だてめえは」

その男は依然として背中を向けたまま、通りの良い声で言う。

安全を考慮してか、一護は頭部にしがみ付くネルを下へ降ろすと、自身の背後に隠す様にして移動させる。

表情を引き締め、一護は己の斬魄刀の柄へ手を添えた。

「——よくぞ聞いてくれたッ!!」

男は突如としてそう叫ぶと、その姿が掻き消える。

攻撃が来るのかと慌てて斬魄刀を抜く一護だったが、それは杞憂に終わった。

実は男はその場から大きく跳び上がっただけで、先程よりは少し間合いを詰めた場所目指して落下し始める。

着地と同時に両足を肩幅以上に大きく開き、右手をやや上に掲げる様にして持ち上げると——其処には所謂決めポーズというものが出来上がっていた。

「吾輩は破面No. シエント・トレス 103、ドルドーニ・アレッサンドロ・ゲル・ソカッチオ!!」

だが何処と無くダサイ印象を受ける。人気の無い地元の特撮ヒーローが良く取っついていそうなものと言え、何となくイメージは湧くかもしれない。

すると次の瞬間、その場の空気が凍る様な悲劇が起こった。

「さて、次はそちらの番だ。名乗りたまえ坊や!!」  
二二二

「……………」

「…何だその顔は。もしかや吾輩の姿に見惚れたかね？」

ふふん、と得意気な表情を浮かべるドルドーニ。

だがそれに対し、無言、無反応、無感情の三拍子が揃った様子で、一護とネルはドルドーニを見遣る。

厳密に言うと、その視線は主にドルドーニの全身から下の部分——股間へと向けられていた。

疑問に思ったドルドーニは、ふとその視線を辿り、周辺を確認。

そして絶句した。何せその股間に当たる部分は、中心の縫い目が見事なまでに破れ、白装束の下に隠されていた下着が丸見えとなっていたのだから。

しかも色は赤。それはもう情熱的なまでの赤である。

この派手さは如何考えても紳士的とは言い難い。

「…もう一度、初めの登場シーンからやり直して良いかね？」

「お、おう…」

顔中から滝の如く冷や汗を流しつつ、ドルドーニはそう問う。

意図的では無いだろう、余りに不幸な出来事。思わず同情してしまったのか、一護は了承の返事を返してしまう。

「で、では失敬!!」

ドルドーニは股間周辺を両手で隠しながら、そそくさと遊撃の間の出口まで直行する。

恐らく自室へと戻って早急に着替えでもするのだろう。

その後ろ姿を眺める一護とネルの周囲には、何とも微妙な雰囲気か漂っていた。

ノイトラは両目を閉じたまま、自室の椅子へと静かに腰掛けていた。何かに集中している様に見受けられるが、正にその通り。

虚夜宮に侵入した八つの霊圧。それ等全ての動向を、先程から探査神経で観察しているのだ。

一護はドルドーニ、泰虎はガンテンバイン、ルキアはアローニー口の宮へと向かい、対峙したのを確認。

取り敢えずこの辺りは史実の通りである。

ノイトラは安堵した。

だが問題は残る二人、石田と恋次にある。

前者の理由は単純。チルツチの存在の有無だ。

彼女は今、ノイトラの従属官という役割を得、共に行動している。

結果、石田はチルツチと交戦する事無く、そのまま移動し続ける事となっていた。

そして最後に恋次。これがまた気に掛かった。

本来であれば彼は、途中で紆余曲折あるものの、そう間を置かずしてザエルアポロと対峙し、交戦する筈だ。

だが現状は異なり、恋次の霊圧は未だに同じ道をぐるぐると回り続けている。

しかもつい先程、如何いう訳か石田と合流。そのまま行動を共にしているという妙な

展開となっている。

「…あの陰険眼鏡め、一体何してやがる?」

そう呟くノイトラの口調には、やや焦燥が感じられた。

妙な事態となっている現状を考慮すれば、致し方無いと言えるだろう。

だがその思考は突如として切り替わる。

それは一護達とは別の——ネル、ペツシエ、ドンドチャツカの霊圧に意識が向いたからだ。

何せこの三人こそ、今のノイトラが最も再会を望み、そして加害者という立場としては最も会いたく無い存在——元第3十刃メンバーに他ならないのだから。

ネルの正体、それはネリエル・トウ・オーデルシユヴァンクその人。ペツシエとドンドチャツカは彼女の従属官。

懐かしい彼等の霊圧を捉えた刹那、フラツシユバツクする嘗ての光景。そして湧き上がる罪悪感。

ノイトラ自身の意思とは裏腹に、心臓の鼓動が早まり始める。

こうしている内にも一秒、また一秒とネリエルとの対面の時が近づく度に加速。それ

に比例して平常心も欠け始め、冷静な思考が薄れてゆく。

いつその事全て投げ捨てて逃げてしまえと、仕舞には消極的な考えすら浮かんでくる。

「…下らねえ」

だがノイトラはそれ等全てを容易く跳ね除けた。

今迄何をしてきた。血が滲むどころか、滝の如く流れる程の努力を重ねてきたのは何故だ。

突如として降り掛かった、ノイトラ・ジルガという存在への憑依という理不尽にもめげず、必死に生き抜いてきたのは何の為だ。

初めはネリエルへの贖罪、自分自身の生存。後に大切な仲間の生存も加わり、それ等全てを成し遂げると誓ったのは嘘だったのか。

——そんな訳があるか。

ノイトラは自身を後退させんと目論む悪魔の囁きを拒絶する。

何を迷う要素があるのか。馬鹿も休み休み言え。

地力に加え、新たな力も得た。布石も打った。仲間の死も乗り越えた。

それ等全ては必ず結果に繋がる。

「スツ込んでろカスが。俺を何だと思ってやがる」

ノイトラは閉じていた目を開き、ゆったりとした動作で立ち上がる。

——引けば老いるぞ。

一護の持つ斬魄刀、斬月。彼が自らの名を授ける際に放った言葉を思い出す。

——臆せば死ぬぞ。

今の己が進むべき道は、直線上にある。

背後は全て崩れ落ち、後退が許されないと言うか、端からそんな選択肢は存在していない。

ならば突き進むのみ。決して振り返る事無く、只管ゴールへ向かって。

「…やってやるヤ」

以前より立てていた計画では、ノイトラはここから暫く単独行動を取る事となる。

出来る事ならまずチルツチャセフィードといった身内の守護に集中したいのが彼の

本音だったが、それでは他の仲間達を救えなくなってしまう。

その代わり、ノイトラはチルツチを護衛として、セフィーロとロカの傍に置いている。無論、それはザエルアポロが敗北するまでの僅かな間だけだ。

その結果が確認出来れば、チルツチも行動を共にする予定となっている。

踏み込んだ内容を避け、表面上のみしか説明していないにも拘らず、疑問を抱く素振りを一切見せずに自分の指示に従ってしてくれるチルツチの献身さに、ノイトラは感謝の念しか抱けない。

セフィーロについても同様だが、彼女に関しては少々異なる。

以前より共に作戦会議を行っている時点で判ると思うが、ノイトラはセフィーロに対し、自分が未来に起こる展開について知って居る事を暴露している。

切っ掛けは不明。気付けば既に話し終えた直後だった。

実はそれに至るまでの前後約一時間以内の記憶も曖昧。何か透き通った青い光を見た様な気もするが——其処まで思い出すのが限界だった。

だが例え無意識の内に情報を引き出されていたのだとしても、特に問題は無いとノイトラは考えている。

それは第一にセフィーロが自身の抱える事情全てを受け入れてくれた事。そして彼女の藍染に対する忠誠心の低さにある。

後者については寧ろ低いと言うか、全く感じられないのが現実だった。実は本人もその事について少々仄めかしている。

——無遠慮に他者の本質を見透かし、掌の上で転がそうとする男は、一番嫌い。それが誰を指しているか、ノイトラには即座に判った。

最悪の場合だが、この先ノイトラは藍染と直接敵対する可能性がある。それを知れば、この虚夜宮内に存在する破面の殆どは阻止に回るか、ノイトラを排除する為に動く筈だ。

恐らくそれはあのスタークでも同様に起こり得る事態。最悪は藍染にその場で命令でもされれば、躊躇はするだろうが、恐らく逆らえない。

だがセフィーロはそれをしない。それどころか敵対行為を推奨する勢いで、仕舞には共に逃避行と洒落込もうと誘って来た程である。

「必ず…成し遂げてやる」

——どうか、御無事で。

藍染の全十刃の招集である、侵入者についての作戦会議という名のティータイムを終えた後に寄った治療室。

最後となるかもしれない憩いの時を過ごし、やがて其処を立ち去ろうとした際、ふとセフィードに投げ掛けられた言葉を思い出す。

その時は返答らしい返答は返さずにその場を後にしたが、それを今此処で口に出す。ノイトラは腰にぶら下げた斬魄刀の一部たる鎖の片側を外し、その巨大な刀身を具現化する。

柄を握り、そのまま軽く一振り。その感覚を確かめた後、背中にそれを担ぐと、自室を後にした。

## 第四十二話 龍拳と魔人と、髭と主人公と…

純粋な体格差で言えば、ガンテンバインが僅かに勝っている。

だが泰虎として侮れない。体重に膂力等、人間離れしたその身体能力は、デモウラのように並外れた巨体を持つ虚が相手でも軽く押し返せる程。

鍛錬を重ねた今となつては、例え相手が最下級大虚であっても難無く勝利出来るだろう。

だがガンテンバインとの初撃のぶつけ合いに於いて、泰虎は呆気無く敗れ去つた。

攻撃に用いた右腕は後方へと弾き返され、それに引つ張られる様にして身体全体も持つて行かれる。

想定外の結果に、その表情が驚愕の色に染まる。勝てないにしても、ある程度は均衡まで持つて行けると思つていたが、まさかこうも容易く押し負けるとはと。

そんな隙をガンテンバインが見逃す筈も無く、即座に響転でその場を跳ぶ。

吹き飛ばされる泰虎との間合いを詰めると、がら空きの懐目掛けて右拳を突き出した。

不安定な体勢ながらも、泰虎は咄嗟に右腕を引き戻し、防御に回す事に成功。

だが気付く。ガンテンバインのその拳には、先程までは無かった筈の——バグ・ナグの様な形状をした武器が握られている事に。

「グ……ウツ!!」

止むを得ずそのまま拳打を受け止めた泰虎だったが、その口からは苦しげな呻き声が漏れ出していた。

何せその爪先は容易に右腕の鎧を貫き、脆弱な内側を傷付けていたのだから。

それだけに終わらず、拳打に込められた衝撃によって、吹き飛ばされる勢いは増幅。

結果、泰虎は盛大に壁へと叩き付けられる事になった。

攻撃を終えたガンテンバインは、地面へと軽やかに着地。

眼前にて埋め込まれた壁から抜け出ささんともがく泰虎を眺める。

「……まだまだ」

静かに呟くと、その姿が掻き消える。

直後、泰虎の本能が激しく警報を鳴らした。躲せ、と。

——追撃を仕掛ける気か。

右腕を最優先に壁から抜き出すと、肘先へ靈圧を籠める。そしてそれを背後の壁に叩き付けた。

発生する凄まじい衝撃。それは壁に埋まったままだった背中に襲い掛かり、泰虎の表情が苦痛に歪む。

だがその我が身を顧みぬ咄嗟の行動は実を結んだ。

泰虎の身体は壁から押し出されており、絶体絶命の窮地から脱していた。

それと擦違う様にして、ガンテンバインの追撃が元居た場所へ叩き込まれる。

泰虎は地面から転がりながら移動。一先ず距離を取る事を選択した。

右拳を突き出した体勢のまま、ガンテンバインは泰虎の姿を横目で見遣る。

心無しか、その目には落胆の色が見て取れた。

「その程度か？ 茶渡泰虎」

「っ!!」

その言葉を耳にした泰虎は、自身の右拳に力が籠るのを感じた。

悔しさもあるだろう。だが最たるものは別。

それは真正面からの尋常な立ち合いを望んだ相手を落胆させてしまったという、自身の失態に対する怒りだった。

「冗談だろう。俺には判ってるぜ」

ガンテンバインは拳を引き戻し、構えつつ言う。

「てめえの力はこんなモンじゃねえ。もっと上がある筈だ」

——だから早くそれを見せろ。

直接は語らず、視線でそう訴えるガンテンバイン。

泰虎としては応えて遣りたいのが本音だったが、そうも行かない理由があった。

あの時祖父に教えられた真の力。それをを用いる際の感覚が、虚圏に侵入した直後から狂ってしまったのだ。

だからと言って現状のまま戦っては、敗北は必至。

戦闘スタイルは問題無い。だが問題はその練度の高さと同機動力だ。

確かにあの力さえ使えば、ガンテンバインと十分に渡り合える自信はある。

だが——出来無い。

必死に己の内に眠る力へ働き掛けても、返答は皆無。時間の経過と共に焦燥が募る。泰虎は何とももどかしい気持ちを抱いていた。

「…ワケありか。しょうがねえ」

泰虎の雰囲気から察したのか、ガンテンバインはそう零した。

「それなら俺が無理矢理にでも引き出させてやる。…死ぬんじやねえぞ？」  
「ッ!!?」

次の瞬間、跳ね上がる霊圧。

咄嗟に身構える泰虎だが、少々遅かった。

気付けば彼の巨体は高々に打ち上げられ、宙を舞っていた。

ドルドーニが立ち去つて数分が経過した頃。待機状態となつていた一護とネルは、もはや緊張感が完全に途切れていた。

あれだけ堂々とコントの如き立ち振る舞いを見せ付けられたのだ。白けない方がおかしいだろう。

「そーいやアイツ…No. 103とか言つてたよな？」

「そつスね」

首を傾げつつ、話し合う二人。

話題はドルドーニの語つた己の階級。

話しを聞く限り、破面とは基本的に1から10の数字を持つ十刃、そして二桁の数字を持つ数字持ちに分類される筈だ。

だがあのドルドーニという破面の持つ数字は三桁。これは如何いう訳なのかと。

順当に考えれば、それだけの数の破面が生まれたと見るべきか、それとも余りに弱い為にその様な数字を刻まれたと見るべきなのか。

一護達としては後者を考えていた。

それはそうだろう。あれだけ盛大に決めポーズをかました挙句、ズボンの股裂きを起こす間抜け振りだ。

如何考えても猛者の立ち振る舞いでは無い。

自分がツイてると感じた時に限り、“ツキツキの舞”を踊る一角の姿とややダブって見えはするが、ドルドーニの場合は突き抜けて緊張感に欠けている。

「…弱そうだな」

「…弱そうっス」

やがて二人は声を揃えて言う。

いつその事、この場合はドルドーニの事など無視して進んだ方が良いのではないかも。

——この時点で察せるだろうが、一護はこの時、同じ三桁の数字を持ちながら隊長格と渡り合える実力を見せたチルツチの存在を忘れていた。

だが一護は気付かない。

先程のドルドーニの立ち振る舞いも、それを思い出すのを阻害していた。

「フハハハハ!! 待たせたな坊や!!」

そんな一護達の上から、突如として降り掛かる声。

此方が引く程のハイテンションで、ドルドーニは空中で身体を回転させつつ、軽やかに着地。そしてやはりポーズを決める。

だが良く見れば些か控え目だ。恐らく先程の二の舞になる事を避けようとしているのだろう。

解決策としては初めから止めれば良いだけの話なのだが、それはドルドーニの信念に反する為、その選択肢が取られる事は無いだろう。

「では早速だが相手をしてやろう! 遠慮無く掛かってきたまえ!!」

ドルドーニはポーズを決めたまま、右手で手招きする。

格好良さばかりを追及した、武の欠片も感じられない隙だらけな構えである。身体もズレており、極めて不安定。これでは咄嗟の対応も間に合わない。

だがこれはブラフ。注目すべきはその目だ。

「猛者であれば直ぐに判る。一見すれば素人だが、その実は己の実力を隠しながら、相手を油断無く観察し続ける鋭いそれに。」

「だが一護達は気付かない。初めに見た間拔けな印象も相俟つてか、表面上にしか取れなかつた。」

何とも締まらない雰囲気、一護は背中の斬月を抜き、正眼に構える。

「なんか…あんたスゲー弱そうだな」

「ぬわああああにいいいい!!? 言うに事欠いて、吾輩が弱そうだとおう!!」

一護のその眩きに即座に反応。手招きに使っていた筈の右手、その人差し指を突き付けて抗議するドルドーニ。

「だがそんな動作も余計に弱者の印象を強める要因となっていた。」

「いや、どう見てもそうとしか思えねえぞ。…股裂けとか」

「ぬふうツ!!」

一護が最後に付け加えたその一言に、ドルドーニは自身の胸を押さえながら、上体を

一気に仰け反らせた。

他者から己の消したい失態を突き付けられる事は、思いの外ショックが大きいのだ。

「ふ、フフフ……まさか口舌の刃で先手を取るとはやってくれる……!」

既に満身創痍な雰囲気醸し出すドルドーニは、やや後退りしながらそう返す。

完全にボケ役の反応である。此処で即座に辛口なツッコみを返せば、普通にコントが成立する事だろう。

「いや、事実だし。赤い下着とか良い趣味してんのな」

「変態みたいっス」

「ぐはあああああッ!!!」

別にそれを狙っていた訳では無いのだが、元からツッコみ体質な一護は呆れ顔でそう返した。

後ろのネルもさり気に眩く。

すると最後のそれが止めとなったのか、遂にドルドーニは片膝を突いて崩れ落ちた。

「クツ…こうなったら最後の手段!! 坊やをコテンパンに叩きのめし、物理的にその記憶を消してやろうではないか!!」

「んな無茶苦茶な…ちよつと離れとけネル」

「う、うん」

だが復帰は意外と早かった。

ドルドーニはその顔を羞恥の赤で染めつつ、声高らかに宣言した。

一護はネルを避難させると、考える。

本当に遣れると思っっているのだろうか。

つまり一護は内心では完全にドルドーニを侮っていた。

彼はまるで物語で良くありがちな——所謂かませキャラの一種ではないかと。

これから間も無くして、その認識を改めざるを得ない状況に陥るとは知らずに。

「まあ、とりあえず相手してやつけど…どうなっても知らねえぞ?」

「…ほざいたな坊や!! ヒトは見た目では判断してはいけないという事を、その身を以て教えてやろう!! 覚悟おお!!」

ドルドーニは叫ぶと、響転も使わずドタドタと足音を立てながら駆け出す。

その右手は左腰に下げられた斬魄刀の柄に添えられてはいたが、その姿は完全に雑魚丸出しなスタイルであつた。

——峰打ち程度で勘弁してやるか。

元から一護は敵であろうとも命を奪う事を良しとしていない。

その為、此処は軽く打ち据える程度に留め、大きな怪我はさせない形で収める事にした。

それに僅かな時間しか接していないが、ドルドーニの性分は悪では無い。寧ろこのキャラは何処か憎めない感じがする上、親しみ易い印象を受ける。

上手い事いけば、織姫を救出する為の協力を得られるかもしれない。そんな淡い期待を抱いていた。

此方に向かつて来るドルドーニを視界に捉えながら、一護は斬月の刀身を反転し、棟を前へ。

左側へ振り被り、その額目掛けて振るつた。

破面には皆共通して鋼皮という頑丈な外皮を持つと言うし、例え頭部に攻撃を加えてもそう大事には至らないだろうと考えて。

「え…う？」

直撃するかと思われた直後、一護の口から気の抜けた様な声が漏れる。

見れば斬月の刀身は空を切っており、ドルドーニの姿は何処にも見当たらない。

そして気付く。左上腕部に感じる鋭い痛み。

視線を移すと、其処には決して深くは無いが、横一筋の太刀傷が刻まれていた。

「ッ、一護!？」

驚愕したまま硬直している一護へ、切羽詰まったネルの声が投げ掛けられる。

それに正気を取り戻すと、直ぐ様背後を振り向いた。

傷の位置からして、ドルドーニは直前に斬魄刀を抜き、斬撃を繰り出しながら左側を擦り抜けたと見られる。

ならば彼の位置は自身の背後の筈。

だが実際は如何だ。視線の先には何も見当たらない。

一護はふと気付く。

この世界は広い。それに比例して、存在している能力の種類も豊富だ。ならばドルドーニが敵の視界から逃れたり隠れる術や能力を持つていたとしても何らおかしく無い。

一護は咄嗟に霊圧探知を発動し、ドルドーニの霊圧の位置を探る。

「——反応が遅いぞ、坊や」

霊圧を捉えるよりも先に、一護の真横から声が掛かる。

そして今更気付いた。右手に握る斬月の柄越しに感じる違和感。

弾かれる様にして声の発生源でもある右方向へと振り向く。其処には斬月の平地の部分に、爪先で立っているドルドーニの姿が。

良く見ればその両手には何も握られてはいない。

それはそうだ。何故なら一護の左腕の太刀傷は、斬魄刀では無くその卓越した脚技によつて刻まれたものなのだから。

だが一護はそれを知らない上、直接その目で確認出来てもいない。

御蔭で彼はあの一瞬の内に何が起きたのか、全く理解が及んでいなかった。

しかももう一つ気になるのは、右手に握る斬月から感じる重さだ。

大の大人一人が乗っているにしては余りにも軽いのである。

その理由は単純。ドルドーニは爪先以外の足の部分へ霊子の足場を展開して乗る事で、斬月に押し掛かる重さを軽減しているのだ。

「なん……だと……!?!」

勿論それについても一護が知っている訳が無い。

彼の口からは思わず驚愕の声漏れていた。

「むん!!」

ドルドーニは斬月を足場にしたまま、身体を回転。未だに硬直した状態の一護の頭部目掛け、容赦無く回し蹴りを繰り返した。

「ガッ!!!」

当然、防御体勢も取れていない一護は真面に直撃。盛大に吹き飛び、それから地面を

二・三回転がった後、壁に衝突する。

直撃の際に負傷したのだろう、周囲へ疎らに血を飛散させながら。

「如何に動揺したとは言え、敵を目の前にして動きを止めるのは自殺行為だぞ」

ドルドーニは険しい表情を浮かべ、その視界を一護の吹き飛んだ方向へと移す。

だが肝心のその姿は砂煙に隠れており、確認は出来無い。

「そして次に選択する行動も、大凡は予測できる——」

だがドルドーニには読めていた。

相手を遙かに格下だと想定していた筈が、真実は全くの真逆。御蔭で初撃から続いて二回連続で攻撃を受けるといった失態を演じてしまう。

これが経験の浅い、血気盛んな若者であれば如何なるか。

まず確実に焦る。そして何とかこの不利な流れを変えんと、真つ先に反撃へと行動を移すだろう。

「——月牙」

だが冷静さを欠いた頭では、策を練る余裕なぞある訳も無い。すると自然と選択肢も絞られる。

最たるものは接近戦。それも狙いは真正面では無く、判り易い死角。

「天衝!!!」

ドルドーニの背後より発せられる声に霊圧。

壁に叩き付けられた直後、一護は即座に瞬歩で移動。その一見隙だらけな背中目掛け、斬月の刀身から必殺の斬撃を放っていたのだ。

「残念だが…背後は悪手だ」

それに対し、ドルドーニは振り向く事も、ましてや回避行動すら取らなかつた。

上体を前方へ倒すと同時に、右踵を真上に振り上げる。

脚全体には事前に霊圧を纏って強化されており、その持つ威力は迫り来る月牙を超

えていた。

「…嘘…だろ…」

始解と卍解、其々の状態で持ち得る最強の技である月牙天衝。

それをいとも容易く粉碎された事に、一護は呆然とそう呟くしか出来無い。

だが厳密に言えば誤りがある。

先程の月牙天衝は、本来持ち得る威力には程遠い。

斬月に込められた霊圧の量に集束率といった、基本的な部分が尽く甘く、実に御粗末な出来であった。

これは一護のみならず、熱し易い性格の者が持つ欠点だ。想定外の事態に陥る等して焦燥に駆られた途端、視野が狭まる上に判断力や集中力が欠如するというもの。

ドルドーニは邂逅より間も無くしてそれを悟っていた。

故に先程はその隙を突き、洗礼の意味合いも含め、加減抜きの一撃を御見舞いしたのである。

その程度ではこの先で待ち構えているであろう、十刃達を相手に生き延びられないぞ、と。

元よりドルドーニは戦いに於いては非常に厳しい考えを持つている。例え女子供や老人であっても、一度戦場に足を踏み入れれば皆平等。敵とあらば、躊躇無く己の刃を振り下ろす。

実力も伴わない癖に、甘い理想ばかり抱く者に対しても同様だ。

だが見込みがある者に対しては情けを掛ける。先程から一護に対して態々諭す様に語り掛けているのが何よりの証拠だ。

「やれやれ…言っただろうに。ヒトを見た目で判断してはいけない」と

背後を振り向くと、ドルドーニは肩を竦めながら言う。

彼のその佇まいには、序盤に見せた間拔けな雰囲気は微塵も無い。

それは正に猛者の貫禄——長年戦場を駆け抜けた者にしか出せぬ凄みが見て取れた。

「理解したかね…坊や？」

「…ッ!!!」

——ぐうの音も出ないとはこの事か。

一護は極度の緊張からか、全身がガチガチに硬直していく様な錯覚に囚われた。

あれから何度殴られた事か。もはや泰虎は覚えていない。

揺れる視界、力が入らない膝。足元には現在進行形で増え続ける大量の血痕。

反撃の余地も皆無な、無慈悲な拳打の嵐。それは主に胴に背中を中心に叩き込まれた。

その結果、無数の内出血や打撲の他、その拳に握られた得物の御蔭で、その服の下は穴だらけになっている事だろう。

顔を狙わなかったのは、殺さない様にという意思の表れか。それとも気紛れか。

ガンテンバインは此方の力を引き出させると言っていた。互いに全力で立ち合う事

を望んでいるが故。ならば前者だろう。

「グ…!!」

遂に泰虎は片膝を地面に着いた。

それを前方で眺めるガンテンバインは、見るからにその肩を落としていた。

「…これだけやっても駄目かよ」

次にその目に浮かんだ感情は——同情。

ガンテンバインは理解していた。泰虎は鮮血を撒き散らせながら殴られ続けながら、必死に己が身から何かを出そうとしていた事に。

恐らくそれは自身が持ち得る本来の力を解放しようという足掻き。

だがその願いは叶わなかった。

眼前では、片膝を着いた状態から再び立ち上がらんと、歯を食い縛り続ける泰虎。

——悔しいだろうに。

ガンテンバインは痛々しい程、その思いを感じ取っていた。

彼とて悔しい。泰虎程の強者を、全力を出せぬまま仕留めなければならぬという現実だ。

正直言うと、泰虎本来の強さは未解放時の自身を超えている。それがガンテンバインの直感だった。

解放すれば良くて互角か、悪くても多少は戦える程度は行くかもしれない。

だがガンテンバインの帰刃形態は火力が上昇する反面、機動力が大幅に落ちてしまうデメリットがあった。

これが十刃クラスが相手であれば話にならない。

ガンテンバインは以前軽くシュミレートしてみたのだが、反撃する余地も与えられず、アルマジロの様に身体を丸めて敵の攻撃に耐え続ける未来しか浮かばなかったのを覚えていた。

厳密に言うると、泰虎の実力は正確には測れていない。だがもし彼が下位十刃クラスに匹敵するのであれば、同様の結果に終わるだろう。

「これも主より与えられた試練なのか…」

ガンテンバインの理想としては、まず本来の実力を取り戻した泰虎と現状のまま立ち

合う。そして大凡の実力を測った後、帰刃を選択。決着が付くまで戦闘を続行する。だがもしも、泰虎の実力が帰刃形態の自分より上であつたならば――。

「お前とは全身全霊を込めたぶつかり合いがしたかつたぜ、茶渡泰虎」

何かに祈りを捧げる様に、ガンテンバインは胸の前で十字を切った。

互いに己の持つ最強の一撃。それを至極単純に、真正面からぶつけ合う事での決着。それがガンテンバインの望みだった。

「だからこいつは…せめてもの手向けだ」

そう零すと、ガンテンバインは両手を胸元まで持ち上げる。

「//翔ける――ドラグ龍拳//」

得物を握ったままのその互いの拳を、胸の前で打ち付ける。

刹那――ガンテンバインの全身が炎に包まれた。

その炎はまるで天に上る竜の如く、遊撃の間の天井を突き破りながら舞い上がる。泰虎は只それを見詰め続ける事しか出来無い。

やがて炎は全て消え、ガンテンバインの姿が露となる。

先程までとは比較にならない霊圧。アルマジロを連想させる巨大な鎧。

普通に考えれば絶対絶命の窮地だ。

だが泰虎は違った。

彼は見た。そして一瞬で理解する。

ガンテンバインの本来持ち得る力が、その全身へ帰属し、姿を変えるその在り方を。

そしてそれが——泰虎自身のそれと似通っている事に。

「そうか…そうだったのか…!!」

泰虎の顔に浮かぶ安堵の表情。

仕舞には声を漏らして笑い始めた。

「…おいおい、いきなりどうしたよ?」

「いや、済まないガンテンバイン。べつに気が狂った訳でも、ましてやお前の解放した姿

を馬鹿にしていた訳でも無いんだ」

当然、ガンテンバインは奇怪なものを見る様な表情で泰虎を見遣る。それに対し、泰虎は口元を吊り上げたまま、謝罪の声を返した。

「ただ——やつと掴めた」

「何だと？」

「そう、簡単な話だったんだ」

先程までの様子が嘘だった様に、泰虎はすつと立ち上がる。

思わず瞠目するガンテンバインだったが、その全身から立ち昇る靈圧を感じ取ると、即座に警戒心を露にした。

「俺の力は死神でも滅却師のものでもない。言うなれば——」

其処で言葉を一旦切ると、泰虎は右腕を持ち上げる。

鎧に浮かぶ紋様。それも白いラインの部分が光り始めていた。

「破面<sup>お前</sup>達に近いのだと」

その光は極限まで高まり、閃光を放つ。

そして続けて膨れ上がった霊圧が爆発を引き起こす。

砂煙が泰虎の全身を覆い隠す。

「クツ…!?!」

ガンテンバインは咄嗟に視界を両腕で覆い隠し、防御体勢を取る。

目潰しは回避出来たが、爆発による余波までは完全では無かった。

巨大な鎧によつて体重の増した帰刃形態にも拘らず、全身が後方へと押し遣られて行く。

——余波だけでこの威力とは。

ガンテンバインは思わず身震いする。

これは恐怖では無い。腕の隙間から僅かに覗いた、その吊上がった口元を見れば直ぐに判る。

「——待たせたな、ガンテンバイン」

余波が収まると同時に、聞こえて来たその声。

ガンテンバインは咄嗟に両腕を降ろし、その発生源を見遣った。

「これが俺の真の力——  
ブラッ・デレチャ・デ・ヒガンテ 巨人の右腕”と、  
ブラッ・イスキエルダ・デル・デアアグロ 悪魔の左腕だ」

そう説明する泰虎の両腕は、先程とは全く異なる姿となっていた。

右腕は髑髏の様な模様が入った巨大な盾へ。それと逆の左腕は、右と比較すると迫力に欠けるが、明らかに異質な雰囲気纏う白色の鎧を纏っていた。

「ク…ははは、なんだよそりゃあ…!!」

ガンテンバインは目元を右手で覆い隠すと、くつくつと笑い声を漏らし始めた。

「巨人に悪魔たア、大層な名前じゃねえか…」

次の瞬間、その右手を退けた後に見せた顔には、獰猛さ溢れる笑みが浮かんでいた。冷静な修行僧の様な雰囲気は何処へやら。

これでは只の戦闘狂だと、そう思われても致し方無い姿だ。

確かに腕を磨くのは楽しいし、戦いの中でその力を発揮するのも爽快の一言に尽きる。

だが今のガンテンバインが見せる態度の理由はそうでは無い。

ある意味で言うところ——抱いていた期待が極限まで落ちた所で、今度は逆に一気に上がるという、展開のギャップにやられたのだ。

その時感じた喜びは半端では無い。寧ろガンテンバインだからこそ、この程度で済んだと見るべきかもしれない。

これがドルドーニであれば、紳士としての立ち振る舞いを忘れる程、歓喜に震えていた事だろう。

「それが名前負けじゃねえ事を祈るぜ……!!」

ガンテンバインの姿が消える。

——先程よりもやや遅い。

だが今の泰虎には確りとその動きが見えていた。

とは言えその反面、警戒せねばならない部分もある。

あの帰刃形態の見た目からして丸判りだ。機動力を犠牲に、火力が上がっているのだと。

「ハアッ!!!」

泰虎の顔面目掛けて捻じ込む様にして突き出された右拳。解放前とは異なり、其処には龍の上顎の如き複数の鋭い牙が。

残る左拳も同様、今度は逆に下顎を思わせるそれが立ち並んでいた。

やはり速度は落ちている。それはガンテンバインも自覚していた。

だが威力は十分。例え真の力を解放した泰虎の反応速度等が上昇していたとしても、当てる事さえ可能であれば対抗出来ると信じて、拳に力を籠める。

「なッ…!?!」

だがその考えは即座に碎かれた。

並大抵の敵であれば容易く粉砕していたであろうその渾身の一撃は、いとも容易く漆黒の盾に止められていたのだから。

思わず絶句したガンテンバインだったが、即座に正気に戻ると、その場から大きくバックステップ。一旦泰虎との距離を取った。

額には汗が滲み、心臓が激しく躍動する。

泰虎は右腕の盾を下げ、攻撃を受け止めた部分を一瞥。

罅が入る等の変化が無い事を確認すると、視線をガンテンバインに移した。

「……とても重く、良い拳だった」

「ハッ、簡単に止めて置いて良く言う」

不意に放たれた泰虎の賞賛を、ガンテンバインは鼻で笑う。

だが事実、泰虎は嘘は言っていないかった。

恋次との鍛錬の時と同じ、あの際限無く溢れ出る力と全能感。再びそれが再来した今、自分には止められぬ攻撃も、打ち碎けぬ壁も無いと考えていた。

だが如何だ。この眼前に立つ十刃でも無い数字持ち——しかも三桁という妙に大

きな数字を持つ破面は、その余裕を一瞬で打ち砕いて見せる。

解放後の彼が放った一撃は、咄嗟に地面を踏み締めなければ吹き飛ばされていた程の威力を誇っていた。

足元を見てみれば一目瞭然。踵より後方の地面は、大きく罅割れたり捲れ上がったりと、実に悲惨な状態だ。

今更ではあるが、泰虎は虚圏に来る前に行つた、喜助の作戦会議を思い返す。

確か現世に侵攻して来た中に、ガンテンバインと同様、三桁の数字を持つ女の破面が居たなど。

チルツチ・サンダーウィッチというその破面は、隊長である冬獅郎と対等以上に立ち会う実力者だった。

確証は無いが、それ等の情報から泰虎は察した。恐らくその三桁の数字は何か別の階級を表しており、並みの数字持ちとは一線を画する実力者なのだ。

——もう慢心はしない。全力を以て相手をしよう。

泰虎はやや緩み始めていた自身の精神を引き締めた。

自分がこの力を完全にモノに出来たのは、他ならぬガンテンバインが本気で立ち合つてくれた御蔭だ。

ならばその心意気に応えずして如何すると。

普通、相手が想像以上に弱ければ、まず確実に力を抜く。

武人であれば尚更、弱者を蹂躪する事は御法度として避けるだろう。

だがガンテンバインはそれをしなかった。邂逅時に読み取った、泰虎の持つ猛者としての雰囲気は本物だと信じて。

もし真実が異なる場合、自身の持つ誇りを傷付ける行為に成り得ると知りながら。

「だから俺も応えよう。この…拳でな」

泰虎はそう言うと、右腕を引き絞った。

残る左腕はそのまま。何故なら此方の腕は単純な接近戦に用いる以外の技を持たないからだ。

「…チイツ!!」

泰虎の右腕に込められる霊圧の量に気付いたガンテンバインは、即座に両腕を交差し、防御の態勢を取った。

だが直後にそれが誤った選択であると気付く。

「まさか…!!」

ガンテンバインの眼前に広がる光。泰虎の右腕から放たれた靈圧のビームである。靈圧の密度、大きさ、速度。それ等全てに於いて、ガンテンバインは激しい既視感を覚えた。

これはまるで——自分達が放つ虚閃そのものではないかと。

「ぐ…ああアアアアアアアア!!?」

光が全身が?み込む。

ものの数秒で焼け付く鋼皮。悲鳴を上げる鎧。

即座に理解する。これは明らかに耐え切れるレベルの攻撃では無いと。

そう判断したガンテンバインの行動は早かった。

無理矢理足を動かし、響転でその場から緊急退避。

だがそれだけに終わらず、続け様に反撃に転じる。狙うは右腕を前方に突き出したまま硬直している泰虎の死角である背後。

「オ、ラアアアツ!!」

その一見隙だらけな後頭部目掛けて放ったのは只の拳撃では無い。その左拳には炎が纏われ、殺傷能力が格段に上昇していた。

「リアム・ブーニョ炎拳」

ガンテンバインが帰刃形態で持ち得る、限り無く最強の拳撃の一つ。だが正直言うと、それが通用するとは毛程も思っていなかった。

そしてそれは正解だったと、ガンテンバインは白き悪魔の左手に握られる自らの拳を見ながら確信した。

しかもそれを成した泰虎は顔は前方を向いたまま微動だにしていない。

つまり彼は背後から迫り来る拳を、一切視認せずに掴み取ったという事に他ならない。

最強の技が破られるという衝撃。それはどれ程のものか。

加えてその形が形だ。事実が認められずに呆然自失となっても何らおかしく無い。

にも拘わらず、ガンテンバインの表情には特に大きな変化は無かった。

見れば彼の持つ鎧の最後尾——正しく龍の尾を思わせる部分が鞭の様に撓り、泰虎の側頭部へと襲い掛かっていた。

先程の拳撃はブラフ。

ガンテンバインは信じていたのだ。今の泰虎であればその程度は遣って退けると。自身の事も勿論だが、何より相手の持つ実力への信頼。それ等の条件を以て初めて成り立する、二段構えの攻めであった。

だが——泰虎はその想定すら超えていた。

彼は既の所で上体を後方へと逸らし、龍の尾を躲したのだ。

「ツ…うおおおおおおお?!!」

恐ろしいまでの反応速度。ガンテンバインは瞠目した。

その隙を突く様にして、彼の視界が凄まじい勢いで移り変わる。

——攻撃が躲された直後、掴まれた左拳ごと投げ飛ばされた。

ガンテンバインがそう理解したのは、その背中が壁に叩き付けられた後だった。

「——ツ…ア…!!!」

その口から漏れ出す、声にならない悲鳴。

只投げ飛ばされただけではこうはいかない。

原因は泰虎の膂力だ。

例え途中で気付いていたとしても、あの凄まじい勢いでは体勢を整える暇すら無かつただろう。

激しく咳き込みながらも、何とか壁から抜け出したガンテンバインは思った。

十秒以下という短時間で呼吸を整え、立ち上がる。

眼前では自然体で佇む泰虎が、此方を真つ直ぐ見詰めていた。

「まさか……これ程とは思わなかったぜ……」

フツと、ガンテンバインは自身の想定の甘さを鼻で笑う。

投げ飛ばされた拍子に筋か何かを遣られたのか、激しい痛みを発する右肩に、彼方此方が軋みを上げる鎧。

これではどちらが不利なのか判り切っていた。

その様子を見た泰虎は、この戦いが終わりに近付いている事を察した。

今のガンテンバインには、自分と満足に打ち合う余裕も無い。

ならば——と、泰虎は一つ提案する。

「次だ」

「…何だと？」

「互いに次の一撃で決めよう」

ガンテンバインにとつて、この誘いは渡りに船だった。

次第にその表情に笑みが浮かぶ。

この瞬間、ガンテンバインにとつて茶渡泰虎という存在は、今迄対峙した中で最高の敵となった。

「その提案——ありがたく乗らせてもらおうぜ!!!」

嬉々とした様子でそう叫ぶと、ガンテンバインは自身の両拳を打ち付けた。

するとその中心に膨大な霊圧が球状に集束して行く。

虚閃とは比較にならない。寧ろそれ以上。

そして後先なぞ考えている訳が無い。例え命を削つてでも、正真正銘の全力をこの一撃に籠めると、ガンテンバインは決意していた。

「食らえ茶渡泰虎……」

靈圧はやがて炎と化し、龍の頭部を模る。

その目は真つ直ぐに敵を睨んでおり、今にも喰らい付かんと牙を剥き出しにしていた。

それに対し、泰虎は左腕を持ち上げると、徐に手を開いた。

腕全体には有らん限りの靈圧を籠め、更にその五つの指先は周囲の靈子を吸収。更に強化に強化を重ねて行く。

「これが俺の全力だ——」

“リユヒル・デル・ドラゴン  
龍 哮 拳 “!!!」

龍頭状の炎を、ガンテンバインは右拳で殴り付け、飛ばす。

それは次第に巨大化して行き、泰虎との間合いが五メートルを切る頃には、既に実物大を思わせる程にまで膨れ上がっていた。

やがて龍が大顎を開き、此方を？み込まんと迫る。

初めは右腕で防ぐ、または左手で握り潰そうかと考えたが、泰虎は直前で止めた。

眼前の龍の靈圧もさる事ながら、そしてそれに込められたガンテンバインの覚悟がそうさせたのだ。

恐らくこの威力では「巨人の右腕」で防ぎ切れるか如何か不明だし、何よりこの場面では互いに最強の一撃をぶつけ合って勝敗を決めるべきだと。

泰虎は強化を終えた左腕を引き絞った。

開いていた手を握り締める。

その狙いは眼前の炎龍では無い。本命はその奥に居るガンテンバイン。

「——魔人の一撃」

突き出された魔人の拳。それより放たれた不可視の一撃は、瞬時に龍の顎を消し去ると、勢いを失う事無く突き進む。

瞬く間にそれはガンテンバインへと到達。直撃を受けた彼の鎧は粉々に砕け散り、その身体は後方へと吹き飛んで行く。

「ガ、フ…」

やがてガンテンバインはそのまま壁へと激突。

彼を中心にして、その壁に罅が入る。

それはまるで——口を開いた髑髏の如き形状へと。

此処まで来れば、もはやガンテンバインに反撃する余力も意志も皆無だった。

只その心に残ったのは満足感。

己の願望が、この上無い理想形で叶ったのだ。文句などある筈が無い。

「——てめえの勝ちだ……茶渡泰虎」

ガンテンバインは清々しい表情で泰虎へ称賛を送ると、そのまま意識を失った。

## 第四十三話 そよ風と妖婦と、主人公と髭と…

治療室にて、セフィーロは椅子に腰掛け、紅茶の入ったティーカップを口元で傾けつつ、先程から自身に向けられている煩わしい視線に耐え続けていた。

その元を辿れば、其処には彼女と同じ体勢で紅茶をチビチビと飲み続けるチルツチの姿が。

表情から読み取る限り、明らかに不機嫌丸出し。眉間には皺が寄り、その眼からは鋭い光が放たれ、全身からは近寄りがたい雰囲気滲み出ている。

それが原因なのか、口力は紅茶の御代わりを注げるや否や、速攻でその場から距離を取ると、離れの作業場までそそくさと立ち去る事を繰り返していた。

「…私、そんなに睨まれる事をした心算は無いんですけど」

「うっさい。大人しくお茶飲んでろ」

やがて耐え切れなくなったセフィーロは遂に抗議するが、チルツチはそれを一蹴。頑なに態度を変えようとしない。

明らかに不本意であるという意思が見て取れるが、何処と無く使命感も感じる。

それはそうだ。何故チルツチが先程からこうしているのかと言うと、ノイトラの指示だからだ。

その内容は護衛。だが先程から見せている態度の通り、チルツチは乗り気では無かった。

ロカは未だしも、恋敵でもあるセフィーロを何故自分が。でもこれは他ならぬノイトラの頼みだし。

チルツチの中ではこの二つの思いが闘ぎ合っていた。

「ええく？ もうお腹がタプンタプンなので無理ですよ」

「じゃあずつと其処で黙って座つてろ一歩も動くな淫乱女」

「…泣いて良いと思うんですよ私」

取り付く島も無いとはこの事か。セフィーロは溜息を吐いた。

事情は理解している。だが正直、彼女としては少々都合が悪かった。

計画の中では、今からノイトラが動き、幾つかの目的を果たすまで、自分達は治療室で大人しく待機する。それが現状での計画だ。

だがセフィーロはそれを勝手に一部変更。彼女自身も独自に行動を起こす予定だった。

当然危険だ。下手すれば彼女自身が取り返しが付かない事態に陥る可能性も低くは無。

だがセフィーロには確固たる自信があった。

そして如何なる窮地に陥ろうが、それを一瞬で覆す強力な切り札も。

「…しようがないですね」

小さくそう呟くと、セフィーロは徐に立ち上がった。

それを見たチルツチは当然それを止める為に動く。

「おい!! てめえ何勝手に——ッ!!?」

制止の声を上げようとしたチルツチだったが、後の言葉が出る事は無かった。

見れば彼女の頭部の殆どが、白色の長い布の様な物に巻き付かれていた。

「ムグ…フ…ツ…!!」

布の発生源を辿ると、それはセフィーロの袖から伸びていた。

—— 一体何を。

チルツチはそんな疑問を抱いたが、一先ず後回しにする。

まずは先にこの布を如何にかせねばと。

両手で布を掴み、そのまま引き千切らんと力を籠める。

だが全くビクともしない。布にしては有り得ない耐久性だ。

そして気付いた。何か感触がおかしいと。

触れているのに触れていない。まるで布と手の間に空間があると思わせる、妙な感覚。

例えるなら強力な磁石。そのS極とN極を互いに押し付け、後一步で密着させられる位置で均衡している状態か。

またしてもチルツチは気付く。この布はセフィーロの帰刃形態より発生するものと同じだと。

今迄に何度か、鍛錬時に目の当りにしていたそれ。だが直接接触した事は——否、触れる事すら許されずに敗北していた為、皆無だった。

だがその布の詳細は知っている。白く発光すると同時に、精神干渉系の能力が発動するのだと。

「御免ね、チルツチちゃん」

「ツ!!?」

申し訳無さ気な表情で、セフィーロは言った。

次の瞬間、布が光を放つ。

チルツチは瞠目する。

本来であれば白色だった筈のその光が、見慣れぬ青色へと変化していた事に。

「コロンビーダ  
墮落聖女」

それはチルツチも初めて耳にする技名だった。

一体の何の能力なのか、それを考える暇も無く、彼女の意識は閉ざされる。

だがその身体は以前として立ち上がったまま。加えて瞼も開いており、只その瞳からは本来あるべき光は無く、虚ろであった。

意識は無いのは確かなのだろう。にも拘わらずこれは如何いう事なのか。

「…目覚めは二分後。それまで眠っていないさい」

聞いている者の気の抜ける様な、緊張感皆無な普段のそれとは異なり、極めて冷淡な口調で、セフィーロは命令する。

それを受けたチルツチは静かに頷くと、突如として糸の切れた人形の如く崩れ落ちた。

後方へと倒れる彼女の身体。後頭部が地面と衝突するかと思われた時、直前で止まる。

見ればセフィーロの出している布が、その身体を下から持ち上げていた。

幾ら頑丈と言っても、只の布では到底不可能な芸当である。

チルツチはそのまま近くのベッドへと運ばれて行く。

その布は其処へ彼女を優しく寝かせた後、セフィーロの袖の中まで戻っていった。

「——本当に…」

それまで一切言葉を発さず、傍観を決め込んでいたロカが口を開いた。  
セフィーロは其方へ振り向く。

「遣らねばならないのですか、セフィーロ様…」  
「…ロカちゃん」

正に人形そのものであつた嘗てより改善されたとは言え、普段は殆ど表情を変化させる事が無いロカ。

だが今の彼女は違う。本当に相手の身を案じ、その顔に憂色を浮かべる心優しき女性の姿が、其処には居た。

「大丈夫、心配しないで」

「ですが…」

「いざとなれば本気を出すから。だから貴方は此処を御願ひ」

セフィーロは強い。長い付き合いであるロカは十分に知っていた。

破面化によって大虚時代より弱体化したらしいが、それでもその実力は並みの数字持

ちを凌駕している。

そしてその能力は使い様によっては恐るべき効果を發揮する事も。

だが——それでも心配なものは心配なのだ。

ザエルアポロの拷問にも等しい実験等により、元より希薄であつた感情を閉ざしてしまつたのはもはや過去の話。

今の口力は明確な意思を以て、自身に救いを与えてくれたセフィーロの身を案じていた。

万が一の場合は、自らの命を投げ打つても良いと考える程に。

「我儘だつて事は理解してる。だけど私達がこうしている間にも——あの人は自分自身のを賭けて行動してる」

セフィーロの言う人物が、一体誰の事を指しているのか。それは直接口に出すまでも無いだろう。

過去の遺恨への決着と、自分達の生存。その計画の内の後半には、口力の取るべき行動も組み込まれている。

勿論、強制では無い。正規の形で協力を依頼された上で引き受けたのだ。

その時の光景を、ロカは今でも明確に覚えている。

——嫌なら断つてくれても構わない。

緊張した面持ちで、此方へ深々と頭を下げて頼み込むノイトラ。

只の雑務係の破面に対して見せる十刃の態度では無い。

だが彼がこの様な行動を取った理由について、ロカ自身は心当りがあつた。

と言うか、十中八九原因は自分だろうと思つている。

それは当時、ノイトラが治療室の常連となつて間も無い頃。ロカは彼と遭遇する度、とある事情からつい反射的に冷ややかな視線と、素つ気無い対応を取つてしまつていた事だ。

それはノイトラがザエルアポロと結託し、卑劣極まりない手口でネリエルを陥れた張本人だつたからだ。

ロカにとつて、ネリエルはセフィーロに次ぐ恩人の一人だ。

普段より何かと自分の事に気に掛け、暇な時間を見付けては鍛錬に付き合い、自身の持つ力の使い方を教えてくれた。

只、セフィーロとの相性はそれ程良く無かつた様で、余り二人が話している機会は少なかつたが。

その証拠に、ネリエルが虚夜宮から姿を消してから翌日、セフィーロが溜息を吐きな

がら零した一言にある。

——人の忠告を聞かないから。

如何やらセフィーロは知らぬ間に、ネリエルの現状へのアドバイスをしていたらしい。だがそれは受け入れられる事は叶わず、あの様な結果となってしまったのだろう。

それ以降、セフィーロはネリエルの行方を調査しようとする素振りを全く見せず、普段通りに振舞っていた。

既に感情を取り戻し始めていたロカは、その姿に僅かな憤りを覚えた。だが即座に消える。

良く良く考えれば、人は自分と馬が合わない人物に対しては極力干渉を避ける傾向にあるのが普通だ。

にも拘わらず、セフィーロは態々アドバイスをした。

だがネリエルはそれを無下にし、失敗した。

ある意味、これは彼女の自業自得だったのかもしれない。

ロカは少し納得した。確かにネリエルは少し頑固な部分もあったし、会話の中で稀に強者としての矜持なのか——上から目線の物言いも目立っていた。

または自分達の事情にセフィーロを巻き込まない為、態と跳ね除けた可能性もあるが。

だが理屈では理解出来ても、感情まではそうはいかない。

ロカはセファイーロ口については割り切ったが、ノイトラとザエルアポロについては無理だった。

故に——あの様な態度を見せてしまった。

今思えば実に命知らずで、馬鹿な真似をしたものである。

ロカは過去の自分を卑下した。

「セファイーロ様…」

だがノイトラは決してロカの態度を咎める事はせず、甘んじて受けた。

そして変わった。言動や仕草はそのままだが、問題はその中身。もはや元の性格が百八十度反転したかの様に。

それに伴い、彼の周囲も良い方向へと変化して行った。

同僚達は日常業務が遣り易くなったり、畏怖の象徴が一つ減った事で精神的に楽になった。

表面上は明るく振舞っては居るが、時折全てを諦めているかの様な無気力さを見せていたセファイーロの笑顔が増えた。

治療室には、基本理性的で平穩を求める傾向にある者達が集まり、階級も関係無い憩いの場と化した。静寂では無く喧騒に包まれる、実に退屈しない楽しい空間となった。

そんな日々を送る内、気付けばロカは無意識の内にノイトラへの態度を改めていた。許した訳では無い。ネリエルに対しての行いは、この程度の事で水に流せる様なレベルでは無いのだ。

只——見届けようと思ったのだ。

ノイトラの変化は、恐らく贖罪。それは協力を要請された際に聞いた計画の内容から、確信へと変わった。

「些細な事でも良い。あの人の助けになりたいの」

懇願するセフィーロ。その瞳に映る覚悟は本物だ。

暫し間を置いた末——ロカは折れた。

「……解りました……」

そう絞り出す様にして言う彼女。その顔は俯いており、一見すれば苦悩している様に取れる。

だがその瞳にはセフィーロと同様に、確固たる覚悟が浮かんでいた。

「有難う」

それに気付かぬまま、セフィーロは踵を返すと、室外へと消えて行った。

斬月の誇る巨大な刀身が、上段より振り下ろされる。その太刀筋には些かブレが見られるが、並大抵の相手であれば容易に叩き切れる威力を誇っていた。

それに対抗するのは、その刀身に負けぬ強度と鋭さを誇る脚。真横に振るわれたそれ

は、鞭の様に撓りつつ、真つ向から立ち向かう。

二つの刃が、十字に交差する。通常であれば、前者の方が圧勝する筈だと思うだろう。だが結果は真逆。弾き返されたのは斬月だった。

その柄を握る一護は、その顔を驚愕の色に染めながら、後方へと大きくブレた己が重心を元通りにせんと動く。

だがそんな暇は無い。打ち勝った脚の持ち主たるドルドーニは、既に一護の間合いへと入り込んでいた。

「フツ!!」

「グ…エツ…!!?」

「一護お!!」

腹部目掛けて真横に薙ぎ払われる右脚。

直撃と同時に、一護の身体がくの字へと曲り、その口からは蛙が潰れる様な声が漏れ出す。

彼の身体は再び後方へと吹き飛ばされ、壁へと叩き付けられた。

それを目の当たりにしたネルは、離れから悲痛な声を上げる。

「…実に未熟」

右脚を振るった体勢のまま、ドルドーニはそれを視線で追う。そして盛大に溜息を吐いた。

「この程度で吾輩を相手取れる等と…本当に思っているのかね、坊や？」

太刀筋が安定しない。反応も鈍い。防御も脆いどころか、真面に取れてすらいない。

それ等に加え、先程与えた折角の助言も活かせていないと来た。

ドルドーニは内心で拍子抜けしていた。始解状態ではあるが、それにしても一護の実力はこの程度だったのかと。

藍染が開示した情報に、破面達が経験した戦闘記録等は、基本的に虚夜宮へと保存、共有される。

だがその回覧は任意であり、強制では無い。

ドルドーニはその十刃落ちという立場から、藍染から任務を与えられる事は皆無に等しい。

故に余り外の情報を見る必要性は無いのだが、その向上心の高さ故に頻繁に覗いていた。様々な敵の戦法や動き、能力を研究する事で、自分にも活かせる部分が見付かる筈だと。

つまり当然その中で——一護の情報も目にしている。

短時間で隊長格と渡り合える程に成長を遂げた天才。正解すら習得しており、未解放とは言えグリムジョーに傷を付けるという快拳を成し遂げる。

そして“虚化”という奥の手を持っている事も。

情報に目を通しながら、ドルドーニは思った。これはまるで一種の英雄譚では無いかと。

そして童心に返ったかの様な感覚を覚える。

己が業に苦悩しながらも、それでも敢えて過酷な道を歩む事を選択したノイトラとはまた異なる在り方だ。

言うなれば、これは王道。一護が光なら、ノイトラは影か。

後者と接するだけでも此方の心が奮い立つのだ。前者であればどれ程まで至るのか、興味が尽きない。

それ故に期待していた。

——未だ判断するには時期尚早。

一護はまだ本質を見せて居ない。落胆するには早いと、ドルドーニは自身に言い聞かせる。

「く、そツ…!!」

頭部から流れた血で顔を赤く染めながら、壁から抜け出した一護は斬月を構える。その内心では盛大に混乱していた。

——十刃でも無いのに、幾ら何でもこれは強過ぎないか。

一護は鈍っていた思考を巡らせ、其処でやつと気付いた。

現世侵攻に参加していた、三桁の数字を持つ女の破面の実力の高さを。

「解せない…：そう言いたげな顔だな坊や」

「ツ!!」

「十刃でも無い相手に、何故ここまで苦戦するのかと。…違うかね？」

凶星を突かれた一護。思わずその表情が強張る。

その姿を見たドルドーニは肩を竦めると、静かに説明し始める。

致し方無い奴だと、呆れを含んだ様子で。

「吾輩の持つ三桁の数字。それが意味するのは…剥奪の証」

「剥奪…だと…?」

「——『十刃落ち』、そう呼ばれている」

「なっ!？」

ドルドーニの口から飛び出した、十刃落ちという階級。その前半の二文字に、一護は反応を示した。

まあ簡単に想像は付くだろう。名前からして、十刃と何かしらの関わりがあると。

「そう、即ち十刃落ちとは——かつて十刃『だった』者を示しているのだよ」

故に——と、其処でドルドーニは言葉を切ると、抑えていた霊圧を解放。

鋭い眼光で、一護を睨み付けた。

「正解もせず、吾輩を倒せるなどと思わぬ方が良いぞ…坊や」

「く…!!」

気圧されたのか、僅かに全身が縮こまった様な感覚を、一護は感じた。

そして同時に気付く。此方の考えを見透かされていると。

確かにドルドーニの言う通り、一護はこの戦いで卍解をする気は無かった。

と言うか、この先に待つであろう十刃達。彼等との戦いの為に自身の霊力を温存したかったのだ。

そして切り札である虚化も尚更。

だがその考えも、今となつては揺らいでいる。

元十刃だけあつて、ドルドーニの実力は相当だ。始解のままでは如何考えても勝ち目は薄い。

しかしこんな序盤から卍解を使用して、本当に大丈夫なのか如何かも判断出来無い。一護の思考は完全に溝へ嵌ってしまった。

「戦いに於いて、自らを律するのは間違っていない。坊やの気持ちは良く解る」

「…そうかよ」

対峙する側にまで伝わってくる、一護の緊張と迷い。

——埒が明かない。

このままでは何時時まで経ってもダラダラと事が運ぶだけだ。そう考えたドルドーニは、年長者として一肌脱ぐ事にした。

「だが考えてもみたまえ。例えその始解の状態で吾輩に勝利出来たとして、坊やは如何なる」

「……………」

「現状からして既にそうだが、無傷では済まないだろう。檻樓雑巾の様な有様で、この先の戦いに耐えられると本当に思うのかね？」

人差し指を立てながら、諭す様に語り掛けるドルドーニ。

それに対し、一護は只管に無言を貫くだけ。だがその瞳は忙しなく揺れ続けている。

「それに——坊やの無事を願い、待っている者の気持ちも汲んでやりたまえ」

「ツ……ネル……!!」

直接指した訳では無い。だがドルドーニが誰の事を言っているのか、一護には理解出来た。

視線を動かし、遊撃の間の入口の影へと隠れている小さな影を見遣る。

其処には今にも泣き出しそうな表情で此方を眺め続けるネルの姿があった。

——そうだ、何を自分は此処まで意地を張っていたのだ。

今更ながら、一護は自身の愚かさを自覚した。

ドルドーニの言い分は御尤もであると。

靈力の減少と、身体への負傷。互いに齎す影響は全くの別物。

前者は時間の経過と共に回復するが、後者は違う。織姫や四番隊といった、治療要員が不在の今、もし腕の一本でも折れたりすれば、もはや致命的だ。

それに仲間が傷付く姿というのは、見ている側からしてみれば何よりも辛く、胸が痛む光景である。

一護は自分自身を殴り付けたい衝動に駆られた。

自分では極力避けたがる癖に、今の姿は何だと。

「…済まねえ」

「何、別に構わんよ。若者を導くのは年長者の役目であり、紳士として当然の事」

一護の謝罪を、ドルドーニは誇らしげに胸を張りながら受け取った。

——如何に若人とは言え、敵に助言を与えるとは、自分も大概甘いな。

敵しく在ろうと心掛けながらも情を捨て切れない。そんなノイトラと接する内、知らず知らずに絆されていたのかと、内心で苦笑しながら。

「こっからが…本番だ!!」

「フツ、是非も無し。これで吾輩も心置き無く全力を出せるといふもの」

仕切り直しだと言わんばかりに、二人は互いに構えを取った。

一護は斬月を前方へと突き出すと、柄を握る右手に左手を添える。

ドルドーニは先程まで一切使用していなかった斬魄刀を抜刀し、頭部よりやや高い位置へと掲げる。刀身を逆さにし、その切っ先を一護へ突き付ける形で。

「行くぜ——」  
「卍解!!」

「まわ旋れ——」  
「ヒラ暴風男爵!!」

二人は全くの同時に解放した。

放出される霊圧も、其々に形が異なる。

一護は天を衝くかの如く高々と立ち上り、ドルドーニは竜巻の如く自身の周囲に渦を巻く。

「…実に良き霊圧だ」

互いに姿を変えた様を眺める中、先に口を開いたのはドルドーニだった。

荒々しくも、何処か此方を柔らかく包み込む様な優しさを感じる一護の霊圧に、素直な賞賛を述べる。

量は上々。その眼に映る覚悟から、気構えも十分。

——相手にとって不足無し。

そう悟るや否や、ドルドーニは自身の脚部の煙突から発生する二つの竜巻より、其々に鳥の嘴を持つ蛇を生み出す。

「いざ、尋常に勝負!!」

漆黒の斬魄刀を正眼に構える一護へ、ドルドーニは左脚で“単鳥嘴脚”を繰り出す。鋭利な嘴が、地面を抉りながら敵を貫かんと迫る。

直後、着弾。だが手応えは無い。

ドルドーニは直感に従い、身体の軸を回転させ、その勢いを乗せた右脚を背後へと振るう。

その判断は正解。

蛇の向かう先には、何時の間にもやら斬魄刀を左腰へと振り被った体勢の一護の姿があった。

——何と言う速さ。

事前に知ってはいたが、実物を見るとやはり違う。

ドルドーニは内心で驚愕しつつ、攻撃の手を緩めない。

「——月牙」

このままでは直撃は必至。だが一護は構えを解かない。

恐らくは真正面から迎え撃つ覚悟なのだろう。

その証拠に、刀身全体へ黒い霧の様な霊圧が渦巻いていた。

「天衝!!」

次の瞬間、斬魄刀が振るわれる。

そして放たれる黒い斬撃は、真つ向から蛇へと向かつて行く。

先程ドルドーニに容易く無効化されたそれと同じ技だが、質は明らかに異なる。

グリムジョーを傷付けるだけあつて、籠められた霊圧量は凄まじい。焦燥が消えた影響か、その密度も相当高い。

案の定、黒い斬撃は蛇を豆腐の如く斬り裂いた。

それで尚勢いを落とす事無く進み続け、攻撃直後の無防備な状態のドルドーニへ襲い掛かる。

「ぬうッ!!」

体勢が体勢だけに、響転は使えない。

ドルドーニは何か身体を振る事に成功するが、完全に躲すには不十分であつた。斬撃の端が肩口へと命中。鮮血が舞つた。

「…見事!!」

傷を負ったにも拘らず、ドルドーニは嬉々とした表情を浮かべる。

そして全く臆する様子も無く、その場から大きく跳躍。宙に作り出した靈子の足場に立った。

「ならば吾輩も出し惜しみはせん!! 受けてみよ坊や!!」

——少々早い気もするが、致し方無い。

ドルドーニは切り札を切った。彼自身が持ち得る中でも最強の技を。

二つの竜巻より生まれる、無数の蛇。

だがその数は四十。ノイトラとの立ち合いの後半で見せた、正真正銘の全力だった。

「ツ!!?」

眼前にて荒ぶる蛇達。流石にその数の多さに驚愕したのか、一護は息を?んだ。

だがそれも僅かな間のみ。

一護は腰を深く落とし、如何なる攻撃にも対応出来る様に構える。

そして今一度、己の卍解の強みを考える。

その強大さ故に、形状が巨大化する事が多い卍解。

だがこの「天鎖斬月」は違う。極限まで小型に圧縮する事で、上昇した攻撃力をそのままに、凄まじいまでの機動力を得た。

ならば現状にて、それ等の能力を如何活かすべきかと。

ドルドーニの放った蛇は強力だ。実際に受け止めた訳では無いが、その持つ霊圧と迫り来る威圧感から、威力は十分に察せた。

今度はそれが二十倍。一つでも直撃すれば、もはや一巻の終わり。瞬く間にその無数の嘴による追撃が掛かり、廻り殺しとなる事だろう。

だが一護には自信があつた。今の自分なら、これ等全てを難無く凌げると。

彼が思い返すのは、以前尸魂界にて死闘を繰り広げ、打ち破った因縁の相手である朽木白哉。彼の誇つた、刀身を幾重にも枝分かれさせ、桜吹雪の如き刃で敵を切り刻む白哉の斬魄刀——「千本桜」。

その刃の総数は、始解状態では千、卍解である「千本桜影厳」を発動すれば数億にも及ぶ。

——あの斬魄刀に比べれば、四十や五十程度、物の数では無い。  
一護は深呼吸した後、ドルドーニへ鋭い視線を送った。

「“双鳥脚”!!」

蛇達は方向に速度、全てがバラバラのタイミングで以て、一護に襲い掛かる。

言わずとも解るだろうが、ドルドーニは意図的にそうしていた。

連撃に分類されるであろう技は、只単に同じ攻撃を複数重ねれば良いと言う訳では無い。  
い。

パターンを読まれてしまえば攻略は容易。そんな技は実戦に於いて全く使い物にならないのだ。

そう考えたドルドーニはノイトラとの鍛錬の中で、以前までは一斉に攻撃を仕掛けていた“双鳥脚”を修正。より効果的な運用法を見出した。

スタークや雨竜の様に、その数が千を超える様であれば工夫も何も必要は無かったのだが、現状の霊力では不可能だった。

「なッ…!?!」

これには流石の一護も、戸解状態とは言え容易には攻略出来無い筈。

ドルドーニはそう考えたが——甘かった。

突如として一護の姿がブレたかと思いきや、彼に向つていた全ての蛇がバラバラに斬り刻まれたのだ。

それは一瞬の出来事であつた。

驚愕の余り、瞠目したまま全身を硬直させるドルドーニ。

——速過ぎる。

だが僅かに見えていた。

一護は驚異的な速度でその場から跳ぶと、斬魄刀を縦横無尽に振るいながら蛇達の間を縫う様にして駆け出していたのだ。

そして全ての蛇を無力化した後、此方へと向かつて来ている事も。

ドルドーニは一瞬迷つた。このままでは一護に切り札を切らせる事も無く、敗北してしまう可能性がある。

此方は既に全てを出し切っている。ならば例え自身が敗北する運命にあるとしても、せめて一護の全力が見たい。

だが未解放時のグリムジョーを圧倒する程強力な力だ。馬鹿正直に要求しても決して

て頭を縦に振らないだろう。

ならば、と——ドルドーニは視線を一瞬だけ離れのネルへと移した。

思い浮かべたのは、所謂人質という、外道に分類される手段。

一護が全力を出さねば、あの幼子が如何なるか判らないぞと仄めかすのだ。

だがドルドーニは即座にその考えを捨てた。

その算段を考える度に、脳裏に浮かぶのだ。ノイトラとその仲間達が集まり、笑顔の絶えない和やかな空間を過ごしている光景が。

「ッ、未だ終わらんよ!!」

——やはり甘さは捨て切れていない、か。

ドルドーニは小さく舌打ちする。

だが決して動きは止めない。

両手を突き出し、その人差し指と小指の先を突き合わせる形で組むと、その間に霊圧が集束されて行く。

やがて其処から放たれたのは虚閃。咄嗟に放たれたとは思えぬ程、その威力は見事なものだった。

「…いや——」

赤い光線が一直線に一護へと向かう。

だが彼は動きを止めない。

切っ先を前方へ突き出した体勢で、臆する事無く虚閃へと飛び込んで行く。

一見すれば無謀。ドルドーニは腐つても元十刃。彼の虚閃は、並みの数字持ちが放つそれを大きく上回る。

直撃すれば少なく無いダメージを負うのは間違いない。

やがて切っ先が虚閃へと触れ——そのまま打ち消して行く。

天鎖斬月の持つ力に、一護の突進力が相乗しているのだ。もはやドルドーニの虚閃如きでは止められなかった。

「これで終わりだ……ドン・パニーニ!!」

虚閃が消え去ると同時に、視界に映る黒。

其処でドルドーニは両手の構えを解き、迎撃に移ろうとするが、全てが手遅れだった。

「グ、ウツ…!!」

勢いをそのままに、漆黒の刀身が腹部を貫き、背中まで貫通する。鋼皮なぞ初めから無かつたかのように、容易く。

ドルドーニは口から大量の血を吐き出しながら、己の敗北を悟った。

「……吾輩の敗け、か……」

本来、ドルドーニ程の実力者となると、身体に刀剣の一本や二本突き立てられる程度、如何と言う事は無い。

だが今彼を貫いているのは、卍解が持ち得る強大な破壊力を極限まで圧縮した斬魄刀だ。その刀身には常時一護の霊圧が覆っており、攻撃を加えた敵の魂魄自体にもダメージを与える代物と化している。

つまり現状に於いて、漆黒の刀身は現在進行形で霊圧を放出し続けており、身体の内側からそれをされている側は無事では済まない。

御蔭でドルドーニにはもはや戦闘を続行する力は残っていなかった。

正直言うと、未だ闘志は十分に残っている。だがそんな意志とは裏腹に、全身からは徐々に力と感覚が消失して行っていた。

ドルドーニは震える手を動かし、自身の腹部を貫く刀身を握り、引き抜こうと試みる。だが現実是非情。その手は既に握力すら失われており、刀身へ添えるだけに終わった。

朦朧とする意識の中、ドルドーニは満足感を覚えると同時に、一つだけ悔いていた。確かに全力での立ち合いは成立した。だが厳密に言えばそれは自分だけ。

一護は違う。何せ彼はまだ虚化という奥の手を残しており、最後までそれを出させる事は叶わなかった。

——願わくば、その持つ力を直接この目で確かめたかった。

ドルドーニは成長の止まってしまった己の実力を恨んだ。

「最後に…一つだけ言って置くぞ…」

「…何だ」

視界が黒く塗り潰される。終わりが近いのだろう。

次の瞬間、ドルドーニは最後の力を振り絞ると、一護に語り掛けた。

一護は真剣な表情で、それに聞き入る。

ドルドーニの性格上、負け惜しみを言う事は無い筈だ。ならば先程と同様に、何か忠告でもしてくれるのかと。

「吾輩の名は……ドルドーニ……だ……!!!」

——ドン・パニーニなどと言う、そんな美味しそうな名前では断じて無い。其処まで口に出す事は叶わず、ドルドーニの意識は完全に暗転した。

## 第四十四話 刺青と眼鏡と、強欲と白雪と…

頭上より振り下ろされる巨大な握り拳。雨竜はそれをサイドステップで躲すと、その拳の持ち主たる巨漢の破面の顔面へ矢を打ち込む。

その狙いは絶妙。恐らく鋼皮の存在を考慮しているのだろう。放たれた矢は何の耐久力も持たない右目へ突き刺さり、続け様に脳を貫いて破面を一瞬で絶命させる。

巨体が後方へと傾き、盛大な轟音を立てながら倒れる。

それは周囲に無数に存在している他の破面達を巻き込み、陣形の一部を崩した。

「阿散井!!」

「おう!!」

雨竜は少し離れた位置で縦横無尽に暴れ回っていた恋次へと声を掛けた。

恋次はそれに返事を返すと、右手に握る刀身に無数の節がある蛇腹剣を思わせる斬魄刀——始解である「蛇尾丸さびまる」を振り回し、此方を取り囲む様に存在していた異形さが際立つ破面達を吹き飛ばす。

「まだまだ行くぜエ!!!」

蛇の如く撓る刀身を更に伸ばし、身体毎回転させて豪快に薙ぎ払う。

蛇尾丸はその特性上、一对多数を得意とする。卍解であれば更に攻撃範囲は広がり、殲滅力は更に上がる。

それは同時に近くの味方を巻き込む危険性を孕んでおり、この場に於いての使用はあまり褒められたものでは無かった。

だが其処は流石の雨竜。その程度の事を考慮せずに声を掛ける筈が無い。

見れば彼は地面に伏せており、恋次が存分に蛇尾丸を振るっても被害を被らない様に構えていた。

「オラオラオラア!! ぶっ飛ベコラア!!!」

蛇尾丸の一つ一つの節、その刃先の一部は鋭利に尖っており、攻撃対象を一人に絞つてその斬撃を直撃させれば、鋸の如くその身を削られるという実に凶悪な仕様となっている。

だが次々に宙を舞って行く破面達の負傷はそれ程酷く無い。尤も、十分に戦闘不能に陥るレベルではある。

今回は敵が多く、より広範囲への攻撃を意識していた為、殺傷能力が幾分か落ちてきているのだ。

「全く…生き生きとしてるね本当に」

一通り殲滅を終え、蛇尾丸を折り畳むのを確認した後、雨竜は立ち上がりながら呆れた様にそう零した。

だがその言葉とは裏腹に、内心ではそんな恋次の姿に頼もしさを感じていたりする。合流を終えた後、打ち合せ通りに壁に穴を開けつつ先を進んでいた二人。

順調に下手人の元へと近付いていると思われたその時、突如として大量の敵が眼前に現れた。

即座に応戦する二人だったが、やはり物量というのは侮れないもの。

特に不利を感じたのは雨竜。と言うのも、やはり喜助に指摘された火力不足がネックで、質で駄目なら量で——と大量の矢を放つ等色々試してはみたが、効果は芳しく無い。

一応雨竜はその欠点を補える武器を所持してはいる。だがこの場を監視して居るであらう下手人の事を考慮すると、使用は控えるべきだと判断した。

だが其処をカバーしたのは逆に火力に優れた恋次。

一角と同様、基本的に戦闘に関しては頭が回る彼だ。即座に状況を読み取ると、斬魄刀を解放。雨竜の攻撃によって僅かに隙が生じた敵達に対し、次々と追い討ちを掛け始めた。

其処から始まった戦闘は、同じ作業の繰り返しとも言える内容。雨竜が敵を錯乱させ、恋次が叩き潰すという単純なパターン。

幸いにも敵達の中には戦略を組む事が出来る者が居なかつた様で、見事なまでに嵌り続けていた。

「しっかしまア、キリが無えなこいつ等は!!」

「同感だね。やはりこれを率いている頭を潰さないと駄目、か…」

恋次の意見に頷くと、雨竜は視線を未だに大量に残る敵達の中心部——其処に佇む一人の異様な雰囲気を持った破面へと移した。

手足の代わりに鉈の様な刃が三本ずつ生え、露出した上半身には禍々しい刺青が隅々

まで刻まれた猫背の破面の男。

生気を感じさせぬ白い肌にも、顔の半分を覆う仮面の名残。そして先程から仲間である破面達が次々に薙ぎ倒されて行く中、眉一つたりとも動かしていない。

正に無機質。そんな機械を思わせる態度が、その破面の不気味さを助長していた。

猫背の破面は徐に両腕を持ち上げ、振り下ろす。するとその先に生えた三本の鉈が伸び、地面へ突き刺さる。

それを起点に、影の様なものが地面を這う様にして広がって行く。

大凡半径十メートル程だろうか。其処で動きが止まると、影の所々が盛り上がった。

「…行け」

盛り上がった影が姿を変え、無数の破面が生まれる。

だがやはりその造形は皆歪で、不完全な進化を遂げた者達なのだろう。

猫背の破面は静かに命令を下す。

それを受けた者達からの返答は無かったが、命令には忠実に従っている様で、次々に恋次と雨竜へ襲い掛かって行った。

「…まだ出せるのかよ、クソツタレが」

「悪態を吐く暇があるなら、まず手を動かす事を御勧めするよ!!」

「わあーってるってるの!!」

恋次は蛇尾丸を肩に担ぐと、迫り来る破面達の軍勢を迎え撃った。

激闘を繰り広げている二人。

その後方では、震えながらその様子を眺め続けるペッシェとドンドチャツカが居た。

「ぺ、ペッシェ…」

「う、狼狽えるなドンドチャツカ！　あまり動くと気付かれるぞ!!」

涙を流しながら震え声を漏らすドンドチャツカに喝を入れるペッシェ。

確かにあの二人は強い。それはあの破面達の群れを何度も蹴散らしている様子から、それは十分理解出来た。

だがそれでも不安は拭えない。

現在自分達が居る場所。ペッシェはそれに見当が付いていた。

それは周囲に僅かに残っている霊圧の名残に起因する。

忘れられる筈も無い。これはかつて自分達を陥れた下手人の一人のものと全く以て同一だったからだ。

ザエルアポロ・グランツ。虚夜宮随一の頭脳を持つ狂気の科学者。

この軍勢を率いている、あの得体の知れない猫背の破面も、恐らくはその部下の一人だろう。

それか意図的に生み出された研究体である可能性が高い。本人の意思を感じさせないあの無機質さが何よりの証拠だ。

元より改造虚を作り出す事が出来るザエルアポロだ。この他にも迎撃用として何体か用意していても何ら不自然では無い。

そして彼ならほぼ確実に、この光景も何処かで観察している筈だ。

その為、一時は二人の加勢に入ろうかと考えたペツシエだったが、止めた。

確かにそうすればこの状況を切り抜けられるかもしれないが、それは同時にザエルアポロへ自分達の情報を漏らす事になってしまう。

——此処は二人を信じて、その時が来るのを待つより他無い。

ペツシエは拳を握り締めながら、戦況を見守るのだった。

地面に倒れ伏しながら、ルキアは己の実力不足に齒噛みした。

今の彼女の身体に、傷の無い場所は殆ど無い。死覇装の黒に隠されてあまり目立ってはいないが、その内側は思わず目を背けたくなる程に悲惨な状態となっている事だろう。

御蔭で特に痛々しく感じるのは、その右頬へ横一筋に刻まれた太刀傷。回道が無ければ、一生レベルで傷跡が残る程、その傷は深かった。

「……う……く……」

満身創痍のルキアを見下ろすのは、何処か一護と似通った雰囲気を持つ、黒髪の子。その表情には笑みが浮かび、その苦しむ様をさも愉悦そうに眺める様は、正に狂人そのもの。

男の右手に握られているのは、口金の付近に青の槍纒そうえいが付いた三又の槍——  
 // 振花ねじばな

“。死神の持つ斬魄刀、その始解の姿だ。  
 その男は、本来であれば生きていた筈が無い存在。

志波しば 海燕かいえん 十三番隊所属の、元副隊長。当時のルキアの心の支えとなってくれた恩人。

そして——嘗て同じ十三番隊第三席であり、妻である志波しば 都みやこを殺した、藍染の生み出した改造虚であるメタスタシア。それに霊体融合という手段で以て肉体を支配された所を、ルキアが突き出した斬魄刀に胸を貫かれて殺された男。

勿論、あの場はそうする事こそが最善。だがこの事実はルキアの心の奥底へ罪悪感として残り、苦痛を齎す闇となる結果となった。

だが今の男は死神では無い。ましてや墓の中から這い出てきたゾンビでも無い。

その正体は破面。それも第9十刃であるアーク・ニーロ・アルエリ。

彼の持つ帰刃—— // 喰虚グロトネリア。死して虚圏へ還つて来たメタスタシアの霊体を喰らい、取り込んで発現したのが、この志波海燕としての姿と能力であった。

始めはそれで此方の事を信用させたルキアを、不意打ちによって始末しようとしたが、既の所で躲されて失敗。

正体を明かさぬまま、今度は彼女の手で一護達の首を持って来させる様に会話で誘導

するも、その非道極まりない言動から偽物と悟られ、その後の戦いの中で完全に正体を看破された。

「実に無様だなア!! あの時より多少は腕を上げた様だが、それでもこのオレには及ばない!!」

だがルキアの奮闘は其処までだった。

開き直ったアローロニーロは、其処で解放。帰刃形態にてルキアを圧倒した。

見ればその下半身は巨大な蛸の様な巨体に埋もれている。

これこそアローロニーロが今迄喰らって来た虚の集合体。その数は三万と三千六百五十。

つまり今のルキアはその数の虚を一斉に相手しているのと同等の状況なのだ。

「だがまあ……このままお前を殺すのも味気無い」

アローロニーロは不意にそう零すと、突如としてその巨体を縮小し始めた。

それはボコボコと音を立てながら彼の身体へと収納されて行き、やがて帰刃する前の

姿へと戻る。

「折角だ。お前も志波海燕と運命を共にさせてやろう」

「なっ…!!」

ルキアは瞠目した。

何故なら海燕を模っていた筈のアーロニーロの顔が、見る見る内に変貌を遂げて行ったのだから。

忘れるものか。その姿はあの時と同じ——メタスタシアに融合された直後の海燕と瓜二つ。

その両目は空洞となり、口からは無数の触手が覗く、正に化け物と呼ぶに相応しい在り様であった。

「覚えてるか？ この姿を」

「ッ!!」

この期に及んで尚、海燕の生き様を嘲笑うかの様な態度を見せるアーロニーロに、ル

キアはこの上無い憤りを覚える。

だが限界を超えて消耗しているその身体では何も出来無かった。

「そら、まずはこつちだ」

「なッ!? 止め——!!」

目があった筈のその空洞から、一本の触手が伸び、斬魄刀を握る右手に触れる。

見覚えがあるそれに、ルキアは咄嗟に制止の声を上げるが、それが聞き入られる事は無かった。

直後、その純白の刀身が周囲の靈子に溶け込む様にして消え去って行く。

それはやがて柄にも及び——袖白雪は完全に消滅した。

呆然とその右手を眺め続けるルキアの表情が、やがて絶望の色へと染まる。

これはメタスタシアの持つ能力。一日に一度、自身の触腕に触れた者の斬魄刀を消滅させるといふ、対死神戦に特化した技である。

本来であれば仮面から生えている筈の触腕でそれを行うのだが、アールローはそれを目の空洞から伸ばしたので。

恐らく喰らいさえすれば、どの様な形でもその虚の能力を使用出来るのだろう。

そしてルキアは、次に自分が何をされるのか悟った。

アールロニーロの零した、海燕と同じ運命という言葉と、メタスタシアの能力の発現。それから導き出される答えは一つしか無い。

「まさか——貴様…!!」

「おっと、今良いところなんだ。逃げるなよ？」

「ぐあッ!!」

身動ぎしたルキアの右肩に、アールロニーロは振花を突き立てる。

刃先は肉を斬り裂き、骨を容易に貫通。そのまま地面に縫い止めた。

「さアてと…仕上げに移るか」

埃等を払う様に両手を打ち合わせると、アールロニーロは口元を吊り上げた。

ルキアは只それを睨み付ける事しか出来無い。

——こんな所で、終わるのか。

アールロニーロが次に行わんとしているのは、ほぼ確実に霊体融合だ。それで自分を

徐々に内側から喰い殺す心算なのだろう。

当然、悔しいに決まっている。叶うのなら、今直ぐにでもその額目掛けて切つ先を突き立てたい。

だがその為の手段も先程失われてしまった。

しかし永久にという訳では無い。それは確かだ。先程から己の内でも必死に呼び掛けて来る、聞き慣れた袖白雪の悲鳴にも等しい声が、それを証明している。

純白の着物を身に纏う雪女を思わせる風貌の彼女は、今頃見ている此方の方が逆に心配する面持ちをしている事だろう。

「……そつ」

考えられるとすれば、今の袖白雪は斬魄刀という憑代を失い、ルキアの魂魄の中に精神だけが乗り移っている状態か。何にせよ、直ぐには戻れないだろう。

もはや打つ手は皆無。万が一にもこの場を切り抜けられたとしても、この身一つで先へ進んだとしてもタカが知れている。

ルキアが諦め掛けたその時——袖白雪とは別の声が、彼女の内へ響き渡った。

本当に諦めるのか、と。

閉じた顔をこれでもかと開くと、ルキアはその正体を探る為に頻りに動かす。声の主は男。だがアローニークでは無い。

それに声が聞こえたのは外部からでは無く、己の内からである。

まさかと思ひ、ルキアはその視線を自身の右肩——それを貫く三又の槍へと移した。

次の瞬間、何処か嬉々とした感情を感じる声が響く。正解だと。

「振…花…？」

有り得ないと、ルキアは思わず内心で否定した。

今の振花はアローニークが発現させた力の一部に過ぎない。それに意思が残っている等と、誰が予想出来るだろうか。

だがその考えを読んだのだろう。自分は確かに此処に居る、という言葉が即座に返される。

「…急に大人しくなったな」

動きが止まったルキアを不審に思うアークニール。

——まあ、別に良いか。

だが今更如何こう出来る訳でも無し、と特に気に留める事は無かった。

次第にアークニールの身体が内側から波打ち始める。

これは準備。実はメタスタシアの霊体融合の能力を発現するには、少々手間が掛かるのだ。

何せ自身の肉体を一度紐状に変換し、相手に溶け込ませる異質な技である。アークニールの場合、その霊力の高さ故に一筋縄とはいかないのだ。

そんな彼を余所に、ルキアは振花と対話を重ねて行く。

斬魄刀の原型たる浅打あさうちの頃から始まった、海燕との長い付き合い。あの日メタスタシアによって消滅した直後。アークニールに取り込まれて以降の事。

状況が状況だけに簡潔な内容に纏められてはいたが、大凡は脳内補完によって理解出来る程に解り易かった。

「今の私に……どうしろと言うのだ……」

弱弱しい声で、ルキアは振花に問い掛ける。

鬼道を使用してこの窮地を抜け出すにしても、靈力は残り少ない。破道は威力も出ないだろうし、縛道も大した拘束力も無いだろう。

例え態勢を整えたとしても、この自身の状態が変わらぬ限り、良い様に蹂躪されて終わりだ。

「な……に……!？」

そんなルキアの考えに対し、振花が提案したのは想像を超えるものだった。

——ならば自分を使え。

得物も無い、余力も無い。その程度の事は如何とでもなる。何故なら自分が力を貸すのだからと、振花は自信満々に宣言する。

担い手が居る斬魄刀を、他の者が使う。それは確かに前例はある。

最たるものは、嘗て死神同士の下らぬ諍いの果てに亡くなった友人、その棺に共に入れられていた斬魄刀を手に取り、継承した東仙要。

現在彼は普通に使用しているが、それに至るまでの経緯は決して容易だった訳では無い。本人の弛まぬ努力と、斬魄刀との度重なる対話によって心を通じ合わせた末に成し遂げた結果なのである。

斬魄刀とは、無銘の浅打とその担い手が寝食を共にし、練磨を重ねることで魂の精髓を刀に写し取った末に完成するもの。

つまり他人がそれを継承するには、元の担い手と同等の研鑽を積むのは勿論。それで且つ斬魄刀自身と全く繋がり無し関係から、長い時を掛けて互いに魂レベルで心を通わせるまで絆を深める必要がある。

それがどれ程困難な事か解るだろうか。元の担い手と親密な関係にある者でも極めて困難な道程である。

如何に親しかろうと、互いに魂まで理解出来ている関係など、この世に存在する訳が無いのだから。

「私に、出来るのか?」

ルキアは迷う。妻である都なら未だしも、多少触れ合う機会が多かった自分如きに、海燕の魂の一部とも言える振花を継承出来るのかと。

其処で間髪入れずに放たれたのは、肯定の意。

息絶える寸前、海燕が自らの心を預けたのは何処の誰だ。妻の都か。同じ場に居た隊長である浮竹十四郎か。それとも瀨霊廷の隊舎にて帰りを待っていた三席の二人組か。

どれも違う。

——朽木ルキア、お前以外に居ないだろう。

振花に続き、袖白雪からも激励の意思が伝わってくる。

——貴女なら大丈夫。

今迄ずっと近くで見守って来たからこそ、自信を持ってそう言えると。

「そう、か…」

二人の言葉に勇気を貰ったルキアは、遂に覚悟を決めた。

そして内心で海燕に謝罪する。

心技体、何もかもが未熟なこの身で、貴方の斬魄刀の柄を握る事を、如何か許して欲しいと。

「ん?」

準備を終えたらしいアーロニーロは再び視線を下に向けると、思わず眉を潜めた。

死に掛けにも等しい筈のルキアが上体を僅かに起こし、左手で振花の柄を握っていた

のだ。

その顔は俯いており、表情は読めない。

この期に及んで何を企んでいるのか。引き抜かんと試みているにしても、そんな力がルキアに残っている筈が無い。

若しくは自らの斬魄刀を失った代わりに、振花を使おうとも言うのか。

アーロニーロは嘲笑した。所詮は無駄な足掻きだと。

やがてその顔に加虐的な笑みが浮かぶ。

——其処まで望むなら、更に苦しませてやろう。

そう考えたアーロニーロは、振花の石突よりやや下の柄へと右手を伸ばした。

「なッ…!!?」

だがその手が柄を握る事は無かった。

触れる直前、何か見えないものに弾き返されたのだ。

その手は表面が焼け焦げており、まるで高圧電流に感電したかを思わせた。先程まで余裕綽々だったアーロニーロの表情に焦燥が浮かぶ。

——如何いう事だ。

まさか振花が反旗を翻したとでも言うのか。

だがそれは有り得ない事象である。

今の振花は紛れも無くアールニーロの力の一部だ。

以前メタスタシアを喰らった後、力の確認の為に何度か試験運用してみたが、意思を持ち合わせている様子は皆無。

水を自由自在に操る流水系の能力はそのままに、只の道具と成り果てたのかと、そう思っていた。

当時のアールニーロとしては、鍛錬の中で振花の意志を屈服させて卍解を習得出来れば、今の階級より更に上に登れるのでは——と仄かに期待していた過去があったりする。

「ぐ…ああアアアアアッ!!!」

右肩から感じる激痛に叫びながら、ルキアは振花の柄を握る左手に力を籠め——  
一氣に引き抜いた。

何処にそんな力が残っていたのかと、アールニーロは瞠目する。

周囲に血飛沫が舞う。思わず傷口を押さえない衝動に駆られるが、ルキアは根性で耐

えた。

震える手で振花を持ち上げ、矛先をアールコートニール口に向ける。

だがその姿は余りに不恰好。真面に構えられてすらいない。

想定外の事態に慌てたものの、それを見たアールコートニール口は安堵の溜息を吐きそうになる。

だがその直後、緩み掛けたその精神を咄嗟に引き締める。

十刃となつて以降、長らく眠っていた本能が飛び起き、囁いたのだ。

——甘く見るな。

これと似た様な感覚は、藍染と初めて出会った瞬間に感じて以来である。

だがその時と比較すれば可愛いものだが、アールコートニール口は如何しても不安が拭えなかつた。

「——もて……」

眼前の小娘の姿をしてみる。切っ先は先程から忙しなく揺れ、方向が定まっていな  
い。

口は小刻みに動いており、只単に震えている様にも見受けられる。恐怖故にそうなつ

ているのか、それとも己を鼓舞する言葉を小声で呟いているのだろうか。

例え再びぶつかり合ったとしても、その力無き小柄な身体は紙切れの如くヒラヒラと宙を舞いそうな程に弱い。

にも拘らず——背筋に感じるこの寒気は何だと言うのか。

ア—ロニー口は虚を喰らう為の口であり斬魄刀でもある左手を持ち上げ、何時でも帰刃出来る様に備える。

だがルキアの構えは一向に変わらず。

対するア—ロニー口は警戒するばかりで、互いに身動き一つ取らない。

「——縛道の六十一」

「な…にッ!？」

「六杖光牢!!!」

だがその均衡は遂に破られた。

ルキアが両手を突出しながら叫ぶと、ア—ロニー口の胸に六つの帯状の光が突き刺さり、その動きを止める。

ア—ロニー口は其処で初めて気付いた。

先程動いていた口は恐怖に震えていた訳でも、ましてや己を鼓舞する言葉を発していた訳でも無い。

此方に聞き取れぬ程に小さな声で、言霊の詠唱をしていたのだと。

「ッ、今更俺の動きを止めたところで何になる!! こんなもの直ぐに——」

消耗故か、その拘束力は戦闘開始時に用いられたものに劣る。

とは言え六十番台の中級縛道。流石のアーロニー口とて、破るには十秒程の時間が必要だった。

「…行くぞ」

だがルキアにとってはそれで十分だった。

左手に握る振花へと視線を移すと、静かに頷く。

直後、振花が光に包まれる。

そしてそれが晴れた時、その姿は只の解放前の斬魄刀へと戻っていた。

「——ッ、くそ!!」

ゾクリ、と背筋に走る凄まじい悪寒。

額に冷や汗を滲ませながら、アールロニーロは六杖光牢を破らんともがき始める。

だがルキアにとって、既に時間稼ぎは十分だった。

縛道の詠唱を唱える前、彼女は振花に指示を受けていた。

先程は何か拒絶したものの、自分は未だアールロニーロの力の一部である事に変更は無い。今再び彼の元に戻されてしまえば、もはや逃れる事は不可能。

その繋がりを完全に断つには、解号と共に名を唱え、解放に合わせて継承の儀を済ませる必要があると。

しかもそれは只単に台詞を真似て喋れば出来るという訳では無い。

斬魄刀の解号と名は、己の担い手として認められた上で、授けられた者が唱えなければ何の変化も意味も持たないのだ。

全ては尸魂界の開闢以来、全死神の斬魄刀の原型となる浅打の全てを創っている——零番隊所属の「刀神<sup>とうしん</sup>」という異名を持つ男がそう定めたが故。

でなければ今頃、誰も彼もが有りとあらゆる斬魄刀を扱ってしまう。他の死神を殺して奪ったり等の争いも勃発し、深刻な問題となっている筈だ。

「不肖の身ながら…貴方の相棒をお借りします」

既にこの世には居ない海燕に対し、静かに語り掛ける。

勿論、返答は無い。

だがルキアは如何しても言わずには居られなかった。

「すいてんさかま水天逆巻け——振花”!!!”

振花の声に合わせ、その名を口にする。

直後、霊圧の増幅と共に大量の水の奔流が巻き起こる。

それと全く同時のタイミングで拘束から抜け出していたアローニーロは、その水に流されまいと足腰に力を籠めて踏み止まる。

「莫迦、な…!!」

——こんな事が有り得るのか。

水流に耐えながら、アールニーロは只々驚愕する。

振花は海燕の能力を発現すると同時に付属して生まれる、只の得物だった。ならば必然的に担い手である自分しか使えない筈なのだ。

だが現実は何だ。ルキアは一度振花を解放前の姿へ戻した後、再び解放した。残り僅かだった筈の彼女の霊力は回復しただけで無く、序盤の倍とも思える程に増幅。

特筆すべきは——その解放した振花の放つ霊圧だ。

アールニーロが振花を解放した時、ルキア程の水量が舞う事は無かった。

それが示す意味は明らか。これこそ振花が本来の力を發揮しているという証拠なのだ。

「覚悟せよ、十刃」

ルキアは振花を左手から右手に持ち替えると、後方へと引き絞り、口金の辺りに左手を添えた——まるで投擲を思わせる構えを取る。

その動きは極めてスムーズ。それこそ、右肩の傷など初めから無かったかのように。

霊圧の上昇は、その者の負った傷の痛みの軽減や止血作用、肉体の強化といった恩恵

を齎す。

それを考えると、ルキアの今の状態も納得出来た。

「海燕殿の誇りを穢した罪の重さ…その身を以て知るが良い!!!」

ルキアの全身から溢れ出した霊圧が、刀の切っ先の如き鋭さを持ち、対峙する者へ降り掛かる。

それを真面に受けたアーロニーロの口から、小さい悲鳴が漏れた。

虚夜宮には、正に影と呼ぶべき部隊が存在する。

侵入者討伐及び敗者の始末、または情報収集。所謂汚れ役といった任務を負う部隊、それが『エッセキアス葬討部隊』。

その部隊で隊長の階級を持つ、牛を思わせる動物の頭蓋骨を模った仮面を頭部全体に被った——ルドボーン・チエルト。

彼は今、とある事情から3ヶタの巢へと急行していた。

追従するのは、その部下であり兵士達。見た目は髑髏そのものの仮面で、ルドボーンと同様に頭部を覆い隠した破面が大凡三十人程揃って居た。

「…間も無く現場へ到着する。気を引き締めろ」

『ハッ!!!』

ルドボーンは部下達にそう言い聞かせる。

部下達は即答。その姿は正に忠実な兵士であった。

葬討部隊が請け負った任務。それは3ヶタの巢に侵入した一護達の追撃、そして敗北した十刃落ち二名を生死問わず持ち帰る事。

前者については時間的に幾分か猶予がある。問題なのは後者だ。

腐つても元十刃。並みの数字持ちを相手にするのは次元が違う。例え消耗してい

たとしても、その実力は侮れない。

とは言え、ルドボーンも一部隊の隊長に任命されるだけあり、相当な実力を持っている。

そんな彼でも、事前に情報へと目を通した限り、決して気を抜けるものでは無いと判断した。先程の部下達への指示はその為だ。

ある日から突然、今迄以上に鍛錬へと力を入れる様になった十刃落ちの二名。

靈力はそれ程上昇してはいない様だが、格上を相手にしているだけあって、技量は大幅に上昇している。

彼等と対峙した場合、一切の油断無く臨むべきだろう。そうルドボーンは判断する。

——必ず成功させてみせる。

“あの方”が約束して下さった、この任務を完遂した暁に齎される報酬。それを思い浮かべた途端、無意識の内に笑みが浮かんで来るのを、ルドボーンは感じた。

自身の帰刃——“アルボラ罫體樹”。主なデメリットも無しに、無限に兵士達を生み出し続ける創造主の如き強力な能力を誇るそれ。

兵士一人一人の戦闘能力は並の数字持ちにも劣るが、その数は圧倒的。時間さえあれば、周囲一帯を埋め尽くす程の軍勢を作り出す事も可能だった。

そんな力を持っていても尚、ルドボーンは届かなかった。十刃という破面達の頂点

に。

本人も悔しくはあったが、それ以上に十刃達に対して畏敬の念を抱いた。

遠目でも判る、あの圧倒的なまでの霊圧とカリスマ。成る程、確かに自分如きでは到底辿り着けない領域だと。

だがそんな立場も、この任務の結果で変わるかもしれないなかった。

報酬の内容は、新たな力を外部からルドボーンの魂魄に植え付けるといふもの。その効果は軽く見積もつて、霊力の倍加と、帰刃形態の能力の進化。

それ等がもし本当なら、今迄手が届かなかつた場所に手が届く様になる——つまりルドボーンは十刃達と肩を並べる事が出来る可能性があつたのだ。

大人しくしていられる筈が無い。奮起しない筈が無い。

だが今回の任務、下手すると越権行為に値する内容である。

しかし幸運な事に、今回は指示を受けた形で動いている為、全責任がルドボーンにある訳では無かつた。

処罰を受けるとしても、運が良ければ短期間の謹慎。最悪を考慮すると、恐らく葬討部隊の解散程度で済む筈だ。

どちらであつても構わない。虚夜宮からの追放さえされなければ、ルドボーンとしては如何でも良かった。

それに「あの方」は報酬の他にも言っていた。

——近い内に十刃の席を一つ空ける。

補足されずとも、ルドボーンには理解出来た。

即ちそれは報酬に加え、自分が十刃に入り込む余地を与えてやるという意味なのだと。

「この絶好の機会、逃してなるものか…!!」

気持ちがあ逸ったのか、気付けばルドボーンは既に抜刀していた。

背後の部下達も慌ててそれに続く。

やがて視界の中に、3ヶタの巢への入口が映る。

事前に発動させていた探查神経によると、一番近くに存在している霊圧はドルドーニのもの。

「あの方」の情報通り、侵入者と交戦した末、敗北を喫したのだろう。その霊圧反応は弱い。

近くにはこの虚夜宮に相応しく無い人間と死神が入り混じった妙な霊圧が。これも情報通り、侵入者である黒崎一護の霊圧の特徴と合致する。

ルドボーンは入口の手前に降り立ち、耳で一足遅れで部下全員が到着するのを確認。背後を振り向くと、命令を下した。

「まず始めの採取対象は、破面N.O. 103、ドルドーニ・アレツサンドロ・デル・ソカツチ才。続けて侵入者の追撃だ。遅れるな!!」

『御意!!』

士気も十分に、葬討部隊は3ヶタの巣へと踏み込んだ。

そしてドルドーニの元へと真っ直ぐ向かう。

だが次の瞬間——その足は強制的に止められる事となる。

「…よオ」

葬討部隊の進行方向に立つ、異質で巨大な得物を担いだ、長身で眼帯の男。見覚えしかないその姿を目の当りにした途端、ルドボーンの全身が恐怖で竦み上がる。

「グ…オオオ…ツ!?」

間髪入れずに叩き付けられる膨大な霊圧に、ルドボーンは思わず膝を着く。

見れば背後の部下達も同様。手に持った刀を地面に落としたり、酷い者は意識を失って地面に倒れ伏す者すら居た。

「ば…莫迦な…!! 何故貴方様が此処に…ッ!!」

「そんな急いで何処に行こうってんだ？」

自分達の行く手を阻んでいる存在は、*“あの方”*の情報の中には無かった。

先程まで高揚していた気分は一転、地の底まで急落。

ルドボーンは悟った。

この状況は完全にイレギュラーなのだ。

「…第5十刃…ノイトラ・ジルガ様…!!」

「さっさと答えろって。なア…ルドボーン？」

ルドボーンにそう問い掛けながら、ノイトラは口元を吊り上げた。

## 第四十五話　その他諸々と、白雪と強欲と…

突如として身体全体に響き渡った激痛。それにガンテンバインは叩き起こされた。

肺に溜まった空気を咳と共に吐き出すと、その臉を開く。

視界に映るのは、天井や壁の殆どが崩壊し、瓦礫塗れとなった遊撃の間の無残な光景。

泰虎とあれだけの戦いを繰り広げたのだ。当然の結果である。

だがそれ以前に疑問があつた。

「俺…何で生きてんだ？」

最後に泰虎が放つた“魔人の一撃”。

全身全霊を込めた“龍哮拳”を消し去つたそれは、勢いをそのままにガンテンバインを打ち抜いた。

文字通り全てを出し切つたタイミングで、その恐るべき威力を誇る一撃を受けたのだ。普通に考えれば即死している。

寧ろ全身が粉々にならなかつただけ良かったと思ふべきなのかもしれない。

「命まで奪う気は無かった、それだけだ」

「ツ!! 茶渡泰虎!」

突如として聞こえて来た、ガンテンバインの呟きに答える声。

その方向へ振り向くと、其処には既に立ち去ったと思っていた泰虎が座り込んでいた。

今の彼は上半身裸で、何処に隠し持っていたのか、包帯を傷口に巻く等の治療を行っている。

思い返してみると、如何に勝利したとは言え、それまでに泰虎の負った怪我は相当だ。最低でも止血程度は行わなければ、この先の戦いで持たないと判断したのだろう。だがそれでも腑に落ちない点もある。

ガンテンバインは問い掛けた。

「こんな事をして、てめえに何の得がある?」

そう、泰虎にはガンテンバインを生かす義理は無い筈なのだ。

——情けでも掛けたのだろうか。

ガンテンバインは憤りを覚えた。もしそうであるのなら、この上無い屈辱だと。

自分はあるのまま死んでいても悔いは無かった。そう考える程に、あの戦いの結果に満足していたのだから。

敗者が何を言っていると思うかもしれない。だが一介の武人としては、如何しても泰虎の選択に異を唱えたかった。

もし納得の行く答えが無ければ、自らこの命を絶つてくれよう。そう考える程に。

「俺がこの力を完全にモノにするきつかけを作ってくれた、その礼だな」

それに——と、泰虎は其処で一旦言葉を区切った。

同時に包帯を巻いていたその手が止まる。恐らく一通りの治療が済んだのだろう。

泰虎は近くに脱ぎ捨てて置いたシャツを手に取り、袖を通す。そしてゆっくり立ち上がると、ガンテンバインへ振り向いた。

「何よりお前は、ここで死なせるには惜しい男だ。傷が癒えた後、もう一度戦いたいと思える程に」

フツ、と泰虎はニヒルな笑みを浮かべた。

暫しの間呆然としていたガンテンバインだったが、やがて苦笑を浮かべた。

それは情けから来る選択で無かった事に対する安堵でもあり、好敵手認定を受けた事による嬉しさ。

「…バカヤロウが」

人間と破面。存在レベルで相容れぬ関係でありながら、一個人として接する。

それがどれ程愚かな行動か、十分に理解しているだろうに。

だが——存外悪く無い気分だった。

「それに…井上の居場所も聞きたかったし、な」

「おい、それが本音だろ」

泰虎はやや顔を背けると、小声で呟いた。

——さつきまでの感動を返せ。

だがガンテンバインにはしつかり聞こえており、即座に内心で抗議しながらツツコミを入れた。

正確には半々といった所なのだろう。どちらにせよ台無しなのに変わりは無いが。泰虎はバツが悪そうに、後頭部を掻いた。

「…ま、所詮コッチは負けた身だ。何でも聞きやがれ」  
「済まない」

色々と思う所はあるが、取り敢えずガンテンバインは開き直る事にした。

その様子に思わず泰虎は謝罪する。

「で、  
崩姫プリンセッサ——井上織姫の居場所だったか」

虚夜宮内での呼称を口に出すが、それは此方側しか知らないのだと気付き、言い直す。だが実際、殆どの破面達は織姫の事を人間としか呼ばない。やはり本能的に見下しているのだろう。会合等の正式な場ではその限りでは無いのだが。

「すぐ判ると思うが…虚夜宮の中心寄りに天蓋を超える高さの宮がある。そこが井上織姫の住居だ」

「…ならここから外に出て、真っ直ぐ向かった方が近いか」

泰虎は先程までの戦闘で崩壊した壁、その先に見える光景を眺めながら言う。

建物の中にしては妙に明るい。人工的な照明では無い、まるで太陽の光が差しているかと思わせる程に。

「それは止めとけ」

「…何故だ？」

その場から立ち上がり、其処へ足先を向けた瞬間だった。

一息遅れで、ガンテンバインから制止の声が掛かる。

「ここは敵地だぜ。開けた場所に、それも一人で出る。それがどういった意味を持つか…解らねえとは言わせねえぞ？」

泰虎は頭を横合いからガツンと殴られる様な錯覚を覚えた。確かにその通りである。

見渡しの良い広い場所に出るといふ事は、即ち敵にとつても同様。寧ろ場合によつては此方の方が不利だ。

先程僅かに見えた程度だが、虚夜宮の内部に幾つか点在している建物は皆高層。

その上に立つて下を見下ろせば如何なるか。取り敢えず下から見上げるのとは比較にならない程、その監視範囲は広いだろう。

自分は此処にいます、どうぞ狙ってくださいと言っている様なものだ。

「そのの出口を真つ直ぐ行くと、途中で宮と宮を繋ぐ橋がいくつかある場所に出る。適当に経路を探しながら移動してりゃあ、いずれは着く筈だ」

「そうか、礼を言う」

「ま、精々死なねえ様に気を付けるこつた」

説明を終えると、ガンテンバインは背中を壁に預けて脱力する。

彼は未だ完全に動けるまで回復していない。

敗北した今、如何いった処分を下されるのか気になる所だが、一先ず後回しにした。

——成る様に成る。

その様に考えながら。

実を言う、ガンテンバインが説明した織姫の居場所までのルートだが——誤りがあつた。

確かに通常であればその通りに行き着く筈なのだが、今は状況が異なる。

3ヶタの巢のある一定範囲に存在する通路、その全てが第三者の手によつて本来とは別の形へ変えられていたのだ。

だがガンテンバインはそれを知らない。

——これがあの様な結末を齎す事になるとは誰が想像出来ただろう。

「幸運を祈る、ガンテンバイン・モスケーダ」

そう言い残すと、泰虎は踵を返した。

目指すは先程説明を受けた通り、遊撃の間の出口。

その足取りは軽い。応急処置したにしても、あれだけの怪我を負いながらこうも動けるとは、相変わらずのタフネスだった。

徐々にその背中が遠退いて行く。

その時、ふとガンテンバインが口を開いた。

「待て」

「…何だ？」

「少し言いそびれてた」

泰虎は一旦足を止め、振り返る。

其処には真剣な面持ちをしたガンテンバインが居た。

「理解してるとは思うが、道中で十刃に出くわしたら真っ先に逃げろ。それが1から4番の上位組なら尚更だ。まともに戦<sup>や</sup>り合おうと考えるな」

「それは…」

「てめえは確かに強え。でもな…奴等はその遙か上をいく。文字通り次元が違うんだよ」

その言葉に、泰虎は迷った。

確かにある程度の実力はあると自負しているが、

喜助のアドバイスの通り、撤退も視野にいれていた。幸いにも、真の力に目覚めた今の泰虎には咄嗟に逃げ出せるだけの反応速度はあるのだから。

だが相手の実力が高ければ高い程、逃走が成功する可能性は低くなる。避けられない場合は戦うしか選択肢は無い。

「そして—— “あいつ” とだけは絶対に戦うな。どう足掻いても勝ち目は無い」

「あいつ？」

「ああ…階級だけ見りやど真ん中だが、実際は詐欺も良いとこだ」

妙に実感が籠った声で、ガンテンバインはその名を口にした。

「覚えとけ。その名は——」

——とは言え、頭を下げて懇願した上で逃走すれば、見逃してくれるかもしれないが。

“あいつ”の性格を知るガンテンバインは、密かに内心でそう思った。

ノイトラは変わらず得物を担いだ体勢で、葬討部隊の前に立ち塞がっていた。

言い逃れは許さないと言わんばかりに、彼の左目から放たれる威圧感。

先程ぶつけられた霊圧の影響で全身が弛緩していたルドボーンには、顔を逸らす事すら叶わなかった。

「そ…それは…」

「答えられねえ、と。この第5十刃でもある俺にもか？」

「ぐ…」

口籠っていると、更に追及。しかも立場を持ち出されると来た。

流石にルドボーンも迷った。この場は答えるべき——否、答えねば危うい状況だろ

うと。

基本的に葬討部隊に命令したり、自由に動かせるのは十刃である。

だが今回の様な緊急時ともなると、葬討部隊を動かせるのは藍染のみに限定される。そういう決まりとなっているのだ。

真実を言ってしまうと、自分達に指示を出した「あの方」は十刃であり、藍染ではない。この時点で既にアウト。重大な規則違反だ。

しかも階級は眼前のノイトラよりも下である。如何考えても素直に白状する事が懸命だろう。

だがそれでも尚ルドボーンは言い出せなかった。

恐ろしいのだ。この件の首謀者たる「あの方」の考えが。

例え此処で全てを曝け出したとして如何なる。実はそれも想定内の範囲内であり、独断行動に対する罰が藍染から下されるよりも早く、自分達を始末する手筈を整えているのではないか。

または知らぬ内に、命令の事をバラした瞬間自爆する等といった仕掛けを身体に施されてしるかもしれない。

「ま、どうせアイツに命令されたんだろ。内容は敗者の回収と侵入者の追撃ってトコか」

「…は？」

「ザエルアポロのヤロウによ」

「ツ!？」

ルドボーンは仮面の内側で瞠目した。

何故ノイトラがその事を知って居るのか。バレる要素は何処にも無かった筈だと。

ハツタリをかました訳では無いのは明白。その声と態度からは確固たる自信が見て取れる。

その様子に、ルドボーンは底知れぬ恐怖を感じた。

「な、何故…」

「臭うんだよ。アイツが何時も撒き散らしてる——ジメジメした陰湿で気色悪いソレがな。テメエ等にもその臭いがこびり付いてんぜ？」

ノイトラは不敵な笑みを浮かべる。

其処で言葉を一旦区切ると、直後にその表情を引き締めながら言う。

「それに——藍染サマだったら、こんなセコい真似なんざする訳が無え」

ノイトラの言葉を聞き、ルドボーンは思考する。

確かにそうだ。藍染は全てが別次元。強さも、頭脳も、カリスマも、上位十刃と比べる事すら烏澁がましい程に。

如何なる危機的状况に陥ろうとも、あの静かな笑みを一切崩す事無く、堂々と玉座に腰掛けて情勢を眺めていそうだ。

「つー訳で、今直ぐ引くってんなら見逃してやる。藍染サマへの報告もな」

「……う……く……」

讓歩案を告げるも、素直に首を縦に振ろうとしないルドボーンに、ノイトラは首を傾げた。

だが即座に納得する。

あのザエルアポロだ。命令を忠実にこなさなかつた部下に対し、何をするかなど容易に想像が付く。

若しくは保険と表して、悪趣味な仕掛けを施している可能性も否めない。

嘗て瀨靈廷へ侵入した雨竜と織姫の二名を仕留める為、マユリが平隊士数名を爆弾として使い捨てた様に、マッドサイエンティストという存在は命を命と思わない行動をする。

それを理解しているからこそ、ルドボーンは迷っているのだろう。

「安心しろ。俺に止められたって言やあ、流石のアイツでも無茶振りやしねえだろ」

直後、ルドボーンは俯き加減となっていた顔を持ち上げる。

その瞳には光が宿り、何か期待が籠った色をしていた。

言葉通りに取れば、ノイトラはこう言っているに等しい。

——困ったら自分の名前を出せ。

下手するとザエルアポロと敵対する可能性も低くは無い。にも拘わらず、ノイトラは平然とそう言い放った。

決してそうはならないという確信でもあるのか。それともザエルアポロ程度軽く捻られるという、自身の実力への絶対的な信頼故か。

「もしそれでも何かされそうだってんなら……部下の一人でも俺に寄越すなりして教え

ろ。口添え程度はしてやるさ」

ルドボーンに電流が走った。

何と言う寛大さか。ハイエナやら死体漁りといった蔑称を囁かれても致し方無い様な自分達に対し、これ程までの気遣いをしてくれるとは。

「何故、そこまで…」

「虚夜宮の中で、葬討部隊の肩書を背負える奴は殆ど居ねえ。俺はそう考えてる」

古今東西、所謂汚れ役という仕事が出来る者はかなり限定される。

自らの意思を押し殺し、それで且つ正気を失う事無く任務を忠実に熟し続けられる強靱な精神。

組織のトップ以外、周囲からの理解はほぼ皆無。常に得体の知れない存在として弾かれ、蔑まれても動じない胆力。

そしてそんな自身の仕事に誇りを持ち、組織のトップへ対する絶対的な忠誠心。

思い返して見れば、さり気にルドボーンはその全てを満たしている。以前それに気付いたノイトラは少し彼の事を尊敬した。

その上で十刃に次いで高い立場でもあると自負しているのか、下々の者達に何を思われ様が知った事かと言わんばかりに、徹底的に傲慢に振舞える余裕もある。

好きにはなれないが、その在り方は認めるに相応しい。それがノイトラの考えだった。

「いくら命令されたつつつても、今のテメエは間違った事をした。でもそれだけだろ。次から改めりや良いんだよ」

故に殺さずに見逃す。その後も立場が悪くならぬ様にフオローはする。

——何故ならお前は必要な存在なのだから。

ノイトラは遠回しにそう言っているのだ。

ルドボーンの全身が震え始める。

怒りや怯えでは無い。感極まる余り、暴走寸前となった己の感情を抑えている為だ。何時以来だろう。自身の事を認める様な事を言われたのは。

有象無象の破面に言われたのとは訳が違う。相手は十刃、しかもあのノイトラ・ジルガにだ。

ザエルアポロからの情報では、変わったと言う噂は偽りで、中身は獣のままらしい。

だが現実は何だ。これが演技とは誰が思うか。

もし話の通りであれば、立場が下の自分達に譲歩する様な態度を取れる訳が無い。次の瞬間、ルドボーンのその考えは確信へと変わった。

「頑張んな、ルドボーン・チエルート」

そう言い残し、ノイトラは3ヶタの巢の中へと立ち去って行く。

霊圧にアテられた名残をもともせず、ルドボーンはすつと立ち上がる。

そしてその背中に向けて、敬意を表す様に、右腕を胸に当てながら頭を垂れた。

やがてノイトラの姿が完全に消えた後、懐から何かを取り出すと、耳に当てる。

「…申し訳ありません、ザエルアポロ様。想定外の事態により、任務遂行は不可能となりました」

『へえ？ キミが其処まで言うとは…一体何があつたんだい？』

それは通信機と同様の働きをする、通信用霊蟲だった。

出発の事前にザエルアポロから渡されていたものである。

使用するにはまずその長い腹部を耳に差し込む必要があり、その際に尋常ならざる不快感があるのだが、ルドボーンは我慢した。

「3ヶタの巢の入口周辺に、ノイトラ・ジルガ様が居られました。止むを得ず…」  
『…あの獣が。やってくれる』

通信機越しに聞こえる舌打ち。

ルドボーンは何故かその様子に愉悦を感じた。

『まあ良いさ。直に奴は何も出来無くなる』

「は、それはどういった——？」

明らかに不機嫌そうではあったが、それは僅かな間のみ。途端にザエルアポロの声は嬉々としたものへと豹変した。その発言内容に、思わず疑問の声を上げるルドボーン。だがそれに対する返答は無かった。

場所が変わり、とある虚夜宮内の通路の一部。

其処にザエルアポロは居た。

周囲に従属官である異形の破面を無数に従えて。

「別にお前が知る必要は無い。取り敢えずご苦労だった」

反論の余地を与えず、そう言つて靈蟲を耳から引き抜き、一方的に通信を切る。

狂気の笑みに歪んだ表情をそのままに、視線を足元に移す。

其処には白衣を身に纏つた女性——セフィーロが倒れ伏していた。

意識を失っているのか、彼女の身体はピクリとも動かない。

「そうさ……もはや如何にでもなる。全ては僕の手の中さ」

クククと静かに笑い声を漏らしながら、ザエルアポロは徐に右手を持ち上げ、その指を鳴らす。

すると周囲の破面達が動きだし、セフィーロの身体を取り囲む。

彼等は割れ物を扱う様に、数人掛かりでその身体を優しく持ち上げると、何処かへ運び始めた。

「間違つても傷付けるな。大事に扱え」

——今は、の話だが。

ザエルアポロは内心でほくそ笑む。

何せ未だノイトラは健在。下手にセファイロを傷付ける真似をしてしまい、それがバレルの事になりでもすれば、『計画』が実行される前に此方が潰される可能性もあるのだから。

部下達の後に、ザエルアポロは少し遅れで移動し始めた。

同時に先程使用していた通信用靈蟲を指先で弄り始める。

最後に人差し指でその腹部に当たる部分を押すと、再び耳へと差し込んだ。

「やあ、そつちはどんな様子だい？」

『…敵二名の消耗は二割程度。こちらもまもなく、『補給』が切れる』

「…相変わらず燃費が悪いね。その辺は要調整といったところか」

通信越しに聞こえて来たのは、一切の感情が籠っていない無機質な声。

ザエルアポロは顎に手を当てながら思考する。

数年前に偶々見付けた、死んで間も無いらしい人型の中級大虚。

部下に早速持ち帰らせ、新たな改造虚の素体として研究を始めたは良い。だがその特殊な能力のせいか、相当苦戦したのを覚えている。

それはつい最近になり、やっと完成へと漕ぎ着ける事が出来た。

軽く行った実験結果は上々。燃費の悪さがネックだが、それでもその能力は便利だった。

言うなれば、今の葬討部隊のレベルを更に二段階程上げた感じか。一つの軍隊を手に入れたと考えると良い。多数の従属官を従えるとは訳が違う。

そんな中、現れた侵入者達。

ザエルアポロはチャンスだと思った。実戦へ投入しての検証と、自身の計画をスムーズに進める為に利用出来ると。

侵入者達が進む通路の何本かの構造を弄り、行先を更に散開させる形へと勝手に変更。

敵が何処に居るのか、何処へ向っているのか不明な状況程、不安を掻き立てるものは無い。

まず殆どの破面は其方に注目する。そして恐らく戦闘狂であるノイトラは真っ先に

動くだろう。それも敵の位置に応じてバラバラに。

その隙を突いて、計画の仕込みと、彼の弱みを握ろうと企てた。すると天はザエルアポロへ味方した。

監視も届かない、破壊も出来無い。そんな鉄壁の城とも言える治療室周辺より、セフィーロが一人で出て来たのだ。

つい最近話した限り、未だノイトラは彼女に対し、独占欲を抱いている事は判つてい

る。つまり弱みの一つとも言えた。完全な人質には出来無いだろうが、此方の要求通りに呼び出す程度の材料には出来そうだ。

そう考えたザエルアポロは早速行動を開始した。

通路を弄り、予め幾つもの薬剤を散布させた場所へとセフィーロを誘導。

序にその周辺には探查神経や霊圧知覚を阻害する装置が壁に打ち込んである。

そのまま全方向を従属官達で塞いで身動きを取れなくさせた結果——やがてセフィーロは薬剤の効果によって意識を失った。

「じゃあ彼等をそのまま宮まで誘導してくれ」

『……ではっ』

「後は直々に僕が始末するとしよう。研究材料になりそうな奴も居る事だし」

今後の未来に期待が膨らむとはこの事か。

ザエルアポロは全てが思い通りに運んでいる現状に、この上無く満足していた。

「頼んだよ…バスーラ」

『…了解、ボス』

それは嘗てノイトラを追い詰め、覚醒の切っ掛けを作った者でもある中級大虚の名。

そんな事などいざ知らず、ザエルアポロは通信を切ると、軽やかな足取りで自身の拠点の宮へと向かった。

だが彼は気付いていなかった。

従属官が運んでいるセフィーロ。

意識の無い筈の彼女、その仮面の名残に隠れた口元が、不気味な程に吊上がっていた事に。

その動きを例えるなら、舞か。

風を斬り裂く鋭さを感じさせながら、柳の如く緩やかな揺れを連想させるそれは、見る者を飽きさせない不思議な魅力があった。

そして本来の担い手とは全く別の扱を方されているにも拘らず、その三又の槍は一向に霊圧の放出を緩めない。

「何故…だ…」

全身が微かに震え出すのを覚えながら、アールニー口は絞り出す様にして声を出した。

「何故お前が扱花を扱える!? 答えろ朽木!!」

やがてそれは怒声となり、眼前のルキアへ降り掛かる。

最後に穂先を振り下ろすと、其処で舞が止まった。

終始目を閉じたままだったルキアは、徐にその瞼を開く。

鋭利に輝くその瞳の奥底には、静かな怒りが宿っていた。

海燕を演じるのは止めた様だが、所々にその名残を見せるアールニーロの態度に対して。

この期に及んでも尚、その呼称を使うかと。

「それはオレの力の筈だ…!!　なのに何故拒絶される!?　何故戻せない!?!」

アールニーロの抱いた疑問は尤もである。

本来であれば振花という斬魄刀は、彼の意志一つで好きに出来る筈なのだ。消すも戻すも、解放も解除も自由自在に。

だが先程は触れる事すら叶わなかった。弾くと同時にその右手を焼くという、明確な敵対行為まで示された上で。

「それとも——このオレがずっと騙されていたとも言えるのか!? 斬魄刀如きに!!」

アールロニーロは叫んだ。心の何処かで察してはいたものの、断固として認めたく無かった事実を。

振花に初めから意思が存在していたのだとすれば、そうとしか考えられない。

自らを押し殺し、頑なに道具の振りを続け、今こうして反旗を翻すチャンスを探っていたのだと。メタスタシアが融合した海燕の魂と共にアールロニーロに取り込まれた、その瞬間から。

だがそれは他ならぬ振花に問うべき内容である。しかし焦燥に加えて恐怖が重なったその精神状態では、冷静な思考も何も出来る筈が無い。

アールロニーロは只々、ルキアに叫び倒すしかない。

思い通りに物事が運ばずに駄々を捏ねる幼子の如く。

「簡単な事だ」

穂先をアールロニーロの喉元へと突き出し、ルキアは静かに呟いた。

「貴様では担い手に相応しく無いと、振花が判断しただけに過ぎん」

そんな事すら解らないのかと、ルキアは冷やかな視線を向ける。

当然、その態度はアローニーロにとっての上無い屈辱であった。

ヤミー程では無いが、アローニーロもそれなりに気が短い。それは破面という高位種族、その更に上位に君臨する十刃としてのプライド故に。

———たかが死神風情が、この自分に対してその様な目を向けて良いと思っているのか。

感情が一瞬で沸騰。激情の余り視界が赤く染まる。

そしてその意志は、全てがルキアへの殺意で塗り潰された。

「喰い尽くせ 喰虚 アアア!!!」

唱えられた解号は、まるで怒声であった。

直後、帰刃を選択したアローニーロの全身が、凄まじい速度で盛り上がって行く。

やがて生まれた異形の造形は、先程と余り変わらない。だがその色が明らかに異なっていた。

赤みを帯びた青色であつた筈のそれは、何処か禍々しい印象を受ける濃い紫色へ。アールロー自身自身の殺意に比例しているとでも言うのだろうか。

巨体の中心部が泡立ち始めると、其処からアールローの上半身が飛び出した。

常に穏やかな表情を浮かべた好青年である筈の海燕の顔は、溢れ出んばかりの怒りと殺意によつて醜く歪んでいた。

「死神風情が……絶対に殺してやる!!」

今のアールローは間違い無く素の状態へと戻つていた。ルキアへの呼称が変わつてゐるのが何よりの証拠である。

意図的に海燕の演技を止めたのか、それとも精神的な余裕を失つたが故に自然と消えたのかは定かでは無い。

だがルキアにとつて、これは好機とも言えた。

——正直言うと、有難い。

ルキアは内心で少々安堵した。

造形のみとは言え、敬愛すべき人物を斬るのは何処か抵抗を持つてしまふのが普通である。振り切れたとは言いつつ、心の奥底では——といった感じにだ。

だが今のアローロニーロには、その切っ掛けとなるような要素は一切無い。全身から滲み出る雰囲気から、正に海燕の皮を被った化け物にしか思えない。

「今の貴様なら…」

—— 迷い無く斬り捨てられる。

そう眩くや否や、ルキアはその場を跳んだ。

同時に周囲から何本もの水柱を立ち昇らせながら。

一瞬の出来事だった。それで且つ耳を澄ましていたとしても気付かぬ程静かに。

確かにルキアは序盤の戦闘時にも何度か使用してはいた。だが今の動きはそれとは別格。

上昇した霊力と共に、肉体の動きや反応等も強化されたのだ。

激情の余り我を忘れ掛けていたアローロニーロは、御蔭でそれに気付くのが遅れた。

無論、それは戦場に於いて致命的に過ぎる。

死神で言う隊長格の戦闘レベルともなれば、一息で勝負が付く事などザラなのだから。

「グ、ウツ!？」

突如として右の肩口から感じた鋭い痛みにも、アールローニークは声を漏らす。

視線を横に移してみれば、其処にはパツクリと裂かれて鮮血を噴き出す自身の右肩が。

——あの一瞬の内に、斬られたというのか。

アールローニークは戦慄した。この斬撃の鋭さを見るに、下手すれば斬り落とされていたと。

自身が置かれた状況に対する危機感、そして絶え間無く響き続ける激痛から、次第に精神が落ち着きを取り戻して行く。

だがやはり遅かった。

次の瞬間、アールローニークの背筋に悪寒が走る。

そして最大音量で警報を鳴らす本能。

咄嗟に周囲を見渡すが、ルキアの姿は何処にも無い。

焦燥の余り、額に冷や汗が浮かぶ。

そんな時だった。パシヤンという水の鳴る音が、真上から聞こえて来たのは。

「な…」

視線の先に居たのは——巨大な獅子。

水で模られているが故に、全身は透明。そしてその顔は、今直ぐにでも獲物に襲い掛からんとする、狩人の表情を浮かべていた。

「<sup>ししおどし</sup>獅子脅<sup>し</sup>」

猛獣の腹の下に当たる場所では、ルキアが振花を上段に振り被っていた。

此方を眺めて硬直したままのアローニーク目掛け、それを振り下ろす。

矛先に合わせ、獅子も動く。眼前の獲物を見定め終えたのか、その顎を大きく開きながら、勢い良く飛び出して行く。

アローニークは咄嗟に下半身から無数の触手を伸ばし、自身を覆い隠す様にして防衛体勢を取った。

直後に押し掛かる衝撃。同時に幾つかの触手が千切れ飛んだのが判る。

——こんな技、志波海燕の記憶の中には無かった筈。

アローニークは驚愕した。

まさかこの短時間で新たな技を編み出したとも言えるのか。そう間を置かずして、触手から感じる圧が消える。

恐らくこれは単発に等しい技なのだろう。これ幸いと、アローニーロは触手の壁を解き、直ぐ様反撃の為に動いた。

今迄に喰らった虚達の記憶を引き出す。凡百の雑魚に始まり、巨大虚、最下級大虚。数は少ないが、中級大虚も含まれている。

その中から、この場に最も適しているであろう能力を選定し、発現させる。

「この程度か！ 温いぞ死神イ!!」

アローニーロの全身が、徐々に鍍金加工を施したかの如き光沢を放ち始める。

これは「帝王外皮<sup>ディアマンテ</sup>」という、数種類の甲殻類を混ぜ合わせた姿をした中級大虚が所持していた技。内容は単純に外皮を硬化化させるだけだが、身体の動きを一切阻害する事が無いという、地味に便利な能力だ。

例え軟体であっても、身体の一部に一つでも先鋭な部分があれば武器と化す副次効果も齎す。アローニーロの場合、触手を無数に所持しているとくれば——言わずもがな。もはや武器には困らなくなる。

地面へ着地したルキア目掛け、アールローは数本の触手を足として用いると、地面を這う様に移動し始める。

その速度は巨体に似合わない程速い。小型の軽自動車、そのアクセルを全開に踏んでも追いつけない程。

このまま単純に体当たりしても十分な威力があるだろうが、生憎とルキアの実力は副隊長クラス。瞬步どころか、下手すると足捌き程度で容易に躲されてしまう。

其処でアールローは触手を更に増やす。

当然それも先程の能力の恩恵を受けており、刺突に鞭打を初め、形状を平たく変化させれば斬撃としても利用可能の凶器と化していた。

発現した能力の詳細は全く知らないが、ルキアは本能的にそれが危ないものだと悟った。

迎撃の構えを解き、振花の穂先を地面に突き立てる。

大量の水がルキアを中心に集束し始め、やがて渦を形成する。

彼女の全身を完全に覆い隠すまで巨大化した渦は更に回転速度を上げ——無数の水の弾丸を打ち出し始めた。

良く見ればその弾丸の一つ一つは非常に小型で、大人の小指程度のサイズだ。

普通に考えれば、そんなものは例え高速で打ち出されたとしても、多少痛みを感じる

程度しかダメージを与えられないだろう。只の悪戯でしかない。

だがそれは誤った認識である。

その証拠にアローロニーロが水の弾丸を受ける度、硬質な物同士が打ち合ったかの如き金属音が鳴り響いていた。

実はこの水の弾丸、振花の支配力によってその形状の持続力が極めて高くなっている。つまりそれ等一つ一つが持つ威力は、只の水鉄砲とは比較にならない程高い。

これに技名など無い。先程の獅子脅は振花から教えられたもので、これは全くの別物。

自身の持てる知識を総動員し、水を武器として用いる方法を見出し、技に昇華させたのだ。

——— //とおりあめ 徹雨〃、とでも名付けようか。

ルキアの内では、そんなノリの軽い振花の声が聞こえていたりする。

「下らん真似を…!!」

途中までは気にせず直進し続けていたアローロニーロだったが、やがて数本の触手を自身の上半身の防御に回す様になる。

負傷とまではいかない。だが直撃時に伝わる衝撃が大きいのだ。

外側は硬質化の能力に加えて鋼皮もあるが、その内側まで強い訳では無い。ましてや頭部が強度の低いカプセル状で、且つ中身が薄紅色の特殊な液体で保護されていなければ瞬く間に死に至る貧弱な本体であれば尚の事。

しかも現在発現している硬質化の能力にはとある制限がある。

故にアローニークは出来る限り早目に勝負を付ける事を選択した。

こんな小娘の悪足掻きに付き合う義理は無いと。

「付け焼刃の技が、このオレに通用すると思うか！ 舐めるな!!」

移動と防御の一切を捨て、アローニークは全ての触手を攻撃へと転じさせた。

視界の先を埋め尽くす様にして、無数の触手は未だに水の弾丸を放ち続けているルキアへ襲い掛かる。

だがルキアは落ち着いていた。静かに振花を地面から抜くと、弾丸の発射と共に自身の周囲を渦巻く水の回転が止まる。

水はやがて輪の様な形状へ変化。彼女はすかさず穂先を下段から振り上げ、それを縦一筋に両断した。

輪だったものは龍の如くうねり始め、更にその姿を変えて行く。

言うなれば巨大な魚。多少大雑把ではあるが、口の左右に生えた二対の髭を見ると、鯉に分類出来るだろう。

それはルキアの周囲を暫しの間遊泳すると、急激に方向転換し、真正面からアール口へと突っ込んだ。

「〃こいのぼり鯉昇〃!!」

地面を擦れ擦れに移動しながら、獲物を飲み込む様にその口を開く。

対するアール口ニール口は、移動に用いているものを除いた全ての触手、その先端を前方に突き出し、巨大魚に対抗する。

互いに引く事無く——やがて激突。

水と鉄製の針山。どちらが優位かと言われれば明らかに後者だろう。

だが巨大魚は触手の針山に全身を貫かれながらも、その形状を崩す事無く、アール口ニール口の巨体をその口で後方へと押し込み続けていた。

「なん……だと……!!?」

アールニーロは咄嗟に数本の触手を地面に突き立て、何とか踏み止まる。だがその表情には明らかに焦燥が浮かんでいた。

理由は直ぐに判る。何故ならアールニーロの全身の光沢が、次第に薄まって来ていたのだから。

そう、“帝王外皮”の制限というのは、その持続時間なのだ。

腕や脚のみといった、身体の一部に限定して使用すれば長時間に亘って持続が可能なのだが、全身ともなると一気にそれが短くなる。

アールニーロの帰刃形態が誇る巨体程ともなれば尚更だ。

「く、そッ!!」

巨大魚を貫いている触手を暴れさせ、その形状を崩さんと試みるが、一向にその気配は無い。只々水を切るだけで、何の変化も起きなかった。

そうこうしている内に、遂に全ての光沢が消え去る。それと同時に全身の硬度が通常状態へと逆戻り。

一応鋼皮は健在だが、初撃の威力を考えると、余り意味は無いだろう。

ルキアはその変化を見逃さなかった。

すかさず振花を頭上で回転させ、周囲の水をそれに集束させて行く。

十分な量が集まったのを確認すると、穂先を上段から振り下ろす。

そして再び放たれる無数の水の弾丸。

だがアールロニーロは眼前の巨大魚のみに意識が向いており、他は完全に無防備。畳掛けるにはベストなタイミングだと言えるだろう。

だがルキアの狙いは違っていた。見れば水の弾丸が飛ぶ方向はアールロニーロの上半身では無く——地面に突き立てている数本の触手。

「なっ!?!」

切れ掛けのロープへ更に荷重を掛ければ如何なるか。誰でも想像が付くだろう。

所々に穴が開き、抉られるその触手達。それに容赦無く襲い掛かる巨大魚からの圧。アールロニーロは其処で初めて不意討ちに気付くも、既に手遅れだった。

その触手達は先端部を地面に残し、瞬く間に千切れ去る。杭を失った巨体は勢いを増しながら後方へと押し遣られて行く。

「うおおオオオッ?!」

壁に激突するも、その勢いは依然として変わらず。

御蔭でアールロニーロは壁を貫通し、宮の外へとその巨体を投げ出す事となった。

第9十刃の拠点の宮は比較的高所に存在している。

つまり今、アールロニーロは宙を舞っていた。流石の彼でも、その巨体を支え切れる靈子の足場を形成する事も出来無い。喰らった虚の中にも、空を飛ぶ能力を持つ者は居なかった。

巨大魚は追撃と言わんばかりに、今度は下方へとアールロニーロを押し遣らんと動いた所で——その姿を消した。

確認してみると、アールロニーロを中心とした周囲一帯には水気が殆ど無く、乾燥し切っている。

同時にその範囲の景色がユラユラと揺れている様にも見える。

これは陽炎。熱により空気の密度が違う場所が発生する事で光が屈折した為、そう見えているのだ。

言わずもがな、これもアールロニーロが発現した一つの能力。

全身の温度を瞬間的に超高温域まで引き上げる——  
「早魃地獄」<sup>セキア</sup>。その温度は約

一万にも及び、太陽の表面温度すら超えていた。

本来であれば敵に密着した状態で使用する一度限りの必殺技である。だがあの状況だ。致し方無いだろう。

「グウアアアアアアアアア!!?」

だが危機的状況は変わらない。

光の差す天蓋の青空の下に出た影響で、闇の中でのみ発現可能であった海燕の能力が解けると同時に、その顔が崩れ始めた。

強制的にその能力を解かれた反動なのか、ア—ロニーロは苦痛を堪える様に声を上げる。

そして露になる本来の素顔。

カプセルの中に浮かぶ二つの頭は、未だ残る反動の名残に眉を顰めている。

「くそが…!!」

「アイツハ、何処ニ——ッ!!?」

上側に浮かんでいる頭は憎々しげに声を漏らし、下側の頭はルキアの姿を探す。直後、そんなアールニールに影が覆い被さる。

「さうらばだ、十刃」

上部から聞こえて来たのは、今自身が最も殺意を抱いている相手。

アールニールは即座に反応を示すと、弾かれる様にして頭部を持ち上げた。

刹那——頭部全体に走る衝撃。

そして次に視界を遮る銀色。

見れば振花の穂先が、二つの頭を避ける様にして頭部に突き刺さっていた。

アールニールが何らかの能力を発動した事を察したのだろう。

水を用いた技は使えず、残存する熱量から接近も不可能と判断し、遠方から振花を投擲したのだ。

他ならぬアールニール自身がその状況を理解するのに要した時間は大凡十秒。

パリン、とカプセルが音を立てて砕け散り、紅色の液体と共に二つの頭が宙へ投げ出されたのと同様だった。

## 第四十六話 強欲と白雪と主人公と髭と三日月と……その 他諸々

蛸型の巨体が液状へと変化し、やがて靈子となつて大氣へ溶け込んで行く。

そして残つたのは解放前の人型。だが其処にカプセル状の頭部は無く、その破片と中身である紅色の液体は宙に広く飛散していた。

司令塔を失つた身体は無抵抗のまま、重力に従い落下。

外へと放り出された本体である二つの頭部だが、その軽量さ故か、遅れてその後を追う。

帰刃形態が解けるという事は、即ちその破面がその状態を維持出来ぬ程に消耗したか、瀕死までに陥つた状態を意味する。

先程の状況を思い返せば、つまり今のアールオーロニーロは後者であると判断出来た。

「オギャアアアアアアアアア!!!」

内一つである、両頬から上の顔半部を仮面の名残で覆つた頭部が、耳を劈く様な悲鳴

を上げる。

やはり紅色の液体は生命維持に必要な不可欠なものだったらしい。その声からは尋常ならざる苦しみを感じ取れた。

「嘘ダ!! コンナ事有り得ナイ!! 何デ：何デエエ!!」

自身が敗北した事が信じられない、または死への恐怖故に錯乱しているのか。

どちらにせよ、幾ら悲鳴を上げ様が現実は変わらない。

だがその頭部は平常心を完全に失っており、壊れた玩具の如く只々叫び続けていた。

「苦シイ!! 苦シイヨ!! 助ケテ藍染様!! タスケ——ツ!!!」

外気に晒されるだけで生命が危ぶまれるのであれば、この落下し続けている現状は余計にそれを悪化させるといふ事。

案の定、その頭部は最後までその言葉を言い切らぬ内に——血と肉片を撒き散らしながら破裂、絶命した。

残されたもう一つの頭部。右目以外を仮面の名残で覆ったそれは、横目でその末路を

見遣ると、静かに呟いた。

「…無様だな」

はっ、と最後に鼻で笑う。

勝てた戦いだった。単純な戦闘能力を見ても、此方が全てを上回っていた。

それでも自分は敗北を喫した。何故だ。

——全ては油断と慢心。それ以外に無い。

如何あつても自身の勝利は揺るがないとタカを括り、無駄に時間を掛けてルキアの処刑せんとしたその愚行。

願わくば、あの時ニタニタと余裕綽々な表情を浮かべていたであろう、自身の顔を殴り飛ばしたい。今更ながらに、ア—ロニ—ロは思った。

「ウ…ギ…!!」

後悔先に立たず。もはや己に待っているのは滅びの運命のみ。

頭部の所々が膨れ出し、中身を圧迫して行く。

如何やらもう一つの頭部と同様、風船の様に破裂しようとしているのだろう。

その口から苦痛の声が漏れ出す。

せめてもの悪足掻きとして、アールローは第9十刃の役目として与えられた能力―

―にんしきどうき「認識同期」を発動。自身の戦った敵の情報と映像を、瞬時に全ての同胞へと報せる。

―今の内に喜べるだけ喜んでいろ。

華々しい勝利を飾れて嬉しいだろう。だが快進撃は其処まで。続きはしないし、絶対にさせないと。

この先に待つ十刃達は、皆自身を遥かに上回る実力者達。情報も流した事だし、もはや欠片の光明が差す事すら無い。

薄れ行く意識の中、アールローはほくそ笑んだ。

そして十刃の中でいの一に退場する羽目となった自分に対し、ある意味納得する。

―全十刃中最弱としては相応しい終わりなのかもしれない。

あのヤミーも、表向きには第10十刃だが、帰刃後はあのザエルアポロの後を継いだ第0十刃となる。

ならば必然的に十刃の中で最弱に位置するのはアールローとなる。それは本人も自覚していた。

喰虚の特性上、進化の可能性は誰よりも持ち合わせていたが。

「…精々足掻け。無駄に終わるだろうが…な…ッ!!」

吐き捨てると、遂にその頭部は弾け飛ぶ。

この瞬間、アーロニーロ・アルエリの死は確定した。

頭部の無いアーロニーロの身体が地面へと落下する。

それから一息遅れで、ルキアも着地した。

少し離れへ突き刺さっていた振花まで近寄り、その柄を握るや否や——膝を折った。

「うっ…く…」

流石に限界が来たのだ。

元からポロポロの身体である。幾ら振花の協力があったとは言え、これ程までに動けたのは奇跡に等しい。

解放直後の霊力の上昇も、理屈は全く以て不明だ。

だがルキアは前向きに捉える事にした。きっと自身に宿る海燕の心が力を貸してくれるのだらうと。

「…はははっ、安心しろ」

その心の内を読んだのか、振花から抗議の声が上がる。

自分の事を忘れてもらっては困るぞと。

ルキアは苦笑しながら、それを宥めた。

「鞘が…必要だな」

鞘というものは本来、その刀に合わせて拵える為、他の刀を納めても合う事はほぼ無い。例え偶然刀身の長さ等が一致したとしても、上手く抜刀出来無かったりと、不具合が必ず起こる。

今左腰に差しているのは袖白雪のもの。となればこの戦いの後、かの零番隊に所属している斬魄刀の創造主に、新たに振花専用の鞘の製作を依頼せねばならない。

厳密に言うとうと、鞘は残っている。だがそのある場所は、志波家の屋敷の敷地内にあ

る海燕の墓の中。

ならば取りに行けば良いと思うだろうが、そうは問屋が卸さない。

海燕の死後、消え掛けの状態である彼の遺体を直接其処まで届けたのはルキア本人。御蔭で彼女は海燕の家族に仇として認識されていた。

だが今となつてはその蟠りも解け、直接赦しの言葉も送られている。

とは言え、唯一残つた形見でもある鞆を譲つて貰う様に頼むのは、余り気が進まない。振花には申し訳無いが、暫くは抜き身のまま持ち歩く事になるだろう。

内心で謝罪しつつ、ルキアは一旦振花を始解状態から戻す。

滯霊廷を出発する前に用意していた道具の中から懐紙を取り出し、その刀身を軽く拭つた。

何時もならその後丁字油を塗るのだが、残念ながら今は持ち合わせていない上、場所が場所だ。そんな悠長な真似は出来無い。

これも我慢してもらう他無いだろう。

「むっ。」

そう考えた時、徐にルキアは首を傾げた。

己の内から聞こえた袖白雪の声に。

——そんなに気を遣わなくて良いのに。

些か拗ねた様にして眩かれたそれ。

ルキアは袖白雪の性格を思い返すと、その態度に得心が行った。

「どうした、嫉妬しているのか？」

基本的に優しく、心配性故に世話焼き。だが寂しがり屋な部分もある。

そんな袖白雪が——あの結果だ。

アーロニーロの手で呆気無く消滅。それどころか突如として現れた別の斬魄刀に自身の立場を完全に奪われたかと思いきや、即興ながらもルキアとの絶妙なコンビネーションで見事勝利を挽ぎ取った。

その光景を只々眺めて居た彼女の心中は如何程か。

否、別に袖白雪もそれが悪い事だと言っている訳では無い。寧ろあの時取れた選択肢はそれ一つであったし、結果的にルキアが無事だったのだ。

正に理想的な終わり。ベターどころかベストである。

なのだが——そう簡単に折り合いを付けられるものでも無いのも事実。

浅打ちの頃から名を持つまで、それこそ長い年月を共に過ごして来たのだ。

言うなれば今の袖白雪は、横から部外者に大事な者を掠め取られた様な、それに似た気分であつた。

「そう膨れてくれるな。お前の斬魄刀もその内戻るだろう。暫しの辛抱だ」

メタスタシアは斬魄刀を消滅させると言っていたが、厳密に言うとは違ふ。

最終手段の「霊体融合」という技から連想出来るとは思ふが、斬魄刀自体を霊子状に分解し、持ち主の魂魄に溶け込ませるのだ。

でなければ、アールローが振花を使った理由が説明出来無い。

海燕の肉体を持つメタスタシアの魂魄自体に振花の力が含まれており、それを喰らうと共に取り込んだと見るべきだろう。

そして一度魂魄に溶け込んだ振花を取り出せたという事は、消滅させるのは一時的なもの。

時間が経てば再び斬魄刀は元通りになると考えられる。

「さて……早く井上の所まで向かわねば」

何時までもモタモタしている訳にはいかない。

依然として消耗は激しいままだが、最低限動けるまでには回復した。

今頃皆も、其々に強敵を相手に奮闘しているのだろう。先程から激しく変動する複数の霊圧が、遠く離れた位置から感じ取れる。

ルキアは最後にアローロニーロの遺体を一瞥すると、別方向へ駆け始めた。

織姫の霊圧は、虚夜宮の中心部。

回道で自身の怪我を治療しつつ、其処を目指す。

「——まさかアローロニーロが敗れるとは…これが番狂わせというのですか」  
「ッ!?!」

突如として背後から聞こえて来た声と、大きな霊圧に、ルキアはその足を止めた。

咄嗟に振り返る。其処には後ろに腕を組みながらアローロニーロの遺体を見下ろす——

額から後頭部に掛けて棘の様なものが縦方向に並んで付いている、坊主頭の黒人風の男が居た。

——こう間を置かずして、新手が来るとは。

ルキアは齒噛みした。

その全身から溢れ出している靈圧の量から、男が只の破面では無い事は明白。瀟靈廷に帰還する前、喜助から提供された情報を思い返す。

もしこの男が十刃だとすれば、確実にアールローニー口よりも上の階級だろう。

十番と六番、そして五番までの数字を持つ者は判明している。

ならば可能性として濃厚なのは、この男の階級は八番か七番。

五番があれば程の実力なのだ。この男からはそれ程圧倒的な力は感じられない。

「くっ!!」

もはや形振り構ってはいられない。

互いに刃を合わせながら、相手の性格や戦闘能力等を分析し、攻略法を見出すといった余裕は、今のルキアには無い。

この男が構えを取る前に、不意打ちでも何でも良いから仕留めるべきだろう。

動きを悟られぬ様に意識しながら、ルキアは振花を後方へ引き絞り、投擲の構えを取った。

靈圧の放出も極力抑えつつ、穂先へ水を集束させる。やがてそれは円錐状へと姿を変

え、ルキアの周囲の大気を巻き込みながら高速回転を始めた。

例えるのであれば、それはドリル。只管に敵を貫く事に特化したその殺傷能力は極めて高い。直撃せずとも、掠めただけでも相当なダメージを与えるだろう。

無論、この技は咄嗟の思い付きであり、名は無い。

先程アールニーロを仕留めた投擲技の上位版と考えれば良い。

仮定ではあるが、この男は彼より階級が上なのだ。流石にルキアも同じ技で仕留められるとは思えなかつた為、少々工夫を凝らしたのだ。

——頼む、決まってくれ。

そう祈りながら、ルキアは男の頭部目掛け、渾身の力で振花を投擲した。

真正正銘、現状で持てる全ての余力を注ぎ込んだ一撃だ。これで決まらなければ敗北は必至であつた。

「な…!?!」

その必死の思いが通じたのか。振花の穂先は吸い込まれる様にして、男の頭蓋へと向って行く。

直前に気付いたらしい。振り返ると同時に、その男の口から驚愕の声が漏れていた。

実に呆気無く、穂先は男の頭部を貫き、水のドリルによって完全に粉碎される。血と肉片を撒き散らしながら弾け飛ぶ様子は、まるで先程のアーロニー口の最期の焼き増しだった。

「やった……か……!!」

全身をふら付かせながらも、ルキアは安堵する。

そして同時に謝罪する。名も語らせぬ内に仕留める形となった、この男に対し。

——それが不要であるとは思ってもせずに。

「……えっ？」

ふと、ルキアは違和感を感じた。自身の胸の中心部に。

本来であれば無い筈の、冷たく硬質な異物が入り込んでいる様な。

視線を下に移し——絶句する。

其処にあったのは、鮮血で紅く染まった刀身。

「——その咄嗟の判断と実行力…確かにアールロニー口を斃しただけはある、と言うべきでしょうか」

背後から発せられた、つい先程聞いたばかりの声。

振り向いて確認したい所だったが、もはやルキアにはその力すら残っていないかった。

「ゴ…フ…」

「ですが残念。あの程度では、私に通用しません」

揺れ始めるルキアの視界。その中には、アールロニー口の傍に立ち、頭部を弾けさせて絶命した筈の男の遺体は存在していなかった。

やがてルキアの胸部より、その刀身が引き抜かれる。

傷口からは鮮血が溢れ、口からも血を吐き出しながら、全身から崩れ落ちた。

袖白雪と振花、二人からの必死の呼び掛けが、そんなルキアの内で響き続けていた。

「…どうやら名乗る必要は無さそうですね」

力無く倒れ伏すルキア。彼女を中心に、地面の砂には血の染みが広がって行く。それを見下ろしながら、男——第七十刃、ゾマリ・ルルーは冷淡に言い放った。

「……ヒュー……ヒュー……」

「誇りなさい。下位とは言え、十刃の一人に勝利出来た事を」

ゾマリは斬魄刀の血を払い、諭す様にして言う。

そして虫の息であるルキア目掛け、更に構えを取った。

狙うは首。何故なら敵の死を確定させるには、首を落とす以外に無いのだから。

「そしてさようなら……か弱き死神の娘よ」

——藍染に齒向かう者は、誰一人として容赦しない。その理念を絶対とするゾマリの目に、迷いは無かった。

紆余曲折あつたが、何とか戦いに勝利した一護。

正解する前に負つた怪我もそれ程大事無く、このまま先に進んでも問題は無いと思われた。

だが其処で一護は悪い癖である、甘さとも取れる優しさを發揮した。眼前で仰向けに倒れているドルドーニに対して。

敵であるにも拘らず、此方に的確な忠告を与え、行動を窘めただけでなく、正々堂々とした勝負を仕掛けて来た生粋の武人。

御蔭で自分が不要な意地を張っていた事を自覚出来たし、緩んでいた精神も引き締まった。更に自身の力に対する扱い方も再認識し、この先の戦いに活かせる様になつた。

この借りは返しても返し切れない。

だからこそ、一護はこのままドルドーニを放置して先に進むのは憚られた。

最後に与えた一撃も、致命傷までは至っていない筈である。

だが重傷な事に変わりは無い。

如何したものかと、一護は悩んだ。自身に回道は使えないし、怪我に使う薬といった物も何も持ち合わせていない。

——この場にあいつが居てくれれば。

思い浮かべたのは、冷静沈着に用意周到という言葉が最も似合うであろう男——雨竜だ。

戦闘時に用いる小道具から始まり、治療用具も一通り常備しているらしく、彼ならば応急処置程度は軽く熟せる筈だ。

だがその性格上、一護の行動にまず反発するだろう。しかしドルドーニの善性を知れば、渋々ながら首を縦に振る可能性が高い。判り辛いが、雨竜も大概御人好しなのである。

だがそんな悩みを解決したのは意外な人物。勝負が付いた瞬間、またしても一護の腹部に突進をかましたネルだった。

話によると、彼女の唾液には微弱ながら治療効果があるらしい。

一護は少々迷ったが、結局ネルに治療を頼む事にした。

その結果が——今の状況だった。

「ええい！ 止せと言っているだろうにお嬢ちゃん!!」

「ふあ？ まだ治療は終わってないっすよ？」

仰向けの体勢だった筈のドルドーニだが、現在は上体を起こし、右手を伸ばしてネルの頭を必死に押し返している。

その様子からして、意外に元氣そうだ。良く見ればその腹部の傷は出血が止まっており、それどころか塞がり掛けている。肩の傷も同様だ。

経緯を最初から説明すると、まずネルは意識の無いドルドーニの全身に大量の唾液を吐き掛けた。

極めて緩やかな速度ではあるが、徐々に傷が治って行く。

一護は顔を引き攣らせ、内心ではやや感心しながらそれを眺める。自分に受けろと言われれば断固として拒否するであろう、その光景を。

そしてある一定まで回復した途端、遂にドルドーニが意識を取り戻し———少女に唾液を掛けられているという、自身の置かれた異常な状況に気付いた。

「ただのヨダレであれば百歩譲って良しとしよう!! だが今お嬢ちゃんの出しているそれはヨダレでは無い!! ゲロだ!!」

ドルドーニが先程からネルの治療を拒否しているのは言葉通りだった。

通常、唾液の分泌速度と量には限度があり、重傷者を治療するには圧倒的に足りない。ネルの場合、通常では有り得ない量の唾液を現在進行形で出し続けている。だがドルドーニ程の怪我を治すにはそれでも不十分だった。

其処でネルは切り札を切る。それは嘗て自身が独自に編み出した「唾液を効率的に出す方法」である。

口の中に手を突っ込み、奥の口蓋垂こうがいすいを指でこねる事で、大量の唾液を吐き出すという、根本的に間違っている方法。

一般常識で考えても即座に判るだろうが、まずそれで出るものは唾液では無く嘔吐物。液体だけで見ると胃液である。

如何考えても治癒効果は無いだろう。逆に悪化しそうだ。

実際、先程から酸味のある香りがドルドーニの周囲に漂っている事から、別な被害も発生していた。

「いいじゃねえか、実際には治ってんだしよ。ワガママ言うなってドン・カポータ」  
「ドルドーニだと言っているだろうに!! 何だその雄牛トロウと戦っていそうな名前は!」

一護は呆れ顔で言う。またしてもその名前を間違えながら。

ドルドーニは残り少ない体力をネルを押し返す事に注ぎ込んでいる為、余裕は殆ど無い。にも拘わらず、根っからの芸人体質故か、一度も嘔まずに見事なツツコみを返して見せた。

「…まあ大人しく治療されとけよ、ドン・ルーニ」

「掠つてる…様なそうで無い様な…ツ!!」

実を言うところの一護、多少長かったり言い難そうな名前は覚えられないという、面倒な病に罹っていたりする。

現に此処に来るまでの道中、ドンドチャツカの名前を思い出せなかった場面もあった。

それに加え、稀に知らない人物の名前を勝手に想像して呼ぶという、当人にとっては傍迷惑な癖まで持ち合わせている。

この場合、後から正式に名乗り出ても手遅れ。被害者は一護と対面する度、毎度の様にツツコみを入れる羽目になる。

現状に於いては、先にドルドーニが名乗ったにも拘らず、それを完全に覚え切れず——その穴を勝手な想像で補完して出来上がったのが、ドン・パニーニという名前だった。

一度強く根付いてしまえば、修正するのは難しい。つまりはそういう事である。

「とりあえず “ドン・” の部分から離れ——いや待てお嬢ちゃんそれは拙いやめ……やめてえええええええ!!!」

「オロロロロロロオオオ」

一向に名前を間違ひ続ける一護に対し、何とか修正を試みるドルドーニ。たがそれは途中で止めざるを得ない状況へと陥った。

何時の間にやらネルが再び自身の口の中に手を突っ込んでいたのだ。

しかも様子がおかしい。その喉は異様なまでに膨張し、コポコポと得体の知れない音を発している。

だが気付いた時には全ては遅く、無情にもその手が抜かれ——遊撃の間全体にドルドーニの悲鳴が木霊した。

場が静まったのはそれから数分後。

完全ではないが、ドルドーニの腹部の傷は殆ど塞がっていた。その事から、如何やら唾液以外でも治癒効果はあったらしい。

——相変わらず酸味のある香りが周囲を漂っているが、それについては触れないで置こう。

「…敵である吾輩を治療するとはな。紛れも無くこれは愚行だぞ坊や」

再び仰向けとなった体勢で、ドルドーニは静かに一護を窺めた。

一護はそれに対し、不貞腐れた様な表情を浮かべながら返す。

「…例え敵でも、俺は絶対に殺さねえ」

「不殺とは…何たる不相応な信念か。そういうものは吾輩を圧倒出来る様になつてから語りたまえ」

「余計なお世話だ。負けた奴が今更ゴチャゴチャ言つてんじゃねえよ」

そう言うと、一護は顔を逸らした。

言われなくても解つていると言わんばかりの、実に若者らしい反応に、ドルドーニは

苦笑した。

殺し殺されが基本の戦場に於いて、不殺を貫くというのがどれ程困難な事か。敵を殺すのと、致命傷を避けた上で無力化する。其々に求められる実力は全く異なる。

前者に必要な力が十とすれば、後者には二十から三十。つまり二倍から三倍は求められるのだ。

普通なら窘めるべきなのだろうが、ドルドーニは不思議とその意欲が湧かなかつた。代わりにその行く末を見てみたくなつた。

常に逆境に囚われながらも、決して折れる事無く乗り越えてきた一護。

情報だけとは言え、そんな彼の強さを知るドルドーニは思った。

「甘いな、まるでチョコラテだ」

「……………」

「その甘さが何処まで通用するか実に見ものよ」

——ぬかしてろ。

一護からの反応は無し。だがその態度には出ていた。

皮肉を口にするまでに回復したドルドーニに、もはや用は済んだと判断したのだらう。

一護は立ち上がり、近くのネルを呼ぶと、即座に踵を返す。その先は出口。虚夜宮内部の中心へと向かう道へと。

「おっと、一つ聞かせてくれ坊や」

「…んだよ」

直後、ドルドーニは上体だけを起こすと、その背中を呼び止めた。

至極面倒臭そうに、一護は振り向く。

下らない内容なら無視するぞと、その表情で語りながら。

「十人居る十刃の内、最も強い者は誰だと考えている？」

「…は？ そりゃ一番目に決まってるんだろ」

——何を馬鹿な事を聞いているのか。

一護は困惑した。

そんな彼を尻目に、ドルドーニは笑みを浮かべながら言葉を繋ぐ。

「残念だが…それはハズレだよ」

「なっ!!? そいつはどういう意味だよ!!」

一護は問い返した。

その顔には明らかに動揺と焦燥が浮かんでいる。

「吾輩からしてみれば…十刃最強を名乗るに相応しい者は一番でも、ましてや二番でもない」

ドルドーニは感慨深く語る。そして思い出す。あの夜に直接対面して感じた、夢や希望など欠片も存在しない、圧倒的な力に押し潰される絶望感を。

無論、藍染程かと問われれば返答に困る。確かにカリスマ性は劣っているのは事実。だが少なくともその実力については、彼の足元にも及ばないという事は無さそうに思えた。

だがあくまでこれは直感。だがドルドーニにとっての十刃最強は、只一人だけだった

「…一体誰なんだ、それは？」

「坊やも知って居る筈だ。巨大な得物を携え、眼帯を付けた長身の破面の事を」

「——ッ!!」

その者の特徴を聞いた一護は、それに心当りしかなかった。

正にその者こそ、虚圏侵入前に喜助から念入りに説明を受けた、最も注意すべき破面の内の一人だったのだから。

「階級は第5十刃、名はノイトラ・ジルガ。吾輩の知る限り、最も十刃最強に相応しい男だ」

そう語るドルドーニの表情は、何処か誇らしげに見えた。

直後、一護の傍に居たネルが唸り始めた。

見れば両手で少し頭を抱えている。

「ど、どうしたネル？」

「うゝ…なんか少し頭が痛いっス」

一護が心配そうに声を掛ける。

だがそれ程酷くは無かつたらしい。

数秒後、ネルは何でも無いと言つて笑みを浮かべると、一護の頭部に飛び付いた。

「…そろそろ行きたまえ。追手が掛からん内にな」

「…わかつてるよ。じゃあな」

ネルを安定した体勢で頭に乗せると、一護は駆け出した。

その顔はまだ何かを言いたげだったが、如何やら？み込んだらしい。

二人の後ろ姿が、出口の奥へと消える。

それを見送つたドルドーニは一旦目を閉じると、深い溜息を吐いた。

「…何とも、先が思い遣られる坊やだ」

最後に急かす様な事を言ったのには理由がある。

一護を死なせたくは無かったからだ。

全力を出した自分を打ち破り、それで且つ無限の可能性を持つあの英雄の卵が、簡単に潰れる様を見たくは無いと。

「——随分とボロボロじゃねえか、ドルドーニ」

そしてそれを齎すであろう存在が、間もなく此処に現れるであろう事も、ドルドーニは察していた。

「…面目無い」

音も無く自身の近くに降り立ったノイトラの第一声に、ドルドーニは苦笑を浮かべながら答えた。

——此処まで近付かれて初めて察せる程とは。

正直、今の今までノイトラの接近に気付いていなかった。

移動中は霊圧を極限まで抑えていたのだろうと推測出来るが、明らかに以前よりもその隠密性が上がっている。

進化が止まらないノイトラに、ドルドーニは恐怖を通り越して呆れしか感じなかった。

「謝罪させてくれ。少し口を滑らせてしまった」

「…黒崎一護にか」

「これでも口は堅い方だと思っていたのだが、な…」

懺悔する様にしてそう零すドルドーニの姿に、ノイトラは暫しの間考える素振りを見せる。

「もしや自分の情報を暴露したりしていないだろうか——等といった動揺は一切無い。

寧ろ純粋に何を話したのか、その内容が気になっていた。

虚夜宮内の情報か。破面達の互いの関係か。それとも織姫の居場所か。

考えれば幾らでも候補は浮上する。

それに付き合いが長い分、ドルドーニはノイトラにとっては余り広められたくない情報も持つて居る。

「別に構いやしねえよ」

だがノイトラは気にしない事にした。

ドルドーニへの信頼故に。

流石に彼とて、仲間を不利に持ち込む様な真似はしないだろうと。

例え情報を漏らされていたとしても、一護ならば問題は無い。これが喜助であれば何かしら対策を取ったりするとは思うが。

少し前までのノイトラは、これ程までに他者を信用する事は無かった。

味方は己自身のみだと勝手に自己完結し、常に周囲を疑って掛かる。そんな愚かしい生き方を本気でしていた。

己の身に降り掛かった、憑依という通常では有り得ない事象。そしてその結果で置かれた環境が、ノイトラをそうさせたのかもしれない。ある意味致し方無いだろう。

だがそれはもう止めにした。

自身がこの世界に於ける未来を知っている事を遠回しの形で告白し、それを全面的に信じてもらえたその瞬間から。

それはつい最近の出来事だ。そしてその相手は二人。

以前より生き残る為の計画立てをしていたセフィーロと、何故か後で加わった口力で

ある。

チルツチは別だ。一応計画には巻き込んではあるが、詳細までは話していない。

身近に存在していながら、肝心な部分で仲間外れにする。中々に酷い気もするが、勿論理由はある。

それはチルツチ以外にも言える事だが——この世界の住人は皆、結構なレベルで口が軽いからだ。敵に対しては更に顕著となる。

セフィーロとロカに話したのは、彼女達がそれに当て嵌まらなかったからに過ぎない。前者はノイトラと似通った感性を持っており、後者は極めて寡黙且つややコミュ障故に心配無いと。

「…そうか。して、敗者たる吾輩を如何する。始末するかね？」

淡泊な反応に拍子抜けしつつ、ドルドーニは更に問い掛けた。

その顔には挑発的な笑みが浮かんでいる。

態度は勿論だが、内容からして、明らかに心にも無い事を言っているのが丸判りである。

「んな事するか。オラ、馬鹿言っていないで立てよ」

ノイトラはそれを軽く流すと、右腕を下に伸ばした。

その予想通りな反応に苦笑しつつ、ドルドーニはそれを掴み取ると、支えにして一気に立ち上がる。

流石に帰刃までとはいかないが、普通に戦闘自体は出来そうな回復振りだ。

史実の様に此処で葬討部隊と対峙したとしても、一進一退の激闘を繰り広げそうな程に。

「ガンテンバインも負けたみてえだし、途中で拾ってく」

そんなドルドーニの状態を確認した後、ノイトラはそれ以上の手を貸す事無く、小さくさと移動し始める。

怪我人に対して実に冷たい態度である。

だが現状に於いては正解だった。

元よりドルドーニは自分自身が弱っている時、余り他者の手を借りる事を良しとしない。あくまで自力で立ち上がらんと奮起し、その上で不可能だった場合、初めて助力を

乞う。

そしてノイトラは既にドルドーニの状態を確認済みである。

なので余り気を遣う必要は無いと判断したのだ。

以前から考えている事だが、十刃としての立場もある。

格下に対し、余り下に出る様な事をしている姿を外部に晒すのは宜しく無い。

他の破面にこれを見られれば、確実に舐められるし、最悪は利用される。

「そしたら纏めて治療室で——ッ!?!」

次の瞬間、ノイトラは言葉を途中で切る。

その顔は驚愕の色に染まっていた。

次々と脳内に浮かび上がって来る映像。

それは誰かの視点だった。

対峙するのは、三又の槍を構えるルキア。

この時点で既に、ノイトラは凄まじく混乱していた。

——何故に振花。袖白雪何処行った。

同時に気付く。これはア—ロ—ニー口の“認識同期”だと。

焦っていたのか、それとも余裕が無かったのか。それ等の映像は断片的で、しかも内容の後半戦。それに至った肝心な経緯である序盤がすっかり欠けている。

取り敢えず現時点で判断出来るのは、如何いった訳かルキアは袖白雪が使えなくなり、代わりにアローロニーロの持つ振花を奪って使用したという事。

必死に情報を整理して行くノイトラへ、不足していた情報と共に、決着の場面の映像が届いた。

「…勝ったのかよ、オイ」

まさかまさかの、ルキア快勝である。ノイトラは啞然とした。

史実では相討ちに終わった筈である。なのにこれは如何いった訳なのか。

序盤までは通常通りの劣勢なのだが、その後の展開が正に劇的の一言。

絶体絶命の窮地から、予想の斜め上を行く形で新たな力を得て、逆に敵を圧倒する。

——これではまるで主人公の様ではないか。

だが其処でノイトラは思い出す。

確かルキアは一護に次ぐもう一人の主人公であり、場合によっては補正が働いても何らおかしく無いではないかと。

「これは…何とも予想外な…!!」

同じく情報を受け取ったのだろう、ドルドーニの驚愕する声で正気に戻ったノイトラは、探査神経を発動する。

集中させるのは、勿論第九十刃の拠点周辺。

すると如何だ。華々しい逆転勝利を飾った筈のルキアの霊圧は、この戦いで消耗したのか、一気に下降していた。

そんな彼女に高速で接近する——ゾマリの霊圧が感じ取れる。

ノイトラは状況を理解すると同時に焦り始めた。

このままでは確実にルキアが殺されてしまうと。

ゾマリは戦いに対し、極めて厳しい考えを持っている。

敵が如何に瀕死状態であろうと、止めを刺す事に躊躇いは無い。これが信仰して已まない藍染に歯向かう者であれば尚の事。これが信仰して已ま

だが今のノイトラには何も手出しは出来無い。

出来るのは、只ルキアの無事を祈るだけ。

「ぬ、大丈夫かね？」

「…ああ」

仲間を失った事で動揺したとても思われたのか。立ち止まったノイトラへ、ドルドーニが気遣う様にして声を掛ける。

無表情を保ちながら、ノイトラは冷静に返す。

——早く来いお義兄ちゃん。最愛の義妹の窮地だぞ。

内心でそう祈りながら、ノイトラはドルドーニを引き連れ、その場を立ち去った。

織姫は自身に宛がわれた宮にて、部屋の中心に敷かれたカーペットの上に座り込み、

窓の外を眺め続けていた。

だが彼女は何処と無く居心地が悪そうな表情を浮かべており、しかもその身体は先程から頻りに身動ぎしている。

そして時折視線がある一定の方向をチラチラと覗き見ている。

それを辿つてみると、壁に背中を預けた体勢で静かに佇むウルキオラの姿があつた。

相変わらず両手を袴の側面へと突つ込み、その無機質な表情からは何を考へているのか全く読み取れない。

「…何だ」

「な、なんでも無いです…」

視線が煩わしかったのか、ウルキオラが問い掛ける。

まさか気付かかれていますとは思ひもしていなかつた織姫は、咄嗟に誤魔化した。そしてウルキオラに聞こえない様、小声で呟いた。

「た、助けてノイトラクくん…」

織姫が真つ先に思い浮かべたのは、ウルキオラと同様に自身の世話役を任されているもう一人の人物。

見た目とは裏腹に、此方を見下す事無く普通に接し、さり気無く親切を働いてくれる不良系男子。

正確に言うとなイトラは圧倒的に年上の為、男子という認識は間違いである。

だが其処は流石の織姫。彼女は何の躊躇いも無く、自身より二つ三つ上の者に対する接し方をしていた。

妙に畏まられるよりは楽だとして、当人が特に何も言わなかったのもそれを定着させる要因となっていたのだが。

「うう〜…」

「…何を唸っている」

実はウルキオラが此処に居る理由。それは織姫の護衛の為だ。

最たるものは、今彼女に最も敵意を抱いているであろう——ロリ・アイヴァーンか。一応ノイトラが直接注意したという事は聞いていた。だが本当にそれが効くか如何かは定かでは無いとも、最後に付け加えられている。

勿論、ウルキオラは藍染にその事を進言した。場合によっては葬討部隊に肅清してもらわねばならないのでは、と。

だがそれに対する返答は予想に反したものだ。

ロリ本人には特に何もせず、暫くは織姫の周囲を警戒する程度に留めてほしいと、そう指示が出されたのだ。

今に始まった事では無いが、理解が及ばなかった。

織姫の能力は、藍染の目的を達成させる為には必要不可欠な要素の筈。なのに何故その様な淡泊な対応を取るのかと。

——何を馬鹿な事を。

だがウルキオラはそんな自身を叱責した。

藍染に対し、その様な考えを抱く事自体が烏滸がましい。己は只、彼の命令を忠実に熟せば良いと。

「何も無いなら黙れ鬱陶しい」

「い、い」「メンなヤツ」

原因は貴方なんです——等と抗議出来る筈も無く、織姫は再び沈黙の支配する息

の詰まる様な空間へとその身を置く事となった。

——何でも良いから、如何かこの状況を打破出来るものを。

織姫がそう願った時だった。

「え…これって…!？」

「何…!？」

二人は全くの同時に声を上げた。

言わずもがな、理由はア—ロ—ロ—ロの“認識同期”である。

直後、織姫は喜色満面の笑みを浮かべた。

脳内に映像が浮かんだのかは不明だが、そんな事など気にならなかつた。

大切な仲間の一人が、強大な敵を見事打ち破つたのだ。喜ばない筈が無い。

「朽木さん…良かったあ…!!」

今にも飛び跳ねそうな雰囲気を見せる織姫を余所に、ウルキオラは未だに驚愕していた。

情報では、朽木ルキアの実力は上位席官クラス。大目に見積もっても副隊長に匹敵するか否かといった感じだ。

間違つてもアール・ニーロに勝利出来るとは思えない。

ふと、再び視線を織姫へ戻す。

彼女は何か祈るようにして、両手を胸の中心部に置いていた。

その様子を見ながら、ウルキオラは考える。

——これも全て、この女の仲間を信じる心が齎した奇跡だとも言えるのか。

以前であれば馬鹿馬鹿しいと切り捨てていただろうが、今のウルキオラはそれが出来なかった。

ルキア以外に意識を向けてみると、一護を含めた二名は其々十刃落ちに勝利しており、それは妥当な結果でもある。

戦闘続行しているのは残り二名。部外者も何名が混ざっている様だが、それは余り気にしなくとも良いだろう。

「だが……奴等の快進撃も其処までだろう」

「え……？」

ウルキオラの眩きに、織姫は振り返った。

「ノイトラが動いている。この時点で既に結果は見えた」

「…ノイトラ君が？」

織姫はイマイチ理解が及ばなかった。だから如何したというのかと。

この時、彼女は失念していた。

温厚な振る舞いをするノイトラと接し過ぎた余り、彼本来の立場とその実力の高さを。

「…まだ解らんか。奴等如きではノイトラの相手にならんと云っている」

「っ……！」

「無論、あの黒崎一護でさえもな…」

呆れを含んだ様に、ウルキオラは補足する。

織姫はやつと其処で思い出した。虚夜宮に連れて来られる前に幾らか知った、ノイトラの強さを。

「で…でも…」

確かに彼が本気になれば、一護達の勝機は限り無く薄くなるだろう。

だが織姫は密かに期待を抱いていた。

あれ程優しい人なら、もしかすれば一護達を蹴散らした後でも、殺さずに見逃してくれるのではと。

——だがその甘い考えは直後に吹き飛ばされる。

「温情を期待している様なら止めて置け」

「…えっ？」

自身の考えを読まれた事に、織姫は動揺する。

その反応から、ウルキオラは予想が当たっていた事を悟った。

同時に納得する。確かに最近のノイトラの態度を見れば、そう期待してしまっても致し方無いだろうと。

だが所詮それは仲間内に限定しての話。織姫に親身に接しているのは、彼女が正式に

虚夜宮の一員となったが故であり、当然一護達はその範囲に含まれる筈が無い。

「ノイトラが軟化した態度を見せているのは、貴様が同胞だからに過ぎん」

一護達が虚夜宮に侵入した時点で、ノイトラが独自に動き始めたのは察知していた。だからこそ、態々自分が現場に赴く必要は無いと、ウルキオラは判断した。

——正直言うのと、一護については直接相手をしたという思いもあつたが。

「しかも奴は戦闘狂の気質もある。例え奴等が奮闘を見せても、逆効果にしかならんだろう」

階級は中堅でありながら、未解放の時点で自身が危機感を抱く程の実力。もしノイトラが野心家であれば、数字一つ違いの自分は下剋上を警戒すべきなのかもしれない。

だが彼の態度を見る限り、その心配は杞憂だと悟った。

自らの責務を十二分に理解し、任務は忠実に熟し、例え相性が悪い仲間でも確り面倒を見る。

味方として考えると、これ程頼りになる者は居ないだろう。

肝心のNo. 1であるスタークは、実力はある癖にやる気は皆無。

バラガンは自らを王だと公言し、何かと皮肉る様な言動を取ったり等、昨に藍染への敵対心を隠していない。

比較的忠誠心が高いハリベルについては余り問題無い。だがその反面、仲間や自らの従属官を捨て駒の様に扱われればどんな行動に出るか判らない危険性を孕んでいる。

上位十刃勢がこれである。これでは余計にノイトラの真面目振りが貴重に思えるのも頷ける。

ウルキオラは意外と不安定な十刃達の内情を再認識した。

「そんな……こと——」

「無いと言いつ切れまい。少なくとも、ノイトラとは俺の方が付き合いが長い。あいつの思考回路と行動理念は大凡把握している」

——気丈なだけで無く、案外強情らしい。

未だに反論の意志を見せる織姫に、ウルキオラは小さく溜息を吐いた。

「それとも仲間達がノイトラに勝利するなどという、ありもしない未来を信じていると

？ 貴様等御得意の…心の繋がりがやら、絆の強さでか？」

「…ッ!!」

「随分と甘く見られたものだ。そんな不明瞭なもので戦いに勝てるのなら、今貴様が此処に居る事は無かつただらうに」

—— 下らない。

直接口には出していないが、織姫には口外にそう言っている様に感じた。

自分達が何より大切に、そして信じているものを馬鹿にされれば如何なるか。取り敢えず想像に難くない。

案の定、織姫の表情に怒気が浮かぶ。

だが所詮はそれだけだ。力の無い者が感情的になつたところで何も変わりはない。

「…ほうっ…」

それでも織姫は怯む事無く、発言者を睨み付けた。

ウルキオラはその胆力にやや感心しつつ、更に言葉を繋がんと口を開き掛け——突如響いた扉を数回叩く音によって止められた。

「失礼致します。ウルキオラ・シファー様は居られますでしょうか」

「…何用だ」

扉越しに聞こえて来たのは、織姫の宮を担当している——口元以外を全て仮面で覆い隠した雑務係の男の破面——ファエナ・ボンドの声。

御蔭ですっかり会話が途切れてしまったが、特に気にも留めた様子も無く、ウルキオラは返事を返す。

「藍染様が御呼びです。至急、自室まで来てもらいたいとの事」

「…直ぐに向かう」

状況的に見て、今織姫の傍から離れるのは拙い。

だが藍染からの召集である。如何にか極力短時間で済ませる様に尽力するしか無いだろう。

ウルキオラは未だに鋭い視線を向けて来る織姫に背を向け、部屋を出る。

そしてふと気になった事を、ファエナへと問い掛けた。

「俺以外に召集を受けた者は？」

「コヨーテ・スターク様です」

「…何だと？」

特に緊迫しているとも言えないが、この現状で上位十刃の二名を——しかも片方は  
No. 1を集める。

ウルキオラは疑問を抱いた。

藍染の真意が読めないのは今に始まった事では無いが、今回は行動が昨過ぎる。

通常であれば、何人にも悟られぬ様に手回しを行い、気付くのは何時も全てが終わった後。

「…何か問題でも？」

「いや、気にするな。一先ず貴様は俺が戻るまで、この宮の周辺を警戒している」

「は、はあ…承知致しました…」

そう言い残し、ウルキオラは早足でその場を去る。

残されたファエナは暫しの間首を傾げていたが、取り敢えず命令に従って周囲を巡回し始めた。

真面目に宮の周辺の通路を巡回し続けるファエナ。

その手には緊急事態を知らせる為の携帯型スイッチが握られており、異常があれば直ぐに周囲へ知らせる事が出来る状態にある。

それはそうだ。例え巡回中に敵と遭遇したとしても、戦闘力の無い雑務係の破面が如何こう出来る筈も無いのだから。

そしてファエナの懐には、織姫の居る部屋の扉の鍵が仕舞われている。他に所持している者は世話役であるノイトラとウルキオラのみだ。

ちなみにあの扉は外側のみからしか鍵を開けられず、破壊する以外に織姫の脱走は不可能な仕様となっている。

「…ウルキオラ様も、中々に困った御方だ」

——こんな時、ノイトラが居てくれれば心強いのだが。

ファエナは仮面の下で緊張した面持ちを浮かべる。

彼もノイトラの変化を知る一人であり、織姫の宮の担当となつてからは余計にその優しさに触れる機会が増えた。

侵入者が居るこの状況を考慮すると、下手すればこの命令は無茶振りにも等しいものにも思える。

正直、恐怖心を抱かずにはいられなかった。

だが直後に考え直す。

ノイトラは十刃の中でも多忙だ。只でさえ普段から御世話になつてゐるのに、そんな人に一々頼つてばかりでは申し訳無いと。

「甘えてばかりはいられないな…よし！」

ファエナは気合いを入れると、先程よりは軽い足取りで巡回を再開した。

通路の曲がり角へ消えると、密かにそれを陰で覗いていた者がその姿を現した。

「…行つたみたいね」

「ちよつとロリ！ だから止めようつて!!」

その正体はロリ。先程からずっと、ファエナが立ち去るのを今か今かと待ち構えていたのだ。

次に戻つて来るまでには未だ時間がある。そう判断した彼女は、通路の曲がり角から一歩踏み出す。

後ろから慌てて声を掛けるのは、相棒のメノリ。

彼女はロリの右腕を掴み、先に進むのを制止せんとしている。

「うるさいわねッ！ バレるでしょうが!!」

「そう言うくらいなら初めからしなければ良いじゃん!! 何でそこまでするの!?!」

ロリの目的——それは報復だ。

あの愛しの藍染に氣に掛けられているにも拘らず、それをさも当然と言わんばかりに、能天氣に過ごしている織姫への。

当然だが、所詮それは嫉妬から来る歪んだ視点からの印象であり、眞実は大きく異なる。

織姫自身は藍染に氣に掛けられているという実感は無く、寧ろ対面するだけで恐怖しか覚えていない。普段の態度が能天氣に見えるのも、第5十刃グループが氣さくに接する事が出来る様に尽力した影響で、精神的に安定していた為だ。

感情的になるが余り、視野が狭まっているロリにはそれが判らない。

「氣に食わないのよ…あの女が！ あんただってそうでしょメモリ!？」

「それは…」

「人間のクセに…なんなのよあの態度!! ムカつく!!」

突如として問われたメモリは、思わず口籠った。

彼女は確かにロリと同様、藍染へ思慕の念を抱いている。

ならばほぼ間違いない、ロリの考えに肯定を示すだろう。

以前までは——の話だが。

実を言えば、その想いは今や殆ど薄れていた。口籠ったのはその為である。

目が覚めたと言い換えても良い。

噂や見た目とは裏腹に、本人は全くの人格者という、ノイトラの見せた衝撃的ギャップに見事その心を打ち抜かれて。

どちらかと言えばそれによつて生まれた感情は、異性に惚れた腫れたと言うより、家族に向ける親愛に近い。

メノリにとつて藍染は、所謂アイドルの様な存在だった。

決して手の届かぬ場所に居ると理解していながら、なまじ直接会う機会がある故に——  
——つい欲が出た。

只単にロリはそれを拗らせたに過ぎない。

ノイトラの後を付いて回る様になり、ロリや藍染と少し距離を置いた結果、メノリはそれが理解出来た。

「まあ……噂だとあのグリムジョーの左腕を再生させたのはあの女らしいし、その能力は確かに本物なんでしょうね」

「……そうだね」

「きつと藍染様はその治癒能力を求めたのよ」

いきなりトーンを下げて語り始めるロリ。

メノリはそれに相槌を打ちながら、その態度に妙な寒気を感じていた。

「…でもそんなにスゴい能力だったら——流石に自分自身の傷も治せないって事は…  
ないわよね？」

「っ!？」

ロリはそう言うのと、その目に狂気を宿しながら、口元に笑みを浮かべた。

彼女の言いたい事はこうだ。

それ程の治癒能力を持つているなら、此方が幾ら暴行を加えて傷を付けたとしても、本人に直接治させれば良い。そうすれば証拠も隠滅出来るし、後は徹底的に脅しを掛ければ藍染にもバレる事は無いと。

極めて穴だらけな、そんな計画。

だが今のロリであれば、もしかすると成功する可能性があった。

ブレーキが無くとも、構わずアクセルを全開にして突き進む。そんな狂気を持つ者と

対峙すれば、大抵の者は反射的に怯む。

——この者なら、何を遣つてもおかしく無い。

例え立場的に周囲から守護を受けている者でも、まずその様な印象を抱く事だろう。そして散々痛め付けられ様が、脅しに屈し、告げ口する勇氣も失せる。

「安心しなさい。恐れればあたし一人でやるから。あんたは別に帰つてて良いわよ」

「——やだ」

「…は？」

想定外の返答に、ロリは素つ頓狂な声を漏らした。

そんな彼女の顔を、メノリは真正面から見詰める。

「藍染様を甘く見過ぎだよ。そうやって隠したとしても、きつとあの方は全てを見通してる」

その頭に浮かぶのは、ロリが暴拳に出た場合を想定してノイトラが与えてくれたアドバイス。

何故止めねばならないのか。一体どんな結果を齎すのか。思い付く限りの可能性を全て、真剣な表情で伝えられたのを覚えている。

藍染が態々指示を出してまで確保させた織姫を、至極自分勝手な理由で害する。謂わば藍染の所有物を傷付ける事と同等。

当然、その罪は極めて重いだろう。それこそ、只単に御叱りを受けるだけでは済まない。

処刑を宣告されても何らおかしくは無いと、ノイトラは説明した。

——そんな最悪の未来は、何としても回避しなければ。

ロリの右腕を掴む手に力を籠めながら、メノリは更に言葉を繋ぐ。

「あの女を庇って言ってる訳じゃない。私は…ロリの事が心配なの」

「……メノリ……」

その鬼気迫る表情に、ロリは正気を取り戻した。

確かにそうだ。自分は何を思いついていたのだと。

考え直してみると、この襲撃計画は藍染を下に見ている様にも取れる。一介の破面でも簡単に欺ける程度の男として扱っているかの様に。

それは実に愚かしく、決してあってはならない考えである。

——何時の間にか自分は、頭の中で藍染の事を都合の良い男として作り変えていたのか。

今更ながらに自覚したロリは、その顔を青ざめた。

「私が言いたいののは、これだけ……」

「う……う……」

——もう十分だろう。

ロリの反応からそう考えたメノリは、その拘束していた右腕を解放すると、優しく微笑んだ。

「信じてるから、ロリ」

それだけ言うと、メノリはその場で踵を返した。

寂しさを紛らわさんが為に、自分の意志を捻じ曲げてまでロリに付き纏っていた面影は何処にも見られない。

其処には完全に自立した、一人前の女の姿があった。

残されたロリ。その頭の中では、先程からとある言葉が休み無く反響し続けていた。

——信じてる。

只その一言が、途轍も無く重く感じた。

「…なによ。べつに…あんたなんか…」

ロリは顔を俯かせながら、絞り出す様にして言う。

——信じて貰わなくても構わない。

だが最後に出る筈の言葉が、如何しても口に出せなかった。

言つてしまえば、自分の中で何かが失われてしまう。そんな気がして。

大虚時代から、ロリとメモリと何時も一緒だった。

破面となつて以降は、その刺々しい態度のせいで、ロリの周囲には誰も近寄らず、気

が付けば雑務係の破面達の中では完全に孤立していた。

だがメモリだけは違った。これまでと変わらず、何時も何時もベタベタと付き纏い続

けた。

ロリが此方が下らない癩癩で罵倒したり、殴り飛ばしても、諦める事無く。

「——ああ、そっか…」

ロリは其処で初めて気付く。

自分が最近苛立っていた理由は、織姫に対してだけでは無い。

何時も傍に居てくれた、唯一無二の存在であるメモリが居ないからだだったのだと。

——何と問拔けなのだろう。

苦笑しながら、内心で自分自身を軽く扱き下ろす。

「信じてる、ね…」

何と無しに、ロリはその言葉を直接口に出した。

すると次の瞬間——その顔が真っ赤に沸騰した。

「んなっ…なんでここであいつの事が思い浮かぶのよ!!?」

忘れたい過去のひとつとなっている——以前ノイトラと二人きりで行った遣り取り

を、ロリは思い出してしまったのだ。

しかもそれだけでは無い。

問題なのはその中で放たれた、ロリにとっては全く初体験で、ある意味ナンパとも取れる言葉。

—— お前は良い女だ。

今度はそれが頭の中で反響し始める。

「…ああああああアアもう!!」

次々と湧き上がる感情が制御を失い、混沌の極みへと陥る脳内。

遂に我慢の限界だったのか、ロリは突如として叫び声を上げた。

御蔭で些か落ち着きを取り戻せたのか、その声を切ると、彼女は身体の向きを反転。メノリが去って行った方向へと走り始めた。

「ちよつと付き合いなさいメノリ!!」

「へ…うわっ!!?」

案の定、そう時間も経たぬ内にメノリへ追い付く。

するとロリはそれを横から追い越す様にして動き——その途中でメノリの腕を掴んで引つ張り始めた。

「ろ、ロリ……?」

「鍛錬するわよ鍛錬!　なんか無性に身体を動かしたい気分なの!!」

「えええ!!　今からあ!!?」

「イヤとは言わせないわよ!!　ほら、シヤキツとしなさい!!」

成すがままのメノリだったが、色々吹っ切れたらしいロリの様子に、思わず笑みが浮かんだ。

——良かった。

自分の言いたい事を受け止めてくれたのだろう。

助言をくれたノイトラに感謝の念を抱きつつ、メノリはロリに合わせて駆け始めた。

二人が走り去った後、別方向の通路から新たに人影が現れた。

その影は一旦立ち止まると、何かを警戒しているのか、頻りに周囲を見渡す。

「…そつちか」

何も問題が無い事を確認したのだろう。

その影はロリ達が去って行った方向とは逆の——織姫の部屋へと向かって歩を進める。

とはいえ、未だに警戒心を捨てていないのか。やや急ぎ足ながらも、音を立てない様に気を配りながら。

「待ってやがれ黒崎、てめえを殺すのはこの俺だ…!!」

全身から殺意を滲み出させながら、その影——グリムジョーは口元を吊上げた。

## 第四十七話 邪淫と、蛇と、三日月の想定外

恋次と雨竜は今、戦場を第8十刃の拠点の宮へと移していた。

戦況は不利。先程から交戦中の猫背の破面——バスターラが突如として大量の虚達を影から生み出し、雪崩の如く物量を全面に出した戦法で二人を此処まで誘導。そしてその先で待ち構えていた——第8十刃、ザエルアポロ・グランツが参戦する。

「ふざけんな…ッ!!」

自称虚夜宮一の天才で研究者だと言う割に、その実力は極めて高かった。

幾ら斬撃を加えても、傷一つ付けられない程の鋼皮を持っている上、それ以前に殆どの攻撃が全く通用しない。尽くが余裕綽々な動きで躲され、防がれる。

「これが研究者の動きかよ?!?!」

攻撃の手を緩めぬまま、恋次は叫んだ。

ザエルアポロはその必死の表情を一瞥し、鼻で笑った。それはお前が弱いだけだと言わんばかりに。

しかもである。交戦から間も無くして、恋次は切り札たる卍解が使用出来無くなつていた。

以前グリムジョーに付き従つて現世へ侵攻し、恋次と死闘を繰り広げたイールフォルト。ザエルアポロは兄である彼に対し、秘密裏に録霊蟲を仕込んでおり、自宮にて事前に恋次の情報を入手していたのである。

それを元に解析を進め、見出した対策がこれ。卍解を解放する瞬間、外部信号を用いてその霊子構成を崩し、集束した霊圧を拡散させるというもの。

この仕掛けは宮全体に施されており、宮から抜け出す以外に逃れる術は無かった。始解では話にならない。だからと言って卍解も使えない。如何考えても詰みである。

本来なら其処で雨竜がすかさずフォローを入れる筈なのだが、生憎と今の彼にそんな余裕は無かった。

それは先程まで恋次達と交戦しつつ、この宮まで誘導したバスターラのせいだ。

依然として影から生み出される虚達は雑魚ばかりだが、この部屋へ移動した後は、その数が急激に倍增。物量を前面に出した戦法で、雨竜は瞬く間に恋次と分断されてしまったのだ。

特に深く考えるまでも無い。ザエルアポロは二人の連携を阻止し、各個撃破して行く心算なのだろう。雨竜はそう結論付けた。

厳密に言うと、ザエルアポロは恋次の事を正解の使える貴重な研究材料としか考えていない。確実にそれを採取したいが為、邪魔の入らない状況を作りたかったのだ。

史実であれば雨竜も恋次と同様、何時の間にか霊圧を解析され、"銀嶺弧雀"を出せなくなる筈である。

だが現状は異なり、ザエルアポロは別件で宮を外出していた為、雨竜の霊圧を解析する余裕は無かった。

——情報が集まるまで、初対面の相手とは直接対峙するのを避けるべき。

二人を分断したのにはそういった考えもあった。

此方が敗北するかもという考えは毛頭無い。だが自身が置かれた状況を鑑みるに、余り時間を掛ける訳にはいかないのもある。

何時までもモタモタしていれば、セフィーロの身柄を確保している事をノイトラに勘付かれてしまうかもしれないからだ。

如何に妨害装置で外部からの霊圧探知を誤魔化しているとは言え、直接治療室辺りに移動されてしまえば一巻の終わり。

——出来る限り早急に事を運ばねば。

そう内心で考えている辺り、今のザエルアポロは結構な勢いで焦燥に駆られていた。

「く、そ…!! 無事か阿散井!？」

「なんとか…なッ!!」

雨竜は何匹目かも判らない虚の脳天を矢で貫いて仕留めると、未だ大量に残る虚達の向こう側へ向けて声を上げる。

それに対して返答しつつ、恋次は始解状態の蛇尾丸を眼前の敵目掛けて薙ぎ払った。

「…ふん」

ザエルアポロは至極退屈そうに左手を振るい——その手に握る斬魄刀では無く、手の甲で蛇尾丸の刀身を打ち払う。

恋次は舌打ちすると、弾き返された刀身を歩き戻し、元の形へと畳む。

——やはり正解しないと話にならないか。

だが現状に於いて、それは不可能。

先程もザエルアポロの隙を見て、何度か解放を試みているが、やはり途中で霊圧が拡

散してしまふ。

正に八方塞。如何すればこの状況を切り抜けられるのか。

生憎だが、自分の頭脳ではとても思い付かないだろう。そう考えた恋次は、それが出来るであろう人物に望みを託す事にした。

構えを解かずに、その視線を横に移す。

其処では相変わらず大量の虚達が溢れ、その中を素早い身の熟しで駆け回り、虚を一匹一匹着実に仕留めて行く雨竜の姿が。

恋次の視線に気付いたのか、虚達の頭上を飛び回りながら、雨竜は顔を向ける。

そして弓を持つ右手とは逆の空いた左手。その人差し指を自身へ、そして次に天井へと向けた後、何度か上下させる。

恋次はその意味を何となく察した。雨竜が脳内に描いている目的等は不明だが、自身が取るべき行動は何なのかを。

「…飽きたね。もはやキミの斬魄刀の能力、攻撃のパターンは完全に把握した」

ザエルアポロは肩を竦めながらそう零す。

言葉通り、彼は先程から終始恋次の事を観察し続けていた。攻勢に出ず、只管待ちの

構えて攻撃を受け続けて居たのはその為だ。

パターンを完全に把握した方が、後々労力を掛けず楽に事を運べるとして。

「これ以上は無駄も無駄。観察する価値も無いよ」

「正解を使える死神を直接見るのは始めて。その為、ザエルアポロは何とか研究素材の一つとして確保したかった。傷も極力少ない、綺麗な状態で。」

だが恋次の暴れ具合を見る限り、それは厳しいだろう。  
致し方無いと、ザエルアポロは空いた右手を懐まで伸ばした。

其処に仕舞われているのは、研究素材確保の為に制作した麻醉薬の一つ。対象は中級大虚から下位十刃を想定しており、セフイーロを捕える際に使用した薬剤もこれだ。

流石に下位十刃と言えど、帰刃されてしまえば通用しなくなるが、未解放の状態であれば確実に効くと断言出来る程の自信作であった。

「さて…そろそろこの下らない遊びを終わらせようか。それでも僕は多忙なん——  
？」

ふと、ザエルアポロは一旦言葉を切った。

何を思ったのか、眼前の恋次が突如として蛇尾丸を持ち上げると、凄まじい勢いで振り回し始めたのだ。

——この期に及んで、一体何を考えているのか。

不審な表情を浮かべるザエルアポロ。

そんな彼に対し、恋次はやがて先程までと同様、斬撃を繰り返し始めた。首を狙ったらしい横からの薙ぎ払いを、また斬魄刀を握る左手で受ける。

直後、ザエルアポロは気付いた。左手から感じる衝撃から、僅かだが先程より威力が上がっている事に。

「オ、リアアアアアツ!!!」

だがこの程度でも、ザエルアポロを押し返すには程遠い。にも拘わらず、恋次は攻撃の手を緩めない。

その余りの猛攻故か、周囲に激しく砂塵が舞い、視界を遮り始める。半径二メートル前後の近場は大丈夫だが、それから先の遠方の様子を窺う事は出来無くなっていった。

ザエルアポロは念の為に受ける部分を斬魄刀へ変更しながら、恋次の行動の意図を考

察する。

——もしかして自棄にでもなったか。

下手な鉄砲も数を撃てばその内当たると言うが、現状がそれに当て嵌まる訳が無い。流石低脳は考える事が単純だ。そう見下しながら、斬撃の嵐を難無く弾いて行く。

「多少打ち込みを強くしたからといって、この僕に通用するだけでも？ 全く、理解に苦しむよ」

攻撃を弾きながら、やがてザエルアポロは恋次に向つて足を進め始める。

恋次は大きく跳躍すると、大きく振り被つた蛇尾丸を振り下ろした。

「だから無駄だと、何度言えば理解出来る——」

斬魄刀を自身の横に移動させ、防御態勢を取る。

その時ふと気付いた。自身の視界に入った宮の天井一带に、何か棘の様な物が刺さっている事に。

「これは…あの人間の——まさかッ!!」

今更ながらに気付く。この棘は雨竜の放った霊子の矢だと。

自棄になった様に猛攻を仕掛けたのは、周囲に砂塵を巻き起こして自身の視界を遮る為。

その隙に雨竜が天井へ無数の矢を打ち込んだのだ。

「——今更気付いた所で、もう遅いよ」

焦燥を浮かべるザエルアポロの耳に入る声。

弾かれる様にしてその方向を振り向くが、其処ですかさず恋次の振るった斬撃が襲い掛かる。

「な、に…?!」

咄嗟に斬魄刀を振るうが、何故かそれは空を斬る。

見れば蛇尾丸の刀身は急激に方向転換。その名にある通り、蛇の如き動きでザエルア

ポロの周囲を取り囲んでいた。

「引つ掛かったな陰険ヤロウ!!」

何をしようとしているのかは明白。

このままザエルアポロを拘束し、自分達の目論見を阻止出来無くする為だ。

「低劣種が…舐めるな!!!」

だが彼とて伊達に八の数字を背負ってはいない。

全力で斬魄刀を下段より振り上げ、自身に巻き付かんとしていた蛇尾丸の刀身を上へと弾き返す。

「なッ…」

驚愕の声を漏らす恋次。

それを見たザエルアポロは得意顔を浮かべると、今度は別の方向へと顔を向け、叫ん

だ。

「お前もだ人間!!」

其処には無数の虚達の上空に舞い上がり、その弓を構えて鏃を天井へと向けている雨竜。

ザエルアポロは掌を彼に向けると、自身の霊圧をそれに集束させて行く。

——虚閃か。

一瞬そう考えた雨竜だったが、即座に改める。

自分達の意図を読んだのだとすれば、この場で攻撃範囲の広い虚閃をザエルアポロが放つとは考えにくい。

「ぐあッ!!」

雨竜の想像は正解。掌から放たれたのは虚弾であった。

流石の彼も、あの体勢から虚閃の二十倍の速度を持つ不可視の弾丸を躲せる筈も無い。

虚弾を真面に受けた雨竜は、全身に受けたその衝撃の強さに顔を歪める。そしてその細身の身体は、下に居る数匹の虚達を巻き込みながら吹き飛ばされて行った。

「石田?! くそが…!!」

雨竜の事は気掛かりだったが、だからと言って眼前の敵から意識を逸らす訳には行かない。

歯噛みしつつ、恋次はザエルアポロに向けて蛇尾丸を構えた。

「…成る程、僕の宮の天井を崩そうとしたのか。如何やら其処の人間の観察眼は中々に鋭いらしい」

人差し指で眼鏡の位置を直しながら、ザエルアポロは嘲笑した。

彼の言う通り、雨竜の目的は宮の天井を破壊する事。恋次の正解を封じる装置の一部を崩し、全力を出せる状態に持ち込む為である。

ザエルアポロの説明によれば、この宮全体が恋次の正解を封じているらしい。

其処で考えた。ならば宮の大部分の壁を破壊すれば、その機能を維持するのは難しくなるのではないかと。

精密機械というのは総じてデリケートで、弱点が多い。

パソコンのハードディスクも、衝撃や熱に湿気、これ等の内一つでも外部から加えられれば、瞬く間にエラーや故障を引き起こす。

開発者が真の天才であれば、対策も十分に考慮して製作するかもしれない。

だがザエルアポロを見る限り、その可能性は低いと判断出来た。

宮の中の通路を弄って遊んだ事から始まり、先程から恋次に対して見せている態度から、自身の策が破られる事なぞ無いという慢心がこれでもかと感じ取れる。

もしもの時の保険はあるかもしれないが、念には念を込めて——といった細かい部分まで用心する事はほぼ無いだろう。

こういったタイプは、僅かでも足元を掬われる様な真似をされると揺らぎ易い。

とは言え、現在雨竜はその周囲を無数の虚達に囲まれている。横の壁を狙って矢を放ったとしても、その肉壁に阻まれてしまう。

ならば如何するか。周囲三百六十度が駄目なら——残るは上しか無い。

加えて天井を狙う利点は他にもある。それはこの部屋が宮の最上階にある事だ。

これもザエルアポロの性格を考慮すれば大体想像が付く。

彼の様に他者を見下す事が大好きな者は、行動にも表れる。

敵を蹴散らした後、ザエルアポロは次に一体何の行動を取るか。

倒れ伏す敵を高所に立って見下ろし、その無様な姿を悠々と観察するに決まってる。

そして本来研究者であるザエルアポロが、戦場に赴いたただけで無く、直々に己の斬魄刀を抜いたのだ。

勝利を確信していなければ、この様な行動に出る筈が無い。

自己顕示欲の高い者が、己の勝利を飾るに相応しい場所として選ぶとすれば、やはり最上階以外に考えられない。

もしそうなら、天井さえ崩せばこの宮から抜け出せる。

そして相手に有利だった条件を対等へと戻した状態で戦える様になる。

只でさえ実力に差があるのだ。少しでもそれを縮める努力をしなければ、一向に勝機が見えて来ない。

雨竜は其処まで考えていた。

「この僕でなければ、その稚拙な策でも通じていただろう。残念だったね」

「チツ…!!」

不敵な笑みを浮かべるザエルアポロに対し、恋次は苛立ちを隠さずに吐き捨てた。

——嫌味な奴だ。

此方は決死覚悟で臨んだというのにこの態度。

卍解さえ使えれば、あの余裕だらけな顔を崩してやるものを。

だが実際は雨竜の考察は当たっており、あのまま天井を破壊されていれば危うかったのはザエルアポロの方である。

それを考慮すると、どちらかが優勢という事は決して無く、状況的には互角であると言えた。

「さて……余り戦闘を長引かせると素体の質も落ちるし、何より面倒だ」

「ツ!!」

終始自然体で立って居た筈のザエルアポロだが、此処で初めて斬魄刀を構えた。

その動きに思わず、恋次の全身に緊張が走る。

「出来ればこれ以上暴れないでくれるかい。大丈夫、痛くはしないから安心して——」

？」

其処で何を思ったのか、ザエルアポロは突如として言葉を切った。

そして先程戦闘を再開した雨竜と虚達の戦場。その更に奥にある出入り口へと視線を移す。

「何だ……」の霊圧は……？」

それは始めて感じるタイプの霊圧だった。

大部分は虚。だが仄かに雨竜と同じ人間のものも混じっている。

如何あっても共存不可能な、相対する属性の組み合わせ。本来であれば前者が後者を浸食して塗り潰す筈だ。

混乱するザエルアポロを余所に、その霊圧は次第に大きくなって行く。

「——ッ、しまっ……!!」

無意識の内に思考の渦に入り込んでいたザエルアポロが正気に戻ったのは、既にその

靈圧が並みの中級大虚を上回った時だった。

咄嗟に出入り口に仕掛けてある、逃走防止用の爆弾を起動させんとするが、最悪のタイミングで邪魔が入る。

「余所見してんじゃねえぞコラア!!!」

下手人は、その僅かな間ザエルアポロが意識を逸らしていた恋次。

頭上より蛇尾丸を叩き付ける様にして振るわれたその斬撃は、先程までのものとは明らかに異なっていた。

恋次の放つ気迫が乗り移ったとでも言うのか、刀身との距離が詰まる度、ビリビリとした衝撃が肌を刺激する。

長きに亘る研究室籠りの影響で鈍っていた勘、排出した以外に僅かに残留していた戦士としての本能が警報を鳴らした。

ザエルアポロは咄嗟に両手で斬魄刀の柄を握ると、横倒しにした刀身を頭上に持ち上げ、その斬撃を受け止める。

同時に彼の表情が歪む。

予想通りと言うべきか、柄へと伝わる重みは尋常では無い。何とか未解放の状態で耐

えられる許容範囲といった所だ。

「うツ!？」

——まさか手加減していたとでも言うのか。

ザエルアポロは困惑すると同時に焦燥に駆られ、またしても肝心な部分から意識を逸らすという失態を遣らかした。

「避ける阿散井!!!」

「おう!!」

突如として響いた雨竜の掛け声に従い、恋次は蛇尾丸を引き戻すと、その場から真横へ跳躍した。

此方を押し潰す勢いで押し掛かって来ていた斬撃に対抗する為、力の限り逆方向へ足を踏み込んでいたザエルアポロは、案の定つんのめる。

慌てて体勢を整えるも、僅かに生まれた隙は致命的であった。

「一体…何を——ッ!？」

顔を持ち上げ、恋次の姿を探さんと視線を周囲へと移した、その直後——ザエルアポロの全身を謎の極大な光線が?み込んだ。

服の殆どが瞬時に消し飛び、徐々に鋼皮が焼かれ始める。しかもその力は相当で、少しでも気を抜けば足が地面から浮かんでしまう程。

ザエルアポロは両腕を交差して顔を防御すると、足腰へ力を入れて一気に真横へと踏み込み、光線の中から何とか抜け出す。

「ゲホッ、ゲホッ…!! 何なんだこれは?!? 何処から如何見ても——!!」

激しく咳き込みながら、ザエルアポロは苛立った様子で叫んだ。

しかも直接我が身で受けた御蔭か、この光線の正体を即座に悟る。  
並みの破面では無い、十刃クラスに匹敵する程のそれを。

——明らかに虚閃ではないか。

だが最後にそう口に出す暇も、ザエルアポロには与えられなかった。

「〃魔人の——〃」

「ッ!!?」

ザエルアポロがその声に気付いた時には既に、その大きな影は自身の懐へと入り込んでいた。

「〃一撃〃!!!」

「ゴッ、ハアアアアアアアアッ!!!」

アツパーカットの要領で鳩尾へと捻じ込まれた白色の鎧を纏う拳は、直撃部周辺にある内臓を尽く潰し、骨も原型を留めぬ程に粉碎した。

ザエルアポロの鼻や口から、ドス黒い血が大量に噴き出す。

更にその身体は勢い良く打ち上げられ、そのまま天井を突き抜けて行った。

「悪いが……これで終わりだ」

両腕に其々白と黒の異形の鎧を纏った影——泰虎は、巨人の名を冠する右腕を引き

絞った。

狙うは勿論、未だに宙を舞っているザエルアポロ以外に無い。

「〃巨人の一撃〃!!!」

腕全体を覆う霊圧が、硬く握り締められた拳へと集束し、極限まで凝縮されて行く。やがてそれは発光を始め、あわや爆発するかと思われた瞬間——腕が振り抜かれる。

拳が突き出されると同時に、集束された霊圧は先程のものを上回る大きさと威力を持つ光線となつて放たれ、ザエルアポロの全身を？み込んだ。

雨竜の矢の御蔭で脆くなつていた天井は、その余波によつて止めを刺された。

ザエルアポロが突き抜け、光線を通つた場所を中心に、次々と崩れ始める。

頭上から落下して来る瓦礫。泰虎は右腕を盾にして凌ぎ、恋次と雨竜は軽快な体捌きで躲して行く。

バースーラも同様、軽快な動きで瓦礫を回避する。一方、生み出された無数の虚達は大した反応も見せず、その殆どが瓦礫の下敷きとなつて消えて行つた。

「無事だったか…茶渡!!」

「茶渡君!!」

やがて瓦礫が収まると、天井は完全に崩壊。上を見上げると、透き通る様な青空が此方を見下ろしていた。

瓦礫の上に立つ泰虎の背中へ、恋次と雨竜は駆け寄りながら嬉々とした声を上げる。それに対し、泰虎は持ち上げていた右腕をゆっくり降ろすと、その親指を立てた。

管制室にて、虚夜宮へ侵入した一護達の進む通路の大部分を弄った張本人であるギンが、椅子に腰掛けて其々の映像を眺めていた。

近くにはつい数十分前に此処へ訪れた、東仙とワンダーワイスが居た。

「…まさかこの様な結果になるとはな」

「いやー、これが賭け事やったらエライ大穴やね」

僅かに眉間に皺を寄せながら、東仙は静かに呟く。

それに対し、ギンは何時を通りの飄々とした様子で肩を竦めながら、軽い口調でそんな事を零した。

二人の話題の中心となっているのは、先程まで繰り広げられていたルキアとアーロニーロの戦いだ。

その硬い態度から丸判りが、此方側が敗北したという結果を見た東仙の心情は余り宜しく無い。

一方、ギンの気分は極めて良好だった。

——良かったな、ルキアちゃん。

内心でそう呟きながら、口元へ作り物では無い天然の笑みが浮かびそうになるのを抑える。

この時点で判るだろうが、実はギンが通路を弄つたのには理由がある。それはルキアへの贖罪だ。

以前よりギンはさり氣にその事を氣にしていたのだ。

自身という存在を完全に悪として認識させる為に必要な布石だったとは言え、処刑を前にして脆い状態となっていたルキアの心を弄び、貶し付けたその罪を。

だからと言つてルキアの相手をアールロニーロにする事の何処が贖罪だというのか。下手すると更に追い詰める——または敗北の上での死という酷く残酷な結果と成り兼ねない。普通ならそう考える筈だ。

だが悪い方向ばかりでは無く、逆に良い方向に考えてみると、また変わってくる。言うなれば、これは賭けに等しい。

確かに下位とは言え、いきなり十刃と戦うのは精神的にも実力的にも厳しいだろう。だがそれでも尚、ルキアが勝利出来たとすれば如何なるかと。

きつと今まで以上に強くなる。

それこそ——あの才能の塊とも言える一護の隣に立つて戦える程に。

今のルキアは、傍から見ても明らかに実力不足だ。それは未だ使いこなせてはいないとは言え、卍解を習得した恋次にも劣る。

そんな様では、この先に待つ激戦を耐えられるとは思えない。

過去の出来事から、未だに心の奥底に闇を抱えるルキア。本当の意味で彼女が強くなるには、その闇と真正面から向き合い、乗り越えなければならぬ。

だからこそ、ギンは敢えてルキアをこの過酷な道へと誘導した。彼女ならば必ず成し遂げられる筈だと。

別に最終到達地点に第9十刃の拠点を設定したルートを作っても良いのでは、と思うかもしれない。

だがそれでは駄目だ。今のルキアの実力では、連戦という形で十刃と当たるのは拙い。万全の状態で臨まねば、彼女が勝利出来る可能性は著しく低下する。

そういつた考えもあつて、ギンはこの様な形で仕込みを行ったのだ。

出来る事なら、つい最近まで所属していた三番隊、その副隊長である吉良イヅル。色々と利用する形となつた彼についても何らかの形で償いたいとは思っているが——  
—残念ながらそれは叶いそうに無い。

内心で密かに謝罪しつつ、ギンは無数の映像を観察する。

「今んところはアツチ側が優勢や…ね…?」

そんな時、突如として自身の隣に気配を感じたギンは、言葉を区切ってその方向を振り向く。

其処にはしやがみ込んだ体勢で、今ある映像を順々に確認しているワンダーワイスの

姿があつた。

「アウ〜…」

その様子を見たギンは首を傾げた。何をしているのかと。

組織の一員として、虚夜宮に侵入した敵達の動静を確認している訳では無いだろう。と言うか、ワンダーワイスにはそんな事を考える知能など皆無。

そんな彼が、熱心に映像を眺める理由は何故か。

暫しの間考えた末——気付いた。

人を欺く事に長けるという事は、即ち人の本質を見抜く力が無ければ出来無い芸当であると言える。

そんなギンだからこそ、ワンダーワイスの目的を察せた。

「…ああ、さよか」

「ウ？」

「…何？」

ワンダーワイスのみならず、東仙までもその眩きに反応を示した。

「いや…さつきからこの子、ノイトラの事探してはんねん」

「…解せん。何故奴の事を？」

明らかに疑問を抱いている東仙に対し、ギンは簡単に説明する。

だが納得がいかないのか、更に問い返す始末。

しかも心成しか、機嫌が徐々に降下している気がする。

「知らんの？　この子、ちよつと前からノイトラに懐いとんのか。最近はせつろしいんか、あんま相手にされとらんみたいやけど」

「…妙に落ち着きが無かったのはその為か」

すると東仙はワンダーワイスに対し、何処か窘める様な視線を向け始めた。

当人は別の事に夢中で気付いていないのか、映像へ釘付けになっている。

確かに東仙からしてみれば気に食わないだろう。

血沸き肉躍る戦いを何処までも求め、時に味方にすら刃を向ける事すら躊躇わない剣

八を悪と認識している彼だ。依然としてそんな剣八と同類の印象を持つノイトラムも、それに含まれていると考えられる。

現在では大分改善されたと説明しても、十中八九無駄に終わる。

組織の秩序を重んじるあの性格から判るだろうが、東仙は結構な頑固者だ。そんな不確かな噂なぞ信用ならないと、切つて捨てる可能性が高い。

横目に眺めていると、次第にギンは同情心が湧き出て来るのを感じた。

表面上は正義を謳いながらも、その本質は復讐でしか無い東仙。

現在進行形で藍染に良い様に利用されており、しかもその行き着く結果は見え切つていると来た。

当人はそれに気付いていないのか、それとも振りをしているのか。定かでは無いが、傍から見ればその姿は道化でしか無い。

人知れず暗躍し始めて以降、東仙は今迄に藍染の指示の元、様々な実験を行つて来た。終いには自分自身を素体として提供し、虚化の実験を行つたりもした。

結果は成功。剩え斬魄刀にも改造を施し、始解と卍解を犠牲に——破面達と同様の刀剣解放を可能とした。

その身を完全なる異形と化しながら、これでもう剣八如きに後れを取る事は無いと零していたのを、ギンは覚えている。

だがそれだけでは無い筈だ。

東仙の身体に手を加えたのはあの藍染である。素直に虚化関係の処置のみを施すとは考えにくい。

——自身が如何に愚かな真似をしたか気付いているのだろうか。  
ギンは密かに東仙へ哀れみの視線を向けた。

「まあ、そないなピリピリせんと——ん？」

思考を切り替え、崩れかけた仮面を取り繕うと、ギンは一先ず東仙を宥めに掛かった。その直後だった。眼前の映像の一つに、とある変化を見付けたのは。

それは3ヶタの巢の周辺の、嘗ての宮の成れの果てが点在している場所を映していた。

その地面の一部に、緊急避難用の地下シェルターへの入口を思わせる、明らかに強固な造りをしているであろう扉が、砂の中から顔を覗かせていた。

「これは…」

一息遅れて気付いた東仙も、その映像を見るや否や、眉間に皺を寄せた。

「あつちやく、こないな時に…」

それに見覚えのあつたギンは、思わず自身の額に手を当てた。

確かに東仙の立場からして考えると、“コレ”も悪に含まれるであろうと考えつつ。

「…今のボクには何も出来ひん」

——申し訳無いが、如何にか切り抜けてくれ。

此処に居ない“共犯者”へと向けて、ギンは内心で呟いた。

意識の無いガンテンバインを右肩に担ぎながら、ノイトラは治療室へと向かった。

ドルドーニはその後を付いて行く。やはり怪我の影響は大きいのか、その額には幾らか汗が浮かんでいる。

それを気遣ってか、ノイトラは此処に来るまでに一切響転を使っていない。

現状としてはそれ程急ぐ必要性も無いからと。

探査神経で探った結果、一護とネルは順調に先を進んでいる。

本来であればこの後、ウルキオラと交戦。敗北して瀕死状態に陥るのだが、如何やらそうはならなそうだ。

まず肝心のウルキオラが周辺に居ない。その代わりと言っては何だが、グリムジョーの霊圧も拠点の宮に無い。恐らくは織姫の宮へと向かっていると考えられる。

この事から想定出来る未来は、一護とグリムジョーの激突が史実より早まるという事。

だがこれについては余り問題は無い。

一護は虚化の習得が少々早まっている様だし、道中で聞いたが、ドルドーニを卍解のみで打倒したのだと言う。少なくとも互角以上の戦いを繰り広げる筈だ。

懸念事項としては、ウルキオラの存在である。

もし一護がグリムジョーに勝利出来たとして、次は自分の番だと言わんばかりに登場されてしまえば拙い。確実に一護が仕留められてしまう。

——それでは目的の一つが台無しになってしまう。

故にノイトラは考えた。ならばそのウルキオラの前に自身を割り込ませれば良いと。

その目的を果たす為の必要不可欠な要素の中に、ノイトラが一護と直接対峙せねばならないというものがある。これが出来なければ全てが終わりだ。

数字の順番的に、このタイミングでは自身が行く事が妥当だろうとか、屁理屈を捏ねれば如何にかなる筈。幸いにも、ウルキオラは結構此方の意見を聞き入れてくれる傾向にあるしと、ノイトラは考えていた。

取り敢えず一護については、グリムジョーとの戦いが終わる直前までに現場に到着出来れば良いと、ノイトラは結論付ける。

「問題は、チャドだな……」

ぼそりと、ノイトラは現状に於ける不確定要素を口に出す。

ガンテンバインを降した泰虎だが、何と次に彼が向かったのは——恋次と雨竜の居

る方向。つまりザエルアポロの拠点の宮である。

道中までは良かったのだが、それから先は探查神経でも霊圧を探れなくなった。恐らく拠点の主がその宮全体に、霊圧探知系統の能力を阻害する装置でも仕掛けているのだろう。

実力的に考えると、ザエルアポロと対峙する三人の間に実力差は余り無い。

正解がある分、多少恋次が一步先に出ている感じが。

史実通りに護廷十三隊からの援軍が来てさえ居れば、結果は同じだろう。

多少なりとも負傷するだろうが、死にはしない筈だ。

其処まで考えた後、ノイトラは軽く頭を左右に振った。

——余り考え過ぎても埒が明かない。

今は成すべき事を成すだけ。一護達の事は信じる他無いと。

そうして思考を切り替えた刹那——ノイトラの足が止まった。

「如何かしたかね？」

「……………」

その様子を不審に思ったのか、ドルドーニが声を掛けて来るが、ノイトラはそれを後

回しにする。

探査神経を発動し、その精度を極限まで高める。

移動途中に仄かに感じた、正体不明な霊圧の居場所を探り当てる。

「来たか…お義兄ちゃんよ」

その発生源は、第9十刃の拠点の宮周辺。

予想通りと言うべきか、あれからルキアはアールオーロニー口を降した後、そう間を置かずしてゾマリの奇襲を受けたらしい。

その証拠に、現在のルキアの霊圧反応は極めて微弱となっている。

だが危機感を抱く必要は無い。そんな彼女の傍には今、明らかに隊長クラスの膨大な霊圧が存在していたのだから。

感情が激しく揺らいでいるのか、その霊圧の荒れ様は尋常では無い。周囲敵味方見境無く敵意を向ける様な、正に触れるもの皆傷付ける状態だ。

その凄まじさは、かなり遠方である筈の此処にすらビリビリと響いて来そうな勢いを持つている。

——随分と御怒りの様で。

だがそんな靈圧も、良く良く確認すると広範囲へ拡散しない形で抑えられている。

自身にとって何よりも大切な存在を害される、そんな常人であれば激情の余り我を忘れるであろう状況下。にも拘わらず、冷静に自身の感情を制御して敵と対峙するその姿勢。正に隊長の鑑である。

ノイトラは内心で合掌した。流石に自分でも勘弁したい相手と戦う運命にあるゾマリに對して。

感情の赴くまま喚き散らす者より、静かなる怒りを持つ者こそが最も恐ろしいのだから。

「…悪い、行くか」

「むう？ 何も無いなら、まあ良いのだが…」

短く謝罪すると、ノイトラは再び駆け出した。

腑に落ちないものを感じながら、ドルドーニはそれに追従する。

そして数秒後——またしてもノイトラの足が止まった。

「…、今度は何だね!？」

「…少し黙つてろ」

ノイトラは険しい表情を浮かべながら、背後のドルドーニに向けて左掌を向ける。

足を止めた理由、それはまた別な霊圧を感じたからである。

というか、これについては明らかに覚えがあつた。

忘れたいものばかりの過去の記憶——その中に残つていたとある存在を。

「オイオイ…まさか…」

ノイトラは思い出した。史実では一切出て来る事の無かつたその存在を。

その頬に一筋の冷や汗が流れる。

だがこれまでの経緯を考えれば、確かに不自然では無い。

本来「アレ」を完全に封じる役目を担っていた筈のルヌガンガはルキアに斃されて  
いるし、残るは閉じ込めてある扉のみ。

「…コツチか」

緊張した面持ちで、ノイトラはある一定の方向を向くと、途端に駆け出した。ドルドーニは慌ててその後を追った。

「一体何だと言うのだ!?! 待ちたまえ!!」

やがて追い付くと、ノイトラはある場所を見詰めて立って居た。その背中に声を掛けると、返ってきた返答は想定外のものだった。

「一つ聞かせろドルドーニ」

「別に構わんが…」

「今…どれ位戦える?」

冗談で言っている訳では無いのは、その声質からして判った。

ドルドーニは即座に自身の残存霊力と体力を確認し、大凡の予測を算出する。

「未解放なら十五から二十。帰刃であれば二・三分が限界、といったところか」

「そう、か…」

返答を受け取ったノイトラは、暫しの間沈黙する。

質問内容からして大凡の想像は付くとは思うが、この時、確かに彼はドルドーニを戦力としてカウントしようと考えていた。

もし眼前から感じる霊圧の持ち主が、記憶にある通りの存在だとすれば、一人では対処し切れない可能性がある。故にガンテンバインを除き、遊撃要員兼補助としてドルドーニを頼ろうとしたのである。

だがその考えは直後に捨てた。やはり危険だとして。

自身が認めた相手に対しては、多少自己犠牲も厭わない部分があるが、ドルドーニは基本的に正直者だ。

とすれば、確かに言った通りの時間は戦えるのだろう。

だが相手が相手である。ノイトラ自身も、如何足掻こうが長期戦は避けられないと判断出来た。

「…そろそろ明確な説明を求めたいのだが？」

それを知らないドルドーニは、詳細を問うべく口を開く。

だがそんな彼の前に、ノイトラは無言のまま、担いでいたガンテンバインを差し出した。

「コイツを頼んだ」

「ぬう…：質問の答えが未だ——」

直後、ノイトラが眺めて居た位置にある地面が爆発した。

その余波で舞い上がったのか、一際大きな瓦礫らしきものが、ノイトラ達の背後へと落下する。

「ぬおツ!!?　これは…?」

恐る恐る後ろを振り向いたドルドーニは瞠目した。

落下した瓦礫の正体は、一面が真っ平らで凹凸が無い、正に閉じたら二度と開けられないと思わしき扉の一部分だった。

扉と断言出来たのは、嘗て罪を重ねた同胞が一時的に勾留されていた宮に似た様な物があつたのを、ドルドーニが覚えていたからだ。

または織姫の部屋と同様、特殊な鍵が必要なだけであり、普通に開閉動作するのかもしれないが。

——まさか、この霊圧は。

再び視線を爆発地点に戻したドルドーニは、その付近から湧き上がる霊圧の正体に気付く。

そしてノイトラの態度に納得した。

「此処は俺に任せて、早く治療室に行け。セフィーロとロカ、序にチルツチも待機してる筈だ」

「…援軍は？」

ドルドーニは静かに問う。

否、想像が正しければ何の問題も無い。実力的に見ても、ノイトラが負ける要素は万が一にも存在していない。

だがあの数に能力は厄介だ。現十刃でも、完全に仕留め切るまでに大分梃子摺るのではないだろうか。

「そんなモン要らねえよ——と書いてえ所だが、頼む。討ち漏らしが出れば目も当てられ無えしな……」

「…承知した」

同様の事を考えていたノイトラは、苦笑しつつも素直にその提案を受けた。実力的に負ける要素は皆無だが、用心するに越した事は無いのだから。

「<sup>ブエナ・スエルテ</sup>幸運を祈る!! 暫し待っていたまえ!!」

ガンテンバインを受け取ると、ドルドーニは全速力で駆け出した。

ノイトラはそれを横目で見送ると、視線を元の位置に戻す。

未だに砂塵の舞った名残のある光景。次の瞬間、その地面から次々と小さな影が飛び出し、ノイトラの眼前へと降り立って行く。

「ぶはー、やっと出れたー!」「わーい!」「やったー!」「まぶしいよー」「クウーン…」「お腹すいたー」「はらがへってはー」「食事もできぬー」「オレサマオマエマルカジリ」「グルルル…」「ひゃわー! 頭かじらないでー!」「あーノイトラだー!」「ふええええー怖い

よ〜!」「い…いじめないで…」「きやははは! 吊り目〜!」「おつきい〜」「背中の上  
 れてメガネ?」「ドーナツ?」「その眼帯ちよ〜だい?」「なんか感じ変わった?」「  
 「え〜わかんないよ〜」「それより食べていい〜?」

それは無数の少年少女、動物の幼体、小型の異形の破面で構成された集団だった。

其々が思い思いに発言し、瞬く間に喧騒を巻き起こす。

彼等の正体はと言うと、ドルドーニヤガンテンバインと同等の存在。

嘗てバラガンが退屈凌ぎで配下に加えて放置し、彼が藍染の配下となつて以降は一時  
 的に十刃に加えられたが、組織の一員として機能しない事を理由に十刃落ちとなつた、  
 今迄に類を見ない『群にして個』の破面——破面No.102、ピカロ。

その本質は完全に子供であり、叱りもせず放置していれば好き勝手に行動してしま  
 う。なまじ実力がある為に、目を付けられた者は死ぬまで遊び倒される。

——『悪戯小僧』とは良く言ったものだ。

背中の上の斬魄刀の柄に右手を掛けながら、ノイトラは思った。

「何か、ルピのヤツが複数居るみてえだな…」

そんな事を眩きながら、ノイトラはピカロの持つ特性を思い返す。

単体では大した事は無い。護廷十三隊の席官クラスなら十二分に相手取れる程だ。

だがやはりその数がネックだった。何事も塵も積もれば山となる、そういう事だ。

そしてピカロの持つ最も厄介な点が——「命の共有」という能力。幾ら傷付こうが、他の個体が特殊な音波に乗せて霊圧を少しずつ分け与え、回復させる事が出来るというもの。

明らかに即死級の傷であっても関係無い。一体でも生き残って居れば、其処から徐々に復活が可能なのだ。

その不死性故か、ピカロを始末するには労力が掛かると判断したのか。真実は本人のみぞ知るが、藍染は水以外には無敵という特性を持ったルヌガンガに対し、ピカロの封印を命じた。

「しっかし…運が悪かったなテムエ等も」

その幼さから来る残酷さ故か、ピカロという存在は、力の無い者達にとって日常を終わりを告げる悪夢の集団に過ぎない。

だがその根幹は子供なのだ。上位十刃の様に、若しもの時は力尽くでピカロを制圧出

来る程の実力さえあれば、確りと手綱を握る位は出来る。躡ける事だつて可能かもしれない。

条件だけで考えると、ノイトラにはその適性があつた。

だが現状に於いて、彼にそんな事をして居る時間は皆無。

そうなると、ピカロの存在は正に悪戯に状況を引つ掻き回すだけの悪い材料でしかない。

それにノイトラは先程から感じていた。

何物にも染まらぬ、無垢な在り方の中に潜んだ——口元から涎を垂らし、血走つた眼球を頻りに動かして獲物を探す、その飢えた獣の気配を。

ピカロは本来、百を超える群体から構成されている筈だ。

だが実際に数えてみると、その数は五十にも満たない。

恐らく食事すら与えられぬ環境下で、何年も封じられていた影響か、極端に衰弱しているのだろう。故に生命維持の為、態とその数を減らしていったと考えられる。

それがたつた今解き放たれた。

ならば今後、ピカロが如何いつた行動を取るかなど、容易に想像が付く。飢えを満たす以外に無い。

一応彼等の帰刃の能力にも、一種の食事にも等しい技があつた筈だが、あの様子を見

る限り、そんな悠長な遣り方で腹を満たそうとする可能性は低い。

至つてシンプルに、本能の赴くまま他の虚や破面を直接喰らうという方法を選択する筈だ。

「生憎と、今の俺にやあ余裕が無えんだ」

下手すると目に付いた者から見境無しに喰らわんとする可能性が高い。最悪、一護達の中の誰かに狙いを定める事だつて有り得る。それだけは阻止しなければならぬ。

それ故に——ノイトラはピカロをこの場で始末する事を決めた。

右手で斬魄刀の柄を握ると、背中からその巨大な刀身を引き抜いた。

そして渾身の力で真横へ振り下ろし、地面に叩き付ける。その際に発生した轟音と衝撃で以て、ピカロ達の喧騒を一時的に止めた。

「恨むなら……存分に恨みやがれ」

子供の姿をした者を手に掛ける。当然抵抗もあるし、罪悪感も湧く。実行すれば間違い無く己の中で大事な何かが崩れ去る。

だがそう言っていていられる状況では無い。一時の情に流され、計画を台無しにしてしまつては本末転倒。

今一度、ドルドーニの言葉を内心で復唱する。

そして腹を決める。今から自分は、一切の情を捨てて動く。

第三者が今のノイトラを見れば、何と云うであろう。

——大人気無い、最低最悪、屑、外道、畜生。好きに呼べば良い。

これより自身が行わんとしている行動の意味など、十二分に自覚している。

だがそれでも尚、覚悟を決めたノイトラに迷いは無かった。

「…行くぜ」

ノイトラは自身を縛る鎖を解き放ち、溢れ出した霊圧を、容赦無く前方へと放出する。

『——ッ?!?!?』

それを真面に受けたピカロ達の表情が一樣に凍り付く。嘗て上司であったバラガンに叱られた時ですら、全体の四割程度は笑つて流していたにも拘らず。

それは理屈では決して答えの出ない、命ある者のみが感じる事の出来る——本能からの恐怖であった。

## 第四十八話 主人公と姫と豹王と…その他諸々

黒い軌跡を残しながら、一護は只管に虚夜宮内の通路を駆け抜けて行く。そんな彼に肩車されているネルは、まるでアトラクションを体験している子供の様な満面の笑みを浮かべていた。

何故そこまでの速度が出ているのかと言うと、3ヶタの巣を出て以降も卍解を解いていない為だ。

消耗の事を考えると解くべきだと思えるが、一護は例外。

彼の卍解の燃費の良さは、歴代の死神の中でも類を見ない。それこそ、戦闘さえしなければ、その霊圧消費の速度は平常時とそう変わりは無かったりする。

恋次の様に、只解放しているだけでも霊圧を凄まじい勢いで消費して行く者からして見れば、何とも羨ましい限りである。

「…くそッ!!」

一護の表情は硬い。何かを耐えているかの様に、ギリギリと音を立てる程強く歯を食

いしばっていた。

その理由は言わずもがな——ルキアだ。

3ヶタの巢を抜けた辺りで、突如として彼女の霊圧が消えた事に気付いたのだ。

当然、一護は動揺した。今居るメンバーの中では、恋次と同等レベルの深い絆で繋がっている相棒的な存在である。動じない訳が無い。

加えてルキアが居た筈の場所には、新たに別の破面らしき霊圧が存在していた。その大ききから判断するに、十刃クラスだと思われる。恐らくはその存在に敗れたのだろう。

だが如何し様も無い。助けに行こうにも、此処からでは大分距離がある。

それに敵地のど真ん中に居るこの状況下。救助に向かったにしても、途中で邪魔が入らないという保証も無い。

第一目的である織姫についても、未だ五体満足で居るのか如何かすら不明だ。一刻も早く彼女の元へ辿り着く必要がある。

だが一護にとって、兩名共に優先順位は変わらない。

——どちらを選べば良いんだ。

心の内に焦燥ばかりが募り、足が止まり掛ける。

現実的に考えると、この場面に於いてはルキアを見捨てて先へ進むのが正しい。

彼女は戦士だ。戦場で敗北して死する程度、とうの昔に覚悟している。

十三番隊の肩書を失う事も同様だ。例え無事に織姫の救出を達成したとしても、はい良かったねでは済まない。護廷十三隊の意向に背いた罪は決して軽くは無いのである。

だが例えその事を忠告してたとしても、恐らくルキアはこう返すだろう。それが如何した。大切な仲間を救えるなら構いはしないと。

「い、一護…?」

切羽詰まった雰囲気を感じたのか、ネルは相手の顔色を窺う様にして、小さく声を掛けた。

其処で一護ははっと正気に戻る。

そして虚夜宮へ侵入後、個々に分かれる直前に自身を諭して来た、恋次の言葉を思い出す。

——戦場での気遣いは、戦士にとって侮辱だ。

「っ、大丈夫だ。心配すんなネル」

一護は横目でネルを見遣ると、笑みを浮かべる。  
そして己の意識を切り替える。

——仲間を信じろ。

必ず生きて戻ると、手を合わせて誓ったではないか。

皆ならきつと大丈夫。だから希望を捨てるなど。

つい先程までとは一転、軽やかな足取りで通路を突き進み始める。

やがて眼前に現れたのは、相当な長さを誇る階段。

だが一護は速度を落とす事無く、足へ更に力を入れて跳躍。何十も段数を飛ばしながら、一気に駆け上る。

階段を抜けて辿り着いた先は、3ヶタの巣でドルドーニと交戦した遊撃の間に敗けず劣らずの広さを誇る広場だった。

一護は其処で一旦足を止めると、周囲を見渡して警戒する。

「…誰もいねえな」

「みたいつスね」

危険が無い事を確認すると、一護は再び駆け出した。

やがて広場の中央付近へと差し掛かった、次の瞬間——突如としてその真上から大きな霊圧を感じた。

「くツ!!」

「うえええっ!?!」

背筋に途轍も無い悪寒を感じた一護は、即座にその場を飛び退く。

急激に方向転換した影響で、ネルが悲鳴を上げながらその頭にしがみ付く。

直後、青色の閃光が天井を突き破って広場の床へ降り注ぐ。

見れば其処は一護が先程まで居た筈の場所であった。

「こいつは…虚閃!!」

その閃光の正体を、一護は即座に看破する。

同時にそれを放った犯人の正体も。

「——躲したか。良い反応してんじゃねえか」

大穴の空いた天井から何者かが広場へ侵入。

それは一護の前へと降り立つと、感心する様にして言った。

「グリムジョー…!!」

一護は天鎖斬月を構え、その眼前に立つ人物の名を口に出した。

「ま、それでこそ殺しがいがあるってモンだ」

「——ッ、離れてろネル!!」

全身から霊圧と共に殺意を垂れ流しながら、グリムジョーは口元を吊り上げた。

一護は咄嗟にネルを下に降ろすと、退避の指示を出す。

ネルは素直に従い、壁際にある柱の影へとその身を隠した。

「…ああ、忘れるところだったぜ」

突如としてそう零すと、グリムジョーは後ろに回していた自身の右腕を見遣り——  
その手に持っていた何かを一護に向けて放り投げた。

それは白い布に包まれた、まるで蚕の繭を連想させる物だった。

特筆すべきはそのサイズ。二メートルは無い、だが確実に人一人分の大きさはある。

「なっ!?!」

予想外の出来事に、一護は驚愕の余りその足を硬直させた。

反射的に放り投げられた物を身体で受け止める。

その際に空いた左手で抱える様に持ち上げた瞬間——ムニョン、と柔らかで且つ弾力のある、非常に心地良い感触がその手の内に広がった。

「ん……あつ……!?!」

「……………へ……?」

直後にその場に響き渡る、男の本能を刺激する甘く艶やかな女の声。

それは一護が今持っている物の中から発せられている。

思わずもう一度その左手を何度か動かし、感觸の正体を探る。

そう—— “探ってしまった”。それが男として最も行つてはならない行為に繋がるとは思いもせず。

「や……あ……ちよつと、待つ……んう!!」

「ま……まさか——!?!」

其処で一護はやつと気付いた。その声は明らかに覚えがある人物のものだと。

一瞬でその顔を蒼白に染めると、眼前にグリムジョーが居るにも拘らず、天鎖斬月を地面に突き立て、右手をフリーの状態にする。続けて抱えていた物を地面に降ろすと、それから布を取り、その中身を確認する。

「ふはっ……く……黒崎君……?」

「い、井上……?」

其処から現れたのは—— 現在進行形で一護達が救出を目指している織姫本人だった。

その頬は僅かに上気しており、そして妙に色気を感じるオーラを垂れ流している。暫しの間、二人は互いに呆然としたまま見詰め合う。

そして先程まで自分達が何をしていた、されていたのか気付き——全くの同時に顔を真っ赤に沸騰させた。

「きゃあああああああ!!!」

「うおおおおおおおッ!!!? 済まねえ井上!!!」

盛大に悲鳴を上げた織姫は、両腕で自身の胸元を隠すと、その場にへたり込んだ。

一護は弾かれる様にして、そんな彼女から距離を取る。

「ううう……!」

「マジで悪かった!! まさかお前だと思ってなくて…」

瞳を潤ませながら、織姫は三メートル程離れた位置に立つ一護を見詰めた。

一護はそれにたじろぎながら、土下座する勢いで謝罪を口にする。

意図的では無いにせよ、これは完全にセクハラである。

——でも凄かったな。

何が、とは言わないが、左手に残る至高の感觸の余韻から、一護は密かにそう思った。だが織姫の心情としては、セクハラをかまされた事に対する怒りは無かった。

——どうせならこんな形では無く、もつと別のシチュエーションで触れられたかった。

簡潔に言うのと、悔しい。これに尽きる。

羞恥心や抵抗は凄まじいが、一護が相手なら別に自身の身体を触られても構いはしない。寧ろバツチ来いである。

だがやはりその場の雰囲気というものがある。

それは恋する乙女としての理想。然るべき場面で、然るべき結果へと至る。

より正確に言えば——満月の浮かぶ幻想的な夜に、狭い部屋で二人きりとなった男女。互いにロマンティックな雰囲気を醸し出した所で、部屋の隅にあるベッドへ視線が向き——。

「む、無理いいいいいい!! 初めてでいきなりそんな体勢なんて…黒崎くんのえっち!!!」

「体勢!? 何の!? おい井上…ちよつと落ち着いて——」

「ストロングブリッチロングジェネレーション体位なんて…私には高レベル過ぎる…!!」

「何か凄そう!!?」

何時の間にやら妄想世界へと旅立っていた織姫は、突如として両手で顔を隠すと、今度は意味不明な事を叫び始めた。

しかも何故かその世界の一護が何か遣らかしたらしい。

現実の一護はと言うと、何故突然自分が責められたのか理解出来ず、盛大に混乱していた。流石と言うべきか、反射的に的確なツツコみを入れながら。

「…乳繰り合うのは済んだかよ」

個々が敵地である事も御構い無しにラブコメを展開している二人へ向けて、グリムジョーの苛立った様な声が投げ掛けられる。

それに正気を取り戻した一護は、天鎖斬月を構え直す。

だがグリムジョーは軽く鼻を鳴らすだけで、臨戦態勢を取る様子も無い。

すると彼はその後、今度は視線を織姫へと移し、口を開いた。

「おい、女」

「は、はい……？」

「これで借りは返した」

その言葉に、織姫は一瞬迷った。借りとは、何の事について言っているのかと。

だが即座に思い出す。此処へ連れて来られた直後、藍染に言われるがまま、〃双天帰盾〃で再生させたグリムジョーの左腕の事を。

決して善意からの行動では無いとは言え、それに恩義を感じ、現在こうして軟禁場所から連れ出すだけに終わらず、一護の元へ届けてくれるとは。

——案外、悪い人では無いのかもしれない。

見た目と言動は明らかに不良そのもの。だがその反面では義理深い面を持っている。

織姫はグリムジョーの印象を少し上方修正し掛け——直後にその考えを改める事となった。

「だから今度は俺の命令に従ってもらおうぜ」

グリムジョーはそう言うと、その顔に凶悪極まりない笑みを浮かべた。

織姫はそれを目の当りにした途端、背筋に悪寒を感じた。

何を勘違いしていたのか。確かにこの男は義理深い部分を持ち合わせてはいる様だが、善人では決して無い。

そしてその目的も、大凡の検討は付く。

「そいつの傷を治せ。一つ残らずな」

「な…!!」

顎で一護の方向を指すと、グリムジョーはそう命令した。

織姫は瞠目し、ほったらかしで話を進められていた本人も驚愕の声を上げる。

「まさか、か…」

一筋の汗が、織姫の頬を伝う。

現世に於けるグリムジョーの今迄の行動、そして現在浮かべている表情。それ等の情報から導き出される結論は一つ。

「べつに逆らっても良いぜ？ その代わりに、あの影に隠れてるガキがどうなっても知らねえがな……」

「なッ、てめえ……!!」

口元を吊り上げながら、グリムジョーはその掌をネルの隠れている柱へ向ける。

織姫が命令に背いた場合、容赦無く虚閃で消し飛ばす心算なのだろう。

だが一護は動けなかった。

本来の虚閃は発射までに一定量の霊圧の溜めが必要となるが、グリムジョーの場合は特にこれといった制約が無い。溜めも無しに無拍子の虚閃を放つ事が可能なのだ。

例え阻止に動いたとしても、高確率で無駄に終わる。それこそ以前の戦いの中で、一護を助けに来たルキアがされた様に、ネルは為す術も無くその極大の光線に？み込まれてしまう事だろう。

そしてネルを助ける為に動いた場合、下手すると今度は標的が織姫に移る可能性もある。

これが時に冷酷な判断を下せる現実主義者だったなら、片方を切り捨てるという選択を取るだろう。

だが一護はその正反対に位置する理想主義者だ。そんな事が出来る筈も無い。故にこうして膠着状態に陥るのは必然と言えた。

「ヤア、どうするっ？」

だが実を言うと、グリムジョーはネルに手を出す気は殆ど無かった。

彼が求めているのは、一護との完全決着のみ。

だが織姫と合流を果たした今、素直に戦うとは思えない。もはや理由が無いとして、逃走を図る可能性だってある。

ネルを人質に取る様な事をしたのは、そんな一護を確実に自分と戦う様仕向ける為に過ぎない。

此方の思惑通りに流れを持ち込んでしまえば、後は如何とでもなるとして。

「く…そ…!!」

「黒崎君…」

現状に於いて、一護達の取れる選択肢はもはや決まり切っていた。

自身の思惑の通りに事が運びそうな雰囲気を感じたグリムジョーは、笑わずには居られなかった。

この薄暗く長い通路を進み始めて、一体どれ程の時間が経過しただろう。

右目を覆う黒い眼帯。顔の左側には頭部から左目、そして顎の付近まで届く縦一筋の傷跡。十一本の棘状にセツトされ、その先端部の一つ一つに鈴が編み込まれているという奇抜過ぎる髪型を持った長身でガラの悪い男——十一番隊隊長、更木ざらぎ 剣八けんぱちは、不意に足を止めた。

「…チツ、一体どうなつてんだ此処は。ちつとも出口が見えてこねえじゃねえか」

舌打ちすると、ぐちぐちと文句を垂れ始める。

「それにいつの間にか他の奴等も居なくなつてやがるしよオ…」  
「あはは！ 剣ちゃん置いてきぼりー！」

恨めしそうに零す剣八。そんな彼の背中から声上がる。

見た目は完全に幼児そのものな、桃色のショートヘアをした幼女——十一番隊副隊長、草鹿<sup>くさしか</sup> やちる。

彼女は剣八の背中にしがみ付きながら、楽しげに笑った。

「…笑い事じゃねえよ。あんまモタついてつと、朽木とマユリのヤローに獲物を全部取られちまうじゃねえか」

「——何を言っているのです。此処に着いた途端、我先に走り出して迷子になったのは貴方ではありませんか」

——責任転嫁とは感心しませんね。

不機嫌さを露にする剣八へ、背後からそんな冷静な声が投げ掛けられる。

その指摘が凶星だったのか、剣八は瞬時に黙り込むと、バツが悪そうにソツポを向いた。

「…いつから居た？」

「出口がどうの——…といった辺りです」

その声の主は、首元から三つ編み状に編まれた長髪を持つ、落ち着いた容姿で物静かで穏やかな雰囲気を漂わせている女性——四番隊隊長、卯ノ花うのはな烈れつ。  
彼女は依然として黙り込む剣八に、何処か呆れた様な視線を向けていた。

「うう…なんで僕、ここに居るんでしょうか…」

「…今更何言ってるんですか。諦めて下さい」

そんな卯ノ花の後ろには、身長差の激しい男女二人組が静かに言葉を交わしていた。

見るからに気弱で覇気が皆無な顔付きをした小柄な青年——四番隊第七席、やまだ山田はなたろう花太郎。彼は剣八の怒気に怯えているのか、先程からその目に涙目を浮かべながら、全身を震わせている。

花太郎の眩きに対して突き放す様に返したのは、百九十近い長身でやや紫掛かった白髪を持つ女性——四番隊副隊長、虎徹こてつ、勇音いさね。彼女は一見平静を保っている様に見えるが、その視線は頻りに左右に動いており、何処か落ち着かない様子だ。

「そんな事言つたつて…僕みたいな奴より、伊江村三席とかの方がずっと役に立てると思ふんですが…」

「…隊長はその辺りも考えた上で貴方を選んだんです。文句言わない」

「そんなあ…」

諭された花太郎は、乍にその肩を落とした。

確かに彼の疑問は尤もである。

その口から上げられた人物は、四番隊第三席、伊江村いへむら 八千和やそちか。眼鏡を掛けた至極真面目な性格の男で、勇音に匹敵する実力者。

日常業務に始まり、現場での前線指揮。そして後方支援専用故か、四番隊を舐めている他の隊士が原因で起きたイザコザの収集も行っている、所謂出来る男というやつだ。

——しかし如何せん地味であり、周囲からの人気が余り無い事に頭を悩ませている不遇な男でもある。

普段から間の抜けている花太郎は、ドジを踏む度に指導を受ける機会が多く、それと同時に八十千和の凄さを認識しており、密かに憧れを抱いていたりする。地味だが。

八十千和と花太郎、どちらがこの場に相応しいかと言えば間違い無く前者である。だが後者が選ばれたのは理由があった。

現在、四番隊は主力であるツートップが不在だ。それは即ち護廷十三隊全体の後方支援能力の著しい低下を意味する。

これで更に支柱とも言える八十千和が抜けてみる。もし現状のまま大規模戦闘を行えば、もはや今の四番隊の能力ではカバーし切れない状態へ陥ってしまう事だろう。

戦場に於いて最も重要なのは強さだけでは無い。傷を癒す回復手段も同等に求められる。

試合とは違うのだ。環境も整わない、劣悪な環境での戦いもザラな状況下に於いて、僅かな負傷が原因で死に至る事なぞ珍しくも無い。

こうして考えてみると、如何に四番隊の存在の大きいかが理解出来る。

それに花太郎は四番隊の中で唯一——切っ掛けは色々アレではあったが、一護達との交流を持っている。

治療という行為は、身体のみならず精神面についても含まれている。傍に居ると安心出来たり、信頼の置ける人物が治療に当たただけで、措置を受ける者にとっては効果が

段違いだ。

卯ノ花が花太郎を選んだのにはこういった背景もあった。

「しようがねえだろ！ あんな強エ奴がいるってわかってて我慢できるかよ!!」

「まあ、貴方らしいと言えば貴方らしいですが…」

やがて開き直ったのか、剣八は声を荒げる。

それに対し、卯ノ花は静かに溜息を吐いた。

総隊長の秘密裏の指示の元、黒腔の解析を進めていた喜助。

その途中で起こった織姫の誘拐。其処で喜助は一月掛かる筈だったその予定を急遽変更し、それよりも圧倒的短期間で解析を終了させ、一護達を虚圏へ送った。

そんな彼等への援軍として、護廷十三隊から虚圏へと派遣されたのは八名。

内の五名は見ての通り。残る三名は現在別行動を取っている。

そうなった全ての原因は剣八だった。

喜助が独自に開いた黒腔を通り、虚圏へと到着したまでは良い。

だがその直後、剣八は何を思ったのか勝手にその場から駆け始めたのだ。やちるもそれに便乗し、途中から勘で行き先の指示を出したりと煽りに煽った結果——見事に

迷った。

基本脳筋で霊圧探知が苦手な剣八と、致命的なまでに方向音痴なやちるが合わさったのだ。妥当とも言える。

卯ノ花はそんな二人を追い掛け、それに勇音と花太郎が追従した流れだ。

御蔭でこうして五人仲良く迷子となった訳である。

立場から考慮すると、全ては隊長である剣八の責任。だが当人は一切気にも留めず、全く別の事を考えていた。

その内容は主にとある破面——第5十刃、ノイトラ・ジルガの事である。

切っ掛けは前回の現世侵攻の後、無事に意識を取り戻して復帰した一角から報告。

だがそれは部下を檻樓雑巾の様にされた報復の為という訳でも無い。確かに少しはあるが、主な意図は別。

得物抜きで一角を瞬殺する実力。そして抜いたら抜いたであの夜一と互角以上に渡り合ったばかりか、最終的に喜助を含めた隊長格数名を相手に大立回りを演じ、圧倒。その後はあっさり撤退したが、実質ノイトラの勝利に等しい結果となっていた。

それ等の情報を知った剣八は、思わず武者震いした。

未解放であるの実力である。解放すれば一体どれ程まで強さが跳ね上がるのか、全く見当も付かない。

「ああくそつ、楽しみで楽しみで仕方が無えッ…!!」

——全く以て最高の相手ではないか。

戦意の昂りと同時に、全身から膨大な霊圧が漏れ出す。

対峙するその時が待ち遠しい。一秒でも早く、ノイトラと斬つて斬られての至高の間を味わいたい。

剣八はその長い舌を伸ばすと、自身の上唇を舐め回した。

それは気色悪さより、血の滴る新鮮な肉を前にした猛獣を連想させる。

本来であれば、敵の持つ戦力の大きさに絶望する所だが、生憎と剣八は普通では無い。生きている限り、強者との死闘を求め続ける戦闘狂の極致。それが戦いより生まれ、戦いに生きて来た更木剣八としての在り方だった。

「…もう少し霊圧を抑えて下さい。後ろの二人が怯えてしまいます」

「ブクブクブク…」

「うひゃあああああ!!? 山田七席いい!!」

卯ノ花の指摘も虚しく、花太郎は直後に白目を向いて後方へと倒れた。その口元からは泡が盛大に噴き出している。

そのホラーチックな有様に、勇音は涙目になりつつも介抱を始める。

「さて、今頃あの二人はどうしているのでしょうかね…」

背後の惨事をスルーしながら、卯ノ花は霊圧探知で周囲一帯を探った。

すると此処から結構離れた位置にて、三つの霊圧が確認出来る。一つは凄まじい速度で移動しており、残る二つは共にゆったりと移動している。

後者は十二番隊隊長、くろつち涅 マユリと、同隊副隊長の涅 ネムだろう。

元から協調性は薄目なマユリだ。この行動も納得ではある。

研究の為の環境を与えて貰っているが故か、ある程度の義理は果たす心算はある様だが、それ以外は如何でも良い。彼が何より優先するのは、自身の研究だけなのだ。

残る前者はルキアの義兄であり、四大貴族である朽木家の現当主及び六番隊隊長、朽木 くちき 白哉 びやくや。最高位の貴族であり護廷十三隊の隊長の一人としての高いプライドを持ち、そして自他共に厳しい、白哲で中性的な容姿の整った男。

その実力も死神の基本的な四つの戦闘方法として斬術・白打・歩法・鬼道—— 〃 斬

拳走鬼“全てに於いて極めて高水準の練度を誇り、尸魂界でも上位に位置する実力者だ。

常に冷静沈着で、戦場に赴く際は万全の態勢を以て臨むべきという、極めて堅実な考えを持つ様な白哉が、こうして独断行動を取るのは非常に珍しい。

——やはり妹さんが心配なのだろう。

卯ノ花は自身の口元に笑みが浮かぶのを感じた。

思い返してみれば、最近のルキアは色々と悲惨な経験をしている。腹部を手刀で貫かれたり、右腕を挽ぎ取られたり、虚閃の直撃を受けてボロボロな状態に陥ったり。戦場に身を置く戦士としてはある意味必然なのかもしれないが、それにしても現世へ派遣されたメンバーの中では彼女が最も重傷を負っていた。

その者が何事にもドライな考えを持っていない限り、身内がその様な目に遭っている気に掛けない筈が無い。

実は昔から白哉はルキアに対して、その身を案じるが余り遠回しな心配りをしていてた。

彼の亡き妻である朽木 緋真<sup>ひまな</sup>。彼女の遺言に従い、南流魂街78地区の戌吊<sup>イヌヅリ</sup>に置き去りにされたにも拘らず逞しく成長し、死神見習いとして真央霊術院に通っていた実妹であるルキアを養子として迎え入れたまでは良い。だが接し方が判らず、冷たく接してし

まう不器用さを見せる反面、その影で危険度の高い席官職に就かせない様に根回しをしてきた過去がある。

護廷十三隊の中では総隊長と同等の古参の死神である卯ノ花がそれに気付かぬ筈も無い。

今となつてはその蟠りも払拭され、多少ぎこちなさは残っているものの、実に良好な関係を築けている様で何よりだが。

「では更木隊長、ここからは私が先導します」

「…あア?」

「大人しく着いて来て下さい。勇音も行きますよ」

「は、はい!」

そう言つて卯ノ花は前に出たかと思いきや、そのまま先を進み始める。

埒が明かないとして、勇音は意識の無い花太郎を担ぐと、その後を追つた。

突如としてこの場を仕切り始めた彼女に対し、剣八は眉を顰めた。

元より他人に指図される事を嫌う性分だ。気に食わないに決まっている。

しかも此処は破面という強敵が大量に存在している——剣八にとって楽園とも言

える場所だ。

盛大に暴れて周囲の建物を破壊したとしても、修理費の請求が来る事は無いし、総隊長に直接呼び出されて叱られる事も無い。

——こんな時ぐらい好きにさせろ。

劍八は苛立ちを覚えていた。

だが卯ノ花としては、如何あつても劍八が自身の指示に従つて貰わねばならない理由があつた。

一言で言えば——劍八を死なせない為だ。

今の彼の實力では、五からそれ以下の数字を持つ十刃達を相手取れないとして。

右目に着用されている、技術開発局が作成した着用者の靈力を無尽蔵に削減する効果を持つ眼帯を外せば、幾分か良い勝負は出来るだろう。

だがノイトラの実力を見る限り、その程度では足りないと思つた。卯ノ花は判断した。

何故そこまでして劍八の身を案じるのか。それは他ならぬ卯ノ花の過去が関係している。

——これは全て自分の責任。

内心で懺悔する。これは贖罪であると。

本来であれば尸魂界の中でも限り無く最強に等しい存在であつた筈の劍八。そんな

彼の力を幼少期に極限まで封じさせてしまったのは、紛れも無く自分自身。

何時の日か剣八がその力を取り戻すまで、絶対に死なせるものかと、卯ノ花は誓っていた。

「なに言つてやがる。そんな面倒くせえ真似なんざしなくても、テキトーに壁ぶち抜きながら進んだ方がずっと簡単——」

「良いですね?」

「だから——」

「良いですね?」

「…おう」

卯ノ花が浮かべているのは普通に笑顔に含まれた妙な迫力に気圧されたのか、剣八は反論を途中で止めると、大人しく従った。

先程から離れて巻き起こっている爆発を確認しながら、バスーラは休み無く能力を行使し続ける。

今ので一気に二十体は消し飛んだだろうか。確かその半数以上がザエルアポロの生み出した改造破面。並みの下級大虚よりも殺傷能力や耐久力が高い筈のそれ等がこうも容易く遣られるとは、予想外も良い所だ。

しかもそれを成したのは、霊圧から読み取るに、先程この場に現れた死神でも滅却師でも無い只の人間だろう。

——何が如何なっているのか、全く理解出来無い。

バスーラは機械的な思考回路でそう思った。

人間でありながら、虚の霊圧までも併せ持った謎の大男。

いきなり自分達の居る戦場へと入り込んだばかりか、瞬く間に戦況を引つ繰り返したその力は決して侮れない。

右腕から放たれた虚閃を思わせる光線は、バスーラが生み出した百近くの虚を消炭と化し、ザエルアポロの鋼皮を焼く威力を持つ。

それに加え、シャツ越しにも判る筋骨隆々な体格から察せる通り、相当な臂力を持つているのだろう。驚異的な脚力から繰り出された踏み込みは、響転に匹敵する程の速度と移動力を誇る。

そして特筆すべきは——その白色の鎧に覆われた左腕だ。

隙を突いたとは言え、一撃のみであのザエルアポロに致命傷を与えたその破壊力は恐ろしい。

間違つても直撃を食らう訳にはいかないと、バスターは泰虎に対する警戒を最高レベルまで引き上げた。

恐らく自身の鋼皮では耐え切れない。確実に死に至るであろうと確信して。

「——背中が御留守だよ？」

「ツ!!」

突如として背中へ投げ掛けられた声に、バスターは思考の渦の中から帰還する。

取り敢えずその正体を確認するのは後回し。即座に両腕に生えた計六本の刃を地面から引き抜くと、振り向き様に真横へ薙ぎ払う。

「…なんだと?」

直後、刃が何かを砕いた。それは雨竜の放った霊子の矢。

だがバースーラは引つ掛かりを覚えた。それが放たれたのは一本だけであった事に。

先程まで相手をしていた分、雨竜の戦闘スタイルについては大凡把握している。

だからこそ解せない。何故連射しなかったのだと。

矢の一本一本では大した威力が無い事を理解しているのだろう。その証拠に、雨竜は耐久力の高めな虚に対し、急所を狙うのは勿論だが、更に複数の矢を連続して放つていった。

ザエルアポロに及ばないにしても、バースーラの鋼皮とてそれなりの耐久力を持っていて、

にも拘らず、先程放たれた矢はたったの一本だ。疑問に思わない訳が無い。

「棒立ちとは余裕だね!!」

バースーラが内心首を傾げていると、其処でやっと雨竜は右手に持つ銀嶺弧雀より、無数の矢を放ち始めた。

——やはり可笑しい。

だがそれでも不審な点があった。

それ等の矢は殆ど狙いが定められておらず、大雑把に放たれているのだ。

「…陽動？ いや、違う…」

思わず口に出すが、バスーラは即座に考え直す。

僅かな時間で、この宮に仕掛けられた装置の弱点を見抜く程の頭脳を持つ雨竜だ。そんな単純な策である筈は無いと。

——奴の行動の裏を読み。

眼前から迫り来る無数の矢を払いながら、バスーラは脳の稼働装置の設定値を徐々に引き上げて行く。

「今度は足元がお留守だぜエ!!」

「な、に…!?!」

しかしそれこそが雨竜の狙いだった。

先程までの細々とした攻撃の意図は只の陽動である。

そしてその真意は——敢えて単純明快な策を仕掛け、深読みさせる事で相手の動きを鈍らせるというもの。

仕掛け人が頭の回る者で、且つ相手はその事を把握していれば、大抵は成功するだろう。

複雑怪奇な数式を瞬時に解く程の頭脳を持つ学者が、足し算引き算の問題を出題したとすれば如何だろう。当然裏がある、馬鹿正直にその問題の答えを言つては駄目だと思ふに決まっている。

バスターラの足元の地面を砕きながら現れたのは、巨大な骨の蛇。

恋次が先程まで封じられていた筈の正解——狒狒王蛇尾丸であった。

バスターラは瞠目する。何時の間にか解放したのだと。

真面に戦えば厄介だと判断した恋次と泰虎に対しては、現状で出せる最高戦力である中級大虚を限界まで生み出して向かわせた筈である。

だが現にこうして恋次が此方の戦いに参戦して来たという事は、それ等全てを打倒したという意味に他ならない。

「ガッ!!」

咄嗟に両腕を交差して防御体勢を取るが、案の定バースーラは力負けした。

いとも容易く弾き飛ばされると、何度ももんどり打ちながら地面を転がって行く。

やがて一際大きな瓦礫へと衝突し、止まる。

バースーラは即座に起き上がろうと腕に力を籠めるが、其処で自身の身体に起きた異常に気付いた。

先程攻撃を防御した影響なのだろう。両腕の六本の刃は全てが砕け、腕があらぬ方向へ曲がっているのだ。

「…不便な」

だがバースーラの表情は至って普通。両腕が折れているというのに、痛みを感じている様子全く無い。

それもそうだ。彼はザエルアポロが死体から造り上げた改造破面。戦闘時に邪魔となるとして、痛覚を完全に取り除かれているのである。

それが仇となったのか、こうして負傷に気付くのが遅れた訳だ。

治療しようにも、バースーラが補給と称している——ザエルアポロが大量に従えてい

る従属官達は、既に先程最後の一匹を影に取り込んで食らったばかり。これ以上はこの宮にある試験室まで取りに行かねばならないだろう。残念ながら、現状に於いてそんな暇は与えられそうに無い。

「グオアツ!!」

そしてその際に生じた隙は、更に別な結果を齎す原因となる。

次の瞬間、バスターラの全身を極大の光線が？み込む。

発生源を辿ると、其処にはやはり右腕を前方へ突き出した体勢の泰虎が。

恋次が参戦出来たという事は、泰虎も同様。雨竜の術中に嵌っていたバスターラはそれも失念していた。

「む…流石に頑丈だな」

だがそれでも仕留め切るには足らなかつたらしい。

光線の中から不格好に転がりながら抜け出すバスターラの姿を見た泰虎は、そう小さく  
眩いた。

「けど奴の抵抗もそれ程長く続かないだろう。油断せずに畳み掛けよう」  
「同感だぜ。ま、あの陰険ヤロウがいなけりや、こつちの勝ちが決まったモンだと思っ  
どな」

泰虎の両側に並ぶ雨竜と恋次の二人は、其々に自身の得物を構える。

視線の先では、両腕が使えない状態となっているバスーラが、何とか身体を上手く使つて立ち上がらんとしていた。

泰虎の攻撃の影響か、全身からは煙が上がっており、見ればその剥き出しとなつてい  
る上半身の殆どが焼け焦げている。

刺青のせいで傷の有無が判り辛い、ほぼ満身創痕と言つても良いだろう。

「……これまでか」

バスーラは己の行く末を悟つた。だがやはりその表情に悲観等といった感情は皆無。  
彼はザエルアポロの道具としての意識しか所持しておらず、その与えられた役割を忠  
実に熟すだけだという考えしか無かつた。

——その失われた筈の心の奥底で、密かに息を吹き返したとある感情に気付かぬまま。

睨み合う一人と三人の両陣営。

雨竜は銀嶺弧雀に矢を番え、矢尻をバスターラへ向ける。

恋次は右手に持つ骨の柄を操り、狒狒王蛇尾丸の頭部を持ち上げさせ、その顎をガチガチと開閉させる。

泰虎は左腕へ己の霊圧を籠め、更にその指先から周囲の霊子を吸収し、確実に仕留められる様に破壊力を限界まで引き上げる。

彼等に対し、バスターラはせめてもの抵抗として、自身の足元を中心に影を広げられるだけ広げると、質量のある下級大虚を二十体程生み出して盾とした。

やがて両者が激突するかと思われた刹那だった。

先に踏み込んだ雨竜と恋次の頭上へ、大きな影が覆い被さったのだ。

「——ッ!! 上だ二人共!!」

「な…!?!」

「うおオオオッ!?!」

逸早くそれに気付いた泰虎が呼び掛けるが、当の二人は反応し切れなかった。

影の正体——赤い触手を無数に生やした細長い羽の様な何かが、二人の全身に覆い被さる。

泰虎は即座に救出の為に動くが、それよりも早く、羽は二人をその内側に包み込んだまま、宙へと持ち上げられる。

——ならば元を叩くまで。

羽が伸ばされている方向の逆を辿ると、泰虎はその場から反転。バスターラへ使用する筈だった強化済みの左腕を振り絞った。

「ゴフツ!!」

だがその左腕が振るわれる事は無かった。

背後へ振り返ったのと同時に、泰虎は腹部へ強い衝撃を感じたかと思うと、凄まじい勢いで吹き飛ばされてしまったのだ。

それを成したのは、真横に鞭の如く薙ぎ払われたもう一つの羽。

根本を見遣ると、其処には泰虎によって退場させられた筈のザエルアポロが居た。

「——ああ、僕が居ない間に随分と好き放題してくれたみたいだね」

彼はドレスの様な物を身に纏い、背中から二対の触手の羽を生やしている。

これこそザエルアポロ・グランツの帰刃形態——フォルニカラス “邪淫妃”。

帰刃の影響なのか、その身体には一切の傷も見当たらない。

「ボス…」

「バスーラ、お前は試験室に戻れ。こいつ等は僕が直々に片付ける」

「…了解」

バスーラは頭を下げると、生み出した下級大虚達を影の中へと戻し、この場から響転で去った。

「ふん…」

ザエルアポロは鼻を鳴らしながら、雨竜と恋次を包み込んでいる羽を見遣る。

その内側からは苦しげな呻き声が漏れ出していた。

雨竜はその細身の体格から判る通り、その拘束から抜け出せる力は持ち合わせていない。

一方恋次はと言うと、今迄に過酷な鍛錬を重ねてきた御蔭か、副隊長の中でもトップクラスの膂力を持っている。だがそれでもザエルアポロの羽を押し退けるには足りなかった。

しかも一番の問題は、彼の右手に握られていた筈の狒狒王蛇尾丸の柄が何時の間にか無く、丁度真下の地面に落ちている事だ。幾ら担い手の魂の一部とも言える斬魄刀でも、その手から離れてしまつては如何し様も無いのである。

「御馳走様……と」

「ぶはっ!？」

「うおおおッ!？」

ザエルアポロはやがてその羽を振り被ると、凄まじい勢いで外側へと振るい、捕えていた二人を用無しとばかりに乱雑に放り投げた。

宮の頂上から落下して行く彼等を尻目に、ザエルアポロは視線を別の方向へ移す。

「ゲホツ…ゲホツ…」

その先に居たのは、片膝を着きながらも何とか立ち上がらんと奮闘している泰虎だった。

先程の腹部への一撃の影響なのだろう。その表情は苦痛に歪んでおり、激しく咳込むと同時に少量の血も吐き出している。

如何やら完全に不意討ちだった為に防御も儘ならず、相当なダメージを負ってしまったらしい。

帰刃形態となったザエルアポロの戦闘能力は、ガンテンバインのそれを大きく上回る。武人としての技術は後者が上だが、基本的なスペックが違い過ぎるのである。

ならば泰虎の状態も納得だった。

「さて、君には先程の御礼をしなければならぬね」

「くツ…!!」

ゆつたりとした足取りで近付いて来るザエルアポロに対し、泰虎は本能的に危機感を覚えた。

だが思った以上に足に力が入らず、未だに立ち上がれていない。

このままでは鬪り殺しにされる運命しか見えない。

泰虎の表情は強張り、その額からは止めど無く冷や汗が流れ始める。

内心で嘲笑を浮かべながらそれを眺めていたザエルアポロは、ふと気付いた。

確かにこのまま手負いの泰虎を仕留めるのは簡単である。帰刃した今となつては、万が一にも敗北する可能性は無い。

——だが果たしてそれで本当に良いのか。

決まり切つた結果を態々実現する。そんなものは余りにつまらない。

ザエルアポロの美学的な観点からすると、限り無くナンセンス。

——何れにせよ殺すのであれば、此処は一つ捻りを加えてみよう。

ザエルアポロは内心でほくそ笑んだ。

これなら此方の溜飲が下がるし、愉悦に浸れる。

きつと泰虎はそれはそれは良い反応を示す筈だ。自身に敵対した事を心から後悔し、涙ながらに命乞いをする、そんな実に無様な姿を晒してくれる事だろう。

「…使え」

「ッ!？」

「それで傷を治すと良い」

突如としてザエルアポロは懐から何かを取り出すと、それを泰虎へと投げ渡した。

それはノイトラがスタークへと渡した物と同じ。僅かながら消費した霊圧と怪我を治療するカプセル状の薬の入った容器だった。

「安心しろ、毒は入っていない。この僕の慈悲深さに咽び泣きながら感謝してくれ」

足元に転がる容器とザエルアポロを何度も見渡しながら、泰虎は盛大に混乱した。

敵である筈の自分に施しを与えるとは、こいつは何を考えているのだと。

「傷が癒え次第、相手をしてやろう。念の為言って置くが…先程の様にいくとは思わな  
い事だ」

「……………」

「…早くしてくれないか。こう見えても僕は暇じゃないんでね」

当然、信用出来る筈が無い。だが嘘を言っている様にも見えないのも事実。

泰虎は迷いに迷った末、その容器を手を取った。

## 第四十九話 三日月と悪戯小僧と、呪眼と白桜と

止めど無く連続して鳴り響き続ける轟音。そして時折その中には、柔らかい物が潰れ、弾け飛ぶ様な不快なものも混じっている。

それが耳に入れない様になっているのだろうか。少し離れた位置にある瓦礫の影にて、両手で両耳を塞いだ状態で、全身を震わせながら座り込んでいる二桁にも満たない年齢であろう——額にゴーグルの様な物を掛けた少年が居た。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい…!!」

彼はピカロの内の一人。その顔色は蒼白そのもので、尋常では無い怯えが浮かんでいる。その小さな口から洩れるのは謝罪。

只管に同じ言葉を発し続けるその姿は、まるで壊れた玩具を連想させた。

「いい子になるから…もういたずらしないから…!! だから——ツ!!?」

——もう殺さないで。

心の底からそう願う少年だったが、現実是非情。それが叶う事は無かった。

何時の間にやら轟音の発生地点から飛来してきた不可視の弾丸——虚弾の一つが、彼を瓦礫ごと跡形も無く粉碎したからだ。

ピカロの能力の特性上、其処で即座に再生が始まる筈である。

だが何時まで経ってもそれが起きる様子が無い。

すると僅かに残る少年の肉片はやがて全て霊子と化し、特殊な音波に乗って他の個体の元へと移動して行った。

その向かった先は、轟音の中心部。先程少年を粉碎した虚弾が無数に降り注いでいる場所だった。

其処で練り広げられていた光景は、正に悲惨の一言。寧ろ虐殺と言っても良い。

逃げ惑うピカロ達を、容赦無く叩き潰し続ける虚弾の嵐。

再生途中であろうが何だろうが、一切の例外も無く、平等に。

幼子の姿を持つ破面の一体一体を潰す度、己という存在を形成している最重要な何かを音を立てて崩れ去って行くのを、ノイトラは感じていた。

だがそれでも尚、彼は攻撃の手を緩めない。

宙に形成した霊子の足場に立ち、狙いをピカロの居る場所へのみ集中させた。虚弾・狂葬曲”で蹂躪を続ける。

本来であれば無差別に放たれる筈の、ノイトラの全身に形成されている発射地点。その狙いを絞った影響か、ピカロへ襲い掛かっている弾幕の密度は異常。幼子の体型であつても、擦り抜けられる様な隙間は皆無であつた。

降り頻る豪雨の中を、一粒の水滴すら触れずに駆け抜けろと言われて出来る者は居ない。

それ程までに、ノイトラの攻撃は無慈悲極まりないものであつた。

「…チツ、やっぱ胸糞悪いなクソツタレが」

——どの口が言うか。

思わず漏れた言葉に、ノイトラは自分で自分にツツコみを入れる。

こうなる事ぐらい、端から予想は付いていた。だが口に出さずにはいられなかつたのだ。

ピカロは現在、確認出来るだけでも個体数は二十を切つた。つまり登場時の半減以下にまでその数を減らしている事になる。

理不尽なまでの暴力を前にして、皆一様に恐怖に怯え、抵抗する意思すら削がれていくらしい。直撃と再生を繰り返しながら、只管逃亡を試みては潰されている。

その光景は正しく虐殺そのもの。まるで軍隊が所持している武力を存分に振るい、力を持たぬ民を殺戮している様を連想させる。

己を縛る枷も何も一切無く、思う存分力を振るえる。そんな機会があれば大抵の者は心踊らせるものだ。それが相手を圧倒している状況であれば尚更。

だがこれは違う。ノイトラはそう断言した。

真面な戦いすら成立していない、薬剤を散布して害虫を駆除するかの如き一方的過ぎる展開。こんなものが爽快であつて堪えるものかと。

文字通り血反吐を吐きながらも力を付けたのはこんな事をする為では断じて無い。

目指すべき目的を阻む遙かに大きな壁を打ち砕き、何時理不尽が降り掛かったとしても撥ね退けられる様になる為だ。

—— 憑依前の人格の名残なのか、より高次元の戦いを味わいたいからという思いも零では無いが、当人は気付かない振りをしていた。

「…そろそろ、か」

如何に覚悟を決めたとして、所詮は凡人の精神。

己の所業に対し、胸が痛む事もあるだろう。

だが——その程度だ。思う事はあっても、今更揺るぎはしない。

探查神経で下の様子を探った後、抑揚の無い声でノイトラは呟いた。

もはやピカ口の霊圧は殆ど感じられなくなっていた。

ノイトラは虚弾の連射を停止すると、全身に張った霊圧の膜も解除する。

群体故か、バラバラに存在していた筈のピカ口の霊圧も、今や一つのみ。

その位置へ視線を映せば、最後の生き残りらしい——右側頭部に仮面を被った少女が地面へへたり込んでいた。

「ヒイツ…!!」

ノイトラは静かに、少女の前へと降り立つ。

最後に己の手で幕を下ろす為だ。

柄を握る手の内に伝わるであろう、子供を叩き潰す感触が嫌だからと、終始飛び道具に逃げる様な真似はしない。

直後に上がる小さな悲鳴。

見れば少女は身体全身を震わせ、その瞳からは止めど無く大量の涙が溢れ出している。

「なんで……こんなことするの……？」

「……………」

「わたしたち、なにも悪いことしてないのに……！」

確かに少女の言い分は正しい。

ピカロという存在自体は決して悪では無い。何もかもが未熟な子供として、極普通に振る舞っているだけだ。

しかしその認識は力の有無だけで大きく変わる。

ピカロが何の消耗もしておらず、且つ群体全てが帰刃形態となれば如何なるか。少なくともその実力は並みの遊撃要員の破面を超える事は確実であり、下手すると現下位十刃に匹敵するかもしれない。

だが彼等はその意味を理解出来無い。

故に無自覚な部分で周囲に破壊を齎してしまうのだ。

手加減というものを知らず、自身より力の劣る者の手に触れば容易く握り潰す。思

い切り引つ張れば、腕の根元から千切り取る。

相手が圧倒的な弱者であっても一切考慮せず、自身の感覚で思い切りじやれ付く。例え途中でその相手が断末魔の悲鳴を上げたとしても、その手を緩める事はしない。

他者を傷付け、終いに殺してしまつたとしても何も感じないし、反省もしない。

何故なら必要が無いからだ。ピカロにとって死というものは、遊びの末に至る在り来りな結果の一つに過ぎないのだから。

言うなればこれは——無自覚な悪。

ある意味最もタチが悪いと言える。

だからこそ、ノイトラは幾ら泣き付かれようが、ピカロ抹殺の意志を曲げる様な事はしない。

——こいつ等は子供の姿をしているだけの怪物だ。

そう自身に言い聞かせながら、右手で斬魄刀の柄を握り締める。

「そうだな」

「…え？」

「確かにテメエ等が悪い訳じゃ無え」

ノイトラから返された突然の肯定に、少女は呆ける様な声を漏らす。

——もしかして許してくれるのか。

一瞬安堵し掛けたピカロだったが、その表情は即座に凍り付く事となる。

「只単に——運が無かった。それだけの事なんだよ」

憂いを帯びた右目を向けながら、ノイトラは冷たく言い放った。

ピカロが現れたのがこんな状況下では無く、もつと前であったのなら、殺す必要性など皆無だった。

恐らくこの御人好しに掛ければ、何だかんだ言いながら態々手間を掛けて躰を行う等の世話を焼き、周囲に馴染める様に尽力していただろう。

だが今となっては何を言おうが詮無き事。

いざ止めを刺さんと、ノイトラは斬魄刀を持ち上げた。

巨大な刀身が作り出した影がピカロへと覆い被さる。見ればその表情は絶望に染まっていた。

だがそれが振り下ろされる直前——横合いから第三者の声が掛けられた。

「何らしくない事してんのよ」

「ッ、チルツチか…」

暫し考える素振りをみせたノイトラは、その持ち上げた斬魄刀を一旦地面へ降ろした。

その刹那——彼の口から小さな安堵の溜息が漏れていたのを、チルツチは見逃さなかつた。

「…つたく」

何年も付き合っていたら、その理由は自ずと理解出来る。時折セフィーロからも話を聞いているので尚更だ。

常時無機質で人形染みており、幾ら会話を重ねても仲が深まる可能性など皆無に思えるウルキオラ。そんな彼の抱く疑問に対し、面倒臭がる事無く丁寧に受け答えをする等、交流を進めていたり。

藍染にも無断で行動した結果、左腕を失う等の重傷を負ったグリムジョー。そんな自業自得とも言える彼を見捨てず、態々ロカに頼み込んで治療の手配をしたり。

チルツチ自身も被害者だが、通路で偶然遭遇した際に挑発と暴言を吐かれた上に、元々相性が悪かったルピ。にも拘わらず任務の際には色々と彼を氣遣つたり、その死にシヨックを受けていたり。

何とも繊細な事である。周囲の事なぞ知つた事かと、心臓に毛が生えているのではと錯覚する程の態度を取つていた過去の姿が嘘の様だ。

普段からこれである。ならば子供の姿をしているピカロを相手にするのは相当辛い筈だ。

しかも理由は不明だが、明らかに仕留めに掛かっていると来た。それが必要だと判断したのであるが、先程の溜息と言ひ、無理をしているのが丸判りだ。

——世話の焼ける奴。

チルツチは溜息を吐くと、ノイトラとピカロの間に入り込む。

「後はあたしが引き受けるから、あんたはあんたのやるべき事をやりなさい」  
「…何だど?」

その行動に、ノイトラは疑問の声を上げた。

だが次の瞬間——離れにて突如として膨大な霊圧の奔流が発生する。

発生地点は二カ所。霊圧の種類は三つ。内二つは覚えのある霊圧であり、ノイトラが現状に於いて何より推移を気にしていたものだ。

「ほら、急ぎなさいよ。間に合わなくならない内に」

「…悪い」

何かを察したのか、チルツチは催促する。

ノイトラは小さく謝罪すると、直後に響転でその場から消えた。

「…あく、もう。こんなのあたしの性分じゃ無いってのに」

——それもこれも全部あいつが悪い。

バツが悪そうに、チルツチは後頭部を掻き毟った。そしてこの場に居ないセフィーロに対して内心で罵倒する。

セフィーロの独断行動の件を言わなかったのは、ノイトラへの気遣いだ。明らかに余裕が無さそうな現状に於いて、別な事を考えさせる訳にはいかないとして。

それにその行動の意図を殆ど知らなかったのもある。チルツチはあれから意識を取

り戻した後、詳細を知る口力を問い詰めたが、返答は答えられないの一点張りで埒が明かなかつた。

その後、チルツチは怒りに任せて治療室を飛び出した。それなら今後も協力者である筈の自分を無視して好きに動けば良い。その代わり、此方も好きにさせてもらおうと。

だが数分経つて冷静さを取り戻した途端、何をすべきか分からなくなつた。

セフィーロを追い駆けるのは論外。あの顔を一発殴りたい気持ちはあつたが、堪えた。流石にチルツチも馬鹿では無い。今後の為に必要だとして、セフィーロは自分自身にしか出来無い事をしに行つたのだと心の隅では気付いていた。

——ならば此方も出来る事をするでしょう。

暫し悩んだ末、チルツチは決めた。ノイトラの補助をしに行こうと。

とは言え、終始彼の後ろを付いて回るといふ訳では無い。簡単に言えば邪魔者や障害物の排除や、後始末等の雑務を引き受けるという意味である。

現状に於いて最たる候補は、眼前で座り込むピカロの最後の個体を完全に始末する事だろうか。

「さて、と。覚悟は良いかしらっ？」

「ッ!？」

斬魄刀の柄に手を掛けるチルツチ。

それを視界に入れたピカ口は、反射的に両目を閉じてその場に丸まった。

だが其処でチルツチの手が止まった。これで本当に良いのだろうか。

此処でピカ口を殺せば、結局のところノイトラはシヨックを受ける事は間違い無い。

逆にチルツチの手を汚させてしまったと、余計な罪悪感を抱く可能性すらある。

彼女自身としては、別に必要とあらば誰を手を掛けても気にしないのだが。

ならばどうすべきか。今一度、チルツチは悩んだ。

ノイトラに何の影響も与えずに済む最善の手は何かと。

「…ねえ、あんた助かりたい？」

「……………」

不意に放たれた問い掛け。

ピカ口は恐る恐る目を開けると、それを発したチルツチを覗き見た。

「…違ったわね。ノイトラに許されたい？」

「——ッ!!」

訂正された質問の意味を理解すると、少女は首を激しく上下に振って肯定の意を示す。

この様子から解る通り、今ピカロが最も恐れているのは自身の滅びでは無い。ノイトラの存在そのものだ。

彼の圧倒的な暴力によって齎されたものは、もはやトラウマにも等しい。

故にピカロは懇願した。あのノイトラから逃れられる、または許されるのであれば、自分達は何をしても良いと。

「なら今から言う事を絶対に守りなさい。それが出来るなら、あたしからノイトラに言つてあげる」

「うん! ぜったい約束する!!」

「…こいつ等に一体何したのよ、あいつ」

——マジギレして帰刃でも出したのだろうか。

ピカロの素直過ぎる反応に、チルツチは呆れた様な表情を浮かべた。

余程恐い思いをしたのだらうとは理解していたが、まさかこれ程の反応を示すとは予想外である。

チルツチはピカ口の封印される前の姿を知っている。だがその頃から、誰の言う事も聞いた試しが無かったのを覚えている。無論、藍染は別格だった様だが。

しかもなまじ力がある分、少しやんちゃをするだけで相当な被害を周囲に齎していた。反撃しようにも、その不死性がネックとなつて殺る気も削がれる。

所詮は退屈凌ぎという、配下に加えた事情が事情なのか。稀に小言を言う程度で、直属の上司である筈のバラガンは半ば放置に等しい扱いをしている始末。

これでは封印されるのも納得だ。

「……この後何か食わせてあげる。だから耳の穴かつぼじつて、良しく聞きなさいよ?」  
「ほんと!? わかった!!」

しかし幾らノイトラの御蔭で素直になつていふからと言って、只あれこれと命令するのも宜しく無い。

少しは御褒美を与えても良いだろう。そう考えたチルツチは、治療室にある冷蔵庫という機械の中に、色々現世の食料が保存されていた事を思い返しながら言った。

するとピカロは先程まで抱いていた恐怖も忘れた様に、満面の笑みを浮かべた。チルツチの選択が吉と出るか凶と出るか。それは誰にも判断出来無い。

そしてこの時、彼女は気付いていなかった。己が無自覚の内に飴と鞭を使い分けていた事に。

その結果、ピカロからの好意が凄まじい勢いで上昇していた事を。

虫の息と化しているルキアの首元目掛けて、ゾマリは迷い無く斬魄刀を振るった。寸分の違いも無く、その刃はルキアの命を完全に刈り取らんと迫る。

「な……!?!」

だが次の瞬間、その刃は既の所で急停止する。

見れば柄を握っている右腕へ、何か霊子で構成された紐の様な物が巻き付いていた。

「これは…鬼道か!!」

その霊圧が死神のものである事に気付いたゾマリは、即座にその正体を悟った。

同時に焦る。紐の霊子構成は単純だ。その事から、これは恐らく低級に位置する程度の縛道であると考えられる。

だが強度が想像以上に高い。これを引き千切る為には、ゾマリであっても相当な力を入れる必要があつた。

これは縛道の四——“這繩”<sup>はいなわ</sup>。縄状の霊子を対象の腕に這うように纏わりつかせ拘束する低級縛道だ。

だがその拘束力は非常に弱く、強者であれば簡単に引き千切れる程度でしか無い。

主に敵の隙を作り出す為に用いられ、ルキアもアローニーロとの戦いの中で一度使用している。案の定、即座に破られたのだが。

しかし此処で一つ気にすべき点があつた。

鬼道の強さというものは、それを行使する者の霊力に比例する。

例え低級であつても、隊長クラスが唱えるものは全く別次元の威力を持つのだ。

ゾマリは自身の右腕を捕えているこの這繩の強度が高いと判断した。

つまりこれを行使した者は、少なくともルキア以上の霊力を持つっていると推測出来る。

「〃——雷鳴の馬車 糸車の間隙 光もて此を六に別つ」

「ツ!？」

何処からともなく聞こえて来たのは、若い男の声。

それが鬼道の詠唱である事は、考えるまでも無く理解出来た。

「〃縛道の六十一——六杖光牢」

直後、ゾマリの胴体へ六つの光の帯が突き刺さる。

すると彼の身体は身動き一つ取れなくなつた。

「しまっ…!!」

先程の這繩とは一線を画す拘束力を持った縛道をその身に受けたゾマリは、自身の背中から大量の冷や汗が噴き出すのを感じた。

確かにこの縛道も、破ろうと思えば破れる。だがその為には全力での抵抗に加え、大凡五分程度の時間が必要だった。

例え一瞬のみであつても、確実な隙というものは致命的以外の何物でも無い。

この状態では帰刃どころか、真面な戦闘すら困難。為す術も無く廻り殺しにされる未来しか見えなかった。

「——暫しの間、そうしているが良い」

焦燥に駆られるゾマリへ投げ掛けられる平坦な声。

すると次の瞬間、眼前で倒れ伏しているルキアの姿が掻き消えた。

咄嗟に探查神経のみを発動させたゾマリは、視線を横へ移動させる。

まず真つ先に視界に入ったのは、死覇装の上に着用されている、護廷十三隊の隊長である事を示す袖無しの羽織——背中の中心部へ刻まれたひし形の枠の模様、その内の

六の字が特徴的な「隊長羽織」。

見るからに高級感溢れる材質で作られているであろう、首元に巻かれた青磁色の襟巻——実は尸魂界にて家十軒にも相当する値打である。『銀白風花紗』。

頭部の中心と右側頭部に付けられた、計五個の髪留め——貴族のみにしか着用が許されないという髪飾りである。『牽星箱』。

そしてその両手に抱えられているのは、先程姿の消えた筈のルキア。

「おのれ…!!」

悔しげな声を漏らすゾマリを一瞥すると、青年——白哉はその場から瞬歩で跳んだ。

そして白哉が移動した先は、先程までルキアがア—ロニー口と激闘を繰り広げていた宮の中。

「……………」

白哉は無言のままルキアを寝かせると、その右手を傷口に当てた。

次第にその手が柔らかな光を放ち始めると、瞬く間にルキアの傷が塞がって行く。

これは回道だ。基本的に不得意な分野が無い優秀な白哉の手に掛ければ、並みの四番隊隊士すら軽く上回る治癒能力を發揮出来る。

「…う…う…」

次第にルキアの口から唸り声が漏れ出す。

傷が癒えるのと合わせ、その意識も戻り掛けているのだろう。

そして予想通り、ルキアはその閉じていた瞳をゆつくりと開き始めた。

「…兄…様…?」

「…ああ」

大切な義妹が無事だったにも関わらず、白哉は眉一つ動かさない。

だが心なしか、その瞳が僅かに輝いた様に見える。

「情けない…姿を…ゴホッ!!」

「無理をするな」

敬愛する義兄に無様な姿は見せられないと、ルキアは上体を起こそうと、身体に力を入れる。

だが肺に血が入り込んでいたのか、深く息を吸った途端、激しく咳き込み始める。途中まで持ち上がっていた上体は、再び地面へと倒れた。

「力を抜け。楽にしている」

「は……い……」

慣れていないのか、ぎこちなさが目立つ。だが大切な物を扱う様な優しい手付きで、白哉はルキアの頭を撫でた。

——後は自分に任せて、今は休め。

傍から見ると、白哉はまるでそう言っているかの様に見えた。

御蔭で安心感を得たのか、やがてルキアの瞼が閉じ始める。

やはり先程までの消耗が響いたらしい。

気付けば白哉の眼前からは小さな寝息が聞こえていた。

「——油断しましたよ。ですが次はありません」

完全に治療を終えた白哉は、再びルキアを抱えると、壁際へと移動させる。

其処で小さく安堵の溜息を漏らした瞬間、拘束を破つたらしいゾマリが、穴の開いた壁から室内へと侵入。白哉の後方へと立った。

「申し遅れましたが、私は第七刃、ゾマリ・ルルー。さあ、名乗りなさい侵入者」

——あのまま自身に止めを刺さなかった事を後悔させてやる。

内心でそんな怒りを滾らせながら、ゾマリは間髪入れずに名乗りを上げると、白哉にも自身と同じ事をする様に催促する。

白哉は静かに背後へと振り向くと、その視線をゾマリに向けた。

「…一つだけ聞かせてもらおう」

「？」

「ルキアをやったのは…兄けいか？」

だが白哉は名乗り返すどころか、突如として質問を投げ掛ける始末。実に失礼極まりない態度だ。にも拘わらず、当事者は一切表情を変えずに平然と佇んで居る。

——厚顔不遜、というべきか。

ゾマリは白哉の態度からそう判断する。

とは言え、礼を欠いた相手に過剰な反応を示しては、逆に此方の品位が問われるというもの。

ならば致し方無いと、ゾマリは自身を納得させた。

暫し間を置いた後、彼は素直に返答を返した。

「…ええ。ですが彼女は戦いの直後で消耗していた様でしてね…随分と簡単でしたよ」

アールローロとの戦いが無ければこうはいかなかつたと、そう言っている様にも聞こえる。

だがゾマリの本心としては、そんな事は微塵も考えていなかった。

例えルキアが全開の状態で交戦していたとしても、自身の勝利という結果は決して揺るぎはしないと。

「ついでに止めも刺す心算でしたが、貴方の邪魔が入った次第で…」

「———そうか…」

それを悟ったのか如何かは不明だが、白哉の纏う空気に変化が現れた。

全身から滲み出す霊圧は激増し、しかも昨に周囲を刺激する攻撃性を持ち始める。

冷静そのものだった筈の表情は僅かに変化。目は細まり、眉間に皺が寄る。

つまるところ———激怒していた。

この様子から判る通り、一見すると白哉は常時冷静沈着で、感情の起伏が少ないと思われがちだが、その実は相当熱し易い性格をしている。

まだ彼が少年だった頃。鍛錬中にも拘らず何かと悪戯を仕掛けて来る夜一に對し、去り際に投げ掛けられた挑発に乗り、ムキになって体力の限界まで彼女を追跡し続けた事もあった。

そんな白哉が何より大切に、誇りに思っているルキアが傷付けられたのだ。どんな反応を示すかなど、容易に想像が付く。

「散れ———せんほんざくら千本桜———」

白哉は右手で斬魄刀の柄を握ると、迷わず抜刀。

刀身が鞘から完全に抜かれると同時に、彼は間髪入れずに解号を唱え、始解を解放した。

刀身が無数の花卉へと枝分かれし、桜吹雪の如く周囲へと舞い散る。

その数は名の通り千。その無数の花卉は瞬く間に宮の中へと拡散した。

「な…!?!」

ゾマリは瞠目した。

白哉の斬魄刀の能力は知らないが、本能が警報を鳴らしたのだろう。気付けば反射的に身体が動いていた。

それは十刃最速の名に相応しい、音も無く消え去る様な凄まじい速度と技量を誇る響転。他の十刃の中でこれと同じ芸当が出来るのは、とある例外を除けば誰も存在していない。

だが白哉も甘くは無い。

考えても見て欲しい。あの尸魂界随一の速度を誇る夜一を知る彼だ。歩法の違い等、

多少誤差があれども、捉えきれぬ訳が無かった。

「ッ!!?」

ゾマリは細かな響転の連発により、花卉の少ない範囲へと逃れる。

だが次の瞬間、彼の全身はズタズタに切り刻まれていた。

見ると白哉はゾマリの居る位置へと向かい、その刀身の無い柄を振るっていた。

“千本桜”は千にも及ぶ刃を操る分、相当な制御能力を求められる。その為、刃の移動速度には限界があった。

だがそれは柄を直接振るう事で改善される。本来であれば白哉の念で操作する無数の刃だが、敢えて直接的な動作を加えるだけで、その精度と速力が倍加するのだ。

「…何?」

だが白哉は突如として不審な声を漏らす。

何故なら先程切り刻んで仕留めた筈のゾマリの姿が、まるで映像がブレるかの様にして消えてしまったのだから。

「驚きましたか？　これは「ヘメロス・ソニード双児響転」。通常の響転に特殊なステップを加えて分身を作り出す、十刃最速である私のみが可能とした歩法です」

表情を変えず、だが何処かしてやったりという雰囲気醸し出しながら、ゾマリは白哉の周囲を駆け回りながら説明する。

それが気に障ったのか如何かは不明だが、白哉は更に花卉を散開させる。盾の代用としてなのだろう。ルキアの周囲にも配置しながら。

「…成る程。これでは迂闊に近寄れない」

——正に攻防一体と言うべきか。

ゾマリは思わず内心で舌打ちした。

この状況では幾ら響転を多用しようが意味が無いと。例え強引に攻撃を仕掛けに向かったとしても、自ら無数の刃の中に飛び込む様な真似にしかない。

しかも最も有効であろうと考えていた——ルキアを人質に取る作戦すらも不可能となつてしまった。

「随分と臆病な真似をするのですね。余程その娘が大切と見える」  
「……………」

其処でゾマリは即座に作戦を変更し、直ぐ様実行に移す。

内容は全く以て単純。挑発する事で白哉の態勢を変えさせようと試みたのだ。

「しかしそんな事をしていては、いつまで経ってもこの私に勝てませんよ。…さあ、どうしますか隊長さん？」

——意図が透けて見える物言いだ。

白哉はゾマリの言葉を耳にしてそう思った。

恐らく此方が動きを見せた途端、その脅威の速度を誇る響転を用いて攻め入る。また  
は花卉の防御が薄くなった途端、ルキアの身柄を確保して人質に使う魂胆か。

だが——白哉は敢えてその挑発に乗る事にした。

通常であれば、其処で自身と対等であるかのように振舞っている勘違い野郎に対し、  
それが如何に間違っているかを語った後、圧倒的な力を以て叩き潰すべきだ。

だがそんな親切を働いてやる義理は此方には無い。

奴は自身の誇り<sup>ルキア</sup>を傷付けるといふ、重罪中の重罪を犯した張本人だ。許せるものか。

「…良いだろう」

「ん？」

直後、白哉は瞬歩でルキアの元へと移動。空いた左手で再び彼女を抱え込むと、周囲に散らしていた花弁を元の刀身の姿へと戻した。

その行動を見たゾマリは首を傾げる。

ルキアを抱えた意図は解る。手の内にあつた方が護り易いという事だろう。

しかし何故始解を戻したのが不明。まさか自身の響転の速度を見ておきながら、通常状態でも対処出来ると考えた訳では無い筈。

「…その身に直接刻み込め」

困惑するゾマリを余所に、白哉は斬魄刀の柄を逆手に持つと、その刀身を下に向ける。刹那、柄を握っていたその右手が開き、斬魄刀が落下する。

そのまま地面に突き立つかと思われたが、そうはならなかった。

しかも落下速度もおかしい。明らかに緩やかで、この時点で重力法則に従っていない状態にあるのだと判断出来る。

「幾ら足掻こうが覆る事の無い——私と貴様の格の違いというものを」

怒りの度合が上がっているのか、もはやゾマリに対する呼称も変化していた。

自身と同等か、ある程度認められた目下の相手に対しての敬称として、白哉は「兄」という呼称を使う。

つまり彼の中では、もはやゾマリ・ルルーという存在はそう呼ぶに値しない者と化していたのだ。

「——」

刀身が地面に触れた途端、その地面が水滴の垂れた直後の水面の様に波打つと、静かに吸い込まれる様にして、斬魄刀全体が沈んで行く。

呆氣に取られた様に、ゾマリは只々それを眺め続ける。

——後に其処で即座に動かなかった事を心底後悔する事になるとはいざ知らず。

「なんだ…それは…」

ゾマリは喉の奥から絞り出す様にして呟いた。

やがて白哉の周囲の地面より現れたのは、無数の巨大な刀身。

百は優に超えているだろうか。それが一体如何なる攻撃能力、手段を持っているのか  
想像も付かない。

だがその疑問は即座に解消する事となる。

「〃散れ——〃」

始解と同じであるその解号を耳にしたゾマリは、其処でやつと気付いた。

——まさかあの刀身全てが枝分かれするとかいうのか。

慌てて帰刃の為の構えを取らんとするが、最早全てが手遅れだった。

「〃千本桜景厳〃」

始解時の千を超えた数億にも及ぶ刃が、部屋中に舞う。

その様は桜吹雪とは程遠い、花卉の濁流。

やがてそれは宮全体を粉々に切り刻みながら、ゾマリ目掛けて飛来し始める。

「ツ!!!  
“鎮ま——”」

背筋にこの上ない悪寒を感じたゾマリは、自身の斬魄刀を横に倒し、胸の前で浮かせる。帰刃の為の儀式の為に。

ゾマリの帰刃はやや特殊で、解放する為にはやや面倒な準備が必要となる。理由は肉体に多大な変化が起こる為だ。

彼の帰刃形態は、下半身が幾つもの人面を持つ巨大な南瓜の様に変化する上、存在する計五十以上の目に見詰めた物の支配権を奪う能力——“<sup>アモール</sup>愛”という特殊な能力が付与される。

様々な能力を保持しているザエルアポロも、帰刃の際には態々斬魄刀の刀身を飲み込み、身体全体が膨張した後、帰刃形態へと至っている。

備えている機能が多い機械程、起動に時間が掛かる。つまりはそういう事だ。

それを考慮すると、アークニーロも前述の二人と同列に見えるが、実際は異なる。

彼は元より不完全な破面だ。しかも平常時に海燕の姿と能力を模した実績から、既に解放以前からその能力を使用出来ている事が判る。

ある意味、普段から半分帰刃していると言つても良い。故に帰刃の際も特に手間が掛かる事は無いのだ。

巨大化、鎧を纏う、腕が倍になる、羽や尻尾が生える等。解放後は身体に余り大きな変化も起こらず、身体能力が上がる程度の変化のみの場合。

またはハリベルやバラガンといった破面化の完全な成功体の様に、解放せずとも日常的に能力を使用可能としている破面も、特に帰刃の際の制約は無い。

故にゾマリには、無拍子で帰刃する様な芸当は到底不可能だった。

「…何……だと…」

案の定、ゾマリが真面に取れた行動は斬魄刀を浮かせただけ。

次に足を肩幅まで開き、その両手を合わせる為に腕を上げた直後だった。

ゾマリの周囲を花卉の濁流の一部が一周したかと思うと、彼の両腕の肘から先が何処にも見当たらなくなっていた。

ガシヤリと、胸の前で浮かんでいた斬魄刀が地面へと落下する。

——あの一瞬の内に、自身の腕を塵も残さぬ程に切り刻んだというのか。

ゾマリは完全に消失した己の前腕を呆然と眺め続ける。

「貴様の階級、異名、能力。全てに於いて興味は無い」

「……」

次の瞬間、数億の刃が彼の周囲を完全に取り囲んだ。

「帰刃は不可能。『双児響転』も無意味。

もはやこの勝負の行方は見え切っていた。

「貴様に残された道は只一つ。私の誇りを傷つけた事を……心の底より悔いて死んでゆく事だけだ」

「……そおおおおおおおおお!!!」

全ては白哉が始解を戻した時点で動かなかった事。そして自身の帰刃が手間と時間が掛かるものであった事。

それ以前にこの宮の中へ移動する際、事前に帰刃しておくべきだったのだ。

白哉が隊長である事は理解していた。ならば何故そうしなかったのか。

表面上は対等な相手だと考えつつ、その思考にそぐわない行動を取っている事から、やはりゾマリは少なく無い慢心を抱いていたのだろう。

結局のところ——ルキアに手を出した時点で、既に運命は決まっていたのかもしれない。

そして史実通りに事が進んでいたとしても、単に早いか遅いかの差でしか無かったのだが。

「——」  
ごうけい  
 吭景・千本桜景巖

叫び声を上げるゾマリを取り囲んでいた全ての刃が、次第に球体状へと変化。容赦無く内側に居る彼を全方位から押し潰し潰しに掛かる。

加減を一切捨てた白哉の正解の前に、通常状態の鋼皮で対抗出来る筈も無い。

断末魔の悲鳴を上げる余裕すら与えられぬまま、ゾマリは瞬く間に全身を斬碎された。

「…刃の吭のどに、？まれて消えろ」

やがて無数の刃が拡散すると、その中心には肉片一つ残っていないなかった。  
十刃最速の名を冠する男。第7十刃、ゾマリ・ルルー。  
形は違えど、確かに彼は最速であった。

## 第五十話 虚無と給仕と、妖婦とかませと、邪淫と魔人と

...

突然の藍染からの召集。それを終えたウルキオラは帰路に着いていた。

とは言っても、向かう先は自身の宮では無い。召集前まで身辺警護等を目的に待機して居た織姫の宮へである。

急いでいるのか、移動速度はやや早足。だがその顔は斜め下を向いており、何か考え事をしているのが丸判りだ。

「……………」

その内容は藍染に言われた事と、自身の他にも呼ばれていたもう一人の人物であるスタークについてだった。

召集の主な用件については、スタークも交えて聞かされた。

恐らくは護廷十三隊との最終決戦になるであろう、間も無く実行に移される予定である現世侵攻作戦。藍染が話したのは、その詳細の打ち合わせだ。

スタークは侵攻組のリーダーとして、他のメンバーであるバラガンにハリベルと上手く立ち回る事を命令された。

厳密に言うとは、出来ればそうしてほしいと頼まれた形ではあったが、藍染に対して多大な恩義を感じているスタークが断れる筈も無く、実質は命令に等しかった。

当人は多分バラガンが仕切りたがる筈だとして、全面指揮についてだけはやんわりと断つたが。

残るウルキオラはと言うと、上位十刃三名とは別に虚夜宮へと残り、侵入者を殲滅するという任務を言い渡された。

現在虚夜宮に侵入している一護を含めた五名の他にも、ほぼ確実に護廷十三隊から援軍が来る。

自分達の出発と同時に、彼等が虚園まで渡つて来た道を塞いで幽閉する。その後、一人一人確実に仕留める様にと。

ちなみに帰刃も許可が降りている。

此処まで聞いた限りでは、特に不自然な点は無いらしいに思える。

だがウルキオラが気が掛かったのは、その話が終わった後。

藍染の自室から退室したのはウルキオラのみで、何故か途中でスタークは呼び止められて残ったのだ。

ウルキオラは視線で藍染に問い掛けたが、大した事では無いから気にしなくて良いと言われ——現在に至る。

第1十刃の彼にしか話せない内容となると、相当重要な案件なのだろう。

正直、詳細を知りたくないと言えば嘘になる。

ウルキオラは普段より、藍染から相当な優遇措置を受けている。頻繁に呼び出されては、他の十刃には知らされない情報等を与えられたり等、色々。

必要とされないよりははずっと良いとして、ウルキオラ自身は特に不満は抱いていない。

だが今回の様な事は初めてだった。藍染と二人きりで話していた途中、東仙やギンといった副官が報告に来た時も、退席しないで構わないと止められ、そのまま一緒に報告を聞いていたりしていたにも拘らずだ。

一体何故なのか。そう悩みながら歩いていると、気付けばウルキオラは目的地の近くまで到着していた。

だがその直後、決して見逃す事の出来無い異変に気付く。

織姫の霊圧が無いのだ。

別な事に意識を向けていたせいとか、探查神経が疎かになっていたらしい。

だからと言ってこのウルキオラが焦る筈が無い。

至極落ち着いた様子で、部屋の入口の扉まで移動する。すると其処でもまたもう一つ異常を発見する。

「…鍵が、開いている？」

鍵を所持しているのは、世話役たるウルキオラにノイトラ、そしてこの宮担当の雑務係であるファエナの三人のみ。

ノイトラは現在忙しく動き回っている。そして自分は先程まで藍染の元に居たし、鍵は確り懐に仕舞ってある。

ならば必然的にこの扉を開けたのはファエナのみに絞られる。だが所詮彼は只の雑務係であり、扉を開ける際は許可が必要。本人の性格的に考えても、無断でそれを行うとは思えない。

「一体誰が……ツ!？」

ウルキオラは一度部屋から出ると、自身が通つて来た別の方向にある通路等を集中して見渡す。

すると見付けた。壁に付いた僅かな血痕と、極めて微弱な霊圧を。

近付いてみると、其処には先程候補として挙げていたフアエナが地面に仰向けに倒れていた。

彼の身体からは夥しいまでの血が流れ出しており、致命傷であることは一目瞭然。

「ウル…キオラ…様…」

霊圧反応から息があるのは判っていたが、僅かに意識も残っていたらしい。フアエナは掠れ声でウルキオラの名を呼んだ。

「言え。何があつた」

「鍵を…『崩姫』を奪われました…!」

膝を折りながら問い掛けるウルキオラへ、フアエナは息も絶え絶えながら必死に返答した。

その表情は何処か悔しげに歪んであり、忸怩たる思いがこれでもかと伝わって来る。通常であれば、失態を犯してしまった自身に下されるであろう罰を恐れ、口を噤んで

しまうところだ。力の無い雑務係の破面であれば尚の事。

だが今のフアエナに怯えは一切感じられない。

ウルキオラはその事に疑問を抱いた。

彼は知らないが、実はこのフアエナ。さり気に憑依後のノイトラの影響を受けていた一人でもあつたりする。

ヤミーと同様、恐怖の象徴でもあつたノイトラ。彼の行動や態度が変化して行く様を、フアエナは何度も目の当りにして来た。

中でも最も印象的だったのは、自身やその周囲の不手際を素直に認めた上で、相手が誰であろうと一貫して謝罪を行った部分だ。

今迄の傍若無人な振る舞いに対して。または仲間内でのトラブルによる二次災害や、鍛錬時に建物の一部を破壊してしまつた事。何度頭を下げられたか正確には覚えていない。

——あんな人でも、本気になればこんなにも変わるのか。

そんなノイトラの姿や、彼と共に練磨を重ねる十刃落ち達等を目の当りにしたフアエナは、勇気を貰うと同時に思い出した。

自身も破面化したばかりの頃は、当時 エスパーダ “刃” と表記されていた、現在で言う十刃に

登り詰める事を夢見ていた事を。

だがその余りの壁の高さを思い知ってからというもの、時の経過と共にその思いは薄れ、何時しか破面の中では最底辺の立場である雑務係となっていた。

以降、フェアナは自身の役割を果たしつつ、空いた時間を只管に己の力を磨く為に費やした。

すると気付けばその實力は、遊撃要員の破面の平均レベルに及ばないまでも、並の雑務係の破面を凌駕するまでに登り詰めていた。

「無念です……ッ！」

だが——現実是非情。

下手人に鍵を渡す様脅された直後、即座に斬魄刀を抜刀したまでは良かった。

次の瞬間、その刀身は素手で押し折られ、唯一の武器を失ったばかりか、切り札たる帰刃すら封じられる。

その後は語るまでも無い。羽虫を潰すかの如く、ものの数秒で蹴散らされた。

——時間稼ぎすら出来無いとは。

理由としては単純に相手が悪過ぎただけなのだが、それでもフェアナは己の中から湧き出る感情を止められなかった。

今迄の積み重ねは何だったのか。何て情けない姿だと。

「誰がやった」

「グリムジョー…ジャガージャック…!!」

「!!」

その口から飛び出した下手人の名に、ウルキオラは瞠目した。

——成程な。

そして即座にグリムジョーの行動の意図に気付く。

織姫を連れ出した理由は、恐らく一護と完全決着を付けるため。

一護は虚夜宮に侵入後、直ぐ様十刃落ちの一人と交戦し、その中で負傷している事は藍染の話の中で把握済だ。

それを織姫に治療させて万全の状態まで戻し、対等な条件下で戦いたいのだろう。

「力及ばす…申し訳…(´)…(´)…」

ファエナは謝罪の言葉を言い切る事が出来無かった。如何やら息絶えたらしい。彼

から発せられていた靈圧は完全に消えている。

見れば彼の右手に握られているのは、刀身が半ばから折れた斬魄刀。

ウルキオラはその様子から、ファエナが抵抗を試みた事実に気付いた。

「…無謀な真似を」

そう呟きつつも、ウルキオラは不思議とファエナのそんな姿を愚かしいとは思えなかった。

グリムジョーとの実力差など、説明されるまでも無く理解していただろう。にも拘らず、命尽きるその最期の瞬間まで己の責務を果たさんとした生き様は、組織の一員として実に模範的で誇り高い姿だと。

当然、ウルキオラは戸惑った。自身はこんな事を思う様な者だったかと。

だが現状では幾ら考えても埒が明かないとして、一先ずその場から立ち合がる。

そして織姫の宮とは別の——先程爆発的に上昇したグリムジョーの靈圧を感じた方向へと歩き始める。

何にせよ、グリムジョーの独断行動は見逃せない。直接会い、この落とし前を付けさせるべきだろう。

胸の内に残るモヤモヤとした何かへの考察を後回しにしながら、ウルキオラは行動を開始した。

治療室では、ロカが先程焦る様に入室して来たドルドーニと、彼に担がれているガンテンバインの治療に当たっていた。

主に重傷なのはガンテンバイン。腹部を中心に酷い打撲傷があり、内部では複数の骨折と内臓の損傷が起きているという惨状。

だが奇跡的と言うべきか、致命傷では無い。恐らく手加減されたのだろうというのが、ロカの見立てだった。

一方その反面、ドルドーニについてはそれ程重くは無かった。

如何やら事前に簡易的な治療を受けていた事が功を制し、後は簡単な措置を施すだけ

で十分。

しかし、ロカは其処で気付いた。その傷があつたであろう部分から感じる懐かしい人物——ネリエルの霊圧に。

彼女が生きていた事に一瞬安堵するが、同時に疑問も浮かんで来た。

何故彼女がドルドーニに治療を施したのか。今更この虚夜宮に戻つて来た意図は何なのか。

内心頭を捻っていたロカだったが、一先ずそれを後回しにする。

今の自分には他に優先すべき事があるではないかと。

思考を切り替えるや否や、ロカは使用した治療用具を所定位置に戻すと、徐々に全身から霊圧を解放し始める。

「…如何かしたかね貴婦人<sup>カバジェーロ</sup>? とうか、早く治療を済ませてはくれないだろうか。吾輩は一秒でも早く向かわねばならぬ場所があるのだが…」

——事は一刻を争う。

ロカが突如として見せた変化に首を傾げながら、治療台に腰掛けたドルドーニは頼み込んだ。

その理由は勿論、封印の解けたらしいピカロを相手する為に残ったノイトラの援護へ向かう為だ。

移動中にチルツチと擦違いになった事は知っている。だが約束をした手前、それを此方の勝手な判断で破るのは自身の信念に反するとして。

「ドルドー二様が向かわずとも、チルツチ様御一人で十分かと」

「しかしだね…」

「それに——」

頑なに己の意志を曲げないドルドー二を余所に、ロカは突如として掌に“反膜の糸”を集束させる。

やがてその上に形成されたのは、一本の斬魄刀。

「私には、これから遣らねばならない事が御座いますので」

「なッ!!」

ロカは斬魄刀を左腰に差し込むと、出入口口である扉まで移動し始める。

当然、ドルドーニはその阻止へと動く。

今の虚夜宮は危険だ。第一に侵入者、そしてその迎撃に出払っているであろう遊撃要員の破面達と十刃達だ。

侵入者は計五人。一護についてはあの性格故に大丈夫だろうとは思いますが、他までは知らない。もしかすれば破面は全て敵だと認識している好戦的な者も居るかもしれない。そんな者と遭遇してしまえば危険だとして。

そして何故仲間である筈の破面達も警戒する必要があるのか。移動中に何人かと擦違ったが、彼等は皆総じて何処か張り詰めた様な雰囲気醸し出していた。

恐らく侵入者の影響だろう。そんな所に、虚夜宮でも底辺の立場にある雑務係の破面であるロカが現れれば如何なるか。最悪、視界に入っただけで目障りだと始末されてしまう可能性もある。

「待ちたまえ!! 今外に出るのは危険——ぬおおおッ!!?」  
「…失礼致します」

治療台から降りたドルドーニは、ロカへと向かって駆け始める。

だがそれは叶わなかった。見ればドルドーニの頭部を除いた全身を、光を放つ布の様

な物が包み込んでいたのだから。

布の出所を辿ると、其処には口カが此方へ向けている右掌が。

彼女がした事は単純。『反膜の糸』でセフィーロの能力を再現し、それでドルドーニを拘束したのだ。

「後で御叱りは受けます。なので今は御容赦の程を…」

「…ッ、止——!!」

ドルドーニが声を荒げた直後、治療室の扉が開いた。

其処から入室して来たのは、先にノイトラの元へと向かった筈のチルツチ。そして彼女の右腋には、ピカ口の群体の内の最後の生き残りである少女の破面が抱えられていた。

「…何やってんのあんた？」

眉を顰めながら、チルツチは眼前に立つ口カへと問い掛けた。

その反面、荷物の様に扱われている筈のピカ口は笑顔満点。

恐らく此処に移動する際に使用された響転の連発の影響か、アトラクションを経験した様な気分になっているのだろう。

「お姉さんだれ〜?」

「ちよつと黙つてなさい」

「はい」

厳しめな口調ではあったが、ピカ口は素直に従った。

完全にチルツチへと従順になっている。

傍から見ると、まるで母親と娘の様にしか見えない。

「私用で…少々外出を」

「どこまで?」

「…申せません」

あやふやな返答に対し、チルツチは即座に追及する。

だが口力は口を濁すどころか、返答自体を完全に拒否するという暴挙を見せた。

そんな彼女の瞳には、生半可な事では揺るがない、確固たる強い意志が宿っていた。暫しの間睨み合う二人。

やがて折れたのは——チルツチの方だった。

「ハア…冷蔵庫の中身貰うから」

「…はい、どうぞ御自由に」

チルツチは溜息を吐くと、ロカの横を通り過ぎる。

見逃してやる。好きにしろ。つまりその態度はそう言う意味だ。

ロカはチルツチの背中へ小さく礼すると、そのまま治療室を出て行った。

「おい御嬢さん!! 何故止めなかった?! 今の虚夜宮は危険だというのに!! とうるかその腕に抱えたそれは悪戯小僧ではないか!？」

「ほっときなさい。ああなつたら絶対折れないわよ。それとピカ口こいっについては色々解決済みだから安心しなさい」

ロカの身が危険に晒され様が如何でも良い、とでも言わんばかりの冷淡な反応に、ド

ルドーニは更に怒りを滾らせた。

だがそれは直後に収まる事となる。

「それに口力あいつ——本気出せばあたしより強いし、なんも問題ないでしょ」

「……は……？」

「心配するだけ無駄よ」

ドルドーニは口を半開きにしたまま硬直した。今チルツチは何と言ったのかと。

彼女が未だ十刃落ちだった頃、三人の実力はほぼ均衡していた。

だが今は如何だ。ノイトラの従属官となって以降、その実力は昔とは比較にならぬ程の域まで磨かれた。

もはやドルドーニとガンテンバインの二人掛かりでも、今のチルツチから勝利を挽ぎ取るのは非常に困難だろう。

主と共に試行錯誤を繰り返しながら、日々の過酷な鍛錬を続けた結果か。元の素質もあつただろうが、妥当な結果とも言える。

そんなチルツチが、自身より強いと素直に認めた。しかもあの戦いとは無縁そうな口力をだ。

ドルドーニは全く理解が及ばなかった。

現在進行形で自身を拘束している布については知らないが、何処か異質で凄まじい力を感じ取れる。解放すればより強力になるのは間違いない、その程度は予測出来た。

だが当然、それだけではチルツチより口力が優れている理由にしては弱い。

「それは……御嬢さんが未解放の状態であればの話だろう……？」

「……あんまり詳しく言いたく無いんだけど」

恐る恐るといった様子で、ドルドーニは問い掛ける。

それに対し、チルツチは露骨に態度を豹変させた。

眉間には皺が寄り、口元はへの字を模っている。

明らかに不機嫌だ。恐らくは本当に知られたく無い内容なのだろう。

ドルドーニは謝罪すると同時に質問を撤回しようとするが、それよりもチルツチが口を開くのが早かった。

「……互いに帰刃した上での話だったの！ ホンツツツトにもう口力あっちもセファイこっー口ちも、ノイトラと同じ階級詐欺の連中ばかりで嫌になるわ!!」

「んな…」

——もう大概にしろ。

チルツチは最後にそう言うと、激しく地団駄を踏み始めた。

この時点で、ドルドーニは完全に言葉を失った。

「あゝあゝ、つ、思い出しただけでもイライラしてきた！　こうなったら冷蔵庫の中身空にする勢いで消費してやらア!!」

「お肉！　わたしお肉がいい！」

「お子ちゃまは野菜で十分よ」

「ええく!?　チルツチのいじわるく!!」

ピカロを弄る事で自身の気分転換を図りながら、チルツチは冷蔵庫——所謂業務用に分類される巨大なその扉に手を掛けたのだった。

——それから数十分後、チルツチは本当に冷蔵庫の中身を空にしてしまい、後に冷蔵庫を管理している人物から極めて手痛い折檻を受ける事となる。

第8十刃の拠点の宮へと続く通路を、ロカは自身の白衣のボタンを外しながら移動していた。

やがてその白衣の下から、機動性を重視しているだろう黒のスポーツインナーが露になる。

くつきりと出たボディラインは、やはり全体的に細い。

だがそれは只痩せているのでは決して無い。良く良く見れば二の腕の部分等は微妙に筋張っており、意外と筋肉質である事が判る。

つまりロカのその細さは体脂肪の少なさから来ている訳では無く、全身が無駄無く引き締まっている為。

以前までは確かに只の痩せ型で、そして見た目通り華奢な身体だった。少し力を入れてその腕を握れば、容易く折れてしまうのではと錯覚する程に。

その様な状態では拙いとして、セフィーロはロカの身体作りを提案し、実施。ものの数ヶ月でロカを理想的なボディへ進化させたのだ。

ちなみに参考資料としたのはネリエル。

秘密裏に「反膜の糸」を接続し、彼女の身体の情報収集。そしてそれを最終到達地点として設定したのである。

——ちなみに胸については、身体のバランスが崩れる上に視界の一部を遮るとして省いていた。

当時のロカは、セフィーロの考えが理解出来無かった。それに無駄だらけであると。収集した情報を元に、自身の身体を作り変えてしまえば手っ取り早い。にも拘わらず、態々時間を掛けて鍛えるなど、何の意味があるのか。

だがセフィーロはそんな意見を一蹴。正規の手順で磨かれた身体にこそ健全な心が宿るのだと力説し、半ば強制的に戦闘訓練と合わせて地道なトレーニングを選択させたのだ。

それも今となつては良かったと、ロカは思っていた。

御蔭で自信も付いたし、一切臆する事無く戦場へと赴ける胆力も鍛えられたのだから。

——何時ぞやにヤミーに不意を突かれた件については、ロカ自身、不徳の致すところ

ろだと思っているが。

そしてこの事実を、ノイトラは全く把握していない。当然、秘密裏にチルツチと何度も模擬戦を繰り返していた事や、そして安定して勝利を収めていた事も。

御蔭でノイトラは現在もロカ力の事を力の無い護るべき対象として見ていた。

「…申し訳御座いません」

辿り着いた扉の前に立つと、ロカは不意に謝罪の言葉を零す。

その対象は、此方の気持ちを含んで引き止めずにいてくれたチルツチ。そして事前に決めていた予定を勝手に破った事を、セフィーロへ向けて。

セフィーロ本人は何の問題も無いとは言っていた。実際、その通りの実力があるのは理解している。

確かに彼女を信じ、治療室で待機していれば万事上手く行くだろう。

だがロカの心は別な事を訴えていた。

だからと言って大人しくして居られる訳があるか。自身の大恩人であり大切な者が、極めて危険度の高い場所へ赴いているのだぞと。

自身の胸部の中心に手を置く。

呼吸は平常、動悸を起こしている様子も無い。

だが間違いない。今にもこの胸を内側から引き裂く勢いで、何か膨れ上がっているのを感じる。

ロカが感じているそれは——恐れ。

可能性は低い。だがもし自身が大切に思っている者が傷付いたり、帰らぬ人へとなつたら、といった類いの。

解り易く例えるなら、戦地に赴いた夫の無事を祈りつつ、その帰りを待つ妻の気持ちか。

まさかそれがこんなにも苦しいものだと、ロカは想像もしていなかった。

「今だけ……我儘を通させていただきます」

そう呟いた直後、ロカは暫しの間瞼を閉じ、やがて開く。

その瞳は嘗て人形と呼ばれていた者の面影なぞ欠片も無い。

何事にも揺るがぬ光——強き意志が宿っていた。

ロカは白衣を脱ぎ捨てると、斬魄刀を抜刀。

間髪入れずに扉を開き、中へと侵入する。

まず真つ先に視界に入ったのは、無数の異形の破面達。ザエルアポロの従属官だ。そしてその中心には、ロカにとっては初対面であるバスターラが佇んでいた。

「…何者だ」

バスターラはロカへ向け、その機械的な目を向けた。

既に補給を完了していたのだろう。その身体には傷一つ無い上、十分過ぎる程の霊圧が満ちている。

「おぼえてる！ そいつ人形!!」

「キャハッ！ 人形きた！ 失敗作きた!!」

「ザエルアポロさまに捨てられた役立たずきた!!」

次々に発言する異形の破面達。その言い回しや言葉のイントネーションからして、明らかに知能が足りていない。

それはそうだ。彼等が生み出された目的は、あくまで回復薬としての補給。頭脳や戦闘力といったものは一切考慮されていない。

数は僅かだが、他には防御のみに特化した盾役も存在している。だが既にそれは実戦投入済みで、泰虎によって始末されていたりする。

「…成る程、確かにデータに残っている」

暫しの間考える素振りを見せたバスターは、そう呟いた。

ザエルアポロより与えられた情報を保存している脳内メモリを確認していたのである。

「その廃品が今更此処に何の用だ。まさかあの『検体』を奪還しに来た訳では無いだろう?」

——用も無いなら失せる雑魚が。

直接口に出してはいないが、そう言っている様にも取れる。

彼が検体と呼んだもの。それは間違い無くセフィーロの事だろう。

つまり現状に於いては彼女の『計画』通りに進んでいるのだと推測出来る。

そして周囲が侵入者の事で騒いでいる中でこうも嚴重に警備しているという事は、間

違い無くこの先にセフィーロが居るのだろうと。

「そのまさか——と言ったら？」

ロカは一切臆さず、それどころか挑発するかの様にそう返す始末。

かつての彼女の姿を知る者からしてみると、有り得ないと声を揃えて言う事だろう。

「…ならば死ね」

バスターラは足元の影を広げると、大量の巨大虚を生み出す。

予め命令を入力されていた巨大虚達は、四方八方より一斉にロカへと襲い掛かった。

次々へと折り重なり続け、やがて出来上がる山。

例え攻撃を躲せていたとしても、あの質量に押し潰されて終わりだろう。

バスターラがそう考えた——次の瞬間。

「ッ!？」

飛び掛かったのとは逆方向へ弾き返され、宙を舞う巨大虚達。

バスターは瞠目しながら、自身へ衝突するであろう個体のみを両腕の刃で切り刻んで迎撃する。

ロカが居た場所には砂塵が舞い、その姿は確認出来無い。

だが其処からは無数の鳥の嘴の様な口を持つ竜巻の蛇が十匹程、怒り狂う龍の如く荒ぶっていた。

——あれは確か、十刃落ちの一人の。

バスターは混乱していた。

確かあの蛇は破面 No. 103、ドルドーニ・アレツサンドロ・ソカッチオの帰刃形態が持つ能力の筈。それが何故この場面で出て来るのかと。

本人が援軍に来た訳では無いのは確実。あの場面に於いて、助けに入るタイミングなど皆無であり、探查神経で確認してもロカ以外の霊圧は一切感じられない。

「だが——これには耐えられまい」

迷っている場合では無い。そう判断したバスターは、すかさず次の手段を取る。

今度影の中より生み出されたのは数体の中級大虚。

ロカ能力は全く以て不明。かといって解析している暇は無い。ならば確実に仕留めるにはこれだろうと判断したのだ。

「…何…だと…？」

だがその見込みは甘かった。

突如として竜巻の蛇が消えたかと思えば、今度は砂塵の中から無数の巨大な刃が飛来。バスターが生み出した中級大虚を瞬く間に切り刻んだのだ。

刃はやがて弧を描く様にして、再び砂塵の中へと戻って行く。

其処から長い何かを持ち上げられると、それに刃が並列する形で装着される。

そして出来上がったのは無数の刃の羽根を持つ巨大な翼。チルツチの帰刃形である“車輪鉄燕”だった。

——今度はあの従属官の能力だと。

何度此方の想像を覆せば気が済むのか。

感情の抑制作用が緩んだのか、バスターの中で仄かに怒りが湧き上がる。そして同時に得体の知れないものへ対する恐怖も。

「――産まれを考えれば……」

砂塵が晴れ、ロカの姿が露になる。

背中からは蜘蛛の足状の腕が四本生え、仮面が消える代わりに大量の糸が包帯の如く顔の右半分を覆っている。

「貴方達の事は、仲間と呼ぶべきなのかもしれません……」

ですが――と、ロカは其処で一旦言葉を区切った。

背中に生えた刃の翼が、周囲に溶け込む様にして消えて行く。

これが彼女の帰刃――テイルレニア“絡新妖婦”の能力。

ロカが自らのために力を行使する事態を避ける為、ザエルアポロが意図的に力の使い方を見せていなかったが、過去に彼女に興味を示していたネリエルとの修行で会得したもの。

今迄にコピーした情報を元に、“反膜の糸”で実際に再現するという驚異的な能力だ。

その範囲も極めて広く、破面に始まり、死神や滅却師。加えて戦闘経験すら再現可能。

だが同時に欠点も存在していた。

まず再現された力は所詮は贗作に過ぎず、オリジナルより劣化する。そしてオリジナルが強力な程、自身の身体への反動も大きい。下手すれば使用後間も無くして絶命してしまう可能性も考えられる。

実はセフィーロの助力によって強化されており、ある一定以下までであれば、反動無しに再現出来るまでに至っていた。

それこそ現在使用したドルドーニとチルツチの能力と、ある程度の戦闘経験までであれば容易な程に。

「私の大切な人達に手を出すというのなら…」

ロカの背中の蜘蛛の腕が変化し始める。

バスターはその変化に、言い様の無い悪寒を感じた。

——この感覚を、自分は知って居る。

一度は死んだ筈の身。だが間違い無く覚えていると。

「貴方達は…私の敵です!!」

雑務係の破面とは思えぬ膨大な霊圧を放ちながら、ロカはそう宣言した。

今の彼女は何時もの無表情では無い。その眼は鋭利に輝き、眼前の存在に対して明確な敵意を向けている。

この瞬間、ロカ・パラミアは自らの意思に基づいて行動する、確固たる個の存在へと完全に昇華した。

「あ……あああああ……!!」

そんなロカの背中の腕が、メキメキと音を立てながら変化してゆく。

やがて出来上がったのは、昆虫の如き外骨格に覆われた四本の腕。

その腕に握られるのは、二対の巨大な大鎌。

言葉に成らぬ声を漏らし続けながら、バスターはその腕を見た瞬間から、全てを思い出していた。

骨の髄ならぬ、魂の髄まで刻まれたトラウマに等しいそれを。

「何で……ッ、何でお前が『アイツ』の力を使ってんだよオツ!!?」

かつて自身が、何時、何処で、誰に殺されたのか。

そしてその時感じた恐怖と——底知れぬ絶望。

幾ら強力な虚達を襲い掛かせても、その外皮を貫く事は叶わず、一切の傷も付けられない。

大鎌が一振りされただけで、前に立ち塞がっていた虚達は尽が断ち切られる。防御に長けた虚を複数、盾として配置してもみたが、何の意味も無い。

バスーラ自身も含め、苦し紛れに無数の虚閃を放つも、“アイツ”は棒立ちのままそれに？み込まれ——その中を平然と歩いて近付いて来た。

「其処を退きなさい!!!」

「く…来るなああああああ!!!」

ノイトラ・ジルガの誇る帰刃——“聖嬰螳螂”。その力と僅かな戦闘経験を再現した口力は、情けない悲鳴を上げるバスーラとの間合いを響転で一瞬の内に詰める。

嘗ての己を取り戻したは良いが、バスーラは激しい錯乱状態へと陥っていた。

そんな状態で真面な対処が取れる筈も無く、彼は自身目掛けて振り下ろされた大鎌

を、只々受け入れるしかなかった。

これでもう何度目になるのか。

地面を転がる様にして吹き飛びながら、泰虎は思った。

朦朧とする意識の中、脚全体に力を籠めて無理矢理立ち合がる。

敵の情けで与えられた薬で回復した霊圧、治癒した怪我。今となってはもはや全てが無意味。

既にそれ等を上回る消耗と負傷を、泰虎の身体は抱えていた。

「確かに君のパワーは驚異的だ。例え帰刃した今の僕でも、直撃すれば相当なダメージを受ける事だろう」

「く…ッ!!」

自身の額と眼の周囲にある仮面の名残を指先で弄りながら、ザエルアポロは淡々と語る。

泰虎は今一度己を奮い立たせると、再度攻撃を仕掛ける為に動いた。

残り少ない霊圧を下半身へと回して強化すると、思い切り前方へと踏み込む。

響転に負けず劣らずの速度で、ザエルアポロとの間合いを詰めに掛かる。

周囲の霊子を掻き集めて、左腕を強化しながら。

「だがまあ——あくまで直撃すればの話だけどね」

「ゴハッ!!」

だがザエルアポロはその上を行っていた。

彼は突き出された泰虎の拳撃を響転で躲すと、その背後へと回り込む。

そして振り上げた触手の羽根を、頭上から叩き付けた。

「茶渡!! くそつたれが…ッ!!」

苦し気な声を上げたのは恋次。何らかの理由で立ち上がれないのか、口から血を吐き出しながら、這い蹲る様にして地面に倒れていた。

その隣では雨竜が頭部から大量の血を流して倒れ伏したまま、ピクリとも動いてない。

二人がこの様な状態へ陥っているのも、全てはザエルアポロの仕業である。

先程登場に合わせて触手の羽で包み込んだ際、同時に“人形芝居”を発動していたのだ。

対象を模した人形を造り出し、その人形を攻撃すれば本人にも直接ダメージを与えられるという、敵からしてみれば非常に厄介な技。しかも人形の中には内臓や腱の名が刻まれたパーツが入っており、それを破壊しても前述と同様の効果があるというやらしさも併せ持っている。

宮の外へと投げ捨てられた後、何とか戦場へと復帰した恋次と雨竜。即座に泰虎の援護に向わんとした直後——二人は両手両足の腱を破壊され、地面に這い蹲った。

序だと言わんばかりに内臓も幾つか潰され、瞬く間に戦闘不能な形へ追い込まれる。策を講じられるのを警戒していたのか、雨竜については最後に人形の頭部へと衝撃を加えられ、その意識を刈り取られたのだ。

「…まだ…だ!!」

それから幾度となく、泰虎はザエルアポロへ立ち向かって行く。

だが展開は一方的。もはやそれは強者が弱者を殲殺しにせんとしている様にしか見えない。

全身を触手の羽で打たれ続けた御蔭で蓄積したダメージに、霊圧の消耗が重なる。

遂に泰虎は真面に立つ事すら困難な状態にまで陥ってしまった。

「そろそろ終わりみたいだね?」

「ガ…グエ…ツ!!?」

ザエルアポロは響転で瞬時に間合いを詰めると、膝を着いていた泰虎の首を触手の羽の一部を巻き付かせて持ち上げる。

徐々に力を籠め、ギリギリと締め上げて行く。

泰虎は引き剥がさんと抵抗を試みるが、消耗しきったその身体では全くの無意味であった。

「今助けるぞ雨竜!!」

「助太刀するでヤンスよ恋次〜!!」

その時、ザエルアポロの背後から二つの声が響き渡った。

そしてそれと同じく二つの影が、彼の背中へと覆い被さる。

その正体は、先程まで瓦礫の下敷きになっていたペツシエとドンドチャツカ。

彼等は其々に隠し持っていた得物を手に、何とザエルアポロへと背後から奇襲を仕掛けたのだ。

——兩名共に泰虎の名を間違えているのは気にしないで置こう。

二人としては初め、この戦場に参戦する心算は毛頭無かった。

理由は一つ——自分達の正体がザエルアポロに悟られたりすれば、同時にネリエルの存在も知られてしまうからだ。

虚夜宮に存在する大半の破面達にとって、ネリエル・トウ・オーデルシユヴァンクは脱走兵の様な認識だ。それは裏切者と言い換えても大差無い。

つまり自分達の情報を拡散されでもすれば、否応無しにネリエルの命が狙われる事となる。

力を失った今の彼女では、羽虫の如く潰されてしまう事だろう。それだけは避けねばならない。

しかしだからと言ってこのまま隠れていても、恋次達三人が敗北してしまえば結果はほぼ同じ。

あのザエルアポロが自分達の存在に気付かない保証は無い。あれよあれよと探り出されるだろうし、結果的に殺されるにしても、それに至るまで一体何をされるか。

悩みに悩んだ末——二人は覚悟を決めた。

ならばいつその事、今此処でザエルアポロを仕留めてしまえば良いと。

考えてみれば、それで全てが解決する。

友人でもあり仲間である三人の命も助かるし、ネリエルの存在が知られる事も無い。

幸いにも今迄に重ねた鍛錬の結果、自分達の実力は嘗て無い程上昇しており、ザエルアポロはあの通り慢心に塗れた男だ。確実に隙を突ける。

「輝け我が愛剣!!」

「ドンドチャツカスイング!!」

普段はギャグ属性を撒き散らしている二人だが、この時ばかりは違った。

そして覚悟を決めたその眼に、もはや迷いの色は欠片も見えない。  
 ペツシエは自身の禪の中から、光り輝く刀身を持つ劍——ウルトイマ 究極<sup>ウルトイマ</sup>を抜き放つ。  
 ドンドチャツカは口から、柄以外は棍棒そのものな斬魄刀を取り出すと、野球のバツ  
 ターの如く振り被った。

「…やれやれ、これだから低脳は」

「グ、オツ!!?」

「あばツ!!?」

だがその予測は外れていた。

ザエルアポロは退屈そうにそう零すと、振り返らずに残る三本の内二本の羽を振るう。

それは泰虎に繰り出していた鞭打とは別物。

一切手加減されておらず、羽は容赦無くその二人へ襲い掛かり、そのまま地面へと叩き落とした。

「この僕が君達の存在に気付いていないと思ったのかい? 元第3十刃の従属官諸君

？」

「…お…のれ…!!!」

「ゼヒュー…ゼヒュー…」

ザエルアポロは笑みを浮かべながら、顔を僅かに横へと動かすと、倒れ伏したまま動けない二人を一瞥した。

ペツシエは悔しげに声を漏らしながら、ザエルアポロを睨み付ける。

その一方で、今の一撃が致命傷となったのか、ドンドチャツカはその巨大な口から血を吐き出しつつ、危うい音を立てて呼吸を繰り返していた。

「取り敢えず君達については後回しだ。まずはこつちを優先させてもらおうよ」

二人が戦闘不能に陥った事を確認したザエルアポロは、視線を再び泰虎へと戻す。

「とは言ったものの——飽きたね。もう少し遊ぼうかと思っただけど、艶に欠ける雄の悲鳴を聞き続けるのも、ね…」

「カ…ア…ツ!!」

「つまらないよ、人間」

依然としてその首を締め上げたまま、ザエルアポロは自身の眼前まで泰虎の身体を移動させる。

見ると泰虎の瞳からは、既に光が失われ始めていた。

「さよなら、だ」

ザエルアポロは右手を手刀の形にすると、後方へと引き絞る。

恐らく止めとして貫手を繰り出さんとしているのだろう。

元より耐久力もそれ程高く無い泰虎が、それに耐えられるか。勿論、否だ。

「止めろ!!!」

「逃げろ茶渡オオオツ!!!」

ペツシエと恋次が必死に叫ぶが、その手刀は無慈悲にも泰虎の心臓目掛けて放たれた。

## 第五十一話 魔人と邪淫と、劍鬼と劍八とか孤狼とか：

自身の左胸部。丁度その内部にある心臓を貫かんと迫る手刀。

恐らく到達するまでは一秒も掛からないだろう。

そんな僅かな時間を、泰虎は途轍も無く長く感じていた。

何をするまでも無く、只管に、霞掛かった視界でその手刀を眺め続ける。

否、今の泰虎にはそうする事しか出来無いのだ。

現世に居た頃は人類最強に等しかった鋼の肉体は、もはや見る影も無い。

高所から落下して来た鉄骨を受け止めても衝撃で額を浅く切る程度で済み、オートバイと正面衝突しても複数の擦り傷しか負わない。

だが所詮はその程度。人知を超えた存在たる破面という存在。その更に上位に位置する十刃の前では何の意味も無かった。

骨折は無いのだから、十分驚異的な耐久力ではと思うかもしれない。

だが実を言うとそれはザエルアポロが敢えてそうしただけ。目的は自身に傷を負わせた泰虎への報復のみ。自身に齒向かった事を心底後悔させた上で、極限の恐怖と絶望を植え付ける為。



らせ、付け焼刃で工夫を凝らしてはみたが、尽くが無駄に終わる。

地面に叩き付けられる度、泰虎は己の無力を嘆いた。

強大な敵を打ち破り、仲間を護る為の力は得た。だから後は何も心配は要らない。

ガテンバインとの戦いで完全に自身の力をモノにした後の泰虎は、完全にそう考えていた。

泰虎は後悔した。

何と言う思いがり。慢心とほぼ相違無いではないかと。

恋次と雨竜の二人掛かりでも苦戦、劣勢になる程の相手が、只の破面である筈が無い。にも拘らず、ああして反撃を許したばかりか、帰刃によって一気に戦況を引つ繰り返されてしまった。

全ての原因は序盤。不意打ちを成功させただけで容易に勝利を確信し、追撃を妥協してしまった事だろう。

あの状況に於いては“巨人の一撃”では無く、より確実に威力のある“魔人の一撃”での止めを選択すべきだった。

だがそんな泰虎の葛藤も、間も無く全てが消え失せる。死と言う結果によって。何も見えず、聞こえず、感じない。そんな世界に、泰虎は向かおうとしていた。

———そんなのは御免だ。

泰虎は嫌忌した。己の死に対してでは無い。その後の事に対し。

自身を仕留めた後、ザエルアポロが次に向かうのは何処か。無論、傷付き倒れた仲間達だ。

泰虎は一護と同様に、仲間の事を何より大切に思っている。

下衆な輩の手で、為す術も無く彼等の命が失われる事なぞ、到底許せる筈も無い。

——何でも良い、頼む。

心の奥底から、泰虎は渴望する。

この状況を打破出来る力に手段を。

自身では如何あつても不可能。ならば願う他に無い。

例えその相手が悪魔であつたとしても。

「……え？」

次の瞬間、泰虎は異変に気付いた。

極めてスローではあつたものの、確かに動いていた筈の世界が——完全に停止している事に。

ザエルアポロの突き出した手刀も、胸部から既の所まで進んだ時点で微動だにしてい

ない。

同時に消え掛けていた筈の意識がクリアになる。

視界は晴れ、曇り一つ無い鮮明な光景が映る。

触手の羽の締め付けによる咽喉の圧迫感も、息苦しさも感じない。声が出せているのが何よりの証拠である。

だが身体は微動だにしない。感覚すら皆無。

まさか手刀の直撃を食らう前に息絶えたのでは——と推測したが、即座に捨てる。

理由は眼前で狂気と陰湿さを感じる笑みを浮かべるザエルアポロ。そんな彼を通り過ぎた先に現れた存在によって。

「じい…ちゃん…」

何時も通りのニヒルな笑みを浮かべながら、祖父——オスカー・ホアキン・デ・ラ・ロサはゆったりとした足取りで此方へと近付いて来る。

完全停止した世界の中で、そんなの関係あるかと言わんばかりに。

まるで幻影の様にザエルアポロを擦り抜け、触手の羽で吊り上げられた状態の泰虎の眼前へと立った。

「こつぴどくやられたな、ヤストラ」

「…ああ」

「このままだと死ぬな」

「……ああ……」

特に焦った様子も無く、落ち着いている。

そんなオスカーの語り掛けに、泰虎は相槌を打つ。

「それで…どうする?」

最後に放たれた問いに、思わず口を噤んだ。

祖父は自身が何も出来無い事なぞ解り切っている筈。にも拘わらず、何故問うのかと。

戸惑う泰虎に対し、オスカーは小さな笑い声を零した。

「なあ、ヤストラ。今のお前は大事な事を忘れておらんか」

「…なん…だつて…?」

泰虎はその言葉の意図が解らなかつた。

忘れていたとは如何いう事だと。

「その力は何の為に在る? 何の為に使うべきだ?」

「俺の…力…」

その問い掛けに対し、泰虎は過去を思い返す。

初めてこの能力を発現させた時、自身は何を考えていたのかを。

幼い頃に師匠であり祖父の宗弦そうげんを失った事件を経て、死神と言う存在を嫌悪する様になつた雨竜。そんな彼が死神代行である一護と出会い、周囲を巻き込もうとも御構い無しに、無謀な勝負を挑んだ時の事だ。

雨竜が使用した撒餌に誘われ、現世へ現れた無数の虚達。その内の一体に襲われていた、一護の下の双子の姉妹の内の妹である夏梨かりん。

そんな彼女を偶然見掛けた泰虎は、その只ならぬ様子から大凡の事情を察し、助けに入る。

だが逆に窮地へと陥り、その隙に虚は夏梨とその友人達へ手を掛けんとした。刹那、咄嗟に虚と子供達の間へと身体を潜り込ませながら、泰虎は思った。

——この子達を護りたい。

生まれつき持っていた浅黒い肌、日本人離れした容姿に体格。それ等を齎したメステイソーの血。

それが原因で色々と面倒な目に遭つて来た。一時はこの身体に流れる血を憎んだ事すらあつた。

だがそんな血に誇りを持たせてくれたのは、他ならぬオスカアの言葉だった。

それからというもの。泰虎の中に蔓延っていた負の感情は鳴りを潜め、それに伴つて暴力を振るう事も無くなった。

あの言葉が無ければ、恐らく自身は目も当てられぬ程に荒んだ人生を歩んでいただろう。

泰虎は今亡きオスカーに対して改めて感謝すると同時に、自身の背後に隠れた子供達を護る為に力を貸してくれと心の内で願つた。

能力が発現したのはその直後である。

今度はザエルアポロとの戦いを振り返つてみる。

序盤までは、その止めが浅かつた件を除けば何の問題も無い。

だが泰虎は気付いた。

気にすべきは後半。帰刃によって復活したザエルアポロが登場して以降にあると。攻撃を尽く見切られ、カウンターの直撃を受ける事数十回。

途中で一度は奮起したものの、実らず。逆に力の差を此れでもかと思せ付けられる結果に終わった。

次第に焦燥が大きくなると同時に、思考が狭まって行つたのを覚えている。

そんな極限状態の中で、泰虎は何を考えていたのか。

——何としてもこの破面を倒さねばならない。

即ちこの時の泰虎の思考は敵の打倒一色に染まり、仲間を護る為という信念は一切無かつたのである。

あの状況を考えれば、そうなるのも致し方無いと言えなくも無いのだが。

「そうだ、ヤストラ」

答えに辿り着いた事を悟つたのだろう。オスカーは満足気に頷いた。

「お前は立ちはだかる壁を打ち破る為の矛であり——それ以上に仲間を護る為の盾で

もある」

「——ッ!!」

——前者は兎も角、後者は如何あつても忘れてはならない。

直接言われずとも、そう論されている事は理解出来た。

泰虎の表情に影が差す。

そんな彼へ、オスカーは優しく語り掛ける。

「そう気に病むな。人は誰しも過ちを犯す。それが若者なら余計にな」

「だが…!!」

「そしてそんな若者を導くのが——儂等年寄りの役目だ」

そう言うと、オスカーは前回と同様、徐にその右手を持ち上げ、今度は泰虎の胸部の中心部へと触れた。

直後、泰虎はその武骨な掌から流れ込む何かを感じていた。

「これで最後だ、ヤストラ」

「え…？」

「自分を信じろ。今のお前ならやれる」

不意に放たれた、まるで今生の別れの様な物言いに、泰虎は一瞬呆けた様な声を漏らす。

厳密に言うとは既に現実世界では死別しているのだから、少々語弊があるかもしれないが。

「お前は強い。お前は巨おほきい。お前は美しい」

静かに語るオスカーの身体が、次第に細かな粒子となつて消え始める。

泰虎は一息遅れでその異変に気付いた。

「だから…優しくなりなさい。誰よりもな」

「じいちゃん…」

満足気な笑みを浮かべるオスカーへ向けて、泰虎は手を伸ばそうとする。

だが身体は言う事を聞かない。

「儂の全てを、お前に託す」

「ツ、ま……!!」

オスカーの全身は既にその六割程が消え失せていた。

——待ってくれ。逝かないでくれ。

喉元を通って口から飛び出し掛けたその言葉を、泰虎は既の所で止める。

オスカーの様子からして、もはや何を言おうが無駄である事は解り切っている。

そして何より、彼は自身に全てを託すと言った。

その覚悟は無駄にしてはならない。

ならば如何するべきか。

オスカーが心置き無く旅立てる様、此方も相応の覚悟を見せるだけ。

「任せてくれ、じいちゃん」

「…ふっ」

——お前ならそう言うと思っていた。

小さく鼻で笑ったオスカーの態度からは、そう読み取れた。

やがて穏やかで優しい笑みを浮かべるオスカーの姿が、完全に消滅する。

その直後、世界が再び時間を取り戻した。

謎の圧力を持つ笑顔に敗けた劍八は、肩にやちるを乗せたまま、素直に先頭を進む卯ノ花へ追従していた。

その更に後方では、相変わらず気絶したままの花太郎を担いだ勇音が続く。

「…なんだよ、いきなり止まりやがって」

だが次の瞬間、彼等の歩みは一斉に停止する。

理由は先頭を歩いてきた卯ノ花が真つ先にその足を止めたからだ。

剣八は彼女の様子を不審に思い、その背中へ問い掛けた。

だが卯ノ花はそれに答えず、顔を左右に動かして周囲を見渡すばかり。

案の定、気の短い剣八が痺れを切らすかと思われたその時、やっと卯ノ花が口を開いた。

「…謀られた様ですね」

「あア？ そいつはどういう意味——ッ!？」

卯ノ花の発言の意味を問い掛けんとした剣八だったが、突如として異変が起こる。

それは二人が立つ丁度真上。無数の光の帯が通路の天井を貫通し、卯ノ花と剣八、そしてやちるを含めて三名を纏めて取り囲んだのだ。

「卯ノ花隊長!？」

「迂闊に近寄ってはなりません。じつとしていなさい勇音」

想定外の事態に慌てたのか、勇音が声を上げる。

卯ノ花の事を誰よりも尊敬し、憧れている彼女だ。当然の反応と言える。

必要とあらば、今にも担いでいる花太郎をその場に放り投げてでも動く事だろう。

だが卯ノ花は冷静だった。

此方へ駆け寄らんばかりの勢いを見せる勇音を静かに宥めると、自分達を取り囲む光の帯の正体を探りに掛かる。

異変の真つ只中という状況にも拘らず、一切揺らがぬ胆力は流石と言うべきか。

「…なんだこりゃあ？ 邪魔すんじゃねえよ」

劍八は眉を顰めると、右手で左腰の鞘から斬魄刀を抜刀。

自分達を取り囲む光の帯を斬り飛ばさんと、迷わず上段から振り下ろした。

「な…!？」

だがその刀身は光の帯を断ち切る事は無かった。

逆に弾き返され、その勢いで劍八は体勢を崩しながら数歩後退する。

硬いという訳では無い。寧ろ手応えが全く感じられない。

なのに何故自身の放った斬撃が弾き返されたのか。全く以て理解不能。

柄を握る右自身の手を眼前まで持ち上げて観察しながら、剣八は戸惑った。

「私の失態です。気付くのが遅過ぎました」

『いえいえ、そんな事はありませんよ。つてかヒントも無しに直前で気付くとか、一体どんな勘してるんですか貴女?』

卯ノ花が自戒するかの様に零したその時、突如として周囲へ間延びした声が響き渡った。

聞いている側の気が抜けそうになるそれは、瞠目する卯ノ花を余所に語り始める。

『もう少し先に進んでくれれば楽だったんですけど、そう易々とはいかないものですねえ。御蔭で余分に力を使う羽目になってしまいましたよ』

「…何者です」

『それは秘密です。あと天井とか床を破壊して抜け出そうとしても無駄ですから』  
「チツ…」

警戒心を露にしながら卯ノ花が問い掛けるが、さりと流される。

そして続け様に忠告。自身が目論んで事を当てられた剣八は、思わず舌打ちした。

『暫くは其処で大人しくしててもらいますよお？ 今貴女達に動かれたら困りますから』

「随分と警戒されたものですね」

『謙遜も過ぎれば嫌味でしかありませんよ？ …ねえ “初代剣八” さん？』

「ツ!!!」

卯ノ花の耳元へ囁く様にして、その声は最後にそう付け加えた。

——何故その事を。

卯ノ花は驚愕した。漣靈廷の中でも限られた者しか知らない己の過去を言い当てられた事を。

しかも敵地であるこの虚夜宮でだ。

だが良く考えてみれば妥当とも言える。

何せ此処を築き上げたのはあの藍染だ。彼であれば卯ノ花の過去を知っていても何

ら不自然では無い。

そしてその情報を部下である破面達に周知させていたとすれば——成る程、この状況にも得心が行く。

考えが纏った卯ノ花は、一先ず落ち着きを取り戻した。

『まあ、警戒すべきは其方の眼帯さんも一緒ですけどね。なので……—』

声は一旦言葉を切ると、直後に光の帯の色が、白色から青色へと変化し始める。

その変化に言い様も無い悪寒を感じた卯ノ花は、咄嗟にこの場に居る全員に向けて声を上げた。

『貴方については、少しの間だけ眠ってもらいます』

「ッ、全員目を閉じなさい!!」

「!!」

危険を察知したのは卯ノ花だけでは無かったらしい。

先程斬撃を弾かれた直後より、光の帯に対する警戒レベルを上げていた剣八の反応は

早かった。

やちるを自身の死覇装の中へと仕舞い込んで避難させるのに合わせ、眼帯に隠れた方とは逆の左目の瞼を閉じ、青い光を視界に入れぬ様に構える。序に右手を瞼の上に被せながら。

『ぎくんねん。一足遅かったですね〜…』  
——マ傀儡遊戯ハール——

「ツ!？」

『邪魔なものを退かして光を見なさい』

声は何をトチ狂ったのか、突如として剣八に命令する。

敵の命令を素直に聞く奴が何処に居る———と思われたが、実際は違った。

何と剣八はその声に従うかの様に、右手を退かして閉じていた筈の瞼を開くと、光の帯から発せられる青い光を凝視し始めたのだ。

だが身体の動きと本人の意志は別にあるらしく、その顔には驚愕の色が浮かんでいた。

「なん…だ…こりゃ…!？」

『良い子良い子。じゃあ次はオネンネしましょうね。』——『墮落聖女』

次の瞬間、光の帯がより一層強く発光する。

それから間も無くして、剣八は力無く全身から崩れ落ち、地面へ倒れ伏した。

『はい完了。やっぱり搦め手には弱いんですねえ』

「ぶはっ……剣ちゃん……？ 剣ちゃん!!」

異変を感じたやちるは、死覇装の中から顔を出す。

俯せの体勢のまま微動だにしない剣八を必死に呼び掛けながら、その小さな両手で身体を揺する。

「草鹿副隊長!! 更木隊長に何が!？」

「わかんない! わかんないけど……急に剣ちゃんが倒れちゃって……呼んでもぜんぜん起きてくれなくてっ……!!」

青い光を警戒しているのだろう。目を閉じたまま、卯ノ花は焦燥を含んだ声で叫ん

だ。

剣八に起こった異変に動揺しているのか、やちるは瞳を潤ませながら、途切れ途切れな口調で説明する。

だがそんな二人を余所に、謎の声は変わらぬ様子で答えた。

『安心して下さ〜い。単に眠ってもらっただけですから〜』

「それを信じるとでも?」

『信じて大丈夫ですよ〜…人によつては魔人になる可能性があるだけで…』

その声はとんでもない事をサラリと付け加える。

——結局信用ならないではないか。

普段温厚な卯ノ花も、流石にここまでおちよくられて何も感じない訳が無く、全身から霊圧と同時に怒りのオーラを滾らせ始める。

『まあ大丈夫でしょう。何せ色々ぶっ飛んでますしねこの人〜』

「知った風な口を…」

『では取り敢えず目的は果たしたので、この辺で失礼します〜』

「ッ、待ちなさい!!」

其処で初めて瞼を開くと、卯ノ花は抜刀。初代剣八に相応しい、凄まじい斬撃を光の帯へ放つ。

『時間になったら解除しますんで、それまで我慢してて下さいねえ』

だが非情にも、それは先程の剣八の二の舞となる。

手の内に伝わる謎の感触と共にその刀身は後方へ弾き返され、卯ノ花自身も踏鞴を踏んだ。

「…成る程」

斬魄刀を鞘へ戻しながら、卯ノ花は呟いた。

その眼は嘗て尸魂界史上空前絶後の大悪人と呼ばれた程の大罪人であり、只管に戦いへと明け暮れる戦闘狂だった頃——卯ノ花 八千流ヤチルの姿を彷彿とさせた。

ちなみに八千流という名は、天下無数にあるあらゆる流派、そしてあらゆる刃の流

れは我が手にあり」という意味を込めて自ら付けたものだ。

それ程までに、卯ノ花は戦いの才に溢れ、相応の実力を持つていたのである。

元柳斎に力を買われ、初代護廷十三隊の十一番隊隊長へなつて以降も、彼女は只管に斬つてきた。

只の虚は当然として、死神や他の魂魄、建物から余す事無く。

その中でも、卯ノ花自身が強者と認識した者といった、特に印象的だったものは明確に記憶している。

当然、その時に感じた手応え等も例外では無い。

それ等の記憶の中から、卯ノ花は先程斬り付けた感触と同種のものを探り当て——光の帯の正体を悟つた。

同時に浮かび上がる苦々しい思い出。

あれは確か、尸魂界へ下級大虚が現れた時の話だ。

暇を持て余していた卯ノ花は即座に現場へ直行。出会い頭に一太刀で重傷を与えたまでは良かった。だが直後に他の下級大虚が傷付いた同族を回収しに現れたのである。

「——『反膜』…ですか」

その際に使用された、未だに卯ノ花も斬れた試しが無い光の柱。

声の主は、それをこの様に小型に圧縮して操り、そして謎の力で剣八を瞬く間に無力化した。

——何たる規格外。

幾ら考えても攻略法の見出せぬその反則的な能力を持つ者の強大さに齒噛みしつつも、何処か心躍らせている自分を、卯ノ花は感じていた。

山の様に積まれたクッション。その上に大の字に寝転がりながら、スタークは心此処に在らずといった様子で、自室の天井を眺め続けていた。

傍から見ればいつも通りに見えるが、そうでは無い。

その内心では先程済んだばかりの、藍染の召集。

その時に伝えられた件について、只管に悩んでいた。

「——ク！ スタークってば!!」

「……………」

らしくない事をしているスタークの横から聞こえる声。

言うまでも無くリリネットだ。

先程から大声で何度もスタークを呼び続けている彼女だったが、肝心の当人からは未だに返事が返って来ていない。

基本的に堪え性の無いリリネットである。

案の定、遂にその堪忍袋の緒が切れた。

蟀谷の血管を浮き上がらせながら、リリネットはクッションの山を駆け上がる。

頂上へ辿り着くと、右足を後方へと大きく振り被り——隙だらけな股間目掛けて勢いよく蹴り出した。

「いつまで無視してんだこのバカっ!!」

「おうふッ!!?」

当然、リリネットの存在にすら気付いていないスタークにその一撃を躲せる筈が無い。

男ならば誰しも恐れ戦き、何としても回避したいであろう致命的な一打が、その局部へ容赦無く直撃した。

如何に急所であれど、その部分もある程度は鋼皮の効果範囲に含まれており、大したダメージは受けない筈である。

だがスタークは少々例外だった。

過去の経験からか、彼は日常的に自身の力を抑える様に心掛けていたのだ。

即ち必然的に鋼皮の霊圧硬度も下がっており、力の弱いリリネットの攻撃でも、急所にさえ当てられれば十分通る様になっていた。

「くあwせdrftgyふじーp!!?」

バラエティ番組でありがちな、キーンという効果音が鳴り響いたかと錯覚する程の、それはそれは見事な金的。

スタークは突如として自身の股間に走った凄まじい激痛に、反射的に全身を跳び上が

らせた。

勢い余ってクッションの山から転がり落ち、両手で股間を押さえながら床をのた打ち回る。

その口からは言葉にならぬ悲鳴が漏れていた。

「…な…に…しやがる…」

「無視すんのが悪い!!」

真つ青に染まった顔から滝の如く冷や汗を流し、全身をガクガクと痙攣させながら、スタークは掠れ声で下手人へ抗議した。

単なる悪戯だったとしても、明らかにこれは遣り過ぎである。

だがリリネットは悪びれる様子も無く、これは当然の報いだと言わんばかりに返した。

十分程床で唸り続けた末、やっと股間の痛みが治まったスタークは安堵の溜息を吐いた。

期を見計らっていたのか、それまで大人しく待っていたリリネットが遂に口を開く。

「…で、なに考えてたのさ」

「……………」

「じゃあもう一回——」

「わかったわかった!! 言うからその足を降ろせ!!」

内容が内容だけに、スタークは思わずだんまりを決め込もうとする。

だが再び足を持ち上げて左右に揺らし始めたリリネットを見て止めた。

「さっきの呼び出しの事だよ」

「…なんか言われたの?」

リリネットは首を傾げた。

この様子から判る通り、彼女は先程の召集には行っていない。  
あくまで指名されたのはスタークとウルキオラだけだからだ。

「実は、な——」

床に寝転がったまま、スタークは藍染との遣り取りの内容を語り始める。その表情からは何処か鬱屈としたものを感じ取れた。

恐らく尸魂界陣営との最終決戦となるであろう、次の現世侵攻時の事。

そしてウルキオラを退室させた後——スターク自身も思わず瞠目した、衝撃的な指しを。

「…はあっ?!」

「やっぱそういう反応するよな…」

中盤までは静かに耳を傾けていたリリネットだったが、最後の部分を聞いた瞬間、驚愕の声を上げた。

その反応は当然だろう。スタークは思った。

そして続け様に深い溜息を吐く。本当に如何してこうなったのかと。

「だって…おかしいじゃん!! 藍染さまは、なんのつもりで…!!」

「俺だって解んねえよ。あの人の考えてる事なんて」

「ッ、どうして——!!」

額に右手を当てながら、スタークは投げ遣りに返す。

その態度に余計に苛立ったのか、リリネットは捲し立てる。

「スタークはそれで良いの!?!」

「……………」

「アーロニーロとゾマリはわかるよ!?! だってあれは戦いの結果だからしょうがないって…!!」

でも——と、リリネットは其処で言葉を切る。

彼女の顔は俯き、その両肩は震えていた。

「リリネット…」

リリネットの抱いているであろうその気持ちは、スタークには痛い程解った。

元々一つだった自身の片割れだ。性格に多少の違いはあれど、本質は同じ。

藍染の言葉を鵜呑みにするなら、このままだと他の仲間達の身が危ういという事。

ならばスタークは必然的に藍染の指示通りに動かねばならなくなる。

だが——それは絶対に有り得ない筈なのだ。

スタークは困惑した。

今迄の付き合いから、何か重大な秘密を抱えているのは大凡察していた。

だが仲間を危険に晒すだけでなく、危害を加えるとは到底思えない。

思い返してみると、あれ程まで自身と波長が合う者と接したのは初めての経験だった。

昔は正にアレとしか言い様の無い在り方だったが、まさかあんな気の良い性分にまで変わるとは誰が想像しただろう。

だがそんな「彼」に対し、自身は秘密裏に謀略を仕掛けようとしている。

あくまで藍染の指示ではあるが、結果的に責任が発生するのは実行した自分自身。

恐らくそれは高確率で成功するだろう。此方の事は仲間として完全に信用しているだろうし、想定外のタイミングで現れたとしても警戒心を見せるとは思えない。

それは正しく騙し討ちであり、裏切り。

罷り間違つても仲間にして良い行為では無い。

だがそれでも、スタークに残された選択は藍染に従う他に無かった。

確かに初めは断ろうとした。無礼を承知で、直接本人にその真意を問い質せば済むの

ではないかと進言する覚悟も。

しかし藍染はそれを想定していたのか如何かは不明だが、何処か含みがある言葉を放ったのである。

別に断つても構わない。だがその場合、仲間達がどの様な結果になるうが、此方は一切関知しないと。

「お前だって理解してんだろ。俺達に選択肢は無えつて」

「だからって……こんな……」

リリネットは体育座りの要領で床に座り込むと、自身の膝に顔を埋める。

その声の震え具合からして、今にも泣き出しそうな勢いだ。

スタークは気付く。

そう言えばリリネットは“彼”と結構仲が良かったなど。

何やらスターク弄り同盟とやらを組む程に。

納得いかない筈だし、辛いに決まっている。

——此処で本音を言えば何も問題は無いのだが。

スタークは思わず口から飛び出しそうになった言葉を飲み込みながら、内心でリリ

ネットへ謝罪した。

確かにこの謀略は成功はするだろう。

だがそれだけだ。

スタークは確信していた。あの「彼」がこの程度の謀略で終わるとは到底思えないと。

進む道の先が障害物等で塞がれていたとしても、強引に真正面から力技で押し退けて行きそうな奴だ。傍から見れば不可能だろうと思える事でも、何とかしてしまいそうに思える。

その為の実力も、当人にはある。

今迄に何度も顔を合わせているスタークでも未だ完全には測り切れていない。だがあの驚異的な霊力の高さに加え、最近の戦闘記録から判断するに、多種多様な独自の技も隠し持っている事だろう。

少なくとも「彼」と戦って勝つには、此方も真正銘の全力を出さねば危ないだろう。スタークはそう推測していた。

「…んな辛気臭え顔すんなよ。こっちまで滅入っちゃう」

——信じる。あいつなら大丈夫だつて。

これこそがスタークの本心であり、リリネットに投げ掛けたかつた言葉だ。

だがそれは藍染の意に反するものに他ならない。罷り間違つて彼の耳に入りでもすれば、最悪は謀反の疑いを向けられてしまふ可能性も考えられる。

そして行く末は無期限の投獄か、はたまた処刑か。

故にスタークは耐える。如何に自室とは言え、何処に藍染の監視の目があるか判らない状況下だ。余り迂闊な事は口に出すべきでは無い。

だが正直言つと、スタークとしては別に死んでも構わないという思いもあつた。言うなれば彼は現状に満足していたのだ。

藍染の傘下に下つた御蔭で得られた、共に居ても消滅する事の無い強い仲間達。中には癖が強かつたり、相性が頗る悪い者も居るが、スタークにとつては十分過ぎた。

彼等と共に過こす事で、長らく自身の中で欠けていたものが満たされて行く感覚。それは幸福以外の何物でもなかつた。

それこそ、何時死んでも構わないと思う程に。

だが結局、スタークは大人しく藍染の指示に従う事にした。

その幸福を与えてくれた多大な恩義故に。

無論——その裏には「彼」に対する信頼もあるのも言うまでも無い。

「…めんどくせえな、ホント」

スタークは再び大の字に寝転がると、深い溜息を吐いた。

途中で阻まれる事無く突き進む己の手刀を見て、ザエルアポロは己の勝利を確信して  
いた。

出来る事ならもう少し恐怖を植え付けてやりたかったが、今は時間が押している。  
この人間を始末した後には、早急に残りを片付けるべきだろう。そう考えていた。

「ッ!？」

だがザエルアポロの目論見は初っ端から破綻する。

泰虎の心臓を貫く筈だった右手は、横合いから延ばされた巨大な黒い鎧を纏った手に掴まれ、止められていたのだから。

「…しづむといね。放してくれないかな？」

元を辿って見れば、案の定、それは泰虎の右腕に繋がっていた。

朦朧としているであろう意識の中で、直撃寸前の手刀を止めた事は驚愕の一言。だが所詮は最後の悪足掻き。如何あっても此方の勝利は揺るがない。

ザエルアポロはその拘束を振り解かんと、掴まれた右手に力を籠める。

「っ、っ、っ…!! 無駄だと言うのが解らないのか!？」

だがその右手は、まるで万力に固定されているが如くビクともしない。

—— 一体何処からこんな力が湧き出て来ていると言うのか。

ザエルアポロの中で焦燥が生まれる。

しかも徐々にその握る力が増して来ている。

先程より圧迫感が増している右手が証拠だ。

ほんの一瞬だけ、ザエルアポロは恐怖心を抱いた。下手すればこのまま握り潰されてしまうのではと。

「ならこのまま首を押し折ってやろう…!!」

即座にそれを振り払いながら、ザエルアポロは泰虎の首に巻き付けている触手の羽へ意識を向ける。

そして神経を通して動きを命じる。全力を以て此奴を締め上げると。

間も無くしてギチギチと音が周囲に聞こえ始める。

だが——其処から変化が無い。

泰虎の首は一向に折れる様子も見せない。

寧ろ羽の方が先に千切れてしまうのではないだろうか。

その直後であった。ボキリ、という不快な音が響き渡ったのは。

当然、ザエルアポロはそれが泰虎の首が折れた音だと思った。

恐らく第三者がこの光景を見てもそう取っていただろう。

「…ふう」

色々と溜まった不満が一気に解消された為か、一旦下を向きながらザエルアポロが安堵の溜息を吐いた瞬間だった。

——何かがおかしい。

ザエルアポロは言い様も無い程に大きな違和感を感じた。

確かに骨が折れたのは確実だろう。

だが何故、触手の羽から感じる感触に変化が無いのか。

そして何故、自身の右手の感覚が無いのか。

「あ…ああア…？」

ザエルアポロは顔を持ち上げ、今一度自身の状況を確認する。

眼前には未だに触手の羽に締め上げられたままの泰虎。先程確認した感触の通り、彼の首に変化は無い。

そして次に視界に映ったのは——大きな手に握られた自身の右手が、その手の内で大量の血を滴り落としながら、五本の指全てをあらぬ方向へと曲げている惨状だった。

「がああああああッ!!!」

即座に走る激痛に、ザエルアポロは悲鳴を上げた。

そして思わず拘束に使用していた羽を解いてしまう。

泰虎の身体が落下する。

だがそのまま地面に倒れ込む様な事にはならなかった。

バランスを崩す事無く、確りと両足で着地。しかもその際、衝撃を緩和する為に一瞬膝を曲げている。

明らかに意識がある事が丸判りだ。

着地と同時に、泰虎はザエルアポロの手を握り潰していた右手を開く。

解放された事に気付いたザエルアポロは、迷わずその場から響転で全力後退する。

「くそっ、くそっ、くそッ…!!」

右手首を左手で押さえながら、ザエルアポロはその表情を歪めた。それが痛みから来るものなのか、それとも怒りなのか如何かは定かでは無い。

やがて全身から溢れ出す濃密な殺意。

知的で冷静な研究者としての自身を取り繕う事なぞ忘れ、衝動に身を任せる様は正に  
 獣。

それはザエルアポロ自身が嫌って己まない姿そのものであった。

「よくも僕の右手を…!! 絶対に殺して——ッ!?!」

そう言つて触手の羽全てを構えたザエルアポロだったが、攻撃に移る事は叶わなかった。

突如として足元が崩れたかと思うと、其処から巨大な骨の蛇—— // 狒狒王蛇尾丸 // が、その顎を大きく開いた状態で襲い掛かって来たのだから。

咄嗟に構えた羽の内、右側の二本を防御に回す。

骨の蛇は顎でそれ等を纏めて捉えると、そのまま龍の如く上へ上へと登り始めた。

それを拙いと考えたザエルアポロは、咄嗟に羽を引き抜こうとするも、顎の中に存在する無数の牙がそれを阻む。

「な…に…!!?」

するとその隙に骨の蛇は頭部を勢い良く振り始めたかと思いきや——何と啜えていた二本の羽を全くの同時に引き千切ってみせた。

余りの想定外な出来事に、ザエルアポロは驚愕の余りその思考回路を停止させる。

「ふえっ！ どんらもんらクホヤロー!!」

直後に響き渡るくぐもった声。

如何やら「どんなもんだクソ野郎」と言っているらしい。

声の出所を探ると、其処には地面に倒れ伏しながら、「狒狒王蛇尾丸」の末端の尾に当たる部分である骨の柄を啜えている恋次が居た。

その姿から判る通り、彼は何と腱を切られて動かせない状態の手足以外を用いて卍解を操ってみせたのだ。

——手が使えないなら口を使えば良いじゃない。

つまりはそういう事である。

単純な発想ではあるが、そう易々と出来る様な芸当では無い。そのチャレンジャー精神の高さは流石と言うべきだろう。

「死にぞこない風情が粋がりやがって!!」

ザエルアポロは苛立ちを露にしながら、懐に手を伸ばす。

やがて其処から取り出したのは、先程使用した“人形芝居”で作成した二つの人形だった。

その内の一つである恋次に似通ったデザインの人形を二つに折り、上半身と下半身に別けた。

そして下半身側の内部に入っているパーツを指で探り、どの部分を破壊すべきか考え始める。

「んな…!!?」

だがその行動が命取りだった。

周囲への警戒が散漫になっていたのか、ザエルアポロは真上から降り注ぐ謎の液体の

存在に気付く事が出来無かった。

案の定、彼は間抜けにもそれを全身に被ってしまった。

「何だ、これは…？ ヌメヌメして気持ち悪——うわっ!!？」

次の瞬間、ザエルアポロはその謎の液体によって足を滑らせ、後方へと盛大に転んでしまう。

そのままの勢いで後頭部を強打。衝撃で口から声が漏れる。

「く、そっ…!! 本当に何…が…？」

悪態を吐こうとしたザエルアポロだったが、直前に気付いた。

自身の両手が空になっている事を。

「よっしや取ったア——!!!!」

背後から何かが地面を擦る音と、嬉々とした感情を感じる声が響き渡る。

全身に浴びた液体の御蔭で、何度も手足を滑らせながら、ザエルアポロは背後を振り向いた。

真つ先に視界に入ったのは、ヘッドスライディングの様な体勢で地面に転がっているペツシエ。

前方へと伸ばされたその両手は、何かを抱える様に上を向いている。

だがザエルアポロは察した。其処には先程まで自身が所持していた筈の二つの人形が乗っている事に。

「見たか!! これぞ我が秘技、インフィナイト・スリック無限の滑走!! この液体は無限に放出される上、その高い滑性がありとあらゆる攻撃を無効化する!!!」

立ち上がりながら、ペツシエは何処か得意気な雰囲気醸し出しながら、謎の液体について大声で説明する。

だがその内容には決定的な誤りがあった。

まず無限と謳いつつも放出量は有限。そして攻撃の無効化は出来るには出来るが、これにも限度がある。

完全に名前負けであった。

「これで手札の一つは封じた！ もはや貴様の思い通りにはいかんぞ!!」

一通り説明して満足したのか、ペツシエは仮面の内側からでも判る程に大きく鼻を鳴らした。

徐に両手を横に移動させる。するとやはりザエルアポロの予想通り、その手の内には二つの人形が乗せられていた。

「さあ、存分に反撃しろ恋次!!」

「——人任せの癖に、随分と態度が大きいね…」

ペツシエはそれ等を纏めて、何時の間にも隣に立つて居た人物へと渡す。

溜息を吐きながら、隣の人物——雨竜は受け取った人形を、懐から取り出した布の様な物で包み込んだ。

「それと僕の名前は雨竜だ。仲間の名前を間違えるのは失礼だぞ、ペツシエ・ガティエーシエ」

「むうっ!? 一度しか名乗っていない筈の私の名を——まさか貴様っ…私の事が好きなのだな!!」

「一体何の事を言っているんだ!! 単に僕は普通より記憶力が良いんだよ!!」

「いきなりのナルシスト発言とは恐れ入る…!」

「おちよくっているのか君は!!」

緊迫した状況下にも拘らず、二人は漫才を展開し始める。

別にペツシエのボケを流せば如何とでもなるのだろうが、根っからのツツコみ体質である雨竜には不可能だったらしい。

苦勞しながら何とか立ち上がったザエルアポロは、その内の雨竜に対して呟いた。

「莫迦な…お前の手足の腱は全て切った筈だ!!」

———なのに何故平然と動いている。

ザエルアポロはその天才的頭脳をフル稼働させるが、一向に納得が行く答えに辿り着けない。

遠目には判らないが、良く見ると雨竜の手足を中心に紐の様な物が結びつけられてい

るのが確認出来る。

これは滅却師の超高等技術——らんそうてんがい“乱装天傀”。無数の糸状に縊り合せた靈子の束を動かない箇所接続し、自分の靈力で自分の身体を操り人形のように強制的に動かす術だ。

身体中が麻痺し、肉や腱が切れ、骨が砕けても関係無い。術者の靈力が続く限り、文字通り身体が塵になるまで戦い続ける。

己の身を顧みず、敵を倒す為だけに全てを投げ打つ。

傍から見ると、その者を最期まで兵器として扱う為の狂気の術でしか無い。少なくとも、これを行使する者の正気を疑う。

だが滅却師の理念を考慮してみれば、何ら不自然でも無かったりする。

彼等の目的は、人間を襲う虚を尸魂界へ送ることを良しとせず、あくまで虚を完全に消滅させる事にある。

その意志は固く、例えそれで尸魂界と現世にある魂魄の量を乱し、世界の崩壊を引き起こす要因だとしても、一切曲げる事は無かった。

それ故に調整者たる死神と対立し——滅ぼされる結果となった。

「世界には君の知らないものもあるって事さ」

「ちっ！」

とは言え、「乱装天傀」の効果範囲は基本的に肉体のみで、内臓等はそれから外れている。

その為、雨竜はこれまた父から拝借してきた薬を使用し、ある程度まで治療を施す事で何とか誤魔化していた。

雨竜は一先ず先程からボケ倒し続けているペツシエを無視して、驚愕するザエルアポロに冷たく言い放った。

雨竜自身としては特に含みも無かったのだが、相手は挑発として受け取ったらしい。ザエルアポロは舌打ちすると、残った二本の羽を広げて臨戦態勢を取る。ペツシエは動揺した様だが、雨竜は動じなかった。

「さて、この状況で一方にばかり注目していて良いのかな？」  
「な、に…!!？」

雨竜は口元に笑みを浮かべながら問い掛ける。

まるで忠告している様にも取れるそれに、理解が及ばなかったザエルアポロだった

が、即座に理解した。

知らぬ間に自身の後方で膨れ上がっていた霊圧の存在に気付くと同時に。

「お前——ツ!!?」

其処に立って居るのは確かに泰虎だ。

だがその姿が先程までとは明らかに異なっていた。

大きな変化は上半身。『巨人の右腕』に『悪魔の左腕』だ。

二本の腕の鎧が更にその範囲を広げ、結果、その上半身は中心部から左右其々に白と黒に分かれた鎧に覆われている。そのデザインも先程までの無骨なものとは打って変わり、まるで人の骨格を基調にした禍々しいものへと変貌を遂げていた。

鎧は口元にも広がっており、勿論それも同様の変化が及んでいる。

今の泰虎の姿を言い表すのであれば——正に魔人。

鎧が口元のみならず顔全体へと広がっていれば、虚と見間違えていたかもしれない。

だが落ち着いて観察してみると、その可能性は皆無だと判断出来た。

根拠はその眼。確固たる理性と強い意志を感じるそれは、本能に任せて暴れまわる化物とは一線を画すものだ。

——まさかこの期に及んでパワーアップを遂げたとも言うのか。

一体何処の御伽噺の主人公だと、ザエルアポロは内心でツツコみを入れた。ならば此方は次の場面には必ず倒される運命にある悪役か。

冗談では無い。ザエルアポロはその流れを打ち砕くべく、先程恋次の手で引き千切られた二本の羽の先を胸元まで移動する。

盛大に出血を続けるその傷口の下に、掌を上に向けた両手を置く。

当然、その両手には瞬く間に血液が溜まって行く。

やがて許容量を超え、掌から溢れ始めた時、ザエルアポロは動いた。

その血を惜しみ無く使い、両手で宙に大きな円を描く。

この時点で既に判るだろう。

そう、ザエルアポロは「王虚の閃光」を放たんとしているのだと。

「ヤッせるか……!!」

現時点で使える手札の中では最高クラスの威力を誇り、加えて発動までの時間も最も短い。

泰虎がどれ程のパワーアップを遂げたのか不明だが、彼が動く前に先手を打つのに最

適な技はこれ以外に無い。

ザエルアポロはそう判断した。

同系統であり更に上の威力を持つ「黒虚閃」でも良いのでは、と思うかもしれないが、急を要するこの場面では不適切だった。

何故なら此方は発動までに必要となる霊圧量が極めて多い。難無く放てる十刃は上位のみで、それ以下では相応に長い溜めが必要となるのである。

「消炭になれ人間!!」

ザエルアポロの顔に笑みが浮かぶ。

だが彼は失念していた。

先程の雨竜の忠告を。

「王虚の——」…グアツ!!」

宙に描かれた赤い輪を媒介に霊圧を集束させ、いざ放たんとした直後。

ザエルアポロの口から苦痛の声漏れる。

見れば彼の両肩の付け根付近からは、青い刃が生えていた。邪魔が入った御蔭か、集束していた筈の霊圧は拡散。技は不発に終わった。

「——やれやれ、ついさつき言ったばかりじゃないか」

「おのれ…!!」

「その有様で天才を名乗るなんて、実に滑稽だ」

両肩を貫いているのは、青い光の刃を持つ剣——ゼーレシュナイダー。滅却師唯一の刃を持った武器だ。

父である「石田 竜弦リゅうげん」が院長を務める空座総合病院。その院内にある隠し倉庫から、雨竜が勝手に拝借して来た物でもある。

本人の了承を得ていない時点で窃盗以外の何ものでも無いのだが、本人は頑なに借りただけだと否定の意を示していた。

ザエルアポロは首だけを振り返らせると、雨竜を睨み付けた。

そして先程よりも警戒レベルを上げていた御蔭か、ザエルアポロは気付いた。雨竜の隣に立って居た筈の者が居ない事に。

「——気付いたか…だが遅い!! やるぞドンドチャツカ!!!」

「了解でヤンス!!!」

突如として響き渡る二つの声。内一つは探していた当人のものだ。

ザエルアポロは弾かれる様にして左側へと振り向く。

其処には大口を開けるドンドチャツカの上に乗る、「究極」を構えるペツシエの姿があつた。

前者は口から飛び出した砲台の様な物へ、後者は剣の切っ先へと霊圧を集束させる。球体状へと変化したその二つの霊圧は、細い稲妻の様な線で繋がっていた。

これはペツシエとドンドチャツカの協力技。虚夜宮より離れた後、人知れず鍛錬に鍛錬を重ねた末に編み出した切り札。

「滅ベザエルアポロ!!  
セロ・シンクレテイコ  
 “融合虚閃”!!!」

放たれた二つの虚閃が、やがて同一軌道上で合流。

その威力と大きさを何倍にも増幅させながら、ザエルアポロを飲み込んだ。

——これで決まれば御の字。

技を放った二人はそう思いつつ、全く同時のタイミングでその場に崩れ落ちた。

元から限界寸前だった二人だ。雨竜の隠し持っていた治療用具で幾分か回復したとは言え、全力で技を放てば意識も失うだろう。

「くそがあああああッ!!!」

光線が通り過ぎた後、辺り一面に煙が巻き起こる。

その中から叫び声が上がったかと思うと、何かが煙を掻き分けながら飛び出して来た。

腰回り以外の白装束が燃え尽き、その恰好はほぼ全裸。露になった皮膚は焼け爛れ、致命傷とは行かずとも、重傷に等しい状態のザエルアポロだった。

これはある意味納得の結果とも言える。

幾ら倍増しているとは言え、ザエルアポロは腐っても十刃。

遊撃要員上位クラスの破面が放つ虚閃、その数倍程度では彼を仕留めるには足りない。

息を荒げながら、ザエルアポロは内心で己の判断ミスを悔いていた。

本来であれば、この「融合虚閃」は無傷で済ませられた筈である。

序盤の恋次との交戦の様子を見ていれば自ずと理解出来るだろうが、ザエルアポロは今迄に解析した霊圧を好きなタイミングで拡散させる装置を開発している。

それは小型化にも成功しており、常に白装束の中に携帯していた。

ペツシエとドンドチャツカの霊圧は何年も前に解析済みだ。そしてそのデータは装置の中に入力されている。

だがザエルアポロはその装置を起動していなかった。

不意打ちを仕掛けて来たペツシエ達を瞬く間に叩きのめした時点で、これは必要無いなど判断して。

加えて帰刃が齎す万能感から来る慢心と、泰虎への報復のみに絞られた思考回路。長時間に亘って自身に圧倒的有利な状況が続いていたのも、その考えに至る要因となっていた。

「どいつもこいつも僕を虚仮にしやがって!!!」

「…流石に頑丈だね」

尚も戦意と殺意を失わないザエルアポロに、雨竜は呆れた様な声を漏らした。

だが焦燥は無い。

何せ『融合虚閃』が直撃した時点で、自分達の勝利は確定しているのだから。

「でも……これで詰みだ。今だ茶渡君!!」

「決めろ茶渡オ!!」

「ツ!!?」

雨竜に続き、遠方の恋次も声を上げる。

この時を待っていたと言わんばかりに、嬉々とした表情を浮かべながら。

ザエルアポロも今更ながらに気付いた。

つい先程までの猛攻は、自身の意識を完全に外部へと逸らす為。

そして本命は一体何なのかは——言うまでも無い。

「終わりだ」

「くっ——!!!」

既に泰虎はザエルアポロの懐へと入り込んでいた。

後方へと引き絞られたその白色の鎧に包まれた左腕は、既に凄まじい量の霊圧に覆わ

れている。

「ゴルベ・モルタル」  
「真・魔人の一撃」

誇りと信念の宿った魔人の左拳が振り抜かれる。

見た目の力強さとは裏腹に、その拳撃は極めて静かだった。

周囲の空間を置き去りにした拳は、真つ直ぐにザエルアポロの胸部へと捻じ込まれ――

――その部分に特大の大穴を開けた。

それだけに終わらず、突き抜けた拳撃の余波は、ザエルアポロの後方へ点在している宮を次々に破壊しながら突き進み、やがて虚夜宮の壁に罅を入れた末に収まった。

破面の身体構造は、人間のそれとほぼ相違無い。当然、心臓や肺といった人体に於いて最も重要な器官が消失した状態で生命活動を維持出来る筈も無い。

次第に彼の瞳から光が失われて行く。

拳撃の衝撃の名残か、指示系統に啞えて支えを失った身体がぐらりと後方へと傾く。

――ふざけるな。

脳が無事だった影響か、僅かに残った意識の中で、ザエルアポロは叫んだ。

何だこの結末は。完全に御都合主義の物語通りではないかと。

この場合、言うなれば彼の役回りは嘯ませ役、踏み台といった辺りだろうか。気に食わないのも当然だ。

しかしこの状況は如何にもならない。

流石のザエルアポロでも、心臓等を瞬時に修復出来る手段は持ち合わせていないのだから。

——忘れるものか、この屈辱。

意識が消える最後の瞬間まで悪態を吐きながら、ザエルアポロ・グランツは完全にその生命を終えた。

泰虎は左腕を引き戻すと、その顔を雨竜と恋次が居る方向へと向けた。

徐にその左腕を胸元まで持ち上げる。

そして左手を握ると——その親指を上にした。

「ム……！」

これは泰虎が良く用いるグッドポーズ。

彼の友人も良くそれを目にしており、実は結構ダサイと思われていたりするものだ。

「…ぷっ」

「ぷっぷっ…」

二人は暫しの間それを眺めて居たが、やがて我慢し切れずに嘔き出した。

彼等の様子に満足気な笑みを浮かべると、泰虎はそのまま体を後方へと傾け始め――

――大の字に地面へ寝転がる。

「…ありがとう、じいちゃん」

泰虎は小さく呟く。

色々と限界だったのか、次第に瞼が落ち始める。

上半身を覆っていた鎧も、周囲に溶け込む様にして消えて行く。

――達者でな、ヤストラ。

意識を失う直前、泰虎は何処からそんな声が聞こえた気がした。

そんなザエルアポロが倒されるまでの一連の流れを、別の地点から観察している者達が居た。

人数は二人。一人は何かモニターらしき物を地面に設置し、それを食い入る様に眺めて居る。残る一人はその後方にて、何か大きな荷物を積んだりアカーの様な物を引いている。

護廷十三隊の隊長である事を証明する羽織を身に纏い、首元はクッション状の襟で囲われている。

頭部にはまるで山羊をモチーフにしているかの様な飾りを持ち、白い肌に面妖な黒い化粧をした異相を持つ男——マユリ。

その後方では、これまた特異なミニスカート丈の死覇装を身に纏う、無表情で黒髪的女性——マユリが己の義骸技術と義魂技術の粋を集めて作った最高傑作の人造死神にして娘であるネムが、静かに佇んで居た。

「…生きた状態で採取する予定だったのだが。全く、御蔭で貴重なサンプルが台無しだ  
ヨ」

「肉体の大半は無事なのが救いでしょうか」

「極めて不本意だがネ…」

マユリの呟きに、ネムが相槌を打つ。

———これだから野蠻人は。

マユリは内心で、ザエルアポロを倒す事に関わった者達全員へ毒づいた。

御蔭で自身の目的の一つが阻まれてしまったではないかと。

この思考回路から判断出来る通り、マユリはマツドサイエンティストに分類される人物であった。

常日頃から研究やら実験に打ち込み、中でも人体実験が得意。

そして敵として戦う相手を主に実験材料として認識しており、初見の相手や能力を見ると研究意欲を刺激されるのか、サンプルとして回収せんと躍起になる部分がある。

正確も冷酷及び残虐で、非倫理的な行動が目立つが、本質はやや異なる。隊長としての才能と使命感を併せ持ち、瀟々を護る為として彼なりに最善の行動を取っているに過ぎない。

——それに巻き込まれる者にとつては堪ったものでは無いのだが。

一見ザエルアポロと同類かと思われるが、これも異なる。

今迄存在した何物よりも素晴しく在れ。だが、決して完璧であるなかれ。科学者とは常にその二律背反に苦しみ続け、更に其処に快樂を見出す生物でなければならぬ。

この理念の元、マユリは己が道を突き進んでいるのだ。

完全な生命を求め、それに至つたと自負するザエルアポロとは一線を画する。

同じ科学者としての格はマユリの方が遙かに上であつた。

「だがまあ——良しとするヨ。新たな発見もあつた事だしネ」

そう言うと、マユリは先程までの不機嫌そうな表情を一転、狂気漂う笑みを浮かべた。

その視線はモニター——以前雨竜に仕込んだ監視用の菌を通して映る人物の一人に向けられていた。

「死神や滅却師のそれとは異なる、まるで虚を思わせる謎の力…。しかも十刃を仕留める程とは——」

「マユリ様…」

「あの鎧は自らの肌を媒介にしている様にも見えたが……はて、一体どういった原理なのか……。クククつ、実に興味深いヨ人間!!」

黒崎一護の仲間に出すのは流石に拙いのでは、と考えたネムは口を出そうとしたが、直前で止める。

頭脳明晰なマユリだ。その程度は理解しているだろうし、ある程度は自重してくれるだろうと信じ。

「行くぞネム。グズグズしては検体の鮮度が落ちる上に、奴等の傷も改造なおしてやらねばならんからネ」

「はい」

「おお、何と慈悲深い事か。まるで優しさに脊髄が付いて動いている私らしい考えだヨ」  
——んな訳あるか。

この場に他の死神が要れば、百人中全員がツツコンでいたであろう。

案の定、あわよくばその治療の際に泰虎の血液等のサンプルを回収出来れば——と  
いった下心を持ちながら、マユリはネムを引き連れてその場を後にした。

## 第五十二話 主人公と豹王と、三日月と金鮫と…

宮の壁を突き破り、其処から二つの影が飛び出す。

突出している方は一護。織姫の治療を受けたのだろう。その身体には傷一つ無く、それ程消耗していなかった為か、靈力もほぼ全快に等しい。

正に戦いに臨む前としては理想の状態だ。

しかし当人の顔に浮かぶ表情は硬い。

何せ相手が相手である。致し方無いだろう。

一護は依然として緊張した面持ちのまま、天鎖斬月を構えた。

そんな彼の眼前に躍り出たのは、殺意を剥き出しにした凶悪極まりない笑みを浮かべるグリムジョー。

左腰の斬魄刀は既に抜かれており、その時点で油断は無い事が窺える。如何やら今回ばかりは本気で一護を仕留めに掛かっているらしい。

「はっ、ハアツ!!!」

先に仕掛けたのは勿論グリムジョーだった。

型に縛られない、野性味溢れる荒々しい太刀筋で一護に襲い掛かる。

そして今迄経験して来た戦いの中で学んだのか、何処を狙えば最も効果的か、敵を仕留められるかといった部分を理解しているのだろう。一太刀一太刀が決して受ける訳にはいかない必殺の攻撃となっていた。

だが一護としてそれは同じ事が言えた。

その類まれなる天才的センスを以て、斬撃の嵐の尽くを見切つては捌き、御返しとばかりに反撃に転じる。刃を交える度、その精度は増していった。

今の一護は既に卍解を解放している。加えてドルドーニとの戦いを経て、その強みを活かす事を理解していた。

もはや一時の感情に振り回され、刀を振るう腕を鈍らせる様な真似はしない。

精神を研ぎ澄まし、相手の太刀筋を見極めながら、確実に攻撃を直撃させる事を重視しながら、一護は刀を振るう。

次第にグリムジョーの身体に刻まれる太刀傷が一つ二つと増えて行く。とは言え、全てが掠つた程度で、戦闘には何ら支障は無い。

だが逆に一護は未だに無傷。それがグリムジョーの焦燥を煽つた。

虚化無しでは鋼皮に阻まれて傷一つ付けられなかった以前とはまるで異なる。

安定した精神状態と丁寧に練り込まれた霊圧は、漆黒の刀身の持つ切れ味を増加。結果、一護の放つ斬撃はグリムジョーの鋼皮の強度を上回る事に成功したのだ。

「チイツ!!」

斬撃の一つが右頬を掠め、僅かに数滴の血が宙を舞う。

気付けば戦況は一護へと傾き始めていた。

このまま斬り合っているのは分が悪いと判断したのか、グリムジョーは舌打ちすると、一旦間合いを取る為に動く。

だが一護はそれすらも読んでいた。

驚異的な速度で死角である背後へと回り込むと、すかさず刀を振り被る。

「逃がすかよ」

「ッ!?!」

——何だこの強さは。

弾かれる様にして顔を背後へ振り向かせながら、グリムジョーは混乱していた。

確かに虚閃による不意討ちを躲した時点で、幾分か腕を上げていたのは把握していた。

だが現状は如何だ。後手に回っているのは自身の方。しかも時間の経過と共に、一護は更にその勢いを増して行っている。

グリムジョーは無理矢理上半身を捻ると、一護の繰り出した斬撃の軌道上に自身の斬魄刀を滑り込ませる。

だが極めて不安定なその体勢で、真面に攻撃を受け切れる筈も無く——刀身同士が交差した直後、グリムジョーは身体ごと吹き飛ばされていた。

「ぐ、ハッ…!!」

全身に襲い掛かった凄まじい衝撃に、肺の空気が気管を通して口から強制排出される。

歯を食縛りながら、グリムジョーは何とか体勢を立て直すと、上空に居るであろう一護へ視線を向けた。

「てめえよくも——ッ!?」

だが其処に一護は居なかつた。

同時に背筋に走る悪寒。

確証は一切無い。だがグリムジョーは幾多の戦場を駆け抜ける中で磨かれた己の勘を信じ、真下目掛けて斬魄刀を振り下ろした。

刹那、自身の立つ位置よりもやや下で、刀を下段に振り被つた一護の姿が視界の端に映る。

そしてその刀身を包んでいる黒い霊圧も。

グリムジョーの脳裏を過る、第一戦にて自身に小さく無い傷を残した、対象へ向かつて飛来する黒の斬撃——月牙天衝。

その持つ威力を身を以て理解していた彼は驚愕すると同時に、その顔に焦燥の色を浮かべた。

しかし幾ら何でもこの至近距離であの技を打てば、一護自身も巻き込まれる可能性が高い。

勝ち急ぐ余り判断を誤ったか。そう考えたグリムジョーだったが、直後にその刀身に纏う霊圧の僅かな違いに気付いた。

以前見た限りでは、あの黒い霊圧は刀身から外部へ噴き出す様にして放出されていた

筈ではなかったかと。

本来、月牙天衝は遠距離攻撃に分類される技だ。それは破面で言う自身の霊圧を固めて射出する虚閃や虚弾等の原理と似通ったものがある。

だが今のこれは違う。明らかに霊圧が刀身から離れる様子が見られない。

つまり一護は黒い霊圧を射出するのではなく、纏わせた状態で維持する事で、通常の斬撃に月牙天衝の威力を乗せて振るわんとしていたのだ。

——この斬撃は拙い。

グリムジョーはその事を正確には理解出来なかったものの、本能的に悟った。今の状態では確実に打ち負けてしまうと。

だが今更攻撃を中断出来る筈も無く、グリムジョーの振るった刀身は一護のそれと接触し——いとも容易く弾き飛ばされた。

柄が手の内から離れ、激しく回転しながら遥か上空へと飛んで行く斬魄刀。

この瞬間、グリムジョーは普通で見れば無手という圧倒的不利な状態へと陥ってしまった。

「な…!!」

「うおおおおおッ!!!」

此れで決まりだと宣言しているかの様に、一護は咆哮を上げる。

刀を振り上げた体勢から、即座に突きの構えに切り替えると、その切っ先をがら空きな腹部目掛けて突き出した。

「ッ!!?」

本来であれば確かに決まっていただろう。

あの第二戦以降、グリムジョー自身に何の変化も無かったのならば。

「——ナメてんじゃねえぞ……」

「嘘、だろ……!!?」

「この程度で俺が殺られると思ったかよ、ああ?」

天鎖斬月の切っ先は何を貫くでも無く、途中で止められていた。

その刀身と同様に漆黒に染まった、野獣の鉤爪を持つ右手によって。

「微温いぞ黒崎イツ!!」

「ぐ、あッ!!」

一護の逃走を阻む為、グリムジョーは漆黒の刀身を握り締める右手に更に力を籠める。

空いた左手にも同様の黒い霊圧を纏わせると、間髪入れずにその鋭い鉤爪を振るつた。

一護は咄嗟に柄を握る右手を放すと、上体を思い切り捻って回避行動を取る。

だが躲し切るには僅かに足らず、右の肩口を浅く斬られてしまう。

一矢報いた事で気を良くしたのか、グリムジョーの口元が吊上がる。

直後、僅かに彼の右手が緩んだ事を、一護は見逃さなかった。

脚部へ力を籠め、全力で霊子の足場を蹴る。

すると刀身は右手の拘束からスルリと抜け出し、同時に一護は後方へと距離を取る事に成功した。

「相変わらず、すばしっこい奴だぜ」

「く……!」

一護は困惑していた。

正直言えばあの時、仕留めるまでとは行かずとも、決定打は与えられると思っていた。それが如何だ。阻んだのは、グリムジョーの両手に突如として具現化した、謎の黒い鉤爪。

咄嗟の思い付きだが、黒い霊圧を纏わせた刀身から繰り出した斬撃の持つ威力は、元となる月牙天衝に匹敵する。

それを掴んで止めるとは、脅威としか言い様が無い。

一護は自身の右肩に刻まれた五つの切傷を見遣った。

ほんの少し掠っただけでもこの威力だ。斬魄刀から繰り出される斬撃を明らかに上回っている。

思い返してみても、あの鉤爪は以前の戦いの中では一切使われていない。

切り札の一つとして隠していた——否、その時よりも強くなっていると見るべきか。

一護はグリムジョーへの警戒レベルを更に上げた。

腕を上げたのは自身だけでは無い。油断は禁物だと。

とは言え、一護の思い付いた技もまだまだ荒削りの域を出ない未完成なもの。

しかしこの天性の才を持つこの男は、一度使用しただけで大凡の感覚を掴んでいた。

——次は止めさせない。

一護は表情を引き締めた。

「…良い顔になったじゃねえか」

グリムジョーは一旦言葉を区切ると、ふと自身の右手へ視線を移す。

するとその黒い霊圧の一部が剥がれ落ちており、剥き出しになった掌には一筋の傷が刻み込まれていた。

丁度その部分は天鎖斬月の刀身を挿んで止めた部分に当たる。如何にあの鉤爪が強力とは言え、一護のそれには及ばなかったらしい。

だがグリムジョーの表情には、悔しさや怒りといったものは微塵も感じられない。寧ろ逆に笑みが浮かべ、更なる戦意を滾らせている事が理解出来る。

グリムジョーは愉しさを見出していたのだ。多少誤差はあるが、この拮抗した戦いを。

彼にとって、これは初めての感覚だった。

今迄は例え弱者であろうと容赦せず、敵と定めた相手を徹底的に破壊し尽くす。そん

な事を繰り返し、爽快感を得ていた。自身は絶対の王であり、その道を阻む者は許されないのだと。

しかしその真逆、現在の様に出し惜しみ無くぶつかり合う中で生まれた充実感。加えて両者共に切り札を残しており、まだまだ勝敗は判らない。

それが何とも新鮮で、心踊るものだとは思いつかなかった。

——だがそれでも、最終的に勝つのはこの自分だ。

内心でそう断言すると、グリムジョーは上体を前屈みにし、両手を開いて鉤爪を構える。

その姿は正しく狙いを定めた獲物へ襲い掛からんとする獣。

一護はそれに対抗するべく、刀を中段に——牽制と攻防どちらにも対応出来る、極めて基本に忠実な正眼の構えを取る。

「俺が戦いてえのは、今のてめえじゃねえ」

一護はその言葉が何の意味を指しているのか、十分に理解出来た。

グリムジョーが望んでいるのは、此方が現状で出せる全力であり切り札である虚化。それをした自身と戦い、決着を付けたいのだと。

だが一護としては、虚化は暴走というリスクの高さ故に、本当に最後の手段として温存して置きたいのが本音であった。

結局のところ、グリムジョーの帰刃の能力次第ではあるが、ほぼ確実に使用せねばならない状況にはなるだろうと予想しつつ。

「無理矢理にでも出させてやるぜ——てめえの本気をな!!」  
「…やってみやがれ!!!」

先に踏み込んだのはグリムジョー。すかさず一護も刀身へ霊圧を纏わせると、真正面から立ち向かう。

こうして両者は再び激闘を再開した。

巨大な二つの霊圧がぶつかり合う光景を、宮の屋上に立つて眺める。

戦況としては、今のところほぼ互角。つい先程までは一方が押していた様だが、如何やら劣勢だった側が奮起したらしい。

放たれる霊圧量は両者共にほぼ差は無いが、後者の方に勢いがある様に見受けられる。

流れとすれば、序盤を終えて中盤に差し掛かった辺りか。

勝敗が決するには未だ時間が掛かりそうである。

「何か強くなつてねえか、グリムジョーの奴……」

腕を組みながら、ノイトラは首を傾げた。

一護なら兎も角として、グリムジョーに何時そんな切っ掛けがあったというのか。

懸命に過去から現在までの記憶を辿ってはみるものの、彼がああ黒い鉤爪の様な技を使用している場面は全く無い。

考えられるとすれば、自身が居合わせる事が無かった出来事の中だろう。ノイトラは推測する。

まず二度目の現世侵攻時は無い。何故ならグリムジョーと一護の戦いの様子を記録した映像データは既に確認済みだからだ。

本人が秘密裏に鍛錬を重ねていた可能性も低い。従属官達も居らず一人で、殆ど拠点の宮から動かずに、一体何が出来るというのか。

ならば考えられるのは一つ。

六の数字を賭けた、ルピとの階級争奪戦しか無い。

「…頑張ったんだな、ルピの奴」

新たな技を閃いたり、己の秘めたる力を覚醒させるには、相応の死線を越える必要がある。

解り易い例を挙げるとすれば、絶体絶命の窮地か。

かく言うノイトラ自身も、それを潜り抜けた末に帰刃の能力を進化させている。

つまりグリムジョーもルピとの戦いの中で追い詰められ、あの鉤爪を具現化させるまでに至ったのだろう。

ルピの奮闘を嬉しく思う反面、僅かにあの時感じた罪悪感も再び込み上げて来る。

だがノイトラは自身に喝を入れ、即座にそれを振り払う。

気を取り直し、再び視線を一護とグリムジョーの戦いへと移して、推移を見守ると同時にタイミングを見計らう。

そんな時、ノイトラの隣へ一つの影が降り立った。

「——加勢しないのか？」

「…解つてて言つてんだろ」

金色の髪を靡かせながら、ハリベルは軽い口調でノイトラへと問い掛けた。

彼女の到着より数秒遅れで、従属官四人が後方より現れる。

ノイトラは背中越しにそれを確認しつつ、ハリベルとの会話を続行する。

「これはグ<sup>ア</sup>リムジ<sup>イ</sup>ョーの戦いだ。それに土足で踏み込める程、俺は馬鹿じゃねえ」

そうは言うが、勿論その本音は別にある。

ノイトラにはグリムジョーの加勢に向かう心算なぞ一切無い。寧ろ自身の目的を果たす為には、史実通りに一護に敗北してもらわねば困ると考えていた。

でなければ今迄の積み重ねの全てが水泡に帰す可能性が高い。

現状で二人の戦いに介入する様な真似をすれば、必然的に一護を仕留めねばならない事態へと陥つてしまう。

まあ当然だろう。自分達の拠点に無断で侵入して来た時点で、その者は排除すべき敵。それと対峙して何も行動を起こさなければ、もはや十刃の一人としての義務を放棄するという事であり、藍染とこの組織に対する裏切り行為に他ならない。

ノイトラが目的を達成する為には、黒崎一護という存在は必要不可欠。故に現状は傍観に徹しているのである。

それに例え加勢したとしても、他ならぬグリムジョーがそれを受け入れるとは考え難い。

彼の事だ。自身の戦いに横槍を入れたとして、ほぼ確実にその逆鱗に触れる。下手すればそのまま標的が此方に移る可能性も高い。

そうならばはや泥沼だ。

「そう、か…」

「…ンだよ、意外か？」

「いや、お前らしいと思っただけだ」

何故か納得を示す様にして、ハリベルはそう零す。

不審に思ったノイトラは、顔を横に向けながら問う。

明確な返答は無し。だがハリベルは何か微笑ましいものを見ている様な眼で、ノイトラを眺めて居た。

—— どうせグリムジョーが絶体絶命の窮地に陥れば、素知らぬ顔で助けに入るに決まっている。

ハリベルはそう確信していたのだ。

何故かというと、原因はテスラにある。

時間に余裕がある時、ハリベルは彼から良くノイトラの話聞いていたからだ。

最も付き合いが長い理解者であるだけあり、テスラはノイトラの事はほぼ熟知している。

荒れていた過去の姿と、変わった現在の姿。物事の考え方や好き嫌いに始まり、私生活での問題点。

剩えほんの数秒間のアイコンタクトさえ出来れば、大抵の意思疎通は可能という、通常では考えられない事実も判明していた。

正しく以心伝心。その関係の深さは、まるで長年連れ添った熟年夫婦を連想させる。

上司と部下という括りでは断じて無い。力量差はあれど、互いの立場は対等。無駄に

気を遣い合う事も無く、心の内を曝け出せる理想の関係。

所謂親友、または心友というやつかと、ハリベルは納得すると同時に感心していた。だがアパッチにミラ・ローズ、スンスンは違う反応を示した。

まあ簡単に言うと、もしかしてあの二人は周囲に薔薇が咲く様な——所謂モーホーな関係なのでは、と勘繰つたのだ。

ノイトラがこの様な言動を取る時は、大抵真逆の意味で取る事が正解。身嗜みを重視しているのか、普段から結構清潔感を出す為に気を配っている。だが私生活では結構ズボラで、自室で服を脱ぎ捨てる場所が何時も決まっている。

常日頃から給仕の如く身の回りの世話をしていたテスラとすれば、知っていて当然という認識なのだが、他人からして見れば必ずしもそうは取れないという事だ。

「…そいつア如何いう意味だ」

「ククツ、さあな」

「笑つてねえで答えろやコラ」

僅かに眉を寄せながら、ノイトラは問い掛けた。

だがハリベルは笑いながらそれを軽く流す。

——何処か見透かされている様で気に食わない。

子供っぽいとは自覚しつつも、ノイトラは逃げる様にしてハリベルから顔を逸らした。

「ちつ、あの野郎調子に乗りやがって……！」

「ハリベル様も何でワザワザ話しかけんだよ……！」

「ふふふ……」

そんな和やかな雰囲気を漂わせている二人の後ろでは、従属官達全員が何処か重々しく黒いオーラを全身から放出していた。

アパツチにミラ・ローズは露骨に顔を顰め、一見普通に見えるスンスンもその眼を細めながら、ノイトラの背中を睨んでいた。

だがそれも直ぐに収まる。三人の後方より放たれた、霊圧とは異なる謎の圧力によって。

『ッ!!?』

先程までの態度を一転、三人は恐る恐るといった様子で、後方へと振り返る。

其処には両腕を後ろに組んだ何時も通りの体勢でテスラが佇んでいるだけ。

だが一つだけ気になる点がある。その端正な顔立ちに、何時に無い優しい笑みが浮かんでいる事だ。

「…ん？　どうかしたか？」

テスラは僅かに首を傾げながら、此方の顔色を窺う様に眺めていた三人に問う。

依然としてその表情に変化は無い。

だが心成しか、その全身から放たれる圧力が次第に膨れ上がっている様な気がする。

『なんでもありません!!』

三人は全くの同時に姿勢を正すと、声を揃えて即答した。

——今のこいつはヤバい。

内心でそう断言して。

テスラの雰囲気の原因。それは勿論嫉妬である。

自身の意中の相手が、これまた自身が最も親しい友人と楽しげに会話しているのだ。何も感じない訳が無い。

だがその反面、ノイトラに対する信頼もあつた。

彼なら大丈夫。例えハリベルと親しくなつたとしても、友人以上にはならないし、本人がさせないだろうと。

この二つの思いが鬩ぎ合つた結果、周囲に居る者を巻き込む謎の圧力となつて放出されたのである。

実はこのテスラの圧力だが、以前にも一度だけ出した事がある。

それは日課である鍛錬終了時に起こつた。

基礎練習の他、総当たりの形で模擬戦を行つたのだが、アパッチとミラ・ローズがその結果について言い合いを始めたのだ。

切つ掛けは黒星が最も多かつた前者を後者が煽つた為。それに悪い笑みを浮かべたスンスンも参戦するものだから、益々ヒートアップする始末。

ハリベルが冷静に窘めるも、耳に入らず。

彼女が思わず溜息を吐いた次の瞬間——テスラがキレた。

只でさえ鍛錬の指導等で少なからず疲れを覚えていた筈のハリベルに対し、これ以上無駄な苦勞を掛けるのかと。

案の定、その時のテスラが浮かべていた表情は優しい笑み。そして全身からは放たれる謎の圧力。

普段怒らない者が怒ると恐いと聞くが、正にその通り。

御蔭で三人は骨の髄まで恐怖を植え付けられる事となった。

先程大人しくなったのもその経験から来ている。

——実は恐怖すると同時に、密かに快感に等しい何かを感じていたとか、そんな事は決して無いのである。うん。

「んな事より、何でアンタは此処に……ッ!？」

後方にてそんな遣り取りが行われているとはいざ知らず、ノイトラは如何にかハリベルに主導権を握られた現状を変えんと思考を巡らせながら口を開く。

だがそんな時、思わぬ方向から助け舟が出された。

突如として戦場の中心部より放たれた極大の閃光。それとほぼ同時に一護が、そしてその約十秒遅れで膨れ上がったグリムジョーの霊圧によって。

如何やら互いに切り札を切ったらしい。

先程の光線は十中八九、グリムジョーの放った「グランレイ、セロ王虚の閃光」だろう。それを一護が

虚化して防ぎ、続けてグリムジョーが帰刃した。

となれば現状は大凡史実通りに事が運んでいると見るべきか。

想定外続きで精神状態が右往左往していたノイトラは、無意識の内にその口から安堵の溜息を漏らした。

霊圧の上昇から間も無くして、二人は再び戦闘を再開した。

互いに力をぶつけ合う度、結構な霊圧の余波が此方にまで伝わって来る。

「…なに、簡単な事だ」

「あア?」

「強者同士の戦闘というものを、部下達に見せてやりたかったただだ」

ノイトラの言わんとしていた事を察していたらしい。

首を横へと動かし、背後に視線を移しながら、ハリベルは答えた。

「…おい、膝震えてんぞアパッチ」

「は、はあ!? てめえこそその肩は何だっただよミラ・ローズ!!」

「う、うるせえ! あたしは肩が凝り易いんだよ! てめえと違ってな!!」

「そりやどういふ意味だコラア!？」

その先では、如何やら一護とグリムジョーの靈圧にアテられたらしいアパッチとミラ・ロースの姿があつた。

前者は腕を前に組み、やや踏ん反り返る様にして立つて居るが、その両膝がまるで生まれたての小鹿の様になっている。

後者は腰に手を当て、これまたその豊満な胸を張りながら堂々と佇んで居る様に見えるが、両肩が小刻みに上下に動いている。

恐らくハリベルに情けない姿を見せまいと必死に取り繕っているのだろう。

しかし悲しいかな、全く隠し切れていない。

まあそんな状態にも拘らず、小声ながら互いに煽り始める辺り、結構余裕はありそう  
だか。

「なあアスン」

「はい、何ですかテスラさん？」

「…近くないか？」

そんな二人を余所に、どきくきに紛れて何かを目論んでいる者が居た。何時の間にかテスラの直ぐ後ろに移動していたスンスンである。

「気のせいですわ」

「そうか…?」

「そうです。では折角なので、もつと前で観戦しませんこと?」

「…別に構わないが、態々腕を組む必要はあるのか?」

前方で口喧嘩を始める二人とは違い、テスラは特に堪えた様子も見られない。

これは過去のノイトラとの鍛錬の御蔭である。戦闘スイッチに切り替えた状態の彼の霊圧も凄まじいが、帰刃形態は更に別格。

それを何度も間近で見ているのだ。グリムジョーと一護の放つ霊圧に耐えられたのも納得である。

そんなテスラに近寄るのは、何時も通りその長い袖で口元を隠したスンスン。

何故か彼女も特に霊圧の余波による影響は見られない。如何やら咄嗟にテスラを盾にしたらしい。

スンスンは隠れた口元を吊上げながら、テスラの腕を取ると、騒がしい二人を避ける

様にして移動し始める。

つい先程まではノイトラに嫉妬していた癖に、実に切り替えの早い事である。

「…後で指導が必要だな」

緊張感の無い四人に、ハリベルは肩を竦めながらそう零した。

「……マジか……？」

その隣にて、ノイトラは口を半開きにしながら驚愕していた。

——何時の間にフラグ立てたんだコイツ。

同時に内心でツツコむ。お前が恋慕の情を抱いているのはハリベルに対してだろう。なのにその状況は何だと。

テスラの腕を引くスンスンの表情——頬を赤く染め、口元が隠れていても判る程の笑みを浮かべている様子からして、好意を抱いているのは明確。

しかも如何やらその感情を抱いているのは彼女一人では無いらしい。

見れば途中で喧嘩を止めたアパッチとミラ・ローズが、その拳をテスラの腹部へ捻じ

込ませながら、怒りの形相でスンスンへ詰め寄っている。

ぎやあぎやあと騒ぎ立てている為に全ては聞き取れないが、その発言内容からして大凡判断出来た。

何イチャイチャしてんだ、鼻の下伸ばすな、抜け駆けすんな。

前二つは兎も角として、最後の発言についてはあからさま過ぎた。

結論として、テスラは三人の女性から好意を向けられている事になる。

否、言つてしまえば確かにテスラはイケメンだ。彼と最も親しいノイトラだからこそ断言出来た。

容姿は勿論、細かな気配りが出来る上に家庭的といった部分を考慮しても、何処に嫁に出しても恥ずかしくは無いレベルだ。

しかも元の素質に加えて今迄散々ノイトラに扱かれた御蔭か、その実力も相当高い。十刃以外で自身の背中を預けるに最も相応しい者は誰かと問われれば、ノイトラは迷わずテスラの名を上げる。

思い返してみると、意外に惚れる要素は多い。

もしかすると単にアパッチ達の異性への耐性が低く、惚れっぽいだけだったのかもしれないが。

「…ま、良いか」

傍から見ればハーレムであるが、特に問題は無い。

何せあのテストラだ。例えばアパッチ達の想いに気付いたとしても、それを受け入れる事は皆無。

自身はハリベル一筋である事を堂々と宣言して振る、そんな漢義を見せてくれる筈だと、ノイトラは信じていた。

しかもあの反応を見る限り、現状では自力でアパッチ達の気持ちに気付く可能性は低いだろう。

だがノイトラは密かに期待していた。いつその事、最終的にハリベルまで含めた修羅場にも発展してくれないだろうか。

そうなれば実にメシウマな状態だ。実に面白い光景が出来上がる事だろう。

無論、流血沙汰にまで発展しそうであれば迷わず止めに入るが。

——何処の恋愛系ゲームの主人公なんだか。

内心でツツコみつつ、やがてノイトラはその場から移動し始めた。

「何処へ行く?」

「ちよつくらグリムジヨアの奴のフォローにな」

その返答に、ハリベルは首を傾げる。

ノイトラは初め、グリムジヨアの戦いに手出しはしないと云つてなかつたかと。

「さつきの見りや判んだろ。あの野郎、戦いに夢中になつて御姫サマの存在を忘れてやがる」

「…崩姫<sup>プリンセッサ</sup>の事か」

「おう。罷り間違つて殺しちまえばシヤレにならねえ」

——世話の焼ける奴だ。

そう愚痴つている様に見えるノイトラの背中に、ハリベルは苦笑を浮かべた。

「…ああ、そうだ。一つだけ我儘を聞いちゃくれねえか？」

「内容によるな。何だ？」

ノイトラは足を止めて振り返ると、申し訳無さげに問い掛けた。

珍しいなと思いつつ、ハリベルは続きを催促する。

「もしグリムジョーが敗けたら……その先は見ねえでくれねえか……？」

「…それは——」

「頼む、ハリベル」

グリムジョーの勝敗によつて、一体何の行動を取ると言うのか。ハリベルは暫しの間考えた。

だが思いの外、彼女は直ぐに答えへ至る。

単純な事だ。順当に考えると、グリムジョーが敗れた後、次に一護と戦う事になるのはノイトラだ。

そしてその結果は明らかである。態々自身の眼で確認するまでも無い。

戦況を見る限り、現状ではほぼ互角。

例えここから一護が巻き返し、グリムジョーから勝利を挽ぎ取ったとしても、流石に無傷ではないかない。相当に消耗している事だろう。

そんな彼と全開状態のノイトラが戦えば——もはや一方的な蹂躪劇にしかならない。

恐らくノイトラとしてもそれは本意では無いのだろう。

しかし彼の立場上、如何しても遣らねばならない。

——雑魚の命には興味も価値も無い。

何時ぞやのノイトラが言っていた事だが、これに全てが集約されている。

今の彼の性分を知っている今だからこそ、ハリベルは察せた。

ノイトラは徒に弱者の命を奪う様な真似をしたく無いのだ。自身より格下の者達と対等に、気兼ね無く付き合っている姿を見れば自ずと理解出来る。

即ちそれは、過去の己の姿を彷彿とさせる行為が故に。

「…良いだろう」

確かにハリベルの推測は正解であった。

だが実を言うと、もう一つ理由がある。

このまま予定通りに事が運んだ場合、途中でノイトラは絶対に邪魔される訳に行かない状況へと移る上、非常に情けない姿を晒す必要が出て来る為だ。

受け取る側によつてはまた別の意味合いで取るかもしれないが、出来る限り部外者は少ない方が良い。

「済まねえ、恩に着る」

「なに、気にするな」

ハリベルの了承の返事に対して小さく礼を返すと、ノイトラはその場から響転で消えた。

ちなみにこの選択が色々と最良の結果を齎していた事実に当人が気付くのは、相当後の話である。

胸の前に持ち上げた両手を握り締め、何かに耐えているかのような面持ちで、織姫は一護とグリムジョーの戦いを見守っていた。

序盤から既にそうだったが、本気を出した二人はもはや彼女の眼では追い切れない程の速度で動き回っており、一体どちらが優勢なのか全く判断が付けられない状況であった。

「黒崎くん……！」

先に虚化という切り札を切ったのは一護。

切っ掛けはグリムジョーの暴挙であった。

万全の一護と戦う為に織姫を利用し、ネルを人質に取る真似をした時点で予想は付く。

グリムジョーが新たに編み出した技により一護へ反撃し、互いに痛み分けの状況へと持ち込んでから直ぐの事だ。

間も無くして再び激突する両名。

得物が両手に纏った黒い鉤爪へと変わった分、手数や速度に加え、応用性が著しく上昇したグリムジョーに対し、一護は苦戦を強いられた。

だがそれも僅かな間のみ。

一護は戦いの中で己の集中力を研ぎ澄まし続け、その末に対処法を見出したのだ。

如何に手数や速度が増えようが、所詮は徒手空拳の範囲。それに振らせさえしなければ、単にリーチが短くなった二刀流を相手にしているに過ぎないと。

斬魄刀とその鞘を用いた二刀流を操る一角との経験が活きた。

威力や速度は遙かに劣るが、一護にとつては誤差の範囲内であった。

次第に慣れ、攻撃を捌ける回数が増えて行く。そうなれば当然、返し技を捻じ込む余裕も生まれてくる。

——この戦いの中で成長しているとでもいうのか。

だがグリムジョーは危機感を覚えるどころか、逆に喜びを感じていた。

それでこそ自身が仕留めるべき獲物に相応しいと。

黒崎一護という存在を再認識すると共に、グリムジョーの中で欲が出た。

これの更にある領域を見てみたい。そしてその状態の一護と、此方も全力を以て戦い、打ち破りたいと。

もはやグリムジョーは手段を選ばなかった。

一旦距離を取ると、自身に刻まれた太刀傷から流れ出す血を利用し、  
“王虚の閃光”  
を放つ。

傍から見れば普通に一護へ向けて放たれた形にしか見えない。

だがグリムジョーの狙いは別にあつた。その時一護が背を向けていた後方——織

姫の居る宮だ。

戦いに集中していた一護は、躲した直後にそれに気付いた。

だが既に放たれた極大の光線は織姫の間近に迫っており、瞬歩を使用しても到底間に合わないタイミングであった。

しかし一つだけ有効な手段があった。虚化である。

未だ不安も多く、消耗も激しい力だが、その恩恵は凄まじい。一度発動させれば、攻撃に耐久、速度に反応、それ等の基本能力を飛躍的に上昇させる。

つまり比例して瞬歩もそれ相応に強化されるのだ。

一護は即座に仮面を具現化し、装着。その身に虚特有の禍々しい霊圧を纏いながら、極大の光線の軌道線上に割り込んだ。

天鎖斬月の刀身に黒い霊圧——月牙を纏い、受け止める。通常状態の十刃が放てる最強の虚閃だけあり、多少の時間が掛かったものの、無事に切り払う事に成功する。

自身の思惑通りに虚化した一護を目の当りにした為だろう。グリムジョーが嬉々とした表情を浮かべると、響転を用いて先程弾き飛ばされた斬魄刀を回収し、即座に帰刃。膨大な霊圧と共に、その身を豹王の名に相応しい本来の姿へ戻した。

そして間髪入れずに一護へ襲い掛かる。

その姿はまるで極上の餌を前に待機を命じられていた空腹状態の犬が、それを食す許

可を得た瞬間を連想させた。

其処から更に激化する二人の戦闘。

戦況は意外にも互角。現在進行形で成長し続ける一護が優勢かと思われたが、グリムジョーの負傷を恐れぬ攻めに特化した戦法がその想定を覆していたのだ。

相討ちを恐れるが余り、無暗矢鱈に斬り込めず。片やその天性の勘と戦闘センスの高さ故に、有効打を与えられない。

だがほんの僅かな切っ掛けがあれば、その拮抗した状況は崩れる。

それ程までに、戦況は緊迫の度を高めていた。

何度希望を抱いただろう。背筋が凍っただろう。織姫はもはやその正確な数は覚えていない。

それは彼女の隣にへたり込んでいる少女——ネルも同じだった。

「い、いちいお…」

先程まで柱の影に隠れていた筈のネルだが、現在はその眼に大量の涙を浮かばせながら、織姫と同じ方向を眺めて居る。

ちなみに二人は簡単な自己紹介は終えている。

互いに人間と破面という別種族の為、初めは戸惑ったものの、一護を大切に思う者同士という事が判明するや否や、即座に打ち解けた。

「大丈夫だよネルちゃん。信じよう、黒崎くんならきつと…!!」

「う、うん!! がんばれ一護お!!」

織姫に励まされ、気を取り直したネルは精一杯の声援を送る。

それを背中に受けた一護は、思わず仮面の下で口元に笑みを浮かべた。

だが剣筋を乱す事はせず、声援によつて向上した戦意を以て眼前の強敵へと立ち向かう。

グリムジョーは一瞬疑問を抱いた。両腕の装甲で受け止めた斬撃が僅かに威力を増している事に。

だが直ぐに振り払うと、御返しだと言わんばかりに反撃へと移った。

肘を曲げ、その先を一護へと向ける。

すると突如として、その装甲の隙間に棘の様な物が飛び出し、弾丸として発射された。

「ッ!!」

これは「ガラ・デ・ラ・バンテラ 豹鉤」。肘の装甲の隙間から棘状の弾丸を発射するグリムジョーの技だ。

数は五。想定外の攻撃に瞠目する一護だったが、即座に正気に戻ると、反射的に天鎖斬月を下段から振り上げた。

——この程度、纏めて弾き返してやる。

だがその内一つに刀身が接触した瞬間、その判断が誤りであったと悟る。

刀身を通じて、その棘の弾丸の一つ一つが凄まじい威力を持っている事に気付いたのだ。

確証も無い癖に、牽制目的の攻撃だと甘く見たツケか。油断せずに月牙を纏わせるべきだったと、一護は後悔した。

「う、おおおオオオオオッ!!!」

だが今更である。如何なる対処も間に合わない。

ならば——と、一護は虚化によって上昇した臂力に任せ、強引に刀身を振るう。

それが功を奏したのか、計四つもの弾丸を弾き返す事に成功する。

残る一つはやや不規則な軌道を描きながら、斬撃を放った直後である隙だらけな状態の一護。彼の腹部へと直撃した。

「ガッ、フ……！」

その弾丸は溢れ出る霊圧により強度を増した筈の皮膚を容易に貫き、凄まじい衝撃を体内へと伝えた。

激痛の余り呻き声が漏れ出し、呼吸と共に身体の動きが一時的に止まる。

それは致命的な隙。

危機感を抱いた一護は、何とか己を奮い立たせると、瞬歩でその場から距離を取った。

「……まだだ」

グリムジョーは右掌を前に突出し、その先に自身の霊圧を集束し始める。

手首には左手が添えられている。

その構えだけを見れば、先程放った“王虚の閃光”のそれと同様だ。

しかし今回は自身の血を媒介にしていない。

一体如何いう事なのか。一護は困惑した。

「見せてやるぜ黒崎…」

その理由は集束されている霊圧の色を確認すれば解る。

球体上に固められているそれは、グリムジョー本来の持つ青色とは異なり——黒く染まつていた。

「こいつは解放状態の十刃だけが放てる虚閃——」

「なっ…!?!」

——まさか “王虚<sup>ア</sup>の閃光<sup>レ</sup>” より上があるとでも言うのか。

背筋に尋常ならざる悪寒を感じた一護は、咄嗟に天鎖斬月を天に突き出すと、その刀身へ全力で月牙を纏わせ始める。

「凌げるもんなら凌いでみやがれ!!」

“セロ、オスキユラス  
黒虚閃”  
!!!」

そう叫ぶグリムジョーの掌から放たれた漆黒の光線。

今迄に見た虚閃の中で最も霊圧密度が高く、速い。一護は一目見ただけでその脅威レベルを看破した。

だが此方とて負けてはいない。

現状で制御可能な限度一杯の霊圧を籠めている。これであれば十分対抗出来る筈だ。そう信じ、一護は持ち上げた刀身を一気に振り下ろした。

「月牙——天衝!!!」

刀身より放たれた漆黒の斬撃は、黒虚閃に対抗すべく突き進む。

だがこの時、一護は一つの過ちを犯していた。

刀身に限界まで霊圧を籠めたままでは良い。

問題はその後——霊圧の密度だ。

一護は霊圧量ばかりにかまけて、肝心なそれを失念していたのだ。

漆黒の斬撃と光線が真正面から衝突する。

その余波により、周囲に点在している宮が次々に破壊されてゆく。

ちなみに織姫とネルの居る宮は離れにある為、多少の影響はあるものの無事だ。

始めこそ拮抗していたが、次第にその勢いを落としていたのは月牙天衝だった。

考えてみれば当然だ。放つてしまえばそれ以上の変化は無い月牙天衝に対し、虚閃は靈圧にさえ余裕があれば放射時間を延長する事も強化する事も可能としている。長期戦になればどちらが不利なのかは分かり切っていた。

とは言え黒虚閃は本来、長時間の放射は不可能な筈である。

理由は使用する桁違いな靈圧量にある。

通常虚閃の放射時間が大凡五秒と仮定すると、倍の十秒にしたい場合はそれに比例して使用する靈圧量を増やさねばならない。

黒虚閃でそれを成すとすると、並大抵の靈圧制御能力では如何あつても不可能。

出来るとすれば、虚閃を極限まで極めた者か、上位十刃しか考えられない。

だがグリムジョーは極めて強引な手法で放射時間を延ばしていた。

発射元である右掌の球体上の靈圧。それに放射と同時進行で靈圧を集束させ続けていたのである。

通常、そんな真似をすれば高確率で靈圧が暴発し、自爆という運命を辿ってしまう。問題無く行うには想像を遙かに超える靈圧の制御力が求められる。

しかしグリムジョーは完全な勘でそれを成していた。

一步どころか半歩でも間違えれば死に直結するにも拘らず、それを一切恐れぬ胆力は

流石と言うべきだろう。

「俺の、月牙天衝が…!!?」

依然として放射の止まらぬ黒虚閃を前に、月牙天衝は完全に勢いを失い、その形が消え始める。

だがグリムジョーも相応の代償を払っている。

その顔に勝ち誇った笑みを浮かべてはいるが、良く見れば激しい息切れを起こしており、全身からは大量の汗を流していた。

霊力の枯渇までは未だ余裕はある。しかし短時間に大量の霊圧を消費するのは、思った以上に身体への負担が大きいのだ。

「しまっ——!!」

自身の必殺技が押し負けた。その事実を悔しさを滲ませつつ、一護は回避行動の為に真横へと跳ぶ。

その直後、彼が元居た場所を、月牙天衝を打ち消した黒虚閃が通り抜けた。

そしてあろう事か、その光線は織姫とネルの居る宮へと直進して行く。

——二人が危ない。

焦燥に駆られた一護は、声を荒げた。

「井上!!! ネル!!!」

これは黒虚閃を放った当人も意図していない事態であつた。

一護が叫んだ瞬間に事態に気付いたらしく、グリムジョーは盛大に舌打ちすると、途端に放射を止める。

流石に彼とて、織姫を殺す事が何を意味するかは理解していた。

だが既に放たれたものは如何し様も無かつた。

一護は必死に駆け出しても、一向に光線に追い付けない。

このままでは織姫とネルの死は必至。

——止まってくれ。

無駄だとは思いつつ、一護はそう願う事しか出来無かつた。

「——え?」

「つ、ネルちゃん!!」

自分達の居る場所へ迫る光線に気付いたネルは、呆けた様な声を漏らす。  
織姫はそんな彼女を庇う様にして胸元へ抱き寄せる。

「さんてんけつしゅん 三天結盾”!!!」

“盾舜六花”を起動すると、火無菊、梅敵、リリイの三人を呼び出し、逆三角形の盾を形成する。

織姫はこれが気休めにもならないと理解していた。

あの漆黒の光線は明らかに強力だ。何せ一護の必殺技を打ち消す威力である。自身の力では到底防ぎ切れる筈も無いと。

「“私は——拒絶する”!!!」

少しでも盾の効力を上げんと、織姫は己の意思を乗せた——鬼道で言う言霊と同類の声を上げる。

ネルに覆い被さり、黒虚閃へ背を向けながら臉を閉じる。

この窮地も、一護がきつと如何にかしてくれと信じて。

だがそんな織姫達の危機は別の形で、しかも全く別の人物によって脱する事となる。

「——  
ソフレボネール・セロ  
虚閃・多重奏」

迫り来る黒虚閃を止めたのは、織姫の丁度頭上付近より放たれた黄色の光線。

しかもその大きさが尋常では無い。良く見れば軽く数えただけでも十は下らない数の光線が束になっているのが判る。

そうこうしている内にもその数は増えて行き——その数が倍近くなった瞬間、黒虚閃は掻き消された。

やがて三天結盾の前に何か降り立つ。

一護とグリムジョーはその姿を目の当たりにした途端、全くの同時にその身体を硬直させた。

「オイオイ…ちよつと興奮し過ぎなんじゃねえか？」

辺り一帯が静寂に包まれる。

その変化に、織姫は恐る恐る閉じていた瞼を開くと、背後を振り向いた。

其処には見覚えしか無い、特異過ぎる形状をした斬魄刀を背負った長身の男が、此方に背を向けたまま佇んで居た。

「少し頭を冷やせって、グリムジョーよオ？」

ノイトラは口元を三日月の如く吊り上げながら、そう言った。

## 第五十三話 三日月と姫と幼女と豹王と主人公と：

ノイトラは不敵な笑みを浮かべつつも、その内心では盛大に安堵していた。

それは先程のグリムジョーが放った黒虚閃を既の所で止められた事だ。

賭けに等しい部分もあったが、結果良ければ全て良しである。

流石のノイトラも、あれは想定外な展開だった。

確かに黒虚閃は十刃が皆共通して使える技だが、記憶を辿る限り、史実に於いてそれを使用したのは二人のみ。

しかもあの局面でグリムジョーが使用するとは誰が想像出来るだろうか。

最強の虚閃だけあり、生半可な攻撃では相殺不可能。

同じ技であれば問題無いが、その為には帰刃が必須となる。

それに織姫とネルへの直撃のタイミングを考慮すると、まず普通に対処しては確実に間に合わない。

例え無拍子の帰刃から溜め無しに黒虚閃を放ったとしても、コンマ数秒の遅れが出る。

残された手段は、全力の響転で織姫とネルの前に立って己が身を盾にするか、現状で

即行使用可能且つ強力な技で相殺する事。

後者は未だしも、前者は少々確実性に欠ける。

何せノイトラ自身は黒虚閃を直接受けるのは初めてだ。程度も不明だし、通常状態で身体を盾にただけで全て止められるか如何かも判断出来無い。

まあ当然だろう。最悪自身を飲み込んだ上でそのまま直進し続け、結局守るべき背後の二人に直撃する羽目になれば意味が無いのだから。

だが幸いな事に、ノイトラには実戦未投入の技が多数あった。中には黒虚閃の相殺条件を満たすものも複数。

緊急事態故に致し方無いと、ノイトラは通常状態で使用可能な内、最も強力な虚閃系統の技を選定して使用。それが先程の“虚閃・多重奏”だった。

実はこの技、元はある人物の技を目指したが失敗に終わり、それを勿体無いとして少々捻りを加えて別な技として再開発した経緯を持つ。

内容は単純。全身に張った霊圧の膜から放たれる通常の虚閃を無数に重ね合わせ、その威力と範囲を倍増させるというもの。

今回は咄嗟の使用だった為か、重ねられたのは二十発程度だったが、集中して行えば最高で四十発近くまで可能。

その威力はノイトラが正真正銘の全力で放つ“王虚の閃光”に匹敵する。

だが多少制御に難がある上、霊圧の消費量が倍近い。発動が早い部分以外は特にメリツトが無く、本人も余り積極的に使用したいとは思えない勝手の悪い技だった。

「ノイトラ…君…」

状況の変化に追いつけていないのか、織姫は「三天結盾」を解除しつつも、心ここにあらずといった風な表情を浮かべていた。

それを耳に入れたノイトラは振り返ると、小さく鼻で笑った。

「ハッ、俺が此処に居るのがそんなおかしいか？」

「そんな…こと…」

返答しようとするが、織姫は言葉を詰まらせた。

そして思い出す。グリムジョーに宮から強制的に引つ張り出されるより前に聞いたウルキオラの話、それ以外で自身が持ち合わせているノイトラについての情報を。

喜助と夜一を同時に相手取つても未解放のまま切り抜ける程の高い実力を持ち、そして戦闘狂のきらいがある危険人物。だがその反面、身内には寛容で、それ故に藍染

の所有物である織姫に親身に接する優しさを併せ持つてもいる。

絶体絶命の危機に陥った自身を助けたのも納得出来る。

織姫はこれ以上に無い程の頼もしさを、ノイトラに感じた。

だが直後に気付く。

確かにノイトラは自身の味方だ。

しかし一護は違う。今の彼は拠点である虚夜宮に無断で入り込んだ侵入者であり、藍染に仇なす敵。

そして腕の中に居るネルも同様。彼女も破面とは言え、一護に非常に懐いている様子を見せており、彼が戦っている時は声援を送る等、仲間として振舞っている裏切者。

この二名に対し、ノイトラが如何なる判断を下すのかは想像に難くない。

織姫の全身が震え出し、顔色も次第に青褪めてゆく。

そんな彼女の変化に気付いたのか、ネルはもともと身体を動かし、自身を包んでい  
る腕の中からその顔を覗かせた。

「どうかしたっス…か…ツ!!?」

明らかに普通では無い織姫の表情を目の当りにしたネルは、思わず問い掛ける。

だが続けて織姫の視線の先を辿り——絶句した。

その先には自身が知り得る限り、一護と戦っているグリムジョーよりも更に上の階級に位置する十刃が立って居ただけだから。

「ツ——…：…んだよその餓鬼は？」

「ひっ…!!!」

不意に二人の視線がぶつかった。

ノイトラはその口から飛び出し掛けた名を咄嗟に飲み込むと、平静を保ちながら白を切る。

此処でネルの正体に気付いた素振りを見せ様ものなら、十刃として然るべき対処を取らねばならなくなるからだ。

虚夜宮内に於いて、ネリエルとその従属官二名は行方不明という扱いになっている。

そんな彼女が、姿を変えたとは言え戻って来たという事が何を齎すのか。

失踪者という肩書が脱走者という扱いに変化。即ちネルは裏切者という肅清対象となってしまう。

一護の行動を容認している時点で既にそうなのだが、その部分は上手く対処すれば殺

されずに済む可能性も高い。

例えばノイトラ自身がネルを管理すると言つて、二度と自分達を裏切る事が出来無い様に躡けるとでも言えば良い。まあこれは一護がグリムジョーに敗北するという、最悪のシナリオを辿つた場合での話なのだが。

「う……あ……!!」

ネルはその圧倒的な存在感と霊圧に萎縮し、小さな悲鳴を漏らす。

同時に感じる拭い様も無い違和感と、激しい頭痛。

思わずネルはノイトラへ向けていた視線を逸らす。続け様に自身の頭部を両手で抱えると、再び織姫の腕の中へと潜り込んでしまった。

「てめえは——」

「何しに来やがったノイトラア!!」

ノイトラへ何かを問い掛けようとした一護を遮り、グリムジョーが声を荒げた。その顔には闘争の空気を乱された事に対する怒りと、僅かな焦燥が見て取れる。

「まさか俺の戦いを邪魔する気じゃねえだろうなア!!？」

「しねエよアホ」

「……………え…………？」

即答したノイトラに、織姫は全身を硬直させた。

見れば一護も同じ様な反応を示している。

「勝手に御姫サマを連れ出したりとか、色々と言いてえ事はあるが——取り敢えず置いてく」

不満な表情を浮かべながら、ノイトラは右手で後頭部を掻いた。

その態度はまるで、状況が状況だけに致し方無く妥協しているのだと、傍から見ればそう言っている様に見えた。

だが当人の本音は別。寧ろノイトラは史実通りに事を進めてくれたグリムジョーに對して感謝こそすれど、非難する意思は毛頭無かった。

——危うく織姫とネルを殺し掛けた件については別だが。

当然、それを態度に出す訳が無い。

だがこの場面に於いて、ノイトラが取るべき適切な行動は、組織の一員としてグリムジョーの独断行動を窘める事だろう。

一切触れずに居るのは余りに不自然。せめて素振りだけでも見せなければ拙い。ノイトラは雰囲気を装いながら、言葉を繋ぐ。

「これはテメエの戦いだろ。それに手を出す気はサラサラ無え」

——但し、少しは周囲の被害とかを考えて動け。

最後にそう付け加えると、ノイトラはその場に胡坐をかいて座り込んだ。

そして視線をグリムジョーから一護へと移しながら言う。

「御姫サマの事は気にすんな。火の粉は払ってやる。だから存分に戦り合えや」  
「っ!!」

そう言われはしたものの、一護は戸惑っていた。

信用ならないというのもあるが、何より恐れていたのだ。間も無く再開されるであろ

うグリムジョーとの決闘を観察される事で、ノイトラに自身の情報が知られる事を。

状況だけを見れば、グリムジョーを打倒すれば次に相對する事になるのはノイトラだ。

只でさえ階級は上だし、真の実力も未知数。實際に交戦した喜助も要注意人物に指定しており、ドルドーニも意味深な事を語っていた。

戦闘態勢を取っていないとは言え、警戒しない訳が無い。

「…チツ、仕切り直しだ」

「グリムジョー…!!」

「ボサツとしてんな!! さっさと始めんぞ黒崎イ!!」

グリムジョーは一護にそれ以上考える暇を与えてくれなかった。

如何やらノイトラの言い分を一先ず信じ、戦闘を続行する事に決めたらしい。

解放前に使用した鉤爪とはまた異なる、黒に染まった両手。その指先に伸びる鋭利で長い爪で敵を切り裂かんと迫る。

一護は身体を横に逸らす事で躲すと、宮から距離を取るべく高速で駆け始めた。

二人が再び激闘を開始したのを遠目で確認しながら、ノイトラは深い溜息を漏らして

いた。

頭に血が上ったグリムジョーは想像以上に厄介だ。他者を一切信用していないが故に、自身の目的に対して不確定要素と成り得るのであれば、例え同胞であろうとも躊躇無く始末に動く。

最悪の場合、ノイトラはグリムジョーと殺し合う可能性も考慮していたりする。

その時は一時凌ぎではあるものの、それを回避出来る対策も立ててはいた。

だがそれではやはり後々面倒な事になるのが目に見えている為、そうならず幸いだったとも言える。

「……ノイトラ君も……」

「……あ?」

「黒崎君と、戦うの……?」

思考を巡らせながら戦場を観察するノイトラの背中へ、織姫は震え声で問い掛けた。彼女の腕の中では相変わらずネルが頭を抱えて唸り続けている。

「グリムジョーが負ける様な事になりやあな」

「つ、そんな!! 黒崎君は戦った直後なのに——!!」

平然と放たれたその返答に、織姫は悲痛さを滲ませながら声を荒げた。

まだ戦う事自体は理解出来る。敵同士なのだから当然だろう。

しかしそのタイミングが余りに悪い。まさかこのノイトラが漁夫の利を狙う様な真似をするとは予想外であり、余りに無慈悲。

今迄に様々な困難を乗り越えて来た一護でも、流石にこれは分が悪過ぎる。

せめて如何にか一護が、万全とは行かずとも回復を待った形で戦ってもらえる様に懇願すべきだろう。

幸いにも、ノイトラは話の通じる相手だ。もしかすると聞き入れてくれるかもしれない。

そう考え、織姫が口を開き掛けた直後だった。

その僅かな希望を打ち砕く言葉がノイトラから放たれたのは。

「何言つてやがる。此処は戦場だぜ。不平等なのが当たり前だろうが」

織姫へ向けられる冷ややかな視線。

しかし実のところ、そんな態度を見せているノイトラの内心は謝罪一色だったりする。

「戦いつてのは元々、不平等と不寛容が産み落とす怪物だ」

本心では無く演技なのだから当然だろう。

だがこれはノイトラが目的を果たす為に必要なのだ。

織姫にとっては非常に辛い場面だろうが、此処は耐えてもらわねばならないと、心を鬼にする。

「どんな理由であれ、敵を作り、敵を作った瞬間から、呼吸一つまで戦いの内だ」

平静を装いながら、史実に於けるノイトラが口にした台詞を、大分省いた形ではあるが、さも当然の様に語り続ける。

とは言え、全部が全部演技な訳では無い。中にはノイトラ自身もある程度納得している数少ない内容も含まれている。

加えて憑依後から無我夢中で潜り抜けた修羅場の経験もあつてか、その言葉には確か

な重みと説得力があった。

当然、聞く側の織姫はそれを十二分に感じており、御蔭で反論も何も浮かばなかった。

「それに敵の本拠のど真ん中で、あんだけハデに戦ってたんだ。それが何の意味を持つのか解らねえ訳じゃ無えだろ？」

「——っ!!」

「のんびり観察させてもらおうとするさ。隅々まで、な…」

——何て卑怯な。

織姫は理解した。グリムジョーに加勢しなかったのはその為かと。

確かにノイトラの言っている事は正しい。

例え一護がそれ程消耗せずにグリムジョーに勝利出来たとしても、不利な状況は変わらない。

敵地の中心で盛大に戦うという事は、自身の情報を見せびらかしているのと同等。

しかも一護は持てる技の殆どを出し切っており、切り札すら披露している。

戦場を観察している者が居れば簡単に対策を練られてしまう事だろう。

ノイトラは悪びれる様子も無しに、それ等を行っている。

仲間が傷付き、血を流している光景を視界に捉えていながら。

しかしその割には、ノイトラからは低劣な小者の醸し出す様な雰囲気は全く無い。

寧ろ真逆。己は何ら恥ずべき事なぞしていないとして、堂々と構える男らしさを感じる。

——卑劣でも外道でも、好きな風に言えば良い。

直接口に出さずとも、その大きな背中はその語っている様に見えた。

それ故か、織姫には如何してもノイトラが悪い人には思えなかつた。

戦いというのは大抵、勝たねば意味が無い。時に敗北する事に意味がある場合もあるが、それは一先ず置いておく。

自然界に於ける生存競争であれば顕著だ。何せ勝者は生き、敗者は死ぬの二択のみなのだから。

織姫は以前、セフイ一口達との世間話の中で聞いていた。虚の世界は正に弱肉強食である事を。

ならばノイトラの行動にも説明が付く。

——生き残る為には勝ち続けるしかない。

全てはこれに尽きるのだ。彼の中では。

現世に住む人間では想像も付かない程に厳しい世界を、ノイトラは生き抜いて来たの

であろう。

故に如何なる手段であろうとも躊躇しない。誰よりも冷徹に、熾烈に振る舞い、敵を確実に叩き潰す事を優先する。

喜助に夜一を含めた隊長格数名を容赦無く圧倒したあの高い実力も、その経歴を証明する一つとなっている。

それは他の十刃達も同様だ。尸魂界陣営が苦戦する訳である。織姫は理解した。

「黒崎君…」

だがどちらにせよ、この戦いの中心に居るのは一護だ。

織姫はその身を案ずると共に、彼がこの圧倒的不利な状況を無事に切り抜けられる事を願った。

最上階とその周辺が凄まじく崩壊した第8十刃の拠点の宮。

その中でも幾つか無事な階の内一つの試験室と呼ばれる場所に、それはあった。

内部が薄緑色の液体で満たされた、巨大なカプセル状の機械——所謂培養槽という物である。

その頂部には複数のチューブの様なものが伸びており、それは液体の中に浮かんでい  
る人型の背中へと繋がっていた。

人型とは言ったものの、その姿は余りに異様であった。

体格は平均的。体毛一本生えていない肌は病的なまでに白く、性器が存在していない  
為に性別も判別不可能。

胸元にある直径五センチ程度の孔から、辛うじて種族だけは判別出来る。

だが目や鼻に加え、耳も無い。唯一あるのは口のみ。状況的に見てもそうだが、一体  
如何にして生きているというのか。

恐らくはその背中に繋がったチューブより、生命維持に必要な成分を全て供給し  
ているのだろう。

身動き一つ無く、静かに浮かび続けていたその人型だが、突如として異変が起こる。

閉じていた筈の口が大きく開き、上体を大きく後方へと反らしたかと思うと、その胴体が風船の如く膨張したのだ。

全身は激しい痙攣を起こし始め、開いた口から大量の気泡が溢れ出す。その姿はまるで苦痛にもがき苦しんでいる様にも見えた。

数十秒程、その動きは急激に停止する。

すると今度は人型の身体が見る見る内に萎れて行く。

張りのあつた肌は老人の様に皺だらけに。膨張した腹部をそのままに、脂肪と筋肉の両方が失われる。

一分も経たない内に、人型はやがて骨と皮だけの木乃伊を連想させる姿へと変貌を遂げた。

空いたままの口から何かが這い出し、同時に腹部も小さく縮み始める。

その直後、培養槽の正面がドアの様に開き、中に居た人型を外へと排出した。液体と共に飛び出した人型は、そのまま力無く床に横たわる。

この瞬間、つい先程まで確かに生きていた筈のそれは、完全にその命の灯火を消していた。

「僕が生まれたという事は、本体が殺られたのか…」

口から飛び出した直後は蛞蝓の様であったそれは、次第に人の形を取り始める。それは余りに見覚えがあり過ぎる人物であった。

桃色の髪に、背中に生えた四本の触手の羽。左目付近のピエロの様な仮面紋。

やがて大量の触手に隠れた二本の足で床に立つと——ザエルアポロ・グランツは静かにそう呟いた。

「やれやれ、保険をかけていて正解だったよ」

泰虎の急襲で重傷を負った後、ザエルアポロは息も絶え絶えに宮の中へと戻り、帰刃。そして嘗て無駄だと断じて切り捨てた中に含まれる、戦士としての勘。僅かに残っていたそれに従い、試験室内の実験用に生み出して保管していた改造破面へとある処置を施した。

その処置こそ、ザエルアポロ自身が誇る最も優れた能力であり、完全な生命へと至った証明——  
//ガブリエール  
受胎告知//。

使用するタイミングは、主にザエルアポロ自身が生命の危機に陥った時だ。

まず触手を用いて敵の体内に侵入し、卵を産み付ける。そして体内から相手の全てを

吸い尽くして成長し、同時に宿主を死に至らしめた後、復活を遂げる。

本人は不死鳥の如く何度も甦る等と表現しているが、傍から見れば只の寄生虫である。

「想定外と言えば想定外だが——まあ、特に問題は無いね」

ザエルアポロはほくそ笑んだ。

今頃あの侵入者達は自身を倒したと完全に信じ、これ以上無い程に気を抜いている事だろう。

そんなタイミングで無傷な自身が登場すれば、一体どんな反応を示すのか。

これは現実なのかと自身の正気を疑った末、絶望に打ちひしがれるか。または敵わないと知りつつ、僅かな希望を胸に立ち向かって来るのか。

ザエルアポロとしては後者の様になってくれれば良いと考えていた。

始めから諦めて無抵抗と化した者より、最後まで抵抗の意志を持つ者の方が鬪り殺し甲斐があるのだから。

「さて、と…まずは先にあの五月蠅い猿と滅却師を始末するか——ツ!!?」

自然と口元が吊上がるのを感じながら、ザエルアポロが俯かせていた顔を持ち上げ——直後にその表情を凍り付かせた。

視界に入ったのは、本来あるべき試験室の光景では無かった。

室内に存在していた機材や容器は全てが瓦礫の山と化し、部屋の隅に設けていた材料の保管庫の扉は無く、其処からは真つ黒な煙が噴き出している。

——この有様は如何いう訳だ。

ザエルアポロは今にも叫び出したい衝動に駆られたが、何とか堪えて状況把握に努める。

周囲を見渡しながら、ふと疑問を抱いた。

これだけを破壊されていながら、何故自身が卵を産み付けた人型が入っていた機材が無事だったのかと。

嫌な予感を感じたザエルアポロは、咄嗟に背後を振り向く。

すると案の定、本来であれば六つ並んでいた筈の培養槽は、彼が出て来た物を除き、全てが完全に破壊されていた。

「一体誰が…!?!」

恋次と泰虎では無いだろう。

周囲に山積みになっている瓦礫を良く見ると、殆どが何か鋭利な物で切断された形で破壊されている。

能力を考慮しても、この二人にそんな真似が出来るとは思えない。

唯一考えられるとすれば雨竜か。

だが彼の主な武器は弓だ。何か別の手段も持ち合わせてはいそうだが、时期的に考えればありえない。

この考えから大凡想像が付くとは思いますが、実を言うとこのザエルアポロは自身の死に至るまでの記憶が無い。

残っているのは泰虎の乱入から数分間程度。

それはそうだ。何せその辺りに本体が卵を産み付けたのだから、それ以降の記憶がある事の方がおかしい。

「——あらあら〜？ 今起きたんですか〜」

「ツ!!？」

突如として室内に響き渡る、緊張感の無い間延びした声。

明らかに聞き覚えしか無いそれを耳にしたザエルアポロは、弾かれる様にしてその方向へと振り向いた。

「あと五分ぐらい早ければ手間が省けたのに。御蔭で部屋中を探し回る羽目になったじゃないですかあゝ」

「な、何故お前が動き回っている!!?」

その声の正体は、侵入者発見から間も無くして、秘密裏に捕えた筈のセフイーロであった。

ザエルアポロは見るからに狼狽した。

その際に用いた薬は、専用の解毒剤を用いねば永久に眠り続ける極めて強力なものだった筈。

—— 一体如何やって逃れたというのか。

天才的頭脳であっても、その理由が全く以て解らなかった。

「ま、結果的に見付かったんで良いんですけどねゝ」

「それは——ッ!!」

ザエルアポロの声を無視すると、セフィーロは徐に白衣のポケットに入れていた自身の右手を抜くと、胸元の高さまで持ち上げた。

人差し指から小指までの指同士の隙間。其処には計三つの黄色の箱状の何かが挟まっていた。

それを見たザエルアポロは瞠目した。

何せそれは対ノイトラ用に開発した秘密兵器——対象の霊体を永久的に閉次元に幽閉出来る、〃数字持ち〃を対象として作られた道具である。〃反膜カハ・ネガシオンの匪〃へ改良を加えた逸品。

まず対象を十刃として強化したものに、更に特定の人物の霊圧を細かく分析して対策を組み込んだ専用設計。

その名も〃永カハ・ネガシオン・ベルマネンシア反膜の匪〃。

実力が未知数な部分が多い上位十刃を対象とした場合は不満が拭えないが、中位かそれ以下は永久に封じ込める事が可能だろうと、ザエルアポロは踏んでいた。

「コソコソとこんな物を作るなんて…ホント貴方は悪い子ですね」

セフィーロはそれを上に放り投げると、それに向って人差し指を向けた。  
その指先周辺に固められた霊圧から、ザエルアポロは彼女が一体何をしようとしているのかを察した。

「や、止め——!!!」  
「オシオキです」

咄嗟にザエルアポロが声を上げるが、無意味だった。

焦燥に駆られた表情を浮かべる彼を嘲笑うかの様に、セフィーロの指先から放たれた不可視の弾丸が、宙を舞う三つの箱を跡形も無く粉碎した。

「このクソアマがあああああアアツ!!」

ザエルアポロは激昂し、殺意全開でセフィーロへと飛び掛かった。

それは策も何も無い、至極単純な突撃戦法。

だがザエルアポロはこれで十分だと判断した。

所詮相手は破面の出来損ない。風の噂で聞いた話だが、元は自身と「同格」だったとしても何の問題も無いと。

先程破壊された物は、ザエルアポロが開発を開始した時点から相当に苦勞した物だ。何せ対象であるノイトラだが、数年前より意図的に此方を避ける様になっており、現在の彼の情報が全く収集出来無い状態。

しかし開発するには、如何あってもその膂力や靈力の最大値を知る必要があった。

そんな厳しい状況下で、ザエルアポロはノイトラの現世での戦闘データ等を収集して事細かに分析。計算に計算を重ね、大凡の予測値を叩き出す事に成功した。

だがそれ等の苦勞もたった今、セフィーロの手で全てが水泡に帰した。

破壊された三つは、予備品を含めた現時点に於ける全ての在庫だ。もう何処にも完成品は存在していない。

今迄の情報を元にまた作れば良いでは無いかと思うかもしれないが、完成品どころか機材も破壊されたゼロの状態ですれをやれというのは、余りに時間と労力が掛かり過ぎる。

「挽肉になれ!!」

四本の触手の羽を持ち上げながら、ザエルアポロは突進する。そして間合いに入った直後、セフィーロを取り囲む様にして叩き付けんとする。

「——間抜け」

並みの数字持ちにとっては十分に即死級の一撃。

しかしセフィーロは一切怯んだ様子は見せなかつた。

それどころか絶対零度の視線をザエルアポロに向けている始末。

「『鎖錠牢獄』」

セフィーロは無造作に右手を横に振るつた。

するとその軌跡に反つて一瞬だけ、青色の閃光が走る。

その眩しさの余り、ザエルアポロは反射的に腕で目元を隠しそうになる。

——目くらまし程度が何だ。

直後にそう推測したザエルアポロは、多少顔の角度を変える程度で耐えると、振り上げた触手の羽を一斉に振り下ろした。

「……………は…え…う？」

だが何時まで経っても、セフィーロに触手の羽が襲い掛かる事は無かった。

見れば彼女の一メートル手前付近で完全に停止しており、ピクリとも動かない。

それどころかザエルアポロの身体自体が、その場に縫い付けられる様にして停止している。

瞠目する彼の口からは、つい先程セフィーロが不意に零した言葉の通り、何とも間抜けな声が漏れ出していた。

「まさか真正面から突っ込んで来るなんて…これの何処が天才だつてんだよ」

動きの止まったザエルアポロの視線の前で、身に纏う雰囲気と口調を豹変させたセフィーロが苛立った様子で吐き捨てた。

「アホくさ、マジで無えわ」

「な…にが…」

「それ位でめえの頭で考えな、淫乱ピンク野郎」

真面に答える心算は無いのだろう。セフィーロは突き放す様にしてそう返すと、未だに呆けたまま硬直しているザエルアポロを一瞥した。

「けどまあ…折角だからこれだけは言っとく」

良い事を思い付いたと言わんばかりに、セフィーロはその口元を吊り上げた。

「一体いつから——私が帰刃していないと錯覚していた？」

次の瞬間、身に纏っていた白衣に変化が起きる。

突如として光を放ち始めると、そのまま無数の帯となって周囲を漂い始めたのだ。

その中心部に立つセフィーロの姿は、何時ぞやに治療室内で見せた帰刃形態そのものであった。

だが一つだけ異なる部分がある。

その時のそれは白色の光を放っていたが、現在は青色。

先程も何か技を出す直前にそれを見せている事から、もしかするとこれが本来の色なのかもしれない。

「そん…な…：…莫迦な…!!」

それを目の当りにしたザエルアポロは、今更ながら思い出した。

自身が破面化して虚夜宮へ来るよりも過去の記憶を。

最上級大虚である分、周囲はほぼ敵無しな状態ではあったが、それでも警戒すべき者は幾つか存在していた。

怒れば怒る程その力を増し、致命傷なぞ関係無いとばかりに復活し続ける為、長期戦は御法度である憤怒の化身。

その「古い」という理不尽な力を持ち、長きに亘って虚圏を統治している神。

そして残る一つ——虚圏の地下に存在する「メノスの森」を住処にしている者。

曰く、生き残りたくば触れるべきでは無い禁忌中の禁忌。

ザエルアポロが生まれるよりも以前から存在しているらしいが、大抵は噂のみで詳細を知る者は殆ど居なかった謎の塊。

集めた情報を纏めれば、長年無差別な破壊と殺戮の限りを尽くしていたが、ある日突

然最奥部の闇の世界へと移住し、それ以降は今迄の行いが嘘の様に大人しく引き籠つて  
いるらしい。

その危険度が如何程かと言うと、驚くべき事にあのバラガンですら部下達に干渉を固  
く禁じる程。

運が良かったのか、偶々その場面をザエルアポロは監視用の霊蟲で確認していた。

如何やら過去に何かあつた様だが、その時に彼が見せた憎々しげなオーラを考慮する  
と、恐らく外部に漏らす事は金輪際無いであろう。

「……  
滅蒼<sup>アスール</sup>……」

今にも消え入りそうな程の掠れ声で、ザエルアポロは呟いた。

もしセフィーロがその存在ならば、自身の中で未だに抱え続けていた疑問も大半が解  
消する。

強力だつた筈の薬が全く効果を表さなかつたのも。

勝手に治療室内へ手を加え、外部干渉不可能な領域へと改造して好き放題しているに  
も拘らず、藍染がそれを許容しているのも。

以前バラガンが部下を使い、凄まじい勢いで力を増していたノイトラを呼び出そうと

し、態々敵対の意志の有無を直接問い質したその裏に隠された真意も。

「…それを口に出すんじゃないよ」

全ては不確定要素であるセフィーロが原因。

それを制しているノイトラは一体どれ程の力を持っていると言うのか。本当に今更ながら、ザエルアポロは己の行いを後悔した。

「取り敢えずてめえの持つてる記憶とか技術とか——丸々全部頂くぞ」

「ひいッ!!?」

「精々役立てさせてもらいますよ〜? 私達の為にねえ〜」

セフィーロは全身から得体の知れない不気味なオーラを纏いながら、じりじりとその距離を詰め始める。

ザエルアポロは小さく悲鳴を漏らす。

突拍子も無く元通りとなった態度も、余計にその恐怖を煽った。

「それでは脳味噌チューチューしますよお〜……」  
// コメール 悪食 // 「

セフィーロの周囲を舞う帯の一つの先端が、細長い針の様な物へと変化。

その先端がザエルアポロの頭部を向くと——瞬きをする間も無く、それは眉間の中にへと突き刺さっていた。

「悪魔……め……」

この短期間で散々生き汚さを見せ付けたザエルアポロだったが、もはやこれまで。

しかも最終的な保険として色々と仕込んでいた筈の口力も、とうの昔にセフィーロによつて手を打たれている。

つまりその意識が再び戻る事は——永久に無い。

ノイトラという部外者の乱入という想定外の事態があったものの、グリムジョーと一護は無事——と言つて良いのか如何かは不明だが、その死闘を再開していた。

だが戦況が互角だった筈の序盤とは明らかに異なる点があった。

一護の動きが何処か精彩を欠いていたのである。

彼自身、グリムジョーとはほぼ実力差は無く、何かの拍子で一気に均衡を崩されてもおかしくは無いと理解はしていた。

そんな強敵を前にして、一体何をすべきか。

至極当然の事である。全神経を集中させ、死力を尽くして戦いに臨む以外に無い。なのだが——如何しても時折その視線が別の方角へと向いてしまう。

無論、そんな隙をグリムジョーが見逃す筈が無い。

時間の経過と共に、一つ、また一つと、一護の身体に傷が刻まれて行く。

同時にグリムジョーの顔に浮かぶ怒りの色も濃度を増す。

「ドコ見てやがる!!!」

「ぐ…!!?」

そしてまたしても一護が同じ動作を見せた刹那、遂にグリムジョーの怒りが臨界点を突破したらしい。

声を荒げると、強烈な回し蹴りをその隙だらけな腹部へと御見舞いする。

仮面の下の表情を苦痛に歪めながら、一護は身体ごと吹き飛ばされる。

だが虚化の影響で耐久力が増していた御蔭か、直ぐに体勢を立て直す事に成功した。

「…そんなにノイトラの奴が気になるかよ」

「——ッ!!」

グリムジョーの眩きを耳にした一護は息を?む。

何故なら凶星だったからだ。

戦いの最中に一護が向けていた視線の先には、織姫とネルの傍で胡坐を掻き、無表情で此方を眺め続けているノイトラの姿が。

彼は確かにグリムジョーと一護の戦いには手を出さないと言った。

だがそれだけなのだ。

所謂——手は出さないと言ったが、他に対して何もしないとまでは言っていない、と

いうやつだ。

映画等の悪役が良く使いそうな手である。

それに一護が第一に考えているのは、織姫とネルの身の安全。

即ちノイトラが彼女達に危害を加える、または何かするのではと危惧する余り、戦闘中にも拘らず何度も視線を移していたのだ。

例えば、仲間であるグリムジョーを勝利させる為、ふとした拍子に人質にする等といった感じに。

この考えを本人が聞けば、そんな馬鹿な真似するかと即座にツツコみを入れるだろうが。

「気に喰わねえ…ッ」

しかし当人の気持ちや考えなど、他人に解る筈も無い。

故にグリムジョーは一護の態度をこう解釈した。

自身の事を差し置いて、ノイトラの方に意識を向けていると。

これが女性であれば可愛らしい嫉妬で済むのだが、生憎とそんな程度のものでは無い。

最終的に放たれるのも平手打ちでは無く、真面に食らえば絶命必至な一撃である。

「とことん気に喰わねえぞ黒崎イ!!!」

グリムジョーは激情のままに叫んだ。

確かにノイトラは強い。その階級から想像したものより遙かに。

しかしこれだけは譲れない。一護という最高の獲物であり好敵手だけは。

だが彼は何度も何度もその視線をノイトラに向け、此方から意識を逸らしてばかり。ならば——無理矢理にでも振り向かせるだけだ。

「この俺が相手じゃ不足ってか!! あア!!」

「っ、そ——」

——そんな訳があるか。

一護はそう言い掛けたが、それよりも早くグリムジョーは捲し立てた。

「なら見せてやる!! 俺の力をな!!」

グリムジョーは全力でその場を跳躍し、高所へ移動する。

そして尋常ならざる剣幕のまま、両手を下げて一護へと向けた。

爪先へと霊圧が集束し始める。

その量と密度は、先程の黒虚閃すら上回る程。

「なんだ…!？」

此方を押し潰すかのような凄まじい霊圧量に、一護は息を？んだ。

グリムジョーの思惑通り、その意識は完全にノイトラから外れていた。

爪先に集束した霊圧が形を成す。

出来上がったのは、複数の巨大な青色の刃。数は片手に其々五本、つまり計十本。

それは過去にルピとの階級争奪戦で見せた、グリムジョーの持つ最大最強の切り札。

「…これが俺の最強の技だ」

驚愕の余り硬直し続ける一護を見下ろしながら、グリムジョーは得意気な表情を浮か

べた。

右手と共に五本の刃を持ち上げ、その切っ先を向ける。

「言つとくが、こいつはさつき黒虚閃の比じゃねえ。今のてめえでも耐えられるかア!!?」

並みの者であれば断頭台の刃以外の何物でも無いそれが、右手と共に振り下ろされる。

一護は咄嗟に靈子の足場を強化して踏ん張り、防御姿勢を取った。

だが五本全ての刃を刀身で受け止めた直後、想像を遥かに超えた威力が両腕を通じて全身へと押し掛かる。

「ぐ、あ…ツ!!!」

一護の身体が僅かにバランスを崩す。

これが“豹王の爪”でなければ誤差の範囲内だったろう。だが今回ばかりは致命的であった。

角度が変わった刀身を滑る様にして乗り越えた青色の刃が、一斉に襲い掛かる。一護は反射的に頭部を後方へと逸らす。

だが完全には躲し切れず、刃の一部が仮面を掠め、その左半分を破壊した。

虚化は仮面を完全に碎かれると強制的に解除されてしまう。

だが幸いにも、一部でも残ってさえいれば維持出来る。

元々の持続時間にも左右されるが、一護の場合、その壁は既にクリアしている。

加えて仮面の方も、再び集中すれば再生は可能。

問題はその為には数秒の時間が必要な事か。ほんの数秒でも確保出来れば十分なのだ。——如何やらそう上手くは行かないらしい。

「ハッ!!」

グリムジョーは笑みを浮かべると、間髪入れずに左手を振るい、追撃を仕掛けた。

先程の攻撃の影響で体勢を崩したままの一護の下へ、容赦無く襲い掛かる青色の刃。

一護は理解していた。これが直撃すれば終わると。

悲鳴を上げる身体に鞭打ち、無茶な体勢のまま霊子の足場を蹴る。

その代償に足を痛める事となったが、御蔭で既の所で回避に成功する。

だが安心してはいられなかった。

見れば青色の刃は、依然としてグリムジョーの両側に浮かんでいる。

一護は歯噛みした。

そう、〃豹王の爪〃は放つたら終わりの単発型では無いのだ。

厳密に言えばどちらでも無く、操り方によって変化する。

攻撃した直後に刃を引き戻せばそのまま維持が出来るし、壁や地面に激突する事も厭わず使用すればそれまで。

現状に於いてこの技を切り抜けるには、青色の刃を全て破壊するか、直接グリムジョーを叩くかの二択しか無い。

「ははははハハハハハッ!!! 見たか、これが俺の力だ!!!」

「く、そッ!!!」

だがグリムジョーの猛攻がそれを阻む。

その巨大さをモノともせず、青色の刃は嵐の如く襲い掛かって来る。

気付けば一護は防戦一方へと追い込まれていた。

「終わりだ黒崎!! てめえは俺に敗ける!!」

一護の身体が引き裂かれ、残り少ない仮面が更に碎けて行く。

何度か刀を振るって対抗しようとしているらしいが、全てが押し負け、無駄に終わっている。

——これが自身に楯突いた者の末路だ。

勝利を確信したグリムジョーは更にその笑みを深めた。

攻撃の手を緩めぬまま、一護へ言い放つ。

「てめえを殺した後は残りの連中だ!! そして——」

一旦言葉を区切ると、一瞬だけ視線を一護から外す。

「次はノイトラ…てめえだ!!」

高揚した気分がそうさせているのだろうか。

明らかに問題発言なのだが、グリムジョーは構わず続ける。

「人間だろうが死神だろうが破面だろうが関係無え!! 俺をナメた眼で見やがる奴は、一人残らず叩き潰す!!」

グリムジョーの中で未来へのビジョンが浮かび上がる。

それはノイトラを含めた他の十刃達五名の姿。それと対峙し、打倒する自身の光景。無論、これは妄想の類いに過ぎない。

相手が相手だ。実際はそう簡単に勝てる存在では無いだろう。

事前に己の力を磨く為の時間が必要となるだろうが、何れにせよ潰す事に変わりは無い。

そして最後は言うまでも無く——藍染。

いけ好かない上から目線の言葉ばかりを吐くあの喉を引き裂き、心臓を引き摺り出して潰してやりたいと、何度思った事か。

あの玉座に腰掛けて良いのは奴では無い。他の奴等を見下ろして良いのも奴では無い。

それが許されるのは真の王である自分、只一人のみ。

「この俺が——王だ!!!」

猛攻に押されて地面へと落下し、膝を着く一護目掛け、グリムジョーは両手を振り上げた。

十本全ての青色の刃の切っ先が、その命を刈り取らんと狙いを定める。

それを視界に捉えながら、一護は己の死を幻視した。

——今の自分に、あれを切り抜けられる余力はあるのか。

霊圧にはまだ余裕がある。だが如何せんダメージを負い過ぎた。

しかも片足を負傷している為、序盤の様な速度では動けない。

このままではジリ貧だ。例えこれを躲したとしても、後には続かないだろう。

ならば相討ちも覚悟の上で、真っ向から受けて立つしか無い。

不安を胸の内に抱えながら、一護は柄を握る手に力を籠めた。

「……このままだと死ぬな、アイツ」

「え……」

不意に、戦場を眺めていたノイトラが呟いた。

それに織姫は反応を示す。

「テメエは良いのかよ」

「それは……どういう——」

「アイツが無様に死ぬ光景を、このまま黙って見てんのかって話だ」

続け様に放たれたノイトラの言葉に、織姫は横合いから頭を殴られた様な錯覚を覚えた。

彼の言う通りだ。自身は何をしているのかと。

一護が此処に来たのは何故だ。あそこまでボロボロになってまで必死に戦い続けているのは何の為だ。

——自身を助ける為だ。

織姫は後悔すると同時に自覚した。

破面という強大な力を持つ敵に対抗すべく編み出したのであろう、一護が見せたあの禍々しい力。それに対し、密かに恐怖を抱いていた自分自身に。

理解の及ばない、または得体の知れないものに対し、警戒や恐怖心を抱くのは当然の反応ではある。

だがそれを用いているのが信頼すべき仲間だった場合は如何か。

初見で植え付けられたイメージは、即座に拭う事が難しい。だが少なくとも、信じる為に努力すべきなのだ。

「ノイトラ君…」

「…この場で声を掛けるべき相手は俺じゃねえだろ」

振り返らぬまま、素っ気無くそう返すノイトラ。

織姫は僅かに混乱しつつも、感謝の念を抱いた。大切な事を思い出させてくれた彼に對し。

そんな織姫の思いとは裏腹に、ノイトラの発言には思惑があった。

史実であれば、一護が絶体絶命の危機へと陥って行く光景を只々眺める事しか出来無かった織姫。そんな彼女を正氣に戻し、一護の反撃の狼煙となる声援を送る切っ掛けを作ったのはネルだ。

しかし今のネルは何故か、両手で自身の頭を抱えて唸り続けるばかりで、一向に変化が無い。

自身と本来とは異なる形で接触をした為に、記憶が戻る兆候が早まったのではない

か、というのがノイトラの予測ではあるが。

もしそうだとすれば都合が良いとも言えるし、悪いとも言える。

何せこのまま織姫を放って置けば一切状況は変わらない。そして彼女の声援を受けない一護は高確率でグリムジョーに敗け、そして死ぬだろう。

土壇場で主人公補正が働く可能性も捨て切れないが、確実では無い。

——そんな不明瞭な希望に縋るのは御免だ。

そう考えたノイトラは、自身がネルの代役を買って出る事にした。

傍から見ると覚悟が決められない青臭い餓鬼が取る様な偽善極まりない行動だが、目的を果たす為には致し方無いとして。

「……………よし…」

腕の中のネルを一旦下に置くと、織姫は立ち上がる。

肺の許容量限界まで息を吸い込むと、一護に向けて声を上げた。

「——死なないで!! 黒崎君!!!」

「ッ、井上!？」

突如として背中へ投げ掛けられた声に、一護は驚愕しつつ振り向いた。

其処には依然として胡坐を掻いたままのノイトラの横に立ち、今にも瞳を潤ませながら此方を見詰める織姫が居た。

「頑張つてなんて言わない…勝つてなんて言わないから…っ」

祈る様に両手を胸の前で握り締めているその姿は、見ている此方の心が締め付けられる。

「お願いだから……もうこれ以上……怪我しないで……!!!」

一護は息を？み、やがて苦笑を浮かべた。

——馬鹿だな。

それは自分自身へと向けた言葉だった。

一体何をしているのか。この期に及んで勝てるか如何かを悩むなど愚の骨頂。勝つのだ。

自身には守るべき仲間と、帰りを待っている家族や友人達が居る。

彼等の存在が、自身に勇気と力を与えてくれる。

これで敗ける方がおかしい。

「井上…ありがとな…」

一護は織姫へ向けて優しい笑みを投げ掛けると同時に、小さく御礼の言葉を呟く。

「安心してくれ、もうこれ以上はやられねえ」

一護は覚悟を決めた。

相手が最強の一撃を放つなら、此方も同様の事をするまでだと。

漆黒の刀身へ、己の霊圧を注ぎ込む。

精神を集中させ、量に密度、その其々を未知の領域まで高める。

身体が軽い。大量の鉛を背負っていた様なつい先程までの状態が嘘の様だ。

霊圧の制御も、何故か今迄に無い程スムーズに行えた。

——これならいける。

刀を構えた一護の瞳には、もはや迷いは微塵も無かった。

「月牙——」

自身の持てる唯一であり最強の技。

その持つ力を信じ、全身全霊を籠めて刀身を振り上げながら、その名を叫ぶ。

一方、グリムジョーは一護の雰囲気が変わった事に内心で首を傾げていた。

だが今更自身の勝利は揺るぎはしないと、絶対的な自信を以てその刃を振り下ろす。

「——天衝!!!」  
 「<sup>デスガロン</sup>豹王の爪!!!」

十本の青色の刃と、更にそれ等を超える大きさを持つ黒い斬撃が、真正面から激突する。

強大な力と力のぶつかり合いだ。無論、その余波は尋常では無い。

二人の周囲に点在している瓦礫に宮は、尽く崩壊し、粉碎。衝撃が風圧となつて広がり、それは織姫達の居る宮にまで迫った。

「…ちとマズイか」

そう呟くと、ノイトラは突如として立ち上がった。

続け様に背中中の斬魄刀を抜き、織姫の眼前まで移動する。

「伏せてろ」

「…ええ？」

突然の事に戸惑いを隠せない織姫だったが、気付けば反射的にその指示に従っていた。

足元に蹲っているネルを庇う様にして、目を閉じながら姿勢を低くする。

それを確認したノイトラは、右隣に斬魄刀を突き立てる。

得物と自身の身体を盾として、織姫達へと迫る風圧を防ぐ為に使用する。

「きやつつ?!」

それでも完全に防ぎ切れる訳では無く、少しでも気を抜けば吹き飛ばされるのではないかと錯覚する程の風に、思わず悲鳴を漏らしていた。

やがて風が完全に治まった後、恐る恐る閉じていた瞼を開く。

真つ先にその視界に入ったのは、攻撃の余波から此方を守ってくれたノイトラの頼もしい後ろ姿。

——やはり何だかんだ言つて、結局は優しい人ではないか。

仲間に対しては、という限定的なものだが、織姫はそう再認識した。

「つ、そうだ、黒崎君は——!!」

だが直後にはつとなる。

そう、肝心の勝負の行方は如何なつたのだろう。そして一護は無事なのか。

織姫はネルを抱えたまま立ち上がると、目を凝らし、戦場を再確認する。

技同士が激突したであろう場所を中心に、極めて広範囲に砂塵が舞っており、勝負の行方が如何なつたのかは全く確認出来無い。

早まる鼓動を感じつつ、それが晴れるのを見守る。

先程から終始頭を抱えて居たネルも、腕の中から恐る恐るその顔を覗かせる。

二分程度は経過しただろうか。

緊張した面持ちでそれを眺め続けていた織姫からすれば、何十倍もの時間が過ぎた感覚だった。

砂塵が舞っていた中心部、その地面に二つの人影があつた。

漆黒の外套に血を滲ませながらも、確りとその足で立っている一護。

彼の前には、右肩から左脇腹に及ぶ大きな太刀傷を負い、仰向けに倒れているグリムジョー。

「……一護？」

「やつ、た……？ 黒崎君が……勝った……!!？」

この光景を見れば、どちらが勝利したのかなぞ一目瞭然。

始めは疑問符混じりに呟いていたネルと織姫だが、やがて互いに満面の笑みを浮かべた。

だがそれは十秒もしない内に凍り付く事となる。

直ぐ傍のノイトラが放った言葉によって。

「——さアて、次は俺の番だな」

「…………え…?」

それを耳にした織姫は茫然とその場に立ち尽くした。

ネルも驚愕の余り硬直している。

「じゃ、大人しく待ってろ」

二人が正気に戻った時には、既にノイトラの姿は何処にも見当たらなかった。

## 第五十四話 三日月と主人公と、虚無と孤狼と…

大の字に倒れたまま身動き一つ取らないグリムジョーを、一護は激しく肩で息をしながらか見下ろしていた。

仮面は左目の周辺のみを残しただけで、後は完全に砕け散っている。

これで良く虚化が解けなかったものである。一護も安堵していた。

先程までの「豹王の爪」の猛攻によって刻まれた傷口からは、止めど無く血が溢れ出し、足元の砂を赤く染めて行く。

傍から見れば満足に動ける状態では無い。

だが一護は構えを解かない。

刀身を下段に置き、何時グリムジョーが襲い掛かって来ても対応可能な形を維持し続ける。

だが正直言えば一護自身も、出来れば今直ぐにでも休息へと入りたい気分だった。

限界とは行かないが、霊力も体力も通常の半分以下。

例えこれでグリムジョーとの戦いが終わったのだとしても、まだ敵は沢山残っている。

こんな状態を狙われでもすれば、もはや一巻の終わりである。

余力を残して置くに越した事は無い。

そう考えた一護は、右手で仮面に触れると、撫でる様にしてそれを消し、虚化を解く。

——自分自身が肝心な存在を忘れていた事に気付かぬまま。

その直後、グリムジョーの身体がピクリと動いた。

一護は即座に反応。重心を低く落とす、油断無くグリムジョーの動きを観察し続ける。

「……ま……ただ……ッ」

如何やら意識を取り戻したらしい。

今迄に無いレベルの致命傷を負っているにも拘らず、グリムジョーは己の内に再び戦意を宿らせる。

脳裏に浮かぶのは、互いの最強の技がぶつかり合い、自身が敗けた光景。

巨大な二つの力は拮抗する様子は一切無く、接触の直後から勝敗が決していた。

全ての青色の刃をガラス板の如く砕きながら直進する漆黒の斬撃。

それはやがてグリムジョーへと到達し、その身に大きな太刀傷を刻み込んだ。

——何が足りなかった。

満身創痍の身体を起こしながら、グリムジヨは考える。

だが全く答えに辿り着けない。

“豹王の爪”を出した直後は明らかに此方の優勢だった。一護は防戦一方で、如何考えても逆転の要素は無かった筈だと。

それでも最後の最後に全てが引つ繰り返された。

こんな想定外な結末、誰が想像するのだろうか。

「が……ああああアアアツ……!!!」

上体が起き上がる度、傷口からブチブチと嫌な音が響く。

同時に鮮血が勢い良く噴き出す。

だがそれでも尚、グリムジヨは動きを止めない。

——何て執念だ。

一護は瞳目する。

あれ程の怪我だ。普通なら身動き一つ取れる筈が無い。逆に傷口を広げ、己の死期を早める可能性が高い。

劍八なら平然と動いて笑いながら斬り掛かって来そうではあるが、あれは例外中の例外である。

「…もう止せグリムジョー。それ以上動けば流石のお前でも——」

「黙…れ…!!」

一護の言葉は怒声によつて遮られる。

それでも諦めずに続けようとするが、グリムジョーの向けて来た凄まじい殺気に、思わず口を噤んだ。

「てめえは、ずつとそうだ…!! 全然殺意を向けてこねえクセに…:俺に勝つ気だけは持つていやがる…!!」

グリムジョーにとつての戦いとは、殺し殺されの死と隣り合わせな世界。

だが一護は違う。どんなに痛め付けられても、仲間を傷付けられても、その眼に憎しみと殺意を宿らせる事はしなかった。

不屈の闘志と不殺の信念を以て、臆する事無く敵に立ち向かつて来た。

それがグリムジョーにとってどんな意味を持つのか。

自身と同じ場所に立とうとしないにも拘らず、勝利を信じて疑わない。

まるでそれはグリムジョーより格上だと、行動で示している様に見えた。

それが如何し様も無く——気に食わなかった。

「ナメンじゃ、ねえええええッ!!」

遂にグリムジョーは立ち上がる。

両足は地面に着いているものの、終始ふら付いており不安定。少しでも気を抜けば瞬く間に倒れてしまいそうな印象を受ける。

正に見た目は瀕死そのもの。

しかしその眼は死んでいない。

鋭利な眼光に含まれる強烈な意志に、一護は気圧された。

だがそれも一瞬の内だけ。負けるものかと、直ぐ様己を奮い立たせ、切っ先を向ける。

「ッ!?!」

だが一護の行動は不要だった。

何故なら次の瞬間、グリムジョーの帰刃形態が解け、解放前の姿へと逆戻りしたのだから。

彼の右手には斬魄刀が握られている。だがその中身は明らかに内包する力が弱くなっており、現状のままでは再び帰刃出来るとは考え難かった。

一護の脳裏に、以前卍解習得の為の修行に当たり、だが夜一から受けた講習内容の一部が浮かび上がる。

持ち主の意志に反して卍解が消滅し、通常の斬魄刀へと戻る現象が起こった際、それは持ち主の死期に近い事を意味すると。

そしてその斬魄刀自体も、持ち主の死と共に消滅するという運命共同体。

やや状況は異なるが、共通すると思わしき部分は幾つかある。

まず十中八九、グリムジョーは自らの意志で帰刃を解いてはいない。瀕死の状態にも拘らず、あれだけの殺気と戦意を向けて来たのだ。態々戦闘能力を落とす真似などせず、例え無茶でもその状態を維持したまま戦闘を再開する筈。

しかし実際は解けた。

ひよつとすると、元々消耗が激しくなると解除される仕組みだったのかもしれない。だがもし、死神の卍解消滅と同様に、破面の帰刃消滅もそれに当て嵌まるとしたら――

「グリムジョー、お前は……」

答えに至った一護は絶句した。

そう、グリムジョー本人もそんな事は百も承知。その上で戦闘を続行しようとしていたのだ。

寿命を縮める事になろうが無関係無い。結局は自身が死ぬよりも早く、敵を殺してしまえば良いだけの事だろうと。

「さつさと……構えろ黒崎……!! 俺はまだ戦え……!!」

「いや無理だろ」

「る、ガッ!!」

未だにふら付いたままの足。その右足を前に出した刹那——グリムジョーが背後から何かに襲われた。

それは鞭の如く撓る——長い右脚であった。

グリムジョーの後方、その上部より斜め下に振り下ろされたそれは、寸分の狂いも無く彼の後頭部へと直撃。

打撃による衝撃により脳が揺さ振られて脳震盪を起こすと、瞬く間にその意識は暗転した。

「取り敢えず今は寝てろ」

糸の切れた人形の如く、グリムジョーは全身から前のめりに崩れ落ちる。

だがそのまま地面へ倒れ伏す様な事にはならなかつた。

長い右脚の次は、これまた長い右腕が後方から伸ばされ、グリムジョーの白装束を掴んで止めていたのだ。

「…居るんだろ、チルツチ」

その腕の持ち主——ノイトラは小さく溜息を吐くと、意識の無いグリムジョーを持ち上げて自身の後方へと差し出しながら、自らの従属官の名を呼ぶ。

すると彼の背後に一つの人影が音も無く降り立った。

「——なに？」

「コイツを治療室まで頼む」

「……りよーかい。ほらあんた達、お仕事の時間よ」

チルツチは了承の返事をする、この場に居る者達以外の誰かへと呼び掛ける。

次の瞬間、彼女の周囲へ複数の気配が瞬時に現れる。

それはノイトラが十刃落ち二名を回収した直後に蹂躪し、最後の一人になったところで現れたチルツチへと預けたピカロであった。

「はーい！」「わかったー」「がってんしよーち！」「よいしよつと」「えいこらしよつ」「どっこいしよつ」「わっしよいわしよい！」「ワンワン!!」「わひやあ!?! ゆらさないでー！」「顔に血がかかったー！」「い、痛そう…」「ぐるてすくく」「これ食べていいの？」「ええ、まずそー」「かたそう…」「ゆでればやわくなるく」「まめ知識?」「とりびあくん」「真面目に運べや糞餓鬼共が！ あとそいつ食べたら二度と飯やらねえぞコラア!!」

ピカロはチルツチの指示に従い、十人以上でグリムジョーの身体を持ち上げると、ま

るで祭りの神輿の如く運び始める。

如何見ても重傷人の扱いをしていない彼等に対し、チルツチは怒鳴りながらもその後を追った。

「……俺は何も見て無えぞ……」

口ではそう言いつつ、ノイトラは果てし無く疑問に思っていた。

——何でピカロが生きてんだ。しかも増えた状態で。

だが今考えるべき事では無いとして、思考を切り替える。

それに理由は不明だが、何故かチルツチには従順になっている様だし、今の所は問題無いだろうと判断して。

「キアて、こうして直接会うのはあの時以来だな？」

「てめえは……!!!」

ノイトラは背筋を伸ばすと、改めて一護と向き合う。

こうして二人が対峙するのは、初の現世侵攻時を含めて二度目。

ノイトラとしては相変わらず何か感慨深いものを感じていたりするのだが、一護は違う。警戒レベルを最大限に上げながらも、密かに恐怖心を抱いていた。

眼前に立たれただけで伝わって来る、此方を容赦無く押し潰さんとする程の凶悪な霊圧は、今迄に感じた事が無い。

正にグリムジョーとは別格。まさか階級一つの違いがこれ程の差を持つとは、と。

「改めて自己紹介といこうぜ。第5十刃、ノイトラ・ジルガだ」

「…黒崎一護だ」

——既に十分知っているだろうに。

平然と名乗り始めたノイトラに対し、一護は内心で吐き捨てた。

「オウ、宜しくな。つっても…短い間だけになるかもしれねえけどな」

「——ッ!!」

その言葉の意味など、説明されるまでも無く理解出来た。

——今のお前を始末する程度、そう時間は掛からない。

即ちノイトラはそう言っているのだ。

一護は思わず歯噛みした。自身の状態を鑑みるに、このまま戦えば確実にそうなるであらうと。

「六番目の次は五番目。順当だろ？」

「く…!!」

「そんじゃ、始めるとすつかア」

無情にもそう言い放つと、ノイトラはゆったりとした速度で歩を進め始める。

明らかに不利なこの状況下に於いて、待ちに入るのは愚策。しかしそんな思考とは裏腹に、一護の足は全く動かず、ノイトラが近付いて来るのを只々眺め続けるしか出来無かった。

グリムジョーと一護の戦いに決着が付いた頃、その現場から徒歩二分程度の位置にある通路を進んでいる者が居た。

織姫が連れ出された事を知り、グリムジョーを追って宮を出たウルキオラだ。

しかしその割には急いでいる様には見えない。響転も使わず、しかも走るところか余裕を持って歩いている。

つい数分前、通路を移動しながら探査神経を発動させていたウルキオラは、一護と交戦していたグリムジョーの霊圧が急激に小さくなつてゆくのを感じた。

その反面、消耗故か序盤に比べて相当弱まつてはいるものの、未だ消失せずに残っている一護の霊圧。

——グリムジョーが敗れたか。

直接見てはいないが、ウルキオラは大凡を察した。

更にそれから間も無くして、その中心部目指して凄まじい速度で近づくノイトラの霊圧。

この時点で一護の運命は決まった様なもの。

それ等の理由から、ウルキオラは特に急ぐ必要も無いとして、移動速度を一気に緩め

たのだ。

「…奴の命運も此処までか。呆気無いものだ」

何処か失望した様にして呟くと、今度は悩み始める。

極めて微弱となったグリムジョーの霊圧反応だが、如何やら治療室へ運ばれているらしい。チルツチと、虚夜宮の一角に閉じ込められていた筈のピカロによって。

そして残されたノイトラと一護は、今正にその距離を詰め始め、交戦状態に入ろうとしている。

——どちらに向かうべきか。

ウルキオラとしては後者の現場を選びたいところだが、組織の一員としての優先順位を考えれば前者も捨てる訳にはいかない。

考えながら通路を進んでいると、少し先に他から伸びた通路の合流地点が視界に入った。

するとその内一つから、とある人物が現れる。

「…ウルキオラ？」

「…お前か、スターク」

それはリリネットに留守番を頼み、自身の宮から出ていたスタークであった。

探査神経を始め、霊圧探知系の殆どを切って歩いていた為か、彼は何処か驚いた様子でその場に立ち止まる。

ウルキオラもそんなスタークの近くまで進むと、その足を止めて向き合った。

「珍しいな。まさかお前が外を出歩いているとは…」

「…どつかの誰かさんにも言われたな、それ」

ウルキオラの言葉を聞いたスタークは、バツが悪そうに後頭部を掻く。

「現世侵攻の予定時間までそう間も無いだろう。良いのか？」

「……あゝ……」

ウルキオラは問い掛ける。

それに対し、スタークは視線を斜め上へと逸らして考え始める。

自身の用件を言うべきか言わざるべきかと。

スタークが宮を出て移動していた理由は、藍染からの密命を実行する為だ。

そのタイミングの全ても、事細かに聞き及んでいる。それが色々とゴタついている今なのである。

それを逃すと非常に面倒な事態に陥る可能性が高い上、難易度が跳ね上がるとして。一分が経過した辺りか。ウルキオラから催促の視線が向けられる。

——そんなに急くなよ。

意外と気が短いウルキオラに、スタークは困惑を隠せない。状況が状況なだけなのかもしれないが。

しかし藍染から出来る限り内密に頼むと言われているし、如何考えても此処は黙っている方が間違いは無い。

だがふと思ひ出す。そう言えば藍染は最後にこう付け加えていた。

信用出来る相手であれば、広めない事を条件に話すなり協力を仰ぐなりしても構わないと。

嘘偽り無く正直に藍染絡みだと言えば、ウルキオラなら忠実に熟そうとするだろう。恐らくは、それが例え仲の良い同僚に手を掛ける内容であってもだ。

それほどまでにウルキオラの忠誠心は高いのだ。

「実はよ…お前が出て行つた後の事なんだが——」

悩みに悩み抜いた末、スタークは意を決して口を開いた。

リリネットにした様に、あの時ウルキオラが退室した後に、藍染から与えられた指示の内容を説明する。

「—— 一体何の冗談だ、それは」

「…は？」

だが説明を終えた直後、ウルキオラが見せた反応は予想外なものだった。

何とその指示の内容の真偽を疑って掛かったのだ。

これには流石のスタークも茫然とするしかなかった。

「奴が何時、そんな下らん事を企んでいる素振りを見せた。そもそも何の得に——っ」

其処まで言い掛けた瞬間、ウルキオラは途端に口を閉ざした。

——自分は何をムキになつてゐるのか。

スタークの言つた内容が真実であるのならば、それを信用しないという事は即ち藍染を信用していないという事になる。

何と愚かしい真似をしているのか。ウルキオラは内心で自身を戒める。

藍染が言えば、例えそれが白であつても黒になる。

当然だろう。彼の僕である自分達は、その骨の髄まで主の為に尽くす事こそが存在意義だ。

その在り方に疑問を挟む余地など皆無。

ウルキオラはそう自身を納得させんとするも——完全には出来無かつた。

それは織姫の宮周辺にて息絶えたファエナ。その生き様を見届けた際に抱いたものと似ている。

その身の内側に生まれた何かは、既の所で藍染の言葉を受け入れる事を拒み続けていた。

「…驚いたな」

己の内できこつた謎の現象に戸惑い続けているウルキオラの様子を眺めながら、ス

タークはそう零した。

普段から出不精なせいだろう。交流が殆ど無かった為、ウルキオラについては時折聞こえて来る風の噂程度でしか知らない。

感情の抜け落ちた人形、藍染の命令にのみ従う機械。稀にある召集で顔を合わせた時も、正に虚無という、その司る死に相応しい存在だという印象しか抱かなかつた。

それが如何だ。恐らくは未だにそれが理解出来ていないのだろう。眼前で自身の口元に手を当て、何かを考え続けている様子を見るに、噂通りでは無いのが明白。

ウルキオラのこの変化の原因は一体何なのか。まあスタークには大凡の見当が付いていたのだが――。

「まあ、信じる信じねえは自由だぜ。どつちにしろ俺のする事は決まってるんだけどな……」

スタークは一旦言葉を区切ると、ウルキオラに背を向けた。

そうして十歩程進んだ時、突如としてその足を止め、顔を僅かに振り返らせながら言った。

「それと…相手が相手だ。お前も手伝つてくれりやあ心強いぜ」

心成しか、その表情には影が差している様に見えたが、別の事に意識を向けていたウルキオラは気付かなかつた。

返答を待たぬ内に、スタークは再び歩き始める。

ウルキオラはその背中が視界から消えるまで、その場に立ち尽くしていた。

状況はこれ以上無い程に最悪だった。

あれだけの激戦の後だ。そんな状態で再びグリムジョークラスの敵と交戦しても勝利出来る可能性は著しく低い。

その為、一護はグリムジョーを下した後、織姫とネルを連れ、これ以上の接敵を避け

ながら退却する予定であった。

しかし現実には余りに非情。今対峙しているのは更にグリムジョーよりも階級が上の十刃であるノイトラ。加えてその戦績を見る限り、例え一護が全快の状態であっても極めて厳しいだろう。寧ろ真面な戦いになるのか如何かすら怪しい。

「……どーしたよ。来ねえならコツチから行くぜ？」

此方を睨み付けるばかりで動く様子が全く無い事に痺れを切らしたのか、先手を打つたのはノイトラだった。

袴の両脇に手を突っ込んだ自然体のまま、瞬時に間合いを詰めると、その長い右脚を真横に振り被る。

——速過ぎる。

一護は驚愕した。視界では捉えていたものの、ノイトラが見せた動きに全く反応出来なかった事に。

しかもこれは響転では無い。只の純粹な踏込みでこの速度を出しているのだと。

一護は咄嗟に後退しようとするが、直後に左足へと走った激痛がそれを阻む。それはグリムジョーとの戦いの中で見せた無茶な動き、その際に使用した部分であった。

己むを得ず、繰り出された蹴撃の軌道を予測し、自身の左側面へと刀身を移動。裏側には左腕も添え、反撃も何も無い完全な防御態勢を取る。

夜の打撃に耐えるどころか逆に負傷させ、手加減抜きで放たれた喜助の、剃刀紅姫を容易く破壊したノイトラの脚だ。

即ちこの一撃には尋常ならざる威力が秘められている筈だとして、一護は全力でそれを受け止めに掛かる。

「ツ…ガ…!!？」

ノイトラの脚と刀身が接触した瞬間だった。

気付けば一護の身体は宙を舞っていた。

目まぐるしい速度で切り替わる視界へ移る光景。感覚の無い両腕に、全身へと襲い掛かる凄まじい衝撃。

そんな状態で真面な着地体勢を取れる筈も無く、一護はやがて転がる様にして地面へと落下した。

——何が起こったのか。

余りに急な展開に、一護は倒れ伏しながら混乱していた。

次第に感覚が戻り始めた両腕に力を入れ、身体を持ち上げる。視界の先には、右脚を振り抜いた状態で止めたまま、何処か落胆した様な表情で此方を眺めているノイトラだった。

「冗談……だろ……!？」

一護は今更ながらに理解する。

自身はあの蹴撃を受け止め切れずに吹き飛ばされたのだと。

そして身体に残るダメージは、その際に刀身を伝わって来たもの。

血の気が引いた。蹴りだけであれ程の威力が出せるのかと。

確かに此方は消耗している。しかしそれでも大抵の攻撃には耐えられる自信があった。

だがこの結果である。一護の全力の防御は、一秒も持たずに崩された。

つまりノイトラは徒手空拳に於いても自身の想定を超える常識外れな能力を持っているという事に他ならない。

「……こんなモンか？」

「ッ!!」

その眩きを耳にした一護は、両足に力を込めて一気に立ち上がる。

透かさず刀を構え直し、切っ先を向ける。

次に深く息を吸い込み、ゆっくり吐く。そうして呼吸を整えると同時に、精神も落ち着かせる事に尽力する。

やがて戻る冷静な思考回路。その中で、一護は如何にしてこの圧倒的不利な現状を打開するかを考える。

普通に戦うだけでは駄目だ。それでは傷一つ付ける事すら叶わない。

グリムジョーですら、卍解状態且つ極限まで集中した上でやっと鋼皮を切り裂けたのだ。最低でも常時その刀身に月牙を纏わせた形で斬撃を繰り返さねば、ノイトラには通用しないだろう。

そして真正面から打ち合う事は如何あつても避けなければならない。確実に打ち負ける。

刀身を通じて感じたのは、蹴撃の威力だけでは無い。それに含まれた速度と鋭さ、正確さに練度、そしてグリムジョーを遥かに超える脅力。

背中の巨大な得物は飾りでは無いのだろう。しかしあの細見の身体の何処からそん

な力が出て来ているのか甚だ疑問だ。

常軌を逸した力の前では、如何なる小細工も通用しない。

一護にとって、正にノイトラはその体現者だった。

互いの力の差は歴然。勝機という希望の光は遙か先にある。

だがそれが何だと、一護は己を奮い立たせる。

決して諦めるものか。最後の最後まで、文字通り死力を尽くして戦い、勝利を挽ぎ取ってやると。

自身の顔を覆い隠す様にして、一護は徐に右手を持ち上げる。

それが一体何の動作なのかは言うまでも無い。

「おおおおオオオッ!!!」

咆哮と共に、一護の周囲が漆黒の霊圧に覆われる。

其処から間髪入れずに何か飛び出すと、残像を残す程の速度でノイトラへと接近する。

無論、それは虚化した一護だった。

刀を真横に振り被り、眼前の敵を胴薙ぎにせんと迫る。

その刀身には既に月牙が纏われていた。

「…へエ」

ノイトラは感心していた。

あれだけの激戦の直後で相当疲弊しているだろうに。そんな中で更に消耗の激しい虚化を迷わず使うとは、何とも思い切った事をする。

十中八九、一護は短期決戦を仕掛ける気なのだろう。

敵は此方を舐めている。ならば本気を出す前に仕留めてやるとでも考えてそうだ。

薙ぎ払われた刀身を、後方へと軽くステップを踏んで躲しながら、ノイトラは思った。一方、初撃は躲されてしまったものの、一護は動じずに更なる追撃を仕掛ける。

怯む事無く次々に前へと踏み込み、的の大きいノイトラの胴体を中心に狙いを定め、縦横無尽に刀を振るう。

実はこの月牙を纏った斬撃。その威力もさる事ながら、実は結構凶悪な仕様だったりする。

それは刀身のみならず、全体を漂う月牙自体も相当な殺傷能力を持っており、並みの鋼皮では少し触れただけで容易く負傷する。

即ち攻撃範囲が不規則なのである。この斬撃を完全に回避するには、只単にその切っ先が届くであろう範囲から逃れるだけでは足りない。その形を定めずに刀身の周囲を漂う月牙にも意識を向けねばならないのだ。

だがノイトラは涼しい表情で、繰り出される無数の斬撃を難なく躲し続ける。

その身に纏う白装束には傷一つ付いておらず、掠りすらしていない事を証明していた。

何故これ程までに完璧に躲し続けられるのか。それはノイトラ自身が極限まで神経を集中させているのもあるが、大半は一護の攻撃の殆どが直線的であった為だ。

如何に速く強力な斬撃でも、初動さえ見極めてしまえば回避は容易い。そしてある程度の余裕を持つて躲せば、刀身に漂う月牙に対応する事も出来る。

これはノイトラの今迄の鍛錬、そして夜一との戦鬪経験が活きた結果であった。

自身の斬撃が尽く当たらない事に内心で舌を巻きながらも、一護は考える。

しかしこうまで徹底して躲し続けているという事が何の意味を持つのかを。

言うまでも無い。直撃による負傷を避ける為だ。

つまり一護の斬撃は、ノイトラの鋼皮を切り裂くに足る十分な威力を持っているという事。

もし耐えられる程度の攻撃なのであれば、一々躲す必要など無いのだから。

だが気に掛かる点もある。先程から一向に、背中の斬魄刀らしき巨大な得物を手に取る様子が無い事だ。

一護はふと思いついた。それが此方を侮っているが故の態度であれば、これはチャンスカもしれない。

確かに観察されていた分、此方の手の内は大半が把握されているかもしれない。

斬魄刀を抜かないのも、この程度であれば使う必要は無いと判断したからだろう。

——その余裕が命取りだ。

ノイトラが油断している隙に全力を以て畳み掛け、帰刃しない内に仕留める。言うなればこれが理想形か。

考えを纏めた一護は、即座に行動へと移す。

攻撃を一旦中断すると、上空へと跳躍。そしてすかさず月牙天衝を放つ。

ノイトラも即座に反応。先程までより大きな動きで、攻撃範囲から逃れんとする。

だがこれはフェイク。躲されるのは織り込み済み。本命はその後にある。

その証拠に、回避姿勢のノイトラの背後には、何時の間にか刀を振り被った一護の姿があった。

無理をして瞬歩を使用した甲斐があったと言うべきか。左足に激痛を感じながらも、一護は即興で立てた戦法が通用した事に安堵していた。

事実、この時彼が叩き出したその速度は過去最高。虚化の影響も相俟つて、それは夜一が全力で使用した瞬歩に匹敵する程だった。

此方に振り向く素振りを見せていない事から、ノイトラはまだ此方に気付いてはいない。

例え気付いていたとしても、今更どんな反応をしても手遅れ。

——これで決まりだ。

己の勝利を確信しながら、一護はノイトラの背中目掛けて刀身を振り下ろした。

「な……!!?」

だがその想定はまたしても覆される。

振り下ろした刀身がその背中に触れるかと思われた刹那、ノイトラは一瞬で上体を前方へと曲げる。それに合わせて右脚を後方へと振り上げ、間近へ迫った刀身を真下から踵で弾き返したのだ。

一護は瞠目した。月牙天衝に負けず劣らずの必殺の一撃が弾かれた事もあるが、何より繰り出されたその脚技に見覚えがあったからだ。

「フツ!!」

ノイトラは振り上げた右脚をそのままに、全身を横倒しにしたまま回転。コンマ数秒の間に三回程繰り返した後、攻撃を弾かれた状態から脱せていない隙だらけな一護の左脇腹へ、勢いを乗せた左脚を叩き付けた。

「ぎ、ぐああああああ!!」

直撃部分にある骨が軋みを上げる。

寧ろ折れなかったのは幸いと言うべきかもしれない。

一護は宙で盛大に回転しながら吹き飛ばされ、ノイトラから相当離れた位置に聳え立つ宮の残骸へと衝突。瓦礫と共に地面へと落下した。

「どういう、事だよ…!!」?

——何故ドルドーニの技をノイトラが使っているのか。  
刀を支えに立ち上がりながら、一護は疑問の声を上げた。

だがそれに対する返答は無い。

即座に背筋を走る悪寒に、警報を鳴らす本能。

一護は反射的に身体を伏せた。するとつい先程まで頭があつた場所を、長く鞭の様に撓らせた左脚が通り過ぎていた。

「——残念」

完全なる不意打ち。しかも振るわれた脚の速度と鋭さは、まるで刃そのものに虚化していなければ対処し切れなかつたであろう。

——もし直撃を受けていれば如何なつていた事か。  
額から流れた一滴の汗が、一護の頬を伝う。

「俺の脚技は基本的に二段構えだ」

「ゴ、アツ!!!」

だがそれも束の間、左脚と入れ替わる様にして今度は右脚が振るわれ、一護へと直撃する。

しかも狙っているのか、先程と同様に左脇腹へと。

その衝撃により、グリムジョーとの戦いの中で負った傷口が広がり、少なく無い量の鮮血が舞った。

凄まじい勢いで地面を転がりながら吹き飛んで行く一護。

それを眺めるノイトラの口元は吊上がっており、明らかに弱者を甚振る事に快感かそれに等しいものを覚えているのが丸判りだ。

無論、実際は完全な演技である。だが長きに亘って鍛え上げられたノイトラの演技力は、並大抵の者では見破れぬ凄まじいものへと昇華していた。

「……い……ち……お……」

「ノイトラ君!! やめてえ!!!」

地面へ転がったまま、右手で直撃部分を押さえて激しく咳き込む一護へ、ノイトラはゆっくりとした足取りで近づいて行く。

離れの宮にて、遂に激痛を発する様になった頭を抱えながら、ネルは一護の名を呼ぶ。彼女の傍に立つ織姫はと言うと、何とノイトラへと声を掛けた。

「貴方はそんな事する人じゃない!! だって私の知るノイトラ君は——不器用でぶつきらぼうだけど、すごく優しかった!!」

「……………」

「だから……お願い!!」

織姫は必死に呼び掛ける。

戦うなどは言わない。だがせめて、一護を回復させるぐらいは許してほしいと、内心で願いながら。

だが悲しい事に、ノイトラは全く反応を示さない。

一步、また一步と、一護との距離を詰めて行く。

「ノイトラ君!!!」

明らかに無視されている。

しかし織姫は諦める事無く、再度ノイトラの名を呼ぶ。

当人が何かしらの反応を示すまでは何度でも繰り返す勢いだ。

「…怪我させねえ程度にソイツを黙らせる!!」

それが功を奏したのか、遂にノイトラが反応した。

苛立ちを隠さずに声を荒げたかと思うと、それは命令。誰かに向かつて放たれたものであった。

「——ホント、人使いが荒いわねっ!」

「あぐっ…!!?」

「うあああっ!!?」

次の瞬間、織姫の身体が地面へと倒れる。

見れば彼女の全身にはワイヤーの様な物が巻き付いており、動きを完全に封じていた。

織姫の足元周辺に居たネルはと言うと、チルツチがその服の襟を掴んで持ち上げ、離れたところへと投げ飛ばしていた。

「チルツチ…ちゃん…?」

「黙りなさい。じゃないとその舌を引っこ抜くわよ」

織姫を拘束したのは、グリムジョーを治療室まで運搬するピカロと共にこの場から離れた筈のチルツチであった。

その際に使用されたワイヤーの様な物の正体は、その特異な形状をした斬魄刀。戸惑いを隠せない織姫を、チルツチは冷ややかな視線で見下ろしていた。

「井上!!?!」

異変に気付いたらしい一護は、咄嗟に上体を持ち上げると、織姫達の居る宮の方向へと顔を向ける。

その直ぐ間近にノイトラが迫っていたにも拘らず。

「…余所見してんじゃねえよ」

「ガハアツ!!」

意識を他に向けているとは言え、未だに倒れたままの一護を、ノイトラは容赦無く蹴

り飛ばした。

その際に生じた、ボキボキという何かが折れる嫌な音。

直撃部分がまたしても左脇腹な時点で、何が起こったのかは大体想像が付く。

度重なる攻撃に、その部分にある骨が遂に耐え切れなくなったのだ。

一護は蹴りの衝撃で数メートル転がり、やがて止まる。

だが一向に立ち上がる素振りを見せない。否、正確には出来無いというべきか。

事実、一護はその仮面の内側で表情を苦痛に歪めながら、左手で負傷箇所を押さえていた。

「そんなにあの御姫サマが心配か？ この俺を無視する程によオ…」

「て、めえ…!!」

せめてもの抵抗なのか、一護はノイトラを睨み付ける。

しかし残念ながら、その程度で動じる様な相手では無い。

「甘エな、まるでチョコラテだ」

「ツ!!?」

不意に呟かれたノイトラの言葉に、一護は硬直した。

それと同じものを聞いたのはつい最近。しかも一度だけだが、あの独特な言い回しは忘れられる筈が無い。

虚夜宮へと侵入した直後まで、過去の記憶を辿り——其処で全てが繋がった。

同じ脚技と言ひ回し。つまりドルドーニとノイトラは親しい間柄か、それに等しい関係にあるのだと。

更に突き詰めれば師弟か友人。一護としては後者の考えがしつくり来たのだが、あれ程までに洗練された脚技は見様見真似で身に付くレベルでは無い事を考慮すると、前者も捨て難かった。

「バカが。それで俺に敗けて死んじまえば本末転倒だろ」  
「……くっ!!」

御尤もな言い分ではある。

一護が死んでしまえば、織姫を助けるも何も無い。

この場に於いて最善の選択は、ノイトラと戦って勝利する事以外に無い。

一護は悔しさを滲ませると、ノイトラは笑みを深める。

その姿はまるで——人が苦しむ様を眺めて愉悅に浸る悪魔を幻視させた。

「それに忘れちゃあいねえか。あの御姫サマの運命は…この俺が握ってるんだぜ？」

一護は瞠目した。

そう、織姫を拘束しているチルツチは従属官。つまりノイトラの指示一つで、織姫を生かすも殺すも自由なのである。

——ならお前は如何するべきか、理解出来ただろう。

相変わらず悪魔染みた雰囲気漂う笑みを浮かべたままだが、その眼帯に隠されている方とは逆の右目は違った。

真つ直ぐ此方を見据える、冷たくも何処か期待の籠った眼差しに、一護はノイトラが何を言わんとしていのかを悟った。

織姫に手を出されたくなかつたら、無駄な抵抗を止めて大人しく殺されるという訳では無い。

お前に残された選択肢は戦う事のみ。例え満身創痍の身体であろうと、文字通り死力を尽くして自身を打ち破り、見事織姫を救ってみせろと。

「うおおおおおおオオオッ!!!」

靈力は勿論、肉体的にも精神的にも限界が近い。

左足の負傷もあり、真面な攻撃は出来無いだろう。体力的に見ても、長時間の斬り合いは厳しい。

ならば——自身に残された全てを賭けた一撃で、この戦いの雌雄を決するのみ。

痛みに疲労、恐怖や不安。それ等全てを払拭する様に叫びながら、一護は立ち上がる。構えを取るや否や、一護は決死の覚悟で踏み込んだ。

その刀身には既に月牙が纏われているが、その質は先程までとは別次元。

一護の見せた決死の覚悟に応えたとも言えるのか。漆黒の刀身全体を包み込み、荒々しく渦を巻くそれが直撃すれば、一体どれ程の威力になるだろう。

当然、ノイトラはその脅威を十分に感じ取っていた。

だが動かない。自然体を崩さず、依然として余裕綽々な様子で佇むばかり。

それに一護は疑問を抱かない。否、抱ける程の余裕が無いと言うべきか。

今の彼の思考は一つ。文字通り自身の全てを注ぎ込んだこの一撃を以て、必ずノイトラを打倒してやるという意志しか無いのだから。

やがて一護は上段に刀を振り被り、間合いに入った瞬間、それを一気に振り下ろした。尋常ならざる殺傷能力を持つ漆黒の霊圧が、斬撃の直撃と同時にノイトラを包み込む。

次の瞬間、一護の顔の仮面が一気に砕け散った。

虚化が自動的に解けたのだ。

同時に全身へと押し掛かる、想像を絶する疲労感と激痛。

今直ぐにでも地面へ横になりたいという願望が一護の中で湧き上がるが、必死に耐える。休息を取るのにはノイトラを倒した事を確認してからだと。

「——やれば出来んじゃないか」

「……え……？」

やがて漆黒の霊圧が晴れる。

同時に眼前へと広がった光景に、一護は絶句した。

一護が振り下ろした刀身は、顔の高さまで持ち上げられたノイトラの右腕に、その刃先を僅かに食い込ませた状態で止まっていた。

「頑張った御褒美だ。一つ良い事を教えてやる」

「あ……ああ……!?!」

「俺の鋼皮は——歴代十刃最高硬度だ」

あれだけの速度と攻撃力、そして多彩な戦法を持ちながら、その上更に十刃トップの防御力を持つとは何の冗談なのか。

その衝撃的な事実を知った一護の表情が、やがて絶望の色へと染まって行く。それを眺めながら、ノイトラは内心で胸を撫で下ろしていた。

正直言うと、一護の斬撃を受け止めたのはそれ程余裕だった訳では決して無い。寧ろかなりギリギリである。

刀身が振り下ろされる直前、ノイトラの中で本能が盛大に警報を鳴らした。

当初はある程度の負傷も覚悟の上で、鋼皮の強度に任せて受け止める心算だったのだが、急遽それを変更。現状に於いて可能な限り、右腕全体を霊圧で全力強化。万全の態勢で迎え撃つたのである。

——これだけボロボロな状態で、あれ程の一撃を繰り出すとは。

主人公補正恐るべし。一護が全開の状態であれば如何なっていた事やら。

全力で強化を施していなければ、恐らく高確率で右腕を斬り落とされていたであろう

う。

表情とは裏腹に、ノイトラは背中に冷や汗を滲ませていた。

「やっし…」

右腕に僅かに食い込んだままの刀身を、ノイトラは左手で鷲掴みにする。

掌が切れる様子は無い。如何やら本当に一護は限界らしい。

刀身を右腕から抜き取ると、そのまま持ち上げる。柄を握り続けていた一護も、それに引つ張られる様に身体が浮かび上がる。

如何やら身体が動かないらしい。殆ど無抵抗だ。

——そろそろの筈だ。

ノイトラは一瞬だけ視線をネルへと移し、直ぐに逸らす。

眼前まで一護を持ち上げて二・三秒程眺めた後、やがて興味を失った様に左手を放した。

「グ…アツ…！」

「終わりだな、黒崎」

受け身も足れぬまま、一護は力無く地面へと倒れ伏す。

ノイトラはそれを見下ろすと、徐に右手を持ち上げ、背中の斬魄刀の柄を掴んだ。

「折角だ。せめて最後は斬魄刀<sup>コイッ</sup>で引導を渡してやるよ」

「……う……」

此処に来て初めて、遂にノイトラは背中の斬魄刀を抜き放つ。

巨大な刀身によって出来た影が、一護へと覆い被さった。

身体を起き上がらせる事すら困難な状態で、防御態勢を取る事なぞ出来る筈が無い。

一護は視線のみをノイトラへ向け、解き放たれたその8の字の巨大な刀身を只々眺め続けていた。

「やめてえええ!!」

「なっ……いっ……!!」

織姫は悲痛な叫び声を上げた。即座にチルツチに押さえ付けられるが、構わず激しく

抵抗する。

だが無情にも、ノイトラの斬魄刀は瀕死の一護を叩き潰さんと、天高く振り上げられる。

霞んだ意識の中で、一護は思った。こんなところで終わるのかと。

此方の攻撃は通じない。全てを注ぎ込んだ決死の一撃も、鋼皮を浅く切る事しか出来なかった。

織姫も拘束され、回復手段も断られた。

他に希望を見出せるとすれば、同じく虚夜宮へ共に突入した仲間達か。

しかしノイトラの圧倒的実力を考慮するに、多少の時間稼ぎ程度にしかならないだろう。

困難な状況であれば、今迄に幾度と無くぶつかつた。だが決して諦めず、心折れる事無く、自身と仲間達を信じて戦い、乗り越えて来た。

しかしこれは違う。

何をして、誰に頼つても無駄であり無力。一筋の希望の光すら差さぬ、全く以て初めでの感覚。

——これが、真の絶望というやつか。

当事者にも拘らず、一護はまるで他人事の様になんか感じていた。

「…出来る事なら、全快の状態のテムエと戦り合いたかったぜ」

もはや戦意どころか生氣すら感じなくなつた一護を確認したノイトラは、不意にその表情を一変。至極残念そうな表情を浮かべた。

先程まで見せていた、弱者を甚振る事に快感を得る様な雰囲気は全く無い。

これこそがノイトラの本心。

彼は思っていた。自身の置かれた厄介な状況、そして憑依したのが破面と言う種族でさえ無ければ、一護とは純粹に手合せを試みたかつたと。

例え種族的に相容れぬ敵であっても、対等な条件下で立ち会う事は当然。そんな武人としての精神を、ノイトラが度重なる鍛錬の中で育んでいたのも、その願望を抱く要因となつていた。

「あつた」

やがてその巨大な刀身が振り下ろされる。

声無き悲鳴を上げる織姫とそれを抑えるチルツチの近くで、とある霊圧が爆発的に膨

れ上  
が  
つ  
た  
の  
は  
そ  
れ  
と  
ほ  
ぼ  
同  
時  
で  
あ  
つ  
た  
。

## 第五十五話 三日月と鈴騎と…

弱者が強者に一方的に甚振られるだけの蹂躪劇。その様は余りに凄惨で、人並みの感覚であれば思わず目を塞ぎたくなる光景であろう。それが弱者の仲間であれば尚更。

全てを見ていた訳では無いが、一護とノイトラが居る戦場を眺めていたチルツチは思った。

「…終わりね」

「ん…むう…！」

遂にノイトラが己の斬魄刀を抜き、それを振り上げた。

その直後に叫びだした織姫の口を塞ぎながら、チルツチは呟く。

あの巨大な刀身が叩き付けられれば、確実に一護は死ぬだろう。原形を留める事無く、哀れにもその身を只の肉塊と化して。

経緯を考えれば、妥当な結果ではある。

だが正直言えば、チルツチは少々残念に思っていた。

もしかするとこの戦いに於いて、ノイトラの本気——— 帰刃形態での戦いが見れるのではと期待していたからだ。

侵入早々にドルドーニを撃破し、後にグリムジョーを殺さずに勝利するという、驚異的な戦果を挙げた一護が相手である。

逆境に強いタイプなのだろう。ならば相手が強ければ強い程、それは顕著になるという事。

期待してしまうのも致し方無い。

従属官になってからというもの、チルツチはノイトラに付き合つて鍛錬に次ぐ鍛錬を重ねて来た。

だがその中で真面にノイトラの帰刃形態を見た事は無い。執拗に頼んでも頑なに拒み続け、一人で鍛錬を行う場合にのみ使用していた。

その意図は理解出来る。帰刃と言う切り札の情報を秘匿する為でもあり、その凄まじさ故に、此方に要らぬ恐怖や悪影響を齎す事を避けていたのだろう。

その気遣いは有難くもあり、気に食わなかった。

自らの主が、遙か高みに位置する存在である事を理解する。確かにきついものがあるだろう。

如何なる努力をしても、自身の手では決して届きはしないという事実を突き付けられ

なのだ。主に追い付く、またはその背中を預けて貰える事を目標に掲げている従属官であれば、まず心が折れる。

だがチルツチは違った。

ノイトラの実力が常軌を逸している程度、とうの昔に理解しているし、割り切っている。

戦闘関連を除いた部分でサポート出来ればそれで十分満足だった。但し、他者から侮られぬ程度の実力は必要だが。

だからこそ、ノイトラの本気を知る事で、その圧倒的な力を持つ者の傍に居られる事を誇りたかった。

しかしそれは叶いそうに無い。

そう悟ったチルツチは諦めた。

後は一護以外の侵入者か、現世で待ち構えているであろう護廷十三隊の隊長格の連中に期待するしか無いかと。

「やめてけろ…」

ふとチルツチの耳が、離れから発せられた小さな声を拾った。

その方向へ振り返ると、其処には頭を両手で抱えつつ、涙目で戦場を眺めて居るネルの姿が視線に入った。

——やはり何処かで見た様な気がする。

チルツチは首を傾げた。

今も昔も、ピカロ以外にあんな幼子の破面は見た事が無い。

だがあの黄緑色の髪と、顔の中央を横切る特徴的な仮面紋には覚えがある。

確か何年も前の話しだが、ある日突然行方不明となった一人の十刃と従属官二名が居た筈だ。

「むぐううツ!!!」

まさか——と、チルツチがそれ等の情報から真実へと至り掛けた刹那であった。

ノイトラが一護目掛けて斬魄刀を振り下ろすと同時に上がる織姫の悲鳴。

それと全く同時にネルが叫んだ。

「いちい(い)おおお!!!」

叫びの直後、ネルの靈圧が急激に膨れ上がる。

その勢いは止まらず、やがて抑え切れなくなつたのか、外部へと放出されたそれは爆発の様なものを引き起こした。

ネルが居た場所を中心にして巻き起こる衝撃と砂塵に、チルツチは思わず両目を腕で覆い隠す。

その異変に気付いたのだろう。

戦場ではノイトラがその振り下ろした斬魄刀を途中で止めており、チルツチ達の居る付近へ顔を向けていた。

「んな——ッ!!」

——この靈圧、間違い無い。

チルツチは確信した。

嘗てドルドーニが背負っていた数字。後に彼が十刃落ちとなり、その後釜に収まつた者。

同じ貴重な女の破面だけあり、記憶には確り残っている。

「何で…てめえが此処に居るんだよ…!!?」

チルツチが戸惑いの声を漏らしてから間も無く、周囲を覆っていた砂塵が晴れる。

その中心部より現れたのはネルという少女では無く——頭部に山羊の髑髏の様な仮面を被った成人女性。元第3十刃、ネリエル・トウ・オーダーシュヴァンクその人だった。

最低限の部分を布切れで覆い隠した服装に、豊満なバストと無駄無く引き締まったその抜群のスタイルは、まるでハリベルを連想させる。

服装については恐らく、少女の状態からそのまま身体だけが大きくなった影響だろう。

「答えやがれネリエル!!!」

「……………」

大声で問い掛けるチルツチに対し、ネリエルは答えずに視線のみを移すだけ。

その反応に苛立ったのか、チルツチは織姫を拘束していた斬魄刀のワイヤーを解き、構えを取る。

ネリエルは徐に、膝を着いていた体勢から立ち上がる。

それから暫しの間、真正面からチルツチを見詰めていたが、やがてその視線をノイトラと一護の居る戦場へと向けた。

「ツ、てめえ!!」

チルツチはそれに危機感を覚えた。

まさかノイトラの戦いに横槍を入れる気かと。

——彼の戦いの邪魔をさせてたまるか。

ネリエルの行動を予測したチルツチの行動は早かった。

織姫を巻き込まない為、その場から跳び上がると、右手に握った斬魄刀を思い切り振るう。

縦に高速回転するチャクラムが、凄まじい勢いでネリエル目掛けて飛来する。

この時、チルツチは焦燥の余り選択を誤っていた。

確かに彼女はノイトラ指導の元の厳しい鍛錬により、以前とは格段に腕を上げていた。先程放った攻撃も、並の数字持ちであれば躲し切れずに容易く両断されるレベルだ。

だが相手は元とは言え、上位十刃に名を連ねたネリエルである。

強力だが弱点もそれなりに多いチルツチの攻撃に対し、対処出来無い道理は無かった。

「なっ…」

案の定、ネリエルは迫り来るチャクラムを、僅かに身体を横へ逸らしただけで躲して見せる。

一切無駄の無い、最低限の動きだけで行う回避行動。並の技量では到底成し得ない芸当だ。

チルツチは思わず息を呑む。

即座に気を取り直し、チャクラムを引き戻そうと右手の柄を引くが——それは叶わなかった。

「ッ!!?」

あろう事か、逆にチルツチがチャクラムの放たれた方向へ引つ張り込まれたのだ。

見れば視線の先には、右手でワイヤーを鷲掴みにして、後方へと引いた体勢のネリエルが居た。

——このまま引き寄せて接近戦に持ち込む気か。

そうなると流石に分が悪過ぎる。

接近戦が比較的不得意の部類にあるチルツチは、内心で舌打ちした。

しかも相手が相手だ。先程の軽やかな身の熟しを見るに、ネリエルの戦士としての技量は相当なもの。真面にやり合った場合の結果なぞ目に見えている。

ならば逆に引つ張り返すか、その場に踏み止まれば良いのではと思うかもしれないが、残念ながらそれは不可能。

小柄なチルツチと、ハリベルとほぼ同等の体格を持つネリエル。靈力差にもよるが、単純な力比べでは後者に軍配が上がる。

「——ちいっ!!」

コンマ数秒の間に情報を整理したチルツチは決断する。此処は賭けに出るべきだと。するとその直後、彼女はあろう事か、自らの斬魄刀を手放すと言う暴挙に出た。

流石に想定外の行動だったのか、ネリエルは瞠目すると、その動きが一瞬だけ止まる。

これこそがチルツチの狙い。

彼女は内心でほくそ笑むと、後方へと跳躍。それと同時に右手を前方へと突き出す。その掌の中心には、霊圧が球体上に集束されていた。

「喰らいやがれ!!」

其処から放たれた赤黒い巨大な光線——虚閃は、ネリエルの全身を？み込まんと直進する。

だが彼女は回避や防御をする素振りを全く見せず、依然としてその場に立ったまま。

右手に握ったワイヤーを手放すと、迫り来る虚閃を前にして何を考えているのか、ネリエルは徐にその大口を開けた。

やがて虚閃が彼女へと直撃する。

だが何時まで経ってもその全身を？み込む心配が無い。まるで直前に見えない壁の様なものにぶつかり、そのまま停止しているかの様に。

これは一体如何いう事なのか。チルツチは戸惑いを隠せなかった。

正真正銘の本気で放った虚閃だ。例え元第3十刃であろうとも、防御も無しに受け止められるとは到底思えない。

「……は……？」

次の瞬間、チルツチは素つ頓狂な声を漏らした。

虚閃が突如として何かに吸い込まれる様にして縮み始め、瞬く間に消え失せたのだ。見れば先程まで開いていた筈のネリエルの口が閉じられており、何かを含んでいるか様に膨らんでいた。

「あたしの虚閃を……飲んだあ!!？」

騒ぎ立てるチルツチを余所に、ネリエルは顔をやや上へ向かせる。

それから数秒後、勢い良く元の位置に振り戻すと同時に口を開いた。

「があッ!!!」

其処から吐き出されたのは、ピンク色の虚閃だった。

チルツチの放ったそれとは明らかにその霊圧量と密度が異なる。

これは相手の虚閃を飲み込んだ後、自分の虚閃を上乗せして放出する——  
重奏<sup>セロ・ドールブル</sup>虚閃<sup>〃</sup>。

その意外性故に、初めて対峙する敵には初見殺しとなる確率が高いネリエルの固有技である。

「ぐ、あああああッ!!」

だがそれを知らぬチルツチは、突然の出来事に反応出来ず、その虚閃へ？み込まれてしまう。

——これは耐え切れない。

帰刃形態であれば耐えられたかもしれないが、生憎と今は未解放の状態。ノイトラに教わった霊圧による鋼皮の強化も間に合わず、その全身が焼かれて行く。

「…く…そつ……」

薄れ行く意識の中、チルツチは己の失態を嘆くと同時に、内心でノイトラへ向けて謝罪の言葉を零した。

虚閃の衝撃によって、もはや檻樓雑巾の様になった彼女の小柄な身体が吹き飛ばされ、そのまま宮の外へと放り出される。

満身創痍の状態で受け身も何も取れず筈が無く、チルツチは地面へと落下。その意識を完全に手放した。

「ネル…ちゃん…?」

うつ伏せの体勢でその一部始終を眺めていた織姫は、此方へ背中を向けるネリエルへ小さく声を掛けた。

ネリエルは暫しの間、チルツチが吹き飛んで行った方向を眺めていたが、完全に撃退出来たと踏んだのか、やがて振り返る。

その表情は柔らかな笑みが浮かんでいた。

「…おはよう」

織姫の抱いていたであろう疑問を肯定すると、響転を用いたのであろう、一瞬で彼女へ近寄る。

片膝を着き、手を差し伸べる。

茫然としながらも、織姫はその手を取った。

「本当に…？」

「本当ですよ。私がネル——元第3十刃、ネリエル・トウ・オーダーシユヴァンクです」

その衝撃的な事実にも、織姫は硬直した。

こうして自身へ優しく手を差し伸べてくれた時点で、敵では無いのは確信している。

しかしあの少女の正体が、実は元とは言え十刃であったなどと、誰が想像出来ただろう。

「お礼を言わせて下さい。貴女と一護が小さな私を護ってくれた御蔭で、本来の姿を取り戻す事が出来ました」

「ネルちゃん…」

「ありがとう」

ネリエルから向けられる温かな感情に、織姫の緊張感が解れる。

気付けば二人は互いに笑みを浮かべていた。

「つ、そうだ！ チルツチちゃんは——」  
「彼女なら大丈夫。致命傷までには至っていないから」

ただ、暫くは動けないと思うけど——と、織姫の思考を先読みしたネリエルは最後にそう付け加えた。

ネリエルとしては、正直あそこまでする心算は無かった。  
彼女がまだ虚夜宮に居た頃、チルツチの事は何度か見掛けている。

その時に観察した際、その足運びや立ち振る舞いから、間違つても自身には及ばない実力者だと判断していた。

しかし実際は如何だ。あの先制攻撃の凄まじさと、想定外の事態に陥つた時の反応速度は目を見張るものがあつた。

ネリエルは即座に認識を改めた。明らかに記憶の中にあるチルツチとは別人だと。

上位の実力者になればなる程、それに比例して耐久度も上がる。ならば並大抵の攻撃では通用しない。

だからこそ、ネリエルは手加減抜きで全力で“重奏虚閃”を返した。チルツチが帰刃

しない内に無力化させたかったという意図もある。

「良かった…」

取り敢えずチルツチが無事である事を知り、織姫は安堵する。

二人の關係を知らないネリエルは、内心で首を傾げていた。囚われていた筈なのに、何故敵の事を心配しているのかと。

だが即座に意識を切り替える。

今はそんな事を考えている場合では無い。

自身の出現によって動揺したらしく、振り下ろした斬魄刀を途中で止めたノイトラ。そして一先ず絶体絶命の危機を免れた一護。

この二人が居る場所を向かう事が先決だとして。

「…一護が心配です。急ぎましょう」

「ひゃっ!？」

「一先ずノイトラの事は私に任せて下さい」

ネリエルは織姫を抱き抱えると、響転でその場から移動する。向かう先は勿論、ノイトラと一護の戦場だ。

瞬く間に現場へ辿り着くと、静かに地面へと降り立った。

そして少女の状態から元の姿に戻って以降、此方の事を見続けていたノイトラへ視線を移した。

ノイトラはネリエルから視線を外さぬまま、内心で何度もガッツポーズを繰り返していた。

ボロボロの一護を執拗に痛め付ける様な真似をしたのは、史実通り彼を極限まで追い詰める事で、ネルの彼の事を護りたいという思いを増幅させ、覚醒を促す為だ。

その思惑は見事成功。只、早々に退場させられたチルツチが気に掛かるが、ネリエル

の事だ。殺してはいないだろうと、一先ずは後回しにする。

一護に向けていた斬魄刀を背中に仕舞う。

そして彼に背を向ける形で、ネリエルの方向へ振り返る。

平静を装うその内側で——僅かでも気を抜けば即座に爆発するであろう、激しく暴れ回る己の感情を全力で抑え込みながら。

「…ネリエル」

「……………」

不意に名を呼ぶノイトラに対し、ネリエルは無言のまま反応を示さない。

暫しの間、二人は互いに見詰め合う。

たがやがてその均衡は崩れ去る。

ネリエルは抱き抱えていた織姫を一旦地面へ下ろすと、突如としてその姿を消したのだ。

ノイトラは確りと捉えていた。

史実の彼であれば全く反応出来無かったそれ。響転を用いて超高速で自身の背後に回り込み、倒れ伏す一護を回収するネリエルの動きを。

「ネル…なのか…?」

「…余り喋らないで。織姫さん、一護の治療をお願いしますか?」

「は、はい!!」

ネリエルは一護に続いて、再び元の位置へと戻って織姫を片手で抱き抱え、更にノイトラとの距離を取る。

二人を地面に降ろし、織姫に一護を託すと、間を置かずにノイトラの正面へと移動した。

「…久し振りだな。あれから何年——」

「どうして?」

「…ああ?」

取り敢えず先程無視された事を無かったものとして、再び語り掛けるノイトラだったが、今度はネリエルの問いによって強制的に中断させられる。

——これでは話が進まないではないか。

今はまだ時間に余裕はあるが、余り悠長にはいられる訳でも無いのも事実。ノイトラは逸る気持ちを押しさえながら、ネリエルの言葉を待つ。

「貴方——初めから気付いてたでしょ。何故見逃す様な真似をしたの？」

「……………」

「一護を痛め付けて笑ってたのも…どこか不自然だった」

—— 一体何を企んでいる。

鋭利な光を放つネリエルの瞳には、そんな多大な警戒心が浮かんでいた。

「さっきのだってそう。防ごうと思えば防げた筈よ」

彼女が疑問に抱くのも当然だろう。

ネル・トウという少女の姿であつたとしても、その霊圧や仮面紋といった特徴は誤魔化せない。

一護との戦いもそうだ。敵である彼を殺そうとしなかった理由が解らない。

ネリエルが元の姿に戻り、傷付いた一護を救出に動いても、ノイトラは一切動揺する

素振りを見せなかった。

初めから気付いて——または予測していたとしか思えぬ反応だ。

ネリエルの問いに、ノイトラは暫し黙り込みながら考える。

この場面に於ける最適な返答は何かと。

大凡の内容は纏っている。問題は言い方だ。

元の姿に戻ったお前に会う為だと、馬鹿正直に言うのは簡単である。

しかしそれは侵入者である一護を見逃す理由にはならない。

藍染の監視下である天蓋の真下で、そんな事を言えば裏切者認定間違い無しだ。

とは言っても、実際そうなのだから他に表現しようが無いのも事実。

——まさかこの様な事態に陥るとは。

ノイトラは悩むと同時に少し後悔していた。

秒針が一つ進む度、次第にネリエルから放たれるプレッシャーが増していくのを感じる。

やがてノイトラはふと思った。此処は別に答える必要は無いではないかと。

色々時間が押している今、こんな些細な事に気を取られて目的を果たすのが遅れる訳にはいかない。

考えが纏まったノイトラは、意を決して口を開く。

「——アンタを騙し討ちして、虚夜宮から外に蹴落として以降…」

「…え？」

「色々、あつたぜ…。ホントによ…」

右目を閉じ、何かを懺悔する様に、ノイトラは静かに語り始める。

ネリエルはその予想外な態度に、瞠目したまま全身を硬直させてしまう。

「そして…何時も考えてた。再びアンタと会う事があつたなら、必ずこうしたいってな…」

「ちよ、ちよつと待つてノイトラ。全然話が見えな——ッ!？」

要領の見えないノイトラの言葉に、ネリエルは一旦それを止めさせようとした。だが直後に絶句する。

眼前のノイトラが、不意に三步後退すると、突如としてその両膝を地面に着けたのだ。

「…この程度で済む事じゃねえのは理解してる」

「ノイ……トラ……？」

次第に上体が前方へ傾き始め、固く握り締めた両手が膝の前に叩き付けられる様にして置かれる。

この時点で、ネリエルはノイトラが何をしようとしているのかを完全に理解した。

「けど今の俺には、これしか出来無えんだ……ッ」

これは以前泰虎が喜助に修行をつけてもらえる様に頼み込む際に使用したものと同じ。

極度に尊崇高貴な対象に恭儉の意を示したり、深い謝罪や請願の意を表す場合に行われる、日本の礼式の一つ。

然るべき場面で用いる場合、尋常ならざる重みを持つそれ。

自身の立場に尊厳やプライド、その一切をかなぐり捨てた上で、謝罪という一つの行為のみに全てを注ぎ込む為の第一段階であり、此方の誠意を示すにはこれ以上無い姿。

「済まなかった、ネリエル!!!」

頭を地面に擦り付けながら、ノイトラは腹の奥底から叫ぶ様にして言った。

そう、彼が見せた行動は——土下座だった。

単に頭を下げるだけなら誰でも出来る。御免なさいと口に出すのも、言うだけなら簡単。しかも過去の行いや態度のせいで信用は皆無に等しい。

故に今のノイトラに残された手段はこれしか無かった。

中には卑屈や単なる自己保身だとネガティブなイメージを抱く者も居るだろう。

しかし所詮それは時と場合によるもの。

普段から下手に出てばかりの者がそれをして、心に響くものは皆無だろう。だが逆は如何か。

例えば十刃の中でも気性が荒い、または極めて高貴でカリスマを持った者が、誠心誠意籠めた土下座を行ったとしよう。それを見た他の破面達は如何感じるか。

まずこれ以上に無い程の衝撃を受けるだろう。下手するとこれは夢だと現実逃避するに違い無い。

「餓鬼みてえに喚き散らして、終いにはあんなクソツタレな手段で——」

「…あ…う…」

「本当に…情けねえ限りだ…」

ノイトラの土下座を目の当たりにしたネリエルは、言葉にならぬ声を漏らしながら狼狽え続ける。

——誰これ。

ネリエルは盛大に混乱していた。本当に彼はあのノイトラ・ジルガなのだろうか。一体何と表現したら良いのだろうか。寧ろ只のそっくりさんだと言われた方が納得出来る。

混乱の余り思考も定まらず、只々ノイトラを眺め続ける事しか出来無かった。

離れでは「双天帰盾」に包まれて治療を施されている一護と、それを展開している織姫が目を見開いたまま硬直している。

だが其処は流石のネリエル。持ち前の強靱な精神力で、一分も経たぬ内に正気を取り戻す事に成功した。

自身が見ている光景は、夢などでは決して無いと。

あのノイトラが、数メートル離れている此方にも伝わって来る程の謝意を全身で放ちながら、その頭を下げている。

しかもそれだけでは無い。

今迄の行いから、自身が殆ど信用されていない事なぞ承知の上だろう。

それでも尚、ノイトラは現にこうして実行に移した。

演技だと思われても構わない。赦してくれとも言わない。只、ケジメだけは付けさせてほしい。

そんな実に男らしい潔さが、ノイトラの行動から感じられた。

初めに投げ掛けた質問の明確な答えはもらっていない。

だが大凡は察せる。

少女であった自身を見逃したのも、傷付いた一護を回収する事を妨害しなかったのも。全てはこの為だけ。

そしてネリエルは今更ながらに気付く。ノイトラが無意識の内に全身から漂わせている、過去のそれを優に越える大きな霊圧に。

脳裏を過る、先程彼が零した色々あったという一言。

ネリエルは悟る。本当にあれ以降、ノイトラは様々な経験を積んできたのだろう。

自発的に、時に強制的に。そうして行く内に、相応の成長を遂げたのだ。

同時に思い返される、彼が一護との戦いの中で見せた、十刃落ちの一人であるドルドーニを連想させる動きの数々。

チルツチがこの場に居た事実も含めれば、全てが繋がる。

恐らくノイトラは十刃落ちの面々と交流を持ち、それで且つ共に練磨を重ねて来たの  
だろう。

ネリエルは認めた。彼が本当に心を入れ替えた事実を。

あの荒んだ過去の在り方から、現在進行形で見せている別人の様な姿へ至るまで、一  
体どれ程の苦勞を重ねてきたというのか。

確かに自分達に行ったあの所業は、簡単に許せる様なものではない。

だがその事を悔いるノイトラの気持ちは本物。ならば此方もその思いに応えるべき  
だろう。

「…頭を上げて、ノイトラ」

ネリエルの言葉に従い、ノイトラは恐る恐るといった様子で、その頭を持ち上げた。

神妙な面持ちで此方を見上げているその姿は、何処か罰を言い渡される瞬間を待つ子  
供の様にも見える。ネリエルは思った。

「もし私がここで貴方に、その命を以て償うなら許す——と言ったらう？」

「ッ!!!」

ネリエルらしからぬ無情な内容の問い掛けに、ノイトラは息を呑んだ。だが即座にその意図を理解する。

この返答次第で、全てを判断する腹積もりなのだろうと。

「……悪イが、それだけは無理だ……」

ノイトラは目を伏せながら、絞り出す様にして答えた。

加害者である癖に、極めて身勝手に自己中心的な意見ではある。

だがそれを理解した上で、ノイトラは正直に己が心の内を吐露し続ける。

「今の俺には、如何してもやらなきやならねえ事がある」

もし自身が、失う物が何も無い状態であったなら、此処で迷わずこの命を贖罪の為に捧げても良かった。

「助けてえヤツ等が居る」

だが現実は違う。

ノイトラの頭の中に浮かぶのは、親しい仲間達の姿。中には既に死んだ者、この先の未来に於いて死にゆく運命にある者も混ざっていた。

「それ等全部が片付くまでは、この命——絶対に失う訳にはいかねえんだ」

望むは限られた範囲での大団円。それを成し遂げる為には、如何あつても生き抜かねばならない。

その結末を迎えた後であれば、この身を煮るなり焼くなり好きにして構わない。ノイトラはそれ等の思い全てを乗せた右目を、ネリエルへと向けた。

——これだけ聞ければもう十分。

本音を引き出す為とはいえ、少々意地悪な質問を投げ掛けた事を内心で謝罪しながら、ネリエルは最後の見極めに入る事にした。

「……立って、ノイトラ」

「……ネリエル……？」

突然の事で理解が追い付いていないのか、少々呆けた様な表情を浮かべるノイトラに  
対し、ネリエルは視線で催促する。

「そして構えて」

「…それは——」

「確かめたいの。お願い」

そう言うネリエルの右手には、何時の間にやら鞆から抜いていた斬魄刀の柄が握られていた。

その切っ先を、未だ両手両膝を着いたままのノイトラへと向ける。

認めたとはいいつつも、ネリエルは確信が欲しかった。

だがそれを得る為には何が必要となるのか。

一つだけある。それは己が本能に従って暴れ回る獣では無く、確固たる理性と目的を以て力を振るわんとする今のノイトラが相手だからこそ出来る事。

「話はこれでおしまい。後は…お互いの剣で語りましょう」

それは古来より行われて来た、互いに剣を通じて語らうという対話方法。

つまりこの時点で既に、ネリエルにとってノイトラという存在は——己と対等な位置に立つ戦士であると認識されていた。

玉座に腰掛け、藍染は眼前のモニターに映る映像を眺めながら、口元に笑みを浮かべていた。

彼の両脇には変わらず、副官である東仙とギンが其々静かに佇んでいる。

「…何も手出しされないのです？」

不意に東仙が藍染に問い掛ける。

彼が言いたいののは映像の中でノイトラに切っ先を突き付けているネリエルに対してだ。

無論、音だけを聞きながら状況を読み取っているだけだが。

数年前、本人の意思では無かったものの、虚夜宮から姿を消した第3十刃とその従属官二名。

そのまま呑気に虚園の砂漠地帯を放浪しているのであれば別に構わなかった。此方に敵意を持たぬ限りは見逃してやる考えだったのだから。

だが何を考えているのか、彼等は自分達の敵である一護達と手を組んでこの虚夜宮に侵入。御蔭で十刃を含めた複数の破面達を撃破され、自分達の拠点の深くまで踏み込まれてしまった。

明らかな裏切り行為。

そしてつい先程、ネリエルは元の姿を取り戻したかと思いきや、追い詰められていた一護を救出。続け様にノイトラと交戦状態へ入ろうとしている。

もはや弁明の余地は無い。現世侵攻の予定時間が迫ってはいるが、今直ぐにでも他の十刃を向かわせる等して処刑すべきだと、東仙は全身から怒りのオーラを垂れ流しつつ訴える。

「その心配は無用だ」

だが藍染の返答は否。

東仙は思わずその見えぬ筈の目を見開いた。

「中々に興味深い展開だからね。もう少し眺めていたい」

「…藍染様」

「それに——」

藍染は暫し間を置くと、笑みを深めながら言った。

「やっと訪れた彼の——ノイトラが待ち望んだ瞬間だ。それに横槍を入れるのは無粋というものだろうか？」

もしノイトラ本人がこの言葉を聞いていれば、驚愕の余り硬直していた事だろう。

厳密に言うと、彼としては一応自身の目的を藍染が察している可能性は考慮してい

る。

だが幾ら頭の中で予測していたとしても、実際にそれを体験した瞬間の衝撃の大きさまでは想定出来る筈も無い。

「しかし、奴のあの発言は…」

東仙にしては珍しく、尚も食い下がる。しかも藍染の返答に対してだ。

今度は矛先をネリエルからノイトラへと変更しながら。

自分自身と相容れ無い存在が気に食わないのも主だが、実は組織人らしい理由もあつた。

ノイトラの発言を聞く限り、少なくともネリエル・トウ・オーデルシュヴァンクに対して負い目、そして一定以上の情を持っている様に見受けられる。

ならば如何にノイトラとて、戦った場合に手心を加える可能性もある。最悪はネリエルに説得され、藍染を裏切るという最悪の事態もだ。

東仙は後者の可能性を最も警戒していた。

以前までの彼であれば、たかが第5十刃如きが裏切る程度で何が変わるのかと、深く考える事無く流していただろう。何せもしもの時は自身が直接出向いて始末すれば良

いのだから。

だが今は違う。それはノイトラの持つ実力に対しての認識が変わっていた為である。

他の隊の副隊長に引けを取らぬ実力を持つ一角を斬魄刀を抜かずに軽くあしらい、尸魂界陣営でも上位の実力者である夜一達を解放無しで切り抜ける等の戦績から、ノイトラはその階級に不相応な力を持っているのだと。

しかもバラガンが直接本人に敵対意志の有無を確認し、ウルキオラも自身と同格かそれ以上の相手として接している程。

それ程の存在が、此方に牙を剥く。これを脅威と言わずして何とする。

加えてこのところ数年、戦場での帰刃の記録がほぼ皆無。御蔭でその力の上限が見えないのも、東仙が警戒心を抱くのに拍車を掛けていた。

無論、藍染にとっては脅威と言う程では無いのかもしれない。だが例え方が一であろうとも、可能性は必ずあるものだ。

それ故に、東仙にとってノイトラという存在は、決して無視出来無い不確定要素であった。

「例え殺すまで行かなくとも、ほぼ確実に無力化はしてくれるだろう。それで十分さ」

そんな東仙の思いなぞ既に察しているだろう。だが藍染は言外にそれを不要だと返す。

其処まで仰るのならばと、内心で諦めつつ、東仙は新たに生じた疑問を口に出した。

「…随分と奴の肩を持つのですね」

「黒崎一護と同様、彼には個人的に期待してるのでね」

そう言うと、藍染は視線だけを東仙とは逆側へと移す。

「君もそうだろう、ギン？」

「…さあ、どうでっしゃるか」

急に話を振られたギンは欠片も動じた様子を見せず、何時も通り薄笑いを浮かべながら肩を竦め、返答をはぐらかす。

藍染は特に気にした様子も見せず、再び映像へと視線を戻した。

大凡数分後、モニターに映る戦場に変化が訪れた瞬間、藍染が玉座から腰を上げた。

「——さて、そろそろ席を外すとしようか」

「…藍染様？」

——何故このタイミングで。

東仙は理解出来無かった。

寧ろこれからの筈。折角映像の先でノイトラがその秘められた力を披露してくれようとしているのだ。

幸いにも、此処は様々な機能が充実している玉座の間。設置されている機器等を最大限に利用して解析すべきだろうと。

「簡単な事だ。この先は見る必要が無いからね」

だが直後に放たれた藍染の言葉は、東仙の考えを不要と断じるものだった。

ノイトラが裏切る事は無いと信用しているのか。または既にその隠された実力を把握しており、対策を講じてあるが故に警戒する必要が無いのか。

真意を悟らせぬまま、藍染はその場から踵を返す。

向かう先は玉座の間の奥。

「…そう——」

そのまま十歩程進むと、突如としてその足が止まる。

藍染は顔だけを振り返らせ、その場で棒立ちになったままの副官二名に視線を移す。

「全ては私の掌の上だ」

さらりと言い放たれたその言葉には、強大な力を得た者に良くありがちな傲慢さは全く感じられない。

正にそれこそが唯一の答えであり真実。聞く者全てに疑問を抱く余地を与えず、この世の摂理なのだとなんげもせずしてしまおう何かがあった。

## 第五十六話 三日月と鈴騎と解禁と…

ノイトラは先程持ち上げた筈の顔を再び俯かせながら、今にも震え出しそうになる身体を必死に抑え込んでいた。歡喜に打ち震えるとは正にこの事かと。

上限を超えた怒りに続き、初めて体験した二つ目の感覚。

ネリエルから立つ様に言われているのだが、済まないがもう少しだけ待つて欲しいと、内心で彼女へ謝罪する。

「剣だけじゃない。脚でも拳でも、あれから貴方が磨き上げてきた全てを…この私に見せて頂戴」

互いに剣や拳を交えて語らう事を提案する。それはつまりネリエルがノイトラを自身と対等な戦士であると認めたという事に他ならない。

それは他ならぬノイトラの願いの一つでもあった。

「それで——もう十分。貴方の謝罪を受け入れるわ」

ネリエルは知る由も無い。その言葉がどれ程を意味を持つのかを。

明確な赦しをもらった訳ではない。だがそれでもノイトラには十分過ぎた。

心の奥底に何年も居座っていた罪悪感という重石、その半分以上が瞬く間に取り払われた。

そして文字通り血反吐を吐きながら積み重ねて来た努力は、決して無駄では無く正しかったと証明された。

あれだけの事を仕出かしたのだ。並大抵の者であれば、少なくとも赦すどころか謝罪すら受け入れない可能性の方が高い。

だがネリエルは言った。力を証明してくれさえすれば、その結果に関係無く謝罪を受け入れると。

ノイトラにとってそれがどれ程の救いだったか。そしてこの先に待ち構えている困難な目的、その達成を目指す励みとなったのか。

「……………ああ……」

本当に今更ではあるが、元を辿れば憑依後のノイトラに罪は無い。

しかし当時の彼の心はそれを否定した。

本来あるべき存在を塗り潰したという事実を認識して生まれた罪悪感と、過去の記憶と経験を受け継いだ影響か。憑依直後に目の当りにした光景が余りに強烈だったのもあるかもしれないが、数多の業に見て見ぬ振りをする事は、この御人好しには出来無かったのだ。

加えてネリエルや他の者達にとつては、憑依という事象を説明しない限り、悪いのは過去のノイトラであつて自身は関係無いという理屈は通用しない。

例え説明したとしても、その内容は余りに荒唐無稽。此方の頭が狂つたと思われるか、只の責任逃れの為に筋の通らない見苦しい言い訳をしている様に取りられる可能性もある。

そういった経緯もあり、ノイトラは不条理を感じながらも過去の罪を受け入れる事を決めた。そして年月を重ねる度、何時しか本当に自分自身のものとして考える様になつていった。

———こんな晴れやかな気分は何時振りだろうか。

未だ全てが終わつた訳では無い現状に於いて、どんな理由であれ気を抜いてはいけない事ぐらい十二分に理解している。

だがそれでも、ノイトラは感慨に浸らずにはいられなかつた。

「…ノイトラ?」

「つ、済まねえ」

ネリエルの声に、感慨に耽っていたノイトラは呼び戻される。こんな事をしている場合では無いと。

既に感情は大分落ち着いた。ならば後はネリエルの提案通り、剣を交えた会話で全てを伝えるべきだろう。

自身が今迄何をして来たのか。どの様に変わったのか。

そして——どれ程強くなったのかを。

「手加減は無用だ。解ってるよな?」

「勿論」

ゆつくりと立ち上がりながら、ノイトラは問う掛ける。

ネリエルの返答は肯定だった。

無論、命の遣り取りとまでは行かないし、させない。限度は致命傷の一手前程度。

直接口に出さずとも、二人の間ではそんな暗黙の了解が交わされていた。

「…始めるか」

「ええ」

ノイトラは徐に右手で背中中の斬魄刀の柄に触れると、一気に抜き放つ。

それと同時に、右腰からそれに繋がっていた鎖が、突如として柄尻に吸い込まれる様にして消え去った。

元よりあの鎖は斬魄刀の一部だ。加えてノイトラは体内へ収納したりと、斬魄刀を独自に扱う手段を確立させている。

つまり意図的に鎖の部分だけを消す事も可能であった。

だが疑問も残る。確かにあの鎖は激しい動きをする際に邪魔と成り得る可能性があるが、それ以上に利点もあつた。

何かの拍子に斬魄刀がその手から離れたとしても、即座に手元へ引き戻せる。そして遠距離攻撃の他、敵の身体に絡ませて拘束するという搦め手にも利用出来る。

にも拘らず、何故態々それを消したと言うのか。一連の流れを見ていたネリエルは、思わず内心で首を傾げた。

そんな彼女を尻目に、ノイトラはゆったりとした動作で戦闘態勢へと移行してゆく。柄を両手で握り、刀身の向く先は相手の喉元。右足を一步前に出し、左足は踵を僅かに浮かせ、重心はその両足の中心へ。

それは愚直なまでに基本に忠実な、剣道の基本の構えであった。

だがそれ故に完成されており、攻め入る際はほぼ皆無。

ノイトラと対峙しているネリエルは、その事を十分過ぎる程に感じていた。

——何て大きい。

身長や斬魄刀の事を指しているのでは無い。それはノイトラの全身から溢れ出る強者のオーラが、である。

人格からして別人の様だと言ったが、まさか霊力だけでなく戦士としての実力にまでこれ程までの変化があったとは思ひもしなかった。

想定が甘かった程度では済まない。寧ろ過ぎた。

一見すると普通に構えているだけだが、こうして正面に立って初めて理解出来るその尋常ならざる威圧感。

ネリエルは今にも震え出しそうになる身体を抑えながら、過去の記憶を思い返していた。

自身が気圧されるという感覚を覚えたのは何時振りだろうかと。

今迄に最も恐怖を覚えたのは、藍染と初めて対面した瞬間か。次に虚園の神と謳われるバラガンのカリスマを真面に受けた時や、彼を押し退けて第一十刃へ着任したスタークの底知れなさに対する不気味さ。

ネリエルは初め、元とは言え第三十刃であつた自身の方が上である事実は揺らぎ無いと考えていた。

一護との戦い、そして土下座している最中に確認した霊圧からして、ノイトラは相当に腕を上げたらしい。

だが依然として彼は自分より格下であり、立場的に見て此方が胸を貸してやるべきだろうと。

だが現実は何だ。ノイトラがその身から放出している霊圧量は、先程とは比較にならない。

恐らくあれは抑えられた状態でのものだったのだろう。もはやネリエルのそれは及びもしない。

この状況に於いて、どちらが上かなぞ分かり切っている。

可能であれば、ネリエルは過去に遡って自身の横顔を張り倒したい気分だった。

「——っ……は……あ……」

何時の間にか息が止まっていたらしい。ネリエルは悟られぬ様、静かに肺へ空気を取り込み、呼吸を整える。

全身から流れ出た大量の冷や汗により、身に纏う布切れがそれを吸い、不快な感触と共に肌へと張り付く。

そんなネリエルに対し、ノイトラの態度には全く変化が無い。構えを崩す事無く、その右目はじつと相手を見据えている。

もし此処を第三者が、それも一定上の実力者が眺めていたなら間違い無くこう断言していただろう。構えを取った時点で既に勝負は付いていたと。

現にネリエルは一向に攻勢へと移る事が出来ずに居た。

隙を探り、戦略を練り、何とかして此方の勝機を見出さんと努める度、ノイトラとの間にある実力差を思い知らされた。

ネリエルはその余りの変化に、正道とは真逆——即ち邪道と呼べる手段で得た力なのではと一瞬だけ疑った。

だが即座にその考えを捨てる。

確かにノイトラの在り方が以前のままであったなら、その可能性は高かっただろう。

しかしあの一切の雑念を感じぬ謝罪と、現在進行形で見せている構えが、その疑念を

完全に否定している。

前者は本心からのものであるのは間違いないし、後者は一年や二年程度では到底済まない練磨の果てに辿り着いたのであろう重みが滲み出ている。

このまま睨み合つて居ても埒が明かないのは理解している。

だが今のネリエルは完全にノイトラの醸し出すオーラに？まれてしまつており、自ら動き出すのはもはや不可能であつた。

「…行くぜ」

それを読んだのか如何かは不明だが、先に動いたのはノイトラだつた。

小さな眩きの直後、ノイトラは既に斬魄刀を上段に振り被つた体勢で、ネリエルとの間合いを完全に詰めていた。

「ッ!!?」

それは無拍子且つ無音、超高速という三拍子揃つた恐るべき響転だつた。

加えて振り上げられた斬魄刀の全体を纏う霊圧の量と密度は、並みの破面が放つ虚閃

が可愛らしく思える程の次元で練り込まれている。

正に宣言通りの手加減無用である。

だがそんなノイトラの常軌を逸した動きを目撃した御蔭か、ネリエルの硬直が解けた。

「くっ!!」

受け止めるという選択肢は取れない。否、取れる筈が無い。

ネリエルの思考の大半を埋め尽くしていたのは、回避と言う二文字のみ。

持てる脚力を総動員し、全力でその場から真横へ跳ぶ。

間一髪、ネリエルは振り下ろされた斬魄刀の軌道から逃れる事に成功する。

だが完全に無事とまではいかなかった。

目標を失った巨大な刀身は、そのまま地面へと叩き付けられる。だが同時に周囲へ凄まじい衝撃波を巻き起こし、回避直後のネリエルへ襲い掛かったのだ。

「ッ、冗談…でしょ…!?!」

結構な距離を取ったにも拘らず、全身へと響いて来るそれ。

ネリエルの顔から血の気が引いた。

元から彼女はノイトラが桁外れの脅力を持つている事は知っている。

だが単純な力だけではこうはならない。これ程の威力を出す為には、自分自身の霊圧を研ぎ澄ませるのは勿論の事、確かな重心移動からなる踏み込みと、ブレの無い太刀筋による振り下ろしが必須。

ネリエルは己の選択が正しかったと実感した。あの一振りを刀身で受けようものなら、瞬く間に押し切られ、この身は肉塊になっていた事だろうと。

傍から見れば必殺の一撃。だがそれを繰り返したノイトラからは、欠片も殺意を感じない。

それは即ち、彼はネリエルであれば凌げる筈だと信じた上で、斬魄刀を振り下ろしたという事に他ならない。

「……これを躲すか。流石だな」

事実、そうであった。

ノイトラが完全に仕留める気であったならば、先程の一撃だけでは終わらない。例え

躲されたとしても、其処から即座に嵐の如き追撃を仕掛け、圧倒的な力で以て押し切っていた。

だがあくまでこれは手合せの範疇。謂わば実戦に近い試合の様なものだ。

その中で行われるのは、互いに今迄磨き上げてきた技と技との競い合い。間違っても命の取り合いでは無いのである。

——そんなに買い被らないでほしい。

ノイトラの口から出た賞賛の言葉に、ネリエルは自身の頬が引き攣るのを感じた。

初撃を躲せたのは偶然に等しい。同じ事をもう一度やれと言われれば、間違い無くこう即答するだろう。無理だと。

だが先程のノイトラの反応からして、その事実を察している様子は無い。

寧ろ更に戦意を滾らせ、激しい攻撃を繰り出してくる筈だ。

「じゃあ次だ」

そう言つて斬魄刀を構え直すノイトラを視界に捉えながら、ネリエルは必死に思考を巡らせる。

攻撃を受け止めたり、回避する事は困難。ならば他の手段で以て凌がなければならな

い。

響転の予備動作は読めない。だが幸いにも、攻撃については僅かに見えた。

ならば自身に残されているのは、その刀身の描くであろう軌道を何とかして逸らし、直撃を避ける事以外に無い。

「本当、夢なら醒めてほしいわ…!!」

ネリエルは崩れた体勢を整え、斬魄刀を構えた。

状況的に見て、今彼女が攻めの姿勢を取るのには拙い。何せ一瞬でも早くノイトラの動作を察知する事が出来ねば終わるのだから。

長らく使用していなかった筈の戦士としての勘。それが殆ど鈍っていなかった事に安堵しつつ、ネリエルは精神を極限まで集中させる。

「なっ…!!?」

だが次の瞬間、ノイトラが見せた動きは予想と大きく異なるものだった。

単純に此方との間合いを詰めて攻撃を繰り出すのでは無い。

両手で構えていた筈の斬魄刀を、逆手にした右手へ持ち替え、肩の上まで持ち上げる。左足を大きく前に出し、右足を引いた形で大きく開くと、その斬魄刀を限界まで後方へと引き絞ったのだ。

それはまるで槍の投擲の様な構え。この時点で、ノイトラが何をしようとしているのかは明確。

ネリエルは理解した。鎖を消したのはこの為かと。

彼女は今迄に、ノイトラとは幾度と無く決闘を行い、勝利を収めて来た。同時にその中で、あの特異な斬魄刀への対処法も見出している。

刀身の巨大さ故に生じる隙や死角を突いたり、柄尻に繋がる鎖を逆に利用して反撃に転じる程度はお手の物。

恐らくノイトラはそれを全て読んでいたのだろう。

——彼はどれだけ此方の想像を上回れば気が済むのか。

ネリエルは想定外の事に内心で慌てながらも、何とか対処すべく待ち構える。

「オ、ラアッ!!!」

気迫の籠った咆哮と共に巨大な得物が、それこそ限界まで引き絞られた弓に番えられ

た矢の如く放たれた。

予備動作から軌道までを辛うじて読めたネリエルは、回避の為に動こうとしたが、ふと脳裏を過つた疑問からそれを止める。

そう言えば、何故ノイトラは態々自身の得物を手放す様な戦法を選んだのかと。

一時的ではあるものの、それは明らかに愚策。この攻撃が成功するしないに拘らず、結果的に離れに転がる事になるであろう斬魄刀を回収しに行かなくてはならないし、その為に用いる時間は余りに大きな隙となる。

だが例えばだ、そんな事なぞ端から覚悟の上で、または理解しながらも敢えて行つたのだとすれば——考えられるのは只一つ。

ノイトラはこれを皮切りに、ドルドーニの脚技を始めとする徒手空拳による攻撃へと戦法を切り替えた形で攻めてくるという事に他ならない。

「なら——!!」

ネリエルは身体を横にした上で数歩だけ移動するという最低限の動きで、此方へ凄まじい勢いで迫り来る巨大な得物を擦れ擦れの状態で躲す。

そして視界をノイトラから外さぬまま探る。回避行動を取った際に生じた自身の隙

を。

そうして幾つかを把握した刹那、ノイトラの姿が視界より消える。

ネリエルはその複数の隙の中から、最も判り易く且つ大きなものを選定。その力バーへと移った。

初動が読めない響転については端から捨て、今迄培った戦士の勘のみを信じ、ノイトラの攻撃を逸らす為に動く。

単に斬魄刀の平地で受け流したり、横から斬り付けるだけでは恐らく通用しない。何せ単純な振り下ろしだけであの威力だ。幾ら攻撃を逸らすだけが目的だとしても、生半可な方法では確実に押し切られてしまう。

故にネリエルは選択した。それは自身が出せる限りの全力の斬撃を左右どちらかより当て、ノイトラの攻撃を逸らすというもの。

恐らく移動先は自身の背後。其処から繰り出されるのは、一護との戦いの内容から察するに、彼が最も得意としているのだらうドルドーニの脚技。

そして使用される脚は十中八九、ノイトラの利き足である右。

「ハアッ!!!」

先を予測したネリエルは、右足を自身の後方へ回す様にして踏み込む。全身を振じる様に回転させて斬撃へと勢いを乗せると、柄を両手で握った状態の斬魄刀を斜め右上へと全力で振り上げる。

「!!」

ネリエルの予測はほぼ完璧に当たっていた。

見ればノイトラは現に彼女の背後へと回り込んでおり、その右脚を大きく振り上げていた。

——それでこそ俺が憧れた女だ。<sup>ひと</sup>

自身の奇襲が読まれていた事に瞠目しながら、ノイトラは内心で納得していた。

そして再び信じる。彼女であれば、この攻撃も凌いで見せる筈だろうと。

鞭の如く撓りながら、大太刀を幻視する程の鋭さを持つ右脚を、斜め上から本気で振り下ろす。

「う、ぐッ…!!」

攻撃が繰り出される位置とタイミングを読んだまでは良かった。

問題はその斬撃と右脚の角度である。これでは逸らす事が出来無い。

已むを得ないと、ネリエルは咄嗟に己の斬魄刀へと更に霊圧を籠めた。

やがて刀身と脚が激突する。

ノイトラの膂力は言わずもがなだが、ネリエルも負けてはいない。

足りない力は今迄培った技術を総動員した動きで補い、見事その右脚を受け止めめる事に成功した。

ノイトラは確かに本気で脚を振るつたが、相手を殺さぬ様に無意識の内に威力を抑えていた事も、その要因であった。

柄を通じて両手へ、そして最終的に全身へと伝わる尋常ならざる重みに、ネリエルは思わずその口から呻き声を漏らす。

だが彼女が最も驚愕したのはそれでは無く、常軌を逸した脚の硬度だった。

——幾ら何でも硬過ぎる。

手応えからして、明らかに普通の鋼皮では無い。寧ろ未知の金属であると言われた方がしつくり来る。

だが一護は僅かではあるものの、この鋼皮を傷付ける事に成功した。

一体如何やったというのか。ネリエルは果てし無く疑問に思った。

「ッ、あああああああ!!!」

鋼皮の硬度に加え、その蹴撃の威力だ。それと対抗している刀身は見る見る内に押し込まれて行く。

ネリエルは己を鼓舞するかの様に大声を上げると、先の事など考慮に入れず、この場で全てを出し切る勢いでそれを押し返しに掛かった。

「マジかよ……」

次第に持ち上がって行く自身の右脚を目の当りにしたノイトラは、驚愕の余りそう零していた。

だがそれだけだ。その心情は戦闘開始直後よりも更に熱くなっていた。

嘗てより懂れて已まなかった存在と互角以上に戦えているという現実。そして極めて脆弱な破面の少女として何年も過ごしていたブランクを一切感じさせぬ、ネリエルの奮闘。

以上の二つが着火剤となり、ノイトラの闘争心という名の炎を激しく燃え上がらせた

のだ。

実際は事実と異なる部分が見られる彼の認識なのだが——まあネリエルへ同情する以外は特に気にしなくても良いだろう。

それと同時に、普段は自身の奥底へと眠っていた筈の戦闘狂としての精神が、密かにノイトラの強靱な理性の壁を乗り越え始める。

未だ主導権は移っていないものの、それは次第に表層へと表れ始めていた。

他に全神経を集中させているネリエルは気付かなかった。

本人は無意識の内だが、ノイトラの口元はこれ以上に無い程に吊上がり、凶悪極まらない笑みが浮かんでいた。

ネリエルは渾身の力を振り絞ると、斬魄刀を一気に横へと薙ぎ払い、その右脚を上へと弾く様にして押し返す事に成功する。

ノイトラの体勢が崩れ、今迄欠片も見られなかった隙が生じる。

——チャンスは今しか無い。

これを逃すと反撃の機会は永久に訪れない。そう判断したネリエルは、右脚を押し返した勢いをそのままに、ノイトラの懐へと踏み込んだ。

「ハアアアアアッ!!!」

生半可な攻撃では、あの鋼皮は破れない。故にネリエルは先程のそれを上回る勢いで霊圧を使用し、極限まで研ぎ澄ました上で、斬魄刀を右斜め上段に振り被った。

この一太刀で勝負を決めてやると。

狙いはがら空きの胸部周辺。踏み込みの深さから考慮するに、この一撃はノイトラへ致命傷を与えてしまう可能性が高い。

だが彼は以前より相当な耐久度を持っている。寧ろこれぐらいのダメージを与えねば、戦いを止めないだろう。

そう信じつつ、ネリエルは刀身を振り下ろした。

ノイトラは自身へ迫り来る銀色に煌く刃を眺めながら考える。

主人公補正ならぬ火事場の馬鹿力というやつか。一目見ただけで、その持つ威力の凄まじさは察せた。

とは言え、一護の時と同様に全力で防御を固めさえすれば、そのまま受け止める事は可能だ。

——だがそれで本当に良いのか。

答えは否。そんなものは技でも何でも無い。只のゴリ押しだ。正に試合に勝って勝負に負けるを体現してしまう。

そんな形で得た勝利に何の価値があるというのか。何より本気でこの勝負に臨んでいるネリエルに対しても失礼だ。

ならばと、ノイトラは自身の身体的スペックの事を頭の中から捨て去り、全く別の手段で以てネリエルの反撃へ対応すべく動いた。

押し返された右脚へ引つ張られる形で崩れた体勢。ノイトラはそれを立て直す事ではないどころか、あろう事か唯一身体を支えていた筈の左脚から力を抜き、ガクンとその膝を折ったのだ。

当然、支柱を失った身体は背中から地面へ向かって一気に倒れ始める。だがその代わりに斬撃の範囲から逃れる事に成功。その刃先は空を斬った。

「う…そ…!？」

自身の攻撃が外れた事に一息遅れで気付いたネリエルの口から驚愕の声が漏れ出す。ノイトラは背中よりも先に右手を伸ばして地面へと着け、全身を支える。

間を置かずこれに軸として真横へ回転。その勢いのまま、足払いの要領でネリエルの足元目掛けて蹴撃を放った。

「ッ!!?」

次の瞬間、ネリエルの身体が横倒しになりながら宙へと浮いた。

反応と理解が追いついていないのか、彼女は瞠目するばかりで体勢を立て直す為の身動きが取れない。

それを確認したノイトラは回転を止め、両足を地面に着地させる。

極めて低いその姿勢から、まるで陸上の短距離選手のクラウチングスタートを思わせる動きで、隙だらけなネリエルへと迫る。

その際に左手を引き絞っており、彼女との間合いを詰めた瞬間、その左掌を腹部へと叩き付けた。

握り拳では無い理由は勿論、殺傷能力を少しでも落とす為である。

「い、フツ…!!」

しかし真面な防御も取れなかった影響か、ネリエルは直撃部分周辺の内臓に重大なダメージを負う事となった。

辛うじて骨折は免れた様だが、どちらにせよ重傷な事に変わりは無い。

ネリエルは勢い良く吹き飛ばされると、後方に存在していた宮の残骸へと激突。瞬く間に瓦礫の山の生き埋めとなってしまった。

この反膜の檻の中に囚われてどれ程の時間が経過しただろうか。

卯ノ花は軽く溜息を吐きながら、如何したものかと思考を巡らせていた。

あれから何度も脱出を試みたものの、全てが無駄に終わった。

斬魄刀で斬り付けても、此方に影響のない程度の威力で鬼道をぶつけてみても、檻には全く変化が無い。

卯ノ花自身としては駄目元で試していた為、動揺はしていない。だが次第にその内心では焦燥が生まれ始めていた。

——何時までもこうしている訳にはいかないというのに。

外では今も戦いは続いている。その結果、中には重傷を負った者も何人か居る筈だ。

一刻も早く自身の目的である治療を施し、織姫の救出を手助けする。そして藍染との最終決戦が始まる前に、尸魂界への帰還を急がねばならない。

だが反膜については未だ説明されていない部分が多い。

此処にマユリが居ない事が悔やまれる。

もはや八方塞かと思われた時、卯ノ花の背後で変化が起こった。

「……あア……?」

「ツ、剣ちゃん!!」

意識を失い、仰向けに倒れていた剣八が突如として目を覚ましたのだ。それを見たやちるは、その懐へと飛び込んで喜びを露にする。

「大丈夫ですか、更木隊長」

未だ完全に覚醒していないのか、右手を額に当てながら頭を左右に振る劍八へ、卯ノ花が問い掛けた。

無論、彼女とて何もしていないなかった訳では無い。

劍八の意識を回復させんと、回道を含めて色々試したものの、効果は見られず。致し方無く、脱出の方を優先したのだ。

「…問題無え」

「それは重畳です。では早速ですが、此処から抜け出す為にご協力願えますか？」

卯ノ花の頼みを聞いた劍八は、ふと自分達を取り囲む反膜の檻を見渡した。

自身の渾身の斬撃を弾き返した、忌まわしい白色の光を放つ反膜。

思わず舌打ちを漏らすと、やちるを抱えたまま静かに立ち上がった。

「退いてろ、やちる」

「…？ う、うん…」

劍八は苛立った様子で、やちるを下に降ろす。  
やちるは少々戸惑いながらも、素直にその指示に従い、卯ノ花の傍へと退避する。

「…何をやる心算です？」

「ちよつくら試してえ事があんだよ」

劍八はそう返すと、徐に右手を自身の顔の位置まで持ち上げる。

親指から中指を使い、左目に掛かっている眼帯を掴むと——そのまま一気に取り外した。

直後、劍八の全身から膨大な霊圧が溢れ出す。

この眼帯は彼自身の希望——自らにハンデを課し、戦闘を楽しみたいという理由から、技術開発局に開発させた物だ。

効果は着用者の霊力を無尽蔵に削減する事で、削減量は並みの霊力の持ち主であれば命が危うくなる程。

だが劍八は普段からそれを着用して平然としており、強敵との戦闘すら余裕で熟す。

それでも尚、敵が脆すぎて戦いを楽しむ暇が無いとして、常に加減して斬る癖を付けているというのだから、如何に彼が規格外なのかを物語っていた。

つまりその眼帯を外した剣八は、文字通り何の縛りも無い全力の状態となる。

その常軌を逸した霊圧は、もはや一種の無差別攻撃に等しい。

無論、過去にそれを真正面から受けている上に交戦経験もある卯ノ花は余裕で耐えられる。そしてやちるは剣八が死神になるより前からの付き合い故、慣れている。

問題は反膜の檻の外に居る勇音と花太郎だ。

だが内と外の世界が隔絶されている影響か、如何やら剣八の放つ霊圧も遮断していらしい。二人は変わらず閉じ込められた卯ノ花達を心配そうな面持ちで眺めており、特に変化は無い。

「…フツ!!!」

剣八は斬魄刀を抜き放つと、間を置かずに反膜の檻の一部へと斬り掛かった。

だが案の定、その全力の斬撃すら弾き返され、気絶する前の二の舞となってしまうた。

「…チツ、やっぱりか」

——これは今の自分では斬れない。

本音を言えば認めたくは無いが、剣八はそう思わずにはいらなかった。彼自身、これ程までに歯が立たないのは初めての経験だった。

今迄に戦つて来た敵の中にも、何らかの手段で自身の斬撃を防いだりした例は幾つかある。だが最終的に目玉や喉が斬れなかつた者は誰一人として居なかつた。

しかしこの反膜はそれ等の例のどれにも当て嵌まらない。

剣八は感覚で理解した。これは刀で斬る物では無いのだと。

とは言え、何時もであれば斬れるまで何度でも試すところだが、生憎と自身の周囲にはやちると卯ノ花が居る。下手すると斬撃の余波に巻き込んでしまう可能性が高い。ならば残された手段は一つだけ。

「つ、一体何を——!!」

「簡単なこつた!!」

卯ノ花が声を荒げた。

斬魄刀を鞘に納めた剣八が、何と素手で反膜の檻に掴み掛つたのだ。

先程と同じく弾き返さんとする力が掌へと伝わるが、構わず全力でそれを押し返す。次第に反膜に触れている両手から大量の血飛沫が舞い始めた。

如何やら決して軽くは無傷を負つたらしい。このままでは両手が使い物にならなくなる可能性が極めて高い。

「どうあつても斬れねえなら…力づくで退かせば良いだけだつてなア!!」

それでも剣八は反膜の檻を掴んだまま、全力で左右に開き始める。

肉が裂ける不快な音が響き、大量の鮮血が周囲へ飛び散る。

だが剣八はその程度構うものかと言わんばかりに、止めようとしな  
い。寧ろその顔には不敵な笑みが浮かんでいた。

剣八は考えていた。そういえばこの反膜の檻を出した下手人も、ノイトラと同様に相  
当な実力者ではないかと。

しかもだ。彼は肉体面のみならず、精神面でも相当な耐久力を誇っている。並の精神  
干渉の能力を食らつても平然としていられる程度には。

にも拘らず、その意識はいとも容易く刈り取られた。

——此処から出たら覚えておけ。

どちらが先になるかは不明だが、必ず相手をしてもらう。

ノイトラの他にももう一つ楽しみが出来たと、剣八は内心でほくそ笑んだ。

その戦意に比例しているのか如何かは定かでは無いが、全身から溢れ出す霊圧量が凄まじい勢いで上昇し始める。

同時に反膜の檻にも変化が現れ始めた。

剣八が掴んでいる部分が、次第に曲がり始めていたのだ。

「……有り…得ない…」

「ウオオオオオオオオオオオオツ!!!」

反膜を力のみで変形させるという前代未聞な行動に、卯ノ花は絶句した。

だが内心は別。歓喜というより狂喜と言い表す方が正しい。

「ですが——やはり貴方は素晴らしい…」

自身の奥底へと封印した初代剣八としての本性が、その僅かに俯かせた顔へと現れる。

それは見る者の背筋が凍える程の寒気を感じる薄笑いだった。

——流石は自身を唯一悦ばせた男。

相変わらず無意識の内に抑え込んでいるものの、やはり過去に見せた別次元の強さは健在なのだろう。

それを悟るや否や、卯ノ花の中で期待が膨らむ。

もしかすれば、あの至高の一時をまた味わえるかもしれないと。

一切の乱れ無く綺麗に整えられていた霊圧が、次第に肌を刺す様な殺伐としたものへと変化し始める。

そんな卯ノ花の身に纏う雰囲気の変化に気付いたのか、やちるが下から彼女の顔を覗き込んだ。

「…なんか言った?」

「いいえ、何も…」

やちるが問い掛ける直前には、卯ノ花は既にその霊圧と表情を何時も通りの姿へと戻していた。

可愛らしい仕草でその首を傾げながらも、結局やちるはそれ以上追及をする事は無かった。

「先に出ろ」

それから数秒後、剣八の手によって反膜の檻は完全に挟じ開けられていた。

未だ反膜の力は残っており、少しでも気を抜けば再び元通りになるだろう。その事を理解していた剣八は、先に卯ノ花とやちるへ先に出る様に指示を出した。

二人の背中を見送った後、自身も檻の中から脱出せんと足を踏み出した刹那——死神のものでは無い、禍々しく強大な霊圧が周囲へ押し掛かった。

「あ……」

「……な……に……これ……!?!」

花太郎は即座に意識を失い、糸の切れた人形の如く崩れ落ちる。

勇音は何とか踏み止まったものの、腰を抜かしたらしく、その場にへたり込んだ。

「わー、でつかい!!」

「この霊圧は……まさか——」

勇音と同じ副隊長にも拘らず、やちるは全く堪えた様子も見せず、逆に嬉々とした表情を浮かべる。この霊圧は剣八が喜びそうな相手だと。

そして卯ノ花はと言うと、つい最近回覧させてもらったばかりの敵の霊圧データの一部、破面が帰刃した場合に見せる霊圧の波長と酷似している事に気付いていた。

「…てめえかノイトラアツ!!!」

口元を盛大に吊り上げながら、剣八は叫んだ。

そう判断した根拠は無い。卯ノ花の様に情報を確認した訳でも無い。

全ては勘。だが侮るなかれ。剣八のそれは限定条件下に於いては、極めて高い正確性を持つ様になるのだ。

言うまでも無いとは思いますが、それは戦闘に関わる場合である。

自身が狙い定めていた好敵手の出現に、剣八は両手の負傷の治療すら忘れ、我先にその場から駆け出していた。

ノイトラは響転を用いて、離れに転がっている自身の斬魄刀を回収。

そして更にネリエルへの追撃に入らんと、重心を落とした直後——周囲へと響いた二人の声が耳に入った。

「ネル!!?」

「ネルちゃん!!」

声を上げたのは一護と織姫。

やや顔色を青褪めながら、瓦礫の中に埋もれたネリエルの方向へと視線を向けていた。

其処で初めて、ノイトラは自身の状態に気付いた。加えて何時の間にもやら凶悪な笑みを浮かべていた事にも。

——危なかった。

精神が高揚する余り、理性の壁が脆くなっていたらしい。

このまま戦闘狂の精神が前面に出ていけば如何なっていた事やら。内心で安堵しつつ、自身を正気に戻してくれた二人に対して感謝の念を抱いた。

「すう…はあ…」

深呼吸で自身の精神を落ち着かせながら、ノイトラは一先ず様子見の態勢へ入る。すると間も無くして、瓦礫の山を押し退けながら、ネリエルがその姿を現した。

「…ゴホツ…ゲホツ…!!」

激しく咳き込む彼女の口からは大量の血が零れ、全身の露出した肌の表面には玉の様な汗が余す事無く浮き出ている。

誰が見ても普通の状態では無いのが丸判りだ。

対してノイトラは無傷な上、呼吸も一切乱れていない。

もはや勝負は付いたと思えぬ状況だった。

無論、完全に劣勢となったネリエル自身も、その事は十分に理解していた。

ノイトラとの明確な実力差も勿論——その振るわれた剣に脚、そして拳に宿った確かな意志と重みを。

ネリエルはふと思い返していた。過去にとある破面から擦れ違い様に囁かれた忠告の言葉を。

——そうやって自分の地位を鼻に掛ける様な態度は止めた方が良い。

策略を仕掛けられたのは、それから間も無くしてだった。

今更ながらに理解した。自身は気付かぬ内にノイトラを見下していたのだと。

恐らくあの言葉を投げ掛けて来た当人はそれを言いたかったのだ。

何時も相手側が気の抜ける様な口調で話す掴み所が無い人物で、且つ誰に対しても一貫して無関心だった筈の「彼女」が、殆ど接点の無い自身に対して忠告した理由。

恐らく同僚であり同室に住む存在である、当時ザエルアポロの干渉を避ける様に手回ししていた口力の為だろう。

彼女曰く、自身に対しては非常に親身に接してくれるとの事だったので、それしか考えられない。

——何故あの時気付けなかったのか。

しかし後悔するのは今では無いと、ネリエルは頭を切り換える。

それにだ。もしかするとあの策略を仕掛ける事が無ければ、今のノイトラは居なかつ

たかもしれない。

そう考えると良かったのか悪かったのか、明確な答えは出せなかった。

「あの頃とは…立場が逆転しちゃったわね…っ」

ネリエルは何処か自嘲する様にして呟いた。

此方の勝機は限り無く薄い。現状で取れる手段も余力も無い。

——最後にもう一足掻きさせてもらおう。

ノイトラの思いは十分に伝わった。ならば今度は此方がそれに応える番だ。

そして彼との因縁も、これで全てを清算する。

「この姿に戻って直ぐはキツそうだけど…しょうがないわね…」

実を言えば、ネリエルには他にも思惑があった。

まずノイトラの全力を見たいのも一つ。未解放でこれだけの強さである。帰刃形態であればどれ程の域に達するのか興味は絶えない。

そして何より——そんな彼に対して自身の力が何処まで通じるかを試してみた

かった。

所謂それは一介の戦士ならば誰もが行き着く思考。

圧倒的に格上たる実力者を前にして、何もしないなどという選択肢を取れる筈が無い。自身が磨き上げた全てを以て、挑ませてもらおうべきだろう。

長らく忘れていた初心。それを取り戻したネリエルに迷いは無かった。

「うた謳え——」

斬魄刀を前方へと突き出すと、刀身を倒して地面と平行に構える。

左手を棟へ添えると、自身の全力である帰刃形態を解き放つべく、その解号を唱える。

「ガミューサ羚騎士<sub>ガミューサ</sub>!!!」

解放と同時に、周囲へ拡散した霊圧の余波が砂塵を巻き起こし、ネリエルの姿を覆い隠す。

それを確認したノイトラは即座に片膝を折ると、右手の人差し指を地面へと突き刺した。

指先から靈圧を電流の様に流し込み、ネリエルの居る場所へと繋げる。

「インディセ・ラダール  
捜指法」。

相手の靈力を測る為のノイトラの固有技だ。範囲を極端に狭める代わりに、その精度を極限まで高めた「探査神経」の様なものだと思えば良い。

——まあ、妥当と言える線か。

ネリエルの力量を測ったノイトラは納得しつつ、少々残念に思った。

恐らく彼女の本来の実力はこんなものでは無い。元の姿に戻ってから二日程度間を置けば、現状とは比較にならないレベルまで回復していただろうにと。

実際は買い被り以外の何ものでも無いのだが、本人は全く気付いていなかった。

相手が憧れて己まない存在であったが故に、それが一種の補正となって発動していた事が大きな要因だろう。

やがて砂塵が晴れ、ネリエルの帰刃形態が露になる。

肩口と肘、手首付近には鎧が。右手に握られているのは巨大なランス状の武器が。

そして特筆すべくは下半身。まるで鈴羊の様な、半人半獣のケンタウロスを連想させる容姿へと変化していた。

無論、先程ノイトラに負わされた傷は全て回復していた。

「…じゃあ、(ハハ)からが本番よ」

「…そうだな」

その言葉を聞いたノイトラは即座に動いた。

右手に握る斬魄刀を、天へ掲げる様にして持ち上げる。

過去とは決別した今の自分を見てくれと、内心で願いながら。

「〃祈れ——〃」

無論、流石に藍染の監視下の真っ只中で、段階を飛ばして〃あの力〃を見せる気はない。

あれはいざと言う時の切り札であり最終手段。

もし使用するとしても、藍染が尸魂界陣営との決戦の舞台へと赴き、この虚夜宮を留守にした後だ。

正直それでも不安は拭えないが、現状よりはマシだろう。

本来であれば通常の帰刃だけでも避けたいところでもある。事実、このまま戦闘を続行したとしても、ノイトラが勝利出来る要素は十分にあった。

だが彼はそれでも帰刃を選択した。それ程までに、ネリエルへの思いが強かったの

だ。

——此処で解放せずして何時するのか。

多少のリスクなぞ端から承知している。だがその程度が如何したと。

当然だろう。ノイトラは生半可な覚悟でこの場に立って居る訳では無いのだから。

そして何より、ネリエルと会うチャンスはこの一度きり。

しかも彼女は何時少女の姿へと逆戻りするかも分からない状態にある。行動するな  
ら出来る限り早い方が良いのは明白だった。

それにノイトラ本人は意識していないが、この場で解放を選択したのは決して悪い事  
では無かったりする。

任務中に幾度となく窮地へ陥ろうとも、頑なに帰刃を拒み続けた理由。それに説明が  
付くのだから。

全ては——ネリエルと再会した時の為であり、力を見せるのは自身の認めた相手に  
対してだけなのだ。

当人は知らず知らずの内に、この場を監視している者達へそう訴えていた。

「<sup>サンタテレサ</sup>聖哭蠟螂<sup>!!!</sup>」

周囲へ無用な警戒心を抱かせぬ程度で本気を出す事を意識しながら、ノイトラは解号を唱えた。

次の瞬間、8の字の刀身の中心部へ霊圧が集束する。

未だ嘗て見た事が無い程の規模まで膨れ上がったそれに、誰もが息を呑んだ。

するとその直後——戦場を圧倒的な霊圧が支配した。

ネリエル、そして一護と織姫の三人は、その余りの規格外さに恐怖を抱いた。

本当にこれが中堅の十刃が持つ力なのかと。

「あ……う……」

「ツ、井上!!?」

案の定、織姫は耐え切れなかったらしく、全身を弛緩させながらその場にへたり込む。だがそれでも彼女は一護の治療の手を緩めない。その精神力の強さは賞賛に値する。

「それが……今の貴方なのね……」

ネリエルは静かにそう呟いた。

やがて巻き上がった砂塵の中から、ゆったりとした足取りで、それは現れる。

立ちほだかる者の尽くを問答無用で捻じ伏せ、一切の希望すら打ち砕く——正に  
絶望”と呼ぶに相応しい存在が、其処には居た。”

## 第五十七話 鈴騎と三日月と、虚無と孤狼と…

死神という言葉聞いた時、真つ先にどんな姿をイメージするか。

頭から黒い外套を被り、命を刈り取る為の大きな鎌を持った骸骨というのが一般的だろう。

だが実際はそれと大きく異なる。

まさか死覇装という着物を身に纏い、斬魄刀と言う刀を以て悪霊を斬り、現世を漂う魂を成仏させる——言うなれば霊界の警察官の様な存在であるなどと、誰が想像出来るだろうか。

一護も最初は戸惑ったものの、死神代行として忙しく動き回り、やがて様々な戦いを経験して行く内に、その死神の在り方に疑問を抱く事は無くなっていた。

だがそれがたつた今、脆くも崩れ去ろうとしていた。眼前に広がる戦場に於いて、ネリエルに続いて真の力を解放したノイトラの姿を目の当りにして。

頭部には左が長く右が短い左右非対称の角は、まるで三日月を連想させる。

解放の余波で眼帯が吹き飛んだのか、右目を覆い隠す開き掛けの顎の様な仮面の名残に、額と右頬まで伸びる黄色の仮面紋。

首から下の上半身は硬質な装甲で覆われており、歴代十刃最強硬度の鋼皮に加えて二重の鎧を身に纏っている状態と言える。

そして最も注目すべきは——六本まで増加した腕と、その手に其々握られている大鎌だ。

「そんなの…ありかよ…?!」

その余りの衝撃的な光景に、一護は途切れ途切れの声でそう零した。

見た目の禍々しさに加え、全身から溢れ出す余りに規格外な霊圧量。流石に藍染には及ばぬものの、彼を除けば今迄遭遇した敵の中では最も大きい。

一護は背筋が凍えた。

あれこそ尸魂界のそれとは別種の死神——正に“死を齎す神”と呼ぶに相応しい存在ではないかと。

通常であれば、あんな巨大な得物を振り回せる訳が無いと思うだろう。単純な臂力もそうだが、何よりそれを支える為の頑丈な土台が必須となる。

だが一護は知っていた。尋常ならざる速度で動き回り、一振り一振りが必殺の威力を持つ脚技を容易に繰り出すノイトラの強靱な下半身を。

ならば六本の大鎌を扱い切れないという事は万が一にも無い筈だ。

一護は想像した。驚異的な機動力と臂力、そして六本の大鎌を縦横無尽に振り回されれば

如何なるのかと。

頬に一筋の冷や汗が流れる。単純ながらも、十分過ぎる程に脅威だ。下手な小細工では万が一にも攻略出来やしないだろう。

そんなノイトラを相手にして、本当に大丈夫なのだろうか。一護は視線をネリエルへと向けた。

織姫も同様に、必死に己の意識を保ちながら、戦場の行く末を見守る。

「どうすんだよ、ネル…!!」

「ネル…ちゃん…っ…」

先程の会話の内容からして、二人の間には過去に何かしら重い出来事があり、ノイトラはそれに罪の意識を感じているらしい。そしてネリエルは謝罪を受け入れ、確かめると称して互いの剣での対話を要求した。

ならばこの戦いは手合せに近いものであり、恐らく一方が殺されるまでは行かないと

想定出来る。

だが安心するには早い。例え手合せに近いとは言っても、物事には常に不測の事態が付き纏う。

事実、ノイトラの放った一発の掌撃が直撃しただけで、ネリエルは相当なダメージを負っていた。

つまるところ、片方に殺意が無くとも、その力量差故に受けた側が死に至る可能性が考えられるのだ。

ネリエルとしてそれは百も承知だった。

全身から冷や汗が滝の様に流れだし、ランスを握る右手の震えが止まらない。

嘗てのノイトラの帰刃形態は何度か見た事はある。だがその時は確か腕は四本で、上半身を覆う装甲も腕と両脇腹周辺のみだった筈。

だが今は如何だ。明らかに変化——と言うより進化しているではないか。

並大抵の鍛錬では此処まで行かないだろう。文字通り血反吐を吐きながら極限まで己を追い詰め、幾度と無く死線を潜り抜けて来たとしか考えられない。

「…強くなったわね、ノイトラ」

ネリエルは口元に小さな笑みを浮かべながら呟いた。依然として恐怖は消えていない。自身の勝機が見えた訳でも無い。

それでも、あのノイトラが此処まで成長した事が。その御蔭で少なくとも、嘗ての自身の行動が無駄では無かったと証明してくれた事が。ネリエルには嬉しく思えた。

その感情はまるで長年世話を焼いていた弟が、自身の手を離れて自立する瞬間に似ていた。

確かにノイトラの罪は決して軽いものではない。だが彼はそれを理解しつつも、贖罪の為に努力を重ね、この境地へと至った。

——もはや謝罪を受け入れるだけでなく、赦しを与えても良い要素は十二分にある。

出来る事なら今直ぐにでもその意思を伝え、称賛の言葉を贈りたい。

元々破面の中では相当温厚な性格であったのもあるだろうが、ネリエルは心からそう思っていた。

しかもだ。ノイトラは確かに言った。助けたい者達が居ると。

深く考えるまでも無い。それは仲間達の事を指しているのだろう。

ネリエルは一切の疑念も無く内心で明言した。

ノイトラの障害と成り得る存在を打ち払わんと迷い無く動いたチルツチ。脚技を伝

授したドルドーニ。そして彼と同様にあの掌撃の原形となる技を伝えたのであろう、残る十刃落ちの一人であるガンテンバイン。

今思えば、満身創痕ながら尚も戦闘を続行せんとしたグリムジョーの意識を強制的に刈り取り、治療室へ運ぶ様にチルツチへと指示したのだからそうだ。

それ等の行動の全てが、ノイトラの心情の変化を表している。

一つだけ疑問があるとすれば、何時もノイトラの傍に付き添っていたテスラの姿が何処にも見えない事だが——それは今考えるべき内容では無いだろう。

あの変わり様だ。万が一にも切り捨てたという事は有り得ない。

出来る事ならこの変わり様をペッシェとドンドチャッカにも見せてやりたかったと、ネリエルは少女の姿だった頃に己の従属官二名とはぐれた事を悔やんだ。

「そしてもう…貴方は一人じゃないのね」

ネリエルは感慨深そうに呟いた。

頑なに他者を拒絶し、一人孤独に戦場で散り逝く事を望んでいたノイトラが、まさかこうなるとは誰が予想出来るだろうか。

そしてその事実は同時に、ネリエルに対して一つの答えを齎した。

——もはや今のノイトラにとって、自分という存在は必要無い。

それを理解した途端、何故か彼女の中に寂しさの様な何かが湧いて来たが、即座に振り払う。

ノイトラにとっては良い事なのだから、自身がそんな感情を抱くのは筋違いだろうと。

ネリエルは身体の震えを喝を入れて一時的に止めると、その重心を落とし、戦闘態勢に入る事で己の意識を切り換えた。

「…よしっ」

接近戦を挑めば即座に終わる。間合いに入ったが最後、瞬く間にあの六本の大鎌によつて命を刈り取られてしまふだろう。

かと言つて距離を取つたとしても意味が無い。ノイトラにはあの驚異的な響転がある。数十メートル程度の距離などあつて無い様なもの。

ネリエルは決心した。次の一撃で終わりにすると。

もはや此方に勝機は無い。ならば残された選択肢は一つだけ。

単純に自身の持てる全力で、最強の技を真正面からぶつけるしか無い。

「いくわよノイトラ!!」

ネリエルは徐に右手に握ったランスを持ち上げると、投擲の構えを取った。

その穂先から更に反対側の穂先まで霊圧を纏わせる事で、技の持つ殺傷能力を限界まで上げる。

「…来るか」

ノイトラはその動きを見ただけで、ネリエルが何をしようとしているのかを悟った。

——上等、受けて立ってやる。

しかしネリエルには申し訳無いが、此方も最強の技を放つ訳にはいかない。

戦士の礼儀としては使用する事が好ましいのだが、色々と問題が多い。

“捜指法”にて読み取ったネリエルの状態からして、まず確実に打ち勝てるだろうが、その反面オーバーキルになってしまう。

そして今後予想される展開を考慮すれば、藍染を含めた信用の置けない他の連中に手の内を晒すのは避けたい。

故にノイトラが選択したのは——至極単純。

鍛え上げた肉體、底上げた靈力、磨き上げた技術。それ等全てを用いて、只全力で得物を振るう事だった。

捻りも何も無い単純な振り下ろしであろうとも、極めれば十分必殺技と成り得る。つまりはそういう事だ。

これならネリエルに対して最低限の礼儀は返せるだろうと、ノイトラは自身を納得させた。

六本の腕を其々に交差させ、自身の身體を包み込む様にして、三対の大鎌を均等に真横へと振り被った。

全ての刀身へ限界値まで靈圧を通し、入念に固める。

「受けてみなさい…」

ネリエルはその動きを確認しつつ、思う。

その形からして、六つの刃が振るわれるであろう方向、攻撃範囲といった大部分については、特に考えるまでも無く簡単に推測出来る。

だが恐らくは——躲せない。

所謂知つていても対処不可能な部類というやつだ。

刀身を纏う霊圧の状態からして、あれは恐らく斬撃を飛ばす類いの技。

心なしか密度が高い様にも見えるが、どちらにせよ尋常ならざる威力を持つている事に変わりは無いだろう。

このまま単純に技を放つたとしても、容易く碎かれて終わり。

それを理解したネリエルは危険を覚悟で、持ち上げたランスへと更に霊圧を籠め始めた。

本来であれば制御限界を超えた霊圧を使用するのは愚かな行為だ。瞬く間に暴発して自分自身を傷付け、最悪は死に至る。

「私の、全力をッ——!!」

だがネリエルは賭けに勝った。投擲の直前だったが故に、追加した霊圧量が思ったより少なかったのが逆に良かったのかもしれない。

彼女は本来、戦場に於いて運が絡む様な不確かな選択肢は取らない。

日頃の鍛錬の中で磨き上げた確かな実力を以て、勝利を挽ぎ取る。何せ努力は自分自身を裏切らないのだから。

正に嘗てのノイトラとは正反対。

強くなるには鍛錬など不要であり、戦場で敵を殺す以外に無い。

如何なる手段を用いたとしても、勝ち負けは勝ち。

そんな在り様だったからこそ、余計にネリエルの目に余ったのだろうか。

「ランサドル・ヴェルデ  
翠の射槍“!!!”」

ネリエルは四本の脚の内、前の二本を前方へと踏み込み、全身の力を余す事無くランスに乗せて投擲した。

ピンク色に発光する霊圧を纏ったそれは、まるでドリルの如く高速回転しながら、ノイトラへと迫る。

速度だけを見れば虚弾にも及ばない。普通に対処すれば躲す事はそう難しくは無い。だが生憎と、そのランスは普通では無かった。

問答無用で相手の意識を釘付けにし、反応を遅らせる。そんな言葉では説明不可能な何かがあった。

予想を遥かに超えた威力故に驚愕した為か。それとも霊圧と共に籠められたネリエルの強い意志がそうさせているのか。どちらが正しいか如何かは不明である。

——成程、だからか。

ノイトラは納得した。

彼は以前より密かに疑問に思っていたのだ。

この世界に於いて良く見られる光景だが、明らかに躲せる速度である筈の攻撃を、何か態々受け止めんとする者が多い事を。

恐らくは眼前の「翠の射槍」の様に、強力であればある程、その何かは効力を増すの  
だろう。

ちなみに剣八は例外だ。それは元々彼はそういった戦い方を好み、それに見合う常軌を逸したタフネスを備えている部分にある。

明らかに重傷を負うであろう攻撃であろうとも、一切回避せずに真正面から敵に突っ込む。戦いというのは、互いに斬ったり斬られたりするの当たり前。死も苦痛も、戦いを楽しむ為の代償の一つなのだからと。

とは言え、死んでしまつては元も子も無い。故に即死を避けるといった最低限の動きは取る様だが。

「…行くぜ」

謎の力を撥ね退けたノイトラは、自身へ迫り来るランスを打ち砕く為に動いた。ネリエルと同様、六つの刀身を纏う霊圧がノイトラ固有の黄色へと発光。同時にその持つ殺傷能力が最大まで上昇する。

「セイス・デ・ラ・クチェージャ  
六刃斬層」

既の所までランスの穂先が迫った刹那、ノイトラはその六本の大鎌を、全くの同時に横一閃へと振るった。

尋常ならざる力が籠められた斬撃にも拘らず、それは信じられぬ程に静かであった。其々の刀身が通り過ぎた場所には、まるでグリムジョーの「豹王の爪」を彷彿とさせる黄色の刃の様な線が残っていた。

ネリエルの放ったランスと、ノイトラの振るった六本の大鎌が、真正面から激突する。勝敗は一瞬で決まった。

得物を振るった体勢で固まるノイトラ。その身体には傷一つ付いていない。

そんな彼の周辺を舞う、何かの破片。

ネリエルとノイトラ。もはやどちらの技が打ち勝ったのかは明白だった。

「……やっぱり、こっくなっちゃったかあ……」

ネリエルは苦笑を浮かべながら、何処か諦めた様にして呟く。

そう、この破片は彼女の放ったランスの残骸であった。

圧倒的な力を前に、此方の全力の一撃はロクに拮抗する事すら叶わず、瞬く間に粉碎。所謂完敗というやつである。予想はしていたものの、まさかこれ程までにアツサリ決まるとは思いもしなかった。

実はネリエルの読み通り、このノイトラの技は本来であれば斬撃を飛ばす類いのものであった。

振るわれた大鎌の持つ威力は言うまでも無いが、その刀身より更に飛来する六つの斬撃は、敵の身体を容易く横へ七等分する。

しかも応用が利き、別に六つ同時でなくとも放てる使い勝手の良い技である。

だがその威力の高さ故に模擬戦闘には適さず、ノイトラは個人の鍛錬時以外では使用禁止と定めていた。

この技を編み出す際に参考にしたのは、喜助の“剃刀紅姫”と一護の“月牙天衝”だ。

確かにノイトラの斬魄刀は他と比較してもリーチが長い上、柄尻の鎖を利用すれば遠

距離攻撃も可能という汎用性の高い得物である。

だが後者は余りに隙が大きく、使い所が非常に難しい。

故にノイトラは他の遠距離攻撃の手段として、虚弾や虚閃の応用技を編み出した。

しかし幾ら技数を増やそうが、原形は同じ。ワンダーワイスの虚弾が発射直前に潰された様に、喜助の手によって虚弾に虚閃という技自体を根本から無効化したり封じる対策を取られてしまう可能性も少なくない。

その事を考慮し、ノイトラは「六刃斬層」という固有技を一から作り上げたのだ。

「けど…何か逆にスッキリした感じね…」

これで彼女は唯一の武器を失う形となったが、永久にという訳では無い。

流星にノイトラの大鎌の様にまでとはいかないが、時間さえあればランスは元通りに修復出来る上、粉々にされたとしても再生成が可能だ。

しかし現状に於いてそんな時間がある筈も無い。例えあったとしても意味が無い。何せ勝負はもう付いているのだから。

「——勝負あり、だな」

現にネリエルの全身には、何時の間にやら接近していたノイトラの大鎌が突き付けられていた。

「…ええ、私の完敗よ」

囁く様にして呟かれたノイトラの言葉を、ネリエルは肯定した。

突き付けられている大鎌が軽く動かされれば、瞬く間に絶命する危機的状况だ。にも拘らず、ネリエルの顔には笑みが浮かんでいた。

今のノイトラならば、決してそんな真似はしないと信用していたからだ。

やがて全ての大鎌がネリエルの身体から離される。

ノイトラは刀身を下に向け、そのまま地面へと置く。

彼のこの一連の動作は、戦いが終わりである事を示していた。

「——もう…」

「ん？」

不意にネリエルが何かを囁き始める。  
ノイトラはそれに耳を傾ける。

「大丈夫、なのね…?」

傍から聞けば、何の事を言っているのか全く分からない問い。

しかしノイトラには理解出来た。

これは最終確認の様なもの。

もう二度とあんな過ちは犯さない、過去の在り方に逆戻りしたりはしないのかと。ネリエルは今一度ノイトラへと問い掛けているのだ。

「ああ。俺はもう絶対に間違えたりしねえ」

「そう…」

ノイトラの返答を聞いたネリエルは、静かに両目を瞑ると、十数秒後に再び開く。その瞳には先程まで浮かべていた鋭さは一切無い。

極めて穏やかな、見る者を包み込む様な優しい光が宿っていた。

「ノイトラ。私は、貴方を……—ツ!!?」

遂にネリエルは赦しの言葉をノイトラへと贈る為、その口を開く。

しかし最後まで言い切る事は叶わなかった。

急激な速度でネリエルの霊圧が急速に萎み始めたかと思いきや、風船の破裂音の様なものが鳴り響くと共に、彼女の身体が少女の姿へと逆戻りしていたのだから。

ノイトラは眼前で狼狽えるネルを見下ろしながら、小さく溜息を吐いた。

——何と言うタイミングの悪さだ。

時間切れまで、せめてあと二・三秒程猶予があれば、その言葉を最後まで聞けたのに

と。

「まあ、良いさ……」

我儘を言うべきでは無い。自身の力を認め、謝罪を受け入れてくれただけで十分。

ノイトラは意識を切り換えると、此処から先の事を考え始める。

チャンスは一度きりだったとは言え、藍染の監視下で本心を曝け出したのは相当にリ  
スクが高い。

だがそれでもノイトラは決行に移した。何故か。

藍染の前では、幾ら凡人が頭を捻って策を考えても全てが無力。先を読み取り、潰す  
事なぞ呼吸に等しく容易いだろう。

故にノイトラは腹を括った。いつその事、自身の考えを読まれても構わないと。

寧ろ徒に陰でコソコソと手回している方が怪しさを助長する。疚しい事は無いのだ  
から、堂々と構えていれば良いのだ。

彼の残る目的は、自身と仲間達の生存だ。言ってしまうえば他の存在——主人公たる  
一護を含め、尸魂界陣営の連中については殆ど考慮していない。精々が史実通りに事を  
運ばせる為に努める程度だ。

つまり目的達成の為には、態々藍染の目的を阻んだり、敵対したりする必要は一切無い。全てはノイトラ自身の立ち回りに掛かっているのである。

憑依後は真面目に任務へ打ち込み、周囲とは出来る限り揉め事を起こさず円滑に物事を運ぶ為に努力した。後者については少々結果は宜しく無いが、元の性格を考えれば十分と言える。

流石の藍染も、多少違和感はあるとしても忠実に働く部下に対して手を出す真似はしない筈。露骨に反旗を翻す態度で行動していれば、遅かれ早かれ動くかもしれないが。というか、彼については如何し様も無いのが現状。その思考を先読みして対策を練るのは不可能に近いし、常に警戒しながら行動しても何時の間にか掌の上で転がされている状況に陥っていても何ら不自然では無い。

ノイトラに出来るのは、如何なる行動を取る上でも必ず、藍染に対して裏切り等の敵対の可能性を示さない事。それさえ出来れば万事上手く行く。

——問題は此処からだ。

ノイトラは帰刃形態を解くと、斬魄刀を背負い直した。

「失せろクソガキ」

「ひいっ…!!?」

ネルを見下ろしながら、ノイトラは多少の霊圧と威圧感を滲ませながら言い放つ。腰を抜かし、涙目で怯える少女を一瞥すると、その横を通り抜ける様にして立ち去る。

「……………ふえ…？」

てつきり殺されるのかと思っていたネルは、その予想外の事態に硬直した。

傍から見ると単純に見逃した様にしか見えないノイトラの行動。だがこれにも理由がある。

幾ら無力な状態へと戻ったとは言え、ネルは裏切者であり敵だ。

だが此処で何時ぞやの集会にて堂々と言い放った台詞が役に立つ。雑魚の命には興味も価値も無いという、ノイトラの本心を表した言葉が。

破面は良くも悪くも我が強く、曲者揃いだ。

これには流石の藍染も、単純に力で抑え込む以外の手段で御する事は難しいのか、多少は目を瞑る様な姿が以前より見られていた。

ノイトラはそれを利用する事にしたのだ。ネリエルへの謝罪劇は自分自身の都合であり、ネルを見逃したのも、前述の本心故にと。

だがそれでも限度がある。過ぎればある意味藍染への忠義が薄いと取られ、最悪は裏切りにも等しい認識をされる可能性もある。

それを防ぐ為、ノイトラは更に行動へ移す。

「井上!!?」

「の、ノイトラ君!!?」

ネルを無視して向かった先は、織姫の治療を受ける一護の居る場所。

ノイトラは一護の傷の大半が治癒している事を確認するや否や、近くの織姫の傍へと響転で一瞬で移動。彼女を片手で自身の腋に抱える様にして持ち上げた。

膨大な霊圧から解放されたとは言え、織姫の身体は依然として弛緩しており、抵抗すら出来ずにされるがままであった。

「今、助けに——ぐっ?!!?」

一護は咄嗟に手を伸ばすが、自身を包み込む結界へと触れた途端、高圧電流が走るかの様な音と共に弾き返された。

これは織姫の修行の成果。以前までの「双天帰盾」には無い——治療対象による内側からの干渉を弾くという性質が加わっていたのだ。

何せ一護を筆頭に、仲間達の殆どが我が身を顧みない無茶な真似をする者達ばかり。治療が終わらぬ内に盾の中から抜け出されでもすれば堪ったものでは無い。

故に織姫は「双天帰盾」に強化を施したのである。

だがまさかそれが裏目に出るとは、彼女自身も思いもしなかった。

一護は驚愕の表情で、弾かれた手と盾を何度も見返す。

そんな彼を目の当りにした織姫は、慌てて解除せんと念を籠める。

「…止めろ。それ以上動けば少し痛い目を見てもらう事になるぜ」

「っ!!?」

「前に言つたら、俺達には藍染サマから、テメエに対してある程度の裁量権が与えられてるってな」

だがノイトラがそれを阻止した。

しかも非力な織姫を脅すという卑怯な手段で以て。

藍染より与えられた——という部分については幾つかある。

織姫から攻撃を受けた際は、彼女のヘアピンであり能力の本体である「六花」の破壊を認める。そして状況的に己むを得ない場合、命に関わらない程度であれば負傷させても構わない。

大まかに言えばこの二つだ。但し後者については個人の感性によつて解釈の仕方が変わる為、結構細かく内容が定められていたりする。

現状の織姫にはそれが十分適用出来る状態だった。

負傷の容認の条件の中には——「崩姫」が逃走またはそれに連なる目的を果たす為、間接的であつても此方に被害を齎す様な行動を示した場合、という一文も含まれている。

一護を解放すれば、まず確実に此方へと刃を向けて来る筈だ。そして織姫は「双天帰盾」を解除する事で、その切っ掛けを作ろうとしているという見方が出来る。

即ちノイトラの行動には何ら問題は無いという訳だ。

だが言動とは裏腹に、実際彼は織姫へと手を掛ける心算なぞ一切無かった。

それに幾ら振りだとは言え、間違いは犯さないとネリエルに宣言した直後にこれだ。思うところが無いと言えば嘘になる。

——凄まじく心が痛むんだが。

一護を痛め付けていた時と同様、ノイトラは思わず内心で何度も謝罪の言葉を連呼し

ていた。

「悪いが、この御姫サマは回収させてもらうぜ」

「っ、てめえ!!!」

ノイトラの言葉に対し、一護は思わず声を荒げた。

織姫を回収するとは、まるで物として扱っている様ではないかと。

だがノイトラは表情を変えずに軽く受け流すと、その場から踵を返す。

その際、何故か一瞬だけその両肩が跳ねていたのだが、一護は気付かなかった。

「…逃げるか、それとも追って来るか。テメエの好きにしな」

不意にノイトラは足を止め、顔だけを一護の居る後方へと振り返らせると、口元を吊り上げながら告げる。

その表情には、力ある者の傲慢さとは別の——圧倒的強者としての余裕が満ち溢れていた。

「けどもし追って来る気なら覚悟しとけ。今度は一切手加減しねえ。全力で叩き潰してやる」

だが実を言うと、その内心は盛大に慌てていた。

ネリエルとの蟠りが解消した影響か、つい先程までは落ち着きに満ち溢れていた。だが何時の間にかやらノイトラの空いている左手へと巻き付いていた口力の「反膜の糸」より齎された情報により、全てが引つ繰り返ったのである。

その内容というのは、現状に於いてノイトラ自身が最も恐れていた——特大の死亡フラグである剣八に関するものだった。

事前に行動していたセフィーロによる足止めは成功していたのだが、持ち前の規格外さで想像よりも早くに復帰。運悪く此方の帰刃の際に発生した霊圧を察知した様で、凄まじい速度でその場から移動し始めたようだ。

ネリエルとの遣り取りに集中する余り忘れていた「探査神経」を使用してみると、此処から結構離れた場所にて一際巨大な霊圧が動き回っているのが判る。

——予定よりも遙かに早い。

一応セフィーロがその進路の妨害に努めているらしいが、如何せん距離が離れている為に取り得る手段が限られており、多少の時間稼ぎしか出来ていないようだ。

だが一つだけ救いもある。それは剣八が仲間達をその場に置いてきぼりにしたまま単独行動を取っている事だ。

彼は霊圧探知を極めて苦手としており、しかも極度の方向音痴。

加えて口力の情報では移動を開始したというだけで、真つ直ぐ此方へ接近している訳では無いそうだ。

とは言え、遠回りではあるが着実に距離が狭まつてはいるらしい。モタモタしていれば何れは到着するかもしれない。

逸る気持ちを押さえながら、ノイトラは今一度自身の計画を脳内で確認する。

まず抱えている織姫をウルキオラへ引き渡す。そしてそれに合わせてチルツチを回収しながら、治療室へと移動する。

態々織姫を引き渡す理由としては、復帰した一護が向かう方向を固定する事で、史実に通りウルキオラと交戦させる為だ。ちなみにその間、ノイトラはセフィーロ達と協力し、もう一度剣八を封じ込めに動く。

残りは状況によつて今後の行動内容を決める形だ。

一通り事が済んだ頃には、既に藍染達は決戦の舞台へと移動しており、後は比較的自由に行動出来る——筈だ。

「ま、結局は俺のどこまで辿り着ければの話だけだな」

不安は拭えないが、ノイトラは内心でそう願いつつ、気持ち早足でその場から移動し始める。

向かう先はチルツチの倒れている方向だ。

ちなみに響転を使用しない理由は、この場を見ている者に違和感を与えない為だ。露骨にコソコソと忙しく動いていては、何かを目論んでいますと言っている様なもの。その為に来る限り余裕振りのアピールする必要があった。

他にも結果的に一護をこの場で見逃す形となっている現状を誤魔化す意図も含まれている。

例えば彼が再び動き始めたとしても、この自分が必ず叩き潰すから問題は無い。そう態度で示しているのだ。

「あはよ」

そして藍染の所有物という扱いだけに、織姫の存在の重要性は高い。

下手すれば一護を後回しにしても違和感が無い程に。

それにネルと同様、ノイトラが一護を雑魚認定したのだとすれば、この行動にも余り違和感はない。

「ま、待て!! このツ…待ちやがれってんだ細目野郎!!」

一護は内側から盾を何度も殴り付けながら、挑発染みた制止の言葉をノイトラの背中へと叫んだ。

折角当初の目的であつた織姫と会えたにも拘らず、再び離され様としているのだ。流石に必死にもなるだろう。

しかしそんな一護の願いも虚しく、ノイトラは一切反応を示さず、足が止まる事は無かつた。

——頼むから止まってくれ。

一護は激しい焦燥に駆られた。

このままノイトラに離脱されてしまえば、織姫の元まで辿り着くだけでも極めて困難な道程となる。

何故ならこの先で待ち構えている敵は皆強敵のみ。ネリエルを圧倒する程の驚異的な実力を見せつけたノイトラもそうだが、そんな彼より階級が上の十刃が未だ四人も存

在している。

余りに絶望的な状況だ。普通なら心が折れているだろう。

無論、一護としては如何なる形になろうが、織姫の救出を諦める心算は無い。

とは言え、その状況が状況だけに一人では心許無いのも事実。

理想としては途中で別れた仲間達と合流し、皆で協力して挑むべきだろう。

「それとも俺と戦うのが恐いのか!? ああ、そりやそうだよな!! 流石のてめえも自慢の鋼皮を斬られてビビった訳だ!!」

だがこれはあくまで最悪の場合の話だ。

可能であれば避けるべき未来だとして、一護は諦めずに叫び続ける。

「止めて黒崎君!! 私は、大丈夫だからっ…」

「井上…!!!」

ノイトラに抱えられた状態ながら、織姫は必死に身体を曲げて一護の方向へと顔を向けた。

表情をやや強張らせながらも、見る者を安心させる優しい笑みを浮かべて見せる。

並の者であれば他者を氣遣う余裕すら無いだろう。にも拘わらず、自分自身より想い人の方を優先し、氣丈に振舞うその健気さは正にヒロインの鑑。

一方でその状況を作り上げた張本人たるノイトラは如何か。

動けぬ主人公の前で、平気な顔して堂々とヒロインを攫うという悪事を働く邪悪さ。何処から如何見ても典型的な悪役そのものである。

その事実<sup>に</sup>氣付き、人知れず更にその心を痛めつつも、ノイトラは思考を巡らせる。自身はウルキオラと同様、最終決戦メンバーには含まれていない。

一応選ばれる可能性を考慮した計画立ててもしてはいたが、その場合は目的達成の難易度が尋常では無いレベルで跳ね上がっていた事だろう。

最悪の事態へ陥らなかつた事に改めて安堵しつつ、ノイトラは歩く速度を上げた。

「——どうやら終わったらしいな」

次の瞬間、何時の間に接近していたのか、この場に新たな人物の声<sup>が</sup>響き渡つた。

皆は弾かれる様にして、声の方向へと一斉に振り向いた。

其処には何時も通りの自然体でウルキオラが立っており、その無機質な瞳をノイトラ

へと向けていた。

タイミングが良いのか悪いのか。ノイトラはこの状況を冷静に判断出来無かった。

史実であれば、織姫を回収するのはスタークの役目である。

だが眼前に立って居るのは紛れも無くウルキオラ・シフアーその人。

疑問に思いつつも、ノイトラは表情を崩す事無く、表面上は普段通りの態度で声を掛けた。

「おう、いきなり出て来て如何したよウルキオラ」

「……………」

だがウルキオラは黙り込んだまま答えない。

質問内容を誤ったかと、ノイトラは思わず内心で焦り始める。

だが彼は即座に後悔する。

“探査神経”を剣八の行方を探る為のみに使用した後、直ぐに切っていた事を。

そして多少疑問を抱いたとは言え、ウルキオラを気の知れた相手だとして、僅かにその緊張感を緩めた事を。

「黙ってられつと困るんだが……——ッ!?!」

次の瞬間、ノイトラは途中で言葉を切ると、何を思ったのか抱えていた織姫を地面へと降ろす。そして続け様にその場から真横へ大きく跳躍した。

見れば先程から沈黙を保っていたウルキオラが、その右手を持ち上げており、人差し指をノイトラへと向けていた。

やがて指先へと霊圧が集束し始める。

—— 一体何を考えているのか。

想定外の出来事に、ノイトラは激しく混乱した。

ウルキオラの見せた動きは、明らかに虚閃の構えだ。

しかも明らかにノイトラのみへ狙いが絞られている。

織姫をその場に放置して移動したのは、それを直前に察知した為。加えて後方の一護とその近くにへたり込んでいるネルを巻き込まない様に、という意図もある。

案の定、距離を取ったノイトラ目掛け、ウルキオラの指先から薄緑色の光線が放たれた。

響転を使用してそれを躲しながら、ノイトラは思考を巡らせる。

全く以て解せない。ウルキオラは何故このタイミングで、味方である筈の自身に向けて攻撃を仕掛けて来たというのか。

今迄の行動を振り返ってみても、裏切りに値する様な真似は一切していない。

寧ろ独断で織姫を連れ出したグリムジョーの方が、肅清対象と判断される要素が大きい筈だ。

「デメエ…いきなり何しやが——」

ノイトラは回避の次いでにウルキオラの近くへと移動。即座に抗議しに掛かる。

だが其処でふと違和感を感じた。

即座に理解する。孔がある自身の左目周辺を覆っていた眼帯が、何時の間にか無く

なっていた事を。

「——悪い、ノイトラ」

「ッ!？」

耳元近くで聞こえて来た聞き覚えのあり過ぎる声に、ノイトラは瞠目した。

——何故これ程の距離になるまでの接近に気付けなかった。

確かに“探査神経”は切っているが、霊圧探知の能力は普通に機能している。

余程の事が無い限り、他者の接近を察知出来無いというのは無い筈だ。

考えられる可能性としては、その者が霊圧秘匿能力に長けていたという事。

だが考える限り、現状でそれが出来る者は限られている。

霊圧を極限まで抑え込んだにしても、限度というものがある。その者が強大な霊力を持つ程、それは顕著になる。

しかもこの声の主は十刃の頂点に君臨する規格外。ここまで完璧に消し去る事は如何あつても不可能の筈なのだ。

「ホントはこんな事やりたくねえんだが…許してくれ」

戸惑うノイトラを嘲笑うかの様に、声の主——スタークは動いた。眼帯を失った部分に影が覆い被さる。見ればその正体は掌だった。ノイトラは驚異的な反応速度で即座にそれを振り払うも、全てが手遅れだった。微かに見えたのだ。その掌の内側に、黄色い箱状の何かがあり、丁度自身の孔へと押し込められたのを。

「な…!!?」

知らない筈が無い。何故ならノイトラもそれと同じ物を所持しているのだから。

それは組織形成の際に、藍染が十刃達全員へ配った物。対象の霊体を永久的に閉次元に幽閉するという、部下の処罰用の道具——“反膜の匪”だ。

だがノイトラは気付いていた。自身に使用されたそれは、何処か通常の物とは異なっている部分がある事に。

まず箱全体の密度だ。僅かでも傷付けば破裂どころか爆発するのではないかと錯覚する程に、明らかに限界まで圧縮した様な印象を抱く。

そして特筆すべきはその色である。本来の“反膜の匪”は黒紫だった筈。断じて黄

色などでは無い。

其処ではつとする。そういえば自身の霊圧色は何色だったかと。

次第にノイトラの中で欠けていたピースが嵌って行く。

もしこれが並の数字持ちでは無く十刃、それも特定人物を対象として作られた専用品なのだとすれば――。

「まさ、か……ッ!!!」

現時点で『反膜の匪』を製作出来る者は誰か。

そして誰よりも仲間思いである筈のスタークが、己の意思を押し殺してまで行動した理由とは何だ。

ノイトラが答えに至ると同時に、その視界を眩いばかりの光が埋め尽くした。

## 第五十八話 三日月と孤狼と虚無と…

視界を塗り潰すと同時に、その光はノイトラの全身へと纏わり付いてゆく。

気体に液体、ましてや鬼道の類いでも縄でも無い。だが確実に拘束という用途に類いするものであるのは間違い無かった。

本来であれば、“反膜の匪”は孔に入れられた直後、有無を言わず対象を閉次元へと隔離する筈だ。

しかし実際は先にノイトラを拘束しに掛かっている。それはまるで凶悪犯罪を犯した受刑者の動きを完全に封じた上で、一切の光も射さぬ独房へと監禁する下準備をしているかの様にも見える。

「冗談じゃねえぞ…!!」

ノイトラは全身に力を籠めて抵抗を試みるが、無駄に終わる。光が纏わり付いた部分は特にそうだ。自慢の膂力を以てしても、ピクリとも動かない。

このままでは本当に閉次元へ幽閉されてしまう。しかもそれはどれ程の時間に及ぶ

のか見当も付かない。

一時間や二時間程度であれば、まだ間に合う範囲である。だがそれ以上ともなると、もはや一巻の終わり。残る目的の全てが達成不可能となってしまう。

そして最終的に藍染が倒されてしまえば、閉次元から抜け出す事すら困難という、言わば詰みの状況へと陥る。

唯一残された希望は喜助だけだが、結局は全てが終わった後となる。

閉次元から抜け出したは良いものの、救いたかった仲間達は一人も居ませんでした。もしそんな非情な現実を突き付けられでもすれば、ノイトラはその場で発狂する自信があった。

——此処に来て終わりなぞ、納得出来るものか。

追い詰められた末に、ノイトラは決断した。

もはや形振り構っていられる状況では無いと。

「ク、ソ……があああああああアアアツ!!!」

それは解号無しの帰刃。しかも先程とは異なり、その力は一切制限していない全力の状態だった。

身体構造が瞬時に変化した影響なのか、その全身を覆っていた光が一時的に拡散する。

チャンスとばかりに、ノイトラは六本の手に握られた大鎌を投げ捨てると、内四本を使つて発生源である左目の孔を塞ぎ、光を抑え込まんとする。

確かに勢いは治まったが、完全には不可能であった。

ほんの僅かな隙間を潜り抜けて光が次々に溢れ出し、再びノイトラの全身を拘束しに掛かる。

心成しか、その拘束力は時間の経過と共に強くなっている様に感じられた。

「っ、駄目か…!!」

最悪の事態である。このままでは本当に終わってしまう。

ノイトラは一瞬迷った。切り札たる「あの力」を解放すべきか否かを。

だがもしそれを使つて脱出に成功したとしても、状況的に詰んでしまう。

下手人のスタークとそれに協力したウルキオラとは確実に戦う羽目になるだろうし、結果的に藍染とも完全に敵対する形となる。

僅かな時間の中で何度も悩んだ末、ノイトラは賭けに出る事を決意した。

もしこの“反膜の匪”が専用設計なのだとしても、一つだけ希望がある。

如何にそれが自身の霊圧を分析して作り上げたのだとしても、流石に見せてもいない“あの力”を想定して作っている訳では無いだろうという確信が。

そして最後にもう一つ——スタークの存在だ。

別に他者の介入が無くとも、他ならぬスターク自身が真正銘の全力を出して立ち回れば、その生存確率は一気に跳ね上がる。しかも彼の性格から考えて、それは他の仲間達にも及ぶかもしれない。

だがそうなると更なる可能性も浮上して来る。史実では普通に生き残ったハリベル達は別として、下手すればバラガンやその従属官達までも生き残る可能性が。

しかし後者については確実では無い。例えそうなたとしても、以前に交わした約束通り不干渉を貫けば大きな問題は起こらないだろう。

故にノイトラの出した結論。それは自身の目的に加え、決意や覚悟といった洗い浚いの全てをスタークに託す事だった。

完全に他力本願な思考ではあるが、この選択は強ち間違つてはいなかったりする。

残るノイトラの望みは仲間達の生存のみ。だが言つてしまえばこれは必ずしも彼でしか達成出来無いものではない。

並みの窮地なぞ軽く跳ね除けられる確かな実力と、仲間を大切に思う気持ちさえあれ

ば誰でも可能なのである。

とは言え、ノイトラの考えとしては、スタークに託すのはあくまで自身が閉次元より戻るまでの間のみ。

其処から先は何としても幽閉状態から抜け出し、直接介入する心算だった。

否、寧ろそうしなければならない。

理由はやはり藍染だ。例えば上位十刃勢が予想に反した奮闘振りを見せたとしても、恐らくは崩玉との完全融合が近付けば結果は同じ。

史実に於いて、決戦の地に赴いた破面達が次々と斃れて行く中、援軍として現れた『仮面の軍勢』達を含めた実力者数名を相手に孤軍奮闘していたハリベル。そんな彼女を文字通り不要だと切り捨てた様に、平然と手を下すであろう。

「スタークスタークスターク!!!」

フリーの状態である二本の腕を駆使し、自身を拘束しに掛かる光に対して力づくで抵抗しながら、ノイトラはその名を叫んだ。

だが離れに立つスタークは反応を示さない。

それどころか眼前に広がる光景を見ない様になっているのか、無言のまま顔を斜め下に

俯かせ続けている始末。

「俺は認めねえぞ!! こんなクソみてえな結末!!!」

だがノイトラは構わず叫び続ける。

例え反応を示していなくとも、スタークならば必ず自身の思いに応えてくれる筈だと信じて。

「コツチを向きやがれエエツ!!!」

「——っ!!」

「現実から逃げんな!! 目を背けんな臆病者!!!」

遂にその必死さが伝わったのか、スタークは動きを見せた。

持ち上げられたその顔には、主に後悔や悲しみが入り混じった複雑な表情が浮かんでいた。

——何故糾弾しない。

その表情が示す通り、スタークの心情はこれだった。

幾ら藍染に命令されたとは言え、罵倒されて然るべき事をした自覚はある。

にも拘らず、ノイトラの言葉には負の感情は一切籠められていない。それどころか此方を奮い立たせんとしているかの様な印象を受ける。

そんな予想に反した彼の言葉に、スタークは只々瞠目するばかりだった。

「俺は必ず戻つて来てやる!! テメエとの決着を付ける為になア!!!」

「ノイトラ…お前…」

「だから…ツ、テメエも——」

——必ず生きて戻つて来い。

だがその言葉を口に出す事は叶わなかった。

直後に孔を押さえていた腕を押し退けて光が溢れ出すと、ノイトラ・ジルガという存在をこの世界から完全に隔離した。

先程までの喧騒が嘘の様に、辺りが静寂へと包まれる。

十秒、二十秒と時間が過ぎて行く。だが一向に誰も言葉を発しない。

厳密に言うとう発せないのだ。驚愕や戸惑い、後悔といった様々な要因から。

状況が変わらぬまま、やがて一分が経過しようとした刹那——遂にスタークがその

静寂を破った。

「簡単に……言いやがってよお……」

喉の奥から絞り出す様にしてそう言うと、徐にその顔を上に向ける。

ダラリと下げられた両腕。その先の拳は有らん限りの力で固く握り締められていた。消える間際にノイトラがぶつつけた思いは、確りとスタークに伝わっていたのだ。その言葉の裏に籠められたもう一つの真意も同様に。

スタークのみならず、他の仲間達も必ず引き連れて戻って来いという、身勝手に困難極まらない頼みを。

だがこれから彼が向かう先は、世界の命運を懸けた戦いが行われる決戦の地だ。

尸魂界陣営は死にも狂いで挑んで来るだろうし、相当厳しい戦いとなるのは明白。桁外れな実力を持つ上位十刃であっても、恐らく自分自身の事だけで精一杯。他の者へ気を配る余裕なぞ全く無いだろう。

「けどまあ——他でも無えお前の頼みだ。やってやるさ」

そう理解していたにも拘らず、スタークはノイトラの願いを聞き入れる事を決意した。

やがてその顔が降ろされる。

常にやる気の欠片も無く濁り切っているその瞳には、確固たる覚悟の光が宿っていた。

尚、これまでの流れを見ていた者であれば理解出来ると思うが、言った当人であるノイトラは決して其処まで求めてはいない。

完全にスタークの深読みし過ぎである。

だが消える間際のノイトラの必死さが、それを助長していた。

「だからお前も絶対戻って来いよ。なあ…  
好敵手<sup>リパール</sup>」

そして今更だが、ノイトラは一つだけ重要な事を忘れていた。

確かにスタークが本気になれば、仲間達の生存確率は上がるかもしれない。

だがそれは同時に尸魂界陣営が敗北する可能性も比例して上がってしまう。

確かに多少の誤差であれば、藍染の行動に変化は無いかもしれない。

だが十刃達が史実を大きく外れ、奮闘だけに収まらずに本当に勝利してしまえば如何

か。

尸魂界、虚圏、藍染、そして一護。其々にどれ程の影響を齎すのか、皆目見当も付かない。

ノイトラは無意識の内に、そんな特大の爆弾を投下していた。

藍染の後へ続いていた東仙だったが、突如としてその場に立ち止まる。

何かを確かめる様に顔を持ち上げて数秒が経過した後、徐に口を開いた。

「…ノイトラ・ジルガの霊圧が消失しました」

「そうか」

それに対し、藍染は特に驚いた様子も無く淡々とそう返した。

彼が秘密裏にスタークへ指示を出していた件を知らされていない東仙は、当然その反応に疑問を抱いた。

ちなみにギンも同様の為、さり気無く視線を藍染の背中へと向けている。

「何をなされたの？」

「…そう言えば君達には話していなかったね」

思わず東仙が問い掛けると、其処でやつと藍染は立ち止まり、後方へと振り向いた。

其処から説明を始める。数時間前、スタークとウルキオラを呼び出した後、前者のみを残してとある密命を出した事を。

理由はノイトラが裏切りを企てている可能性があり、それ故に幽閉の必要があるのだと。

当然、スタークは相当に洩った。しかしノイトラの裏切りが真実であれば、他の仲間達の身が危険に晒されると理解するや否や、最終的に首を縦に振った。

——出来ればこういった命令は今回限りにしてほしい。

去り間際にそう言い残しながら。

「彼の説得には少々骨が折れたよ」

実はそれに加え、藍染は密かに仕込みも行っていた。

以前ノイトラへの報酬としてザエルアポロを呼び出した際、とある依頼をしていたのだ。

それは対ノイトラ専用の“反膜の匪”の制作。

ザエルアポロは嬉々として引き受けた。そして藍染の自室を出た後、監視の目を警戒して悔しがる演技をしながら、自身の宮へと早足で向かった。

だがそれはフェイク。

まずノイトラに恨みに近い感情を抱いているザエルアポロは、嬉々として制作の為の行動を開始する。

其処で真つ先にノイトラと親しい者、それも上位クラスの者がその動きを察知し、何れかのタイミングで阻止の為に動く。

藍染はその隙を突き、スタークに自身が既に製作していた本命の“永反膜の匪”を渡して置き、ネリエルとの遣り取りを終えたノイトラへの使用を命じる。

理由はノイトラが自分達に対して反旗を翻す可能性が浮上した為、一時的に幽閉する

という名目で。

人選の理由は単純に実力だ。

他の上位十刃勢でも構わなかったのだが、藍染の想定する限り、最も此方側への被害が少なくスムーズに事を運べるのはスターク以外に適任者が居なかったのだ。

それにノイトラ自身、気を許している仲間を前にすれば少なからず気が抜ける筈。そうして隙が生じれば、更に成功の確率は上がる。

「…何故そこまでして奴を？」

「ノイトラ・ジルガはその階級に不相应な実力等、不確定要素が大きい存在だった」

経緯については理解出来たが、肝心な部分が抜けている事に気付いた東仙は、更に追及する。

「私達が虚夜宮を留守にする間、野放しにして置くのは余り気が進まなくてね」

確かにそうだと、藍染の意見に対して東仙は内心で同意する。

だが一つだけ気にかかる点があった。

如何にノイトラの実力が上がっているとは言え、虚夜宮の警備として残るウルキオラ、そしてヤミーが二人掛かりで対処すれば、抑える事は可能なのではないかと。

前者は上位十刃の上、藍染が言うには何か通常の帰刃とは別の切り札の様なものがあるらしい。そして後者は最下位の階級ではあるものの、解放時は第0十刃という真の階級に相応しい姿へと戻る。

残留組に選ばれたのも納得だ。この二人が居れば、大抵の敵は尽くが粉碎される事だろう。

だが藍染は封印という手段を取った。しかも態々“反膜の匪”を自らの手で改良するという手間まで掛けて。

これ以上引き止めるのは不敬に当たる。そうは思いつつ、東仙は真意を問わずにはいられなかった。

「ですが、その時は——」

「例えウルキオラ達が対処に動いたとしても、結局は後手に回る事になるだろう?」

東仙の思考を読んでいた藍染は、言い切る前に返答した。

——ノイトラを侮ってはならない。

言外にそう窘められている様に感じた東仙は、それ以上口を開く事は無かった。

「それにノイトラを封じる利点は他にもある」

そう、藍染にはもう一つだけ理由があった。それはノイトラと同様に不確定要素として認識していたセファイロの存在である。

当時は未だ不完全な状態であった崩玉を使用した為か、破面化に失敗した例とされている彼女。

だが案の定と言うべきか、藍染はそう認識してはいなかった。

嘗てその名を語る事すら恐れられ、虚圏で暴虐の限りを尽くしていた「滅蒼」。ザエルアポロやスタークの様、魂を二つに分けた訳でも無しに、そんな規格外がこの程度の事で力を失ったと本当に思えるだろうか。

自身の力を利用されたくないが為に、何らかの手段で秘匿している。または此方が認識出来無い程に力を増したのか。

藍染としては前者の可能性を考えていた。でなければ此方の勧誘に対してあっさりと言を縦に振った理由が説明出来無い。しかも後者であればどうの昔に行動を見せている筈である。

「君達は気に留めてすらいなかったかもしれないが、私は一時も彼女から意識を逸らしたことは無い」

藍染はセフィーロの事を如何に警戒すべき存在なのかを、東仙とギンへと事細かに説明する。

虚夜宮中に仕込んでいる監視装置は勿論、崩玉を用いても、その動きを覗く事が殆ど出来無いという驚愕の事実も交えながら。

だがそんな底知れぬセフィーロの行動に制限を掛ける方法があつた。それこそ彼女が執着しているノイトラの封印である。

彼を此方の手の内に抑えてしまえば、後は簡単。何せノイトラを解放出来るのは「永反膜の匪」の製作者のみ。つまり力では解決出来無い状況故に、セフィーロは身動き一つ取れなくなるのだ。

もはやこの世の全ては自身の掌の上だと、藍染は締め括った。

「さて……そろそろ出発しようか」

やがて玉座の間の最深部に当たる場所にて、巨大な黒腔が開く。その道の先に移る光景を眺めながら、藍染は静かに呟いた。

「…さあ、この状況をどう乗り切る？」

その言葉は誰に向けたものなのか。それは当人にしか分からない。だが何処と無く、藍染の表情は楽しげに見えた。

先程までノイトラが居た筈の場所を眺めながら、ウルキオラはその場に立ち尽くしていた。

その心情を埋め尽くしていたのは——果てしなき疑問。

スタークより伝え聞いた藍染の言葉が真実であれば、ノイトラを封じたのは当然の措置と言える。

だがそれでも納得出来なかった。

今のノイトラは決して馬鹿では無い。藍染を裏切るといふ行為が、一体何の意味を持つのか、如何なる結果を齎すのか。その程度は理解している筈。

共に行動する機会が増えたが故に、ウルキオラは知っていた。藍染の命令に逆らわず、時には戦闘狂故に湧き上がる己の戦意を押し殺しながら、忠実な部下として行動して来たその実績を。

ネリエルとの遣り取りは終始観察していた。恐らく彼女との過去の因縁も、ノイトラが変わる切っ掛けの一つでもあったのだろう。そう考えればあの予想外な態度や姿を見せたのには得心が行く。

「…一体何だというのだ……」

ノイトラが閉次元の中へと消えた直後から、ウルキオラはそれ等を感じていた。

己の中で、何か途轍も無く大きなものが抜け落ちたかの様な消失感。

意味も無く周囲の何かに力をぶつけたくなる暴力衝動。

スタークへと助力した自身の行動に対する、極めて不明瞭な後悔に似た感覚。

そして——ノイトラに消えて欲しく無いという願望。

刹那、ウルキオラの脳裏にとある文字が過った。

以前ノイトラにも問ひ掛けた、“心”という一文字が。

——まさかとは思うが、これがそうなのか。

一瞬だけそう考えたウルキオラだったが、即座に振り払い、違うと否定する。

それにだ、もしかすると本当にノイトラが裏切りを企てており、組織の内部崩壊を促す為に態と自身を惑わす様な言動を取った可能性も捨て切れない。

他の仲間達と良く接していたのもそうだ。仲を深めて置けば、それこそ岐路に立たされた時、最終的に自身へ協力させる形へと持ち込む布石だったのではないか。

揺らぐが、そして迷わず。藍染の道具としての己の存在意義を認識し直せと、ウルキオラは己に言い聞かせる。

「…もういらねえよな、コレ」

彼がそんな葛藤をしているとはいざ知らず、スタークはその腕に装着されていたアクセサリーらしきものを取り外すと、何処か憎々しげに呟きながら投げ捨てた。

これは「永反膜の匪」と共に藍染より渡された道具。ウルキオラが織姫を連れて来  
る際に使用した腕輪の姉妹品でもある。

元は喜助が尸魂界から逃げ出した際に残っていた置き土産である、霊圧遮断用の黒い  
外套の技術を利用した物だ。

非常にコンパクトな分、幾つかの制限があるのだから、詳しく語る必要は無いだろう。

「ノイトラ…君…？」

「…な…なにがおこったんすか…？」

その場にへたり込み、呆けた様な表情を浮かべながら、織姫は途切れ途切れの声でノ  
イトラの名を呼んだ。

つい先程まで恐るべき実力を存分に見せ付けていた筈の存在が、訳も分からぬ内に消  
え去ってしまうという怒濤の展開について行けなかったのもある。

だが織姫が最も衝撃を受けたのは、それを成したのがノイトラの仲間達であった事  
だ。

それは彼女のみならず、ネルと一護も同様であった。

「———どういふ事だよ…」

盾の中の一護が、何かを呟いた。

その声には途方も無い怒りが籠められていた。

「てめえ等…何をやってんだよ!？」

静かにその場に佇んでいるスタークとウルキオラに向け、一護は叫んだ。

彼等の突然過ぎる行動———仲間である筈のノイトラに対する所業に。

あの光の正体は謎だが、取り敢えず普通では無いのは確実。

消える寸前にノイトラが放った、戻って来るといふ言葉からして、決して死に至らしめる効果がある訳では無いのだろう。

だが下手すると二度と抜け出せない、そんな牢獄の中に閉じ込める様なものかもしれない。

「仲間じゃねえか!! 何でそんな平気なカオしてられんだよ!!?」

例え敵側の事情、しかも敵側の大きな戦力が勝手に削れるという利点を尸魂界陣営へ齎すのだとしても関係無い。

仲間を平然と裏切る。それは大切な仲間を傷付けられたり、弱者を蹂躪して快樂を見出す事と同様、一護が最も許せない行為であった。

しかも被害を被った相手が相手である。

例え怪我人が相手であろうとも、敵であれば一切容赦せず、勝つ為には手段を選ばない。そんな稀に見る熾烈さを持ちながらも、実は仲間思い。多少手荒ではあったものの、致命傷を負っているにも拘らず尚も戦闘を続行せんとしたグリムジョーをこの場から撤退させたのが証拠だ。

そんなノイトラに対し、剩え二人掛かりで襲い掛かるという裏切りを決行した。

確かに彼の持つ力は凄まじい。故に単独では厳しいと判断したのかもしれないが、どちらにせよ忌避すべき行動である事に変わりはない。

「ッ、てめえ等…!!」

だがスタークとウルキオラは一切反応を示さない。

それが余計に一護の怒りを煽った。

「——うるせえなあ…」

「ツ!!?」

「悪いけどよ、ちよつと黙つててくんねえか?」

更に捲し立てんとした一護だったが、残念ながらそれ以上は許されなかった。

突如としてスタークより放たれた威圧感と、その声に含まれた尋常ならざる怒気によつて黙らされたのだ。

い。——自分とて好き好んでこんな真似をした訳じゃないし、平気な訳では断じて無い。

だから何も知らない奴は黙つていろと、その態度は明らかに語っていた。

「〃反膜の匪〃」

「…なんだつて?」

「ノイトラに使つた道具の事だ」

気圧された影響で全身を硬直させていた一護だったが、突如として聞こえて来た言葉

によつてそれを解かれる。

見れば声の方向にはウルキオラが、相変わらず視線を一定の場所から外さずに佇んで居た。

その真意は不明だが、淡々とした口調で説明を続ける。

“反膜の匪”の持つ効果と用途、そしてその製作者を。

「今回ののは特別製。中位以下の十刃を——且つノイトラの霊圧構成の情報を組み込んだ専用品らしい」

「それじゃあ……あいつは二度と——」

「そうだ。藍染様が解放を認めない限り、奴は永遠に閉次元へ囚われたままとなる」

平然と語るウルキオラに対し、一護は激しい憤りを覚えた。

例え裏切られたノイトラの方に問題があったのだとしても、この仕打ちは常軌を逸している。自由剥奪と刑事施設への収監の刑期が終身に及ぶ、所謂終身刑が生易しく感じられる程に。

後者は最低限度の衣食住が提供されるものの、前者は違う。何せ藍染以外に手出し不可能な閉次元へと幽閉されるのだ。その意味は深く考えるまでも無い。

「っ、そんな…酷い…!!」

塵一つ与えられない牢獄の中で、死ぬまで囚われ続ける。それは地獄以外に何と云うだろう。

寧ろ一思いに殺して貰った方が救いとなる。

ウルキオラの説明を聞いていた織姫もその考えに至ったのか、思わず震え声でそう呟くと、両手で口を覆い隠した。

「…そっ、いやもう一つあったな。藍染さんからの命令——っ」

思い出したと言わんばかりにスタークはそう呟くと、織姫へと視線を向ける。

するとその直後、彼は突如として自身の右腕を持ち上げ、横顔を防御するかの様な体勢を取った。

間を置かずに周囲へと響き渡る、凄まじい轟音と衝撃。

見ればスタークが持ち上げた右腕は、真横から振るわれたらしい無数の巨大な刃の羽を持つ翼を受け止めていた。

「お前…」

「——なにしてんだてめえ等ああッ!!」

「ッ!!」

それは帰刃形態と化したチルツチによる不意討ちだった。

瞠目するスタークを余所に、彼女は未だ嘗て無い程の怒りの形相を浮かべながら、同時に逆側の翼を振るって追撃を仕掛けた。

だが其処は流石の第一十刃と言うべきか、スタークは大きく上へ跳躍する事で難無くそれを躲す。

宙に形成した霊子の足場を蹴り、離れた位置へ降り立つ彼をチルツチは睨み付けると、激情のまま叫んだ。

「答えやがれ!! ノイトラに何しやがった!!」

「……勘弁してくれよ…」

スタークは思わず内心で舌打ちした。

この場に降り立つより前、彼は一応チルツチの様子は確認していた。負傷の具合からして、暫く意識は戻らないだろうと想定していたのだが——如何やら甘かったらしい。

恐らくノイトラを封じる直前かその付近に意識を取り戻し、一部始終を目撃していたのだろう。そして帰刃する事で強制的に傷を癒し、この場へ乗り込んで来た。

だが直前まで行われていた会話までは聞いていないらしい。驚愕故にか、はたまた距離的な問題なのかは不明だ。

——面倒な事になった。

今のチルツチは何処から如何見ても話が通じる状態では無いのが明白。

スタークは小さく溜息を吐いた。

「ッ、ダンマリかよ…!!」

そんな態度が余計に怒りを煽ったのか、チルツチは遂に殺意を剥き出しにした。

如何なる理由があろうとも、第一十刃に攻撃するのは拙い。最悪は組織に対する裏切りとして取られる可能性も低くは無い。

だがチルツチは怯まない。寧ろその程度が何だと開き直っていた。

ノイトラが「反膜の匪」らしき物で封印される光景は見ていた。

止めに入る事が出来無かったのは、余りに突然過ぎる展開に硬直していたからに過ぎない。

それはそうだ。あのスタークが仲間を、加えて特に親しい者に手を掛けるなどと、誰が考えるか。

以前からの会話の中でもそうだが、ノイトラはテスラと同等のレベルで、スタークの事を信頼している。

戦力としては勿論だが、真に仲間として頼るべき者はアイツだと、過去の宴会の中で呟いた時がある程。

その時は周囲が騒がしかった為、その発言を聞いていた者は少ないが、チルツチは確りと記憶していた。

ウルキオラに対しても似た様な事が言える。彼は任務等を通してノイトラと接する機会が多く、その中で徐々に変化の兆しを見せ始めた途端にこれだ。

やはり所詮は藍染の手駒でしかなかったのだろうと、チルツチは失望していた。

「…なら力づくで吐かせてや——!!!」

無論、強気に出てはいるが、簡単に出来るとは思つてはいない。

ノイトラの信頼を裏切つた二人に対し、その罪の重さを思い知らせられる程度に痛手を与えられれば良いと。

この通り、今のチルツチは正気とは言い難い状態であつた。

自身の主であり想い人たるノイトラが生死不明となつた事で生まれた焦燥。それを成した下手人へ抱いた激しい怒りと殺意。これ等が要因だろう。

らしいと言えばらしいのだが、結局の所、チルツチの行き着く先は見えていた。

「——る…？」

そして彼女は運が無かつた。

理由はスタークの状態にある。

彼はノイトラの意志を汲み、自身の力が及ぶ限りで動く事を決意した——言わば本気モードに入っていた。

残された時間の少ない現状に於いて、今迄の様に状況に身を任せる等という真似をす  
る筈が無い。

「あの野郎ツ…どこに消え——」

気付けばチルツチの視界の先に居た筈のスタークは、忽然とその姿を消していた。咄嗟に「探査神経」で居場所を探らんとするも、余りに遅過ぎた。

「…悪いな」

「ガッ!!?」

周囲を見渡すチルツチの後頭部へ叩き込まれたのは手刀。

それも只の手刀では無い。並みの破面であれば帰刃形態であっても容易く肉片と化する様な威力を持っているそれ。恐らくチルツチの力が史実より増していなければ、同様の運命を辿っていたであろう。

「…もう、許しは請わねえ」

「…ぐ…あ…」

チルツチの視界は一瞬で黒く塗り潰され、その身体は地面へと叩き付けられる。

倒れ伏したまま動かなくなった彼女を見下ろしながら、スタークは淡々と語り掛けた。

「後で存分に殴られてやるからよ、今は眠っててくれ」

彼女の近くへ着地すると、優しい手付きでチルツチを持ち上げ、右肩に担ぎ上げる。そして先程からその場に立ち尽くしたまま動かないウルキオラへ向けて声を掛けた。

「…ウルキオラ、そのお嬢ちゃんを第五の塔まで頼むぜ。俺はこいつを治療室まで運んでく」

「…ああ」

「きやつ?!?!」

ウルキオラは一息遅れで了承する。

響転で移動し、その場にへたり込んでいる織姫を片手で持ち上げる。

些かその動きにはウルキオラらしからぬ粗さが見て取れたが、それに気付いた者は居なかった。

「そんな浮かねえ顔すんなって。ノイトラなら大丈夫だ」

「…別に気になどしていいない」

「…そうかい」

—— 本当に気にしていないのなら、終始ノイトラの居た場所を眺め続けている訳が無いだろうに。

スタークはそう思ったが、敢えて口に出さない。

こういうものは本人に自覚させるべきなのだから。

「くそツ!! 早くこの術を解いてくれ井上!!」

「黒崎君…」

再び両手を盾の内側へと叩き付けながら、一護は叫んだ。

既に傷の大半は癒えており、後もう少し霊圧が回復すれば直ぐにでも戦闘に移れる状況であった。

だが織姫は何かに耐えている様な表情を浮かべるだけで、その要望に応える素振りを

見せない。

その理由は明らか。一護の為である。

ノイトラに連れ去られそうになっていた時と同じだ。

今術を解けば、一護は間違い無く織姫を助け出す為にウルキオラ、そしてスタークへと戦いを挑む事だろう。

しかしそうなった場合の勝率は絶望的なまでに低い。

先程までの戦いの中で驚異的な力を見せ付けたノイトラ。そんな彼に一目置かれていたウルキオラに加え、不意を突いたとは言え難無くノイトラを封じる事に成功したスターク。

両名共に序列は不明だが、単純に考えても相当な実力を持っている筈である。それこそノイトラに匹敵——またはそれを上回る程の。

だからこそ、織姫は一護を解放しない。

ウルキオラに連れ去られた後、どんな目に遭うのか全く判断が付かない。下手すれば、外的要因があつたとしても宮を抜け出した罪で、死なない程度の酷い罰則を受ける可能性もある。

だがそれでも構わない。自身が犠牲になる事で、想い人が助かるのならばと。

「じゃあ後でな」

「…ああ」

スタークとウルキオラは軽く言葉を交わすと、全くの同時に響転でその場から消え去った。

その場に一人ぼつりと取り残された一護は、やがて盾を叩くのを止めると、頭を下げて両手を地面に着けた。

数秒間を置いた後、息を大きく吸い込み始める。

やがて肺の容量限界を迎えた瞬間——顔を持ち上げると同時に腹の底から叫んだ。

「くッそおおおおおオオオツ!!!」

それは虚夜宮全体へと響くかと思う程に大きかった。

単純な声量、では無い。それに込められた一護の感情が、である。

人並みの感性を持つ者であれば、直接声を聞かずとも、今の彼の姿を見ていれば感じ取れる筈だ。

感受性が高い者であれば余計に。この上無い程に、胸が締め付けられる様な錯覚を覚

え、剩え痛みを感じるかもしれない。

それ程までに強い感情が、この叫びには込められていた。

そんな一護からそう遠く無い場所にて、突如として地面が盛り上がり、轟音を響かせながら爆発した。

大量の砂埃が舞う中、其処から一つの影が飛び出して来た。

「はいっア…どういった状況だ？」

如何やら此処に来るまでに色々とあつたらしい。

顔の至る所に打撲の後らしき青痣と小さな裂傷を覗かせながら、剣八は首を傾げた。

ウルキオラと別れたスタークは、虚夜宮のとある通路を進んでいた。右肩には相変わらず意識の無いチルツチが担がれている。ちなみに帰刃形態は既に解けており、御蔭で運ぶのが楽になったと、スタークは内心で安堵していたりする。

「気が乗らねえなあ…」

スタークは空いた左手で後頭部を掻きながら、憂鬱そうに呟いた。

向かう先は勿論治療室である。

だがつい先程呟いた言葉の通り、スタークの足取りは重かった。

チルツチは治療室在住の二名に加え、他の常連メンバーと非常に仲が良い。

殺してはいけないものの、スタークはそんな彼女に手を上げたのだ。顔を出し辛いに決まっている。

「…ん？」

スタークはふと進行方向が騒がしい事に気が付く。

如何やら通路の一部に大人数が集まり、何かを話し合っているらしい。

不審に思いながらも、彼はそのまま進み続け——その光景を視界に捉えた途端、全身を硬直させた。

「どこに行つたのかな？」「うえあ？」「いずこへ？」「チルツチい——」「おかあさん！」「さびしいよう…」「おなかすいた」「びええん！」「クウーン」「母をさがして？」「三千霊里？」

「…おいおい、マジかよ」

直接面識があつた訳では無いが、スタークは即座にその正体に気付いた。

自身が十刃に加入するより前にバラガンが戯れに配下へ加えていた破面であり、その扱い辛さ故に封印された筈の破面——ピカロ。

しかも会話内容を聞く限り、理由は不明だがチルツチの事を探しているらしい。

——これは非常に拙いものではなからうか。

答えに至つたスタークは、思わず頬を引き攣らせた。

もはやピカロが何時の間に封印から抜け出したのかという疑問など吹き飛んでいた。

ピカロの探し人たるチルツチは現在、自分自身が担いでいる。それだけであれば何も懸念するものは無かつた。

問題なのはその意識が無い事だ。

つまり傍から見れば誘拐犯にしか見えない。

親が攫われている状況を子が目撃すれば、一体どんな行動を起こすだろう。例え蛮勇であつたとしても、奪還に動かない訳が無い。

「…迂回すつか」

スタークの為人を知っている者であれば、誘拐と取る可能性は万が一にも無いだろう。

だが生憎と、彼の事をピカロは知らない。間違い無く誤解する筈だ。

そう考えたスタークは、一旦来た道を引き返す事にした。

無論、音を立てぬ様に細心の注意を払いながら。

「ああー!!」「チルツチいたー!」「われ発見せり!」「あれれ?」「なんか変な人がいる…」「おっさん?」「不審者?」「変態?」「なんかチルツチを持つてるよ?」「拉致?」「誘拐?」「これはまずいですよ」「かせいふは見た!」

「やつ、べえ…!!」

だが僅かに遅かった。

無意識の内に靈圧を探っていたのか、ピカロは一斉にスタークの方へと振り向き、その姿を完全に捉えた。

そしてその右肩に担がれているチルツチの存在にも。

すると案の定、スタークを見るピカロの様子が次第に変化し始める。

知らない人から不審者へ。そして最終的には——不倶戴天の敵へと。

背筋に悪寒を感じたスタークは、即座にその場から駆け出した。

響転を使わないのは、少なく無いダメージを負っているチルツチへ負担を与えない為だ。

だがその気遣いが、この場に於いては仇となった。

「あ、にげた」「こらくー！」「まてー！」「なにしてんだオツサンめー！」「止まれひげづらくー！」「チルツチをかえせくー！」「お母さんを放せ変態ー！」「ふええええ、ママくー！」「よ…くも…」「ゆるるさ…ん…！」「その罪は重い」「くいあらためよ」「だが無意味だ」「判決をいいわたす！」「死刑！」「極刑！」「ワオーン！」「満場一致！」「異議なし！」「タマとつたらあ〜！」「カマほつたらあ〜！」「アッー！」「ぐくさいとちれ」「慈悲

はない」

「うおおおっ!?! 落ち着けお前等…ってかチルツチがお母さんってどういう事だよ!?!」

ピカロは通路を埋め尽くす様にして、逃走するスタークを追跡し始めた。

しかも逃げ道を塞ぐ為だろう、その数を活かし、周辺の通路の殆どに広く分散しながら。

それから数分後、スタークは何とか治療室に辿り着く事に成功するが、その表情には隠し切れぬ程の疲労感が浮かんでいたそうなの。

## 空座決戦篇

## 第五十九話 孤狼と金鮫と、黒幕と山爺と…

ピカロとの壮絶な鬼ごっこを切り抜けた後に浮かべていた筈の疲労感は何処へやら。スタークは表情と恰好を何時も通りの形へと戻し、通路を進んでいた。

だが外見とは裏腹に、その全身から溢れ出ているオーラは何処か荒々しい。

そのせいか、隣を歩くりりネットは極めて居心地が悪そうだ。腕を組んだり放したり、寝癖も無いのに指先で自身の髪を弄ったりと、全身を忙しなく動かし続けている。

一応この状況からの脱却は考えているのだろう。しかし声を掛け辛いのか、時折スタークの事を横目でチラチラと覗き見たりと、様子を窺うだけに留めていた。

現在、二人が目指しているのは玉座の間。尸魂界陣営との最終決戦に参加するメンバーの待機場所として指定されているからだ。

「…ん？」

曲がり角を曲がった瞬間、スタークの視界にとある人物が映った。

通路の中央を陣取る様にして立つハリベルだった。その後ろには従属官四名が静かに佇んでいる。

五人の視線は一斉にスタークへと向けられる。心做しか、ハリベルのそれが一番強い。

半ばその理由を理解しながら、スタークは無言のまま彼女達の横を通り過ぎんとする。

出来れば話し掛けないでくれと、内心で願いながら。

「待て、スターク」

だが案の定、それは叶わなかった。

五人の横を通り過ぎた直後、ハリベルがスタークを呼び止めたのだ。

やはりこうなったかと、スタークは小さく溜息を吐きながら振り返る。

「…何か用かよ、ハリベル」

「言わねば解らんか？」

無論、補足されずともスタークはその言葉の意味を理解していた。

ハリベルが問い質したのは、ノイトラの霊圧が消失した事以外に無い。

一護とグリムジョーの戦場を眺めていたハリベルは、ノイトラの頼みを聞き入れ、従属官達を連れて素直にその場から立ち去った。故にあの後の状況を知らないのだ。

探查神経は発動させていた為、序盤までは大凡把握している。

ノイトラが一護を叩きのめした後、行方不明だった筈のネリエルが現れ、暫し間を置いた後に交戦。結果はノイトラの圧勝。これはハリベルも半ば予想していた。

そして一護の始末より織姫の回収を優先したらしいノイトラへと近付くスタークとウルキオラ。

異常はその直後に起こった。ノイトラの霊圧に激しい揺れが発生したのだ。

やがてそれはネリエルとの戦闘中に見せたそれを上回るレベルまで爆発的に上昇し——まるで初めから其処に居なかつた様にして一瞬で消失。

その霊圧の動きは、持ち主が死亡する直前のもとは明らかに異なっていた。首を落とされる等といった即死状態であつたとしても、これ程まで早く霊圧が消失する事など有り得ない。

「つい先程、ノイトラの霊圧が消えた。まるで初めから其処に居なかつたかの様にな」

「……………」

「貴様…奴に何をした？」

——言い逃れは許さない。

問い掛けたハリベルの視線はそう訴えている

スタークは悩んだ。

馬鹿正直に機密事項だと言うのは流石に拙い。聡明なハリベルの事だ。恐らくは藍染が命令したのだと即座に察するだろう。

確かにハリベルは藍染へ対する忠誠心は高い方だが、ピエホヤゾマリ程ではない。寧ろ状況によつては迷わず藍染を裏切る可能性も秘めている。

決戦が間近に迫つたこの時に、足並みを乱す様な切欠を与えるのは流石に拙い。

そう考えたスタークは、一先ず返答を拒否する事にした。

「悪いが、言えねえ」

「…ほう？」

次の瞬間、ハリベルの瞳が鋭利に輝く。

——失敗したか。

慌てたスタークは、弁明とはいかずとも、一先ずこの状況を落ち着かせるべくして口を開いた。

「言い方が悪かった。取り敢えず無事なのは確実だ。怪我だつて一つも無え」

「…それで？」

「済まねえが、この程度で勘弁してくれ」

内心では戦々恐々しつつ、自身も不本意ではあつたのだと、誠意を以て説明する。

その思いが伝わったのか、それ以上の追及が返つて来る事は無かつた。

実際、ハリベルも大凡は見当が付いていた。

十刃の中で最も仲間思いのスタークが、仲間を手に掛ける可能性は万が一にも無いだろうと。しかも好敵手認定されているとは言え、非常に親しい間柄でもあるノイトラをだ。

もしそうせざるを得ない状況であつたのだとすれば、理由は一つ——藍染からの命令。

あくまでそれは推測。しかも内容的に見て容易に判断は出来無い。

だがこの瞬間を以て、ハリベルの中では藍染への忠誠心を僅かに上回る不信任感が生まれたのは確かだった。

即ちスタークの努力は無駄に終わったという訳である。

「ああ、そういや一つだけ言いそびれてた」

「…何だ」

「この先の戦いだけだよ…」

そうとは知らぬ当人は内心で安堵しながら、この場を早急に立ち去ろうとする。だが何かを思い出したらしく、即座にその足を止め、ハリベルへと振り返った。

「お前達——バラガン達も含めてだが、個人的に危ねえと感じたら、遠慮無く手を出させてもらうぜ」

ハリベルは瞠目する。見れば従属官達も同様らしく、その口を半開きにして硬直していた。

内容もそうだが、何よりその言葉に籠められた気迫は尋常では無かった。彼は本当に

スタークなのかと疑う程に。

「…貴様らしくもない」

「安心しろ。自覚はしてる」

思わずそう零すと、スタークは後頭部を搔き筆りながら苦笑した。

「約束、しちまつたからな…」

彼は不意にそう呟くと、止めていた足を再び動かし始めた。

誰にだ——とハリベルが問い返す暇も与えない。気付けばその距離は、普通に話しかけただけでは届かぬ程まで離れていた。

その後をリリネットが慌てて追い掛けて行く。

残された面々は、暫しの間その場に立ち尽くす。

だがやがてアパッチの舌打ちを皮切りに、ミラ・ローズ、スンスンと続けて口を開き始める。

「ちっ、あの野郎……」

「言うだけ言つて逃げたつて感じだな、ホント」

「どうなさりますか？　ハリベル様」

スンスンの問い掛けに、ハリベルは顔を僅かに下に向け、何か考える素振りを見せる。するとやがて後方へと振り返ると、スンスンでは無く、先程から終始黙り込んでいたテスラへと視線を移した。

元主であり親友である存在が忽然と消えたにしては、余りに落ち着き過ぎている。慌てた様子なぞ欠片も無い。

寧ろそれが如何したと言わんばかりに、背筋を正して後ろに手を組んだ何時も通りの姿で堂々と佇んで居る。

恐らくこれはノイトラに対する信頼。ハリベルには即座に理解出来た。

彼がこの程度で終わる訳が無い。必ず無事に戻つて来るに決まっている。そう信じているのだろうと。

「…何か？」

「いや、気にするな——っ」

直後、五人の頭の中に突如として声が響き始める。

それは藍染のものだった。

内容からして、主に虚夜宮へ侵入した者達へ向けたものらしい。

「…長居し過ぎたか。急ぐぞ、お前達」

『はっ』

其々漠然としたものを抱えながらも、ハリベル達は集合場所へと移動を開始した。

東仙が発動させた、縛道の七十七——天挺空羅<sup>てんていくわら</sup>。靈圧を網状に張り巡らせ、複  
 数人の対象の位置を搜索、捕捉して伝信するそれに自身の声を乗せ、藍染は自身の策略  
 を事細かに説明する。

織姫を攫った本当の目的は、一護やその仲間達、そして援軍として送られて来る隊長  
 格数名を虚圏へ閉じ込め、尸魂界陣営の戦力を半減させる為。

そうして間も無く始まる決戦に於いて、自らの陣営を極めて優位な状況へと持ち込む  
 事にあつたのだと。

「そう……もはや全てが容易い」

黒腔の中をゆつたりした速度で進みながら、藍染は言い切った。

「残る護廷十三隊を滅し去った後、空座町を使って『王鍵』を創生。そして尸魂界を攻  
 め落とす」

其処で一旦言葉を区切ると、口元に笑みを浮かべる。

それは自身の敗北の可能性など微塵も考えていない、勝利を確信した者のみが見せる表情であつた。

「君達は…そうだね、全てが済んだ後に相手をするでしょう」

その対象は一護を始めとして、その仲間達四名と、護廷十三隊からの援軍数名。

尸魂界にとっては主力と言える戦力が集結している筈なのだが、藍染はそれをさらりと後回しにした。

彼等を始末する程度、大した手間では無いと言わんばかりに。

「それまで留守は任せたよ、ウルキオラ」

最後にそう言うと、藍染は東仙に目配りをし、  
“天挺空羅”を解除させた。

やがて三人は黒腔を抜け、空座町に到着する。

藍染は徐に周囲の街並みを一通り見渡し——その表情に落胆の色を浮かばせた。

「…随分と甘く見られたものだ。この程度で私が騙せるとでも？」

「——思つておらんよ」

その問いに対して答える者が居た。

藍染の正面に勢揃いしている、虚夜宮に閉じ込められた者達も含めて数名を除いた、護廷十三隊の隊長格の面々。

隊長の羽織の上に女物の着物を羽織り、女物の長い帯を袴の帯として使つた派手な格好している飄々とした印象を受ける男——八番隊隊長、京楽 春水。

彼の隣に立つのは、真央霊術院に通つていた頃からの親友である——十三番隊隊長、浮竹 十四郎。

一見子供かと思ふ程に小柄ながら、隠密機動総司令官に相応しい、極めて冷徹な表情と鋭利な目つきを持つ女——二番隊隊長、碎蜂。

隊長とは真逆に、全身に無駄な部分が多く、如何考えても動ける身体をしていない大男——二番隊副隊長、大前田 希千代。

狼の頭を持ち、その見た目通り人の範疇を超えた体格を持つ巨漢——七番隊隊長、

狛村 左陣。

短髪でグラサンを掛け厳つい顔付きで、見た目は極道に所属していそうな風貌だが、その実は仁義に厚く極めて上司思いな男——七番隊副隊長、射場いば 鉄左衛門てつざえもん。

前回の敗戦を悔い、同様の結果を繰り返さぬ様に気合を入れていているせいで、全身から靈圧と共に鬨気を滾らせている少年——十番隊隊長、日番谷ひつがや 冬獅郎とうしろう。

あからさまにやる気満々の彼に内心で苦笑しながら、自分自身も結構躍りになつていたりする美女——十番隊副隊長、松本まつもと 乱菊らんぎく。

その中心で杖を支えに立つ、禿頭から額に掛けて刻まれた十文字の傷と、膝まで垂れる長い髭を持つ老爺——護廷十三隊総隊長であり一番隊隊長、山本やまもと 元柳齋げんりゅうさい 重國しげくに。  
藍染の言葉に答えたのは彼だった。

「只…お主の野望は此処で潰える。覚悟せい、藍染惣右介よ」

そう、実を言うところの空座町は全て偽物レプリカ。

重國の指示により喜助が作った「転界結柱てんかいけつちゆう」。見た目は四本の巨大な柱そのものが、中身は極めて特殊な効果を持つ装置だ。

使用方法としては、転送場所を東西南北に囲む様に設置。その後には柱を結び、半径一零里の穿界門となり、囲んだ場所を転送して別の空間と入れ換える事が出来る。

それを使用し、藍染が現世に現れるよりも早く、尸魂界に建てた偽物と、本物の空座町とその住人達も含めて丸々入れ換えていたのだ。

だが流石と言うべきか、藍染はそれを一目で見抜いた。

重國もそれは予想していた。

しかし空座町を入れ換えた一番の目的は、藍染を欺く事では無い。

決戦の余波による空座町の破壊を防ぎ、*“王鍵”*の創生を少しでも遅らせる為である。

とは言え、死神達にもリスクが無い訳では無い。偽物の空座町を破壊すると、度合に応じた賠償金を支払う必要があるのだ。

所詮は作り物だと高を括り、派手に立ち回ってしまえば、決戦後はその隊全体の懐事情が非常に寂しいものとなる事間違いない。

だが世界の命運を賭けた戦いだ。そんな些細な事を気にする者は、今この場には殆ど居なかった。

「…まあ良い。君達が如何に策を講じようと、私の道を阻む障害には成り得ないのだから」

臉を閉じると、藍染は自らの配下達の名を呼んだ。

「スターク、バラガン、ハリベル。来るんだ」

背後で三つの黒腔が開く。

それより現れる、藍染の配下たる十刃——その中でも特に選りすぐり精鋭達。

第1十刃、コヨーテ・スターク。第2十刃、バラガン・ルイゼンバーン。第3十刃、テイア・ハリベル。

各従属官も含め、計十四名の破面がこの場に現れた。

同時に周囲へ押し掛かる霊圧量が爆発的に上昇。脆弱な魂魄は瞬く間に潰れて死に至る世界と化した。

剣八を差し置いて最強と謳われる死神だけあり、重國はその佇まいを一切崩していない。

総隊長に情けない姿を晒すまいとしているのか、後方に立つ死神達は鋭い目付きで藍染達を睨み付けているものの、何人かが息を呑んだり身体を震わせたりしていた。

後者は霊圧にアテられたというのものもあるが、最たるものは別。ノイトラの存在だ。

前回の現世侵攻時に於いて、第5十刃という中堅に位置する階級でありながら、未解

放のまま隊長格数名を退けるといふ驚異的な実力を見せ付けた彼。

御蔭で護廷十三隊の十刃に対する認識は一変。脅威レベルを何段階も跳ね上げる結果となった。

無論、この決戦に臨むまでに出来る限りの事はして来た。

日常のそれを超える鍛錬に始まり、現状で持ち得る限りの敵の情報分析。例え付け焼刃であろうとも、勝つ為の手段を限界まで模索し続けた。

故に護廷十三隊には自信があつた。この戦いは必ず勝てる。

自らが天に立つという身勝手な野望を掲げる藍染に対し、自分達は尸魂界を守るといふ重大な使命を背負っている自負も、それを後押ししていた。

「……………ふむ…」

一見落ち着いている様に見える重國だったが、内心では珍しく驚愕を露にしていた。

その視線はとある人物——気怠げな表情を浮かべながら、此方を静かに見据えているスタークへと向けられていた。

重國は戦いが始まるより前に、一番の脅威である藍染と副官二名の動きを封じた後、その間に配下である十刃達を先に片付ける予定であつた。

だが出来無かった。支えとしている杖——封印状態である斬魄刀を解放せんとした刹那、藍染の後方より放たれた殺気を感じたのだ。

その張本人こそがスターク。殺気自体は既に治まってはいるものの、彼はそれ以降も絶えず視線を重國へ向け続けている。

重國は悟る。自身が少しでも動きを見せれば、スタークは瞬く間に此方との間合いを詰めて来るであろうと。

——敵ながら天晴。

誰よりも早く此方の動きを先読みしただけで無く、視線のみで阻止してみせたその手腕。重國は称賛の意を示すと同時に、スタークの本質を読み取った。

表面上は欠片の覇気も感じず、怠惰さが前面に出ている様にしか見えないが、秘められた実力は一級ならぬ特級。

まるで元教え子であり、今は隊長となった京楽と浮竹と同類にしか思えない。両者共に日常と戦場との立ち振舞いの落差が激しいが故に。

真央霊術院時代では、前者は女に弱く軽薄な振舞いが目立ち、後者は病弱で余り外へ出歩けず。

だがそんな普段の様子とは異なり、中身は正に別物。京楽は誰よりも思慮深く冷静で、真実を見通す力に長けていた。浮竹は自身の体質を憂う様子を一切見せず、明るく

温和で義理堅い性格から、周囲広くから慕われていた。

そして日常風景から一変——戦場では同僚どころか先達にすら並ぶ者が居ない程、極めて高い実力を発揮する。

「実に良き強者よ……」

恐らくあの破面こそが十刃の頂点。他の者も相当な実力を持つているのだろうが、やはり頭一つ抜けている。

重國は決めた。スタークには実力の確かな隊長を向かわせ、自身が動くのは最悪の状況に陥った時のみだと。

本来であれば一番隊副隊長であり、他の隊長と同等以上の実力を持つ自身の右腕に任せるところだが、生憎と今の彼には別の任務を与えている為に不在。故に選択肢から外さざるを得なかった。

副隊長として不自然の無い様、常日頃から自身の力に制限を与えている彼だが、今回は任意でそれを解ける様に手配している。間違っても敗北して死ぬ様な事は無いだろうと、重國は信頼していた。

——致し方無い。

出来る事なら自ら相手しても良かったのだが、迂闊に藍染から目を離す訳にはいかな  
い。

そう判断した重國は、杖の先で靈子の足場を小さく叩いて音を鳴らすと、自身の近く  
に立つ京楽と浮竹に目配りする。

それだけで大凡の意図を二人は理解したらしく、小さく頷きを返し、その意識をス  
タークへと向けた。

「…うむ」

如何に藍染とて、自身が眼前に佇んで居ればそう易々と動けはしない筈。

ならば自身は睨みを利かせてその動きを封じ、その間に十刃達を撃破させる。現状で  
はこれが最良の作戦だろう。

だが重國のそんな思惑は、別の形で成立する事となる。

「安心したまえ死神諸君。私が動くのはあくまで最後だ」

気付けば藍染は、何処から取り出したのか不明な、洋風な意匠の御洒落な椅子に腰掛

けていた。

重國はその言葉に対し、僅かに眉を擡めた。

つまり藍染はこう言っているのだ。自身が動くのは、配下達が全て倒された後だと。

「まあ…その必要は無さそうだがね」

藍染は最後に挑発染みた事を呟くと、ふっと鼻で笑った。

直後、それを耳にしたらしい護廷十三隊の面々、中でも血氣盛んな者達が殺氣立つ。

「落ち着かんか小童共」

だが当然と言うべきか、総隊長たる重國はこの程度で一々反応を示す様な器ではない。

佇まいを崩さぬまま、今にも敵へ向かって行きそうな部下達を軽く一喝すると、藍染へ向けて口を開いた。

「…如何やら暫く見ぬ内に目を曇らせた様じゃな」

「私は事実を述べたまでだ、山本元柳斎重國」

暫し間を置いた後、重國は叫んだ。

「…かかれ!!」

辺り一帯の空気を震わせる程の雷声。

そしてそれに含まれる気迫は、藍染の後方の上位十刃達も一瞬気圧される程であった。

「全霊を賭してここで叩き潰せ！ 肉裂かれようと骨の一片まで鉄壁とせよ!!」

重國の言葉に、隊長格の面々は表情を引き締めると、斬魄刀の柄に手を添えた。

「奴等に尸魂界の土を一步たりとも踏ませてはならぬ!!」

彼等の考えている事は只一つ。

——例え刺し違えてでも、藍染達は此処で必ず倒す。

中には尸魂界にて己の帰りを待っている妹の事を考えている者も居たが、まあそれは御愛嬌という事で。

重國が睨みを利かせている上、当人が完全に観戦の態勢に入っている為、藍染は早々動く事は無い。それは副官二名も同様だろう。

ならばその間に、自分達は一人も欠ける事無く、配下たる十刃達を確実に殲滅。最後に全員で残る三人を相手取る。

重國と同じ考えに至った死神達は、一斉に前方へと駆け出した。

死神達の動きに合わせ、十刃達も迎撃へと移るべく散開。

主君たる藍染の為。己が野望の為。友との約束を守る為。様々な思惑が錯綜しつつ、彼等は敵と対峙した。

第五の塔に到着するや否や、ウルキオラは抱えていた織姫を無造作にその場へと降ろす。

明らかに扱いが雑だ。現世より虚夜宮に攫つて来た際の面影は殆ど無い。

だが織姫はそれに抗議する事はせず、静かに立ち上がると、此方へ背中を向けたまま僅かに俯いているウルキオラへと声を掛けた。

「…怒ってるんだね」

「………何だと…？」

その発言内容が聞き捨てならなかったのか、ウルキオラは直ぐに反応を示した。

相変わらず無機質で得体の知れぬ恐怖を感じる瞳が向けられるも、織姫は怯む事無く言葉を繋いだ。

「本当はやりたくなかったんだよね。ノイトラ君を幽閉するなんて」

「………」

そんな訳があるかと、ウルキオラは否定しようとするも——出来無かった。違うという一言を、何故口に出せない。自身が怒りを覚えているとは、やりたくな

かつたとは如何いう事だ。次から次へと疑問が浮かんで来る。

ノイトラは裏切りを企てていたのだから、あの結末は当然。故に自身とスタークの行動は何ら間違つてはいない。

それを何故——この女は簡単に否定出来るのか。

しかも此方の事を全て知っているとでも言わんばかりの態度で。

色々と考えは浮かぶものの、結局ウルキオラは何も言い返せぬまま、織姫の発言を許してしまう。

「でもやらなきやならなかった。命令だったから」

——それ以上口を開くな。

理由は不明だが、ウルキオラはそう願っている自分自身に気付いた。

所詮は人間の小娘の戯言。本来であれば真面に聞く価値すら無い。

にも拘らず——何故聞き流す事が出来無いのか。何故織姫の言葉を聞く度に、胸の孔の辺りがざわつく様な不快な感覚を覚えるのか。

「そして貴方は後悔してる」

「……これ」

「同時に…そんな命令に従うしか出来無い自分に苛立つてる」

「黙れ…っ」

それはウルキオラ自身も信じられない程、今迄に出した事の無い強い声だった。

驚愕と戸惑いで一瞬硬直するも、即座にウルキオラは何時も通りの口調で話し始める。

「随分と知った風な口を利くな…女」

視線を合わせたまま、ゆったりとした足取りで織姫へと近付いて行く。

「この俺が己に怒りを覚えているだと？ 何故そう断言出来る」

互いの距離が一メートルを切った時、足が止まる。

接近の間、織姫はその場から一步も動かずにウルキオラを見詰め返していた。その瞳には欠片の恐怖すら浮かんでいない。

ウルキオラはそんな気丈な彼女を見下ろしながら、静かに問い掛けた。

「まさかとは思うが——この俺に心があるからだとも言う気か？」

「そうだよ」

「……………」

まさかの即答に、ウルキオラは思わず押し黙った。

半ば予想していたにも拘らずだ。

——ノイトラにも言える事だが、この女には何が視えているというのか。

自身の表情は一切変わっていない。ならばそれから読み取る事は困難。

それ以外で変化がある可能性があるとするれば、自身が意識せぬ内に行動の中へ表れて見たと見るべきだろう。

だがやはり無意識だけあって、自分自身では一体どのタイミングでそれが出たのか判断出来無い。

全てはそれ等の変化を全て読み取った上で、此方に心があると断言した織姫のみぞ知

る。

ウルキオラは悟る。このまま考え続けていても答えは出ないだろうと。ならば残された手段は一つしか無い。

「ならば教えろ。心とは何だ」

ウルキオラは更に半歩前に踏み出すと、織姫に対してストレートに問い掛けた。

余りに彼らしからぬ行動。本人も自覚してはいた。

だがそれでも、一刻も早く知りたかった。ノイトラを幽閉した直後から、この身の内で荒れ狂っているものの正体を。

人は大抵、自分自身の理解が及ばぬものは異物として認識する。

ならばそんなものが身近に、または己の中にあつたと知れば如何なるか。恐怖を抱かずにはいられない筈だ。そして瞬く間に排除に動く事だろう。

ウルキオラの場合、これに当て嵌まるか如何かと言われれば微妙なところである。

彼は情緒の部分に関してのみ、赤子に等しい。つまるところ、恐怖という感情すら理解していないのだ。

只一つ言えるのは、自身の中にあるものを異物として認識しつつ、不安に思っている

という事だ。

故に焦燥に駆られ、その解消の為に理解を優先した。

「俺の眼は全てを映す。捉えられぬものなぞ存在しない。だが心とやらは一度たりとも見た試しが無い」

視認不可能な魂魄の一部なのか。通常の視界では捉え切れぬ程微細な臓器の一部なのか。

様々な疑問を抱きつつ、ウルキオラは織姫の胸の中心部へ、右手の人差し指を突き付けた。

そのまま刺突を繰り返すか、虚閃か虚弾を放つ等すれば、瞬く間に織姫の命は消し飛ぶだろう。

だがやはり彼女は相変わらず怯えた様子も見せず、真っ直ぐにウルキオラを見据えている。

「貴様の胸の中を引き裂けば、頭蓋を砕けば、その奥に見えるのか？」

そうは問いつつ、ウルキオラは確信していた。

以前ノイトラが言っていた事を信じるのであれば、恐らく違うだろうと。

心というものは物質では無い。ならば肉体的な部分では如何あつても認識する事は叶わない。

つまりは精神論の様なもの。例えるなら宗教で言う神の存在といった、オカルトに類する可能性が高いのではないかと、ウルキオラは踏んでいた。

だが何れにせよ、全ては織姫の返答を聞いた後。判断を下すのはそれからでも良い。

今は大人しく待つべきだろう。ウルキオラは織姫の反応を一瞬たりとも見逃すまいと、神経を研ぎ澄ました。

「——心って、いうのはね…」

やがて織姫は両目を閉じると、静かに語り始める。

その表情は実に柔らかで、何か大切なものの事を思い浮かべている様に見えた。

「目に見えないけど、皆が持つてる」

その言葉を聞いた直後、ウルキオラの脳裏に何時ぞやのノイトラから語られた言葉が過ぎる。

心とは見て触れるものではなく、感じるものなのだ。

「そして——とても温かいもの」

織姫は自身の胸部の中心に突き付けられているウルキオラの右手を、自身の両手で優しく包み込んだ。

ウルキオラはそれを強がりの一種かと勘繰ったが、震えや手汗といった一切を全く感じなかった為、即座に否定した。

「貴方のこの掌の中にだって、それはあるんだよ。私には分かる」  
「……………」

普通なら迷わず振り払っていた。

だが如何いった理由か、今のウルキオラにはそうするという選択肢が浮かばなかった。

「…あつたところで何が変わる。逆に邪魔にしかならんだろう」

それは単純な疑問。

事ある毎に様々な感情を抱き、思い悩んだりしている様では、必ず弊害が出て来る筈だ。

外側よりも内側に意識が集中すれば、隙が生じる可能性が上がる。感情が激しく乱れれば思考回路も鈍るし、動きも単調になる。

無論、個人差だつてあるだろう。人によつては強靱な精神力で抑え込む等して、特に何も問題は無いというパターンも考えられなくは無い。

だがそれも完璧とは言いがたい。何事にも万が一というものがある。

ならばいつその事、初めから心が無い方が良いのではないだろうか。ウルキオラは合理的にそう考えていた。

「ならないよ」

だが織姫は否定した。

そしてその後には語られるのは、彼女自身を取り巻いている状況から、一護を始めとした仲間達の事。

自身が攫われ、それを助ける為に追って来た一護達。

嬉しいと思う反面、それ以上の悲しみを抱いた。

皆を護る為に、自身は大人しく虚夜宮へと連れられて行った。なのに何故、危険を冒してまでこんな場所に来てしまったのかと。

だが其処で気付いた。皆もそれと同じ思いを抱いていた事に。

もしあの中の誰かが消えたり、攫われたりすれば、きつと自身も同じ行動を取る。

傍から見れば極めて危険で愚かしい行動なのは重々承知だ。しかし何もせず仲間を只々待つているというのは、戦場で酷い怪我を負う事よりずっと辛い。

「心があつて、皆それが繋がっているからこそ頑張れる。私も希望を失わずに、ここに立っていられる」

所詮は精神論。そう斬り捨てるのは容易い。

だが悔れない。皆の心を一つにする事は、時に驚異的な力を発揮したり、他者が予想も出来無かった奇跡を起こす大きな切っ掛けとなる。

皆が一丸となつて道を突き進む——所謂チームワークも似た様なものだ。

如何に個々の力が優れていても、連携も無く勝手に動き回れば互いの足を引つ張り、無駄が増えて十分にその力を発揮出来無くなる。

逆に力が及ばず、弱点も多い場合は如何なるか。

確かにそのままでは勝てないだろう。しかし皆が互いに信頼し合い、協調して足りない部分を補えば、平均以上の力を発揮する。その証拠に、「シャヤアスト・キリンダ番狂わせ」というのはこの条件が成立した場合に起こり易い。

「貴方もそうやって悩みながら、少しずつ変わってきてる。それは絶対良い事で、間違つてないと思うの」

「……………」

無言で織姫の言葉を聞きながら、ウルキオラは思案する。

もしもの話だが、自身とノイトラとの立場が逆だったなら如何なっていただろうか。階級では無く、藍染より命令が出された側を入れ替えてという意味でだ。

恐らくは丸きり同じ結果になる事は無いだろう。それはあのノイトラの性格を考慮すれば自ずと答えに辿り着く。

確かに藍染への忠誠心は高いが、同等かそれ以上に仲間を大事にしている彼だ。スタートクに事の詳細を聞き、協力を要請されたとしても、簡単には首を縦に振らない筈。藍染の意思に背く真似はしないと思うが、何とかしてそれを回避する為に動くだろう。それが命令を中断する様に直談判する可能性も有り得る。

未だノイトラへの疑いは消えていない。

だがそれでも、彼が自身の為に必死になつて動き回る様が、何故か容易く想像出来た。ウルキオラにはそれが——存外悪く無いと感じられた。表面上は不要だと、無駄だと考えながらも。

「…俺、は——っ」

刹那、二人よりそう遠く無い位置の床を破壊しながら、何かが飛び出して来た。その正体はネルを左腕に抱えた一護だった。

「…う、そ………なんで黒崎君が…？」

織姫は困惑していた。

実を言うと、二人が第五の塔に到着する寸前に、一護は治療を終えていた。

だが織姫は「双天帰盾」を解いていない。何故なら依然として予断を許さぬ状況だからだ。

要素の一つであるスタークは離れたとは言え、ウルキオラは自身の傍に居る。

術を解けば間違い無く一護は此方へ向かうだろう。それでは彼を護る為に閉じ込めていた意味が無い。

つい先程、頭の中に響いた藍染の言葉を信じるのであれば、自身の存在は既に不要となつている。

ならばウルキオラは何時まで此方を監視している意味は無いだろうし、もしかするとその内離れていくかもしれない。術を解くならそのタイミングがベストかと、織姫は踏んでいた。

下手するとそれより前に、自身が処分される可能性も無きにしても非ずだが。

『ごめん、織姫さん』

『ごめん…なさい…』

「…舜桜？ あやめ？」

混乱する織姫の傍に、術を展開していた舜桜とあやめが戻つて来る。

そしてその口から語られるのは、一護が此処に来た理由。

簡単に言うとは、治療を終えた彼が自分達へ必死に頼み込んだらしい。何とか術を解いて、織姫の元へと行かせてほしいと。

本来であれば担い手である織姫本人が許可せねば、基本的に術は解けない筈である。

だが抜け道が一つだけ方法あった。外部から許容量を超えるダメージを与えて強制的に壊す事だ。

とは言え、「双天帰盾」の強度は一護も身を以て理解している。これを打ち破るのは容易では無いだろうとも。

理想は術を行使する織姫自身の意志が弱まった瞬間を見計らい、月牙を纏った斬撃を叩き込む事だろうと、一護達は静かにその時を待っていた。

まあ結局のところ——横で話を聞いていたらしい剣八が、まどろっこしいとぼやきながら突如として蹴りを放ち、術を叩き割るといふ形に終わったのだが。

自由の身になった一護は即座に移動を開始した。

当然、途中で敵の新手による妨害は入った。『エクスセキアス葬討部隊』隊長と名乗った、牛の髑髏の様な仮面を被ったルドボンという破面と、百を優に超える数の大量の配下達である。

何故か妙に苛立っていた様子だったが、考えていても仕方が無いとして、一護は逸る気持ちを抑えながらも戦闘態勢に入った。

だがそれは突如として現れた、ルキアを始めとする仲間達が助太刀に入ってくれた事で全て解決した。

皆がルドボーン達を引き付けてくれた御蔭で、一護はこうして織姫の元に辿り着けたという訳である。

「ッ、井上から離れろ!!」

一護はウルキオラを睨み付けながら言った。

その表情にはやや焦燥が浮かんでいる。

今のウルキオラと織姫の状態を見れば自ずと理解出来る。

傍から見れば手を下そうとしている前者と、その手を掴んで抵抗する後者の光景である。

一護がこの反応を示すのも致し方無いだろう。

「…元よりその心算だ。俺が藍染様に任されたのは虚夜宮の警護。女を殺せとまでは言

われていない」

ウルキオラは織姫へと突き付けていた右手を戻すと、一護へと向き合った。

「黒崎一護」

「っ…何だ」

見ればウルキオラは右手を斬魄刀の柄へと添えていた。

「構えろ。今此処で貴様との決着を付ける」

虚夜宮の警備を任された身としては当然の行動。

だがウルキオラの真意は別にあった。

自身がこうして悩んでいる事も、全ては一護と邂逅した時から始まっている。

ならば全ての元凶である彼との戦いを通じて、己の中にある心かもしれないそれを見極めてやると。

「…言われるまでもねえ!!」

ウルキオラより放たれる謎の威圧感に驚愕しつつも、一護は天鎖斬月を構えた。

——今こいつを倒せば、織姫を助けられる。

ノイトラを封じたもう一人の手下人は此処に居ない。恐らく藍染に追従し、護廷十三隊との決戦の地に赴く予定なのだろう。

ならばこれはチャンスだと、一護は奮起する。

織姫を救出した後、何とかして虚圏を抜け出し、仲間達の援軍に向かう。

そして藍染達を倒して大団円だ。

「ネル。井上と一緒に離れてろ」

「…りよ、了解っス!!」

指示を受けたネルは、一護に負けるなど視線で応援しつつ、織姫の元へと駆け寄って行く。

部屋の壁へと二人が移動するのを確認すると、遂にウルキオラは刀を抜いた。

——こいつは間違い無く強い。

切っ先を向けられた一護は、その隙の無さに思わず息を？んだ。

ノイトラムも相当だったが、ウルキオラムも引けを取らない。身長は別として、同じ細身の体型ながら、基本的に武骨で荒々しい印象を受ける前者に対し、後者は歪み無く綺麗に研ぎ澄まされた刃を思わせる。

以上の点より、一護はウルキオラムの戦闘スタイルを想像する。

結論として浮かんだのはこれ。火力はそれ程では無いが、死角や急所を突く等して、不足している部分を補って余りあるダメージを相手に与える事が可能——技量へ特化したタイプ。

どちらかと言えば苦手な部類ではある。これに搦め手や特殊能力が付属すれば尚更だ。

一護は内心で舌打ちした。

自身は頭の回転が良い方ではない。恐らく前半は高確率で後手に回るだろう。だがそれさえ乗り切れれば、希望は見えて来る。

根拠は始解と卍解、其々の習得の為にを行った修行の中で一護が経験したものだ。幾度と無く刃を交える度に精神が研ぎ澄まされ、動きも洗練されていった、あの不思議な感覚。全ては直感に過ぎない。だが一護は確信していた。

今の自分なら、再びあの領域に至れると。

「さあ、行く——ぜえッ!!？」

腹を決めた一護は、いざ攻め込まんと足に力を入れ——気付けば宙を舞っていた。何者かが突如として彼の襟を後ろから掴み、そのまま後方へと放り投げたのだ。

「てめっ…なにしやがる剣八!!？」

「うるせえ!!」

下手人は遅れてこの場に現れた剣八だった。此処へ来る前に付け直したのか、右目には再び眼帯が装着されている。

体勢を立て直し、何とか着地した一護は即座に抗議するが、当人は知った事かと撥ね退ける。

「俺はここに来てから一回も戦ってねえんだ！今は譲れ!!」

「はあっ!!？」

その余りに身勝手な動機に、一護は思わず素つ頓狂な声を上げる。相手は十刃。それもノイトラと同格かそれ以上のウルキオラだ。

言つては悪い気もするが、始解状態の自身に敗れた剣八程度の実力では、如何考えても勝ち目は無い。

「そんな事言つてる場合じゃ——ッ!!?」

一護は何とか説得を試みんとする。

だが次の瞬間、眼前にて剣八が浅翠色の光線へと飲み込まれた。

先程同じ光景を見たばかりだ。忘れる筈が無い。ウルキオラの虚閃である。

「……これで邪魔者は消えた。さあ、始めるぞ黒崎一護」

虚閃を放つ為に使用した左手を降ろすと、ウルキオラは再び意識を一護へと戻した。

だが直後に瞠目する。

衝撃によつて巻き上がった煙。それが晴れるや否や、視界の端に余りに想定外なものが映ったからだ。

「——いきなり随分なご挨拶じゃねえか、破面」

「…莫迦な」

煙の中より姿を現したのは、凶悪極まりない笑みを浮かべた剣八だった。

無防備な状態で虚閃の直撃を受けたにも拘らず、全くの無傷。

その有り得ない姿を目の当たりにしたウルキオラは、思わずそう零していた。

一応彼も剣八についての情報は持っていた。

護廷十三隊でも最強と呼ばれる十一番隊。その隊長であり、最強の死神を証明する

「剣八」の名を、前隊長を殺す事で引き継いだ男。

だがその中身は御世辞にも優れているとは言い難い。

卍解どころか始解すら習得しておらず、鬼道も使えぬ三流死神。戦績もそれ程良い訳でも無く、過去に始解状態の一護に相討ちに終わっているらしい。

ならば間違つても先程の虚閃に耐えられる筈が無い。

だが現実は何だ。無傷に加えて、その全身から溢れ出している霊圧は、不意討ちを食らう直前とは比較にならない程増幅している。

——まさか実力を隠していたとでもいうのか。

ウルキオラは困惑を隠し切れなかった。  
だが途中で考えるのを止める。

眼前の男の実力が如何であれ、流星に自身の帰刃形態——そして“切り札”には及ばない。

長引く様であれば早急に解放して片付け、一護の相手をすれば良いと。

「ならこつちも挨拶を返さなきゃなんねえよなア…」

不意討ちに憤った様子も無く、逆に舌なめずりしながら、剣八は名乗りを上げた。

「十一番隊長、更木剣八だ」

「…第4十刃、ウルキオラ・シファード」  
クワトロ・エスパーダ

「ツ、4番目……だって…!？」

ウルキオラの名乗り、一護は思わず絶句した。

数字だけで判断すれば、ウルキオラはあのノイトラを上回っている事になる。

ドルドーニの忠告の件もあって、完全には判断出来無い。だが少なくともグリム

ジョーより強いのは確実だろう。

「待て劍は——」

——幾ら何でも相手が悪過ぎる。

一護は咄嗟に制止の声を上げんとするが、もはや全てが手遅れだった。

「そんじゃあ早速…存分に殺<sup>や</sup>り合おうとしようぜえええええッ!!!」

劍八は刃毀れだらけの長刀を鞘から抜くと同時に、その笑みを深めながらウルキオラへと突貫して行った。

## 第六十話 其々の戦場と、剣鬼と虚無と…

碎蜂と大前田は、バラガンとその従属官達の前に立ち塞がっていた。

数だけ見ても明らかに前者が不利。だが碎蜂は臆した様子も無く、傲岸不遜という言葉  
葉を体现するかの様にその場に佇んで居る。

基本小心者の大前田は言うまでも無く、昨に全身を震わせて怯えを露にしていた。

その二人を、バラガンは興味無さげに眺めている。それはまるで道端に転がっている  
小石を見る様に似ていた。

事実、その通りだった。神を自負する彼にとって、己以外の全ての存在には等しく価値が無い。

何気無く歩を進めるだけで、容易く踏み潰せてしまう蟻の如く。

「どうした破面？ 別に全員で掛かって来ても構わんぞ？」

「た、隊長!？」

そんな事などいざ知らず、碎蜂は不敵な笑みを浮かべながら、斬魄刀の切っ先を突き

付けてバラガン達を挑発する。

恐怖や不安が入り混じって落ち着かないのだろう。先の発言に対し、大前田は素っ頓狂な声を漏らした。

だがバラガンは反応を示さない。それどころか従属官達も眉一つ動かさずにその場に佇んで居る。

前者はまだ理解出来る。碎蜂の存在自体を無価値として一切意識を向けていないが故に、その発言を聞き流しているのだろう。

しかし後者は違う。自分達が絶対崇拜する神が貶されたとして騒ぎ立てていても何ら不自然では無い筈だ。

これは如何いう事か。

理由は簡単だ。全てはバラガンと同じ価値観を共有し、心酔しているが故。

我らが神が無価値と評しているのだ。ならばそれに従わずして何とすると。

他の十刃の従属官であれば、主が無反応だったとしても間違い無く反応を示していただろう。その辺りが、第2十刃メンバーの一味も二味も違う在り方を示していた。

「所詮は蟻共の考える事か…下らん」

そう零しながら、バラガンは偽物の空座町を一瞥した。

本当に眼前の敵の事など眼中に無い振る舞いだ。

碎蜂は眉を顰めると同時に、このクソジジイと内心で呟きつつ、昨に殺意を剥き出しにする。

「ボスは死神等を始末した後、態々尸魂界に出向く気らしいが…儂はそんな手間を掛ける必要など無いと考えとる」

碎蜂は直後に気付く。そして背筋に走る悪寒。

——まさかこの短時間で気付いたというのか。

バラガンの発言内容を良く考えてみれば解る。彼はこの偽物の空座町の仕組みを既に把握しているのだ。

ならば次に如何なる行動を取るかは想像に難くない。『転界結柱』の破壊だ。恐るべき洞察能力の高さ。虚圏の神を自負し、他者とは隔絶した精神と思考を持つバラガンならではのと言える。

この辺りは絶対者たる藍染と似通ったものがある。

故に碎蜂が一瞬戦慄めいた反応を示すのも致し方無かった。

「ジオ、ニルゲ」

『はっ!』

バラガンは六人居る従属官の内、比較的近くに立っている二人に声を掛けた。

ジオ・ヴェガと、ヘルメットの様な仮面の名残を被った、両目に隈取に似た仮面紋がある下顎の牙が突出したための大男——破面N<sup>ベイン・テイシエテ</sup>o・27、ニルゲ・パルドウツクだ。

「貴様等はこの二匹の蟻を相手せい」

「はっ!!」

「…必ずや、勝利を」

二人は片膝を突いて礼をすると、ジオは碎蜂へ、ニルゲは大前田へ視線を移した。

「ポウ、クールホーン、アビラマ、フィンドール。貴様等は町の外周へ向かえ」

バラガンは続け様に残る従属官達へ命令を下す。

顎に仮面の名残を残した、両頬に薄緑色で頂点を内側とした三角形の仮面紋と、虚ろな表情を浮かべた、ヤミーをも超える体格を誇る巨漢——破面N<sup>o.</sup>25、チーノン・ポウ。

カチューシャ状の仮面の残骸を装着し、紫色のエキゾチックな髪をした厳つい容姿を持つ大男——破面N<sup>o.</sup>20、シャルロット・クールホーン。

鳥の頭蓋骨を模した仮面の名残を被った、ポウと同様に顔面に赤色で隈取のような仮面紋がある、何処ぞの部族の様な風貌を持つ男——破面N<sup>o.</sup>22、アビラマ・レット。

顔の殆どを仮面の名残で覆った、長髪で細見の男——破面N<sup>o.</sup>24、フィンドル・キャリアス。

「場所は東西南北の四方。何かしら仕掛けがある筈じゃ。それを壊せ」  
「んなつ!!?」

その指示内容に驚愕の声を漏らしたのは大前田だった。

彼はバラガンが偽物の空座町の仕組みを既に把握していた事に今更気付くと、同時に慌て始める。

装置を壊されてしまえば、折角転移させた本物の空座町が元通りになり、そのまま戦場となってしまうのではないかと。

碎蜂には悪いが、この場は彼女に任せ、自身はこの四人の行動を阻止に動くべきだろう。

他に手が空いている者が居れば、協力を要請するなり出来たのだが、生憎と手一杯。もはや頼れるのは自分自身のみ。

——兄様は頑張るぞ、まれよ希代。

涙目で自身の無事を願っているであろう妹の姿を思い浮かべながら、大前田は珍しく覚悟を決めた。

「何だその間抜け面は。『転界結柱』には斑目、綾瀬川、吉良、檜佐木の四人が配置されている事を忘れたか？」

「…へ？」

だがそれは杞憂に終わる。

碎蜂より放たれた衝撃の事実によって。

「言つたぞ私は」

——なにそれ聞いてない。

大前田は思わず口から出そうになったその言葉を？み込んだ。

てつきり彼は、碎蜂の言う四名はこの決戦には参加させられなかった留守番組であると認識していた。そしてさり気に自身の方が頼りにされているのだと優越感に浸っていたりする。

しかし現実は如何だ。単純に敵と戦うだけの大前田に対し、四人は“転界結柱”を守るという重要な任務を任せられている。

それに伏兵として用いられるという事は、重要な戦力の一つとしてカウントされているという証明に他ならない。

つまりこの四人は大前田よりも頼りにされているというのが事実であった。

「大方貴様が油煎餅でも齧っていて、私の言葉を聞き漏らしたのだろう」

啞然とする大前田に対し、碎蜂は冷ややかに言い放った。

——本当は伝えていなかったかもしれないが。

内心ではそんな自身の不手際に見て見ぬ振りをしつつ。

この時、碎蜂は気付いていなかった。

バラガンは伏兵の可能性も視野に入れた上で、自らの従属官達を向寄せた事に。

全員が副隊長クラスであっても、この精鋭達であれば十分撃破可能だとして。

即ち安心出来る要素は何処にも無いのである。

正直、これに気付けと言うのも酷な話かもしれないが。

「さて…そろそろ始まるぞ大前田。精々私の邪魔をしない様に努めろ」

「りよ、了解っす!!」

二人は何時でも仕掛けられる様、重心を落としつつ構える。

「行け。儂を落胆させるなよ…貴様等」

全身より有無を言わせぬ圧力を滲ませながら、バラガンは従属官達に呟いた。

「敵の血で染まっておらん道など、この儂に歩かせるな」

そして直後に叫ぶ。

先程の重國の一喝に対抗するかの様に。

「言え！ 貴様等は誰の部下だ!!」

『はい!!』

従属官達は心酔する主であり神を失望させる訳にはいかないと、間髪入れずに答える。

其々が斬魄刀を抜き、バラガンを隙間無く守護するかの様な陣営を組みながら。

「我々は『大帝』バラガン・ルイゼンバーン陛下の従属官!!」

「あらゆる敵を——」

「華麗に!!」

「…粉碎し!」

「必ずこの戦場を——」

「美しく!!」

「…奴等の血肉で染め上げて御覽に入れます！」

途中で茶々を入れている者が居た様だが、他の者がすかさずフォローしており、幸いにもバラガンの怒りを買う事は無かった。

やがて周囲より響き始めた戦闘音を皮切りに、バラガンを除いた全員が動いた。

指示を受けていた四人の従属官は、響転で移動。

ジオと碎蜂、そしてニルゲと大前田は、互いの刃を交差させた。

二番隊とは別方向へと向かった冬獅郎と乱菊は現在、ハリベルとその従属官四名と対峙していた。

既に抜刀している前者とは裏腹に、後者は自然体で佇むばかり。明らかに余裕に満ち

溢れている。

「十番隊隊長、日番谷冬獅郎だ」

「同じく副隊長、松本乱菊よ」

恐らくは挑発の一種なのだろう。冬獅郎は自身の感情を律しつつ予測した。

——この程度で熱くなるものか。

平静を保ちながら、名乗りを上げる。乱菊もそれに続く。

史上最年少の隊長でありながら、この精神力。戦士としては文句無しに及第点だ。

死と隣り合わせな戦場にて、これと同じ真似が出来る者はそうは居ない。

同時に内心では相当に警戒していた。

数だけを見ても明らかに不利。そして何より、向こう側は間違い無く、乱菊を含めた

自身の情報を持っているだろうと。

本当に今更だが、前回の現世侵攻に於いて、冬獅郎は余りに手の内を晒し過ぎた。原

因は言わずもがな。

一応切り札は残っているものの、制御し切れているとは言い難く、発動にも多大な時

間を要する。

——それでも勝機は必ずある筈だ。

今一度、冬獅郎は気を引き締めた。

確かに状況は厳しいものの、上手いタイミングで切り札を発動出来れば、自身の勝利は揺るがない。

冬獅郎はイメージする。自身が眼前の敵を倒すまでの流れを。

まず従属官達の相手は乱菊に任せ、時間稼ぎに徹してもらう。その間に自身は確実に十刃を打倒し、速やかに乱菊の援護に入る。

あくまで理想ではあるが、現状ではこれがベスト。

非常に厳しい状況下での立ち回りを要求される乱菊に内心で謝罪しつつ、冬獅郎は勝敗の鍵を握っている自身に喝を入れた。

此処で躓いている様では、この刃は永久に藍染に届かないぞと。

「…どーするっ?」

「あたしに聞くなよ」

冬獅郎と乱菊の名乗りから暫し間を置いた後、不意にアパッチとミラ・ローズが小声で話し始めた。

二人の表情には困惑が浮かんでいた。

「一応こっちも返したほうが…」

「やっぱそうか？」

内容は冬獅郎と乱菊の名乗りに関してだ。

彼女達もある程度の武人としての矜持がある。元は違ったのだが、ハリベルの影響が大きい。

こうして堂々と名乗られたのだから、礼儀として素直に此方も名乗り返すべきかと相談していたのである。

だが案の定、そんな二人に横槍を入れる者が現れた。

「…はあ、別にそんな義務は無いでしょうに。これだから頭でつかちの脳筋は…」

「てめえスンスン、喧嘩売ってのか!!？」

「コツチは真面目な話してんだ！ 邪魔すんじゃねえ!!」

態とらしく溜息を吐いくスンスンに、アパッチとミラ・ローズは歯を剥き出しにして

怒り始めた。

僅かな殺意と共に、その怒気をスンスンへと向ける。すると彼女は次なる火種を投下した。

「きやあー、助けて下さいテスラさーん。脳筋二人が苛めてきますわー」

「おわっ!!」

『あゝあゝッ!! テスラてめえ何イチャついてやがる!!!』

「何で俺が!!」

次の瞬間、スンスンは棒読みの悲鳴を漏らしながら、隣のテスラに抱き着いて助けを乞いたのだ。

テスラは突然の事に一瞬全身を硬直させるも、優しく受け止める。

どんな状況でも女性には紳士的に対応すべしという、ノイトラの教えを守っているのだ。

だがその行為はアパッチとミラ・ローズを刺激するだけで、今度はその怒りの矛先がテスラへと向けられる事となる。

理不尽な、と嘆く彼の腕の中では、スンスンが勝ち誇った笑みを浮かべていたりする

のだが、それを知る者は当人以外に居なかった。

——コントを見に来た訳ではないのだが。

従属官四人の遣り取りを見ていた冬獅郎と乱菊の心情はこれだった。

「お前達は……本当に……」

主であるハリベルも、右手の指先を額に当てながら呆れを示していた。

全く以て緊張感が無い。逆にし過ぎるのも駄目ではあるのだが、やはり一定量は無ければ気が緩む。

こんな調子で大丈夫なのだろうか。ハリベルは溜息を吐いた。

「……気は引けるが、勝手に始めさせてもらうとするか」

「そうですね」

暫し迷った末、冬獅郎は此方から仕掛ける事に決める。このままで埒が明かないとして。

乱菊も冬獅郎の意見に同意する。

全ては戦場で隙を見せた者こそが悪いのだ。

「松本はあの四人を頼む。出来るな？」

「勿論。隊長もお気を付けて」

「ああ」

冬獅郎は乱菊に指示を出した後、狙いをハリベルへと定め、間合いを詰めるべく駆け出した。

そう、冬獅郎は初めからハリベルが十刃である事を見抜いていたのである。

軽く確認しただけで判る膨大な霊圧。そして敵を前にしても一切動じぬ余裕溢れる佇まい。寧ろ間違える方がおかしい。

先程の従属官達によるコントも、それを確信させる要因だった。

「なっ…!!」

「——相手が違うんじゃないか？ 隊長さん」

だが先手を取る筈だった冬獅郎の動きは、直後に止められる事となる。

何時の間に現れたのか。眼前にて後ろで腕を組んだ体勢で佇むテスラによって。密かに終始敵を警戒し続けていた彼は、冬獅郎が動くと同時に、自身に抱き着いているスンスンを引き剥がして響転で移動。瞬時に冬獅郎の前へと立ち塞がったのだ。

「まずボスの前に立ち塞がるのは下つ端——定石だろうか？」

「ちっ……！」

「この先に行きたければ……この俺を倒してからにしてもらおう」

テスラはサーベル状の斬魄刀を引き抜くと、切っ先を冬獅郎へと突き付ける。

全身からは綺麗に研ぎ澄まされた霊圧と、静かなる怒気が放たれていた。

——隙が見当たらない。

立ち塞がるテスラに対し、冬獅郎は舌打ちを返しつつ、背中に冷や汗を滲ませた。

これが下つ端とは何の冗談だ。護廷十三隊の席官にも及ばぬ末端の一般隊士こそ、そう言うべきだろうと。

解放の事を考慮すれば、この破面は最低でも副隊長クラスに匹敵する。

流石に上位クラスの十刃ともなれば、率いる部下のレベルも比例して上がると見るべきか。

冬獅郎は改めた。限定解除の状態であれば、十刃以下の破面など警戒に値しない相手であるという認識を。

「待て、テスラ」

「…ハリベル様？」

睨み合う二人の戦意が遂に限界点へと達するかと思われた刹那、突如としてハリベルが口を開いた。

冬獅郎を牽制したまま、テスラは顔のみを後方へと振り返らせた。

「此奴は私が相手をする。お前は副隊長の方をやれ」

「それ、は……」

想定外なハリベルの命令に対し、テスラは思わず口籠った。

自身の前に居るのは隊長だ。しかも死兵。敗北は万が一にも無いとは思うが、傷の二つや二つは負う可能性はある。

主の手を煩わせるのは、従属官として失格だというのが表向き。その本音は——自

身が恋い焦がれて已まない女性が血を流す姿を見たくは無という我儘。

テスラは迷った。現状ではどの選択肢が最良なのかを。

そんな彼の心情が手に取る様に理解出来たハリベルは、思わず苦笑を浮かべた。

「そう渋ってくれるな」

「しかし…」

テスラが力を付けようと決意したのは、何時も孤独に戦い続けていたノイトラへと近付く為だ。

あの他者を寄せ付けぬ圧倒的な力に憧れ、そんな彼の背中を任せられる様な存在になりたい。そう心より願いながら、日々の過酷な鍛練に打ち込んで来た。

だが今は違う。厳密に言うとう目的が変わったのだ。

正式に第3十刃の従属官へと異動する事が決まった時、ノイトラに言われた言葉が切っ掛けである。

——その今迄培った力を、今度は惚れた女の為に使え。

俺は俺でやっていけるから安心しろと背中を押す彼に、テスラは自身の目頭が熱くなったのを覚えている。

そんなノイトラの応援に応えたいという思いもあつて、テスラは簡単に首を縦に振る事が出来ずにいた。

「お前の気持ちは有難く思う。だが流石に私も、実戦から離れてばかりでは腕が鈍る」  
「…承知しました」

流石にここまで言われれば、テスラも引き下がらずにはいられない。

彼は即座に思考を切り替えると、斬魄刀を腰の鞘に納め、その場から踵を返した。

「御武運を」

「ふっ、お前もな」

最後まで此方を気遣う仕草を見せるテスラに、ハリベルは柔らかな笑みを浮かべながらその背中を見送った。

「待たせたな」

「構わねえ。どっちにしろ勝つのは俺だからな」

謝意を示しつつ、ハリベルは視線を前方へと向ける。

そんな彼女に対し、冬獅郎は不敵な笑みを返した。

「トレス・エスパルダ第3十刃、ティア・ハリベルだ」

「…3番目か」

挑発をさらりと流しながら、ハリベルは名乗る。

その階級を耳にした冬獅郎は小さく呟いた。

だがハリベルはその呟きに含まれた僅かな安堵を見逃さなかった。

「安心したか？ 思ったより序列が低い事に」

「…そんな事はねえ」

ハリベルが問い掛けると、少々遅れて冬獅郎は否定を返す。

正直言うとう嘘だ。確かに冬獅郎は安堵していた。

この決戦の場に現れた十刃は三名。霊圧の大きさを判断した結果だが、強ち間違いで

は無い筈だと、尸魂界陣営は考えている。

藍染が決戦の場に連れて来た連中だ。状況的に見て、間違い無く序列は上位——  
一番から三番に絞られる。

ハリベルが第3十刃であれば、他の二名の何れかが第2十刃と第1十刃。

客観的に見れば、冬獅郎の相手はこの場では最も低い階級である。

この程度なら、意外と早く倒して藍染に向かえるかもしれない。隊長とは言え、未だ未熟の域を出ない冬獅郎が不意にそう考えてしまうのも致し方無いだろう。

「…青い、な」

「なんだと…？」

争いを好まず、極力避ける生き方をして来たハリベルとて、数々の死線を潜り抜けて来た強者だ。冬獅郎の考えを見抜けぬ筈が無かった。

この若さで隊長になったという事は、やはり天才なのだろう。

だがふとした拍子にこうして自身の考えを表に出す時点で、まだまだ甘い。

容易くテスラに足止めを食らった時点で、実力面でも発展途上なのは言うまでも無い。

——対峙するのが後十年遅ければ、また結果は違っていたかもしれないが。基本辛辣ではあったが、ハリベルは冬獅郎の事をそれなりに評価していた。

「まあ良い」

ハリベルは背中に携えた斬魄刀、その鏢の一部にある輪に右手の人差し指を通し、一気に引き抜く。

露になったのは、中心が空洞になっている巨大な段平のような形状を持つ刀身。抜刀の勢いそのまま宙で何度か回転させ、やがて柄を握る。

「先達として胸を貸してやろう。来い、少年」

「っ、上等だぜ……!!」

余裕溢れた態度と口調で言うと、ハリベルはそれの切っ先を向ける。

格下どころか、少年呼ばわりされた冬獅郎は、ほんの一瞬だけ眉を顰める。

だが直ぐに平静を取り戻すと、戦意を滾らせながらハリベルへと向かって駆け出して行った。

バラガンやハリベル達とは一際離れた位置に移動したスタークは、一息遅れで自身の前に現れた二人の死神——京楽と浮竹へと視線を移した。

「…あんた等が俺の相手かい」

「そういう事になるねえ…」

「卑怯と罵ってくれても構わない」

スタークの問いに、京楽は肩を竦めながら答えた。

それに続けて、浮竹は表情を引き締めつつも何処か申し訳無さ気に言う。

何せ相手は十刃一人と、明らかに力の弱い少女の破面一人。それに対し、此方は護廷

十三隊でも上位の実力を持つ二人。

如何見ても不利なのはスターク側である。

幾ら敗北が許されない状況とは言え、性根が優し過ぎる浮竹は気にせずにはいられた。戦いに妥協しない京楽であれば気にしないだろうが。

「言わねえよ。戦いに卑怯もクソも無えだろ」

「そう、か…」

「…理解してくれて嬉しいよ」

だがスタークは何でも無いとでも言わんばかりの態度で返す。

浮竹の事を氣遣つてか、それとも余裕の表れか。

今迄培つた観察眼を総動員しても全く読めないスタークに対し、京楽は底知れぬ不氣味さを感じていた。

「リリネット」

「…な、なにさ」

「離れてろ」

「——っ」

気怠げな表情をかえぬまま、スタークは自身の傍に立つリリネットを呼ぶと、抑揚の無い声で指示を出した。

リリネットは思わず口を噤む。

確かにスタークは正しい。何せ自身は下級大虚にも劣る弱小破面。手助けするどころか、足を引つ張る以外の何ものでも無いのが現状だった。

とは言え、戦いたい気持ちも少なからずある。

だがその結果は容易に思い浮かぶ。

眼前の二人は身に纏う霊圧量からして明らかに隊長クラス。

一太刀の元に斬り伏せられるか、態々相手する価値も無いとして軽く流されて終わるだろう。

リリネットは己の余りの不甲斐無さに、その小さな両手を握り締めて悔しさを滲ませた。

「安心しろ」

「え…？」

彼女が顔を俯かせ掛けた瞬間、スタークが突如として声を掛けた。

依然として表情は変わらぬものの、その声には何処か相手を氣遣う様な優しさが見て取れた。

「多分、直ぐに帰刃が必要になる。それまで大人しく待つてろ、な？」

その言葉に、リリネットは思わず瞠目した。

他者を傷付ける事を好まない性分が故に、スタークは本気を出そうとしないのが常だ。例えそれが敵であろうとも変わらない。否応無しも殺傷能力が跳ね上がる帰刃など以外の外。

だが先程の発言を振り返ってみるに、スタークはそれまでの考えを一転させんとしている。

それ程まで眼前の二人が強いのかとも考えたが、リリネットは即座に否定した。

全てはノイトラとの約束を守る為。これに尽きる。

藍染の密命から実行までの事の顛末は、スタークから聞いていた。消える直前にノイトラが叫んだ言葉と、それに込められた真意についても。

自身は必ず戻る。だからスタークのみならず、仲間達全員で無事に生きて返って来いと。

「…わかった。でもそれまで絶対負けちゃ駄目だかな！」

「ああ」

リリネットは人差し指を突き付けながらそう言うと、その場から離れて行った。彼女を見送った後、スタークは視線を京楽と浮竹へと戻した。

「…おやおや、あの娘を一人にして良かったのかな？」

暫し間を置いた後、不意に京楽は口を開く。

その顔に何処か挑発的で暗い笑みを浮かべながら。

「もしかすると僕らの誰かが——」

「らしく無えコト言うなよ」

後続く筈だった言葉を、スタークは強制的に切った。

彼は京楽の言わんとして、既にある事を既に理解していた。加えてそれは此方に精神的な揺さ振りを掛ける意図が含まれているのだとも。

スタークは京楽を一目見た時、てっきり自身と同じ性分を持つ者だと思い込んでいた。

だが時間の経過と共に、その考えは一変。

自身と京楽とは、根本の部分で決定的な違いがあると。

穏やかな表情を浮かべつつも、欠片も隙を見せない佇まい。そして先程の態度と言葉が、京楽の隠された本質を示す決定的な証拠となった。

「見た感じ……あなたとあの爺さん辺りは、勝つ為なら大抵の事は出来るタイプみたいだが——外道までは堕ちてねえだろ」

上に立つ者というのは、部下に信頼される要素は勿論の事、清濁併せ呑む度量が必要となる。

それに京楽が本当の外道であれば、浮竹に自身の注意を逸らす為に何かしらの指示を出した後、真つ先にリリネットの確保へと向かっていた筈だ。

総隊長である重國より真っ先に目配りで指示を受けていた事も考慮すると、京楽は隊長の中でも限り無く上位に位置する者であると推測出来る。

それに対し、隣に立つ浮竹はまた違うタイプだ。

京楽のリリネットを引き合いに出す様な物言いに対し、顔を僅かに顰めていたのを、スタークは見逃していなかった。

「違うか？」

「……これは参ったねえ……」

スタークは最後に問う。

京楽は肩を竦めると、それ以上口を開く事が出来無かった。凶星を指されて動揺したのもあるが、スタークのその観察眼の鋭さに驚愕する余り。

隣では浮竹も瞳目し、驚愕を露にしていた。

「だから…頼むぜ隊長さん方」

「…何をだい？」

訝しむ京楽を尻目に、スタークは斬魄刀の柄を右手で握る。

同時に怠惰さが目立つ表情が一転して引き締まると、その瞳が鋭利な輝きを放った。

「極力殺しはしたかねえんだが…生憎と、今の俺はあんま手加減出来無えんだ」

厳密に言えば手心を加える訳にはいかないのだ。

確実に敵を打倒し、自身が最後まで生き残る為には。

全てはライバルであり大切な仲間であるノイトラとの約束の為に。

「精一杯足掻いて、生き残ってくれ」

刹那——スタークの姿がその場から忽然と消えた。

それは予備動作も、剩え残像すら残さぬ、超高速で移動したというのが信じられない程の動きだった。

寧ろ初めから其処に居なかったと言われた方が納得出来る。ファンタジー風に時間操作系統の魔法を使用した、というのもありだ。

「ッ、許せ浮竹!!!」

「うわっ?!」

京楽が動いたのは完全に無意識の内だった。

反射的に片手で浮竹を真横に弾き飛ばすと、間髪入れずに京楽は瞬歩で回避行動を取っていた。自らの竹帽子の止め紐が外れ、宙を舞うのもお構い無しに。

それが僅かに遅かった事に気付いたのは、自身の胸元に浅く刻まれた横一筋の太刀傷より発せられた痛み。そして其処から宙に舞った鮮血が、視界へと映った瞬間だった。

「…悪い。そーいや肝心な事を忘れてたぜ」

斬魄刀を真横に振り抜いた体勢のまま、スタークは口を開いた。

余りに斬撃が鋭く、速過ぎたのだろう。その刀身には一滴の血も付着していなかった。

「<sup>プリメーラ・エスバダ</sup>第 1 十刃、ココロテ・スタークだ。以後お見知り置きを…ってか?」

名乗ると同時に、スタークの全身から放出された膨大な霊圧と、圧倒的猛者の貫禄。京楽と浮竹は全身から冷や汗を流しつつ、己の中に久しく芽生えた恐怖心を感じていた。

迫り来る斬撃を尽く躲し、時にいなしながら、ウルキオラは剣八の戦闘能力を観察し続ける。

型は無い。只管に敵を殺す事のみを追求した、正に邪道の剣。

だからと言つて正道の剣に劣っている訳では無い。寧ろ実戦に於いては前者の方が優れている。

恐らくは純然たる鍛錬では無く、幾多の実戦の中で腕を磨いたのだろう。その泥臭さはグリムジョーに通ずるものがある。

ウルキオラとてこの様な相手は今迄に何度か経験している。故に大凡の対策も既に確立している。

剣八についても、間も無く能力の把握が終わるところだ。

もはや臆する要素は皆無と言えた。

——雑魚と断ずるのはやや尚早か。

だがウルキオラは判断を一先ず先送りする事にした。

腐つても隊長といふべきか、斬撃自体は相当な重みを持っている上、心做しか時間の経過と共にその威力が増して来ている。

加えて型に囚われない戦闘スタイルなだけに、攻撃を先読みする際の難易度が非常に高い。

戦いという観点に於いては、実に理に適っている。これ程やりにくい相手は中々居ないだろう。

そして野性的な勘や反応速度にも秀でているらしく、此方のフェイントを織り交ぜた回避行動を看破して斬り掛かるといふ芸当も何度か見せている。

交戦直後と比較すれば、もはや別人と言つても良い領域まで、今の剣八は至っている。

戦いの中で成長し続ける程の潜在能力の高さがそれを助長しているのか、または全力を出すまでに時間が掛かるのか。

確証は無いが、勝負を逸る余り藪をつついて蛇を出す様な愚行を犯す訳にはいかない。

「はっ、ハアツ!!」

それを知らぬ剣八は、相変わらず凶悪極まりない笑みを浮かべながら右手に握った斬魄刀を振るい続ける。

ウルキオラは態とその斬撃を、何度か自身の身体に掠めて威力を検証してみたが、現状では鋼皮を傷付けるまでには及ばないという結果に終わった。

故に余り危険視はしてはいなかったものの、慢心も過ぎれば足元を掬われる可能性が上がるとして、時折反撃を返しながら回避を続けていた。

傍から見れば押しているのは剣八。ウルキオラは終始待ちへと回っているのが当たり前だろう。

しかし良く見ると、前者の全身には少なく無い数の太刀傷が刻まれている。

刃先が皮膚へ食い込む直前に、驚異的な反応速度でその部分を引く事によって被害を薄皮一枚程度に留めてはいる。

とは言え、この場で最も血を流しているのは剣八。常人であれば少なからず焦りを覚

える状況だ。

これがグリムジョーであれば十中八九、此方の攻撃は当たらず一方的に自身が傷付けられるという状況に更に怒り狂う余り、攻めが単調になっていた事だろう。

そして敵側に付け入る隙を与え——最終的に敗北を喫する。

だが剣八にはそれが無い。

その程度が如何したと言わんばかりに、攻めの姿勢を一向に崩さず。寧ろ傷が増え、血を流す度、その戦意はより激しく燃え上がっていると来た。

「…面倒な」

時間の経過と共に、ウルキオラは僅かに焦燥を覚えていた。

何せ剣八の後には一護も控えている。自身の敗北の可能性は限り無く低いとは思いますが、万が一の可能性も考慮して、この場での消耗は極力押さえたいのが本音だった。

——このままでは埒が明かないか。

先程までの慎重姿勢から一転してそう判断すると、ウルキオラは攻勢に出る事を決めた。

後方へと下がり続けていた足を止め、反転。斬撃の嵐の中を潜り抜けながら、前方へ

と踏み込む。

「ッ!!?」

ウルキオラの突然の行動に、剣八は思わず瞠目した。

だが直後にその表情に喜色を浮かべると、攻撃の手を更に激しくする。

それ等を全て躲し、ウルキオラは剣八の懐に入り込むと、刀身を下段より斜め上に振り上げた。

剣八は回避の為、反射的に後方へと半歩引く。

だが僅かに足りなかった。次の瞬間、剣八はその右下腹部から左肩まで一筋の太刀傷を負ってしまう。

更に追撃を仕掛けんとしたウルキオラだったが、突如として眼前に蹴りを放たれた為、中断せざるを得なかった。

空いた左手を顔の前に持ち上げ、迫り来る右足を受け止める。

案の定、これも只の蹴りとは思えぬ威力だったが、鋼皮でも十分に耐えられる範囲だ。ところがこれは攻撃では無かったらしい。

剣八はウルキオラを踏み台にする様にして、大きくその場から跳躍。

二人は互いに距離を取る形となった。

「強エな、てめえ…!!」

「……………」

自身に刻まれた傷を一瞥すると、剣八が口を開いた。

決して浅くは無い筈のだが、痛みに顔を顰める様子は一切無い。寧ろ興奮冷めやらぬといった感じだ。

「……これで理解出来た筈だ。貴様では俺に勝てん」

だがこの反応は、ウルキオラの中では予想の範囲内だった。

刀身に付着した血を払いながら、冷ややかに言い放つ。

「ましてやその程度の攻撃では、俺の鋼皮を斬り裂く事すら叶わん」

「……………」

「無駄な抵抗は止め。そうすれば一瞬で終わらせてやる」

ウルキオラの言葉に、劍八は顔を俯かせながら黙り込む。

これ程の差を見せ付けたのだ。戦闘狂であつても流石に理解した筈。そう考えたウルキオラだったが、直後に覆された。

「…そいつは無理な相談つてやつだぜ」

「何…?」

不意に放たれた眩きに、内心で首を傾げる。

劍八は依然として顔を俯かせてはいる。だが良く見ると、その空いた左手は右目を覆っていた眼帯を驚掴みにしていた。

「折角盛り上がってきたのによオ…」

次第に劍八の口元が吊り上って行く。

—— 一体何をする心算だ。

ウルキオラは警戒心を露に、斬魄刀を構える。

「これで終わりは勿体無エだろ!!? もっと楽しもうぜウルキオラア!!!」

剣八は顔を上げてそう叫ぶと、左手を一気に引き、留め具を引き千切りながら眼帯を強引に取り外した。

直後、剣八の全身から膨大且つ暴力的な霊圧が溢れ出す。

それはこの第五の塔全体が震え、所々が軋みを上げる程。場所によっては罅すら入っている。

「…有り得ん。何だその霊圧は」

ウルキオラは珍しく困惑していた。事前に得ていた情報とは明らかに違うではないかと。

本当にこれと一護は始解の状態で相討ったというのか。

冗談も休み休み言え。霊力だけで判断しても、こんなレベルの敵を相手取るには、最低でも帰刃状態の下位十刃を引っ張り出さなければならぬ。

「なんだよ…あれ…!?!」

離れではネルと織姫の傍に立って居る一護が、驚愕の声を漏らすと同時に、その思考回路を盛大に混乱させていた。

「剣八って、こんなに強かったか…!?!」

不意討ちの虚閃が直撃しても無傷だった事に加え、あのウルキオラと真面に斬り合えているというのも信じ難い。

そして何より注目すべきは、現在進行形でその身から溢れ出している霊圧だ。

装着者の霊圧を無限に喰らい続ける眼帯を外せば縛りが無くなり、剣八は全力の状態となるのは直接戦った一護も知っている。

だが上昇具合が尋常では無い。下手すると自身が戦ったあの時の数倍に及ぶのではないだろうか。

一護は剣八の底知れない実力に対して、僅かな恐怖心と同時に期待を抱いた。もしや今の彼ならウルキオラに勝利出来るのではないだろうか。

「…何をした」

「封だよ」

構えを解かぬまま、ウルキオラは問い掛ける。

左手に持った眼帯を地面へ投げ捨てると、剣八は律儀に説明を始めた。

「俺は普段から、この眼帯に自分の霊圧を喰わせる事で、力を抑えて戦ってた」

ウルキオラは疑問に思った。

何故そうまでして、自らを窮地に追い込む様な真似をするのかと。

だがそれは即座に解消する。

「それでもしねえと——敵が脆すぎて戦いを楽しむ暇が無くなっちゃうからなア!!!」

「ツ!!」

説明を終えると同時に、剣八は一瞬でウルキオラとの間合いを詰めると、斬魄刀を上段から振り下ろした。

瞬歩では無い。全ては増大した靈力の影響で上昇した身体能力で以て、単純に前方へと踏み込んだのだ。

ウルキオラは咄嗟に響転で回避行動を取る。

空を斬った剣八の斬撃は勢いをそのままに床へと叩き付けられ——盛大な破壊音と共に大穴を開けるといふ結果を齎した。

「これは……!!」

その威力を目の当たりにしたウルキオラは気付く。

今の剣八は間違い無く、自身の鋼皮を斬り裂く事が可能な領域にまで至っていると。

——様子見は失策だったか。

序盤までの自身の行動を後悔しつつも、悟った。

剣八は全力を出すまでに時間を要するのでは無い。戦いが長引けば長引く程、その力を増して行くのだ。

その上限は留まる事を知らず、故に常日頃から力に封をしている。

もはや選択の余地は無い。ウルキオラは思考を切り替えた。

これ以上戦闘を長引かせては、更に厄介な状況に陥る事になる。

ウルキオラは響転を連続使用して剣八の背後へと回り込み、隙だらけな背中目掛けて斬魄刀を握る右手を振り下ろす。

無論、現状で出せる限りの本気でだ。

「な…に…!？」

だが封を解いた剣八の力は、此方の予想を遥かに超えていた。

完全に隙を突いたにも拘らず、剣八はそれを既の所で反応。振り向き様に空いた左手で振り下ろされた刀身を驚掴みにして止めたのだ。

相当な力が籠められていた為か、刃先が掌を切り裂き、結構な量の血が滴り落ちる。だが案の定、剣八は動じない。

「ハッ!!」

ウルキオラの斬魄刀を万力の如く固定したまま、右手の斬魄刀を真横に振り抜く。

その狙いは首。口では戦いを愉しみたいとは言いつつ、行動には殺意しか感じ取れない。

敵を殺す為の剣が身体に染み付いているが故か。それともこの程度では終わらないだろうと信じているのか。真実は定かでは無い。

現状で持てる全能力を総動員し、ウルキオラはその必殺の一撃を避ける為に動いた。一旦柄から手を放し、床へと着地。その直後、彼の頭部の上を剣八が振るつた刀身が通過した。

それを見計らい、ウルキオラは自身の斬魄刀を掴んでいる剣八の左手首へ蹴撃を放つ。

並みの相手なら瞬く間に肉片と化す、そんな蹴りの域を優に超える凄まじい威力には耐えられなかったのだろう。剣八の左手は直ぐに刀身を放し、自由の身となった斬魄刀が宙を舞う。

ウルキオラは即座にそれを回収しに向かい、その柄を握つた刹那——背後より追撃を仕掛けて来た剣八目掛けて斬撃を放つた。

「…ちっっ」

互いの刀身が真正面から激突する。それと同時に周囲へ響き渡る尋常ならざる衝撃。不意にウルキオラの口から舌打ちが零れた。

そう、何と打ち負けたのは彼の方であつた。

「はははははハハハハハハッ!!」

一般男性平均よりやや小柄な身体が、室内の柱を何本も破壊しながら吹き飛んで行く。

剣八は大声で笑いながら、それを追い駆ける。

飛散する大量の粉塵と瓦礫の中より、ウルキオラが飛び出して来る。

待っていましたと言わんばかりに、剣八は隙だらけな彼へ容赦無く襲い掛かった。

ウルキオラは咄嗟に左手の人差し指より虚閃を放つ。

効果は端から期待していない。目的は剣八の視界を一時的に潰し、追撃のタイミングを少しでも遅らせる為だ。

「!!」

回避不可能なタイミングで放たれた薄緑色の光線は、瞬く間に剣八を？み込む。

その刹那、ウルキオラの背筋にこれ以上無い程の悪寒が走った。

巻き上がった煙が晴れぬ内に、ウルキオラは反射的に斬魄刀を自身の胸の前に持ち上げ、防御体勢を取っていた。

「これにも反応するか!! 最高だぜウルキオラアツ!!」

その判断は正しかった。

あろう事か剣八はウルキオラの虚閃を、まるでそよ風の中を突っ切る様にして直進して来たのだ。

次の瞬間に広がった光景は、先程の繰り返し。

ウルキオラは剣八の斬撃を受け止め切れず、盛大に吹き飛ばされるという結果に終わった。

——何という規格外。

空中で体勢を整えつつ、ウルキオラは思った。

此奴に常識は通用しない。正に化け物と言うに相応しい存在。

藍染が幽閉対象に含めたのも納得だ。

「頼むから簡単に終わってくれんじゃねえぞ!! こっからもっと愉しくなるんだから

よオ!!!」

斬魄刀を構えながら、剣八は全身から更に霊圧を放出する。もはやその量と密度は、交戦直後の数倍にも及んでいた。

「…致し方無い、か」

ウルキオラは静かに呟くと、突如としてその場から真上へ跳躍した。天井を突き破ってもそれは止まらず、虚夜宮の天蓋目掛けて上昇を続ける。

「っ、逃がすかよ!!」

予想外な展開に一瞬呆けた様な表情を浮かべた剣八だったが、即座に正気を取り戻すと、慌てて追跡に動いた。丁度近くに聳え立つ、天蓋の外まで続く支柱を蹴り登りながら。

霊子の足場を構築するか、瞬歩を使えば簡単ではないか、と思うだろう。だが剣八は普段よりこの二つの技を余り使用したがない。

得意では無いというのもあるが、何より面倒だからだ。

実際、剣八はその生まれ持った驚異的な身体能力を駆使するだけで、大抵の事は出来た。

霊子の足場が無くとも、単に跳躍するだけで高所に居る敵へ一気に接近。思い切り踏み込むだけで、瞬歩並みの速度で移動可能。

正に非常識の塊。例えば隊長格であつても、その光景を目の当りにしようものなら、確実に自身の正気を疑う事だろう。

「あの野郎、なに考えてやがる…？」

追跡を続けながら、剣八は疑問を抱いた。

ウルキオラの向かう先は間も無く虚夜宮の天蓋。だが彼は移動速度を全く緩める様子も見せない。

外に出ようとしているのは確実。だがその理由が解らない。

——別にあのまま戦つていても問題無いだろうに。

そう考える剣八を余所に、やがてウルキオラは天蓋を突き破ると、支柱の頂上へと降り立った。

「…第4以上の十刃は——」

自身が作り出した穴より飛び出してきた剣八を見下ろしながら、ウルキオラは口を開く。

「天蓋の下での解放」を禁じられている」

「ああ…?」

——そういう事か。

一瞬呆けた様な声を漏らした剣八だったが、即座にウルキオラの言葉の意味を察した。

同時に剣八の顔に喜色が浮かぶ。

此方は本気を出し、戦況を有利に持ち込んだ。ならば相手も本気を出さない筈も無いと。

更なる高次元の戦いの予感に、剣八は期待で胸を膨らませる。

その高揚する感情に比例するかの様に、彼の霊力がさらに上昇。

全身から溢れる靈圧も、その密度と量を増していった。

「<sup>トビ</sup>鎖せ——<sup>ムルシエラ</sup>黒翼大魔」

やがてウルキオラが解号を唱えた。

次の瞬間、彼を起点として急激に立ち昇る漆黒の靈圧。

他の破面と比較しても何処か異質さを感じるそれは、数秒が経過しても収まる事を知らず——やがて雲の如く、周囲一帯の空を覆い隠した。

## 第六十一話 地味つ子と、主人公達と、虚無と剣鬼と…

眼鏡を掛けた細身の男——四番隊第三席兼、第一上級救護班班長である伊江村いえむら八十千和やそちかは、自身の周囲で慌ただしく動き回る一般隊士達の様子を伺っていた。

その表情は硬く、額には大量の冷や汗が浮かんでおり、只ならぬ様子が見て取れる。

今彼が居る場所は瀨霊廷。死神が良く用いる「穿界門せんかいもん」とは別の、四つ存在する門の

内の一つ。西に位置する「白道門はくどうもん」の傍だ。

門は僅かに開いており、其処から多数の隊士達が絶え間無く行き来していた。

主に中へと入って来るのは大部分が怪我人とそれを運ぶ者で占められている。それと入れ替わる様にして、後に控えて居たらしい無傷の隊士が覚悟を決めた面持ちで外へ出て行く。

深く考えるまでも無い。門の外は他ならぬ戦場となっているのだ。

「伊江村三席!!」

「何だ」

若い男の隊士が、大声で八十千和を呼ぶ。

戦場に対する怯えか、それとも緊張か。理由は不明だが、その全身は震えていた。

「新たな負傷者です！ 数は二十!!」

「…重傷者は？」

——もうこれで何度目だ。

致し方無い事だとは理解してはいたが、八十千和は内心で吐き捨てずにはいられなかった。

だがそれを表に出す事はせず、平静を装いながら問い返す。

伝え難い内容なのか、隊士は暫し間を置いた後、恐る恐るといった様子で答えた。

「…八名です。内二名は致命傷で、恐らく長くは持たないかと…」

「そう、か…」

報告を耳にした八十千和は腕を組みながら、眼鏡の下で瞼を閉じ——やがて盛大な舌打ちと共に悪態を吐いた。

「くそッ!! このままでは間も無く此処も限界に達するではないか!!」

未だ嘗て見せた事も無い程、八十千和の表情が歪む。

拳を握り締め、ぎりぎりど歯軋りする彼の苦悩に満ちた様子は、思わず見る者の同情を誘う。

立場は相当離れているとはいえ、多少なりとも気持ち理解出来るのだろう。

報告をした隊士も、労わる様な視線を八十千和へと向けていた。

「まさかこのタイミングで、あれだけの戦力を率いて攻め込んで来るとは——!!?」

誰が予測した。そう言い切る直前に、突如として響いた轟音。

敵による攻撃であると、八十千和は即座に察した。

それは瀟靈廷全体を揺らす程で、相当な威力が窺える。

周囲を見渡すと、東に位置する結界の一面に、禍々しい赤黒い光が広がっていた。

「これは… “青流門” か!!」

八十千和はこれが虚閃である事を理解していた。

決戦の為に隊長格全員が出動し、他の死神達は勝利の二文字の報告が来るのを期待しながら待機していたところへ、突如として現れた老人と巨漢の破面の二人組。

続け様に黒腔より現れた巨大な二つ目の虚。その口から吐き出された二十体程の下級大虚。

戸惑う死神達に対し、老人の破面が口を開いた。

——これより瀨霊廷への侵攻を開始致します故、御覚悟召されよ。

死神達は慌てて迎撃に出たものの、自分達の戦力不足と敵の圧倒的物量が重なり、極めて劣勢であった。

それでも持ち堪えられているのは、単に十一番隊の御蔭だ。

日頃から蔑ろにされている八十千和を含め、四番隊としては少々不本意ではあったが、この時ばかりは彼等に感謝の念を抱いていた。

敵と自分達の戦力差を理解しているにも拘らず、戦意を失わず我先に敵へと立ち向かい、その身を以て戦況を押し留めている。

仕舞いには多大な犠牲を払いながらも、敵の隙を強引に作り出し、それを上位席官クラスが突くという構図が出来上がっていた。

正に身体のみならず、その魂が燃え尽きるまで壁として用いている状態だ。

つい先程、偽物の空座町にて、重國が交戦と同時に隊長格全員に放った言葉の一部を体現していると言つても良いだろう。

とは言え、実のところ十一番隊側も、四番隊に対して同様に感謝していたりする。

負傷者として運ばれて来た十一番隊の隊士達の大半が、最低限の処置を終えた時点で再び戦場へ向かわんとする無茶苦茶な者ばかり。中には治療を施している四番隊の隊士を力で押し退けて行こうとする者すら居た。

だがそれに対し、四番隊の隊士は臆する事無く立ち塞がった。

それは患者の命を預かる医者としての矜持に似ていた。幾ら他人の意志は尊重すべきとは言え、はいどうぞと怪我人を死地へ向かわせる筈があろうか。

気弱な四番隊らしからぬ鬼気迫った説得に、十一番隊の隊士は折れた。四番隊は所詮戦場に出ない腰抜け集団という認識を、その内心で改めながら。

「あそこには鬼腕かいわんが居る筈だ。一体どうなっている!？」

「鬼腕様はつい先程、戦闘続行不可能な傷を負った為に一時退却致しました！ その前線は沖牙三席が対応しております！」

「何だっ!？」

隊長格が不在の今、残された最高戦力は八十千和含めた上位席官クラスのみ。

彼等は東西南北に存在する門の防衛と援護に回っている。

その残存戦力の中ではトップクラスである—— 一番隊第三席、おききぼ沖牙、げんじろう源志郎は、北のこくりょうもん黒稜門を担当していた筈だ。

即ちこの若い隊士の話が本当であれば、沖牙は一人で二ヶ所の門を担当している事になる。

敵の物量からして、この戦いが長期戦になるのは自明の理。

如何に沖牙が強かろうと、所詮は席官の範疇での話。良くて副隊長に匹敵するとしても、隊長には到底及ばない。幾ら何でも無茶が過ぎる。

最下級大虚が単体であれば、隊長格の脅威には成り得ない。だが隊長以下の死神達にとっては十分過ぎる程に強敵だ。

しかもそれが複数居るとすれば——言うまでも無い。

「わ、我々は一体どうすれば——」

「狼狽えるな!!」

怯えた表情を浮かべる隊士を、八十千和は一喝する。

その余りの気迫に、周囲で慌ただしく動き回っていた隊士達すら、驚愕の余り全身を硬直させていた。

「重傷者は至急、隊舎の総合救護詰所へ！ 残りは後ろの仮設診療所へと搬送しろ！」  
「りよ、了解しました！」

不安なのはこの場に居る誰もが同様だ。

にも拘らず、冷や汗一つ流さず指揮官として堂々たる振る舞いを見せる八十千和の姿に、周囲の隊士は尊敬の念を抱いていた。

「りていたい裏廷隊”は居るか!!」

「——はっ！ 此処に！」

直後、八十千和の前に現れたのは、顔の大半を覆う程大きな角張った帽子を被った男。死覇装も、他の隊士が身に纏うそれとは異なり、機動性を重視した作りとなっている。この男は隠密機動第五分隊に属し、通称「裏廷隊」と呼ばれる隊士間での情報伝達を

行う部隊だ。

戦闘能力は低いものの、瞬歩の使い手が多く、例え戦場の真っ只中であろうとも無傷で駆け回れる脚を誇る。

「伝令を頼む!! 白道門周辺の前線を担当している第五席以下の席官クラスは全員後方へ退却! 漣靈廷内の防衛を優先しろと!!」

「は…!?! かし——」

その想定外な指示に対し、裏廷隊の男は混乱した。

敵は多数の下級大虚。後方には階級不明の破面も控えている。

正直、上位席官クラスが全員揃っていたとしても厳しい状況だ。そして中位以下の席官が束になっても、徒に犠牲者を増やすだけに終わるだろう。

即ち現状に於いて、前線の戦力を削るのは自らの首を絞める様なもの。

戸惑う様子を見せる裏廷隊の男だったが、八十千和は有無を言わず勢いで畳み掛けた。

「全責任は私が取る!! 良いから行け!!」

「…承知致しました!!」

八十千和は馬鹿では無い。何か考えがあつての事なのだろう。

そう悟つた裏廷隊の男は任務を果たすべく、即座に移動を開始した。

その背中を見送ると、八十千和は近くの隊士へ声を掛けた。

「君、済まないが此処の指揮を任せる」

「…へ?」

声を掛けられた隊士は、四番隊六席。

それ以上か同等の席官クラスは、各所に存在する仮設診療所の指揮に回っている。

「ど、どちらへ!？」

「決まっている」

戸惑う隊士を余所に、八十千和は斬魄刀の柄に右手を添えながら答えた。

「私とて伊達に三席の階級を背負っている訳では無い」

「まさか——!!」

「そうだ。前線へ向かう」

隊士は絶句した。

返答内容が予想外だった事もあるが、最たるものは八十千和の表情と雰囲気だ。普段は一切見せた事の無い、歴戦の勇士を連想させるそれに。

「……どうかご無事で!!」

「ああ、後を頼む」

隊士の本音とすれば、八十千和が居なくなるのは非常に困る。

確かに自身は席官であり、指揮官としての経験も少なからずある。

だが今は緊急事態。この様に誰も切羽詰まった状態で、的確な指示を出せる自身も無いし、皆もそれに素直に従うか如何かは甚だ疑問だ。

とは言え、最終的に前線が崩れてしまえば、結果は変わらない。

負傷者も治療者も関係無い。漣靈廷全てが破壊し尽くされてしまうだろう。

ならば優先すべきは、この戦い自体に勝利する事以外に無い。

「四番隊とは言え、残存戦力の中でも上位に位置する八十千和が加勢に向かうのは正しいと言えた。」

「——待て。それは不要だ」

「つ、あ…：貴方は——!!」

いざ戦場へ向かつて駆け出さんとした八十千和だったが、突如投げ掛けられた制止の声に、思わず弾かれるようにして振り向いた。

そしてその姿を視界に捉えた瞬間、息を呑んだ。

其処に立つて居たのは、銀髪で横に細長い髭を生やした、西洋人を思わせる風貌を持つ男—— 一番隊副隊長、雀部ささきべ 長次郎ちようじろう 忠息ただおき。

隊に配属される事自体が名誉である一番隊に於いて、表舞台には殆ど出て来ない故に、その顔を知る者が極めて少ない存在であった。

「貴殿は引き続き、此処の指揮を全うせよ」

「しよ、承知致しました!!」

副隊長にも拘らず、戦場に立つ事はほぼ皆無。故に陰では「戦いに参加せぬ副隊長」と蔑まれてもいる長次郎。

中には「副隊長地味っ子トリオ」という、不名誉極まりない称号すら与えられている始末。

だが当人はさして気に留める素振りも見せず、終始一貫して重國の右腕として彼の後ろに付き従い続けていた。

常日頃より他の隊士より地味扱いされ、時折あらぬ噂を流されては苦勞している八十千和だが、実は密かに長次郎へ尊敬の念を抱いていたりする。

自身より遥かに過酷な環境下にて、これまた長い年月を過ごしているだろうに。それでも尚折れずに責務を全うし続ける、その揺るぎ無き心。称えずに何とする。

「っかっ…」

長次郎の指示に対し、八十千和は即座に頭を下げて了承の返事をするも、ふと抱いた疑問を口に出した。

「確か雀部副隊長殿は、空座町の結界の守護を担当していた筈では…?」

「沖牙に引き継がせた」

「な…!?!」

八十千和は瞠目した。長次郎の言葉が真実であれば、流石に拙いではないかと。

一人で前線を支えていた沖牙の存在が欠けるといふ事は、二つの門が手薄になつてしまふのだから。

「案ずるな。既に北と東の敵は殲滅してある」

「…は?」

「沖牙自身も、私の回道にて傷は癒した。残るはこの西と南の残党を片付けるのみ」

暫しの間硬直していた八十千和であったが、やがて長次郎の言葉を理解した途端、一気に安堵した。

——何と頼もしい男か。

この短時間で敵を五割近く殲滅するという驚異的な戦果を残しながら、未だに余裕に満ち溢れている。

もはやこの戦いの結果は決まったも同然。そう思える程に、長次郎の齎した安心感は大きかった。

「えいじノ字さ——元柳齋殿の右腕として、奴等にこの瀟靈廷の地を決して踏ませはせぬ」

それだけ言い残すと、長次郎はその場から姿を消した。始めに何かを言い掛けた様だが、それに気付いた者はいなかった。

瞬歩であるの言うまでも無い。だがその速度たるや、とうに副隊長の域を超えており、寧ろ隊長であると言われた方が違和感が無い。

四番隊故に他の隊より低い地位として扱われているものの、三席に相応しい實力を持つ八十千和ですら、初動を捉え切れなかった。

『…誰?』

「お…お前達いいい!! 失礼だろうがあああ!!」

長次郎が去った後、残された八十千和を除く隊士達が声を揃えてそう呟く。

それから間も無くして、八十千和の怒声が周囲へ響き渡ったのは言うまでも無い。

突如として真上へ移動し始めたウルキオラ。それを追い駆けて行った剣八。現在その二人が居る場所へと顔を向けながら、一護は右頬に一筋の冷や汗を流していた。

「この霊圧…まさか解放したってのかわか？」

二人が消えて間も無くして、この周囲一帯へ押し掛かった巨大な霊圧。死神のそれとは真逆の、触れた者全てを病魔に侵さんとする様な禍々しさ。

一護は気付いた。現状がグリムジョーが解放した時と似ている事に。

即ちこれは剣八では無く——ウルキオラのものであると理解出来る。

だが思いの外、衝撃は少ない。

焦燥に駆られる自身の精神を抑えつつ、一護は分析する。

恐らくこれはノイトラが原因だろう。

ネリエルとの戦闘で見せた帰刃形態、そして“永反膜の匪”によつて幽閉される直前に見せた霊圧の全力放出だ。

ウルキオラも相当ではあるが、ノイトラのそれと比較すると、量だけは確実に後者の方が上回っている。

だがやはり階級が一つ上なだけはあると言ふべきか、前者の霊圧には何処か底知れぬ異質なものを感じ取れた。

——自身がこれと対峙したとして、果たして勝てるだろうか。

張り詰める一護の精神。それに比例するかの様に、柄を握る右手にも力が籠る。

「あうう……」

「大丈夫？ ネルちゃん」

「な、なんとかあ……」

一護の傍では、織姫が“双天帰盾”を展開して、自身とネルを包み込んでいる。

この凶悪極まりない靈圧から弱い自分達を守る為だ。

その無事な姿に安堵した一護だったが、直後に気付いた。

——流石の剣八でも、解放後のウルキオラが相手では危ないのではないか。

理由は不明だが、確かに以前対峙した時とは別人の様に実力が上がっている。とは言え、ノイトラに続き、ウルキオラも未だ嘗て経験した事の無い強敵だ。

だが加勢に向かおうにも、織姫達を放つて置けないのが現状。例え連れて行つたとしても、剣八とウルキオラの戦いに巻き込まれる危険性がある。

そこで一護は思った。正直、少しだけ様子を見る程度でも良いのではないかと。

寧ろそうした方が賢明である。強敵を前にした剣八が如何いった状況に陥るかなぞ、想像に難く無い。

確実に加勢は拒む。例え敵が複数存在していようと、彼は一人で戦う事を望むだろう。加えて周囲を気にした戦い方は絶対にしない。

史実に於いて、マユリが戦場に立ち入った剣八の事を「生肉を放られた獣」と評した様に、確実に眼前の御馳走のみにしか意識を向けず、下手に近寄れば敵諸共喰われる。

一護は迷う。

危険性は重々承知している。だが今の剣八の調子であれば、自身が虚化した状態で加勢すれば、ウルキオラと直角以上の戦いが出るのではと。

それにウルキオラが帰刃したという事実は、彼はこれ以上強くはならないという証明でもある。

初っ端から全力で畳み掛ければ、短時間で勝負を決められる可能性もある。一通り考えが纏った一護は、織姫達の意見を聞こうかと口を開いた。

「悪い井上。少し話が——」

「駄目だよ」

「ツ!!?」

だがそれは突如として眼前へと現れたやちるによつて遮られる。

表情は何時も通りの明るい笑みが浮かんでいるが、一護を正面から見詰めるその瞳は少女が持ち得る筈が無いドス黒い感情が渦巻いていた。

「いくらいつちーでも、剣ちゃんの邪魔したら許さないから」

「っ、今はそんな事言ってる場合じゃねえだろ!!」

帰刃したウルキオラと、本気を出した剣八。この二人の力の差は明らかに前者が圧倒

している。

過去に死闘を繰り広げた間柄とは言え、今の一護にとって剣八は大事な仲間の一人だ。こんな状況下に於いて、放置なぞ出来る筈が無い。

「大丈夫、剣ちゃんは負けないよ」

そんな一護の心情を余所に、やちるはいとも容易く断言した。

剣八の居る方向へと視線を移しながら、どこか懐かしむ様な表情を浮かべている。

「だって——あんなに楽しんでるの、”あの時”以来だもん」

一護は困惑していた。

まあ当然だろう。剣八の過去を知らぬ彼に、その言葉の意味が理解出来る筈が無いのだから。

「…じゃ！ あたしは剣ちゃんの応援に行ってくるから！」

「お、おい待てよ!!」

——幾ら何でも危険過ぎる。

制止に動こうとする一護を余所に、既にやちるは瞬歩で移動していた。

「くそッ！ 頼むから無事に帰って来いよ……！」

やちるの御蔭で更に身動き一つ取れない状況へと陥った、一護は歯噛みした。  
今の彼に出来るのは、剣八とやちるの無事を願う事だけだった。

「——みつけた」

「!!？」

ふと耳に入ったのは、聞き覚えの無い女の声。

——こんな時に新手か。

声が響いてきた後方へと振り向きながら、一護は思わず身構える。

其処には肩口と腹部を大きく露出した白装束を身に纏った女の破面——ロリが、鋭い視線で一護達を睨んでいた。

そんな彼女の後方には、あわあわと困惑した表情を浮かべながら、ロリと一護の方向を交互に見るを繰り返しているメノリが。

「ちよつと顔貸しなさい、あんたじゃなくてそっちの女」

ほぼ互角だったとは言え、帰刃したグリムジョーを下した一護に、雑務係の破面如きが敵う筈も無い。

だがロリはそんな相手を前にしながら、一切臆さず堂々と言い放った。

辺り一面の空を雲の如く覆い隠した漆黒の霊圧が、やがて黒い雨となって地上へと降り注ぐ。

劍八は右手を自身の顔の上へと持ち上げ、傘代わりにする。やがて雨が晴れると、再び三日月の光が周囲を照らす。

それは虚夜宮の天蓋を突き抜ける様にして聳え立つ複数の巨大な柱の内一つ。その頂上に立つ——帰刃形態となったウルキオラの姿を露にした。

まず目を見張るのは、蝙蝠の様な巨大な漆黒の翼。

左頭部の仮面の名残は、四本の角を持つ兜の様な形へと進化を遂げ、顔の仮面紋も大きくなっている。

白装束の下部も伸び、まるでスカートを連想させる物へと変わっていた。

「…正直、帰刃これを使うのは黒崎一護を相手にした時だろうと考えていた」

姿形のみならず、先程までとはまるで比較にならぬ霊圧を全身より放ちながら、ウルキオラは静かに語り始める。

つい先程まで獰猛な笑みを浮かべていた筈の劍八は、茫然とそれを見上げていた。

「認めてやる、更木劍八。貴様は俺が倒すべき敵だ」

流石に怖気づいたのだろう。

ウルキオラは黙り込んだ剣八を見てそう思った。

だが何処までも予想を上回るのが、更木剣八という男であった。

「——いい霊圧だ」

「!!」

やがて剣八が浮かべたのは——凄絶な笑み。

恐怖なぞ欠片も無い。これでもかと齒を剥き出しにした、只管に血沸き肉躍る殺し合  
いへの渴望を増幅させたそれを。

「久しぶりだぜ。霊圧で刃が研がれてくみてえな…こういう感覚はよ」

「…そうか」

この期に及んでも変わらぬ態度を見せる剣八に対し、ウルキオラはある意味感心して  
いた。

寧ろ良くぞここまで突き抜けられたものだ。

恐らく他の十刃、拳句の果てには藍染と対峙したとしても、嬉々として斬り掛かつて行く事は間違い無いだろう。

そして時間が経てば経つ程、相手の想像を遥かに上回る速度で力を増し続け——最終的に手の付けられないレベルの怪物と化し、全ての敵を喰らい尽くす。

「ならばその研がれた刃とやらで、この俺を斬ってみろ」

成程、確かにこれは紛れも無く脅威だ。ウルキオラは藍染の意図を理解した。

一護も相当な成長率の高さを誇るが、やはり剣八のそれは突出している。

ならばこの場に於いて、藍染にとって最大の障害と成り得る存在は後者のみ。

だが生憎と、その可能性は此処で潰える。何故ならこいつは今此処で死ぬ運命にあるのだから。

そう確信しながら、ウルキオラは己の内に静かなる殺意を漲らせる。

彼は見抜いていた。傍から見れば規格外としか言い様の無い剣八の持つ、決定的な弱点を。

加えて他ならぬ自分自身が、剣八を確実に打倒し得る天敵となる要素を持っている事も。

「く、ハッ…!!」

そうとは知らぬ剣八は、自身の口から飛び出さんとする笑い声を必死に抑えながら、ウルキオラへと襲い掛かった。一瞬で間合いを詰め、迷い無く斬り掛かる。

だが嬉々として輝いていたその表情は直後に凍り付く。

見れば渾身の力で振り下ろされた刀身は、一枚の漆黒の翼によって軽々と受け止められていた。

「——これが全力か？」

瞠目する剣八を一瞥すると、ウルキオラは小さく呟いた。

その瞳には心做しか、落胆の色が見て取れた。

ウルキオラは徐に左腕を下段に振り被る。その左手には霊圧で形成された光の槍——「ブルゴール」が握られていた。

動きを封じられた訳では無い。だが剣八は自身の渾身の一撃をあつさり受け止められた事に対する衝撃で、全身が一時的に硬直しており、もはや回避不能の状態へと陥つ

ていた。

「終わりだ」

先に刻み込まれた太刀傷を更に上書きするかの様に、振り上げられた光の槍は剣八の身体を斜めに大きく斬り裂いた。

鮮血を撒き散らしながら、剣八は柱の頂上より落下して行く。

受け身も取れぬまま、その身体は天蓋の上へと叩き付けられる。

立ち上がる素振りには皆無。恐らくは意識を失っているのだろう。または傷の深さを見るに、即死状態にあると言われても何ら不自然では無い。

「…黒崎一護と同様、お前は紛れも無く脅威だ。藍染様にすら危害が及ぶ可能性がある程にな」

大の字で横たわる剣八を中心に、血溜まりが広がって行く。

見た目は死体そのものだが、霊圧反応が消えていない。即ち未だ息があるのだと判断出来る。

その様を見下ろしながら、ウルキオラは言葉を繋ぐ。尤も、等の本人は聞こえてはいないだろうと思いつつ。

「だからこそ、その芽を今此処で摘ませてもらう」

だがウルキオラは無情にも、そんな剣八に対して無慈悲な宣告を下した。右手を持ち上げ、その掌へ黒い霊圧が集束させてゆく。

「黒虚閃」で剣八へと止めを、それこそ肉片一つ残さず消し飛ばす事で、再起の可能性を完全に無くす為に。

「…剣ちゃん?」

「……………」

不意に耳に入る、この場に不釣り合いな幼い少女の声。

ウルキオラは顔だけを振り向かせ、天蓋に空いた穴の近くに立つやちるを視界に捉える。

見るからに幼子。だがその身に纏う死覇装と、左腕に装着された副官章から、その正

体を察した。

「…面倒な」

小さく呟くと、剣八に向けていた右手を、今度はやちるへと向けた。

ウルキオラは剣八より先に彼女を始末する事にしたのだ。

副隊長クラスであれば、少なくとも此方の動きを阻止するまで行かずとも、邪魔する程度は出来る筈。

加えてその能力も未知数だ。下手すれば一瞬の隙に剣八を救出する手段を隠し持っている可能性もあるとして。

「安心しろ。お前もこの男と共に、同じ場所へ逝かせてやる」

だがこれは誤った選択。

例え瀕死状態だったとしても、剣八から意識を逸らす真似をすべきでは無かったのだ。

「——うしろ」

「…何?」

絶体絶命の状況にも拘らず、やちるは表情を変えぬまま、不意にウルキオラの後方を指差した。

ウルキオラは思わず問い返す。

攻撃の隙を生む為のハツタリかとも考えたが、可能性は低い。現にやちるからは全く戦意を感じない。

幼いとは言え、副隊長まで上り詰める程だ。此方との戦力差は十分理解出来ている筈。

なのにこの余裕振り。不気味過ぎる。

ウルキオラは霊圧の集束を中断し、次に続くであろう言葉を待った。

「見たほうがいいよ」

その言葉の意味が理解出来たのは、背後にて急激に上昇した霊圧、そして半ばより切断された自身の翼が宙を舞う光景を目の当たりにした直後であった。

無限の広さを持つ異次元世界。言うなれば宇宙空間の様なもの。

これが眼前に広がる光景を視界に捉えたノイトラの抱いた第一印象だった。

上下左右、ありとあらゆる全方位の感覚に加え、距離感が全く計れない。

一応その場に立ってはいるものの、それはあくまでこの世界に漂う霊子を固めて足場にしただけ。

実際は重力に従って直立しているのかもしれない。だが極限まで感覚が狂い切った状態故に、その実感は完全に失われていた。

とは言え、自身の両足は確りと地面を踏んでいる為、最低限の安心感は得られているのが唯一の救いか。

——咄嗟に行動していなければ如何なっていた事やら。

現状ですらこの上無い気持ち悪さを感じているのだ。下手すると嘔吐していたかもしれない。

「……………参ったぜ……………」

全身を覆っていた謎の光による拘束は既に解けている。

閉次元へと放り込まれた直後、自身の役目は終わったと言わんばかりに、瞬く間に消え去ったのだ。

「やっぱ、どー考えても変だよなア……………」

ノイトラは右手で後頭部を掻きながら、そう零した。

幽閉から数分後。彼は自身の置かれた状況を静かに考察していた。

“反膜の匪”は、本来であれば十刃以外の破面用。そして幽閉された側の脱出方法は無い。

だがこれは違う。色や拘束時の力から判断すると、特別製なのは明白。

ならば史実に於いて、ウルキオラが空間を割って抜け出した様に、対象の霊圧が強大

であればある程、幽閉時間が短くなる特徴を持つ可能性も低くなる。

しかしそれ以外に脱出手段が無いのも事実。閉次元の中から藍染に必死に叫んで懇願しようが、例え本人が聞いていたとしても確実に無視されるだろう。

そう結論付けたまでは良い。問題はこれ以降だ。

悩みに悩んだ末、ノイトラは駄目元で、帰刃形態での霊圧の全力解放を試みたのである。

二回目までは殆ど変化は無かったが、丁度三回目となった時、それは響いた。

方向は不明だが、何かが盛大に軋み、罅割れてゆく様な謎の音を。

即ちこれはノイトラの霊圧に耐え切れなかった閉次元全体が、崩壊へ近付いた証明。

紛れも無く脱出のチャンスである。

だが生憎、ノイトラはそれに喜びを感じられる程の能天気ではなかった。

確証は無いのだが、自身の幽閉を指示したのは藍染で間違い無い。

彼が本気で封じに掛かったのであれば、こうも簡単に脱出の糸口が見える様な形にするだろうか。

答えは否。ノイトラはそう断言出来た。

喜助には劣るものの、彼より先に「崩玉」を開発するという、決して引けを取らぬ程の頭脳。自身の望む未来を実現させる為、他人どころか尸魂界全体を自らの掌の上で転

がしてみせる、常軌を逸した策略を見出す思考回路と視野の広さ。

それに次元の違う戦闘能力を足した者が、藍染惣右介という男である。

凡人の思考や行動如きで対処可能な次元では無いのだ。

正直なところ、ノイトラは自身の実力をそれ程高いとは考えていない。

長年に亘って重ねて来た血の滲む様な鍛錬。そして最近の戦闘実績を考慮すれば、少しぐらいは自信を持ってても良いのではないかと、普通は思うだろう。

だがノイトラは如何しても——憑依前に既に深々と根付いていた、藍染のあの圧倒的強者としての強烈なイメージが、その邪魔を顕著に表れている。

日頃の鍛錬の中でも、その影響は顕著に表れている。

切り札を使ったとしても、精々が全力のスタークと同等程度であり、罷り間違っても藍染の相手が出来る領域に至っては無い。

単純な戦闘能力もそうだが、何より“鏡花水月”の能力が凶悪過ぎる。

いくらノイトラ自身が解放状態を見ていないとは言えど、藍染にとつては誤差の範囲内ではない。交戦中に解放し、気付いた時には既に催眠状態へ陥っていた——というのも十分有り得る。

「上等だぜ、藍染サマよオ…」

——此処で迷つてばかりいても仕方が無い。

どちらにせよ、今の自身に残された選択肢は、脱出の二文字以外に何も無いのだから。

「例え既にアンタの掌の上に乗せられていたとしても——そう簡単には転がつてやんねえぞ……!!」

ノイトラは腹を決めた。

この先に如何なる展開が待ち受けていたとしても、決して揺るがぬと。自らが掲げた理想の未来を実現させるべく、全身全霊を注ぐ事を。

ノイトラは六本の大鎌を上へと掲げ、交差させながら叫んだ。

「<sup>お</sup>覚醒しろ——<sup>ろ</sup>聖哭螳螂 アアアツ!!!」

全身から漆黒に染まった膨大な霊圧が爆発的に噴き出す。

それは瞬く間に閉次元全体へと広がり続け——元より綻びが生じていたそれを更に広げ、崩壊一步手前へと追い詰めた。

間髪入れずに、ノイトラは畳み掛ける。

真の帰刃形態へと姿を変えた彼は、惜しみ無く自身の持てる全力で以て、確実にこの世界を破壊する為に。

「ブツ壊れる…!!」

三日月状の両刃の大鎌二本を、ネリエルとの戦いで見せた“六刃斬層”の様に、両腕を交差させながら左右へ振り被る。

鎌全体を纏うのは、黄色では無く黒色の霊圧。

その様はまるで、一護の唯一無二の必殺技たる“月牙天衝”が放たれる直前の姿と酷似していた。

「ラ・オス・デ・ラ・バルカ死神の鎌”」

## 第六十二話 仄々夜宮と、死神達と破面達

治療室にて、ロカはスタークによって運ばれてきたチルツチの治療をしていた。

とは言っても後頭部の打撲以外に目立った外傷は無く、殆ど手間は要らない状態である。

寧ろ遅れて登場したピカロが酷く混乱しており、それを宥める方が大変だったぐらいだ。

「…後は意識が戻るのを待つだけです」

治療道具を台に置くと、ロカはそう締め括った。

次の瞬間、チルツチの傍へと一斉に近寄る小さな影達。

言うまでも無くピカロである。

「チルツチい〜！」「おかあさ〜ん！」「ママ〜！」「うわ〜ん！」「びえええん！」「キユ〜ン」「死んじゃやだ〜！」「あなたが死ぬなら〜」「私も死ぬう〜！」「みんなも一緒に」「無

理心中「へんじがない」「ただのしかばねのようだ」「起きてよう……」「おねぼうさん？」「いっしょにごはん食べようよー！」「山盛りで！」「てんこもり！」「おやつは？」「さんびやくえんまで！」「バナナはおやつに？」「ふくみます！」「そんなあ」「がっでむ」「救いはないんですか!？」

「ええい騒がしい!! しかも先程から死んでおらんと何度も言っているだろうに!!」  
「……途中で不謹慎な言葉が聞こえた様な……」

あれよあれよと騒ぎ始めるピカロに、同じく治療処置を終えたドルドーニは思わず声を荒げた。

隣に立つガンテンバインはそれを眺めながら小さく呟く。

この様子から判る通り、二人は既に治療済み。霊圧も十全に回復しており、何時でも前線復帰する事は可能だった。

「つーかよ、アレをどう思う?」

「…言うな、闘士よ」

ガンテンバインは徐に右手の親指で、自身の後方に当たる治療室の天井の一部を指し

ながら問い掛けた。

恐らくは触れてほしくなかった内容なのだろう。ドルドーニは静かに溜息を漏らすと、指の示す方向へと振り返りながら答えた。

「モガー!! ムガモゴ!!」

「……りや酷え」

「まるでカルコイマ蓑虫よ」

其処には全身をセフィーロの反膜の紐によつて、全身を雁字搦めにされて宙吊りとなつているグリムジョーの姿があつた。

呼吸と視界確保の為か、一応頭部から鼻の周辺は無事ではある。だが抜け出すのは到底不可能。

ドルドーニの言う通り、正に蓑虫と言っても差し支えない状態だった。

如何に十刃の一角と言えど、こうなつては只の晒し者。何とも哀れな姿である。

憐みの目で此方を眺める二人に気付いたのか、グリムジョーは殺気を滾らせながら睨み付ける。

——見ていないでさつさと助ける。

そんな意思が伝わって来たものの、二人にはそれが出来無い理由があった。

「睨むなよ。俺等だつて放置したくてして居るわけじゃねえんだ」

「如何してもと言うなら、此処の監ディレクター督の許しを得る事だ」

「ムゴゴ…!!」

口に出さないだけで、実はもう一つ理由がある。

もし今グリムジョーを解放してしまえば、間違い無く報復と称して暴れ出す。そして此処に来る羽目になった原因であるノイトラの元へと向かつて行くだろう。

とは言え、現在当人は行方不明となっている為、衝突する事はまず無いだろうが。

「しかし…ノイトラの奴は大丈夫なのか？」

「案ずる事は無い」

当然、この二人もノイトラの霊圧の消失に気付いていた。

しかし初めこそ動揺したものの、直ぐに落ち着いた。

理由は先程から終始態度の変化を見せないセフィー口だ。

何故スタークが気絶したチルツチを運んで来たのか。如何なる経緯からそうなったのか。全く以て疑問は絶えない。

状況からして確実に、スタークはノイトラの霊圧消失に関係しているのだろう。故にチルツチが何かしらの行動を起こした為、多少手荒な方法で彼女を沈めた。そこまでは察せる。

にも拘らず、セファイロは顔色一つ変えずに対応。剩え治療室を去る直前のスタークに劳いの言葉を投げ掛ける始末。

「彼女が動かないのだ。恐らく大した問題では無いのだろう」

「…確かにな」

だがドルドーニが落ち着いている理由はそれだけでは無い。テスラと同様、彼は信じていたのだ。あのノイトラがこの程度で終わる筈が無いと。

加えてドルドーニは唯一、ノイトラが秘めていた真の実力を直接目の当たりにしている。故にその信頼は揺るぎ無いものとなっていた。

「今我々に出来るのは、何時でも動ける様に万全の状態で備えておく事。只それだけだ」

「なら焦っても仕方が無えな。そんじや、もう暫く休ませてもらうとするぜ」

納得したのか、ガンテンバインはベッドへと横たわる。

それに続く様にして、ドルドーニも近くの椅子へと腰掛けた。

「それじゃあロカちゃん。さっき言った件の準備をしましょうかあ〜？」

「…はい」

「あの陰険メガネも少しは役に立ちましたねえ〜」

ロカが後片付けを終えると同時に、セフィーロが声を掛ける。

「…一つだけお聞かせ下さい」

「はい〜？」

ふと、ロカはセフィーロへと問い掛けた。

ノイトラが忙しく動き回っていた時から、ずっと気になっていた事を。

「何故——ノイトラ様を“放置”したのですか？」

その問いの刹那、セフィーロの動きが止まる。  
だが口力は構う事無く、更に言葉を繋ぐ。

「貴女なら……如何とでも出来た筈です」

それこそ彼女がその気になれば——“永反膜の匪”によってノイトラが幽閉されるのを事前に阻止する程度すら容易に。なのに何故。

暫し間を置いた後、セフィーロは薄笑いを浮かべながら口を開いた。  
見る者全てが悪寒を感じる様な、底知れぬ不気味な空気を漂わせながら。

「ノイトラさんが一番格好良く見えるのは……どんな時だと思う？」  
「え……」

質問に質問で返す。本来であれば失礼に当たる対応である。

しかし口力としては別に構わなかった。問題はその質問の意図が読めない事だ。

だがセフィーロが意味の無い問いをする筈が無いとして、返答の為に思考を巡らせ始める。

ノイトラの格好良い部分。見た目は完全に極悪人であり、過去の振る舞いも粗暴で下衆。

だが今となつては全くの別人。荒く素つ気無い言動は目立つものの、格下の相手とも壁を作らず対等に振る舞い、やや遠回しながら優しさを見せる様になった。

ノイトラと接する機会の多いロカはそれを十分に理解しており、最近ではヤミーの暴挙から救ってくれた恩義もある。

当然、悪い部分もあるにはある。だが考えれば考えるだけノイトラの良い部分が浮かんでくる。

単に虚夜宮以外では至つて普通の事で、一癖二癖ある者達の集いだけに目立っているだけなのかもしれないが。

思考を巡らせていたロカはふと、自身の頬に熱が籠っているのを感じた。

——これが気恥ずかしい、というものなのだろうか。

今迄感じた事のない未知の感情にもどかしさを覚えつつ、考えの纏まったロカは答えを口に出した。

「……一つの目標に向かつて、一心不乱に努力している姿、でしょうか…?」  
「そう。普段さり気無い優しさを見せてくれるのも良いけど、やっぱりそれが一番良いわね」

刹那、ロカは気付いた。セフィーロの浮かべる笑みに、どこか黒く歪んだものが浮かんでいた事に。

「まさ、か——」

「ふふっ」

ロカの額から一筋の冷や汗が伝う。

彼女は全てを悟った。

「折角ノイトラさんが頑張っているのに——それを台無しにしてしまうなんて勿体無いと思わない?」

そう、セフィーロは必死に足掻くノイトラの姿を眺めていたいという欲の為だけに、

行動を起こさなかったのだ。

とは言え、本当に危機に陥りそうな場合は流石に手を出していただろうが、それでもこれは余りに身勝手に歪んだ考えだと思えない。

「さ、時は金なり。早く行きしようか」

「は……い……」

けろりと雰囲気切り替えて歩き始めるセフィーロに対し、ロカは今迄以上に恐怖を感じた。

だがそんな彼女に救われ、今の自身があるのも事実。

——信じよう。

今のセフィーロの事は確かに恐ろしく感じるが、結局のところ、彼女の根幹にはノイトラを想う心がある。

例え紆余曲折あろうとも、最終的には悪い結果にはならない、させない筈だ。

ロカは身体の震えを抑えながら、一息遅れでその後を追い——途中でその歩みを止めた。

「その前に…」  
「ん〜？」

セフィーロが振り返る。

そのまま口力の視線の先を追うと、わいわいと騒がしく動き回るピカロの姿があった。

「え〜い」「ふあいや〜」「おいしいー」「外れたー！」「もういつちよ〜」「おおー」「大当たリーー！」「今のは何点？」「おでこなので5点です」「ええ〜」「がーん」「こんなのつてないよ…」「10点はどこ？」「ち〇こ〜」「タ〇タ〇〜」「う〇こ〜」「しつこ〜」「ぶぶつ」「きやははは！」「今のは満点ですね」「おなかいたい」「わたしの腹筋をかえしてください」

「グモアアアツ！！」

「止さんか悪戯小僧共！！ 自分達が何をしているのか理解しているのかね！！？」  
「勘弁してくれ！！ 下手すりゃコツチも巻き添え食らっちゃうじゃねえか！！」

チルツチの無事を理解して安堵したのだろう。何時も通りの調子に戻ったピカロは、

治療室に置いてある遊具の中からボールにパチンコや玩具の弓といった物を持ち出し、グリムジョーを的にして遊び始めたのだ。

言うまでも無く、玩具の一種として扱われている当人は額に青筋を立てて怒りを露にしている。

何時になるかは不明だが、この様子だと解放された直後、真つ先にピカロを殺しに掛かるだろう。ピカロを止めなかった周囲の者も同様に。

それを察したドルドーニとガンテンバインは、盛大に焦りながら暴拳を止める為に奔走していた。

だが数が数である。たった二人で間に合う筈も無く、状況は好転しているとは言い難かった。

「彼等を…止めてからが宜しいかと」

「…そうですねえ」

このままではグリムジョーの拘束を解く訳にはいかなくなる。

正直、それは困る。何せ一応彼にもやってもらわねばならない事があるのだから。

セフィーロは静かに溜息を吐くと、口力を連れて喧騒の中心へと向かった。

京楽が初撃を食らって以降、彼と浮竹は数回に亘ってスタークとの斬り合いを行った。

結果は散々。此方の攻撃は尽く見切られ、鬼道すらその膨大な霊圧で相殺される等、全く通用しなかった。

そして逆に攻勢に出られれば、もはや手も足も出ない。

幾多の鍛錬と戦場で鍛え上げられた目を用いても、響転による動きは捉え切れず。単  
純な体捌きすら同様。

意識の外より繰り出される、極限まで研ぎ澄まされた斬撃は、大半が直撃して初めて  
気付いた。運よく受け止められても、容易く力負けする。

この様に圧倒されている現状ではあるが、唯一の救いもある。それは此方の攻撃を捌かれた際に反撃がこない事だ。

その理由を京楽は察していた。確かにスタークは本気なのだろうが、同時に此方の観察も行っているのだと。

——観察が終われば如何なる事やら。

想像するだけでも寒気がした。

「…無事か、浮竹？」

「っ、大丈夫だ」

傷があるのは京楽のみ。対峙直後に刻まれた胸元のそれに加え、全身には無数の太刀傷があり、絶えず血を流している。

対して浮竹は頬を浅く斬られた程度で、それ以外はほぼ無傷だった。

理由は簡単。京楽が庇っているのだ。

如何に隊長格の中では上位に位置する実力があるとは言え、浮竹は生まれつき病弱な身体を持っている。長時間の戦闘は勿論、強敵との激しい戦闘に耐え得る筈も無い。

何せスタークの後には藍染と副官二名が待ち構えている。その為、京楽は浮竹の負担

を極力減らしたいと考え、献身的な立ち回りをしていった。

「…済まない、足を引つ張ってしまつて」

「そんな水臭い事言わない。僕と君との仲じゃないの」

しかし流石に無茶が過ぎたかと、少々後悔していた。

未だ交戦開始より僅かな時間しか経過していないが、スタークは余力を残して戦える相手では決して無い。それこそ此方が持てる全てを注ぎ込み、死力を尽くしてやっと手取れるレベルだ。

京楽の中で危機感が募る。

周囲を巻き込む事を恐れるが余り、思考より除外していた卍解という二文字が脳裏を過る程に。

だが現状では卍解の解放すら叶わない可能性もあつた。

その証拠に京楽と浮竹は未だに始解すら解放していない。

通常、卍解を習得している死神は必須である解号を飛ばして始解を使用出来る。しかしスタークはその僅かな時間すら与えてはくれなかつたのだ。

現在は何を思つたのか、一旦距離を取つて戦闘を中断してはいる。

だがスタークにとってこの程度の距離なぞ何の意味も持たないだろう。それを身以て理解していた京楽と浮竹は、警戒の余り身動き一つ取れずにいた。

「…少し危ねえ、か」

表情を強張らせながら此方の様子を窺っている二人を余所に、スタークは不意に呟く。その視線はバラガン達の戦場へと向いていた。

バラガンの従属官達は、この空座町全体を覆う結界の起点らしき柱の近くで、伏兵らしき死神達と交戦している。

表面上は押している。このまま流れが変わらなければ、従属官達が勝利するだろう。だがスタークは気付いていた。数名を除き、大半の死神達が後手に回りながらも反撃のタイミングを計っている事に。

「ハリベル達は…大丈夫だな」

その反面、ハリベルとその従属官達四名は終始戦況を優位に運んでいる。最も、後者はテスラ一人しか戦っていないのだが。

状況から見ると、如何やら一対一の対等な条件で戦う事を選択したのだろう。観戦する羽目になったアパッチ達の不満気な表情から、大凡は予測出来た。

「さて、そんじやあボチボチ動くとしますか——」

先程までの交戦で、京楽と浮竹の戦力分析は済んでいる。

斬魄刀の能力はまだだが、スタークは確信していた。この二人の本来の戦い方は二刀流であるのだと。

二人に共通するのは、斬魄刀を右手左手と両利きで戦える部分と、持ち替えた際の踏み込みの違いだ。

読まれまいとしているのか、京楽はその辺りを微妙に調整してはいた。だが先程述べた動きに加え、左腰に残された脇差——の様に見える斬魄刀の奥深くに内包された霊圧までは誤魔化せない。

未だ不確定要素は残っているものの、スタークに迷いは無かった。

今の彼の頭にあつたのは、全く以て正気を疑う内容。それは帰刃後に眼前の二人を速攻で撃破した後、危機に陥っている仲間達の援護へと回るというものだった。

京楽と浮竹が此方の予測を超えた粘りを見せる可能性も考えられるが、その時は二人

の相手をしながら援護すれば良いと。

スタークの帰刃形態の能力は基本的に遠距離攻撃に特化している上、近接戦闘にも対応出来る。加えて当人の能力も隙間無く突き抜けている。

つまるところ——スタークにしか出来無い事。正に第一十刃に相応しい思考回路と言えた。

「止めい」

「ッ!!」

スタークが帰刃の為にリリネットを呼ばんと、息を大きく吸い込んだ直後である。

何と彼の前に突如としてバラガンが立ち塞がったのだ。

予想外の出来事に、スタークは思わず全身を硬直させる。それは京楽と浮竹も同様に。

「それ以上動けば、儂は貴様を敵と見做す」

「……は……？」

バラガンの口より放たれた言葉に、スタークは絶句した。  
何せそれは、自身の従属官達を助けるなど言うのと同義なのだから。

「アンタ…本気か？」

「二度は言わん」

———どうか聞き間違えであつてくれ。

そう内心で願いつつ問い返したスタークだが、叶わなかった。

「解つてんだろ。このままだとアイツ等は…」

「それが如何した」

「———ッ!？」

何人の兵士が死のうが、自身には何の問題も無い。その程度の存在であつただけの事。

戦場というものは常に死と隣り合わせ。特に兵隊なぞ消耗品に等しい存在だ。

彼等が一人二人と死んだ程度で動じる程度の器なぞ、端から持ち合わせていない。

「たかが数字一つの違いで、儂より上に立った心算か。図に乗るなよ餓鬼が」

あの従属官達は自身の所有物。

如何扱おうが、他者に口出しされる謂われは無い。

「何人たりとも、儂が配置した駒を横合いから動かす真似は許さん」

バラガンの思考は全てこれに尽きた。

王であり神たる自身の采配は絶対。他者が口を挿む余地など微塵も存在しない。

「…例えそれが、藍染サンの指示だったとしてもか」

「ふん」

全身から尋常ならざる威圧感を放出しながら、スタークとバラガンは互いに睨み合う。

強大過ぎる圧と圧とのぶつかり合いに、京楽と浮竹の硬直したまま動けない。

「…勝手にしやがれ」

一体どれ程の時間が経過しただろうか。

長い長い睨み合いの末に、折れたのはスタークだった。

吐き捨てる様にしてバラガンにそう言うと、珍しくその眉を不機嫌そうに顰めながら別方向を向く。

バラガンにとっては実に不敬極まりない態度である。

もしもこの遣り取りを彼の従属官達が見ていけば、立場なぞ投げ捨てて迷わず食って掛かっていただろう。

だがバラガンは特に咎める様な真似はしなかった。

元よりスタークは気に食わない存在であったが、その実力だけは本物。本気で敵対すれば、此方も無傷では済まないだろうと。

でなければ第2十刃の立場に甘んじている訳が無い。当人としては極めて不本意ではあろうが。

「…済まねえ」

バラガンが響転でその場から去った後、スタークは小さく謝罪の言葉を零した。対象は勿論ノイトラだ。何せ全員無事で帰って来るといふ約束が、限りなく不可能となつてしまつたからだ。

正直言つと、バラガンの意思を無視して従属官達を助ける事は可能である。しかしその行動を起こした場合、まず確実にバラガンが敵に回つてしまう。そうなれば最早泥沼。下手すれば連鎖する様にして、救える者も救えぬ最悪な状況へと陥る事だろう。

「あらあら、よろしくないねえ。仲間なんだからもう少し仲良くしないと」  
「…それが出来りゃあ苦労しねえよ」

先程までの態度が嘘の様な京楽の言葉に、スタークは左手で後頭部を掻き毟りながらそう返す。

この時ばかりは、互いにいがみ合う事無く固い絆で結ばれた死神達が羨ましく思えた。

「リリネット！」

思考を切り替えたスタークは、自身の片割れであり唯一の従属官の名を叫んだ。

何時でも戻れる様に待機していたのだろう。リリネットはものの数秒で傍へと降り立つ。

「…やるんだね？」

「ああ。もうのんびりしてられる状況じゃあなくなっちゃった」

リリネットの問いに、スタークは両瞼を閉じながら答えた。

第20刃の従属官達はもはや助けられない。だがバラガン本人は別だ。

駒については警告されたが、それを率いる王までは駄目だと聞いていない。

故にバラガンを助けても、此方は文句を言われる筋合いなぞ無いという訳だ。

完全に屁理屈な解釈だが、スタークは完全に聞き直っていた。

——何があっても、バラガンだけは助ける。

それが成功した場合、今後は今迄以上に彼との関係が悪くなる可能性が高いが、死なせるよりはずっと良い。

ならば今、自身は如何すべきか。

今相手している二人の敵を早急に片付け、どの戦場にも助力出来る様に備えておく。それが最善だろう。

当初は多少時間を掛けてでも、敵の能力を見極めた後、一気にカタを付ける予定であつた。

慎重案を抜きにして序盤全力で挑んでも勝てる可能性は決して低くは無かつただろうが、相手が相手だけにリスクが高い。

浮竹は不明だが、京楽の様な腹の底を見せないタイプは、何かしら戦況を引つ繰り返す様な奥の手を持っていても不思議では無いのだから。

「浮竹!」

「…ああ!」

京楽と浮竹は、スタークの雰囲気の変化に気付いた。

——— 今しかない。

二人は互いに視線を合わせると、何かを決心したかの様に頷いた。

「花風はなかぜ紊みだれて花神啼かしんき——」

「波なみ 悉ことごとく我が盾となれ——」

其々に自身の斬魄刀を構え、解号を唱え始める。

それを眺めながら、スタークは右手に握った斬魄刀を鞘に納め、その手をリリネットの頭頂部に乗せる。

直後、彼女の姿が掌へ吸い込まれる様にして消え去った。

「天風てんふう紊みだれて天魔啖てんまう！！」

「雷いかづち 悉ことごとく我が刃となれ！！」

解放が近づくに連れ、浮竹と京楽の霊圧が上昇し始める。

それを静かに眺めながら、スタークは自身も秘めし力を解放すべく、解号を唱える。

「蹴散らせ——」

——絶対に勝つて。

己の中から響くりリネットの声に、そんな事は重々承知だと返しながら。

「かてんきようこつ  
花天狂骨!!!」

「そうぎよのこわり  
双魚理!!!」

「ロス・ロボス  
群狼!!!」

三人が解放したのはほぼ同時だった。

噴き出した霊圧を周囲へ撒き散らしながら、京楽と浮竹は尸魂界でも唯一と謳われる二刀一対の斬魄刀を、スタークは第一十刃の所以たる真の姿を晒す。

刀で言う棟むねに当たる部分の一部が欠けた、まるで青龍刀を連想させる「花天狂骨」を握る京楽。

逆十手状の刀身を持ち、五枚の札をぶら下げた縄が柄同士を繋いでいるという、非常に個性的なデザインの「双魚理」を構える浮竹。

そしてこの二人と相對するのは——両手には二丁拳銃が握られ、狼の毛皮の様なコートをその身に纏い、左目にポインターの様な仮面の名残を装着したガンマンと化したスターク。

「…ふいふ、つと」

座り込んでいた体勢から、気怠げな様子でスタークがゆつくりと立ち上がる。

傍から見れば隙だらけな姿だが、京楽と浮竹は動かなかった。警戒レベルを最大まで上げ、油断無くその一挙一動を観察し続けるに止めていた。

これが他の若い死神達であれば、このチャンスを逃すまいと確実に攻勢に出ていただろう。

京楽と浮竹は読んでいたのだ。その霊力の凄まじさは勿論、隙だらけに見える姿は全て偽りであると。

「…折角解放したところで悪いが」

スタークは京楽と浮竹を一瞥すると、口を開いた。

「アンタ等の斬魄刀強そうだしよ…」

刹那、スタークの姿が忽然と消える。

それが響転だというのはもはや判り切っている。だが先程までとは決定的な違いがあった。

只でさえ捉え切れぬ程だった速度が更に一段階上昇し——隠密機動の動きが赤子に見えるレベルへまで至っていた事だ。

正にその速度は魔的。才気溢れる者が長年に亘り練磨を重ねたとしても、到底辿り着けぬ領域。

「——さっさと決めさせてもらうぜ」

上空より響く声に、京楽と浮竹は弾かれる様にして顔を持ち上げる。

其処には体勢を上下反転させたスタークが、二丁拳銃の銃口を真下へ向けながら緩やかに落下して来ていた。

「セロ・イン・ファイニート重光無極閃弾」

放たれたのは帰刃形態のスタークが得意とする、燃費威力共に桁外れな、ノイトラム模倣せんとした強力無比な技——セロ・メトラン・エツタ無限装弾虚閃。

銃より無数の虚閃を放つという単純なものだが、恐るべきはその連射速度。なんと千発以上もの数を瞬時に叩き込めるのだ。

しかし本来それは拳銃一丁で放つもの。現にスタークは異なる技名を口に出している上、銃も二丁使用している。

単純に見れば倍。片方で千発だとすれば、二千発。

一発一発は通常の虚閃だとしても、幾つも重なれば威力は増す。他の十刃が放つ『王虚の閃光』や『黒虚閃』など目では無い程に。

「は、はは……」

「ちよつと洒落になつてないって、これは……」

閃光に？み込まれる直前、その有り得ざる光景に、京楽と浮竹は思わずその表情を引き攣らせていた。

乱れた呼吸を必死に整えながら、冬獅郎は眼前にて静かに佇む敵を睨み付ける。

既に斬魄刀は始解の状態だ。交戦開始からものの数秒で、ハリベルの実力の高さを読み取った冬獅郎は、迷わず解放を選択した。

流石に卍解は早過ぎるとして見送ったのだが、今思えば間違いであったと後悔していた。

「はっ、はっ……!!」

強い。今の冬獅郎の心中はその二文字で占められている。

ハリベルの持つ力、速度、技術、経験。それ等全ては凄まじく高い水準にあった。疲弊している此方に比べ、汗一つ流さずにいる時点でお察した。

自身が未熟なのは十二分に理解していた。だがこれは余りにも差が開けているとしか言い様が無い。

幸いなのは未だ負傷が一つも無い部分か。

しかしこれは決して冬獅郎の奮闘の結果では無い。ハリベルが意図的にそうしているのである。

冬獅郎が攻撃を弾かれて隙だらけとなっても、響転で死角に回り込んでも、一向に仕留めに掛からない。

態々彼が対処出来る様になるまで一息置いた後、そこでやっと動き始めるのだ。

——これではまるで稽古ではないか。

冬獅郎は己の中で沸々と沸き上がる怒りを抑え込みながら、歯噛みした。

文句を言いたいのは山々だが、後手に回り続けるしか出来ていない分際で訴えても何の意味も無い。

それにもしかすると、此方の怒りを煽る事で刃を鈍らせる意図がある可能性もある。

「…思いの外、鈍ってはいないな」

ハリベルは斬魄刀を眼前まで持ち上げると、何度か柄を握り直しながら呟いた。

それを耳にした冬獅郎は悟る。彼女は自身に稽古を付ける意図は無く、単に肩慣らしをしていたのだと。

勝負を決めに来なかつたのも、直ぐに終わらせてしまおうと慣らしも何も無くなつてし

まう為。

屈辱だと、冬獅郎は内心で吐き捨てる。

それだけの実力がハリベルにはあるとはいえ、納得出来様筈も無い。

「随分と余裕かましてくれんじゃねえか」

「…ふむ、気に障ったか？」

我慢の限界だったのだろう。気付けば冬獅郎は口を開いていた。

その声に隠し切れぬ程の怒りの感情を込めながら。

「その割には卍解を使わない様だが…」

「くっ…!!」

——嘗めているのはどちらだ。

その返しは、口外にそう言っている様を取れた。

とは言え、ハリベルは冬獅郎の考えを理解していた。

死神達にとって一番の目的は、藍染の打倒である。それまでに余力を残しておこうと

するのは当然。故に配下の中でも精鋭たる十刃達を相手にしながら、卍解という切り札を使わずにいるのだろうか。

しかしこれはハリベルにとって結構な屈辱だった。

言うなれば——十刃如き、卍解を使わずとも勝てる程度の相手だと判断されているに等しいのだから。

他は知らないが、少なくともハリベル達は常日頃から多くの鍛練を積んできたという自負がある。

死神達は無意識の内にそれを無下にしたのだ。故に多少の意図返し程度は構わないだろうとして、ワザと先程までの様な態度を見せていた。

「だが…そうだな。部下達が真面目に戦っているというのに、私がこれでは示しが付かん」

「ッ、松本!?!」

ハリベルが呟いた直後、冬獅郎の近くに何か吹き飛ばされて来た。

それは従属官四人と交戦している筈の乱菊だった。

即座に体勢を整えるも、彼女の表情は苦痛に歪んでおり、攻撃を受けたらしい腹部の

辺りを空いた左手で押さえている。

——こつちの事は気にしないで。

乱菊は視線のみで冬獅郎に訴えながら、再び自身の戦場へと戻って行った。

「部下の事より、まず自分の心配をするのだな」

「ちつ」

ハリベルの忠言に対し、冬獅郎は舌打ちしながら構え直す。

内心で敵に指導される己の未熟さを恥じながら。

「……ここからが本番だ。死力を尽くして掛かって来い」

ハリベルは徐に、自身の斬魄刀を逆手に持ち替えると、切っ先を下に向けながら前方へ掲げた。

「ッ討て——ディブロン皇鮫后」

周囲に突如として発生した大量の水が、二枚貝状の波となって全身を包み込んだ。それから間も無くして、その波が巻貝状に回転し始める。

「ッ、  
〃卍解——だいぐれんひょうりんまる大紅蓮氷輪丸〃!!!」

これ以上実力差を開けさせる訳にはいかない。そう判断した冬獅郎の行動は早かった。

念には念をと、密かに保険を仕込みながら。

冬獅郎の卍解が解放された直後、眼前にて渦が縦に裂かれた。

そこから姿を現したのは、帰刃形態と化したハリベル。

口元の仮面が消え、両頬に浮かぶ藍色の仮面紋。両肩や胸元周辺には装甲、下はミニスカート、膝より下は脚甲が。背中には鮫のヒレを模した飾りに、その手には持ち替え自在な鮫の頭部の様な大剣が握られている。

元々全体的に高かった露出度が更に向上。最低限の部分だけを隠し、戦いの為に極限まで機性能性を重視した、正にハリベルらしい姿だった。

「っ、来るか——!!!」

ハリベルが徐に大剣を持ち上げる。

それが攻撃開始の合図であると、誰が見ても理解出来た。

防御か回避か。どちらにでも対応可能な様、重心を低くして構えながら、冬獅郎はハリベルの動きを注視する。

それが全く無意味である事も知らずに。

「……は……？」

遂に大剣が振り下ろされるかと思われた次の瞬間——視界が左右に別れた。

冬獅郎は理解した。自身は今、ハリベルの放った斬撃により、縦真つ二つに両断されたのだと。

冬獅郎の視界が暗転してゆく。

その様を、ハリベルは期待外れだと言わんばかりに、極めて冷めた視線で見下ろしていた。

不覚にも良い一撃を食らってしまったと、乱菊は未だに鈍い痛みを発する腹部に顔を顰めながら思う。

正直、たかが従属官と侮っていた。後にテスラ・リンドクルツと名乗った優男の破面は、先に仕掛けた冬獅郎の前に瞬時に回り込む等、速さには目を見張るものがあつたが、意識していれば対処のし様はあるとだろうと。

しかしテスラの実力は此方の想像を遥かに超えていた。

速度のみならず、基本に忠実な剣筋と、同様の性質の徒手空拳を組み込んだ戦法。それは単純ながら非常に強力で、乱菊としても初めて戦うタイプだっただけに、苦戦を強いられた。

加えてフェイントも用いるらしく、見事に嵌められてしまう。先程吹き飛ばされたのもそれだ。

敵を弾き飛ばした後、上段から追撃する。そのパターンを覚えさせられたかと思いき

や、がら空きの腹部へ蹴撃を捻じ込まれた。

何とか元の場所へと戻ると、すかさず構える。

そんな彼女の眼前では、サーベル状の斬魄刀を右手に持ちながらも、一切構えず自然体で佇むテスラの姿があった。

——何と無様な結果か。

乱菊は四人同時に相手してやると豪語した自身を殴り飛ばしたい衝動に駆られた。

今こうして生きていられるのも、挑発染みた台詞に殺気立つ他の三人を宥めたテスラが、まずは自身が一対一で相手する事を提案したからだ。

乱菊は気を引き締めた。そして冬獅郎が来るまでの時間稼ぎという自身の役目を全うすべく、思考を巡らせる。

戦闘では分が悪い事は理解した。恐らく鬼道等の捌め手を多用しても長くは持たないだろう。

ならば剣を交えるのと併せて弁舌を振るうというのは如何だろう。

幸いにも、乱菊は他者をからかったり煽るのは得意分野だった。

「…案外優しいのね」

「何がだ？」

不審に思いながら、テスラは問い返した。

「だって貴方、さつきから私の顔を狙わないじゃない」

乱菊の返答が予想外だったのか、テスラは首を傾げながら答えた。

「…無用の気遣いだったか？ 女性にとって顔は命だと認識していたのだが」

今度は乱菊が目を点にする番だった。

只の偶然だろうと考えていたそれが、まさか本人が意図的にしていたとは思ひもしなかったからだ。

事実、これはテスラの正直な意見である。

別に顔を狙わずとも、勝つ方法は幾らでも存在する。胴体の方が攻撃を当て易い上、少しでも傷を付けられれば大抵の相手は動きが鈍る。つまり確実性を求めるのであれば後者が有効と言えた。

ぶっちゃけノイトラによる紳士教育の影響が大きいのも否定出来無いが。

「あら紳士的。嫌いじゃないわよそれ」

「それは光栄……とでも言うべきか」

乱菊は瀟靈廷にて数々の男性隊士達を虜にした魅惑の笑みを浮かべながら言う。

だがテスラには通用しなかった様で、さらりと流された。

「素っ気無いわねえ。こっちは結構本気なのに」

「済まないな」

—— 付け入る隙が無いとはこの事か。

乱菊は知っていた。反応からして、テスラは心に決めた唯一無二の者が存在するのだと。

ならば今度はそれに触れる形で揺さ振りを掛けてみるべきか。

乱菊がそう考えた時だった。

「……さて、時間稼ぎはもう良いか？ 余り俺も暇では無いんだ」

「!!」

不意に放たれたテスラの問い掛けに瞠目する。

此方の思惑なぞ、全て承知の上で会話に付き合っていたという事に。

油断では無く余裕。

自身は確固たる自信が見て取れた。

「もう、本当につれないわね！　せっかちな男は嫌われるわ、よッ!!」

「善処しよう」

乱菊は再び斬り掛かり、テスラはそれを軽く受け止める。

そのまま刀身を押し返して乱菊の体勢を崩すと、流れる様にして斬撃を繰り出した。

それは乱菊の肩口へと直撃。同時に鮮血が宙を舞う。

痛みに顔を顰めながらも、乱菊は必死に食らい付かんと攻め続ける。

だがテスラはそれを涼しい顔で捌いてゆく。

「っ、紳士だったら女性に勝ちを譲るものじゃない!?」

「申し訳無いが、俺には何としても勝利を捧げたい方がいるのでな」

良く良く見れば、テスラはその場から殆ど動いていない。

逆に乱菊は激しく動き回っている上、負傷の多さから考えるに、もはやどちらが優勢なのか判り切っていた。

「あたし達の出番……」

「……もうあいつ一人で良いんじゃないか?」

「容赦の無い姿も素敵ですわ」

ここは自分がやるからと、テスラに待機を頼まれていた三人は、様々な感情を抱きながら戦場を眺めていた。

日頃の鍛練の成果を見せてやると意気込んでいたアパッチは、出鼻を挫かれた事で不満げな表情を浮かべている。

ミラ・ローズはテスラの優勢振りを見て、何かを諦めた様に呟く。

スンスンは自身の頬に手を当てながら、熱っぽい眼差しをテスラへと向けている。

「つーか何だよあいつ！ さっきから鼻の下伸ばしやがって!!」  
「やっぱムツツリか！ マジで見境ねえなあ野郎!!」

遂に不満が頂点へと達したのか、アパッチとミラ・ローズが騒ぎ始める。  
その謂われない文句は、確りとテスラの耳にも届いていた。

「乳か！ 乳なのか!? あんなんタダの脂肪の塊じゃねえか!!」

「…ぷっ」

「今ドコみて笑いやがったミラ・ローズツ!!」

叫びながら地団駄を踏むアパッチを、ミラ・ローズは馬鹿にする様にして笑う。

直前までその視線が胸部を向いていたのに気付いたのか、アパッチは眉間に皺を寄せながら詰め寄った。

「大き過ぎたり硬過ぎても良くありませんわよ?」

「んだとコラア!!」

「だよな！ だよな！」

突然のスンスンの助け船に、アパッチは瞳を輝かせながら同意する。だがそれは即座に裏切られる事となる。

「ですが逆も過ぎては駄目です。大切なのは程よいサイズと形、そして柔らかさですわ」

スンスンはそこで一旦言葉を区切る。

そしてアパッチとミラ・ローズの胸部を一瞥し——口元を袖で隠しつつ、勝ち誇った様に鼻で笑った。

「……ふっ」

『よしその喧嘩買ったア!!』

勃発するキャットファイト。ぎやあぎやあと騒ぎながら、三人は互いに髪や頬を引っ張り合う。

斬魄刀を抜かない辺り、本気では無いのだろう。

命の奪い合いが繰り広げられる戦場に於いて、緊張せず何時も通りに振舞えるのは決

して悪い事では無い。

だが彼女達の場合、余りにマイペース過ぎている。

これではさも不意討ちして下さいと言っている様なものだ。

——後で折檻を受けても知らないぞ。

自身の後方にて繰り広げられている喧騒を耳にしたテスラは、そう内心で思った。

「…あれ、良いの…？」

「………気にするな……」

流石の乱菊も気になったのか、肩で息をしながら問う。

それに答えるテスラはどこか遠い目を浮かべていた。

「…さて、そろそろ様子見は終わりにしよう」

「がはッ!!」

直後、遂にテスラが動いた。

響転で瞬時に乱菊へ接近すると、その腹部へ掌底打ちを叩き込む。

身体の内部に大きなダメージを受けた乱菊は、肺に溜まった空気を強制的に吐き出しながら吹き飛んで行く。

「くツ… // 灰猫<sup>はいねこ</sup>!!」

何とか体勢を整えると、間髪入れずに乱菊は斬魄刀を解放する。

刀身が灰状となって周囲へ拡散。瞬く間にテスラを包囲した。

追撃を仕掛けんとしていたテスラだったが、得体の知れない斬魄刀の動きに、思わずその動きを止めた。

「さっきまでのお返しよ!!」

「これは…」

「食らいなさい—— // 猫輪舞<sup>ねこりんぶ</sup>!!!」

やがてテスラを覆い隠した灰が、その距離を詰めながら高速回転を始める。

灰猫の能力からして大凡察せるだろう。乱菊はこの技で、テスラを全方位より斬り刻み、勝負を決めようとしているのだ。

正解を習得していない副隊長にとって、始解は真正正銘の切り札である。

この局面でそれを使用するという事は即ち、勝機があると判断したが故。

終始不利ではあつたものの、乱菊は出来る範囲でテスラの分析をしていた。

単純な戦闘能力では向こうが上。それを理解した時点で、即座に近接戦は捨てた。

かと言つて遠距離戦闘に切り替えるとしても、始解は必須。加えてあの響転の動きか

らして、気を抜けば一瞬で間合いを詰めて来るだろう。

言つてしまえば、『灰猫』の能力は複雑では無い。

余り長く御披露目していれば、相手は簡単にその対策を見出す事だろう。

ならば使用するタイミングとして最適なのは何時か。

テスラが此方の様子見を止め、勝負を決めに掛かった瞬間以外に無い。

その場合、大半の者の意識はその一点のみに集中する。

直前に敵が何か動きを見せても、所詮は苦し紛れの一手だろうと気に留めずに攻め続

けるか。または後手に回るのも承知で、慎重にその対応を優先するか。つまり二択

だ。

テスラの場合は後者だった。これがアパッチかミラ・ローズであれば、迷わず前者を

選択

していただろう。

一息遅れで「灰猫」の能力分析を開始するも、既に乱菊は次の手を打っていた。

——これで終わりだ。

勝利を確信した乱菊は内心でガッツポーズを取った。

まだ後には三人も控えて居るが、この戦いでの勝利は大きい。

確実に敵の士気は下がり、動揺もする。非道かもしれないが、それを突く等すれば、当初の予定通り時間稼ぎに徹する事も難しくは無いだらうと。

「よし……！」

この時、乱菊は一つだけ失念していた。

確かにテスラの意識の際を突いたのは見事としか言い様が無い。通常であれば、ほぼ勝利は決定したも同然だろう。

しかし相手は死神では無い。破面だ。

「——見事だ」

「……え？」

技を終えた灰が周囲へ拡散し始める。乱菊は自身の持つ柄へと刀身を戻さんと、念を込めた直後だった。

仕留めたと思っていた筈のテスラが、自身の顔の前で両腕を交差させた防御体勢のまま、その灰の中から姿を現した。

「正直、悔っていた」

「う……そ……」

「まさかあの局面で逆転を狙いにくるとは思いもしなかったぞ」

流石に無傷とはいかなかつたらしい。白装束はボロボロになり、そこから覗く肌には無数の太刀傷が刻まれている。

しかしそれ等の傷は全て浅く、動きを阻害する程でも無かった。

「……一から作り直しだな」

瞳目する乱菊を余所に、テスラは防御体勢を解くと、自身の身体を一瞥する。

視界に入る、自身の身に纏う白装束の末路に、思わず溜め息を吐いた。

実はこの白装束、配給された当初の物にテスラが独自のアレンジを加えた、結構なお気に入りでたっぷりする。

切っ掛けはノイトラだ。折角の端正な顔立ちなのだから、もう少し着飾れと言われたのだ。

初めは乗り気では無かったものの、上手くいけば意中の相手へのアピールになるかもしれないぞと囁かれ、まんまと乗せられてしまう。

ハリベルの従属官となって以降は手を加えるのを止めたが、愛着は変わらず。

ちなみに止めた理由としては、余り服装に拘るのは異性に軟派な印象を与えかねないからだ。

「さあ、今度は此方の番で良いな？」

「ッ!!」

テスラは再び視線を乱菊へと戻すと、そう言った。

その瞳には先程まで一切無かった、刃の如き鋭利な輝きを放っていた。

「ッ打ち伏せろ——ペル牙鎧士ガ」

サーベル状の斬魄刀を逆手に握り、柄の部分を自身の顔の横へと持ち上げた。直後に解号を唱え、テスラの姿は巻き上がった煙幕の中へと隠された。

「——つ、*灰猫*!!」

その桁違いな霊圧の上昇量に、乱菊は息を？む。だが即座に正気に戻ると、二元に戻し掛けていた灰状の刀身を再び周囲へ拡散させる。

「無駄だ」

しかし全てが手遅れ。

突如として耳に入るのは、重厚さを増した低いテスラの声。

次の瞬間——乱菊の腹部を中心に走る尋常ならざる衝撃と、ぶれる視界。

気付けば彼女は全身から地面に叩き付けられ、その口からは大量の血が溢れ出していた。

## 第六十三話 死神と侵略者と、虚無と剣鬼と

都会の超高層ビルに匹敵する程の巨体を揺らしながら、数体の下級大虚がゆつたりとした速度で瀦霊廷へと近付いて行く。

その足元では、大勢の隊士達も勇敢にも立ち向かっていた。

「どりゃあああああッ!!」

「死にさせええええッ!!」

顔に刻まれた無数の傷跡。清潔感の感じないボサボサの髪。帯も締めずに羽織っただけの死覇装。

見るからに無法者としか思えぬ散々な出で立ちをした十一番隊の隊士達は、其々に下級大虚の右足目掛けて斬魄刀を振り下ろす。

だがそれ等は全て薄皮一枚を斬り裂いただけに終わり、ほぼダメージを与えられない結果となる。

とは言え、下級大虚としては痒みを覚える程度の効果はあったらしい。

右足を僅かに持ち上げると、其処に群がっていた隊士達をまるで小虫を追い払うかの様にして前方へと蹴り出した。

「ぐわッ!？」

「ぎゃあッ!!」

当然、隊長どころか席官にも及ばぬ実力の彼等が回避出来る筈も無く、瞬く間に宙へと投げ出された。

内数名は運悪く直撃を受けた様で、全身の骨は砕け、酷い者は原形を留めぬ只の肉塊となつて絶命する。

「ヒッ…!!」

「う…あ…」

眼前で目の当たりにした惨劇に恐怖した大半の隊士達は、その表情に恐怖を浮かべて硬直してしまう。

だがその中でも、仲間達がやられた事で逆に己を奮い立たせたのか、足を止めない者

達が居た。

「今だてめえ等アツ!!」

『往生せえやああああアツ!!』

無論、それは十一番隊だった。

先程より更に増した気迫を周囲に撒き散らしながら、未だに右足を振り上げた体勢で固まっている下級大虚目掛けて一斉に駆け出す。

彼等が狙うは左足。そう、先に足を潰す事で転倒させ、そこから畳み掛ける作戦なのだ。

只でさえ攻撃力が足りず、空中で霊子の足場を構築する事も出来ぬ彼等にとって、並外れた巨体を持つ敵が相手では部が悪い。何せ手が届く範囲は足のみで、弱点である頭部を狙えないからだ。

弱者が強者を打倒するには、隙を狙った上で弱点を突く以外に無い。絶体絶命の窮地に追い詰められてパワーアップして逆転——といった芸当が出来るのは、今も昔も物語の主人公のみである。

「オオ、…!？」

十一番隊の面々の勝利への執念が実ったのか、下級大虚の左足へ先程よりも大きなダメージを与える事に成功する。

攻撃の際の衝撃に耐え切れず大半の斬魄刀の刀身が碎ける中、偶然にも僅か数本が踵周辺へ深々と突き刺さったのだ。

片足立ちという不安定な体勢、そして下級大虚が武の心得なぞ欠片も持ち合わせていなかった事。この二つの要素が重なった結果、根を傷付けられた巨木はバランスを崩し、見る見る内に後方へと傾いて行く。

やがて十秒も掛からぬ内に、周囲へ凄まじい轟音と衝撃が響き渡った。

『よっしやあああああッ!!!』

直後に立ち上る、男達の荒々しい歓声。

まあ致し方無いだろう。彼等は一般隊士でありながら、下級大虚を転倒させるという前代未聞の偉業を成し遂げたのだから。

「流石は十一番隊！ 見事だ!!」

「この機を逃すな!!」

絶好のチャンスとばかりに踏み出したのは、席官クラスの面々。

彼等は其々に斬魄刀を解放しながら、仰向けに倒れた下級大虚の頭部へと狙いを定めた。

「『巻きて昇れ——春塵』!!」

「『吹鳴らせ——虎落笛』!!」

「『打消せ——片陰』!!」

三番隊第三席、戸隠とかくし 李空りくうは、鎌状へと変化した刀身を振り被り。同隊の第五席、吾里ごり武綱たけつなは、穴が空いた剃刀状の刀身を肩に担ぎ。第六席、片倉かたくら 飛鳥あすかは、音叉状の刀身を大きく引き絞る。

多大な犠牲を払いながらも、十一番隊の隊士達が作り出した隙である。決して無駄にしてはならないと、彼等の表情には尋常ならざる覚悟が見て取れた。

確実に仕留める為だろう。三名は一斉に下級大虚の頭部、それも硬質な仮面を避ける

様にして、己の斬魄刀を振り下ろした。

その一撃は皮膚を斬り裂き、次に頭蓋を砕き、内側の脳を破壊。結果、下級大虚を完全に仕留める事に成功する。

霊子となって消え始める巨体を目の当たりにした十一番隊の隊士達は、先程よりも更に大きな雄叫びを上げた。

「どんなもんだコラア!!」

「思い知ったかデカブツが!!」

「これが俺達、護廷十三隊最強——」

『十一番隊の力よオツ!!』

止めを刺したのは彼等では無いが、それを指摘する様な野暮な者は此処には居なかった。

それに等しい働きをしたのは間違い無いのだから。

離れでは此処と同様、十一番隊の奮闘により下級大虚が転倒させられ、それを上位席官達が仕留めるといふ光景が広がっていた。

だがその代償は余りに大きい。十一番隊の隊士の数は、当初の半数近くにまで減少し

ていた。中には重傷を負って退却した者も含まれてはいるが、それ以上に死亡者が大半を占めている。

今後、新たに隊士が補充されでもない限り、この作戦は二度と出来無であろう。

「仇は取ってやったぜダチ公…!!」

「今度一緒に飲もうって言ったじゃねえか…バカヤロウ…!!」

下級大虚の最後の一体が消えた直後、十一番隊の一部の隊士達が悲しみの感情を爆発させていた。

仲間の亡骸を前に、地面に膝を着いて涙を流しながら、其々に思い思いの言葉を投げ掛ける。

礼儀を欠いた荒くれ者の多い隊ではあるが、皆総じて身内に対する人情味は持っている。

そんな彼等の様子を目の当たりにした他の隊士達は、下級大虚達を打倒した事に喜びを覚えつつも、沈痛な面持ちを浮かべながら犠牲となった者達へ感謝の意を示していた。

「……これはこれは、何とも予想外な結果で御座いますのう」  
「んな事言ってる場合かよ、じいさん」

瀟靈廷へ攻め込んだ主犯格であり、終始戦場を遠目で観察していた破面——ビエホは思わず呟いた。

恐らく不安なのだろう。隣ではグラが貧乏揺すりをしながら、視線を忙しなく動かしながらそう返す。

所詮は主力を欠いた有象無象。そう考えていたのだが、如何やら侮っていたらしい。情報によれば、下級大虚を確実に打倒出来る實力を持つのは隊長格のみで、それ以下の死神達は相手をするので手一杯の筈。

それが如何だ。ワンダーワイスの協力の元、兵隊として用いた下級大虚達は全滅。対してこちらの戦果は二割三割の一般隊士達を殺したのみ。無傷とはいかずとも、席官クラスは一人も欠けていない。

何とも無様な結果か。表面上は変わらぬものの、ビエホは内心で盛大に焦っていた。これでは藍染より叱られるだけでは済まない。少なくともこれは処刑レベルの失態。加えてワンダーワイスにも合わせる顔が無い。

「隙ありだあああッ!!」

「くたばれジジイ!!」

次の瞬間、突如としてビエホの背後に飛び掛かる二つの人影が現れた。その物騒極まらない言動からして明白だが、十一番隊の隊士である。

見た目からして、恐らくグラよりもビエホの方が弱いと判断したのでろう。

老人だろうと御構い無しに、男達は全力でその隙だらけな背中へ斬魄刀を振り下ろした。

「…は？」

「んなっ…!?!」

「…やれやれ。老人は労わるものですよ」

だが無情にもその二本の刀身は、ビエホの背中に当たった状態で止まっていた。言うまでも無く鋼皮に阻まれたのである。

相手が「数字持ち」クラスともなれば、鋼皮を斬り裂くには少なくとも第三席程度の實力は必要だ。それ以下では真面にダメージを与える事すら難しくなるだろう。

完全に不意を突いた心算だった二人は、想定外の出来事に全身を硬直させた。

——仕掛ける相手を間違ったな。

結果を確信していたグラは溜息を吐くと、襲い掛かって来た二人へ憐みの視線を向けた。

何せ弱体化した現在ですら、ビエホの実力は自身を遥かに上回っているのだから。

「反省しなされ、若人達よ」

「ぐあああッ!!?」

「ギヤアッ!!」

二人が正気に戻るよりも先に、ビエホは振り返り様に虚弾を放つ。

反省しろという言葉通り、殺意は無かったのかもしれない。直撃を受けた二人は存命。だが無事とは言い難く、鮮血を撒き散らしながら吹き飛んでいった。

「っ、怯むんじゃねえ!! 今度は全員で掛かるぞ!!」

「…めんどくせー」

その掛け声を皮切りに、周囲の隊士達は一斉に駆け出す。眉を顰めながらグラは呟くと、右手を自身の斬魄刀へ添えた。

「欲せ——アブソルベール暴食王」

グラが解号を唱えるや否や、身体が帰刃形態へ変化するのに余り時間は掛からなかった。

白装束が破ける程に胴体が大きく膨張した以外は、特に外見は変わらず。唯一目立つのは、露出した腹部へ不気味な文様が浮かび上がり、赤く発光している部分か。

当然、隊士達もグラが解放した事には気付いている。だが今更攻撃を止める訳にもいかない。

——ならば奴が行動を起こす前に仕留めるまで。

そう判断した隊士達は、眼前の大きな的である腹部目掛けて斬魄刀を突き立てた。

「…けっ、腹一分にも満たねえや」

「なん…!!?」

「が…ア…!!」

やはりと言わすべきか、その攻撃は全て意味を成さなかった。

今度はビエホとは異なり、切っ先は全て腹部へと突き刺さりはしている。

だが手応えが全く無い。まるで水の中に刀身が飲み込まれたかの様な感覚が、柄を握る手に伝わっていた。

戸惑う隊士達。すると次の瞬間、グラの腹部が先程までより強く発光したかと思いきや、彼等の全身が弾け飛んだ。

これはグラの帰刃の能力。敵の攻撃を吸収し、溜め込んだそれを一気に周囲へ放出するという、カウンターに特化した力。

但し、吸収可能な攻撃には限度があり、それを超えた場合は普通にダメージが通るとはいえ、隊長格ならまだしも、上位席官以下の実力では厳しいと言わざるを得ない。

即ちこの場に於いて、グラを倒せる者は皆無と言って良い。

周囲へ飛散する大量の血と肉片。つい先程、下級大虚が見せた凄惨な光景を遥かに上回っている。

これには流石の十一番隊の面々も怯んだ。

青褪めた顔で、じりじりと後退し始める。熱く燃え滾っていた筈の戦意も、今や半減以下にまで落ちていた。

「む…無理だよ…こんなの…」

「バカヤロウ!! 弱気になってんじゃねえ!!」

金髪のショートヘアで白手袋を装着した小柄な少女——十三番隊第三席、虎徹清音は、全身を震わせながら弱音を漏らす。

彼女は解放したグラの霊力を感じ取り、察したのだ。自身では勝てないと。

それに大声で喝を入れたのは、同じく十三番隊の第三席、小椿仙太郎。白い綱を纏に、振り鉢巻きとして装着した、ガサツな印象を受ける男。

とはいえ、彼も清音と同様に敵との実力差を察しており、その表情は強張っているのが判る。

——もはやこれまでか。

戦場に立つ死神達の内心はこれだった。

かといって後退が許される状況でも無い。此処は正に最後の砦。突破されてしまえば全てが終わる。

例え全滅に終わろうとも、最期まで戦い抜く以外に、自分達に残された選択肢は無いのだ。

彼等が己の死の運命を予感しながら、斬魄刀を構えた——その時であった。ビエホとグラ、そして死神達の間、突如として一つの影が舞い降りた。

「——皆、良くぞここまで耐えた。後は全て私に任せよ」

「…え？」

「あ、あんたは!!」

それは人知れず尸魂界へ帰還し、北と東の敵を殲滅せしめた長次郎であった。突然の事に清音は呆けた様な声を漏らし、仙太郎はその人物の正体に気付き、瞠目する。

「ほっほっほ。まさか隊長格が残っておられるとは…」

「…タイミング悪過ぎだろ、くそが」

余裕を崩さぬビエホの横で、グラは舌打ちする。

雑魚を片付けて終わりだった筈が、面倒な事になったと。

「グラヤ、焦らずとも良いですぞ」

ビエホは笑みを崩さぬまま、優しくグラに語り掛ける。

「確かにこの者は副隊長。しかし脅威でも何でも無い」

虚夜宮にて情報管理を請け負っている彼は、勿論長次郎についても把握している。

長年一番隊の副隊長を務めている事から、確かに相応の能力を持っているのだろう。だが戦場に立った実績は殆ど無く、御蔭で極端に腕を鈍らせた。その結果が、ルキアを救出する為に現れた一護との交戦時に表れている。

「実力は斬魄刀も使わぬ黒崎一護に素手で制圧される程度。これで副隊長とは実に痛ましい」

事実、今の長次郎の霊力は大して高くは無い。並の“数字持ち”なら十分に制圧出来るレベルだ。

嘗てヤミーを制圧した実績を持つビエホは、自信満々にそう断言した。

「否定はせん。だが——」

長次郎は悔しさを滲ませる様子も無く、淡々とそう返した。

そして周囲に転がる隊士達の亡骸を一瞥すると——表情を変えぬまま、全身より凄まじいまでの怒気を発した。

「貴様等のこれまでの所業、もはや見過ごせぬ」

斬魄刀の柄へと右手を添えつつ、ピエホ達を睨み付ける。

「我が全霊を以て——討つ」

そして抜刀。続け様に切っ先を向ける。

気付けばその斬魄刀は何時の間にかやら、西洋風のレイピアの様な形状へと変化していた。

「その堂々たる姿、実に天晴れ！ なればこちらも相応の対処をさせていただきますぞ！！」

珍しく大声で称賛の意を示しながら、ビエホは自身の斬魄刀へと手を伸ばした。敵の強さを理解しながら、懸命に挑んで来たのは周囲の隊士達も同様。

ところがビエホ達の力を目の当たりにした途端、その戦意は著しく落ちた。

勝機が限り無く薄いと、否応無しに理解出来たのだ。当然と言えば当然だろう。

だが反面、長次郎にはそれが一切無い。

自身は弱い。相手の方が強い。それがどうしたと言わんばかりに。

怯まず、迷わず、前だけを見据える。たった1パーセントでも可能性があるのなら、それに全てを賭ける。

そんな長次郎の強き在り方が、ビエホにとっては好ましかった。

「…例の準備は」

『万全です!!』

「ならばよし」

ビエホが斬魄刀を抜くと同時に、長次郎が何かを呟いた。

すると何処からか、長次郎のみに聞こえる程度の音量で答えが返ってくる。

長次郎はふと周囲を見回す。

その目は主に冷静な思考が残っている席官クラスの者達へと向いていた。

「ッ、てめえ等こつから離れろおおおお!!」

「ええっ!? いきなり何さ!!」

「モタモタすんな早くしろ!!」

長次郎の意図を真つ先に理解したのは仙太郎だった。

彼は戸惑う清音を引つ張りながら、この場から退却を始める。

それに続く様にして、他の隊士達も一斉に動き始めた。

「ちよ、説明しろつての!!」

「察しろアホ!! よーするに、だ!!」

抗議の声を上げる清音へ振り返らずに、仙太郎は断言した。

「あの人が本気出すから、巻き込まれねえ場所まで離れろって事だ!!」

見た目に反して、意外と勤勉な彼は知っていた。

護廷十三隊の成立時より一番隊副隊長として着任し、以降長きに亘り重國を補佐し続けている男。情報が少ない上、当人も極めて寡黙。戦場に立つ事も皆無に等しい為、その実力を疑問視する者も少なくない謎多き人物。

だが実際は恐ろしく優秀で模範的な死神であった。

若かりし頃、卍解を僅か一月という短期間で習得し、重國の額に二つ目となる消えぬ傷を刻み込み、十字傷にした張本人。

そしてその実力の高さ故に、一時期は尸魂界にその名を轟かせた実績を持つ。

如何せん千年以上昔の情報故に、この事実を知る者は極僅かだが、深く踏み込んで調査してみれば誰でも知る事が出来た内容である。

何故これ程の人物が目立たないのかと、当時の仙太郎は疑問を抱いた。

故に隊長である浮竹に問い掛けた。京楽と共に重國の教え子である彼なら、何か知っている筈だと。

そして返ってきた答えに納得した。

長次郎は自身が称えられるよりも、重國の右腕として生涯を捧げる事を望んでいるのだと。

故に他の部隊への人事異動、最近では藍染の裏切りにより欠けた穴を埋める為の隊長権限代行の依頼すら断っていた。

「〃限定解除〃」

仙太郎が清音に叫ぶと同時に、長次郎が呟いた。

すると長次郎の右鎖骨の下辺りより、菊の花を模した印が浮かび上がり、発光した後  
に消え去る。

次の瞬間、彼を中心に膨大な霊圧が巻き起こる。

それは相当距離を取った筈の隊士達が気を失い、席官クラスの殆どが全身を弛緩させる程。

「ん……な……!!?」

「莫迦な、その霊圧は一体…!？」

その靈圧の余りの強大さに、グラとピエホは先程までの余裕を全て失い、戦慄した。冗談では無い。これ程の水準の者が副隊長であるものか。

それこそ——隊長だと言われた方が納得出来る。

「一番隊副隊長、雀部長次郎忠息」

本来、限定靈印というものは現世の靈に影響を及ぼさぬ様に刻むもの。

だが長次郎の場合は違う。既に隊長に相応しい実力を持ちながら、重國の右腕として在る事を望み、常日頃より副隊長として不自然の無い様に力を抑える為、限定靈印をその身に刻んでいたのだ。

故に一護に後れを取った。反撃どころか反応すら出来ず、完膚無きにまで。

今の様に本来の力を解放していれば、あの様な結果にはならなかっただろう。

だが長次郎はこの結果を真摯に受け止めた。故に残ったのは一護への恨みでは無く、自身の未熟さへの怒り。

瀨靈廷の守護を命じられた際、長次郎は重國より伝えられた言葉があった。

一番隊副隊長としてでは無く——雀部長次郎忠息という一人の死神として戦えと。

それは即ち自身の力に一切の制限を与えず、全身全霊を以て外敵を尽く打ち破れとい

う意味に他ならない。

「護廷十三隊総隊長、山本元柳齋重國殿の右腕也」

ゆつたりとした足取りで歩を進めながら、長次郎は淡々と名乗りを上げる。

全身より溢れ出す、静かに研ぎ澄まされた強大な霊圧は、先程までこの場に居た死神達を遥かに凌駕していた。

一步、また一步と距離を詰められる度、ビエホとグラも無意識の内に後退して行く。

「貴様等にはもはや…一步たりともこの先には進ませぬ」

やがて長次郎は右手に持つ斬魄刀を天に掲げた。

刀身を覆う霊圧の流れから、ビエホは彼が何をしようとしているのかを悟った。

「この地に土足で踏み入った事を、冥府にて悔いるがいい」

「まさ…か…ツ!!」

「『卍解——黄煌<sup>こうこう</sup>厳<sup>いん</sup>霊<sup>りょう</sup>離<sup>りき</sup>宮<sup>みや</sup>』」

一瞬にして暗雲が垂れ込めた空に——雷鳴が轟いた。

一体何が起きたのかと、考えるよりも先にウルキオラは動いていた。

即座に響転でその場から離れて安全を確保した後、自身の片翼を斬り落としたであろう張本人——剣八を睨み付ける。

「貴様……」

「ふう〜」

先程まで瀕死状態だったとは思えぬ様子で、剣八は平然とその場に立ちながら、自身

の首をコキコキと鳴らしていた。

「まずは片方だ」

斬魄刀を軽く振ると、笑みを浮かべながらそう呟く。

彼がウルキオラの翼を斬り落とした理由は単純。攻撃の手数を減らす為だ。

先程斬撃を受け止められた時点で察していた。あの翼は防御のみならず、攻撃にも使用可能な強度を持っていると。

言うなればウルキオラは帰刃前とは異なり、腕が四本となっているに等しい状態。

ならば此方の攻撃を両腕で受け止めている内に、残った翼で反撃するという芸当も可能だろう。

正に攻防一体。これでは攻撃を通すだけでも難しい。

互いに斬って斬られての戦いを望む剣八としては、余りにつまらない状況である。ならば——その増えた部分を斬り落としてやれば問題無い。

そうして本来の姿に戻してしまえば、思う存分斬り合える。

「…その傷で動けるか」

——化け物め。

ウルキオラは内心で毒づいた。

傷の深さからして、明らかに致命傷だった筈。なのに何故立っていられる。

痛みが麻痺しているのか、それとも単に不死身なだけなのか。

後者は確実に有り得ないのだが、今の剣八の姿を見るとそう思わずにはいられなかった。

「さアて、後はもう一枚だけだな」

剣八は残る左側の翼へと視線を移しながら言う。

その言葉に、ウルキオラは全てを悟った。

奴は此方の翼を全て斬り落とし、元の対等な状態に持ち込まんとしているのだと。

「……この程度で俺の力を削いだ心算か？」

実に単純で浅はかな思考である。

ウルキオラは冷めた目で剣八を見遣ると、斬り落とされた翼の付け根に意識を向け  
る。

直後、その部分から黒い霧の様なものが噴き出したかと思いきや、ものの数秒で翼が  
元通りとなった。

「俺の帰刃の最たる能力は、戦闘性能の向上では無い。再生だ」

瞠目する剣八に対し、ウルキオラは自身の帰刃の能力——脳と臓器を除いた部分を  
即座に再生出来るという、弱点にあたる部分すら説明し始める。

だがこれはウルキオラの余裕の表れだった。

慢心では無い。例えば知ったとしても、剣八程度では己を殺すに至らないという確信。

「進化する過程に於いて、強大な力と引き換えに大半の超速再生を失う破面達の中で、俺  
だけはそれを残していた」

事実、ウルキオラはこれに加えて更なる切り札を残している。

ならば彼の行動にも得心が行くというもの。

「はははははははッ!!!」

これだけの實力を持ちながら、強力な再生能力を持つとなれば、大抵の相手は絶望するだろう。

しかし案の定、剣八は臆さない。

「なんだその羨ましい能力は!!」  
チカラ

傷口から盛大に血を流しながら、血走った眼をウルキオラへ向ける。

その姿は正しく、戦いという名の血肉を前にした獣。

今直ぐにでも目の前の御馳走に喰らい付きたいと、涎を垂らしながら唸るそれに似ていた。

「つまり何度手足を斬り落とされても、中身を潰されねえ限りは永遠に戦い続けられるって事じゃねえか!!」

「……………」

「最高だなオイ!!」

如何すればそんな発想に至るのか。全く以て理解不能な思考回路だ。

——もはや手遅れなレベルで狂っている。

高笑いする剣八を無表情で眺めながら、ウルキオラは内心でそう思った。

ならば自身の力を以てその狂気を払い、正気に戻る程の衝撃を与えて治療してやろう。

ウルキオラは今一度、右手で光の槍を握り直すと、有無を言わず剣八へと襲い掛かった。

「グ、オツ!!」

倍増した響転の速度に加え、ウルキオラの行動が余りに予想外だったのか、剣八の反応がやや遅れる。

寸での差で防御態勢に移行するも、ウルキオラが振るった槍は盾代わりの刀身を押し退け、がら空きとなった胴を斬り裂いた。

それだけでは終わらない。攻撃の際に発生した衝撃により、長身で筋骨隆々の重量の

ある身体はいとも容易く吹き飛ばされ、後方の支柱へと激突する。

ウルキオラは追撃の為にその後を追う。

剣八が埋まった瓦礫の山の前に立つと、躊躇無く槍を振り被った。

「っ!!」

矛先を振り下ろさんとした刹那——瓦礫の中より突如として右手が飛び出し、ウルキオラの顔を鷲掴みにせんと迫る。

寸でのところでそれを躲すと、槍による攻撃を中断。その場で身体を回転させると、勢いを乗せた右足で瓦礫の山ごと蹴り飛ばす。

虚夜宮の天蓋の上を抉る様にして、瓦礫と共に剣八が吹き飛んで行く。

今度こそ仕留めると、ウルキオラは全速力で駆け出す。

刹那、剣八は斬魄刀を地面に突き立て、勢いを殺す事で強引に体勢を整え、超高速で接近して来たウルキオラを迎え撃った。

「ゴフッ!!」

しかしウルキオラの追撃は想像以上だった。

繰り出されたのは槍の投擲。剣八は驚異の反応速度により回避に動くも、気づけばその槍は左脇腹を貫いていた。

宙を舞う大量の鮮血によって赤い軌道を描きながら、剣八はまたしても衝撃によって吹き飛ばされる。

敵に大きなダメージを与えたにも拘らず、ウルキオラは内心で舌打ちした。

何故ならその槍は心臓を狙って放たれたものだったからだ。直撃の寸前、剣八は飛来する槍を叩き落とす為に斬魄刀を振るい、僅かにその起動を逸らしていたのである。

「無駄な足掻きを…」

ウルキオラは新たに再構成した槍を握ると、更に追撃を仕掛ける。

だがやはり——仕留め切れなかった。

先程よりも早く体勢を整えた剣八は、何と脇腹を貫く槍をそのままに、反撃へと転じたのだ。

「ク、はッ!!」

「……ちっ」

この期に及んで、まだ戦いを楽しめるその精神。もはや何と言い表せば良いのか分からない。

襲い掛かる斬撃の嵐を裁き、時折反撃を加えながら、ウルキオラは戸惑う。

自身の方が斬っている。剣八の傷は数え切れぬ程に増え、血も大量に流れた。

なのに何故—— 奴は何度斬っても斬っても、平然と斬り返してこれるのか。

そして気付く。剣八の力が増大している事に。

先程まで一方的な展開だったにも拘わらず、現にこうして正面から斬り合いが成立しているのが何よりの証拠だ。

ウルキオラが攻撃を崩し続けているのもそれが理由である。如何に解放したとは言え、この様子では硬度を増した鋼皮でも耐え切れる保証は無い。

剣速、威力、反応速度。全てが尋常ならざる勢いで上昇を続けている。

正に底無し。如何なる強敵が相手だろうと、その尽くを超えてゆく規格外。

この時、ウルキオラの中で何か芽生えた。

一刻も早く眼前の敵を殺さねばならないという、焦燥にも似たそれ。

もしもこの場にノイトラが居たならば、こう言っていただろう。それは理解の及ばぬ

未知の存在に対する——恐怖という感情であると。

「ははははははははッ!!!」

そんなウルキオラに対し、剣八は歓喜の絶頂の真っ只中だった。

これ程の戦いは何時振りか。一護との斬り合いも素晴らしかったが、これも相当だ。下手すると——幼少期に経験したあの至高の一時を彷彿とさせる程に。

「速エ!! 強エ!! 愉しいなウルキオラアッ!!!」

この斬り合いを長く続けていたい。一時間や二時間では無く、日を跨いででも。だが剣八の願いは儂く散る。他でも無いウルキオラの手によって。

「…狂人が」

もはや自身が優位に立って居られるのは僅かな時間しかない。

——ここで決める。

ウルキオラは負傷を覚悟で、剣八の懐目掛けてへ踏み込んだ。

恐らく一撃では殺せない。先程の様に、寸前でその化け物染みた反応速度を用いて致命傷を避けるであろう。

だがそれでいい。一瞬でも隙を作れば重畳。後の追撃にて畳み掛けるだけだ。

後方へ引き絞った槍を、胸部の中心に狙いを定めて全力で突き出す。

一気に攻勢へと移ったウルキオラに驚いたのか、ほんの僅か動きが鈍った。

だがそこは流石の剣八。思考よりも先に身体が動き、繰り出された必殺の一撃を右下へと逸らす。

「ツ!!」

先程とは逆の右脇腹へと突き刺さる槍。それは屈強な肉体を易々と貫通し、周囲に鮮血を撒き散らした。

剣八は盛大に吐血する。だがあろう事か、彼は自身を貫く槍をウルキオラの手ごと掴みにして固定し、斬り掛かった。

——肉を斬らせて骨を断つ。ぶった斬る

それは以前尸魂界にて、東仙と対峙した際に用いた戦法。極めて単純で下手すれば自

殺行為だが、その分見返りは大きい。何せ相討ちとは、余程で無い限り回避は不可能なのだから。

無論、ウルキオラは剣八の意図を読んでいた。

迫り来る刃先を視線に入れながら、徐に空いた左手を持ち上げ——超至近距離で虚弾を御見舞いする。

「な……!!?」

これが下位十刃クラスの虚弾であれば、確実に剣八は踏み止まっていただろう。

だが相手はウルキオラだ。階級は別にして、単純な戦闘能力は限り無く上位に食い込むであろう破面。そんな実力者が放ったそれでは、流石に分が悪かった。

瞬時にその場から弾き飛ばされる剣八。絶好のチャンスを潰されたばかりか、致命的な隙が出来上がる。

そしてそれを見逃すウルキオラではない。

虚弾を放った左手に、再び霊圧を集束させる。

その色は——黒。

「これで詰め、だ」

その手より放たれる漆黒の光線。史実に於いて、虚化した一護に重傷を与えた黒虚閃だ。

当然、体勢を整えていない剣八に回避なぞ出来る筈も無く、実に呆気無く呑み込まれた。

その光景を眺めながら、ウルキオラは己の勝利を確信していた。

霊圧反応からして、まだ剣八は死んではない。だがその弱弱しさから、ほぼ瀕死まで追い詰めた。ならば後は止めを刺すだけ。

ウルキオラは油断無く槍を構えながら、黒虚閃の余波が晴れるのを待った。

「……参ったぜ……」

黒い霧の様な霊圧の余波の中より現れた剣八の姿は、実に凄惨であった。

死覇装は袴の一部を残して消し飛び、剥き出しとなった肌は殆どが焼け爛れ、酷い部分は炭化に等しい状態。

それまでに刻まれていた傷は、その深さ故か未だに出血を続けている。

死体が立っている、そう言っても何ら不自然では無い。

剣八の並外れた生命力に、ウルキオラは内心呆れを通り越して感心していた。

「このままじゃ…本当に死んじゃまう…」

全身を脱力させながら、剣八は空を仰いだ。

「…嫌だなア、死ぬのは」

「剣ちゃん…」

恐怖故に、の発言では無い。此処で死んで、二度と戦えなくなる事が何より嫌なのだ。

とは言っても、このまま戦闘を続行すれば確実に死ぬ。霊圧に余裕はあるものの、余りに肉体が傷付き、血を流し過ぎた。

そんな剣八の思いを誰より理解していたやちるは、その姿を眺めながら同情する様に呟いた。

「しょうがねえ…久しぶりにやってみるか」

——致し方無い。

剣八は溜息を吐きながら、決めた。

不本意ではあるが、この戦いを終わらせると。

「〃剣道〃 つてやつを」

「…何？」

剣八の言葉に、ウルキオラは不審に思った。

この期に及んで、こいつは一体何を言っているのかと。

「むかし山本のじいさんに無理矢理やらされた事があつてよ…」

斬魄刀を持ち上げながら、剣八は語り始める。

死神となつて間も無く、重國に騙されて習つた剣道。だがそれは我流の剣術が染み付いてしまった自身とは相性が頗る悪く、二度とやらないと誓つた。

剣の道だか何だか知らないが、結局はいけ好かないものと断じた事。

だが——そんな中で一つだけ納得したものがあつたと。

「知ってるか？ 剣つてのは、片手で振るより両手で振った方が強エんだと」

「…馬鹿か貴様は」

何を当たり前の事を言っているのかと、ウルキオラは先程よりも冷めた視線を向けた。

剣———というか日本刀を扱う場合、基本的に柄は両手握りだ。でなければ剣筋は大概不安定となり、斬撃の威力も乗らない。西洋剣の類であればまた話は別だが、それは一先ず置いておく。

片手で剣を振るう者は、別に両手で握らずとも問題無いレベルの技量を持っているに過ぎない。腕力に頼り切ったり、形だけ繕った見せ掛けの剣を振るう者とは全くの別物だ。

「…もう良い」

これ以上の会話は無駄でしかない。

そう断じたウルキオラは、止めの一撃——彼が現状にて使用出来る中で最も殺傷能力に優れた技の準備をする。

見せたのは投擲の構え。勿論、先程の斬り合いの中で使用したそれとは別物である。帰刃形態のウルキオラが持つ能力全てを注ぎ込んだ状態で放つのだ。単純に己の得物を投げ付ける域に収まらぬ威力を持つ事は明白。

「知らねえだろ、どのくらい強さが違うのか」

剣八は正面を見据えながら、ゆったりとした動作で柄を両手で握ると、正眼に構えた。基本に忠実な、堅実過ぎるそれを。

全く以てらしくない佇まいである。恐らく彼を知る者がこの姿を見れば、間違い無く目を丸くしていただろう。

剣八が構えを取った瞬間、先程まで荒れ狂っていたばかりの霊圧が急激に静まり返る。

殺気も、威圧感も無い。まるで静水の如く。

別人と見紛う程の剣八の変化に不気味さを覚えながらも、ウルキオラは限界まで引き絞った槍を全力で放った。

「ルス・デ・ラ・ルナ  
月光槍」

鋭利に光り輝く穂先が、凄まじい勢いで劍八目掛けて突き進む。

その速度は放たれてからでは到底回避が叶わない、正に対象へ確実に死を齎す必殺の一撃。

瞬き一回。直撃までその程度の時間すら必要無い程の距離まで槍が迫る。

その時、劍八の構えは既に正眼から上段へと移っていた。

「…ふっ!!」

息を吐くと同時に—— 一閃。

僅かなブレも無く、縦一筋に振り下ろされた刀身。

膨大な霊圧を纏って放たれた斬撃は、迫り来る槍を粉々に打ち砕いただけで終わらなかった。

例えるなら、まるでビルかと思われる程に常軌を逸した巨大さを持つ太刀。それが振り下ろされたに等しい。

槍が砕かれた瞬間、ウルキオラは反射的に両腕を胸の前に交差させ、防御体勢を取る。

「な……に……!!?」

しかし無意味だった。

剣八の斬撃はその両腕を豆腐の如く断つと、あわやウルキオラの身体を二分割せんとする勢いで、左肩口から真下を深々と斬り裂いた。

## 第六十四話 破面と死神と仮面と…

全身に力が入らない。呼吸をするだけで腹部を中心に激痛が走り、口から血が溢れ出す。視界も揺れ動くばかりで一向に定まらない。

戦闘どころか、指先を動かす事すら困難。今の乱菊の状態がそうだった。臆気な意識の中で、こうなる直前の記憶を辿る。

確か自身はこれ以上無いタイミングで必殺技をテスラへ叩き込んだ筈。

しかし結果は無惨なもの。やっとの思いで刻み込んだ傷は決定打には程遠く。直後、テスラが解放。そして瞬時に何かしらの攻撃を受けた。

「勝負有り、だ」

ずしん、という着地音を響かせながら、帰刃形態のテスラは仰向けに倒れる乱菊の傍へと降り立った。

止めを刺す意思は、彼には無い。

お前は敗れたのだという事実を突き付け、この戦いは終わりだと伝えに来たのだ。

——どうか立ち上がってくれな。

テスラは内心で願った。

でなければ、今度こそ命を奪わなければならなくなる。

互いに実力が拮抗した者同士の激戦の上でそうなるのであれば、まあ理解は出来る。

だが現状は異なる。乱菊は明らかにテスラより格下だ。憑依後のノイトラとハリベルの影響により、武人としての矜持を持つ様になったテスラとしては、極力殺す事を避けたい対象であつた。

「まだ……よ……！」

だが当然の事ながら、乱菊は戦闘続行の意思を示した。

限界を迎えている身体に鞭打ち、再び起き上がらんと奮起する。

此処で倒れる訳にはいかない。

仲間達も含め、自身には尸魂界の命運が掛かっている。

勝手に離れて勝手に行動している幼馴染みを引つ叩くといった、他にも成し遂げたい事はある。

命ある限り、足掻き続けてやると。

「…そうか」

その様子を目の当たりにしたテスラは、少々残念に思いながらも、尊敬の念を抱いた。見事な覚悟である。尸魂界をハリベルに置き換えて考えてみれば、自身も同じ行動を取ったであろう。

「貴女に敬意を」

故に——決める。乱菊は此処で確実に仕留めると。手加減抜きに、全力で以て。それが確固たる覚悟を示した乱菊に対する最大の礼儀だとして。

腰を低く落とし、霊圧を纏わせて強化した巨大な右拳を引き絞る。

それより放たれるのは、テスラが今までの鍛練の中で積み上げてきた全てを集約した一撃。以前の模擬戦でノイトラに傷を付けたのもこれだ。

未解放とはいえ、歴代十刃最高硬度の鋼皮を抜ける威力である。まともに直撃すれば隊長クラスでも耐えられるか怪しい。

「くっ…」

乱菊は表情を苦痛に歪めながら、テスラを見上げる。

啖呵を切ったが良いが、実際は上体を持ち上げる事すら叶わない。

己の役割を全う出来無かった事を、乱菊は内心で冬獅郎に謝罪する。

そして一筋の希望に縋り、願う。

奇跡でも何でも良い。どうかこの窮地の打開をと。

「っ?!」

直後、乱菊の必死の祈りは実る。

いざ右拳を振り下ろさんとしたテスラに向け、何処からともなく飛来してきた火の玉が直撃したのだ。

そして突然の浮遊感と共に、乱菊の視界がとある建物の屋上へと切り替わる。

「松本さん、大丈夫ですか?」

「…吉良?」

呼び掛けに振り返ると、其処には先程まで別の破面と交戦していた筈のイズルが居た。

「間一髪じゃのう」

「救援が遅れて済みません、乱菊さん」

イズルに続く様にして声を掛けたのは射場。そして彼の隣に立つ、左頬に6と9の刺青を彫り、逆側には額から顎にかけて三本筋の傷跡を持ち、ノースリーブの死覇装を身に纏った男——九番隊副隊長、檜佐木 修平。

「良かったあ、間に合つて」

「雛森…あんた…」

最後に安堵の溜め息と共にそう溢したのは、小柄でシニヨンを布と紐で纏めた髪形の女性——五番隊副隊長、雛森 桃。

その手には七支刀の様な刀身を持つ斬魄刀——“飛梅”が握られていた。テスラ

に直撃した火球玉を放ったのはこれの持つ能力である。

彼女は内心で後悔していた。

自身がもう少し早く此処に来る決心をしていれば、乱菊がこれ程の怪我を負う事は無かつた筈だと。

しかし雛森がギリギリまで迷いを捨て切れなかつたのも致し方無いと言える。

尊敬の念と同時に好意を抱いていた、当時隊長であつた藍染。そんな彼の残酷過ぎる形での裏切り。

他にもそれに至るまで様々な出来事があり、それ等が積もりに積もつた雛森の心は、ほぼ崩壊寸前まで追い込まれていた。

それでも尚、彼女は此処に立っている。

きつと藍染は本心から裏切つたのでは無い、全ては悪い夢なのだと、現実逃避をし続けていたかつた。

自身の持つ力など知れている。副隊長一人欠けた程度で護挺十三隊は揺らがない。

だが——寸での所で踏み留まつた。

それで本当に良いのか。悔いは無いのか。真実を直接この目で確かめずに、全てが終わるまで閉じ籠っているのが本当に正しいのかと。

「乱菊さんは休んで下さい。後は——」

そんな訳が無い。絶対に間違っている。

如何なる事情があつたとしても、藍染の所業は許されざる行為だ。

ならば自身のする事は一つ。

皆と協力し、藍染を止める。そして真実がどの様なものであつても、全てを受け入れると。

「俺達がやります」

「儂等に任せえ」

雛森の言葉を引き継ぐ様にして、修平と射場が言う。

其々に始解状態の斬魄刀を構えながら、黒煙に隠れたテスラへと視線を向ける。

「頼んだぜ、元四番隊」

「いつの話をしてるんですか」

介抱されている乱菊を一瞥すると、修平は吉良へと声を掛けた。それに対し、吉良は苦笑しながら返した。

「…増援か」

やがて黒煙が晴れると、其処から無傷のテスラが姿を現す。

乱菊の周囲に立つ副隊長の面々を一瞥すると、特に取り乱した様子も無く淡々と呟いた。

「おいおい、大丈夫かよ」

「流石に助けが要るんじゃないかねえか？」

「テスラさん…」

「…ふっ」

だがアパッチ達はそうもいかず、其々にテスラを気遣う様な素振りを見せる。そんな様子を見たテスラは、静かに笑った。

「心配するな。これしきの事で、俺は負けない」

だから安心して、アパッチ達へと振り返りながら断言する。

慢心とは違う。所詮は副隊長だと、相手を見下している訳でも無い。

自身は今までに相当の鍛練を積んできた。遥かに格上の相手とも幾度と無く手合わせした。

そして何より——自身の背中を後押ししてくれた親友と、想い慕う女性であり尊敬すべき主へ、この勝利を捧げたい。

瞳に揺るぎ無い決意を宿しながら、テスラは構えを取る。

その堂々たる後ろ姿に、アパッチ達は思わず見惚れていた。

「…まず俺が隙を作ります。二人はそこを一気に叩いて下さい」

「わかりました！」

「おう」

修平の作戦を聞いた雛森と射場は、其々に別方向へと駆け出す。

残された修平は、瞬歩でテスラの真正面へと立つと、一對の鎖で繋がった特異な刃を

持つ鎖鎌形の斬魄刀——  
“風死”<sup>かぜしに</sup>の内一つを、高速で回転させながら投げ付けた。

「はっ!!」

テスラはそれを巨体に似合わぬ軽やかな体捌きで難無く躲す。

だがそれこそが修平の狙い。彼は空となった右手で鎖を握ると、真横へと引いた。

すると如何だ。目標を失った鎖は即座に方向を変え、テスラの周囲を大きく回る様にして動き始めたではないか。

「なに…?」

その予想外な動きに、テスラは思わず瞠目する。

一瞬の反応の遅れ。それが命取りとなり、テスラはあつという間に全身を鎖に絡め取られる事となった。

「…この程度で俺の動きを止めた気か? 迂闊だな」

だが焦る程では無い。感触からして、自身を捕らえている鎖は強度が高くは無い。少しでも力を入れれば引き千切れるレベルだ。

そう判断したテスラはいぎ全身に力を籠めんとする。

「迂闊なのはどっちだろうな」

「!!」

「食らえ…：破道の十一—— // 綴雷電<sup>つづらいでん</sup>」

直後、修平の右手より電撃が放たれると、それは瞬時に鎖を辿ってテスラへと向かう。バチバチという音を立てながら、その身を焼きに掛かった。

——これで少しは隙が出来るだろう。

後はこれに乗じて射場と雛森の両名が畳み掛ければ決まる。修平はそう考えた。

しかし甘い。如何に副隊長が使用したと言えど、十番台の下級鬼道程度が並の“数字持ち”を凌駕する実力を持つテスラに通じる筈が無い。

「——だから迂闊だと言った」

「なっ…!?!」

何とテスラはその身に電撃を受けながら、平然と鎖を引き千切ると、響転にて修平との間合いを瞬時に詰めていた。

加えて右拳は引き絞られており、拳撃を繰り出す寸前なのが丸判り。修平は慌てて距離を取ろうとするも、余りに反応が遅過ぎた。

「ガ…あつ!!」

がら空きの腹部を中心点として、巨大な拳がめり込む。同時に周囲へ聞こえる、無数の骨が折れ、肉や内臓が潰れる不快な音。

「エノルメ・ブリーニョ 巨拳」。霊圧を纏わせた拳で、腰を入れた必殺の一撃を放つという、極めて単純な技。

そして先程乱菊に放たんとしていたものもこれである。

拳越しに伝わる確かな手応え。にも拘らず、テスラはその拳を止めなかった。

あろう事か、更に奥へと捻じ込む様にして突き出した拳句、最後は力任せに振り抜いたのである。

「……ん？」

鮮血を撒き散らしながら吹き飛んでゆく修平を眺めながら、テスラはふと首を傾げた。

自身は何故これ程までに力を入れてしまったのかと。

やがて直近の記憶を思い返してみると、直ぐに納得した。

単純に気に食わなかったのだ。修平の持つ斬魄刀が。鎌と鎖、この一つの共通点があるという理由だけで。

——その程度の実力で、ノイトラと同じ系統の得物を使うな。

実に理不尽で子供染みた我儘だった。

「ふう、俺もまだまだ未熟だな……っ！」

右拳を振り抜いた体勢のまま固まっているテスラへ影が降り掛かる。

それは鏢が無く、中間辺りに枝の様な刃が付いた刀身を持つ斬魄刀を振り被った射場であった。

当初の予定とは異なるものの、修平が命懸けで作りに出した隙だ。無駄にはならな

い。

そんな並々ならぬ決意を胸に、テスラのがら空きの背中目掛け、渾身の力を以て上段から刀身を振り下ろす。

「温(ぬ)い」

だが射場は気付いていない。

体勢は変わらずだが、僅かに顔を振り向かせているテスラの眼が、他ならぬ自身へと向いていた事に。

「ぬおおおッ?!」

振り下ろされた刃先が直撃するかと思われた刹那——射場の全身へ凄まじい衝撃波が襲い掛かった。

これもテスラの持つ固有技——セロ・コルネア“視虚閃”。本来持ち得る攻撃範囲の殆どを落とす代わりに、眼球から高速且つ高精度の小規模な虚閃を放つというもの。

虚弾と同等に思えるが、速度は及ばない代わりに威力はそれより上であり、応用も利

く使い勝手の良い技であつた。

「檜佐木さん!?! 射場さん!?!」

瞬く間に退けられた二人に、雛森は思わず動きを止めて声を上げる。

刹那——眼前に迫り来る巨大な拳に気付いた。

「しまっ——!!」

反射的に斬魄刀を盾にする様にして防御体勢を取るも、無意味に終わつた。

直撃と同時に刀身は粉碎され、その拳は勢いを落とさぬまま雛森へと襲い掛かる。

結果は想像するまでも無い。瞬く間に致命傷を負つた彼女は、檜佐木と同様に地面へ向かつて吹き飛んで行く。

だが雛森は幸運だつたと言える。

実はこの一撃は先程よりもかなり手加減されたもの。檜佐木に対して大人気無い反応を取つた事を反省したテスラは、見るからに華奢である雛森が戦闘不能に陥るに足る威力を見極めた上で拳を振るつたのだ。

無論、女性の命たる顔は狙わずに。とは言え、それ以外の部分に傷跡が残る可能性はあるが、それは戦場に身を置く者の宿命として勘弁してもらいたいと考えつつ。

「っ、雛森さん!!」

乱菊の治療を続けていたイズルだが、密かに想いを寄せている雛森がやられた光景を目の当たりにした途端、思わず叫んだ。

回道を使用している内の片手を雛森へと向け、新たに詠唱を唱える。

「縛道の三十七——  
//吊星<sup>つりぼし</sup>//!!」

霊圧で構成された床の様な物が、五方向へと広がりながら雛森の落下地点より上に現れる。

それはふわりと衝撃を緩和させながら、雛森の身体を受け止めた。

直後、吉良の頭部を凄まじいまでの鈍痛が襲う。

無理も無い。事前に詠唱を行わずに二種類の鬼道を使用したのだ。暴発も無く発動しただけでも御の字と言える。

鬼道の錬度が高い吉良でなければ、恐らく悲惨な事になっていただろう。

——副隊長が三人掛かりでも駄目なのか。

正に悪夢だ。吉良の表情が絶望に染まる。

頼みの綱である隊長達は現状で手一杯。これでは助けを期待しても無駄だろう。

「後はお前だけだ」

「くっ……」

乱菊と雛森の治療で身動きの取れない吉良の前に、この惨状を作り上げたテスラが舞い降りる。

「さあ……どうするっ……」

その問い掛けに、吉良は答える事が出来無かった。

冬獅郎を一刀の元に両断し、その亡骸が地面に落下するのを見届けた後。ハリベルは自身の従属官の戦いを眺めていた。

「…いふむ」

増援を含めた副隊長数名を、テスラが難無く撃破したところで、一旦採点を始める。少々勝ち急ぐが余り、不意を突かれたのは減点ものだが、解放して以降は問題無し。敢えて一つだけ注文するとすれば、アパツチ達にも久々の実戦を経験させてやってほしいという点か。

だが乱菊の実力を見るに、実際に戦わずとも結果は目に見えている。

身近で観戦出来ただけでも御の字か。ハリベルはそう結論付けながら——その場から響転にて跳んだ。

すると先程まで彼女が立っていた場所を、凄まじい速度で無数の氷の刃が通り過ぎて

いった。

「…やはりな」

「ちっ!!」

それを放ったのは、先程死んだ筈の冬獅郎だった。

普通は驚愕しそうなものだが、ハリベルは特にそんな様子も無く、冷静さを保っている。

——読まれていたか。

不意討ちを躲された冬獅郎は内心で舌打ちする。

「…良く気付いたな」

「逆にこの程度の手品で私を騙せると?」

そう言うと、ハリベルは地面のとある一点に視線を移す。

其処には冬獅郎の亡骸など一切無く、代わりに幾つかの氷の破片が散らばっていた。

これは氷を用いて自身の分身を作り出す技——

“斬氷人形”。

その余りの精巧さ故に、大抵の敵は冬獅郎を確実に仕留めたとして完全に油断し、霊圧を探るといふ事もしなくなる。

だが現状の通り、ハリベルはその限りでは無かった。

優勢であつても彼女は抜かりなく、常に「霊圧探知」を働かせながら戦つていた。分身を斬り捨てた後に見せた、失望した様な視線もブラフである。

「そして仕掛けて来たという事は、私を倒す算段が付いたと取つて良いのだな？」

「——つ、まあな……」

此方の全てを見通しているかの様に錯覚する鋭利な視線に、冬獅郎は息を呑んだ。

完全に主導権を握られてしまつてゐる。もはや読み合いで状況を引つ繰り返す事は不可能に近い。

ならば残された手は一つ。

真正面からハリベルの想定を上回る程の力を見せ付ける以外に無い。

「ならば見せてみる、貴様の全力をな」

「…後悔するぜ」

冬獅郎は切つ先を天へと向ける。

すると周圍一帶の空が瞬く間に厚い雨雲に覆われ、肌を突き刺す様な冷氣が広がる。

「む…」

「てめえが様子見に徹してくれて助かった」

やがて雨雲よりチラチラと雪が降り始める。

次第にそれは小粒から大粒となつてゆく。

「御蔭で… “これ” を使う万全の状態まで持つて来れた」

「!!」

「終わりだ—— ひょうてんひやつかそう “氷天百華葬”」

直後、ハリベルの本能がけたたましいまでの警報を鳴らす。

この雪に僅かでも触れてはならない。何としても回避せよと。

限り無く正解だった。これは触れたものを瞬時に華の如く凍り付かせる雪。例えほ

んの一粒が指先に触れたとしても、もはやその手どころか腕全体が使い物にならなくなる。

後はそれで動きの鈍ったところに次々と雪が降り積もり——やがて天へ向かつて聳え立つ、巨大な氷柱の墓が築き上げられる事だろう。

「イルビエンド  
灼海流」

大剣を持ち上げ、切っ先を上へ向ける。

するとその刀身から凄まじいまでの熱気が立ち込めた。

ハリベルへと降り注がんとした雪の大半が一瞬で蒸発する。

それに負けじと、雪は更に量を増し——遂にその熱気の壁を超える物が出始めた。

「カスケーダ  
断瀑！！」

ならばと、ハリベルも次の対抗手段を選択した。

放たれたのは尋常ならざる水量からなる激流。それは極めて高圧力で、直撃した対象を容赦無く押し潰す威力を誇る。

通常は一直線に集中して放つ技だが、今回は防御の為か広範囲に亘つて展開されている。加えて先程放つた「灼海流」の熱気によって水はこの上無く沸騰していた。

間も無くしてそれは冬獅郎の放つた技と真つ向から激突。

凍り付かせ、溶かしを繰り返しながら拮抗。その最中にも気化した水が大気へ広がりが続き、冬獅郎とハリベルは互いにその支配権の奪い合いを並行して行う。

どちらかの霊圧が尽きるまで続くかと思われる程の競り合い。

だが次の瞬間、予想外の方向から崩された。軍配が上がったのは——冬獅郎。

「良いのか？　上ばかりに気を取られて」

「何…!?!」

そう呟くと、冬獅郎は不敵な笑みを浮かべる。

ハリベルは咄嗟に周囲へと気を配ると、自身の下から異変を感じ取った。

視線を移せば、一面に広がる氷の花。それ等は止めどなく咲き続け、まるで意思を持つかの様にハリベル目掛けて迫り来る。

「これは——!!」

「足元注意だぜ、破面」

だが動けない。今「断瀑」を止めてしまつては、瞬く間にやられる。かと言つてこのままでも未来は変わらない。

——見誤つていたのは此方だったか。

例え格下だろうとも油断はしない。そう考へてはいたが、ほんの僅かに残つていたの  
だろう。

冬獅郎が切り札を隠しているのは察していた。だが問題は無い。自身の全霊を以て  
すれば、必ず打ち碎けると。

「…本当に、示しが付かんな……」

御笑い種だ。この様で部下を率いる資格があるうか。

アパッチ達には勿論、自身を信じてテスラを託したノイトラにも申し訳が立たない。  
諦めに等しい感情を抱きながら、ハリベルは思う。

だがもしも——次があるならと。

今度こそ過ちは犯さない。格下格上関係無しに、戦うとなれば全力を尽くす。必ず勝

利してみせる。

ハリベルが敗北を、冬獅郎が勝利を確信した——その時だった。

「んなつ——!!?」

「ツ、まさか……」

視界を埋め尽くす程の無数の光線。それ等は二人を避ける様にして通り過ぎる。

正に一瞬の出来事だった。

光線はハリベルの足元へと迫っていたものも含めた氷の花に加え、端雪どころか空を覆う雨雲ごと消し飛ばした。

「——スタークか!!」

呆気にとられる二人。

冬獅郎よりも先に正気に戻ったハリベルは、弾かれる様にして振り返る。

その視線の向こうには、銃口を此方へ向けた体勢で佇むスタークの姿があった。

スタークはハリベルの無事を確認すると、思わず安堵の溜息を吐いた。  
京楽と浮竹を相手にしつつ、横目で他の戦況を眺めてはいたが、まさか終始不利だった冬獅郎があのような切り札を見せるとは予想外だった。

「ふう…危ねえ危ねえ」

白煙を上げる銃口を下げながら、スタークは呟いた。

これで万が一にもハリベルが敗北する可能性は潰えた。冬獅郎についても同様、もはや打つ手は残って無いだろう。あれ程の大技だ。そう易々と放てる代物では無い筈。

従属官達についても、テスラが単独で副隊長達を蹴散らし、もはや勝負が付いたも同然となっている。流石はノイトラの元部下と言うべきか。

一旦思考を区切ると、次はバラガンの戦場を横目で確認する。

すると予想通り、彼については何の心配もいらぬ様だ。対峙する碎蜂と大前田のコンビを前に、帰刃も使わぬ状態にて圧倒した後、そろそろ詰めに掛かるところだ。

やがてスタークは自身が対峙していた敵の居る方向へと視線を戻した。

無慈悲なまでの虚閃の豪雨を降らせた結果、其処には元の街としての姿は残っておらず、更地を通り越した荒野の如き惨状が広がっていた。

「しかしまあ、驚かされたぜ。あのちびっ子も…アンタ等も」

その荒野の中心に立つ二人の死神。無論、京楽と浮竹だ。

生き残っている時点で驚異的だが、それだけだ。二人の姿は完全に満身創痍。死覇装はほぼ布切れと化し、露出している肌は余す事無く炭化に等しい状態となっている。

決して手加減した訳では無いのだがと、内心で驚愕しながら、スタークは声を掛ける。

「やっぱ強えよ、あんた達」

「ッ、嫌味にしか…聞こえないねえ…!」

「ゴホッ、ゴホッ、本当に…ね…!」

実際、二人が生き残れたのは奇跡に等しい。

確かにあの「重光無極閃弾」は圧倒的だった。威力に数、範囲に速度。敵を完膚無き  
にまで仕留める為の要素を全て注ぎ込んだ理不尽な技と言つて良い。

だが——ほんの僅かにだが、虚閃と虚閃の間に隙間があつた。刹那の内に京楽と浮  
竹はそれを見極め、其々の斬魄刀の能力を総動員して回避に徹したのだ。

霊圧領域内にて自らが提示する遊びのルールを、担い手である京楽を含めた敵へ強制的  
に従わせる能力を持つ「花天狂骨」。その技の一つである「影鬼<sup>かげおに</sup>」にて、浮竹を連れ  
て影の中へと潜り込み、その隙間を指して移動。

続いて片方の刃で受けた技を吸収し、もう片方の刃から放出して攻撃出来る「双魚理  
」。それを利用し、一つの虚閃を吸収した後に放出して相殺。

忙しくこの二つを繰り返す事で、何とか生き残れたのである。

「嫌味じゃねえよ」

勿論、スタークはその一部始終を確認していた。

もし僅かでも二人の息が合わなければ、瞬く間に消炭となつていただろう。

——阿吽の呼吸とはこの事か。

回避に動く際、京楽と浮竹の間に会話は無かった。単に互いの名を呼び合った程度である。

つまりそれだけで互いの思考を読み取って理解し、動いた。

実に圧巻、素晴らしき連携の極致。見ている此方が心踊る、そんな光景を垣間見たのだ。スタークのそれは紛れも無い本音であった。

「…成程な」

そして確信した。これ程までに追い詰められても尚、二人が卍解を使用しない理由を。

浮竹については恐らくその病弱な体質にある。その強大さ故に掛かる負担が尋常では無く、最低でも身体の調子が良い時にしか使えないのだろう。

そして京楽は範囲。一度使用すればほぼ勝利は確定するものの、敵味方関係無く巻き込んでしまうデメリットがある。単純な攻撃範囲の話では無い。始解状態の能力からして、その特異性故に味方すら回避が困難となるといったところか。

「同情すんぜ、ホント」

——状況に恵まれてさえいれば、また結果は違っていただろうに。  
 憐みの視線を向けながら、スタークは銃口を向けた。

「——悪いな、ちよつと邪魔させてもらうぜ」  
 「今彼等に死なれちやあ困るんだよね」

だが次の瞬間、スタークの背後に二つの影が降り立った。  
 少しでも動けば斬ると言わんばかりの殺気と、隊長格と同等の霊圧を向けられたスタークは、思わず動きを止めた。

「…誰だよ、アンタ等」  
 「ヴァイザード仮面の軍勢」所属、愛川 羅武」  
 「同じく、鳳橋 楼十郎」

羅武は巨大な棘付きの棍棒——てんぐまる天狗丸”を担ぎ、楼十郎は先端に薔薇の付いた鉄の鞭——きんしゃら金沙羅”を自身の周囲に舞わせながら、スタークへと対峙する。

「つ、誰だ…!？」

場所は変わり、冬獅郎とハリベルの戦場も同様、乱入者が二名現れていた。

外部より自身の切り札が無力化され、もはや後が無い状況へと追い込まれた冬獅郎。

そして顔付きが当初より明らかに変わったハリベルが、今まさに大剣を構えて此方に止めを刺さんとしていた時である。

「…何者だ」

「…猿柿ひよ里」

「矢胴丸リサ」

ひよ里は刀身に鋸の如きギザギザが付いた大剣——〃<sup>くびきりおろち</sup> 鹹大蛇〃を握り、リサは身の丈を優に超える大槍——〃<sup>はぐろとんぼ</sup> 鉄漿蜻蛉〃の矛先をハリベルに向けた。

「…何じゃい、貴様は」

「突然の来訪、失礼。私、有昭田 鉢玄と申します」

「ッ、貴様は——!!」

「……………誰……………」

睨み付けてくるバラガンに対し、鉢玄は深々と頭を下げながら、特徴的な訛り口調で挨拶を返す。

見覚えがあるその姿に目を剥く碎蜂の横で、稀千代は首を傾げていた。

リラックスした体勢で椅子に腰掛けていた藍染は、ふと閉じていた瞼を開いた。

視線の先には先程から一切変わらず、静かに此方を警戒し続ける重國の姿がある。

だが彼の事なぞ眼中に無いと言わんばかりに、藍染は薄笑いを浮かべながら口を開いた。

「ふむ、思いの外早かったね」

「…藍染隊長？」

その発言の意図が読めなかったギンは、思わず問い掛けた。

藍染は視線を僅かに上に向け、此処には無い何かに思いを馳せているかの様にして答える。

「いや、そろそろかと思つてね」

「それは如何いった…？」

「直に解るさ」

ギンと同様だった東仙も続けて問いを返すも、藍染は明確な回答を避けた。だがその表情から漂う雰囲気は、先程よりも明るく感じられた。

「さて、此方も準備をしましょう」

まだ皆の戦いは終わっていないが、と締め括りながら、藍染は腰掛けていた椅子より立ち上がった。

突然の行動に、重國は一瞬目を見開くも、何時でも踏み込める様に態勢を整える。

「おイタはそこまでやで、藍染」

それに待ったを掛ける、第三者の声。

聞き覚えのある声に、重國は弾かれる様にして振り向いた。

「お主は——平子 真子!!」

「お久しゅう、総隊長」

一見すると丁寧ではあるものの、敬意の欠片も感じぬ口調で、真子は視線を向けぬまま返した。

まあ致し方無いだろう。当時、彼を含めた“仮面の軍勢”メンバーは、藍染による虚化の被害者とは言え、護廷十三隊から切り捨てられた過去を持つ。厳密に言う中央四十六室の頑迷極まりない老人達はその判断を下したのだが。

故に真子達は護廷十三隊に対して良い感情を持っていない。僅かながらの愛着があつても、未練は皆無。特にひよ里は嫌悪感を露にしている為、解り易い。

もし護廷十三隊全体で本腰を入れた調査を行つていれば、少しは疑念を抱いたかもしれない。だがあの藍染の陰謀だ。結果は変わらなかつた可能性もある。

加えて中央四十六室の権限は絶対。例え総隊長である重國であつても、出来るのは時間稼ぎ程度で、決定を覆す事は不可能と言えた。

だが真子達は機械では無い。極稀に居る死神狂信者でも無い。故に思うのだ。

組織の在り方として、この決定は理解出来る。だが——尸魂界に多大な貢献をしてきた自分達に対し、この仕打ちは余りにも無慈悲過ぎやしないかと。

中央四十六室の連中は勿論だが、他の死神達もそうだ。内心では異を唱えていたとしても、実際に行動せねば容認しているのと変わらないのだから。

「…そういう事ですか」

「いや、残念だが私が言っているのは彼等の事じゃあ無い」

得心がいった様子で呟く東仙を、藍染は即座に否定する。

そして戦場に現れた仮面の軍勢メンバーを一瞥し、最後に真子へと視線を移す。

その眼は道端の小石を眺めるそれに似ていた。

「君はお呼びじゃないよ。平子 〃元〃隊長」

「…ひっさびさの再会なのに、言うてくれるなア——藍染!!」

怨敵の前に、真子は斬魄刀を抜きながら吼えた。

## 第六十五話 始まる戦い、終わる戦い

未だに混濁する意識の中、ルドボーンは全身に押し掛かる瓦礫を何とか退かし、外へと這い出す。

軋みを上げる身体に鞭打ち、無理矢理顔を上げる。

視線の先では先程まで自身と交戦していた侵入者達四人が、乱入者——ヤミーと激戦を繰り広げていた。

しかし戦況は明らかに此方側の不利。完全に調子を取り戻したらしいヤミーだが、手当たり次第に剛腕を振るい、虚閃や虚弾を撒き散らすという単純極まりない戦法を取り続けている為か、尽く無駄に終わっていた。

初動を雨竜が矢を放つ事で崩し、ルキアが“掬花”の激流にて視界を潰しつつ動きを止め、その隙に恋次が“狒狒王蛇尾丸”の巨体を叩き付け、泰虎が駄目出しとばかりに“悪魔の左腕”を捻じ込む。

彼等の巧みな連携プレーの前に、ヤミーは成す術が無い。ノイトラには及ばないにしても、その強靱な肉体には傷が目立つ様になっている。加えて帰刃を解放する暇も無いときた。

「おのれ……!!」

ルドボーンは苛立った。戦場に突然現れたかと思いきや、味方である筈の自身を殴り付けて戦闘不能に追い遣った癖に、追い詰められているヤミーに。こうして戦場を眺めるしかない己の無力さに。

当初、ルドボーンが四人と交戦を始めた時は比較的有利に戦況を運んでいた。

事前に帰刃にて三百を超える程の軍勢を揃えた上で、容赦無い使い捨て戦法を用いて四人の足並みを崩し、そこで帰刃——アルボラ“髑髏樹”を解放。大樹と化した自身の肉体より絶え間無く兵士を生み出し続ける事で、相手に態勢を立て直す暇を与えずに攻め立てた。

ふとした拍子に一護を逃がしてしまったが、特に気にしてはいない。何せ彼の行く先にはウルキオラが居るのだから。

後は残る四人を勢いのままに圧殺するだけ。如何なる猛者として、圧倒的な数に攻められ続ければ限界が出てくる。

しかしルドボーンのそんな思惑は、全てヤミーが台無しにした。

今思えば、勝ち急ぐ余り周囲への警戒が疎かになっていたのだろう。

「こんな様では…あの方に合わせる顔が無いではないか…!!」

思い浮かべるのは、突如として霊圧を消失したノイトラ。

組織を運用する為に必要不可欠な存在とは言え、いつの時代も他者より忌避されるのが暗部の宿命。表立って肯定する者なぞ居ない。

だがノイトラは違った。嬉々としてザエルアポロの命令に従い、ドルドーニとガンテンバインを手に掛けんとした事を許したばかりか、*“葬送部隊”*という存在自体を肯定したのだ。

ルドボーンにとって、それがどれ程の救いだっただか。

そんなノイトラの思いに応えるべく、ザエルアポロに焚き付けられた野心を圧殺し、これまで以上に己の使命を全うせんと奮起した。

だがそれも、この侵入者達が虚夜宮の奥へと進み続けた結果、立て続けに不測の事態が振り掛かる。これにはノイトラの消失も含まれている。

故にルドボーンは憤った。貴様等が現れなければ、こんな事にはならなかったのに、と。

「しっかしイカした斬魄刀だなルキア！ 前のはお役御免か!？」

「笑えぬ冗談はよせ恋次。今は訳あって使えぬというだけ…だ!!」

余裕故か、恋次が軽口を叩き始める。

それを軽く叱責しながら、ルキアはすっかり手に馴染んだ振花を振るう。

巻き起こる激流に、ヤミーの巨体は再び押し流され、近くの瓦礫へと叩き付けられる。

「ぶはあッ!! てめえら調子に——」

「〃巨人の一撃〃!!」

「乗ってんじゃねウオオオオオオッ?!？」

散々痛め付けられている筈なのだが、ヤミーは持ち前のタフネスで難無く耐え抜く。そして直ぐ様立ち上がりんとするも、泰虎の追撃によって再び地面を転がる羽目になった。

瓦礫と砂の山に埋もれ、姿を消したヤミーの姿を見た雨竜は、自身の得物を下げながら呟いた。

「…後は時間の問題だね」

そして遠目で地面に這い蹲っているルドボーンを同情の目で眺める。

正直言うと、彼の方がヤミーより手強かった。最下位とは言え十刃だけあって個の力量は上を行く後者と、数の有利性を前面に出した戦術を取る前者。どちらが相手が良いかと問われれば答えは決まっている。

もしあのままルドボーンと戦っていれば、負けはしなくとも少なく無い消耗を強いられていただろう。そう考えるとヤミーが横槍を入れて来たのは幸運だと言わざるを得ない。

「さて、済まないが僕は黒崎むしこうの様子を見に行くよ」

現状では一人抜けても、ヤミーの撃破はそう難しい事では無い。何せ自分達全員が彼の階級以上の十刃を相手にし、全て打倒してきたのだから。

そう考えた雨竜は、先程から気掛かりだった——終始膨大な霊圧が激しく変動を繰り返している方向を見遣った。言うまでも無く一護の居る方向である。

ルドボーンと交戦する前に霊圧を探った限り、織姫の救出には成功したらしい。傍に

はネルも居る。

だが問題なのは、増援に向かった剣八と十刃らしき霊圧が激闘を繰り広げている事だ。

熱くなり易く、そしてどこか抜けている性格の一護。状況によつては織姫の安全を疎かにした行動を取りかねない。出来る限り早急に合流した方が得策だろう。

現に折角剣八が敵を引き付けているにも拘らず、その場から織姫とネルを連れて動くともしていない。

大方、剣八の事が気掛かりになっている。理由としてはそんなところだろう。

当初の計画を忘れたのか、他人よりもまず自分の状況を顧みろと、一言二言——否、最低でも三言以上はぶつけてやらねば気が済まない。

「おう！ 後は任せな！」

「井上を頼むぞ」

「む…」

仲間達からの了承を得た雨竜は、“飛廉脚”にてその場から瞬時に移動を開始した。

それを見送ると、残された三人は改めて構えを取ると、埋もれていた状態から息も絶

え絶えに這い出てきたヤミーを見据える。

「さて…コツチもいい加減ケリつけるとすつか」

「覚悟せよ十刃。もはや解放する暇すら与えんぞ」

「…」これで決める」

其々に霊圧を放出し、止めの一撃を放たんとする。

解放後の十刃がどれ程の脅威か、身を以て知っているが故か。全く以て容赦の欠片も無い。

まあ間違つてはいないだろう。物語的な観点からしてみれば盛り上がり欠けるかもしれないが。

「——ッ、クソが…ああ!!？」

これには流石に焦りを感じたヤミーは、痛む身体に鞭打ち、慌てて自身の斬魄刀の柄に触れようとする。

だが悲しいかな、その肝心な斬魄刀は本来あるべき場所には無かった。度重なる追撃

によって白装束がボロボロになり、その拍子に左腰より離れてしまっていたのだ。

大量の冷や汗を流しながらヤミーが周囲を見渡すと、十メートル以上離れた場所に転がっているのを発見する。

一瞬安堵したものの、ふと気付く。今からそれを拾いに行く暇など無いのでは、と。

元より響転は得意では無いし、例え出来たとしても現状の負傷具合では結果は変わらないだろう。

絶望一色に染まるヤミーの思考。

だが次の瞬間——奇跡が起きる。

「んなっ…!!?」

「何だ…この霊圧は…!!?」

「ぬ…ぐう…!!」

虚夜宮の天蓋の上より、周囲一帯に背筋が凍る程に異質で膨大な霊圧が押し掛かったのだ。

恋次とルキアは思わず膝を着き、泰虎はバランスを崩した様にして全身をふら付かせる。

ヤミーはその靈圧に心当りがあつた。

「——<sup>スエルト</sup>ラツキー!! ありがとうとよウルキオラア!!!」

動きの止まった三人を見て、ヤミーは歡喜の叫び声を上げる。

そして渾身の力を振り絞つて飛び出し、見事斬魄刀を回収する事に成功した。

「んなツ…アイツいつの間にも!!?」

「迂闊…!!」

「…これは、マズいな」

先程までの余裕を失い、焦り始めた三人を視界に入れたヤミーは、勝ち誇つた笑みを浮かべた。

「オイ、さつきはよくもやつてくれたなあ…?」

柄を握り、僅かに抜刀しながら囁く様にして言う。

同時にイメージする。眼前の三人を、最強たる自身の帰刃の誇る圧倒的な暴力で捻り潰す光景を。

そんなヤミーの尋常ならざる雰囲気を感じ、三人は身構える。

中でも泰虎は一つの決断を下していた。実は彼、一護と合流する先の事を考慮し、新たに得た自身の能力をセーブしていたのだ。

だがもはやそんな状況では断じて無い。迷わず全てを解放せねばならない窮地にあると、勘が最大音量で警報を鳴らしている。

未だ漠然とした部分は残っているものの、感覚的にだが大部分は把握した。後は未体験の力を使うに足る覚悟だけ。

—— やってやるさ、じいちゃん。<sup>アップウエロ</sup>

能力の解放と同時に、泰虎の両腕の鎧が上半身を中心に広がり、口元まで覆う。

「お礼に……まとめてブツ潰してやるぜエ!!」

右手の盾を上げる。

粗暴な幼き頃、オスカーに誓った。自分の為に暴力を振るわないと。

左手の矛を構える。

不良に絡まれた時、助けてくれた一護と誓った。互いの為に拳を振るうと。

「ブチ切れる——イェーラ憤獸!!!」

ヤミーの巨体が、凄まじい速度で何倍にも巨大化してゆく。

このままでは天蓋にも届くかと思われたが、数十メートル手前で止まる。

頭部に四本、背中の肩甲骨が生え、全身の筋肉が異常なまでに膨張。臀部には四本角の鬼のような顔を持つ尾が生えていた。

「数字が…!!」

「0…だと…!?!」

十の数字が刻まれてたヤミーの左肩。その内の一の数字が消え失せている。それに気付いた恋次とルキアは思わず息を?む。

泰虎も同様のタイミングで気付いてはいた。だが覚悟を決めたが故か、一貫して平静を保ち続けていた。

「俺は力を溜めて完全解放することで数字の変わる、唯一の十刃」

化物に近付いた風貌を更に凶悪化させる笑みを浮かべながら、ヤミーは右腕を振り被る。

「ゼロ・エスパーダ第0十刃、ヤミー・リヤルゴだ!!」

名乗り終わると同時に、それを振り下ろす。

泰虎はそれに向かい、迷まず踏み込んだ。

前方に立つロリとメノリに対し、一護は警戒心を露にしつつ、ネルと織姫を庇う様に

して前に立った。

だがロリは一護の事など眼中に無いかの様に歩を進め、距離を詰めて行く。

「つ、止まれ！ それ以上近付けば——」

「あなたに用は無いわ。そっちの女にちよつと話があるだけ」

「ロ……ロリい……」

警告しながら斬魄刀を構える一護だが、案の定ロリは突つ撥ねる。

その様子を、メノリは後方でオロオロしながら眺めていた。

「信用出来るかよ！ そう言つて油断させようつたつて無駄だ!!」

「……メンドクサイ奴ね」

取りつく島も無い一護の様子に溜息を吐くと、ロリは徐に自身のスカートの下に手を潜らせ始める。

元々極端に短いそれだ。ならば当然、僅かに捲ただけで下着が丸見えになる訳で——

「ぶふあ!!? いきなり何してやがんだ!!?」

「はい、これで良いでしょ」

顔を真っ赤に染めて慌てふためく一護を尻目に、ロリはやがてスカートの中から手を抜くと、何かを地面へ投げ捨てた。

カランとした音を立てながら転がったそれは、ダガーの形状をした斬魄刀。

それを目の当たりにした一護は瞬時に正気へ戻ると、不審な表情を浮かべながら問い掛けた。

「…何の真似だ?」

「察しなさい」

それ以上は語る必要も無いと言わんばかりに、ロリは腕を組んでその場に佇む。

彼女の行動から察するに、此方に危害を加える意思は無いと示しているのだろう。

だが如何せん、初対面だ。もしかするとこの様に相手を油断させ、隙を見せた瞬間に襲い掛かる算段を立てている可能性も考えられる。

一護は想定外の事に困惑しつつ背後へ振り返り、織姫へ助けを求める様に視線を向けた。

それに対し織姫は少々考える素振りを見せたものの、やがて意を決した様にして口を開く。

「…大丈夫。ちよつと怖いけど、頑張るよ」

「井上…」

ごめんね、と両腕に抱えていたネルを地面へ降ろすと、緊張した面持ちでロリの眼前まで移動する。

「それで…話って何かな？」

「単刀直入に聞くわ」

織姫を正面より見据えながら、ロリは切り出した。

「藍染様のこと…どう思ってるの」

「…ふえっ?」

気付けば織姫は素っ頓狂な声を漏らしていた。

一体何を聞かれるのかと、戦々恐々していたところに——この問いである。彼女の反応も致し方無いと言えた。

「ハッキリしなさいよ! 好きなのか嫌いなのかって聞いてんのよ!!」

「好きって…え、ええええ!!」

口を半開きにしたまま硬直する織姫を、ロリは一喝して更に問い詰める。

だが混乱の極みに陥っている為か、一向に返答は無い。

痺れを切らしたのか、ロリは肺の容量限界まで息を吸い込むと、大声で言い放った。

「あたしは好き!! って言うか愛してる!!!」

「えっ、ええええええ!!」

「あわわわわ…!!」

想定外の事に狼狽える織姫。ロリの後方に立つメノリも同様の反応を示していた。

「この想いは誰にも負けないって、自信持つて言えるわ!!」

実に天晴れ。賞賛に値する、堂々たる告白振りであった。

もしこの場に意中の本人が居れば、もはや神よ照覧あれと言わんばかりの喝采を贈つても足りない。

——とは言え、やはり少なからず羞恥心を抱いているのか、その頬は赤みを帯びていた様だが。

「さあ、答えなさい!!」

「…私、は——」

暫しの間を置いて、織姫は覚悟を決めた。圧巻とも言える告白を見せ付けたロリに対し、ここで引いては女が廃ると。

徐に背後へと振り返り、一護を見遣る。

其処には変わらず此方の身を案じ、何時でも踏み出せる様に構え続ける頼もしい姿が

あつた。

それに勇気を貰った織姫は、やがて視線をロリへと戻し、肺の容量の限界まで大きく息を吸った。

「私には好きな人がいます!!」

「…へえ」

「けどそれは藍染さんじゃないです!! 嘘じゃありません!!!」

言い切った爽快感と、同時に湧き出るそれ以上の羞恥心。

正しく穴が有ったら入りたい状態だ。

織姫は改めてロリの事を尊敬した。これを平然とやるなんて、と。

しかも意中の相手の名前を出した上である。とは言え、織姫の場合は直ぐ後ろに当人が居るので、それ程ロリとの差があるとは言いい切れないが。

御蔭で暫くは顔を見れそうにない。そう思った直後であつた。

「井上って、好きな奴がいたのか…」

「…あつ」

その一護の眩きに、織姫ははつとなる。

先程の発言は、下手すると誤解を生む様なものではなかったかと。

「ち、違うの黒崎君!! いや…違うわけじゃないんだけど…っ!!」

「は? だって今——」

「だ、だから…やっぱり違うのお!!」

「どっちだよ!?!」

焦燥の余り羞恥心も忘れ、一護の前で両手を振り回しながら支離滅裂な事を騒ぎ始める。

その傍ではネルが、半目で一護の事を睨んでいた。今は幼い状態とは言え女だ。織姫の想い人が誰かを直感で察したのだろう。流石に察せとまでは言わないが、少しはデリカシーを持って、その視線に込めながら。

ぎやあぎやあと騒ぎ続ける二人を余所に、口りは大きく溜息を吐いた。

——何だか馬鹿らしい。

その心中はこれに尽きた。

少し冷静に考えれば解った事だ。藍染が求めていたのは織姫の力のみ。他ならぬ織姫自身も、そんな相手に好意を抱く要素は皆無。

もし本気で藍染が織姫の全てを求めていたとすれば、現世より攫つて来た日よりその間を置かずに全て事を済ませていただろう。超越者たる彼にとって、人間の一人を心身に支配し尽くす程度は造作も無い。

恐らくは織姫の力を求めたのも、藍染にとっては戯れの一つだったのだろう。

虚夜宮へと連れて来て直ぐ、隔離するかの様に離宮へと移し、管理をノイトラとウルキオラに一任したのが証拠だ。

「アホくさ……」

全てを悟ったロリは、やがて吐き捨てる様にしてそう呟いた。

未だに喧騒の渦中にある織姫達を無視して、その場から踵を返す。先程投げ捨てた斬魄刀を拾い、元の場所へと仕舞い込むと、そのまま出口へと向かって歩を進め始めた。

「行くわよ、メノリ」

「えっ……もういいの？」

「聞きたい事も聞けたし、ここにもう用は無いわ」

やがて去って行く二人に今更ながら気付いたのか、一護と織姫が声を発するが、ロリはそれを聞き流した。

メノリを引き連れ、遊撃の間の外に出た途端、腕を持ち上げて大きく体を伸ばしながら言った。

「さて、今から藍染様のお部屋の掃除に行くわよ」

「ええ!?! 何で今から!?!」

その有り得ない提案に、メノリは思わず叫んだ。

侵入者を放置して織姫と多少話した後これである。付き合いの長い彼女も、流石にロリの意図を理解出来無かった。

「なに言ってるのよ。あたし達本来の役割はそれでしょ?」

「それはそうだけど…」

遊撃の間の方角をチラチラと眺めるメノリの言わんとしている事を察したのか、ロリは小さな溜息の後に説明し始めた。

「どのみち、あいつ等は終わりよ」

虚夜宮の天蓋の上から感じる霊圧、あれは紛れも無くウルキオラのものだ。

上位十刃たる彼の戦闘能力は文字通り次元が違う。それこそ帰刃を解き放てば、自分達の様な有象無象の破面なぞ一撫でするだけで終わる程に。

ここまで戦い抜いた一護の実力は確かに驚異的ではある。だが所詮はそれだけだ。グリムジョーに辛勝する程度では、ウルキオラを相手にしても結果は目に見えている。

余談だが、ロリの中では一つだけ気掛かりな事があつた。一向に姿の見えないノイトラの事である。

今の彼がこの非常事態に動かないというのは有り得ない。何か想定外の事態の対処に追われているか、または身動きの取れない状態にあるのだろうか。

だがロリは直ぐに断言した。あいつの事だ、特に問題無いだろうと。

ヒステリックに喚くロリの事を真つ直ぐ見据えつつ、多少意図があつたとは言え、ノイトラが嘘偽り無い本心から肯定の言葉を贈った出来事より数日後。そんなノイトラ

に対し、ロリの中であるとある感情が芽生えていた。

それは頑なに他者を拒み続けてきた彼女が初めて抱いた——信頼。

ロリ自身は非常に癪だと思っていたが、あの出来事の御蔭で自信が持てる様になり、精神的に大きな余裕が出来たのは覆し様も無い事実。

だからと言つて正直に感謝の念を示すのも、自身が手玉に取られている様で何処か気に食わない。

故にロリは決意した。

成程、そこまで言うなら徹底的に見せてやろう。虚夜宮の破面の中で最も優れた女は誰なのかを。

織姫との遣り取りも、全てはこの為の布石であり、始まりを告げる狼煙。

「ならあたし達は、いつも通り自分の仕事をするだけよ」

嘗ての様な酷く醜い姿は、二度と見せない。

想い人の近くに女の姿があつても決して狼狽えず、如何なる時も感情に支配されぬ屈強な精神。例え危機に瀕しても、臆さず前に踏み出せる度胸。十刃までとは至らぬまでも、並みの“数字持ち”を振じ伏せられる実力。この三つを持てば、最早恐るるに足ら

ずだ。

正直言えば、藍染の隣に立つ事は叶わないのかもしれない。共に並び立てる者すら皆無な現状、恋仲になるなぞ夢のまた夢。

だが——それでも良い。ならばせめて傍に立つに相応しい女と認められるまで、己を磨き続けるだけだ。

「なんか今のロリ……凄くカッコイイ！」

「……はっ、違うでしょバーカ」

目を輝かせながら言うメノリを、ロリは軽く笑い飛ばした。

相手を見下すのでは無く、まるで素頓狂な勘違いを指摘するかの様にして。

「こういう時は——凄くいい女って言うのよ!!」

そう言い切ったロリの顔には、今迄見せた事も無い程に晴れやかな笑顔が浮かんでいた。

視界に写るのは、辺りに鮮血を撒き散らせながら宙を舞う両腕。

そして直後に感じる、斬撃が直撃した部分を中心にして広がる灼熱の如き激痛。

「ぐ……フ……」

—— 防御毎、断ち切られた。

ウルキオラは迷わずその場を跳び退いて距離を取ると同時に、盛大に吐血した。

「へエ……まだ生きてんのか」

振り下ろしの体勢より、斬魄刀を肩に担いだ自然体へと戻った剣八は、感心した様に

して呟いた。

手応えは十分。大抵なら真つ二つどころか肉片と化すであろう必殺の一撃。その直撃を受けながら息があるというのは、彼にとって初めての経験であった。

「ひよろひよろしてる癖にタフだな、大したモンだぜ」

「……………」

ウルキオラは無言のまま、受けた傷の再生を済ませる。

両腕に関しては問題無い。だが左肩口より真下へと刻まれた部分については例外だった。

あわや両断されるかというレベルだったあの斬撃は、ウルキオラの左肺は勿論、その他複数の内臓を致命的にまで破壊していたのだ。

再生を終えた今、表面上は無傷だが、その実は満身創痕。戦闘どころか満足に動ける状態ですら無く、立っているだけで精一杯だった。

そんなウルキオラの状態を見抜いたのか、剣八はコキコキと首を鳴らすと、その場から踵を返した。

「ツ、何処へ行く……？」

「決まってるだろ、次の相手を探しに行くんだよ」

ウルキオラが問い掛けると、剣八は何を当たり前の事を聞いているのかと言わんばかりに返した。

元より剣八は戦いを楽しめさえすれば、他の事は如何でも良いと考えている。死神としての義務も、隊長としての責務も、そんなものは糞食らえだ。

この通り、完全なる破綻者ではあるが、外道畜生では無い。無意識の中ではあるものの、多少の倫理観だって持ち合わせている。

相手が一般的な虚の様に、理性を持たぬ獣であれば容赦無く斬り捨てるが。

今のウルキオラへの対応を見れば分かる通り、剣八は自身との戦いで負傷する等し、戦闘続行が不可能になった者は命を奪わずに見逃してきた。同隊の第三席である一角もそうだった。

この状態で戦っても気が乗らない上に楽しめない。それに生かしておけば、今後その者が更に強くなり、何時の日か再戦出来るかも、と期待しているのも理由だ。

「俺は戦えなくなったヤツを斬る趣味は無え。てめえはもう終わりだ」

「……ちっ」

剣八の指摘は凶星。ウルキオラは舌打ちした。

確かに今のままでは不可能だ。無茶を承知で動けば多少なりとも戦えるかもしれないが、到底勝てはしないだろう。

しかし——決して手が無い訳では無い。

十刃の中でウルキオラのみが持つ“奥の手”を使えば、間違い無くこの状況を覆せる。

だが一度それを使用してしまうえば、この虚夜宮が廃墟同然と化してしまう可能性が高い。

如何なる理由が有るとしても、藍染が築き上げた神聖なる場所を破壊するのは憚られた。

「次は……そうだな、ノイトラのヤツと戦いてえなア……！」

だがそんなウルキオラの迷いは、放たれた剣八の言葉で全て吹き飛んだ。

「てめえよりかは弱えと思うが、退屈はしねえだろ」

劍八は舌舐めずりしつつ、そう溢す。

以前の戦いの映像を見るからして察するに、ノイトラは手の内が豊富だが、基本的に戦闘スタイルは近接専用だ。しかも細身な見た目に反して桁外れなパワーを誇りながら、確かな鍛練からくる技量に加え、野性的な反射神経等も持つ相当な実力者。

直接斬り合う戦いを好む劍八としては、実に理想的な相手と言える。

超高機動戦闘を主体としたウルキオラとはまた違った戦いを味わえる事だろう。

「…そうか」

—— 気に食わない。

そんな内心に呼応する様にして、ウルキオラの口から出た声は何時にも増して冷ややかなものだった。

ノイトラが自身より弱いと、何を根拠にそう言える。

直接顔を合わせた訳でも無し、交戦どころか言葉を交わした事も無いだろうに。

お前はノイトラの事を何も知らない。その癖に軽々とそう断言するか。

次第にウルキオラの中で沸々と沸き上がるナニか。

平時の彼であれば、これの正体は何なのかを冷静に思考していただろう。

だが今はそれが出来無い。と言うかウルキオラ自身、する気も全く起きなかった。

やがてそのナニかは、徐々に剣八への殺意へと変換されてゆく。

「ならば知ると良い」

「…ああ?」

最早躊躇いは無い。ウルキオラは自身の全てを以て、剣八を仕留める事を決意した。

「貴様がノイトラと戦うのは、叶わぬ望みなのだ」と

何故なら——と、ウルキオラは一旦言葉を切る。

次の瞬間、彼の霊圧が尋常ならざる勢いで膨れ上がり始めた。

剣八は困惑した。その瀕死の身体の何処に余力を残していたのか。

そして気付く。この霊圧の動きは——まるで帰刃の時と全く同じであると。

「おいおい…」

これには流石の剣八も危機感を——覚える訳が無かった。

即座に表情を喜色満面へと変えると、ウルキオラに向き合い、斬魄刀を構え直す。

満身創痍な身体など何のその。これから始まるであろう死闘の第三幕に心膨らませながら、その時を待った。

やがてウルキオラの全身が変化してゆく。

上半身は剥き出しに、両腕と下半身が黒い体毛に覆われ、四肢の爪が鋭利な物へと変わり、頭部に長い二本角が。眼球は黒みがかった深緑、瞳は黄色となり、その周囲には複雑化した仮面紋。喉元の孔は大きく広がり、胸へと移動。

更なる変貌を遂げたウルキオラ。その姿を総称するならば——悪魔。

彼の放出する霊圧は激増しており、異質さや重さもそれに比例して変化していた。

「レスレクシオン・セグンダ・エターナ 刀剣解放第二階層」

笑みを深める剣八を前に、ウルキオラは静かに語り始める。

「十刃の中で俺だけが、この二段階目の解放を可能にした」

「……ほオ……」

「そしてこの姿は藍染様にもお見せしていない」

直後、剣八は駆け出していた。

言うなれば飢えた猛獣。飼育者の命令も聞かず、極上の肉に喰らい付かんとするそれ。

「はっ、ハアツ!!!」

両手で斬魄刀を持った状態で、上段より振り下ろす。

剣八自身、これで終わるとは微塵も考えていない。

受け止めるか、躲すか。どちらでも良い。

今はただ、心行くまで楽しみたかった。願わくば“あの時”の様な、至高の闘争を。

「——愚かだな」

だがその希望は呆気無く打ち砕かれる。  
右手で易々と止められた斬撃が、それを表していた。

「ガ、フ……」

同時に剣八の口より大量の血が溢れた。

見れば彼の胸部の中心より、いつの間にもやう背後に回ったウルキオラの左手が突き出ていた。

「所詮はこの程度だ。ましてや——」

左手を引き抜きながら、ウルキオラは絶対零度の視線を剣八へ向ける。

「今の俺に刃が届かぬ時点で、貴様ではノイトラに到底及ばん」

風穴が開いた胸元から鮮血を吹き出しながら、剣八の身体は糸の切れた人形の如く崩れ落ちる。

その目には先程まで見せていたギラついた光は消え失せていた。

「身の程を弁えろ」

血溜まりに沈む剣八を見下ろしながら、ウルキオラはそう言い放った。